
自動販売機に生まれ変わった俺は迷宮を彷徨う

昼熊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自動販売機に生まれ変わった俺は迷宮を彷徨う

【Nコード】

N7583DE

【作者名】

昼熊

【あらすじ】

アニメ化決定！

書籍 1〜3巻発売中

コミカライズ 月刊コミック電撃大王にて連載中！

自他共に認める自動販売機マニアである彼は、交通事故から自動販

売機を守って死んだ。

そこで人生を終える筈だった彼が目覚めたのは、自然豊かな湖畔だった。

何が起こったのか理解できない彼だったが自分が 自動販売機になっ
ていることだけは理解できてしまう。

異世界の迷宮で一人……一台佇む彼が一人の少女と出会うことにより物語は動き始めるのだった。

プロローグ

「俺たち、死ぬのかな……」

「そんなことはねえっ……って言いたいところだが、無理だろうな」

あきらめきつた男たちの声は掠れ掠れで、今にも息絶えそうな程にか細かった。

三人の男が灼熱の陽射しが降り注ぐ砂の海で、残り僅かな水分をやりくりして何とか生き延びている　いや、生き延びていたと言うべきか。

命の水は全て体内に吸収され、それも汗となり既に蒸発してしまった。

屈強な身体つきの男たちが為す術もなく、息絶えようとしている。リーダー格の男は今更ながらに、何故こうなったのかと己の判断ミスを悔やんではいるが、何を反省したところで後の祭りだ。

「はあ、はあー、あん？　はっは……は。とうとう幻覚まで見えてきちまったぜ。鉄の棺桶を背負った人の姿が見えやがる」

仲間の一人が零した自嘲的な呟きに反応して、二人も男が見つめる先へと目をやった。

陽炎が立ち昇り、視界が揺らぐ砂の海を誰かが黙々と歩を進めている。それは自らの願望が見せた甘い幻惑ではないかと目を擦るが、それは消えることなく、三人の元へと向かっている。

「人だと……それも一人」

「馬鹿な。この灼熱の砂階層にたった一人で挑むハンターなんているわけが」

「だが、三人が同じ幻覚をみるつてのは……まさか魔物か？」

三人はそれなりに場数を踏んできた中堅と呼ばれて差支えのないハンターたちだ。人型の魔物を見た経験はある。だが、灼熱の砂階層に現れるという情報は一度たりとも耳にしたことは無い。

朦朧とする意識を懸命に繋ぎ止め、何とか頭を働かせる。

灼熱の砂階層の魔物は鳥、サソリ、トカゲ、棘の生えた植物、蛇系ぐらいしか聞いたことが無い。人型は闇の森林階層や犬岩山階層にいるらしい。という情報までは得ていた。

それ以上はもう考える気力が失われていた。徐々に大きく鮮明になっていくそれを見つめることしかできない。

鉄の棺桶も異様ではあったが、それを背負う人物もまた妙であった。

直射日光を避ける為にフード付きのマントを羽織るといふのは常識なのだが、その色彩が魔物が跋扈する迷宮には相応しくない。

原色に近い黄色と緑の縦縞模様なのだ。奇抜な格好と言うのは目につきやすい。つまり、魔物に狙われやすいということになる。そんなものを迷宮で着込むのは余程腕に自信があるか、無謀なバカの一択しかないのだ。

一人でこの灼熱の砂階層に現れるということは、必然的に前者とということになる。が、その小柄な体格を見る限り、どうしても信じられない思いがあるのは当然のことだろう。

そんなことを考えている間にも距離が縮まり、気が付けば巨大な鉄の塊を背負う者の影に、彼らは入っていた。

「大丈夫ですか？」

それは身を労わる優しい声だった。男は霞む目でその声の主を見上げる。

奇抜なデザインのフードに隠れていたのは、金色の髪に蒼い瞳の少女のようだった。その顔は幼く、高く見積もっても18に届くかどうかにかにしか見えない。首も細く、体格も華奢なようで、ハンターに向いているとはお世辞にも言えない、そんな女性だった。

「あ、ああ、悪いが水を持っているなら分けてもらえないだろうか。金なら幾らでも出す」

あまりに特異な状況に頭が思考を休もうとするが、生きる為に言葉振り絞る。

少女はその言葉を聞くと、まるで女神の肖像画のような慈愛溢れる笑みを浮かべ、くるっとその場で回転をして男に背を向けた。

少女が背負っていた巨大な鉄の塊が露わになる。それは、さっきまで見えていた鉛色とは違い、鮮やかな色彩をしていた。

四分の三程がガラス張りで、そのガラスの奥には幾つもの細長い円柱が並べられている。それは一つ一つデザインが異なり、男たちが見たこともない言語が色彩豊かに描かれている。

その円柱の下には細長い凸があり、どういう仕組みなのか端で光が点滅している。

よく見ると円柱だけではなく、酒の入っている瓶のように見える、飲み口が細くなっている入れ物や、四角い紙の箱のような物も並べてあった。

そして、下の方には長く細い口が開いてあり、どのような目的でつけられたのか男たちには皆目見当がつかない。

死が直前に迫っていたというのに、このあまりに理解不能な光景に、男たちはただ黙って眺めるしかできないでいる。

「あ、これはシトウアンアイキという魔法の道具です。この穴に硬貨を入れてもらえれば、金額によって商品が購入できます」

思考力が落ちていた彼らでも、その説明は理解できた。いや、極限状態だからこそ、多くの疑問を追求せずに物の本質を素直に受け入れられた。

ここに並んでいる不可思議な商品を買取ることが出来る機械。あの瓶のような物の中には透明の水が入っているように見える。アレを買うことが出来れば。

もう使い道がないと思っていた金の詰まった袋を取り出し、そこから一番高額の金貨を取り出して穴に入れようとする。

「あつ、銀貨で充分ですよ」

命のかかっている場面だ。最も価値のある金貨を支払うことに迷いがなかった男だったが、少女の指摘に従い金貨を袋に戻し、代わりに銀貨を取り出した。通常時であれば銀貨でも飲み物一本と交換するには高すぎる金額なのだが。

細長い穴に銀貨を投入すると、商品の下に配置された凸が赤い光でコーティングされる。

「この光っている部分を押しせば、上の商品を一つ購入できます」

男は恐る恐る、水が入っていると思われる容器の下の凸を押しす。

ガタンと何かが落ちる音がしたかと思えば、シトウアンアイキと呼ばれていた鉄の箱の下部に何かが現れた。

「購入された商品は下の取り出し口から受け取れます」

少女の言葉に操られるように男は手を伸ばし、それを掴んだ。

「冷たいっ！？ 何だこの手触りは」

驚愕する男はまじまじと手の中のソレを見つめる。

透明のガラス瓶かと思いきや、軽く力を入れただけで簡単にへこむ謎の材質。容器の上部には見たことのない文字と、山頂に雪の積もった絵が描かれている。

手の平に伝わる心地の良い冷たさ。中は澄んだ水で満たされ、見ているだけで残された希少な水分である唾が湧き出てくる。

「蓋を捻ってもらおうと開きますので」

蓋をねじ切る勢いで慌てて回し、解放された飲み口に齧り付く。

そして、中身を一気に煽った。

パサついていた口内が水で満たされていく。喉を程よく冷えた水が通り過ぎていく快感に思わず体が震える。一気に半分ほど飲みきったところで、男はようやく味わうということを感じる。

何だこの水は。乾ききった今なら泥水だって喜んで飲めるが、この水はべらぼうに美味い。そう断言できた。男が今まで何度も口にしてきた水とは比べ物にならない、いや、以前これと似たような水を何処かで。

男はその記憶の糸を懸命に手繰り寄せ、その答えを引っ張り寄せた。

「霊峰の湧水に匹敵するぞ」

思わず呟いた言葉に、残りの二人が反応する。彼らはリーダー格の男から当時の話を散々聞かされていたので、それが最高の褒め言葉であることを即座に理解できた。

二人が顔を見合わずと我先にと銀貨を投入し、三人とも同じ水を購入する。そして、貪るようにして飲みきると、そこで初めて一息を吐く。

「うめえええええっ！　なんだこりゃ！」

「ただの水がこんなに旨いって、ありがよ！」

全身に水が行き渡り、彼らは見る見るうちに生気を取り戻していく。

ただ水を500ml体内に入れただけだというのに、さっきまでとは見違えるぐらいの力強さを感じさせる。

「皆さん、他にもスナック菓子や携帯食料、温かいスープ。炭酸の入った甘い飲料、お酒も取り揃えていますよ」

満面の笑みを浮かべ、最高の誘惑をしてくる少女に、彼らは抗える術を持たなかった。

マニア逝く

俺は自動販売機が好きだ。どれぐらい好きかって？

財布の中身が千円しかなくて、それであと一週間食いつながなければならぬ状況下でも、自動販売機に見知らぬ商品が入っていたら、迷わず購入するぐらいかな。

じゃあ、それは自動販売機じゃなくて中身が好きなんじゃないかって？

いやいや、どっちもなんだよ好きなのは。自動販売機のデザインも好きだし、その中に多種多様で魅力的な商品が詰め込まれた箱なんだぞ。俺にしてみれば宝箱も同然だ。

飲んだことのない明らかに地雷な組み合わせをした炭酸飲料。それを温めたらダメだろと言いたくなるホット飲料。たぶん、ここで俺が買わなければ一か月後には消えている。なら買うしかないだろ。飲料だけじゃない。スナック菓子やパン、冷凍食品を自動で温めてくれる物だってある。

もちろん食べ物以外も、文房具、服、靴下、アダルトなアイテムまで取り揃えている自動販売機。惹かれない方が嘘ってもんだ。

古今東西のあらゆる自動販売機があまりに好き過ぎて、ネットで見つけた珍しい自動販売機を巡る旅に出たことだってある。あれは最高の旅だった。激写しまくった写真はパソコンの秘蔵ファイルに満載されている。

そんな俺が自動販売機に押しつぶされて死んだのはある意味、必然だったのだろう。

自動販売機を設置する為に軽トラックの荷台に置かれていた自動販売機。それが急カーブから飛び出してきた車との接触事故により、

俺の方向へ飛んできたのだ。

今思えば全力で避けていたら助かっていたかもしれない。だが、その真新しいデザインの美しいフォルムをした自動販売機に目を奪われていた俺は、この自動販売機を助けなければと、地面に激突する前に受け止めようとしたのだ。

中身が詰まっていらない自動販売機であっても400kg前後、中身が詰まっていたら800を超えると言われている。そんな重量の鉄の塊が吹き飛んできて、それを人が受け止められるかどうか。

答えは　押し潰され絶命した俺を見ればわかるだろう。

そうして、自動販売機マニアはある意味、本望である死に方をしたのだった。

本来はそこで終わる筈の話なのだが。俺の物語には続きがあった。鉄の冷たさを抱きながら永遠の眠りに落ちた俺は、唐突に目が覚めたのだ。

死ななかつたという安堵感と同時に、受け止めた自動販売機が無事なのかと心配になったが、それは杞憂だった。

何故だつて？　それはもう少しすれば嫌でもわかるさ。

何処かわからない湖の近くに俺は突っ立っていた。体も動かず、声も出せず、感覚もなくなったそこにいた。

わけもわからず叫び出したかったが、口から出た言葉は

「いらつしゃいませ」

予想もしない言葉だった。思わず俺の正気を疑い、誰か別の人の声ではないかと思っただが、自分で話した自覚はある。

心を落ち着かせて、もう一度声にしてみる。

「ありがとうございます」

聞き取りやすいはきはきとした話し方と声。それは俺の声なのだが違和感がある。そもそも、そんなことを話すつもりではなかった。だというのに、声に出そうとしたら自然と今の言葉が出てしまったのだ。

今度こそと、精神を集中して発言する。

「またのぐりようつをおまちしています」

続けて、

「あたりがでたら もういっぱい」

更に、

「ごんねん」

そして

「おおあたり」

この言葉のチョイスには聞き覚えがある。今まで何度も何度も聞いてきたので、間違いはない。これは俺の好きなメーカーの自動販売機で購入した時に聞こえてくる声だ。

いや、まさかな。幾ら何でも荒唐無稽すぎる。自動販売機が好きで好きでたまらなかったとはいえ、死んで自動販売機に生まれ変わるなんてあり得ない……よな？

だって、こうやってちゃんと広大な景色も見えている。

大空にはぼつぼつと小さな雲が浮き、目の前には巨大な湖がある。どうやらここは湖畔みたいだ。視線を下に向けたら、こうやって自分の姿が湖面に映るし。

白く真っ直ぐに伸びた四角形の身体は、優雅さと機能美を併せ持つ完璧なスタイルだ。磨き上げられたガラスの奥には、ペットボトルのミネラルウォーターと小さめの缶コーンスープが整然と並び、黄金比と呼んでも差支えのない計算された美を感じさせる。そして、暑さ寒さを乗り越えられるように、冷たいと温かいという二段構えの優しさ。

それに加え、缶は100円、ペットボトルは130円という良心的な値段設定。どれをとっても素晴らしい……自動販売機だこれ！

ええええええつ、嘘だろ、あり得ないだろ！ 死んだら自動販売機に転生って、最悪……ではないな。大好きだった物に生まれ変わるなんて、これはもしかや神様の慈悲か。

い、いや、でもなあ。車が好きだから車になりたいって訳じゃないし。あ、でも、幼稚園児だった頃、友達が「ボク大きくなったらパトカーになる！」って断言していたな。夢は叶っただろうか。

なってしまったものはしょうがない。としか思うしかない。正直、そんなに悪い気はしないのがマニアの悲しいところだ。

泣いて喚いたところでどうなるものでもないだろうし。納得はいかないけど、受け入れるしかないか。胸に溜まったモヤモヤも全て吐き出す様に、息を吐いた。

「おおあたり」

黙れ、俺。

どうやら声に出そうとすると、自販機に予め録音されている声が

漏れるようだ。何度も試してみた結果、何が話せるか判明した。

「いらつしゃいませ」「ありがとうございます」「またのごりょうをおまちしています」「あたりがでたらもういっぽん」「さんねん」「おおあたり」「こうかをとつにゆうしてください」

これだけらしい。何も話せないよりマシかもしれないが、これで誰かと会話することは不可能だよな。人が来たとしても、この言葉を連呼する自動販売機があつたら俺なら逃げる。

会話は諦めるとしても、他に何かできないのだろうか。自動販売機としてやれそうなこと……商品の販売か。客がないから今はどうにもならない。

そついや人つ子一人いないが、売り上げは大丈夫なのだろうか。

ここが辺ぴな場所だったとしても、誰かしら人は通るだろうし、売れ行きの悪い場所に自動販売機を設置するとは思えない。

見た感じでは観光地っぽいなここ。湖畔に別荘があるのかもしれない。もし、客が来ないとしてもメーカーの点検や、商品の入れ替えにはやってくるだろう。

いずれ誰かと会話できるチャンスを生かす為に、何かやれることは無いか模索してみるか。

まず体が動くのが理想的だが、さつきから何度も挑戦しているが微動だにしない。自動販売機に手足が生えて自由自在に動けたら、それはそれで怖いが。

他に何かやれることはないのか。さつきから自動販売機に予め仕込まれていた音声の再生を自分の意思で再生をしている。と言うことは己の意思で自動販売機の機能を、ある程度は動かせると思うわけ。

自動販売機のやれることと言えば、お金を入れてもらって商品を

出す。それだけだよな。お金がなくても商品を出すことは可能だったりするのだろうか……他にすることもないし、試してみよう。

まずは自分の体を理解することから始めようか。ええと、俺は人間ではなく自動販売機であることを認めてみるか。筋肉や骨や内臓は、パーツや電極や商品。声は録音されている音声の再生。手や足は存在していない。

なーんとなく、そんな気はしてきた……ような？

こつこつというのは現実を受け止め、冷静に状況を判断する。そして時に熱く気持ちを高ぶらせ大胆に行動する。

そうまるで、冷たいと温かいに分けられた飲料のように……。我ながら意味不明だが、ここはそう思い込もう。

俺は自動販売機なのだ。人間は自分の意思で体を自由に動かせる。ならば自動販売機である俺が自分の意思で性能を操れないでどうする。

信じる、成りきれ、俺は自動販売機だ。自分の体を理解しろ！

自動販売機

(冷) ミネラルウォーター 130円(100個)

(温) コーンスープ 100円(100個)

PT 1000

機能 保冷 保温

えっ、唐突に脳内……脳は無いか。まあ、頭にそんな文字と数字が浮かんだ。

んー、これって俺の体にある飲料の種類だよな。寂しいラインナップだが、怪しげな類いの飲み物でないだけマシか。何と言ってもミネラルウォーターは強いからな。

冬場の缶コーンスープって美味しいしね。そういや、メーカーは

わからないのかな。

また唐突に文字が浮かんできた。

ええと、ミネラルウォーターのメーカーがずらりと並んでいる。誰でも知っているような有名なところもあれば、あまり知られていない社名もある。まあ、俺は全部知っているし、全て飲んだことがあるけど。

今、設置されているのはミネラルウォーターで一番メジャーな会社の物か。これって変更できるのかな。

《種類を変更する場合はポイントを消費してください》

何だ、今度は文字だけが現れたな。ポイントって何だ。あれか、コーンスープの下に書いてあったPTってやつか。

だとしたら、どうやって使うんだ？ ええと、頭に浮かんでいるこの表示ってどうにかして操れないのかな。手も足もないなら、見えない何かで操るような、曖昧な感覚でどうにかしてくれないだろうか。

《ポイントを10消費してメーカーの変更をします》

どうにかしてくれた。こう、脳内でマウスを動かしてPTに持って行くイメージで何とかなったな。脳内で左クリックをするような感じで操ると、今の文字が出た。あれ、ってことは右クリックしたらどうなのかな。

《ポイントとは金銭を元に変換。ポイントを消費することにより、商品の補充や変更、機能追加が可能。電力代わりに一時間ごとにポイントを1消費します》

お、説明が出るのか。これは便利だな。なら、自分の体について
隅々まで調べさせてもらおうとするか。

自販機の体

情報を収集した結果、以下の事がわかった。

P Tというのはポイントのことで、これを消費して商品の補充と変更。そして、自動販売機の機能すら変えられるらしい。

機能追加と言うのは飲料を温めたり冷やしたりするだけではなく、冷凍食品を温める機能やカップラーメンにお湯を注いだりも可能になるみたいだな。色々書いてあったが、上の方だけざっと目を通しておいた。

機能追加はおいおい調べるとして、まずは変更できる商品の種類を調べたのだが、ずらつと尋常ではない量の商品が並んでいた。その全てに目を通したのだが、どうやら俺が死ぬまでに自動販売機で購入した物は、全てポイントで得られるようになっていているようだ。

試しに、冷たいミルクティーをポイント交換してみたのだが。P T 10消費して、(冷)ミルクティー(100個)が手に入った。冷たいコーナーを占領していたミネラルウォーターの一番右だけをミルクティーと入れ替えておく。値段も設定できるので100円にしておいた。

ちなみに100円で1ポイントと変換できるそうだ。って、もしかして、俺って売り上げを使い自力で補充するシステムなのか。何と言うか一般的な自販機から逸脱しているよな。

そうそう、おかしなところと言えば自分の体を確認できるようになってわかったのだが、俺の体電気で動いていない。説明にもあったのだが、どうやらポイントを消費して電力代わりにしているらしい。一時間で1ポイントの消費なので一日で24消滅することになる。つまり一日2400円も消費するのか。

まだ900以上は残しているので、一ヶ月はこのままでも稼働し続けられるようだ。とはいえ、ポイントの無駄遣いは自重しよう。売り上げが安定するまでは冒険を控えないと。

とまあ、色々と考察しているのには理由がある。暇なのだ。自動販売機になつてから丸二日過ぎたが誰も来やしねえ。よく見ると道も舗装されてない湖畔に置いて、人が来るわけないよな。

まさか……一生誰も現れずに機能停止なんてオチは無いだろうな。ん、んー、機能追加も調べておくか。タイヤが生えて自動で動く機能とかないだろうか。ここはどう考えても場所が悪すぎる。もっと、人の多い場所に移動したい。

ええと、機能、機能。電子レンジ、お湯とかがあれば温かい食べ物を提供できるな。他には、おおっ紙コップに注ぐタイプも可能なのか。あとは……ん？ 機能の下に何か変な項目があるな。何だこれ。

「グゲツゴゲツゴ」

お、生き物の声がした。考え事は後回しにしよう。ずっとボツチプレイだったからな。生き物がいるというだけで妙に心が弾むぞ。聞いたことのない鳴き声だったがカエルっぽいような。声の聞こえてきた方向は湖近くの森からか。目があるとは思えないが気持ちだけでも目を凝らしてみる。

木の影から何か出てきたぞ。はい？ え、最近のカエルって皮膚が黒っぽくて革製の鎧っぽいのを着込むのが流行なのか。手に出来損ないの木製バットのような物を握っているな。おまけに二足歩行しているぞ。

新種のカエルというには無理があるよな。顔が人間ぐらいの大きさだし、剥き出しの腕と足には無数のイボがある。目は吊り上がっ

ていて、カエルのくせに鋭い犬歯が見える。

あれ、どう見ても化け物だよな。二足歩行のイボガエルか。身長は150もなさそうだが見るからに凶悪そうな生き物だ。

特殊メイクだとしたらハリウッドも真っ青なレベルだが、肌の又メつとしたテカリ具合と、目の動きが作り物とは思えない。

ってことは、ここは日本じゃないのか。普通なら驚く場面なのだろうけど、自動販売機になった時点で常識とか鼻で笑う次元だよな。あれっ、異世界とかだとしたら通貨とかどうなってるだろう。円じゃないよな、やっぱ。てことは日本円を手に入れられないから、詰んでないか!?

「ギョルグゲツゴ?」

あ、カエル人間がこっち見ている。おいこら、近づいて来るな。待てよ、革鎧を着ているのなら知的生命体の可能性が高い。見た目で判断するのは人として最低だ。初めてのお客さんになるかもしれない。

「いらっしやいませ」

言葉は通じなそうだが、取り敢えず挨拶しておいた。

「グワゲゴ!？」

驚いて周囲を見回しているぞ。残念、声は自動販売機からなのだよ。

棍棒を構えて、腰を低くしているな。ここで、もう一度声をかけたら、良いリアクション見せてくれそうだが……やめておこう。

暫く、様子を伺っていたのだが何者かを発見できずに諦めたよう

で、再びこっちに向かってきている。

近くで見ると、迫力満点だな。爬虫類や両生類ってそもそも苦手なんだが、それが人間と変わらない大きさになると、おぞましさも倍増だ。

自動販売機である俺から一定の距離を保ったまま、グルグルと周囲を回っている。これが何であるが理解できないのか。

一周して帰ってきたカエル人間が腕を振り上げ……って、おいやめろ！ その棍棒で何する気だ！

止める術を持たない俺は棍棒が振り下ろされるのを黙って見ているしかできなかった。

ガラス部分に棍棒が当たり、衝撃で自動販売機が揺れる。

《3のダメージ。耐久力が3減りました》

今度は何なんだこの文字。ダメージとか耐久力ってゲームじゃあるまいし。ああ、くそ。自動販売機を傷つけるなんて、最低の生物だ。この機能的でありながらも芸術性溢れるフォルムが理解できないのか！

《2のダメージ。耐久力が2減りました》

くそ、カエルが調子乗りやがって。無抵抗なのをいいことにまた殴りやがったな！ 痛覚が無いみたいだからまだマシだけど、このままだと故障しないか！？

って、耐久力って何だ。この自動販売機の頑丈さというか生命力ってのが妥当っぽいけど。

《耐久力 これが尽きると自動販売機は壊れて使用不可になります》

あれか、HPみたいな感じか。今どれだけ残っているのだろうか。てか、自動販売機の耐久力とか性能を調べることは……。

《自動販売機

耐久力	95 / 100
頑丈	10
筋力	0
素早さ	0
器用さ	0
魔力	0

機能 保冷 保温》

おおつ、何かまた出てきた。これが俺のステータスか。耐久力と頑丈以外は0で。まあ、他の能力は自動販売機には必要ないだろうけどさ。魔力が表示されてるって事は魔法が存在する世界って事なのか……くそつ、魔法使える自動販売機とかカッコ良さそうなのに、魔力もないのか。

って、アンニュイな気分に陥っている場合じゃなかった。ど、どうする。このまま、殴られ続けたら破壊されるぞ。ど、どうにか、撃退か耐久力を回復させる方法は無いのか!?

《耐久力はポイントを消費して回復できません》

そ、そうなんだ。だとしたら、ポイントは900まだあるから、持久戦に持ち込めば相手が諦めるかもしれない。

そんな俺の考えを嘲笑うかのように、森から新たに三体カエル人間が現れた。フラグ回収早いな!

や、やばい、やばすぎるぞ。カエル人間の一体は手に斧もってやがるし、あれで叩かれたらシャレにならんぞ。

《2のダメージ、耐久力が2減りました》

わかってるよ！ ど、どうする。機能追加で何か良さそうなのはないか！？

お湯注入 購入時ファンファール 受け取り口の衝撃吸収材 当たり付きルーレット……使えねえなあツ！ もっと、こつ現状を打破するような画期的な機能は！

その時、俺の目に飛び込んできた機能に目を奪われた。目は無いけど。

《変形》ポイント1000000000

何だ、ロボットにでも変形してくれるのだろうか。これは男の口マンが詰まった機能だ！ でも、10億ポイントってお前な……取らせる気ないだろ。

だ、ダメだ。もっと現実的で購入可能な機能は、現状を打破できるとっておきとかないのか！？

ざつと目を通していく間にも《2のダメージ、耐久力が2減りました》と報告の文字が何度も浮かんでいる。ああ、早く、早く、何かもっと効果的……あ、そついや下の方に。

さつき見つけてはいたが後回しにしていた、あの文字をもう一度確認する。

《加護》

加護って何だ。って考えるのは後にして取り敢えず、これを調べよう。

《加護 神から与えられる特別な力。一つだけポイントを消費せずに得ることができる》

おおつ、一個だけ自由に選べるのか。何かよくわからないけど、すっごい超能力みたいな魔法みたいな力だよな!? よ、よーし、選ぶぞ!

《身体変化 視界移動 念話 吸収 強奪 剣技 格闘技 火属性
魔法 水属性魔法》

格闘系とか剣技とかどうしろと仰るので!? 手も足もねえよ! いくつか変形取ってから手に入れてやるからな、待ってるよ! っって言ってる場合じゃないって学習しろ俺!

魔法って、魔力ないから使えないじゃないか。ええと、他には念話で話しかけるといのは、言葉は関係なく通じそうだが、説得に
応じるようには見えないよな。

ほ、他には、自動販売機でも有効そうな加護は無いのかっ!

下の方まで目を通していくうちに、一つ目を逸らせない単語があった。それは 結界 と書かれていて、効果は《自分の周囲半径一メートルに不可侵の結界が張れる。対象を選んで出入りを可能にできる》こ、これだああああっ!

《2、3、5のダメージ 耐久力が10減りました》

もう、時間も余裕もない。こ、これにするぞ!

結界 を選ぶと、体に温かい何か潜り込んでくるような感覚があった。な、何か、良くわからないけど 結界 発動っ!

「グゲゴゴゲゴッ!?」

おお、カエル人間が吹っ飛ばされやがった。尻もちをついてやが

るな。今までよくも好き勝手殴ってくれたな、何か一言言わないと気が済まんぞ。

「またのごりようをおまちしています」

ふっ、言葉は通じないようだが、気分がすつとした。カエル人間も馬鹿にされたのを理解したのか、手にした武器を掲げて突っ込んでくるが、俺の周りの青白い光に阻まれて、近寄れないようだ。

「あたりがでたらもういっぱん」

更に挑発してみる。おうおう、躍起になって突っ込んで来よるわ。この 結界 もしかして凄くできる子なのではないだろうか。半透明の青い壁が四角く周囲を取り囲んでいるのだけど、そこに何度も武器を振り下ろされているが、余裕で弾き返している。

ふはははは、これで壊れない無敵の自動販売機の完成だ！

《ポイントが1減少 ポイントが1減少 ポイントが1減少……》

ちよ、ちよつと待て！ ポイントが湯水のように減っているのですけどっ。何だ、この 結界 って持続するのにポイントを消費するのかよっ！

え、ちよつと、そ、そろそろ、カエルさんたちは自宅に帰るといふのは如何でしょうか。

「またのごりようをおまちしています」

あ、攻撃の勢いが増した。今のは挑発したつもりじゃなかったのだが。おおっ、ガンガンとポイントが減っていく。ほんとマジで、もう諦めた方が良いと思うのですがっ！

購入者

あれから、暫くカエル人間は結界を殴り続けていたが、どうにもならない事を悟ったようで、渋々といった感じで立ち去っていった。何とか助かったのはいいが……確認しておこうか。

《自動販売機

耐久力	65 / 100
頑丈	10
筋力	0
素早さ	0
器用さ	0
魔力	0
PT	346
機能	保冷 保温
加護	結界 《

ポイントがごっそり減っている。結界のおかげで助かったのは確かだが、燃費が悪すぎる。また魔物に襲われたら、撃退できるかどうかも怪しいぞ。

これ、本格的にやばいよな。耐久力も減っているし、自動販売機のボディーが見るも無残な姿に。ポイントは貴重だが、このまま放置して壊れても困る。直しておこうか。

ポイントを35消費して全快したから、残り311ポイント。一日で24消費するから、何もしなければ十日以上持つけど、このまま購入者が現れなければ、機能停止待ったなしか。そうなったら俺は死ぬのかな……だとしたら、あまりにも悲惨な新しい人生 自動販売機生過ぎるだろ。

まずは、人間か人間並みの知能を持った魔物と出会いたい、待つかないよな。これ以上ポイントを消費するわけにはいかないし、待つしかない……誰かが現れるのを。

あれから三日過ぎた。人間は現れず、遠くからこっちを見つめるカエル人間を、何度か目撃したぐらいだ。

刻一刻と自分の死が迫る感覚に身が震える代わりに、ウィーンと自動販売機が音を立てる。緊張感が霧散するな。

はぁー、死ぬ前に一度自動販売機として物を売りたいかった。折角、生まれ変わったのだから、それらしいことを一度ぐらいしたかったのだが。

「も、もう駄目、お腹が空きすぎて力が出ない……はぁ、何でうちっていつもこうなんだろう……」

ひ、人の声だ！ 神は我を見捨てなかったのかっ！

女性の落ち込んだような声だったが、たぶん若い女性だよな今の声は。何処だ、何処から聞こえてきた！？

言葉が通じるのかと言う疑問がずっとあったが、相手の言葉は理解できたということは、こっちの呼びかけも通じる筈だ。異世界なのに日本語が通じるとかツッコミどころは山ほどあるが、そんなもの今はどうでもいい。

こちらら命が懸かっているんだ。

「一緒にチームを組んでいた人にも見捨てられて……怪力の加護があっても、こんなにどんくさかったら、意味ないよね……」

声が聞き取りやすくなってきたということは、こっちに向かって来ているってことだよな。切実に追い込まれている感じが伝わってくる悲壮な声をしている。仲間に見捨てられたのか。カエル人間がうじゃうじゃいるところで、それって致命的なんじゃ。

「食料の入った鞆も逃げる際に落としたり……お腹と背中がくっつくよ……もう、最悪……おかん、おとん、うち、もうあかんわぁ」

泣きが入った。咳く声も後半は関西弁のような訛りが混ざっていたな。田舎から出て来て夢破れた感がひしひしと伝わってくる。

でも、こんな魔物がいる場所に、そもそも何しに来たんだ。旅の途中か、それとも町や村が近くにあるのかな。

「ハンターなんて、うちには、無理やったんや。ごめんなあ、おかん、おとう」

ハンターって何だ。狩人ってことなら獵師なのかな。某ゲームなら魔物を狩る職業な感じだが、カエル人間がうるつくような世界だ。そっちの可能性も捨てがたい。

「食べるもんもないし、どないしたらええんよ。蛙人魔を倒して肉を……あかん、うち一人じゃ攻撃があたりへんし、お腹空いて力でえへん」

怪力の加護を持っていると口にしていたから、力は自信があるけど武器の扱いが下手ということなのだろう。器用さ低そうだな。荷物が無いって事はお金が無い可能性が高いな。う、うーん、まだわからないけど、期待感が凄く薄れている。

「へっ、あれはなんや？ 石碑？ にしては鉄っぽくあらへん？」

おつ、俺に気づいたか。声からしてかなり近いようだが、裏側だからどんな相手かわからないんだよな。前に回ってくるんだ。

俺が念を飛ばしていると、その効き目があったのかどうかは不明だが、裏から回り込んできた女性が姿を現した。

「な、なんやこれ。綺麗な形してるんやけど。ガラスの向こうにあるのは、飲み物？」

小首を傾げているのは小柄な女性だった。金色の髪を横で纏めているな、サイドポニーと言うのだったか、この髪形。

身長は160にも満たない感じで、目が大きく鼻筋が通っているが、綺麗と言うよりは可愛らしい。アイドルにでもなったら、人気沸騰しそうな愛らしさがある。

おどおどとしていて涙目なのが、保護欲をそそる。って、俺は変態か。ま、まあ、そんなことより、この子の格好が目を引く。

靴は登山用のブーツのような感じで、黒いタイツと青い短パン。ここまでは理解できるし、違和感もない。だが上半身が妙なのだ。

警察官が危険な現場で着ている袖のない革製の防弾チョッキ……いや、革鎧だよなこれ。肩パットみたいなのがあるし。頑丈そうな手袋も装着している。

何と言うかファンタジーっぽい格好だ。頭のとっぺんから足先まで観察してみると、腰のベルトに小さな袋が取りつけられている。あれって、貴重品やお金が入ってそうだが。

「お水あるけど、これどうやって取り出すのかな。文字っぽい書いているんやけど、読まれへん」

言葉は理解できても文字は通用しないのか。となると、購入以前

の問題になる。何とか誘導するしかないか。

「このガラス壊したらとれるのかな。でも、そんなんして壊したらもったいないしアカンよな」

「いらっしやいませ」

「な、なんや、今の声どっからしたんや!？」

きよろきよろしているな。怯えながら警戒する姿がちょっと可愛いらしい。

さて、ここで逃げられたら元も子もない。一気に畳みかけてみよう。

「ごうかをとうにゆうしてください」

「へう! この鉄の箱が話したの? 硬貨、お金ってこと?」

その疑問に答えてあげたいが、生憎、決められた言葉しか話せない。

申し訳ないが自力で察してくれ、頼む。こっちも今後の生存が懸かっているんだ。

「え、えと、硬貨って銅貨でもいいのかな、あ、でも流石に青銅貨……銀貨ぐらいじゃないと、もしかして金貨……そんな高価な硬貨は無いし」

この世界の通貨は銅貨、青銅貨、銀貨、金貨って感じなのか。更にも上もありそうだが。まあ、それが日本円に換算して幾らなのか不明だけど。イメージだと銅貨が10円ぐらいなのだろうか。

「投入って、お金入れられそうなのって、この細い穴と透明の蓋がある四角い凹みかな」

この子は警戒心が薄いのか純粹なのか。こんなシチュエーションでビビりながらもお金を入れようとしてくれている。この性格だと荒っぽい生活には向いて無さそうだ。初めての客としては、ありがたいけど。

そうそう、そっちの細い穴に入れるんだ、オーライ、オーライ、そのままゴー！

カランと効果の転がる音が体内に響き、異物が入ったことがわかる。さあ、銅貨らしいがこれでポイントが入れば……。

《硬貨が異なります。機能で硬貨変化を取得すれば対応できます》

マジか。そういや、あつたなそんなの。ちょ、ちょっと待ってくれよ。ええとここら辺に、あつたあつた！ポイント消費は1000なら足りる！

「あれ、やっぱり銅貨じゃダメだったのかな。え、何か数字が表示されている……10？えっと、銅貨一つで10増えるってことは、商品の下の数字が関係しているのかな10000って書いてあるから……」
つつ銀貨一枚なんだ。これだけあつたら晩御飯食べられるんやけど……」

あれ？通貨変更したら値段表示も変化したのか。日本円だと銅貨一枚で10円ってことなのか。銀貨が10000円でコーンスープとミルクティーが購入できる値段になる。あれ、なら値段100のままでもいいんじゃない。ど、どうやって変更すればいいんだろう。

「で、でも背に腹は代えられないよね。お腹空いているし。ここで死んだらお金なんて意味ないんだし。よ、よーし、いくでえ！」

この娘、興奮したり落ち着きがなくなると方言が出るみたいだ。銀貨が体内に投入されて、かつと体が燃え上がるような興奮が全身を駆け巡る。よし、金額は満たされた。さあ、商品を選んでくれ！

「この出っ張りの光っているのが買えるってことだよね……じゃ、じゃあ、ええと、スープの絵が描いているのにしようかな」

言葉が通じないとなると内容が一目でわかる商品の方が良さそうだな。ちゃんと覚えておこう。

震える指がコーンスープのボタンを押し、取り出し口にコーンスープを落した。

「わっ、なんやいまの！？ 下の方から音がしたんやけど」

そーっと怯えながら取り出し口を覗き込んでいる。

そうそう、それが正解だから。さあ、勇気を出して取り出してくれ。

「手を突っ込まんとあかんのかな。入れたら食われるとかせんよね？」

しないしない。だから、早く取ってくれ。このコーンスープは俺のおすすめのメーカーだから。味もさることながら、缶の仕様が気に入っているんだよ。

コーンスープの缶で誰もが経験する、コーンの粒が残るあの現象。あれを無くすために、ここのメーカーは考え抜いて一つの結論に達したのだ。

飲み口を大きくするというのは他のメーカーもやっていた。だが、ここはプルタブ缶ではなく、ボトル缶をいち早く採用した。更に飲み口を大きくしたことにより、コーンを余すことなく頂けるようになった。あのイライラから解消されたのだ。

「あ、取れた。すつごく温かい！ えと、瓶みたいに蓋を捻ったらいいのかな。えいつ。うわあああ、いい香り」

そうなんだよ。飲み口が広いから香りが一気に溢れて、鼻孔をくすぐってくる。それが、寒い時期にはもうたまらなくて、何度購入したことが。

彼女は蓋を開けて、口に当てるとボトル缶を少し傾けた。かつと目が見開き、喉が大きく膨らんだ。

「ふあああああ。おいしいiiiiiii！ な、なんやこれ。うちが利用している飯屋とは比べ物にならん美味しさや！」

おおつ、一気に飲み干した。口の周りに付着しているコーンスープを舌で舐めとり、至福の表情を浮かべている。くうううつ、何だろうこの嬉しさ。こんなにも喜んでもらえたら、自動販売機冥利に尽きるな。

「はああ、もうなくなってもうた。これがこんなにも美味しいんやから、他のものもごつつう美味しいんやろうな。透明なのは水やろうし、ほんなら、あのカップに入っている明るい茶色の飲み物も、やっぱ飲んでみるとあかんよな、うん」

あ、また銀貨投入してくれた。その後、ミルクティーもかなり気に入ってもらえたようで、更にコーンスープを三つ、水を一つ購入してくれた。

合計6300円、こつちの硬貨で言うなら銀貨六枚、銅貨三十枚の収入となる。ポイントに換算すると63ポイントも増えた。値段設定は、このままでも充分いけそうだな。

心と体が満たされ緊張の糸が切れたのか、女ハンターらしい少女が俺に背を預けて眠っている。無防備極まりないが、大切なお客様だ。俺がちゃんと 結界 で守るから安心して寝てくれ。

そう言えば購入後の空き缶や空のペットボトルは消滅しているな。ゴミ対策もばっちりなのか。異世界に優しい自動販売機のような。

自動販売機移動する

「へうあ？ あっ、寝てもうたんか。魔物が現れへんでよかったわあ」

目が覚めた少女が胸を撫で下ろしている。あれだな、小柄で幼い顔の割に胸は大層立派だ。革鎧で押さえつけられているというのに、上から見下ろす形だと胸の谷間がハッキリと分かる。

「お金はだいぶ減ったけど、お腹も心も満たされたわ。ほんまにありがとな」

少女は自動販売機である俺に深々と頭を下げている。何て良い娘さんだ。俺の方こそ感謝だよ。お金を入れてくれたおかげでポイントを増やせるし。

「ありがとうございます」

この言葉が自販機に入っていて本当に良かった。こうやって感謝の言葉を伝えられる。

「え、あ、はい。こちらこそ。ええと、貴方はお話しができるの？」

答えてやりたいが、その返答ができないもどかしさに、生身の身体があつたら身悶えているところだ。どうにかして、こちらの言葉を、思いを、届ける方法はないのか。

「ええと、もしかして特定の言葉しか話せないのかな。知り合いに

ね、魔力を込めた道具の発明をしている人がいてね、名前はヒュールミって言うんだ。ってああ、うちも名乗ってなかった。ラッミスって言うの」

ふむふむ。ちゃんと覚えておこう。初めてのお客様の名前はラッミス。よっし、忘れないぞ。

「でね、その子の発明の一つに、声を物に封じて、それを解放させる研究をしているの。店の呼び込みとかを自動で出来ないかって言っていて。貴方もそういつた感じなのかな。もしあっていたら、何でもいいから声に出してくれたら嬉しいな」

おおっ、意思の疎通をする最大のチャンス！ この子はかなり勘が鋭いのだろうか。これは嬉しい誤算だな。

「いらっしゃいませ」

「うわあ。わかるんだね！ ヒュールミがこれを知ったら感動するんだろうな。あ、じゃあ、そうだ、もしよかったら、はいの代わりにいらっしゃいませ。で、いいえの代わりに別の言葉を話すってのはどうかな」

何と言うグッドアイデアだ。はい、と、いいえが伝えられるだけでも世界が変わってくる。もちろんOKに決まっている。

「ざんねん」

「ぶっ、それっていいえの代わりって事でいいのかな？」

「いらっしゃいませ」

「それは、はい、だよな。うん、わかった。ええと……貴方の名前は言えたりするのかな」

答えたけれど、無理なんだよな。いつかスムーズに会話できる日がくるといいんだけど。

「ざんねん」

「名前は言えないんだね、本当に残念だなあ。あつ、そうそう、貴方は何でここにいるの？ 大事な使命があるとか？」

「ざんねん」

「うーんと、何て聞けばいいのかな。もしかしてなんだけど……寂しかったりする？」

え、何でわかるんだろうそんなこと。ラツミスは加護とやらで、そういう能力があったりするのだろうか。無機物の感情がわかるのか。

「いらっしゃいませ」

「やっぱりそうなんだ。何故か、湖畔で佇むその姿が寂しそうに見えるたの。気のせいかもしれないけど」

そんな哀愁の漂う姿だったのだろうか。何も無い湖畔に自動販売機が一つ置いてあれば、確かに寂しそうではあるけど。

「もしかして、移動しても大丈夫とか？」

「いらつしゃいませ」

「あつ、そうなんだ！もしよかったら、ここから出てヒュールミに合ってみない？彼女なら、貴方と話が合うと思うんだ」

「いらつしゃいませ」

それは望むところだけど、どうやっても移動できないと思うんだが。まさか担ぐわけじゃないだろうし。自動販売機を一人で抱えられるわけがないからな。

「いいんだね！良かったあ、余計なことかと思つて冷や冷やしちやつた。じゃあ、ちよつと失礼しますっ」

え、屈みこんで何してんの。俺に抱き付くなんて、ラツミスもかなりの自動販売機マニアになったようだ。同志爆誕かつ！

「よいしょつとー！」

ふあつ？え、身体が浮いたぞ。おいおい、何でこんな小柄な少女が500キロ以上はありそうな俺を持ち上げられるんだ。

「ちよつと重いけど運べそう。んしょ、んしょ」

おおおつ、移動しているぞ！歩みは遅いけど、凄いなラツミスは。これって怪力の加護つてやつなのかな。指が若干めり込んでいくけど、運んでもらっている立場で贅沢は言うまい。

おー、湖が遠ざかっていく。短い日数だったが異世界に来てからずっと見続けていた風景だ、愛着が無いと言えば嘘になる。

万感の思いを込めて、俺は心の中で頭を下げる。

「ありがとうございます」

「ちょっとここで休憩するね。あ、黄色くてとろっとしたスープ買おうかな。お腹空いてきちゃった」

あれから俺を抱えたまま二時間近く歩き続けていたラツミスは、雑草が生い茂る草原の巨大な岩陰に俺をそっと置いてくれた。

「貴方と出会ってから幸運が降ってきたのかな、蛙人魔かわずじんまに一度も会ってないよ。ここって、あいつらの縄張りなのに」

それはちょっと違うかな。

今のところ戦闘は発生してしていないが、遠くの方からカエル人間が、恐る恐るこつちを見ている姿は何度か目撃している。俺の噂が仲間内で広がって警戒しているのかもしれない。

うーん、お腹が空いているのか。コーンスープじゃ、そんなにお腹膨れないよな。何かお腹に溜まるような物が商品になかったか。

現在のポイントは268。10ポイントを消費して入れ替えることが出来る商品に目を通す。ここでポイントの消耗は厳しいが、ラツミスにはこれからもお世話になる。なら、彼女の為にやれることはやっておきたい。

カロリーが高そうで食感がある物がいいよな。お汁粉とかいいかもしれない甘いし、女性に喜ばれそうだ。あっ、でも餡子あんこって外人は苦手だって聞いたことがある。見た目が泥のように見えるかと

かどうとか。

となると、他に良さそうなものはハンバーガーとかカップ麺という選択肢もあるのだが、それは特殊な機能を追加しないといけないので、ポイントが圧倒的に足りていない今の自分にはきつい。

缶に入っているもので食べられる商品……あつ、あるな。局地的に有名なの。って、これ仕入れポイントが30じゃないか。あー、おでん缶仕入れたかったのに。売値が高い物は交換ポイントも多いのか勉強になったよ。

今は出来るだけポイントを節約しておきたい、無理をせずに安い方にしておこう。

ってことは、売値が1000円というか銀貨一枚の品がいいのかあ、お菓子類があつたな。これって特殊な機能が必要な場合もあるが、普通の自動販売機で稀に清涼飲料水に並んで置いてあるお菓子がある。形状が缶に近ければ普通に置けるようだ。

ええと、あつたあつた。普通のポテトチップスと違いジャガイモを成型してポテトチップスに似せた筒入りのお菓子。これを一つミネラルウォーターと入れ替えておく。

「へうつ！　び、びっくりしたー、何か光って……あ、商品が変わってへん？　何だろうこの赤い筒。薄くて丸い物が重なっている絵が描いてあるけど、もしかして食べ物？」

「いらっしゃいませ」

「あ、そうなんや……じゃない、そうなんだ。値段は同じだし、買ってみようかな」

詭りのままで可愛いのに気にしているのか。

取り出し口から赤い筒に入った成型ポテトチップスを受け取り、悪戦苦闘していたようだ。が何とか自力で蓋を開けた。

「この筒とか凄く質が良いけど、周りに書いている絵も精密で売ったら凄い値段で売れそうだね。って、今は中身中身」

好奇心よりも食欲が圧勝したようで、包み紙を引き破り中身を取り出した。

それがお菓子のような物だと理解したようで、摘まむと躊躇いもなく噛り付く。ちなみにうすしお味だ。

「ふあああ、何、この食感。あっさりとした塩味なんだけど、何これ、止まらない」

口一杯に頬張っては、追加で購入したミネラルウォーターを流し込んでいる。ハマってしまったか、このお菓子の悪魔的魅力に。俺もこれが大好きで、気が付くとこれの倍入っているサイズを軽く一つ食べることなんてざらだ。

「ああっ、お金が湯水のように減っていくうう、でも止まらないいい」

「ありがとうございます」

礼を言うておく。

今回の売り上げは銀貨六枚。日本円で六千円。ポイントで60となった。320まで回復したな。

そうそう、値段変更ができるようになったので、ミネラルウォーターを1000に代えておく。これで今、自動販売機に置いてある商品は全て1000となった。

計算が面倒なので統一したというのもあるのだが、ミネラルウォーターの仕入れポイントとコーンスープ、ミルクティーが同じだったので良心が咎めたのだ。

ラッミスのお金が尽きそうになったら、値段を一気に下げて提供するか。どんどん財布が軽くなっているようだし。暫くは俺の命もかかっているから、この値段で提供させてもらうが。

門番と集落

「もうすぐで、この階層の入り口に着くから。もう少し辛抱してね。そこは小さな集落になっているから、ゆっくりできるよ」

階層？ 階層って何だ。まるで建物内部の様な物言いだけど、頭上には大空が広がっているから屋内なんてことはないよな。

良くわからないけど他に人がいるのはありがたい。商品を大量に購入してもらって、ポイントを大量ゲットしたいところだ。

あれから一度も襲撃を受けていないので 結界 も張らずに済んでいる。遠くから様子を伺っているだけで、ちよっかいはかけられてないからな。カエル人間の情報網は優秀なようで。

しかし、ラツミスは怪力もさる事ながら、体力も大したものだと思う。俺を持ち上げたまま5時間ぐらいは平然と歩き続けていた。やりようによっては優秀なハンターになれると思うのだけど。

「あつ、集落が見えてきた！ やったあつ！ 生きて戻ってこれたんだ」

仲間に見捨てられて一度潰えた希望。それが、俺を見つけてここまで戻ってこれた。嬉しさのあまり涙目になるのも無理はないか。当たり前のように運ばれていたけど、ラツミス以外の人に見つかっていたら、この体を破壊して中身を取り出されていたかもしれない。彼女は運が良かったと言っていたが、それはこっちのセリフかもしれないな。

進路方向に見えてきたのは丸太がずらりと並んだ、手作り感満載

の防壁だった。高さは2メートルぐらいか。結構な大きさの集落っぽい。

出入り口らしき場所には薄汚れた革鎧を着込んだスキンヘッドの男と、角刈りっぽい髪型の男がいる。両方プロレスラーのような体型で見張りとしては充分すぎる存在感だ。

「おっ、ラツミスじゃねえか！ お前さん、無事だったのか。仲間のやつらが半死半生で戻ってきたから、心配していたんだぜっ！」

頬に刀傷のようなものがあるスキンヘッドのおっさんが、屈託のない笑みを浮かべ、ラツミスの無事を喜んでいる。見た目に反して人当たりのいい人なのか。

「はい、何とか生き延びていました！ カリオスさん、ご心配をおかけして申し訳ないです」

俺を地面に置いてからペコペコと頭を下げている。腰が低いならラツミスは。

隣に立つ角刈りの人は目を細めて、二人のやり取りを眺めているだけだ。あれは、微笑んでいるようにも見えるな。

「お前さんが無事だったのは何よりだが、それなんだ？」

「あ、これですか。たぶん魔道具らしくて湖畔で拾いました。お金を入れたら商品を取り出せるんですよ、この子！」

この子が。ラツミスの方が俺よりもかなり年下だと思うが、異世界で生まれ変わったとするなら、生後まだ数日だからな。

「ほおおっ、それはどっかの魔法具の開発者が実験の一環として置

いたのか、それとも宝か。しかし、清流の湖階層にそんなものがあるなんて話、聞いたこともねえぞ。俺らはここの門番やってもう五年なるが……なあ、ゴルス」

「ああ」

スキンヘッドの方がカリオスで、無口角刈りがゴルスか。カリオスが交渉ごと担当っぽいな。あっちが無口過ぎるし。

「発明品なら持って来たらダメでした？」

「まあ、ただ憶測だ。それに、階層に落ちている者は拾ったものに所有権があるってのは、このダンジョンでの常識だ」

ダンジョン？ え、さつきから階層とか口にしていたけど、もしかしてここってダンジョンの一階層に過ぎないというのか……。え、空あるよ？ どう見ても地下には見えないよな、どうなってんだこの世界。

「でだ、金を払えば商品を買うってことだが、それって俺たちも買えるのか？」

「はい、大丈夫だと思います。いいよね？」

ラツミスがこちらに振り返り問いかけてきた。答えは決まってる。

「いらっしやませ」

「おうあっ！？ 何だ、今の男の声は誰だ！？」

カリオスが上半身を仰け反らして、辺りを見回しているな。ゴルス訝しげにこつちを凝視している。今のが俺の発言だと理解したのか。

「あははは。大丈夫ですよカリオスさん。今のはこの子が返事したんですよ、ねっ」

「いらっしゃいませ」

「ま、まじか。話もできる魔道具なんて聞いたことねえぞ。これって結構、高値で売れるんじゃないかねえか……」

「う、売りませんよ！ この子は私と一緒にヒュールミに会いに行くんですから」

俺を守るように前に立ち両手を広げている。

うつつつつ、なんて良い子や。ポイントの為とはいえ、金銭巻き上げてごめんよ。

「ヒュールミってあの、いかれた魔道具技師のねえちゃんか。暫く、この集落にいたことがあったよな。知識は半端ねえから、いいかも知んねえな」

何だろうその不安になる説明は。枕詞にいかれたが付く技術者なんて、良いイメージが全く浮かばない。会うのを遠慮したくなってきた。

「でしょ。それで、何か購入しますか？」

「おう、物は試した。お前さんが勧めるなら安全だろう。1000
つてことは銀貨一枚か、安くはねえが……これ、商品どうなってん
だ」

「ええとね、これが美味しい水だよ。で、これが甘くてミルクが入
ったお茶みたい。この二つはとつても冷たいよ。で、下の段のは温
かいとろつとしたスープ。あとは赤い筒のは、ズユギウマを揚げた
ような食べ物だったよ」

「温かいのと冷たいのもあるのか。それじゃ、スープと揚げたの食
うか。ゴルスはどうすんだ」

「甘いお茶をもらおう」

「こづかをとつにゆうしてください」

二人がびくつと体を揺らす、ラツミスの指示に従い硬貨投入口
に銀貨を入れてくれた。

注文の品を全て渡し終えたので「またのこりようをおまちしてい
ます」と礼を言っておく。

両方ボトル缶なので簡単に開けているが、これプルトップにした
ら開けられなさそうだな。暫くは、プルトップ缶は避けておこう
か。

「スープあったけえな」

「こつちは冷たい」

二人が同時に飲み口を含み、一気に煽る。その瞬間、カツと目が
見開かれる。

「なんでえ、これ！ おいおい、マジでうめえぞこれっ」

「ほう、こちらも美味だ」

「この揚げものはどうなんだ……おおっ、やべえ、あっさりしてるんだが止まらねえ」

「少しくれ」

成型ポテトチップスを貪り食う二人を眺め、ラツミスは嬉しそうに顔をほころばせている。俺も表情があるなら同じような顔をしてそうだ。

カリオスが渋るのでゴルスは追加で成型ポテトチップスを購入してくれた。今度はミルクティーを美味しそうに飲み干すのを見て、カリオスが興味をもったようだ。ミルクティー追加入りまーす。

かなり気に入ってくれたようで、二人とも全商品を購入して、カリオスはコーンスープ、ゴルスはミルクティーがお気に入りようだ。

総売り上げ9000、銀貨九枚となった。90ポイントも増えるな、上客に感謝。

「いやあ、これいいぞ。味も相当ランクたけえし、温かいのも冷たいのも飲めるってのが最高だ。ここに設置してくれねえか？ 見張りやってると、この場から離れられないからな。これがあつたら、めっちゃありがてえぜ」

「確かに」

あー成程。ここに設置してもらったら、二人は定期的に購入して

くれそうだし、見張りも交代するだろうから、その人たちも買ってくれば悪くない売上かもしれないな。

「うーん、どうしよっかな。私もこの子から離れたくないし……」

「それじゃあ、たまにここに持ってきてくれよ。来たら必ず買っぜ。他の奴にも教えておくからよ」

「そのままだと運びにくいだろう。背負い紐でも買ったらどうだ」

「おーそれは、ナイスアイデアだ。抱きしめられるように持ち運ばれるのも嫌いじゃないが、背負い紐か何かで背負えるようにすると、ラツミスも運びやすくなって良さそうだな。」

「あ、それいいかも。貴方もそれでいい？」

「いらっしやませ」

「いいんだね。じゃあ、たまにこの子と一緒に来るねー」

「おう、頼むぜ。これで見張りの楽しみが増えたってもんだ」

「助かる」

これで安定した売り上げが見込めそうだ。ポイントは俺の全てだからな。もっと新商品も仕入れたいし、機能だつて追加したい。

まずはポイントを集めることが最優先事項だ。

「まずは宿屋に戻るっか。何をするにも先立つ物が……」

おう、すまない。俺が散財させたからな。余裕が出て来たら売り上げの一部を、ラッミスに渡せたらいいんだが。どうにかできないか、暇な時に調べておこう。

集落の中は大きなテントが点在している。テントといっても、休日のキャンプで使うような物ではなく、遊牧民族が住居としている円形でしっかりした造りをしている。

キャンプの一つ一つが商店や住居のようで、入り口付近に立っている人々から奇異の視線が注がれている。小柄な少女が四角い鉄塊を抱きかかえていたら、そりゃ奇妙に見えるか。

集落の地面は平らに均されている。舗装とまでは呼べないが外と比べれば歩きやすそうだ。

「あれが、私の泊まっている宿屋だよ」

集落内では珍しく二階建ての木造建築がそこにあつた。

金策

「おかみさーん。ただいま！」

宿屋の扉を開け放ち、扉脇に俺を置くとラツミスが元気よく挨拶をしている。

掃除が行き届いているホールらしき場所には、箒を手にした恰幅のいい女性があんぐりと大口を開け、こちらを見ている。

「あんた、無事だったのかい！ 心配したんだよ。はああ、死人魔じゃないよね、ちゃんと呼吸してるかい」

「生きてる、ちゃんと生きてるって。色々あったけど、何とか帰ってきたから」

体を叩いて確認する宿屋の女将さんに、ラツミスが引きつった笑みで説明している。この集落の人は優しい人が多いのか、ラツミスが愛されキャラなのかは不明だが立場は悪くないようだ。

「あんたと組んでたハンターたちは傷だらけで戻ってきて、死んだって言っているし、娘は絶対に信じないって、あいつらに怒鳴りつけていたよ」

「ムナミにも心配かけちゃったね。後で謝っておかない」

「あああああああつ！ ラツミスウー！」

ホールを揺るがす絶叫に二人の肩が縦に揺れた。ラツミスが振り

返った先には階段を下りてくる少女がいた。

少女は両腕で大きな籠を抱きかかえ、その上には洗濯物が満載されている。赤みがかった髪を三つ編みにして、額には三角巾を巻いている。服装は宿屋の制服なのか女将と同じ配色のエプロンスカートなのだが、少しアレンジが入っている。

丈が短くフリルが追加されている。若者向けの制服といった感じが。

目を引くような容姿ではないのだが、素朴な感じでありながら鋭い目つきが利発そうな印象を抱かしてくれる。ぶっちゃけると、ぱっとしない地味メイドって感じた。

そんな彼女が猛烈な勢いで階段を駆け下り、ラツミスの前まで特攻してくると洗濯物を床に置き、両肩をがしっと掴んだ。

「え、生きてるの！ 死人魔じゃないよね！」

「ム、ムナミ、生きてる、生きてるから！」

ムナミってことは女将さんの娘か。さすが親子だ、言っていることが同じ。

体を激しく前後に揺らされているので首がもげそうだ。そろそろ、やめてあげたほうが……。

「まったくもう、どれだけ心配させるの。ラツミスと一緒に行動していたあいつらを問い詰めたら、見捨てて逃げたって言うから二度とこの集落で生活できないように、悪評広めてやったわ。ふふふふ」

俯き気味の顔に影が差してめっちゃ怖いんですが。怒らしたら危険なタイプか。

「だから、慌てて荷物まとめて出て行ったのね……」

女将さんがため息を吐いている。

「ところで、それなに？ 入り口にドンと置いてある重そうなそれ」

「ああ、この子は湖畔で見つけたの」

「ラツミス……また変なのを拾ってきたの。前は蛙人魔の子供拾ってきて大騒ぎになったのを覚えている？」

「う、うん。で、でも、今回は違うよ？ この子はすっごく便利で私を助けてくれたんだから」

ジト目で親子に見つめられ、しどろもどろになりながら俺との出会いと性能、これからどうしたいかを説明している。

「大体は理解できたけど……ラツミス、地上に戻ってヒュールミに会わせるとしても転送陣のお金どうするの？ 宿屋代もあるの？ 荷物全部失ったみたいだけど？」

「あ、はい。何もありません……どうしようもありません」

矢継ぎ早に質問をされ、ラツミスが力なく崩れ落ち、両膝を突いてうなだれている。

……貴重な財産の殆どが俺の中なんだよな。今までの会話に出てきた単語を抜き出して考えると、地上に転送陣とダンジョンか。

ここはダンジョンの中で地上に戻るには転送陣を使用しなければならぬ。そして、利用代金が結構する。そして、ラツミスは金欠。

すまん。

ダンジョンの中か。現実味が無いが、無いが、俺って自動販売機なんだよな……。その時点で常識とか現実味って、鼻で笑うレベルだ。そういうものなのだろうと、受け止めるしかない。

二人の会話に口を挟むにしても「いらっしやいませ」「ありがとうございました」「またのごりようをおまちしています」「あたりがでたらもういっぼん」「ざんねん」「こうかをとうにゆうしてください」「でどうしろというのか。

そんなことを思案している間に話は終盤に差し掛かっていた。

「仕方ないわね。暫くうちで宿屋の仕事をする事。その箱は宿屋の外に置いて、客引きしてもらおうかしら。中身も売れるし一石二鳥でしょう」

それは願ったり叶ったりだ。

「いらっしやいませ」

「うわ、本当に話すのね。じゃあ、客引きよろしくね」

「あつ、でも門番のカリオスさんに、たまに持ってきて欲しいって、言ってたよ」

「じゃあ、途中で抜け出して置いてきていいから」

「はい」

こうして俺はこの集落で暮らすこととなった。

集落は100人程度なのだが住民の入れ替わりが激しい。ハンター向けの商売をしている住民だけが固定メンバーのようだ。

ハンターというのは魔物の討伐や素材集めや護衛の依頼を受けたり、もしくは迷宮探索で秘宝を見つけ一攫千金を狙う人たちらしい。ハンター協会の支部もこの集落に存在していて、ハンター達への依頼や素材の買取りをしている。

そうそう、ここは清流の湖と呼ばれるダンジョンの階層だそうだが、空もあるのにダンジョン内部って……異世界って凄いとしか言いようがない。

この階層は端から端まで移動するだけで三週間はかかるらしい。生息する主な生物は、名前にもなっている清流の湖に住む魚介類や、蛙人魔と呼ばれるカエル人間らしい。他にも多様な生物がいるらしいが、詳しいところはわからない。

ちなみに情報源は毎日何かと話しかけてくれるラツミスと、宿屋を利用する客の会話を盗み聞きして得た。それと

「それで俺はこう言ってやったのさ。無法者からここを守るのが俺の仕事だってな」

門番をしているカリオスだ。暇を持て余しているらしく、門の近くに設置されている時は頻繁に話しかけてくるのだ。

「いらっしやませ」

「でよ。最近は蛙野郎が活発らしくて怪我人が多くてな、近々大掛かりな討伐隊が組まれる時期だぜ」

「いらつしゃいませ」

相槌さえあればいらしく「いらつしゃいませ」を繰り返しているだけでいいのは楽なんだが。

討伐隊か……ここに来てから一週間が経つが、どおりで最近見たことのないハンターを頻繁に見かけるわけだ。

「って喉が渴いちまったが、どれも飲み飽きたな」

そりゃ毎日五本以上は購入してもらっているからな。新商品を仕入れてもいい頃合いか。ポイントもかなり増えてるしな。この一週間で物珍しさと味で一気に有名になって、驚くほど売り上げがあったから、ちよつと確認してみるか。

自動販売機

(冷)	ミネラルウォーター	1000円	1銀貨	(130個)
(冷)	ミルクティー	1000円	1銀貨	(24個)
(温)	コーンスープ	1000円	1銀貨	(19個)
(常)	成型ポテトチップス	1000円	1銀貨	(36個)

PT 3253

機能 保冷 保温

加護 結界

何度も補充をして400個以上売り上げたおかげで、ポイントが3000を越えてくれた。何かあるかわからないからポイントは溜め込んでいたが、機能も追加したいところだな。

欲しい機能の追加は低くても1000ポイントを消費するので踏ん切りがつかなかったが、一つぐらいなら追加しても問題は無いだろう。

あつ、でもここは順当に品数を増やした方がいいのか。例えば、カップラーメンのお湯出し機能を追加したら、自動販売機の体が変わるってことになる。他の商品に影響を与えないか不安だ……いや、結界が張れて、機能追加ができて、人間の意思がある自動販売機の時点で、そういう常識的な心配はするべきじゃないのか。

う、うーん。あれこれ考えるくらいなら客のニーズを一番に考えた方が良さ。門番のカリオスとゴルスは一番の常連だ。二人が何を望んでいたか思い出せ。

確か、もう少し腹に溜まる物が欲しいって言っていた。なら、おでん缶を提供したいところだが、ふたの開け方わかるかな。プルトップ方式ってこの異世界じゃ浸透していないようだし、説明するにも俺には不可能だからな。

なら、諦めるしか……あつ、いや、いけるか！

俺はあることを思い出し、メーカー名を探し当て、おでん缶を100個30ポイントで追加した。

「おつ、急に光ったと思ったら、商品追加されてやがるぞ。値段は……3000か。銀貨三枚はちと厳しいな。だが、新商品が出たとなれば買わずにはいられないっ！」

わかる、わかるよ。自動販売機の新商品の魔力って恐ろしいよな。痛いほどよくわかる。ましてや、湯気の上がった美味しそうな写真が印刷されていたら、そりゃ食指が動くってもんだ。

そついや、言葉は通じなくせに数字は通じるって違和感しかないが、そんなことを言っていたら何で言葉が通じるんだって話だよな。なんかこつ、魔法的なもので伝わっていると信じておこつ。

ダンジョンの階層というのは外の世界に比べて、かなり稼ぎやすいところのようで、その分、危険性も高いそう。ハイリスクハイ

リターンなので上手く立ち回っている連中は懐具合がかなり温かい。ここにいる商人たちがあえて危険地帯で商売する理由がそこにある。あらゆるものが地上に比べて高値で売ることができ、貴重な品を手に入れる可能性も高い。

そんな集落を守る門番は結構な高給取りらしく、だからこそ俺を御鼻屑にしてくれている。多分、地上の安全な町ならこの値段設定では商売が成り立たないだろう。

「ほう、熱いなこれ。つてか、どうやって開けるんだ」

やはり、そこで躓いたか。だが、よく缶を見てくれ。カリオスもゴルスも注意深い人間であることを、この一週間で知っているからこそ期待できる。

缶を摘み上げ、しげしげと見つめている。ゴルスも気になるようで、見張りそつちのけで横目でじっと観察している。缶をぐるっと回したところで、二人とも気づいたようだな。

「ん？ 何か絵が描いてあるぞ。これは、開け方と食べ方が」

そう、このメーカーのおでん缶は食べ方がわからない人に向けて、説明の絵が側面に描かれているのだ。

某電気街で有名になったこれは海外にも知れ渡り、マニアックな観光客が購入することが増えた。その際、食べ方がわからずに火傷をする外国人が増えてしまい、言葉が通じなくても理解できるよう、懇切丁寧な食べ方の手順が絵で側面に描かれるようになったのを、ふと思いついたのだ。

「ええと、この上のこれをくいつと折るようにして……おつ、いい匂いがするじゃねえか。で一気に上に押し上げると、開いた開いた」

よっし、第一関門突破だ。これで二人にはこの系統の缶を提供できるようになった。商品の幅が広がるぞ。二人から他の人にも浸透するだろうから、数週間もすれば常連の殆どが対応できそうだな。カリオスが食べやすいように串の刺さったおでんを一本取り出す。あれは、ウズラの卵とちくわ、こんにやくの黄金トリオ串か。薄らと湯気が立ち昇るそれを口に含み、まずは一番上のウズラの卵を頬張っている。二度噛んだところで、鼻の穴から湯気が噴き出し、目尻が下がる。

「ほおうあう。やべえ、これやべえわ。一番好きかもしれん。この茹でた卵に複雑でありながらくどくない味が沁みこんでいて、噛んだ瞬間口の中に黄身と混ぜた汁が溢れやがった……くそっ、やべえな。酒が欲しくなるぜ」

ウズラを食べきると、次にちくわを噛みしめる。

「くうう、これも味が沁みこんでいてたまんねえな。初めての食感だが、仄かに魚っぽい味がするぞこれ。一体どうやって作ってんだ。この下のは……おおおっ、ぐにぐにしているが、いやじゃねえ。ははっ、おもしれえ」

ちくわとこんにやくも気に入ってくれたようだ。出汁も全て飲み干し、満足げな顔で更に財布から銀貨を三枚取り出したところで、割って入ったゴルスが先に投入した。

「て、てめえ、俺が買おうとしていたところだろっ！」

「次は俺だ」

これも手ごたえはばっちりだな。おでん缶も売れ行きに期待できそうだ。

こうしておでん缶は口伝えに広まり、清流の湖の集落限定でブームを引き起こすことになった。最近めっきり寒くなってきた環境も売り上げに貢献してくれたようで、これからも期待できそうだ。

自動販売機の日

ここに来てから一日のスケジュールはこうなっている。

早朝、宿屋の前から始まる。夜は寝なくてもいいのだが、最近スリープモードを覚え、消費ポイントが半減して眠ることが可能となった。まあ、眠らなくても何ら問題は無いのだが、起きた時に何となく気分がいい。

「おはよう、ハッコン！」

朝っぱらから元気いっぱいラツミスの声が響く。宿屋の作業着に着替えた姿も最近ではさまになってきている。

ちなみに、ハッコンというのは俺の名前らしい。命名はもちろんラツミスだ。宿屋の娘、ムナミが箱と呼んでいたのを聞いて、それは可愛げが無いという理由でハッコンとなった。

そのネーミングセンスは正直どうかと思うが、彼女の嬉しそうな顔を見ていると「いらっしやいませ」と同意せずにはいられなかったのは、仕方のないことだと思う。

「今日も一日頑張ろうね！」

「いらっしやいませ」

俺の体を綺麗な布で拭きながら、いつものように話しかけてくれる。彼女は危険なハンター稼業をするよりも、宿屋の従業員の方が似合っていると思うのだが、彼女には彼女の考えがあるのだろう。

今日も一日お互い頑張ろうという気持ちを込めて、受け取り口に数日前に仕入れたスポーツドリンクを落とす。

「今日も賣っていいの？」

「いらっしゃいませ」

「ありがとう！」

美味しそうに飲み干す彼女を見ているだけで、機械の体が温まった気がしてくる。

最近ではかなり自分の体 自動販売機の仕組みを理解できてきたので、こうやってタダで商品を出すことも可能になった。

隅から隅まで綺麗にしてもらったボディが、朝日を浴びて眩しく輝いている。今日も一日、商売に励むとしよう。

彼女が宿屋に戻ってから数分が過ぎると、いつものように常連が俺の前に現れる。

「いらっしゃいませ」

「はい、おはよう。やっぱり朝はこのスープ飲まないと始まらないねえ」

「お婆さんもそうですか。僕もこの甘いお茶が好きで好きで、これを飲んでからじゃないと気合が入らないのですよ」

「いやいや、朝は水じゃろう。目覚めの一杯が最高なんじゃよ」

老夫婦とやせ気味の青年が話をしている。

確か、老夫婦はこの近くで加護の鍛錬方法や扱い方をハンターに教える生業をしているらしい。元凄腕ハンターと言う噂だ。

青年の方は近くの道具屋で働いている跡取り息子らしく、昼にな

るとこの宿屋の一階にある食堂に毎日食べにきている。ラツミスによると、この青年は宿屋の看板娘ムナミに気があるらしい。

「ありがとうございます。またのごりようをおまちしています」

三人にいつものようにお礼を口にして、立ち去る背を見守っている。

彼らが消えるタイミングを計ったかのように、四人の屈強な男たちが姿を現す。

「ふうー、ようやく夜の見張り終わったぜ。今日は何にすっかな」

「いらっしゃいませ」

売り上げ貢献度ナンバーワンのガリオス一行の登場だ。彼らはこの集落の門番と治安維持を担当しているので、交代のタイミングで利用してくれることが多い。

今日もいつものように飲料と成型ポテトチップスを買っていった。ここからは少し暇になる。ちなみに、おでん缶は朝、宿屋の前にいる時は陳列をしていない。宿屋で朝食を提供しているので、商売の邪魔をしたくないからだ。

ここから、客はぼつぼつと不定期になる。値段が少し割高なので、頻繁に買える人が限られてくるので、週に二三次購入してくれる客が大半になる。

昼にはまだ少し早い時間帯になると、ハンターギルドの方角から鎧を着込み、手に武器を携えたグループが姿を現すようになる。

「今日は日帰りだが、水は忘れずに購入しておけよ。懐に余裕があるなら煮物の入った缶と赤い筒も買った方がいいぞ」

「ええと、これはどうやって商品を買っんですか？」

「わからないのか。なら俺が教えてやるう」

グループのリーダーらしき黒い鎧を着込んだ髭もじやの男が、ちよつと自慢げに説明をしている。確かこの人は四日前に自動販売機の前に現れて、誰もいないタイミングを見計らって、おっかなびつくり商品を購入していた人だよな。

ちゃんと前もって練習していたのか。厳つい顔つきも何処か可愛く見えてくるのが不思議だ。

自動販売機の商品は密封性もあり使用後は消える仕様なので、外に探索や魔物討伐に向かうハンターたちに人気がある。女性のハンターには紅茶が大人気のように最近仕入れたレモンティーとミルクティーで派閥ができているという噂を耳にした。

コーヒーも置いていたのだが、あまり人気が無い。一部の熱心なお客がいるので商品をひっこめることは無いが、カフェオレに変更した方がいいかもしれない。

この時間帯になると遅めに起床することが多いハンターが利用することが多いので、おでん缶も置くようにしている。

昼になると、おでん缶を再び引っ込める。宿屋の食堂が書き入れ時なので、昼食を出来るだけ店内でとってもらえるよう、「いらつしやいませ」と客引きに集中する。食べ終わり食堂から出て行くお客には「ありがとうございます」と言うのも忘れない。

儲け時を過ぎて人通りも少なくなってくると、視界の隅で小さな何か動いたのを見逃さなかった。

また来やがったな、あのガキ。この時間帯になると必ずと言っていい確率でやって来る女の子がいる。頭は薄い茶色の髪でツインテ

ールの見るからに生意気そうな子供だ。年齢は10歳ぐらいだろうか。

この集落の中ではかなり仕立てのいい服を着込んでいて、典型的な甘やかされて育ったお嬢様といった感じがする。

木の壁で囲んでいるとはいえ外には魔物がうろつき、お世辞にも安全だとは言えない集落に、こんな子供がいることが不思議でならなかったのだが、ここで最も大きな石造りの店を構える大商人の孫らしい。

数日前に気づいたのだが、一人で気ままに集落を散策しているように見えて、距離を置いて護衛の人が数人潜んでいる。まあ、それがわかったのも、お嬢様を尾行していた黒服の男がミルクティーを購入した際に、愚痴を零していたからだけど。

「スオリ様のおてんばぶりにも困ったものだ。もう少しお淑やかであれば、我々も楽ができるのだが」

あの時は黒服の男性に同情もしたが、今はもつとちゃんと蔑しると声を大にして言いたい。このスオリという小娘はおてんばという次元を通り越しているのだ。

初見で俺を見つけた時は物珍しそうに眺めていたので「いらっしやいませ」と声を掛けると、飛び上がった驚き慌てて逃げ去った。反応が初々しくて、可愛らしいと思ってしまうた当時の自分を殴りたい。

問題は次の日からだ。遠くから眺めているだけなら良かったのだが、何を思ったのか足元の石を拾って投げつけてきたのだ。非力な少女の投げた石なので傷はつかなかったが、イラッとした。それでも子供のしたことだと大目にみていたら、更に翌日。

今度は鞆を肩にかけた状態で至近距離まで近づいてきたので、買

い物でもするのかと思えば、取り出し口に鞆から取り出した小石を詰め込もうとした。流石にそこで堪忍袋の緒が切れて最大音量で、

「ごうかをとうにゆうしてください」

と至近距離で放つたら、腰を抜かしたらしく地面に尻もちをついた。

「ぶ、無礼者！ わ、わらわをだ、誰とおもっていえるんひゃ！」

呂律が怪しいながらも怒り狂っているようだ。そこら中から黒服の男女が四人飛び出してきて彼女を抱きかかえる姿にはかなり引いたな。

その後も俺を壊せだとか叫んでいたが、黒服に運ばれて行つてその場はそれで収まった。まあ、それからが酷かったわけだが。

かなりプライドの高い子らしく、俺に驚かされたことが許せず、嫌がらせが日に日に酷くなっていった。ペンキのような物をぶちまけようとして俺に驚かされて自分で被つたり、固い棒で俺を傷つけようとして転んで泣いたり、一度も上手くいってないが健気だと笑って済ませるレベルじゃないんだよな。

で、今日は何をしでかすのかと警戒していたのだが……あれ、俯いてトボトボと歩いている。気落ちしているのが目に見えてわかるな。これが芝居なら大したものだが、こんなわかりやすい性格の子供に、そんな器用な真似はできないだろう。

んー、俺の前に立っているのに悪戯を仕掛けてくるわけでもなく、ぼーっと突っ立っているだけだな。顔を上げた目元には泣きはらした後がある。何か家庭でトラブルでもあったのか。

いつも小憎たらしいぐらいに元気いっぱいの子供がここまで落ち

込んでいると、何とかしてやりたいと思うのが人情だよな。しゃーない。ここは大人としての度量を見せよう。

商品一覧に目を通して子供が好きそうな飲み物を選んでみるか。妥当なところはオレンジジュースだよな、それも100%とかじゃなくて糖分多めがいい。

となるとCMでも有名なメーカーのが妥当か。よいしょっと。新たにオレンジジュースを仕入れて、取り出し口に落とす。

「えっ、今の音は」

「いらっしゃいませ」

今日は俺のおごりだお嬢ちゃん。今度からは金を払って購入してくれよ。

「もらっていいの？」

オレンジジュースを抱えてキョトンとした顔は結構可愛いじゃないか。いつも、怒ったり拗ねたり不貞腐れたりした顔しか知らなかったが、将来有望だな。

「あ、あの、ありがとう」

「またのぐりようをおまちしています」

夕方前になると俺はラツミスに背負われて門まで運ばれていく。俺を抱いて移動するには不便だろうと、荷運び用の背負子を改良した物を彼女が購入してくれたので、かなり快適に移動できるようになった。

ラツミスにそっと置かれ門の傍に佇んでいる。夜は宿屋の食堂兼

酒場が終わるまでここに滞在するのが日課である。ちなみに成型ポテトチップスとおでん缶は、女将さんが大量購入済みで、酒のつまみとして提供されているそうだ。

日頃お世話になっていたので場所代の意味も込めて、女将さんが購入する際には半額で提供させてもらっている。

「ふう、さみいな。おつ、また新商品仕入れたのか。ってか、ポタシが青いのは確か冷たいやつだったか。うまそうだが、やめとくかいつものスープいっとくぜ」

「俺は温かく甘いお茶を」

「なっ、甘いお茶、温かいのもあるのかよっ！ くそ、後でそっち買っぞ」

ミルクティーの温かいも仕入れておきましたので御贖に。

カリオスとゴルスの両名は毎回かなり購入してくれるのでありがたいが、財布の中身が心配になる。門番はかなり実入りが良いとは聞いているので大丈夫らしい……って浪費させている俺が心配するのはおかしい話か。

門の脇に俺がいるのは門番担当者たちに商品が好評というのもあるのだが、何故か俺がいる時だけは、蛙人魔が襲ってこないというジンクスが広まっているというのも大きいらしい。

「ハッコニー！ そろそろ帰るよー」

お、ラツミスが呼んでいる。宿屋の仕事が終わったのか。じゃあ、俺の仕事も今日はここまでだな。

最後に二人が温かい飲料を購入してくれたのが、本日最後の販売になる。

「またも背負子に置かれて、小柄な体格からは信じられない怪力で軽々と持ち上げられ、門から宿屋までの帰り道を二人……一台と一人で歩く。」

「今日はね、宿屋で面白い客が来たんだよ。この迷宮に潜るのは初めてらしくて、すつごく元気な同い年ぐらいのハンターだったよ」

「いらっしやいませ」

「そう言えば、ラツミスって幾つぐらいなのだろう。勝手に15、6ぐらいだと思っ込んでいたが、実際はもう少し年齢が上下するかもしれないな。」

「ハツコンはどうだった」

「あたりがでたらもういっぱん」

「楽しかったのかな。いつか、いっぱいお喋りできるようになるといいね。その為にも早くお金貯めてヒュールミに会いに行かないとね。そしたら、きっと色々出来るようになると思うんだ！」

「彼女は俺に命を救われたと思って、色々尽くしてくれているが助けられたのは俺の方だよ。ラツミスと出会っていなければ俺は湖畔で機能停止していただろう。」

「感謝するのはこっちだよ。本当に」

「ありがとうございます」

「どうしたの急に。お礼なんて言わないでよ。うちの方こそハツコンに助けてもらったんだし。ありがとうございます」

彼女のたわいのない話に相槌を打つことぐらいしかできない俺だが、彼女が満足そうに笑ってくれているので、それだけで充分。

異世界に自動販売機という訳のわからない状況だったけど、こんな生活も悪くないと思いはじめている自分に、顔があれば苦笑いでも浮かべてそうだ。

異常な環境だけど、こんな日常ならいつまでも続いて欲しい。心からそう思った。

会長

今日も元気に宿屋の前で目覚めた。

当初は俺を盗もうとする連中もいたが、最近は平和なもんだ。あの金髪ツインテお嬢様も悪戯をしなくなって、ちゃんと購入してくれるようになったからな。

オレンジジュースがかなりお気に入りらしいので、今度は別の果汁ジュースも増やしておこうかな。

いつもなら、そろそろ老夫婦と商人の青年が来る頃なのだが、今日は彼らとは違う別の来客があったのだが……何で俺をじっと見つめたまま、微動だにしないのだろうか。

俺の体は自動販売機の平均身長つばいなので180を越えているのだが、目の前の巨大な熊は頭一つはでかい。熊と表現したが本当に熊なのだ。

黒毛の巨大な熊がフード付きのロングコートを着ている。嘘や冗談や比喻ではなく間違いなく熊だ。普通なら集落の中が騒動になりそうな案件なのだが、道行く人々はチラッと視線を向けるだけで、誰も驚いたりはしない。

と言うことは、この世界では熊人間というのは別段珍しくないってことか。カエル人間もいるのだから、まあ、そうなの……か？

「あれー、会長こんなところで何しているの？」

宿屋の扉を容赦のない勢いで開け放ち、いつものように元気いっぱいいの声を響かせているのはラツミスだ。

今、会長とこの熊を呼んだよな。この風貌でどこぞのお偉いさんなのだろうか。言われてみれば何処となく知性を感じるような顔を

しているような気が、しないこともない。

「ふむ。ラッミスか」

何と言う重低音ボイス。その姿と相まって圧倒的な存在感を生み出している。一言発したただけだというのに、頼れる上司っぷりが半端ない。

「珍しいね、ハンター協会の会長さんが、こんなところまで来るなんて」

「ふむ。今回はこの意思ある魔道具に頼みごとがあつてな」

えっ、俺？ ハンター協会の会長つて事はかなりのお偉いさんだよな。そんな御方が俺に何の用があるつていうのだろうか。

「ハッコンに用なんだ。じゃあ、こんな場所でも何だから中に入つて！ ハッコンはうちが運ぶね。よいしょつと」

こうやって運ばれるのも慣れてしまったな。まるで介護を受けているような感じだが、自力で動けない俺にとつて、彼女の存在がとても大きくなっているのを日常の節々に自覚させられる。

宿の丸机の椅子を一つ外してそこに俺が置かれ、向かい側に熊會長が位置する。どんとその巨体を椅子に預け、ぎしつと軋む音がした。

ラッミスは俺の右手側に陣取っているな。

「お主の怪力はハンターとしてかなり有益なのだが、戻る気はないのか」

「今は宿屋の仕事が楽しいし、うちがハンターに戻っても組んでくれる人がいないから……」

「ふむ、そんなことは無いと思うが、いつでも戻ってきて良いのだからな」

「ありがとう、会長」

熊会長は鷹揚に頷いている。ラツミスはハンターとして落ちこぼれだと口にしていたが、会長からの評価は低くないようだ。相性のいい相手と組むことが出来れば、才能が開花しそうなのだが。

「それで話なのだが、近々、蛙人魔の拠点に襲撃する計画があつてな。それに、このハツコンだったか、キミも参加して欲しいのだよ」

思ってもみなかった申し出だ。これって戦闘力として期待している訳じゃないよな。

「えっ、ハツコン戦えないよ？」

「知っておる。彼には移動中の食事と飲料を提供してほしいのだ。我々も十二分な食料を用意はするが戦いは何が起こるかわからない。即座に食べられる温かい食事というのはハンターには貴重でな。もちろん、購入する者は各自で料金を払わせる。それと別にこちらからも報酬を支払おう。それでどうだろうか」

悪くない申し出に思える。蛙人魔には警戒されているので、俺が狙われる可能性も低いときている。おまけに、ハンターたちも大量に購入してくれそうだ。

ただ、俺をどうやって運搬する気なのだろうか。馬車にでも乗せ

てくれるなら、何の問題もないが。

「どうする、ハツコン。この依頼受ける？」

「いらっしやませ」

即答しておいた。この集落で暮らしていくなら、ハンター協会の会長に顔売っておくのは悪くない。それに今回の一件で知名度を上げて、大量のお得意様をゲットできるチャンスだ。舌に商品の味を覚えさせて、病み付きにさせてやる。

「ハツコンは行きたいんだね。じゃあ、うちも参加する！」

元気良く手を挙げてアピールするのはいいけど、ラツミスには危険な真似をして欲しくないのだが。このままハンターにはならず宿屋で働いているのが、彼女には向いていると思うけど。

「ラツミスも参加してくれるのか。ならば、ハツコン君と組んで食料運搬と食事提供を担当してもらってよいか」

「はい。ハツコンのことは任せて！」

俺と一緒に行動するなら、危険な場面に遭遇することもないだろう。それに、いざとなれば 結界 で守ってあげられる。だったら、大丈夫かな。

それに協力して蛙人魔を何とかしておかないと、集落が危険に晒されることになり、最終的にはラツミスが無事では済まなくなる。

話がまとまり、熊会長が宿屋から出て行く。決行日は三日後らしいので、俺も準備をしておくか。食べ物を増やしておきたいところだな。何が好まれるか三日間色々試してみよう。

約束の三日後がやってきた。

俺は既に背負子の上という定位置にいる。周囲にはハンターらしき男女が総勢三十名近くいて、町の防衛に最低限の人数を残しただけで、殆どがこの作戦に参加するそうさ。

集落の存亡も重要なのだが、何よりも集落内にある転送陣を奪われる訳にはいかないそうさ。この転送陣は地上から直接この清流の湖階層に跳躍できる魔法の装置。

上階層からもこの場所に移動してくるそうさ。各階層には階層主と呼ばれる存在がいて、そいつを倒したハンターたちの目の前に転送陣が現れ、それに乗ると次の階層へと移動するシステムらしい。

階層主を倒さなくてもダンジョン入り口で金さえ払えば転送陣は使えるので、階層主が倒されて解放された転送陣がある階層なら何処にでも飛べる。

下に潜れば潜る程強力な敵が現れることが多いのだが、階層によつてはそんなに強い敵が現れることもなく稼ぎやすい階層もある。そのうちの一つが、ここ清流の湖階層だとカリオスが以前自慢げに語っていた。

ただし、数の暴力程恐ろしい物はなく、カエル人間は繁殖時期になると大量に子供を産み、一斉に大人になるので本格的に冬を迎える前が一番厄介だと、これはムナミが話していたのだったか。

「今年もこの季節がやってきやがったか」

「実入りはいいからな。せいぜい、稼がせてもらっせ」

如何にもベテランという感じの三十代半ばっぽい戦士風のコンビが軽口を叩いている。見るからに頼りになりそうな人たちだ。これは毎年恒例の行事らしく、討伐のタイミングを見計らって集落に訪れるハンターも多く、商人たちも儲け時だと話していたな。

「か、確実にいこう。僕たちは無理をしすぎないように」

「うん。おこぼれ狙いでも利益はでるからね」

初々しい新人も多く参加するようで、初めてとなる団体行動に若干緊張気味のような様子だ。

これだけの人数がいればちょっとやさっとでは負けなと思うが、心配な点を挙げるとすれば、例年に比べて蛙人魔の数が多くいつもより活発らしい。

万が一の事態になったらラツミスだけでも守りつつ、撤退したいところだが……10億ポイントの変形機能欲しいな。

「ハツコン、座り心地悪いとかなない？」

「いらつしゃいませ」

俺を気遣って声を掛けてくれていたが、それは自分の緊張をほぐす為でもあるようだ。ラツミスの顔が少し血の気が薄い気がする。

食料や物資を運ぶ部隊を何て言うのだったか、ミリタリーマニアの友人がその類いのゲームをしている時に何か言っていたな。確かに輜重兵だったか。まあ、輸送隊でいいか。この部隊は戦闘に参加することは滅多にないらしく、馬車ならぬ額に角の生えた巨大な猪に荷台を運ばせている。猪車と一緒に行動することになっている。

戦いにおいての物資の重要性は理解しているようで、護衛のハンターも六人常に傍にいてくれるそうだ。

「あんまり緊張しなさんな。俺たちはまあ中堅どころの実力はある。蛙人魔に後れを取ることはないさ」

つばの広い帽子を被った、無精ひげを生やしたワイルドな男が声を掛けてきた。西部劇に出てきそうなガンマン風なのだが、腰には銃の代わりに短剣を二本差している。

護衛担当の六人組のリーダーらしく、適度に力の抜けた自然体な感じがする人だ。今まで一度も見かけたことがないから、たぶん、この討伐戦に臨時で参加しに来た面々の内の一人なのだろう。

「はい、よろしくお願いします！」

勢いよく体を曲げて礼をしたので、俺も同時に振り下ろされる形になった。ぶつかりそうになった男がひょいと後方に跳ぶ。

「うおっと、これが例の意味ある箱ってやつか。集落で噂になっていたぜ」

「この子はハッコンです。硬貨投入口にお金を入れて欲しい物の下にある出っ張りを押すと、商品が出てきますよ」

ラツミスの説明も様になってきているな。初めの頃は使い方がわからない人が多くて、彼女が実践して人々に教えていた。ある程度人々に知れ渡ると俺の横に簡単な説明文を書き込んだ立札を置いてそれを見た住人が恐る恐る試していた。今となってはちょっと懐かしい。

「ほうー便利なもんだ。探索中や戦争中に即座に食料や飲料が手に入る。ちとデカいのが難点だが、お嬢ちゃんのように運ぶ者を雇え

ば、かなり有益かもしれん」

感心してくれるのは結構なんだが、その瞳に仄暗い光が一瞬宿った気がした。あれって、俺を奪おうとして失敗した連中に似ているな。この男も警戒しておいた方がいいか。

「あ、今、ハッコン欲しいって思ったでしょ。駄目ですよ、この子は私のお友達だから」

やっぱり、ラツミスは勘が鋭いというか人の考えを読み取る能力に優れている気がする。本人はあんな性格なので、それを生かすきつていないが。

「うおっ、ばれちまったか。俺んどこにも、ハッコンだったか。こいつがいたら便利なんだがな。まあ、お近づきの印に一つ買わせてもらうか。水はいらねえな……このロマワの輪切りっぽいのが浮いた絵のやつにするか」

「それは冷たい方ですよ。その下の赤い出っ張りが温かい方」

「おっ、そうなのか。ありがとうよ」

男は温かいレモンティーを選んだようだ。胡散臭いところはあるが客は客だ。ちゃんと商品は提供するよ。

取り出し口から男が商品を手にしたのを確認して「ありがとうございませした。またのごりようをおまちしています」といつものお礼を口にする。

「へええ、本当に話すのか。いやはや、大したもんだ。こんな容器も見たことが無いな。この精密な絵は一個一個手で描いているわけ

じゃないよな。どうやってんだ」

「うんとね、よくわからないみたい。あ、飲んだら容器は消えるから、ゴミの心配もいらないよ」

ラツミスの言葉遣いが素に戻っている。丁寧な口調で初めは頑張るのだが、直ぐにこうなるのは彼女の欠点でもあり売りでもある。俺は自然体の方が魅力があると思うが。あと方言バージョンも嫌いじゃない。

「マジか。あとは味だが……くはああっ、うめえ。温かいし最高だな。これを富裕層が住んでいるところに置いたらぼろ儲けできるぞ。って、この商品の補充ってどうなってるんだ」

この男、質問の内容が的確だ。好奇心旺盛というのもありそうだが、頭の中でそろばんをはじいてそうだ。金儲けの嗅覚が鋭いのかもしれない。

「それがね。ハツコンは一度も補充したことないんだ。今まで何百個も売っているのに。不思議でしょ」

「まずまず、興味深い箱だな。おい、フィルミナどうせ聞いてたんだろ、ちよつとこつちこい」

「何ですか、ケリオイル団長。あと、声がでかいです」

呼ばれて現れたのは、弱いパーマをかけてウェーブ状に仕上げたような青い髪をした女性だった。眉が細くて長い。その下の目は若干吊り上がり気味で、気が強そうに見える。顔の造形が整っているだけに、ちよつともつたいないような。

手には木製の節くれだった杖を持ち、澄んだ青い色のローブのよ
うなものを着込んでいる。あれだ、魔法使いっぽい。それも水属性
の。

「お前、魔法の道具とか古代のお宝とかに詳しいだろ。このハッコ
ンとやらが何かわからないか」

「さつきから色々探ってはいたのですが、魔力も感じませんし、た
だの無機質な鉄の塊としか思えません」

いや、まあ、自動販売機だからね。

「だがな、補充もしないで品が出てくるって事は、転移系か別空間
に収納しているってことだろ」

「普通はそうですが、加護の一種なら魔力が発生しない場合もあり
ます。まあ、鉄の塊が加護を使えるわけがないです」

あ、うん、実は使えるんだ加護。やはり、自動販売機が加護を使
えるのはおかしいらしい……知ってた。 結界 は暫く発動しない
で様子を見ていた方が良さそうだ。

「何かと規格外の存在か。よくわからんが、力を貸してくれるなら
ありがたい。よろしくなハッコンとやら」

「ありがとうございます」

怪しい感じのする男だが、商品を購入したのであればお礼を言わ
ねばなるまい。人が良すぎるラツミスが騙されないように見張って
おかないと駄目かもしれないな。

討伐隊

蛙人魔の巢というか集落は俺がいた湖畔から、北に一時間ぐらい進んだ先にあるそうだ。

だから、何度もカエル人間が覗きに来ていたのか。あの時、加護選択を間違えていたら今頃スクラップだったかもしれない。戦闘系の能力を選ばなくて良かったよ……まあ選んだところで、自動販売機の体で扱えるとも思えないが。

「いらっしやいませ」

「ありがとうございます」

「またのごりようをおまちしています」

とまあ、深く考え込む時間が無いぐらい大盛況だ。さっきからフル稼働でお礼の言葉も途切れることが無い。

昼時になると各自が所有している携帯食料や、大量に荷台に積まれた食材を使って昼食を取り始めたハンター一行だったのだが、ラツミスの一言がきっかけとなり一気に客が集まってきた。

「このパスタ料理ってすっごく美味しいよね」

そう、俺は今回の遠征を考慮して新機能を1000ポイントで追加しておいたのだ。朝晩かなり冷え込むようになってきたので、お湯を注ぐ機能を増やし、商品もカップ麺を四種類追加しておいた。きつねうどん、醤油ラーメン、豚骨ラーメン、塩ラーメン。と好みに合わせて選べるラインナップ。

もちろん、何も知らない異世界の人相手の商売なので、お湯を注ぐだけの簡単仕様のモノを選んでいる。この商品も器の側面に作り

方が、文字と絵で表示されているタイプのものなので、ラツミスとムナミも直ぐに理解してくれた。

カップ麺販売モードに変化させると、自動販売機の半分をその機能が占めてしまうので、飲料を置けるスペースが減ってしまうのが難点かもしれない。ただし、カップ麺機能は入れ替えが自由なので、いつもの状態にも直ぐに戻せる。

今日は曇天模様で肌寒かったことも幸いし、美味しそうに食べるラツミスを見て客が群がり大盛況となっている。

ちなみに一つ銀貨二枚となっている。オプシヨンのフォークモカツプ麺と一緒に提供されるので、そこら辺の対策も万全だ。

「くはぁー、身体が芯からあつたまるぜ」

「この大きな茶色の味が沁みっていて美味しいわぁ」

「お前のうまそうだな、一口交換しようぜ！」

和気あいあいと感想を口にしながら食べるハンターたち。あつという間に40個のカップ麺と飲み物も大量購入してもらえた。体を動かす職業なだけあり、一人で二個以上食べる人も少なくない。

相手の集落まで片道徒歩二日はかかる距離を考慮して、食料は大量に積み込まれていて余裕があるのだが、昼食に手間をかけないのがハンターの基本らしく、物珍しさと相まってこの売り上げとなったようだ。

もちろん、開発者が試行錯誤して生み出した味が素晴らしいというの言うまでもない。こういうクオリティーの高さを実感すると、日本人で良かったなと心底思う。

この調子だと遠征中に荒稼ぎできそうだな。値段は銀貨三枚でもありだったのだが、蛙人魔の駆除が最優先なので、彼らを応援する

意味も込めて少し下げさせてもらった。

俺たちは討伐隊の最後尾にいるので戦闘とは無縁で、時折先発しているハンターたちの剣戟と怒鳴り声が聞こえてくる程度で、至って平和である。

移動中は商品を買う人もいないので、自分の能力の再確認と今後の進むべき道を模索する時間に充てていた。

自分の全能力を表示するとこんな感じになっている。

《自動販売機 ハツコン》

耐久力 1000/1000
頑丈 10
筋力 0
素早さ 0
器用さ 0
魔力 0

PT 3600

(冷) ミネラルウォーター 1000 1銀貨(130個)
(冷) (温) ミルクティー 1000 1銀貨(124個)
(冷) (温) レモンティー 1000 1銀貨(65個)
(冷) スポーツドリンク 1000 1銀貨(78個)
(冷) オレンジジュース 1000 1銀貨(65個)
(温) コーンスープ 1000 1銀貨(119個)
(温) おでん缶 3000 3銀貨(56個)
(常) 成型ポテトチップス 1000 1銀貨(136個)
(常) カップ麺 きつねうどん 2000 2銀貨(85個)
(常) カップ麺 とんこつラーメン 2000 2銀貨(92個)
(常) カップ麺 醤油ラーメン 2000 2銀貨(88個)
(常) カップ麺 塩ラーメン 2000 2銀貨(89個)

機能 保冷 保温 お湯出し（カップ麺対応モード）
加護 結界 》

表示される文字が増えすぎだな。商品は別々で確認した方が良さそうだ。

討伐隊に参加中は常時カップ麺もいける状態にしておいて、飲料も一種類ずつ並べておく感じに対応しよう。

しかし、機能追加で外観が一気に変わるのは魔法のようだったな。これってもしかして、配色とかデザイン、フォルムの変更も機能欄にあつたりするのかね……あつた。

ほうほう、色は自由に変えられるのか。模様の追加やスイッチのデザイン、電光掲示板の取りつけも可能なのか。自由度高いな。

配色変化はそんなにポイントを消費しないようだが、形状の変更と電光掲示板は結構ポイント取られるぞ。これはもつと余裕が出てからにしよう。

機能追加にある様々な仕様を眺めていると、あつという間に時が過ぎ、気が付けば辺りは暗くなっていた。

「ここらで一晩明かすぞ。各自野営の準備をしてくれ」

あの渋い声はハンター協会の会長か。そういや、討伐隊に参加しているのだったな。元々凄腕のハンターだったそうで、このメンツの中では頭一つ抜き出た実力者らしい。

テントを設置するグループもいれば、焚火の前に居座っているだけのハンターも多い。ああいう人は寝袋か毛布を纏うだけなのか。ラツミスはどうするのか気になり視線を動かすと、俺の隣に座ってニコニコしているだけだった。

……何も考えてないように見えるけど、仮にもハンターやっていたのだから、そんなことは無いよな。でも、俺を背負っていただけ

で何一つ荷物を持っていなかった気がする。大丈夫なのか？

そんな心配をよそに彼女は何を買おうか商品を生懸命に選んでいる。他の人たちは明日が決戦と言うこともあり、少し豪華な夕飯を作って食べているな。

大半が飲料のみを購入して、おでんもカップ麺もあまり捌けていない。手持ちの荷物を減らす為にも、食材の消費をしておきたいのだろう。

「この串に刺したのほんと好き。小さい卵だけの串があれば最高なのに」

ラツミスは卵派か。ウズラの卵は単価が高いから全部卵にしたら仕入れ値上がりそうだな。俺はおでんなら餅巾着と大根は外せない。彼女の晩御飯はおでんとミルクティーときつねうどん。栄養バランスがいいのか悪いのか。

「今、よいか」

ぬつと巨体が覆い被さるように、ラツミスの背後に立つのは会長さんか。

こんなに近くに寄るまで全く気付かなかった。凄腕のハンターだったというのは嘘じゃないようだ。

「会長も何か買うの？」

「そうだな。黄色いスープを後でもらおうか。それよりも、明日の事なのだが。やつらの集落まで、ここから三時間程度で着くだろう。ここは周囲を木々に囲まれている空き地なので、光が漏れずに野営に向いている。敵に見つかる可能性も低いだろう」

だから、火を焚いているのか。敵の本拠地が近いのに、夜に目立つような真似をすることに疑問を抱いていたが納得した。

「そこでだ。お主らはここで待機しておくか、我々と共に戦場に向かうか好きな方を選んでくれ。ここに残る場合、蛙人魔の残党や他の魔物が現れる可能性もある。護衛の彼らは残しておくが、安全だと言い切ることはできない」

一緒に蛙人魔に向かえば戦闘に巻き込まれるが、30人ものハンターと共にいられるという安心感も捨てがたい。その中にはベテラン勢も多く、万が一にも負ける可能性は無いという事前情報は得ている。

正直、蛙人魔以外の魔物というのがどれ程危険な存在なのかわからないので、俺にはどっちが正しいのか判断がつかない。

「う、うーん。うちはこれでもハンターだから、戦場に立つのは問題ないけど、ハツコンは戦いに巻き込まれたくないよね？」

困ったな。どう返事すればいいのか。俺は痛覚もないし、二三発ぐらいなら攻撃を受けても大したことは無いのは体験済みだ。傷ついてもポイントで修復できる。

俺は別に構わないが、ラツミスがどうしたいかだ。見た感じでは怯えてもなく、寧ろ戦う意欲があるような。だったら、俺の返事は決まっている。

「ぜんねん」

「えっ、戦いに参加してもいいの？」

「いらっしやませ」

「うん、わかった。会長、うちとハッコンも戦いに参加するよ！」

彼女は俺が守って見せる。手も足もないけど 結界 があるから守るぐらいは出来る筈だ。この世界に来て初めての客であり初めての友達。ポイントと引き換えに助けられるなら、幾らでも使ってる。その為にも頑張って商品を売り捌きポイントを稼がないと。

さあ、他のハンター共よ、我が商品の虜になるがいい！

朝日が昇り始めると同時にハンターたちも活動を始めている。ラツミスは結局俺に寄り添って眠っていた。どうやら機能の 保温効果は周囲にも影響があるらしく、彼女は毛布も被らない状態で、寒がりもせず熟睡していたのには驚かされたぞ

昨夜はかなり冷え込んでくれたので、おでんと温かい飲料が飛ぶように売れほくほくですわ。一日で1000ポイントも稼げるとは、いい意味で予想外だ。

今日も朝から温かい物を求め、俺の前には列が出来上がっている。カップ麺とコーンスープの個数を増やしておいた方が良さそうだな。

蛙人魔を倒すにあたって、相手がカエルの習性を持っているなら、もう少し待てば冬眠に入って楽に倒せそうな気がするのだが、地球のカエルとは似て非なる存在かもしれない。仮に俺の予想が当たっていたとしても伝える術はないのだが。

「皆、聞いてくれ。朝食を終えたら今から、敵の本拠地を襲う。手筈は伝えた通りで頼む。戦力的には問題なく完勝できる。だが、油

断はしないでくれ。以上だ」

会長の言葉には妙な説得力と安心感があるな。この人が言うなら大丈夫だという気にさせてくれる。

テントと調理道具も片づけは終えたようだ。いつものようにラックミスに背負われ、俺たちも出発した。

仲間と魔物退治に向かう。こう書けば良くある異世界ファンタジー作品なのだが、自動販売機なんだよな……自力で動けないんだよな……どうしろと。

活躍する為には加護とやらで 結界 以外の能力を得るとというのが一番の近道に思えるが、加護の能力を得るのに必要なポイントが一番低い物で、100万ポイントってばっかじゃねえか。

あー、空は青く澄み渡っているなー。可愛い女の子に背負われるだけの存在って、男としてどうなのだろうかとか、考えたら落ち込みそうになるからやめておこう。

襲撃

カエル人間の住む場所にかなり近づいたらしく、周囲の空気が変わったのがわかる。機械の体なものにな！

体に水滴が付着している。湿気が酷いようだ。身体錆びたりしないだろうか……。

足下の土も泥状になっているようで、歩きにくそうにしている。ラツミスは俺が重すぎるせいで膝下辺りまで埋まっている。大丈夫だろうか。

「グゲグガグエグエツ！」

「やっちまええええっ！」

カエル人間の鳴き声と勇ましい絶叫が至る所で上がっている。先行しているハンターが戦闘に入ったようだ。足場が悪いとハンター側が不利な気がするのだが、そんなのは彼らも百は承知だろう。

その上で勝てると思込んだのだから、素人の俺が心配する何ておこがましい行為だ。お客たちの無事を祈るしかない。

泥をはね上げて走る音がこちらに近づいてきている気がする。荷猪車を囲むように陣取っている護衛の面々の顔が真剣な表情に切り替わった。

「ハツコン、敵が来たみたい。一緒に頑張ろうね」

俺が戦力にならないとわかっているのに、一緒にと言ってくれた。その心意気に応えないと男じゃない。まあ自動販売機に性別があるとは思えないが。

彼女は俺を降ろす気が無いらしく、そのまま戦う気のように。この重さを苦にもしてないので大丈夫だとは思うが、どっちにしろ彼女が決めたのなら答えは一つしかない。

「いらっしやいませ」

音量を出るだけ低くして返事しておく。ラツミスは前に集中して、後ろは俺に任せてくれ。どんな攻撃も受け止めてみせるから。っと、敵がやってきたな。結構な数のカエル人間が走り寄ってきているようだ。背負われている俺からは背中側になるので、音で判断するしかない。っと側面から現れたのは俺でも目視できる。相手は脚が水かきになっているので、跳ねるようにして泥に埋まることなく動けるのか。

横合いから迫る敵にラツミスが身構えたので、進路方向の敵も横目で確認できるようになった。

「討伐数で金が加算されるからな。お前ら気合入れろよ！ やっちまえ！」

「いくぞおおっ！」

リーダーであるケリオイルの号令に従い、前方から迫りくるカエル人間に矢と投げナイフ、手斧が襲い掛かる。

おー、この人たちはかなりの腕のようだ。殆どが狙いを違わずカエル人間に突き刺さっている。敵の接近を許さず既に半数がやられた。

「水よ渦を描き貫け」

あれはケリオイルを団長と呼んでいた魔法使いっぱい格好をして

いる女性か。杖を突き出すと、そこから水が勢いを強めたホースから噴き出すように、真っ直ぐ伸びていく。

水流は重力に従うことなく地面と平行に飛んでいった。よく見ると先端が錐の様に鋭く尖っている。それは水だというのに易々とカエル人間の頭を貫き、もう一体も串刺しにしている。

あれって魔法なのかなやっぱり。もしかして、加護の能力だとしたら俺も手に入れたら、あんな感じで操れるのだろうか。だとしたら戦う自動販売機に……悪くない未来だ。でも、俺の魔力って0だったよな。あ、無理っばいぞ。

そんなことを呑気に考えていられるぐらい楽勝ムードだ。視界が激しく揺れているのはラツミスが戦っているからなのだろうが、背中側が見えないのは不便過ぎるな。どうせなら、前向きになるように背負ってもらいたかった。

彼女は攻撃を与えるのが苦手だと零していたが、上手くやれているのだろうか。

心配だが悲鳴は聞こえていないし、こっちを見ている護衛が焦ることなく手助けにも来ないということは、ピンチではないということだろう。

あれ、今更だけど武器持ってなかったよな。手に少し大きめのグローブをしていたけど、あれってもしかして？

「よっし、何とか倒せたー。ハツコンがいるからできるだけ小さく動いていたら、いつもより攻撃当たるし、楽に倒せたよ！」

背後からラツミスの喜ぶ声が聞こえる。体を半回転させて、新たな敵に備えているようだ。見える範囲が横にずれたので、さっきまでラツミスが戦っていたであろう敵の姿を見ることが叶った。

顔面が陥没している、カエル人間の死体が泥の上に寝そべっている。巨大なハンマーで顔面を殴られたのではないかと思うぐらいの

変形具合だ。これって怪力で殴った跡だよな。そ、そうか。冷静に考えたら妥当な破壊力か。

俺を軽々と背負い、平気な顔をして歩き続ける力と足腰の強さがあるのだ。この威力を叩きだせたとしても何ら不思議ではない。

彼女の話から察するに背中に俺がいるので、無駄な動きを省き小さくまとまったのが功を奏したようだ。これだけの力があるのだから、コンパクトに動いて攻撃を当てることに集中した方が強いということがあるか。

間接的にだがラツミスの力になれたのなら嬉しい限りだ。

あと少してカエル人間たちを殲滅できそうだったのだが、更に追加で十体出現している。最後尾の俺たちにはあまり敵が来ないという話の筈が、おかしくないか。

「ここでこんなに敵がいるってのは不自然だ。前線はもつと湧いているとなると……きな臭くなってきやがったな」

ケリオイル団長が忌々しげに呟いている声が届いた。やはり、この事態は異様なのか。

「お前ら集まれ。自由にやってやがると足元をすくわれかねん！」

「わかりました、団長！」

荷猪車を背に護衛のハンターたちが円陣を組んでいる。その判断は正しかったようで、泥の中から更に追加で現れたカエル人間が周囲を取り囲んでいる。

ざっと見積もっても三十はいるぞ。一人頭、五体やらないといけないのか。これって、結構ヤバくないか。

「団長さすがにこれは、多すぎませんか」

「泣き言は後だ。いざとなれば猪車は捨てても構わねえ。命大事にがうちの団のモットーだからな」

「初めて聞きましたよ」

ケリオイルと青髪のフィルミナは軽口を叩いているが、その表情に余裕はない。それだけ、緊迫した情勢だということか。

ラツミスにも危なくなったら逃げて欲しいところだ。俺が邪魔なら捨てて行ってくれて構わないから。

彼女は弓を構えているハンターの傍に立ち、近距離戦を担当するつもりか。

「撃ち漏らしたのはうちが何とかするから」

「ありがとう、助かるっす」

フードで顔が見えなかったので今まで気づいてなかったのだが、この狩人っぽいハンターは女性なのか。って、あれ、今更だが護衛担当のハンターって女性率高いな。全員がああケリオイルを団長と呼んでいたから、この人たちはあの人配下ってことだ。

六人の内、女性が四名もいるぞ。もしかしてハーレム状態の団なのか……ケリオイルのことをこれからは無精ひげと呼ぶことにしよう。

そんな馬鹿なことを考えている間にも戦況が激しくなっている。無精ひげは団長を名乗るだけあり、両手の短剣を見事な剣捌きで操り、次々とカエルの死体を築いている。

フィルミナも水を巧みに操作して敵を寄せ付けていない。他の面

々もかなりの腕利きのようでカエル人間を圧倒しているな。

問題はラツミスが庇っている射手だ。この女性も中々の腕なのだが、連射が苦手のように攻撃と攻撃の間にもたつきがあり、敵の接近を何度も許している。

そこでラツミスが割り込み、何とか対応しているという状態だ。さっきの体捌きでコツを掴んだらしく、一対一なら簡単にねじ伏せられるようになったようだが、二体同時となるとかなり厳しいようだ。

彼女の背後に回り込んだもう一体が、長い舌を伸ばして自分の眼球を舐めているのは挑発のつもりなのか。死角に入り込み、手にした斧を振り上げ、俺に殴りかかろうとしている。

このまま受け止めても耐えられるダメージなので、あえて結界を張らずに攻撃をもらった。

《4のダメージ、耐久力が4減りました》

体を揺さぶる衝撃と共に文字が浮かぶ。久しぶりのダメージ表示だ。

斧は中々の高威力つばいが、俺にはポイントが結構残っている。数十発なら受け止めてやるぞ。

「えっ、背後に回られているの!? ご、ごめん、ハッコン! 大丈夫!？」

取り乱した声が聞こえる。そんなに慌てなくても大丈夫なのだが心配は無用だ。むしろラツミスの代わりにダメージを受けたのなら嬉しいくらいだよ。

「いらっしゃいませ」

「ほんとうついに、ごめんね！」

気にしないでそっちに集中してくれ、と言いたいのには伝えられないもどかしさ。こっちに気を取られて、戦闘が疎かになっただら元も子もないよな。

向こうの様子は見えないが、身体の揺れる感覚から動きに乱れを感じる。焦りがこっちにまで伝わってくるぞ。これは良くない流れだ。

「きゃっ！」

射手の人が攻撃を避け損ねたらしく、視界の端で転んでいるのが見えた。そんな彼女に槍を手にしたカエルが跳躍して上から突き刺そうとしている。

「だめええええっ！」

ラツミスはその光景を目の当たりにして、何も考えずに飛び込んでいく。彼女を抱きかかえるようにして庇うと……まあ、俺が矢面に立つわけで。

あ、体重の乗った切っ先が迫ってくる。ここは 結界 発動っ！俺の周囲に青白い光が広がり、寸前まで迫っていた切っ先が弾かれ、ついでにカエル人間も吹っ飛ばされている。

「え、何、この光……貴女の力っすか？」

「ち、違っわ」

話を振られて射手の人が頭を左右に振っているのが、視界ギリギ

りに見える。ああもう、もどかしい。もうちょっと視界を広げたい。何かそういう機能ないのか。

こんな状況下だが、あまりに不便なので機能欄にざっと目を通すと、あった

全方位視界確保 の文字が。1000ポイントは安くないが、背に腹は代えられない。躊躇うことなくそれを取得した。

おおおっ、急に視界が広がり……酔いそうだ。あらゆる方向を見られるようになったのは嬉しいが、これ慣れるまできつそうだな。

「そうじゃないなら、誰がこの光の壁を出してくれたっすか」

「あたりがでたらもういっぼん」

「ここで俺だというアピールをしておく。自慢したいわけじゃないが、誰がやったかわからないと動きづらいだろう。」

「えっ、ハッコンがしているの!」

「いらっしゃいませ」

「うわー、そうなんだ。ありがとう、ハッコン!」

これで素直に信じてくれるのがラツミスのいいところだよな。意思の疎通ができる鉄の箱にこんな能力があるなんて荒唐無稽な話、普通は誰も信用しないだろう。

「じゃあ、危なくなったらお願いしていいっすか?」

「いらっしゃいませ」

音量を上げて、はっきりと答える。これで、彼女にも守りは万全なことが伝わった。

ここからが本番だ。二人で協力してカエルを殲滅しよう。

一台と一人(前書き)

一台と一人

「ハツコン、背後から敵がきたら教えてね」

「いらっしやいませ。あたりがでたらもういっばん」

「あたりがでたらって言ったら、敵が来たって事でいいんだよね」

「いらっしやいませ」

ラツミスとの意思の疎通がスムーズになってきているような。彼女の勘の鋭さに助けられている面も大きいがお互いに話さなくても何となく考えていることがわかり始めている……気がする。

しかし、ラツミスは本当に落ちこぼれだったのか？ 動きが見えるようになってから、彼女の一挙手一投足をつぶさに観察しているのだが、背中の俺が邪魔で肘を後ろまでやれないというのに、自動販売機に一度しか肘をぶつけていない。

足もすり足で決して素早い動きではないのだが、相手の攻撃を躲す時には最小限の動きで、最短距離を進むようにしているようだ。

そんな窮屈な動きだというのに、俺は一度たりとも被弾していない。素人目線だが格闘家のようなキレのある技や足捌きしていないか。

「あー、この動き。そうよ、この動き！ 師匠に岩を背負わされて修行させられた日々がっ、あの地獄めぐりツアーの日々がっ」

師匠？ もしかして、ラツミスはかなり厳しい格闘の訓練を受けてそれなりの実力があるのに、活かしきれていなかっただけなのか。

俺を背負うことで似たような訓練の経験を思い出して、本来の動きを思い出した。というのは都合が良すぎる解釈か。

何にせよ、今のラツミスなら安心して見ていられる。しかし、自動販売機を背負うと強くなる設定ってどうなんだ。むしろ普通は重りを剥がし軽くなって、能力がアップするのが定番だろうに。

「お、やるじゃねえか。その破壊力と受け流しの技、大したもんだぜ」

「いやー、そんな言われたら照れるやんか」

無精ひげ団長に褒められて恥ずかしがるのは後にしてくれ。褒められ慣れていないから嬉しいのはわかるけど、戦場の真っ只中だ。頭を掻くのもあと、あと！ちゃんと戦闘に集中してくれ、見ていて怖すぎる！

ってほら、敵が接近しているって。

「あたりがでたらもういっぱい」

「もう、ハツコンまで褒め過ぎやって」

意思の疎通とは何だったのか。さっきの会話内容、頭からぶつとんでいるだろ。ああもう 結果 発動っ！

背後から迫ってくる二体の力エル人間を、体に触れる直前で止める。あつぶなあ……間一髪だった。

「この青い光はどういうことだ。敵の攻撃を防ぐだけじゃなく、通り抜けることすらできないのか。聞いたことも見たこともない……これはお前さんの加護か？」

結界 ってレアなのか。無精ひげ団長が結界を武器や指で突いて喰っているぞ。あんたも戦闘中だというのに余裕だな。あっ、飛び込んできたカエル人間を、振り返りもせずに斬り捨てている。無精ひげ侮りがたし。

「ううん。これはハツコンの力だよ」

あ、ラツミス。この人には秘密にしておいて欲しかったんだが、仕方ないか。人を疑うことのない純粹さも彼女の魅力だしな。

無精ひげの口元に浮かんだ笑み。悪巧みをしてそうな顔だ。本気で俺を盗みかねないぞ、こいつ。要注意人物に格上げだ。

「ハツコンとはこれからも仲良くしたいぜ」

「うんうん、仲良くしてあげてね」

周りにカエルの無残な死体が転がっていないければ、ほのぼのした日常のニコマッぽい。あと、無精ひげと仲良くするのはお断りです。それと、和むのは後にしてくれ。楽しく会話する場面じゃないから と思ったのだが、意外と苦戦していないな。この護衛の一団はかなり優秀らしく、危なげなく処理している。

「ここは、あらかた片付いたか。お前ら、ちゃんと舌切り落としておけよ。後で協会に提出するからな」

「団長もやってくださいよ。ねばねばしてキモいんですよこれ」

「ふっ、そういう面倒くせえことをするのが嫌だから団長やってんだよ」

「横暴つすー」「幼女趣味だー」「給料安いぞー」

「てめえら、いい根性してやがるな……」

意外とアツトホームな職場なのか。罵倒しているようで、じゃれ合っているようにしか見えない。この無精ひげ団長、目ざとだけで悪い奴には見えなくなってきた。

いや、仲間内から慕われていても、他人には外道な輩もいるだろう。油断は禁物だ。

「さーてと、これからどうすつか。稼ぎとしては悪くないが、欲を出すなら前線に向かうのもありだが」

「我々の任務は、食料の運搬及び鉄の箱と、それを運ぶ女性の護衛ですよ」

「んなことは、わかってるってーの。でもよフィルミナ副団長、ここで稼いでおけば団の運営がかなり楽になるぞ。お前らにも賞与させるかもしれないのに、残念だ。実に残念だ」

無精ひげ団長がわざとらしく、額に手を当てて頭を振っている。

フィルミナさんは副団長だったのか。自由人っぽい団長に振り回されて苦労してそうだな。

「はあー、わかりました。備品も新しくしたいところでしたし、前線のお手伝いに向かいますよ。ただし、ラツミス様も納得されたいですよ。我々の任務はあくまで彼女とハツコンさんの護衛です」

「わーってる、わーってるって。そんなに小難しいことばっか考え

てると、小じわが増えるぞ。もっと気楽にいこうぜ」

うわー、親指を立ててウィンクをしている無精ひげ団長に、フィルミナ副団長がイラツとしている。一発殴ってもいいんだよ？

「とうとうとで、ラツミス様はどうなさいますか。もちろん、こいで待機と言っているのであれば従いますので」

「行こうぜー、戦おうぜー、お前さんも、もっと戦いたいだろー」

あ、うざい。いい年をしたオッサンが、子供みたいに駄々をこねている。くねくねと体を揺らしている動作が神経を逆なでしたようで、フィルミナ副団長から水の塊をぶつけられている。

「ええと、向こうが苦戦しているなら手伝ってあげたいので、いきましよう！ ハツコンもそれでいい？」

ラツミスならそう言つと思つたよ。もちろん、異論はない。

「いらつしゃいませ」

こつちに敵が流れてきているということは、本陣はかなり苦戦している可能性がある。援軍に向かうことに口を挟む気はないが……まあ、口を挟みようがないけど。混戦に巻き込まれる可能性が高い。結界をいつでも発動できるように気を張っておこう。

荷猪車と一緒に進行すると、そこら中で泥まみれのバトルが繰り

広げられていた。

無精ひげの一団が意気揚々とカエル人間に襲い掛かっている。他のハンターは押され気味だったようで、彼らの乱入を素直に喜んでるようだ。

しかし、数の差が酷いな。多く見積もっても五十匹だろうという事前情報だったのだが、少なく見積もっても百匹はいるよな。それも、地面に転がっている死体を合わせたら二百近いんじゃないか。

ハンター側の負傷者も結構な数に達していて、白いローブを着込んだ人が手から白い光を出して、怪我人を癒している。まるで時を巻き戻しているかのように、酷い傷が見る見るうちに塞がっていく。あれは俺でも知っている。加護の癒しの光 だったか。所有者がそれなりに多い加護なのだが、傷を癒せるという能力は重宝されているので、所有者は仕事に困らないそう。ちなみに常連である老夫婦の御婦人の方が使えるそう。

三十人近くいたハンターのうち、まともに戦えているのは半分くらいか。傷が癒されても流れ落ちた血と体力は戻らないので、大怪我を負ったハンターは戦線復帰が厳しい。

「怪我人を荷台に運ばないっ！」

ラツミスは戦闘に参加するよりも、怪我人の確保に回るのが。俺を背負ったまま駆け寄る姿に、怪我人たちが目を見開き戸惑っているが、問答無用で抱きかかえては荷台に運んでいく。

しかし、大の大人を軽々と運ぶな。背中の俺も相当な重量だというのに、これだけ身体能力が高ければ、そりゃ強くない方が嘘だというものだ。

こういう時、手伝えることが無いのが困る。何か出来ることは… スポーツドリンクの差し入れでもしておくか。彼女が荷台に怪我人を搬入した直後に、スポーツドリンクを取り出し口に落とし「あ

たりがでたらもういっばん」と音を出すと、それだけで察してくれた。

「これ怪我人に渡したらいいんだよね」

「いらっしやいませ」

次々とスポーツドリンクを落とし、それを拾ってはラツミスが荷台に並べている。二十ぐらいあればいいか。

「ハツコンからのサービスだから好きなだけ飲んでいいからね」

「お、う……ありがとうよ」

心から相手を心配して気遣う姿に、むさ苦しいオッサンたちが厳しい顔に弱々しい笑みを浮かべている。弱っている時に純粹無垢なラツミスに癒されたら、大半の男はこうなるだろう。

戦線を離脱した怪我人の全てを荷台に放り込み終わると、あれ程いた力エル人間の群れも二割程度しか残っていない。この乱戦を軽傷、もしくは無傷で戦い続けている面々はかなりの猛者らしく、力エル人間を軽々と葬っている。

ここまで実力差があると圧倒的物量の差も問題にならないのか。

「助かったぞ、ケリオイル君。流石、愚者の奇行団といったところか」

熊会長がのしのと歩み寄ってくる。爪が血で赤く染まっているので凄味が倍増した。この人も無手で戦うのか。いや、素手と言っているのか……あの鋭い爪はそれだけで刃物に匹敵しそうだが。

しかし、変な名前をしている団体だな。

「暇していたので、余計かとは思ったのですが」

「助力感謝する。予想外の数がいてな、キミたちのおかげで何とか討伐できた。しかし、他の集落にいた蛙人魔も合流したのか。一集落の数にしては予想の倍は軽く超えていた」

「それに異常なまでに好戦的でしたよ。通常、蛙人魔は全滅するまで襲い掛かるような真似はしませんので」

無精ひげ団長と熊会長の話に割り込んできたのはフィルミナ副団長か。

確かに、カエル人間は俺を襲った時も、通用しないとわかると退いて、その後も襲ってこなかった。無謀な突撃を繰り返す生物ではないというのは同意できる。

「ふむ、となると考えられることは……」

「やっぱりそうですね……」

「まあ、そうなります」

三人とも渋面をしているな。今の物言いといい、この状況が何か嫌な予兆だというのだろうか。そこは含みのある話し方ではなく、ずばっと言い切って欲しい。こっちは訊きだすことができないのだから。

「ねえ、何のことなの？」

ナイスだラツミス！ それが訊きたかった。

「ああ、すまぬ。これは憶測に過ぎんのだが、王蛙人魔が現れた可能性が高い」

お、王蛙人魔だと……何だそれ。名前からして強そうだよな、嫌な予感しかない。

もめごと（前書き）

感想、誤字脱字のご指摘は全て目を通しています。

感想をすべて返してしまうと執筆が遅れてしまうので、投稿速度を最優先させていただいています。返信できずに申し訳ございません。

もめごと

戦力外となった怪我人たちは荷台で休んでもらい。護衛に人数を割り、実力者のみで集落にいるであろう蛙の王様。王蛙人魔を倒しに行くことになった。

物語の主人公ならここで、退治するメンバーに組み込まれるのだろうが、自動販売機の俺とラツミスはお留守番である。

まあ、食料提供が本命だから当たり前と言えば当たり前なのだが。

ケリオイル率いる愚者の奇行団という、眉があれば眉根を寄せたくなるネーミングセンスの一団は全員、王様退治に行ってしまった。あとは拠点である集落に王様とその取り巻きが残っている程度らしいので、俺たちはのんびり待っていればいい。ということは、商売タイム！

荷台の近くに置かれたので、少しポイントを稼がせてもらおうとしよう。

「いらっしやいませ、いらっしやいませ」

「温かい料理も飲料も取り揃えていますよー、飲み物は銀貨一枚ですー！」

俺の呼び込みに反応して、ラツミスも手伝ってくれている。

丁度、一息吐くタイミングだったらしく、カップ麺と紅茶、スポーツドリンクの売り上げが赤丸急上昇中だ。

スポーツドリンクは当初、今まで経験したことのない味が集落の人々に不評だったのだが、ハンターが討伐後の疲れ切った時に飲むと、疲労が回復したという情報が広まり、ハンター内で大流行とな

った。

そもそも、青と白のロゴで有名なスポーツドリンクは、薬として開発されたという話を聞いたことがある。水分補給に優れていて、風邪や下痢のさいに大変お世話になった過去を思い出す。

今の状況にはピッタリな飲料だ。飲む点滴って言う人もいるよな。

「はあー火を起こさないで温かいもの食えるのって、たまんねえな」

「後片付けが必要ないってのも、嬉しいよね」

「うちのチームにも一台欲しいぜ」

自動販売機の性能はハンターたちにとってかなり有益なようで、羨ましそうにこちらをチラチラと見る輩が大量にいる。無精ひげ団長だけでも厄介なのに、他のハンターたちにも気を払わなければならないのか。

ラツミスは俺の人気が高いことが嬉しいらしく、いつにも増してにこにここと笑っている。周りの視線の意味に気づいて……ないよな、この調子だと。

「すまん、誰か怪我人の手当て手伝ってくれんか」

「あ、うちやるよー！ ハッコンちよつと一人にするけど、寂しいからって泣かないでね」

「またのごりようをおまちしています」

「何よそれ。じゃあ、行ってくるー」

茶目っ気のある問いかけだったので素早く切り返すと、頬を膨ら

まして少し拗ねたような振りをして、走り去っていった。

これが生身の付き合いなら恋人同士に見られるかもしれないが、俺、無機物だしな……。

「っと、あのお人好しいないな。今のうちか」

小柄でひよろつとした出っ歯の目立つ男が、辺りの視線を気にしながらこっちに歩み寄ってきている。人を見た目で判断するのは最低の行為だというのは理解した上で、言わせてもらいたい。胡散臭いぞ、こいつ。

何と言うか見るからに雑魚っぽい。ザ小悪党という称号を与えたぐらいだ。鼻歌交じりに近づいてくるが、視線が全身を舐めるように這いずり回っている。

視線を追うと、硬貨投入口を気にしているようだが。

「さつとと、何買うか」

雑魚っぽいハンターはわざとらしく大きな声でそういうと、コイン投入口に細い針金のような物を差し込もうとしている。

ああ、こいつ俺の金を盗むつもりなのか。ならば、それ相応の対応をさせてもらおうとしよう。

「いらっしやいませ」

最大音量でかましてみた。

「うえい！？」

おっ、飛び上がるぐらい驚いたか。俺の音声と小悪党の思わず漏れた声に、周囲の視線が集まっている。さあ、この状況でどうする

のかな。

「へ、へえ、マジで話せるのか。大したもんだ」

感心しているように装っているが、頬が引きつっているぞ。

これで素直に購入して帰るなら放っておくが、そんな素直な人間には見えない。

「てめえ、言葉がわかっているなら大人しく金だしやがれ……壊されたくなかつたらなっ」

小声で凄んできたか。おっ、こいつ爪先で俺を蹴っているぞ。ほほう、自動販売機で手足が無いからって舐めているな。

自衛できる自動販売機の実力を見せてやるうじゃないか。

俺は取り出し口にミネラルウォーターを一つ落としてやると、男の顔が喜色をあらわにしている。そして、手を突っ込み中を弄っている……ところで、追加の商品を落としてやる。

「また、音が……あっちいいいいいいっ！ あっ、あっ、ぎいああああっ！」

ふはははは、限界まで温めた灼熱コーンスープはどうかね。更に数を増やしてやるうじゃないか。

「あたりがでたらもういっぱい」

続いて数本、コーンスープを落とすことにより男の手が抜けなくなった。我がボディーを傷つけ金を奪おうとしたことは許すわけにはいかん。暫く、苦しむがいい。

「くそつ、くそつ、箱の分際で舐めやがって！ ぶっ壊してやる！」

男が腰に携えていた短剣を抜き出し、大きく振りかぶった。結界で弾いてもいいが、このまま受けても損傷は僅かだ。お前さんの愚行を周りに知らしめるためにも、ここはあえて受け止めることにしよう。

そう決意して迫りくる切っ先を眺めていたのだが、俺に触れる寸前で動きがぴたりと止まる。

「ハツコンに何しようとしているの……」

この低く凄味のある声はラツミスか。騒ぎを聞いて駆けつけてくれたみたいだ。この子はこんな声も出せたのか。

手首を掴まれた男が振り返ったまま硬直している。それぐらい、ラツミスの顔には迫力があつた。日頃可愛い顔を見慣れているだけに、眉尻を吊り上げ目を大きく見開いた形相が恐ろしい。

「ち、違つんだ。品を取ろうとしたら、大量に落ちてきて腕が抜けなくなつたんだって！」

「その前に何か変なことしなかつた？」

流石ラツミスだ。その察しの良さと勘の鋭さ、惚れそうになる。

「何もしてねえよっ！ こいつが勝手におかしな動きをしゃがったんだ！」

「ハツコン、本当にこの人変なことしてない？」

「ざんねん」

「ほら、ハツコンは違つて言ってるよ」

「何言ってるんだ。お前は俺とこの鉄の箱の言うこと、どっちを信じ
」

「ハツコンに決まっている」

被せてラツミスが即答した。俺に対する圧倒的な信頼度の高さ。
腕が合つたら抱きしめなくなるぐらいに嬉しいぞ。

そして、嘘つき男には更に缶のプレゼントだ。温度は冷えてきた
ようだが、この重さで押し潰してくれる。

「いたたたたたつ！ この箱野郎っ、やめろっ！」

「そっぴや、貴方って団長さんが言っていた要注意人物の人かな。
もしかして、グゴイルさん？」

「へっ、い、いや、違つぜ」

うわー、見るからに胡散臭い。芝居下手だな、露骨に顔を逸らし
てこめかみから汗が流れ落ちていているし。そうです、って言っている
ようなもんだろ。

「ラツミスちゃん。そいつグゴイルだぜ、手癖が悪いことで有名な」

荷台から顔を出した髭もじやのオッサンが教えてくれた。あ、こ
の人、前に部下らしき人たちの前で自動販売機の使い方を説明して
いた人か。心のメモ帳良い人リストにメモっておこう。

「ふうふううん。じゃあ、容赦は必要ないよね？」

腕をばきばき鳴らして見下ろすラツミスは笑顔を浮かべているというのに、何故か迫力があつた。

結局、あの男は荒縄でぐるぐる巻きにされて、怪我人と一緒に荷台へ放り込まれている。今までもハンターの金を盗んだ前料があるらしく、周りの人もラツミスの味方をしてくれたので、あっさりと解決したな。

あれからは、まったりと時が流れている。拠点に向かった連中は今頃戦っている最中なのだろうか。王蛙人魔がどの程度の強さかわからないので、心配する材料すらない。こういう時、会話が出来るなら情報を集めることも可能なんだが、聞き役専門だからどうしようもない。

「想像以上に敵も多かったが、その分、臨時の報酬が期待できそうだ」

「早く集落に戻って一杯やりたいぜ」

居残り組は完全に戦勝ムードだな。誰もかれもが寛いでいる。荷台の怪我人が九名。護衛が六名。戦いつてのは何があるかわからないから、油断しすぎな気もするが、戦闘もできない俺にどうこういう資格はないし、そもそも言えない。

集落に戻ったら新商品で酒を追加すると儲かりそうだな。酎ハイ、日本酒、カクテルもあるが、どれがこの世界の人に受けるのか。

そっぴや、炭酸飲料を提供したら飲めるのかね。子供が初めて炭酸を飲んだら喉が痛くてイヤだつて言う子もいるしな。まあ、それでも慣れたら平気みたいだから、置いてみるのもありかもしれない。以前一度、ラツミスに試してもらったことがあるのだが、プルト

ツプの開け方が良くわからなくて、あれこれ弄り回している内に中身が振られてしまい、開けた途端に中身が飛び出し、炭酸塗れにしてみましたことがある。

あれ以来、ラツミスは炭酸飲料に怯えてしまったので、商品として並ぶことが無かった。彼女以外にだったら解禁しても大丈夫だろう。それも炭酸控えめなら。

「ハツコン、無事終わりそうだねー。帰ったら体綺麗にしてあげるから、もう少し辛抱してね」

「いらっしやいませ」

それは楽しみだ。感覚がある訳じゃないのだが、濡れた布で全身拭いてもらうのは結構好きだったりする。体も気分もさっぱりしたような感じが心地いい。

戦いに参加すると聞いたときは心配だったが、ハンター側には死者も出ずに無事帰還できそうだ。俺も気分がいいから、祝いも兼ねて集落に着いたら割引セールでもしようか。

「や、やべえぞ。おい、みんな、ここから撤退しろ！ でけえのがこっちに向かって来ていやがる！」

荷台にいた胸元に包帯を巻いた男が、遠くを指差し叫んでいる。

その切羽詰った感じに促され、そちらを見ると 炎に包まれている巨大な蛙が飛び跳ねてきているのが見えた。

王様蛙

「おいおい！ 何で王様蛙がこっちきてんだ！ 討伐に行った奴ら何してやがる！」

怒鳴り散らすハンターを無視して、巨大カエルを凝視する。

少し後方から何人ものハンターが追いかけているな。あの大きさから割り出すと、王様蛙は体長3メートルぐらいか。マンシヨンの二階ぐらいまで届きそうだ。

カエル人間と違い、あれはほぼカエルだ。二足歩行もしていないし、手足もカエルのままだ。ただ、体に土色の鎧のようを装着しているので、ただのカエルって事は無さそうだが。

まあ、それよりも何よりも、身体が炎に包まれているのはどういう仕組みなんだ。あれってハンターの誰かが燃やしたのかと思っていたのだが、平然としているところを見ると、自力で燃えているのか？

「くそつ、憤怒状態じゃねえか。あれじゃ、近づけねえぞ！」

あ、やっぱりカエルが自分でやっているのか、あの炎。加護のようなものなのだと予想はつくが、俺の結界にしる何でもありだな加護の力。

跳ねる度に、機械の体が揺れるのを感じる。3メートル程度の大きさだというのにかなり重いのか。そっぴりカエルの体って筋肉質で掴むとかなり硬いつて聞いたことがある。

と、冷静に考察してみたが……ヤバくないこれ？

「撤退しろ！ 全員、撤退だーっ！」

「逃げろおおおお！ 荷物何て置いていけ！」

全員が一斉に撤退を始めている。ここで慌てふためき混乱状態に陥るかと思っていたら、皆手際良いな。数秒で既に逃げ出しているハンターが大半だ。

「え、あ、え？」

ラツミスはどうしていいかわからずに、キヨロキヨロと辺りを見回しているだけだ。こういう咄嗟の判断とか苦手だろうとは思っていたけど、俺のボタンを連打しても何にもならないから！ 落ち着け、落ち着きなさい！

「ざんねん」

「はっ、そ、そうよね落ち着かないと。ハッコンうちらも逃げよう！」

やっと正気になってくれたか。俺を背負って逃げ出そうとしたところで、ラツミスの動きが停止した。急かそうと思っただが、彼女が見ている方向を確認して納得がいった。

「くそお、ウナススが動きやがらねえ！ あれに、びびってやがるのか。動け、動いてくれ！」

角の生えた猪がウナススと呼ばれているのは知っているが、あの巨大な蛙を目撃して硬直してしまったのか。蛇に睨まれた蛙というのは聞いたことがあるが、蛙に睨まれたウナスス状態なんて皮肉でしかない。

怪我人が乗ったあれが動かなければ、怪我人たちは自力で歩かない。傷は塞がっているが血と体力を消耗している彼らが、走って逃げられる可能性は皆無だろう。

ラツミスが助かる為には迷う必要なんてない。ここで一番大切なのは自分の命だ。彼らを見捨てることになるが、非常事態で他者を見捨てることは罪じゃない。だから

「助けないとっ！　ウナススが動けないなら、うちが引くよ！」

そう言うと思ったよ。そんなラツミスだから俺も助けられたんだしな。いざとなったら俺が全力で　結界　を張るから、好きにすればいい。何があっても彼女だけは救ってみせる。

荷猪車に駆け寄ると、怯えているウナススの背を優しく撫でて、その拘束を外した。そこで、我を取り戻したようで凄まじい勢いで走り去った。

「な、なんで、逃がしやがった！　俺たちに死ねとい

「言いません！　私が代わりに引きます」

怪我人の言葉を遮り、ラツミスが叫ぶと荷車を両手で握りしめる。そして、歯を食いしばり一歩踏み出した。

本来なら大人が九人も乗った荷車を少女が一人で引けるわけがない。だが、彼女には自動販売機である俺を楽々と背負える怪力がある。それを知っている俺にとって驚く結果ではない。だけど……。

「ふぬっつっつっつ」

その歩みは遅い。地面はぬかるみで足を取られ車輪が重いことだろう。それを遅いながらも動かせるだけで圧巻なのだが、この状況

では何の意味も持たない。

背後から迫る王様蛙がかなり近くまできている。このままだと、あれに踏みつぶされるか巨大な口に呑み込まれるのは時間の問題だ。あと焼死もあるか。

俺が話せるなら背負っている自動販売機を降ろせと言えるのだが……もし言えたとしても彼女なら拒否をするだろう。

どうする、どうしたらいい？ 結界で相手の攻撃を耐えてみせるしかないのか。ラッミスだけなら救えるかもしれないが、怪我人は助けられない。

腕の立つ面々が仕留めきれないでいるあれを、怪我人だけで倒すのは不可能。護衛で残っていたハンターは真つ先に逃げている。

だとしたら、何とか足止めをする方法はないのか。

相手を驚かすか邪魔することが出来ればそれでいい。時間を稼げば後方から追ってきているハンターたちが何とかしてくれる筈だ。何か、時間稼ぎか邪魔を出来るような商品が何かはないのか！？

ざっと、商品に目を通すが、徐々に大きくなる揺れと怪我人の悲鳴が、焦りを誘発してくれる。ああ、くそ、何か、何かっ！

俺が今まで購入したことのある商品のラインナップに、有益な品は……ちよつと待て、あ、これとこれを使えば時間稼ぎくらいは！

ポイントは幾つある？ 6000を越えているなら足りる！

先ずは機能追加と変更だ。今まではペットボトル500mlが最大の大きさだったが、ポイントを1000消費して2リットルのペットボトルも置けるようにする。

そして、新商品の購入。炭酸飲料であるコーラ2リットルをずらつと並べる。それも最近は見かけなくなった名前にダイエツトと付いた方だ。他の商品は今、必要ない。

商品を変更しただけでは背負っているラッミスが気づかないから、取りあえず一本落とす！

「うあつ、何今の音！？ 追いつかれた？」

「違うぞ、ラツミスちゃん。その背負っている、ハツコンだったか。その姿がちょっと変わって何か勝手に落ちてきたみたいだぞ」

ナイスアシストだ髭面の人。それで気づいてくれ、ラツミス。

「ど、どということ、この状況で商品を落として。もしかして、ハツコン何か意味があるのこれに？」

「いらっしゃいませ」

「何か策があるんだよね。信じるよ！」

ラツミスは荷台から手を離し、迷うことなく俺を地面に降ろし、2リットルのペットボトルを取り出してくれた。

「えっ、この泡がぶくぶくなっているのって……あの変なジュース？」

あの時の事を思い出したようで、しかめ面になっているが理解してくれているならよし。この調子で大盤振る舞いといくか。

次々とコーラを取り出し口に運んでいく。ラツミスがそれを抜き出しているのは荷台の上に置いていくという流れ作業となっている。

そっぴや、地鳴りがしなくなったな。何か進展があったのか？

ちらつと、王様蛙に目を向けると、何とか追いついたハンターの面々が攻撃を仕掛けている。だが、劣勢のようであるのであの炎を前に攻めあぐねているように見える。

このままだと、どっちにしる近いうちにここに到達するのは確実。だったら、俺たちが何かしなければならぬという現状は変わらない。

更に機能追加購入して、フォルムチェンジだ！

体が光に包まれ、今までとは違う急激な変化が始まった。四角形の体から角が無くなり、円柱のような形になった。

下半身はカラフルな彩りとなり、丸い模様が至る所に描かれている。そこから上は透明のボディとなり中身が透けて見え、中には新たに購入した棒状の包み紙に覆われたお菓子が満載されている。

そのお菓子と言うのは囲碁の碁石に似た形状をしているキャンディーが幾つも入った物だ。普通に食べたら美味しいキャンディーなのだが。

「えっ、えっ、ハツコンが丸くなった！」

それだと性格がきつかったみたいに勘違いされそうだな。って、そんなことを考えている余裕はなかった。このキャンディーも無料でご奉仕しよう。

「えっ、えっ、これも受け取ればいいんだよね」

「いらっしゃいませ」

取り出し口から溢れ出すそれをラミスが拾ってくれている。ここまでではいい、問題はここからだ。どうやって彼女に理解してもらおうか。

「どうやってたら伝えられる？ 出来る範囲でやってみるしかないか。」

「こうかをどうにゆうしてください。こうかをどうにゆうしてください。」

さい。こづかをとづにゆうしてください」

「えっ、商品いっぱい出ているのに、硬貨を投入するの？」

「さんねん。こづかをとづにゆうしてください。こづかをとづにゆうしてください」

「ど、どづこづ」

こんなんじや説明不足にも程があるよな。でも、これ以外は俺にどうしようもないんだ。無茶だとはわかってる。だけど、どうにか……。

「ラツミスちゃんよ、そいつ壊れたんじや」

「そんなことない！ ハツコンは必死になって、うちに何か伝えようとしている！」

今、泣きそうになった。俺の事を信じて、何とか読み取ろうとしてくれている。これがもし伝わらなくても、俺には後悔はない。ここまで信じてくれたラツミスがいてくれたら、もう、それでいい。

「この炭酸飲料。お菓子。硬貨を投入。でもそれは違う……この飲み物は前に、噴き出したやつだよ。ええと、ってことはあの時のように……でも、このお菓子は。お金を入れないで出たのに、硬貨を投入して、じゃなくて……」

あと一歩、あと一歩なんだ。頼む気づいてくれ。

「どづでもいいけどよっ！ 俺の縄を解きやがれ！ お前らと心中

するつもりはねえぞ！」

あの煩いのは荒縄でぐるぐる巻きにした小悪党か。存在を忘れていたよ。

「てめえ、うっさいぞ！ 口に何か放り込んで黙らせておけ！」

「お、おう。じゃあ、これでも入れればいいか」

あ、髭面のオッサンに怒鳴られて、怪我人の一人があのかキャンデーを包み紙ごと口に放り込んだ。

「なんふあこのひゃみはっ！ がっぺっ、紙の棒なんか突っ込みやがって。まだ口に残ってやが、あれ、ナンダコレ、うめええええっ！ あ、でも喉が渇くな。誰か、水くれよ、水、水！」

吐き出す時に包装紙が破れて中身が口内に零れ落ちたのか。こっちは切羽詰っているのに、呑気に味わいやがって。

「だああ、うっせえな。これでも飲ませておけ！」

オッサンがコーラを投げ渡して、受け取った男が蓋を開けて小悪党に飲ませた……あつ。

「ぶふあるふあああああ」

小悪党の口から噴水が上がった。それを見たラツミスは 全てを理解してくれた。

「これの中に硬貨じゃなくて、このお菓子を投入……入れたらいい

んだね！」

「いらつしゃいませ」

正解だよ、ラツミス。包装紙を引き裂き、中のキャンディーを一気にコーラの中に放り込んだ。凄まじい勢いで中身が噴き出し、ハインターたちがびしょ濡れになっている。

「な、なんだ。爆発しやがったぞ」

「何この甘ったるい臭い……あ、目が痛い」

そう、これこそが動画投稿サイトで一躍有名になった現象だ。コーラに特定のキャンディーを入れると一気に中身が間欠泉の様に噴き出される。実は塩やラムネでも可能だったりするが、これが一番勢いがある。あと、コーラもこの種類の物が最も反応する。噴き上がる高さは4、5メートルに到達……と経験者が語っておく。

やるべきことを理解したラツミスが怪我人全員にコーラとキャンディーを配り、軽く説明をしてきている。行き渡ったのを確認した。さあ、駄目で元々ぶっかけるとするか。

一難去って（前書き）

一難去って

激しい戦いを繰り広げながら戦場がじわりじわりとこっちに迫っている。王様蛙は弱って動けないハンターたちを先に食う気なのか。肉食獣は群れの中でも弱い物を獲物にするって言うしな。

結構距離があるというのに熱気がここまで伝わってきているようで、ラツミスとハンターたちがしかめ面になっている。

戦闘中のハンターたちがこちらの存在に気づいたようだが、俺たちには何か言うよりも先に王様蛙がこっちに向かってきた。

どうせ逃げられない。だとしたら無駄だとしても足掻かないと損だろ！

「みんな、構えて！」

「おうさっ！」

全員が荷台の縁に並び、コーラの中にキャンディーを放り込み指で栓をする。そして、泡がペットボトル内に充満したところで

「目を狙って放出！」

ペットボトルの口から勢いよく飛び出した黒い飛沫が、接近してきた王様蛙の目玉に向かっていく。炎に触れて一気に蒸発するが、まだまだ在庫はある。

王様蛙は鬱陶しそうにこちらへ攻撃を加えようとするが、火の勢いが弱まったことで他のハンターが攻勢に転じている。そこで更に嫌がらせの二発目が飛ぶ。

何とか団の副団長であるフェルミナさんも便乗して水を放出して

くれたおかげで、こちらのコーラスプラッシュが相手の目に届いた。

「グゲグゲゴオオオ！」

あ、激しく瞬きをしている。コーラって目に入ると痛いんだよな。わかるわかる。

暴れている王様蛙の隙をハンターたちが見逃すわけもなく、一斉に攻撃を加えはじめた。

さて、やるべき嫌がらせはやったし、後は任せてもいいだろう。今の内に撤退だっ！

「逃げるよーっ！」

荷台を引いて全力で逃げるラツミスの背で揺られながら、遠ざかる王様蛙に別れの言葉を手向けることにした。

「またのごりようをおまちしています」

視界を奪われたことで、すぐに王様蛙は倒されたのだが、今更だがふと思ったことがある。

遠距離からラツミスの怪力で次々とコーラというか飲料を投げつけたら済んだ話じゃ……。あ、でも、不器用そうだし投げて当たらない確率が高いよな。それに、それを伝える術もなかったし。と、言い訳をしておこう。何でもそうだが冷静さを失うと人は突飛な発想になるようだ。

結果論で言えば、上手くいったのだから文句はないのだが、もっとやりようがあったよな。うん、反省しよう。

「上手くいって良かったねー、ハッコン」

「お前のおかげだぜ、ハッコン」

称賛してくれるのは嬉しいが、どうにも複雑な心境だ。これでも出せる仕様なら、それこそガスボンベでも取り出して投げてもらえれば、大爆発で倒せたかもしれないが、俺が今までに自動販売機で購入したものという縛りがあるからな。

カセットボンベやスプレータイプの整髪料もそうだが、ガスが入っている商品は衝撃と温度に弱いらしく、実際はどこかにあるのかもしれないが、俺は自動販売機で一度も見たことが無い。

他の策も今のところ思いつかないし、結局はこれしかなかったのか。うーん、もう少し自分の機能を知っておかないと駄目だな。

あとまあ、反省点と言うか何と言うか……ポイントの消費量が。2リットル対応と棒状キャンディー販売機モードの二つで2000。そしてコーラとキャンディー購入で合計40ポイント。2040ポイントを使ったことになる。

それで何とか成ったのだから良しとしておこう。

「無茶をするでない。胆が冷えたぞ」

「ごめんなさい、会長」

こちらに歩み寄って苦言を呈する熊会長に、深々と頭を下げているラツミス。音声を切ったら、食べないでと熊に懇願する少女のようだ。

「だが、助力感謝する。こちらの失態でお主らを危険に晒してしま

った。この通りだ」

「そ、そんな、こっちこそ無茶をしちゃってごめんなさい」

熊と少女がぺこぺこ頭を下げあっている。シユールだが微笑ましい光景だ。

負傷者は出てしまったが、再起不能までの重傷者はいないようで、熊会長が胸を撫で下ろしていたのが印象的だった。

「皆、ご苦労だった。休憩を取った後に、帰路へ着こう。だが、集落に戻るまでが遠征だ。油断はせんように」

熊会長の話が今回の戦いを絞める言葉となった。

戦闘後から今まで特記するようなイベントもなく、夜は疲れ切っていて料理を作る気力もなかったようで、自動販売機の売り上げが過去最高金額を叩きだしたぐらいだろう。

あ、そうそう。あと、妙にコーラが流行っている。被った人があの味に興味を持ったという理由と、自分たちを助けてくれた飲料に感謝の意味も込めて飲んでくれたようだ。

ちなみに、入れたら噴き出すあのキャンデーは暫く封印することになる。あれは自動販売機の形から変えないといけないので、他の商品を置けなくなる。

あれから森で一晩明かし、次の日の昼過ぎに全員揃って集落にたどり着いた。

やっと疲れた体を思う存分休められると、安心しきっていた俺た

ちを迎えたのは 至る所から煙を上げている集落。おいおいおい
っ！

木製の杭を打ち込んだだけの壁の一部分が倒壊している。木製の門も破壊されているが……門番のカリオスとゴルスはどこだっ！ 無事でいてくれ。

「ど、どういうことだ！ 皆、疲れているところ悪いが、もう一踏ん張りしてもらわねばならぬようだ」

まだ体力が回復していない荷台にいるハンターを残し、大半の者が集落へと駆けて行く。

自力で動けないこの身が恨めしい。俺も彼らに追従して集落に飛び込み、門番と宿屋の女将とムナミ。そして常連の客たちが無事か今すぐにも確かめに行きたい。

だが、俺は自力で動けない。走るところか歩くことすら……。

「み、みんなは、ムナミ、女将さん……」

今にも泣きだしそうなラツミス声を聞いて我に返った。俺が落ち込んで動揺してどうする。ラツミスは俺なんかとは比べ物にならないくらい、長い付き合いをしてきたんだ。

友達と言ってくれた彼女の為にすることがあるだろ！

「い こう かをとうにゆうしてください」

「えっ、ハッコン？」

「ありがと うごうごう かをとうにゆうしてください」

ずっと考えていた、どうやれば意思の疎通が可能かを。話せる言

葉は限られている、だがそれを組み合わせれば、会話ができるのではないかと。

話せる言葉は「いらっしやいませ」「ありがとうございました」「またのごりようをおまちしています」「あたりがでたらもういっぼん」「ざんねん」「おおあたり」「こうかをとうにゆうしてください」「これだけだ。

そして、そこから好きな言葉を抜き出すことはできないが、初めの言葉を話した後に次の言葉を被せることで、違う言葉を生み出せないか。何度も頭で文章を組み立て、深夜の人気のない時間に何度も繰り返し、俺は被せて言葉を消すことと、発音の速度を変更することが可能になった。

初めは「いらっしやいませ」の「い」を発音した後に「こうかをとうにゆうしてください」を被せて後半を遅らせただけだ。二回目は後半を区切って「うごこう」と言葉にしたが、伝わっているのだろうか。

「そうだね。動かないとどうしようもないよね！ 行くよ、ハツコン」

「いこうか をとうにゆうしてください」

片言でもどかしいが、会話が成立した喜びはぐつと抑え込む。いつか、言葉を途中からでも抜き出せる様になれば、一文字ずつの組み合わせで話せる日が来るかもしれない。日々鍛錬あるのみだな。彼女と共に集落の中に入ると、テントや数少ない建造物が無残にも破壊されていた。これは何かに襲撃されたって事だよな。足元に視線を落とすと、地面には巨大な溝がそこら中にあつた。

これって、何か巨大な綱でも擦りつけたかのような……倒壊している建物もよく見ると、外から内に向けて握りつぶされたような、

跡が残っている。つまり、これをやったのは。

「宿屋、宿屋はどうなっているの!」

自動販売機を背負っているのが信じられない速度でラツミスが駆けている。気持ちはわかるが、これをやった何かがまだいる可能性もある。

これは言葉の組み合わせで忠告するのは無理か。さっきの方法で話すには予め使えそうな言葉を覚えておく必要がある。この状況で咄嗟に思いつくのは難しい。

忠告できないなら、俺が彼女の代わりに気を配るしかないか。

テントは九割方破壊されている。宿屋に向かうまでの道に人の姿を一人も見かけていないのが気になる。殺されていたとしても死体が転がっている筈なのだが、それすらもない。

どういうことだ。全員が避難しているのであれば、それが一番だが。

「あ、あつた! そ、そんな……酷いつ! 女将さん! ムナミ!」

悲壮な声を上げ叫ぶラツミスの見たものは、倒壊寸前の宿屋だった。二階建ての木造建築だった宿屋は見る影もなく、屋根は吹き飛び二階と一階の中間部分が内側に捻じられたようになっていた。

扉も歪んでいるので、もう扉としての機能を果たせない。他もまだ崩れていないのが不思議なぐらいで、何か衝撃を与えたら今にも崩れ落ちそうだ。

このままだと、ラツミスが飛び込んでいきかねない。どうかして落ち着かせないと。この状況で適した言葉を組み合わせるしかない。

「返事をして、二人とも!」

宿屋に突っ込む気が。ええい、何とかしないと！ その時、咄嗟に頭にひらめいた言葉を俺は口にした。

「あたま ざんねん」

「ひ、酷いよ、ハツコン！」

あ、怒ってらっしゃる。でも、今ので感情が切り替わって少し冷静になれたようだ。大きく深呼吸を繰り返している。

「ごめん、ハツコン。今この建物に触れたら壊れかねないもんね。それに、返事が無いって事は……どこかに避難しているかもしれないってことだし」

「いらっしやいませ」

はい、いいえ。で答えられるときは今まで通りでいくしかない。ラッミスがいつもの感じに戻ってくれて助かった。ざっと目を通しただけだが、宿屋とその周辺に血の跡はなかった。そう信じたいという願望が入ってないとは言えないが、無事の可能性はある筈だ。

防衛

「ええと、こういう時は、避難する場所は……あつ、ハンター協会！　そうやった、ハンター協会や！」

動揺して方言が出ているな。ハンター協会か。そういや、俺って集落の中まともに見て回ったことが無いから、どんな建物か全く知らないぞ。

一応、荒事を担当している屈強なハンターをまとめている所だから、それなりに立派で頑丈な建物のイメージはあるが。会長は熊だから、内装もしっかりしてないとすぐ壊れそうだな。

「ほな、行くよ……じゃない、行くよ！」

「いこうか　をとうにゆうしてください」

ああ、何かこっちの話しの方がもやっとするな。でもまあ、今はこれで妥協しておこう。

宿屋は門からかなり近い場所にあったので奥の方は全然知らなかったが、へえーこっちは結構しっかりした建物が多いんだな。

宿屋と門付近はテントが多かったのだが、こっちまで来ると木造と石造りの建物の方が多い。というか大半がしっかりとした造り……だったのだろう。今は見るも無残な姿を晒している。

被害を受けていない建物も結構あるが、何故かくねくねと曲がった一本道が建造物の密集地帯に出来上がっているのだ。

何度も見た大きな綱を引きずったような跡がここにもある。太さは大人が二人寝転んだぐらいか。

「この壊された先に向かえばきっと生存者がいるよね！」

「いらっしやいませ」

そう答えておいたが、この跡つてどう考えても巨大な蛇だよな。ここで連想されるのがカエル人間の存在だ。カエルの天敵として真っ先に思い浮かぶのは蛇だろう。蛇に睨まれた蛙という言葉もあるぐらいだから。

生物が大量発生する要因としては色々上げられるだろうが、天敵がいなくなり異常に増えた野生動物の話は良く聞く。この巨大な蛇は蛙人魔の天敵で、どういう理由か今年は奴らをあまり襲わなかった。

もしくは冬眠から異様に遅く目覚めたとか。それで腹を減らして人間の集落を襲った。そういう流れは考えられないだろうか。ただの憶測だけど、意外といい線いつている気がする。

「もうすぐ、ハンター協会だからね！」

半壊、全壊した建物の間をすり抜け、飛び出した先には砦がどんと構えていた。

え、何、この難攻不落の砦。材質が不明な黒い外壁は鈍く輝き如何にも頑丈そうで、二階立ての二階部分にはテラスがあり、そこには備え付けの巨大な弓　バリスタがずらりと並んでいる。

全ての窓には格子が付けられていて、外からも中からも通すことを許さない。扉も両開きの鉄製のようで、見ているだけでわかる重量感溢れる逸品だ。

建物も学校の校舎ぐらいあり、ここなら100人ぐらいは軽く匿かくまえそうだ。

とまあ、冷静に分析できるのも目の前の光景を見たからなのだが。ハンター協会と思わしき建造物の前に、異様に長く太い物体が横たわっている。茶褐色のそれには鱗があり、先端には巨大な頭が二つあった。口が奥まで裂け鋭い牙が伸び、鼻は細長い穴が二つ開いているだけだ。

つまり、頭が二つある巨大な蛇が体中から矢を生やして死んでいる。そして、その周りには討伐隊に同行したハンターたちや、この町に残っていたハンターと門番の二人もいた。

カリオスとゴルスは無事だったか。はあああ、全身の力が抜けていく……って、電源落ちないだろうな。あとは、集落の住民たちの安否なんだが。

「カリオスさん、ゴルスさん！ 二人とも無事だったんだね！」

恐る恐る、巨大な蛇を突いていたカリオスにラツミスが駆け寄っていく。

「おおっ、ラツミスとハツコンか。お前さんたちも怪我がないようで良かったぜ」

「何より」

「うん、私たちは平気だよ」

「ありがとうございます」

ラツミスだけじゃなく自動販売機である俺のことまで気にかけてくれていたのか。嬉しさを言葉で伝えるのは、今の俺には難しいので、今度何か二人の欲しそうな商品を追加しておこう。

「あ、あのね、それで、えと、二人は……」

胸元で手を組み合わせ祈りながら、そう問いかけるラツミスに二人は 笑顔を返した。

「おう、心配するな。住民は全員無事だぜ。協会の中に皆いるぞ」

「よ、よかったあああ」

ラツミスがその場に崩れ落ちている。ふう、俺も気が抜けて電源落ちそうだ。

しかし、こんな立派な建物が集落にあったのか。予想外にも程がある。

「そっぴや、ラツミスはここに来てから日が浅かったな。この住民は魔法の警鐘が鳴らされると、一目散にここを目指して決まっ
ていてな。俺たちも無理だと思ったたら門を閉めて速攻でハンター協
会に逃げ込むことにしてんだよ」

「ここには転送陣があるからな」

成程。これ程の損害が出ているのに、全員無事なんてあり得ない
と思っただが、そう言うからくりがあったのか。迷宮の中に作ら
れた集落だから、これぐらいの備えが合っただり前なのかもしれ
ない。

城壁が丸太を並べただけの代物だから甘く見ていた。何にせよ、
集落の人々が無事で何よりだ。建物は壊れてしまったけど、少なく
とも命は残っている。

壊れた物はまた建てればいい、なんて綺麗ごとを言うつもりはな
い。家というのは財産であり、その人の日々が詰まっている思い出

の宝箱なのだ。少なくとも失ったことのない人が、命があれば良いなんて口にははいけない。

でも、それでも、俺は生きていてくれてよかったと思う。たった数週間しかここで暮らしていないが、毎日顔を見せてくれるお客も、俺の前を通り過ぎるだけの住民も、死んで欲しくないと思つて心から思う。一度死んだ身だからこそ……。

「まあ、色々ぶつ壊れちまったが、三年前も酷かったからな。だから、俺たちのいる門の辺りは壁も安っぽいだろ？」

三年前にも集落が被害を受けたのか。だから、あそこはテントばかりで、こっちは立派な住宅が建っている。この人たちは俺が思っている以上に遅いようだ。

「ラツミー！ おつかえり」

「ふう、今回は駄目かと思つたわ。いやー、凄かつたわね今日のはラツミス、怪我はないかい？」

開け放たれた鉄扉から次々と人が現れる。常連である老夫婦と商人の若者もいるな。ツインテお嬢様スオリも無事のようにだ。黒服の面々も隣に付き添っている。

他にも何度か見かけた面々の姿に、一連の出来事がようやく終わりを告げたのだと、安堵の息を吐いた。

「ありがとうございました」

そんなことを言つつもりではなかったのだが、これは間違いとは言切れないな。

今度こそ本当に一息つけそうだ。

「ふうつ、安心したら腹が減ってきたな。ハツコン、疲れが飛ぶ変な水頼むぜ」

「俺は甘いお茶にしよう」

「私はアロワザジュースにしようかな。ラツミーも母さんもそれでいい？」

「うん、うちもそれでいいよ」

「ああ、頼むよ」

カリオスはスポーツドリンク、ゴルスはミルクティー、ムナミ、ラツミス、女将さんはオレンジジュースだね。あいよ、全品俺の驕りだもってけ泥棒！

「あれま、ハツコンさんがいますよ、お爺さん」

「そんなにバンバン叩かんでも見えとるわ。わしはいつもの水でええか。婆さんは黄色いスープじゃったか」

「僕も甘いお茶いただこうかな。あ、ムナミさんもいたのですね。偶然だなー」

「ええい、朝の常連三人衆にもプレゼントだ！」

「いいところにハツコンあるじゃねえか。俺は白濁色のパスタ食うぞ」

「私は茶色いの乗っているの、食べようっかな」

「んじゃ、俺はどれにすつか」

次々と客が集まってきた。ああもう、普通なら大繁盛と喜ぶところだけど、今日は儲け度外視だ。今夜限りの全品無料セールを開始だこんちくしょう！

新商品の酒もビール、カクテル、酎ハイも取り揃えているぞ。今夜はひとしきり騒いでやるぞ、野郎ども！

……ここから前途多難かもしれないが、手も足も貸すことができない俺からのせめてもの贈り物だから。これぐらいしかできないけど、これからもこの集落の一員としてよろしく頼みます。

あれから生存者の確認と、自宅が住めなくなった人は荷物をハンター協会に運ぶ作業が終わり、飲めや歌えやの大宴会が始まった。

メインディッシュは双頭蛇で、みんな臆することなく煮物や焼き物に齧り付いていた。何と言うか、この世界の人はワイルドだ。日本では蛇を食べる機会がなかったが、脂がのっけていて美味しそうだな。

商品が無料とわかると、今まで購入したことが無い人まで群がり何度補充したことやら。売れ行きは新商品の酒類がバカ売れで、次いで成型ポテトチップスとおでんをつまみとしてセットで買って行く人が多かった。

明日は飲み過ぎの人にスポーツドリンクが売れそうだな。あとシジミの味噌汁も仕入れておこう。ふふふふ、無料は今日の夜までだからな。明日はがっぱり稼がせてもらいまっせえ。

「ハッコン、飲んでるうー」

酔っ払いが絡んできたぞ。完全に出来上がっているラツミスが、俺に体を預けて地面に座り込んでいる。日本なら法的にアウトだろうが、この異世界の飲酒可能年齢は低いようだ。他にも高校生ぐらいにしか見えないハンターたちが、平然と酒盛りしているからな。ラツミスは顔がふやけきっていて、幸せを顔面で表現している。こんなにも幸せそうな酔っ払い、初めて見たかもしれない。

「討伐に行ってから、いーいっばい苦労したけど。凄く充実していたよねえ」

「いらっしゃいませ」

うん、それは同意するよ。こんなにも激しい戦いだったというのに、死者が一人も出なかったというのは、ハンターも含めて集落の全員が生きることに対して長けていたということだ。伊達に魔物が住む階層に住居を構えていないな。

ここの住民は普通の村人や町人と違い、皆が危険と隣り合わせで生きている。

俺が全く変わらない生身の状態で転移していたら、数日生き延びられるかどうか……自動販売機に転生させてくれたのは、本当に神の慈悲なのかもしれない。

「でね、うちは嬉しいんやあ。皆が生きていたことも、めっちゃ嬉しいんやけどあー」

素の口調になってきたな。俺も今にも落ちそうだな。寝落ち寸前っぼいが、何とかギリギリのラインで踏ん張っているみたいだ。無理せずに寝ていいのに。

「ここに帰ってきて、みんなが、ハッコンに駆け寄ってきたのが
ごっつううう、嬉しくてなあ。ハッコンはいつの間にか、ここに
必要な存在になっていたんやなって、だから、ほんまに嬉しくて嬉
しくてう……すうー」

あーあ、寝落ちした。

そうか、そんなことを思っていたのかラツミスは。本当に優しく
温かい人だ。日本でこんな女性に出会っていたら、本気で好きにな
っていたかもしれないな。

おやすみ、ラツミス。また明日からも、よろしく。

復興作業

どうも、自動販売機です。住処が宿屋前からハンター協会前に変わりました。

ムナミと女将さんは早朝から元気に飛び出してきました。そうそう、瓦礫となった宿屋は一度完全に取り壊してから、建て直すみたいです。

宿屋は集落には必須らしいのでハンター協会から費用が出るらしく、今度はもつと豪華な宿屋建てようかと、二人で笑いあっていたのが若干恐ろしかったです。

って、この口調疲れるな、やめよう。

心機一転、俺も気持ちを引き締めていこうかと思っただが、慣れないことはするもんじゃない。

昨日は散財する羽目になったが今日からはばっちり儲けさせてもらう。もう既に大量に商品が捌けていつているからな。

朝っぱらから元酔っ払い共が亡者の様にふらふらと俺の前に現れて、次々と商品が売れていく。昨日、無料だからと初めて商品を買ってくれた大半が、リピーターになってくれたようで笑いが止まらない状態だ……計画通りっ！

ラツミスは起きてからすぐに熊会長に呼ばれて、協会の中に入っていた。今回の遠征で周囲の見る目が変わったのなら嬉しいところだ。

今朝からカップ麺がやたらと売れるのは、調理道具も失ってしまった人たちが購入しているのと、昨日はしゃぎすぎて料理する気も起らない人が殆どっばい。

正直な話をすると、皆が金銭的に困っているなら、カップ麺は赤

字覚悟の値段設定でいくつもりだったのだが、誰もが家の倒壊を覚悟済みで住んでいたようで、現金の殆どをハンター協会内の倉庫に預けていたのだ。

商人たちも今日から大工と防衛護衛依頼を狙っているハンターが大量に乗り込んでくることを計算して、大忙しで商売に励んでいる。生命力が溢れているぞ、ここの住民は。

「ハツコン！　うちね会長から直に依頼受けたんだ。凄いでしょ！」

「いらっしやいませ」

えらく出世したな。でも、その依頼内容は予想がつく。

「でね、何と、瓦礫撤去の依頼だよ！」

「ですよー。その怪力を知っていたら誰だって、その依頼を思いつく。」

建築機械である重機にも匹敵しそうな力を思う存分発揮できる現場だよな。力が余って壊しても何の問題もないから、器用さが低くても安心だ。

「まずは宿屋があつたところを更地にして欲しいんだって。新しい宿屋を速攻で建てたいからって言ってたよ」

大量に人が押し寄せてくるなら、まずは宿だよな。簡易のテントをハンター協会前に大量に設置していたけど、ちゃんとした宿屋でゆったり体を休めたいと誰もが思うだろう。

ってことはつまり、また定位置に戻るのか俺は。

ラツミスに運ばれて元宿屋前に到着すると、女将さんとムナミさんは既に撤去作業を開始していた。二人とも宿屋の制服なのだが、

スカートの下には作業スポンをはいているようだ。だったら、スカート止めたらしいのと思うが、たぶん彼女たちのポリシーなのだろう。

「ムナミイイ、女将さあああん。手伝いに来たよー」

「ラツミー来てくれたんだ。これで百人力ね。ハツコンも一緒なのね、おはようー」

「いらっしやいませ」

音声に「おはようございます」と「こんばんは」が切実に欲しい。みんなは慣れているから、普通に挨拶だと受け取ってもらえているけど。

「ええと瓦礫はその荷台に載せて、門の先まで持って行けばいいらしいよ。そこで、燃える物と燃えない物に分けてくれる人がいるそうだから」

「あ、そうなんだ。じゃあ、溜まったら、うちが運ぶよ。ハツコンはここで、みんなに飲み物とか売って上げてね」

「いらっしやいませ」

いつもの場所に置かれると、何故かほっとしてしまう。

おっ、次々と人がやってきたな。見た感じでは若い人ばかりで、何人かは討伐に同行していた見知った顔だ。ハンターの若手は瓦礫の除去に回っているのか。

「お、ここが現場か。って、意思のある箱もいるじゃねえか。やっ

たぜ、ついでる」

「あつ、本当だ。美味しい物をいつでも補給できるね！」

「復興作業の依頼は報酬が良いからガンガン使えるな」

喜んでいただけでなによりだ。暫くはスポーツドリンクが売れそうだな。目につくように多めに並べておこう。

さて、皆の働きぶりでも眺めておこうかな。

体力勝負のハンターだけあって、助っ人の若者たちも良く働いている。女将さんとムナミも彼らに負けない働きぶりだ。宿屋の仕事は重労働って言っていたのが良くわかる。

だが、そんな彼らとは比べ物にならない活躍をしているのが、ラツミスだ。彼らが三人がかりで持ち上げようとしていた柱を、ひよいつと一人で持ち上げては荷台に載せていく。

大きすぎて運べない瓦礫はその拳と蹴りで手頃の大きさに粉碎している。それを目撃したハンターたちは啞然としているな。無理もない。可愛らしくて小柄な彼女が、尋常ではない怪力を振るうギャップ。驚かない方が、無理があるってものだ。

「いっばいになったから捨ててくるよー。よいしょっと」

本来は角の生えた猪　　ウナススや馬っぱい動物に運ばせる荷台なのだが、彼女の怪力なら何の問題もないので、当たり前のように一人で運んでいく。

徐々に遠ざかる姿をハンターたちはぼーっと眺めている。

「凄いな、あの子。俺たちも負けてられねえぜ」

「あれは加護の力よね。にしても、凄い怪力」

「ここの復興が一段落ついたら、チームに誘いたいところだが、あのような人材なら既に有名なチームに加入しているか」

彼らの話に耳を傾けていたのだが、ラツミスは高評価のようだ。この働きだけを見たら優秀なハンターに見えるよな。わかる、わかるぞ。でも、ハンター仲間はいないという現実。

今のところ集落の住民とは仲がいいようだが、ハンター関連は会長と、あの何とかの団ぐらいとしか、まともな会話をしたことが無いように思える。

以前の彼女は力を持って余して空回りしていたから、組んだ面々に足手まとい扱いされていたらしい。こういった単純な力仕事は彼女の専売特許だ。ハンターの依頼も、こういうのをメインにしていたら評価も変わっていただろうに。

「たっただいまー！ さあ、ガンガンやるよー」

遠くから砂埃を巻き上げて近づいてきていたから、そうだろうとは思っていたが重しが無いとかなり足が速いな。でも、俺を背負って適度な重さが無いと身体が軽すぎて、思うように動けないという困った体質。

前に零していたのだけど、ある程度重しが無いとただ走るだけで、飛び跳ねるような感じになるので動いていて気持ち悪いらしい。腕の手袋も鉄板が仕込んでいて、重さを調整しているようだ。

日頃から力を制御しながら動いていたので、思ったように体を動かせずに失敗ばかりしていて、周囲から落ちこぼれ扱いされていた。それが彼女に対する反応の理由だったりする。

凄腕のハンターを師事していたこともあったそうだが、旅の途中

だったので二か月程度で、ずっと水を満載した瓶を背負わされていたと、懐かしそうに語っていたな。

「おっ、やってるやってる。ラツミスちゃん、ハッコン元気してるかー」

汗水垂らして働いているところにやってきたのは、寝ぼけ眼で大欠伸をしている無精ひげこと、ケリオイル団長だった。

あの西部劇に出てきそうなテンガロンハットはお気に入りなのだろうが、野営している時も被ったままだったな。腕は確かだが時折こっちを見る視線に怪しいものを感じていたので、正直なところ全く信用できないオツサンというイメージがぬぐえない。

「お、おい、あの人、愚者の奇行団の団長じゃねえか？」

「あのハンターチームの中でトップクラスの」

「後で握手してもらえるかな」

仕事をしていた若手ハンターたちが手を止め、色めきだっている。何だと。ケリオイル団長って有名人なのか。腕利きだったし、団員からも慕われていたようだけど、まさかの人気者設定。愚者の奇行団という怪しげなネーミングセンスの団も、ハンター界隈では知れ渡っているのか。

「おー、諸君頑張ってるねー。働く若者におじさんから賄賂を渡しておこう。ハッコンから好きな物を選んでくれ、驕るぜ。もちろん、その淑女の皆様もどうぞ」

うわぁ、生でこんな気障めがねな台詞を言う人初めて見たよ。本気か芝

居でやっているのか判断がつかないが、どっちにしろ、この人は苦手だ。

若手ハンターたちは騒いでいるが、ラツミスとムナミと女将さんは変わりないな。平然と構えている。

「おごつてくれるんだ。じゃあ、うちは……これとこれ」

「ラツミー、こういう時は一番高いのから順に買うものよ」

「それじゃあ、私はおつまみように、煮物が入っているのを1000個程もらおうかね」

よ、容赦ないな二人とも。宿屋を運営していたから、こういう輩の対処方法は慣れているのだろう。

「そ、それはちょっと。一人二品まででお願いできませんかね」

お金が入った袋を覗き込んだケリオイル団長の頬が引きつっている。いいぞ、もっとやって。

一見、押しに弱い軽い人間に見えるが……眠たそうで締まりのない顔も、帽子のつばからのぞく目の鋭さを見ると、その感想は吹き飛ぶ。

「ラツミスちゃんは、うちの団に入る気はねえか？ もちろん、ハツコンも一緒にな」

まるで食事にも誘うようなノリで、ラツミスの肩を抱きとんでもないことを口走った。

回りくどいことをせずに、直接勧誘に来たか。ラツミスはどう返答するつもりなんだ。周りのハンターの羨む顔を見る限り、この愚

者の奇行団だったか。ここに誘われるなんてかなり光栄なことなのだろう。

「え、嫌です」

ラツミスは即答すると、肩に置かれた手を払う。よくやった、感動した。

まさか断れると思ってもいなかったのか、目と口を限界いっぱいまで開いている。あ、トレードマークの帽子がずれているぞ。

「そ、そうか。ま、まあ、考えておいてくれ。気が変わるのを期待しているぜ。っと、ハツコンで水でも購入するか。昨日の二日酔いが酷くてな……」

「いらっ

しゃいませ」

あ、帽子が今にもずり落ちそうだ。

金貨と銀貨

ケリオイル団長がとぼとぼと哀愁を漂わせて帰っていった。

俺としては断って正解だと思っている。有名な一団だとしても、そこに加入するということは荒事が増えるということだ。ハンターをやっているだけでも危険が隣り合わせだとは理解している。だけど、今の彼女は強豪の中で、もまれるよりも、ここでじっくりと腰を据えて実力を伸ばすべきだと、勝手ながらにそう思う。

でだ、これは俺の意見であって、肝心のラツミスが何故断ったのか。それが不思議でならない。

「おいおい。あんた、何で愚者の奇行団の誘い断ったんだよ！」

お、短髪のハンター、ナイスなツッコミだ。それ、それが知りたかった。

「んー、だつて、この街つて復興中だし。人手が足りなくなったら、困るでしょ？」

ハンターたちの開いた口が塞がらない。あー、ラツミス……別に今すぐって意味じゃないと思うぞ。言えば復興が終わるまでは待ってくれるだろうに。

「じゃあ、みんな続き頑張ろうね！」

彼女以外の人々がため息を吐くと、作業に戻っていった。状況が理解できず、首を傾げていたラツミスも瓦礫の撤去に戻っていく。

それからは特に面白いイベントもなく。昼になった。宿屋復興部

隊にカップ麺とおでんを売り捌き、ラツミスに背負われて今度はハ
ンター協会前に移動する。

到着を待ち構えていた人々に次々と商品が売れて行く。この調子
だったら昨日のマイナス分は直ぐに取り返せそうだ。

お客は購入経験がある人が大半だったが、一度も使用したことな
い人も今日は多かった。その顔に見覚えが無いということは、今日
からこの清流の湖階層にやってきた人たちか。

その人たちには共通点があつて、頭に布を巻いて長袖とポケット
が多いズボンをはいている。何と言うか大工っぽいな。ざっと見た
だけでも100人ぐらいいるぞ。ということは、集落の人口が少な
くとも倍に跳ね上がっているってことだよな。

困ったなあーまた商品が大量に捌けてしまうじゃないかあ。困っ
たなあー、いやーまいったまいった……後でポイント計算をしてお
こう。

「よし、ハツコン作業に戻るよー」

「いらっしやいませ」

また宿屋前の定位置に戻り、購入に来る人たちの相手をしながら
過ごしていると。俺の前にすつと立つ人がいた。

この世界って眼鏡とスーツっぽい服も存在しているのか。黒縁の
眼鏡をかけ、緑のワイシャツと膝の少し上までの丈しかないスカー
トを履いた女性が、じつとこっちを見ている。

日本だったら会計とか弁護士とか似合いそうな人だ。目尻も吊り
上がり気味で、ちょっと怖いイメージを抱くが美人だな。

その後ろに立つ2メートルを越える大男は、この人の知り合いな
のだろうか。逆三角形の筋肉の塊で腕が長く、顔は眉間にしわがあ

り目尻が下がっていて鼻が低い。正直な第一印象は、人の良さそうなゴリラだ。

服装はスーツっぽいがぱつんぱつんで、今にも破れそう。背中には巨大なバックパックのようなものを背負っている。

「貴方は意思のある箱で間違いありませんか。ハツコン様と呼ばれているそうです」

唐突にそんな言葉を投げかけられた。え、どう答えたらいいのかと、取りあえず、いつもの挨拶をしておこう。

「いらっしゃいませ」

「事前に調べた情報によりますと、それは、はいと受け取って宜しいのでしょうか」

……やりにくいよこの人！ 表情も全く変わらないし、威圧感が半端ないぞ。見られているだけで、体が硬くなる。まあ、自動販売機だけだ。

何が目的なのだろう。真面目な話っばいけど、ど、どうしようか。

「あれ、ハツコンどうしたの。ええと、どちら様？」

ラツミスが俺の後ろからひょこつと顔を出して、黒物眼鏡の女性に物怖じもせず話しかけている。

「貴方はラツミスさんですね、失礼しました。わたくし、両替商のアコウイと申します。以後お見知りおきを。後ろに控えているのは、助手のゴツガイです」

「よろしく願います」

冷たく澄んだような声をしているアコウイと、温かみを感じさせるのんびりとした口調のゴツガイ。両極端な二人だな。

しかし、両替商か。あれって、円とドルを交換とかしているのは現代版だよな。確か、昔だと金貨を銀貨に両替とか逆のことをする職業だったか。銀行の元とかなんとか聞いたことがある。

「この階層で銀貨が不足しているという情報を得まして、我々が出向いたのです」

誰だ、銀貨を貯め込んでいる奴は。まったくもって、けしからん。

「あー、ハツコンへの支払いが銀貨ばかりだから！」

しー、ラツミスそれを言ったらダメだろ。え、もしかして、貯め込んでばかりだと硬貨の流通が滞るとか文句の一つも言われるのか。そんなことを言われたとしても、ポイントに変換したからな。今更どうしようもないぞ。

「やはりそうでしたか。そこで、我々はここが好機と判断しまして、ハツコン様にご提案があるのです。我々は金貨を100枚ほど持ってきていますので、幾つか貯め込んだ銀貨と交換いたしませんか？」

あれ、商談なのか。銀貨と金貨を交換することに異論はないけど、確か金貨一枚と銀貨100枚ぐらいが同じ価値だったよな。日本円だと金貨って10万ぐらいなのかな。まあ、変動もしているだろうから、大体だけど。にしても、金貨を100枚ってかなりの大金を所持しているってことだよな。大丈夫なのか？

出来ることなら両替してあげたいが、どうすればいいんだ？

機能に 両替 とかあるのだろうか。自動販売機は普通、両替機能がついてないけど。ええと、ざっと見てみたがないよな。

「ざんねん」

「それは承諾しかねるといふことですか」

申し訳ない。してあげたいけど、やりようがないんだ。

「あ、両替は無理だとしても、金貨で商品買えばいいんじゃないの。そしたらお釣りでないのかな？」

ラツミスの何気ない一言に、俯き気味だったアコウイの顔がぐんと勢いよく前を向いた。目が爛々と輝いていて、初めて感情らしいものを見せてくれた。

実際、金貨を入れたらどうなるのだろう。今まで一度も金貨を入れたことがない。お釣りがもらえるかどうかわからない状況で、試しに金貨を入れる猛者がいなかったからな。

「そうですか！ ゴツガイまとめ買いしますよ。金貨を」

あ、初投入か。ど、どうしよう。もし、お釣りが出ないようなら金貨そのまま返そう。

おおっ、自動販売機人生初の金貨が我が体内に。銀貨一枚の商品を買われたとしたら、銀貨九十九枚出すことになる訳だが。男は度胸、物は試しだ。

今までにない全身が湧きたつような感覚に自動販売機が振動する。これが、金貨が体内に入り込むことなのか。って、余韻に浸っている場合じゃない。お釣りはどうなった。

じゃらじゃらと釣り銭受け皿に銀貨が流れていき、溢れた銀貨が

地面に零れ落ちている。遠回しにこつちを見ていたハンターたちが生唾を呑み込んでいるな。

普通にお釣りが出たか。これが出なかつたら泥棒扱いされかねなかつた。

「これでいいですね。じゃんじゃん買いましょう」

金貨が次々と投入され、銀貨が次々と排出されていく。ゴツガイがその巨体を折り曲げ、銀貨を残さずに拾っている。

金貨を十枚入れたところで、アコウイさんも納得したらしい。ほくほく顔でバックパックに詰められた銀貨を眺めている。金銭が絡むと表情が変化するのか。

「これ以上はハツコン様の負担になってしまいかもしれませんので、ここまでにいたします。では、また後日、購入させてもらいますので。これからもよろしなに」

スキップでも踏み出しそうな後姿だな。ゴツガイさんは硬貨と商品が大量に詰め込まれたバックパックを苦もなく運んでいる。見た目に反しない筋力のような。

あの人たちとは長い付き合いになるのだろうか。悪い人たちではないようだが。

「ハツコンってすごいお金持ちだよ。お金取られないように気を付けないと」

「いらつしゃいませ」

そうだね。まあ、俺を破壊して解体したところで、中から硬貨が出るかどうかは怪しいけど。商品だって湧き出るシステムなのだから

ら、硬貨だって体内にあったというよりは、需要に応じて現れたという感じだった。

こんな話をしている間、じつとこっちを見つめる熱い視線が幾つもあった。若手のハンターにしてみれば、今、金貨を十枚吸い込んだ俺の体は、それは魅力的に見えることだろう。

そついや、自動販売機は治安が悪いところには置けないので、あれ程、日本に自動販売機があるというのは平和で治安がいい証拠らしい。

暫くは、馬鹿なことを考えそうな人たちの警戒もした方が良さそうだ。

「あ、そうそう。ごめん、ハッコン！ ずっと言うのを忘れていたんだけど、ヒュールミに暫く会えそうもないんだ。手紙送ったけど、返事がなくて……たぶん、また階層内をうろついているっぽい。だから、連絡が取れるまではここで待機つてことで、いい？」

手を合わせてぺこぺこ頭を下げているラツミスに「いらっしやいませ」と伝えておいた。一瞬、ヒュールミつて誰つて思ったが、初めて会った時に言っていた魔道具技師の友人だったか。

そついや、そんな目的があつたなと他人事のように思い出していた。

妙な出会いがあつた一日だったが、復興初日は特に問題なく終わりを告げようとしている。夜になり、ハンター協会前の定位置に居座り晩御飯の商品も売り終え、集落の明かりが次々と消えて行くのをぼーっと眺めていた。

魔道具には電球代わりの物もあるようで、集落にもその灯りが点在しているのだが、やはり日本の夜と比べるとかなり暗い。魔道具はかなり高価らしく、一般のご家庭で使われることはまずないようだ。基本的にはランタンやそれこそ松明を設置しているテントも少

なくない。

灯りの周辺だけはそれなりに明るい、そこから少しでも離れると深く黒い闇が佇んでいる。

俺のいる場所も光から離れた場所にあるので、本来なら人の目に留まりにくい。だが、俺は自動販売機だ。自ら光を発しているので、いつもなら異様なまでに目立っている。

しかし、今日は発光モードを消して、尚且つ機能の塗装変化を取得してボディを真っ黒に塗りつぶしておいた。あの時のやり取りを見ていたハンターたちもそうだが、遠征中に金を狙ってきた小悪党の一件もある。夜は闇と同化して、余計な揉め事は避けることにした。

「あれっ、ここら辺にいつもあるよな」

「移動したんじゃないか。ほら、怪力女がいつも運んでいるだろ」

「くそっ、宿屋跡地のほうに回るぞ」

噂をすればなんとやら。一緒に仕事をした若いハンターたちではなかったが、三人組の男たちが俺を探しているようだ。

実際、俺にちよっかいを出してきたところで 結界 もあるし、最大音量で音声を再生すれば、ハンター協会から何人が飛び出してきてくれるので問題はない。だけど、穩便に済ませられるなら、それでいいか。

大人の自動販売機

あれから一週間が過ぎた。集落は復興ムードに湧き、人とお金が大量に流入して、かなり活気づいてきている。

新たな住民の見分け方は俺を見て驚くかどうかだ。実にわかりやすい。

あれだけの人員を、実質この集落を取り仕切っているハンター協会はどうやって賄っているのかと不思議だったのだが、どうやら、あの二つ頭の蛇と王蛙人魔から得た素材が、とんでもない金額になっただけらしい。

ちなみに討伐隊は予め多くの報酬を約束されていた代わりに、魔物が落とした素材は全てハンター協会が所有するという契約済みだ。そうで、ハンターたちが地団駄を踏んで悔しがっていた。

最終的には、王様蛙討伐に参加していたハンターたちは特別報酬が貰えたらしく、それからは誰も文句を口にしていない。そういえば、怪我をして逃げられなかったハンターたちが「おまえのおかげだ、ありがとうよ」と大量購入してくれたな。

あの二つ頭の蛇は蛇双魔オウゴウマと呼ばれる魔物らしく、この清流の湖階層に生息する魔物らしい。予想通りカエル人間の天敵らしく、いつもは両者が争い大量発生を免れていたのだが、この蛇双魔は遠出しでいたようで、小さなカエル人間の集落を襲いながらその体を強化していったそうだ。

で、今から俺たちが戦っていた集落に、いっぱい増えているであろう蛙を食べに行く途中、人間の住む集落を見つけて、ああなったというのがハンター協会の見解らしい。

とまあ、何で俺がそんなに詳しいかと言えば、今、ハンター協会

の会長室にいるからなのだが。

「とまあ、今回の一件のあらまはこんな感じだ。ラッミスもハッコンもよくやってくれた。キミたちがいなければ、事態は悪化の一途をたどっていた可能性も高い、感謝する」

「そ、そんな、頭を上げてください」

大きな机を挟んでソファから腰を浮かした熊会長が頭を下げて、ラッミスがそれを止めさせようと両腕を激しく振っている。動きが余りに激しいので風が巻き起こっているな。怪力恐るべし。

そして、そんな二人の脇に立つ自動販売機。これって地球の人が見たら、我が目を疑う光景だよな。

「お主らを呼んだのは、特別報酬の件と今回の全貌を説明したかったのもあるのだが、ハッコンに一つ訊ねておきたいことがあってな」

ん？ なんだろう。改まって言われると構えてしまう。熊会長の目が真剣みを帯びると、何と云うか動物としての生存本能が逃げると囁く。自動販売機だけど。

中身は良い人だと知っているが、やはり巨大な熊が目の前にいる迫力には、そう簡単には慣れそうにない。

「ハッコン、お主は相手の望む物が何でも商品として出せると聞いたのだが、本当だろうか」

また過剰評価だな。確かに相手が望みそうな物をチョイスして商品を仕入れることはあるが、俺の商品と言うのは『自分が購入したことのある自動販売機の商品』という制限がある。

何でも出せるなら、それこそ拳銃や武器でも並べたら、あの戦い

もかなり楽になっていたことだろう。自動販売機で売られていない物は無理だし、一応、目についた商品は殆ど買ってきたと自負しているが、それでも世の中には俺の知らない自動販売機の商品がまだまだあるだろう。

だから、返答は「いいえ」なのだが、ある程度は出せることも伝えたい。どう答えるべきか。

「いらっしやい ざんねん」

「む、どういうことだ」

「たぶん、ハツコンは、できるけど、できないこともあるって言いたいんじゃないかな」

「いらっしやいませ」

ラツミスの通訳には助けられてばかりだな。

熊会長もそれで得心がいったようで、何度も頷いている。あ、動物園でご飯をねだる熊みたいだ、とか思っではいけない。

「そういうことか。ならば、可能であれば一つ頼みたいことがある。あー、ラツミスは席を外してもらえるか。ハツコンと内密な話があるってな」

「いいけど、ええと一階で待っていたらいいのかな」

「ああ、頼む。話が終わり次第、使いを寄越す」

「うん、わかった。男同士の話に口を挟んだらダメだって、母さんも言っていたし。じゃあ、下で待っているね」

「ありがとうございました」

立ち去る背に声を掛けると、ラツミスが振り返り腕を大きく振って扉を閉めた。

密室に熊と自動販売機。そっちが切り出してくれないと、話が進まないのだが。

「まずは現状を伝えておこう。現在、この集落には多くの人々が押し寄せている。元々、ここは三年前までは、もっと栄えていた集落……いや、町と呼んでいい規模だったのだよ」

人が増えているのは売り上げから見ても実感しているが、三年前に何かあったらしいという話は宿屋の女将さんと、カリオスも口にしていたな。

ここが町と呼んでも差支えない場所だった……か。ハンター協会周辺の建物は立派だし、どう考えても1000人程度の人数にしては集落が広すぎるとは思っていたが、なるほど、納得したよ。

「その一件で住民の多くが亡くなり、生き残った人々もここから立ち去った。残ったのはハンターと、商魂逞しい商売人ぐらいだな。ここでは税金は一切かからない。それを目当てに残った彼らは、今回の一件でも物怖じすることなく、既に損害分は取り戻したそうだ」

本当に逞しいなこの人は。一住民として頼もしい限りだ。

「そこで今回の蛇双魔に対して、死傷者を出さずに撃退したことが広まったことにより、防衛機能を称賛する声が高まり、移民希望の人々が集まり、この盛況ぶりとなったわけだ。壊された住居の補修だけではなく、新たに民家や店舗も建築する予定にしている」

これは益々儲けるチャンスだ。新商品と新機能を何にするか、今から考えておかないと。

「人が増えれば、様々な問題が起こる。食料関連でもハツコンには期待しているが、それは商人も理解しているようで大量の物資が流れ込んでいるので、さほど心配していない」

ふむふむ。ハンター協会の前にも露店が並び始めているからな。最近、カップ麺の売れ行きが落ちてきたので、新商品を選んでいくところだった。まあ、その分、飲料が売れているので総売り上げは変わらないのだが。

やはり、日本の多種多様な飲料業界を生き抜いてきた猛者たちの味、飲み心地、アイデアは新鮮らしく、異世界の飲み物に今のところは圧勝している。

「すまない、話が逸れてしまった。そろそろ、本命といこう。現在、最も頭を抱えている事案が、性風俗関連なのだよ。我ら熊人魔は繁殖期以外は、そういった欲望が薄いのだが人間はそうではなくてな。人が増えたことにより需要に供給が追いつかない状態なのだよ」

そっち系の話だったのか。ラツミスを引つ込ませたわけだ。

熊会長が熊人魔という種族だという情報も貴重だが、今それは置いておこう。うーん、俺は鉄の体になったから、そういった欲望からは解放されているみたいだけど、切実なのはよくわかる。

「それに衛生面の問題もあってな、病気が蔓延すると復興作業も滞ってしまう。だからといって、取り締まりを強化してしまうと、別の問題が発生してしまつてな。無茶な頼みだとは理解しているが、ハツコン、何か対策はないだろうか」

本当に無茶な申し出だな。う、うーん、病気対策は思い当たる節がある。ただ、この世界の事情に詳しくないので、似たような物が存在しているかどうかという疑問が。

試しに出してみても、反応を見てみようか。

これって箱型の商品だから機能追加しないといけないのか。ええと 箱型商品対応 でいいのか。ふむふむ、これで箱型のお菓子やたばこも可能になる。問題は俺が煙草を一回も吸ったことが無いので、煙草の販売は諦めるしかない。

商品も追加して、並べておこうか。

「ほう、このような感じで商品の入れ替えが行われるのか。ふむ、この箱は一体。これがハツコンの秘策なのか？」

「いらっしやいませ」

「ならば、購入してみるとしよう。三種類あるようだが、全て買っておくか。銀貨十枚となると、安くはないようだが」

日本では一箱1000円ぐらいだから、飲料に合わせて値段設定をしたけど、高すぎる様なら変更も考えておこう。

「この箱を空けるのだな。切れ目の入っている小さな袋なのだろうか。これを破って中身を取り出すのか」

「いらっしやいませ」

「ふむ、間違っではないようだな。これはこの手では少し扱い難いようだ。そうだな、丁度いい彼女を呼ぶとしよう。シャーリイ来てくれ」

熊会長の呼びかけに応じて、廊下側ではない壁際に設置されている片開きの扉が開き、そこから一人の女性が姿を現した。

体に張りつくイブニングドレスには腰辺りまでスリットが入っていて、すらっと伸びた陶磁器のような艶めかしい足が、歩く度に見える隠れている。両肩を剥き出しにして、胸元も大胆なカットイングが施されているので、豊かな胸の谷間に思わす目がいつてしまう。

理想的と表現しても過言ではないスタイルで、同性からも嫉妬されそうな女性は、体型だけではなかった。その上に乗っている容貌も負けてはいない。

艶やかな黒髪を背中に流し、目はどこか眠たげな感じで薄く見開かれているが、薄紅色の濡れた唇と相まって、壮絶な色気を醸し出している。

あ、この人、そっち関連の商売している方だ。そう断言できる女性としての魅力がある。

「あら、こちらがハッコンさんなのかしら。初めまして、シャーリイと申します。この度はお世話になります」

笑った顔まで色つばい。自動販売機の体になっていなければ、まともに目を合わせられないぞ。ソファアに座るときの足の組み方なんて、見えそうで見えないギリギリを狙ってやっているとしたか思えない。

「これがハッコンから提示された商品なのだが、この手では扱い辛くてな、やっってもらって構わぬか」

「もちろんですわ。私たちの為になる商品なのですよね。ここを破るのかしら……あら、これは、不思議な素材ですわ。伸び縮みする

何て面白いわ」

この背徳的な気分は何なのだろうか。

「ぬるつとした液体が片面に付着していますわね。これって用途は」

「それが、さつぱりだな。そういえば、箱の中に紙が入っていた。読んでみてくれ」

「拝見いたしますわ。あつ、そういうことですね。図解されていましたので、わかり易くて助かります」

妖艶に微笑むのはやめて欲しい。自動販売機が不具合を起こしそうになる。

「おお、わかったのか。これはどういう用途で使われるのだ」

「これは殿方のあそこに装着して、女性の秘部に挿入するのですよ。箱の種類によって、殿方の大きさに対応されているようですわ。これだけ薄いのであれば、行為の邪魔にもならず病気の予防にもなる素晴らしい逸品です」

流石プロだ。コンドームが何であるかを一発で見抜いたか。お世辞ではなく、本気で喜んでもらえているようだ。

ちなみに余談だが、箱によってSMLサイズに分かれている。生前に購入した物しか並ばない商品で何故大きさの異なる三種類を取り揃えられたのか。見栄とプライドと現実とだけ言っておこう。男なら誰もが本番を想定して試したことがあるよな……あるよね？

シャーリイは箱ごとの大きさ、枚数、値段をチェックしているよ。うで、メモを取ると小さく頷いている。

「是非、購入させていただきます。他にもおすすめの商品があるのでしたら、拝見させていただきたいのですが」

し、仕方ない。そこまで言われたら出すしかないよな。ま、まあ、俺もアダルト関連の商品は殆ど購入したことが無いので、そんなに商品揃えられないが。

その後、何とか商談が成立して、シャーリイさんは腰をくねらせながら会長室を出て行った。最後に一言「あなたが人間でしたら、私自らお相手しましたのに、残念ですわ」と囁かれたのはヤバかった。

だけど、それから合流したラツミスに、

「あれ、ハツコン体がちょっと熱いよ。何か嬉しいことでもあったの」

と言われた時に全身が冷たくなり、保温機能が壊れたのかと焦ったな。勘が鋭いというのは良し悪しだと、今日初めて思ってしまった。

当たり付き

「またも新しい機能を手に入れてみた。」

「この機能は前々から欲しいと思っていたのだが、何かと忙しくずるずると引き伸ばしになっていたんだよな。最近少し落ち着いてきたので、思い切ってそれを選んだのだが。」

「あたりがでたらもういっぱい」

「よし、よし、こいこい、7、7、ろおおくううう、なんとおおおおお」

「ざんねん」

「そう、ようやくこの音声を本来の目的で使用することが可能になった。当たり付きの機能を追加したのだ。777の数字が揃えばもう一本当たるといって、誰もが一度は期待をしたことのあるあれだ。」

「これを導入してから、売り上げが三割近く伸びた。この集落には娯楽施設が少ないので、こんな単純なスロットだというのは、はまる人が続出している。」

「他にも住民の間で当たりが出たら一日幸運が訪れるという胡散臭い噂が広がり、運試しを兼ねて購入する人も増えているようだ。」

「日常のちょっとしたスパイスとして楽しんで貰えるなら狙い通りなのだが、常連の一人が予想以上にハマってしまい、今日も無駄に商品を買って入っている。」

「落ち着け、落ち着くのじゃ。これで、これで最後にするぞ。今までの統計では、水の勝率が高い。故に水を買うのが必勝への近道と」

なるっ」

それは、圧倒的に水を買う回数が多いからだと思うよ、お爺さん。充血した目で息荒く、ボタンに指をかけて気合を入れているのは、朝の常連三人衆の一人であるお爺さんだ。今まではお婆さんと一緒に来ることが多かったのだが、当たり付きを実装してからは、早朝の誰もいない時間帯に一人できて、最低六回はスロットを回して帰っていくのだ。

ちなみに自動販売機のスロット機能は自動販売機の設置者が自由に確率を変えることが可能となっている。

そして、豆知識としてはスロットを当てたいのなら、不人気な商品を選ぶといいという噂がある。

スロットのシステムなのだが、景品表示法という法律により、一般懸賞における景品類の限度額が決められていて、懸賞にかけられるのは売上予定総額の2%となっている。

つまり、その商品が100本売れば2本までは当たりとして提供していいということだ。

まあ、何が言いたいかと言えば、結局は運なんだよな。どうしても当てたいのなら、全てを買い占める勢いでお金をつぎ込めば必ず当たるのだが。あ、この当たりの確率は2%にしている。日本ならかなり良心的な設定と言えるだろう。

「この一投に全てをっ、我が博打人生の全てをっ」

「何をやっているのですか、お爺さん……」

ハツとした顔でお爺さんが振り返った先には、笑顔のまま杖を振り上げているお婆さんがいた。とうとうバレってしまったか。そりゃ、

毎日早朝に家を抜け出していれば、こうなるよな。

「まったく、昔の悪い癖が出て、女の尻でも追っかけているのかと思つたら……はあ、そっちの病気が再発やとわ」

「い、いや、婆さんや、違つんじや。ほ、ほら、婆さんのスープも買つておいてやろうと思つてな、あいたつ！」

言い訳をするお爺さんの頭頂部に杖が振り下ろされた。結構、容赦のない勢いで叩いたが、大丈夫だろうか。

「頭が割れても、私が癒しますから安心していいですよ」

そついや、お婆さんは加護の癒しの光が使えるのだつたな。なら安心だ……安心か？

「まったく、今日が何の日か忘れとらんでしょう」

「わかつとる。わかつとるわ……最後にもう一回」

「お、じ、い、さ、ん」

お婆さんが杖を捻つて引つ張ると、中から鈍く輝く刃物の光が見えた。え、それ仕込み杖なのか。柔和な笑顔のまま杖から現れた刀を構えるお婆さんに、お爺さんは完全に腰が引けている。

「よ、よさんか！ 婆さんの腕はシャレにならん。わかつた、ワシが悪かつた」

「わかつてくれたのですねえ。ほなら、行きましようか」

何度も名残惜しそうに、こちらをチラチラと見ながら、お爺さんがお婆さんに引つ張られていく。いつもはお婆さんがお爺さんに従っている感じだったのだが、実はお婆さんの尻に敷かれていたのか。今日のお爺さん、いつもよりむきになってスロットをしていたな。お婆さんの口振りだと大事な用事があるみたいだけど、それに行きたくないから現実逃避をしていたのだろうか。

俺が会話できるなら、愚痴の一つでも聞いてあげたいところだが、自動販売機は物を売ることしか出来ない。

お爺さんのことが気になりながらも、いつものように商品を提供していると、気が付けば集落が紅く染まっていた。夕日か……ダンジョンの内部だというのに、当たり前のように陽が昇り、陽が落ちる。それに違和感を覚えなくなっているということは、俺も異世界に馴染んできたということなのだろう。

今日はラツミスが忙しいらしく、ハンター協会の近くで丸一日放置プレイ中だ。

最近では飲食店や屋台が、自動販売機の商品に触発されて料理の味が上がっているとの話をよく耳にする。集落が活気づくのは良いことだと思うので、夕方から夜にかけては食べ物関係の商品を並べていない。

異世界の人は就寝時間が早いらしく、遅くても22時までには店を閉めるので、それ以降は温かいカップ麺やおでん缶、最近仕入れたカレーうどん缶も置くようにした。

冷凍食品を温めて提供するモードもあるのだが、あれをすると自動販売機の半分がその機能で占められてしまうので、もう半分を飲料モードにするかカップ麺を置くかそこが問題だ。

「おじいちゃん、おじいちゃん。おなかすいてない？ あのしかく

いのつて、たべものいっぱいできてくるハコだよ。メイはへつてないけど、あれっておいしいのかな」

若い女の子の声が聞こえる。あれって遠回しに催促しているよな。あくまで自分が食べたいわけじゃないという主張が可愛らしくもある。ちよつとませた子なのだろうか。

「おうそうじゃな。じゃあ、何か一つ買うとするか。メイは何が食べたいんじゃ」

ん、今の声は常連のお爺さんじゃないか。今朝の不機嫌具合が嘘のように、満面の笑みを浮かべて少女の手を握っている。その隣にはお婆さんと、二十代ぐらいに見える三つ編みの大人しそうな女性がいる。

「思い切って会いにきてよかった……親不孝な娘でごめんなさい」

「親にとって一番の親不孝は、先に死なれることだよ。まあ、あんたは年取ってから出来た子やから、甘やかしすぎたとは思うとったけどねえ」

さらつと重い内容の会話をしている。こういうのを第三者である俺が聞くのは失礼だとはわかっているのだが、耳を塞ぐことすらできないので勘弁してもらおう。

あの女性は娘なのか。老夫婦は外見の印象だと六十後半といった感じなのだが、娘さんが実は三十代だとしたら、そんなにおかしい年齢差ではないな。

「あの人は、最後までしぶつとったけどねえ。本心は会いたいと思うとつたくせに、ほんまに素直じゃない人やわ」

「勘当覚悟で駆け落ちしたのだから、当たり前よね。それもお爺ちやんが嫌っていた相手と。それで、捨てられておめおめと帰って来たら……」

「それは違う。あの人はあんたらが心配なんよ。ここはなんやかんや言つても、魔物が跋扈するダンジョンの中。最近も魔物の襲撃があつたばかりやからね、守りも手薄なんよ。そんな時、あんたが一方的に会いに来ると手紙を寄越してきてもんだから、ずーっと心配しとつたんよ」

「そう、なの？」

「そうやよ。だから、あんたがここを飛び出してからずーっと止めていたギャンブルも解禁して」

そう言つてお婆さんが、俺の前で商品を選んでいるお爺さんと孫娘を眺めている。

ああ、だからお爺さんは、最近ずっとスロットを回し続けて、攻略方法を探っていたのか。来たるべき今日に備え、藁にもすがる思いで一日幸運が訪れるという噂の当たりを引く為に。

「おじいちゃん、このすうじつて、なあに？」

「ああ、それはな。ここで買い物したら回つてな、数字が三つ揃つたら当たりで、もう一個ただで貰えるんじやよ。それにな、ここで当たりがでたら一日幸せになれるという話じや」

「えっ、そうなんだ！ メイ、やってみたい！ きつとあたりでるよー」

手を挙げて、ぴよんぴよんと少女が跳ねている。お爺さんは目を細めて、眩しそうに孫娘を見つめ微笑んだ。あんなに優しい顔をしたのを初めて見たな。

「なら、やってみるか。爺ちゃんが硬貨入れたら、好きな商品押したらええ。ちなみに、爺ちゃんのおすすめは、水じゃよ」

「うん、やってみるね！」

この子が届きそうな一番下の列に、オレンジジュースを並び替えておこう。

少女は一生懸命背伸びをして、オレンジジュースのボタンに触れた。ジュースが取り出し口に落ちると同時に、スロットの数字が動き始める。

「7と7だよ！ あと一つでいいんだよね！」

「そこからが、当たらのじゃよ。そこまでならワシもいくんじやがな」

「なーな、なーな、なーな、なーな……7きたよ！ あたったあああつ」

「な、なんじゃとっ」

ファンファアーレの音が鳴り響き、温かいと冷たいを表現している赤と青の光が交互に点滅する。飛び跳ねて喜ぶ少女と呆然と立ちすくむお爺さん。

目の前の光景が信じられないのだろう。今まで散々お金を注ぎ込

んで一度しか当たったことが無いのに、孫娘が一発で引き当てたのだから。

「メイや、早く選ばんと、ただで貰える時間が過ぎてしまつぞ」

「じゃあ、これ！」

少女が選んだのはオレンジジュースの横に並んでいたミネラルウォーター。

「はい、これお爺ちゃんの！」

「ワシにくれるのか、ありがとうよ。じゃが、折角の一日幸せになるという効果が今からじゃと、直ぐに終わってしまうのう。もったいない」

「え、なんで。メイは今日、おじいちゃんとおばあちゃんにあえてずーっとしあわせだったよ！ だから、もったいなくなってるじゃないよ！」

その言葉を聞いてお爺さんが夕日に染まる雲を見上げた。俺の高さとお爺さんの顔が丸見えなのだが、その目の端には光る滴があった。

お爺さんとお婆さん、そして娘さんと孫娘。四人が並んで歩いて行く影が、長く長く地面に伸びている。その影は幸せそうに絡み合い揺れながら、消えて行った。

メイちゃんが当たりを引き当てたのは偶然かどうなのか、それを語るのには蛇足だよな。

誘拐

あ、どうも自動販売機です。只今、絶賛輸送中です。

荷猪車の荷台に載せられて揺られている最中だったりするのは、まあ、いいとしても問題は、ここが何処かって話なんだよな。

幌もない荷台の上にいるから周囲の風景が良く見える。丈の長い雑草が生えた平原には時折、三本角の生えた鹿のような生き物が顔を出している。あれは魔物ではなく動物らしい。俺には動物と魔物の差がわからないのだが、ちゃんとした定義があるっぽい。

その他に見えるモノと言えば、御者席に二人の男が座っているな。年齢は四十前後だろうか。特に印象の残らないタイプの顔だ。

で、この荷台の後を追うようにもう一台、荷猪車がついてきている。その荷台には六人のハンターっぽい格好をした一団がいる。俺を苦勞して荷台に載せていた連中だよな。

ほんつと、今更なんだけど、もう少し怪しむべきだった。

早朝にやってきて、あいつらはずらっと前に並ぶと、俺に話しかけてきたのだ。

「ハンター協会の会長からの依頼で、壁付近の修復と補強を本格的に今日から始めることになりました。ハツコンさんは暫くそこで商売をして欲しいと言われていました」

丁度その時、自分の能力とポイントの計算、次に何を仕入れるか悩んでいたところだったので、二つ返事で「いらっしやいませ」と伝えて、思考の海に深く沈んでいた。

今までは熊会長が直接伝えに来るか、ラツミスが代わりに伝えてくれるかの二択だったのだが、使いの者だけで話を通すこともある

だろつな程度の認識だった。

そして、疑いもせずに六人がかりで荷台に載せられたわけだ。こ
こでもう一つ大きな間違いを犯した。車に乗っていて窓から心地い
い日差しが射し込む状況って眠くなるよね。俺は寝なくても大丈夫
なのだが、人間時代の習慣でたまに眠りたくなるのだ。

俺は荷台の揺れと車輪が地面を転がる音を子守唄代わりに、意識
を閉じた。

で、こんな現状になっている訳ですわ。これって俺を誘拐したつ
て事だよな。狙いは中に詰まっている金貨、もしくは俺自身の価値
を見込んでのことだろう。

生命の危機は全く感じないが、一番困るのは俺が自力で動けない
ことだ。ここでどうにか、奴らから逃れられたとしても、集落まで
戻る方法が無い。この階層はかなり広いので、途中で捨てられたら
誰にも気づかないで数年を過ごすという可能性も高い。まあ、先に
ポイントが尽きるだろうけど。

取り敢えず、前に防犯の一環として取得しておいた、自動販売機
用防犯カメラで犯人たちの顔を記録しておこう。これで記録した映
像はいつでも脳内で再生できるので、顔を忘れることは無い。

二人ほど、見かけたことのある顔だな。最近頻繁に購入していた
客だが、他の人に比べてやたらと熱心に商品を見ていた記憶がある。
あとは……ん、ああ、こいつもいるのか。ザ小悪党のグゴイルが
ニヤニヤとこつちを見て笑っている。相変わらず、雑魚っぷりが半
端ない。

こいつの手筈で素行の悪い連中が組んだ、もしくは元々仲間だつ
たつてところか。だとしたら、何処かで降ろされて解体という流れ
かな。確か、グゴイルは俺の 結果 は知らない筈だ。ラツミスと
ケリオイル団長以外には見せていなかったと思う。

だとしたら 結果 は切り札として取っておくか。とはいえ、こ

のまま集落から距離が開けば開くほど、見つけてもらえる可能性が減るわけで。ど、どうしよう。ちよつと焦ってきた。

よ、よし、落ち着く為にも能力の確認をしておこう。

《自動販売機 ハツコン

耐久力	100 / 100
頑丈	10
筋力	0
素早さ	0
器用さ	0
魔力	0
PT	11346

機能 保冷 保温 全方位視界確保 お湯出し（カップ麵対応モード）
2リットル対応 棒状キャンディー販売機 塗装変化 箱型商品対応 自動販売機用防犯カメラ

加護 結界 《

自動販売機としてはかなりの高性能だと自負しているが、異世界で活躍できる能力じゃないよな。

ポイントが一万を超えて浮かれすぎていたのが、この現状を生み出した最大の要因だが、これだけポイントがあれば 結界 を長時間維持できるから、不幸中の幸いと思っておこう。修復も何度だつて対応できる。

落ち着け、落ち着け。直ぐにスクラップになるという流れにはならない。 結界 は一秒間に1ポイント消費する感じなので一分で60。一時間3600で済むじゃないか……やばいぞ、これ……。

一万ポイントもあればやりたい放題だと浮かれていた、過去の自分の電源を落としてやりたい気分だ。

そんなことを考えている間にも集落からどんどん遠ざかっていき、目が覚めてからかれこれ二時間が過ぎようとしている。

「おーい、一旦休憩するぞ」

こちらの御者席にいた男が後ろに向かって叫び、荷猪車が止まった。

後ろにつけていた荷猪車からも、そろそろと降りてきている。で、こいつら俺を取り囲んでいるが、まさか大人しく飯を出すとも思っているのか。

「じゃあ、飯にしようぜ。おい、ハッコン。てめえ意思があるなら、この状況は理解できているよな」

ザ小悪党が周りに仲間がいるからって調子に乗っているな。あの時の屈辱を思い出しているのか、へらへらと笑いながら刃物をちらつかせている。

「ただで、俺たちが食いたい物と飲み物を出しやがれ。逆らったらどうなるか、鉄の箱でもわかるよなあ」

「ざんねん」

即答してやった。ここで挑発することがどういう結果に繋がるかわかっているが言わずにはいられなかった。

予想通り、グゴイルの顔に血が一気に巡り、赤く染まっている。こいつには忍耐の文字は無いのだろうか。

「てめえ、ぶっ壊してやる!」

短剣をガラスに突き刺すが、表面に軽く傷が入った程度だ。

《1のダメージ。耐久力が1減りました》

たった1のダメージなのか、予想以上に貧弱だな。カエル人間の方がよほど痛かった。懲りずに何度も傷つけてくるが、合計で5しか減っていない。

「グゴイルやめろ。そいつは中身も目当てだが、それ自体にも商品価値があるのは説明しただろうが。意味もなく傷つけるな」

「は、はい。すみやせん……けつ、命拾いしたな」

理想的な捨て台詞だ。止めた奴は周囲と比べて一回り体が大きいな。あの両替商の女性と一緒にいたゴツガイと呼ばれていた人に体格だけは似ている。

額に大きな刃物傷があるのが人相の悪さを増幅しているな。眉毛と髪の毛が無いのは剃っているのか生まれつきなのか。立派な口ひげが無ければ、門番のカリオスに結構似ているかもしれない。

「お前さんも、壊されたくないんだろ。だったら、ここは従った方が利口だと思うぜ」

この大男は、グゴイルよりかは理性的なようだ。確かにここで齒向かってても良いことは何もない。ここは従う振りをして、状況を見極めるのが正解だろう。

「あたま ざんねん」

何てな。俺を誘拐するような輩の言い分を聞かないといけない。

ここでラツミスがいたら絶対に断っている。彼女と一緒にこれからも居たいのであれば、自分に恥じるような生き方をするつもりはない。

「てめえは立場がわかってねえみたいだな。おい、グゴイル。こいつは破損個所を自分で直せるって話だったな」

「へい、そうです。討伐隊に参加した時も結構凹んでいた筈なのに、綺麗さっぱり元に戻っていやした」

「そうか、ならてめえら、壊さない程度に体にわからせてやれ」

これって痛覚があればそれなりに恐怖を覚えるシチュエーションなのだが、自動販売機に脅しをかけて取り囲む屈強な男たちって…高度なギャグか。

こちらのこともわかってないのに、無暗に傷つけて言うことを聞かせようという安易な発想。鉄の箱相手に馬鹿なことをしていると…いう自覚は無いのだろうな。

「謝るなら今の内だぜ。親分の許しが出たからには、容赦はしねえからな覚悟しやがれ」

親分か。あれがトップでこいつらは全員子分なのか。とまあ、情報を得て冷静に現状を理解したところで、伝える術がない。

《3のダメージ。耐久力が3減りました》

《2のダメージ。耐久力が2減りました》

本当に容赦なく手にした武器で殴ってくるな。このままやられっ

ばなしだと、いずれ破壊されてしまう。だが 結界 はギリギリまで隠しておきたい。ここで修復したら、調子に乗って攻撃が増すだろう。どうすればいいのか、壊れる寸前まで放置して相手を焦らせるとというのが正解だとは思うが……それは、こちらの腹の虫が治まらない。

加護にはポイントが足りない。機能にも目ぼしい物が無い。他に俺は何かできないのだろうか。耐久力は減り続け、反撃の手段は無い。もう少し頑丈があったら、無傷で済んだかもしれないのに。

《1000ポイントを消費して頑丈を10増やしますか》

えっ、頑丈の項目を見ていたら文字が浮かび上がってきた。え、ステータスもポイントで強化できるのか!?

1000ポイントはかなり痛いが頑丈を上げたら、今受けているダメージが軽減できる。やる価値はあるよな。なら、上げてみるか。

《頑丈が20になりました》

実感はわかないがきつと硬くなったのだろう。それが本当かどうかはこれから嫌でもわかる。

《0のダメージ。耐久力が0減りました》

よっし、ダメージが無くなった。これで、耐久力はこのまま減った状態にして置けば、損傷を残したままになるので、奴らは効果があると勘違いしてくれるだろう。

相手が疲れ切るまで見物といくか。

誘拐犯

肩で息をしながら殴り続けている奴らをよそに、ステータスの確認をしている。

頑丈が上げられたのなら、他の能力も上げることが可能なのだろうか。まずは、耐久力だ。

《1000ポイントを消費して耐久力を10増やしますか》

耐久力は上げられるのか。でも、消費ポイントの割には上昇率が低いよな。100ぐらい耐久力が増えるなら迷わず上げるのだけど。他はどうなのだろう。

《10000ポイントを消費して筋力を10増やしますか》

《100000ポイントを消費して素早さを10増やしますか》

《100000ポイントを消費して器用さを10増やしますか》

一桁多いだと……。筋力、素早さ、器用さは自動販売機に必要なステータスではないから、上げる予定もないけど無駄に高いな。

もしも、筋力や素早さを上げたら、自動販売機を揺らしながら歩いたりできるのだろうか。可能であればかなり面白いことになりそうだが。

魔力はどうやっても上がらないのか。魔法自動販売機爆誕とはいかないようだ。残念。

「おまえら、それぐらいにしておけ」

「へいつ」

あ、終わったんだ。耐久力が30ぐらい減ってから頑丈を上げたので、結構酷い見た目になっていそうだな。

「おい、こいつ修復していないぞ」

「そ、そんなわけが。確かに前は直ったんです。この目でしかと見ました！ お、おい、てめえ。さっさと傷を直しやがれ！」

断る。俺はこのまま故障した振りを続けさせてもらおう。こいつらに飲み物を提供する気は微塵も起らな……あ、いや、気が変わった、飲み物を提供してやろう。

「グゴイル。これが壊れたら、わかっているだろうな」

「へ、へいっ！ お、おい、箱野郎、さっさと傷を直しやがれ！ どうせ、動けない振りをしているだけだろ！」

焦ってる焦ってる。まあ、傷は放置するが飲み物はやるから安心してくれ。

「お、親分！ 商品が落ちてきやした！ ほ、ほら、壊れてはいませんぜ！」

人数分、飲料を落としてやったら喜んで拾っている。俺の優しさに感謝するんだぞ。

「まあ、いいだろう。取り敢えず、一本どれでもいいからよこせ」

全員に飲料が配られたな。ほぼ同時にキャップを開け、俺に暴行

を加えて汗をかいていた奴らは一気にそれを飲み込んだ。

「ぶっぶっぶっぶっぶ」

「げはっ、ごほっ、な、なんだ!？」

「くっそまじいぞこれ!」

俺の厳選したワースト10に選ばれしジュースの味はどうだ。自動販売機に新製品が並ぶと迷わず購入してきた俺は、大当たりを引くこともあれば、もちろん外れを引くこともある。

担当者は味覚音痴じゃないのかと思わせる、信じられないくらい不味い飲料というのは結構あったりする。軽いところでは、マヨネーズをかけて食べたなら美味しい野菜に炭酸を混ぜ合わせたものや、日本料理で使われる香りの強い薬味に炭酸を……これって両方とも同じメーカーから出ているんだよな。

他にも常軌を逸した組み合わせが結構存在していて、飲料メーカー業界の奥深さを見せつけてくれる。

「こいつ、本当に壊れたんじゃないか？」

「まあいい。アジトに戻ってから、どうするか決めるぞ。万が一壊れていた時は、グゴイル。無事で済むと思うなよ」

「は、はひ」

親分に凄まれて顔面蒼白で今にも倒れそうだな。同情する気は全くないのでどうでもいいのだが。元々、こいつが吹き込んだせいでこうなっているのだろうから。

これ以上やると本当に壊れかねないと思ったのか、あれからはや

けに丁寧に接してくれている。一段落ついたのはいいのだが、結局事態は何も好転していない。

アジトに着いたとして、そこからどうすればいいのか。これといった策が全く思いつかない。臨機応変にいくしかないか。本当にやばくなったら結界で抵抗しよう。

あれからは揉め事も商品を購入されることもなく、二時間程度で目的地にたどり着いた。

森の中の獣道を少しマシにした程度の砂利道を進むと、自然豊かなこの場所に不自然な建造物があった。それは壁には大穴が空き、至る所が朽ち果て崩壊寸前の砦。ハンター協会と比べるとかなり小さな規模だが、元々はしつかりとした砦だったのだろう。

放置されてからかなりの月日が流れているのか、藁がそこら中に絡みつき廃墟探險したら楽しそうな所だ。

「お前らそいつを中に運べ。そのまま、あれに調べさせろ」

「わかりやしたが、あれが言うことを聞いてくれるとは思えません
が」

「その時は、お前の首が胴体から離れるだけだ」

「ひい、わ、わかりやした！」

ザ小悪党は、ザ下っ端に格下げしておこう。しかし、あれって誰のことなのだろうか。あいつらの仲間というには信頼関係が無いよ
うだが。

自動販売機である俺は寝かされ、六人がかりで運ばれて行きながらそんなことを思っていた。六人がかりで何とか運べる重量の俺を軽々と運ぶラツミスって、やっぱり規格外だよな。

強く衝撃を与えたら蝶番が外れそうな両開きの扉を潜り、ボロボロの砦の中に侵入すると、中は思ったよりも小奇麗だった。ホールらしき場所には手作り感満載の長机と椅子が数セット置いてある。

壁際の大きなソファは古ぼけているが質は良さそうだ。床はこまめに掃除しているのか、埃が積もっていないこともない。凶悪な蛸みたいな面をしているくせに綺麗好きなのだろうか。

そのままホールを抜け階段を上るのかと思えば、右隅の方にある鉄製の扉に向かっていているようだ。軋みながら扉が開くと、その先は薄暗く下りの階段があった。

おみこし気分で階段を下り、更に奥へ進むとそこには金属鎧を着込んだ二人の見張りらしき男がいて、門の刺さった扉を守っているようだ。まるで凶悪な囚人でも捕らえていそうな警備状況だな。

「あれは大人しくしているのか」

「魔道具を与えたら、急に大人しくなって何やらガチャガチャやってるぞ」

「良くわからん女だ。まあ、これも与えて置けば暴れる様なこともないだろうよ」

悪党どもの会話に耳を傾けているが、ますます、この先にいる人物像がわからなくなってきた。

門を引き抜き、扉を開く際も見張りが手にした槍を構え警戒をしている。中にいるのは魔道具好きの野獣か何かなのだろうか。

「おい、お前の好きそうなおもちやを持ってきてやったぞ。これを解析して壊れているようなら元に戻せ」

「ああんつ。てめえ、誰に生意気な口を訊いてやがる。糞にも劣るためえらが人様に命令してんじゃねえよっ！」

どすの利いた声が部屋に充満する。ザ下っ端はその一言で意気消沈したようで、文句の一つも言い返さずに、目を逸らしながら俺を部屋の隅に置いた。

「こ、これがそいつの資料だ。良く目を通しておけよ」

「はっ、人と話す時は目を見て話せてママに習わなかったのか？それとも、びびってんのか、こんなか弱い女の子によおおおう」

迫力のあるヤンキー口調の女性をまじまじと見つめてしまう。その人は女性にしてはかなりの高身長で俺と同じか、ほんの少し劣るぐらいだ。

ミルクティーのような色合いの長い髪を後ろで束ねているが、それは邪魔だからまとめただけのように、毛が何本も飛び跳ねている。切れ長の目が細められ、訝し気に俺を睨んでいるな。薄いピンクの唇が「ちっ」と舌打ちをして、今にも唾を床に吐き捨てそうだ。

元々は白だったのかも知れないが、今は茶色と黒がまだらに配色された全身に張りつくような服を着込んでいる。その上から黒のコートを羽織っているのかと思ったのだが、よく見るとあれって白衣を黒く染めているのか。前を開け放ち、体に張りつくような服を着ているせいで体形がもろにわかってしまう。

胸元は思わず二度見してしまう程、何も無い。膨らみが殆どない。あれだな、高身長に険しい顔に貧乳。ラッミスと正反対だ。

「あーんっ！ あいつらこれを置いて逃げやがった。逃げ足だけは一丁前な奴らだ。でこれは何なんだ。資料とか何とか言っただが」

地面に置かれた紙の束を面倒そうに拾うと、目を通して見る。この口の悪い女性はあまり関わらない方が良さそうに思える。このまま、無害な鉄の塊の振りをしていただけの方がいいような気がしてならない。

「おう、あんた意思のある魔道具ってのは本当かい？」

資料にそんなことが記載されているのか。ここでとぼけても無駄っぽい。口は悪いが、あいつらとは仲が悪いようだから、敵の敵は味方って言うし。んー、反応に迷うな。

「あー、もしかして、アイツらの仲間と思われて警戒されているのか。オレはアイツらに拉致されて、ここに閉じ込められている被害者だ。こう見えてもオレはそれなりに有名な魔道技師でな。お前さんを調べる為に連れてこられたみたいだぜ」

その話が本当なら、彼女は俺のせいでこんな境遇に陥っているってことになる。このまま、ただの自動販売機の振りをするのは、あまりにも卑怯だな。

「いらっしやませ」

「おつ、マジで話せるのか！ うおおおつ、言葉を理解して口にする魔道具だなんて、初めてお目にかかるぜ。捕まるのも悪いことばかりじゃねえな」

細目が大きく見開かれ、さっきまでの気だるそうな態度は霧散し、鼻息荒く俺に近づいて隅から隅まで観察している。

「幾つか質問しても構わねえか？」

「いらっしやいませ」

「それは、はいつて意味だと資料に書いていたな。じゃあ、質問……と、すまねえ。まずは名乗っとくのが礼儀か。オレの名前はヒュールミってんだ」

えっ、その名前聞き覚えがあるぞ。まさか、こんなところでラッミスよりも早く会うことになるとは。ラッミスが俺に会せようとしていた、友人の魔道具技師ヒュールミが彼女なのか。

魔道具技師ビュールミ(前書き)

夕方にもう一話上げます

魔道具技師ヒュール

「ざつと資料に目を通させてもらったが、いらつしゃいませ、と、ざんねんで意思の疎通が可能なのは本当か」

「いらつしゃいませ」

「なるほど。人と同じ知能を成立させた魔道具というのは、今まで聞いたことが無い。だが、人語を理解し話す武器と言つのは実は珍しくないってのは知っているか」

「ざんねん」

こうやって説明をしている時は、知的な感じがして口調も少し柔らかくなるのか。

「書物にも結構残っているんだぜ、そういうの。知恵ある武器って呼ばれた事もあったそうだ。だが、そういった武器は使用者か特定の人物にしか声が聞こえず、周囲からは妄想で戯言を話していると理解されていたようだな。それに知恵ある武器は製作者が不明で、そういった事情も信憑性を無くした要因の一つだ」

そついやゲームや小説でそういう設定の武器を何度か見た経験がある。この異世界でも同じような武器があったということか。

「オレも魔道具技師の端くれだからな。魔道具に知能を持たせられないかと、何度も実験を試みたが……結論としては今の技術力では不可能という答えにたどり着いた。そこでオレは発想を変えてみ

た。人が生み出した人工生命体ではなく、そういった物は人の魂が宿ったのではないか、ってな」

なんと、単独でその答えを導き出したのかこの人は。彼女なら俺の正体にも気づいてくれるのではないか。そんな期待を秘めたまま会話に集中する。

「魂を封印するというのは昔から魔法や加護を使用して行われてきた。基本的には死者の魂を一時的に身体に降ろす場合や、死体を操る邪法で何者かの魂を一時的に降ろし死者を操るとかな。んっ、ああっ、すまんちょっと水を……」

安っぽく錆びた水入れからコップに注ごうとしている。そんなことしないで、俺がおごるよ。何がいいかな、髪色と同じ温かいミルクティーにするか。ここは地下で少し肌寒いし、温かい物がいいだろう。

「ん、何か音が。ってこれはお前さんの商品の一つか。もらってもいいのか」

「いらっしゃいませ」

「そうか、すまん。遠慮なくもらっぞ……ん、くはああ、疲れ切った頭に糖分が嬉しいぜ。それにこの丁度いい温かさ。やるな、あんた」

お、表情が緩むとイメージがガラッと変わる。無邪気で純粋な少女のような笑顔だ。

「人心地つけたぜ、ありがとう。でだ、お前さんは名前ハッコンっ

て書いてあるが、間違いないか」

「いらつしゃいませ」

「じゃあハツコン。もしかして、人間の魂がこの魔道具に宿った存在なのか？」

その質問が投げかけられる日が来るとは。まともに話せない状態でラツミスという、心を通わせる存在が現れただけでも幸運だと思っていたのに、俺の現状に気づいてくれる人まで。

「いらつしゃいませ」

気持ちハツキリと音量大きめで返事をする。

「やはりそうか！ オレの考察力も捨てたもんじゃねえな！ おー、そうかそうか。よろしくな、ハツコン」

「ありがとうございました」

本当に嬉しい。この事に気付いてくれた人がラツミスの友人であるというのは妙な縁だが、親しくしている人は基本みんな良い人ばかりだからな。偶然かとも思っていたが、彼女の魅力が引き寄せた結果なら、これは必然なのかもしれない。

「俺が今から資料の情報を参考に推測を口に出すから、間違っていたらガンガン突っ込んでくれよな。ハツコンは主が存在する魔道具である」

「ざんねん」

自動販売機のオーナーは存在しないよな。強いて言うなら神様かもしれないが。

「おっ、いねえのか。じゃあ、人だった頃の記憶はあるのか？」

「いらっしやいませ」

「そうなのか。へえ、なるほどな。で、一番の疑問なんだが。商品を補充しているわけでもないのに、中身が尽きることが無い。おそらく空間魔法や能力の一種で、別空間に保管庫が存在して、そこから引っ張り出していると考えているが、どうだ」

ある意味正しいが、正解でもないよな。俺自身、仕組みを全く理解していないし。

「いらっしやいませ さんねん」

「完全に間違いではないってことか。となると、商品の金額に絡んできているのか。主がいなければ、魔道具であるあんたが金を集めたところで使い道が無い。商品を売るといつ目的だけなら、値段をもっと下げてもいい筈だ。なのに、少し割高にも思える価格設定。つまり、金がハッコンにとって重要な役割を担っている」

「いらっしやいませ いらっしやいませ」

ヒュールミ凄いな。ラツミスは性格の良さと勘で言い当てる感じだったが、彼女は少ない情報から正しい答えを導き出している。

「大正解ってところか。方法はわからないが手に入れた金銭を利用

して、商品を購入している、どうよ」

「いらっしやいませ」

「ってことは、商品の購入に結構な金が必要となるのか」

「ざんねん」

商品購入だけなら売値は10分の1でも元は取れるのだが、他の機能や加護、そして生命維持にもポイントは必須だからな。

「違うのか。じゃあ、こんなに高く設定してお金を得る必要性はないよな……他に金の使い道があるということか」

「いらっしやいませ」

これは実際に見せた方が早そうだな。一番わかり易いフォルムチエンジである、あのキャンディー販売モードに機体を変更した。

「おおおおっ、なんだ！ 光が……おいおい、またガラッと変わリやがったな」

円柱型のキャンディー販売モードになると、ヒュールミがペタペタと体を触ってくる。これ触感があれば変な気分になりそうだ。

「この透明な部分はガラスのようでそうではないのか、興味深いぜ。ここに硬貨をいれると中身が取り出せるようになっていたのか。商品そのものが見えることにより、購買意欲を高める効果がある……スゲエな！」

的確なコメントだ。他の異世界人とは見る目が全然違う。

「っとすまん。興奮しすぎて、話が脱線しちゃったぜ。つまり、パソコンは貯め込んだ金を使ってこんな感じで体型の変化が可能になる……いや、機能そのものを変化させられるってことか」

「いらっしゃいませ」

正解を引き当ててくれたので、キャンディーを一つ落としておいた。後で食べてくれ。

「お、ありがたく、もらっておくぜ」

拾ったのを確認してから、いつもの自動販売機に戻しておく。キャンディー販売モードも嫌いじゃないのだが、少し落ち着かないのだ。

「あと、知っておきたいことは……あれだ、お前さん体の変化と商品の変更以外で、何か他にも出来ることはあるのか？」

「いらっしゃいませ」

加護の 結界 があるからな。ラツミスの友人である彼女になら教えても大丈夫だろう。

「へえー、まだ秘密があるってのか。それをオレに見せてもらうことは可能か？」

「いらっしゃいませ」

「そりゃ楽しみだ。じゃあ、見せてくれよ」

それは構わないのだが、ちょっと近すぎるな。ここで結界を使用したら彼女を吹き飛ばしてしまう。少し離れてもらうにはどうしたらいい。離れてくれー離れてくれー、取りあえず念を飛ばしてみた。

「ん？ 見せてくれないのか。あ、すまん、もしかして危険なのか。少し離れて……どうだこれで」

「いらっしやいませ」

これって俺の思いが通じた訳じゃなく、ヒュールミの察しが良いだけだな。

充分に距離を取ってくれたから、大丈夫か。近くに小さな机があるけど物は載ってないから、吹き飛ばしても問題ないか。

では 結界

青い光が俺の周りに発生する。自分から1メートル離れた場所に蒼い半透明の壁が現れ、取り囲んでいる。

「おつ、何だこれ。近くにあった机が押し出されるようにして吹き飛んだ。つまり、障壁のようなものか。これ触っても大丈夫か？」

「いらっしやいませ」

基本的には物凄く固い壁なだけだから、触る分には何の問題もない。

物怖じすることなく指で突き、手の平を当てて触感を確かめ、カップに水を注ぎ指で滴を飛ばしては、結界に弾かれるさまを興味深く観察している。

「頑丈な壁のような手触りだな。強度もなかなかありそうだ」

壁をペタペタ触っている姿を見ていたら、悪戯心が芽生えてしまった。ちよつと、驚かせてみるか。

結界の中にヒュールミが入ることを許可する。

「どの程度の衝撃まで耐えられるか、試し　ふへえ？　きゃああ　っ！」

両手で押している最中だったので、彼女の手が勢いよく結界を通り抜け、俺の体に触れる。勢い余って俺の体に身を預けるような形になってしまった。

俺が生身の人間ならラッキーなことなのかもしれないが、自動販売機の胸に飛び込む女性の姿って客観的に見たら、ただのおかしな人だよな……。

「ど、どういうことだ。体が青い壁の中に入った。これを解除したわけじゃなく、オレだけ入ることを許可されたのか。出入りを自在に選べる強固な壁。何処かで聞いたことあるぞ……あー何処だったか、確か、あれは帝国で……おつ、そうだ！　結界、結界だ！　加護の一つにこれと似た希少な能力が存在した筈だ！」

「いらつしゃいませ」

しかし、驚くほど物知りだなヒュールミは。ラツミスが会わせてがっていた理由が良くわかるよ。

「ハツコンはすげえな。多種多様な商品を取り扱い、身体や機能の変更も可能。そして、加護まで扱えるなんて、魔道具の範疇を超越しているぞ」

褒めてもらって嬉しいが、これは俺の実力でもなんでもない。ただ優秀な自動販売機の体を貰っただけだ。本当に誇つていいのは彼女の知識量だろう。それは自分の力で得た物なのだから。

それから、俺はありとあらゆる質問に答え、彼女が満足する夜中まで続けられた。

知的好奇心が満たされ、満足げな彼女の手には栄養ドリンクが握られている。興奮しすぎて倒れそうだったので、その対策として商品の追加をしておいた。

それも、かなり値が張る商品なので効果はてきめんで、飲んだ途端に凄く元気になっていた。本当に高い栄養ドリンクは即効性で効き目が表れる。栄養価が高いので風邪を引いたときに良くお世話になっていたな。

それでも、彼女はそろそろ限界っぽいので眠ることにしたようで、俺から少し離れた場所の長机の上で仰向けに寝そべり、ぼろ布を被ると、あっという間に眠りに落ちた。何と男らしい。

荒くれ者の犯罪者集団の中でこんな無防備な姿を晒したら危険だよな。豪快というか、何と云うか。今日は寝ずの番をしておかないと。

欲望を満たす方法（前書き）

前話が説明回でしたので、本日二話目の更新です。

欲望を満たす方法

高いびきを立てて熟睡している彼女をぼーっと眺めながら、これからのことを考えている。

ヒュールミは味方だと思って間違いはない。彼女は一応、俺の謎を解き明かすまでは命の保証はされているようなので、殺される心配はないようだ。

ラツミスと話だと放浪癖がある人なので、行方不明になっても心配されるどころか、気づかれていない可能性が高い。彼女の捜索に誰かが来るといふ期待は避けた方がよい。

となると俺がいなくなったことに気づいているだろうから、熊会長が捜索隊を出してくれていることを祈るしかない。ラツミスが心配をし過ぎて、無茶してないといいのだけど。

集落の復興にはラツミスもそうだが、俺も結構貢献していると思う。俺がいなくなれば集落の損失に繋がりが、復興作業が遅れる……と都合のいい解釈をしてくれないだろうか。

そんなことを考えていると、深夜の静寂に包まれた部屋に、カチヤリと小さな音が流れた。音のした方向に視線を向けると、ドアノブが回って扉が徐々に開いていく。やはり、きやがったか。

「おい、まじでやるのか」

「お前らだって溜まってるんだろつが、嫌なら帰っていいんだぜ」

「い、いや、でもなあ、あれ寸胴でひよる長いだけで薄汚れてやがるし、色気もへったくれもねえぞ」

「穴がありゃ構わねえよ」

「親分から手を出さなって命令はどうすんだ」

「んなもん、刃物をちらつかせて、脅しておけば黙る」

小声で下種な会話をしているな。人数は三人か。ザ下っ端のグゴイルは参加していない。今日散々、親分から脅されていたから自重したとかいうオチだろう。

最大音量で「いらっしやいませ」と叫んで騒ぎを起こすのもありだが、地下室は防音性が高いのが定番なので正直効き目があるか疑わしい。ここって牢屋を改良した感じがするし。

それに驚かせたことで、混乱した奴らにヒュールミが傷つけられる恐れがある。俺を黙らす為に死に物狂いで壊しにかかる可能性だつてある。

だとしたら、どうしたらいい。あいつらはじりじりと彼女に近づき値踏みしているのか、全身を舐め回すように視線を這わしている。時間が無い。あれを試してみるか。

「お、おい、ちょっと待て。あの魔道具の箱が光っているぞ」

彼女の肌に触れる直前、仲間の一人が慌てて仲間の背を叩きこつちを凝視している。

「え、な、なんだ。商品が入れ替わって……いや、形も変化しているぞ」

「こ、こいつは、すっげえぞ！ 精密な女の裸が描いてあるっ。こ

「うちは色っぽい下着姿で誘惑してやがるぜ。なんちゅうエロい身体つきしてやがる」

三人とも俺の体に張りつき、ガラス越しの雑誌を凝視している俗に言うエロ本に。

最近ではネットの普及により見かけることも減った、エロ本を置いている自動販売機だが、それでも今なおひっそりと生息しているのを俺は知っている。

「さあ、ここからが本番だ。取り出し口に六冊、俺が特選したエロ本を落とす。」

「おい、商品が落ちてきたぞっ」

「マジか、ちょっと見せてくれ」

「俺も俺もっ」

くはははは、喰らいついておるわ。日本のエロに対する気合の入り具合は尋常ではない。特に自動販売機で売られている、その類いの本は中を確かめることができないので、表紙でどうやって客を釣るか、そこが重要なのだ。

ポーズやアングルも計算され尽くされている。性風俗が発達していない異世界人がそんなエロ本を見たらどうなるか。

そして、渡した本は俺が今まで買ってきた中でも選別され、自信を持ってお届けできる内容の雑誌だ。この類いは中身が酷い作品も多いので何度騙されてきたことかっ。

「あ、いや。俺は自動販売機マニアだから、そういうものに興味があったわけじゃなく、あくまでコレクションの一環として購入しただけなのだ。決して、夜中に家を抜け出し、周辺に人がいないの

を確認してから買ったわけじゃない。

最近はずっとネットがあるので、人々は苦もせずに性欲を満たすことが可能となった。自分だって利用しているのでとやかく言う権利は無いのかもしれないが、あえて言わせてもらいたい。

苦労して得たエロは、クリッカー一つで手に入れた物とは価値が違う！ 例え、中身が表紙と全く違うチープな物だとしても、何度も期待を裏切られたとしても、それは確かな思い出となり、その身に宿るのだと！

……これこそ、以前、性風俗を取り仕切っているシャーリイさんに相談されて、対策の一つとして俺が考えていた手の一つだ。まあ、結局はこのモードにならなかったのだが。何と云うか、自分の性癖を集落中に広めるようなものだからな。

「うお、この精密な絵はどうなってんだ。これスゲーな、たまんねえぞ」

「な、なんだ、この爆乳。え、こんなやりかたが」

「マジか、マジか、マジか」

性に目覚めたばかりの中学生も若干引くレベルの喰い付きだ。完全にヒョールの存在を忘れて読みふけている。

ここまでは想定通りだ。問題はここからか。

「お、俺は襲うのやめるぜ。ちょっと用事を思い出した」

「き、奇遇だな。俺も腹がいてえからやめとくわ」

「じゃ、じゃあ、帰るか」

全員が何故か前屈みになって、両手に一冊ずつ雑誌を握りしめたまま部屋から出て行った。興奮して彼女に襲い掛かることも考慮していたのだが、性的好奇心が勝ったようだ。

危険を冒して彼女を襲うよりも、これで欲求を満たした方がいいと判断したのだろう。見たこともない妖艶な女性の欲望を誘発する格好や、絡み合う写真はそれだけ衝撃的だったようだ。

雑誌の被写体の人って異様にスタイルが良くて顔も美人だからな。最近の画像加工技術は凄いなとか興奮めする意見を口にはしていない。

こういうのはどういった方法でも発散さえしてしまえば、凶暴さは鳴りを潜める。

悪い方向に事が進んで、彼女が襲われることになったら、騒音と結界でどうにかするつもりではいたが、上手く行って良かったよ。

扉が閉まり、奴らが姿を消す。ヒュールミは自分が襲われそうになったことも知らずに、爆睡中だ。これで暫くあいつらが大人しくしてくれるなら、無駄な争いをしないで済むのだが。

自力で逃げ出すことができない俺は出来ることが余りに少なすぎる。彼女が俺を担いで運ぶのはどう考えても無理だろう。ラツミスでなければ単独で運ぶのは不可能。

いなくなつて初めてわかる、彼女の大切さ。ってこれじゃあ、別れたばかりの恋人のようだな。

結局俺に出来ることは時間稼ぎと邪魔ぐらいか。加護を得るにはポイントが全然足りていない。となると機能に託すしかない訳だが、もう一度目を通しておくか。

残ったポイントと照らし合わせて、何を得るべきかそれを考えている内に結構な時間が過ぎていたようで、ヒュールミが目覚ました。

「ふああああああ。はあ、良く寝たぜ。うーっす、ハッコン」

ぼさぼさの頭を無造作に掻き毟りながら、俺に向かって片手を拳げている。寝起きで着衣が乱れているのだが、色っぽいというよりだらしないが圧勝している。

体を仰け反らせて関節を伸ばしているのだが、反っているのに胸のふくらみが皆無だ。実は男性というオチはないだろうな。言動だけなら完璧に男なのだ。

「んじゃ、今日は何すつか。お前さんの機能も調べたいところだが」

話している最中に大きな腹の音が鳴り、ヒュールミが頬を指で掻いている。

「わりい。食事に変な物でも入れられてないか警戒して、少量しか口にしてなかったからな。無茶苦茶腹減ってた」

そうなのか。なら、俺からご馳走しよう。さっきから手足を擦っているってことは、かなり冷え込んでいるのか。ならカップ麺と言いたいところだが、そんなにお腹空いているなら直ぐに食べられるおでんを先にしよう。

おでん缶をまず落とす、それを受け取ったので、今度はカップ麺を提供した。

「これは温けえな。完全に密封された容器なのか……ここを曲げて引く張ると、うおおおっ、これはたまんねえ。うまそうな匂いだけ」

がつがつと豪快な食べっぷりで一気におでんを食べきり、汁も飲

み干すと今度はカップ麺に取り掛かるようだ。お湯の使い方に戸惑っていたが、何とかお湯を注ぐと机の上で胡坐をかいて、鼻歌交じりに出来上がるのを待っている。

何度か蓋を開けては、麺を突いては状態を確かめ、また閉じるを繰り返している姿は子供のようだ。カップ麺もあっさりと平らげ、まだ物足りなさそうにしていたので、新商品の缶に入ったパンを試食してもらうことにした。

「缶の中にふわふわのこれは……パンかっ！　こんなもんまであったら、食堂ぶっ潰れるぞ。これもマジでうめえな、ふっかふかじゃねえか」

お世辞にも上品な食べ方とは言えないが、あれだけ美味しそうに食べてくれたら、見ているこっちが嬉しくなる。

彼女の腹が満たされたようで、膨らんだ腹を擦りながら、カップ麺についていたフォークを爪楊枝代わりにして寛いでいた。

その時だ、ガチャリと扉が開き、厳つい顔の親分と呼ばれていた男が顔を出した。

「起きているようだな。その箱について何かわかったか」

「ああんっ、何でてめえの指図を受けねえといけねえんだよっ！」

誘拐された状況で、強面の大男にガン飛ばすヒールミの神経はどうなっているのだろうか。怯えなど微塵も見せていない。心臓が鋼鉄でできていても不思議じゃない。

「いい根性してやがるな。この団に入るなら好待遇で迎え入れてやるぜ」

「生憎、悪党に従う気も、養ってもらおう気もねえよ」

「おいおい、強がりも程々にしろよ。お前さんの仲間と同じ目にあいたいのか」

「けっ、あいつらは仲間じゃねえよ。護衛で雇っただけの関係だからな」

護衛を雇っていたのか。まあ、当たり前だな。どう見ても体を鍛えていなさそうな彼女が、一人で魔物がうろつく階層を探索しているわけがない。

「だがな、金で雇った奴らとはいえ、殺したてめえらを許す気はねえぜっ！」

「はっ、非力な女一人で何が出来ろ。俺は辛抱強い方じゃねえ。そうだな、あと二日以内に、この箱を修理するか、中から金貨を取り出せ。いいな」

親分がそれだけを伝えると、ここから立ち去った。

ヒュールミは首を親指で掻っ切る動作をしてから、舌を出している。

猶予は二日か。それまでに打開策を講じるか、何かしらの進展がなければ彼女は殺されるか、死ぬよりも辛い目にあわされるだろう。何とかしないと。

居場所

これといった打開策が思いつかないまま、ここに来てから二日目の夜を迎えた。あいつらは俺が壊れていると思っっているらしく、一度も商品を購入しようとしていない。

エロ本を与えた三名は、あれから一度だけやってきて、チラチラと俺を横目で気にしていたようだが。三人組は俺が変身したことも、ただで雑誌を手に入れたことも周囲に話してないようだ。たぶん、他の奴らに話したら自分たちがヒュールミを襲おうとしたのが広まって、親分の耳に届くのを嫌ってのことだろう。

もしくは、あの雑誌を没収されることを恐れたのかもしれないな。

ヒュールミは俺と会話をしながらマイペースで分析をしている。

これは親分に伝える為ではなく、純粋に学術的興味からやっているだけのようだ。

あいつらは一応、朝晩と飯の差し入れはしているのだが、彼女はその全てを部屋の隅に置いてある樽の中に放り込んで蓋をしていた。食事は全て俺が提供した物で賄っているので、あんな不味そうなものを食べる必要はない。

ちなみに今日の晩御飯はカップ麺二種類と成型ポテトチップスだった。新たに新商品を仕入れようかとも思ったのだが、この現状でポイントは貴重だ。万が一に備えて、少しでも残しておくべきだと判断した。

「くはあああ。今日もゴチでした。いやあ、お前さんの料理はスゲエな。研究ばっかやってきたオレじゃ、足元にも及ばないぜ」

俺が凄いんじゃないかって、メーカーさんの実力なだけだね。

二日間、腹いっぱい食事をしているおかげなのか、肌艶が良くなくなってきたな。頬も心なしか肉がついてきた気がする。それでも痩せ形なのだが、当初よりも魅力的に見えるな。

ぼさぼさだった髪も今は指通りの滑らかな、理想的な髪に変貌しているし。これは俺が本来冷たいペットボトルの水を温めて提供して、更にホテルやスパ―銭湯に置いてある自販機のシャンプーやトリートメントを使った成果だ。もちろん、タオルも渡してある。

「ふう、さっぱりしたぜ」

自動販売機である俺のことは全く意識せずに、上半身を晒し、頭を洗って体を拭いたヒュールミが満足げに瓶に入ったコーヒー牛乳を飲み干している。

風呂上りはコーヒー牛乳。これを譲る気はない。改めて黒衣を脱いでいる彼女の姿を観察してみるが、上半身は残念だが下半身は女性的魅力に溢れていた。安産型か……深い意味は無いけど。

普通の男性なら興奮する場面なのだろうが、自動販売機になってから、そういった感情が薄れている気がする。発散の仕方がないの都合はいい。

ヒュールミは余裕な振りをしているが、タイムリミットは明日の朝。逃げ出すなら今日の夜が最後のチャンスだろう。俺があいつらの注意を引きつけて、その隙に彼女を逃がす。これが最良の策だとは思っているが、それを伝える術がない。

何だろうこの自動的コミュ障は。こうなったら籠城戦もありな気がするな……俺をどうにか扉の前まで運ぶことが出来たら、扉を開けるのがかなり困難になる筈だ。食料は俺が出せるし、一週間ぐらいなら余裕で耐えられる。

そうになると、どうやって彼女が俺を扉まで運ぶかという難題が、立ち塞がってくるんだよな。

「まあ、なるようにしかならねえか。ハッコンはあんま気にすんなよ！ あんたの価値をあいつらに説明して、時間をかけたら直せると説得すれば、バカだから騙されるって！」

体を拭き終わりさっぱりとした彼女は今まで着ていた服を脱ぎ、俺が用意しておいた下着と男性サイズのＴシャツを着込んでいる。

ああ、下着の上からだばだばのＴシャツ。日本で一度は叶えたかったシチュエーションをまさか異世界で経験できるとは。転生してみるもんだな。

この下着とＴシャツはもちろん自動販売機で購入した物だ。あ、女性用の下着は間違えて購入した物だということを強調しておきたい。強調しておきたい。

「このままじゃ流石に寒いな、これ着ておくか」

さっぱりしたところに、あの着古した黒衣を羽織るのか。下着やシャツの自動販売機は購入経験があるのだが、生憎パジャマは見たことが無い。たぶん、探せばあると思うが俺もマニアとして未熟だったということだ。

毛布や布団の自動販売機は見たことが無いし、あつたとしても衝動買いをするには大きすぎる。となると、バスタオルを多めに輸出しておく。これはスーパージェットやホテルで良く見かけるグッズだ。

「こんなに真っ白で綺麗なのは使うの気が引けるな」

遠慮なく使って欲しい。そのままじゃ風邪ひくよ。これから何が起こるかわからない。最後まで諦めずに万全の態勢を整えておかないとな。

「ハツコン、ちと真面目な話をしても構わねえか？」

「いらつしゃいませ」

彼女が俺の前まで来るとバスタオルを一枚地面に引いて、そこに座り込み胡坐をかく。そんな格好をすれば下着が丸見えなのだが、お構いなしだ。まあ、自動販売機を相手に照れる方がおかしな話か。

「もしかして、自分が犠牲になってもオレを逃がそうってつもりなら無駄だぜ。外まで逃げられたとしても、魔物がそこら中にわんさかいる地帯を、戦闘技能が無いオレが生き延びられると思うか？」

俺の考えは読まれていたのか。イエス、ノーだけの意思表示だったが、彼女とはこの二日、かなり話していたからな。元々頭のいい人だから、俺の単純な思考回路を読むぐらいのことはやってのけるか。

「ごんねん」

「だろ。だから、逃げ出しても無駄だ。何とか時間を稼いで、千載一遇の好機を待つしかねえ。ハツコンからしてみれば、かなり無謀な女に見えてんだろ。大して強くもねえくせに態度だけはデカい命知らずだつてな。別に死ぬのは怖くねえんだぜ。いや、そういった感情がマヒしちまったつてのが正しいか……ああっ、何話してんだつてことで、オレは寝る！ おやすみ！」

「またのごりようをおまちしています」

その場に横たわりバスタオルを被せて、あつという間に眠る。この寝つきの良さは特技といっても差し支えないな。

意味深なことを話していたな。彼女には人に言えない事情があるようだ。根掘り葉掘り聞きだす術もなければ、隠しておきたい過去をほじくり出す気もない。

何だかんだで、もう深夜か。この奴らも、扉の前と廃墟と化した砦の見張りぐらいいしか起きてないのだろう。行動を起こすなら今のだが自動販売機に何をしろと。まさに手も足も出ない。

俺に出来ることは彼女が処分されると考えて、再び襲いに来るかもしれない馬鹿共から結界で守るぐらいか。

わかつてはいるが落ち着かないので部屋を見回すが、古びた机、椅子、資料、魔道具の灯り、工具らしき物ぐらいいしかない。天井高は3メートル程度で、壁も床も天井も石造りで見るからに重厚で頑丈そうだ。

脱走といえば壁を掘るといのが定番中の定番だが、何年かけたら可能なのだろうか。結局、何度見回しても打開策が見つかる訳もなく、明日を待つしかない諦めかけていた。

その時、微かに流れてくる音と共に自動販売機の体が微かに揺れた。え、今は。ほんの僅かだったけど、何かが弾けたような音がしなかったか。

実際にはない耳を澄ますと、遠くで何かが爆発するような音が再び聞こえ、その他にも剣戟のような音がする。

「おい、何の音だ！」

「上からだぞ！」

見張りの焦っている声と駆けあがっていく足音が遠ざかっていく。これって砦が襲撃されているのか！？

だとしたら、ヒュールミを起こさないと。

「あたりがでたらもういっぼん あたりがでたらもういっぼん あたりがでたらもういっぼん」

「ふえい？ え、何だ何だ、え、お、ど、どうした、ハッコン」

涎を手で拭いながら、ぼーとした表情で俺を見つめている。説明のしようがないので、取りあえず寝起きの缶コーヒーをどうぞ。

「おつ、すまねえな。くはああああ、目覚めのいっばいは最高だぜっ」

相変わらず、オッサン臭いが今それはどうでもいい。この状況、考えられるのは襲撃だよな。問題は奴らが戦っている相手だ。

襲撃をしているのが何者かというのは可能性が二つぐらいか。階層の魔物が襲ってきた。もしくはハンターたち。

集落が活気づくということは金の臭いを嗅ぎつけた、こいつらみたいな悪党どもも流れ込んでくるということだ。俺を盗み出したのが初犯でなく、何度も犯罪を重ねていたと仮定しよう。こいつらはマークされていたのかもしれない。

だとしても偶然にしては運が良すぎる。となると……。

あつ、もしかして、俺が盗まれるのを待っていた？ かなり儲けている鉄の塊である俺って絶好の力モじゃないか。自分で動くことも抵抗もできない巨大な貯金箱が路上に置かれている。そりゃ、犯罪者としては狙ってくれと言っているようなものだ。

そして、俺を盗むとなるとかなり大掛かりになる。重量も相当なものなので運ぶのに手間もかかる。囷としてこれ程最適な相手もないだろう。

え、もしかして熊会長あたりが考え出した作戦に利用された？

でも、熊会長なら事前に教えてくれる筈だ。いや、教えようとしていたところを襲われたから便乗したのか。どちらにしろ、この予想が的中していたら助かるぞ！

「この音……誰かが争っているのか」

ヒュールミようやく目が覚めたようで、いつもの鋭い目つきで扉まで移動して聞き耳を立てている。

「やっぱり、誰かと戦ってやがるな。何者かは不明だが好機かもしれないぜ」

彼女も同じ意見か。ここで一番困るのは両者全滅パターンだ。そうなったら俺たちは閉じ込められたままになる。

さつきから扉を開こうと奮闘しているようだが、外側から鍵が閉められているようで、どうにもならないっぽい。

「おおおおん」

え、今の声は。聞き覚えのある声にハツとなる。ヒュールミも思うところがあつたのだろう、眉根を寄せて扉にへばりついている。

「はあああつこおおおおん！ どこにいいいい、おるんやあああああああ！」

この聞き覚えのあり過ぎる、分厚い扉の向こうからも聞こえてくる大声は

「ラツミスー!？」

そう、ラツミス声だ！ 彼女の声を俺が聞き間違えることは無い。つまり、今争っているのはハンターたちということだ。助かるぞ！

「あ、え、何であの子が。ハンター協会が動いたってことなのか。それにハツコンの名を呼んでいたぞ。もしかして、知り合いなのか？」

「いらっしやいませ」

「おおおっ、そうか！ なら、俺たちは邪魔と足手まといに、ならないようにしておこうぜ。人質に取られたらシャレになんねえからな」

俺の傍にるのが一番安全だと判断したようで、脱いだ服をまとめて俺に背を預けている。

「いざという時は、守ってくれよな！」

「いらっしやいませ」

お任せあれ。守ることだけなら自信があるから。

剣戟の音と怒声も聞こえてくるようになっていく。時折感じる地響きの正体はラツミスの可能性が一番高そうだ。枷を外して全力で怪力を振るえば、朽ち果てる寸前の砦の壁や柱なんて、彼女にしてみれば発泡スチロールと大差ない。

「これ、やべえかもしんねえぞ」

ヒュールミが突然、天井を見上げて声を漏らしている。俺もつら

れて天井を見たのだが、別に違和感はない。埃が少し降ってくるが、崩壊する程ではないと思う。

「この上は倉庫になっていてな、クズ共が集めた硬貨が貯め込まれている。でだ、それだけならいいんだが、あの馬鹿共、欠陥品の魔石……別名、爆石を溜め込んでいやがるんだよ。本来、魔石ってのは魔道具の燃料になる石なんだが、たまに内蔵されている魔力の流れがおかしい魔石があつてな、そういうのは燃料として使えない。下手に使うと不具合が起きて魔道具がぶっ壊れるからな」

魔石もあるのか。魔道具は何で動いているのかと疑問だったが、なるほどそういう仕組みなんだな。

「でよ、欠陥のある魔石は取り扱いが難しくてな、兵器に利用しようとして貯め込んでいた国の倉庫が、周りの施設を巻き込んで吹き飛んだって話もあるぐらいだ。だから、今では見つけたら即処分というのは常識になっている……が、アイツらそれを知らずに商人にだけえ爆石を幾つも魔石として売りつけられて、上の倉庫に後生大事に放り込んでいるってわけだ。馬鹿だろ」

これが他人事ならバカだなーで済む話なのだが、つまり俺たちの頭の上には不発弾が置かれているって事だよな……ばっかじゃねえか！？

「で、まあ爆石は強い衝撃を与えたらやばいってのは理解できたよな。これで上の屋根が倒壊して爆石に当たりでもしたら」

ああ、うん。それ以上は必要ない。ラッミスさん、ちょっと力抑えてもらえませんかっ！

何か破壊音と振動が徐々に近づいてくるんですけどっ！

「あ、これ、マジでやべえな」

ヒュールミがそう呟いた瞬間、轟音と共に天井が崩れ落ちてきた。

自動販売機マニアとして

鼓膜があれば麻痺しそうな爆音が地下室を満たし、見上げた天井が軋み亀裂が縦横無尽に走っていく。

あ、これ駄目なやつだ！

「ほ、崩落するぞっ！ きゃあああああっ！」

悲鳴を上げる時は可愛いんだなとか思っている場合か 結界 発動！

ギリギリで青い壁が俺を取り囲み、崩壊した天井を弾き結界内に入ることを拒む。もう、何の音か判別付かない騒音に包まれ、ヒュールミは耳を押さえて蹲っている。

ようやく音が消えると俺たちは瓦礫に閉じ込められていた。本来なら光を通さない漆黒の闇なのだろうが、自動販売機の体から溢れ出す光で、辺りが良く見えていた。

「た、助かったぜハッコン。できる男だなてめえは」

鉄の体を拳で軽く小突かれた。安心できる状況ではないのだが、取りあえずは何とかなったようだ。だけど、問題はこれからか。

食料は何とでもなる。最大の問題は結界の維持だ。一万を切っているポイントでは毎秒1ポイント減り続ける結界を持続するには限界がある。一時間で3600ポイントも減るとなると、三時間以内に掘りだしてもらえなければ押し潰されて死ぬだけ。

俺だけなら……頑丈を上げれば耐えられるだろう。だが、それを選ぶ気は微塵もない。彼女を見捨てたら俺は一生後悔し続ける。人ではなくなったからこそ、心だけは人でありたい。

それにラツミスの泣き顔を見たくはないからな。

「ハツコン、この結界はずっと維持できるのか？」

「ざんねん」

ここは嘘を吐いてもしょうがない。現状を出来る範囲で伝え、二人で助かる方法を探すべきだ。

「一時間ももたないのか？」

「ざんねん」

「二時間がぎりか？」

「ざんねん」

「三時間ぐらいか？」

「いらっしやいませ」

「そうか、三時間持つかどうか……余裕は殆どないのか、厄介だぜ」

そう、時間が無いのだ。時間切れまでに現状を打破しなければならぬ。自販機の商品にここから逃げ出せるような道具は存在しない。

非情であろうがこれが現実か。加護を得るには圧倒的なポイント不足。機能にドリルでもオプションでつけられるなら話は変わるのだが、もちろんそんなものはない。あつたとしても膨大なポイントを必要とするだろうな。

どう考えても詰みだが、まだまだ。まだ何か組み合わせれば……。

「おい、ハツコン。加護を維持するには、もしかして金が必要なのか？ 前にも金を別のことに使っているって話をしたよな」

「いらつしゃいませ」

ああ、そんな話をしたな。もちろん、硬貨を大量に得ることが出来れば、ポイントに変換して結界を保てるが、ヒュールミは硬貨と荷物を全部奪われたと言っていた。そんな金、何処にも存在しない。

「やっぱそうか。ならどうにかなるかもしんねえぞ。ハツコン上を見ってみるよ」

何とかなる？ 素直にそれを信じられなかったが、視線を上に移動すると元々は天井だった瓦礫が埋め尽くしている。これでどうしろ え、これって。

「見えたか？ あれって硬貨の詰まった袋だよな。上が倉庫だって話したのを覚えているか」

あ、ああ、そうか。真上に倉庫があったから、この大惨事を引き起こしたのだった。床が抜ければ、倉庫にあった物が下に落ちてくるのは道理。

なら、その袋だけを結界内へ入ることを許可する！

地面に落ちた子供がすっぽり入れるぐらいの袋の口から、金銀銅が入り混じった硬貨が溢れている。よおおおし、これだけあれば結界の維持は余裕だ。零れている硬貨だけでも丸一日は余裕で持つだろう。

あとは料金設定を商品一個、金貨一枚以上に変更してやる。

「よーし、何でも好きなの買ってやるぜ！」

金貨、銀貨、銅貨が大量に投入され、ポイントが信じられないぐ

らに上がっていく。たぶん、違法な行為で手に入れた金銭だとは思うが、被害にあった人に返しようがないので俺が有意義に使わせてもらいます。

これで、あいつらの親玉が無事で、貯め込んだ金がすべて消えていると知ったら発狂するかもしれないな。

結界の心配はなくなった。三日も耐えれば、ラツミスなら瓦礫を排除して俺を掘り当ててくれるだろう。加えて俺が声を出し続けておけば、近いうちに気づいてくれると信じている。

生命の危機が遠ざかり、ようやく心に余裕ができた。

あとは助けを待つだけでいい。ヒュールミも完全にくつろいで金貨一枚以上で購入した高価な成型ポテトチップスを齧っていた。今はお腹一杯になって眠いのか静かだが。

「はあーはあーはあはあ、何だ……息が、苦しい」

えっ、顔色が悪くないか。呼吸も荒く、額に手を当て苦しそうに見える。一体どうしたんだ、さっきまではあんなにも元気だったの…… ああっ、馬鹿か俺は！

自分が機械の体になったことで、間抜けなミスを犯してしまった。今、彼女は窒息状態だ。俺と違って人は呼吸を必要とする。瓦礫で隙間なく埋め尽くされた密閉された空間で、人は長く生きられない。くそっ、少し考えたらわかったことだろ。自分が死なないからって油断をして、彼女をみすみす危険に晒してしまった。

「頭がいてえ、はあはあはあ」

どうすればいい。時間の余裕はさっきよりもないぞ。ヒュールミが窒息して気を失ったら、俺にはどうすることもできない。酸素が不足しているのなら……酸素……そうか！

確かあったよな、この機能。取ることはないと思っていたのだが、
今ほど、俺が自動販売機マニアで良かったと思っただことは無い。

自動販売機がレトロな感じに変形する。長方形のお世辞にもデザ
インセンスがあるとは言えないフォルムチェンジすると、上の方に
ある文字が漢字で表示される。

『酸素自動販売機』

体の中央部には鼻と口をすっぽりと覆うことが可能なマスクがあ
って、細いチューブで本体と繋がり、それを当てることにより酸素
を吸うことが可能となるのだ。

「はあはあ、こ、これは、どうすれば」

本来50円で3000ccの酸素を供給するシステムだが、今回
はもちろん無料だ。彼女が気づかなくても大丈夫のように酸素を出
し続けておく。ようは、この空間に酸素を供給できればいいのだか
ら。

「はあはあ、ここから、はあはあはあ……何かが出ている……吸え
って、はあはあ、ことかあ」

「いらっしやいませ」

彼女はマスクをしつかりと口に当てた。貪るように酸素を吸い続
け、苦しそうな顔が段々と穏やかになっていく。よかった、もう大
丈夫だな。

はああああ、焦った。自動販売機博物館やミュージアムを見つけ
たら迷わずに飛び込み、自動販売機マニアのコミュニティーに加入
していた甲斐があった。

この酸素自動販売機は昭和40年頃に実際に存在していた自動販売機だ。当時の日本は大気汚染が問題になっていて、その対策の一环なのか銀座に置かれていたそうだ。

俺の知りうる限りだが、変わり種の自動販売機の上位に入る逸品だな。

ポイントは潤沢なので結界と酸素を同時に発動し続けても、問題は無い。後はのんびり彼女の助けを待つことにしよう。もちろん、今度こそ見落としが無いか調べてからだが。

食事は何時でも提供できるし、大量購入した商品が床に散らばっているのを暫くは何の問題もない。ポイントも必要以上にある。何か異変があった時に備えて、俺は暫く不眠不休で警戒態勢を維持。これで万全、だよな。見落としはない、と思う。

これまでが酷かったので断言ができないのが悲しいが、失敗をしたとしてもフォローが出来れば何とかなる。助かるまでは油断をしないことを自分自身に誓おう。

「ありがとうよ、ハッコン。あれだな、お前さんが人間だったら、マジやばかったかも」

座り込んだ状態で照れながら上目遣いをされたら、自動販売機なのに胸が 装置が高鳴りそうになる。だけど、物理的にも俺の背を預けられるのはラツミスだ。

今も、俺が押し潰されたんじゃないかと、泣いていないだろうか。俺の結界と頑丈なことを知っているので大丈夫だとは思うが、無茶してないだろうな。

そんな俺の思考を遮るように、頭上から妙な音が響いてくる。ガリガリと何かを削るような音に重低音が混ざりあっているが、腹に響く音は何か重い物が地面に落ちたのか。

その音も直ぐに掻き消されることになる 　ある少女の叫びによ

り。

「ハッコン！ どうか、どうか！ 無事じゃなくても返事して！」

あの悲痛な声は……泣いているのか。まったく、自動販売機を想って泣くなんて、マニアの俺も真っ青だよ。

「ふはははは。ラッミスが呼んでいるぞ、ハッコン。返事してやれ」

立ち上がったヒュールミがバンバンと俺の背を叩いている。

頭上の瓦礫が吹き飛ばされ、魔法の灯りに照らされたラッミスが俺たちを覗き込んでいる。顔は鼻水と涙で濡れ、泣きはらした目元は腫れ目が真っ赤に充血している。俺のことをどれだけ心配してくれていたか一目でわかる。

「はっこおおおおんっ！」

彼女は躊躇うことなく、頭上から俺に向かって飛び込んでくる。

結界にラッミスが入れるように許可を出すと、青い壁をすり抜け俺にラッミスが激突した。

《25のダメージ。耐久力が25減りました》

ぐはっ、く、思ったよりもダメージが通ったな。でも、空気読もうなダメージ表示。

「ごめん、ごめんね。私が目を離したから、こんなことになったんだよね」

そんなに気にしないでいいから。あと抱き付いてくれるのは嬉し

いけど、身体がミシミシって軋むダメな音がっ。

《10のダメージ。耐久力が10減りました》

……耐久力回復しておこう。されるがままにしていたら、助かった命を失う羽目になりかねないぞ。落ちつこうな、ラツミス。

「ありがとうございます」

「ごめんね、ごめんね、無事でよかったああ」

泣きじゃくる彼女を抱きしめる腕もないし、慰める言葉を伝える口もないけど、キミと会えてよかったと心から思っている。また会えて嬉しいよ、ラツミス。

自動販売機マニアとして（後書き）

これにて一章終了となります。

これからもお付き合いのほど、よろしくお願いします。

キミと共に

「ハツコン……もう、何処にもいかんといて……」

あれから、俺たちは引き上げられ砦の隅で休憩している。ラツミスは緊張の糸が切れたらしく、俺にもたれかかって眠っている。

彼女は俺がいなくなってから、殆ど眠ることなく探し続けたそうだった。

「ラツミスはハツコンにかなり依存しているな。この取り乱しっぷりは……やっぱ、昔のアレとダブったのか」

昔のアレ？ 気になることをヒールミが口にしたぞ。

「ざんねん」

「ああ、何のことかわかんねえよな。まあ、ハツコンなら話しても大丈夫だろう。オレとラツミスは同じ村出身でな、いわゆる幼馴染ってやつだ」

そうなのか。見た目も真逆だが、性格も正反対の相手の方が意外と上手くいくって言うからな。

「まあ、良くある話なんだけどよ。小さな名もなき村が魔物に襲われて壊滅した。オレとラツミスは数少ない村の生き残りでな……まあ、なんだ、親は両方死んじゃった」

ラツミスは何処か言動が幼いところがあって、甘えん坊な所があ

るとは思っていたが、誰か頼れる相手を、親代わりの存在を無意識の内に求めていたのかもしれないな。

「オレはまあ、こんな性格だからいいんだが、アイツは自分には力があつたのに、怯えてばかりで何もできなかったことをずっと後悔していた。どんくさくて、虫も殺せない性格だったくせにハンターになりやがって、バカが」

言葉は辛辣だが、声には相手を労わる響きが含まれていた。

怪力は確かにハンターに適した能力だが、彼女の性格は正直争い事には向いていない。宿屋の仕事や瓦礫撤去をして働く姿は本当に楽しそうで、できることなら危険なハンターには復帰して欲しくない。

だが、彼女には譲れない強い想いがあるのだろう。俺が力になれるなら、何とかしてやりたいが。

「ハツコン、今、大丈夫か」

「いらっしやいませ」

お、熊会長もいたのか。ざっと見たところ十人でこいつらの拠点を強襲したようだが、メンバーの中には愚者の奇行団の姿もある。団長と副団長が休憩しつつ、こつちを気にしているようだ。

「ラツミスは眠ったか。疲労が溜まっていたようだ、このまま寝かせてやってくれ。今回の一件は謝らねばならない。この盗賊団がお主を狙っているという情報は既に得ていた。奴らを一網打尽にする為に、明日にでも囿として協力を頼む予定にしていたのだが、奴らの動きが早く、このような事態になってしまった。それでも助けに入るべきだったのだが、私からの命令で尾行させることにした。奴

らを追い詰める為とはいえ、お主を危険に晒したのは間違いない。すまなかった」

熊会長が深々と頭を下げている。大体は俺の予想通りだったので、驚くこともなく腹も立たない。結果論だが、俺の誘拐を邪魔しなかったからこそ、ヒュールミと出会えて助け出すことができた。

俺を誘拐できていなかったら、彼女は処分されていたか別の場所へと連れ去れていたことだろう。なら、何も誰も悪くない。

「いらっしやいませ」

「今回の一件に関して、こちらから報酬を出させてもらう。それに、今後お主の身に何かあった時は、ハンター協会は協力を惜しまないと誓おう」

熊会長と強力なパイプが繋がったことだけでも、十二分な報酬になる。

「くそつ、離しやがれつ。てめえら、俺の貯め込んだ金を奪うつもりかっ！」

この怒鳴り声は奴らの親玉か。視線を向けると、縄で拘束された奴らが纏められている。近くに身動きもせず横たわっているのは死体か。あれは見張りの一人だな。人の死体を見たというのに、動揺どころか心の乱れが一切ない。

これも自動販売機になったことによる、変化の一部なのだろうか。

「おいおい、命の心配より金の心配か。余裕だねえ。まあ、お前さんらが大量に貯め込んだ金も何もかもハンター協会が有効活用してくれるさ。心配しなさんな」

ケリオイル団長が帽子のつばに指を這わせながら、間延びした話し方で眠たそうに目元を擦っている。

助け出されたのは嬉しいが、愚者の奇行団に借りができてしまった。嫌な予感しかしないぞ。あ、団長さん、そいつの貯め込んでいた硬貨の殆どは俺の体内にあるよ。これバレたら怒られそうだな。

まあ、何にせよ、これにて誘拐事件は終了となる。後は朝を待ち、居心地のいい彼女の背にもたれかかって帰るだけだ。

さーて、活躍してくれたハンターみんなには大盤振る舞いしますか。冷凍食品を温めるモードも追加したので、焼きおにぎり、から揚げ、フライドポテト、焼き飯、焼きそば、たこ焼きだつて出せるぞ。冷凍食品で有名なメーカーの自動販売機なので味も折り紙付き。

ちなみに俺のおすすめは、から揚げだ。

「おつ、ハツコンの形が変わりやがったぞ。何だこの美味そうな飯の絵は」

「今まで見たことのない食いもんばつかじゃねえか」

「お前ら落ち着け。危険があるかも知れねえだろ。まずは団長である俺が試してやるよ」

「ずりいいいいい！ 団長ずるいぞっ！」

「横暴つす！ 部下を大切にしない組織は成長しないつすよ！」

俺の前にずらっと並んでいたハンターを押し分け、割り込んできたケリオイル団長に団員がしがみついて動きを封じている。

「あつ、くそ。てめえら、今回の報酬削るぞっ」

「何バカやっているのですか。ハツコンさん、値段表示が無いようですが。もしかして、おごっていただけのですか」

「いらっしゃいませ」

「ありがとうございます。では、この肉の塊を揚げた物でしょうか、これを」

じゃれている団長と団員を放置して、副団長であるフィルミナさんが、から揚げのボタンを押した。

「ありがとうございます」

「お、おいフィルミナ、何しれつと割り込んでんだっ」

「フィルミナ副団長ずるいっす」

「このお肉、信じられないくらい柔らかいですね。噛むと中から肉汁が溢れ出てきて……はあああ」

いつもは冷たいイメージがあるフィルミナ副団長が、頬に手を当て破顔している。その幸せそうな顔に、他のハンターたちも辛抱たまらなくなったようで、次々と指が伸びてくる。

はいはい、争わないでいいから。みんな、思う存分飲み食いしてくれ。アルコールは提供しないが、それ以外は何だつて出すよ。

「ハツコンの周りに集まった奴らが、あんなに幸せそうにしてやが

る。それって、人でも中々できないことだぜ」

珍しく黒衣の前を閉じているヒュールミに体をコンコンと軽く叩かれる。

何気ない一言だったが、俺の中にずっと温かいものが潜り込んできた気がした。機械の体なので実際にそういった感覚は存在しなのかも知れないが、この気持ちや温かさは気のせいではないと信じた。

飲み食いを続けるハンターたちに商品を提供しているだけで幸せに感じるのは、自動販売機としての自覚が芽生えたというよりは、人として当たり前の感情。この気持ちを、感覚を忘れないでいられたら、俺はこれからも自動販売機としてやっていける。

「はっこおおん……ずっと……一緒だよ……すうう」

ラツミスの寝言か。幸せそうな寝顔で、猫のように丸まっている。ああ、キミが俺から自ら離れる日が来るまでは、一緒にいような。

途中アクシデントもなく、集落まで辿り着いた。

無事にアジトから帰還した俺を門番の二人、カリオスとゴルスが迎え、我が事のように喜んでくれた。それから、ハンター協会前に戻ると次から次へと客がやってきて、辺りが見えないぐらいの人で埋め尽くされた。

どうやら、うちの商品を毎日口にしないと落ち着かない人がいるようで、大量に購入する人たちも少なくない。ずらっと並ぶお客を眺めていると、少し離れた場所で目を輝かせている両替商のアカウイさんの眼鏡が、怪しい光を放っていた。手元の手帳に高速で何か

を書き込んでいる。充分貯め込んだところで銀貨を回収するつもりなのだろう。

朝早く戻ってきたにもかかわらず、客の列は夜になるまで途切れることはなく、最後の客を捌くともう深夜と呼んでいい時間帯だった。

「今日もお疲れさま、ハッコン」

俺の背後から聞き慣れた声が響く。ラッミスが俺の横に並ぶ。

こんな深夜に何をしに来たのかと、普通なら驚く場面なのだろうが平然としているのには理由がある。彼女はずっといたのだ。今日一日ずっと、俺の近くに居続けていた。

さすがに用を足すときは離れたが、それ以外、最長でも5メートル以上距離を開くことはなかった。そして、今の彼女は寝袋に包まれ顔だけ出した状態だ。茶色のタラコに人間の顔を付けたような姿でニコニコと笑っている。

俺を誘拐されたことがかなり堪えているようで、今日は絶対に離れないと屋外で寝ることを決めたようだ。ヒュールミヤムナミも止めたのだが、頑として譲らずこうなった。

熊会長も心配なようで、ハンター協会の入り口にいつもはいない見張りを立てて、こっちを警戒してくれている。

「ハッコンも、色々あって疲れているんだから、寝ないと駄目だよ」

「いらっしやませ」

今日はこれぐらいにして、灯りを消しておこう。

暫くは彼女が俺のことを離してくれなそうだが、ここまで過剰に心配して貰える自動販売機なんて存在しないよな。だったら、ラッ

ミスが納得するまで付き合っことにしよう。

「眠るまで、お話していい？」

もちろん。聞き役しかできない俺で良ければ、幾らでも付き合うよ。

嬉しそうに語る彼女の声を聞きながら、視線を空に移すとそこには夜空が広がっていた。屋外としか思えないダンジョンの中だが、星は存在していないようだ。太陽はあるのに。

日本の常識が通用しないダンジョンの不可思議な光景を眺めていると、ああ、帰ってきたんだなと実感してしまう。

そんな俺の心中を知らずに、満面の笑みで途切れることのないラツミスの話は、夜風に乗る遠くへと流れていった。

真心を貴方に

視界が激しく上下左右に揺れている。そして、たまに猛スピードで景色が吹っ飛んでいく。

「ハッコン、もう少しでお昼だから、休憩しようね」

今日も元気に復興作業中のラツミスの声が至近距離から聞こえる。背中にいるから当たり前なのだが、降ろしてもいいんだよ？

誘拐されて帰ってきてから、ずっとラツミスが傍にいる。今まで作業中は地面に設置されていた俺を、何があるうと背負ったままでいるのだ。彼女が俺を手放すのは、トイレの時ぐらいで一日の大半を共に過ごしている。

別に嫌じゃないのだけど……依存が強すぎませんかね。

「若干引くぐらい仲良しだな。よっ、ハッコン元気してるか」

軽く手を挙げて近づいてくるのは、今日も黒衣のヒュールミか。相変わらず、服装やオシヤレには無頓着らしく、ぼさぼさの頭を適当に縛っている。

一番小奇麗にしていたのが拉致監禁されていた時ってどういうことだ。

「あっ、ヒュールミ。体の方はもう大丈夫。疲れが残っていない？」

「おう。むしろ、監禁中の方が美味しいもん食ってたから、バリバリ元気だぜ」

二人は本当に仲がいらしく、毎日、休憩時間を狙って会いに来ている。

基本的にはヒュールミが知的なお姉さんといった感じなのだが、時折、ラツミスが母親の様に体を労わったりしている関係が面白い。

「しっかし、作業中ぐらいはハツコン降ろしたらどうだ。邪魔になんねえのか？」

「全然大丈夫だよ。力が有り余っているから、ハツコンぐらいの重しが無いと身体が軽すぎて逆に動き辛いの」

「うーん、理由はそれだけじゃないよな。心配してくれるのは嬉しいが、過保護というか心配性も度が過ぎている。何とかした方が良いのだろうか。」

「でもよ、ほらラツミスがいつも傍にいたら、気が引ける客がいるんじゃないか？」

「あ、うー。でも、離れたら、また誘拐されるかもしれないし」

「ハツコンだって今度は警戒しているさ。なあ」

「いらっしやませ」

「う、うーん。ハツコンがそう言うなら」

渋々ながらだがラツミスは俺を地面に設置して、不満顔で少し頬を膨らませている。これでプライベートの時間も確保できるようになった。グツジョブだヒュールミ。

正直な話、ずっと背負われていたので売り上げがかなり落ちてい

た。そりゃ、人の背中で激しく動いている自動販売機から、商品を
買う勇氣がある人は一握りだろう。門番の二人は一度声を掛けて、
動きを止めて貰ってから購入しているが。

ラツミスはちらちらと何度も余所見をしているので仕事に身が入
ってないようで、怪我しないか心配だ。

こっちはかなり順調で、今まで様子見をして手を出せなかったお
客が、俺の前に群がっている。よし、今までの遅れを取り戻すぞ。

昼に予想以上の量を売り捌き、売れ行きが好調の商品を補充して、
商品が全て温かいになってしまいそうなくらい、ほくほくしながら
ハンター協会前の定位置に居座っている。

夕方になると、今までならラツミスは俺の隣で自動販売機の商品
を食べていたのだが、気を利かせてくれたヒュールミが、仮店舗で
営業しているムナミと女将さんの食堂へ連れて行ってくれた。

この時間帯はいつも人が途切れるので、久しぶりに一人　じゃ
なく、一台でまったり過ごしていると、俯き気味で誰かが歩み寄っ
てきた。

あれは、朝の常連三人衆の青年商人だよな。いつもは無駄に爽や
かな笑みを浮かべて、人当たりのいい態度で老夫婦にも好印象を与
えているというのに、身体の周りから黒いオーラを出しそうなくら
い、落ち込んでいる。

「はあ……上手くないなあ。最近は何よりも忙しそうだし。声
を掛ける切っ掛けも……明日誕生日だって言うのに」

ため息交じりの呟きを聞いて合点がいった。彼は確か宿屋の看板

娘ムナミに惚れこんでいるのだったな。関係を進展させたいけど、
上手いかず悩んでいる。恋愛がらみの悩み事か、相談に乗って上
げたいけど相槌専門だからな。

「はあ、アコウイさん、最近根を詰めすぎで心配だ」

商人青年とは真逆の方向から迫りくる巨大な影はゴリ……両替商
の助手をしているゴツガイだったか。

あの人は見た目に反して穏やかで、前も転んで泣いている子供が
立ち上がるまで見守っていると「自分で立ち上がれて偉いな」と優
しく微笑むような人だ。

「おや、両替商のゴツガイさんではないですか」

「これはこれは。先日はお世話になりました」

二人は顔見知りのようで、軽く会釈をしている。まあ、商人と両
替商なら接点はあつて不思議はないか。天気や商売と最近の噂話な
ど、差し障りのない雑談を交わしている二人は心ここにあらずと言
った感じで、下手な芝居を見ているようだ。

時折、両者が視線を俺に向けている。どうやら、二人とも何かを
買いたいようだが、別に相手がいても商品なんて好きに買えばいい
のに、何かあるのか。

「いらっしやませ」

「あつ、何か飲まれますか。僕が出しますよ」

「いえいえ、ハツコンさんにはお世話になっていきますので、自分が」

二人は「私が」「自分が」を繰り返している。普通に話せたら「じゃあ、俺が」「どうぞ、どうぞ」という流れをやる絶好のチャンスなのだが。

「では、今回は僕が出しますので、次回お会いした時はお願いしていいですか」

「わかりました。今回はご馳走になります」

青年商人はいつものミルクティーを、ゴツガイはレモンティーを飲んでいる。両方温かいを選んだようだ。季節は初冬らしく、温かい物が美味しい季節だからな。ダンジョンの中なのに季節があるのかとか、そういう疑問は今更だよな。

「はああ、落ち着きますね」

「ハッコンさんの商品は本当に美味しい物ばかりで困ってしまいましたよ」

一緒に温かい物を飲むという行為だけだというのに、二人の距離が少し近づいた気がする。さっきよりも会話が弾んでいるようだ。

「ところで、失礼だとは思いますが……何か深刻そうな顔を、していらっしゃったようですが」

「いや、お恥ずかしい。少しその、女性関係での悩みが」

「そうなのですか。良かったら、話してみませんか。悩みと言うのは口に出すと、少し楽になるものですから。ああっ、そうです。自分も上司のアコウイさん関連で悩み事がありまして、宜しければ自

分の話も後で聞いてもらえると有難いです」

ゴツガイさんは自分の悩みも後で打ち明けるといふ条件を出すことにより、青年商人が話しやすい状況を作り出したのか。アコウイさんがきつめの性格で交渉があまり得意なタイプじゃなかったので、彼が常にフオローをしているのだろうな。

「実は、片想いをしている女性がいます、近いうちに誕生日だといふ情報は得ているのですが、どうしたらいいのかと思ひまして。贈り物を手渡すとしても、そこまで仲が良い訳ではない客の一人から、貰って嬉しいのかと」

「成程、確かに悩ましい問題ですね。贈り物というのは高価であればいいというものでもありませんので。かなり親しい間柄であれば宝石や装飾品もありますが、常連のお客から、いきなりそんなものを渡されては、変に意識されかねません」

「そうですね。お恥ずかしい話なのですが、商売ばかりで恋愛経験も乏しく、こういった場合の最適な回答を導き出すことができないのです」

生真面目そうな青年だからな、色恋沙汰とは無縁の生活をしているのだろう。

都合のいい物語やゲームで良くあるチヨロイ女性なら、価値のある品を渡せば「え、こんなの受け取れません」とか言っておきながら最終的には受け取って好感度がうなぎ上りするのだが。ムナミはそういった輩に慣れていそうだから、笑顔で受け取ってそれで終わりそうだ。

「こういった場合は一般的な女性が喜びそうな、手頃な値段の物が

良いかと」

「やはり、そうなりますか。僕もそう思って、ここに来たのです。ハッコンさんは人の望みを聞いて、相応しい新商品を仕入れてくれるという噂はご存知ですか」

「あー、自分も聞いたことがありますよ。商品どころか形も変化したとか……ここだけの話なのですが、夜の商売をされているシャーリイさんのところで利用されている、避妊具のような物はハッコンさんが提供したそうですね」

そこら辺から情報が流れているのか。いつか都市伝説ならぬ集落伝説に挙げられそうだな。意思がある自動販売機の時点で今更だが。

「物は試しです、ハッコンさんに頼んでみませんか。自分も興味あります」

「そうですね。駄目で元々、ハッコンさん今の話は聞いてもらいましたが」

「いらっしやいませ」

「なら、話が早い。女性の誕生日に贈るのに相応しい品は何かありませんか」

話を聞きながらずっと考えていたのだが、一つ思いついた物がある。

復興の最中で集落が活気づいているのはいいのだが、何と云うか余裕がないのだ。必要な物資は不足していないのだが、娯楽もそうだが生活でいっぱいといった感じが拭えない。

ハンターや商売人は理想的な環境かもしれないが、お世辞にも女性には優しくない集落だ。ならば、ここで俺が提供する新商品は。

「光が……え、またガラスと変化しましたね。え、これは、花？」

「これは見事な彩りの花ではないですか。この階層は湿地が多いですから。自分はここまで美しい花をみたことはありませんよ」

そう、花の自動販売機だ。大半をガラス張りに変更して幾つか区切り、そこに花を並べている。購入した経験がなければ置けないので、花の種類は母の日に購入したカーネーション、バラ、墓参りに持って行く仏花、百合となっている。

ちなみに、母が購入する際にお金を払わされた経験が生きているようだ。

復興真っ只中で、町にあるのは建築材と瓦礫ばかり。花を見た記憶が全くない。そんな集落で色とりどりの花を手渡されたら、嫌な気持ちになる女性は殆どいない……と思う。

「なるほど、花ですか。値段もお手頃価格ですね。これはいい！」

「確か、アコウイさんは白い花が好きでしたね。自分も購入させてもらいます」

二人が思い思いの花を購入する。青年商人は仏花を。ゴツガイは白い百合を買っていった。

男性二人が花束を持つ姿に何故か温かい気持ちになるのは、俺だけだろうか。

手にした花束を見つめ目尻を下げ少し照れている二人の男性は、会釈をして立ち去っていく。二人とも上手くいけばいいな。暫くは、

注意して情報を集めることにしよう。

「ハツコン、知ってる？」

あれから数日が過ぎた。本格的な冬が訪れる直前らしく、住民が慌ただしく冬を越える準備をしている。いつものように定位置で商品を販売していると、いきなりラツミスにそんなことを切り出された。

何のことかわかるわけがないので「ざんねん」と言っておく。

「えつとね。ムナミと女将さんが今、テントで臨時の食堂やっっているでしょ、今、あそこ女性に大人気なんだよ。何でだと思っ？」

と言われてもな。情報が少なすぎて反応に困る。食堂が儲かる理由なんて味だよな普通。でも、女性に大人気つてのが気になる。元々、女性二人で経営しているので、女性のハンターや住人が利用しやすいという話は聞いたことがあった。

となると、更に女性客の需要に応えるような配慮がされたということが。わかんないな。

「ざんねん」

「わかんないよね。実は、ムナミの食堂にね綺麗な花が飾られるようになったんだ。それがすごく綺麗な花で。見ているだけで癒されるんだ」

おー、青年商人があれから頻繁に購入して、足しげく通っているかいたったようだ。そういや、先日やってきた両替商のアコウイさんも、けんのある表情が少し薄れていた気がする。効果はてきめんだったのか。

ラツミスは花が好きなのかな。語っている時の目が輝いていたように見えた。

だとしたら、そうだよな、うん。

「わっ、ど、どうしたの急に形を変化させて……えっ、あの花、ハッコンが売っていたの？」

花販売モードになるとピンクのカーネーションを取り出し口に落としました。

「ええっ、うちにもくれるの！？　ありがとう、ハッコン。大事にするねっ」

抱きかかえて、嬉しそうにクルクルその場で回っている。そこまです喜んでくれるなら、プレゼントのやりがいがあるってもんだ。

知っているかい、ラツミス。ピンク色のカーネーションの花言葉は『感謝』って言うんだよ。

脅威

壁掛け燭台がその部屋には四つ設置されていた。

薄暗い室内の中心には巨大な丸い机があり、それを取り囲むように十三の人影が並び座っている。

誰も口を開かず沈黙が支配している場で、一人の女性がすっと立ち上がった。

「みんな、よく集まってくれた。定例会議を始めるわよ。今回の議題はもちろん アレよ」

アレという不審な何かを指す言葉に、一同が騒めく。

「まさか、奴らがここにまで手を伸ばすとは」

「ああ、油断していた」

「対策を練らねば、一瞬にして滅ぼされるぞ」

物騒な言葉が次々と彼らの口から漏れ、悲痛な呻き声も聞こえてくる。

薄明りに照らされた顔はどれも暗く、生気が感じられない。

「静粛に。現在わかっている情報をまとめておいた……頼むよ」

女性に促されて隣に座っていた、エプロンスカート姿のメイドのような格好をした女性が立ち上がり、手にした資料を開く。

「では、アレは開放されたダンジョン内階層の七割を手中に収めています。そして、今回ここにも手を伸ばしてきました。我々は今こそ一致団結してアレの排除に努めなければいけません。そこで、今回、切り札としてある御方をお呼びしています。では、一言いただけますか」

「いらつしゃいませ」

清流の湖階層の集落で飲食業を営んでいる面々の会合に、強制参加させられた俺はそう口にする事しかできないでいた。

こういった会合は年に三度決まった月日に開かれていて、真面目な話をする場合もあるのだが、基本的にはお互いの情報交換と後は雑談で終わる。

しかし、今回は特別に急ぎよ開かれた会合であり、全員の表情に余裕は微塵もない。切羽詰った様子が見ているだけで伝わり、正直居心地は悪い。

「ハツコンさんは何か意見があれば、いつでもどうぞ」

ムナミにさん付けをされると気持ち悪いです。この人、役割になりきるタイプなのか。優秀な秘書官っぽいイメージでやっている気がする。

「話を続けさせていただきます。現在、この集落には大量の人々が流れ込んでいます。百人程度だった人口が膨れ上がり、今や住民は五百人近いのではないかと噂されています」

「最近、活気がありますからなあ」

「本来なら喜ぶべき事態なのだが」

集落は復興作業で人手が足りないでも足りないから、本格的な冬を迎える前にせめて外壁だけは整えようと、最近人の出入りが激しかった。何とか、敵の侵入を防げる程度の杭の壁は揃えたらしく、ほっとしているという現状だそう。

「人が増え、飲食業界としては嬉しい限り……だったのですが、その事により奴らが動き出してしまいました。ダンジョンの食を全て制覇するという目的の、最強最悪の食堂　鎖食堂がっ！」

「くそう、ここはあいつ等がないから、儲かると思っていたのによっー！」

「俺なんて別階層で商売していたのに、やつらが集落の食需要を全て奪っていきやがった！」

悲劇の主人公のようなノリで騒いでいる飲食店主を眺めながら、話を頭でまとめていく。

つまり、このダンジョンの各階層には人々の集まる集落があり、そこに飲食店を出店している大手がいるってことだよ。つまり迷宮チェーン店か。

今までは人口が百前後だった為、利益が低いと思われて手を伸ばしていなかった。だが、最近の人口増加を見て儲け時だと判断したようだ。

その大手チェーン店の名前が鎖食堂というらしい。彼らが出店する店舗は飲食店とは思えない規模で、飲食はもちろんだが、保存食や携帯食料も取り揃えてあり「食の全てが揃う鎖食堂」というのがキヤッチフレーズらしい。

鎖食堂は契約農家から直接仕入れ、中間業者を挟まないことによ

り低価格高品質を可能にしている。転送陣を運営している業者とも繋がりがあり、格安で利用できるので食料の運搬費がかからず、値段品質で一般の飲食店が太刀打ちできないという状況だ。

そして、鎖食堂が出店した集落は、他の飲食業が蹂躪されていくという最悪な展開が待っている。

これって現代日本でも良くある話だよな。地方に大型店舗が建ち、商店街や小売店が軒並み潰されて商店街がシャッター街になった前例なんて幾らでもある。

「奴らはこの時期を狙っていたのでしよう。冬を迎え、食材が高値で取引され我々が値段設定で頭を悩ます、この時期に。あつちは食材を新鮮に保つことが可能な魔道具を大量に所持しているようで、冬場でも変わらぬ料理を提供できるそうです」

つまり大型冷蔵庫みたいなものなのかな。

ここの飲食店の八割が露店で営業しているので、そんなものがある筈もない。材料が仕入れられなかったから、今日は休むなんて当たり前のことだったりする。

「転送陣も奴らが手を伸ばしているのでしょうか、露骨に値上げを始め食材の流通が滞っています。我々は本気で追い込まれている現状です」

「くそお、俺たちは蹂躪されるだけなのかつ」

「うちには可愛い子供たちがいるんだぞ。どうやって冬を越せばいいってんだっ」

机に拳を叩きつけ、悔しがっている店主たちの動作が芝居がかった。ちらっ、ちらっ、とこっちに視線を向けているのがな

あ。

ここまでの茶番劇で俺がここに呼ばれた理由が把握できた。この状況を打破する為の対抗策を俺に求めている。

正直、自動販売機としては大手チェーン店がやってこようが、それ程、影響はない。こっちは24時間営業も可能だし、鎖食堂が真似できないような商品を幾つも取り扱っている。カップ麺のフリーズドライ製法を、異世界の住民が可能にできるとは思えないし。

だけど、ここの住民を俺は気に入っているし、ラツミスのこともあるので住民に親切にしておいて損はない。俺がいつか壊れて使え物にならなくなった時に、彼女の居場所を確保しておく為にも。

あとは学生時代に老夫婦が営んでいた、お気に入りのお店が、大型店舗に潰された苦い過去があるので、そのリベンジを異世界で果たすというのも悪くないよな。

「ということで、ハツコンさん協力してもらえませんか！
……手伝ってくれたら、宿屋が復旧した際にはラツミスの宿泊費を半額にするよ」

ムナミのボソツと呟いた後半部分に生身だったら反応していたな。うーん、そんな交渉しなくても手伝うつもりだったが、ラツミスが得になるなら断る理由は消滅した。

「いらっしやいませ」

「ありがとうございます！ ハツコンさん」

「おおっ、ハツコンが協力してくれれば、百人力……百箱力だぜっ
！」

「これで、何とかなるかもしれないなっ！」

沸き立つのは結構なのだけど、あれ、これって俺の責任重大だよね。何か勝ったつもりで盛り上がっているけど、何も手伝えなかつたらどうするつもりなのだろうか、この人たち。

ため息の一つも吐きたかったが、決まった言葉が流れるだけなので、ぐつと堪えた。

「ここが鎖食堂なんだ。噂には聞いていたけど、すつごく立派だね」「とうとう、この階層にまで出店しやがるのか」

ラッミスとヒュールミと一緒に敵情視察に来ている。今、店の前なのだが、流石にショッピングモール程の規模は無いが、この異世界で見た建造物でならハンター協会に次ぐ巨大な建物だ。

天井はドーム型で一階建てのように見える。木材の湾曲したパネルを並べてはめ込んだような円形の店舗か。集落で異彩を放っているデザインだな。

入り口の扉は大きく、原色に近い黄色の上着を羽織った店員らしい人が、大声を張り上げて客引きをしている。

「いらっしやいませ、いらっしやいませ。食の事なら何でも揃う、美味しい安い便利でお馴染みの鎖食堂！ 鎖食堂でございます！ 開店記念として全品今なら何と、半額、半額で提供しております！」

何だろう、懐かしい気分になる。日本では結構良く見かける光景なのだが、異世界では異質のようで、物珍しさに店内に足を踏み入

れる人波が途切れ無い。

かなり繁盛している。知名度の高さと実績も影響を与えているのか。新しくこの集落に来た人が、小さな商店よりこっちを選びたくなる気持ちは理解できる。

「おやおやおや。これはこれはこれは、敵情視察でしょうか」

客引きをしていた華奢な男が、揉み手をしながら歩み寄ってきた。顔に張りついている営業スマイルが胡散臭い。

「て、敵情視察って何でわかったんですか」

「ラツミス……背中背中」

額に手を当ててヒュールミが疲れたように頭を振っている。

そりゃ、俺を背負っていたら誰だってわかると思うよ。目立っている自覚は無いのか。

「それが噂のハツコンという意思ある魔道具ですか。うちの社長も気にしていますね。どうです、うちで働いてみませんか。好待遇は保証しますよ」

まさかの勧誘だと。冗談で言っているという感じじゃないな、目が笑っていない。

相手側からしたら俺が一番邪魔な存在なので、いつそのこと自軍に引き込もつてことか。

「ハツコンは、そんなところで働いたりしないよ。ずっと、うちと一緒にいるんだからね。ねえ、ハツコン」

「いらつしゃいませ」

「ほーらね」

何でラツミスが胸を張ってドヤ顔をしているのか。でもまあ、異世界に転生したのだから、普通の安定した職場は正直興味ないかなというより、ここで働いたらスーパーに置かれた自動販売機と大差ない気がする。

「それは残念ですね。まあ数か月もしたら、自分から売り込みに来そうですが。では、こちらは忙しいので失礼します」

自分から寄ってきておいて何を言っているんだ、この人は。興を削がれたので、二人はこのまま帰るのかと思っただが、何もしない訳にはいかないようで俺を背負ったまま店内に入っていた。

自動販売機と一緒に問題ない間口の広さで、室内は壁もなく広々とした空間になっている。右手の方は物販の販売所か。干し肉や日持ちのする食料を提供しているようだ。主にハンターを狙った商品っぽい。

中央から左に向かってカウンターが伸びていて、その奥には調理場がある。そこで注文をして商品を受け取るタイプのようだ。

他には長机が並び、椅子が等間隔に置かれている。あれだ、フリードコートと同じシステムに見える。

ラツミスは肉と黄緑色の野菜が入ったパスタ。ヒュールミはパンと白身魚のムニエルのような物を頼んだ。

見た感じでは両方美味しそうに見えるが、食堂に普通に置いていそうな料理で特に変わった印象は無い。

「んー、普通に美味しいね」

「ああ、何と云うか想像通りの味だな」

二人は特に感動もなく淡々と食べている。味覚が備わっていないので、味比べができないのが辛い。味は美味しいそう。でも、食べた時の喜びが全く伝わってこない。俺の商品を食べる時は二人とも嬉しそうなのだが。

「美味しいんだけど、何だろう。普通だよな」

「ハツコンの食事に慣れちゃったせいかな、驚きと言いか感動がねえな。普通に美味しい」

成程な。チェーン店にありがちな一定水準は越えている味というやつか。

万人に受けるように尖った味付けはせずに、100点を指すのではなく70点以上を狙う味。それが悪いという訳じゃない。どの店舗も味を統一しなくてはならないから、複雑で手間暇がかかる味付けはできない。それに低価格を売りにしているのだから、材料費にも限度がある。

おまけに調味料が貴重なので、この世界では塩味や薄味が基本らしい。

そこに付け入る隙があるかも知れない。

メニューも定番を押さえている感じか。ふむふむ、攻略の糸口が見つかったかな。

打倒、鎖食堂！

「では、第二回、打倒、鎖食堂殲滅大集会を始めます！」

「うおおおおっ！」

暑苦しい男のノリに、ついていけない女店主たちの、恥ずかしそうに拳を突き上げる動作に萌えそうになる。

今日も前回と同じ面子でやるようだ。司会進行はムナミで決定なのか。

場所は、宿屋の女将さんが臨時で営業しているテントの中だ。机と椅子の殆どが壁際に寄せられているので、結構スペースに余裕がある。

「今回は対抗策として新メニューの開発についてです。皆さんには前回通知しておいたので、試食品を持ってきていらっしやいますよね。では、まずは私たちから」

そう言って試食品の料理が丸テーブルの上に置かれ、店主たちが味を確かめて意見を交わしている。全員が料理を提出し終わったのだが、正直どれもパツとしない。

既存の料理に少しアレンジを加えた程度で、味の方はわからないが他の人の反応を見ている限りでは、芳しくないようだ。

「では、ここで今回も参加していただいたハツコンさん。何か助言はありませんか。例えば私の試作品はどう？」

俺の目の前に突き出された料理は、とろみのあるスープのかかつ

たパスタのようだ。クリームパスタのようにも見えるが、にしては色が白ではなく黄色だ。

「ええと、ハツコン困っているみたいだから、うちとヒュールミが食べて感想を伝えるから、それで何とかならない？」

「いらっしやいませ」

ああ、そうだった。今日は臨時ゲストとしてラツミスとヒュールミも参加している。客側からの意見も欲しいからだそうだ。

俺の味覚の代わりをしてもらえるなら、助かるよ。

「ハツコンが良いって言うてるから、ムナミ食べていい？」

「うんうん、是非お願い。ヒュールミもよろしくね」

「味覚にはあんま自信ねえんだけどな」

二人は黄色のスープパスタを口に運ぶ。黙って咀嚼してから、二人は口を拭った。

「うん、美味しいと思う。ただ、味が少し薄いような？ スープは動物の出汁だと思うけど、とろみは野菜からかな。もうちょっと濃厚な方がパスタに絡んで美味しいと思うよ」

「確かにそんな感じだな。パスタはもうちょっと硬めにゆでた方が良くねえか。パスタにスープを吸い込ませる余裕を持たせた方が、食いやすいと思うぜ」

二人ともの確な意見じゃないか。ラツミスは手料理が得意らしく

て、味も一流の料理人に匹敵するとヒュールミが自慢していたのは嘘ではないようだ。そんな料理を幼少から食べている彼女も同様に舌が肥えているのか。

「ちよ、ちよつと待って。メモするから。ええと、ハツコンは何ある？」

動揺してムナミが素に戻っている。俺の意見か……二人の改善策以外に思いついたことか。あークリーム系の濃厚パスタなら、これどうだろう、ホワイトクリーム系パスタ。

缶に入ったスープパスタもあるのだが、長時間スープに浸されるのが前提になるから、普通のパスタとは違うものを使っているの、参考になるかは微妙だったりする。

なので、俺が出すパスタはフェリーで置いてあった、特別製の自動販売機で売られていたパスタだ。こっちはスープとパスタが別になっているので、自分で封を切ってかけるレトルトタイプで缶と比べたら手間がかかるが、味は結構良かった記憶がある。

「ふわっ、これってパスタと袋？ ええと、これ温かいけど封を切れてことよね。何かハサミの絵が描いているから、ここを切り取って中身を注ぐ……白くて茸と燻製肉かしら。味は……んぐっ、美味しい！ 濃い目の味付けでとろみも強い。これって動物の乳なのね。うんうん、だとしたら……」

どうやら参考になったようで、メモを手に調理場へと向かっていた。

そんな彼女を見送った店主たちは一斉に俺たちに群がり、二人は試作品を次々と試食する羽目になっている。

揚げ物の露店をしている人には、から揚げとフライドポテト。

温かいスープが自慢の店主には、豚汁、シジミ汁、味噌汁を。味

噂が存在してなさそうだが、店主のインスピレーションを刺激したようで、何度も頷いていた。

双子の女性はスイーツを提供しているそうなので、鹿児島で食べたことのある透明の瓶に入ったクレープを取り出す。この自動販売機に置いてあるクレープは地元では結構有名らしく、種類も豊富で実はかなり美味しい。

クレープは女性陣にかなり好評で、色気たっぷりのシャリーイさんの店で働いている女性たちに受けそうだ。あそこの近くに露店を構えたら、結構儲かりそうな気がする。

そんな感じで、各店舗の得意分野に合わせた料理の提示と、二人からのアドバイスを聞いて各自メモを取り、あれやこれやとメニューの開発にこの場で取り掛かっている。さて、じゃあ、ここからは商売だ。

「あれ、ハッコンまた形変わったけど、これって卵？」

そう、今度は卵の自動販売機にフォルムチェンジをした。実は卵の自動販売機と言うのは意外とポピュラーで、日本各地で見かけることが多い。

食材の手配が上手くいってないそうなので、卵が飛ぶように売れに行く。更に地方で良く見かける野菜の自動販売機に変化すると、またも店主たちが奪い合うように購入していった。

スープパスタとクレープに必須なので、もちろん牛乳も販売しておく。ただ、生肉を売っている自動販売機には出会った経験がないのでどうしようもない。たぶん、食品衛生法に絡んでくるから日本では置けないのだと思う。肉の提供はハンターたちに頑張ってもらおう。

価格はかなり良心的な値段にしておいた。食材の販売は飲食店の店主たちにかなり好評だったので、週に一度だけ食材を販売する時

間を確保することに決定する。冬の間だけでも頼むと懇願されたので、了承することにした。

あれから三日が経過し、今日が飲食店で取り決めた一斉蜂起の日となる。

今日から飲食店の営業時間帯は食べ物を置くことを控え、彼らの活動を後押しする。飲料も彼らの新メニューに合いそうなものをチョイスしておいた。

勝負は鎖食堂が開店セールを実施中の一ヶ月。この間に客の流出を防ぎ、胃袋を鷲掴みにする。

鎖食堂は利益が出ないと判断すると、即座に撤退することでも有名ならしいので、開店セール中に売り上げが悪ければ、清流の湖畔層での出店を取りやめる可能性が高い。

やることはやったので、あとは結果を待つだけだ。各店舗が良く見える場所に配置してもらったので、今日一日じっくりと観察しておこう。

午前中は全店舗が準備に追われ、昼を迎える直前に一斉に活動を始める。

「今日から新メニューを販売するよ！ズユギウマをカラッと揚げた若者に大人気の一品！さあ、お試しあれ！」

「肉の旨味を封じ込めた至高の一品。ここでしか味わえない味だよー」

「こっそりした物を食べた後に、優しい甘さの可愛いお菓子はいかがですかー。中身の果物は自由に選べますよー」

大声を張り上げ、露天商の面々が呼び込みを始めている。

鎖食堂が出店してきてから二週間が過ぎ、客が目ぼしい料理はあ

らかた味を確かめたタイミングで、露店に見たことも聞いたこともない商品が並ぶ。

そして、露店に並ぶ料理の数々は常習性のある俗に言うジャンクフードばかりだ。栄養バランスも悪くカロリーも高い物ばかりになるが、この世界の人々は現代日本に比べてカロリーの消費量が半端ない。

そもそも、冬場は野菜を滅多に摂取できないのが当たり前の世界で、そんなことを気にすること自体が間違っている。この時期に野菜が入っていると割高になるので「栄養バランスを考えて野菜を入れました。だからお値段高めです」なんて言ったら客は寄り付かない。

ハンバーガーを置いてある露店は中にレタスを挟んでいるだけでも、贅沢なのに安いと絶賛されているぐらいだ。

露店ごとに特色が出るように料理が被らないようにしているが、今のところ、から揚げが一番売れ行きがいい。次いでハンバーガー、そしてたこ焼きっぽい物だ。蛸が無いので肉が入っているらしい。たこ焼きソースは俺が提供している。自動販売機で普通に売っていたので、生前何度か購入していた。

ハンター協会前の広場が露店地帯なので、依頼を達成して懐が温まっているハンターたちが即座に購入できるといふ立地条件もプラスになっているようだ。鎖食堂は広い敷地面積が必要なので、少し離れた場所に店舗を構えている。冬の寒い時期だとそこまでの移動すら億劫に感じる人が多い。

そして、露店から立ち昇る湯気と食欲をくすぐる匂い。この誘惑に耐える方が難しいだろう。味の方はラツミスとヒュールミのチエツクが入り、かなり自信のある仕上がりになっているようで、店主たちは自信満々だった。

「あれ、これは何なんだ」

露店で立ち食いをしていたハンターの一人が、店主に渡された名刺大のカードを渡されて首を傾げている。

「これは、一つ買ってもらったら判を一つ押すんだ。全て埋まると協力店で一銀貨分割り引いてもらえるって寸法さ」

「へえー、面白いな。って、ここの店だけじゃなくてもいいのか」

「ええ、店の前にこのカードの絵が描かれている店ならどこでも、いけますぜ」

これこそが秘策第二段。ポイントカードの導入だ。協力店と言うのはもちろん、あの会議に参加していた店主たちが経営する飲食店だ。

このポイントカードをどうやって彼らが思いついたのか。そのきっかけは俺だったりする。カードを入れてポイントが貯められる自動販売機というのは、今ではそう珍しくない。

そしてメーカーによっては商品を買う際にポイントカードを貰えるものもあり、俺はその機能を得て、実際にカードを落として理解してもらった。

まあ、店主たちは意味がわからなかったのだが、ヒュールミが使い方を理解してくれて、彼らに教えてくれた。ヒュールミの考察力には助けられている。

俺のにわか知識と二人のアドバイスにより、清流の湖階層の飲食店が奮起した結果、かなり優勢に事が運んでいる。目新しさで客を引き留めている状況だが、それでいい。短期間こちらが優勢であれば、鎖食堂は撤退してくれるのだから。

昼はこちらが圧倒的に優勢で、視察に来た鎖食堂の呼び込みが悔しそうに睨んでいたのが印象的だった。

夜は冷え込みが厳しいので露店は早々と店を閉めたのだが、昼にポイントカードを使える店を宣伝しておいたので、宿屋の臨時テントやポイントカードを使える店に人が流れ込んでいる。

昼とは逆に野菜をふんだんに盛り込んだスープや炒め物が、低価格で提供されているので、昼間こっそりした物を食べた人や、老人女性に人気のおうだ。

もちろん、低価格で提供できる理由は俺がギリギリの値段設定でやっているからなのだが。それでもポイントはマイナスになっていない。鎖食堂が撤退したらライバルになる飲食店に塩を送るような真似をしているが、それでいいと思っている。

ラツミスはハンターとして活躍をしたいという望みがあるらしい。今は集落の復興を最優先にしているが、冬を越えれば再びハンター活動を始めたいと思っている筈だ。なら、集落の食を安定させておいた方が、人も集まり集落が寂れることは無いだろう。

それに、ラツミスは俺に遠慮をしている節がある。俺が必要以上に集落から求められている状況なので、彼女が動きにくいという現状も打破したい。

とまあ、色々考えては見たが本音は……折角、異世界に転移したからには色々見て回りたいし、もっと異世界を堪能したいよな。

っと、お客が来た。まずは自動販売機の仕事をこなしてからだ。

「いらっしやいま　せ」

「よう、ハッコン。中々楽しいことしているな。ちょっと男同士……お前、男だよな？　まあ、それは今どうでもいいが。お前さんに、

相談事があるんだよ」

ケリオイル団長のいつもの軽薄そつな表情を見て、嫌な予感を告げる警報が鳴りやまなかった。

遠征と駆け引き

「冬が過ぎてからで構わないんだが、俺たちの遠征に付き合う気はないか？」

ケリオイル団長の急な申し出に俺は一呼吸もおかず、

「ごんねん」

と答える。その頼みごとは予想通りだったので、迷う必要がなかった。

俺が行くということはセットでラツミスもついてくるということだ。勝手に判断していい事案じゃない。彼女の判断に任せよう。

「相変わらず即答するな、ハツコンは。なあ、もしかして俺って嫌われているのか？」

「いらつしゃいませ」

「お前なあ……お得意様には愛想よく接するものだぜ。それに、こんなことは言いたくないんだが、お前さんを救出に行くときに進んで立候補したんだけどな」。別に恩を着せるつもりはないけど、ハツコンを救出するのに団員から怪我人もでただけどな」。いや、別にだからといって、どうこうってわけじゃないけどよー」

確かに団長というか患者の奇行団には借りがある。それは重々承知しているのだが、ケリオイル団長の胡散臭い雰囲気は苦手なのだ。ただの憶測なのだが、笑って人を裏切りそうな気がする、この人。

「ただ、相手の言い分もごもつともだ。愚者の奇行団が力を貸してくれたから、あっさり盗賊団を殲滅できたって話だしな。」

「いらっしゃいませ」

「お、少しは打ち解ける気になったか。まあ、ラツミスにも話を通してからってことだよな。雪解けまでには時間があるからな。のんびり考えておいてくれや」

そう言っただけでケリオイル団長は立ち去った。これって俺があれこれ頭を悩ませても意味がないな。ラツミスがどうしたいか、それだけだ。

って、今は打倒鎖食堂だった。夜も更けてきたので、各店舗も店じまいのようだ。先日までと比べて、どの店も軽く三倍を超える客入りだったと思う。大盛況とっていいだろう。この調子で二週間耐えることができれば、望みはある。

団長の話は取り敢えず置いておいて、集中しないとな。

あれから評判が評判を呼び、日に日に客が増えて行き、二週間も過ぎると客の大半をこちらが奪い返していた。

この数日、夕方から夜にかけて雪が降る日が多く、住宅地から近いハンター前広場の飲食店に暖を取りに入る人が増えたのも、ついていたな。

鎖食堂が開店してから一ヶ月が経過すると、あっさりと清流の湖階層の集落から撤退した。この引き際の潔さも大手チェインらしいといえば、らしいのだが。正直肩透かしをくらった気分だ。

店主たちは喜んでいたので、不満がある訳じゃないのだが。ここまで見事な引き際だと裏があるのではないかと疑ってしまう。何にせよ春に向けて、ハンターの活動時期に入った時の憂いは消えたかな。

そうそう、春になったら愚者の奇行団が遠征に付き合わないかと誘ってきた件なのだが、ラツミスと相談の結果、受けることにした。彼らの遠征は往復二週間かかるかどうからしく、目的はとある魔物の偵察及び、可能なら討伐となっている。

同行を決めた話し合いをした時は、ラツミスと俺とヒュールミもいたな。人に聞かせる内容じゃないので、幼馴染の二人で借りているテントに俺もお邪魔したのだったか。

「愚者の奇行団と言えば、超有名どころだ。それに同行できるのなら、喜ぶべき事態なんだが……大丈夫か？」

「うーん、団長さんは戦うのが怖ければハツコンを運ぶだけでいいって言ってたけど、私は戦いたい。そうじゃないと、うちはいつまで経っても強くなれないから」

ぐっと拳を握りしめるラツミスの横顔がいつにも増して真剣で、少し怖いぐらいだ。

傍から見ただけでも強い意志を秘めているのがわかる。何故、彼女が強くなりたいのかは、ヒュールミが話していた生まれ故郷の出来事が原因だとはわかるが、それだけにしては……。

「ラツミス。あんた、やつぱり 仇を討つつもりかい」

「うん。あの日、私たちの村を襲ったアイツを殺さないと、うちは自分を許せないっ！」

ラツミスの口から殺すという物騒な言葉が飛び出し、俺の体内でパーツが異音を上げる。俺が誘拐された時も怒りを露わにしていたが、殺意を漲らせた瞳を見ていると保温効果が壊れそうだ。

魔物が村を滅ぼしたという話だったが、アイツとは魔物の親玉なのだろうか。

「ラツミスが見たっていう、魔物を操っていた奴のことか」

「アイツは、あの男は、笑いながら魔物を操っていた！ おかんとおとんを殺した時も、嬉しそうにつ、笑ってたんやつ！」

叩きつけた拳が地面を穿ち、手首まで埋まっている。

彼女が向いていないハンター稼業を続けている理由が判明した。仇を討つたところで死んだ人が蘇る訳じゃなく、無駄な行ないだという人もいるだろう。

俺は偉そうなことを言える立場じゃないし、そんな経験をしたこともない。甘いことを言うなら、そんな殺伐とした考えは捨てて、ハンター稼業を営んで欲しい。

でも、こういうのは当人にしかわからない感情なのだ。同情はできるが、真に理解することはできない。なら、彼女の気の済むようにさせてあげたい。その為には自動販売機として尽力を惜しむつもりはない。

「なら、オレが何を言っても無駄か。愚者の奇行団なら何かあっても対応してくれる、と信じるしかねえ。それに、今は頼もしい相棒がいるしな」

口元に笑みを浮かべ、流し目を注ぐヒュールミに「いらっしやいませ」と自信満々に答える。音声は一緒なので、この気持ちが伝わっているかは怪しいが。

「心配してくれてありがとう、ヒュールミ。ハッコンもありがとう

な」

取り乱していた自分を恥じて、頭を掻きながらはにかんでいる。彼女の背にいる限り 結界 で守り通せるが、戦闘で他にも何か手伝えないだろうか。

盗賊団が貯め込んでいた硬貨を大量に吸収したので、ポイントが凄いいことになっているのだが、加護を覚えられるほどじゃない。もし、ギリギリポイントが届いたとしても、ある程度余裕を持ってないと、何があるかわからないからな。それは前回の誘拐事件で身に染みだ。

能力を得るなら機能一択だろう。幾つか候補があるのだが、消費ポイントが尋常じゃないので踏ん切りがつかないでいる。数万ポイントを注いで、予想通りの効果が期待できなかつたら、暫く立ち直れないくらい落ち込みそうだ。

「うじゃうじゃ、悩むのはやめとこうぜ。それに春までには、まだまだ時間がある。ってか、もう遅いから寝るぞ。明日も朝から瓦礫の撤去作業が待ってんだろ」

「うん。じゃあ、寝よっか！ あ、ハッコン今日はうちのテントで寝ていいからね」

「こんな美女二人と寝られるなんて、最高だろ」

確かに最高だけど、生身じゃないからな。間違いが起こることもない。

改めてテント内を観察してみるが、結構場所を取る俺が入っても邪魔にならないくらい、テント内部は広々としている。円形の中心部に一本支柱が建っていてテントの屋根部分を支えている、かなり

しっかりとして住み心地は思ったより良さそうだ。

室内にはタンスとベッドが二つずつ。頑丈そうで天板の広い木製の机。あと、工具と魔道具の部品らしいものが転がっている。あれは間違いなくヒュールミのだ。

女性二人が暮らす部屋にしては殺風景だが、机の上に置かれているカーネーションが辛うじて女性っぽさを演出してくれている。プレゼントして良かったよ。

「あ、ハツコンからもらった、お花は大切にしているからね」

「へええ、ラツミスにだけプレゼントを渡したのか。あー、オレって三日前誕生日だったんだがな！。そういや、今年は誰にも何も貰ってねえなあー」

「ああっ！ ごめん、すっかり忘れてた。明日、何か美味しい物食べに行こうね」

「ありがとよ、ラツミス。でだ、ハツコンは何かくれねえのか？」

半分冗談なのだろうが、彼女の知識にはお世話になっているし、これからも力を貸してもらいたい。そんな彼女に相応しい商品となると、実は既に決まっているのだ。

ただ、この商品は他の人に渡すと悪用されかねないので、周囲にバレずに渡す機会を窺っていた。なので、この状況は丁度いい。

「なーんてな。冗談だから、真に受けるな……おおおおおっ！こ、これはっ！」

赤と白の細長いボディに変化した俺を、抱きしめるようにヒュールミが掴んでいる。その瞳は爛々と輝き、口は荒い呼吸を繰り返

している。

目が怖い、目が怖い。食いつくとは思っていたが、ここまで反応を見せるとは。

「ガラス板の向こうに、色んな道具があるね。あ、ヒュールミが好きそうなのばかり」

そう、今回は工具の自動販売機だ。品は、安全メガネ、マスク、コンベックス（メジャー）、手袋、八種類のドライバースセット、撥水加工に優れたナイロンヤッケとなっている。

工具専門店の自動販売機なので品質も良く、手袋だって抗菌防臭加工を施し通気性に優れ滑り止めもついている。ヒュールミにしてみれば喉から手が出るぐらい、欲しい逸品だろう。

「ね、値段は幾らだ！ ラツミス、足りなかつたら貸してくれ！」

「え、あ、うん」

目を血走らせて迫るヒュールミの迫力に気圧されているな。こういった品は職人にも売れるのは理解しているのだが、技術の流出を何処までしていいのかが悩みどころなのだ。だから、基本的には消耗品しか置かない事になっている。

ヒュールミは悪用しないと信じているので、こつやって提供することに抵抗はない。

手持ちの現金を確認しているが、今回は誕生日プレゼントだから料金を貰う気はないよ。

商品一式を取り出し口に落とすと、全て掴み天に掲げるようにして「おおおおおおお」と声を漏らしている。あ、ラツミスが距離を取った。

「ハッコンマジでいいのか貰っても!」

「いらっしゃいませ」

「ありがとう、愛してるぜっ!」

感極まったヒュールミが俺のガラスに接吻をすると、踵を返して工具を机に並べて試している……って、びっくりした!。まさかキスされるとは。こういう時、触感が無いってのは辛いな。ま、まあ、悪い気はしないけど。

「ハッコン、嬉しそう……」

何を仰っているのでしょうかラツミスさん。何故、半眼でわたくしめを睨んでいらっしゃるのでしょうか。

「むうー」

頬を膨らませて拗ねている顔もなかなか、とか余裕を見せている場合じゃないな。

それからラツミスの機嫌を取る為に、あれやこれやと好きそうな商品をプレゼントしたのだが、一日不機嫌なままだった。

おでん缶

清流の湖畔層の冬はかなり厳しく、日本の豪雪地帯まではいかなが常時5センチぐらい雪が積もっている。これ以上、雪が降り積もるならテントでは潰れてしまう可能性があるので、1メートル以上の積雪は滅多にない……と信じたい。

この階層の魔物は冬になると地中深くで冬眠するらしく、ハンターたちも討伐依頼や素材集めが難しくなるので、集落に引きこもるというのが定番だと、おでんを食べながら門番のカリオスが零していた。

ただ、今年は復興作業があるので集落内で働き口に困ることがなく、いつもなら冬が訪れたら別の階層に移動するハンターたちも、ここに留まっている。ミルクティーを片手に青年商人が稼ぎ時だと嬉しそうに語っていたな。

俺はいつものようにラツミスが特定の場所で作業をする時は背負われて行き、夕方になったらハンター協会前で商品を売っている。飲食店が店を閉める時間になるまでは飲料だけを置いて、それからは食べ物も並べるといのがパターン化している。外気がとても寒いというのは理解しているのだが、俺には温度を感じる機能が無いので全く苦にならない。

あつ、気温を測れる機能を追加してもいいな。次世代自動販売機と呼ばれる高性能なタイプには気温を計測して、おすすめの商品を提示する物もある。

ポイントは……そんなに高くないか。これは選んでもいいかもしれないな。

「うー、さみいさみい。スープと煮物、煮物」

夜も更けて寒風吹き荒れる中、商品を購入しようなんて物好きは少ない。訊き慣れた声と状況から見て、門番のカリオスで間違いないだろう。

「ゴルス、お前は今日何にすんだ」

「甘いお茶」

「そればつかだな、お前は」

「お前も串で刺した煮物ばかりだろ」

今日はカリオスとゴルスが門番担当なのか。寒い中ご苦労様です。彼らは温かい商品を購入した後、暫く懐ふとろや服の内ポケットに入れて、カイロ代わりにするので、ちょっと商品を熱めに設定しておく。

「今日もあつつあつだな。ありがとよ、ハッコン」

「感謝する」

「ありがとございました」

彼らは俺が気をきかせて温度調整をしていることをわかっているようで、いつもこうやって、お礼を口にしてくれる。

この集落に来てからラツミスの次に言葉を交わしているのが、この二人かもしれない。まあ、一方的にカリオスが話して、俺とゴルスが相槌を打っているだけなのだが。

背を丸め厚手のコートコートの襟を立てた二人が、闇の中に消えて行く。彼らを見ていると門の近くに設置して上げたいのだが、ラツミスが

離れることを拒むので彼女たちのテントが見える、この定位置から夜から朝にかけては動くことが滅多にない。

いつもの二人を見送ると、視界の隅に赤い何かがすっと入り込んできた。

ああ、またか。

それは血のように赤いワンピースを着込んだ一人の女性。といっても、半袖ではなくゆったりとした長袖に丈の長い服で、たぶん中は厚着をしていると思う。

首に巻き付いているマフラーも真っ赤で、靴、手袋も同様に赤く染まっている。そんな女性の顔なのだが、よくわからない。

長い黒髪は腰の下まで伸び、前髪は鼻先まで伸びている。唯一見える口も真っ赤なルージユが塗られている。

深夜に赤一色の服装で佇む不気味な女性。普通なら悲鳴の一つも上げて逃げ出してもおかしくない場面だが、俺は動けないし、悲鳴を上げる機能もない。

そして何より 見慣れてしまった。

この女性、結構頻繁に現れるのだ、それも夜にばかり。

夜の常連と言っただけでも珍しいのに、この格好だ。嫌でも覚えてしまう。夜に女性が一人で出歩くのは危険だと思うのだが、この女性に声を掛ける勇気がある人がいるのかと問われたら返事に困るな。

いつものように、おでん缶を購入すると、すーっと闇の中へと消えて行く。

自動販売機に転生する奴がいるぐらいだ、お化けが存在しているも不思議じゃない。でも、あの女性は実体もあるし、ちゃんと生きている。それに、おでん缶を手にとった瞬間、口元に笑みを浮かべるのだ。余程のおでんマニアなのかもしれない。

どんな人でもお客には変わらない。それに、誰もいない場所で一

人 いや、一台佇んでいるよりは寂しくないので助かっている。
それにしても今日も寒そうだな。

「ふうー、くっそ寒いのに夜中担当かよお」

「諦める」

今日も丸坊主カリオスと角刈りゴルスは夜中の見張りらしい。二人はこの集落の衛兵の中でもかなり腕が立つので、稀に凶悪な魔物が出没する夜に回されることが多い。

「さみいなあ。マフラーもう一本巻き付けとけば、よかったぜ」

「相変わらず悪趣味な色だ」

「はんつ、何とでも言いやがれ。俺の幸運を呼ぶ色は赤だからな。
昔、よく当たる呪い師に教えてもらったんだぜ」

正直、厳ついオッサンに赤のマフラーはどうかと思うが、人の好みはそれぞれ。当人が気に入っている物を着るのが一番だ。

「赤と言えば、あの噂があった」

「ああ、真つ赤な女の幽霊って奴か。最近深夜に目撃したって話を
そこら中で聞くな。有害な幽霊なら退治しなくちゃならねえが」

この世界では幽霊ってのは恐怖の対象でもあるが、討伐可能な存

在なのか。さすが異世界だ。この二人は怯えている素振りを全く見せていない。

噂の幽霊って確実に、あの女性の事だよな。俺も初めはお化けかと勘違いしたから、噂になるのも頷ける。

二人はいつものおでん缶とミルクティーを手に取り、門の方向へと速足に向かっていった。そんな二人の姿が消える直前に、視界に割り込んできたのはいつもの赤い服の女性だ。

今更なのだが、彼女の出現条件に付いて気づいたことがある。彼女はいつも、あの二人が現れて直ぐにやって来る。そして、おでん缶を握りしめたまま、二人の後を追うように門の方向へと消えて行く。

流石に、ここまで情報が揃うと俺だって感づく。この赤い服の女性にはカリオスが好きなのだろう。好物のおでん缶を買い、好きだと言っていた赤色の服で全身をコーディネートする。

若干ストーリーカー気質なところが怖いが、遠くで見守っているのだから害はないだろう……たぶん。

じつと観察していると強めの寒風が吹き、彼女の前髪を掻き上げる。その下から現れた顔を見て俺は息を呑んだ。

澄んだ瞳に形の良い鼻。頬を赤く染めた表情はとても魅力的に見えた。思わず自動販売機用防犯カメラで録画してしまうぐらいに。

「カリオス様……」

初めて聞く彼女の声はか細く、夜風に掻き消されそうだったが、想いを秘めた熱を感じさせた。

確かカリオスって恋人も嫁もいなかったな。結構本気で口説けば落ちそうな気がするのだが、そんな勇気は彼女にはなさそうだ。それに相手の好みもあるだろうから、俺は温かく見守るしかできない

か。

おでん缶を握り締めたまま、ふらふらとカリオスの後を追うように、彼女もまた門の方向へと歩み去っていった。

「よし、今日は非番だぜっ！ 何すっかな」

カリオスが声を張り上げ、スキップでも踏みそうなくらい浮かれた様子で俺の前に現れた。私服のカリオスを始めて見たが、まあ普通だな。ただ、赤のマフラーが浮き過ぎていて、昔の仮面なんたらの一号みたいだ。

「あの道具屋で備品でも購入したらどうだ」

ゴルスは今から見張りのようで、いつもの格好でミルクティーを購入している。

「おー、そ、そうだな。お前が言うなら、道具屋に行くか！」

あれ、何かソワソワしだしたぞ。ガラスに映る自分の姿を凝視して、服装に乱れが無いかチェックしているな。

それを眺めているゴルスが小さく「ふっ」と笑っている。

「よ、よし、じゃあ何か手土産でも……あっ」

「あ、あら、カリオスさん」

偶然通りかかった女性を見てカリオスの背がぴんつと伸びた。女性の方も両手に荷物を抱えたまま硬直している。

「ぐ、偶然ですね。今から道具屋に向かうところだったのですよ」

「そ、そうなのですか。私も今から戻るところで。あつ、そのマフラー鮮やかな赤で素敵ですね」

「そうですか。実は赤が好きです」

カリオスの口調が丁寧で違和感しかない。寒空だというのに額とこめかみに汗が浮かんでいる。かなり緊張しているようだ。

女性も視線が定まらず若干挙動不審だな。あれ、この二人もしかしていい感じ。あ、この女性の顔……見覚えが。カチューシャで前髪を上げているので丸見えなのだが、あの赤い服の女性だよな。防犯カメラの映像と照らし合わせてみたが間違いない。

あれっ、もしかして相思相愛なのか。何だろう、祝福したいと思う反面、何故かいらっとする。

「カリオス、道具屋に行くなら荷物を持って差し上げたらどうだ」

おお、ナイスフォローだゴルス。

「そ、そうだな。宜しければ、荷物持ちますよ」

「あ、ありがとうございます」

荷物を受け取り、二人は肩を並べて歩み去っていく。その背を見つめていたゴルスは大きく息を吐いた。

「やれやれ、さつさと付き合えばいいものを」

「いらつしゃいませ」

俺もそう思うよ。ゴルスに同意しておいた。

深夜、いつもの二人が自動販売機の前から立ち去ると、またも赤一色の女性　道具屋の店員が姿を現す。いつものようにおでん缶を握り締め、カリオスの背を見つめている。

「カリオス様。この想いをどうやって伝えれば」

正に恋する乙女だな。

ゴルスの話によると彼女は以前、集落内で素行の悪いハンターに暗闇へと連れ込まれそうになったところを、カリオスに助けられたそうだ。

それをきっかけに何かと話すようになり、気が付くとカリオスが本気で惚れてしまっていたらしい。豪快な性格のくせして女性には奥手らしく、中々一歩を踏み出せずにと今の関係が続いている。

道具屋の女性も、その一件以来カリオスが気になるようで、傍から見ていればもどかしい関係でゴルスは何とかしたいと考えていた。

うーん、切っ掛けか。男性から声を掛けるのがベストなんだが、あんな厳つい顔して彼女の前では緊張して碌に話せていないからな。となると、彼女からアプローチをする理由があれば……ん、ああ、あれいけるんじゃないか。

「はあ、今日もこうして貴方の好きな赤に身を包んで、後姿を見つめることしか……えっ」

一人語りを始めた彼女を無視して、俺は身体を変化させる。飲食店に野菜を提供する時の自動販売機へと。

「これはお野菜？」

小首を傾げている彼女の前で大根が納められている、ガラス張りのロッカーのような蓋を開いた。

「あ、え、これを受け取ったらいいのかしら」

「いらっしやいませ」

おどおど大根を受け取った彼女を確認してから、今度は卵販売モードに変化した。そして、同じように卵を一パック提供する。

続いて今度は竹輪も取り出し口に落とす。今更だが自動販売機の商品の豊富さには驚かされる。これはとあるパーキングエリアで見つけた物だ。

そして、最後にいつもの自動販売機モードに戻り、マニアックだがかかり気に入っている商品を並べた。ペットボトルに入ったアゴ出汁だ。

これは大阪の自動販売機で発見したのだが、値段が少し高い方はアゴ　つまりトビウオのことなのだが丸々一匹入っている。

「あ、あの、ええと、こんなにも頂いて、あの、どうしたら」

止めにおでん缶を取り出し口に落とす。それを見て、彼女は目

を見開き俺を凝視している。気が付いてくれたようだ。

「この食材で、この煮物を作れということですねっ」

「いらっしやいませ」

「あ、ありがとうございます！ これで、あの人を振り向かせてみせます！」

全てを理解した彼女は俺に何度も頭を下げて、いつもとは違う門とは逆の方向に走り去った。彼女の一途さを見ていると上手くいつてほしいが、カリオスに春が来るのかと思うと、いらっとするのは仕方のないことだと思う。

「ゴルス、ハツコン恋っていいぞ！ 毎日が輝いて見える！ あ、そうそう、昨日なんだけどよ。彼女がまた手料理を作ってくれて、それが旨いのなんのって」

数日後、おでんを作った彼女が食事にカリオスを誘い、それをきっかけに急接近した二人は恋人となった。それからというもの、毎日、俺とゴルスに惚気話を聞かせるのだ。

ゴルスは心底うんざりした顔で冷たい視線を注いでいるのだが、カリオスは全く気付いていない。毎回毎回、よくも飽きずに彼女のことをこれだけ褒められるな。若干どころか、かなりうざい。仲を取り持ったことを少し後悔しそうだ。

「てなことがあってよ。あ、そろそろ見張り交代の時間か。なら、

いつもの買っていくか。彼女の手料理には劣るが、これはこれで旨いからなっ!」

浮かれ調子のカリオスがいつものように、おでん缶を購入して取り出そうとした。

「ひいうあっ! 冷てええ! な、なんだ、ハッコン温まってないぞ!」

けっ、冷えたおでんでも食ってやがれ。

春が来て

「カリオスさん、襟が曲がっていますよ」

「お、おう、ありがとう。今日は遅くなると思うが、寂しくても泣くんじゃないぞ」

「はい。貴方の好きな煮物に卵をいっぱい入れて待っています。怪我にはくれぐれも気を付けてくださいね」

「お前を残して行くのは辛く、身が張り裂けそうだ……だけど、これも仕事だ。すまないっ」

「ええ、私もあなたと離れたくありません。ですが、貴方の仕事の邪魔をしたくはありません。涙を吞んで」

いい加減やめてもらえませんか。毎日毎日、色ボケカップルが自動販売機の前でイチヤイチャするのを。

相棒のゴルスが額に手を当てて疲れ切っているじゃないか。二人で門番をすることが多いので、惚気話を延々と聞かされているのだろ。可哀想に。

「ムナミさん、今日もいい天気ですね。最近では日差しも暖かくなつてきて、絶好の散歩日和です」

「そうね。今日はお店の方は大丈夫なの？」

もう一組厄介なのが来た。青年商人と宿屋の自称看板娘ムナミだ。

こっちは恋人同士とまでは発展していないが、ムナミが客に接する口調ではなく、友達として話しているようなので、以前と比べたらかなり仲良くなっている。

そして、揃いも揃って何故、俺の前で雑談を始める。はあ、最近気温が高くなってきた春の訪れを感じるようになったかと思えば、春真っ盛りの方がたむろするという事態。

春だねえ。と和んでいる場合でもないか。そろそろ、ハンターが活動する時期だ。そう、ラッミスが愚者の奇行団との遠征に参加する約束の。

「ハツコン、調子はどう？」

「おっ、今日も売れ行きは順調みたいだな。今日はあつたけえから、冷たいしゅわしゅわしているのいくか」

噂をすれば何とやら。ラッミスとヒュールミがやってきた。

カップルたちは、いつの間にか何処かに行ったようだ。仲がいいのは結構なんだが、ほんと、他所でやって欲しい。こっちは生身が無いので恋愛なんて無縁なのだから。

別にう、羨ましい訳じゃない。今度彼らの仲を祝福して温かい炭酸飲料をプレゼントしてあげよう。

「ハツコン、明日出発になっているけど、大丈夫かな？」

「いらっしやませ」

前々からわかっていた事なので、今更断る理由もない。

心配は尽きないが、彼女は強くなることを望んでいる。俺と彼女は一心同体のような関係だ。足りないところは互いに補っていくしかない。

ってまあ偉そうに語ってみたが、俺の方が圧倒的に足りないけどね。足も手もないからなあ。いつもお世話になっております。

「そうか、明日からだったか。愚者の奇行団の仕事に同行するって話だったよな」

「そつだよ、ヒュールミ。ええと、確か、鰐人魔がくじんまの様子を探ってくるって話だよ」

「鰐人魔。清流の湖階層に生息している三大勢力の一端か」

ヒュールミの言う通り、この階層に生息する魔物は大きく三種類に分かれている。カエル人間こと蛙人魔。集落を襲った蛇双魔。そして、二足歩行するリザードマンではなくワニ人間、鰐人魔。

どうやら、蛙と蛇と鰐が住む階層らしい。蛙と蛇が出てきたところで、もう一種類いると知った時は三すくみを思い出し、ナメクジだと想像していたらワニだった。

よく考えたら湿地帯なので、ナメクジがいる方が変なのだが。

「蛙人魔と蛇双魔を倒しちゃったから、鰐人魔が増えすぎてないか、その調査みただよ。討伐は二の次で、どれくらい脅威になりうるか調べて来るって言った」

三大脅威の内の二つが甚大な被害を受けたので、ここでワニの生息地を調べて増えすぎているようなら、討伐隊を組む予定らしい。

階層には生態系があり、それを無暗に崩すと何かしらの異変が起ころのが定番で、三年前の大惨事も魔物たちの勢力の均衡が崩れた結果だそつだ。

「今の内に調べておかないと厄介なのは確かだな。王蛙人魔が現れ、

巨大な蛇双魔まで現れたって話だ。この階層に何かしらの異変が起こっているのかもしれないぜ……ラツミス、ヤバそうなら撤退しろよ」

「うん。危なくなったらハッコンと一緒に逃げるよ。ねえ」

「いらっしやいませ」

結界をいつでも張れるように、遠征中は常に警戒を忘れないでおう。

普通なら色々と準備が必要なのかもしれないが、俺は特にするところがない。新商品を調べて、その場の状況に合わせて商品を出せるようにするぐらいか。あつ、商店に食材を卸しておくか。

あと、ムナミの店舗に飲料を安めに売り捌いておこう。暫く集落から離れることになるので、常連客が補充できるようにしておくかないとな。

集落中に患者の奇行団と俺たちが遠征に出ることは知れ渡っていたよう、今日は深夜まで客が現れ、買いだめしていく者が多かった。

次の日の朝、俺の隣でラツミスとヒュールミが朝食を取っている。ラツミスは遠征に備えて革鎧とブーツを身に着けているのはわかるが、他には腰に小さな袋をぶら下げているぐらいだ。あと、俺を運ぶ為の背負子ぐらいか。

食料は俺がいるので問題は無いし、灯りも俺が照らしたら大丈夫。寝る時も俺の近くにいれば保温機能が働くよう、寒さ暑さも緩和できるので適温が保たれる。何ならバスタオルを出してもいい。

となると道具は殆ど必要ないのか。それに俺を背負っているから、どっちにしる大きな荷物は持てない。必要最低限の道具は愚者の奇行団が用意しているそうなので、そんなに心配はいらないか。

「おーっす。ラツミス、ハツコン。準備は万端か」

声と共に現れたのはトレードマークのテンガロンハットを斜めに被り、無精ひげを蓄えた気障っぽい男、ケリオイル団長だ。隣には青髪の副団長フィルミナさんもいる。

「皆さん、おはようございます。問題がなければ、門に荷猪車を待たせていますので」

「はい。大丈夫です。ハツコン行こうか。よいしょっと」

いつものように軽々と背負われて、団長と副団長の後ろをついていく。冬はずっと集落内だったから、久しぶりの外だな。最近は異世界と言うよりはファンタジー映画の撮影所にいる気分だった。

冬場は武装している人も少なく、素朴な格好をしている人が多かったので、たまに異世界であることを忘れそうになる。まあ、熊会長や他にも動物の顔をした人が稀にいたので、現実に引き戻される訳だが。

この世界の獣人は猫耳や尻尾だけといったファンシーな存在ではなく、そのまんま動物の顔をしている。カエル人間もそうだが、動物の骨格だけを何とか人間っぽくした存在が一般的らしい。

「壁の中で暮らすつてのは窮屈だよな。たまには外に出て息抜きしねえと、腐っちまうぜ」

「いらっしゃいませ」

と返事をしておいてなんだが、ヒュールミが隣に並んで歩いているのに今気づいた。見送りでもしてくれるのか。

「あれが、奇行団で所有している荷猪車です」

フィルミナが指差す方向には、巨大な一匹のウナススが引く荷猪車がある。門から少し先に停めているので、近くにはカリオスとゴルスがいて、団員らしきハンターと雑談をしていた。

「おつ、ラツミス、ハツコン。気を付けて行って来いよ。あ、ちょっと待て。幾つか補充しておくぞ」

「俺も買っておくか」

暫く会えないだろうからな、買い溜めを推奨するよ。

大量に購入してくれたので、ちよつと確率を弄ると当たり付きのスロットにゴルスだけ当たっていた。最近リア充アピールがうざいからって、鼻屑したわけじゃない。

「あつ、団長連れてきたんですね。ラツミスさん、ハツコンさん、よろしくー」

「おう、二人……一人と一台？ 歓迎するぜ、よろしくなっ」

「よろよろー」

この団はアットホームな関係らしく、一応上下関係はあるようだが基本的に馴れ馴れしい人が多い。愚者の奇行団の同行する面々は団長、副団長、カエル人間討伐の時にいた狩人っぽい女性。あと双

子らしきノリのいい二人の青年だ。

「よし、出発すんぞ。さっさと、準備しろ」

幌付きの荷台で寛いでいた双子を急かすように、ケリオイル団長が車輪に蹴りを入れる。双子が御者席に回り、団長と副団長が荷台に乗り込む。

「ラツミスとハツコンも乗っていいぞ」

「ううん。うちはこのまま走るよ！ その方が鍛錬にもなるし。それにハツコン置いたらウナススが辛いと思うし」

まあ、大人数人分の重量だからな。全員乗りこむよりも負担が大きいかもしれない。

「んじゃ、オレが代わりに乗るか」

そう言っただけで見送りに着た筈のヒュールミが荷台に飛び乗った。つて、えええつ。

「え、ヒュールミも来るの？」

「おうさ。化け物の生態調査となるなら、知識豊富な者がいた方がいいだろ。ちゃんと熊会長から依頼を受けているぜ」

俺たちを驚かす為だけに黙っていたのか。そっぴや、俺たちを心配する素振りをおぼろげに見せてなかったな。

名前はあれだが腕は確かな患者の奇行団が護衛代わりになってくれるので、戦闘力が無いヒュールミでも大丈夫だとは思いますが、魔物

がいる異世界は何があるかわからない。

傍にいる時は守ってあげられるが、ラッミスと移動することがメインだから、基本は荷台で隠れていてもらうことになるだろう。

冒険か……自動販売機として異世界に転生して、普通なら物を売るだけの鉄の箱として一生を終えるだけだった俺が、こつやって迷宮内を探索できるようになるとは。

人生 自動販売機生、わからないものだな。

荷猪車と変わらぬ速度で走るラッミスの背に揺られながら、遠ざかっていく集落を感慨深く眺めていた。

旅のお供に

草原とぼつぼつと雲が浮かぶ空を眺めながら、俺は少女に運ばれている……深く考えたら負けだ。

朝早く出発してから三時間が過ぎたぐらいで一度、小休憩を取ることになった。

巨大なウナスはまだまだ余裕があるようだし、並走していたラツミスも疲れた素振りを見せていない。改めて思うのだが、とんでもない身体能力をしているよな彼女は。

それなら休憩は必要なさそうなものだが、どうやらトイレ休憩のようだ。この面子は女性の割合が多いので、用を足す場所やタイミングが問題なのか。男みたいに小ならそこら辺で立って済ますという訳にはいかない。

ゲームとかではわからなかった女性ならではのリアルな問題か。あれ、そう言えばこんな状況に適したあれがあったな。

機能の欄の下の方にあつたソレを選び出すと、ポイントを消費して手に入れる。そして、すぐさまその仕様に変更する。

既に荷台の隣の置かれていたのだが、フォームが変化する俺の姿を見て双子と狩人っぽい女性が、あんぐりと大口を開けている。この人たちは見たことが無かったのか。

「あれ、ハッコンまた何か新機能を見せてくれるのか。ん？ 何だ、横になんか追加されてるぞ」

ヒュールミの言う通り、今回は本体が変わるのではなく、俺の隣に新たな物体が出現したのだ。それは細長いロッカーのような物で、高さは俺と全く同じ。

下半分はゴミ箱になっている。上半分はめ込み式の蓋があり、それを外すと中に折り畳みの椅子、段ボール、長くて細い段ボールが収納されている。

「何だこれ。ハツコンがこのタイミングで出したって事は、何か意味があるんだよな」

「いらっしやいませ」

「取り敢えず、開けて中身出していいか？」

「いらっしやいませ」

ヒュールミが物怖じせず中身を取り出していくと、ラツミスと愚者の奇行団が興味津々といった感じで覗き込んでいる。

「これは、畳める椅子か。でも、何で座るところに穴が空いていやがんだ？ この不思議な手触りの箱の中には妙な手触りの紙？ 開けていいんだな」

「いらっしやいませ」

「好き勝手にやるから、ダメなら止めてくれよ。でだ、この頑丈な紙は袋状になっている」

「ねえ、ヒュールミ。その袋ってその穴のあいた椅子にぴったり納まらない？」

「んー、おつ。丁度だな。でかしたラツミス。で、他にはこのデカくて細い箱か。これも開けるぞ……中に透明の袋があって、その中

に……うおおっ」

ヒュールミが取り出したそれは、ぼんつと音と共に三倍の長さに伸びる。それは折り畳み式のテントなのだが、広げるだけでいいという便利仕様の品だ。

「び、びびったぜ。これは予め形が定まっていて、少し触るだけで元の形に復元されるのか？ 魔道具の一種かも知んねえな」

驚きながらも好奇心が勝ったようで、腰が引けていたが何とかその小さなテントを広げられた。

「独りがすっぽり入れる大きさのテントらしき物体。穴の開いた椅子と袋……おいおい、まさかこれ、簡易トイレか！？」

ヒュールミが叫ぶと、女性陣の目の色が変わった。

そう、これは災害対策サービスとして自動販売機の隣に設置されている、災害用簡易トイレなのだ。近年大災害が多発し、トイレが深刻な問題になっていた。そこで、自動販売機メーカーがサービスとして、簡易トイレが入った箱を設置するところにしたという訳だ。

まだまだ数は少ないが、俺はこういった心がけをしているメーカーは純粹に応援しているので、見つけたら商品を何か買うようにしていた。

「この小さなテントは蓋が出来るから、人に見られることもねえ。それにこの袋は使用後に閉じれば臭いも漏れない」

「そ、それは本当ですかっ！」

副団長のフィルミナさんが珍しく大声を上げ、説明をしたヒュー

ルミに迫っている。

「お、おう。たぶん間違いないんじゃないか。袋の底に敷いてある物から香りがするのは、消臭効果を狙っていいそうだな。なあ、ハッコン」

「いらつしゃいませ」

「だ、そうだぜ」

目の色を変えた女性陣が我先にと簡易トイレに殺到する。まずは、ちゃんと使えるか試す為にヒュールミが入り満足げな顔で出てくると、女性陣が一行に並んだ。

「ハッコン。これマジでいいぞ。これなら金貨出しても欲しがらハンターいるんじゃないか」

女性のトイレ事情は俺が思っていたよりも切羽詰っていたようだ。これって災害用のサービスだから、料金は取れないんだよな。まあ、その後、トイレを利用したハンターたちが、お礼を口にして飲料を買ってくれたので、それでいいか。

「どうよ。俺がハッコンを勧誘したから、こんな便利なトイレ使えただぜ。さあ、もっと団長である俺を褒め称えるがいい」

「これはハッコンさんが凄いのであって、団長の手柄ではありませんん」

フィルミナさんにぴしゃりと言い捨てられ、立ち去る団長の背中が少し寂しそうだ。

簡易トイレは大盛況で使用後の袋は地面を掘った穴に埋められた。商品で出した物は任意で消すことも可能なので、土壌汚染を考えて袋は消滅させておいたから汚物はいずれ土に還るだろう。

簡易トイレセットは再び折りたたまれて荷台に載せられている。災害セットもポイントを消費するので、これは消さずに彼らに所持しておいてもらおう。遠征が終わったら回収させてもらうけど。

「ついでに早めの昼食取っておけよ」

さあ、ここからが本来の出番だ。ずらっと並べた商品は集落で売っている値段の半額以下で提供している。普通はこういった状況なら値段を高め設定しても売れそうなのだが、事前に愚者の奇行団から報酬を約束されているので、こういったサービスをおけば、ラツミスが今後ハンター活動をする時の良い宣伝になる筈だ。

「穀物を固めて焼いたのうめええ」

「お、マジマジ。この濃い味付けのパスタもいけてるぜ」

双子青年ハンターが仲良く分け合って食べている。片方の髪色が赤で、もう一人が白色だ。心の中で紅白とコンビ名をつけておこう。ちなみに彼らはそのまま「赤」「白」と呼ばれている。

「はああ、こんなに美味しい物を遠征中も食べられるなんて、参加して良かったっす」

射手の女性は襟首が見えるぐらいのショートカットで一見男性のように見えるが、声が甲高くアニメの萌えキャラのような声をしている。

彼女の前にはたこ焼き、焼きそば、カップ麺、から揚げ、2リッ

トルコーラが置かれている　いや、置かれていた。それはもう空で中身は全て消えている。小柄な女性だというのに、それを一人で平らげたのだ。大食いチャンピオンもびっくりの食べっぷりだったな。

「シユイは相変わらず大食いね。ハツコンさんのおかげで、今回は食料の残りを心配しないで済むわ」

青く波打つような髪を指で弄りながら、フィルミナ副団長がため息を吐いている。

これだけ大食いだと長期にわたる遠征とかだと、すぐさま食料不足に陥りそうだ。

「今回は魔物を捕まえて丸焼きにしないでいいのだった」

「ああ、良かった……本当に良かった」

紅白双子が抱き合って喜んでいる。毎回、魔物捕まえて食ったのか。蛇は美味しそうだったけど、カエル人間はどうなんだろうか。そういや、ラツミスと初めて会った時も、カエル人間を捕まえて食べようとしていたな。

異世界の住民は魔物を食べることに殆ど抵抗が無いのか。基本的にはハンターが屋外で食べる物は、乾物が塩味に香草を入れる程度の料理らしいから、自動販売機の料理に感動するのも理解できる。

簡易トイレといい、ハンターのチームに臨時で同行して商売をしたら、かなり利益を得ることができそうだな。自動販売機の俺を運ぶ人手がいるので、ラツミスが危害を加えられる可能性も減りそうだし。

でも、安全性を考えるなら、この患者の奇行団のような有力な八

ンターの一団に所属するのが一番なのだが……うーん。俺が頭を悩ませたところで、判断をするのはラツミスか。助言の一つもできないが、今回の遠征でこの一団を見極めさせてもらおう。

なんて決意を胸に秘めたのはいいのだが、今のところ特に何もない。休憩後に再び行進を開始したのだが、時折姿を現すカエル人間や小さめ、といったも大人ぐらいの大きさの双首の蛇は、遠距離から矢と水の魔法で射抜かれている。

それ以外にも、たまに幌の上で寝転んでいる団長から投げナイフが投擲され、魔物が頭からナイフの柄を生やし仰向けに倒れていく。格が違うな。若手のハンターたちが憧れるのも納得だ。彼らの戦いぶりは王蛙人魔の時も目撃したのだが、余裕のある状態で観察していると思わず感嘆の息を吐きそうになる。

敵が接近することがないので、今のところ双子とラツミスに戦闘面で出番はない。

「ハツコン。うちも何かしなくていいのかな。石でも投げた方が良くない？」

投擲か。基本的に不器用だけど、あの有り余っている怪力を生かすのはありだよな。何か投げるのに適した商品あったかな。

俺に鎖でも巻き付けて振り回してもらえば、かなりの攻撃力が期待できるが、ラツミスは絶対にやらないよな。うーん、投擲武器か。昔懐かし瓶ジュースはどうだろう。あれなら適度な重さと硬さがあるので、威力も期待できそうだ。大きさも手ごろだから、投げやすい筈だ。

物は試しだと瓶ジュースを仕入れて、一本落としてみた。

今は前向きに背負われているので、無理な体勢だが手を伸ばすと取り出し口に手が届くので、ラツミスは歩きながら何とか抜き出した。

「ん？ これってしゅわしゅわするジュースだよ。あれ、入れ物がいつもと違って固いよ」

「それを投げて使えってことじゃねえか」

荷台から顔を出したヒュールミが助言してくれた。

合点がいったようで、ラツミスがポンと手を叩き大きく頷いている。丁度いいタイミングで、前方に一匹のカエル人間が現れたので、手にした瓶ジュースを振りかぶって投げる。

あらぬ方向に飛んでいった瓶ジュースは雑草の中に消え、カエル人間が呆れた顔で肩を竦めていた。

「うぬぬぬ、悔しいいい」

やっぱり怪力を持って余しているな。投擲は可能だけど精度はお察しくださいということか。もういつそのこと俺を投げてもらった方が命中しそうな気がする。

まあ、カエル人間はその後、あっさりと矢に脳天を射抜かれて倒されたわけだが。ラツミスの出番は当分なさそうだ。

ワニと対処

荷猪車を岩山の窪みに停めると、幌の上で寝転びながら全身を伸ばす男がいた。

「ふあああああ。奴らの生息域に入ったから、お前ら警戒しておけよー」

「じゃあ、団長も幌の上から降りてきてくださいよ」

「下から槍で突くか」

いいと思います。ナイスな提案だ紅白双子。

集落を出てから二日が過ぎ、三日目を迎えた。太陽だと思わしき星が真上に達しようとした時刻に、鰐人魔のテリトリーに入り込んだようだ。

「団長、いい加減に降りてください。我々の目的は偵察と調査なのですよ」

「へーい。つたく、怒りつばいな副団長は」

帽子が飛ばないように右手で押さえ、ケリオイル団長が飛び降りてくる。悔しいことに、その動作がさまになっていて少しカッコいいと思ってしまった。

「んじゃま、赤と白。偵察頼んだぞ」

「わっかりましたー」

「あいあいさー」

この二人は偵察担当なのか？ 見た感じはリア充グループに一人は居そうな盛り上げ担当のキャラなのだが。うえーいうえーい、言っているのが似合うタイプだ。

顔は悪くないのに軽薄な口調とノリの軽すぎる性格なので、間違ってもラツミスとヒュールミが惚れるということは無さそうだ。

得物は赤が短めの槍。白が小剣か。防具は分厚い素材のワイシャツのような感じで、茶色が抜けかけた色合いだ。かなり使い込まれているのか。

おっ、表情がすつと消えた。目つきが鋭くなり、纏う雰囲気が一瞬で変わる。常にこんな感じならモテるだろうに。

姿勢を低くして二人が丈の長い雑草の中に消えていく。湿地帯なので歩くだけで足を取られかねないというのに、音も立てずに走っていたな。見た目に反してかなり優秀な人材なのか。

「んじゃ、暫くのんびり待つとするか。ハッコン旨そうな菓子はねえか」

「私は甘いお茶を」

「いらっしやいませ」

団長も副団長も寛ぎタイムだな。心配なんて微塵もしていない。もう一人の団員であるショートカットの女性も弓の調整をしているだけで、消えて行った二人を全く気にしていない。信頼されているのか。

ラツミスは俺の裏側にもたれかかって気持ち良さそうに昼寝をしている。ヒュールミは缶の仕組みが気になるようで、一口も飲まずに弄り回してはメモ帳に書き込んでいるな。

鰐人魔がうるつく地帯で無防備すぎるが彼らの腕は一流だ。俺が警戒する必要性はないのかもしれない。だけど、前回のミスを二度と繰り返さないように油断だけはしないぞ。

太陽が半分以上沈み、愚者の奇行団の面々が野営の準備を始めている。ラツミスも手伝おうとしていたのだが、やんわりと断られていた。彼女は怪力過ぎて備品や道具を壊すことがあるので、それを警戒してのことだろう。

少し寂しそうに俺の隣に座り込んだので、温かいミルクティーをプレゼントしておく。

そんなに気にしないで、ドンと構えていればいいんだよ。ヒュールミを見てごらん、腹を丸出してぼりぼりと豪快に搔きながら爆睡しているぞ……あれは見習わなくていいか。

「戻ったよー」

「たっだいまー」

うおっ、びっくりした。紅白双子がいつの間にか俺の隣に並んで立っている。自動販売機に気配が読めるのかは不明だが、全くこれっぽっちも気づかなかった。

「団長。調べてきたよ」

「ご苦労さん。もう少しで飯だから、その前によろしく」

「あいあいさー。ええと、ここから北東に二時間ぐらいだったかな赤」

「そうだな、白。そこは小さい沼があつて、三十匹ぐらいバチャバチャしてたよ」

お互いに赤と白と呼び合っているとは。いい加減な説明だけど、こんなので大丈夫なのだろうか、少し心配になる。

「三十匹の集まりつてえと、群れとしてはどうなんだ？」

団長が視線を向けたのは、目が覚めて直ぐに今度はペットボトルの材質を調べていたヒュールミだった。

「んー、群れは十から多くて五十未満だと言われているぜ。三十つてことは中規模の群れだ。一匹のでかさはどんな感じだった」

「んーと、立った状態で僕たちと同じぐらいかな白」

「だな、赤。殆ど同じだと思うよ」

彼らは俺より少し低いから175ぐらいか、結構大きな個体なんだな。カエル人間から連想するとワニが背筋を伸ばして二足歩行で、手足がそのままの長さだと足が遅そうだな。

「通常より個体がちっけえな。成体は二メートルぐらいが普通なんだが。カエルが増えて群れをなしていたから、襲えずに食料が不足していたのか……いや三十もいれば百近くの群れならいけるよな」

ってことは、ワ二人間って単純計算で、カエル人間の三倍の力を保有しているということか。ワ二って皮膚も鎧の様に硬いし、尻尾も巨大な口も立派な武器だよな。それぐらい実力差があっても不思議ではないか。

「俺たちはこの階層専門じゃねえから、良く知らないんだけどよ。鱈人魔ってこの階層じゃ、三大勢力の中で最も凶悪な存在なんだろ。蛙人魔が増えたら食料増えて万々歳ってならないのかい」

「普通はそう考えるよな。だが今回は王蛙人魔がいやがった。王ってのはどういう仕組みで現れるのか不明なんだが、あれは馬鹿げた戦闘力もさることながら、群れが統率されるってのが問題でな。小さな群れやはぐれも集まってきちまうんだよ」

「それで、鱈人魔は迂闊に手が出せなかったってことか。集落を襲った巨大な蛇双魔はあれも、規格外だよな」

あー、それは知りたかった。蛇双魔って基本単独行動で二メートル前後が一般的な大きさだって聞いたことはあるけど。

「蛇双魔は喰えば喰う程、脱皮を繰り返して倍々にデカくなっていく魔物だぜ。ただ、肉が上質で素材が高値で取引されるから、ハンターたちが狙うことが多い。単体でうるついでいるので絶好の獲物だからな」

蛙人魔は鱈人魔と蛇双魔から狙われる。

蛇双魔はハンターから狙われる。

鱈人魔は……放置プレイか。

「まあ、あれだ。食料の蛙人魔は王の元に集まり、蛇双魔がただでさえ少ない蛙人魔の残りを食い尽くし、巨大化したから手も出しにくい。で、食料不足で弱体化した状態つてのが現状じゃねえか」

「なるほどねー。なら、別にちよっかいかけしないで放置でいいんじゃないかね？」

「団長。鰐人魔は肉食ですよ。食料が無くなった現状で、飢えを満たす為に何を襲うと思っているのですか」

「まあ、俺たち人間か。んじゃ、全滅させた方がいいか」

この階層の生態系はどうなっているのか。魔物を全滅させたら、階層から魔物が消え去るのだろうか。それとも、何かダンジョンの不思議パワーで湧いてくるのだろうか。

ヒュールミに訊ねたら喜々として教えてくれそうだが、質問する方法が無い。

「そうですね。集落から近い群れは全滅させて問題ないかと」

副団長のフィルミナが珍しく同意しているな。

そういや清流の湖階層つて端から端まで三週間以上歩かないと辿り着かないのだったか。二三日の距離にある群れなら全滅させても、問題ないのも頷ける。

「で、マジでどうするよ。群れの情報収集が依頼内容だからな。別に倒さなくても収入は保証されているぜ」

「でも、素材は高く売れますよ。弱体化しているなら何体か我々で減らしておくのも手かと。素材は高いですよ」

あれ、フィルミナ副団長が珍しく好戦的だ。え、愚者の奇行団って経営難なのか？

「副団長ってお金が絡むと人変わるよな」

「いつもは冷静沈着なのにな」

「前も食べ過ぎではないですかって、怒られたっす」

団員たちが集まると、小声で言葉を交わしている。

ただの守銭奴の可能性が……でも、いい加減そんな団長の元だと自然に金管理に厳しくもなるか。見るからに苦労してそうだもんな。

「退治するにしても、どうすっかな。やっぱり夜に襲うってのが定番か」

「それはやめておいた方がいいぜ。鰐人魔は夜行性だ。夜の方が凶暴になる」

「へー、そうなんだ」

へー、そうなのか。あつ、ラツミスと被った。ほんとヒュールミは物知りだ。

ワニの生態か。以前、動物園の餌の自動販売機を見に行ったついでに、ワニのコーナーを覗いたとき何か書いていなかったか。

確かワニの餌って……魚や鶏肉を与えていたのを見た記憶がある。自動販売機で生ものは取り扱ってない。魚……練り物……ちくわでどうにか、ならないよな。

他に特徴としては、あつ、カエル人間も冬は苦手って話をしていたから、ワニ人間も寒さに弱いのか。ワニは変温動物だから可能性はあるよな。

そもそも、ワニ人間の活動期に入る前に偵察してこいって話らしいし。今は春先で気温も上がってきている。寒さか……あれ、いけるんじゃないか。

「それじゃあ、今晚はゆっくり体を休めて明日の朝に動くとするか。群れから離れた奴を各個撃破と洒落込むぞー」

「そうですね。では、行動は明日ということでご飯を作りましょう。赤と白は見張りお願いします」

「えええー。今、偵察から帰ってきたばかりなのに」

「横暴だー。断固、業務改善を求めろぞー」

「はいはい、私も手伝ってあげますから、行くつすよ」

不平不満を口にする双子の間に入り込み腕を絡めると、射手の女性引張っていった。

俺が提供した食材で作られた食事を終えると、見張りにラツミスとヒュールミが申し出たので、俺も付き合っことにする。自動販売機の灯りは一応消しておく。

「戦いは明日か。そうになるとオレは用無しだぜ。ラツミスもハッコンも無茶すぎるなよ。相手は食料不足で凶暴になっている可能性がたけえ。ヤバそうになったら、ハッコンが結界で守ってやってくれ」

「いらっしやませ」

「頼りにしているよ、ハッコン」

おつさ。守りに関してはお手のものだ。ポイントもかなり余裕があるから、いざという時は守りに徹するよ。

「オレも何か手伝えたらいいんだがな」

あ、それだ。さつき思いついた方法をヒュールミなら察してくれないだろうか。取り敢えず試してみよう。

「鰐人魔の弱点となると……おつ、どうしたハッコン。また妙な形になって」

いつもよりスリムな形となり、ボディの大半が白となり上の方には『ICE』という文字が浮かび上がる。取り出し口にはかなり大きく、小さなバケツなら楽々おけるスペースがある。

「これって何を売るものなんだろう。ハッコンが意味もなく変身するわけがないよね」

わかつているね、ラツミス。何の販売機なのかは現物を見ればすぐにわかるよ。

俺は自動販売機を稼働させ、取り出し口に角氷を落とした。これは、スーパ―や魚市場に置いてある氷の自動販売機だ。

「おつ、これは氷か。これは夏場大儲けできそうな予感が」

「ふわ、冷たいっ。でも、氷なんて出してどうしたいのかな」

「さっきまでの流れだと、この氷を鰐人魔退治にいかせて事が」

「投げつけるのかなっ!」

ラツミスらしい発想だけど、それは「ざんねん」だ。

「氷、鰐人魔、生態ってなると、答えは一つか。ハツコン、この氷って馬鹿みてえに出せたりするのかわ?」

「いらっしやいませ」

「そういうことか。面白いことになりそうじゃねえか」

「ねえねえ、うちにもわかるように教えてよっ」

あ、話についていけないラツミスが頬を膨らませて拗ねている。

詳しい説明はヒュールミに任せよう。一度へそを曲げたら話し聞いてくれないから……後は頼んだ。その代わり見張り頑張るから。

なだめすかす姿を見守りながら、視界が全方位あることを最大限に利用して機嫌が直るまで、一人で見張りをしていた。

翌日、ヒュールミが作戦を話すと患者の奇行団は乗り気のように、協力してくれることとなった。紅白双子の道案内により、池に流れ込んでいる小川に辿り着くと川岸に設置され、俺は氷を流し込んでいく。

小川は幅三十センチにも満たないものなので水量は大したことは

無いが、氷は上手い具合に水面に浮かび池へと流れ込んでいる。

さあ、じゃんじゃんいこうか。まあ、この氷で何処まで水温が下がるのか甚だ疑問だけど、沼の規模は大したことなかった。初春なのでまだまだ水も冷たく氷も溶けにくいはずだ。鰐人魔の住む沼は浅いらしいので、それなりに水温が下がってくれる……といいな。

鰐人魔は水の中にいる時が一番厄介らしいので、水温が下がった沼を嫌い離れてくれるだけでも大助かりらしい。ということで、氷の大盤振舞いだ。

ジャラジャラと氷を大量に排出していく。氷はポイント変換もかなり安めなので、一時間ぐらい放出し続けても、それほど痛手にはならない。

これで、体温が少しでも下がって動きが鈍れば儲けものだしな。ラツミスの戦いが楽になるなら、この程度の出費安いもんだ。

ワニ退治

「団長。鱈人魔が岸边に上がっていました。寒そうに震えていますよー。だるそうに寝転んでいたし」

沼の様子を偵察に行っていた赤が戻ってくると、状況を報告している。

ケリオイル団長が大岩の上で寝そべりながら「ご苦労さん」と片手を上げた。

「いい感じみたいだが、動かないとはいえ襲ったら他の奴らも反応するな。副団長、霧の魔法で奴らの視界を妨げることが可能か？」

「無理ではありませんが、沼全域を霧で覆うのは無理があります」

おお、霧の魔法か。沼の上に漂う霧って風情があるな。

是非、拝見させてほしいけど範囲が広すぎるのか。沼に霧を発生させるとなると、今度はあれ使ったら手伝えるか。

「んじゃ、どうすっかな。あいつらを分断させ……何やってんだ、ハッコン」

フォームチェンジをした俺を見て、ケリオイル団長の帽子がずれた。今回の変形は銀の円柱ボディの真ん中あたりに透明の扉が付いたタイプだ。

扉を開けて、内部にある銀の筒から白い塊を落とす。それは白い湯気を立ち昇らせ、そこに鎮座している。

「ん、なんだこれ。氷にしては濁り過ぎだな。雪を固めたような感じか？」

団長が興味をもったようで大岩から飛び降りると、白い塊に顔を近づけ覗き込んでいる。指で突こうとしたので、更にソレを落とし「ざんねん」と発する。

「団長さん。たぶん、それに触らないでってハッコン言っているんじゃないかな」

「素手で触れるのは危険なのかも知んねえぞ」

「いらっしやいませ」

二人とも正解だ。論より証拠とばかりに更にソレを落としていき、取り出し口に溢れた白い塊は川へと落ちていった。

水に触れた途端、白い塊は大量の蒸気を噴出する。

「うおっ、なんだ！？ 霧を吹き出しやがったぞ！」

俺の前から飛びのき、白い煙を噴き出しながら流れて行く白い塊

ドライアイス眺めている。いいリアクションだ団長。

ドライアイスを入れると白い煙が出る遊びを誰しもが一度はしたことがあると思う。これって霧の代用品になるかと考えたのだが、どうだろうか。

「ハッコンさん。凄いですよ！ これなら私の霧の魔法と混ぜ合わせれば沼一帯を霧で包むことが可能かもしれません」

「やるじゃねえか、ハッコン。さすが、俺の見込んだ魔道具だ」

「団長よりも役に立っていますよね」

「ぐはっ！」

副団長であるフィルミナの冷たく言い放たれた言葉に、団長が胸を押さえて後退っている。

「もう、いつそのことハツコンを団長にしようよ」

「それ、いいな白。愚者の奇行団って名前もダサイから、ハツコン団って可愛い感じに変更な」

「お、お前ら、俺が頭を捻って考え出した、このセンス溢れる名前をそんな風に思っていたのかっ」

赤と白の追撃に団長が抵抗している。

「だって、愚者に奇行っすよ。ハツコン団って可愛いくて女の子に人気でそう。ハツコンさんが団長になったら、ご飯食べ放題っすよね！ 大賛成！」

「うおおおおおおお」

女性団員が止めを刺した。団長が蹲り、地面を叩いている。哀れな。

「はいはい。お遊びはこれぐらいにしますよ。団長いじけてないで指示を出してください」

「けつ、お前ら適当に各個撃破しとけ。役立たずの団長は甘いお茶飲みながら見学させてもらっつからよっ」

ああ、河原の石を蹴ってわかり易くいじけている。子供かつ。そんな団長の言い分が通る訳もなく、団員たちに引きずられていった。

「ええと、うちも行ってくるけど。ハツコンはそれを落とし続けなといけないんだよね。じゃあ、ここでビュールミとお留守番でいい？」

「いらっしゃいませ」

「おう、気を付けて行ってこいよ。危なくなったら速攻で戻ってこい」

「うん、行ってくるねー」

ドライアイスをとす作業があるので動けないのだが、一緒にいけないのは不安になる。弱体化した敵を集団で狩っていくだけだから、滅多なことではやられないと思うが、背中に彼女がいないと心配になるな。

「まあ、安心しな。愚者の奇行団は凄腕のハンター集団だ。引き際もわきまえているさ。危なくなったら帰ってくるって」

バンバンと俺の体を叩きながら気遣ってくれているようだ。

大丈夫だと信じよう。俺は自分の仕事に集中しないと。ドライアイスを小川に落としながら、溢れ出る霧の中に消えて行った方向を黙って見つめるしかできないでいた。

「暇だなハツコン」

「いらっしゃいませ」

非戦闘員の一人と一台はこうなるとすることが無い。ドライアイスを流し続けてはいるけど、異世界に転生しておいて戦う術がないというのは、申し訳ない気持ちになる。

「暇つぶしに雑談にでも付き合ってくれ」

「いらっしゃいませ」

「今回の偵察任務なんだが、オレは会長から直接依頼を受けたって話はしたよな。その内容が、清流の湖階層の様子が最近おかしいから調べて欲しい。って事だったんだぜ。今回の鱈人魔でも異変が見られる様なら要注意だったな」

王様蛙に巨大すぎる蛇。異世界の住民じゃない俺だって異様な事態だってことは理解できる。更に鱈人魔にも何かあれば何かあると考えるともなるよな。

「ハツコンは知らないと思うが、各階層には主と呼ばれる存在がいる。そいつを倒すことにより次の階層が解放される。でだ、階層の主は一度倒されると滅多なことでは復活しない。だが、稀に復活することがあってな。未だに条件は不明なんだが、数年の場合や数十年かかるときもある」

主か。ダンジョン物で良くある階層ごとのボスキャラか。普通は下の階に繋がる階段の前や、扉の前で待ち構えている存在だよな。

「でだ、会長は今回の騒動を主の復活ではないかと考えているみてえだ。愚者の奇行団の団長にもその事は伝えている。だから、ヤバそうな気配があれば迷わず撤退する筈だぜ。そっぴや主を倒したら、凄いいお宝が手に入るって噂があつたな眉唾だが」

今回の偵察は結構重要な任務なのか。しかし、この階層の主ってどんな魔物なのだろう。蛙と鱈と蛇が混ざりあつたキメラのような存在だろうか。

やっぱり巨大な姿つてのが定番だよな。全長五メートルぐらいはあるのかもしれない。安全地帯から見学できるなら見てみたい気もする。

本当に主が復活となつたら別の階層か地上に移動することも考慮しておいた方がいいかもしれない。まあ、それも二人に任すしかないけど。

主の存在も気になるが、今はラツミスが無事……というか何かしでかしていないか不安になる。

「あれだ、幾ら何でも初っ端から主を引くような事はなんねえさ」

ヒュールミそれってフラグって言うんだぞ。そういう不吉なことは口に出さずに秘めておかないと、現実になりかねないから注意だ。話せるならツッコミの一つも入れたかったが、そんな考えもすぐさま消え去った。

「何だ、この振動……」

地面に接している部分から振動が小刻みに伝わってくる。嫌な予感しかしないが、音の源に視線を向けると　こちらに向かって爆走してくる荷猪車が見えた。荷台の幌は消滅していて、乗っている

人が丸見えになっている。

御者席には赤と白髪の子。後ろには焦った表情の団長。そして、後ろに振り向いている射手のシユイと副団長のフィルミナが矢と魔法を撃ち込んでいた。

ラツミスは、ラツミスは何処だ!? 今、見える範囲にはラツミスの姿が……いたっ!

荷台の縁に背を預け、目を閉じたまま身動きをしていない。だ、大丈夫なのか!?

「おいおいおい、冗談だろ! くそっ、ドンピシャかよ。主が出やがったのかっ!」

主!? 声が出せるなら大声で問い返していた。

ヒュールミが唾然と見つめる先にいるのは、荷猪車の後を追う小山だった。

俺がおかしくなったわけじゃない。小山としか思えない物体が背後から彼らを追っているのだ。

荷猪車がファイギアにしか見えない、遠近感がおかしくなったのかと思う程の巨体がそこにある。全体のフォルムは巨大なワニ。ただ、足が八本あって目が四つあるのを除けば。

あの足の裏だけで荷猪車をすっぽり覆うぐらいのデカさがある。

巨大だとは予想していたが、これは規格外すぎる。こんな人が倒せるのか!?

八本も脚があるので振動がおさまることなく、自動販売機の体が浮きそうになる。

「ああ、くそっ。階層割れまで起きているじゃねえかっ!」

ヒュールミが忌々しげに吐き捨てている。その視線の先を追うと地面に亀裂が走っていて、そこから光が溢れ出ているのが目視でき

た。あれが階層割れってやつなのか。

よくわからないが、碌でもない事が起きていることだけは理解できる。

ど、どうすればいいんだ。荷猪車はこっちに向かって激走している。ヒュールミは回収できるかもしれないが、俺を乗せる余裕は……ない。

だったら、やるべきことは決まっているよなっ！

「ラツミスは気を失っているだけだ！ ヒュールミ手を伸ばせ！俺の手を掴めっ！」

「ハツコンはどうすんだ！ 残していけっと言うのかっ！」

「いらっしやませ」

団長への問いかけに俺が答える。

ヒュールミが呆けた顔で見返しているな。 結界 を発動させて傍からヒュールミを引き離れた。

「ハツコン、何のつもりだっ！」

「すまん、ハツコン。後で必ず拾いにくる！」

俺の真横を走り抜ける際に、荷台から上半身を限界まで伸ばしてヒュールミを抱きかかえると、ケリオイル団長が 頭を下げて詫びた。

「くそっ、離しやがれ！ ハツコン、ハツコーン！」

「またのどりようをおまちしています」

遠ざかる彼らの背に向けて、別れの言葉を口にすると俺は正面を見据えた。

ラツミスが気を失っていたのは不幸中の幸いかもしれないな。彼女なら荷台から飛び降りて俺と一緒に残ろうとするだろう。

ここでやることは決まっている。戦うこともできない自動販売機だが困ぐらいはやれるはずだ！ フォルムチェンジするぞ！

俺の体は真つ直ぐに伸びていき全長三メートルに到達した。ボデーは派手で目立つ色に変化し、商品はコーラだけが並んでいる。この自動販売機とはあるテーマパークに置かれている巨大な自動販売機で、二人がかりでどちらかが踏み台にならなければ購入できない代物だ。

迫りくる巨大な八本足鱈は荷猪車を狙っていたようだが、突如これ程目立ち巨大な物が現れたことにより、興味を奪われたようだ。四つの目が全て俺を捉えている。ここで更に注目する様に音量を最大に調整する。

「いらっしやいませ いらっしやいませ いらっしやいませ いらっしやいませ」

大音量で響き渡る声に八本足鱈が反応した。殺気を孕んだ視線が鉄の体に突き刺さる。おお、こええ。商品が凍ったらどうしてくれる。

近づくにつれて視界が八本足鱈の皮膚の色に染まっていく。黒に薄汚れた緑をぶちまけたような色で視界が埋め尽くされた。湿地帯特有の泥が噴き上げられ、後数十秒で俺に到達することだろう。

崩落した瓦礫にも耐えた 結界 で防げることに賭けたが、結界を貫かれたら一巻の終わりだ。更に、耐久力を100上げて200

に、頑丈さを30上げて50にしておく。

10000と90000ポイントを消費したが、焼け石に水かもしれないな。

目前に迫った巨大過ぎる足を見つめ、諦めに近い感想を抱いた俺は 重力を無視して、後方へと吹き飛んだ。

《ポイントが10000減少》

うおおおつ、後方に体が引つ張られるような感覚は、アイツに蹴り飛ばされたからか。自動販売機つて空飛べるんだ……つて言っている場合じゃねえ！

数十メートル吹き飛ばされた俺は大岩に激突して動きが止まった。結界のおかげでダメージは無いが、ポイント10000消費つて何だ。結界は毎秒1ポイント消費じゃないのか。瓦礫を受け止めた時もこんな表示はなかった。

結界 の強度を越える馬鹿げた攻撃を受けると、ポイントの大量消費により結界を何とか維持できるということか。

岩が結界の形に凹んでいる。あんなの生身で受けたら跡形もなく消し飛ばさぞ。

ますます、ラッミスたちを追わせる訳にはいかなくなった。

戦う自動販売機

時間稼ぎをするにはこうやって相手に弾かれ 結果 で耐えるだけで何とかなるかもしれないが、あのままあれが集落に向かったら、ハンター協会の強固な砦でも耐えられるかどうか。

少なくとも、前回の様に集落の人々が全員助かるということはないだろう。

何かとお世話になっている宿屋の女将さんとムナミ。一番のお得意さんである門番のカリオスとゴルス。朝の常連三人組、いや最近では孫が増えて四人組になったのか。避妊具をまとめ買いするシャーリイ。金髪お嬢様と黒服、両替商の二人、他にもお客は何人も集落にいる。

自動販売機があるということは平和であり治安が良いことの証のようなものだ。

なら、自動販売機である俺が集落の人々を守っても何の問題もないよな！

何度吹き飛ばしても、壊れずにいる俺に苛立ちを覚えているのか、八本足鰐が今までにない速度で突っ込んでくる。

これを防いだとしても、とんでもない距離を吹き飛ばされ見失ってしまい、相手が興味を失う可能性もある。そんなことになったら、逃げているラツミスたちが危険に晒されてしまう。だったら、これでどうだ！

俺は地方で見つけた、お手製お弁当販売機に変化した。そして、から揚げ弁当を大量に取り出し口に落とす。乱暴に扱ったので商品が弁当箱から零れ落ち、保温状態で温められていた、から揚げの匂いが辺りに漂う。

ワニは嗅覚が鋭いかどうかは知らないが、あの巨体なら常に飢えているだろう。おまけに何度攻撃しても壊れない俺に苛立たしさを覚えている筈。

そんな状況で目の前で旨そうな匂いを発する物があつたら、どうするか。

その答えは鋭い歯がずらりと並んだ、ワニの口内が物語っていた。何度か体が左右にぶれたかと思うと、今度は真つ逆さまに落ちて行く。周囲は赤黒く長い管を通っているようだ。ここって食道なのか。

こんな状況でも 結界 は俺を守ってくれている。そのまま、転がり続け何か液体の中に落ちた音がした。粘着質な液体の中にぶかぶかと浮かび辺りを見回すと、岩や枝葉が溶けた木が幾つも沈んでいる。

ああ、ここは胃の中だな。

《ポイントが10減少 ポイントが10減少》

胃液でポイントが凄まじい勢いで減っていく。あんまり、余裕を見せていられる状況でもないようだ。ここが相手の胃袋なら 嫌がらせを開始させてもらおう！

俺は箱型商品対応機能を生かし、商品を入れ替える。コインランドリーに置いている洗濯用洗剤に変更して、取り出し口に次々と落とし 結果 の能力を利用して洗剤を結界内に入ることを拒否する。取り出し口にあつた洗剤が結界の外に飛び出し、胃液の中にどぼどぼと沈んでいく。

さあ、激痛でのたうち回りやがれ。俺のおごりだ幾らでも胃洗浄してやるぞ！

次々と洗剤を胃の中に落としていくと、胃液が波打ち出した。八

本足鰐がもがき苦しんでいるのが手に取るようにわかる。結構効いているようだ。

だけど、これだけで相手を殺すことは不可能だろう。どう考えても下痢や腹痛が限界だ。ならば、今度は新たに得た、古びた身体に変形する。

見るからにレトロな銀色の四角い箱には、レバーが取りつけられていてそれは手動で回すことが可能になっている。下部からはオレンジ色の管が伸び旧型のコンロに繋がっている。

これは古い旅館や病院や寮などで稀に見かけることがある、ガスの自動販売機。百円を入れたら数分間使用できる。屋外で料理をする時に便利な能力だとは思ったが、自動販売機の商品が売れなくなりそうなので自重した機能の一つだ。

ガスの自動販売機に変形した目的は一つ。ガスを結界外へ放出する。胃の中をガスでぱんぱんにしてやる。

食べ過ぎで胃にガスが溜まるとよく言うが、こっちは本物のガスが溜まっていく。ガスを放出し続けていると、胃液が渦を巻き始めた。俺の体が流れに乗り、渦の中心へと徐々に吸い込まれていく。

これは体外に俺を排出するつもりなのか。このまま腸に運ばれる前に決行するしかない。このガスで充分なのか 結界 が耐えきれなのか、やってみなければわからないが、やるだけの価値はあると信じている。

……問題は火か。コンロを点火すればいいと考えていたのだが、コックを捻る方法が無い。自動販売機の体ならある程度は操作できるのだが、コンロは外部オプションのような扱いなので、どれだけ力を入れても操れない。

予定と違うぞ。やばい、もう少しで吸い込まれそうだ。火、火花でもなんでもいい！ って、あれは可能か？

冷凍食品を温める自動販売機モードに変更して、体内の電子レン

ジ機能の中に缶の商品を補充してみる。いつものように補充する時のイメージで、一個だけそこに任意に出現させられないか。

自動販売機は俺の体だ。もう何か月も付き合ってきたんだ。これぐらいは、頼むできてくれ！

体内に響くカコンという音と共に、体の中に一つ小さな缶が現れた感覚があった。

よし、同じ要領でタオルと新聞をそこに落とす。

ここで禁断の秘儀　電子レンジで缶を温める！　良い子は真似したら駄目だぞ！

体内から聞こえてくる異音に怯えながら、俺は火花を飛ばしている缶の存在を感じている。感覚は無い筈なのに体内で何が起きているのか理解できるようだ。

あ、火が付いたか。

《10のダメージ、耐久力が10減りました》

体内での損害なのでダメージがきついな。だけど、これで準備は整った。

取り出し口に缶飲料と燃え始めているタオル、新聞紙を落とす。

そして、　結果　内部にこの三つが入ることを許可しない！

取り出し口からはじき出されたのは、火のついたタオルと新聞紙に包まれた缶飲料。それはまるで火の玉を射出したかのような光景だった。

結果　からはじき出された火の玉は、外に出た途端胃内部に充滿していたガスに触れ　大爆発を引き起こした。

「またのぐりようをおまちしています」

《ポイントが1000減少》

目の前は赤黒い何か飛び散っているのはわかるが、視界がぐるぐると回転し続けているので、何が起こっているのかさっぱりわからない。

おおおつ、酔いそうだつ！ 胃が爆発したのであれば、その痛みは想像を絶するだろう。階層の主である八本足鱈でも、いずれは息絶える……よな！？

周囲は肉の壁なのか、赤黒いヌメヌメ光る肉質感ばつちりの肉壁に取り囲まれている。相変わらず暴れているようで、身体が激しく揺さぶられ、生身の体なら吐いているかもしれない。

どれぐらい時が流れたのかはわからないが、ようやく体の揺れが治まった。八本足鱈が息絶えたのか？ だとしたら、問題は俺どうやって体内から出たらいいの？

《ポイントが1減少 ポイントが1減少》

あ、はいはい、わかっています。 結界 を維持しているのでポイントが減り続けている。頑丈さを上げているので、肉の圧力に耐えられそうな気もするが試すには勇氣がいるな。ポイントが残り僅かになったら解除するしか手は無いです。

これで倒せたのなら御の字だ。貯め込んでいたポイントを結構消費したけど、生きていればこそだ。いや、自動販売機だから稼働していればこそか。

今回は我ながら頑張ったと思う。自画自賛をしても許される活躍だったよな。自動販売機でもやれるじゃないか。少しだけ自信がもてそうだ。

後は逃げ切ったラツミスたちが戻ってきてくれるか、一度集落まで戻って討伐隊が組まれるまでの辛抱だな。あれだ、嗅覚なくてよかった。

早くても半日、長くて数週間は我慢か。自動販売機だから同じ場所待つの仕事の一環だしな。新商品を何にするかでも考えておこう　ふあつ？

あれ、視界を埋め尽くしていた肉塊が消えて、空と地面が見える。え、外だよなここ。肉が綺麗さっぱり消えているぞ。え、なんだ、何かよくわからないから　結界　は維持しておこう。

ここってさつきまでいた沼の近くだよな。地面に亀裂があつてそこから金色の光が溢れ出しているのは、階層割れとかヒュールミが呼んでいた現象。

あれ、やっぱり外か。周辺を眺めると、白くて長い物が組み合わさり、俺に覆いかぶさるように配置されている。これは八本足鰐の骨……っばいな。

肉が消えて骨だけ残ったのか。これが階層の主を倒した時の仕様なのだろうか。亀裂から溢れ出す光に照らされて、ワニの骨格標本だというのに少し神秘的に見える。

何と言うかほっとしたけど、誰か俺を引き起こしてくれないかな。今、横向きで寝そべっている状態だから、ちよつと居心地が悪い。自力で元に戻れない、この体の不便さをこつという時に実感させられる。自動販売機は立ってこそだ。

つてあれ、亀裂の光が眩し過ぎて気づいてなかったんだが、目の前に金のコインが転がっている。これ普通の金貨じゃないよな。見える範囲の装飾が全然違う。表面に描かれている緻密な彫り物が八本足の鰐だ。

これはゲームで言うところのポストドロップなのかな。ボスしか落とさないアイテムってことなら価値がありそうだが、手も足もないので取れません！

結界内部にあるので、誰にも奪われないようにしないと。ヒュールミなら詳しいことを知っているだろう。それまでは誰にも渡さ

んぞ。

さて、体内から解放された事だし、このまま、だらだらと誰かがやってくるのを待つしかないか。

うーん、何か地面が未だに微振動が続いていて、ミシミシって音が地中から響いているのが少し気になるが、きっと気のせいだ。

うーん、地面のひび割れがそこら中に走って、まるで網目の様になっているのも、光量が増して視界が金色に染まっているのも、たぶん、目の錯覚だ。

うーん、横たわっている地面が徐々に沈んでいくような気がするのも、これ、陥没してるよな！

えっ、今回の騒動で地盤が緩んだのか。それとも、階層割れの名の通り階層が割れるのか！？ ちょ、ちょっと待て。だとしたら、地面が割れたらその後どうなるんだ。えっ、落ちるのか。

これって結構じゃなくて冗談抜きでやばいな。って前も同じ感想を抱いた覚えがあるぞ。

ちよつと、誰か、誰か怪力の人はいませんかー！

自動販売機を楽々と背負える怪力のお客様はいませんかー！

「いらっしやいませ いらっしやいませ いらっしやいませ」

連呼してみたが、誰もいない湿地帯に虚しく響いただけだ。

こういう時にラツミスのありがたみがわかるな。強敵を倒して調子に乗っていたけど、やっぱり自動販売機は自動販売機だ。一人じや何にもできない。

あつ。

体を支えている地面が無くなり、自動販売機の体が真つ逆さまに落ちて行く。

切羽詰った状況の中、俺の脳裏に浮かんだのは泣き顔のラツミス

だ
っ
た。

落下

地が割れ崩壊した。

土砂と共に俺は急降下中だ。見上げると土の天井が見え、そこらぽっかりと穴が開いている。その穴はそんなに大きなものじゃないので俺は落ちたが、八本足鱈の骨は穴の上に被さっているだけで、落下を免れたようだ。

で、下に目を向けると雲があった。結界を張っているので風圧は感じないが……凄まじい速度で墜ちているのは理解できる！

ええええっ、地面抜けたら空ってファンタジーだな！

うおおおおっ、地面が見えない程の高さってええええっ、あああっ、お、お、落ち着け！

まずは現状をどうにかしないと。自分の状況を把握しなくては！

場所は、雲の中！

状況は、落下中！

結果は、激突粉碎！

これは終わった……と、あっさり諦めてたまるかつ。地面に激突するまでにはまだ時間がある。頭を働かせる。この絶体絶命の状況を切り抜ける方法を。

俺に出来ることは機能変化のみ。自動販売機的能力をフル活用すれば何とか、何とかなるのか？

落下しているということは落下速度を下げればいい。となると、ここで相応しい自動販売機は。あれかつ！

俺は機能の中から 風船自動販売機 を選び出し、身体を変化させた。

以前はよくスーパーの屋上や遊園地に置かれていたのだが、最近

は稀に古い感じのゲームセンター等に置かれているぐらいらしい。
黄色を基調とした体にはガラスの窓があり、その先に膨らます前の風船がずらっとぶら下がっている。購入者はその中から好きな色を選び、硬貨を投入すると自動で風船を膨らませてくれる仕様になっている。

って、説明している場合じゃねえ！ 色なんてどれでもいいから、風船を大量生産しなければ。

風船がセットされ中にガスが流れ込んでいく。徐々に大きくなっていく赤い風船 　ってこれじゃ時間が足りなすぎる。もっと早く作れないのか。スピードを上げる方法……ステータスの素早さ上げたら、膨らませる速度アップとかしないか！？
駄目で元々、時間も無い、やってみるか。

《10000ポイントを消費して素早さを10増やしますか》

おうさ、頼む！

何かが体に入り込むような感覚があった。風船の膨らます速度は……おっ、目に見えて上がっている。さっきの倍以上は早くなっているぞ。なら更に上げれば。

《20000ポイントを消費して素早さを10増やしますか》

値上げ率酷くありませんかね。くそっ、ポイントの野郎、足元を見やがって。背に腹は代えられない、もう10アップだ。

まるで早送りを見ているかのように二秒に一個の速さで風船が出来上がっていく。完成した風船は結界内に留まり、結界の内側が風船で詰まってきた。

下の光景は雲を突き抜け地面が見えてきているが……何だあれ。入り組んだ巨大な迷路？ そっいや、ラッミスが階層について何か

話していたな。確か、清流の湖階層の下は巨大な迷路になっているとかどうか。

って、今、過去を懐かしんでいる場合じゃない。迷宮は徐々に大きくハッキリとその全貌を見せてついている。まあ、落下速度は殆ど変わっていないからな。

風船が数十個あったぐらいで数百キロある自動販売機を支えられるわけがない。昔バラエティー番組で大人一人浮かすのに、二千個以上の風船を使っていた記憶がある。だから、風船でこの自動販売機をどうにかできるなんて初めから思ってもいない。

迷宮の壁が分厚く、その高さと同様規模が異様であることが理解できるぐらいに地面が迫ってきた。本格的に時間がないな。ならばっ！

ここで俺が選んだのは ダンボール自動販売機へのチェンジだ！

説明しよう！ ダンボール自動販売機とは小学生の間で流行った、ダンボール製の手作り自動販売機の事である！ 実際にコイン投入口と商品もセットしてあり、スイッチを押すと商品が落ちてくることばかりようである！

ちなみに自動販売機マニアとして、おうちで作れるダンボール自動販売機セットを購入して制作済みだ！

そう、俺の体は今ダンボール製に変化している。つまり、一気に軽くなりこの数の風船で支えられるぐらいの重さへと変化したのだ。はああああ、間に合った。結界内部を埋め尽くす風船のおかげで落下速度が激減して、俺はゆっくりと下降している。

機能の欄にダンボール自動販売機を見つけた時は、一生取ることはないだろうと思っていたのだが、まさか命を救ってくれるほどの活躍を見せてくれるとは。ほんと、わからないものだな。

ようやく心に余裕が持てたので、眼下の景色を楽しんでみるか。巨大な円形の迷路は壁が灰色でおそらく材質は石っぽい。直線と

曲線で通路が描かれていて、かなり入り組んでいる。全体図が見えている今の内に防犯カメラで録画しておこう。

高度からなので正確な大きさは不明だが、細めの通路でも俺を何台も横に並べて置くことが可能ならい道幅に余裕がありそうだ。

広場っぽいエリアや池のようなものもあるのか。こんなもの地球で作ったら幾ら費用がかかるのだろう。

さっきまでいたのが清流の湖階層で、確かその下の階層は迷路階層だったか。正式名称があった気もするが、ヒュールミが迷路階層とばかり口にしていたので、そっちの名前でしか覚えていない。

この階層はかなり厄介で難易度も高く、ハンターたちに毛嫌いされているという話だった。自然発生する宝箱が存在していて、一攫千金が可能らしいが敵も強く畏も多い。おまけに道も迷路なので思った方向に進めず、餓死するハンターも少なくないそうだ。

上から見下ろしているので、入り組んだ迷路の性質の悪さが正確に伝わってくる。

っと、もう少しで地上に降りられそうだ。これって通路の壁の上に着地したら誰も、買いにこられないよな。って、おお、壁の上って鋭角になっているので、登ることが無理な仕様になっているのか。

このままだと、壁近くの大きめな通路に着地しそうだな。うーん、正直何が正解かわからないので、このまま自然な感じで任せよう。

このままだと迷宮の中心近くに降りられそうだ。

通路の壁は思ったより高いぞ。地上から十メートル以上はありそうだ。厚さも相当なもので、五階建ての団地ぐらいある壁が迷宮を作り出しているのか。

壁際をゆらゆらと揺れながら降りていき、何とか綺麗に着地できた。いつもの自動販売機に戻っておこう。

床も壁も石造りに見えるが継ぎ目が一切ない。壁に灯りが存在し

ないので、日が暮れたら一気に暗くなりそうだ。

通路の幅が五十メートルはありそうで、左右に長く通路が伸びている。上から見ていた感じだと、迷宮のど真ん中に走る大通りのような通路だったので、ここならハンターと出会う可能性が高いかもしれない。

ラツミスたちが迎えに来てくれた時にもわかり易い場所だ。暫くはここで暮らすことになりそうだ。

普通は自動販売機を助け出そうなんて物好きは存在しないだろうが、ラツミスなら必ず来る。普通なら階層割れから落ちたのだから、人であろうが自動販売機であろうが絶望的なのは誰だってわかるだろう。

それでも、ラツミスはやってくると確信めいたものを感じていた。熊会長にも借しがあり、愚者の奇行団も俺を狙っているなら積極的に捜索に参加してくると思われる。何なら、団に入ることを条件にラツミスに協力を申し出ているかもしれないな。

彼女が無茶をしようとしたらヒュールミが止めてくれる筈だ。助けに来て欲しいと思う反面、無理をして欲しくないという思いもある。矛盾した考えだとはわかってはいるのだが、これが本音だ。

まずは、ここで生き延びることを最優先に考えなければならぬ。他のハンターが通りかかって、助けてくれる可能性もあるしな。

よっし、周囲の観察からだ。ざっと見た程度だから、じっくりと調べ情報を得ることは生き延びる為に必須。

今いる場所は大きな通りの壁際。左右に道が伸びているが、遠すぎて先が見えない。真っ直ぐ伸びてはいるが、途中で道沿いに脇道が幾つもあるようだ。

今のところ魔物を見かけてはいない。上空から見ている感じではかなり大型の魔物も存在していたが、この大通りには何もいなかったと思う。ここは迷路の安全地帯なのかもしれないな。

でだ、一番気になっているのは俺の前に落ちている、八本足鰐の絵が描かれているコインだ。結界内に入ったまま、ここまで落ちてきたので、コインも一緒に連れてきてしまった。

目の前に価値がありそうなコインがあるというのに手が出せないジレンマ。これで、見知らぬ人に拾って持っていかれたら、怒りのあまり商品が全て温かいを通り越して熱いになるぞ。

どうにかして手に入れたいが、自動販売機ではどうにもならない。はあ、取りあえず、ここで生き延びる為に能力とポイントの再確認をしておこう。八本足鰐との戦闘で盗賊から巻き上げた金を大量に消費したからな。

《自動販売機 ハツコン

耐久力 200/200

頑丈 50

筋力 0

素早さ 20

器用さ 0

魔力 0

PT 1020698

機能 保冷 保温 全方位視界確保 お湯出し カップ麺対応
2リットル対応 塗装変化 箱型商品対応 自動販売機用防犯カメラ
ラ 棒状キャンデー販売機 酸素自動販売機 雑誌販売機 ガス
自動販売機 ダンボール自動販売機

加護 結界 《

耐久力と頑丈がこれだけあれば、そう簡単に壊されることは無いだろう。素早さは商品を出す時や温める速度が増すのだと思う。これは後で実験しておかないとな。

他に変わったところは……んー、何だバグか？ ポイントの表示がちょっとおかしいような。一、十、百、千、万、十万、百万……ひゃ、百万っ！？

え、あ、う、ええええっ！ 何でポイントが100万もあるんだえ、犯罪行為に身を染めた覚えもないぞ。

どういうことだ。ポイントは硬貨と引き換えに得られるものだよな。確か説明にもそうなっていた筈だし。あの時はお金でポイントを得られるって表示されていた。もう一度確認しておこうか。

《100円と1ポイントを交換することも可能》

そうだよな。ポイントはお金と交換できるって書いてある。でも他にポイントを得られる方法が無いとも記載されていない。

もしかして、ポイントって本来は敵を倒して得るものなんじゃないのか。ゲームなら敵を倒して経験値やスキルポイントを得るのが基本。もしかして、お金とポイントを交換する方が異質で、元々は敵を倒して手に入れるものなのかポイントって。

だとしたら、この大量のポイントは階層主である八本足鱈を倒したことによるものだとしたら納得できる。

そうか、お金を消費しなくてもポイントを得る方法があるのか。勉強にはなったが、再び魔物を倒すチャンスは無いと思う。今回はたまたま上手くいったけど、あんな場面はもう二度とないだろう。

やっぱり、自動販売機としてお金を稼ぐ方が現実的だ。

とまあ現状は把握できたところで、お楽しみ有加護タイムだ！

100万ポイントを越えた今、新たな加護を手に入れることが可能となった。正直、百万なんて馬鹿げたポイントを手に入れられるとは思ってもなかったが、まさかこんな抜け道があったとは。

さあて、加護をじっくりと厳選させてもらおうとしよう。

新たな力

100万ポイントで得られる加護から必要な能力と、そうでない能力をまず仕分けする。

剣技や格闘技といった手足が無ければ使えない能力は論外。火属性魔法、水属性魔法といった魔法関連は魔力が無いので除外。残った物で自動販売機として便利そうな能力を吟味していこう。まずはこれだ。

《念動力》つまりテレキネシスとかいう、触れずに物を動かすことができる超能力の事だよな。説明を見ておくか。

《自分の周囲半径一メートル以内の物体を操ることが可能になる。ただし、重量に限度があり商品のみとなる》

半径一メートルはまあいいとしよう。それだけでも充分ありがたいから。だが、何故に商品限定なんだ。でも、この能力があれば、商品の使い方を自らレクチャーすることも可能になる。候補の一つだな。じゃあ、次を見よう。

《念話》

《自分の周囲半径一メートル以内の相手に心の声を届けられる》

これが実は一番狙っていた加護だ。これさえあればラツミスと会話することが可能となる。効果範囲が狭いが、それでも意思の疎通が可能になるのは大きい。

《瞬間移動》

《自分の周囲半径一メートル以内に瞬間移動することが可能となる》

俗に言うテレポーテーションだ。しかし、何で効果範囲は一メートル縛りなのだろうか。一メートルしか移動できないとはいえ、自動販売機が移動する方法を手に入れられる。

この三つが有力候補となる。ただし、それが自分の思い描いた能力であるならばの話だ。結界と同じく、発動にはポイント消費する可能性がある。

その場合、燃費も考慮しなければならない。ここにラツミスがいるなら迷わず念話を選んでいた。だが、俺はこの迷宮に一人一台ポツチだ。この現状で選ぶのは躊躇する。

瞬間移動もこの広大な迷宮で一メートル移動できたところで、焼け石に水のような気がしてならない。連続で発動可能なら、それこそ空中移動も可能になりそうだが裏があるのではないかと疑ってしまふ。

念動力は自動販売機としての能力を一番いかせられる加護だよな。商品を操れるなら、できることが大幅に増える。これが妥当っぽい。焦る必要はない。100万ポイントを無駄にはできない。

そついや、ポイントがそれだけあるなら機能でも何か選べないか。10万ポイントを超える機能は取ることが暫くないだろうと思っただけで見ていなかったからな。

まあ加護で決まりだとは思っけど、他にも目を引く機能が。え、こんなのあったか？

《自動販売機ランクアップ》

なんだこの、自動販売機マニアの魂を揺さぶる文言は。いや、待て。そんなものより加護を選んだ方が効率的に決まっている。ま、

まあ、一応、説明だけでも見ておくか。

《自動販売機とは硬貨や紙幣などの対価を支払うことにより、店員を介さず自動的に商品やサービスを受けられることをできるようにした機器。この定義に当てはまるものが追加で解放され、更に様々なオプションパーツが取りつけられるようになる》

なんだと……つまり、今までは選ぶことが出来なかった機能や自動販売機本体の種類が増えるということか。今までは自動販売機と呼ばれている物しか選ぶことが出来なかった。

自動販売機という呼称ではないが、その定義に当てはまりさえすれば、その類いの機能を選べるようになるということか。

そんなの選ぶしかな　待て待て。落ち着け俺。まずは深呼吸をして冷静に冷静に。

「いらっしやいませ　いらっしやいませ」

よっし、落ち着いた。まず、この異世界で、尚且つ迷路の階層で生き残るには加護を選ぶのが、正しい回答だろう。そうだ、そんなことはわかりきっている。

だが、だがしかし、俺は自動販売機だ。好きが高じてこの体を得たような物だ。未だに転生した理由は不明だけど。自動販売機として生まれ変わった一人のマニアだということを忘れてはいけない。

俺は超能力を操れる自動販売機になりたいのか、それとも多機能な優れた自動販売機になりたいのか。

迷う必要なんて初めからなかったんだ。そう、俺が選ぶのは自動販売機ランクアップだっ！

《自動販売機のランクが2に上がりました》

その言葉が脳裏に浮かんだ瞬間、全身に力漲る……わけでもなく、変化は全く感じられない。ランク2ということは更に上のランクがあるのだろうか。ちょっと楽しみになってきた。

体中から熱が抜けていき、冷静になって思ったことがある。もしかして、やつちまった？

い、いや、確かに強くなることも便利になることは大事だ。でも、俺は自動販売機。そこを忘れたら本末転倒だろ。今までも不便ではあったが何とかやってこられたからな。

うんうん。どんな選択でも妥協して選んで失敗するよりも、自分で選択した未来なら失敗しても後悔は少ない。

反省終わり！ 早速、ランク2になって使えるようになった機能の一つを手に入れることにした。

それは白くすらつと伸びた身体にコイン投入口があるのは当たり前だが、側面に蛇腹のホースが取りつけられ先端部分はプラスチックの素材出てきている。

そして、そこには銃の引き金のようなものがあり、それを引くとギユウウウと異音が鳴り空気が吸い込まれていく。更に引き金の近くにスイッチがあつて、それを押すと強烈な風を噴出することもできる優れものだ。

ちゃんと起動するようだな セルフ洗車場に置かれているコイン式室内掃除機は。

説明した通りなのだが、このコイン式掃除機の中でも俺の好きなこの機種は、吸うだけじゃなく風を噴き出すことも可能で、車の椅子の下に潜り込んでいる砂を吹き飛ばすことも可能となっている。

問題はここからだ。自在に吸引噴出を俺の意思で操作可能なのは確かめた。ならば、ここからすべきことは 結果 でホースの先端を外に弾き出す。

結界の外に弾き出されたホースの先が地面を転がり停止した。こ

の掃除機のホースは軽く二メートル以上あるので、弾き出すのは可能。

そしてここから、風を噴出、ストップ！ っともう少し、風を強くして…… っと今度は強すぎたか。もう少し、短く風を出して、位置を微調整して。

と十分以上悪戦苦闘した結果、何とかホースの先端を理想的な場所に運ぶことに成功した。そう、八本足鰐のコインの近くまで。

誰かにとられる前に、自分で取り込んだ方がマシだ。という結論に達しミッションは決行された。

ホースの位置よし！ 障害物もなし！ 吸引開始！

吸引口から音が響き地面の砂と共に空気をも一気に吸い込んでいく。本命であるコインも驚きの吸引力には逆らえないように、にじり寄ってくる吸引口の中に消えた。

ミッションコンプリート。

ホースの中をコインが転がっているのがわかる。そういや、このあとコインってどうなるのだろうか。この掃除機は確か後ろの方に排出口があつて、そこにゴミ箱が設置されていて、その中にゴミが落ちる仕組みだった筈だが。

《八足鰐のコインが所持品に追加されました》

はい？ え、所持品って何。そんな項目なかったよな。

疑問に思ったら即実行。能力を確かめてみるか。

《自動販売機 ハツコン ランク2

耐久力 200 / 200

頑丈 50

筋力 0

素早さ 20
器用さ 0
魔力 0
P T 18595

機能 保冷 保温 全方位視界確保 お湯出し（カップ麺対応モ
ード） 2リットル対応 棒状キャンディー販売機 塗装変化 箱
型商品対応 自動販売機用防犯カメラ 酸素自動販売機 雑誌販売
機 ガス自動販売機 ダンボール自動販売機 コイン式掃除機
加護 結界

所持品 八足鰐のコイン》

お、所持品の項目が増えている。ポイントがごっそり減ったなどか、ランク2が表示されているとか気になることは他にもあるが、まずは所持品のチェックだよな。

《八足鰐のコイン。階層主を倒した証》

それだけかいっ！ え、他に説明は無いのか。これってコレクターアイテムなのか。それとも何か重要な意味のあるコインなのか。それはわからないが、持っていて損はないだろう。

……このコイン取り出せるのだろうか。出せたとしても、もう一度吸い込むのに時間がかかるので今はやらないが。あの階層主って八足鰐って名前なのか。

ポイントが2万を切ったので、あまり無茶ができなくなってきた。コイン式掃除機って実は2000ポイントも消費するのか。ランク2になってから選べるようになった機能は割高なものが多い、気を付けないと。

やるべきことをやったので、かなり落ち着いてきた。まあ、そう

なると現状がリアルに迫ってくるわけで。一応階層の一つでわかり易い場所だから、ここを攻略に来ているハンターたちと遭遇する可能性は高いと睨んでいる。

そこで問題になるのが、ラツミスや清流の湖階層の住民の様に良識がある人かどうかということだ。それこそ盗賊団のような輩が来て、壊すか持ち去ろうとしても不思議ではない。客になる保証は何処にもないのだ。

最悪な展開も考慮しておかないと。まずは 結界 を維持できるだけのポイントの確保。それに何かポイントを他にも得る方法があればいいんだけど。ポイントを維持できれば機能が停止する心配もない。

となると魔物の討伐……は無理だな。八足鰐を倒せたのはただの幸運だ。それにもう一度あれをやれと言われても、正直やりたくないです、はい。

何事も起こらず機能維持だけでいいなら、一年は余裕で耐えられるのだが、この異世界は何が起こるかわからない。というのに、100万ポイントを何故ランクアップに注ぎ込んだとか、考えたら負けだ。

《自動販売機変形時間が限界の二時間を越えます。直ちに、元の自動販売機に戻ってください。繰り返しします。自動販売機変形時間が限界の二時間を越えます。直ちに》

なんだ！？ 唐突に頭に警報が鳴り響いて、こんな文字が表示されたぞ。変形時間の限界？ えっ、か、考えるのは後にして元のことは、いつもの自動販売機に戻ればいいんだよな。

即行で、いつもの自動販売機に戻ると、警報も忠告の文字も消えた。これって初めての経験だが、元の自動販売機以外の形には一日最高でも二時間以上は無理って事なのか。

今まで何度もフォームを変えてきたが、そういや、別の形だと妙な違和感があつて、いつもの自動販売機に戻つていた。二時間以上別の機種でいたことがなかったのか……気づかなかつたな。

一日二時間が限界なのか。大した理由もなく機種を変更するのは止めた方がいいなこれは。

こういうことも含めて、最近はラツミスやヒュールミに頼り切つてばかりだった。自動販売機は店員がいなくても何でも買える便利などころが売りだった筈だ。いい機会だ。一人で何処までやれるか試してみるか。

新たな出会い

はああ、いい天気だねえ。

中天から降り注ぐ日光を浴びながら、俺はまつたりしている。

あれから三日が過ぎたが人っ子一人訪れません。だが、俺は微塵も焦ってはいない。太陽の光を浴びているだけで幸せなのだから。

今までならじわじわとポイントが削られていくことに、軽い恐怖を覚えていたかもしれない。だが、今の俺はポイントが増え続けている。

その理由は頭の上のこれだ。傾斜のある屋根のように設置されているソーラーパネルを新機能として追加したのだ。これで晴れの日は何もしないでポイントが溜まっていく。

ほら、ランクアップ選んで正解だった！ って誰もいないのに何で言い訳しているんだ。

このソーラーパネルは本来、節電と災害時用対策の一環らしい。俺のはかなり高性能らしく、天気が良いければ一時間で10ポイントは溜まっていく。日中にポイントを稼いでおけば余裕で生きていく。

この三日、自分の能力を再確認する為に、まずは機種変化の二時間縛りを調べることに費やした。わかったことは、生まれ変わった時の姿であれば何時間でも維持できる。わかりきっていたことだが、それに加え外観は殆どそのまま、内部の機能を変化するだけなら時間制限はない。

つまり、半分だけカップ麺の機能を入れても時間制限には引つかからないようだ。

何事もなければ、このまま穏やかに時間が過ぎていくだけなのだが。

う、うーん、心配事が一つ解決すると、今度は欲が出てくるよな。

正直暇だ。自動販売機の体に慣れすぎたせいなのかも知れないが、商品を誰かに売らないと落ち着かないのだ。

迷路階層は本当に人気が無いようだ。もう少し詳しくヒュールミから話を聞きたかったけど、今更だよな。俺から聞きだす方法もないし。

ラツミスは気を失っていたけど大丈夫なのだろうか。常連のお婆さんがいるから傷は治してくれるだろうけど、後遺症とか残ってないだろうな。

はあ、最近はずっと騒がしい日々を過ごしてきたので、一日中誰とも会わない日々は少し寂しい。前後は巨大な壁があり空は見えるが、それだけだ。

することもないので、いつものように辺りを見回していると、通路の遙か向こうに微かに動く物体を捉えた。

空中から録画しておいた防犯カメラの映像からして、俺から向かって左側は確か迷路の入り口だったよな。ということは、期待できるかもしれない。上の階層から助けに来てくれるのがベストだけど、他のハンターたちでも構わない。

素行の悪い連中でなければいいけど。

何かが徐々に大きくなり、その姿が何とか見て取れるようになってきた。

あれって二足歩行の 小型の黒い熊か……いや、猫、たぬきか？ 判別の難しい顔をしている。

数は四。お揃いの緑が鮮やかな革のジャケットを着込んでいるな。ズボンは履いてないというのに靴はあるのか。ジャケットの前を止めていないので胸元が丸見えなのだが、白い三日月模様がある。小型のツキノワグマか？

熊会長と同じ種族かもしれない。にしてはかなり小さいけど。

顔も体毛も真っ黒なのだが、鼻も黒くて大きく耳が立っていて内側がピンクだ。髭もあるのだが猫みたいだな。ということは熊じゃないのか。まあ、何にせよ結構愛らしい顔をしている。自動販売機の次に猫が好きな俺としては、うずうずしてしまふ。

な、なんだ、あの可愛い団体は。何か商品を買って購入している間に、もっとじっくり観察したいが、相手はそれどころじゃないよ。うだ。背中にバツクパツクを背負った状態で懸命に駆けてきている。その背後からは弛んだ体の上に豚の顔が乗った魔物が三体、手にした棍棒を振り上げたまま追いかけてきている。前を走る熊猫……ってパンダのことだったような、まあいいか。

追っ手はそいつらの三倍以上はある体躯で足は決して速くはないのだが、熊猫たちは一匹が足を怪我していて、二匹が肩を貸しながら走っているせいで距離が一向に広がらないでいる。

豚の顔が乗った魔物は確か、豊豚魔と呼ばれていた筈だ。清流の湖階層の人たちが太っている人を揶揄して口にしていたのを聞いたことがある。

まだ距離があるが、俺の前まで何とか逃げ切ってくれ。そうしたら、俺が何とかしてみせるから。

「ヴアアアアアッ！」

「あっち行ってよおお」

「わたしを置いて行って」

「置いていけるわけがないだろっ！」

見た目に反してしゃがれた鳴き声と大口を開いたときの顔が怖え

っ！ 口が大きく裂け鋭い牙が覗いている。

怪我をしているのが猫のスコティッシュフォールドみたいに耳が垂れている个体か。声からしてメスみたいだな。それを支えているのが、黒褐色の他と比べて少し背が高い猫熊。

威嚇しながら走っているのが細身で。最後尾を走っているのはふっくらとしている。

同じように見えて結構違うもんだな。まあ、そこは置いておいてあの調子だと何とか俺の前を通り抜けられそうだな。背後の豊豚魔との距離は十メートル程度か。

問題は俺がどうやって熊猫たちを助けるかだよな。暇に飽かして自動販売機でもできる攻撃方法を考えていた成果を見せる時が来たか。

取り出し口に蓋のないタイプの自動販売機に変化し、瓶ジュースを取り出し口に幾つか落とす。自動販売機の色を周りの壁と同色に変化させて、壁と同化しておく。

パツと見は壁の一部に見えるだろう。この状況でじっくりと見る余裕もないだろうからな。

熊猫たちが駆け抜け、少し遅れて豊豚魔が俺の前に差し掛かったところで 瓶ジューススプラッシュ！

結果 で瓶ジュースを結界の外に押し出す。それなりに速度が出た瓶ジュースが三本だけ豚人間の二体に命中した。ダメージは全く通っていないようだが、外れた瓶ジュースも辺りに散らばったことで、相手が足を止め俺に注目している。

じゃあ、擬態を解いて「あたりがでたらもういっぽん」を連呼する。

「なんだぶひい」

「迷宮のわなぶふう」

こいつらは語尾にぶひとかついちゃうんだ、わかり易いな。この魔物は会話をする程度の知能はあるって事か。熊会長や熊猫たちもそうだし、哺乳類系の二足歩行をする生物は知能が高いのかもしれない。

「こんなところに罠があったぶひいか？」

豊豚魔たちが俺に注目している間に熊猫たちは、かなり距離を稼いでいる。更にここで罠を発動だ。豚って確か雑食だったよな。何でも食べると聞いたことがある。

最近、活躍したばかりの野菜販売自動販売機に変わって、野菜を展示しているガラスの蓋を解放して、野菜を全て 結界 で弾き出す。

「ぶひい、飯がでてきたぶふ！」

「飯だ飯だぶひいい」

疑いもなく拾って、生のままバリバリと食っているな。かなり飢えていたようだ。

俺に背を向けて呑気に貪り食っている。熊猫たちに興味を失ったようで、無我夢中で散らばった野菜を拾っては口に放り込んでいく。その間に子供用のテーマパークに置いてある背の低い小型の自動販売機に変化をしておき、配色も壁と同じに戻しておいた。

暫く観察していると、全てを食べ尽くして満足したらしく、腹を叩きながらのっそりと豊豚魔たちが立ち上がる。

「満腹だぶひい」

「おい、野菜を出した箱がないぶひよ」

辺りをキョロキョロと見回しているが、目の前の壁と同じ色になった俺を見ても、気にも留めていない。

首を傾げていたが、腹が膨れて注意力も散漫になっているようで、そのまま道を戻っていった。

何とか熊猫たちを逃がしてやれたが、彼らも離れて行ってしまった。くそっ、もっと愛でたかった。救えたことには満足しているから、まあよしとしよう。

しかし、あの熊猫たち可愛かったな。子供ぐらいの大きさだったのも良かった。でも、あの熊猫たちはここで何をしていたのだろうか。迷宮で暮らす魔物にしては殺意というか、恐怖を感じなかった。あの豊豚魔とも敵対していたようだし。熊会長の様に人間と共に暮らす友好的な種族っぽいな。言葉も理解できたから、いいお客さんになれたかもしれないのに。非常に残念だ。

ただ、ここは異世界だというのに、獣人も魔物も何かしら地球の生物を元にしたような姿をしているが、あの熊猫は何なのだろうか。何処かで、若い頃どこかで見たことがあるような気がするのだが……名前何だったか。

凄くマニアックな名前だったような。中学ぐらいの時にその名前に惹かれたような……。

「ほんとに戻るの……」

「奥に進んだら魔物が強くなるんだよ……」

「畏がまだいきているかもしれないわ……」

おおっ、さっきの熊猫たちの声が聞こえる。

ずっと豊豚魔が消えて行った方向を注意していたから、気づいていなかったが、こっちに近づいてきていたのか。

視線を移すと周囲を警戒しながら四匹の熊猫が歩いてきていた。

さて、どうしようか。このまま壁の振りをしていたら気づかれな可能性があるので、まずは配色を普通の自動販売機に戻しておく。大きさは子供用のままでいいか。熊猫たちの身長だと、この方が使いやすいだろう。

ああ、手足が短めで和むなあ。

「あれ何？」

「なんだろう」

「さっき豊豚魔が引つ掛かっていた罨じゃないかな」

怪我をしている垂れ耳は距離を置いた状態でじっとこっちを見ている。ふくよかな熊猫も後方で控えているようだ。残りの二匹は興味深々といった感じで、忍び足で近づいてくると前足というか手をひゅっと伸ばして、俺の体を突いている。

まったく痛くないのは、相手も様子を窺っているだけなのだろう。やっぱり、猫っぽい外見だけあって好奇心旺盛なのか。俺を取り囲んで鼻をひくひくさせて嗅いでくる。

あ、今凄く幸せだ。このまま、熊猫に囲まれる至福の時間を楽しんでいたい。そういう訳にもいかない。非常に残念だが。

「いらっしやませ」

「ヴオオオオオッ!？」

一斉に熊猫たちが後方に跳んで、距離を取った。だから、鳴き声
と顔が怖いって。悪いことをしたな、驚かせてしまった。

「ヴアアアアアッ！」

黒褐色は気が強いようで、大口を開けて威嚇している。
残りの二匹はじりじりと後退っているな。このままだと逃げられ
てしまう。ここはフォルムチェンジをして、から揚げを温めて取り
出し口に落とすぞ。素早さが上がったからなのか、あっという間に
温め終わった。

「光って伸びたよ！」

「み、みんな、気を付けろっ」

「逃げた方がよくない？ ねえ、逃げた方がよくない？」

後方の三匹が更に慌てている。

細身はリーダーなのだろうか、仲間に注意を促している。ぼっち
やりしているのは臆病らしく一番後方まで下がっている。

くそっ、怯えた素振りも可愛いじゃないか。

「えっ、この匂い肉か」

黒褐色が匂いに気づいて鼻がびくびくしている。

猫と言えば魚というイメージがあるが、実は魚よりも鳥肉の方が
好きだ。家で飼っていた猫なんて、何度も生の鳥肉や、から揚げを
強奪した前科がある。まあ、あれが熊だったとしても肉なら好物だ
ろっ。

罾でないかと警戒はしているようだが、好奇心と食欲に動きを封じられているようだ。

「いらっしゃいませ こうかをとくにゆっしてくだい」

「ヴアアアアツ……ア？ これって物を売っている箱なのかしら」

お、垂れ耳が気づいてくれたか。

「スコ、騙されてはいけない。物で釣るタイプの罾かもしれない」

細身は慎重派だな。もこもこしているのなんて匂いにつられてぶらぶらと、俺に近づいてきているというのに。

「ペル、近づいちゃダメだ。ショートも一定の距離を取るんだ」

「わかった、ミケネ」

お、登場した熊猫の名前が全て判明したぞ。細身のリーダー格がミケネ、耳が垂れているメスっぽいのがスコ。ぼっちゃりしているのがペルで、黒褐色の気が強そうなのがショートか。

どうにか熊猫たちに商品を買ってもらえるように誘導しないとな。

暴食の悪魔

警戒は解かれていないが、から揚げが気になっていようだ。全てタダで提供すると、欲を出されて商品を購入しようともせず、中身を取り出そうとされても困るからな。

「もう、食べてみようよ。食料ももうないし、ボクお腹空いたよ」

よっし、誘惑に負けるんだ、ペルと呼ばれていた熊猫。見た目通り食いしん坊キャラなのか。

「バカ、ペル。大食いの悪魔と呼ばれた、袋熊猫人魔の一員である誇りを忘れたのかっ」

ミケネだったか。リーダーっぽいのが胸を張っているのはいいのだが、大食いの悪魔ってなんだ。それに袋熊猫人魔って名称が長いな。

種族名から察するに有袋類で熊と猫っぽい特徴があるってことか。それに大食いの悪魔か……あああっ！元になった動物わかったぞ！そのネーミングの格好良さに中学時代注目していた絶滅が危惧されている動物。たぶん、タスマニアデビルだ！

一見可愛らしい顔をしているのに悪魔のような鳴き声と胸元の白い三日月模様。思い出した、タスマニアデビルで間違いない。もっとも異世界なので、もっと違う何かなのかもしれないが、まあまあが晴れてスッキリした。

タスマニアデビルって肉食でかなりの大食いだったような。客として迎え入れられたら、売り上げが期待できるぞ。

「いらっしゃいませ 二つかをとくにゆっつしてください」

「逃げるかそれとも……」

「もう、ボクダメええ」

ペルがミケネを押しつけから揚げの入った箱に飛び付いた。そして、周囲が止める間もなく箱を引き裂くと、中から湯気を立ち昇らせているから揚げを鋭い爪で摘み上げて、口の中に放り込んだ。

「はふはふ、んぐっ、お、おいしいiiiiiiiiiiii！ 何これ！？」

五個入りのから揚げをあつという間に平らげ、口元の油を舌で舐めとっている。

「え、美味しいの？ え、硬貨入れたら、この絵と同じものが買えるってことなのかな」

「お、おい。俺たちのは！ いつそのこと箱を壊すか……いや、こは硬貨を入れておいて、後で壊して回収すればいいだけか。俺も食うぞ」

「待つんだ、スコ、ショート！ これは買かも」

ミケネが止めるのを無視して、黒褐色のショートがジャケットのポケットから銀貨を取り出し、硬貨投入口を何とか見つけ出すと、そこに放り込んだ。

「絵の下の出っ張りが光っているな。これを押せと言うことか」

ここで集落の人間相手なら「いらっしやいませ」と返事をするのだが、彼らにはそれが「はい」という意味だというのが伝わらない。集落の生活では、そういつたやり取りが普通になっついていて油断していた。本来なら今みたいに言葉が通じない方が当たり前なのだ。

シヨートが恐る恐るから揚げのスイッチを押すと、商品が温まった状態で取り出し口に現れる。

「やはりそうなのか。何と言う香ばしく食欲をそそる匂いだ。それに温かい。俺も食うぞ」

「じゃあ、私も」

ミケネ以外がから揚げを購入して、はふはふ言いながら美味しそうに食べている。ペルは銀貨を何枚も取り出すと、次々と投入口に硬貨を入れ、から揚げのスイッチを連打している。

素早さを上げていて良かったよ。この調子だと温め終わるまで辛抱できずに壊されかねない勢いだ。

合計六個のから揚げを提供すると、その後ろで待っていたシヨートとスコが同じように、購入してくれている。

短い腕を組んだ状態でじつとこちらを見つめていたミケネも、どうやら辛抱が限界に達したようで、ふらふらと俺の前に歩み寄ると銀貨を入れて、から揚げを購入した。

「全く、みんな畏だったらどうするつもりだい。まずは、毒味をしてから……はああ、肉汁が溢れ出すよ！ なにこれ、すっごく美味い！」

よっし、全員陥落した。日本の冷凍食品技術を思い知ったか。っ

て、俺の手柄のように振舞うのは違うな。ありがとつ、某社！ 個人的にはこのメーカーの炒飯が好きなのだが、肉食の彼らが食べるのか疑問ではある。

でも熊会長は何でも食べていたから、その点は心配しないでいいのかもしれないな。そんなことを考えながら、呑気に眺めていたのだが……このタスマニアデビルたちはいつまで食べ続けるんだ。既にから揚げ一人前を一人頭、二十回以上買っているぞ。

え、胃袋は大丈夫？ まさかたった四匹というか四人でいいのかな。彼らだけだから揚げの補充をする羽目になるとは。大食いの悪魔恐るべし。

「もう、お腹パンパンだよ。逃げるのにも疲れたしい……」

「くら、ペル。こんなところで寝るんじゃない」

「ミケネ、ここで休憩した方が良くないか。スコも動くのは限界だろ」

「ごめんね。もう歩けそうもない」

「いや、ボクの方こそゴメン。じゃあ、ボクが見張りをしておくから、みんなここで休んでくれ」

「わかった。後で代わるからミケネ初めは頼むよ」

リーダーらしき細身のミケネ以外は俺と壁の隙間に隠れるようにして入り込み、横になると一分も経たずに眠りに落ちた。余程疲れていたのだろう。

この距離なら何とか 結界 で防いであげられるかもしれない。ここまで見た感じでは全員がお互いを信頼して庇いあう良好な関

係に思える。見張りに立っている細身のミケネは俺にもたれかかりながら、たまに意識が飛んでいるな。立っているのもやつとのおようだ。

辺りは暗くなり始めているし、このまま寝てもいいんだぞ。俺が代わりに見張りやっておくから。

そんな俺の思いが通じたわけではないだろうが、ミケネが力尽きたように地面へと滑り落ち、そのまま眠ってしまった。

お疲れさん。今日は安心してぐっすり眠ってくれ。

「みんなこれからどうする」

「んがっ、はぐはぐむしゃむぐ」

ミケネが仲間に関後のことを相談しているのだが、全員が食事に夢中で全く聞いていない。彼らは結局朝まで誰も起きることなく、目が覚めると同時にお腹が空いたようで、またも、から揚げを大量購入してくれた。

その際に体を変化させると、また敵つい顔で威嚇されたのだが、から揚げが買えることがわかるとあっさり状況を受け入れてくれた。この種族何よりも食欲が優先されるのかもしれない。

「でも、この箱何なんだろうな」

「んぐつ。ふうう。ご飯が買える魔道具じゃないの？」

「ボクたち運が良かったよね。こんなに美味しいお肉食べられるんだから」

「ペルは呑気だな。こんな状況なのに」

朝飯を食べていた彼らの話を盗み聞きしていてわかったのだが、彼らはこの迷路に住んでいる魔物ではなくハンターらしい。

とある一団に所属していて、その名も 暴食の悪魔団 と言うそう。何と言うか見た目に反したネーミングだが、彼らの食べっぷりを目撃した後だと納得してしまう。

しかし、この世界のハンターグループは変な名前をつけなければいけない縛りでもあるのだろうか。

話を聞いている限りでは、この迷路の階層かなり実入りはいいが危険度が高いらしく、安定を求めるハンターたちからは忌避されているらしい。どうりでハンターと全く出会わないわけだ。

彼ら暴食の悪魔団は当人たち曰く何故か出費が激しいらしく、団を維持する為に一攫千金を求めて、この階層にやってきたそうだ。

まあ、その理由は…… 第三者からしてみれば、よくわかるのだが…… 食べる量を抑えられないのだろうか。

彼らは身体能力も高く、顎の強さと爪の鋭さ、それに 咆哮 と呼ばれる威圧系の加護を所持しているようだ。ハンターとしては無能ではないらしいが、生まれつき体が小さいので大型の敵を苦手にしている。

それでも彼らに言わせると、追いかけてきていた豊豚魔も仲間の怪我がなく、相手が二体だったら何とか撃退する自信があったそうだ。本当かどうかは知らないが。

全て食べつくした彼らはお腹を擦りながらポーっとしている。腹が膨れると危機感が無くなるのか、寛いでいるな。

「みんな、話がある。ちゃんと聞いてくれ。今後どうするかなのだけど、どうにか入り口に戻ろうと思っっている」

「でも、お宝何も手に入れてないよ？」

「ボ、ボクは帰るのに賛成かな。だって、ここ怖いし」

「今帰ったら団の存続は不可能になるけど、いいんだな？」

命あつての物種って言うしね。正直、戻った方がいいんじゃないかな。

唯一のメス いや、女性と云うべきだな。傷を負った彼女が完治したら戻るのを推奨するよ。

「みんな、宝なら見つけたじゃないか。食べ物を買える魔道具を！」

「あああつ、それもそうか！」

宝と言われて若干悪くない気分だが、俺は誰の所有物でもないし、相棒はラツミスと決めているからな。文句の一つでも言っておくか。

「ざんねん」

「ヴアアアッ！ びっくりした。いらっしやいませ以外にも言えるんだ」

「あたりがでたらもういっぱい」

「えっ、他にも何か話せたりして……」

「ありがとっございました またのぐりよつをおまちしています」

自分が話せる音声を全て再生して相手の出方を窺ってみる。
袋熊猫人魔こと熊猫たちは円陣を組んで顔を見合わせて、ぼそぼそと話し合っているようだ。

「今、ボクたちの声に反応していなかった？」

「偶然じゃないかしら」

「でも、受け答えしているようなタイミングだったよ」

「まさか、この箱は意思があるのか？ 試してみるしかないぞ」

話し合いが終わると、全員が俺から一步距離を取ってじっと見つめている。くっ、黒い瞳でじっと見られたら和んでしまっじゃないか。

ミケネが仲間を代表して一步前に進み出ると、意を決して話しかけてきた。

「もしかして、ボクたちの言葉を理解していたりしますか？」

その台詞を待っていた。当然答えは決まっている。

「いらっしやいませ」

「あっ、やっぱり、言葉が通じてないよ。こっちの声に反応して適当な言葉を返しているだけみたい」

えっ？ いやいやいやいや！ そこは察しようよ。決められた言葉しか話せなくて、それで対応しているって。

「ざんねん」

「あ、本当だ。ただ反応しているだけで、意味がないみたい。あー、びっくりした」

「うんうん、驚いたらまたお腹空いてきたよ。今度はこの肉を揚げたの以外も食べてみようかなー」

ええええっ！ ほら、もうちょっと頑張って考察しようよ！ 色々見えてくるかもしれないぞ、頑張れ！

とまあ、心の中で応援してみたが、我関せずとまた食事を始めている。

はあ……ああ、でも、そうか。冷静に考えてみれば、これが普通の反応なのか。

ラツミスの感受性の高さに助けられて、俺は集落でも普通に意思の疎通が可能になったが、彼らの方が当たり前前の感覚なのか。

「じゃあ、この魔道具の箱を持って帰るって事でいいかな」

「はい」「いいぞ」

満場一致で可決されました。どうにか誤解を解きたいところだが、今はいいか。入り口付近まで運んでもらえるなら、そっちの方がありがたいしな。ラツミスたちが探しに来てくれた場合、直ぐに見つけてもらえるし。

「じゃあ、スコは怪我しているから、ボクたち三人でこれを運ぶよー！」

ミケネ、ペル、ショートが俺を取り囲み、動かそうと力を込めて

いるが少しだけ地面を擦った程度で一センチ動いたかどうかだ。こ
ういう場面に遭遇する度に、俺を一人で運ぶラツミスの凄さを思い
知らされる。

「ふんぬうううう」

「うがあああ、ヴアアアアッ！」

「だ、ダメだああ」

三体とも俺にもたれかかって荒い呼吸を繰り返している。小柄な
割には力持ちなのかもしれないが、俺を運ぶには力不足だよな。

同行したら食料の確保が必要なくなるし、いざとなったら 結界
で守ってあげられる。それに、見捨てるというか放っておくのは
少し心配になる。

となると、彼らが運びやすい形になればいい。ダンボール自動販
売機に成ったら彼らでも楽に運べるだろう。だけど、機種変化は二
時間までという縛りがある。いざという時の為に、取っておくべき
だよな。

残された方法はやっぱりこれか。ランクアップによって増えた機
能の一つ、車輪を四つ底に設置する。

「あれ、ちよつと背が高くなってるない」

「見て見て、箱の下に車輪がでてきたよ！」

気づいてくれたか。これで移動が可能になったと思うが、大丈夫
だよな？

もう一度、スコを除いた全員で俺の側面に回って押すと、ゆっく
りではあるが思ったよりもスムーズに動き始めた。ここは道が平坦

で上りでも下りでもないのが良かったようだ。

「動く動く!!」

「これで大金持ちだね!」

「いつでもお腹いっぱい食べられるかな」

「これだけ便利な魔道具だ。鎖食堂あたりに売り込めば大金が転がり込むぞ」

喜んでいるところ悪いんだが、売られる気はないぞ。あと、鎖食堂は断固拒否する。

うーん、彼らとラツミスたちが出会ったら確実にひと悶着起ころうな。悩ましい事態になりそうだが、今は少しでも入り口に近づきたいので考えないようにしよう。

四匹と一台

車輪がついて動かせるようになったとはいえ、重量があるのでかなり体力を持っていかれるらしく、一時間ぐらい押されていると休憩になった。

そうになると、飲み物が欲しくなるようで飲料を各自一本ずつ選んでいる。

彼らの体力とやる気が尽きてしまつと俺としても困るので、商品は安めに提供しているのだが、水分はそれ程必要としないようだ。肉を食べる量に比べたら一般的な量しか飲んでいない。

休憩を何度も挟んで一日かけて進んだのだが正直実感が湧かない。道の先は見えてこず、周囲の風景も殆ど変わりがないので、本当に進んでいるのかと不安になるぐらいだ。

たまに脇道が現れるのだが、その先がかなり入り組んでいることを俺は知っている。防犯用カメラで撮影した迷路の全景はバッチリ記録してあるからな。

夕方になると彼らは早めに野営の準備を始めている。夜の魔物は凶暴化するという話を門番のカリオスがしていたから、それを警戒していることだろう。

昼もそうだが夜も大量に商品が売れていく。彼らの食欲には呆れを通り越して感心してしまうよ。愚者の奇行団にいた射手のシユイと大食い対決をさせたら面白いことになりそうだ。

「どれぐらいで入り口につくかな」

「早くても一週間ぐらいじゃないかしら。私たちが迷路階層に入つてから二週間ぐらいだし」

「何日も中で迷っていたもんね。ボクもそれぐらいだと思う」

「大通りは一本道だから迷うことは無いと思うが、その代わり魔物に遭遇する確率が上がる。用心はしておこう」

豊豚魔以外に会ったことは無いが、迷路階層の中には色々な魔物が生息しているのは当たり前か。上空から眺めた感じでは巨大な人型の岩みたいなのがあったな。一般的なファンタジーなら石や岩でできた魔法生命体ゴレムつてところか。

後は余りに距離があり過ぎていて、何か蠢いているのがわかったが、正確な姿は確認できなかった。

「もう少し進んだら豊豚魔が出てきた場所だったね」

「うん、そうね。不意に脇道から飛び出してきて、足に怪我しちゃったから良く覚えているわ」

「あの時はびっくりしたなあ。思い出したらお腹空いてきた」

「もう少しペルは自重しろ」

豊豚魔がうるついているエリアなのか。スコの足はだいぶ良くなっているので、今度狙われても全力で逃げれば問題ないだろう。

俺の 結果 の事を暴食の悪魔団は知らない。これを伝えておいた方が良いのは理解しているが、彼らに見せたところでちゃんと意味が通じるのか。

土壇場で戸惑ってミスを犯すぐらいなら、今の内に見せておいた方がいいよな。うん、決めた。

「いらっしゃいませ」

「ヴアアアアッ!? 何、何で急にこの箱は話し出したのっ」

相変わらず驚いたときの悲鳴と言つか鳴き声と、迫力のあり過ぎる顔が怖い。

全員が俺に注目したな。じゃあ、いつちょ発動しますか。

「えっ、えっ、青くて透明の壁が」

「ど、どうなっているの。み、みんな大丈夫!？」

ミケネとスコは押す係ではなく少し離れたところにいたので、結界の外にいるな。押していた二人は自分たちが結界に囲まれていることに気づき、慌てて外に出ようとして結界で頭を打っている。

「で、出られないよっ! ミケネ、スコ、助けてええ」

「ペルうるたえるな。落ち着くんだ」

閉じ込められることになったペルが慌てふためき取り乱しているが、ショートは冷静に落ち着かせようとしている。

「ヴアアアアア!」

ミケネとスコが大口を開けて威嚇すると、結界に向かって鋭い爪を振り下ろした。

だが、その爪は結界を貫くことができずに、簡単に弾かれてしまっ

「これは、この箱がやっているのかっ、ならば」

今度はシヨートが大口を開けて俺の体に噛みつきこうしてきた。シヨートが結界に入ること許可しない！

噛みつきこうとした体勢のまま外に突き出されたシヨートは、地面を滑りながら四つん這いでこっちを睨んでいる。

いつもとは全く違う好戦的な対応をしてきたな。ただの大食い癒し系かと思っていたが、いざとなれば中々凶暴な種族のようだ。

「ヴアアアアッ！ どういうつもりだ、魔法道具！ 仲間を離せ！」

ミケネが凶悪な形相で威嚇している。悪魔の名は伊達じゃないな。ちよつと予想外な展開になってしまったが、誤解を解く為にもペルも解放しておこう。

「ボ、ボクだけ出られ……あ、出られた」

「無事かペル。何だ一体。この青いのは……それにこれは魔法道具がやったのか？」

「いらっしゃいませ」

いつもの調子で「はい」の代わりに声を出した。

「舐めているのかっ！ 何がいらっしゃいませだっ」

シヨートが怒りのあまり、牙を剥き出しにして唸り声を上げている。

そう取られたか。この状況でいらっしゃいませ、何て言われたら

馬鹿にしていると思われるも、しょうがないのか。駄目だな、ラツミスたちを相手にしている時のやり取りが、体に染みついている。彼らとコミュニケーションを取るには、新たな手段を模索するしかない。

となると 念話 を選ばなかったことが悔やまれるが、過去を後悔しても意味はないよな。だったら、今やれる最善の方法を試すだけだ。

以前から迷っていた機能 電光掲示板 を取得した。これは結構ポイントを消費するのずっと躊躇っていた機能の一つだ。理想としては、ここに文字を表示して相手との対話を可能にすることなのだが。物は試した、稼働させてみよう。

商品がずらっと並んでいる上部に黒く長い掲示板が設置される。そして、そこに文字が流れるように意識してみる。

『いらっしやいませ こうかをとうにゆうしてください ありがとうございます ございました またのごりようをおまちしています』

やっぱり、定型文だけかつ！これが躊躇っていた最大の理由だ。音声の再生も決まった文章のみだったので嫌な予感がしていた。何と言つか、予想通り過ぎて泣きそうだ。

「え、何あれ。変な絵というか線？ が流れている」

「もしかして、文字なのか。見たこともないけど……」

あ、うん。おまけに日本語表示なんだ。いや、わかっていたよ。缶や自動販売機の文字が通じてない時点でこのオチ読めていたけどな！

一縷の望みに賭けたのだが、これじゃあ、相手にとって意味不明

な文字を垂れ流すだけの装置か。ポイント返してくれませんかね。
ああ、くそっ、困った。完全に手詰まりだ。どうやって、彼らに
俺が無害で結界が守る力だというのをわからせればいい。

「魔法道具の箱はボクたちを拒絶したということだよな」

「ざんねん」

「ほら、やっぱりそうだ」

いや、違っただってミケネ。また「いいえ」のつもりで口にして
しまった。

ほんつともどかしい。ラッミスとヒュールミが恋しいよ。

「手も出せないし、この箱置いて行くしかないか」

「でも、ミケネ。あれを持って帰らないと、お金がなくて飢え死に
しちゃっよ」

「ペルの言う通りだ。どうにか持って帰る方法を模索しないか」

「うんうん、そうだよな。ほら、追い出されただけで怪我したわけ
じゃないし」

お、まだ望みはあるのか。じゃあ、まずは結界を解除しよう。そ
して、更に食べ物を提供しようじゃないか。さあ、好物のから揚げ
だよー。

「はっ、あの肉の匂いがああ」

続いてどたどたと地面を叩く音が流れてきた。音の源は少し先にある横道の入り口か。

「今のは豊豚魔！ みんな逃げる準備をして！」

全員が一斉に立ち上がり前屈みになった。逃げる準備は万端か。あ、これ、また置いて行かれるパターンだ。暴食の悪魔団の面々が生き延びてくれるなら、また時間稼ぎ担当するか。

そんな気持ちで横道に繋がる箇所を眺めていると、豊豚魔が六体飛び出してきた。そして、こっちに向かって走ってきている。体中から汗を流し、武器も手放した状態で全力疾走をして。

え、何で、今にも泣きだしそうな悲壮な表情なんだ。あれじゃまるで、誰かに追われているみたいじゃ。

そんな俺の考えを肯定する様に、豊豚魔の背後の大气が揺らぎ、巨大な骨の手が現れ壁を掴んだ。それはただ大きいだけではない、その手は炎に覆われ、凄まじい熱量に石の壁が溶解して、マグマのように変貌している。

そして、更にぬつと豊豚魔一体分はありそうな巨大な頭蓋骨が抜き出てきた。腕と同様に顔は炎を纏い目には黒い炎が宿っていた。

「あれは、炎巨骨魔っ！ 嘘だろっ、みんな逃げろっ！」

炎巨骨魔

豊豚魔は暴食の悪魔団を襲う余裕もなく、ただ逃げているだけのようだ。暴食の悪魔団は既に脱兎のごとく走り去っている。

炎を纏った骸骨の全身像が露わになったのだが、これは驚愕するレベルの巨大さだ。壁の頂点にもう少しで達しそうだ。十メートル近くあるのか。

あまりの熱量に視界が霞んでいるな。一步踏み出すごとに、地面が足の形に溶けて陥没しているぞ。おまけに縦揺れが酷い。あれだけの巨体だと骨だけでも重量が半端ないようだ。自動販売機の体を浮かすほどの振動って、相当なものだぞ。

ここまで凄いと王蛙人魔に使ったコーラスプラスチックも通用しないか。水の入ったペットボトルをぶつけたところで、まさに焼け石に水だろうな。

倒すのは諦めて、時間稼ぎの方法を考えるか。もう少しで、豊豚魔が俺の元にまで辿り着きそうだ……ということは、やることに決まった。

まずはフォルムチェンジだな。ランク2から機能欄に現れた灯油計量器に変化する。ガソリンスタンドに必ずある冬場お世話になるあれだ。

白いボディに某ガソリンスタンドのマークが描かれ、側面に強度のあるゴム製のホースとレバー付きのノズルがある。

よっし、これで地面に灯油をぶちまけて ノズルの先端が本体に刺さっているな。このままレバーを引くと俺が灯油まみれにならないか。

まあ、灯油に濡れても 結界 内に入るのを拒否したら付着した

灯油も外に弾き出されるよな。ちよつと試しに少しだけ灯油を出してみよう。

レバーを引いて……そうか安全性を考慮して刺さった状態だと灯油が出ないのか。さすが日本製だ。作戦、これにて終了！

とまあ、潔く諦める人間　自動販売機じゃないんだよな。何かしらの抜け道と言うか方法が無いか。つておおつ。

炎巨骨魔が更に一步踏み出すと振動が増して、灯油計量器となった俺の体が地面から離れる。そして着地と同時にノズルが外れて地面に落ちた。

これはついてるぞ。先端も上手い具合に通路側に向いている。なら、このまま灯油を地面にぶちまけるか。

ノズルから溢れ出した灯油が俺の前の地面を濡らしていく。ここは地面も石なので灯油が沁み込まず、一帯に薄い油溜まりが出来る。逃げることに必死で足元を全く注意していなかった豊豚魔が灯油地帯に差し掛かると、

「ぶひいいい」

その場で受け身も取れずに転んでいく。頭を抱えて唸っているのもいるな。

灯油まみれの床って、スケートリンクかと思うぐらい滑るので、一度転んだ豊豚魔は起きることも困難になっている。

そして、そこに後方から追いついてきた炎巨骨魔が燃え盛る巨大な足を振り下ろすと　灯油が一気に燃え広がり、辺りが火の海と化した。

俺はもちろん　結界　で熱も炎も遮断しているが、転んで全身を灯油でコーティングした豊豚魔たちは見事なまでに燃え上っている。

断末魔を上げることすら出来ずに崩れ落ちた豊豚魔の死体を、炎

巨骨魔が摘み上げると、骸骨の口を開き、その中へと放り込んでいく。

骸骨の癖に食事をするのか。炎に触れて消し炭となっているのに、それでいいのだろうか。

炎の海の中で燃え盛る巨大な骸骨が焦げた死体を喰う姿と言うのは、恐怖よりも荘厳な感じがする。これって俺が結界内部という安全地帯にいるから思うことであって、生身だったら腰でも抜かしていそうだ。

六体の豊豚魔を平らげた炎巨骨魔は俺を一瞥しただけで、ちよっかいをかけてくるわけでもなく、そのまま歩き去っていく。

配色を壁と同じに変化させていたので気づかなかったのか、もしくは腹が満たされて興味すら湧かなかったのか。どちらにしる、助かったことに変わりはない。

しかし、酷い有様だ。地面は足裏の骨の形に陥没しているし、あれが近づいた壁際も溶けて固まり歪な形に変化している。

あれも階層主なのだろうか。上空から観察した時はその存在を確認できなかったが、何か出没する条件があるのかもしれないな。

あんなのが我が物顔で闊歩していたら迷宮はもつと酷いことになっていそうだが、やはり、何か理由があるのだろうか。

さて、問題はまた独りぼっちになったことぐらいだ。でも、暴食の悪魔団はお腹がすいたら戻ってきそうな気がする。どうにも、考えがおおざっぱすぎるようで、食料をバックパックに入れておけばいいのに、何も考えずに食べているだけだったからな。

あとは地面の至る所が陥没して熱で歪んでいるから、自動販売機を押ししてもらつのも一苦労しそうだ。

流石に今回の敵は能天気な所がある彼らでも命の危機を感じたらしく、夜が更けて辺りが真っ暗になるまで戻ってこなかった。まあ、結局、今こうやって俺の前でご飯を食べているわけだが。

「はあ、驚くとお腹減るよね」

ペル、キミはいつもお腹空いているよ。

「まさか、階層主にお目にかかれるとは……噂には聞いたことがあったけど凄かったな。会長に後で自慢できるよ」

「ほんと、ほんと、びっくりしたわ」

「炎巨骨魔を倒すとお宝が手に入るって話だが、あんなものをどうやって倒せと言っのたろうな」

ショートに同意するよ。あんなの倒しようがないだろう。巨体なものあれだが、あの炎に近づけるわけがない。水を掛けて消火するにしても、それこそ池の水を一気にぶっかけるぐらいのことをしないと無駄だろう。

水の入ったペットボトルの水を投げまくっても無意味だよな。考えたところでしょうがないか。俺がアレと戦うような事はないだろうし。

安堵して眠りこける彼らに囲まれながら、炎巨骨魔が消えて行った脇道はずっと見つめていた。

「そこ、右に行きすぎないで。左、もうちょっと左」

ミケネの指示の元に、俺の体を慎重に運んでくれている。地面の凹凸が酷いので何とか平らな場所を探しながら進み、朝からずっと

やっているのに陥没地帯を何とか抜けた時には、もう空が暮れ始めていた。

今日は殆ど進んでいないが、明日からは地面が平坦になるので移動速度も上がるだろう。またあの炎巨骨魔が現れたら、何とか時間稼ぎをするしかないよな。

今日はもうこれ以上イベントは必要ないので、安全な夜を過ごしたいところだ。

そんなことを考えている間も俺はフル稼働で、次々と商品が購入されていく。かなり安い値段で提供しているのだが、彼らの懐具合が心配になるな。そりゃ、団継続も危うくなるよな。

いつものように腹いっぱいになると注意力が散漫になるようで、見張りも残さずに眠りこけている。まあ、敵の気配や物音がしたらすぐさま目が覚めるようなので、俺が警戒音を発したら跳び起きるだろう。

静かな夜だな。巨大な壁が並ぶ幅の広い通路っていうのは雰囲気がある。夜なので灯りは俺の体から発している光のみで、少し離れると周囲は漆黒の闇だ。

俺の光は目立ちすぎるな消しておくか。完全な闇に沈み、聞こえる音も彼らの寝息ぐらい。ああ、怖いぐらい静かだ。でも、誰かが傍にいてくれるだけで不安は少し和らぐ。

これが生身で本当に独りぼっちだったら、恐怖のあまり発狂してもおかしくない状況かもな。それぐらい、この場所は寂しく本能的に恐怖を覚える。

気配を感じる能力でもあれば、また違ったのかもしれないが……あ、そっぴや面白い機能があつたな。確か、こちら辺に、あつたあつた 人感センサー だ。

人の来ない夜中は照明を落としておいて、センサーが反応した時だけ照明をフル点灯したりできる。ああ、でも、これって俺には必

要ないか。全部自力で判断と調整できるしな。

とまあ、色々考えては見るのだが、幸せそうに寝ている彼らを見ていると和んでしまって、どうでもよくなってきた。うーん、彼らの傍にいと保護者のような気分になる。

せめて俺だけでも警戒は解かないようにしておかないと。暗闇では殆ど見えないので音だけに気を配っていると、今、微かに何か聞こえたような。

音の方向を探りだし、目を凝らして耳を澄ます。ポーっと小さな音だが途切れることなく、流れ続けている。これってコンロの火が付いている時のような？

音は少し先の左手の方向。暗闇で見えないが確かそこら辺は横道の入り口か。

暗闇の中にほんのり光が零れている。揺らいで見えるのは灯りが燃えている火だからか。これは起こした方がいいな。

「いらっしやいませ」

相手に感づかれる恐れがあったので、音量控えめで実行する。

「んー、から揚げ……あと二十個だけ……」

「ミケネ、ショート……男同士で、そんなの……駄目だよお……」

寝言が聞こえる。あと、スコの発言に腐の波動を感じるが、聞かなかったことにしておこう。

起きる気配が全くないな。って、このまま放置はできないから、もう少し大きめで。

「またのこりようをおまちしています」

「ヴアアアアッ！ 何、何、なんだ！？」

ミケネが跳び起きてくれたのはいいが、声が大き過ぎる。

その叫び声に全員が起きて、慌てて辺りを見回している。今ので完全に謎の光源にもばれたよな。辺りが徐々に明るくなっているのは近づいてきている証拠だ。

「みんな、敵だ逃げる準備をして」

戦わずに迷わず逃走選ぶスタイル嫌いじゃない。命知らずな無謀なハンターよりも余程いい。

逃走準備の整った暴食の悪魔団の前に現れたのは、大人の人間と同程度の大きさをした、炎を纏った頭蓋骨だった。

「炎飛頭魔かつ。速攻で処理しないと、炎巨骨魔を呼ばれるぞ！」

「み、水！ 誰か大量の水をぶっかけて！」

あの炎の骸骨の仲間なのか。アレを呼ばれたら勝ち目はない。水、水が必要なんだな。

素早く2リットルのミネラルウォーターを取り出し口に落とす。

「え、水？ 魔道具の箱から水が落ちてきたよ！」

「運がいいな！ スコ、それを渡してくれ！」

シオートや、それを運で片付けるのはやめていただきたいのだが。彼らは自動販売機である俺に意思があるとは思ってもいないよな。そろそろ、察してくれてもいいんだよ？

諦め交じりに更にペットボトルを落としておく。

全員が二リットルのペットボトルを抱え、あの爪では咄嗟にキャップを外するのが難しいらしく、上部を鋭い爪で切り裂いている。

全員が小脇にペットボトルを抱えて特攻すると、思ったよりも素早い動きで間合いを詰めて中身を空飛ぶ頭蓋骨にぶっつけた。

四本もの水を掛けられた頭蓋骨の炎は完全に消え去り、守る物が無くなった頭蓋骨はミケネの噛みつきであっさりと砕かれ消滅した。炎が消えると結構脆いんだな。

今までは逃げているところしか見ていなかったので実力が不明だったのだが、かなり素早い動きをしていた。実は結構強いのかな。日頃の態度を見ているとそうは思えないが。

あの炎飛頭魔を倒したのはいいのだが、援軍を呼ばれていないか警戒しているようだ。あのデカいのが来たら、それこそ逃げるしか手が無いからな。

暫く様子を見て増援が無いことを確認すると、交互に見張りに立つことになったようだ。これで少しは安心して見守っていられるといいけど。

合流

騒がしい夜が過ぎ、またも大量の朝食を平らげると、彼らにしては珍しく準備を始めている。いつもなら満腹感が薄れるまでダラダラしているというのに。

あの戦いを経験して暴食の悪魔団の面々も学んだようで、バックバックにミネラルウォーターを詰め込んでいる。

「炎飛頭魔は水を掛ければ倒せるから、各自一本は所持しておこう」

「あと、食料も幾つか持つておこうよ。この箱と離れた時お腹空いちやうよ」

食欲優先のペルだが、尤もな意見なので全員が頷き商品を選んでいる。から揚げは保存食にならないので、商品にお菓子や保存も利く缶の食料品を並べて置く。

「この魔法の箱って凄いいよね。から揚げ食べたいと思ったら、から揚げ置いてくれるし。今は保存食っぱいの並べてくれて。まるで、意思があるみたいだなあ」

おおおっ、ペル。わかってくれるのか！ ようやく、彼らと意思の疎通が可能になるというのか。

「いらっしゃいませ」

「ないない。ほら、今も、いらっしゃいませしか言っていないだろ」

顔の前で手を振りミケネが完全否定をしている。くそ、今度冷えたから揚げ提供するぞ。

はあ、まあわかっていたよ。ここで「はい」「いいえ」が言えるなら、幾ら彼らでも察してくれるだろうが、いらっしやいませじゃ無理だよな。

彼らは俺に危害を与えるわけじゃないし、今のままでも充分か。取り敢えずの目的は迷路の入り口付近まで運んでもらい、清流の湖階層の人たちに見つけてもらうことだ。

その際には彼らにお礼を支払ってもいいと考えている。でも、自動販売機で購入する際に割引とかの方が喜ばれるかもしれないな。

「じゃあ、今日も元気にみんな頑張ろう！」

「おー！」

ああ、和むなあ。魔物が徘徊する危険と隣り合わせの状況だというのに、暴食の悪魔団を見ているだけでニヤついてしまいそうになる。自動販売機じゃなかったら顔が酷いことになっていそうだ。

彼らが交代で俺を押しながら進んでいくと、進路方向のかなり先で砂埃が上がっているのが目視できた。誰かが争っているのか。あまりに距離が開き過ぎていて、対象が人間なのか魔物なのかも判断できない。

「みんな、この先で誰か戦っているみたいだ、どうする」

ミケネも気づいたか。全員が足を止め背伸びをして先を見つめている。

「良く見えないが、確かに争っている音がするぞ」

「うんうん、ボクも聞こえる」

「ハンターっぽいね。数も多いし」

俺も……は聞こえないな。彼らはかなり耳が良いようだ。

「どうしようか。このまま合流して助けてもらおう?」

「それをすると、この魔道具の箱奪われないか」

「でもでも、ボクたちだけで迷路階層を抜けるのはきつくないかな」

「そうよね。命あってこそだし。交渉してみる価値があるかも」

少しもめたが、戦っているハンターたちが苦戦しているようなら、助力をして恩を売れば、悪い対応はされないだろうという結論に達したようだ。

「まずは単独で様子を窺ってくる。交渉が可能かどうか確かめないとな。ミケネたちはゆっくりでいいから、それを運びながら近づいて来てくれ」

「わかった。くれぐれも気を付けるんだぞショート」

「任せておけ」

ショートが先行して飛び出し、あっという間にその姿が小さくなっていった。

俺は残った三人と一緒に少しずつ様子を窺いながら進んでいる。戦う者たちの姿もまだ米粒に辛うじて手足が生えた程度にしか見え

ず、全く判別がつかない。

「ハンター側が優勢みたいだ」

「何か、変な奇声を上げている人いない？」

「うん、意味不明なこと叫んでいるね。女性かな」

奇声を上げながら戦っているのか、独自の気合の入れ方もしれない。ハンマー投げの選手も聞き取れないことを叫んで放り投げているし。ああやると、力が入るって話だからな。

ゆっくり、ゆっくりと近づいてくと、猛スピードでこっちに向かってくる影があった。目を凝らしてみるとそれは ショートか。

「おーい、みんな、熊会長がいたぞ！ 話は付けてきた。急いで向かおう！」

「えっ、清流の湖層にいるハンター協会の？」

「何で下の階層に降りてきたのかしら」

「でも、助かったね。熊会長ならちゃんと話を聞いてくれるし、ハンターの取ってきた宝を奪うことなんてしないよ」

和気あいあいと話す彼らは安堵の表情を浮かべているが、俺も同様にそれ以上に安心してはいる。熊会長が来てくれたのか。助かった……ってことはラツミスもいそいだな。

また泣かれるか怒られるかするだろうけど、甘んじて受け入れよう。それは心配してくれているという証なのだから。

「そうだ。ハンターの中に凄いのがいたぞ。はっこおおおん、とか意味不明な奇声を上げて岩人魔を素手で打ち砕いていた人間のハンターがいてな」

やっぱり、ラツミスも同行しているのか。かなり心配させているんだ。これは、どんな罵倒も説教も大人しく聞き入れるしかない。

「うそだー。人間が岩人魔を素手で砕けるわけがないよ」

「いやいや、本当だってペル。それも小柄な女だったぞ。確かこうも言っていたな、心配ばかりさせて一発ガツンとかまさないと気が済まない、とか、何とか」

…… 結界 で防いだら怒られそうだ。頑丈足りるか…… もっと上げておこうかな。

「あれ、この箱急に重くなってるないか。動きにくくなった」

「あ、うん、本当だ、すっごく重いよ」

気のせいだ。

会いたい気持ちと会いたくない気持ちが入り混じったまま、俺は戦いを続けている彼らの元へと運ばれて行った。

「えっ、はっこおおおおおん！」

お互いの姿が確認できる距離まで近づいたタイミングで丁度、八

ンターたちの戦闘が終わった。ラツミスの視線が俺たちを捉えると、地面を陥没させながら跳ぶように走る彼女が、こっちに突っ込んできている。

踏み込んだ足が地面を打ち砕く、全速力の助走はやめなさい！
そこまで勢いを付けられた状態で跳びこまれたらっ！？

ラツミスが数メートル先から両手を広げてこっちに滑空してきた。
結界 は……駄目だ。泣いて飛び込んできた女性を弾くなんて自動販売機ではなく、男として最低だ。

ここで選ぶ選択肢は……受け止める！

徐々に近づいてくる泣き顔を見つめながら俺は 大丈夫、頑丈は50まで上げているから大丈夫。と自分に言い聞かせていた。

大気を揺るがすほどの重低音が辺りを満たし、激突の際に生じた衝撃波で運んでいた暴食の悪魔団が吹き飛んでいる。

《10のダメージ。耐久力が10減りました》

ぐはああつ。ま、まさか、ここまで頑丈を上げた俺に10もダメージを通すだっ！

「ハッコン！ ばかあああああつ！ 信じてたから、絶対に壊れてないって信じてたから！」

《2のダメージ。耐久力が2減りました》

せ、成長したなラツミス。あと、ドンドンと体を叩くのを止めていただけないでしょうか。

離れてもらうように何か言おうとも思ったが、涙で濡れた顔を押し付けて泣いている姿を見て、これは黙って受け止めるべきだと判断した。

彼女が満足するまで、その気持ちを受け止めるべきだ。

《3のダメージ。耐久力が3減りました》

「そっつと修復しておこう。」

何とか落ち着いた彼女からの万力のような抱擁を乗り越えようと、他の面子も歩み寄ってきた。見覚えのある顔ばかりがずらりと並んでいる。

「つたく、心配させやがって。はあああ、オレも信じてたぞ。絶対無事だってな」

ヒュールミは俺の体に顔を当てると軽く拳で叩いてきた。本当に心配してくれていたんだな、声がいつもと違い弱々しい。

「ハツコン、また会えたな」

「どっか壊れていないだろうな。ハツコンが壊れたら滅茶苦茶困るんだぞ、そこんどこわかってんのか。愛しの彼女にまで心配させやがって」

門番のゴルスとカリオスも助けに来てくれたのか。今度お礼に門付近に設置してもらえるように、ラツミスに頼めないかな。

「ハツコン、助かったぜ。お前がもし見つからなかったら……」

「危なかったよね白……」

「そうだな赤……」

患者の奇行団男性陣が安堵の息を吐き出し、肩を落としている。え、この反応は、どういう意味だろう。

「ハツコンさん、無事で何よりですね。貴方を見捨てたことをラッミスさんに話したところ」

「団長が凄い剣幕で詰め寄られて、もし見つけれなかったら、どうなっていたっすかね……」

副団長のフィルミナと射手のシュイの説明を聞いて納得がいった。俺の足元に座り込んで上目遣いで睨んでいる彼女が脅しをかけていたのか。ゴメンな、心配ばかりかけて。

「ハツコン。しかし、どうやって助かったのだ。階層割れから落ちて無事だった者なんて、聞いたこともない」

熊会長がてっぺんから車輪までじっと見つめながら、疑問を口にしている。

あの高度を落ちたら普通は即死間違いなしだ。俺もあの時はスクラップになった未来予想図が頭に浮かんだよ。

「会長、会長、お久しぶりです！」

衝撃波で吹き飛ばされていた暴食の悪魔団の面々がいつの間にか復活して、熊会長を取り囲んでいる。

「おおつ、大食い団が全員揃い踏みだな。ハツコンを見つけた上に保護してくれていたのだな、感謝する」

ん？ あれ、暴食の悪魔団は……勝手に名乗っているだけなのか。

「えっ、会長。ハツコンって何ですか？」

「ミケネが知らないのも無理はない。この魔道具の箱はハツコンと呼ばれている、清流の湖階層の住人だ」

「住人？」

暴食の悪魔団（自称）こと大食い団の全員が首を傾げている。

熊会長は自動販売機である俺を住人として認めてくれているのか。俺は異世界に来てから人との出会いに恵まれ過ぎている。ったく、嬉しさのあまり自動販売機から水漏れしてないだろうな。

「ああ、住人だ。清流の湖階層の集落に住んでいる」

「え、でも、これって便利な魔道具であって……」

「ああ、そうか。お主らは気づかぬままだったのだな。ハツコンは意思の疎通が可能だぞ。なあ、ハツコン」

「いらっしやいませ」

「だって会長。ほら、いらっしやいませとしか言っていないし」

「ハツコンは話せる言葉が限られていてな。いらっしやいませは、はいだ。そして、ざんねんが、いいえだ」

熊会長の説明を聞いても信じられないようで、大食い団は半眼で俺を見つめている。

「ええと、ハツコンだったかな。ボクたち暴食の悪魔団が一番食べたのは、肉の揚げたやつで間違いない？」

「いらっしやいませ」

「ええと、それじゃあ、彼の名前はショートだ」

ぼっちゃりしているのはペルだから「ざんねん」だな。

「う、嘘だ。じゃあ、ボクたちが何を話していたのか、全部わかっていたの？」

「いらっしやいませ」

顎が落ちそうなくらい大口を開けて、真黒な目が飛び出しそうなくらい見開いている。

まあ、彼らは俺と意思の疎通が可能だなんて微塵も考えてなかったからな。

大金が転がり込むと思いきりでいた彼らのシヨックは相当なものだ、熊会長が説明を続けているのだが全く耳に入っていない。

あ、うん。あとで運送費として、から揚げただで振舞うから、それで勘弁してくれないかな。

搜索と討伐

「ハツコン、話がある。今、構わないか？」

合流してから夕暮れまで時間がなかったので、全員が大通りの端にまつまり野営の準備をしているところで、熊会長に声を掛けられた。

あ、そうそう。大食い団なのだが、熊会長が特別に報酬を出すということで納得してくれたようで、腹いっぱいから揚げを食べて幸せそうに寝転んでいる。

「いらっしやいませ」

俺の両隣にはラツミスとヒュールミがいるのだが、二人とも俺から購入した商品を食べ終え、じっとこっちを見つめている。

「ああ、二人も聞いて構わぬよ。今回我々の第一目的がハツコン、お主の搜索だ。それは今日達成された」

何かとお世話になりました。あとで好きな商品を何でも持って行ってください。

「このまま戻っても良いのだが、実は迷路階層に来たのは、もう一つ目的があるのだよ。これはハンター協会の会長としての責務と、愚者の奇行団から依頼だ」

愚者の奇行団の依頼というのは予想の範疇だったが、ハンター協会の会長としての責務とは一体。

「まず、患者の奇行団からの依頼というのは、迷路階層主である炎巨骨魔の討伐だ。そして、会長としての責務は階層異変の調査となっている。清流の湖階層でも主である八足鰐が現れ、この階層でも炎巨骨魔の目撃が報告された」

炎巨骨魔って階層主だったのか。あれ程の威圧感と圧倒的な強さを目の当たりにしたので、納得はできるな。ハンター協会としての異変調査も理解できる。けれど患者の奇行団があれを倒そうと考えているとは……。

「ハンター協会としては討伐までは考えていなかったのだが、主が出現することにより迷宮の均衡が崩れ、ハンターの死亡数が格段に上昇するのは事実。出来ることなら討伐しておきたいというのも本音ではある」

確かにあれに遭遇したら、普通は逃げるか死ぬの二択だよな。他のハンターたちの身を案じて行動を起こした熊会長の理屈は通っている。上司として立派だとすら思う。

だけど、患者の奇行団のノリだと安全第一で無謀な戦いをするとは思えないのだが。

「患者の奇行団の目的については当人の口から語ってもらおうのが一番だろう」

そう言って熊会長が振り返ると、背後に団長と副団長が突っ立っていた。

ケリオイル団長はいつもの調子で軽く手を挙げ、フィルミナ副団長は深々と頭を下げている。

「んじゃ、座らせてもらっせ」

「失礼します」

熊会長がすつと横に移動すると、俺の正面に二人が座り込んだ。いつものおどけた態度は鳴りを潜め、いつにもなく真剣な眼差しが俺に注がれている。

「会長から聞いているとは思いが、俺たちは階層主を倒したい。その為にお前さんの力を貸して欲しい」

と言われてもな。何故、そんな無謀な戦いをするのかわからないし、そもそも自動販売機に何を期待しているのか。

「と、いきなり言われても困るわな。まあ、あれだ、ほら俺んこの団って愚者の奇行を名乗っているだろ。あれって、思い付きでも何でもねえんだ。本当に愚か者が無謀とも呼べる奇行に走る団なんだぜ」

口元を歪め軽い口調で話しているが、苦笑いが泣き顔に見えたのは気のせいだろうか。隣に並ぶフィルミナ副団長は目を伏せて何も語らない。

「この団に所属する者は目的がある。それを成し遂げる為には、どんなことをする覚悟も完了済みだ。愚者と馬鹿にされようが、奇行だと嘲り笑われようがな。ハッコン知っているか。迷宮の伝説を」

異世界に来て間もない俺が知る訳もなく「ざんねん」と即座に返すしかなかった。

「迷宮……つまりダンジョンってのは世界各地にあつてな、その最下層に到達し、条件を満たした者はどんな願いも、一つだけ叶えられると言ひ伝えられている。俺たちはそれを狙っている。その為には階層主を討伐した際に落とすコインが必要……らしいって話だ」

へええ……あ、それって、もしかしなくても所持品にある、八足鰐のコインのことだよな。これって、かなり価値があるって事か。売ったら幾らするのだろう。

「噂によるとそのコインの枚数分だけ願いを叶えてくれるそうだ。愚者の奇行団に所属する団員は全員で八。双子は願いが同じで、俺と副団長も同じ願いだ。なので叶えたい願いは六。現在手に入れているコインの枚数は三。まだ足りねえ。それに、最下層にはまだ誰も到達していないからな」

俺の体内に隠し持っているコインを使えば、俺も願い事が叶えられるということなのか。超高性能自動販売機になる夢……あ、いや、違うぞ。最近この体に違和感を覚えなくなったから、すっかり忘れていたが、人間に戻るのも可能って事だよな。

「ヒュールミに聞いたんだが、お前さんは人間の魂が宿っている状態らしいな。俺たちと行動を共にするなら、人間として蘇ることも可能だ」

やっぱり、そこを突いてくるよな。その言葉に過剰な反応を示したのは俺ではなく　ラツミスとヒュールミだった。

「そ、その話本当なんですかつ！？」

「書物で似たような記載を目にした記憶はあるが、ハツコンが人と

して復活か……」

ラツミスに襟首を掴まれて、前後に激しく振られている団長の頭の残像が見えるな。フィルミナさん見てないで止めて止めて。頭がもげる。

「あたりがでたらもういっぱん」

大きめの音量で放つとラツミスの動きが止まった。団長はぐつたりしているが、生きているようなのでいいか。

何でも叶えるというのが眉唾物だが、異世界ならあり得るのかもしれない。藁にも縋る想いを抱いている人なら……この誘惑は魅力的に映るだろうな。

「た、助かったぜ、ハツコン。まあ、落ち着け。どつちにしろ最下層に到達しなけりや何の意味も持たない。今は実力を付ける為に各階層を回り、主の出現情報を得たらこうやって倒しに向かっているってわけだ。ところで、ハツコン。一つ聞いておきたいことがある。お前さん、八足鱈を倒した際にコインを見なかったか？」

ここで嘘を吐くのもありだが、貴重な情報を提供してくれたケリオイル団長には正直に答えておきたい。

「いらつしゃいませ」

「見たんだな。そのコインが何処にあるか知っているのか？」

「いらつしゃいませ」

目つきが鋭くなり瞳に光が宿った気がする。

彼らの目的が判明したことにより、以前よりかは信用できそうだが、俺に利用価値があるうちは裏切るような真似はしてこないだろう。

「もしかして……そのコイン所持しているのか？」

「いらつしゃいませ」

「そうか、なら都合がいい。ハツコンとラツミス、俺たち愚者の奇行団に加入……いや、常に行動を共にしろとは言わねえ。だけど、遠征や力を借りたいときは協力して欲しい」

俺としては受けてもいいと思っっているが問題はラツミスだ。あれからずっと黙っていたラツミスだったが視線が集まると、すっと立ち上がった俺の体に手を添えた。

そして優しく微笑むと、

「うん、協力するよ！ 私も強くなりたいし、ハツコンとお話したり、手料理も食べて欲しいからね！」

「しゃあねえ、オレも協力するぜ。ラツミスだけだとコロツと騙されやがるからな」

「感謝する。もち、ヒュールミも歓迎するぜ。でだ、ハツコン。お前さんは手を貸してくれるのか？」

「ここまでお膳立てされたら、答えはたった一つだろう。」

「いらつしゃいませ」

「そうか！ ハツコンがいれば食料問題が一気に片付くぜ。ありが

とうよー！」

「ハツコンさん、ありがとうございます。これでもう、食料不足で魔物の骨をしゃぶるような真似をしなくて済むのですね……」

わざとらしく目元を拭っている副団長の背後で、いつの間にかやってきていた紅白双子が歓喜のあまり拳を振り上げている。その隣ではシュイが満面の笑みを浮かべ舌なめずりをしているな。どうやら思っていた以上に歓迎されているようだ。

「それとだ、今回ハツコンにしてもらいたいののは食料面だけじゃねえんだ。といつても、危険な現場を任せたいんじゃないかねえ。お前さんにしかできない、炎巨骨魔攻略の手伝いをな」

含みのある物言いだ、何か考えがあるようだ。明日になってから説明するということなので、今日は追求せずに全員が床に就いた。ラツミスとヒュールミが俺にもたれかかって寝ている。はああ、これが人間の体であつたらどきまぎしたり軽く興奮しそうだが、こういう場合は鉄の体で良かったと思ふべきなのか、残念だと感じるべきなのか結構微妙だ。

触感があれば女性の柔らかさを感じられたのか。まあ、信頼しきっている二人に対して邪な思ひは控えないとな。

しかし、団長はアレを討伐する気、満々のようだが。どうやるつもりなのだろうか。それも俺の力を借りてと言っていた。

一番妥当な策は水だよな。でも、ペットボトルの水をぶっつけたぐらいで、どうにかなるレベルじゃないと思う。何か策があるのか……不謹慎かもしれないが少し楽しみだな。

役に立つかどうかはわからないが、俺も対策を考えておくか。見張りに立っている紅白双子や交代した門番の二人に商品を売り

ながら、一晩中、討伐方法を模索していた。

「皆、準備はできただろうか。では、あの場所へ移動する。手元の地図を見てくれ」

大食い団の食欲に触発されたシユイが馬鹿食いを始めたという、予想通りの展開は兎も角、平穩無事な朝を迎えて一息ついているところで熊会長が声を発した。

手にした地図を広げているが、何と言うか形が歪で精度が低い。上から撮影した俺の映像と見比べると正確な地図だとはお世辞にも言えない。

防犯カメラの映像を共有できればいいのだが。新しい機能に何かないかな。ええと、これどうだろう。ポイントは……結構消費するが、大食い団から荒稼ぎした銀貨も溜まっているし、大丈夫か。

俺は機能欄の 液晶パネル を選んだ。彼らが真剣に地図を見ながら話し合いをしている間に、その機能を試していく。

この液晶パネルは前面に貼り付けて、商品を実際に並べるのではなくパネルに表示して、タッチパネル方式で購入させることも可能なのか。ふむふむ、他には俺が今まで防犯カメラで録画してきた映像を見せることはできないか？

やるだけやってみるか。まず、カメラの映像をいつものように再生して自分だけ見る。そして、それを体の表面に投影するように強く意識する。

映れー映れー映れー、はあああああつ！

「あああつ、何で俺と彼女の姿がここに！？ な、なんだ、幻覚かっ!？」

余所見をしていた門番のカリオスがこっちを見ていたようで、液

晶パネルの映像を見つめ硬直している。

『お前を残して行くのは辛く、身が張り裂けそうだ……だけど、これも仕事だ。すまないっ』

『ええ、私もあなたと離れたくありません。ですが、貴方の仕事の邪魔をしたくはありません。涙を吞んで』

「やめるおおおお！」

ちなみに放映中の映像は二人のイチヤイチャっぷりを録画した物だ。

客観的に見ると恥ずかしいのか。カリオスが蹲って頭を抱えている。流石に可哀想に思えたので、映像を切り替えた。

「これは……迷路階層かつ！ ハツコン、これはいったい!？」

「遙か上空から見たような感じだが。もしかして……ハツコンが実際に見たものを、映し出すことが可能ってことなのか。階層割れで落ちていく最中のことだと考えると納得がいくが」

直ぐにそれを理解できるヒュールミがいると話が早く助かる。

「いらっしやいませ」

「う、うちもわかっていたもんね」

ラツミス、対抗意識を燃やさなくていいから。腕を組んで言い放つ彼女の姿が可愛らしくて和んでしまったが、今はそんな場合じゃない。

迷宮の全貌が見えている状態で一時停止をして、パネルに表示しておく。

「まさか迷宮の全貌が明らかになるとは……ハッコン、大手柄だ。ハンター協会として後で報酬を追加しよう」

「フィルミナ頼む」

「わかっています」

熊会長が何度も頷き感心してくれている。副団長のフィルミナが紙を持ち出して、そこに映像を絵として描きだしているようだ。

これで迷路階層の攻略が少しは楽になるといいんだが。

秘策

「では、階層主である炎巨骨魔の討伐方法なのだが、一つ策がある」

居心地のいいラツミスの背に揺られながら、熊会長の説明に耳を傾けている。

「この先の大通りに大掛かりな罠があつてな、この罠の存在を知らないハンターも多いのだが、特殊な条件でのみ発動する特異な罠になつている」

「確か、重さだつたよな」

先頭にいたケリオイル団長がわざわざ歩く速度を落として、話に割り込んできた。暇なのだろうか。

「そうだ。一定の重さを越えると罠が発動して……大穴が開く。つまりは落とし穴だ。そこに炎巨骨魔を落とすという算段になつている」

あれを落とすなんてかなりの大穴だよな。そんなのがあつたら、誰でも気づきそうなものだけど。

「この罠の厭らしいところは、大人数のごり押しで階層を走破させないようになっているところだ。大通りは迷路階層攻略の起点となっている。誰もが通らなければならぬところに、ある一定数以上が乗ると真つ逆さまというわけだ」

「だから、今回の面子は数ではなく質を揃えているだろ」

ああ、なるほど。だから、門番である二人も参加してくれているのか。カリオスとゴルスは衛兵の中でも腕利きだからな。

「清流の湖階層はハンターが増えていく状況で尚且つ、階層主も討伐し終えている。カリオスとゴルスが抜けても問題は無い」

「うちに勧誘したいぐらいの人材だが……冗談だつて、会長」

熊会長に軽く睨まれ、ケリオイル団長が肩を竦めている。

守りの要と言っても過言ではない二人らしいから、清流の湖階層を仕切っている熊会長としては引き抜かれては困るようだ。

正直その心配は杞憂だと思う。少なくともカリオスはあの階層から離れることはないだろう。ちらりと件の人物であるカリオスに目をやる。

「この一件を終わらせたら、彼女がおかえりパーティーをしてくれらるんだぜ。いやー、愛されるつても辛いもんだな！」

満面の笑みで何言つてんだらう。スキンヘッドの厳つい顔が溶け切っているぞ。彼女が清流の湖に居続ける限り、カリオスは門番であり続けるだろう。今回は例外中の例外だと思う、感謝しないとな。そんなカリオスの隣でゴルスが額に手を当ててため息をついている。いつもお疲れ様です。

「落とし穴の場所はそろそろか。みんな左側の壁際に寄ってくれ。背中が密着するぐらいに」

全員が大人しく従い壁に背を預け一列に並んでいる。熊会長だけ

が壁際を進んでいき、壁に手を突いて何やらごそごそやっている。暫くすると、大きく一度頷きこつちを確認した。

すると、地響きがしたかと思うと地面に一本真つ直ぐな亀裂が走り、真つ二つに割れた。俺たちのいる壁際だけを残して、一帯の地面が見事なまでに消失している。

突如現れた巨大な真四角の穴は目測だと、25メートルプールがすっぽり入る大きさのようだ。穴は深く底が見えない。覗き込んで見えるのは深淵の黒のみ。

「縁がすり鉢状に傾斜が付いている、皆気をつけるように。穴の位置をしっかりと覚えておいて欲しい。今はあえて罨を起動させているが、通常時ならば我ら全員が乗らない限り、落とし穴が開くことは無い……ハツコンは怪しいが」

重いからね。でも、熊会長も相当なものだと思う。

再び何かを操作すると地面の蓋がゆっくりと閉まっていった。

「一応、今開いた地面には触れずに進んでくれ。その先で改めて作戦の概要を説明させてもらおう」

穴の深さを知った大食い団の面々がおっかなびっくりといった感じで、地面を凝視しながら進む姿が、また可愛らしい。威嚇してない時は癒しキャラだな。

穴から少し離れた場所で円になって座り込むと、今度はケリオイル団長が説明を担当するようだ。

「さーて、ハツコンとも合流できたから、詳しい説明をしておくぞ。さっきの穴は深さが炎巨骨魔の二倍以上ある。あの穴の上に奴を誘導して落とす予定だが、上手く落とせたとしてもそれで破壊できるかは怪しい。穴の上から攻撃を加えたところで、体に纏う業火が全

てを溶かしてしまうからな。そこで、副団長の水系の魔法とハツコンに水を提供してもらい、あの穴を水で満たそうと考えている」

なるほど。だから俺を必要としていたのか。

炎を消しさえすれば炎飛頭魔みたいに骨が剥き出しになり、ダメージが与えられるという寸法か。あれが浸かるぐらいの水なら確かに火を消すことは可能かもしれないが、あの穴を水で満たすにはどれだけの時間が必要なのか。

ペットボトルの水程度では何日かかるかわかったものじゃない。

学校のプールでも水を一杯にするには半日かかると聞いたことがある。この大穴は深さで考えるなら数十倍ある。普通にやったら気が遠くなる作業だ。

「無理を承知で訊ねるが……ハツコン、水を大量に売るもしくは排出する何かを持っていたりしないか？」

全員の視線が俺に集中している。そんな期待された目で見られても困るんだが。水の自動販売機となるとミネラルウォーターを売るのがあったな。機能の欄にも確かにある。だけど、その程度の排水量じゃ、アレを満たすにはどれだけの時間を有するか。

水、水か……現在、取得している機能と合わせて何か攻略の糸口が見えてこないかな。

そっぴや新たに得た 水の自動販売機 で氷を流し込めば、水を入れるよりも早く満たせるかもしれない。

あと、コイン式掃除機は関係ないか。セルフの洗車場でお世話になっ……ん？ セルフ洗車場か。ということは、あれが選べるようになってる。

よっし、最近ポイントを消費しすぎな気もするが自動販売機はお客様の役に立ってこそ。この機能を追加しよう。

それを選択することにより、俺の体に変化していく。自動販売機よりも横は倍以上に大きく変貌して、幾つかのボタンが現れる。側面には黒く硬いホースが備え付けられて、その先に灯油計量器と似たレバーの付いたノズルが現れる。

「これは、また見たこともない形だが。ハッコン、これがお前の答えなんだよな」

「いらっしやませ」

ケリオイル団長の問いに即答する。普通ならこの使い道に気づいてくれるかは怪しいのだが、今回はここにラツミスとヒュールミがいてくれる。彼女たちなら何とかしてくれるのではないかという、信頼があつた。

「ちょっと失礼するぞ。出っ張りが幾つかあるのは、商品を買う時と同じくこれを押すと、何らかの反応があるということか」

「ヒュールミ、何か綺麗な絵が描いているこれって使い方じゃないのかな」

一歩前に進みでて考察していたヒュールミに、俺の側面を指差したラツミスが指摘をしている。

そう、このタイプは幾つかのコースがあり、値段とその使い方と手順が写真で記載されているのだ。これを見れば理解力の高いヒュールミならわかってくれるだろう。

「へえー何々。女性がこれを握ると水が噴出するのかっ！ ハッコンやってみても構わねえかっ！」

目を爛々と輝かせて迫るヒュールミを断る理由は無いよな。

「いらっしゃいませ こうかをとくにゆうしてください」

最近無料奉仕が多かったので、一応金銭のアピールしておく。これって最終的に払うのは愚者の奇行団になるだろうから問題ないだろう。

「おっ、なら俺が払うぜ。副団長頼んだ」

「そこで自分の財布から出す気概がないのが団長らしいです」

フィルミナ副団長が財布から金貨を一枚投入してくれた。全身に力が漲り、準備が整ったことが伝わってくる。

「よっし、準備万端だな。このスイッチを押して、人のいない方向に向けてレバーを引く！」

ノズルの先端から勢いよく飛び出した水が、壁に命中し飛沫を撒き散らしていく。思ったよりも威力があったようで、ヒュールミが勢いに押されて一歩後退っていた。

「これはスゲエな。炎飛頭魔ぐらいなら余裕で消火できるぞ」

楽しくなってきたようで壁を上から横に水を掛けていき、汚れの洗浄を始めている。

それを眺めていたラツミスや大食い団のペルとスコ。愚者の奇行団のシュイ、双子が羨ましそうにヒュールミを取り囲んでいる。おもちやを目の前にした子供のような純粹無垢な瞳だ。

「後で、順番な」

子供に言い聞かすようにヒュールミが言つと「はい」と声を揃えて待ち構えている。この高圧洗浄機で車を洗うのは実際かなり楽しい。以前は車ごと機械で洗浄してもらっていたのだが、自分で洗う楽しみを知ってからにはセルフ洗浄ばかり選んでいたな。

「これ程の水量なら、水で満たすのも荒唐無稽な話ではなくなってきたか。助かるぜ、ハッコン！」

ケリオイル団長に認められて悪い気はしないが、この水量でも数日……いや、一週間以上かかってもおかしくない。それまでずっと放水を続けるとしても、そんなに上手く事が運ぶのか。

そして、これが本当に決め手になるのか。疑問と不安は尽きないが、これが最良の策ならばやるしかない。俺も全力を出させてもらうよ。

あっ、いや、ちょっと待ってくれ。フォームエンジンは一日二時間までだった……どうしよう。

あれから二日が過ぎた。

誰か一人が念の為に命綱をつけた状態で罾を発動させる装置をいじって大穴を開けると、俺がひたすらに水を注ぎ続ける日々を過ごしている。

と言つても、結局、不意のアクシデントに備えて一日一時間だけ高圧洗浄機になって、あとは2リットルのミネラルウォーターを続けざまに落としている。

初めは蓋を開けてもらい中身を傾斜のある部分に注いでいたのだが、俺が一度ペットボトルだけを消して、中身の水が零れたのを見

てすぐさま彼女たちが理解してくれた。今はペットボトルごと穴に放り込んでいる。

途中、豊豚魔や動く骸骨も何度か出現したのだが、腕利きが集まっているこのメンバーに挑むことすら無謀で、あつという間に退けられた。

炎飛頭魔が現れるとラツミスが俺を担ぎ、事前に決めていた放水担当の者が意気揚々と近づいてきて、嬉しそうに水をぶっかけていた。

これだけの水量があるとあつという間に火が消えるので、それが楽しいらしく担当の時に炎飛頭魔が現れると、羨ましがられるようになってる。

「どれぐらい水が溜まっているか見てくるよ。命綱ちゃんと握っていて」

体の軽いミケネが腹に命綱を巻き付け、仲間たちによってゆっくりと穴の底へ降りて行く。感覚としては結構溜まっていそうなのが実際はどうなのだろう。

暫くして、ラツミスに一本釣りされたミケネが帰還し、熊会長たちに情報を伝えている。

「穴の中って真冬みたいにすっごく寒いんだけど、水はけのいい地面みたいで水が沁みこんでいたから、全然溜まってなかった」

「うぬう、そうか」

「いい作戦だと思ったんだが……落とし穴に落とすってのは有効な筈だが練り直しか」

熊会長とケリオイル団長が顔を突き合わせて唸っている。
水はけがいいのか。ってことは、試してみるのもありかもしれない。

「お、ハツコン急に変わってどうした。これって、ああ、そういうことか。寒いなら水じゃなく氷を落とせばいいってことか」

そういうこと。一日一時間ちよいだけど、やらないよりましだろう。それに、素早さが上がっているから、氷を落とす速度も前とは比べ物にならないしな。

火消し

それからは毎日深夜になると俺がフォームチェンジをして、自力で大量に落としていく。素早さが上がっているので、怒涛の勢いで流れ落ちて行くな。

穴の中はかなり冷えているようで全く溶けていないと、またも確認の為に穴に吊るされたミケネが言っていたな。

取り出し口に、木製の滑り台のような物をヒュールミが設置してくれたので、滞りなく穴へ落とせるようになった。

深夜にやるのは一日二時間縛りがあるので、その日の最後二時間にやれば、日を越えて直ぐにフォームチェンジの制限時間が回復するからだ。

なので深夜の仕事は基本一人作業となる。ラツミスたちが一緒に起きておくと言っていたが、丁重にお断りしておいた。それなら普通に見張りしてもらった方がいいからな。

炎巨骨魔が炎飛頭魔と同じ性質なら、火さえ消せば攻撃が通る。でも、水や氷程度なら一瞬にして蒸発させそうな気がしてならない。

「ハツコン、何か考え事しているの？」

目をまたぎ元の自動販売機に戻ると、ひょこつとラツミスが後ろから顔を出した。

しかし、何で俺が悩んでいることがわかるのだろうか。いつもと変わらない自動販売機の筈なんだが。

「気づいてないと思うけど、考え事している時って、灯りが点滅したり弱くなったりしているよ」

そうなのか。全く気付いてなかった。よく観察しているなラツミスは。

「ハツコン、一つ聞いていい？」

珍しく笑顔が消え、真剣な眼差しが俺に注がれている。ここは茶化したり惚けたりしていい場面じゃなさそうだ。

「いらっしやいませ」

「ハツコンは人間に戻りたいの？」

難しい質問だな。普通なら自動販売機じゃなくて人間に戻りたいと思うだろう。これは自動販売機マニアだとしても普通は……。当初は俺も人に戻ることを願っていた。人に戻ってラツミスと言葉を交わしたいという望みは今もある。でも、気づいてしまったんだ。人に戻り自動販売機でなくなった俺に 価値はあるのかと今はラツミスや皆の役に立っている自覚がある。だけど、人に戻るということは、これとって取り柄のない平凡な自分に戻るといふことだ。

その事を考えると怖いんだ。人間に戻ったら初めは喜んでくれるだろう。だけど、役立たずであることが知れ渡り、皆が自動販売機だった頃の方が良かった……と口々に言う未来が脳裏にちらつく。それに 念話 を覚えたとしても、彼女と会話した際に幻滅されないだろうかと不安が先に来てしまう。人間時代、口が達者な方ではなかった俺が、彼女たちを満足させるだけの会話ができるのか。話してみたら面白くない男だと幻滅されないだろうか。

だからあの時、無意識の内に 念話 を取るのを避けていたのかもしれない。今のままでも最低限のコミュニケーションが取れているのだから、それで充分だと強引に理由を付けて、彼女たちと話せるチャンスを自ら手放した。

情けないよな。人間よりも自動販売機である今の方が、存在に自信が持てるなんて。

「あたりがでたらもういっぼん」

「よくわからないってこと？　うちは、いつかハツコンとお話して一緒に色んなことしたいな。あ、前も言ったけど、手料理も食べて欲しい！」

腕があれば屈託なく笑う彼女を抱きしめることもできる。足があれば、彼女に背負われるのではなく、共に肩を並べて歩ける。

それだけでも充分だよな。彼女がそれを望むのであれば、俺はそれを目標にして生きることしよう。その結果、どういう結末になったとしても。

更に数日が過ぎた穴の中にも結構溜まってきたので作戦を実行に移すそうさ。作戦の概要は、まず炎飛頭魔を見つけ出し、この落とし穴に誘導する。

そして落とし穴の蓋は塞いだ状態で炎巨骨魔を呼び出す。そして穴の上に乗ったところで罨を発動させて穴に落とし、火が消えたところから攻撃を加えるという寸法だ。

その為に荷台いっぱい岩を詰んできていた。ここでの主戦力はラツミスになる。

ただ、岩がさほど大きくないのが気になる。ラツミスならもつと巨大な岩でも持ち上げられるのだが、荷猪車がその重量に耐えられず、手頃な大きさの岩がなかったそうだ。

やってみないことには何とも言えないところがきついな。穴にハメさえすれば相手が登ってこられない間は危険性が薄れる。それだけでも、攻め手側が有利だとは思うが。

「団長。赤が炎飛頭魔と接触したみたいです」

「よっし、そのままこっちに誘導させてくれ」

耳に手を当てて白がケリオイル団長に説明をしている。確か、紅白双子は特殊な加護を覚えていて、どれだけ距離が開いていても二人限定で声をお互いに届けることが可能らしい。

二人限定とはいえ便利な能力だよな。そりゃ、団長も重宝するわけだ。

「聞いている通りだ。俺たちは穴から離れたここで待ち受ける。ミケネはこのフード付きマントを被って定位置に頼む」

「わかったよ」

壁と同色のマントにすっぽり覆われたミケネが落とし穴の発動装置前に陣取る。背中を向けると壁と同化しているように見えて、注意深く見なければ気づかれないかもしれないな。

俺たちは穴の向こう側に陣取り待ち構えておく。あとは階層主を呼ぶまで時間を稼ぎ、作戦を実行する。

「ハツコン、正直な話。お前は どう見ている。この作戦成功すると思うか」

ヒュールミが俺に口を近づけそう眩く。
こういうのは時の運だとは思うが、上手くいくかどうかと言うより上手くいった欲しいというのが本音だ。

「いらっしやいませ」

「そうか。オレだって成功して欲しいと思ってんだぜ。でもよ、炎巨骨魔の炎つてのは噂では水を一瞬にして蒸発させるほどの火力だつて話だ。穴を満たした氷程度でどうにかなるのか……」

ああ、なるほど。ヒュールミが危惧しているのはそこか。その心配を取り除いてやりたいのだが、それを伝える術を持たない。

「そろそろ、赤が来ます！」

「穴の上で待ち構えるのは、俺たち患者の奇行団が受け持つ。命綱離さないでくれよ！」

「まっかせて、団長さん！」

「安心するがいい」

彼らの腰に巻き付けてある命綱の末端はラツミスと熊会長が握っている。あと団長の命綱は俺の体に巻きつけてあるな。フォルムチエンジしたらどうなるのだろうか……興味はあるけど自重しよう。

脇道から飛び出してきた赤の背後から、三体もの炎飛頭魔が浮遊して追いかけている。こんなに釣ってきたのか。

「ある程度苦戦しているように見せかけて二体までは倒している。」

「一体は残しておけよ」

「了解です！」

患者の奇行団が意気揚々と飛び出していく。彼らの実力なら炎飛頭魔に後れを取ることは無いので、安心して見ていられる。

実際、余裕を持って対応しているので、あとは待ち人ならぬ待ち主が現れるのを待つだけだ。残り一体となり、それもじわじわと削られていく最中、地面から微かな振動を感じ取った。

本命の御到着のようだ。脇道に繋がる箇所の大気が揺らいで見える。高熱による現象だろう。

「おっし、わかっているな！」

「はい！」

残されていた炎飛頭魔をあっさり倒し、患者の奇行団が落とす穴の中心部に陣取っている。全身の視線が集まる場所には紅蓮の炎に包まれた巨大な骸骨の手があった。そして、にゅっと炎を纏う頭蓋骨が壁の頂点近くから抜き出てきた。

「この距離で既に熱いのか」

ヒュールミが額の汗を拭い、じっと炎巨骨魔を睨みつけている。全員の表情が硬い。無理もないか、巨大な骸骨だけでも異様なのに、壁が溶ける程の炎に包まれているのだから。

「もう少し下がるといい」

熊会長がラツミスとヒュールミを少し下からせる。

愚者の奇行団も相手に怖気づいているかのように後退りを始めているが、チラチラと足元を窺う余裕があるようだ。

一步踏み出すごとに、前回と同じく地面が骸骨の足の形に溶解して陥没する。鈍重な動きでゆっくりと歩いていた炎巨骨魔だったが、歩行速度は徐々に上がり、今はもう駆け足になっている。

地面を溶かしながら地響きと共に迫りくる炎巨骨魔の迫力が尋常ではなく、客観的に見て絶望感が半端ない。

「捕まるなよ！ 一気に駆け抜ける！」

正に死に物狂いで走る愚者の奇行団の背後から迫る炎の骸骨。手を振り回しているが、辛うじて届いては無いようだが、熱風で煽られた彼らの髪が激しく揺れている。

「あつっつ！ 熱い、熱い！」

「団長、泣き言は後にしてください」

「副団長だけ水で覆ってずるいつす！」

「部下を労わる心は無いのかああ」

「こっちにも水をおねしやす！」

彼らの叫び声を聞いて副団長に目をやると、確かに水で全身をコーティングしている。どうりで、一人だけ涼しい顔をしているわけだ。

何だかんだ言って軽口を叩くぐらいの余裕があるよな。

彼らが落とし穴部分を抜け、続いて炎巨骨魔が差し掛かったところ、

「今だ、ミケネ！」

「はい！」

熊会長が吠えるように叫ぶと、壁に擬態していたミケネが畏を起動させた。

足下の地面が消え、炎巨骨魔が手を伸ばした状態で視界から消えて行く。

「みんな、水蒸気が噴き出してくる！ 穴にはまだ近づくな！」

ヒュールミが大声で叫ぶと、確認の為に中を覗き込もうとしていた彼らの足が止まった。

だが、いつまで経っても水蒸気は噴き出してこず、全員の視線がヒュールミに集まっている。

「あ、あれ？ 水が蒸発する筈なんだが……どういうことだ」

納得がいかないようで腕を組んだまま、ヒュールミが唸っている。壁際にいたミケネが好奇心には勝てなかったようで、恐る恐る中を覗き込んだ。

「みんなー、骸骨の火消えているよ！」

「よくわからんが、消えているならそれでいい！ 投擲開始だ！」

ケリオイル団長の号令の元、全員が巨大な石を投げ込んでいる。

炎が消えた理由を知っているのは、この場で俺だけだろう。あの落とし穴の中に放り込んでいたのは氷ではなく実は ドライアイ

スだった。

ドライアイスというのは二酸化炭素を固めた物体なので、炎巨骨魔が落ちてきた際にドライアイスが溶けて、穴は二酸化炭素で満たされた。

ここからは小学生の理科の内容なのだが、火は酸素がなければ燃えず二酸化炭素は酸素より重いので下に溜まる。つまり、やつの炎が消えるということだ。

これ上手くいったから良かったものの、失敗していたら目も当てられなかったな。独断でやっていた事だから、正直ほっとしている。さてこのまま、何もなく退治できたらいいのだが。次々と石を落としている彼らを見つめながら、そんなことを願っていた。

とどめの一撃

「ミケネ、様子はどうだ」

穴の中を覗き込んでいるミケネにケリオイル団長が問いかけている。

「ある程度、痛手は与えているみたいだけど、もう一押し足りない感じがするよ」

あの程度の石では決め手にかけるのか。もつと重く硬い物があればやれるかもしれない……ん？ 何故、皆様はわたくしを見つめていらっしやるのかな。

「ハツコンならいけるんじゃないか？」

「いや、でも、失敗したらハツコンさん壊れますよ」

「階層割れから落ちてもいけたんだから、大丈夫じゃねえか」

団長さんと副団長さん。当人を目の前にして物騒な話し合いはやめてもらえませんか。でも、正直な話、俺が巨大な自動販売機に変化して、落ちるのが一番有効なのは確かっばいな。

「ダメだよ！ ハツコンに危険なことはさせられない！」

「確実性がないからな。オレも反対させてもらおう」

ラツミスとヒュールミが俺を庇うように前に並んだ。二人の気持ち嬉しいが、他に決定打が無いなら、この策も一考の余地はあるとおもう。

頑丈は結構上がっているので、落ちても大丈夫な気もする。耐久力が0にならない限りはポイントで修復できるので、やれると思うのだが。でも、失敗したらそこで終わりなんだよな。

「そうだな、ハツコンはこれまで十分に役立ってくれた。これ以上負担させるのは酷ってもんだ。俺たちもいいところ見せておかないといかんしな」

「飛び込んで一気にやりますか？」

「そうだな、邪魔な炎さえなければやれるか……」

えっ、いやいやいや、それは駄目だ！ 下は二酸化炭素が充満している。彼らが下りたら呼吸困難というか二酸化炭素中毒で死ぬぞ。これは予想外だった。どうにかして、彼らが下りることだけは避けないと。

「いらっしゃいませ いらっしゃいませ いらっしゃいませ」

「おっ、ハツコンも賛成なのか」

ちっがーうー！

「ざんねん ざんねん ざんねん」

「違うのか。だが、もたもたしていると」

「骨が穴を登ろうとしている！」

穴で大人しくしている理由なんてないもんな。そりゃ登ろうとしてくるか。益々、時間が無い。だからといって、人を穴に下ろすわけにもいかない。

「この好機を逃すわけにはいかねえぞ。お前ら、準備はイイか！」

「命綱離さないでくださいね！」

「マジで頼みます！」

「マジでネタふりじゃないから！」

こういう時の思い切りの良さは尊敬に値するが、今はそれが悪い方向に作用している。ダメだ、このままでは……何か手は、何か彼らを止める術は！

俺の今いる位置は穴から少し離れた場所。傾斜がある落とし穴の縁までは三メートルはある。俺の近くにいたのはラツミスとヒュールミ。そして、ミケネを除いた大食い団の残りか。

団長が俺の体に巻きつけていた命綱を外し、熊会長に手渡している。長さの調整をする場合、都合がいいからだろう。

どうにか傾斜部分に俺の体を持っていけないか。まずは車輪をこそっと底に装着しておく。後は押ししてもらえれば何とかいけそうなのだが。

ラツミスに伝える手段があったとしても、彼女は頭を縦に振ることとは無いだろう。ヒュールミもさっきの様子じゃ無理っぽい。そうになると、熊会長もしくは大食い団か。

大食い団が押す場合、全力で力を合わせないと無理だし、熊会長

は命綱を託されて両手が塞がっている。ラツミスの怪力なら軽く押す程度でも斜面までは余裕で移動できそうだが。

あつ……一つ方法を思いついた。だけど、これを実行するには恥も外聞も投げ捨てなければならぬ。勝つ為だ、好感度が少々下がっても彼女たちが死ぬよりマシだ。

俺はフォルムチェンジを選ぶ エロ本販売機に。

「え、ハツコン急に変わって……えつ、ええええつ!？」

ガラスの向こう側に並ぶ煽情的な格好をした女性たちが妖艶なポーズを取り、男たちを誘っているようにしか見えない。

それを目撃したラツミスの顔が見る見るうちに赤く染まっていく。

「へう、えつ、何でこの人たち、下着姿でお尻を突き出したり胸を持ち上げて……うわああ」

照れながらも食い入るように見入っている。恥ずかしいけど興味あるといった感じだな。気持ちはわかるよラツミス。

と、ラツミスの照れている姿に萌えている場合ではない。更にここでダメ押しだ。

「いらっしやませ」

「へあうあつ! や、やだもう、ハツコン。こんなの買わないって、もうスケベ!」

集中していたところに声を掛けられて、過剰な反応を示したラツミスが動揺を誤魔化すように、俺の体を平手で叩く。

普通なら軽い音がする程度なのだが、動揺していて力の加減を誤

ったのか結構な衝撃が体を貫いた。

そして、その衝撃により自動販売機の体が横にすつとずれた。車輪を出していなければ体が揺れた程度なのだろうが、今の俺には充分すぎる威力。

「えっ、ハッコン!？」

「ありがとうございます」

彼女が慌てて手を伸ばすが、その手は空を握りしめただけで、俺は斜面に差し掛かると速度を増して、穴へと跳び込んでいく。

体が宙に浮いた感覚がすると同時に今度は巨大な自動販売機に変化する。

下に視線を向けると、穴をよじ登ろうとしてた骸骨と見つめ合う形となった。手を離せば穴へ落ちる状況で真上から落ちてくる自動販売機。

手を離して俺を弾くか、それとも受け止めるか。その一瞬の迷いが炎巨骨魔の命取りとなった。結局判断が付かなかったのか、額で受け止める羽目になった頭蓋骨を、自動販売機の体が容易く打ち砕く。

丁度角が当たったのも幸運だった。頭蓋骨を粉碎した俺の体が喉、あばら、腰骨を破壊して地面に墜落した。

《12のダメージ。耐久力が12減りました》

思ったよりダメージが少なかったのは、骨を砕く際に落下速度が激減してくれたからだろう。

体の三分の一ぐらいが地面にめり込んでいるのは不格好だが、結果良ければ全てよし。

頭上から骨の欠片がパラパラと降ってくる。ちゃんと止めを刺せ

たようだな。これで万事OK。

「はっこおおおん！ また無茶してええええっ！ 今から行くから、ちよっと待ってなさい！」

ラツミスさんが激怒していらっしやる。今すぐにも降りてきそうだな。って、ここは二酸化炭素で満たされているから、酸素自動販売機に変わって酸素を放出しておこう。

「ざんねん ざんねん ざんねん」

彼女を近寄らせないように残念を連呼したのだが、聞く耳を持たないようで穴の上から縄が垂れてきた。酸素ハイスピードで出し続けるぞ！

ずっと「ざんねん」と叫んでいた成果があつたようで、ラツミスが下りるのを躊躇ってくれたようだ。周りに止められたのかもしれないが。

「ハッコン！ 今はまだ下は危険だつてことか！」

「いらっしやいませ」

ヒュールミの問いかけに即座に応える。こういう場面での彼女の存在はありがたい。ラツミスも察しは良い方なのだが、俺が絡むと途端、無謀になる。

心配してくれるのは嬉しいのだが、もう少し自分の身を案じて欲しい。って俺も人のことは言えないか。

そう言えば階層主を倒したのだから、コインがそこら辺に落ちていないだろうか。おっ、あつたあつた。前と同様に コイン式掃除機 を何とか調節してコインを吸い込んでおく。

所持品の欄に 炎巨骨魔のコイン が追加されているな。

あとは暫く酸素を出し続けて……って、酸素は二酸化炭素より比重が軽いから穴の底には溜まらないか。となると、みんなに俺がどうやって階層割れから帰還したのかを教えておくか。

風船を大量に作り、結界内部をパンパンにすると ダンボール自動販売機 になる。体が浮遊感に包まれ、ふわふわと舞い上がっていく。

これって、二酸化炭素の中だから比重の関係で浮きやすくなっているのか。思ったよりも勢いよく浮上している。

穴の半分より少し上に差し掛かると速度が激減する。ここまで二酸化炭素で満たされていたってことだよな。前回よりも風船を多めにしておいたので何とか体は上に進んでいく。

「ええと、ハッコン？」

「いらっしやいませ」

ダンボールの体だから声を出せないのではないと不安だったのだが、そこは大丈夫なようだ。まあ、他の自動販売機も音声再生機能が無いのに話せたしな。

「ミケネ、穴を塞いでくれ」

「わかりました」

熊会長の命令で落とし穴の蓋が閉じたので、 結界 を解除して風船を解放して着地した。そして、いつもの自動販売機に戻り、ほとと一息つくと……俺の体に影が差した。

嫌な予感と言つか視線を向けたくないのだが、しらばくれる訳に

もいかず、渋々だが前を見た。

腰に手を当てて前屈みで頬を膨らましているラツミスがいた。うん、間違いない怒っている。

「ハッコン。壊れたらどうする気だったの？」

声が優しいのが逆に怖い。

「あたりがでたらもういっほん」

「誤魔化さない。うちは怒っているんやで」

くっ、感情が高ぶっている時の方言が出ている。ここは大人しくしておこう。

元々、女性を言い含められる話術は無いし、この音声データでは何を言っても無駄だろう。と考えた自分の浅はかさを知るのは、説教が終わった一時間後。

初めは怒っていたのだが徐々に愚痴とどれだけ心配していたかという話に移行し、見かねたヒュールミが止めに入るまで続いていた。

「ラツミス、それぐらいにしておけ。あんまりしつこく責めると、ハッコンに嫌われるぞ」

「あうう。じゃあ、これぐらいにしておく。もう、こんな無謀な真似はしないでね」

彼女の懇願する問いに俺は沈黙で答えた。彼女に対して嘘は吐きたくない。だから、俺は何も答えられない。みんなを助けられる場に遭遇したら、再び同じことをするだろうから。

そんな俺の態度にイラつくわけでもなく、ラツミスは苦笑いを浮

かべた。まるで、俺の心を読んで呆れたかのように。

「話し合いは終わったか。ちょっと俺からも質問があるんだが、構わねえか？」

話しかけるタイミングを見計らっていたのだろう、ケリオイル団長が帽子のつばに指を這わせながら歩み寄ってきた。

「今回もご苦労さん。ハツコン、穴の底に階層主のコインは落ちていなかったか？」

「いらっしゃいませ」

「お、そうか。なら後で拾いに行かないとな」

回収しておいたコインを提出しておくか。ええと、どうやるのだ。所持品の 炎巨骨魔のコイン に合わせて、外に出すような感じで。

「おおっ、拾っておいてくれたのか！」

上手い具合に目の前にコインが転がり落ちてくれた。団長が迷わず拾おうとしたのだが、横合いから伸びた手が腕を掴んだ。

「何のつもりだヒュールミ」

「当たり前のように自分の物にしようとしているが、炎巨骨魔を倒したのも拾ったのもハツコンだろ。所有権はあんたじゃねえ」

正論ではあるが俺としては別にどうでもいい。でもまあ、こういうのは馴れあうよりも、きちんとしておいた方がいいかもしれない

な。

「ああ、すまなかった。お前さんの大活躍で何とかなったのは事実だ。これを得る権利があるのはハツコンで間違いない。ってことで、これを買収取らせて欲しい。金貨百枚でどうだ？」

軽いノリで口にしていい金額じゃないよな。金貨百枚ってことはポイント換算すると10万ポイントか。って、滅茶苦茶大金じゃないか。

ラツミスは俺と同じで驚いているようで、真ん丸な目を見開いてコインと俺を交互に見ている。

ヒュールミは特段驚いている様子もなく、チラツと視線を傍観者と化していた熊会長に向けた。

「ふむ。階層主のコインの相場であるなら、それぐらいで間違いない」

「だってよ、ハツコン。どうする」

それなら何の問題もないどころか十二分だよ。既に階層主のコインは一つ確保しているから、これ以上は必要ない。

「いらっしやませ」

「流石ハツコンだ。話が早くて助かる。金は後日支払うってことで構わねえよな。それだけの大金常に持ち歩くわけにはいかねえからな」

交渉が成立してコインは彼らの物となった。ケリオイル団長はつまんだコインを光にかざして、じっくりと観察すると腰の鞆に放り

込んだ。

さーで、後は清流の湖階層に戻るだけだな。迷路階層は上空からと大通りしか知らずに終わりそうだが、もうここに来ることは二度とないだろう。

とどめの一章（後書き）

これにて二章終了となります。
三章もよろしくお願いします。

迷路階層の集落

ラツミスに背負われることに違和感が無くなっている自分に対して、正直どうかと思うが、やっぱりこの場所は落ち着く。

迷路階層の転送陣が置かれている集落に向けて帰還中なのだが、結構な大所帯だよな。

ラツミスにヒュールミ。熊会長。門番ズ。愚者の奇行団はケリオイル団長、ファイルミナ副団長、射手のシユイ、紅白双子の赤と白。元暴食の悪魔団こと大食い団のミケネ、ペル、スコ、ショート。

総勢14名+1台となっている。

今後は迷路階層の集落で暫く滞在をしてから、清流の湖階層に戻るらしい。俺が映し出した迷路階層の地図を正確にトレースして、罫の配置場所とかを記載する作業をするそうなので、手伝いをする事になっている。

迷路階層は入り組んだ通路と罫の凶悪さで忌避されているので、ハンター協会としては少しでも生存率を上げる為の努力を惜しまたくないそうだ。

それが一段落つくまでは、迷路階層の集落が仮の我が家となる。

迷路の大通りにある罫の殆どは既に配置場所も起動条件も調べられているようで、時折魔物は現れるが容易く撃退されていた。

特にこれと言ったアクシデントもなく、二日後には迷路の入り口に到達していた。

入り口には門も何もなく衛兵も存在していない。迷路から脱出して少し進んだ先にポツリポツリと建物が見えてきたのだが、何と云うか寂しい光景だ。

迷路の外壁より外は荒れ果てた大地が広がり、草の一本すら生え

ていない。

建造物も丸太を組み合わせただけのログハウス風のものや、石を重ねた真四角な平屋が点在しているだけで、集落を囲う塀すらないのだが……魔物対策はどうしているのだろうか。

「ここって殺風景だよな。ハッコンもそう思わない？」

「いらっしゃいませ」

「だよな。何で活気もなくて寂れているんだろう」

「ラツミスは知らねえのか。この迷路階層ってのは損失と危険は大きいけど、その分見返りも期待できるって場所だな。死亡率が異様に高いが、一生使いきれない程の現金を手に入れたハンターだっている」

そんな話を大食い団の面々もしていたな。

「そんな場所だから来る連中は腕に覚えがある者か、実力もないのに一獲千金を夢見る馬鹿な連中の二択ってわけだ」

特に深い意味は無いのだが、思わず大食い団に視線を移してしまった。四人仲良く行進しながら談笑をしているようだ。

「滅多にハンターがやってこねえけど、ハンター協会としては転送陣を維持する為にも最低人数の職員は送り込まなければならぬ。人が少ないとはいえ宿屋や食堂などの施設がなければ不便だからな。そんな感じでハンター協会、宿屋兼食堂、武器防具屋、道具屋ぐらいいしかねえんだよ」

「そうなんだ、ヒュールミは物知りだね。あ、でも、集落と言う割には周りに防壁がないけど、それは？」

「迷路の魔物は何故か迷路から一步も外に出ないらしい。そして、迷路の外は一匹たりとも生き物が存在しない不毛の大地。防壁が必要ないって寸法だ」

「協会としては、もう少しこの階層に訪れるハンターを増やしたいのだがな。苦心しているところに、今回の一件だ。ハツコンの地図のおかげで展望が見えてきた、感謝する」

話に割り込んできたのは熊会長だった。どうやら近くで聞き耳を立てていたようで、話に混ざるタイミングを見計らっていた節がある。

「ダンジョンは未だに我々の理解が及ばぬ領域が余りにも多すぎる。各階層にある程度の人員を確保できなければ異変に気づくのも遅く、行動に起こした時には時すでに遅し、といった最悪の事態だけは避けねばならん。特に今回は階層主の復活が多発してある。どうにも、嫌な予感がしてならぬのだよ」

俺はこの世界については知らないことばかりだ。こんな短期間の内に階層主二体に遭遇するなんて、普通ではあり得ないことなのだろう。

「数日は地図制作に付き合ってもらおうことになるが、上空からの光景とは別口で支払いをさせてもらう」

それなら文句はない。いや、元から文句を言う気もなかったのだが。俺としてはラツミスと共に救出に来てくれただけで充分嬉しか

った。それが打算込みであったとしてもだ。

なので追加報酬をもらうのは正直どうかと思っただが、相手の申し出を上手く断れる程の会話能力が皆無なので、黙って受け取らせてもらおう。

そんな会話を続けていると、全員の足がぴたりと止まった。ここが目的の迷路階層にあるハンター協会か。

清流の湖階層と違い、あまりにも小規模で二階建ての民家を改造したようにしか見えない佇まいだ。よく言えば庶民的、悪く言えば……金かかってないなあ。

両開きの扉を開けて中に入ると、壁際にカウンター、丸テーブルが二つに、椅子が数脚。あと本棚が一つ。それが室内にある家具の全てだ。

カウンターの向こうには職員らしき女性が二人いるのだが、他には誰もいない。俺たちが来るまで暇を持て余していたのか、片方は読書、もう片方は居眠りをしていた。

「えっ、あ、ボミー会長、お早いお帰りで。もう見つかったのですか」

本から素早く手を離し、慌てて立ち上がり熊会長に頭を下げている。

その声に居眠りしていた方も起きたようで、キョロキョロと辺りを見回した後に、隣の職員と同じように頭を下げている。

しかし、熊会長はボミー会長と言っのか。じっくりこないの、俺は心の中で熊会長と呼び続けよう。

「ケシャ、ウリワ。暇なのはわかるが、もう少し緊張を持ってくれ」

「も、申し訳ございません」

受付の女性は読書をしていた方が三つ編みの黒メガネでケシャ。居眠りをしていた方がウリワだよな。ショートカットで体育会系といった感じだ。

「迷路階層会長は上か？」

「はい。おられます」

「では、団長、副団長、ヒュールミ、それと……一応ミケネも来てもらえるか。他の者はここで休んでいてくれ」

ラツミスによってホールの隅っこに設置された。久しぶりに屋根のある場所で過ごせるのか。

休憩となると自動販売機としての出番だ。全員が好む商品は把握しているのですらりと並べておく。何度も購入してきているので手慣れた動作で次々と商品を購入している。買い終えると丸机の上に並べて寛ぎだした。

「あ、あの、それなんですか？」

受付の職員二人がいつの間にか近くまでやってきて、好奇心を隠しきれずに患者の奇行団の面々に話しかけているな。

「んー、あつハツコンのこと。ええとね、硬貨を入れたら並んでいる商品が買える不思議な魔道具だよ。味も美味しくてお腹いっぱい食べられるから、チヨーおすすめですよ」

流石、患者の奇行団で一番のお得意様シュイだ。べた褒めしてくれてありがとう。

皆が美味しそうに食べている姿を見て、受付の職員二人がゴクリと喉を鳴らす。

「買ってみようか。いつもあの食堂だけだし」

「そうよね。味も悪くないけど、飽きたよね……」

この集落には食堂兼宿屋が一件だけだもんな。そりゃ、飽きるだろう。というか、食堂兼宿屋は経営が成り立っているのだろうか。実はハンター協会から補助金とか与えられているのかもしれない。他の面子を買っている商品を調べた上で、黒メガネの方がミルクティーとおでん缶。もう片方がコーンスープとカップ麺を購入してくれた。

臭いを嗅いで缶を指で突いて、あれやれこれやと弄って一先ず納得したようだ。緊張しながら口にすると、かつと目が見開いた。

「あ、意外と美味しい！」

「何これ、のど越しもいいし、この甘さが病み付きになりそう」

高評価いただきました。新たな顧客をゲットできたことだし、腰を据えてポイントの確認でもしようかな。階層主二体目を倒したことでポイントが更に増えてないかな。

《自動販売機》 ハツコン ランク2

耐久力 200 / 200

頑丈 50

筋力 0

素早さ 20

器用さ 0

魔力 0
PT 517654

機能 保冷 保温 全方位視界確保 お湯出し（カップ麺対応モード） 2リットル対応 棒状キャンディー販売機 塗装変化 箱型商品対応 自動販売機用防犯カメラ 太陽光発電 車輪 電光掲示板 液晶パネル 酸素自動販売機 雑誌販売機 氷自動販売機
ドライアイス自動販売機 ガス自動販売機 風船自動販売機 野菜自動販売機 卵自動販売機 ダンボール自動販売機 コイン式掃除機 高圧洗浄機

加護 結界

所持品 八足鱈のコイン》

何と言うか 機能 が増えすぎて、よくわからない存在になっているな。殆どの機能は有意義で活躍もしてくれたのだが、電光掲示板はミスったかな。文字が自在に打てるなら、音声も自由に選べそうなものだと、考えが及ばなかった。

いつか別の使い道が思い浮かぶかもしれないから、忘れないようにはしておこう。

あとは耐久力と頑丈をかなり上げたのだが、これってどの程度の硬さなのか実感できていないんだよな。

ラッミスの助走体当たりでダメージが通ったのは、彼女の怪力がなせる業だというのは理解している。一度適度な強さの敵の攻撃を受けてみたいのだが、そんな機会は無いに越したことはないか。

で、本命のポイントなのだが51万か。八足鱈を倒した時は100万近いポイントを得たが、今回は50万ぐらい増えている。これって、八足鱈よりも炎巨骨魔がポイント少ないだけなのか、それとも今回は俺が止めを刺す前に、ある程度のダメージが蓄積していた

からなのか、判断に苦しむな。

何にせよ100万ポイントには足りないことだけは確かだ。また100万ポイントに到達することがあったら、今度こそは加護を取るべきだよな。うん。

当てにならない誓いを胸に秘め、雨風に晒されることのない環境で緊張の糸が切れた俺は、迷路階層に落ちてから初めて眠ることを選んだ。

理想の英雄未満

迷路階層に来てから新たな常連が増えた。武器防具屋の夫婦に宿屋の親子、ハンター協会の受付と、この住民の殆どが毎日購入していくようになった。

というか、この階層って住民の数が少なすぎる。人気のない階層とはいえ10人前後じゃ商売あがりだろ。と部外者なのに余計な心配をしていたのだが、俺と同じ疑問を抱いたラツミスが受付に質問したことにより、謎が解けた。

実は俺の予想が的中していて、ハンター協会から毎月一定の金額が支払われているそう。つまり客が全く来なくても、充分生活ができる程度の収入が保障されている。

そうなると話が変わってくる。働かなくてもお金が貰えらなれば、この境遇にも耐えられる人は多いだろう。

とはいえ暇というのはある程度ならば歓迎されるのだが、それがあまりに長い時間となると、働き者であればある程、苦痛となり不安を覚えるらしい。

なので、たまにハンターが訪れると異様なまでの歓迎ムードでもてなしてくれるのが、ここの面白いところだ。

今回は俺たちが長期にわたり滞在しているので、住民の顔は生気に溢れテンションも上がっている。

集落に着いてから三日が過ぎると、愚者の奇行団は別階層の下調べに向かい、情報収集を終えたら誘いに来ると言っていた。

熊会長もそろそろ清流の湖階層に戻らないと色々と問題があるらしく、先に帰還した。

未だに残っているラツミス、ヒュールミ、大食い団の面々は熊会

長からの依頼があるので、離れられないでいる。明日から決行するらしく各自が準備を整えていると、珍しくこの階層に別のハンターがやってきた。

漆黒で表面が濡れているかのような、やけに艶のある全身鎧を着込んだ、金髪碧眼の中性的な美青年がたった一人でハンター協会に訪れたのだ。

見目麗しくすらつと伸びた手脚に、背中の大剣に加え漆黒の鎧。何と言うか、まるで女性の理想を詰め込んだ、超美麗CG映像が自慢の某ゲームから抜き出てきたような彼に、受付の視線が集中している。

「すみません。今日、この階層に来たばかりなのですが迷路の詳しい地図はありませんか」

物腰も柔らかく声も澄んでいる。今のところ欠点が見当たらない。自動販売機なので嫉妬するのもおかしな話なのだが、これ生身だったら隣に並ぶことすら同性として苦痛かも知れないぞ。

「は、はい。地図はあと三日待つただければ、最新の精密な物が完成する予定です」

あれが一目惚れした女性の顔か。俺は一目惚れを信じないタイプなのだけど、ここまでの美形だと仕方がないような気持ちになる。あっ、もしか……。

俺の傍で飲み物を口にしていたラツミスとヒュールミの様子が気になり視線を向けると……騒ぎながら青年を眺めていた。

「ヒュールミ、見て見て、絵にかいたような綺麗な男の人だよ」

「おー、マジだな。めっちゃ美形だぜ」

何と言うかノリが軽い。惚れているという感じではなく、街中で有名人を見つけた時のようなテンション。純粹に感心しているようだ。

「三日ですか、では三日後にまた伺わせてもらいますね」

帰り際に春風を彷彿させる爽やかな笑顔を見せて扉から出て行った。

受付の二人は姿が消えても未だに手を振り続けている。凄いなイケメン効果。

女つて見た目で簡単に騙されてちよろいよな。と言う程、擦れてはない。男だつて美人や胸の大きな人に簡単になびくもんだし、お互い様だと思う。

同性の目から見ても、あそこまでの美形なら仕方ないと思う。それぐらいの美貌をしている。

「昔話に出てくる勇者様つて感じだよな」

「ラツミス、あれは美化されまくっている作り上げられた勇者像だぞ。有名なハンターつてのは、大概是ムキムキで筋肉ダルマのオッサンつてのが定番だ」

ラツミスが憧れを打ち砕かれてショックを受けている。知らなくていい現実つてあるよな。うんうん。

「じゃ、じゃあ、100の加護を持つ、神の寵愛を受けた者と呼ばれた有名なハンターは！？ 超絶美少女つて話聞いたことがあるんやけど、うち、めっちゃ憧れてるんやで！」

動揺が方言となって表れている。

しかし、100の加護って凄いな。何ポイント消費したんだ。あれ？ そう言えば俺はポイント消費して機能とか加護を得ることが出来るけど、他のハンターとかはポイント制なのだろうか？

こういうシステムが当たり前のように思いこんでいたけど、ハンターの人たちは魔物を倒したら強くなるのだろうか。こればかりは俺の定型文では聞き出すことができないな。

「あー、神の寵愛を受けた者か。あの人は本当に美人で優しい人だったという文献や証言が今も残っているな。ただ、一か所に留まることがなかったから、各地に伝説を残しているが細かい人物像は不明ってことになってるぜ」

カツコいい人だな。正体不明で流離^{ウツロイ}いの美人、尚且つ強キャラか。物語の題材にしたら人気間違いなしだ。

「良かったー。うちの理想だからね！」

「まあ、あの美形君も、そういった特殊な人間の一人なのかも知れねえな。迷路階層に一人で挑む実力ってことは、相当なもんだぜ」

あれだけの容姿なら腕がそれ程でなくても、チームメンバーになりたがる女性ハンターなんて腐るほどいるだろう。それでもあえて一人でやっているのは腕が立つって事だよな。

もしかして、外にチームメンバーを待たせているのかもしれないが、何となくだが他人を寄せ付けない感じがした。物腰は穏やかで丁寧だが、一步距離を置いて接している様にも見えた。

でもまあ、仲間に危害を与えないのであれば内面はどうでもいいんだが。

夜になり、娯楽施設が全くない迷路階層では早めの就寝が常識になっっている。

無駄に部屋数だけは豊富な宿屋にラツミスたちは泊まっているのだが、外から見る限りでは窓の明かりも消え、早々に眠りについたようだ。

俺は宿屋の前に佇んでいる。室内に入れてもらえそうだったのだが、重みで床が抜けても困るので屋外にいることにした。

自動販売機の体に慣れきってしまったので、こうやって屋外でぼーっとするのも嫌いじゃなくなっている。それどころか妙に馴染むのだ体に。

身も心も自動販売機になってきている気がする……別に悪いことでもないか。

夜の節電モードにして、ほんのり明かりが灯る程度にしておく。辺りに光源が無いのでこれだけでも異様に目立っている。

しかし、迷路階層って廃れ過ぎだと思う。迷路以外は安全とはいえない不毛の大地なので、農作物は育たない。魔物も居なければ動物もいない。どうしようもない土地に見えるが、実は利用価値あるようなところ。

これが現代日本とかなら、工業地帯が出来上がりそうな気がする。でも、何が起こるか分からない迷路で普通の人が就職するには難があるか。

そもそも、迷宮がどういうものか未だに不明点が多すぎる。俺の知っているダンジョンというのは空もなければ一階層がこんなに広大ではない。何と言うかスケールが違い過ぎる。

それに最下層をクリアしたら、どんな願いも叶えられるというのが眉唾だ。こんな馬鹿げた仮想世界を創造できる存在なら不可能と言いつれないけど。

うーん、自動販売機が悩むのは商品の売れ行きだけにしたいのだが、そうはいかないよな。

結構真剣に考え込んでいると、不意に辺りが明るくなった。おっ、誰か宿屋から出てきたのか。

宿屋入り口の両開きの扉が開け放たれて、そこから一人の美男子が歩み出てくる。昼間の目立つ青年か。

彼はゆらゆらと頼りない足取りで俺の前にすっと立った。放たれる光に照らされた表情は生気がなく、昼間の自信ありげで余裕の態度が微塵も感じられない。視線が定まらず、身体が小刻みに震えている。

どうしたんだ。今の姿は拳動不審で陰気な残念イケメンって感じだぞ。

「あああつ、もう、緊張したなあ。何でみんな、じろじろ見てくるんだよ。はああああ、怖かった。この階層は人が少ないって聞いていたのに、結構人がいるしいいいいい」

んー？ 今、この青年は早口で情けないことをまくし立てなかったか。おいおい、昼間の態度は無理していたって事で本性はこつちだというのか。

「もおおおう、無理いいいい。人と話すのやだもおおおう。ほんつと勘弁してほしいよ。はああああああ」

口から魂が抜け出そうなくらいのため息だな。この人、コミュ障なのか。それを隠す為にイケメンキャラになりきっているってこと

か。単独行動している理由がコミュ障ってどうなんだ。何と云うか……急に親しみが湧いてきた。

「ダメだダメだ。物事を否定的に捉えたり、悪いことばかり考えたらダメだって母さんも言っていたし。肯定的に、肯定的に」

深呼吸を繰り返し、ぎゅっと拳を握りしめる姿を見ていると応援したくなる。

確かカカオの実に含まれる成分に自律神経を整えて、リラックスできる効果があるとかどうか聞いた記憶が。だとしたら、新商品としてココアを仕入れよう。

「いらっしゃいませ」

「うわああっ、びっくりした！ えっ、なにになにに!？」

かなり驚いたようで、その場で三メートルほど跳躍した。凄いな身体能力。そんな見事なりアクションされたら悪戯心が疼きそうになるが、それをやったら本末転倒だ。

「こうかをとうにゆうしてください」

「あ、う。昼間、ハンター協会にあった箱かな。確か買い物ができる不思議な箱だったよな。袋熊猫人魔の人たちが買っていたし」

上半身を若干後方に反らしながら、器用に近寄ってきている。怖がっているのが如実に伝わってくるよ。自分が原因なのだが、落ち着かせる為にもココアを飲ませてあげたい。

ココアが目立つように下の段一列をココアで揃えてみた。

「えっと、硬貨を確かここに入れていたよね。それで、欲しい商品の下にある出っ張りを押せばよかったと思う」

硬貨が体内に滑り込んだのを確認すると購入可能になった証として、スイッチを点灯させる。

「何にしようかな。このカップに茶色い液体注いでいる絵って飲み物ってことだよな。いっぱい並んでいるって事は人気ありそうだし、実家で飲んでいたお茶に似ているから、これにしようかな」

思惑通りココアを選んでくれたのは嬉しいのだが、独り言が多い。そういや、友人が在宅の仕事で人と殆ど触れ合わない生活を続けていたら、独り言が増えたとか言っていたな。

「うわあ、温かいんだ。ええと、開け方も確かここを引き上げて…
…いけたっ」

無邪気に喜ぶ姿が可愛らしいぞ。きりっとしていればイケメンなのに、笑顔は可愛いとなると、年上のお姉さま方が一発で落ちそう
だ。

「ふうー。甘くて美味しいなあ。なんか凄くほっとする。この魔道具いいな。人相手じゃないから買い物も緊張しないで済むし」

物欲しそうな目でじっと見つめられても困るんだが。高評価で求められるのは悪い気はしないけど、俺の居場所は決まっている。

「確か、所有者は彼女たちだったか。明日交渉してみよう」

そう呟くと彼はココアの缶を大事そうに両手で包み込み、宿屋の

中へと姿を消した。

交渉しても無駄だと思っけど、無理やり奪おうとしないのは立派だ。個人的には好きなタイプの人間なのだが、彼とこれ以上は接点を持つことは無いだろう。

明日になったら俺たちは別口の依頼で動くことになるからな。

「ハッコン、ミシュエル君が依頼に同行してくれることになったよ！」

「よろしく、ハッコン」

次の日の朝、俺の前に飛び出してきたラツミスが開口一番そんなことを言い出した。

彼女の隣に並び立つ爽やかイケメンは笑みを浮かべ、俺にすつと手を出すが握手できない事を思い出し、頭を恥ずかしそうに掻いていた。

外周

熊会長が用意した荷猪車の荷台にはヒュールミと大食い団が乗り、脇に俺を背負ったラツミスと一人の青年が歩いている。

「ははっ、そうですね」

「でも、本当は迷路の中を探索する予定だったんだよね」

「ええまあ」

「良いじゃねえか。実力のあるハンターが同行してくれるんだ。万が一の事態に対応できるしな。頼りにしているぜ」

「ははっ、そうですね」

「まさか、孤高の黒き閃光と呼ばれるミシユエルさんと同行できるなんて、光栄だなー」

「ええ、ははっ」

昨日の夜の一件を知らなければ、余裕のある爽やか笑顔で対応する好青年に見えるのだが……よく見ると微かに頬が引きつっているし、受け答えの単語が殆ど同じだぞ、ミシユエル君。

俺たちは熊会長の依頼により巨大迷路の外周を進んでいる。左にはそそり立つ迷路の外壁。右には荒れ果てた大地。敵は迷路から出てくることなく、外には生物が存在しない。

危険度はかなり低い依頼なので、ラツミス、ヒュールミ、大食い

団といった人員でも大丈夫だろうと依頼された。だが、最近は一変が立て続けに起こり、何かあるかわからないということ、急な申し出ではあったが、実力者として名の知れ渡っているミシユエルの合流を許可した。というのが顛末である。

「ヒュールミ、この外周って何もなかったら一周するのに一ヶ月ぐらいかかるんだっけ？」

「一年前、調査を担当したハンターたちはそうだったらしいが、ハツコンの映像を元に計算した感じでは三週間はかからないと思うんだがな。あれじゃねえか、依頼料を多めにふんだくる為にわざと時間を掛けたのかも知れねえぜ」

「あー、なるほど。安全で日数分だけ依頼料を渡すという内容なら、そう考えるハンターがいたって不思議じゃない。」

「今回は無限の食料を提供できるハツコンがいるオレたちには最適の任務だ。元々は脚の速さと生命力に定評がある大食い団に頼みたかったようだが、食料問題があったからな」

「足が速くて野生での環境に適応しやすい……らしい大食い団は調査に向いているのだが、食料の確保という最大のデメリットが存在する。なので、俺とラツミスが同行することになり、更に迷宮の壁が劣化していないか、周辺の環境に変化はないか、異変の兆しはないか、そういった細かい調査や分析を担当するのがヒュールミといった具合だ。」

「のんびりと外壁に沿って旅行気分移動するだけの簡単なお仕事なのだが、今まで予想外な出来事に巻き込まれ過ぎて、どうにも警戒してしまう。」

「では、念の為に私が殿を担当します」

不意に声があったので意識を覚醒させて、声の主を見る。

ミシユエルが自然な感じで、その場から立ち去り最後尾へと移動したのだが、誰の視線も自分に向いていないことを理解して、ほつと安堵の息を吐いている。

まあ、俺の視線は注がれているのだが知らぬが仏だ。でも、これだけ人見知りなくせして何で今回の任務に同行したんだ？

確か自動販売機である俺を買い取る交渉をラツミスに持ちかけた…… 筈なんだが、何処をどう間違っただろうな。不信感とまではいかないのだが、彼の行動には疑問が残るので注意深く観察してみよう。

最後尾に移動してからは、誰かが振り向いたりしてミシユエルの様子を覗き見ない限りは、若干俯き気味で黙々と歩いている。その顔を注視していて気づいたのだが、口が微妙に動いている。

何か独り言を呟いているのか？ 意識を集中して声を拾ってみる。

「この……一ヶ月……できるだけ……慣れない……女性……袋熊猫……自然に……できるように……」

途切れ途切れではあるが、何を言っているのかある程度は理解できた。つまり、女性とタスマニアデビル族しかいない、このメンバーと同行することで、コミュニケーションを少しでも改善したいと考えているのか。

大食い団の面々は人とかけ離れているので接しやすいというのはわかるが、男性よりも女性の方が緊張しないのか。まあ、男性ハンターって敵ついでが多いから…… 門番のカリオスとゴルスなんて、気の弱い子供が夜に見たら泣くレベルだ。

ふむ、ならば俺も協力してあげないと。購入の際にはちゃんと話

しかけて、少しでも男性の声に慣れてくれればいいのだが。
とまあ彼のことはこれぐらいにして、周囲を見回してみるが何も
ないな。

壁、荒野だけ。全く同じ風景に進んでいる実感が皆無だ。あと一
か月近くこの状況が続くのか。一人ならうんざりするところだが、
癒しの大食い団とラツミス、ヒュールミがいたら苦でもなさそうだ。
昼食になると皆が俺から商品を購入して、各自が思い思いの場所
で食事をしている。と言っても三つのグループに分かれるのだが。
ラツミスとヒュールミの幼馴染二人。大食い団。そして、ミシユ
エル。

これだとミシユエルだけが仲間外れでボツちなイメージだ。ラツ
ミスとヒュールミは気さくに一緒に食べようと誘ったのだが、人見
知りの激しい彼が本心を笑顔の仮面で完全ガードして、やんわりと
断っていた。

まだ、一緒に食事をするのはハードルが高いようだ。この一か月
間で普通にご飯ぐらいは食べられるようになるといいな。

こんなイケメンがラツミスやヒュールミの傍にいるというように、
苛立ちも焦りも俺にはない。これまでの言動で危険性が無いとわか
ったのも大きい。が、何と云うか、彼の言動を見ていると応援したく
なるのだ。

「あ、明日は、もう1メートル近くで食事を取るようにしよう、う
ん」

荒野の吹きすさぶ風に乗って、こんな言葉が流されて来たら、そ
りや応援もしたくなる。

表面上は微笑みながら食事をしているように見えるが、常に相手
の視線を察知して笑みを浮かべている。

いっそのこと、自分は人と接するのが苦手ですと暴露した方が楽

だと思っただが、それができないから、偽りの仮面を被っているのだろうな。どんな家庭環境で育ったら、あのような感じになるのだろうか。

食事を終えると、またものんびりと外周に沿って進み始める。平和だねえ。油断は禁物なのは重々承知しているので、必要以上に気を抜くことは無いが、何も無いのが一番だ。

そして、本当にただ歩いただけの初日が終わろうとしている。

この階層は夜も寒くなく年中気温の変化が少ないので、大食い団の面々は満腹の腹を晒しながら、地面の上で豪快な寝息を立てている。寝顔も愛らしいな。防犯カメラで録画しておこう。

ラッミスとヒュールミは幌付きの荷台の中で眠っているらしく、微かな寝息が届いている。残りのミシユエルは俺と一緒に見張りに立ってくれているのだが、今日一日ずっと視線を気にしていた精神的疲れが出ているようで、胡坐をかいて座っているのだが、意識が飛びそうになっているのか、頭がぐんと何度も落ちかけている。

「はっ、ダメだダメだ。皆さんはハッコンが見張りしてくれるから大丈夫。だと言っていたけど。はあああ、もおおう、緊張したなあ。お二人は美人だし、大食い団の皆さんは可愛らしいし。表情引き締めるのに必死だったよ。あ、そう言えば本当に……この箱の魔道具は意思を持っているのかな」

まあ、素直に信じられないのが普通だと思うよ。二人は察しが良すぎるし、大食い団はご飯につられただけだからな。

顎に手を当てて額がくっつくぐらい近づき、俺の中を見通すようにじっと見つめられたら、照れるじゃないか。

「いらっしゃいませ」

「あ、はい。いらつしやいました。こ、今晚は」

日頃のイケメンモードより、この純朴で物怖じする状態の方が好きだな。素の彼は田舎から出てきた人見知りをする青年だと言われたら納得するぞ。

「ええと、何か買おうかな。そう言えば、あの甘くてホツとする飲み物、ほんつと美味しかった。いつもなら買い物するのにも緊張するのに、この魔道具の箱だと人の目を気にしないでいいし」

うんうん。店員相手に緊張するというのはわからなくもないからね。気軽に買えるというのも自動販売機のメリットの一つだ。

ココアを握りしめてホツと息を吐くミシユエルの横顔を、何とはなしに眺めていたのだが、こういう時は年齢よりも幼く見える。

油断している時の緩んだ表情と雰囲気は年上キラーっぽい。シヨタ好きの相手なら一発で落とせると断言できる。普通なら嫉妬の一つもするレベルの美形だが、彼を見ていると応援したくなるのは人徳なのかもしれないな。

それから一週間が過ぎ、本当に戦闘の一つもなく問題も生じず、順調に日々は過ぎて行った。ミシユエルはほんの少し距離感が縮まっっているようだ。

大食い団の愛らしさとラツミスの人懐っこさが功を奏した結果だろう。と言っても、まだまだ他人行儀で、素の状態で会話したことは一度もない。

そんなミシユエルにはかり注意がいつていたのだが、今日はラツミスの調子がどうもおかしい。

目が虚ろで足取りが重い。歩いているのが精一杯に見える。

「おいおい、どうしたんだラツミス。体調が悪いなら、ハツコンと一緒に荷台に乗りな」

「いらっしやいませ」

うんうん。急ぐ任務じゃないのだから、無理する必要はない。

荷台から身を乗り出しヒュールミが手招きしている。彼女は運動能力に問題があるので、あの場所が定位置なのだが、ラツミスは一度も荷台に乗ったことがなかった。

「んー、大丈夫だよ。元気いっぱいだよー」

手を挙げてアピールしているが大丈夫には見えないのだが。いつもの元気はつらつな笑顔に影が差しているぞ。

しかし、急にどうしたのだろう。風邪ならくしゃみや咳の一つもしそうなものだが、鼻づまりすらしていない。たまに下腹部を擦っているので腹痛なのかもしれない。うちの商品で食あたりはあり得ないよな。なら、なんだ？

「ラ、ラツミスさん、無理をはいけません。ここは体を休めた方がいいです」

「えっ、ひゃっ！」

ミシユエルがラツミスを背負おうとしたので、ダンボール自動販売機に変化しておいた。これで彼でも運べるようになり、軽い足取りで荷台まで運んでいく。

「ハツコンさんは思ったより軽いのですね」

いやいや、俺がダンボールになっているからだぞ。いつもの自動販売機だと、今頃地面に埋まっている。

ラツミスは抵抗しようとはしているのだが力が入らないようで、そのままひょいっと荷台に置かれた。強く反論する元気もないように、諦めて座り込んでいる。

「ヒュールミさん看病お願いしていいですか」

「おっさ、任せな」

何だかんだ言って面倒見のいい彼女に任せておけば安心だろう。俺を背中から取り外すと、荷台の外にそっと置いてくれた。元の自動販売機に戻って、一応スポーツドリンクを差し入れだけしておく。

取り出し口に落とすと、ミシュエルが即座に反応して「ハッコンさんからの差し入れのようです」と荷台の隅に置いてくれた。

「まったく、相変わらず限界ギリギリまで無茶しやがるな。服脱がして着替えさせるぞ」

「い、いいよ。自分ですから……」

「へ口へ口な状態で格好つけるんじゃないやねえよ。人の親切は素直に受け取るもんだぜ」

どたどたと抵抗する音が響いてくるが、聞いている限りではヒュールミが優勢に事を運んでいる。本当にかなり弱っているようだ。暫くは安静にしてもら

「おおおっ！　っ、血が出てるじゃねえかつ！　馬鹿野郎！　何で黙ってい……い……あっ！」

「あ、あ、あ、あ」

ヒュールミの驚いた声に続いて、ラツミスの「あ」だけをひたすら繰り返す声が届いてきた。

「ラツミス、この血は生理かつ！」

「もっつっ、ばかあああああ！」

大声でなんてことを口走ってんだ。ラツミスが絶望的な悲鳴を上げているじゃないか可哀想に。

ミシユエルが目を逸らし、口に手を当てて驚いているが、俺としては急に弱々しくなったことに納得がいった。

月一ぐらいでそんな日が今までにもあったな。気づいてあげられなくてゴメン。

リアルとファンタジー

「生理って何？ 食べ物？」

「何だろう、ボクも聞いたことないな」

「女が関連するみたいだが、スコ知っているか？」

「ええとね、人間とか猿系の種族女性に多いんだけど、下腹部から血が出る女性特有の症状らしいよ」

大食い団が集まって、ひそひそと小学校高学年の男子みたいな会話をしているな。

そついや、人間と一部の動物以外は生理がなく、あつたとしても軽いつて聞いたことがある。

「つたく、無茶しやがって。ラツミス、生理重い方だったろ。あーあ、下着も布も血塗れじゃねえか。こついつのは綺麗な布に換えないと病気が怖かったりするんだぞ」

「あつつ、はい……」

「別に恥じることじゃねえが、子供を産めるってのは女性の特権だ。もつと大事にしようぜ」

何をしているのかは見えないが、声だけでもヒュールミがてきぱきと処理しているのがわかる。こついつのつて男は弱いんだよな。何か力になれることは……清潔なタオルの提供と後は、あー、まあ、

あるな。

俺は機能から 手動サニタリー用自動販売機 を選び出し、フォームをチェンジさせる。

清潔さをアピールするかのような純白の体に変化し、かなりスリムにもなった。この自動販売機は手動という名の通り、電気を必要としないタイプで硬貨を入れてレバーを捻ると商品が出てくるようになってる。

この自動販売機で売られている商品はたった二つ。ナプキンとマスクだ。

女性ならデパートや駅構内や学校等のトイレで見たことがあるのではないだろうか。男性でこれを見たことがある人は少ないと思う。じゃあなんで、自分で購入したことがある物しか商品として選べないという縛りがある俺が、商品を提供できるのか……い、いや、別にやましいことは何も無い。

親戚が清掃業をしていて、学生時代に何度かバイト経験があるのだ。その際に男性トイレ女性トイレの清掃もあって初めて見る自動販売機に、中身も知らずに興味本位で購入した過去が。って、それは今どうでもいい。

「あれ、ハッコン急にどうした。細くて白くなったな。今、変化し たって事は何か意味があるってことか。硬貨入れてみるぞ」

ラツミスやヒュールミ相手だと意思の疎通が楽で本当に助かるよ。レバー捻って商品を取り出し、じっと見つめていたようだが、よくわからなかったようで首を傾げている。

「へえ、変わった物だな。この透明の袋はいらねえな。妙な肌触りの布……いや、紙か？」

考察しながら弄り直し、現状から俺が何をしたいのかを理解してくれたようで、失敗を繰り返しながらも何とか使えたようだ。

「これスゲエな、凄まじい吸水率だぞ。これならダバーッと出た日も安心だな」

新たに購入したナプキンにペットボトルの水を吸い込ませて感心している。

生理もリアルな問題だよな。ファンタジー作品で女性冒険者とかを多く見かけることがあるが、実際は陰で結構苦労していそうだな。

「血塗れのズボンと下着はハッコンに水出してもらって洗うか」

「あ、私が洗っておきますよ。姉や母の物を洗うこともありましたので」

荷台の傍に置かれた俺は、少しも嫌がることなく汚れた下着とズボンを受け取ったミシュエルを見て、感心していた。男なら少しは抵抗が有るもののだが、女系家族らしいので見慣れているようだ。そんな彼の為に新たな機能を追加した。

これは前々から取ろうと思っていたのだが コイン式全自動洗濯機 乾燥機一体型 へと変化する。これはコインランドリーに置いてある、ドラム式の洗濯機だ。

ハンターは荷物になるので予備の服を持つとしても一着ぐらいで、不衛生な格好が日常なのが気になっていたのだ。こうやって魔物討伐中や依頼中でも洗濯が出来れば喜ばれるのではないかと考えていた。

取り敢えずパカッと丸い蓋を開けて、ここに放り込んでくれアピールをする。ミシュエルは好青年でやましい気持ちは皆無だろうけど、ラツミスの下着を手洗いさせるのには抵抗があるよな。

「不思議な形に変化したけど、何かして欲しいのかな？」

「ハッコンはその中に汚れ物を入れると言っているみたいだぜ」

「いらっしやいませ」

「では、入れてしまいますよ」

今回は試運転も兼ねて無料でご奉仕だ。洗剤自動投入装置も付いているので放り込んだら、後は待つだけだ。一応、洗い方や時間設定もできるのだが、そっちの操作は全て俺がやっておこう。

ミシユエルは洗濯を見ているのが楽しいらしく、ガラスに顔を近づけてじつと中を覗き込んでいる。そんな彼を見て大食い団も好奇心が刺激された様で、全員で洗濯物がぐるぐる回っているのを見つめている。何だこの状況。

洗濯機の性能では30〜40分かかる筈なのだが素早さを上げているので、10分程度で終了した。素早さ上げて正解だったな。二時間しか変化できないので、時間の短縮が無ければ多用できない機能だ。

終了を伝える音が流れると大食い団が後ろに跳び退り「ヴアアアアアッ！」と驚いている。あの叫ぶ姿にも慣れてきた。

蓋を開けると躊躇いがちにミシユエルが手を突っ込んで、洗い立てのズボンと下着を取り出し、天に掲げた。荒野を吹き抜ける風に下着とズボンがそよいでいる。

女性のズボンと下着を握り締めるミシユエル。いくらイケメン補正があるといっても、これはフォローできないな。

「これは凄い、真っ白ですよー！」

洗濯機になつた俺の体をがしつと掴むと、身体が激しく揺さぶられている。あれ、予想以上に食いついてきているな。

「これは他にも汚れ物を洗いましょう！ 私も鎧以外全て放り込みます。皆さんも、汚れ物を出してください！」

俺が止める間もなくバツクバツクから洗濯物を取り出し、洗濯機に放り込んでいく。ヒュールミなんて荷台の中で服を脱ぎ捨て、下着一枚の格好で荷台から顔を出して洗濯機の中に洗濯物を放り投げている。

大食い団も例外ではなく、ジャケットを剥がれて靴を履いただけの姿で、呆然と立っていた。

「いいですよね、汚れが取れていく過程というものは。部屋の掃除もそうですが、衣類が綺麗になるのが一番気持ちいいと思いませんか。私の家ではメイドが滅多にさせてくれなかったので、今、凄く楽しいですよ」

ああ、だから、あんなに目を輝かせて洗濯機の中を見つめていたのか。喜んでくれたのなら何よりだ。さっきの発言でメイドが家にいるという事実が判明したのだが、彼はそれなりに身分の高い人間のようなのだな。

しかし、真面目そうなミシユエルしかいないとはいえ、若い女性が多下着姿で健康的な身体を晒しているというのは、どうなのだろうか。ラツミスも今半裸状態だよな。体調が悪くて気づいていないだけみたいだけど。

ミシユエルは荷台の中が見えない位置に陣取っているが、俺の場所からだと彼女たちの姿が良く見える。

折角だから、彼女たちの下着姿を観察してみるか。これで彼女たちのセンスがわかれば、今後の商品展開にいかせるかもしれないからな。それだけで、他に深い意味は無い。下心とかは全く無い。微塵もない。

まあ、観察と言っても現代日本とは違って下着も凝ったデザインではない。ただ、肉体労働がメインのハンターなので、ラツミスはTバックなのか。激しい動きをするなら、そっちの方がいいのかもしれない。

後は小柄な体にしては凶悪すぎる二つの大きな球体が、重力に負けて胸部で押し潰されている。いつもは革鎧で圧迫されているので、ここまで強烈な印象を与えないのだが、薄着になった時の破壊力が半端ない。仰向けだというのに、その大きさが尋常ではない事が一目でわかる。

「ラツミス、また胸デカくなってないか」

「そう……かな。よくわかんない」

ヒュールミはまじまじと、弱っているラツミスの胸を観察してから、自分の胸元に視線を移し「はっ」と疲れたように息を吐いた。

そんな彼女の胸部には黒い布が巻かれているだけで、まっ平らに近い。相変わらず肉厚で形のいいお尻をしているのだが、女性としては胸の方が気になるようだ。

個人的には大きくても小さくても問題ないのだが、男の本能としては胸の大きな女性には思わず目がいつてしまうからな。そりゃ、女性も気にするか。

この状況、男性なら興奮して喜ぶべきなのだろうが、自動販売機の俺にどうしろと。いや、今は洗濯機か。この姿で性欲を持て余しても困るから、文句を口にするのもおかしな話か。

洗濯と乾燥が終わり、洗い立ての洗濯物を着込んだ全員がほのかに香る洗剤の香りと、肌触りに満足しているようだ。

「では、今日は一日休息ということでしょうか」

「だな。まだ昼過ぎだが、たまにはいいだろう」

ラツミスの体調を気遣って今日一日は動かない事に決めたようだ。大食い団は大地に寝そべり日向ぼっこをしている。

ミシュエルは洗濯への欲望がまだ消えてないようで、荷台の幌を外して洗えないか考え込んでいる。ヒュールミは荷台で時折、眠っているラツミスの体調を窺いながら何かの本を読んでいるようだ。

「じゃあ、俺は何をしようかな。取り敢えず、洗濯機からいつもの自動販売機に戻っておこう。あつ、ミシュエルが露骨に残念そうな顔をしている。」

「そついやポイントに余裕がある今の内に、ステータスの変化が何に影響を及ぼすか試してみるのもありか。」

自動販売機のステータスには耐久力、頑丈、筋力、素早さ、器用さ、魔力がある。

耐久力と頑丈は今更検証するまでもない。素早さは、あらゆる動作の速度が上がるので、これからも上げることがありそうだ。

さて、問題は残りの筋力、器用さ、魔力なのだが、魔力はPTを消費しても上がらないようなので除外する。

となると筋力なのだが自動販売機の筋力って何だ？ 今のところパワーが必要な自動販売機の形態は存在しない。手足が生えたり自力で移動できるようになれば、必須の能力なのかもしれないが。今のところ使い道は無いと思う。

残りの器用さは……何だろうな。精密動作が可能になるって事な

のだろうか。今のところ精密動作が必要な機能が見当たらないし、これも上げる必要性を感じない。

両方10上げるには1万ポイント必要なのだが、使い道がわからない能力に費やすのは勿体ないよな。

結局、考察したのみで能力を上げることなく、一日が更けていった。

ミシユエル

「みんなごめんね、迷惑かけちゃって」

朝になると顔色がかなり良くなったラツミスが開口一番、お礼とお詫びの言葉を口にして、深々と頭を下げた。

みんなで朝ごはんの準備をしていたのだが、荷台から降りてきた軽装のラツミスに駆け寄っている。

「おっ、もう体調はいいのか。あんま無理すんなよ」

「え、ええ、無理はなさらないでください。ハツコンさんに新鮮なハエロワサエ出してもらいましたので」

ちなみにハエロワサエとはほうれん草のことだ。野菜も日本と変わらないものが多いのだが、ネーミングだけは全く違う。

ああ、それと缶詰のぶどうパンも渡しておいた。鉄分と言えばレーズンだと聞いたことがあったので。

「みんな、体調崩していたの黙っていてごめんね」

「あの血の臭いがそうだったんだね。生肉隠しているのかと思っていたよ」

ミケネが首を傾げながら言い放つと、仲間たちも同じらしく頷いている。タスマニアデビルの嗅覚が鋭いのは知っていたが、生理の臭いを嗅ぎ分けられるとは思いもしなかったな。

「ハンター稼業はただでさえ女が不利なんだ。急ぎの仕事じゃねえんだ。無茶すんなよ」

「そ、そうですよ。困った時はお互い様です」

「ありがとうございます。反省します」

あれ、まだ若干挙動不審だが、いつものイケメンモードでもないのに会話が成立しているな。コミュ障を発動させる暇もなく、慌ただしく女性の衣類を洗濯したことにより、心の垣根が少し下がったのか。

三人のやり取りを眺めながら、一つ気づいたことがある。もしかしてミシユエルのハーレムパーティーに見える状況ではないのか。美女二人と癒し系獣人。俺は自動販売機だから魔道具という立ち位置か。

自動販売機が無ければ、ファンタジーにおける理想のパーティーかもしれないな。

ラツミスが恥を晒し、それをきっかけに打ち解けてきたミシユエルは一緒に食事を取るようになり、それから一週間も過ぎるとすっかり馴染んでいた。

「しかし、ハツコンさんは、とても優秀な魔道具ですね」

「そうだよな。ご飯も飲み物も美味しいし、便利な道具いっぱい出してくれるし、結界で守ってくれるし、すっごいんだよ!」

そんなにべた褒めされると照れるな。俺に気を使っている訳じゃなくて、本音で言っているのがラツミスらしさか。

「私も色々と魔道具を目にしてきましたが、このような魔道具は初

めてですよ」

「そうだろうな。オレの知りうる限りだが、文献にもハツコンと同様の魔道具の存在は記載されてないぜ。ハツコンが喋れたら、情報を得ることもできるが……ない物ねだりをしてもら」

「それでも、意思の疎通が可能なだけでも凄いことですよ。ですよ、ハツコンさん」

「いらっしやませ」

ミシユエルにも好意的に受け入れられているようで何よりだ。ラツミス、ヒュールミとの距離が近くなったことで、色恋沙汰に発展するのではと勘ぐってしまいそうになるが、そんな気配はまるでない。片方がイケメンで二人は美女。絵にはなるのだが、お互い興味が無いようだ。どちらとも既に心に決めている相手がいるのかもしれないな。

外周の調査に出てから二週間以上が過ぎているのだが、ラツミスが体調を崩したことで以外に変わったことはなく、他の生物に出会うこともなく、そろそろ一周し終えるらしい。

迷路の外壁にはほころびも傷もなかったため、ただの安全確認で終了しそうだ。ヒュールミの計算によると、あと三日もすれば迷路階層の集落にたどり着くそうで、危険もなく無事に終えられそうだ。かなり安値で提供したのでポイントは殆ど増えていないのだが、50万もポイントは残っているのだから焦る必要はない。

三人は楽しそうに談笑をしている。漆黒の鎧を着込んでいるので、パツと見はイケメン戦士といった感じなのだが、じつと観察をするとミシュエルの腰が低いので、二人の姉に従う弟の様に見えてきた。そう言えば姉がいると口にしていたから、元々、弟気質なのだろう。

「んっ……みんな止まって！」

先行していたミケネが足を止め、牙を剥き出しにして荷猪車を停車させた。

よく見ると他の大食い団の面々も表情が引き締まり、匂いを嗅いでいるのか鼻をぴくぴくさせている。

「ペル、匂いを感じるかい」

「ええとね、少し先から人の匂いが流れてきているよ。体拭いたりもしてないのかな、かなり臭いなあ。人間の男が四、五人ぐらい。他の動物も魔物もないみたい。ショートは聞こえる？」

「ああ、何を話しているかまでは聞き取れないが、男の声っぽいな」

ペルは嗅覚が鋭く、ショートは聴覚が優れているようで、二人の意見にミケネが耳を傾け頷いている。

「ヒュールミさん。何が目的かわからないけど、この先に人間が五人程度潜んでいるみたいだよ」

「マジかミケネ。ハンターが外周にいる……ねえな。生物が存在しない荒野をうろつく理由がねえ。肯定的に捉えるなら、熊会長からの使いだが……」

「何か急用があるのかな？」

俺たちの力が急に必要になった、という展開はあるかもしれない。しかし、急ぎの用なら人間だけで来ることは無いよな。普通、荷猪車や馬がいるのかは知らないけど、そういった移動手段を利用する。それに、危険のない荒野で用件を伝えるだけなら、四、五人もいらない。胡散臭くなってきたぞ。

「あー、ちとヤバそうだな。徒歩でおまけにそんな人数で用件を伝えに来る訳がねえ。寂しがり屋か超慎重なやつでもない限りな」

ヒュールミは俺と同じ意見か。もし敵対する存在として仮定するなら、狙いは魔道具である俺。

もしくは、ラツミスやヒュールミは美人だから奴隷狙いの人身売買。そういや、大食い団の面々は希少な種族で黙っていれば愛らしいので、一部の好事家に人気があるそうだ。もちろん、非合法な意味で。

思い当たるのはそれぐらいか。人気のないこの階層では人攫いをしたところで、迷路で死んだことにすれば怪しまれない。転送陣をどうするのかという疑問はあるが、裏道があるのかもかもしれないな。

「皆さん、申し訳ありません。待ち構えている人物ですが、私の関係者の可能性が高いです」

ミシユエルが表情を曇らせ苦々しげに口にした。

まさかの、そっち関係だとは。まだ確定ではないだろうが狙われる心当たりがあるってことだよな。

「ここは私だけで向かいます。ご迷惑をおかけするわけにはいきま

「せんで」

きりつとイケメンモードになったミシユエルが、返事も待たずに歩き始めるが、その肩をラツミスが掴んだ。

「まだわからないでしょ。それに、危険なら一人で行かしたりはしないよ」

「離してください。私と共にいたら命の危険が」

その手を振りほどこうとしているようだが、鎧の肩当てをがっしりと掴んだラツミスの怪力から逃れられるわけがなく、親から逃げようとして暴れている子供のようだ。

「落ち着けて。お前さんが何故狙われているのか事情を教えてください。やる気はあるか？」

「ないです」

ヒュールミの問いに、きっぱりと否定した。その切り返しは、何か秘密があると言っているようなものだ。

複雑な家庭の事情でもあるのだろうか。ただのコミュ障なら問題はない……いや、あるけど、そこまで深刻になることもないのだが、もう一つの隠し事が大問題っぽいな。

「オレたちの身を案じてくれるのはわかるが、その心配は無用だぜ。ハツコンがいる限りはな」

「そうだね。ハツコンの傍にいたら、怪我の心配もないし」

全幅の信頼を寄せてくれている二人に掛ける言葉は決まっている。

「いらっしゃいませ」

俺の近くに来てくれるなら 結界 で絶対に守ってみせる自信はある。

そんな俺たちのやり取りに納得がいかないようでミシユエルは口を噤んだまま、半眼で俺を睨んでいる。やはり、論より証拠か。

俺を背負ってくれているラツミスごと 結界 で包む。

「この青い光は一体……」

「これはねハツコンの加護らしいよ。 結界 って言うんだって。

あらゆる攻撃を弾く、無敵の壁なんだ。階層主の攻撃だつて防いだみたいだよ」

あ、ミシユエルの眉根が寄った。胡散臭い物を見る目で、じつと見つめられているのですが。まあ、信じられないのが当たり前か。

「信用できない気持ちはわかるぜ。試しに全力で斬りかかっているぜ。お前さんの攻撃が全く通らなかつたら、オレたちも同行させてもらつてのはどうだ」

「本当ですね。防ぐことが叶わなければ、絶対に後を追わないと約束できますか」

目つきが鋭くなり、キュツと空気が引き締まったかのような雰囲気。気を彼から感じる。ミシユエルは俺たちが憎くて言っている訳じゃないのは、重々承知している。危険から遠ざける為に冷たい態度を貫いているのだろう。

「ただ、ラツミスは自動販売機を拾って運ぶ、お人好しだぞ。そんなことで折れるような女じゃない。」

「うん、いいよ。もし、その大剣が少しでも結界を貫いたら。うちらはここで一日大人しくしておく、誓うよ。」

彼の凍てつく視線に動じることなく、ラツミスは見つめ返している。

その目から強い意志を感じ取ったのだろう、ミシユエルは背中 of 巨大な鞘から、大剣を抜き放った。柄は凝った作りで竜の胴体に見える彫り込みがしているのだが、握りしめた手の先には鍔代わりの竜頭があり、その大きく開かれた胛から半透明の赤い刀身が伸びている。

まるで暗黒の竜が灼熱の炎を吐き出しているかのような、見ているだけで圧倒される迫力がある。

これは 結界 の張り甲斐がありそうだ。ラツミスの期待に応える為にも、貫かせはしない。

「遠慮なくいくぞ」

刀身を肩に担ぎ、腰を落としている。構えカッコイイな……と呑気な感想を抱いている場合じゃないか。さあ、こい、どんな一撃であろうと 結界 が防いでくれる！ 頑張れ 結界 ！ 負けるな 結界 ！ ……盛り上げてみたが、なんというか 結界 に頼り切りの自分が少し恥ずかしくなってくる。

「はあああああつ！」

鋭く吐き出された呼気、振り下ろされる赤い刃、切っ先が少しめり込む程度の軌道で刃が迫ってくる と思った時には既に刃が

結界 と激突していた。

《ポイントが500減少》

おおおっ！ 完全に弾き返したが 結界 の強度を超えた分をポイントで消費する表示が出た。階層主の八足鱈の体当たりでも100ポイント追加で消費したが、ミシユエルの攻撃は、あの体当たり半分ぐらいの威力があったことになるのか。

凄まじいな。この破壊力尋常じゃないぞ。こうなると、ラツミスが全力で殴ったらポイント消費がどうなるのか調べてみたくなるな。

「防がれた……まさかつ、この邪竜の咆哮撃がっ」

弾かれた状態のまま放心状態で悔しそうに呟くミシユエル。今の一撃はお見事だったよ。まさか階層主の半分のダメージを与えられるとは思ひもしなかった。

「ねっ、大丈夫でしょ。何があっても、こちらが傷つくことはないから」

「ってことだ」

約束は約束なので渋々ではあるが、ミシユエルが同行を許可してくれた。

完全に敵前提で話が進んでいるが、これで何もないのであれば、それに越したことは無いよな。

追手

ミシユエルを先頭に少し離れた後方から、俺を担いだラツミスも同行している。あとはミケネも一緒だ。残りの大食い団とヒュールミには荷猪車の見張りを頼んでおいた。

何が待っているのかは結局教えてもらえなかったが、表情の消えた顔を見れば、生半可な相手が待っていないことぐらい馬鹿でもわかる。

「ハツコン、いざという時はお願いね」

「いらっしやいませ」

本当はラツミスにも控えておいて欲しかったのだが、ミシユエルが俺を担いでいくわけにもいかないしな。こうなったら俺は全力で彼女を守るだけだが、一体どんな相手が待ち構えているのか。

「ラツミス。男の数は五だよ。やっぱり、ミシユエルを狙っているみたいだね」

鼻と耳をぴくぴくとさせながらミケネが断言する。距離が近づくと嗅覚のみでそこまでわかるものなのか。相手の姿は進路方向に見えてきてはいるが、人数を正確に確認するのは難しい。

「前方の三人はかなり腕が立つようです。残りの二人は魔法、もしくは四属性かその類いの加護使いかもしれない」

ミシユエルの表情と口調が男前になっている。スイッチが入りっ

ばなしのようだな。

「もしかして、ミシユエルは気配が読めるの？」

「ええ、ある程度ですが」

気配が読み取れたら便利そうだな。自動販売機である俺は一生取
得できるとは思えないけど。加護や機能に気配察知とかあったら面
白そうだが。

さて、問題はここからだ。ミケネにも 加護 の効果は伝えられ
ているから、離れることは無いと思うが、いざとなったら逃げ足の
速さで何とでもするだろう。

ただ、ミシユエルが大人しく俺に守られるとは思えない。重大な
秘密を抱えているようだが、それが今回の一件で判明するかもしれ
ないな。

確かな足取りで進む一行の前に、五人の男たちが姿を現した。

一人は頬に刃物傷があり、いかにも歴戦の戦士といった雰囲気
纏っている。あれがリーダーっぽいな。三人は鋼色の全身鎧に盾と
メイスという重装備。

残りの二人は先端に巨大な水晶のような石を取りつけている両手
杖を持ち、フードを目深に被った理想的な魔法使いといった感じだ。
前衛三人の装備が清流の湖層ではあまり見かけない格好だな。湿
気の多い階層なので金属鎧に適していないというのもあるのだが、
鈍器をメイン武器にするハンターは少なくないが、前衛三人全員が
メイスというのは珍しい。

「ミシユエル様ですな。お命頂きに参りました」

「やはり、そうか。誰の手の者だ」

「それは言わずとも」承知では」

「違うない」

不謹慎だとはわかってはいるが、雰囲気のあるやり取りだな。時代劇でこういうの見たことあるぞ。でも、自己完結せずに詳しく説明して欲しいというのが本音だが。

「ところで、その獣人と……少女はお仲間ですか」

刃物傷がある戦士の視線が一瞬だが俺を見て停止していた。理解できないと即座に判断して、思考を止めたようだ。

「仲間ではない。共に依頼を受けたただけだ。私を狙うのは構わないが、二人と一台に手を出すことは許さないぞ」

勘定に入れてくれるのか。ミシユエルの発言にラツミスの頬が緩む。俺も含めてくれたことが嬉しいのだろうか。

「そうですね。その首を大人しく差し出して頂けるなら、手を出さないと誓いましょう」

心底、胡散臭い発言だ。手を出さないと行って、手を出さなかった前例を見たことが無い。ミシユエルを手にかけたら、その情報が漏れるのを嫌って目撃者も殺すというのが定番中の定番だろう。

「それを信じると？」

「どう判断するかは」自由に。さて、ミシユエル様はどうなさいます

すか」

「答えは決まっている。貴様らを倒し、彼女たちも傷つけさせない！」

理想的な英雄像だな。見た目が良いから様になっている。これが自動販売機の発言だったら鼻で笑われて終わりだぞ。

とまあ、傍観者として楽しむのはここまでにしよう。いつでも結界を発動できるように集中しておかないと。

「ご立派ですな。崇高な思いを胸に抱いたまま、荒野に散っていただきましよう」

敵側が構えに入った。ミシユエルの破壊力はこの身で受けて知っているが、攻撃力がずば抜けているからと言って、対人戦で勝てるかどうかはまた別の話だ。

ラツミスは破壊力ならケリオイル団長を圧倒できるが、手合せした時にいとも容易く完封されていた。「力に技が伴って初めて戦力となる」と、それっぽいことを団長が口にしていたしな。

彼らも厄介だが、一番の問題は後方に控えている魔法使いっぽい二人だ。戦士は魔法に弱いつてのがゲームでは常識だが、この異世界でも当てはまるのか。

どっちにしろ、このまま大人しく待つてやる義理は無い。

俺は 高圧洗浄機 にフォームチェンジをする。この姿を見て直ぐにピンときたようで、ラツミスは俺を背負ったままノズルを引き抜いて構えた。

これの扱い方は炎飛頭魔で実習済みなので問題なく操れるだろう。腰だめに構えるとレバーに指を添えている。

「ミシユエル、後ろのは任せて！」

相手の返事も待たずにラツミスが突っ込んでいく。ミケネも慌てて追従しているな。不意打ちが怖いから、予め 結界 を張っておくか。

「何だあの青いのは。お前らは先にそっちを始末しておけ」

魔法使い風が二人こちらに杖を突きつけている。今、ふと思ったのだが……魔法とかも防げるよな？ 物理攻撃だけじゃなく炎や熱も防げたから大丈夫だとは思うが。え、いけるよな！？

そんな俺の内心を考慮してくれるわけもなく、杖の先端から炎の球と石礫が横殴りの雨となり襲い掛かってきた。

俺を完全に信じ切っているラツミスは、降り注ぐ炎と石の豪雨に頭から突っ込んでいく。 結界 の半透明の壁に激突するが、その全てを弾き一発たりとも侵入を許していない。

よっし、魔法っぽいのも防げるようだな。ラツミス思う存分、暴れていいぞ。

俺という鉄の箱を背負ったまま、魔法らしきものを物ともせず突っ込んでくるラツミスに敵が怯えているぞ。腰が引けた状態で後退っている。

「放水開始！」

3メートルにも満たない距離まで詰めると、レバーを引きノズルの先端から高圧力の水が噴き出す。

「なに、水操作系の加護かつ！？」

当たつても少し痛い程度の威力しかないが、視界を遮り邪魔をするには充分だ。更に俺は水から洗車時のシャンプーモードに切り替えた。水の代わりに泡が噴き出し、相手の体を覆っていく。

「ぶはっ、な、なんだ、視界が！ 目が痛いっ！」

そりゃ洗剤が目に入ったら痛いだろう。泡塗れで暴れているが、濡れたローブが体に張りついたたださえ動き辛いところに、洗剤で体が滑り豪快に転んでいる。

「あ、何か楽しい！」

水鉄砲で一方的に相手を完封しているようにしか見えないもんな、そりゃ楽しかろう。ミケネが羨ましそうに見つめているぞ。

相手も反撃を試みているのだが 結果 が全て防ぎ、一方的な蹂躪 というか虐めじゃないかなこれ。

「何をやっているんだ貴様ら！」

怒鳴りつけているのはリーダーらしい刃物傷の男か。あつちの戦況は三対一だというのに、ミシユエルが相手の攻撃を凌いでいる。素人目でも襲撃者の動きにはキレがあり、剣捌きも巧みに見える。

それでも押し切れずに焦っているようだが、後衛が封じられていることを知り、相手の焦りが増して動きが乱れてきているな。

今度はすすぎモードで泡を洗い落としてやっているのだが、地面の砂と混ざり合い泥まみれの格好で転がっている。直接打撃を打ち込まれたわけでもないのに、息も絶え絶えだ。

そんな相手にミケネが突っ込んでいくと、手にした縄を器用に巻き付けていく。それだけではなく、口と目にも布を巻きつけている。

「見えなければ魔法も加護も思い通りの場所に発動できないからね。言葉が発動の条件になっている加護もあるから、仲間との連絡を遮るついでに」

ミケネはこういった相手への対応に慣れているようで、手際よく二人を無力化した。

「ミシユエル！ こっちは倒したよ！」

ラツミスが叫び伝えることにより相手の集中力が途切れ、あからさまに動きが鈍っている。その隙をミシユエルが見逃さずに三度大剣を振るうと、同時に膝から崩れ落ち地面に倒れ伏した。

「ありがとうございます。手を貸してもらえなければ、危なかったかもしれない。感謝しています」

深々と頭を下げるミシユエルに対し、ラツミスは「いいよーいいよー」と軽く返している。ミケネは縄を手にしたまま切り倒された三人に歩み寄り、脈や瞳孔を調べていたが首を横に振った。

殺したのか。相手が殺しに来ていたのだ、正当防衛としても当たり前の行為だ。頭では理解できているというのに、少しだけ心がざわつくのは、平和が約束された日本で生きてきた証拠のようなものだ。

「そちらの二人は無力化してくれたのですね。尋問が可能か……助かります」

その瞳には熱が感じられず、冷淡な光を宿していた。

魔物を殺したラツミスには何も感じなかったくせに、彼に対してだけ少し恐怖を覚えるなんて身勝手過ぎる。ここは異世界だ、これ

ぐらいで動揺していたら生きていけない。

清流の湖階層での暮らしが穏やかで快適過ぎたせいで、俺の認識が甘くなっていたのかもしれない。ここでもう一度、気を引き締めおくべきかもしれないな。

久しぶりの清流の湖階層で

「残してきた皆を呼んで来てもらえませんか。私はこの人たちから聞きだすべきことがあるので」

俺たちがいない内に尋問を終わらせておきたいのだろう。この場に居られると困る内容もあるようで、遠回しに立ち去れと言っている。

「わかった。じゃあ、ヒュールミたちを連れてくるね」

ラツミスは察しの良い子だからな。何も追求せずにミケネと一緒に背を向けて、その場から離れて行く。背中揺られながら遠ざかるミシュエルを眺めていたのだが、一度こちらをチラリと見た時に見えた横顔は、無表情でその顔からは何も読み取ることができなかった。

「ミシュエルにも色々あるみたいだね」

「いらっしゃいませ」

「ごうごうのって、何処まで踏み入っていいのか悩むよね」

「いらっしゃいませ」

「今回のことも余計なお世話だっただけでわかっていただけ、どうしても黙っていられなかったんだ。もう少し距離を置いた方がいいのかな」

ラツミスも色々考えているのだな。この問いにはどう答えていいのか俺にもわからない。鬱陶しいと思う人もいれば、聞いて欲しいと思う人もいるだろう。

彼は誰かを巻き込むことを恐れているようにみえた。相手を拒絶しているというよりは、被害が及ばないように気を使っているだけの気もする。

そんなことを考えている間にヒュールミたちが待つ荷猪車と合流し、特段急ぐことなくミシュエルの元へと向かった。

往復で30分程度だったのだが、戻った時にはミシュエルが一人立ち尽くしているだけで、魔法使い風の二人は何処にもいない。彼が斬り捨てた三人の男たちの死体も消え失せている。

逃がしたのかとも思ったが、注意深く地面を観察していると、薄らと焦げた跡が幾つかあった。それは 人型のようにも見える。数は五。つまり、そういうことなのだろう。

「処分は済んだみたいだな。お疲れさん」

「連れてきたよー」

ヒュールミはここで何があつたかを理解した上で、あえて気軽に声を掛けている。ラツミスも軽く手を振って深刻さを微塵も感じさせていない。

「お帰りなさい。私事に巻き込んでしまって、申し訳ありません」

「気にしない、気にしない。ハツコンだって誘拐されたり、階層割れに落ちたり、いっぱい巻き込まれているもんね」

「ちげえねえな」

「ざんねん」

その節はお世話をおかけしました。

そんな俺たちのやり取りを聞いて、ミシュエルの張り詰めていた表情がほんの少しだけ緩んだ。

「詳しい事情は明かせませんが、私はとある理由で命を狙われている身です。これ以上共に過ごすのは皆様の命に関わりますので、一足先に集落に戻り別の階層に移ることにします。今まで本当にお世話になりました」

「あ、ちよつと待つて。訳ありで実力者なら、愚者の奇行団に入つたらどうか。団長がそういった人材を探しているって言うていたよ?」

「そういや、そんなこと口走つてたな。実力があれば、素性なんてどうでもいい。むしろ、厄介事の一つも抱えてない奴は、うちの団には一人もいねえ。って自慢していたぜ」

まさかの勧誘だと。そういや、ケリオイル団長は、そんなこと確かに言っていた。追手なんぞ返り討ちにするだけだ、いい不意打ちの訓練になる。とか平然と言いそう。肝っ玉大きいからなケリオイル団長。

「愚者の奇行団とは、あの有名なハンターグループですか」

「そうそう。みんな面白い人たちだよ。うちらも、たまに協力する約束しているんだ」

「まあ、難しいこと考えずに一度話を聞いてみたらどうだ。力を手に入れるには、いいところだと思っぞ」

「そう、ですな。一度、接触を図ってみます。では、またご縁がありましたら」

深々と頭を下げていたのだが、すつと背筋を伸ばして去っていく。去り際も様になっていたのだが、風に乗って運ばれてきた彼の呟きを俺は聞き逃さなかった。

「愚者の奇行団って……知らない人がいっぱいいるところなんて……無理だよお」

あー、やっぱり彼にはハードルが高すぎたか。イケメンモードの時は頼りがいのある男のだが、このギャップも彼の魅力だと思っておこう。

誰も止めることもなく、その背が見えなくなると俺たちも進行を再開した。速度を上げてミシュエルに追いついたら気まずいので、出来るだけ速度を落として、のんびりまったり揺られていく。

通常の倍以上の時間を掛けて集落にたどり着くと、空が夕闇に染まり始めていたので、慌てる必要はないと迷路階層唯一の宿屋で一晩を明かした。

「色々あったけど、ようやく清流の湖階層に戻れるね！」

翌日。転送陣の上に立つラツミスだけがハイテンションだ。ヒュールミは眠たそうに欠伸を噛み殺し、大食い団も眠たそうに目元を擦っている。

それもその筈。まだ朝日が昇り始めた早朝で、夜型と夜行性には

きつい時間帯だ。

昨日は、ハンター協会に異常なしと報告を終え、軽く説明するだけであっさりと任務は終了した。その後、俺から商品を大量に購入して、夜遅くまで騒ぎ今に至る。

「暫くは、のんびり研究したいところだぜ」

「清流の階層って今、仕事一杯あるらしいから、食うのに困らないぐらいは稼げるらしいよ」

「お腹いっぱい食べられるといいなあ」

「水浴びしたいわ」

「熊会長が支配している場所だからな、悪いことにはならないだろう」

ヒュールミは当然なのだが、大食い団も清流の湖階層に住むらしく、これからも常連として期待できそうだ。

迷路階層を去ることになる訳だが、もう二度とここに来ることは無いだろう。大体、階層割れに巻き込まれていなければ、空から降ってくることもなかったわけだし。

新たな出会いもあったが、落ち着く場所はやっぱり清流の湖だな。一ヶ月近く離れていたただけだというのに、かなり懐かしい気がする。ハンター協会前のいつもの定位置で常連相手に早く商売がしたい。みんなもきつと待ち望んでいることだろう。購入した際のあの嬉しそうな顔を見るのが、自動販売機としての楽しみだからな。

「じゃあ、帰るよー！」

ラツミスの声を合図に転送陣が職員の手により起動され、足元から溢れ出した光りに包まれた俺たちは、体が軽くなり浮遊感が生じた。

そして、一瞬だけふっと意識が途切れたかと思うと足元の光が消え、周囲の光景がガラツと変わっている。

さつきまでは6畳程度の木造の部屋だったが、100㎡以上はある巨大な石造りの部屋にいる。壁には魔道具らしき灯りが四隅に備え付けられ、窓が無いというのに魔法の光で視界は十二分に確保されている。

「清流の湖階層に着いたみたいだね」

清流の湖の転送陣はこんな場所に設置されているのか。人も多し、物資の運搬もあるので部屋を大きくしていないと、色々困るのかもかもしれない。

俺でも余裕を持って潜れる大きさの扉をラツミスが開け放ち、通路に出る。右側には扉が規則正しく並び、左側は大きな窓が取りつけられている。

通路は大人が四、五人横並びになっても問題が無いぐらい幅もあり、高さも3メートル以上は確保されている。窓から射し込む光からして清流の湖階層の空は晴天のようだ。

長い通路の先にはまたも両開きの大きな扉があり、押し開くとそこはハンター協会の一階ホールに繋がっていた。

ホールにはハンターの姿がなく、ハンター協会の職員が居るだけだった。

カウンターの向こうには職員のお姉さんがいつも通り並んで座っていて、俺たちの姿を見ると……何で口に手を当てて驚いているんだ。

「あれっ、何でハツコンさんがそこから？」

えっ、ああ、そうか。俺は階層割れから下に落ちたから、転送陣から戻って来たら変に思われるよな。驚いている理由はそれか。

「ハツコンは階層割れに巻き込まれて、迷路階層に落ちちまっただせオレたちで回収して戻ってきたんだぜ」

ヒュールミが即座に説明してくれた。これで、職員さんの疑問も氷解しただろう。

「あ、それは会長から聞いていますので、存じておりますが……」

あれ？　じゃあ、何で驚いているんだ。知っているなら何も問題ないじゃないか。

「ハツコンさん、今朝といいですか、一週間以上前から集落内で商売していますよね？」

「えっ」

えっ。ラツミスとヒュールミの漏らした声と心の声が被さった。ど、どういうことだ。俺は今、帰ってきたばかりで、下の階層に落ちたのは一ヶ月ぐらい前だぞ。どう考えても計算が合わない。

「ちょ、ちょっと待って。ハツコンはずっと迷路階層にいたよ？　一度もここには戻ってきてないよ」

カウンターに詰め寄り両手をついて顔を寄せるラツミスを、女性職員は手で制しながら営業スマイルを何とか維持している。

「と、申されましても、実際集落内でハツコンさんの姿をお見かけしましたし。ねえ」

「う、うん。私も昨日利用させてもらいました」

隣に座っていた職員もこくこくと頷いている。二人が嘘を言っているという訳ではなさそうだ。だが、しかし、そうなる俺の偽物というか類似品がいるということなのか。

「つまり、ハツコンの偽物が存在するって事だよな……これは由々しき事態だぜ」

「偽物……文句言わないと！」

憤るラツミスが今にも飛び出しそうだったので「ざんねん」と発言しておく。

「ハツコン、何で止めるの。偽物だよ。ハツコンの振りをして商売しているなんて許せない。ちゃんと苦情を伝えて辞めさせないと」

その通りなのだが、相手が何を考えてそれを行っているのかが非常に気になる。俺がいなくなり、成り替わろうとしているのか。それとも、たんに真似をして儲けようと考えているだけなのか。

後者であるなら咎めるのはお門違いだろう。商売を真似るなんて金儲けの基本だ。それに、どうやって自動販売機の機能を成立させているのか純粹に興味があったりする。

「落ち着けラツミス。相手の意図がわからない内は、迂闊な真似をしない方がよいぜ。熊会長に報告したら、一緒に偵察に行かねえか」

ヒュールミは俺と同意見か。彼女の場合は単純に学術的興味で提案しているようだ。

ラツミスは怒りがおさまらない感じではあったが、渋々ながら了承してくれたようで、取りあえずは全員で熊会長の部屋に向かうことになった。

熊会長は俺の探索で何日も仕事をさぼっていたツケが回ってきたらしく、こっちに戻ってきてからはずっと書類と格闘しているそうだ。

「会長ー入っいいい？」

「ラツミスか。戻ってきたのだな。入ってかまわんよ」

扉の向こうから熊会長の覇気のない消耗しきった声が届いた。

開いた扉の先には机に山積みになされている書類を見つめ、うんざりした表情の熊会長がいた。あの熊の手で器用にペンを握んでいるが、ちゃんと文字が書けるのだろうかとかと余計な心配をしてしまう。

「丁度、休憩しようかと思っいてな。ハツコン、冷たい飲み物を購入させてもらおう」

「いらっしゃいませ」

レモンティーを買つと、ソファーに深々と腰を下ろして中身を一気に飲み干した。疲労が溜まっているのが目に見えてわかるな。

「皆も座ってくれ。依頼の結果を伝えてもらえるか」

ヒュールミが代表して迷路周辺の状況を伝える。そして、少し迷っていたようだ、ミシユエルの事も隠すことなく口にした。

「ミシユエルか。優秀なハンターだとは聞いているが、誰とも組むことがないのは何かしらの深い事情があるようだな。心に留めておくでしょう」

まあ、コミュ障も原因なんだけどね。

「でだ、会長。最近、集落にハツコンの偽物が現れているのは知っているか？」

「偽物だと。すまん、ずっとこの部屋に籠っていてな。世事には疎いのだよ」

「ハツコンに似せた存在がいるらしくてな、それを皆がハツコンだと思いこんでいる。ちょっと調べようと思うが、ハンター協会の許可は必要か」

「いや、好きにやってくれていい。他者……この場合は表現が難しいが、ハツコンは清流の湖階層の住人だ。住人の名を謀り、利益を得る輩がいるのであれば、それなりに制裁を加えなければならぬだろう。ハンター協会からの依頼として、その者の正体を見破って欲しい。ただし、暴力に訴えるのは無しで頼む。充分な証拠を掴んでからであれば、問題は無いが」

「うん、わかった。ちゃんと正体暴いて見せるよ!!」

ラツミスが拳を握り締めている。会長が釘を刺してくれたので暴走はしないと思うが、まだ少し心配だ。

しかし、俺の偽物か……どんな相手なのだろう。ちょっと、どこるか、かなり興味が湧いてきた。何が現れるのか、期待させてもら

偽物

大食い団は熊会長の元に残し、ラツミスとヒュールミが敵情視察に向かうことになったのだが、俺だつて付いていきたい。

偽物に興味津々だからな。話だけではなく直接見たい。とはいえ、いつもの自動販売機状態で担がれては直ぐにバレてしまう。素性を隠したまま見に行くのが一番だろう。

ということで、ダンボール自動販売機 になって大きめの鞆に入れられた状態で、ヒュールミが運ぶことになった。俺なりの変装なのだが実は二人も変装済みだ。

ラツミスはサイドポニーではなく髪を下ろし、つばの広く柔らかい材質の帽子を被っている。服装もカーディガンにロングスカートで日頃の活発な雰囲気は鳴りを潜め、まるで深窓の令嬢のようだ。

「へ、変じゃないかなハツコン。似合ってる？」

「いらつしゃいませ」

いつものイメージと正反対の格好だが、照れている仕草と相まって、とてつもなく可愛らしいぞ。防犯カメラで録画しておこう。

「化けたなラツミス」

そう言つてまじまじと見つめているヒュールミも見違えるようだ。適当に縛っているだけの髪を三つ編みにして背中に垂らし、頭部が膨らんで見える前庇のついた帽子を被っている。

袖のない服を着ているのだが首はタートルネックになっていて、体のラインがわかるのだが……胸詰め物しているな。いつもより立

派だ。下は太股剥き出しのローライズの短パンからは、細く白い足がすらりと伸びている。

いつもの不健康で薄汚れた格好ではなく、活動的に見える格好だ。

「ビュールミの服はカッコイイね。ねえ、ハツコン」

「いらっしやませ」

「こつこつなのは、苦手なんだがな」

頭をぼりぼりと掻き、珍しく照れているようだ。いつも黒衣で肌の露出を控えているので、新鮮で魅力的に見える。元が良いのだから、身だしなみにもう少し気を遣えばモテるだろうに。

「じゃあ、偵察に行こう！」

「ああ、ちと恥ずかしいが行くか」

「いらっしやませ」

三人で集落内を歩いているのだが、さっきから男女問わず視線を感じる。

男はイイ女を相手にした時の欲情丸出しの視線なのだが、女性は見惚れているようで感嘆のため息も時折届いてくる。両方レベルが高いので人の視線を集めるのは理解できるのだが、偵察としては間違った変装だよな。

「ねえ、偽ハツコンのいる場所ってこつちで間違いないよね」

「ああ。場所は……ほら、前に鎖食堂があった場所の近くらしいぜ」

それを聞いた途端、嫌な予感がした。いや、予感と言うよりは確信に近い。というか、この話のオチが見えた気がする。

鎖食堂がこの一件に絡んでいるとしたら……決めつけは良くないな。まずは現場で情報を集めてから判断するべきだ。

大通りを進んでいくと、徐々に人が増えて行く。現在は昼前で、いつもはハンター協会前の露店に人が集まっているのだが、今日はあまり人がいなかった。こっちに流れてきているということなのだろうか。

元鎖食堂のあった場所を目視できる場所に抜け出ると、人が一列となつて並んでいる姿が飛び込んできた。最前列に見えるのは、巨大な白い箱だった。どうやら、あれが俺の偽物らしい。この距離では詳しい形状もわからないな。

商品を求めて並んでいる人数は十人ぐらいだろうか。他にも二十名近くが、屋外に設置されているイスとテーブルで食事をしている。

「後ろに並ぶぞ」

「うん、わかった」

最後尾に着き順番が回ってくるまで辺りを観察することにした。

偽物は元鎖食堂の壁に背を預ける形で立っている。鎖食堂は経営を再開しているわけでもなく、店は閉まつたままだ。

徐々に近づいてきてわかったことなのだが、あの偽物は俺より二回り以上デカイ。高さは2メートルをゆうに越え熊会長に並ぶぐらいか。幅や奥行きも俺の二倍ぐらいあるぞ。

色合いやデザインは俺に近づけているようだが、何処かチープな感じがする。手作りで頑張っている感じは伝わってくるが、誰かが俺を真似て作ったのは間違いなさそうだ。

「っと、ようやくオレたちの順番か」

鞆の上部から少し顔を出しているので良く見えるな。やっぱり、俺のデザインに酷似している。だが、並んでいる商品が全く違う。

陳列されてるのは二段で一番上は飲料がずらりと並んでいる。まず、容器が全く違う。全てガラスで蓋はコルクで栓されている。スイッチの上はこの世界の文字で商品名が書かれているようで、そこは俺よりも親切設計のようだ。

「甘いお茶と水、それに果汁を絞った物のようだぜ。値段は1銀貨
つてところだ」

ヒュールミが小声で俺に情報を伝えてくれている。値段設定も序盤の俺と合わせているのか。飲料はこの世界で用意できる物で揃えているのだな。

「下は食べ物なんだね。肉の揚げたものと、パスタと、具材をパンで挟んだのもあるよ」

二段目は食べ物で揃えていて、から揚げ、ラーメンもどき、サンドイッチ、あとはおでんっぽいものもあるな。凄く頑張っているようだが、これ本当に購入できて温かい状態で提供できるのか？

「んじゃ、飲料と食い物一個ずつ買ってみるか」

ヒュールミが銀貨を投入口に押し込む。あの形も俺とほぼ同じだな。銀貨が入ったがスイッチが点灯することもなく、これって購入できるかどうかわかりにくいよな。

「銀貨が一枚入りました」

うおおっ！ 自動販売機から声が聞こえた。え、この世界の技術で音声再生が可能なのか。ヒュールミが研究中で実用化はまだ難しいって言っていたのだが。

「音声機能が……にしては」

二枚目の銀貨を投入すると、

「銀貨が二枚入りました」

再び声がする。今度は落ち着いて耳を澄ませていたからわかったのだが、若い男性の声で録音されたものとは思えない生々しさがある。

首を傾げながらヒュールミが更に三枚目を入れた。

「銀貨が三枚入りまっ……ごほんっ、した」

咳き込んだ！ え、もしかしてこの自動販売機中身が人なんじゃ。ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべたヒュールミが、お茶とから揚げっぽいのを同時に押す。

「えっ……」

今、確かに戸惑う男の声が出た。中に誰がいるとなると、納得はいく。異世界の技術ではまだまだ難しい自動販売機の性能。だが、中に人間がいて対応しているとなれば、金銭のやり取りや商品の提供は可能だ。

取り出し口に飲料が置かれるが、から揚げはまだ出てきていない。

「しばらくお待ちください」

自動販売機の中の人がそう言うてきたのだが、作り置きの中から揚げを出すなら、直ぐに出せると思うのだが。

それから五分以上してから取り出し口に、商品が置かれた。

取り出されたそれは陶器の皿に入っていて、置かれているから揚げからは湯気が立ち昇っている。温め直したというより揚げたての様には見えないぞ。

まさか、あの自動販売機の中で調理をしているのか。いや、あり得ない。俺よりは大きいとはいえ、大人が入って調理をするには無理があるスペースだ。

「じゃあ、うちは水と汁のパスタにしようかな」

水は直ぐに出てきたが、やはりラーメンもどきは時間がかかるよ
うで、から揚げよりは早かったが、それでも三分は経っている。

商品は同様に出来たてのようだ。から揚げとラーメンを作れる設備をあの中に置くのは不可能だよな。どういうからくりなのだろうか。

二人は近くの机に商品を並べ、食事を始める。

「おー、美味しいな。作り置きじゃねえなこれ」

「うん、そうだね。普通に美味しいけど、あれ、この味……鎖食堂で食べたのと似ているような」

ラッミスの感想を聞いてピンと来た。あの自動販売機の場所が全ての答えだったのだ。偽物は鎖食堂の関係者で間違いないだろう。

おそらくだが、自動販売機の裏側が開いていて、元鎖食堂の建物

と繋がっている。壁に穴を開けて自動販売機と繋げ、商品を購入したら鎖食堂の内部で作っている。そう考えたら辻褃が合わないか。となると、何故相手がこんな面倒なことをしたのかということだが、顧客を奪うのが最大の目的だろうが、俺に対する嫌がらせも含まれているのかもしれないな。

大手チェーン店が一台の魔道具に面子を潰されたのだ、あの引き際の良さは、この作戦を実行する準備期間を得る為だったのかもかもしれない。

「んじゃ、帰るか。詳しい相談はテントでしようぜ」

「うん、そうだね」

偽自動販売機の仕組みと裏で糸を引いている相手もわかったことだし、後は対策を考えるのみか。真似されたことは良い気がしないが、正直なところ、相手の間違った企業努力に感心している。

これで俺が迷路階層で壊れていたら乗っ取りは成功していたのだろうか。良く似せているとは思うが、常連の人たちが騙されるクオリティーではないよな。

実際、さっきも商品を購入していた人たちの中に常連はいなかった。味は悪くないのだろうけど、それなら別に他の店でも飲み食いできるというのが正直な感想なのだと思う。

露店や他の店も前回手伝った際に、味も品質も上がっているの、味勝負を仕掛けたところで鎖食堂が有利だとは言えない状況になっている。

これって別に放置していても、自滅しそうな気がするな。注文してから、手際よく料理を作らないといけないし、自動販売機は一個しかないから回転率も悪い。

黒字かどうかも怪しいよな。これって商売として成立していない

ような。

あれから二人の住むテントに戻り、話し合いが始まったのだが結局、普通に自動販売機として商売を始めたら、それでいいんじゃないかという結論に達した。

それで、翌日からハンター協会前の定位置で商売を再開すると、あつという間に情報が広まり、常連たちが一齐に群がり、商品が飛ぶように売れていく。

露店の料理人たちも、食材の補充で大量購入をしていき、朝から晩まで人の波が途切れることが無い。一週間が過ぎ、ようやく落ち着いてきた頃には、偽物自動販売機は撤退した後で、設置されていた場所の壁には板が打ち付けられていた。

これで、鎖食堂が諦めてくれたらいいのだが、またちよっかい出してきそうな気がしてならない。今回の一件で完全に目を付けられたらどうな。

こういうのって面子の問題だから、大手企業なら本気で潰しにきかねない。まあ、俺や仲間に出すのなら返り討ちにするだけだが。

大会

偽物事件から数日が過ぎ、いつもの日常に戻りつつある清流の湖階層の集落で、客を取り戻した飲食店の店主たちの会合に、また強制参加させられていた。

「土魔法が扱えるハンターを大量に雇い入れたおかげで、集落の壁は九割がた修復が終わりました」

「おー、ハンター協会も頑張ったな」

「壁さえ出来上がりや、守りは万全だ」

いつもの司会進行役であるムナミが拍手をすると、店主たちも手を打ち鳴らし喝采している。

思ったよりも防壁の修復が早まったのは、ムナミの説明にもあった通り、ハンター協会が大量に雇った、土魔法を操れる人員を確保したことが大きかった。

以前は木の杭だけで防壁と呼ぶのも恥ずかしい出来の壁が、半分以上を占めていたのだが、今は高く分厚い土壁が集落を囲っている。

「皆さん静粛に。あと二週間もすれば防壁は完成するようです。安全が確保されれば、ますます集落は発展し、人が流入してくることでしょう。そこで、防壁完成記念と称し、飲食店共同で催しを開こうかと思っています」

鎖食堂の一件がきっかけとなって、この階層の飲食店が結束したおかげだな。全員が敵対するわけじゃなく手を取りあう関係ってい

いよな。

「内容は大食い大会を実施しようと思っています」

「ああ、ハンターはめっちゃ食うからな。盛り上がるんじゃないか」

「おう、優勝者に賞品を出せば、参加者も期待できそうだな」

「入場料もある程度取れば、こっちが赤字になることもねえだろう」

大食い大会か。シンプルでルールもわかり易いし、盛り上がりそうだな。

「あれだな、出来るだけ腹の膨れやすい食べ物が良いか」

「女性部門は別にして甘味でいくというのはどうでしょうか」

「逆に食べやすい物にしたら、大食い感が出て観客が喜ぶのでは」

様々な意見が飛び交い、活気ある討論が繰り広げられている。前は俺に頼りきりだったが、こんな風に自主的に盛り上がるのを眺めていると、ほっとするな。

って、上から目線で語るのも失礼な話か。俺なんて自動販売機に置かれている商品の力を借りているだけだというのに。

「では、二週間後の開催を目指して、雑貨屋の店主にチラシや張り紙も制作してもらいましょう。皆さん盛り上げていきましょう！」

「おーーーーっ！」

拳を突き上げる店主たちを眺めながら、自分がここにいる必要ないよな……と思っていた。一度たりとも意見を求められてないのが少しだけ寂しい。

盛り上がる店主たちを眺めていると 本当は何故連れてきた。

あれから数日が過ぎたのだが、集落内はお祭りの準備でてんやわんやとなっている。

会場はハンター協会前の広場で決定し、会場の設置作業も進んでいる。復興作業中なので大工は有り余っているらしく、その日限りの会場だというのにやけに立派な舞台が出来上がっていく。

大会開催を知らせる張り紙が至る所に貼られ、チラシも配られている。当日に向けて盛り上がりは最高潮へと近づいているようだ。

参加者に対する賞品も各店舗が提供してくれるそうで、五位以内に滑り込むと結構な賞品が与えられるらしい。ざっと耳にした程度だが、武器屋からは武器と道具屋からはハンター道具一式等、他にもハンターなら誰もが欲しがるような賞品が揃っている。

そのおかげで大食い大会に参加希望者が日に日に増えていき、主催者たちは嬉しい悲鳴を上げているようで、なによりだ。

「ハツコンさん、お力をお貸しいただきたい！」

またも、臨時会合に招かれたのだが、嬉しい悲鳴が本物の悲鳴となった店主たちが一斉に泣きついてきた。

誰もかれもが悲壮な表情で、まるでゾンビの群れのように俺に擦り寄ってくる。

「ちょ、ちょっとハツコンが怖がっているでしょー！」

「オッサンら、ちょっと落ち着けて」

一緒に付いてきたラツミスとヒュールミになだめられ、店主たちは何とか落ち着きを取り戻してくれた。

「でだ、ハツコンに何を頼みてえんだ。大食い大会は順調に準備ができていって聞いたぞ」

「うんうん。うちも参加する予定だよ」

「それがね、ラツミス。確かに参加者も増えて順調だったの。そう、順調……だったの。奴らの参戦を知るまでは」

そこで言葉を区切りムナミは深刻な表情でじっとラツミスを見つめている。

奴らときたか。その不穏な言葉から連想されるのは、何者かが嫌がらせ目的で刺客を紛れ込ませたと云ったところか。思い当たるのは鎖食堂なのだが。

「大食い大会に、大会荒らしの吸引娘シュイと大食い団が参加するのよ」

再び口を開いたムナミの発言を聞いて、追い詰められている現状を一発で理解した。

患者の奇行団一の大食い娘シュイの食欲は、俺に注がれた硬貨の数が証明してくれている。常日頃から人の三倍以上を軽く平らげ、

「腹五分目ぐらいが動きやすいつすよね」

と、平気な顔でうそぶく彼女が参戦となると、店主たちが動揺するのも無理はない。

更に彼女に加え大食い団四人も参加するのか、彼らの胃袋も尋常ではないからな。この五人が以前、本気で飲み食いしたときは商品を三度も補充させられた。

タスマニアデビルって、自分の体重の半分ぐらいの量を食べることが可能らしいからな。彼らが小柄だとはいえ50キロぐらいは体重があるだろう。だとしたら、本気を出せば20キロ以上は軽くいけるということだ。そんなのが四体も参加となると、そりゃ絶望を覚えても仕方ない。

参加費は徴収するらしいが、それじゃ全然足りないよな、あの五人が絡んでくると。

「これじゃ、赤字どころか大赤字だ！ 料理がいくらあっても足りねえ！」

「大食い団が参加した大会は食材どころかゴミ一つ残らないらしいぞ……」

「折角、みんなで団結して頑張ってきたのに、これで何もかもおしまいだっ」

悲観にくれ、拳を床に叩きつける店主たちが、ちらちらと俺へ媚びるような視線を向ける。以前、全く同じ経験をした記憶があるぞ。取り敢えず、その小芝居をやめい。

「つまり、あれか。ハッコンにその五人の大食いをどうにかする策や商品を求めているってわけだよな」

店主たちが以前から練習していたかのように、タイミングを合わ

せて頭を上下に振っている。

あの大食いたちを満足させるとなると大量に物を食べさせる、もしくは、何かしら腹が膨らむような物を事前に、もしくは一緒に摂取させるぐらいか。

あれだな、飲み物は炭酸飲料にするというのはどうだろう。大食いの品も味を濃い目にするか辛くすれば、喉も乾きやすくなるから炭酸飲料の摂取も増えるだろう。

そう思い2リットルのコーラを取り出し口に落とした。ラッミスがコーラを手に取り机の上に置くと、店主たちが集まってきたのだが、それが何かわからず首を傾げている。

「ええとね、これは、面白い喉越しをしている、しゅわしゅわってなる飲み物だよ」

「オレは好きで飲んでいるが、こいつは甘くて結構腹が膨れるんだ。ハッコンはこれを料理と一緒に提供すれば、食べる量が減るんじゃないかって言いたいんじゃないか。なあ、ハッコン」

「いらっしやませ」

二人の説明を聞いてもピンときていないようなので、ラッミスがコップに注いで全員に提供する。受け取ってもコップを見つめたまま、誰も口を付けようとしない。

泡が弾ける度にびくりと肩を揺らしている。そんな店主たちを見かねてヒュールミが一気に飲み干す。

「くはああ、このピリピリくる喉の刺激が病み付きになるぜ」

美味しそうに飲み、口を拭う姿を見て彼らの好奇心が刺激された様で、全員が一口だが口に含んだ。

「ふう、何だ初めての感覚だな」

「口の中で何かが弾けるような。味は甘すぎる気もするが、このしゅわしゅわのおかげであっさりと飲めるぞ」

「私、これ好きかも」

おおむね好評のようだ。ただ、苦手な人もいるかもしれないので、そこが問題になってくるだろう。

「水の代わりにこれを出して、参加者から文句が出ないかな」

「あー、確かに。俺はちょっとこれは無理だ」

「となると、水とこれのどちらを選んでもいいようにするか」

「いやいや、そうになると水を飲む方が断然有利になってしまう」

ここからは店主たちに任せるしかない。さっきまでとは打って変わって、多くの意見や提案が次々と上がっているので、もう大丈夫だと思いたい。

その場で暫く傍観者に徹し、ラツミスとヒュールミも口を挟まずにミルクティーを啜っていると、対応策が決定した。

大食い大会では参加者に水とコーラが提供されて、どっちを選んでもいいことにするそうだ。そうすると、水を飲む方が断然有利になる訳だが、そこは面白い手を打ってきた。

大会当日まで各店舗でコーラを置いて、少しの量をかなりの高価で売ることにする。そうすることにより、大会当日に無料でコーラ

が飲めると知った参加者の多くが、水よりもコーラを選ぶのではないかと考えた。

これって妙手じゃないか。本気で優勝を狙うなら水を選ぶべきだが、彼らは大食いを仕事でやっている訳じゃない。目先の誘惑に負けても仕方がないよな。

「そういうことで、ハツコンさん。お手頃な価格で提供していただけると、ありがたいのですが」

揉み手をしながら懇願してくる店主たちに、思わず苦笑しそうになったが、初めから赤字にならない程度の金額で売るつもりだったので「いらっしやいませ」と了承しておいた。

これで事前の準備は整った。あとは大会当日を楽しみに待つことにしよう。

大食い大会当日（前書き）

シュイの口調を変更しました

大食い大会当日

大盛況だな。晴天の空の下、多くの人が列をなして大食い大会の参加証を受け取る為に並んでいる。参加者は老若男女、種族もバラバラでこれまでの宣伝効果の成果が見て取れた。

結局、大会品目は、から揚げで決まったのだが予想を軽く超える参加者の数に、ハンター総動員で食材の確保に当たったらしい。

会場裏に設置された調理場では、集落周辺に生息している動物の殆どが狩り尽くされたのではないかと、心配になるぐらい山積みになされた肉を次々と揚げている。

そっぴゃ、前に調理担当の人が変なことを呟いていたな。何だったか確か……。

「あー、肉たんねえぞ。どうするか、ここの辺の動物は殆ど狩りつちまったらしいしな。肉、肉、に……おっ、あれがあったな。確か前回、討伐にいった時に持って帰ってきた」

それって、もしかして蛙人魔とか鱈人魔の肉じゃ……あ、いや、この世界では魔物の肉食べるのは常識らしいからな。日本人の倫理観を押し付けたらダメだな、うんうん。

何だかんだあって肉は十二分に確保できたらしいし、事前にコーラと水のどっちがいいかを聞いているようだが、思惑通りコーラを望む人が多いそうだ。

問題児である吸引娘シユイと大食い団の面々もコーラを気に入っているそうなので、第一段階クリアーと言ったところか。

「ハッコンは今日、ずっと大食い大会の飲み物提供する係なんだよね？」

「いらっしゃいませ」

そう、今日は舞台の隅で少なくなったコーラを補充する仕事がある。参加人数が五十人を超えたので、から揚げもそうだがコーラの消費もかなりのものになるだろう。

から揚げの味付けもラツミスの提案により濃くすることになったので、喉の渇きが増幅すること間違いなしだ。

「じゃあ、うちも手続きがあるから先に舞台に設置しておくね」

「いらっしゃいませ」

舞台の端ではあるが、結構目立つ位置に俺は置かれることになった。

この集落では自動販売機である俺の存在に興味はあるが、怖くて手が出せないという人も少なくないので、今回のイベントで俺は便利で安全だというアピールをする目的もある。と、熊会長が語っていた。

舞台は一段上がっているので観客席や周囲の状況が見渡せるのだが、未だに参加証を渡す係員の前には長蛇の列がある。

最後尾付近にはラツミスがいて、その前には大食い団が揃っているな。愚者の奇行団からはシュイだけじゃなく、紅白双子も参加するようだ。

参加者の中に知り合いは他にもいるかな。門番二人も出るみたいだな。後は両替商のゴツガイさんも出るのか。逆三角形の筋肉質で如何にも大食いに見える。優勝候補者の一人に名を連ねそうだ。

早朝常連四人衆は観客席に陣取っている。ざっと見回すと自動販売機を頻繁にご利用いただいている客がちらほらと見受けられる。

何故かみんなの視線が俺に集中しているのだが、物珍しそうに見つめる視線と何でここに俺がいるのか訝しく思っただけ眺めている人の二択のようだ。

そんな居たたまれない状況のまま会場の設備が整っていき、椅子や机の設置も終了したようだ。広大な舞台の上に長机が繋げて並べられ、椅子が二十以上置かれている。

準備が終わり舞台の上に進み出てきたのは、司会進行役である宿屋の看板娘ことムナミ。格好はいつものメイド服風のエプロンスカートなのか。むしろ、私服姿を見た記憶が無いな。

「皆様、お待たせしました。これより第一回、清流の湖階層大食い大会を開催します！」

観客席から拍手と歓声が上がっている。観客席もほぼ満席だな。会場周辺に設置された屋台から購入した品を持って見物する人が大半か。

空腹状態で大食い勝負を見るのは拷問のような物だからな。露店の売り上げも期待できそうだ。

「参加者が予想を超えましたので、第一ブロック、第二ブロックに分けさせていただきまして、各ブロックの上位五名が決勝戦に進出となり、最終決戦を行います。豪華優勝景品も用意しておりますので、参加者の皆様頑張ってください」

「うおおおおっ！」

会場の裾から野太い声が響いてきた。参加者のテンションも最高潮に近づいている。

「では、第一ブロックの出場者の皆様、ご入場ください！」

ぞろぞろと大男たちが流れ込んでくる中、大食い団の四人も現れた。シューイヤラツミスは第二ブロックなのか。参加者の中に見当たらない。というか、男性ばかりでむさ苦しい。

ざつと見た感じでは身長2メートルを越え、胴回りもふくよか過ぎる男性が強そうだが、大食い団の食欲を知っているので、あれに勝てるかどうか。

「制限時間はこの砂時計の砂が全て落ちるまでとなっています」

俺と真逆の位置に巨大な砂時計が置かれていて、それがストップウォッチ代わりなのか。

参加者の前に、から揚げが山積みにつて盛られている大皿が置かれていく。あれだけの量なら軽く2キロは越えているだろう。

「もちろん、制限時間までに食べきった方は、その時点で合格となります。それでは、準備は宜しいでしょうか。大食い大会……開始します！」

参加者が一斉に、湯気が立ち昇るから揚げを口に放り込んでいく。

「あつう、あちい」

「はふはふはふ」

揚げたてなので口内に肉汁が溢れ出したのだろつ。大の男たちが口を押えて悶えている。熱さを中和する為に、ジョッキに注がれていたコーラを口にする男たちが結構いるな。

本命の大食い団は……口を上に向けてはふはふしている。動物つ

て熱いの苦手だったりするもんな。冷えるまではペースが上がりに
うに無い。彼らには悪いが、その姿に和んでしまう。

コーラで強引に冷やして流し込んでいるが、あの方法だと炭酸で
一気に腹が膨れそうだが、大丈夫なのかね。あー、企画者側として
は大食い団がここで脱落した方が良いのか。心情としては結構複雑
だ。

大食い団はお得意様だし、何かと縁があるから個人的には頑張っ
て欲しいのだが。

店主たちが考えた作戦その一、熱々大作戦が成功したようのでコー
ラが大量に飲まれていく。追加で店主たちが俺からキンキンに冷え
たコーラを購入している。

砂時計を見ると半分が既に下へと流れ落ち、そろそろ食べきる者
も現れそうだ。

「食べたよー」

「ボクも終わった」

「私もー」

「こっちも完了だ」

大食い団がほぼ同時に手をビシッと挙げた。予想通りとはいえ、
四人とも通過か。店主たちは喝采を送っているが、よく見ると頬が
引きつっている。

厄介な奴らが上がってきたというのが正直なところなのだろう。

「自分も食べ終わりました」

おつ、ゴツガイさんも終わったか。これで五人の通過者が決定した。思ったよりも早かったな。

「制限時間を待たずに通過者が決定しました。皆様、残った料理はお持ち帰りしていただいて結構ですので。容器もこちらから提供します」

大食い企画としては親切設計だ。まだ食べている途中だった参加者たちだったが、容器に残りを詰めて退場していく。

第一ブロックの参加者がいなくなると係員が食べ残しや食器等を片付け、物の数分で次の準備を整えた。

「では、大食い大会、第二ブロック出場者の入場です！」

舞台袖から現れたのは、第一ブロックと違い女性比率が高いな。本命の一人であるシュイもそうだがラツミスもいるな。元気に手を振りながらの入場だ。

ラツミスも体格の割には大食いなのだが、シュイと比べると勝てるとは思えない。後は女性ハンターも何人が参加している。ハンター協会前が定位置なので、出入りをしているハンターの顔はある程度覚えてしまった。

第二ブロックの女性比率を高くしたのは、決勝に華やかさを求めたからなのかもしれないな。

「では、第二ブロックの大食いを開始します！」

宣言と共に参加者がから揚げに喰らいつく。揚げたての熱さにやられ、コーラを流し込む人が多発しているのは前回と同様だな。

シュイは元々コーラを好んで飲んでいたので、平然とコーラを飲みながら、から揚げを美味しそうに頬張っている。彼女のいいところ

るは、美味しそうに食べるところだろう。頬に手を当て至福の表情で、豪快に咀嚼している。

見る見るうちに肉が減っていくな。シュイは一口が大きく、噛む回数が少ないみたいだ。他の参加者と比べてダントツの速さだ。

「ご馳走様でしたっすよー！」

砂時計の砂が半分も減らないうちにシュイが食べ終わり、残ったコーラを一気に飲み干している。大食い団の面々よりも早かったな。

「私も食べ終わりましたわ」

続いてずっと手が拳がったのだが、二番手はスーッっぱい姿の黒縁眼鏡の女性。まさかの両替商アコウイ。シュイにしるアコウイにしる、痩せ形なのに大食いという多くの女性に妬まれそうな人だな。

それからかなり遅れて次の通過者が出た。

「た、食べ終わったよー。美味しかった」

ラツミスがお腹を擦りながら何とか食べきったようだ。残りの二人も決まったようだが見覚えの無い人だった。最近、この階層に来た人がハンター協会にあまり近づかない住民なのかもしれないな。

「これで、決勝戦の出場選手が決まりました！ 決勝戦は二時間後になりますので、皆様、暫くの間お待ちください。舞台の掃除が終了しましたら、劇団の芝居が始まります。露店で食べ物や飲み物などを購入して、ご観覧ください」

芝居もやるのか、本格的なイベントだな。この集落に劇団がいる

なんて聞いたこともなかったということは、今回の大食い大会の為に雇ったのか。

「ハツコン、舞台から降りるよ。お芝居の邪魔になるからね」

「いらっしやいませ」

一生懸命芝居している場で自動販売機が置いてあったら、芝居の内容が何であれ違和感しかない。大人しく運んでもらおう。

「ハツコンはお芝居観る？」

うーん、どうしようかな。芝居には興味はあるのだが、昔から演劇を観るのが苦手なのだ。何と言うか、テレビと違って役者が失敗しないかとか心配になる。余計なお世話だとはわかっているのだが、ハラハラして内容が頭に入らない。

ガキの頃、子供向けの戦隊ショーを見に行った時に、ハプニングがあつて中の人が出してしまい、てんやわんやになったのを目の当たりにしたのが原因だと思う。

あー、でも、気にはなるな。娯楽が少ない異世界なら劇団の練度も高そうだし、大丈夫だよな。

「いらっしやいませ」

「興味あるんだね。じゃあ、一緒に観ようか」

「おっ、二人とも観るのか。じゃあ、オレも」

ヒュールミも来ていたのか。声の聞こえた方へ視線を向けると、いつもの黒衣を着て、両手に露店の食べ物を手に入っていた。お祭り

を満喫されているようで何よりだ。

「ラツミス、何か食うか？」

「無理無理。お腹パンパンでもう何も入らないよ」

二時間後の決勝戦は期待できなさそうだな。あれだけ、から揚げを食べたら当たり前前だけど。むしろ、よく頑張ったと褒めるところだよな。

観客席は七割方埋まっていたが、後ろの列の隅が空いていたので、そこに陣取ることになった。俺がいると端っこじゃないと後ろの人が全く見えなくなるので、場所取りにも注意が必要だ。

今は異世界の芝居を楽しませてもらうとしようか。

優勝者と賞品

演劇の準備が整ったようなので姿勢を正して 常に真っ直ぐに背筋と言つか体が伸びているので俺は大丈夫だな。

後は劇の邪魔にならないように静かに佇んでおくことにしよう。

「おっ、ハッコンじゃねえか。こんなところで何やってんだ」

「今日は冷たいお茶を飲んでおこう」

って、このタイミングで門番ズの二人がやってくるとは。

芝居が始まるので音を立てたくはないのだが、そこは俺の熟練した商品落としテクニックで消音効果を見せつけてやるう。

赤子を抱きかかえて、そっとベビーベッドに置く母のような慈愛に満ちた対応で、商品をそっと取り出し口に置く。

よっし、殆ど音がしなかったな。人間 自動販売機でもやればできるもんだ。

「今日の演目は何だったか」

「ええとね、確か……」

って、カリオスとゴルスもここで芝居を見る気なのか。

こういうのは周囲に迷惑が掛からない程度の小声で、感想を言い合つのも楽しいよな。俺としては歓迎だ。

「さっき配っていた進行表だと……幸せを呼ぶ畑って題名らしいぞ。聞いたことねえな」

幸せを呼ぶ畑って何だ。皆目見当もつかないぞ。物知り博士のヒールミが知らないのだから、マニアックな話か完全創作ってところか。

たぶん、農業系の話だろうな。美少女が一所懸命畑を耕して、育った野菜をみんなに配って幸せにする。みたいな感じか。

俺としては異世界らしい破天荒なアクション活劇みたいなほうが好きなのだが、ラブロマンスとか始まったら見続ける自信が無い。あまり期待しない方が良さそうだな。

「まあ、見りゃわかるだろ。おっ、始まるみたいだぞ」

そうだな。見る前にあれやこれや考察してもしようがないしな。一観客として楽しませてもらうとしよう。

「何と言つか、色々と予想外だったぜ……」

「あそこで、こうくるか……」

「うん、確かに幸せを呼ぶ畑だね。あ、でも、呼ぶって言つより、来るって言つか……」

みんなが唾然とした表情であれやこれやと感想を口に出している。

俺の素直な意見としては異世界半端ないな。これに尽きる。まさか、主人公が人ではなく、そっちだったとは。総評としては面白かったと思うが、人を選びそうな内容だった。

劇のクオリティーも高かったので、同じ劇団がまた違う演目をす

るなら観てみたいな。

「って、呆気にとられている場合じゃねえ。ラツミス、決勝戦出るんだろ」

「ああ、そうだった！ ハッコン行くよ！」

「いらっしやませ」

ひょいっと担がれラツミスに運ばれていく。

「ラツミス頑張れよ！ 応援してるぞ」

「ほどほどにな」

「女の意地見せてやれ！」

三人からの応援を背に受け、ラツミスが拳を振り上げている。残念ながら自動販売機を背負っているので、ヒョールミたちに見えていないが。

舞台の隅に速攻で設置されると、ラツミスは出場者が控えているところに速攻で駆けて行った。急いでいるのはわかったけど、慌て過ぎてこけないようにな。

「ああっ、ご、ごめんなさい」

破壊音と悲鳴が届いてきたが、聞かなかったことにしておこう。

舞台の準備も整い、司会進行役のムナミも舞台に立った。決勝戦が始まるようだ。観客席は六割方埋まっている程度で、前半の戦いで満足した人が多いのか、ちょっと少なめだな。

もう少し盛り上げて人も増やしたいところだが、人を集める方法となると何があるだろうか。俺に出来ることは無いかな。使えそうな機能があればいいんだが。

ランク2になってから増えた機能に目を通していくと、一つ面白い機能を発見した。これを使えば集客と場を盛り上げられそうだ。

俺は機能欄から ジュークボックス を選び実行した。

「では、出場者の入場です！」

観客の殆どが司会のムナミに注目していたので、俺がこそつと変化したことに気づいていないようだ。

いつもの自動販売機より小さくなり先端が丸みを帯びる。身体の子に太い二本のプラスチック製の蛍光灯のような物が装着され、黄色い光を放っている。体内にはいつもの飲料食料ではなく、代わりにレコードが何百枚も置かれているのがわかった。

昔は喫茶店やバー等に置かれていた、硬貨を入れて好きな曲が聞ける機械なのだが、二十代から四十代ぐらいの人なら、ボーリング場に置かれていた新しい曲を選べるジュークボックスの方が馴染深そうだが。

ちなみにジュークボックスは立派な自動販売機の一つなのだが、そういう認識が無い人は多いかもしれないな。もちろん、自動販売機マニアとしては見かける度に曲を流させてもらっている。

出場者が舞台上上がってきたので、俺は運動会などで定番のクラシック曲を流してみた。やっぱり、入場曲と言えばこれだろう。

あえて最新型じゃなく古いタイプを選んだのは、クラシックが充実しているからだ。

「えっ、この曲は何処から」

観客は演出の一環だと思ってくれているようだが、ムナミや関係者たちは戸惑っているな。それでも、慌てず騒がず司会を進行しているムナミの肝っ玉の太さには感心する。

現場で場数を踏んできた彼女の対応力なら大丈夫だろうと、全投げして音響を担当させてもらおうとしよう。

「みんな盛り上がっているかい！ 泣いても笑ってもこれでおしまい。参加者の皆さんは思う存分、食べまくってくださいーい！」

BGM効果なのかムナミが弾けている。ならば負けずに、もっとテンポが速く盛り上がる曲をチョイスさせてもらおう。

「最終戦は時間内に食べた量で決まります！ 己の限界を超え、新たな世界の扉が開かれんことを……では、決勝戦を開始します！」

宣言と同時に曲を変更した。運動会ではリレーや徒競走でお馴染みの曲を大音量で流す。あの曲を聞くと高揚感が増すよな。出場者の食べる速度もかなり上がっているようだ。

ちよつと煽り過ぎている気もするが、治癒系の魔法や加護を所有している人が控えているので、万が一の事態にはならないだろう。

まだ始まったばかりだが、序盤から飛ばしているのは予想通り吸引娘シユイと大食い団四人衆か。ラツミスは前回の勢いはなく、ゆつくりと食事を楽しんでいるようだ。

他のメンバーもあの五人には勝てないとはわかっているようだが、負けじと食べ進んでいる。山盛りにされた、から揚げを五人が平らげると次に現れたのは、赤ん坊なら楽々と包めそうな巨大なクレープだった。

決勝は、まず山盛りのから揚げが出され、それを食べきったら次は巨大クレープが待っている。腹が膨れたところに甘い物という追

い打ち。これは心と胃袋にくる構成だと思う。

ちなみにクレープの中身は俺が提供したリンゴやバナナがこれでもかというぐらいに、詰め込まれている。リンゴはリンゴ専用の自動販売機、バナナはバナナ専用の自動販売機になって提供した。

野菜の自動販売機で果物バージョンもあるにはあるのだが、ここはあえて専用の自動販売機になるこだわりを理解していただきたいところだ。

ちなみにリンゴ自動販売機は新大阪駅の二階で見つけた。ただカツトしているだけではなく、チョコレートやハチミツやキャラメルが掛けられているバージョンもあり、種類も豊富でバリエーションを楽しめた記憶がある。

男性陣は巨大なクレープを目の当たりにしてげんなりとしているのだが、女性陣は目の色が変わった。

「むっ、甘い物っ！ それも、めっちゃ美味しそうやんっ！」

ラツミス方言でてるぞ。

「それも頂けるのですか」

隣の席のアコウイの目が眼鏡の奥で光ったように見えた。

女性が何故、こんなにも甘い物に対して反応するのか。異世界だからなのかダンジョン内限定なのかは不明だが、砂糖や果物が貴重だからだ。

こういった甘味を安く提供するこの階層は、甘い物が好きな女性と男性にとって天国らしく、最近では甘いもの目当てに清流の湖階層へ出稼ぎにきた労働者やハンターもいるという噂を聞いたことがある。

ラツミスとアコウイの食事速度が目に見えて上がっているぞ。から揚げは食べきりそうだな。

シユイは口の周りにクリームをべったりとつけて、満面の笑みで喰らいついているが、大食い団の男性陣はクレープを開いて、中の果物を先に食べているな。団で唯一の女性であるスコはそのまま噛り付いているが。

この勢いだとシユイとスコの一騎打ちになりそうだ。砂時計をチエックすると砂が七割方落ちていた。男性陣はほぼ壊滅状態で、大食い団の男共も生クリームとクレープの生地的苦戦している。

あつ、ラツミスとアコウイが、から揚げ完食した。今、目尻が下がった状態でクレープを味わっている。これは完全に試合そっちのけで食後のティータイムに入ったな。

シユイとスコは、見た感じだと互角だ。このままいくと、時間までに巨大クレープまで平らげそうだぞ。

関係者各位が熱い視線を注ぐ中、砂時計の砂が落ちる直前にフォークを持った手が雄々しく掲げられる。

「食べきったつす！」

口の周りにクリームをつけ満足げに笑うシユイ。大食い大会の優勝者は愚者の奇行団シユイで決定した。

大きな問題もなく無事に大会が終了して、現在上位三名が表彰台に登り、賞品を手渡されているところだ。

一位はシユイ。二位はスコ。三位は唯一の男性ゴツガイが滑り込んだ。

時間制限があるので、普通の自動販売機に戻って眺めていたのだが、

「では、優勝賞品はハッコンさんを一日自由に扱える権利です！」

とんでもないことをムナミが口にした。

はい？ え、何のこと？

戸惑っている俺にそつとムナミが近寄り、口を寄せて囁いてきた。

「以前、賞品についてもできることなら何でも手伝ってくれと、言っていたわよね」

記憶にないと惚けたところだが……適当に聞き流しながら同意した記憶がある。

「ざんね」

「今更しらばつくれるのは無しよ」

くっ、言葉を重ねて遮られた。でも、まあ、一日ぐらいなら別にいいか。大食いとはいえ商品目当てだとしても出費も知れている。

深刻に考えることは何もない。そんな軽い気持ちで受け入れたのだが……この時の決断を後々後悔することになるうとは、今の俺は知らないでいた。

なんてことを独白してみたが、別に問題はないだろう。

始まりの階層

「と言うことで、今日一日ハツコンは私の物になったですよー！」

なられました。大食い大会の次の日、約束通り俺は一日シユイにレンタルされることになったのだが、早朝から連れていかれた場所が 愚者の奇行団が拠点としているテントだった。

そういや、大食い大会の後、飲食店の店主たちや関係者に平謝りされたな。あの時はテンション上がり過ぎて話題性を得る為に、強引に賞品としてしまい申し訳ないと。

今日の出費は後で全てこちらが出すと言っていたが、丁重にお断りしておいた。ちゃんと話を聞かずに返事をした俺も悪かったからな。

「いいなあー。シユイ羨まし過ぎるっ！ なあ赤」

「食べ放題飲み放題なのかつ！ ずるいぞ、なあ白」

紅白双子が心底羨ましそうに、じっと俺とシユイを見つめている。そんな二人に対し、胸を張って自慢しているシユイ。

「良くやったシユイ。期限が一日なら、魔物狩りに行くのもいいな」

「そうですね、団長。もしくは、交渉事にハツコンさんも同行してもらって、物珍しさで相手を」

「団長、副団長、ハツコンは私のっすよ？ 貸さないっすよ」

ケリオイル団長とフィルミナ副団長の提案に乗る気は全くないのか。

「ハツコンは私と一緒に始まりの階層でデートするっす」

えっ、そうなんだ。初めて知ったぞ。ってか、始まりの階層って何処だろう。

「第一階層に連れていく気か。あそこは……なるほどな。そりゃ、しゃーねえ。ハツコンは俺たちの手伝いをする約束を取りつけているからな。今回は諦めるか」

「うんうん。そもそも、今日は私が独占する日っすからね」

「だがな、シユイ。万が一にもあり得ねえと思うが、ハツコンをそのまま連れ去ったり、売り捌いたりしたら制裁を加える。俺たち愚者の奇行団がな。仲間を裏切らない契約は順守する。それが団の掟だ」

ケリオイル団長の目がすっと細くなり、声に凄味が増す。よく見ると、他の団員全員の顔から表情が消え、冷たい光を宿した瞳がシユイに向けられている。

いつもはどこかふざけた雰囲気を纏っている彼らだが、空気がキツツと引き締まったかのような感覚。らしくないというより、これが本来の姿なのかもしれない。

「わかっているっすよ、団長。あのバカを始末した時に射たの私だよ。仲間を裏切ったりするわけないよ」

「だったな。じゃあ、一日楽しんでこいや。最後に俺たちの土産忘

れずに持って帰って来てくれよ」

「じゃあ、しゅわしゅわする飲み物と煮物で！」

「ええと、それじゃあ、ズユギウマ焼いた菓子と甘くて冷たいお茶！」

「私は黄色のスープをお願いします」

「わかったー。覚えていたら、買っておくつすよー」

自慢と報告を終えたシユイがテントの入り口まで移動する。そして、俺に振り返り破顔して軽く頭を下げた。

「ということで、ハッコン、ラツミス今日一日お付き合いお願いしていいですか？」

「いいよー。私とハッコンは一心同体みたいなものだからねっ」

「いらっしゃいませ」

俺一人では碌に移動できないので、必然的にラツミスがセットとなる。

彼女に迷惑を掛けたくなかったので、下に車輪でも出してシユイに何とか運んでもらおうと思ったのだが、5メートルも進まずに彼女が断念した。

ハンターとはいえ女一人で自動販売機を押すのはかなりの重労働で、結局ラツミスが手伝うという流れで落ち着いた。足でもあれば自力で動けるのだが……自動販売機に足が生えて自走するとなると、奇妙どころの騒ぎじゃないな。ビジュアルが酷すぎる。

「行っ てきまーす」

そうして、今日一日、シュイとラツミスと過ごすこととなった。

ハンター協会の転送陣に乗り、二度目となる転移を経験した。この浮遊感がジェットコースターを思い出して好きになれない。

転送陣の光が消えると石造りの部屋で、清流の湖階層の転送陣が置いてあった部屋と殆ど変わりがなかった。

扉を開けるとそこは屋外で転送陣だけを置いている小屋のような場所だったらしい。

そこは妙な場所だった。薄暗いというか空には岩の天井があり、日光が一切差し込んでいない。天井高は地面から10メートルぐらいだろうか。

普通なら真っ暗でもおかしくないのだが、集落の至る所に松明や魔道具の明かりが灯り、視界は十二分に確保されている。

辺りをぐるっと見回してみたが、木製や石造りの家が立ち並び、人通りも激しい。人口密集具合は清流の階層を軽く上回っているな。

「久しぶりに始まりの階層に来たなー。なっつかしい」

「私は結構頻繁に来ているっすよ」

少し落ち着きのないラツミスとは対照的に優しく微笑むシュイ。いつもの食欲以外に興味のない彼女とは別人のようだ。

目的地が決まっているようで、躊躇いもなく足早に大通りを進ん

でいく。ラツミスはきよるきよると街並みを眺めながら、彼女から離れないようにしている。

辺りを観察してわかったのだが、この場所は巨大な洞窟に住居を並べて、無理やり集落を形成した感じだ。まるでダンジョン内に作られた集落……いや、ダンジョン内の集落として本来あるべき姿はこっちなか。

清流の湖階層や迷路階層が異常であって、普通は岩肌剥き出しの天井や壁があるべきなんだよな。ダンジョンなのだから光が射さないのも当たり前だ。俺もあの階層に毒されて、自分の中の常識が崩れてしまっている。

「シユイ、何処に行く予定なの」

「この奥にある、貧乏人が集まっている一帯っすね」

それだけ伝えると後は何も語らずに黙々と歩を進めている。

貧乏人が集まる場所か。貧民街みたいな感じなのだろうか。そういうところは治安が悪いのが常識。彼女が俺たちを罠にハメる気はないと思うが、念には念を入れて警戒だけはしておこう。

転送陣の周辺はしつかりとした建造物が並んでいたのだが、こちら辺はあばら家というか廃墟寸前の家と呼んでいいか躊躇うレベルの建物ばかりだ。

ラツミスの怪力なら軽く小突いただけで瓦礫と化しそつだな。

「さーとと、到着っす」

そう言って振り返った彼女の背後には、古ぼけた屋敷の廃墟が建っている。半分以上が崩れ落ちている石の塀に囲まれた平屋の屋敷。何年も人が住まずに放置しているように一瞬見えたのだが、所々補修された後があるな。

庭も雑草が生えていないし、明らかに人の手が加えられている。

「みんなー、帰ったつすよおおおー！」

シユイが屋敷に向かって叫ぶと、両開きの扉が勢いよく開け放たれ、そこから子供たちが次々と雪崩出てきた。歳の頃は……たぶん下は二歳ぐらいで、上は十歳を越えている辺りだろう。総勢、十名は軽く超えている。

「あつ、やっぱりシユイ姉ちゃんだ！」

「お帰りー、お土産は！」

「姉ちゃん遊ば、遊ば！」

あつという間にシユイが子供たちに取り囲まれ、服の袖を引つ張られている。子供たちは全員笑顔で彼女が慕われているのが一目でわかる光景だ。

「ただいま。みんな元気になっていたみたいだね。姉ちゃんは嬉しいつすよ。遊ぶのはちょっと待つつす。園長先生は？」

「先生は掃除してたよ！ せんせーい！ シユイ姉ちゃんが帰ってきたよー！」

「はいはい。聞こえていますよ。お帰りなさい、シユイ」

子供たちから遅れて出てきたのは、一人のやせ気味な女性だった。口や目尻の皺からみて五十代ぐらいだろうか。見るからに温和で人の良さが溢れている穏やかな笑みを浮かべ、走り寄ってきた子供た

ちの頭を撫でている。

格好は白の頭巾を被り紺色のゆったりとしたローブのような服を着込んでいる。尼僧の様に見える服装だ。

「ただいまっす、園長先生」

「はい、お帰りなさいシユイ。後ろの荷物を背負っている人はお友達ですか？」

「うん、そんな感じ。職場の仲間だよ」

「あら、そうなのですね。ようこそいらっしやいました。立ち話も何ですから、中へどうぞ」

「はい、お邪魔しま……ハツコンも中に入って大丈夫かな？」

あー、床が抜けそうな気がする。ここは、安全を期して外に設置してもらった方がいいだろう。

「ざんねん」

「だよね。じゃあ、ハツコンは入り口に置くよ。ええと、園長先生ちょっと待ってください。子供たち集まってー」

ラツミスが俺を設置すると、子供たちに向き直って手招きをする。子供たちは戸惑っているようだったが、シユイも一緒に手を振っているので安心して駆け寄ってきた。

何がしたいのか理解したので、さっと商品を並び替えておく。

「みんな、この箱は魔法の箱なんっすよ！ここに並んでいる物で

欲しい物があつたら、この出っ張り押ししてごらん。今日は一日、姉ちゃんが自由にしていって約束しているから、遠慮はいらないです」

「この丸いの何？」

「これは甘い果汁が入った飲み物っすね。姉ちゃんは、この黒くてしゅわしゅわするのが好きっす」

「これは、これは」

「それはお菓子っすね。ちょっとしよっぱいけど、美味しいぞー」

和気藹々と説明をする彼女と、落ちてきた商品を嬉しそうに掴んではしゃいでいる子供たち。そんな姿を見せつけられたら、サービスするしかないよな自動販売機として。

全員に飲料とお菓子や食べ物が行き渡ったのを確認すると、フォルムチェンジをする。黄色を基調とした体となり、身体の中心部には色とりどりの空気を入れる前の風船が並んでいる。

「え、なになに。これなに？」

お、子供たちが覗き込んでいるな。そこで、ガスを入れて風船を膨らませていく。子供たちが驚いて一步引いたが、それでも好奇心が勝るようでじっと熱い視線を風船に注いでいる。

膨らみきった風船に紐が取りつけられると、ラツミスがそれを取り出して子供たちに配っていく。ふわふわと浮かぶ風船に喜び、子供たちが紐を掴んで走り回っている。

一度俺が風船で浮いた姿を見せてから、風船を欲しがったラツミスや大食い団に渡したことがあるのだが、あの時も喜んでいたので

な。子供たちの反応は予想通りだ。

園長先生とシユイも顔をほころばせて子供たちを見守っている。子供たちへの掴みはバツチリだ。今日は一日、子供たちと一緒に過ごすことになりそうだが、そんな一日も悪くないよな。

孤児院と自動販売機

はしゃぐ子供たちと一緒にラツミスとシュイが遊んでいる。元々、無邪気な所があるので子供とは相性がいらしく、物の数分で仲良くなったな。

今は 高圧洗浄機 となった俺のシャワーから子供が逃げ惑っている。もちろん、操作しているのはラツミスなのだが。

遊び疲れた子供たちは、ずぶ濡れになった状態で家に入ろうとしたのだが、扉の前で腕を組み凄味のある笑みを浮かべた園長先生の前で硬直している。

「皆さん、そんなびしょびしょの泥まみれで何処に行こうというのですか」

「え、園長先生」

「その場で服を脱いで、この籠に入れてから風呂に行きなさい」

「は、はい」

萎縮している子供たちが扉の前で服を脱ぎだしている。ラツミスとシュイも一緒になって服を脱いで……こらこらこら。周りに人の目が無いとはいえ屋外だ。若い娘がはしたない。と忠告したかったが、どうやら早とちりだったようで、靴と靴下だけを脱いでいる。

それじゃあ、バスタオルを提供しておこう。

「ありがとう、ハッコン。シュイもどうぞ」

「ハツコンは気が利くねー。人間だったらモテモテすよ！」

「今のままでも人気者だもんね」

褒めてくれた二人に対して照れ隠しをするように コイン式全自動洗濯機乾燥機一体型 ヘトフォルムチェンジした。褒められるのは嬉しいが、正面から素直な感情をぶつけられると、少しむず痒いような妙な感覚になる。

「あ、これは洗濯するやつだよ。じゃあ、室内に運ぶよ」

俺はラツミスに抱き上げられて玄関の隅に設置された。そして、脱ぎたての汚れた服と下着を突っ込まれ、洗濯を開始した。

「これは一体……」

「ハツコンは不思議な魔道具で色んな形に変化できるんつすよ。凄いつつよ」

シユイが自分のことのように胸を張って自慢していると、隣でラツミスが大袈裟に頷いている。

「あらまあ、よくわからないけど凄いわね。最近の魔道具って便利なのね」

最新の電化製品を前にした機械音痴の母親の様な反応だ。理解はしていないけど、凄いということだけはわかってくれた。って俺が凄いい訳じゃなくて、日本の技術力が優れているだけなのだが。

「洗濯は直ぐに終わるから、それまで皆でお風呂に入るつすよ。ほ

ら、早くいかないと捕まえてべるべるするぞおお」

「わああああっ」

舌を出して上下に揺らしながらシュイが子供たちを追いかけている。子供たちは悲鳴を上げて逃げ回っているが、何処か楽しそうだ。

これシュイが男なら完全に犯罪だよな。いや、女性でも子供が嫌がっているならアウトか。

「下着も洗うなら、ハッコンお風呂場の近くまで運ぼうか」

「いらっしゃいませ」

そうだね。10分もあれば乾燥までやるから、風呂に入っている間に終わる筈だ。

「あ、でも、重さで床抜けないかな」

「それなら、裏口まで回っていただけたら、風呂の裏側につきます。そこには勝手口もありますので」

「じゃあ、外側からぐるっと回り込もうか」

ラツミスに背負われて外壁沿いに移動すると扉が見えてきた。あれが勝手口か。

壁に背を預けるようにして置かれると、ラツミスがそつと扉を開けた。扉の向こうは風呂の脱衣所になっていて、全裸半裸状態の子供が密集している。

しかし、これだけの大人数が一斉に入れるのだろうか。だとした

ら、相当大きな浴槽だぞ。

「こらこら、暴れない。じゃあ、みんなお風呂で洗いっこするっすよー」

一糸まとわぬ姿のシユイが小さい子供を抱きかかえてお風呂場に消えて行く。ショートカットで色気より食い気のシユイだが、ちゃんと女性なのだなど妙な感心をしてしまった。

「あーっ、お風呂お湯入ってないよ！」

「あらあら、今日のお風呂当番は誰だったかしら」

脱衣所まで見に来ていた園長先生が頬に指を当てて、首を傾げている。誰だ誰だとお互いに視線を交わす中、手を挙げて二人の女の子が進み出てきた。

「ご、ごめんなさい。シユイ姉ちゃんと遊んでいて、忘れていました」

その身を縮ませて萎縮している少女の頭に園長先生がそっと手を添える。びくりと体を揺らした少女が俯いていた顔を上げて、視線を合わせた。

「当番を忘れていたのは良くないことですが、正直に話してくれてありがとうございます。失敗は誰にでもあります。でもそれを誤魔化すのではなく、失敗を認めて反省することが大切なのです」

頭ごなしに叱りつける親が多い昨今、ちゃんと諭せるというのは当たり前のように見えて難しいことじゃないかと思う。

俺の親せきや友人でも、子供が可哀想に思えるぐらい怒鳴りつける人がいて、そんなに怒らなくてもと止めに入ったことは一度や二度じゃない。全く怒らないで放置している親よりかはマシだが、やり過ぎだと……って独身男性が子育ての辛さも知らないくせに、偉そうに語ることじゃないか。

「しかし、困りましたね。今から水を溜めて薪で沸かすのには時間がかかってしまいます。今日はお風呂諦めましょうか」

水遊びで体が冷えた状態でお風呂が無いとなると、風邪をひかないか心配になるな。何とかして上げられないだろうか。機能に何かあったかな。

「あ、ハッコン洗濯終わったんだね。中身出しておくよ」

もう乾燥まで終了したようだ。ラッミスが綺麗になった洗濯物を取り出している間に機能欄に目を通していく。

お風呂関係じゃないな。ええと、水では沸かすのに時間がかかるからお湯……あ、あれいけるな！

洗濯物が全て体外に取り出されたのを確認すると本日三度目のフォームチェンジをした 温泉自動販売機 に。

これはその名の通り、温泉を自動で売る機械だ。四角柱の体に堂々と温泉自動販売機という日本語が筆で書かれている。側面から一本のホースが出ていて100円で2分間温泉を出し続ける仕様になっている。

温泉地で稀に見かける自動販売機で利用したことがあるのだが、家に帰るまでに冷えるので、お湯炊き必須の温泉だ。

「また見たことない形になったね、ハッコン。一体、何種類の体が

あるんだろう」

幾つあるのだろうか。俺もちゃんと数えたことがないな。今変形できる自動販売機だけでも二十近くあるみたいだが。

「ええと、この長いのって、今までの流れだとここから何か出るんだよね。それに、この状況だから……わかった！」

最近では機能の使い方を判断するのはヒュールミの役目が多くなっていたが、やっぱりラツミスも理解力が高いよな。

ヒュールミは状況と俺の形から能力を推測しているが、ラツミスの場合、俺の内面を読み取って理解しようとしてくれてる気がしてならない。俺の性格ならこうするのではないかと。

ただの自動販売機相手に真剣に向かい合ってくれているラツミスには、本当に感謝してもしきれないな。

浴室の引き戸を開け放ちホースを浴槽に突っ込んでいる。その状態で俺を見返して片目を閉じてウィンクしたのは合図か。では、一気に放出するでしょう。

勢いよく温泉が流れだし、素早さのおかげもあるのか、あっという間に浴槽が温泉で満たされる。

「うわっ、スゲー！」

「お風呂だお風呂だ」

「飛び込めー」

「こらこら、ちゃんと体洗うっすー！」

浴室に子供たちと、それを咎めるシユイの声が反響している。お湯を溜める役割を終えたので、俺は再び洗濯機へと戻り残りの洗濯物を回すことにした。

ラツミスも全て脱ぎ去り、一緒に浴室で洗いあっているようだ。

「ハツコンさんでしたか。この度はありがとうございます。色々お手伝いしていただき助かりましたわ」

俺のことをどう認識しているかは怪しいところだが、園長先生は深々と頭を下げている。

「いらっしゃいませ」

「ええと、それは肯定の意味でしたわね。シユイは最近、思い詰めているところがあったので、心配していたのですが、今日の姿を見てホツとしています。これからも、あの子のことよろしくお願いします」

ただの自動販売機相手にお礼を口にして託せるといっものは立派だよな。そこまでされると申し訳なくて萎縮してしまいそうになる。しかし、こんな暖かい場所があるシユイの望みは何なのだろうか。この孤児院を維持するには大金が必要だろうから、やはり目当ては金か。うーん、こういうのは詮索するのも失礼な話だな。

洗濯と風呂も終わり、晩御飯は俺が振舞うことになったので、食べたことのないものがいいだろうと冷凍食品セットとカップ麺を提供したのだが、ちょっと栄養バランスが気になったので、食後のデザートにと果物とクレープも出しておいた。

食堂や室内はやはり床の耐久力が怪しいらしく、孤児院での定位置は玄関脇で決定したようだ。

子供たちが食事をしている間は、一人でのんびりしておこうと思っていたのだが、子供たちが「ハッコン一人じゃ寂しいよ」と言うってくれて、外に椅子と机を出して庭で食事を取ることになった。

この孤児院の周辺には空き家が多く、はしゃいでいても苦情が来ることは滅多にないそうなので、子供たちは口一杯に料理を詰めては大声で、美味しい、美味しいと喜んでくれている。

子供たちの服装はどれも素朴……いや、言葉を濁し過ぎだな。粗末な格好でふくよかな体型の子供は一人もいない。かといって痩せすぎの子供も見当たらないので、食生活は何とか保たれているように思う。

後で下着やタオル類も提供しておくか。

俺がお金を寄付してもいいのだが、自動販売機である俺から施しを受けることを良しとするだろうか。こういう時、何処まで関わってもいいのか、俺にはそのさじ加減がわからない。普通に会話する能力があるなら、相手の神経を逆なでせずに援助することも可能なのだろうか。

自分のポイントを得る為に金稼ぎのことばかり考えてきたが、貧しくて幸せそうにしている子供たちを見ると、自分がとても薄汚い存在に思えてきた。

「明かりがピカピカしてたけど、もしかして、変なこと考えてる？ハッコンは、ハッコンだよ。今、みんなに食事をただで提供して笑顔にさせられるのも余裕があるからでしょ。だから、もっと自信を持っていいんだよ」

いつの間にか俺の隣に立っていたラツミスが、俺の心を見抜くような言葉を掛け、にっこりと微笑んでいる。

凄いなラツミスは。言葉も話せないただの自動販売機の考えを理解してくれて、気遣ってくれる。

そうだな、うん、俺は俺だ。ポイントの為に大金稼ぎを止めるつもりはないが、これからは、もう少し周囲の状況を考えて行動することにしよう。

そして今は、純粹にこの時を楽しんで、子供たちを言ばせることだけを考えよう。

始まりの階層の夜

腹がはち切れんばかりに晩御飯を食べきった子供たちは、全員床に就いたようだ。ここは空が見えない洞窟内なので、夜と朝の区別が曖昧になりそうだが、現在は夜らしい。

ここで暮らしていたら昼夜の感覚がおかしくなりそうだな。

夜なら省エネモードにしてもいいのだが、周囲の明るさに差が無いので、このままでも問題は無いだろう。

元屋敷を改造した孤児院の窓から明かりが漏れているということは、園長先生やラツミスたちが、まだ起きているのか。

「ハツコン、今日はお疲れさまですよ。みんな大喜びで感謝感激です」

シュイが俺の隣に腰を下ろして胡坐をかいている。身体を左右に揺らして、嬉しさを全身で表現しているな。

あんなに素直に喜んでもらえると、こちらとしても自動販売機冥利に尽きる。

頬が若干上気しているのは食卓に提供したカクテルをがぶ飲みしていたからだろう。ただのジュースだと思って、結構飲んでいたからな。

「今日の出費安くないっすよね。今度必ず返すんで、暫く待ってほしいっす」

「ざんねん」

「えっ、待ってくれないっすか」

いや、違う。払わなくていいって言いたかったのだが、細かい二ユアンスを伝えるのは難しいな。

それに金銭を要求するなら飲食店の店主たちであって、優勝者の賞品として受け取ったシュイが払う必要は全くない。

「さんねん　ありがとうございます」

「えっと、もしかして払わなくていいって、ことっすか？」

「いらっしゃいませ」

何とか伝わってくれたか。理解してくれたお礼にコーラをプレゼントだ。

取り出し口に、彼女の好物であるコーラ2リットルを落とす。今日の晩は大食いの彼女にしては小食だったからな。自分の分も子供に与えていたから、まだまだ腹に余裕があると思う。

「あ、しゅわしゅわだ！　まだ小腹が空いていたから助かるっす！」

蓋を開け、飲み口に口を付けて豪快に中身をあおっている。炭酸が強めだから、そんなに一気に飲むと……。

「くはあああつ、ぐええええつぷ」

見事なげつぷが闇夜に響く。さすがに恥ずかしかったようで、俯いた顔が赤い。

こういう時は場を和ますために何か言った方がいいのだろうか。よっし、決めた。

「あたりがでたらもういっぱい」

彼女の顔が更に真っ赤に染まる。どうやらチヨイスを間違えたようだ。

「そ、そうだ。この始まりの階層ってダンジョンに潜る人が必ず訪れる場所って知っていたっすか？」

へえ、そうなんだ。第一階層とか言っていたから、ダンジョン一階なのだろうとは思っていたけど。

「ざんねん」

「この階層にまず入って、奥にある転送陣まで辿り着かなければ、別の階層に移動できない事になっているっす。まあ、始まりの階層ぐらい踏破できない者は、別の階層に進む権利すらないってことっすね」

なるほど。転送陣で階層の行き来が自由だと聞いていたが、ここだけはそうは問屋が卸さない訳か。

「でも、一度でも奥の転送陣に辿り着けば、次からは何処にでも飛び放題っすよ」

地上に出たら毎回、第一階層を攻略しなくてもいいのか。そういう配慮もされているのか、ダンジョンの仕組みが益々わからなくなってくる。

「それで、この集落は何らかの理由で第一階層奥の転送陣にたどり着けなかった者たちが、少なからず残っているっす。もしくは、

ここで子供を作って身動きが取れなくなつた人たちもいるっすね。そうして、外の世界を知らずに産まれ、邪魔になつて捨てられた子供が集まっているのが……ここっす」

この孤児院にいる子はダンジョンの外を知らない子がいるのか。それどころか、この階層から移動したことが無いのなら、空も天気も外気にも触れたこともなく育つた。うーん、それは子供の成長に悪影響を与えそつだ。

「私の願いは、孤児院の皆が幸せに　　つて、今日は口が妙に軽くて困るっす。今のことは忘れて欲しいっす。もう今日は寝るっす！　　おやすみ！」

両手を大きく振りおぼつかない足取りで、扉の向こうに消えて行った。アルコールの影響で色々聞けたな。

様々な人が生活して、多種多様な悩みが存在する。当たり前のことなのだが、最近は自動販売機として商売と自分のポイントのことが考えてなかつた。

いや、自動販売機としては正しいスタンスだとは思っているが、この匙加減が難しい。安くしたり無料奉仕をすると、今度は飲食店の店主たちが困る事になるし、俺もポイントが増えない。商売とボランティアとの違いを自覚しないとな。

「おい、ここか……」

「へい、兄貴。ここに珍しい魔道具があるって話ですぜ」

如何にも荒くれ者といった口調の男たちの声が、遠くから流れてくる。目的が一発でわかる説明付きで現れるとは至れり尽くせりだな。

人が少ない場所だとはいえ、お世辞にも治安がいいとは言えない場所ではしゃぎ過ぎたようだ。

久しぶりに俺目当てのお客さんか。最近、こういった輩はご無沙汰だったので、どういった行動を取るのか興味津々だったりする。相手の姿が見える前に、灯りを消して闇に溶け込む配色に変更しておこう。

「本当に、食い物がただで幾らでも出てくるんだな」

「ええ、部下の一人がその目で確かに見たって言うてやった」

徐々に近づいてくる人影に目を凝らしていたのだが、相手はがたいのいい男が四名。俺を載せる為の手押し車も準備済みか。

清流の湖階層なら俺の存在は結構知れ渡っているが、この階層では無名だからな。狙われるのも当然か。

あの男たちなら俺を運ぶことも可能なようだが、さて、どうしよう。大声を出して、ラッミスたちを起こせば、あいつらは逃げ出さだろう。だが、彼女たちが危険に晒される可能性がある。

ここは俺一人で何とかしてみるか。既に取っている機能で使えそうなのをチョイスしてみるか。

これと、これと、これも使えるか。結界 もあれば頑丈も上がっている。余程の事が無い限り、前みたいに誘拐されることはないと思う。

まずは ドライアイス自動販売機 になって足下にドライアイス を大量にばらまく。今度は 高圧洗浄機 になって周辺に散水する。ドライアイスに水が掛かり、薄らと白い煙が地面に漂う。

そこから更に ジュークボックス になってミュージックスタート。

「おい、今日は足元がやけに寒いぞ」

「何か、音がしてねえか……」

「妙な音楽が……」

ホラー映画でお馴染みの曲を流すと、男たちが辺りを忙しく見回している。この集落の薄暗さと相まって、雰囲気はバツチリだ。ここからどうするか。灯油を撒いて火をつけるのは、流石にやり過ぎだよな。撤退させるだけでいいとなると、何が最良なのだろうか。

相手は誘拐 泥棒に来たので灯りは所持していない。暗闇で目が利くとしても、あまり辺りが見えていないよな。だとしたら、脅かせば何とかなる気がする。

今度は コイン式全自動洗濯機乾燥機一体型 になると蓋を開けた状態で、洗濯槽内に水を溜めて回転させる。

「親分、水の音がしやせんか」

「ここら辺は川も湧き水もねえだろ、気のせいだ」

そんな彼らに 結界 で弾いた洗濯槽の水を提供してあげよう。

「ぶはああつ、何だ、何だっ！」

「み、水う？ ど、何処から水がっ」

「おおあたり」

面白いぐらいに取り乱しているな。あ、ちょっと楽しくなってきた。次はこれでいこう。

卵自動販売機 になり、ガラス張りのロッカーにも見える外観に変化すると、その蓋を全て開けて 結果 により卵を一斉掃射する。

十個を一まとめにしてネットで包まれている卵が、二十以上も同時に放たれたので、その幾つかが見事に男たちを捉えた。

食べ物を粗末にして怒られそうだが、平和的解決の為なので目をつぶって欲しいところだ。

「痛えっ！ 何だこれ、ぬるぬるしやがるぞ」

「お、親分、か、帰りましょう！ 誰かに狙われていやす！」

「くそっ、ふざけやがって！ お前ら今日は帰るぞ！」

どうやら撤退してくれるようなので、蛍の光で送り出しておく。あの様子だとまた懲りずにやってきそうだな。俺がないとわかると、孤児院の中を荒らす可能性も出てくるか。対策は明日の朝、ラッミスに会った時に実行しよう。

町中の灯りの光量が増し、始まりの階層内が少し明るくなったように思える。これがここでの朝なのだろう。

庭のドライアイスや散乱した卵の欠片と中身は既に消してある。これで、昨日何があったのか孤児院の子供たちが知ることはない。

「おはよう、ハッコン」

「おはようっす」

朝から元気な二人組が現れた。この二人、結構似ているところがある。この一日で意気投合して、かなり仲良くなっている。

ラツミスはハンターに知り合いが少ないので、歳の近い同性の友達が出来てほつと一安心だ。愚者の奇行団というのが若干不安ではあるが、シュイ自身は気の良い女性なので、さほど警戒はしていない。

「二人とも早いわね。皆さん、おはようございます」

その後ろから顔を出したのは園長先生か。いつもの柔らかな表情で挨拶をしてくれている。

「ありがとうございます」

おはようございますの代わりに「いらっしやいませ」を使っていたのだが、こっちの方が挨拶の返しとしては正しい気がするので、ちよつと変更してみた。

つと、そうだ。今、子供たちがいないなら丁度いい。昨日会った出来事を伝えておかないと。

「あれ、商品のところに板が。これって地図見せてくれたあれかな」

正解だよ、ラツミス。俺の数ある機能の一つ 液晶パネル だ。これを使って昨日の一件を録画した映像を流せば注意喚起にもなるだろう。

チンピラが現れて撤退するまでの映像を流すと、全員が興味深げに見入っていた。

「夜にこんなことがあったっすか。こいつらは、近くにアジトを構

えている、元ハンターたちっすね」

「そうみたいね。ハンターを止めて犯罪行為に走るなんて、悪い子たち。それも孤児院の客人に手を出すとは……」

二人とも顔見知りなのか。この映像を証拠に衛兵やハンター協会に持ち掛け、犯人を捕まえてもらうことも考えたが、やつら未遂なんだよな。俺がさせなかったから、そう言う話題を口にしていただけとなる。

捕まえるには少し無理があるかも知れない。

「シユイ、少し出掛けてきますので、暫く子供たちを任せてもいいですか」

「それはいいけど……園長先生まさか」

あれっ？ シユイの頬が引きつり額からすつと汗が流れ落ちたぞ。園長先生は一度、孤児院に入ると直ぐに戻ってきたのだが、その手には大きな弓。背中には矢筒を背負っている。

「では、直ぐに帰りますので」

そう言っただけで俺たちに頭を下げて立ち去っていった。って、あまりのスムーズな流れに止める暇もなかったが、もしかして園長先生は彼らに武力行使で黙らせに行ったのか？

え、それは危険すぎる。六十手前に見える女性が一人でどうこうできるわけがない。ここは、止めに行かないと。

「あー、久しぶりに園長先生のマジ怒り見たっすよ。あ、お二人とも心配しているようですが、大丈夫っすよ。園長先生は私の弓の師

匠で元凄腕ハンター。熊会長と一緒に昔は迷宮を荒らしまくっていた実力があって今でも団長が一目置いているぐらいです。そうでなければ、こんな治安の悪い場所で孤児院経営なんて無理です。あと熊会長のように権力持っている人とも繋がりあるっすから」

そ、そうなのか。あの細腕と雰囲気からは想像もつかないが、シユイが全く焦っていないところを見ると、心配するのも馬鹿馬鹿しいぐらいの腕なのだろう。ここは信じて待たせてもらおうか。

あれから一時間が経過し、子供たちも朝食を食べ終わったタイミングで園長先生が帰ってきた。出掛けた時と変わらぬ姿 いや、よく見ると服の裾に返り血の滴があり、矢筒から数本矢がなくなっている。

「ハツコンさん。こちらの説得に彼らは快く応じてくださいましたので、彼らが二度とちよっかいを掛けてくることはないですよ」

「ありがとうございます」

理屈ではなく本能が即座にお礼を言えと訴えかけてきた。今も慈愛溢れる笑みを浮かべているのだが、前までと違いその微笑みに威圧感を覚えてしまうのも仕方ないと思う。

と、兎も角、彼らとのいざござは解決したようで何よりだ。お礼に、一週間は賄える食料と飲料を置いて行こう。

この人は敵に回してはいけないタイプだと即座に判断した。シユイもいずれ園長先生みたいになるのだろうか。

「ん、誰かから見られている気がするっす」

俺の視線に気づいたのか、気味悪そうに肩を竦めるシユイを見つめ「ざんねん」と零した。

新たな階層

無事に清流の湖階層に戻り、いつものように商売を続けているのだが、最近是需要が減ってきている。

だからといって儲かっていない訳じゃない。大口の注文である飲食店には定期的に食材を卸し、シャーリイにも避妊具を提供しているので利益としては充分だ。

早朝の四人衆、門番の二人、その他にも常連は通ってくれているので黒字なのだが、明らかに売り上げは減っている。

利益を求めるなら別階層に移動して商売をするのもありだが、ここは居心地がいいので定住するのも悪くない。

もつとも、自力では動けないので移住するにしてもラツミス任せなのだが。

「ハツコン！ ケリオイル団長が頼みごとあるんだって。一緒に行こうね」

考え込んでいたところに声を掛けてきたのはラツミスだった。

団長からお呼びがかかったか。前から調査に出ているという話だったから、次の遠征場所が決まったのかもしれないな。階層主と争うのであれば、ポイントは大量に確保しておこう。結界の発動と維持。それが俺に課せられた役割なのだから。

「おーよく来てくれたな。まあ座ってくれ」

愚者の奇行団のテントに招かれたラツミスとヒュールミと俺が団長の前に座り込む。

前回、シユイが自慢する為に中に入った時以来だな。大きなテナトの内部には鉄で枠組みを補強した木箱が幾つか転がっていて、団員の何人かがその箱を開けて中を弄っている。どうやら団員たちの私物が入っているようだ。

「前から話していた通り、次に倒す階層主が決まった。亡者の嘆き階層の死霊王討伐を予定している。それに、ハツコンたちも参加して欲しい」

聞くからに物騒な名前の階層だ。どう考えてもアンデッド系が豊富な場所だよな。おまけに死霊王ときたか。イメージでは高そうなローブを身に纏った骸骨の魔法使いだが、実際はどんな感じなのだろうか。

「亡者の嘆きか。確か死人魔や骨人魔とかキモいのがてんこ盛りの階層だよな。って、そういや……ラツミス」

ヒュールミが何かに思い当たったらしく、俯いたまま一言も発していないラツミスの顔を覗き込んでいる。俺もつられて彼女を見つめているのだが……体が小刻みに震えてないか？

「本当に、そこに、行くの？」

何で区切りながら話しているのだろう。

「ああ、その予定だが。ラツミス都合が悪かったか」

「え、ううん、そうじゃないけど、そうじゃないけど、そこは止め

にしない？」

珍しく消極的だな。声も小さいし、これってもしかして、ラツミスってホラー系苦手なのか。明らかに怯えているよな。

「昔っから怖い話とか苦手だったもんな。ビビってんだろ」

「ち、違うし！ もう、子供じゃないんだから平気だし！」

何処からどう見ても強がっているだけだ。そうか、苦手なのか。その階層が何処までホラーチックなのかにもよるが、ああいうのダメな人は本当に無理だからな。

俺は昔、ホラー系が大好きな友人に、その系統の映画を何作も見せられ、お化け屋敷巡りをさせられた苦い経験があるので耐性が付いている。たぶん、大丈夫だろう。

「あー、怖いの駄目か。あそこの敵は、動く死体と骸骨、後は幽霊ぐらいだけ。平気平気。豊豚魔の方がよっぽどキモいぞ」

「団長。普通、そういうのが怖いのですよ。皆が団長みたいに神経図太い訳ではないのです」

副団長のフィルミナにたしなめられ、ケリオイル団長が肩を竦めている。

「オレは話に聞いた程度の知識しかないが、亡者の嘆き階層ってどんな場所なんだ」

「そうですね。昼夜問わず、空は厚い雲で覆われ稲光が煌めき、肌寒く、朽ち果てた墓石がそこら中に転がっているぐらいでしょうか」

フィルミナさんの説明を聞いて、完全に委縮したラツミスが俺に抱き付いている。触れた部分から震えがもろに伝わってくる。本気で怯えているようだ。

この様子だと亡者の嘆き階層にはラツミスは参加できないかもしれないな。

「ラツミス、お前さんマジでビビってんのか？」

「そ、そ、そんなこと、ないよ。お化けとか怖がるなんて、子供じゃないんだし」

「無理すんな。ガキの頃なんて怖い話聞いただけで、夜トイレに行けなかつたじゃねえか」

「ヒュールミ！ そんな昔の話、言わなくてもいいでしょ！」

わかりやすく狼狽している。この調子だと戦力外どころか同行するのも辛そうだ。

「困ったな。ラツミスが無理となると、誰がハツコンを運ぶかって話になるんだが。うちの面子でそんな怪力いねえよな」

「そうですね。軽々とハツコンさんを運べる人材はいませんね。とはいえ、ハツコンさんが同行されないとすると、食料面の問題で長期遠征は不可能となります」

「死霊王は固定の場所にいるわけじゃねえから、探すのに一苦労するんだよな。腰を据えて探索するにはハツコンは欠かせねえ」

団長と副団長が腕を組んで唸っている。魔物や化け物が徘徊する世界でも、幽霊やホラー系はまた違った怖さがあるよな。苦手な気持ちも良くわかるが、移動手段を失ったら俺はただのお荷物と化してしまふ。

「ちょ、ちょっと待って。みんな、私が行けないと決めつけているみたいだけど、全然平気だし。むしろ、怖いのが得意だし」

無理をしているのが見え見えだ。口調からしていつもと違う。

実際に行ってみないことには何とも言えないところがあるが……ラツミスは無理っぽいよな。

「じゃあさ、一回お試しで亡者の嘆き階層行ってみようぜ。団長、そこにも集落はあるんだろ？」

「おう、あるぜ。規模はここには及ばねえが、それなりに立派なものだ。一部の特殊な趣味の奴らに結構人気のある階層でな。一般の人も結構やってくるそうだが。なあ、副団長」

「まあ、大半が怖いもの見たさですが。世の中にはそっち系も需要があるようです。幽霊や怪奇現象が日常の階層ですからね」

有名なホラースポット扱いなのか。そういうのが好きな人にはたまらんだろうな。金持ちの暇人やノリの軽そうな若者が来てそんなイメージがある。

「ヒュールミの提案に乗るか。まずは集落で過ごしてみても階層の空気に慣れてもらおうとしよう。どうしても無理そうなら、別の手段を考えるってことでいいか」

誰からも反論が無かったので、お試しで亡者の嘆き階層に移動することとなった。ラツミスの顔から血の気が引いているのが気掛かりだが、どの程度苦手なのかを事前に知っておかないと命に関わるからな。

転送陣で移動した亡者の嘆き階層は予想以上の場所だった。

始まりの階層以上に薄暗く、遠くで頻繁に稲光が見え落雷が轟く。集落に建てられている建造物は適度に古びていて、何故か洋館風の建物ばかりだ。

街灯が至る所に設置されているので、歩くのに不便はない。住民は黒や紺といった色彩を好んでいるようで、服装も街並みも地味な色で統一されている。

住民ぐるみで明らかに狙ってないかこれ。わざわざ恐怖を増長させる演出をしている様にしか見えない。

ハンターも結構な数がいるようで、彼らは鎧やローブといった一般的なハンター装備だ。

「まあ、こんな感じで雰囲気はあるわな。どうだ、ラツミス」

「ひうつ。だ、大丈夫。別に普通かな」

動揺しているなあ。あちこちを見回す姿が完全に挙動不審だ。怖いのはわかったから、もう少し落ち着こうな。自動販売機を背負って震えているラツミスを、ここの住民が不審な目で見ているから。

「取り敢えず、宿屋に行くか……」

ケリオイル団長の顔に苦笑いが浮かんでいる。これは無理そうだと諦め気味だ。正直、俺も駄目だと思う。

この階層に馴染んでもらうのが目的なので、今日は団長とラツミス、ヒュールミしか来ていない。数日、集落で過ごすだけなのだが、明日まで持つかどうかも怪しいぞ。

物音がする度にラツミスが体を縦に揺らすので、視界が激しく動く。中の炭酸飲料大丈夫だろうか。

数日お世話になる予定の宿屋に着いたのだが、ここも雰囲気のある宿屋だ。

建物としては古くもなく外装も立派なのだが、何故蔭を壁に這わした。入り口の扉の前に設置されているランタンから漏れる明かりも、適度な光量で雰囲気はバッチリだ。

二階建てなのだが、二階の隅の部屋の窓だけ外から板が打ち付けられているのは、どういう意味があるのだろうか。あ、その板の間から覗いている女性がいたような気が……きっと目の錯覚だな。うん。

幽霊が現れても何ら違和感のない宿屋だ。ホラーゲームだったら及第点は貰える外観をしている。

「こっ、こっ、こっ、ここで寝泊まりするんですかっ」

動揺しすぎて鶏みたいになっている。ここまで怯えていると、もう帰ってあげたいのだが、当人はまだ頑張るつもりみたいだからな。

「そうだな。あれだ、無理そうだったら何時でも言ってくれ。清流の湖階層に戻るからよ」

「な、な、な、何言っているんねーん。平気でんがなー」

ああもつ、支離滅裂だ。方言も滅茶苦茶になっている。

「はああ。団長、オレがついているから大丈夫だ。ヤバくなったらすぐに連れて帰るぜ」

「お、おつ。そうしてくれ。ハツコンを運ぶ他の方法考えておくからよ」

それが賢明だと思う。ただ、人は慣れる生き物だから、少しの間ここで過ごせばラツミスに耐性が付く可能性も微量ながら残されている。

期待はできないが、温かく見守ることにしよう。

先頭のケリオイル団長が入り口の扉に手を掛けて押すと、扉がギーツと軋みながら開いていく。こういうところもホラーチックなのか。

扉の先はホールになっているのだが、屋外より室内の方が薄暗いってどうなんだ。それに付け加え、インテリアが黒で統一されているところに店主のこだわりを感じる。

そして宿屋には必要ないと思われる肖像画が高い位置にずらっと並んでいるな。薄らと笑みを浮かべているのが不気味に見えるのは、この場の空気のせいだろう。

おどろおどろしい雰囲気出ているな。ラツミス……怯えているのはわかるのだけど、そんなに強く掴まれると。

《1のダメージ。耐久力が1減りました》

指が体にめり込んでいる、めり込んでいる！ メキメキって立てたらダメな音がしているのですがつ。

「いらつしゃいませ……愚者の奇行団様ですね。お待ち……しておりました」

すつと音も立てず目の前に現れたのは、長い黒髪の女性だった。フランス人形が着ていそうな黒のドレスがやけに似合っている。

髪が床に付きそうなくらい長く、前髪が口元まで伸びているので顔が殆どわからず、唇は鮮血を塗ったかのように赤い。その唇がニヤリと意味深に口角を吊り上げた。

「ふいふい……」

あ、限界に達したラツミスが直立状態から、そのまま後方へと倒れた。

お化け対策

ラツミスが倒れたということは、必然的に俺も一緒に床に倒れてしまう訳で、今、俺の上で気絶したラツミスが寝転んでいる。

「おいおい、まいったな。ここまで苦手だとは」

「これでも、ガキの頃に比べれば耐えた方だぜ。ラツミスは部屋まで運ぶとして、ハツコンはどうしようか」

意識を放棄したラツミスは背負子の革紐を外され、ケリオイル団長に担がれている。俺はこのままだと宿屋の営業妨害になるので、一旦ダンボール自動販売機 になっておく。

「これなら誰でも運べるな。女将、宿屋の前にハツコンを設置するが構わないか」

「はい……その方がお話しになられていた……意志を持つ魔道具なのですわ……ふふふ、神秘ですわ」

この人、宿屋の女将さんなのか。占い師とか副業にしたら似合いそうだ。

ヒュールミに抱き上げられ、宿屋の外にそつと置かれた。扉脇とというのが俺の定位置に成りつつある。まあ、自動販売機の設置場所では定番中の定番だから文句はない。

「ほんつとに、ビビりだよな。昔っからああなんだぜ。怖い話とかしたら両手で耳を押さえて、あーあーって叫んでいたっけな。懐か

しいぜ」

昔を思い出したのかヒュールミの目尻が下がり、優しい表情で微笑んでいる。何だかんだで二人はかなり仲がいいよな。二人が会話しているのを眺めていると、仲の良い姉妹にしか見えない時がある。

「いつもなら、とっくに逃げ出しているんだが、今回は譲れないみたいだな」

あれだけ怯えていたら普通は泣きが入って逃げ出すよな。

もしかして、俺を運ぶ人がいなくなると困る人がいるから頑張っ
て耐えてくれているのだろうか。だとしたら、あまり無理をして欲
しくないのだが。

「ハツコン。もしかして、見当違いの事を考えてねえか？ ラツミ
スがなんで意地になって恐怖を克服しよう……って、オレが教え
るのも癪だな」

「あたりがでたらもういっぼん」

今の発言はどういう意図があるのだろうか。意味深な物言いで、
流し目を注いでいるだけで、ヒュールミはそれ以上、語ろうとしな
い。

自分で考えろって事だよな。意地になって克服しようとしている
理由か。敵討ちの為に強くなりたいと願っている彼女としては、こ
の程度の恐怖は乗り越えないと意味がないと思っっているとか。

「まあ、じっくり考えてみる事だな。んじゃ、俺はラツミスの様
子見てくるぜ」

結局答えは教えてくれないのか。立ち去るヒュールミの背に疑問を投げかけたかったが、その言葉を俺は有していない。

わからず終いだ時間が、のんびり考えるところだろうか。

「お、何だこれ。変な物がガラスの向こうに並んでいるが、何だこれ？」

おっと、亡者の嘆き階層での初めての客か。金属鎧を着込んだインターらしき若者だな。額が付きそうぐらい顔を寄せて、商品を覗き込んでいる。

では、いつもの商売を開始するでしょう。

「いらっしやいませ」

「うおっ、誰だ！？ お前らか？」

「ちげえよ。その箱から音がしたように聞こえたぞ」

仲間の一人が指摘すると、今度は三人全てが俺を凝視している。

「こうかをとうにゆうしてください」

「おおおう、マジでこの箱から声がしやがった。硬貨を投入してくださいって何だ？」

三人は騒いでいるだけで硬貨を何処に投入していいかもわからず、慌てふためいているだけだ。やっぱり、普通はこんな言葉だけじゃ通用しないよな。

いつもは立て札を隣に置いてもらい、簡単な取扱説明書を張りつけてもらっているので、初心者でも対応できるのだが、今日は何も

ない状態でどうにかするしかない。

今までなら言葉を繰り返すしか手はなかったが、俺だって自分の体と機能を把握してきている。様々な手段を模索し、幾つかの方法を導き出している。そう、俺は進化する自動販売機なのだ。

まず商品を覆い隠すことになるが、液晶パネルを設置する。そして、そこにとある映像を流す。

「おおっ、箱の中に女がいるぞ。ねえちゃん、これどうやって買えばいいかわかるか？」

若者はパネルに映る女性に声を掛けているが、録画した映像が返事をするわけがなく、映っている女性　ラツミスが無視をしてコインを握った手を伸ばしている。

そして「どれを買おうかなー」と迷いながら人差し指を立てて、相手を指差すような動作をした。その後、屈みこみ立ち上がった彼女の手には、コーンスープが握られていた。捻って蓋を開け、美味しそうに飲み干す。

そこで録画した映像は終わりなのだが、俺は繰り返して流し続ける。

「どういうこった。何でこの女は同じこと繰り返してんだよ」

「これって、幻影じゃねえか。映っている女が小さすぎるだろ。それに動きが全く同じだ」

暫く三人が集まってあれやこれやと討論を続け、結論に達したよ
うだ。

「つまり、この女は俺たちに、この魔道具の使い方を教えている。そうだな」

「いらつしゃいませ」

時間はかかったが、何とか正解に辿り着いてくれた。今度はじっくりと映像を見つめ、使い方を覚えた一人が商品を購入してくれた。

「よっしゃあ、買えたぞ！」

「おー、そうやるのか」

「なるほどなあ」

いつの間にか人が周囲に集まっていて、無事商品を購入できたハインターたちに感心している。興味はあったが何かわからずに観察していた人たちのようだ。

「これはこう捻って開けるんだよな。で、飲んでみるか……くはあ、うめええ！ キンキンに冷えてやがるぜ。五臓六腑に染み渡りやがる」

彼の反応が何よりの宣伝となり、きつかけに次々と商品が売れて行く。物珍しさと、この異世界では未経験の味に面白がって購入していく人が多い。

順調な滑り出しだな。ラッミスが帰りたいた言うまでは、暫く稼がせてもらうことにしよう。

ある程度商品を捌いてわかったのだが、この階層では温かい商品

が良く売れる。住民の服装も厚着している人が多く、どうやら冬とまではいかなくても寒いようだ。

清流の湖階層は初夏に近い気温だったのだが、ここは真逆の氣候らしい。お客の吐き出した息が白くないので10度前後かもしれない。

そんなことを考えていると客足も絶え、通りに人影も減ってきている。薄暗かった辺りは完全な暗闇に支配され、どうやら夜が訪れたようだ。

日中も薄暗いとはいえ、夜と昼間の明るさは雲泥の差がある。集落内には街灯もあるのだが、その灯りを闇が侵食しているかのよう、微量な光を漏らしているだけで十分な明かりだとは、お世辞にも言えない。

自動販売機になつて夜は何度も経験しているが、この闇夜は違和感がある。不自然なぐらいに暗いのだ。辺りの建物の窓から明かりは漏れているのだが、明るいのはそこだけで周辺を全く照らしていない。

黒の世界にポツンポツンと光が点在するだけで、あとは一面の闇。ここまで暗いと、そりゃ誰も歩き回らないか。雑音も存在せず、現実と虚構の区別がつかなくなりそうなぐらいに、非現実的な光景だ。亡者の嘆きと名乗るだけのことはありそうだ。ここの闇は特殊なのかもされないな。魔物を討伐するにしても夜は避けて、昼間行動するべきだ。

人っ子一人いないので商売にならないと省エネモードに移行しようとする、向こうの方から、ほんのり光る何かが寄ってきた。

手に灯りを持っているのだろうか。その灯りは近づくにつれ徐々に大きくなっていくのだが、その光に違和感を覚えていた。

光に照らされるべき人がいないのだ。その灯りは単独で浮いている。ゆらゆらと揺れながら、人であるなら腰の高さを維持しながら

迫ってくる。

嫌な予感しかしない。足があるなら、直ぐにでも宿屋に逃げ込みたいのだが、残念ながら自動販売機に逃走手段は存在しない。

この体になって精神が強くなったと思っていたのだが、それは勘違いだったようだ。本体内部から異音が響いている。自動販売機になった俺が少しビビっているだと……。

恐怖と好奇心の板挟みになりながら、俺は目を凝らしそれを注意深く観察した。

それは炎を纏う頭蓋骨だった。って、炎飛頭魔じゃないか！ なんだ、ビビッて損した。普通ならホラーな光景なのだろうが、相手の弱点もわかっているし何度も倒してきた、今更怯える必要がない。

正体がわかったら余裕が出てきたぞ。恐怖は掻き消えたが、問題は魔物が集落内に現れたことだよな。夜になると当たり前のように集落を魔物が徘徊するとなると、夜は迂闊に出歩けないのか。

っと考えている間に、他にも炎に包まれた頭蓋骨が現れている。見える範囲だけでもその数は八。何故か建物内部には入ろうとせずに彷徨っているだけで、奴らの目的がさっぱりわからない。

あれっ、今度は炎飛頭魔と一緒に骸骨が現れた。こいつは頭もあるただの骸骨だな。いや、動いていることが普通じゃないか。おっ、半透明の人間も出てきたぞ……野外のお化け屋敷状態だ。

これだけ、堂々と何体もいると怖くないな。というよりホラー要素が薄い。幽霊っぽい半透明の人も普通の服装で歩いているだけだし、人を脅かしたいのなら、もうちょっと工夫が欲しい。下半身が千切れて内臓を引きずりながら、恨めしそうな声を漏らし手で走るとか、日本のお化けを見習ってほしいところだ。

呑気に観察してられるのも、どの魔物も建物内部に入ろうとしていないからだ。この集落の住民が何かしらの対策をしているのかもしれないな。

念の為に 結界 を発動しているのだが、魔物が寄ってこない。俺に興味がないようだ。

今後、この階層を探索することになるのだから、色々試しておくのも悪くないよな。対アンデッド用の商品なんてあったか。

んー、定番なら塩？ 塩か……ありそうで、意外と自動販売機に置いてない商品の一つなんだよな。岩塩なら購入したことあるから、一応試してみるか。

透明な筒状のケースに入った岩塩を取り出し口に落とし、ケースだけ消して岩塩を 結界 で飛ばしてみる。狙ったのは骸骨だったのだが、狙いが逸れて幽霊に命中 素通りしたな。幽霊だけに物理攻撃を一切受け付けないのか。

コロコロと地面を転がる岩塩を魔物たちが一瞥しただけで、特に何の反応も示してくれなかった。効果は全くないと。

他に効き目がありそうなのは……あ、あれはどうだろうか。京都の映画村で有名な町にあった 仏像自動販売機 で購入した仏像と数珠。

俺が知っている変わり種商品トップ10に入る逸品だ。信じられないかもしれないが、本当に売っていたのだ。手のひらサイズでかなり小さいのだが、ちゃんとした仏像だった。

相手がお化けなら効果があるかもしれない。あの時購入した仏像 二体と数珠を 結界 で弾き出し、じつと見守ってみる。

魔物たちは謎の物体に興味をもったようで近寄っては来るのだが、何の影響も与えていない。いや、数が足りないだけかもしれない。やるだけやってみるぞ。

「よー、ハツコン。昨日は眠れたか……うおおっ、なんだこれ！
何で地面に妙な形をした人形とか石が転がってんだ」

もう、朝なのか。昨日は魔物たちを相手に岩塩や仏像の効力を試
していたのだが、徹夜で朝までやっていたとは。

良い考えだと思ったのに、異世界は宗派が違ったかつ。

特訓

亡者の嘆き階層に来てから二日目の朝を迎えた。

相変わらず薄暗いが、あの夜を経験すると、この程度の明るさでもホツとするな。

ケリオイル団長は早朝に転送陣で他の階層に移動したようだ。この階層の攻略メンバーを連れてくると言っていたな。あと、俺を運べるような人材がいなか探してくると。

ラツミスまでとは言わないが、荷台に乗せた俺を運べるぐらいの力があればいいのだが。

「ハツコン様……昨晩はお楽しみになりましたか？」

今後のことを思案していると宿屋の女将さんが隣に寄り添っていた……いつ来たんだ。全くと言うか、これっぽっちも気づかなかつた。

今も視界に捉えているというのに存在感が皆無。この人が幽霊と言われても納得してしまいそうだな。

「ここは……夜になると……魔物が集落の中にも現れますので……腕に自信がある御方以外は……外出禁止なのですよ……」

昨日の謎は解けたけど、先に教えて欲しかったな。

「この魔物は……生ある物を羨みます……なので、ハツコン様には無害……襲われることもなかったと思います……」

だから、俺に寄ってくるわけでもなく、建物の中を覗き込んでい

ただけなのか。

「ハツコン様は……我々よりも……彼ら寄り……いえ……失礼しました……」

意味深なことを口にして立ち去るのは、止めてもらいたいのだけれど。あの姿でそれっぽいことを口にされると、無条件で信じてしまいそうになる。

しかし、何が言いたかったのだろうか。人間よりも幽霊とかそっち系だと言いたかったのかね。だとしたら間違いではないよな。魂が自動販売機に乗り移っているような存在だし。

でも、女将さんより幽霊寄りと言われるのはどうかと思う。

「ハツコン。ごめんね、昨日は」

女将さんと入れ違って現れたのは、意気消沈したラツミスだった。俯きながら俺の隣に並ぶと、腰を落として背を預けてくる。体が震えてはいないようだが、お世辞にもいつもの状態だとは言えない。

「いらっしやいませ」

「子供の頃から怖いのが苦手で、少しは克服できたかと思っていたのに、全然だめだった。はあああああああああああああ」

口から魂が抜け出そうなくらいの落ち込み具合だ。俺も怖くて気絶する人なんて初めて見たが、当人としては深刻だよな。

「ずっとハツコンと一緒にいるって言ったのに、こんなんじゃないダメだよな」

「ごんねん」

「ほんと、残念だよね……」

駄目だ。ネガティブモードに入って、言葉をそのまま受け取ってしまったている。どうやったら励ましてあげられるだろうか。

「ったく、らしくねえな。考える前に行動するのがラツミスだろ。苦手なら克服すればいいだけだ。そうだろ？」

ヒュールミも来ていたのか。落ち込むラツミスを見かねて、腕を組んだ状態で提案を口にした。

そうだよな、どうにかしたいと思っているなら何とかすればいい。単純だが、こんなにわかりやすいこともない。

「そ、そうだね！ うん、苦手なら慣れたらいいだけだよ！」

「良く言った。じゃあ、オレが恐怖を克服する特訓してやるよ」

「特訓……うん、苦手のままじゃダメだよ。はい、教官お願いします！」

拳を振り上げ、やる気を出すラツミスを見てヒュールミが満足げに微笑んでいる。若干楽しそうに見えるのは気のせいだと思いたい。

「じゃあ、まずはこの集落を散策することから始めようぜ」

「お散歩……ですかっ」

何でシリアスな顔つきになって唾を飲み込んだ。難しいことは一

つも言っていない筈だが。

大きく深呼吸をして体を一回転させて360度確認すると、ビシツと額に手を当てて敬礼のポーズを取った。

「無理そうです！」

「折れるの早すぎだろ。あのなあ、空はただの曇り。そこら辺はちよつと薄暗いだけ。別に怖かねえだろうに。清流の湖でもこんな日あつたる」

「そうだけど、ここは雰囲気が違うの。清流の湖階層が蛙人魔だとしたら、ここは王蛙人魔なのっ」

わかるような、わからないような例えだな。

でもまあ確かに、この場所はただ暗いだけじゃなくて空気が重く湿気がきつい。俺の体に水滴がついているからな。

「んじゃ、諦めるか？ とつと清流の湖に戻って、ハツコンはオレたちと一緒に探索するから、暫く待っていてくれよ」

「それは、イヤ！」

「だったら、頑張るしかねえよな。つてことで、まずはここを真っ直ぐ行った先に雑貨屋があるから、そこで回復薬を買って来てくれ」

「う、うん。じゃあ、ハツコン行こうね」

そう言ってラッミスがいつものように俺を背負う為にしゃがみ込んだのだが、その背に置かれたのはヒュールミの手だった。

「独りでだ。独りで行くうな」

「嘘、でしょ……」

「マジだ。そんなこともできないようじゃ、集落の外になんて一生いけねえぜ」

「や、やってやるわ。ま、任してよ。子供じゃないんやから、余裕やって」

ラツミスは相変わらず口調で動揺が手に取るようにわかるな。ここは集落の大通りだから、人通りもそれなりにあるから怖がりでも大丈夫だろう。

「う、うん。うちならやれる、いける、負けへん」

大丈夫かな……拳を握りしめてぶつぶつ言っているけど。

覚悟を決めたラツミスが雄々しく立ち上がると、キツと前を見据えて堂々とした足取りで進んでいく。十歩ほど。

そこで、ちらっと一度こつちを振り返る。ヒュールミが微笑みながら手を振ると、引きつった笑みを浮かべ小さく手を振り再び歩きだした。

おっかなびつくり歩を進める彼女を見てふと思った。初めてのお使いに向かう子供を見送る親の心境は、こんな感じなのだろうか。更に数歩進むが、人とすれ違う度に大袈裟に体を揺らして驚いているな。それでも、足を止めずに歩いている。頑張れ、ラツミス。

あっ、近くの民家の扉が大きな音を立てて開いた。その場で2メートル近く跳び上がると、くるっとこつちに振り返って、全力で駆け戻ってきている。

「ハッコオオオオオン！ 無理iiiiiiii」

あーあ、半泣きじゃないか。進むのに数分かったというのに、戻るときは五秒程度だった。俺に飛び付くと抱き付いたままガタガタ震えている。

よしよし、怖かったな。ほら、温かいコーンスープ飲んでいいから落ち着いて。甘いジュースの方がいいかな。じゃあ、両方落とすから好きな方飲んでいいよ。

「ラツミス……ハッコンも甘やかすなよ……」

額に手を当ててヒュールミが大きく息を吐いた。すまん、甘やかしている自覚はある。

でもなあ、ここまで怖がっているのなら無理せずに撤退した方がいいって。ハンターとして強くなりたいたいなら、いずれ克服しなければならぬけど、今は徐々にやっていくしかないだろう。

「もう、帰るか？」

「ハッコンを背負ったらいけると思う。うん、きつといける！ ほら、うちはハッコンを運ぶ役だから、ハッコンを背負ってないとダメだと思うの、うちは！」

ラツミスが必死だ。求められるのは嬉しいのだけど、完全に保護者の立ち位置だよな。

「じゃあ、ハッコン背負っていいから行ってこい」

「うん。ハッコンと一緒になら平気だよ。ねっ、ハッコン」

だといいが。でもまあ、お化け屋敷だつて一人で行くのと自動販売機を背負つて行くのでは雲泥の差が……自動販売機背負つてお化け屋敷に入る人を見たことないな。

「ハツコン、ちゃんという!?　ちゃんと背中にいる!?」

「いらつしゃいませ」

「ほ、本当!　本当にいるよね!」

「いらつしゃいませ」

「背中から離れたらダメだよ!　絶対にダメだからね!」

「いらつ　しゃいませ」

自転車に乗れない親戚の子供の手伝いをした時を思い出すな。

自力で動けない俺が離れるわけがないというのに、居るかどうかわからない不安になるって事は、これだけの重量が背に乗っているというのに殆ど重さを感じていないってことか。それだけの力があれば、夜に見た魔物ぐらい一撃粉碎できるのにな。

「頑張るから。うち頑張るから。だから、一緒に、一緒に探索しようね」

震えながらも歯を食いしばり、一步一步踏みしめながら歩いている。

そうか、鈍い俺でもようやく今わかった。ラツミスは俺と一緒にいる為に、こんなにも必死になって怖さを乗り越えようとしているのか。

だったら、俺も全力で応援して共に恐怖を乗り越えるべきだよな。雑貨店までは結構距離が残っている。彼女が少しでも怖がらずに目的地に到達する為に何か機能で使えそうなのは。

気持ちを安らげる効果……リラックス……となると香りか。バラの臭いとかグレープフルーツの匂いがいいと聞いたことがある。アロマテラピーにハマっていた友人が力説していたような。あと、コーヒーの匂いも落ち着くらしい。

となると、花の自動販売機や果物の自動販売機に変化するのがいいのか。いや、待てよ。その自動販売機になったところで、漏れ出る匂いなんて極僅かだ。もっと、直ぐに判別できるぐらいの強い香りを発生させるには　これを取るか。

機能の欄にあった　芳香器　を選ぶ。これはトイレ等で悪臭を紛らわせるタイプの物ではなく、販促用の　芳香器　だ。

自動販売機に簡単に組み込めるタイプの物で、香りの種類も百種類以上あり、人感センサーで人がいるのを察知すると、機械に組み込まれている香りのカートリッジから芳香を放つ装置である。この機能を生かす為に　人感センサー　も取得しておいた。

売っている商品の香りでも人を引き付ける為に使われる装置なのだが、その匂いは結構強めになっているので、背負っているラッミスにも届くはずだ。

百種類ある匂いの中にはグレープフルーツとコーヒーの香りもあるな。効果を期待して香りを放ってみるか。

「あー、何か良い匂いがしてきた。柑橘系かなあ」

おっ、ラッミスの背中から伝わってきた震えが消えたぞ。これはリラックス効果なのか、ただ単に気が紛れただけなのかはわからないが、恐怖心が薄れたならどっちでもいい。

この調子でラツミスの為に色々やってみるぞ。

幾つか試してみた結果、恐怖心を誤魔化したのは 芳香器 の香りと ジュークボックス の音楽だった。一番効き目があったのは ジャズを聞かせながらコーヒーの香りを漂わせた時で、フォルムチ エンジには二時間縛りがあるので、基本は 芳香剤 メインでやって、いざという時だけ音楽もプラスするという作戦が有効だと思う。

まあ、音楽の演奏があるとラツミスは落ち着くようだが、周囲からの奇異の視線が半端ないことになるので、そこは気づかないで欲しいところだ。

メンバー

毎日、数時間だが過酷な特訓をこなしてきたラツミスはこの環境に適応しつつあった。

特訓内容は俺を背負って集落内でのお使い。夜一人で宿屋内のトイレに行く。俺を背負って集落内の散歩。

あまりに辛い内容に何度も心が折れそうになっていたが、不屈の精神で乗り越え、俺を背負った状態なら集落内を自由に動けるようになった。甘いかな、俺って。

まあその代わりに、いい香りを漂わせながら巨大な鉄の箱を背負って彷徨う少女という、この集落での怖い噂話の一つ増えたらしいが些細なことだろう。

「ヒュールミ、うちはもう完璧だよ！ 怯えることもなくなったから」

急に脇道から人が出てくると未だに跳び上がりそうになるぐらい驚くことはあるが、確かに以前と比べたら着実に進歩している。

「そうかそうか。オレもラツミスの頑張り見てきたぜ。じゃあ、次のステップに進むとしようか」

「何でも、ドンとこいよー！」

胸を力強く叩き自信満々だ。この数日の特訓でかなりの自信を手に入れたようだ。

「おお、言うじゃねえか。それなら、次はハツコンを背負わずに、

集落内を」

「無理です勘弁してください」

言い終えるよりも早く腰を九十度曲げて素早く頭を下げた。何と
言う潔さ。一瞬の躊躇いもなかったな。まだ一人でぶらつくのはハ
ードルが高いようだ。

「探索でもハツコンが常に一緒だから大丈夫だとは思うがあれだな、
問題は集落の外に出ても平気かって話だ」

「だ、大丈夫だよ。ほら、他にも人がいるわけだし。一人じゃない
し」

「まあ、そつか。そついや、予定では今日探索メンバーを連れてく
るとか言ってたな団長」

おつ、ようやく本番の死霊王搜索を始めるのか。いつもの愚者の
奇行団の面々に加えて誰か別の人も参加するのかな。アンデッド系
が多いから、僧侶とか神官みたいな人が来るのだろうか。

この世界での回復職は俺の知りうる限りでは、傷を癒せる系統の
加護を所持している人が担当するらしい。早朝常連四人衆のお婆さ
んが、その加護持ちだという話だ。

傷を治す魔法も存在するらしいので、俺としてはシスターっぽい
女性や神官戦士風の男性を期待したい。

「つと、ここにいたか。今回、探索する面子連れてきたぞ」

この声はケリオイル団長か。特訓の為に集落内をうるちよろして
いた俺たちを探していたようだ。

二人が振り返り、俺も視界を団長へと向ける。

団長の後ろには大食い大会で活躍したベリーショートの吸引娘シユイと大食い団四人。紅白双子がいる。ここまでは、いつものメンバーだが他にも参加者がいるようだ。

「お久しぶりです、ハツコンさん。それにラツミスさんとヒュールミさんも」

漆黒の鎧に爽やかスマイル。ミシユエルも同行するのか。戦力としては申し分ない人材だが……これだけの大人数、コミュ障の彼は大丈夫なのか。

「ミシユエルはお前さんたちも知っているだろ。今回、お試しで愚者の奇行団に加入することになった。俺たちとしてみれば孤高の黒き閃光が仲間になってくれるなら、もろ手を挙げて歓迎するんだが。今回の遠征でうちの団を見極めるそうだ。なあ、ミシユエル」

「いえいえ、皆様の足を引っ張らないか、私が支障なく共同作業を行えるか。そこを知っておきたいだけです」

謙遜しているように見えるが実際は後半部分が重要なのを、この場では俺だけが知っている。今も普通に受け答えしている様に見えるが、鎧の中は緊張で汗まみれだと思う。

追加は彼だけのようだが、聖職者関係はこの世界にいないのか。少し残念だ。

「んじゃ、適当な店に入って遠征内容と簡単な方針を説明するぜ」

そう言った団長に促されるままに、近くの飯屋に全員が流れ込んでいく。

そこは中規模の店で飯時ではないので他に客はなく、急な団体に戸惑っているように見える。

「こんな大人数ですまん。暫く貸切りにさせてもらえないか」

団長は駆け寄ってきた給仕の女性に、金貨を一枚親指で弾いて渡した。

それを見た途端に態度をコロツと変え、店の奥の丸い大テーブルへと案内してくれると、入り口の扉前に何か看板のような物を置きにいった。たぶん、貸切り中みたいなのが書かれているのだろう。全員が席に着き、俺も椅子を一つどけた後に置かれた。

「食い物と飲料は適当に頼むぞ。ああ、お前ら物欲しそうな目で見んな。わかってるっての、食い物大量に頼んでやるよ」

シュイと大食い団に潤んだ瞳で見つめられ、団長が大量注文している。この五人がいるとエンゲル係数が一気に跳ね上がるよな。飲食店としては嬉しい客だが。

「でだ、飯は食いながら構わねえから聞いてくれ。今回はここにいる全員で死霊王を探し出し、葬るのが目的だ。あー、副団長は事情により今回は別行動となっている」

「副団長怖がりっすからね」

「きつとあれだぜ、怖がっている姿を団長に見られるのが恥ずかしいんだ」

「マジか白。副団長にそんな可愛らしい一面があったなんて意外過ぎるぞ」

団員の囁き合う声で副団長不在の理由が一発で理解できた。つまりラツミスと同じなのか。気が強そうな人ほど怪談苦手だったりするからな。

しかし、冷静沈着で補佐役のフィルミナ副団長がいないと、遠征が心配になってきた。誰が仕切り役をするのだろうか。

「ちなみにだ、大食い団に協力を仰いだのは、こういった雰囲気にもまれることがないってのと、索敵能力に長けているからだ」

「良くわかんないけど、人間は暗い所と死人魔とか骨人魔とか死霊魔とか苦手なんだってね。ボクたちにはわからない感覚だよ」

「死人魔は腐った肉の臭いがやだけど。あの臭い食欲がなくなっちゃうから」

ミケネの意見にペルが大きく頷いて顔をしかめている。ホラー要素に対する恐怖の感覚が人間と獣人では異なるようだ。そう考えると大食い団は適しているな。

おまけに耳と鼻の良さ。いざという時の足の速さ。これはかなり貴重な能力と言える。

「今回は探索範囲が広く、辺りは闇だ。夜目が利く点もこつちとしてはありがたい」

タスマニアデビルは確か夜行性だったから……うん、最適な人材かもしれないぞ。

「シユイと赤白は強引に連れてきた」

「横暴つす！ 私も怖い弱いのにっ！」

「俺もどつちかと言えば苦手なのにつ！」

「俺も俺も！」

文句たらたらの団員に向かってケリオイル団長は満面の笑みを向け「お前らに拒否権はねえ」ときっぱりと言いつ捨てた。

団員たちも負けじと罵声を浴びせ、醜い言い争いへと移行している。見慣れた光景なのでラツミスたちは止めることもせず、運ばれてきた食事を黙って口に運んでいく。

ミシユエルは状況を理解できていないが口を挟む勇気もないようで、笑顔を無理やり顔に貼り付けたまま硬直している。

暫くしてお互いの語彙も尽きたようで、愚者の奇行団の面々は肩で息をしながら深々と椅子に腰を下ろした。

「でだ、話を戻すぞ。亡者の嘆き階層の敵で多いのは死人魔、骨人魔、炎飛頭魔、死霊魔となる。この魔物についての説明は、ヒュールミ頼んでもいいか」

「おう、任せてくれ。炎飛頭魔は迷路階層で散々戦ったから省くぞ。つと、ミシユエルは説明いるか？」

「いえ、大丈夫です。続けてください」

「そうか。んじゃ、まずは死人魔だ。その名の通り死んだ人間が動いている魔物だな。腐って肉が殆ど削げ落ちている個体もあれば、生身の人間と変わらないものもある。特徴として動きは鈍いが力が強い。組み付かまれたり、咬まれたりしないようにしてくれ」

つまり、ゾンビだな。ホラー映画だと咬まれたら感染して広まるというのが定番だが、その事に関しての説明がなかったから、その点は心配しないでいいのだろう。

「骨人魔は動く骨格標本だな。肉が全て削ぎ落ちた死人魔の慣れの果てだという研究者もいるが、オレの意見は異なる……って、それはどうでもいいか。動きが速いが力は弱いという特徴があり、あれだ、死人魔と正反対と思って間違いはねえぜ」

骨って正直弱そうだな。某映画でも骨の敵って簡単に破壊されていた。ヒュールミの言い方も緊張感がなく雑魚敵のようだな。

「んで、最後は死霊魔だが、半透明の体で直接攻撃が通用しない。って言うところ厄介そうだが、弱点は光だ。強烈な光を浴びせると簡単に消滅する。灯りを持っていけば寄り付きもしねえぜ」

そうなのか。なら、俺が狙われることはないのか。夜は常に光を放っておいた方が良さそうだな。

「まあ、ここらが頻繁に現れる魔物だが、それ以外にも強い個体や別の魔物も少数ながら目撃されている。油断はしないでくれ」

「説明ありがとよ。ヒュールミがいると情報収集の手間が省けてありがたいぜ。明日の早朝出発予定にしている。各自準備しておいてくれよ。まずは半日ほど探索して集落に戻る。これを暫く繰り返す。荷物はそんなにいらねえからな」

初めの内は日帰り探索を繰り返すのか、ラツミスの事を考えるとそれが良いと思う。夜は魔物が強化されるようだし、日帰り中に敵の情報が集まるのがベストだけど。

そんなことを考えながらチラリと隣に視線を向けると、俺の体に指をめり込ませて壊れた機械のように何度も頷いているラッミスがいた。

だ、大丈夫かな明日から。

死人魔

自動販売機である俺、ラツミス、ヒュールミ、ケリオイル団長、シユイ、紅白双子、大食い団、ミシユエルという総勢11名という大所帯で探索に出ることとなった。あと、幌付きの荷猪車も一緒だ。これだけいればラツミスが怯えることはないだろうと楽観的な気持ちで集落の外に出たのだが。

「相変わらずおどろおどろしい所だぜ」

「急用思い出したから帰るよ、白」

「そうだね、赤」

「宿屋に荷物忘れてきたっす」

愚者の奇行団の団員が一齐に回れ右をして帰ろうとしたところを、団長に捕まっている。半分は冗談でやっているのだろうが本気度も結構高いよな。そう思わせるぐらい辺りは雰囲気があった。

雑草一本生えていない荒れ果てた大地の至る所に墓石が突き刺さっている。それも綺麗な状態ではなく所々が欠けていて、原形を保っているのは今のところ見当たらぬ。

葉が一枚も存在していない枯れ木が、ぽつりぽつりと存在しているのだが、その枝には先端が輪になった荒縄が括られ風に揺れている。

何と言うか……風情があるな。ハンターの成れの果てっぽい古びた鎧や武器が転がっているのもホラースポットとしてはポイントが

高い。

また、時折雷鳴が響き、稲光の演出も評価したいところだ。とまあ評論家の様な意見を胸に抱きながら、探索メンバーに視線を向けたのだが、平然としているのは団長、ヒュールミ、大食い団だけだな。

「何で集落の外にお墓を立てたんだらう」

「そりゃ、ミケネあれだ。何でだ」

「ミケネもショートもわかってないわね。きつと気まぐれよ」

「そうかな……でもお供え物しても魔物に食べられそうでもつたいないよね」

大食い団は、やっぱり人間とは恐怖を覚える感覚が異なるようで、全く怖がっていない。こういう状況では頼もしい限りだ。

「ここはダンジョンで死ぬと勝手に墓が現れるそうだが。名前も自動的に刻まれる親切設計らしいぞ」

ヒュールミも動じていないな。無造作に墓石に近づき、砂埃を払って名を確認する余裕すらある。

ミシユエルは笑顔を張りつけたまま微動だにしていない。一見、心乱れることなく冷静なのだなと感心しそうになったが、瞳孔が一点を見つめたままだ。恐怖のあまり、硬直していないかこれ。

ラツミスは俺を背負った状態で地面だけを見つめて、精神への被害を最小限にとどめているようだ。

「お前ら、動揺しすぎだ。確かにちつとはうすら寒いが、それだけ

「だろ。雰囲気には呑まれるなよ」

団員たちは表情を引き締め、顔色はお世辞にも良くないが腹は決まったようだ。

ミシユエルはハツとなると一つ咳払いをして、いつもの余裕のある爽やか笑顔を貼り付けている。

少し動揺はしたが、直ぐに元の状態へ戻れた彼らなら問題ないだろう。ラツミスは地面を見つめたままなので戦闘には期待できないが、荷物運び係をするだけなら、たぶんいける。いけるよな？

「はああ、まあ、あれだ今日は適当に探索してみるか」

ケリオイル団長が珍しく帽子を脱いで頭をボリボリと掻いている。前途多難な状況に呆れているのだろうけど、気持ちはわからないでもない。

現状で一番頼りになりそうなのが大食い団となったら、嘆きたくもなるだろう。

団長の指示に従い適当に辺りをぶらついているのだが、敵との遭遇率がかなり高めだ。三十分程度うるついただけで、十体以上と戦っている。

と考察している今も敵が現れたか。

地面が盛り上がり、そこから絶賛肉が腐敗中で白い骨が見える腕が生えてくる。

他にも既に白骨と化している腕や頭蓋骨が、そこら中から土を押しつけて現れているのだが、律儀に墓石の近くから出てきているな。

ゾンビ　死人魔と骨人魔が合計八体のようだが、一呼吸する間に遠距離攻撃で四体が破壊され、残りの四体も全身を地面から抜き出す前に、接近した大食い団の牙と爪で砕かれた。

効率的な倒し方だとは理解しているのだが、敵が若干哀れだな。

怯えていた割には愚者の奇行団の団員は動きにキレがあり、戦闘をそつなくこなしている。ミシユエルも戦いになるとイケメンモードが発動して問題ないようだ。

となると残るはラツミスなのだが、敵が現れても息を呑んで硬直するだけで、悲鳴も上げず逃げもしないので俺的には、かなり進歩していると思う。

その後も順調に敵が倒されていくが、ラツミスは俺を運ぶだけで精一杯のようだと戦闘に参加することはなかった。

夕方になる前に集落に戻った一行は宿屋へ早々に引込んだ。

俺はいつものように屋外でポーッと星も見えない夜空を眺めている。

ここの魔物たちが俺に危害を与えないと知っては、余裕を持って夜は魔物観察と洒落込んでいる。気分的には高価そうな椅子に腰かけてワイングラスを傾け、ホラー映画鑑賞をしている感じだ。

今日も懲りずに魔物たちは集落内を彷徨い、明かりの漏れる窓の中を覗いている。数日観察して思ってたのだが、表情の変化しない顔だというのに、何故か羨ましそうに室内の様子を眺めているように見える。

普通の魔物と違い、ここの魔物は死んだ人間をベースにしているという噂は眉唾ではないのかもしれないな。

「あーっ、あ、あ、ああああ」

考え込んでいると至近距離から声が聞こえたので、ふと視線を正面に向けた。

俺の気づかぬ間にかなり距離を詰めて来ていたようで、顔の肉が削げ片方の眼球が零れ落ちそうになっている腐敗した顔と、至近距離で見つめ合う羽目になっていた。

あ、うん、この距離は結構きつい。おまけに俺の体から溢れ出し

た光に照らされているので、陰影がくつきりとして迫力が増している。

思わず悲鳴が「こうかをとくにゆうしてください」 出ないな。こういう場面でも定型文しか出ないこの体が恨めしい。

自分の体から発せられた、この場に相応しくない言葉に驚きも恐怖心もすつと引いた。自分で言うておいて冷めるとは。

冷静さを取り戻したついでに、じっくりと観察してみるか。目の前にいるのは死人魔で間違いないだろう。背丈が低いのでおそらく子供。

俺が物珍しいのか「あーあー」言いながら残っている片方の目が俺を見つめている。人をベースとしているというのが本当なら、この死人魔は幼くして命を失った子供が魔物になったということになるのか。

そう考えただけで、この死人魔を恐ろしい存在だとは思えなくなってしまった。俺に危害を与えたいわけじゃなく、子供としての好奇心で俺を見ているのだとしたら、邪険にするのは可哀想か。

「いらつしゃいませ」

「あーあーう、あああああ」

俺が声を掛けると首を傾げている。見た目はあれだが中身は人間だった頃の記憶が残っているのだろうか。そうだとしたら、これから倒すのがきつくなるな。まあ、俺が戦う訳ではないのだが。

って、こら、べたべた触るんじゃないやありません。指紋どころか腐肉が付いてる付いてる。ああもう、これあげるから。

飲めるかどうかは不明だが、金髪ツインテお嬢様にも大好評なオレンジジュースを取り出し口に落とした。

ガタンと缶が落ちる音に反応はしたが、それが何かは理解できない

いのか。じゃあ 結界 でオレンジジュースを弾き飛ばしてみるか。子供死人魔の隣を通り過ぎて地面に転がったジュースに反応して振り返ると、ゆらゆらと体を揺らしながらおぼつかない足取りで、ジュースの元へと向かった。

ゾンビ映画にありがちな音に過剰反応するタイプのようだな。

オレンジジュースの缶を両手で掴むと持ち上げ、蓋をどうするかと思っで見守っていたのだが噛り付いた。アルミン缶を簡単に貫通した歯の隙間から橙色の液体が溢れ、子供死人魔の体を濡らす。

そのまま、アルミンごと咀嚼を続けると満足したようで、闇の中へと消えて行った。思いもしない遭遇だったが、彼とはもう二度と会うこともないだろう。妙な一夜だったが、不思議と嫌な気持ちはしなかった。

二日目の探索を終え、またも宿屋の外で黄昏ている。

ラツミスは相変わらず戦闘には参加していないが、ちゃんと前を向いて戦闘を眺めるぐらいはできるようになってきた。うん、この調子で頑張っていこう。

「あーう あああああ」

また死人魔や死霊魔が湧いてきたか。今日も今日とて深夜徘徊をする為だけにやってきたようだ。

そんな魔物たちを眺めていると、一直線に俺を目掛け歩み寄る個体があった。あの小さな死人魔はもしかして昨日と同じやつか？

腐った顔と抜け落ちた髪形が似ているが確証はない。何かわかりやすい特徴でもあればいいのだが、腐りかけの顔を判別するのは難

しいな。同じ死人魔ならオレンジジュースを出せばわかるか。

昨日と同じくオレンジジュースを結界の外に弾くと、それを拾い、また缶ごと齧って満足そうに去っていった。あれ、もしかして懐かれているのか。いや、まさかな。

三日目の夜。また来たぞ……子供死人魔。

子供らしく味を占めたのだろうか。魔物になっていても子供としての習慣や本能の残留が、その腐敗した体に僅かながらこびり付いているのかもしれない。

こんなことに意味はないのかもしれないが、俺はこの子に今日もオレンジジュースを与えた。自分でも何がしたいのかわからないのだが、この子との交流が深夜の楽しみになりつつある。

四、五、六日目過ぎた。探索は順調で今日は初めて集落外で夜を過ごすこととなった。といっても、集落から徒歩10分程度しか離れていないので、いざとなったら逃げ込むことになっている。

あれから毎晩現れていた子供死人魔には悪いことしたな。今日はオレンジジュースを渡せない。まあ、明日には帰るから一日だけ我慢してもらおう。

「ハツコン、今日は傍で寝させてね」

皆は火を囲んで輪になっているのだが、俺は直火を避けて少しだけ離れた場所に置かれている。その俺の前に毛布に包まったラツミ

スが背を預けて座り込んでいる。

今日一日、怖いのを我慢して頑張ってくれたからな。一緒に寝ることぐらい喜んで受け入れるよ。

「いらっしやいませ」

「ありがとうね、ハッコン」

極度の緊張で精神が摩耗していたのだろう。ラツミスはあつという間に眠りに誘われた。

お疲れさま、ラツミス。また明日も一緒に頑張ろうな。

熟睡するラツミスを危険から守り抜く為にも、周囲の警戒は怠らないでおこう。今日の夜の見張りは大食い団からミケネとショートの比較的しつかり者コンビ。それに紅白双子というラインナップだ。彼らなら敵の察知も対応もばっちりなので、安心して任せていられるのだが、この異世界は何が起こるかわからない。警戒する人数が多くて損はないだろう。

今日はこんな場所で料理する気にもならなかったようで、全員が商品を購入してくれたので悪くない収入だった。

深夜に差し掛かり、見張り担当も少し気が緩み出した頃、俺は微かな音を捉えていた。

「あ……あああつ……」

死人魔か。一体だけだが、こちらに向かって来ているようで徐々に声が大きくなってくる。

「赤、皆起こすか？」

「一体だけなら大丈夫だろう、白」

大食い団の二人はそのまま警戒を続け、俺の方向から流れてくる音には紅白双子が対応するようだ。

二人が俺の横に並んだので、敵が良く見えるように光量を増した。闇に浮かび上がったのは小さな死人魔……って、この個体は！

「子供か。可哀想だが成仏してくれよ！」

「ざんねん」

飛び出した赤を止める為に最大音量で叫ぶが、彼は振り返ることなく槍を子供死人魔の腹に突き刺した。

「何だ、ハツコン。急に大声を出して、どうしたんだよ」

赤は意味も解らず戸惑った顔でこっちを見ているが、そんなことはどうでもいい。今の子供死人魔は、まさか、あの深夜に来ていた個体……なのか。

「何だ、穂先に何か引っかけたってんぞ。え、これって、ハツコンの飲み物の容器だよな。こいつ、どこで手に入れたんだ」

彼の槍が貫いたのは間違いなく、オレンジジュースの缶の破片だった。

赤に怒るのはお門違いなのはわかっている。彼にとって子供死人魔はただの魔物だ。素早く処理して称賛されることはあっても、非

難されることはないのだ。

わかつている、わかつているが……こちらに向かって手を伸ばした状態で倒れ伏す、この子を見ていると配線がショートしそうになる。

きっとこの子は俺を見つけ、いつものようにジューズを貰いに来たのだろう。だけど、それはただの憶測で、本当は人間を襲いに来たのかもしれない。

そうだ、今日だっていつも買いにくる時間より遅い。この子は魔物なのだ人を襲うのは本能であって

「赤、その個体、手に何か持ってないか」

白の言葉に釣られて視線を飛ばすと、伸ばされた子供死人魔の手には硬貨が握られていた。

「まさか、買い物しようとしていたのか。いや、ありえないよな、まさかな……」

「その死人魔かはわからないけど、遠くからこっちをじつと見ている個体はいたよ。ちょっかい出してこないから無視していたけど」

話に割り込んできたのはミケネだった。夜行性で夜目が利く彼らの言うことなら間違いはないだろう。

つまり、この子は仲間が硬貨で商品を購入していたのを真似て、俺に硬貨を入れようとしていたのか……。

馬鹿だな、子供がそんなこと気にしないでもいいのに。それに、手にしているのは銅貨一枚じゃないか、それじゃ足りないぞ。

興味を失った二人が立ち去った後も俺は、その子から目が逸らせずにいた。

体を コイン式掃除機 に変化させ、苦戦しながらも彼の銅貨を
吸い取ると、いつもの自動販売機になり商品にオレンジジュースを
追加した。

銅貨一枚で購入できる金額に変更してオレンジジュースを落とし、
彼の元へと飛ばす。

俺はあの子に対して最初で最後となる、感謝の言葉を手向けた。

「ありがとうございました」

今後の方針

探索を開始してから一週間も過ぎると、ラツミスもかなり慣れてきたようで、死人魔以外とは戦えるようになってきた。死人魔はビジュアルがあれだから、拳で打ち砕くには抵抗があるのは良くわかる。

俺としても前の一件により死人魔には思い入れがあるので、至近距離で粉碎される姿を見なくて済んでいるので助かっているのだが。

「団長、死霊王を見つけたとして、対抗策は考えてあるんだよな」

戦いとなると出番がないので最近はずっと荷台の中で何やらしているヒュールミが、ひょこつと顔を出して団長に問いかけている。

「ん、あー、まあな。物知りのお前さんに訊くのもなんだが、死霊王がどんな魔物が知っているか」

荷猪車と並んでのんびり歩いていた団長が首だけ巡らし、質問を質問で返した。

「あれだろ、特大サイズの骸骨で金かかってそうなローブを着込んだ、偉そうな格好をした奴だろ。確か、元偉大な魔法使いの成れの果てとか言われているそうだな」

「おう、間違つてねえぜ。多くの属性魔法を操り、魔力も膨大らしいから魔法の連発も可能。まあ、その代わりと言っちゃあなんだが体が脆いらしい」

完全に魔法特化タイプなんだな。でかいのを一発当てたら勝ちみたいだが、どうやって魔法を掻い潜って接近できるかが勝負か。

相手を倒す破壊力ならラツミスかミシユエルが適任だろう。

「で、その魔法をどうすんだ。ここの面子には盾も壁もいねえだろ。まあいたとしても魔法は物理的なもんじゃねえから、役に立たねえぞ」

ヒュールミの言う盾と壁というのは文字通りの意味ではなく、ハンターの担当する役割らしい。つまり、チーム内で相手の攻撃を集め耐えることにより、仲間も守ることに特化した者のことだ。

「まあな。だがな、ここにはどんな攻撃も防ぐことが可能な頼れる奴がいるだろ？」

そうやってウインクをして茶目っ気のある表情で、こっちに視線を飛ばしてくる無精ひげのオッサンがいる。

あー、そういうことか。なるほど、執拗に俺を探索に連れて行きたがっていた理由が判明したよ。

「え、それってハツコンのこと？」

「正解だラツミス。ハツコンの結界は魔法すら防ぐ万能の盾だからな。お前さんが一気に距離を詰めて倒してくれても、敵の注意を引きつけてくれるだけでも構わねえ」

「それは危険……でもねえか。ハツコンは階層主の攻撃にも耐えている実績がある。ミシユエルを狙っていた奴の魔法も防いだって話だ……可能なのか……」

ヒュールミが額を指でリズムよく叩きながら考えを巡らしているようだ。

ポイントには余裕があるから相手の攻撃を防ぎ切る自信はある。攻撃の威力で吹き飛ばされる心配はラツミスが背負うことにより、踏ん張りがきくのでそれも対応は可能。

あれ、これって案外、名案じゃないか。

「ハツコンどうだ。お前さんが無理と思うなら策を練り直すか、可能か？」

可能か不可能かで答えるなら可能だろう。ラツミスを危険に晒すことになるが、そこは俺が守れば済む話だ。ハンターなんて危険な職を選んだのだから、危ないからといって避けていては一生前に進めないよな。

「いらつしゃいませ」

「おつ、流石だぜハツコン。男だねえ」

「ハツコンがいいなら、うちも構わないよ」

ラツミスは俺を信頼しきつてくれている。ならその期待に応えるのが男つてもんだ。自動販売機になったとはいえ、心意気を忘れてはいけないよな。

「死霊王は王を名乗るだけあって、何体もの魔物を従えて現れるそつだ。雑魚の対応は俺たちに任せてくれ」

愚者の奇行団の實力は疑う余地すらない。ミシユエルもそつだ。大食い団は死人魔とは戦い辛そつだが身軽なので捕まることもなく、

骨系には強いようなので問題はない。

聞いている分にはやれそうな気がしてくるな。

「だが、こんなもん机上の空論だ。基本は臨機応変。やばくなったら、一目散に逃走するぜ。俺の指示を聞き逃すなよ」

この死んでも戦い抜けではなく、逃走を良しとするスタイル嫌いじゃない。何だかんだ言っても愚者の奇行団は仲間の命を重視している。だから、文句を言われながらも団員に好かれているのだろう。

「もう一つ質問していいか」

「何でも聞いてくれて構わねえぜ、ヒュールミ」

「この策は悪くねえと思うが、今までの奴らはどうやって死霊王を倒したんだ？」

あ、そうか。俺の 結界 を前提として考えられた作戦だが、今までに討伐した他のハンターグループがどうやったのか興味あるな。しかし、こうやって作戦を練りだすと他の面子は蚊帳の外というか、聞き役に徹しているな。いつもなら副団長も加わるのだが、今はヒュールミの独壇場だ。

「他の奴らか、俺の知りうる限りだが……数の暴力で犠牲をいとわずごり押し。もしくは、魔法に対して万全の対策をして挑んだって話だな。後者は俺たちの策と似ているな」

前者は最低な選択をしたもんだ。相手の実力がわからないなら、数で挑むというのは間違いとはい切れないが、どれだけの犠牲を払ったのだろうか。

「細かい相手の特徴や攻撃手段は資料としてまとめてあるから、目を通しておいでくれよ。ラツミスはハツコンにも教えてやってくれ」

「うん、わかった。ハツコン、後で一緒に勉強しようね」

「いらっしやいませ」

文字が読めないからお願いするよラツミス。そろそろ、異世界の文字を勉強したいのだが、教えてもらう方法すら思いつかない。

この世界の識字率は低くないようで、少なくとも清流の湖に住む人たちが、文字を読めないで困っている姿を見たことがない。何となくアルファベットを崩した感じのような字のだが、ちゃんとした参考資料が教えてくれる人がいないと自力で覚えるのは難しい。

「ってこった。各自ちゃんとお勉強しておけよー」

「はい」

団員と大食い団が手を挙げている。相変わらず、和む光景だ。俺も後でしっかり覚えておこう。敵の情報を得ることが出来れば、自分の機能から対応策が思いつくかもしれない。

「ってことだ、わかったか」

「はい、ヒュールミ先生」

何故か眼鏡を掛けて指し棒を手にしたヒュールミが、資料を手にした全員に詳しく説明をしている。口調はきついところもあるが基本、面倒見がいいので好評のようだ。

情報を頭で整理しておくか。

死霊王が出現すると周りに数体の魔物が現れる。その数はランダムで五十近く湧いて出てきた事もあったそうだ。三十を超えている場合は即座に撤退するのも忘れずにしよう。

死霊王は魔法攻撃がメインで、火、水、風、土の四元素を自在に操り、闇の魔法にも長けている。光属性の魔法が苦手らしく、明るい場所も好まない。光量を最大で放てば怯んだりする可能性もあるかもしれない。

物理攻撃に弱く、魔法に強い。魔法の効き目が悪いらしいので、直接攻撃メインで対応するそうだ。

あと、ラツミスと俺は雑魚に構わず死霊王だけを狙うこと。魔法を引き受け 結界 で弾き、間合いを詰めて一気に葬れば理想的だが、それができない場合は敵の攻撃を引きつけるだけでいい。そう聞くと簡単そうに思えるが、俺と違いラツミスは生身だ。防御を任されたからには全力で守り抜く。

一応、各自には治癒薬も渡されていて、少々の怪我ならぶっかけるだけで治るそうだ。こちら辺はファンタジーらしくて助かる。

これで死霊王を見つけ出し戦うことになったら、階層主と三度も戦うことになるのか。ハンターとしての実績を上げている自動販売機ってどうなんだ。

異世界転移の物語としては理想的な展開かもしれないが、自動販売機なのが……。いや、ここは発想の転換だ。自動販売機なのに異世界を満喫できている幸せを噛みしめるべきか。

それもただのお荷物じゃなく役に立っている。そこは誇ってもいいところだよな。

「責任重大だけど頑張ろうね！」

「いらっしやいませ」

もちろんだ、ラツミス。前の階層主は美味しいところを掻っ攫っていく展開になったが、今回は一緒に階層主討伐と洒落込もう。ラツミスはもつと評価されてもいい実力の持ち主だと思っっている。

俺としてはラツミスとのコンビとして有名になるのが理想なのだから。

この階層の雰囲気にも慣れてきて恐怖心も薄れている今なら、ラツミスの活躍も期待できる。慢心には気を付けないといけないが、俺たちが活躍すればするほど、戦闘に参加する仲間の危険度が下がる。それは俺もラツミスも望むところだ。

「ラツミス、気負いすぎるなよ。もし、万が一、戦いでオレたちの誰かが死ぬようなことがあっても、それは誰のせいでもねえ。みんな納得して、この場に居るのを忘れるな」

そう言っつてヒュールミがラツミスの頭に手を置いた。彼女は戦闘力が皆無だが、情報提供や心の支えとして必要不可欠な存在だ。

その言葉に他の面子も大きく頷いている。誰も死にたいとは思ってもないし、死ぬ気もないだろう。だが、覚悟だけはしているということか。

誰も死んで欲しくないよな、やっぱり。悪人にも人権があり、どんな理由があれど人殺しは駄目だ。なんていう気はさらさらない。全く見知らぬ場所で知りもしない他人が死んで心を痛めることもない。

だけど、俺を一度でも利用してくれたことがある人たちには死んで欲しくない。危険が隣り合わせのハンター稼業をしている人たち相手に、無茶な望みだというのは理解している。

それでも、ここにいる人たちは誰一人として欠けることなく集落に戻り、また商品を購入して欲しいと心から願うよ。

「まあ、それもこれも、まずは死霊王を見つけてからだ。んじゃ、景気づけにしゅわしゅわするの飲むか」

「うちも大食い大会で飲んでから、はまっちゃって」

ヒュールミの言葉をきっかけにコーラが売れていき、全員にコーラが行き渡った。

「んじゃ、皆で乾杯でもすっか」

「賛成！ 蓋を開けて……かんぱーい！」

「乾杯！」

円陣を組むように集まった仲間たちがペットボトルのコーラを合わせ、同時に微笑むとその中身を口にしていぐ。

なんか、某コーラのCMを見ているかのような光景だ。この探索が終わったら、また全員で集まって、コーラで乾杯をするのも悪くないな。

決戦

「団長。赤から、この先で死霊王らしき魔物を発見したって報告が来たよ」

紅白双子の遠距離で意思の疎通ができる加護のおかげで、偵察に出ていた赤と大食い団二人から連絡を得ることができた。

「見つけたか。赤たちには一定の距離を保って見張りを続けさせておけ。俺たちも急ぐぞ」

本番か。何度も脳内でシミュレーションをしてきたから何とかなるとは思うが、いざとなったら守りに徹しよう。

非戦闘員であるヒュールミをどうするかなのだが、荷猪車と一緒に現場に向かっている。幌付きの荷台なのだが、幌を取り外してそこに射手であるシュイも乗り、遠距離攻撃を仕掛けることになっている。

護衛に大食い団のスコとペルもいるので、大丈夫だろうという判断だ。どっちにしる、置いていけないし集落にも戻る訳にもいかない。

「大体、十分ぐらいで着くからな。腹くくっておけよ」

御者席に乗り手綱を操るケリオイル団長の言葉に全員が頷いている。

結構な速度が出ている荷猪車には愚者の奇行団全員とヒュールミが乗り、大食い団とラツミスは並走している。

いい加減慣れそうなもののだが、俺を背負って無理なくこの速

度が出る脚力には驚かされるよ。俺を背負わない状態で力を上手く操れるようになったら、ラツミスは誰にも負けない強さを手に入れられそうなのだが、制御がかなり難しいそうだ。何度も練習して体に覚えさせるしかない。

「つと、いたか」

前方の岩陰に赤と大食い団ミケネ、ショートがいる。手を振る彼らに速度を落として近づき、岩陰に全員が一先ず隠れることとなった。

「状況は？」

「この先に死霊王とその配下と思われる魔物の一団がいます。死人魔が五、死霊魔が五、骨人魔が八、炎飛頭魔が四です」

簡潔な質問に的確な答えが返ってくる。取り巻きの数は二十二。事前の作戦では許容範囲だが、少し多いよな。

「やれないことはないが……初手である程度数を減らしたいところだな」

「副団長がいないっすからね。弓だと接近するまでに数体はやれるけど」

一気に倒す方法か。魔法が無いので遠距離攻撃は弓と団長の投げナイフぐらいか。大食い団はあの手なので飛び道具を操るのは無理だし、ラツミスは命中率が低すぎる。

高圧洗浄機　水を出せば炎飛頭魔の火は消せるが、他の魔物には効果が無い。魔物たちは死霊王を取り囲むように配置されてい

ると、赤が説明しているので、むしろあの炎を利用するべきか。となると 灯油計量器 になって灯油をばらまき一帯を火の海にするというのはどうだろうか。

お、これは意外と良い案かもしれない。念の為に引火点の低いガソリンや軽油にした方がいいだろうか。ガソリン計量機 もちやんと機能の欄にあるしな。

「雑魚を一掃できると後が楽なんだが……おっ、ハツコン何か策を思いついたのか」

姿の変わった俺を見てケリオイル団長の目が見開かれる。期待してもらえないのは悪くない気分だが、問題はこの使い方を即座に理解してもらえるかどうか。

一見、ただの自動販売機にも見える四角いボディに赤、黄色、緑のノズルが突き刺さっている。日本人の成人なら誰しもが理解していると思うが、赤はレギュラーガソリン、黄色はハイオク、緑は軽油を出すノズルとなっている。

ラツミスも何か考えがあるのだろうと、形状の変化した俺を地面に下ろして、じっと見つめているな。さて、問題はここからだ。彼らにどうやって理解してもらおう。

「これは水を飛ばす装置に似ているな、これ抜いても構わねえか？」

「いらっしやいませ」

ヒュールミは一目見ただけで、そこを見抜き軽油のノズルを引き抜き、手に取って眺めている。

「やっぱ、水出すのと仕組みが似ているな。これを引くと先端から何か出るって感じか」

「いらっしゃいませ」

先に高圧洗浄機の知識があつて助かるよ。

「ちょっと、引いていいか？」

もちろんだ、望むところだよ。

「いらっしゃいませ」

ヒュールミが先端を誰もいない方向へ向けてからレバーを引いた。ノズルの先から透明の液体が勢いよく噴出する。本来は先をタンクに入れなければ出ないように、安全装置が付いているのだが、それは解除させてもらった。

「うわっ、くっさいよこれ！」

大食い団の面々が鼻を押さえて、しかめ面をしている。

ヒュールミはレバーを戻し、ノズルを元の位置に差し込むと屈みこみ、地面に零れた軽油を調べ始めた。

「ハッコン、これ触っても大丈夫か。毒とかじゃねえよな」

「いらっしゃいませ」

ちょっと触るぐらいなら問題ないよな。手が臭くなるぐらいだ。

「臭いは、こりゃきついな。感触はぬるぬるして油っぽい。紙に浸してみるか」

ヒュールミは軽油で濡れた紙を持って少し離れると、懐から出した手のひらサイズの円柱状の物体　着火用の魔道具を取り出した。この世界で百円ライターを提供すれば売れるのではないかと、一時期考えたのだが、普通にライター代わりの魔道具が出回っていることを知り、あっさりと諦めた過去がある。

魔道具の先端に火が灯り、それを紙に近づける。

「うおっ！　スゲエ燃えるな」

ヒュールミは素早く手を離して地面で燃え続ける紙を観察している。紙の炎に下から照らされたヒュールミの笑顔が若干怖い。

「あれか、ハツコンはこの良く燃える油を奴らにぶっかけると言いたいんだな」

「いらっしゃいませ」

正解だよ、ヒュールミ。

「じゃあ、私が敵に突っ込みながら油撒いたらいいんだね」

「そうなんだが……いや、待てよ。この油もつと使い道があるな。ハツコン、水入っている容器を利用して構わねえか？」

何か思いつき口元に笑みを浮かべたヒュールミを見て、俺も理解した。もちろんだとも、好きにやってくれ。

「いらっしゃいませ」

死霊王に動きが無いうちに作業を終わらせ、戦闘準備が整った。

「それじゃあ、作戦通りにやるぞ。役割分担を忘れるなよ……行くぞ！」

全員が岩陰から飛び出し、ラツミスと俺は仲間から少し遅れて、死霊王に向かい正面から突っ込んでいく。

距離はまだあるが、相手がこちらの動きに気づいたようで、まずは取り巻きを俺たちにぶつけるように指示を出している。

死霊王から魔物たちが離れ、ひと塊になってこっちに向かってきたところで、仲間が一斉に手にしたペットボトルを投げつけた。ラツミスだけは軽油のノズルを引き抜いて、相手に向けているが。

放物線を描いて相手の上空にペットボトルが達したところで、俺はペットボトルだけを消して満タンにしておいた中身　軽油を魔物の頭上から浴びせる。

炎飛頭魔の炎が軽油に引火、辺りが火の海と化した。更にノズルから噴出した軽油が撒かれたことにより、炎は激しさを増す。

突如現れた炎の一角を避けるように左右に分かれて仲間が回り込んでいく。だが、俺たちは炎の中に平然と突っ込んでいく。

結界　で炎も熱も二酸化炭素も侵入を許さず、炎の中を一気に走り抜ける。

視界は炎で閉ざされているが、それは敵も同じ。タイミングをずらしたことにより、今頃は先に挟み込む形で、死霊王の視界に仲間が飛び込んでいる筈だ。

相手が敵を認識して注意が逸れているところで、炎を突っ切って俺たちが飛び出す。

ビンゴだ！ 敵の正面、距離10メートル程度。金色の刺繍が至る所に施された漆黒のローブを着込んだ骸骨がそこにいた。

相手は魔法を放つ直前だったようだが、俺たちを見ると標的を変更して、骸骨の腕が重なり合って形成された杖をこちらに向ける。

魔法が来る！ 結界の準備は万端。どんな魔法でも確実に防いでみせる。

杖の先端は骸骨の閉じられた拳が寄り添っていたのだが、その全ての手が開き、そこから閃光が伸びてきた。

稲妻かつ。電気系は自動販売機にとつて最悪の相性。結界で静電気の一つも通さず、全てを弾き飛ばした。その瞬間、眼球のない死霊王の瞳に宿る赤い光が揺れた気がした。動揺しているのか。

「我が魔法を防ぐだどっ！ その青白き光はもしや……結界かつ、小癪な」

お、骸骨が喋った。中々威厳のある良い声をしている。声帯ないのでどうしているのだろうか、突っ込むのは野暮な話か。俺だつて自動販売機なのに意思があるしな。

俺の 結界を一目で見抜くとは、生前は優秀な魔法使いだったというのは本当なのかもしれない。

こちらに意識を奪われている間にシュイ、ケリオイル団長からの矢と投げナイフが放たれる。

「無駄なことを」

死霊王が軽く杖を振ると、両脇から骸骨で埋め尽くされた骨の壁が出現した。更に、もう一度杖を振ると、骸骨の壁が崩れたのだが、骸骨たちは破壊されることなく地面に降り立ち、仲間に向かって襲い掛かっている。

壁一枚につき骸骨が三十はいる。合計六十近い骸骨となると、助力は期待できそうにないな。

「その娘よ、背にあるその箱……何かあるな」

「さあ、よくわかんない！」

問いかけられた言葉を無視して、ラツミスが突っ込んでいく。ここからは一対一プラス一台だ。こうやってボス級の相手に二人きりで挑むのは初めてだよな。気合入れて行くぞ！

一人と一台の力

「氷の礫よ、穿て」

死霊王が呪文っぽい言葉を呟くと、先端の尖った氷が視界を埋め尽くす。数は十までは数えたが残りは放棄した。

「突っ込むよ！」

「いらっしゃいませ」

安心してくれ、そんなもの全部、防いでみせるから。

結界の青い壁に氷が着弾していくが今のところ貫かれていない。

《ポイントが1減少 ポイントが1減少 ポイントが1減少》

毎秒ごとのポイント減少と氷の礫が命中する度に減るポイント。それを知らせる文字が頭の中で滝のように流れている。

だが、まだ多くのポイントが残っている俺にしてみれば、この程度の減少なら何の問題もない。

「ふむ、面倒な加護だ。それはその娘……いや、後ろの魔道具に宿りし魂のなせる業か。ならば火は……貫いてきおったか。それでは、吹き荒れる唸る風」

氷の雨の後は暴風か。もう数歩も進めば相手に届きそうだったのに。

正面から吹きつける風に 結界 外の地面が抉れ墓石と共に後方へとすつ飛んでいる。

これって風は防いでいるが 結界 で表面積が増えた分、風の影響をもろに受ける羽目になっているぞ。

「ふはははは。不可侵な結界であろうと対応策など幾らでもあるのだよ。結界ごと吹き飛ぶが……んっ？」

勝ち誇っていた死霊王が大口を開けて、こちらを凝視しているな。大地が削られる程の強風の中、ラツミスは前へ前へと進んでいる。風圧は確かに凄いのだが、ラツミスは大地に足をめり込ませながら前のめりになって歩き続けていく。

「何故、吹き飛ばされん。どうなっている、魔法で強風に干渉しているのか」

いえ、ただの怪力です。物理的に抗っています。

「風にも雹にも負けず、特攻、粉碎、粉碎」

正に力押しで突き進むラツミスが物騒なことを呟いている。

「氷も風も火も、さほど影響を与えぬとなると……これが。大地よ慟哭を叫べ」

呪文つてあの台詞必要なのだろうか。カッコいいとは思うが、聞く度に俺の心がざわつく。そう、中学二年生の頃に男子なら誰もが患う、あの病気が再発しそうになる。

と馬鹿なことを考えている場合じゃない。足元から伝わる振動と共に足下に亀裂が入っていく。そして、轟音と共に大地が二つに裂

け、深淵が大きく口を開けた。

「ちょ、ちよっとっ！」

そのまま真つ逆さまに落ちていくラツミスを放っておくわけにはいかない。フォルムチェンジでダンボール自動販売機に変化した。これで、数百キロの重荷がなくなりラツミスの負担が減るはずだ。

「な、なんのおおおう」

ラツミスは深淵の側面を蹴りつけ、斜め上へと飛翔すると、更に反対側に位置する深淵の側面を蹴りつける。それを繰り返す様は壁を蹴って駆け上る忍者アクションゲームのようだ。

「中々、齒ごたえのある人間ではあった。罅よ閉じろ」

割れた大地が徐々に閉じていくが、完全に閉まりきる前にラツミスが最後の一蹴りで天高く跳躍した。

「何とっ！」

深淵から舞い上がったラツミスを見て驚愕している。今、相手の頭上10メートルぐらいか。また一気に跳んだな。真下には死霊王がいるってことは絶好のポジションだ。

「ええと、取りあえずキーック！」

跳躍の頂点に達したところで急下降を始め、ラツミスが蹴りの格好で落ちていく。と言っても、ラツミスの体重では威力が知れてい

る。どれだけ怪力があるうと、身体を踏ん張れなければ威力は激減する。

今の攻撃力を加算させるためには体重を増やせばいい。単純なことでだ。となると。

「そんな蹴り何ぞ喰らう訳がなからう！ 迎え撃つてくれるわ。集え集え集え、深淵より来たれし魔窟の邪」

って、させるか。以前も化けた巨大な自動販売機に変化する。落下速度が微量だが増したことでタイミングをずらし、尚且つ、空中で姿を変えた俺に戸惑い、詠唱が中断した死霊王の顔面を捉えた。

「ぐいっ」

足裏がめり込み背負われている俺にまで、何かを砕いた手応えが伝わってきた。

「わっわっ、とおおう！」

踏みつけている死霊王の顔から飛び降りたラツミスが、着地した際に体が揺れたが何とか体勢を立て直し、握りしめた拳を相手の身体を中心に叩き込んだ。

可愛い掛け声とは裏腹に、打撃音を越えた爆発音が響き、見事なまでにくの字に折れ曲がった死霊王が高速で飛んでいく。あ、残像が見える。

地面と平行で飛んでいた死霊王の体が上下に分断され、上半身は空へときりもみ回転をしながら舞い上り小さくなっていき視界から消えた。下半身は地面に激突すると砂煙を上げながら転がり続けていたが、足を天に向けた状態でピタリと止まった。

打撃に弱い体質だとはいえラツミスが本気で殴るところなるのか。

やっぱり、強いよなラツミスは。この破壊力を自在に操ることが出来たら、彼女はもっともっと強くなれる。

「おいおい、お前さんたちだけで終わらせちゃったのかよ」

他のメンバーも骸骨を倒し終えたようで、全員が集まってきた。いつもの自動販売機に戻っておこう。

ミケネは遠くまで飛ばされた死霊王の辛うじて残っている頭蓋骨を掴んで持ってきてくれている。ショートは逆さになっていた下半身を引きずってきた。

半分以上が消滅しているが、ここに消滅寸前の死霊王の断片が集まっている。

「こいつ、まだ辛うじて生きていやがるな」

頭蓋骨に足を添えてケリオイル団長が見下ろしているが、あれは妙な動きをしたら即座に砕くという意思表示なのだろう。

「偉大なる……我を……足蹴に……すると……は……万死に……」

「死にかけている癖に偉そうな。さっさと砕いてコインになってもらうとするか」

「コイン……ふはははは……きさまら……もしや、我をただの……階層ぬ」

「全員、離れろっ!」

表情を豹変させ団長が唐突に叫び、近くにいた団員たちを蹴り飛ばして飛び退く。

大食い団も「ヴァアアアアツ！」と久しぶりの叫び声を響かせながら逃げ惑っている。

何かよくわからんが 結界 発動！

青い光がラツミスごと包み込んだ瞬間、視界が黒に染まった。

《ポイントが500減少》

な、何だ！？ 周囲が黒一色だぞ！

ポイントが減っているということは攻撃を受けているのかっ！

どういうことだ、最後の力を振り絞って死霊王が自爆したのかっ？

「ハツコン、どういうこと！ ど、どうなっているのっ！」

ラツミス、それは俺が知りたいよ。彼女の取り乱している声を聞いて、少し冷静さを取り戻せた。焦っても何も生まれない、冷静に状況を判断しろ。

《ポイントが500減少》

まだ減少が止まらない。この黒いのは相手の魔法か何かなのか。

結界 の感じだと上から降ってきているのか。

暫く耐え続けていると黒の奔流が消え去り、ようやく視界に光が見えてきた。降り注ぐ黒い闇が途切れたようだ。ポイントの減少も止まった。

「うそっ……み、みんな」

闇の消えたそこには巨大なクレーターが出来上がっていた。俺たちのいる場所はクレーターの中心部で、俺たちの足元にだけ地面が残り、常識では考えられないような不思議な地形を作り出してい

る。

仲間……クレーターの外側で散り散りになって倒れ伏している。死んではない　と思いたい。

おそらく気を失っているのか、大半がピクリとも動かないが、团长とミシユエルは何か立ち上がるうともがいている。少なくとも二人は生存している、それは間違いのないようだ。

「ほおう、私の闇魔法に耐えきった輩がおるとは」

上空から降ってきた声に視線を向けると、そこには死霊王を二回りほど大きくした骸骨が宙に浮かんでいた。

銀色の骸骨がフード付きのローブを身に纏っているのだが、そのローブの刺繍は死霊王のものより緻密で、骸骨が着ているというのに高貴さを漂わせている。

腕が四本もあり背後から、ちらちら見えるのは骨で出来た尻尾か。

「無能な弟子め。光に縋りし亡者の腕、返してもらおうぞ」

宙に浮かぶ骸骨が手の平を下に向けると、クレーターの地面が盛り上がり、埋もれていた死霊王の杖が浮かび奴の手元に納まった。

「優秀な魔道具は優秀な者の手に……そうは思わないかね。異世界からの来訪者よ」

この銀びか骸骨は俺の正体を見抜いているのか。あの闇が佇む双眸に見つめられると、自動販売機の中まで見透かされているような寒気がする。

何者かはわからないが、俺たちの倒した死霊王の上位であることは確かだ。

「な、何者なの、あんたは！」

「ふむ、我が名など忘れてしまったが、冥府の王と呼ばれることが多いか。お前たちが死霊王と呼ぶ、クズの支配者でもあるようだ」

やっぱり、あれの上位互換か。この状況、一手でも間違えると取り返しのつかないことになる。仲間で生死不明なのは大食い団、紅白双子。辛うじて意識を保っているのが、ケリオイル団長とミシユエル。どうすれば、助かる。助けられる。

ラツミスだけを救うなら、俺がここで 結果 で耐えきればいい。ポイントはまだ余裕がある。さつき倒した死霊王のポイントも結構俺に流れ込んでいるので、防ぎ切る自信はある。

だが、他の面々を救えない。彼らを切り捨てていいのであれば……。

「これが階層主のコインというものか。面白みのない素材だ」

指をくいつとしただけで、コインが冥府の王の前に浮かぶが興味を失ったようで、重力に従い落下すると地面に転がっている。

「な、なんで、こんなことをしたの!」

「何故だと。我が狩りをして何が悪い。お主らも自分の欲望を満たす為に、死霊王を襲ったのであろう？ 不意打ちもハンター共の得意分野の筈だが」

「そ、それはそうだけど」

「人の世界ではこのような言葉があるのではないか。自分がされて嫌なことは人にしないだったか。子供でも知っていることだ」

「で、でも、それは」

「それは何だ。それとこれとは話が別とでも言うのか。何が違うか
噛み砕いて教えてもらいたいものだ。なあ、人間」

こいつ、ラツミスをからかって遊んでいるな。絶対的強者が弱者
に対して見せる余裕。普通なら敵に一矢報いるチャンスなのだが、
勝てる未来が全く見えない。

自動販売機として出来ること(前書き)

自動販売機として出来ること

自分の機能だけで現状を打破する方法はないのか。

敵を自ら作り上げたクレーターに誘い込み、事前に流し込んでいたドライアイスで窒息させる……これは、意味がないか。骸骨が呼吸をしているとは思えない。それに、今のように宙に逃げられたら、それで終わりだ。

食品系は無意味。氷や水も効果は期待できない。やはり、倒すことは諦める方針でいこう。逃走のみを考えるべきだよな。

「おや、ご教授願えないのかね」

「口達者なやつとまともに問答するんじゃないよっ！」

不意に聞こえてきたこの声はヒュールミ！ そうだ、後衛のシユイとヒュールミは荷猪車で離れた位置にいたので、まだ健在だった。怒声に続いて俺たちの元に届いたのは数本のペットボトル。それは宙に浮かんでいる冥府の王を目掛けて一直線に飛んでいる。即座に彼女の行動を理解して、ペットボトルだけを消滅させ、前と同じ手段で中身を冥府の王にぶっかけようとした。

「あの燃えやすい油か。ふっ」

小さく息を吐いただけで冥府の王の脇に風の壁が発生した。軽油を吹き飛ばすつもりのようにだ。

「甘いつすよっ！」

シユイの言葉と共に火矢が飛来して空中の軽油　ではなくガソリンに引火。風の壁に触れる前に爆炎が発生した。

「ラツミス、ハツコン今の内に逃げるっす！」

「早くしろ！」

二人の言葉に促されて、ラツミスが地面を蹴り上げクレーターの縁まで跳躍する。その時はもちろん　ダンボール自動販売機　になつて軽量化を忘れていない。

「団長、ミシユエル早く乗るっす。とつととずらからないと！」

荷猪車は起き上がるうともがいている二人の近くに止まり、彼らを荷台に押し込んでいる最中だった。

「うちも手伝うよ」

ラツミスが一足飛びで近寄ると、軽々と二人を荷台に放り込んだ。

「一旦逃げるぞ！」

「でも、まだみんながっ」

返事も待たずにヒュールミが発進させると、ラツミスも渋々ながら付いて行く。

後方に視線を移すと、地面に倒れたままの仲間に変化はない。宙に浮かんでいた冥府の王は爆炎を吹き飛ばした状態で、何故か動きもせずに睥睨している。

どういうことだ、殺す価値もないと見逃してくれるのか？　どん

な理由であれ生き延びられるなら、それで構わない。今は逃げられさえすればいい。

『何処に行くのかね。まだ教えてもらっていないのだが』

脳に直接、横柄な物言いの骸骨の声が届く。これは加護にあった念話　っばいな。

全員聞こえたようだが、振り向きもせずに速度を上げている。

『やれやれ、話をする時は目を見て最後までちゃんと聞くと習わなかったのかね。最近の若い者は礼儀を知らぬから困ったものだ』

田舎の爺さんみたいなのを言っているな。これがただの礼儀作法にうるさい爺さんなら何の問題もないのだが、あの馬鹿げた強さを保有している冥府の王となると話が違ってくる。

念話　が、どこまで届くのかは知れないが、話だけで攻撃をしてくないのであれば、幾らでも独り言を呟いてくれて構わないぞ。

「仲間を見捨てるのかね」

唐突に何の前触れもなく、進路方向に冥府の王が現れた。世の中そんなに甘くないか。

このままぶつかって接触事故で倒せる相手じゃない。それを理解しているヒュールミが手綱を操り進路を変更しようとする。

「会話ができぬとなれば、それはもう獣と同じではないかね」

何を思ったのか手元の杖が消え、フリーになった両手を前に突き出している。何かはわからないが、嫌な予感がするぞ。　結果　を

全開にして相手の一挙手一投足を見逃さないように注視する。
肉が一辺もない銀色の指が少し閉じると冥府の王の手の中に
ヒュールミとシュイが出現した。

「ヒュールミ、シュイ！」

さっきまで御者席にいた二人が何故そこにいる。荷猪車を見ると
無人となった荷台があるだけだった。

冥府の王は二人の首を掴んだ状態で宙に浮いている。何とか抵抗
しようとする手を振り回しているが、全く堪えていない。

「その面白い加護を持つ娘と来訪者の魂を持つ魔道具よ。お主ら
は興味深い。なので生かしておいてやろう。まだまだ成長過程で今
後に期待できそうだからな」

「二人を離してっ！」

ラツミスが感情の高ぶるままに飛び出していく。止めたいところ
だが、今、無理やり止めたら一生彼女は後悔するだろう。誘い出す
為の挑発だとわかっていても、ここはいく場面だ！

「圧倒的な力の差を理解していながら、まだ足掻くか。よいよい、
その気概、益々気に入ったぞ。我は英雄と呼ばれる者の冒険譚が好
物だな。悪に立ち向かう英雄が強くなるきっかけとなる王道は、仲
間の死。我も悪役側として演出しなければなるまい！」

「や、やめてええええっ！」

最悪の展開が頭に浮かぶ。背にいる俺はダンボール自動販売機
となったので負担はない。彼女は十数歩かかりそうな距離を、た

った一度、地面を蹴るだけで飛ぶように進んでいる。それでも

「鼓動よ踊り乱れ、死を享受せよ」

冥府の王がその言葉を口にした途端、シユイとヒュールミの体を闇が包み、その体が一度だけ大きく跳ねた。

そして、冥府の王はその手を離すと、二人が真つ逆さまに落ちていく。

「うあああああつ！」

ラツミスは踏み込みにより地面が爆発して、粉塵が噴き上がる。十メートル以上の距離を一気に詰めると、落下する二人の下に滑り込み、地面に激突する前に受け止めた。

「よくぞ間に合ったな。では、褒美として、その二人の骸は返却しよう。お主らの成長、楽しみにしておるぞ。我は暫く、この階層に滞在しておる。いつでも復讐に来るがいい」

それだけを口にして杖を掲げた冥府の王は、その場から消え失せた。

「ヒュールミ、シユイ、返事をして！　お願い、お願いやから……返事して」

自分の怪力で頬を叩く危険性を理解しているのか。ただ隣で涙を零し、拳を握りしめているだけのラツミス。

二人は静かに眠っているようにしか見えないが、彼女の取り乱しようを見て、そんな楽観的に考えられるほど馬鹿じゃないつもりだ。

「ヒュールミ、ずっと私の手伝いしてくれるって約束したよね……シユイ、みんなが、孤児院のみんなが待っているよ……だから、お願い、ほんまに、お願いやから」

「くそつたれが……俺の仲間が、くそがあああつ」

「私は、私は、また目の前でっ」

荷猪車が近くに戻ってきていたのか。ミシュエルと団長の悲痛な声がある。

ミシュエルは片膝を突いた状態で剣を支えにして、何とかその状態をキープしているが、噛みしめた唇から鮮血が流れ落ちている。

辛うじて動ける団長が荷台から飛び降り、シユイとヒュールミの鎧と服を脱がし、シユイの心臓マツサージを始めた。

「ラツミス！ お前も心停止の処置方法はハンターの基礎として学んだら！ ぼーっとしているんじゃねえ！」

「う、うん！」

ラツミスは俺を脇に置くと、力を込め過ぎないように細心の注意を払いながら、心臓マツサージを始めている。

助かってくれ、頼むっ！

口は悪いが姉御肌でラツミスの支えになってくれていたヒュールミ。俺のことを理解しようとしてくれた大切な人。

明るく、大食いで、孤児院の為にその身を尽くしてハンター活動をしていたシユイ。

そんな二人が、今、目の前で物言わぬ身体を晒している。

「駄目、息を吹き返さないっ！」

ラツミスの悲痛な叫びが、荒れ果てた大地に響き渡る。

諦めるしかないのか？ 本当に何もせずに死を受け入れるしかないのか……まだだっ！ まだ、諦めるのはまだ早い！

あいつは「鼓動よ踊り乱れ、死を享受せよ」と言っていた。外傷はなく眠っているようにしか見えない二人の遺体。ケリオイル団長の判断を信じるなら心停止状態なだけだ。ならば、まだ、助かる見込みはある！

俺は以前から目を付けていた機能を即座に選び出し、それを取得了した。

自動販売機の身体の中心部右寄りに透明の扉が装着され、その中に橙色の物体が現れる。その隣には赤いハートの絵柄とAEDの文字が描かれている。

俺が選んだ新たな機能は AED だ。AEDとは自動体外除細動器のことで、つまりは心停止の人に電気ショックを与えて蘇生させる医療機器のことだ。

震災が多発している昨今、非常用の設備として簡易トイレやAEDを設置できるタイプの自動販売機が現れ始めている。そのおかげで俺はこうして機能を得ることが出来た。

二人の状態ならば、これを使えば蘇生は可能だと信じる！

「え、何これ、えっ」

変化に気づいたラツミスは手を止めずに、涙が止めどなく零れ落ちる目で見つめているが、それが何かを理解できていない。当たり前だ、これを見ただけで即座に理解する異世界人なんているわけがない。日本人だってAEDだと理解していても取り扱いは躊躇うだろう。

心停止からの蘇生は時間との勝負。躊躇っている余裕はない！

彼女に説明をする方法がないのでラツミスに任せることは不可能。ケースの中に図解の説明書があるにはあるが、それでも理解までには時間を必要とする。

俺の残りポイントは幾つだ…… 122万あるなっ！ それだけあれば充分だ！

死霊王を協力して討伐したポイントと今までコツコツ稼いできた成果、それに炎巨骨魔のコイン報酬が入ったのでここまで貯めることが出来た。

ここで俺の取るべき能力は 念動力 だ。

この加護の性能は《自分の周囲半径一メートル以内の物体を操ることが可能になる。ただし、重量に限度があり商品のみとなる》となっている。

AEDが商品の定義に含まれるのかは不明だが、他に方法がない。迷う理由はない！

100万ポイントを消費して 念動力 を得た俺は、AEDを見つめ強く念じる。すると、透明の蓋が開き中からAEDが抜き出してきた。今は空中にふわふわと浮いている。

よしよしよしよしっ、第一関門突破だ！ 次はケースを開けて中身を取り出す。黄色の装置を地面に置き電極パットを相手の胸に…… くそ、届かない。ここで1メートル縛りの壁が邪魔をするのかっ。

「ハッコン、何かしようとしてくれているんだよね。もしかして、もしかして、無いとは思っけど、生き返らせられるの?」

「いらっしやませ」

期待もせず口にした言葉を肯定されて、ラツミスの目が大きく見開かれている。

「ほ、本当につ、ええと、その紐のついた四角いので何とかしたいんだよね。ええと、ええと、二人をもっと近づけたらいいのかな」

「いらっしやいませ」

「うん、わかった!」

充分察しのいい対応をしてきているのだが、焦っている俺には、それすら時間がかかり過ぎだと思ってしまうそうになる。落ち着け、ラツミスは軽くパニックに陥っているのに、懸命に頭を働かせて、動いてくれているのだ。

俺だけでも冷静に対応しなければならぬ。やり方は A E D を選んだ時に全て理解できた。あとは実行するのみ。

「連れてきたよ!」

俺の体にくつつく距離で二人が並んで寝かされている。

これなら届く。まずは……シユイ、悪いが、先にヒュールミを蘇生させるぞ。

電極は右胸の上部と左脇腹の下辺りか。この二箇所貼りつける。これだけで A E D が自動で心電図を解析して、電気ショックが必要か判断してくれる。

『体に触らないでください。心電図を調べています』

音声ガイダンスがあるので日本人であれば誰でも扱えるのだが。

『電気ショックが必要です』

「この声誰……何て言っているかわかんない」

こっちは日本語の音声で翻訳されないのか。本体からの声じゃないからということなのだろう。あの音声が流れると充電が始まり、それが終わると『ショックボタンを押してください』再び日本語の音声が流れる。

あとは装置の赤いショックボタンを押すだけなのだが、躊躇っている暇はない。この後、シユイにもやらなければならない。心停止は時間が過ぎれば過ぎる程、蘇生の確率が下がる……押すぞ、いや、待て蘇生率を上げる為に、まだやれることがある。

僅かな可能性に賭けて俺はステータスの器用さを上げた。器用さの効果は未だに不明だが、こういう機能の効果や性能が少しでも向上するのであれば、ポイントなんて惜しくない。

10、20、30、40と上げ、ポイントは10万減ったが許容範囲だ。よっし、ショックボタンを押すぞ！

『電気ショックを行いました。体に触っても大丈夫です』

電気ショックで体がピクリと動いたが安心はできない。電気が走ったから起こった現象に過ぎない。問題はここからだ。

「ヒュールミ……あつ、息が、息を吹き返したっ！ ヒュールミ、ヒュールミイイッ！」

「マジかつ！ じゃあ、シユイも……」

良かった、ヒュールミ本当に良かったっ。心臓マッサージの手を止めずに、泣きじゃくるラツミスを見て、安堵のあまり電源が落ちそうになるが、まだだ。安心するのはまだ早い、シユイも残ってい

る。

えっ何だ、さっきよりも電極を細かく正確に操れるぞ。これは器用さが上昇したことによる恩恵か。これなら、適正な位置に貼り付けるのも苦じゃない。

ヒュールミでの経験を活かし、俺はシュイの電気ショックも行い結果……二人とも息を吹き返した。

よ、よしっ！ な、何とかなつたぞ。はああああああああ。

「シュイ、心配させやがって馬鹿野郎……が。ありがとうよ、ハツコン。お前は命の恩人だ、本当に感謝している」

今にも倒れてもおかしくないぐらいの大怪我だというのに、シュイの頭を優しく撫でながら俺に深々と頭を下げている。

ケリオイル団長と愚者の奇行団のことは、もう少し信用することにしよう。そう思えるぐらい、団長の行動は心に響いた。

蹂躪後

「み、みんなは！」

二人が息を吹き返したのを確認すると、ラツミスは泣き顔を一変させて飛び出していった。そうだ、二人は一先ず安心だが、他の面子は全く動きが無い。

生きていると信じたいが、ここからでは判断ができない。ラツミスが連れてくるのを待つしかないのか……俺には祈ることしかできないのか。

ラツミスが尋常ではない速度で仲間駆け寄り、怪我の具合や呼吸を確かめているように見える。ホツと胸を撫で下ろしている時もあるれば、何かを呟いている場面もあり、この距離では状況を正確に把握することは不可能だ。

じれったいが、彼女が戻ってくるのを待つしかない。

「何とか全員、命の危険はねえか……」

俺が出したバスタオルの上に並んで寝かされている面々を見つめ、ケリオイル団長が安堵の息を吐いた。

吹き飛ばされていた者の中で重傷もいたのだが、治療薬と適切な応急処置が功を奏したようだ。今はそつと荷台にラツミスが運んでいる。

完全に傷が癒えたわけではなく、衝撃で内臓がやられている可能性もあるので、今は少々無理をしても素早く集落に運ぶ必要がある。

た。

ヒュールミとシュイはあれから眠り続けているので、彼女たちも荷猪車に乗せられている。

「ミシユエルすまねえが、俺と交代で御者やつてもらうことになりそうだが」

「大丈夫です。治癒薬のおかげで、かなり楽になっていますので」

そう口にする二人だったが、お互いの顔色は悪く、万全には程遠い状態なのが見て取れる。ここは弱みを見せる状況でないことくらい重々承知しているのだろう。

傷薬や痛み止めが自動販売機の商品になればいいのだが、薬事法の問題なのか薬を自動販売機で売っているのを俺は見ることがなかった。海外にはあるそうなのだが、薬の自動販売機だけを見に行く為に海外旅行が出来る程、生前の俺は裕福ではない。

出来るだけ車体を揺らさないように気を付けながら、荷猪車が出発した。急いでいるのは彼らを治癒してもらうのが最大の理由ではある。だが、それ以外にも奴が 冥府の王が気まぐれで戻ってくるのではないかという疑心が俺たちを後押ししていた。

集落にたどり着き、亡者の嘆き階層で唯一の診療所に仲間たちが運ばれて行った。

適切な治療を受け、専門の担当医からもう大丈夫とお墨付きをもらうと、俺とラツミスは安堵のあまり床へと崩れ落ちていた。

だが、一度心臓の止まった二人は暫く安静となり、他の面々もある閻魔法により身体のダメージだけではなく精神も削られた様で、

数日であっさり元の状態になれるわけではないようだ。

最低でも一週間以上は入院する必要があるらしい。

そんな状況下なのだが、俺たちはのんびり仲間の回復を待つ時間ではなかった。ギルドに冥府の王が現れたことを告げると、比較的軽傷の団長とミシュエルはこの階層のギルドマスターに呼び出され、緊急会議に組み込まれている。

半日もしないうちに熊会長や他の階層の会長もやってきたことにより、事の重要性が再認識された。

更に、一日も経たずにこの階層への一般市民の出入りが禁じられ、集落には続々とハンターが集まり始めている。

ラツミスも何度か会議に呼ばれ目撃したことを伝えてはいたようだが、会長たちの表情は芳しくなかった。零していたな。

俺とラツミスは待機中で、亡者の嘆き階層ハンター協会前で二人揃って、ぼーっと曇り空を眺めている。

「どうなるのかな、ハツコン。みんなが死なずに済んでホッとしているけど、あの冥府の王って強すぎるよね」

「いらっしやいませ」

圧倒的な魔力による蹂躪。勝つどころか対抗手段も思いつかない。知能があり浮くことのできる相手には俺は役に立たない。今までの階層主を倒せてきたことがどれ程、幸運だったのか思い知らされたよ。

仲間が殺されかけた怨みと憎しみがある間は、冥府の王を倒すことしか頭になかったが、時間が経つにつれ冷静になり、現実を正確に認識できるようになってしまった。

「あの四本腕骸骨、一体何だったんだらう。冥府の王なんて、うち

聞いたこともないよ。ヒュールミなら知っているのかな」

階層主である死霊王を配下にする存在。一体何者なのか俺だって知りたい。

「冥府の王が何者であるか、知りたいか」

頭上から降ってきた洪い声に視界を移動させると、疲れたように肉球でこめかみをマツサージしている熊会長がいた。鼻眼鏡を掛けていて、片腕で資料の束を抱え込んでいる。

「熊会長、会議終わったの？」

「ああ、一先ずはな。まあ、その内容も含めて話がある。ハッコンにも。詳しくは中で」

協会から出てきたばかりだというのに踵を返して、俺たちを手招いている。話の内容が気になるし、断る理由もないのでラツミスに背負われて後を追う。

一階の奥まった場所にある、見るからに重厚そうな扉を軽々と熊会長が押し開くと、そこは大きな丸テーブルがある会議場だった。

「ラツミス適当に腰かけてくれるか」

直ぐ近くにあった椅子を移動させて俺をそこに設置すると、直ぐ隣にラツミスが座る。

ここには俺たちだけではなく、ケリオイル団長、ミシユエル、それ以外にも見たことが無い男女が九名、既に席に着いていた。

「そっちの二人は説明不要だな。残りのメンバーは各階層のハンタ

「協会会長とその代理だ」

そうなのか。会長と呼ぶにふさわしい貫禄のある人もいるが、ラツミスと変わらない年齢に見える人もいるのだが、あの歳で会長をやっているというのか。

っと、顔見知りを除いた好奇の視線が俺に注がれている。この感じはもう慣れた。

「皆様、彼女と魔道具である彼は冥府の王と遭遇し、生き延びた者たちです。今回の作戦にも大きく関わる二人なので、特別に呼び寄せました」

「清流の会長、その魔道具が噂の金で未知の物を購入することが出来る箱なのか？」

真っ赤な女性用スーツで身を固めた妙齡の女性が、手元の万年筆を指で回しながらじっと見つめている。

「ああ、始まりの会長。それ以外にも、かなり有能な能力を保有し、何度も助けられておるからな」

会長たちは階層の名前で呼称されるのか。清流の会長よりも熊会長の方がピツタリだと思っただが。

「そうか、話の腰を折ってすまなかったな。それだけだ」

「ふむ。では、話を続けさせてもらおう。今回現れた冥府の王はほぼ間違いなく、魔王軍の左腕將軍である冥府の王で間違いはない」

「おおおおっ」

と会長たちがざわついている。その驚き方が何処か芝居がかっていて、誰もがわかつてはいたが、改めて驚いているといった感じに見える。

「あのー、魔王軍の左腕將軍って何ですか？」

おずおずと手を挙げラツミスが疑問を口にしてくれた。俺もそれを知りたかったところだ。ナイスアシスト。

「知らぬ者もいて当然ではあるな。ここから遙か北方に自らを魔王と呼称する者が治める国があるのだよ。その魔王軍は何人も將軍がいるのだが位によって呼び名が異なるのだ。魔王である自分を頭と位置づけ、配下の者を手足と捉えた考えでな。位が上から順に右腕將軍、左腕將軍、右脚將軍、左脚將軍という四人の肢体將軍が存在し、その下には更に二十指將軍が控えておるのだ」

つまり、この世界には魔王が存在して配下に何人も將軍を従えている。そのうちの上から二番目の地位にいる左腕將軍が冥府の王ってことだよな。

それってかなり上位の存在だよな。実質、魔王軍のナンバーズリーが何でこんな場所に来たんだ。

しかし、魔王がいるのか。この世界感でいない方が不自然とも言えるが、魔王か。

「冥府の王がこの場所に現れた理由は不明だが、現場での会話から察するに、こここの階層主である死霊王は冥府の王の部下だったようだ。階層主というのはダンジョンから出ることが叶わぬ存在だというのは承知しておると思う」

そうだったのか、初耳だ。

「この階層には死者の魂が集まり魔物と化すと言われている。死霊王は元人間もしくは魔物だった者が死してこの場に魂として集められ、死霊王となった……のかもしれない。もしくは別の手段でダンジョンに入り込んだか。あくまで仮定の話だが」

そういう経緯があったのかもしれないのか。死霊王と冥府の王の話聞いた限りでは確かに上下関係があり、冥府の王が上司っぽい口ぶりだったよな。

「とまあ、わからぬことを考察するのは全てが終わってからでも良いだろう。問題はまだこの階層に滞在していると思われる、冥府の王の対処方法だ」

「ちょっといいか、清流の会長」

「何だろうか、灼熱の会長」

挙手して意見を口にしたのは、赤銅色の肌をして焦げ茶色の髪の毛が立っている、見るからに暑苦しい男だった。

服装は炎が描かれたアロハシャツのような上着と、砂漠の砂の様な色彩のスボン。夏の砂浜が似合いそうな男臭さがある。

「仮にも魔王軍の幹部と事を構えても大丈夫なのか？ 倒しちゃったら何かと後々問題になっちゃうんじゃないか」

「それは心配いらないだろう。そもそも、向こうから仕掛けてきたのだ。魔王軍が我々と事を構えたいのであれば、迎え撃つしかない。もつとも、少数で動くならまだしも、魔王軍が直接この場所に侵攻

するには、防衛都市や帝国を滅ぼしてからになる。おそらく、今回の一件は冥府の王の単独行動で間違いないかと」

この世界の地理が頭に入っていないのだが、この迷宮がある国の北側には帝国があり、魔王軍と接する場所に防衛都市が存在していて、そこをどうにかしないと、ここまで攻め入ることは不可能な事だよな。

「じゃあ、何故、冥府の王はそんな単独行動を」

「始まりの会長、それはわかりかねる。ただ、ダンジョンには人知の及ばぬところがある。階層を突破した際の 憶測は止めておくでしょう」

政治が絡んでくると面倒臭いことになるのだが、そこは無視しても大丈夫なようだ。いや、寧ろ交渉事で追い払える方が、この人たちにとっては良いことなのかもしれないな。

「それで、対応策はどうすんだ」

「討伐しかない。我らが管理するダンジョン内で、ハンター協会の一員に手を出したのだ、総力を挙げて叩き潰すしかない」

一見穏やかで紳士の風格を漂わせる熊会長だが、その目に宿る光が野生の力強さを感じさせる。今回、懇意にしている愚者の奇行団や大食い団がやられたことに対し、腹に据えかねているようだ。

「珍しくやる気じゃねえか。だが、もつともだな。ハンターとは魔物を倒すのが仕事の一環だ。舐められたままじゃ、商売が成り立たねえ。俺んここに所属しているハンターから腕の立つのを参戦させ

るぜ」

「始まりの階層からも何組か出そう」

他の階層からも腕利きのハンターを出すということで話がまとまり、会議は解散となった。これは大掛かりな戦いになりそうだな。凄腕のハンター集団なら、あの化け物を倒すことも可能かもしれない。

「ラツミス、ハツコン、ケリオイル団長、それにミシユエル。ご苦労だった。今回の決議は皆も知つての通りだ。ここであえて問いたいことがある。お主ら今回の冥府の王討伐に参加する意思はあるか？」

「当たり前だ。うちの団員をあんな目に遭わせて、ただで済ますわけがねえ」

「私も参戦させていただきたい。己の未熟さを痛感させられる戦いでした。雪辱を果たすためにも是非！」

ケリオイル団長とミシユエルの心は全く折れていない。むしろ、闘志が溢れている。

会議が始まってから一言も発して無かったラツミスへ視線を移すと、俯いていた顔を勢いよく上げた。その顔には怯えも躊躇いもなく、強い決意が漲っていた。

「もちろん、参加するよ！ みんなを傷つけて、ヒュールミをあんな目に……一発殴らないと気が済まない！ ねえ、ハツコン」

「いらっしゃいませ」

ああ、その通りだラツミス。俺たちの力、見せつけてやるう。

「その熱い想い受け取った。清流の湖ハンター協会に所属する最高の人材を用意する。彼らと共に協力して冥府の王を討伐しようぞ」

そう言って熊会長が突き出した拳に全員が打ち合わせる。この時ばかりは俺にも腕があればと思わずにはいられなかった。

蹂躪後（後書き）

三章終了となります。

引き続き四章もよろしくお願いします。

強者

最強の敵である冥府の王に対する全員の決意が固まり、ラツミスが俺を担いで会議室を出ようとしたところで、何を思ったのかミシユエルが俺の前に回り込んできた。

「ハツコンさん。お礼が遅れて申し訳ありませんでした。貴方の活躍が無ければ、この場に私はいられませんでした。本当に感謝の言葉もありません」

腰を九十度に曲げて深々と頭を下げている。本当に礼儀正しい好青年だな。これで、コミュ障でなければ完璧なのに。

「本当に、本当に、感動しました！ 前々からずっと思っていたことがあるのです！ 鉄の体でありながら高潔で優しく、全く気配を読み取らない見事な隠蔽術。それに付け加え、鉄壁の防御だけではなく蘇生までこなせるなんて……ハツコンさん！」

額がくっつくぐらいに顔を寄せてきている。濡れた瞳が怖いぐらいに輝いている。え、なに、なに、なに。鼻息も荒くて怖いんですけどっ！

何かべた褒めされているけど、気配が読み取れないのは自動販売機だからだと思っぞ！

「魔道具であるとか、そんなことは関係なく貴方に惚れました！ 今日からハツコン師匠と呼ばせてもらってもいいですかっ！」

「なっ！」

驚愕のあまり一瞬頭の中が空白になった。

隣であんぐりと大口を開けてラツミスも驚いているけど、俺も生身があればあんな感じになっていると思う。

外見ではなく内面を褒められるというのは嬉しいのだが自動販売機なのに師匠って……同性に惚れられるというのは悪くないのだが、人として惚れたという意味だよな。決してあっち系の意味じゃないよな。違うよ……ね。

「だ、ダメでしょうか、ハツコン師匠と呼ぶのは」

くっ、中性的な顔をしたイケメンが潤んだ瞳で見つめてくるぞ。

俺が女なら一発で落ちそうなシチュエーションだが、そっちの気は無いから大丈夫、大丈夫。

彼は素直な純粹な気持ちで慕ってくれているだけだ。邪推したら失礼に値する。ここは大人の男として対応しないと。

「いらつしゃいませ」

「それは構わないってことですよね！　ありがとうございませす、ハツコン師匠！」

感極まったミシユエルにハグされたが、深い意味は無いんだよな。つ。なつ？

「ふうーん、弟子ができて良かったね」

何でラツミスに半眼で睨まれているのだろうか。

こうして自動販売機なのに人間の弟子ができてしまった。いや、師匠と言われても何も教えることなんてないよ？

曇天模様の空の下、宿屋の前でいつものように商品を売り終わりに休憩をしていると、すっと誰かが近寄ってきた。

「ハツコン師匠。お体、拭かせてもらいます」

手に綺麗な布と水の入った木桶を持って現れたのはミシユエルだった。

あれから俺は……ミシユエルに懐かれてしまった。何かと傍にいたことが多くなり、甲斐甲斐しく世話をしてくれている。

これって俺を尊敬してくれているのもあるのだろうが、日に日に人が増えていく亡者の嘆き階層の集落で、人目に晒されることが増えて落ち着かないから、俺の傍にいただけの様な気もする。

自動販売機である俺なら全く緊張しないで済むようだからな。

「ミシユエル。ハツコンの体を磨くのはうちやの。それはしなくていいのっ」

「そうでしたか、差し出がましい真似をしまい、申し訳ございません。では、また昼にきますので」

固執することなく直ぐに引いてくれるし、悪い子ではないのだが。

「ハツコン、最近ミシユエルに甘すぎるよ。迷惑ならベシツと言わないと」

ラツミスが腰に手を当てて頬を膨らませている。最近、ミシユエ

ルへの当たりが厳しいな。いつも一緒にいる俺を取られるとでも思っているのだろうか。

迷惑とまでは思っていないので、もう少し二人が仲良くなってくれると嬉しいが。

「なんてね。ミシユエルは悪い子じゃないの知ってるから。でも、ハツコンはうちのだもん。譲ってあげないからねー」

はにかみながら、そんなことを言われたら機械の体なのに、無い筈の心臓が跳ねそうになる。自動販売機である俺を友人として相棒として大切に思ってくれているだけなのに、こんな体になって何勘違いしているのだろうか。

「あー、今日だっけ。清流の湖階層に所属しているハンターが来るのって。まだみんなは本調子じゃなくて討伐に参加できないから、ちょっと期待しちゃうよね」

「いらっしやませ」

確か今日だったな。所属か……：そういえば、外の世界のハンター協会とは別で、ダンジョン内で新たに所属するハンター協会を選ぶことがある。

これには協会側とハンターの両者にとってメリットがあり、各階層のハンター協会としては何か困った案件が生じた場合、優先的にこちらの仕事を依頼することが可能となる。

ハンター側としては、その階層のハンター協会からの融通が利くようになり、有益な情報の提供や、別階層から所属する階層に移動する際には転送陣が安くなるなど、様々な特権が与えられる。

その為、各階層のハンター協会は優秀なハンターを勧誘して抱え

込むことも、立派な業務の一つだと言われている。ちなみにラツミスは清流の湖階層のハンター協会に所属していて、実は俺も同じく所属していたりするのだよな。

何でそんな経緯になったのかと言うと、迷路階層に落ちて大食い団に拾われた一件が切っ掛けだったりする。ちゃんとハンターとして所属しておけば同じような問題が発生した時に対応がしやすいそうなので、魔道具として初のハンターとなった。

熊会長は「こちらにもハツコンを手元に置ければ何かと、ありがたいからな」と本音を漏らしてくれた。その一言で俺はハンターになることを決めたとと言っても過言ではない。

「誰が来るのかな。清流の階層で有名なハンターかー。うーん、あんまりハンターとの交流が無いから、よくわかんないんだよね」

凄腕のハンターを連れてくると熊会長が息巻いていたから期待はできると思うのだけど、王蛙人魔を倒した際には、そんなに目立った動きをするハンターはいなかった。愚者の奇行団が一番優れていたよな。

「おつ、久々だな、ラツミス、ハツコン。元気してやがったか」

「息災か」

あれ、門番ズのカリオスとゴルスじゃないか。相変わらず見事なスキンヘッドと表情の崩れない名物門番コンビが何でここに。

「あれ、何で二人が亡者の嘆き階層に？」

「熊会長から聞いてないのか。討伐隊に参加することになったんだ

よ。俺もゴルスもな」

「よろしく頼む」

ああ、なるほど。二人の腕なら選ばれるのも当然だよな、盲点だった。

「お久しぶりですねえ。ハツコンさん」

「元気しておったか。再会を祝して水とスープを買うとするか。今日こそ、数字を揃えてみせようぞ」

あれ、早朝常連四人衆の二人、老夫婦が何故ここに。それに格好がいつもの私服と全く違うぞ。

両方とも少しデザインは異なるが着物にしか見えない服を着込んでいる。お爺さんは着物に帯を締めただけの格好で、確か着流しと言ったか。紺色の生地のだが裏地が真っ赤で、渋さの中に格好良さが同居している。

帯には何本も扇子が刺さっているようだが、武器らしきものを所有していない。

お婆さんは何時も手にしている漆塗りの様な光沢がある杖を所持している。服装は藍染の着物に黒い帯なのだが、足元は黒いブーツで腕にも剣道の籠手らしき防具を装着している。

いつもの格好とはあまりにも違う二人に、正直違和感しかない。しかし、この世界には和装もあるのか。俺以外にも日本人の転移者がいたのか、たまたま昔の日本に似た風土の国があつて服装が似ているだけなのかは判断がつかないな。

「あらあら、お久しぶりですね。ハツコンさんにラツミスさん。あ

「まあ、シメライ先輩にユミテ先輩まで」

「なんだ、お前さんも参加するのか」

「あああ、ホクシー。元気にしとったのかい」

新たに現れたのは尼僧のような格好をした孤児院の園長先生だった。既に黒塗りの大弓と矢筒を背負っている。

何故この階層にいるのかという疑問よりも、老夫婦と顔見知りであることに驚かされた。三人は駆け寄ると雑談に花を咲かしている。

「ふむ、メンバーが揃っておるようだな」

更にこの場に追加されたのは熊会長だった。って、聞き間違いじゃなければ、メンバーが揃ったって言ったよな。えっ、清流の階層の討伐隊って、この面子なのかっ！

えっ？ えっ？ えええええええええっ！？

「会長、もしかして、凄腕のハンターって園長先生たちのことなの？」

「ああ、皆、昔は共にハンターとして肩を並べていた仲間だ。腕は保証する。ラツミスもハツコンも既に顔見知りだとは思うが、改めて今回のメンバーを紹介しておこう。まずは清流の階層で門番を任せている、カリオスとゴルスの二人だ」

「おう、かしこまって言うのも変な感じだが、よろしくな」

「よろしく」

彼らの実力は良く知っているので、適切な人材と言える。だが、問題は……。

「そして、昔、共に組んでいたシメライにユミテだ」

「久々の戦場じゃが、安心するがええ。年季の差を見せつけてやるとするか」

「お爺さん、そんな大口叩いていたら、後で恥をかいても知りませんよ」

自信满满のお爺さんをたしなめるお婆さん。今更なのだが、初めて老夫婦の名を知ったな。お爺さんがシメライ、お婆さんがユミテなのか。

熊会長は口元に若干皺があって緩んでいるので若くはないとは思っていたが、実は老夫婦と同年代なのかもしれないな。

「最後が今は孤児院の園長をしているホクシーだな。愚者の奇行団に所属しているシュイの弓の師匠でもある」

「ラツミスさん、ハツコンさん、あの時は大変お世話になりました。今後ともよろしくお願いしますわ」

ニコニコと柔和な笑みを浮かべているが、あの顔に騙されてはいけない。その実力はあの一件である程度は把握している。実際に見たわけではないがシュイの言うことを信じるなら、心配は無用だろう。

熊会長にお墨付きをもらっているのだから、その実力は疑う余地が無いと思う。しかし、平均年齢が一気に上昇したな。

腕は確かだとしても体力が心配になる。それに昔は凄腕でも、老

化による衰えはある筈だ。それでも、熊会長が信頼を寄せているのだから、大丈夫だろう。きっと。

「お爺さんや、孫の土産何にしますかねえ」

「うむう、この階層でしか売っていない骸骨人形とかどうかのう」

「シユイがお世話になったみたいで、二人ともありがとうね。もう、あの子ったら、昔から無茶ばかりして、迷惑かけなかった？ あ、そうそう、うちの子たちが、またラツミスさんとハツコンさんに

」

おしゃべりが止まらない園長先生の対応をどうしたらいいか、ラツミスが戸惑っているな。老夫婦はマイペースでお土産を探しているし……だ、大丈夫だよな、本当に。

怨み（前書き）

一話連続更新になっています。こちらが一話です。

怨み

亡者の嘆き階層では冥府の王討伐に向けての準備が着々と進んでいる。

俺の存在を知った他のハンターたちは、どれだけ便利な存在なのかをいち早く察したようで、毎日の売り上げが倍増している。幾つかのチームが俺とラツミスを勧誘しようとしていたのだが、ケリオイル団長と熊会長に釘を刺されて様子を窺っている状態らしい。

そんな数日を過ごしているのだが、最近とても気になることがある。

冥府の王が何か先手を打ってこないとも限らないので、人々が出歩かなくなる深夜も警戒モード全開で見張りをしてしていると、宿屋の向かい側の民家に半透明の男が頻繁に現れては、窓と扉の前を歩き来しているのを毎晩見かけるのだ。

半透明の体なので死霊魔であるのは確かなのだが、ここでの魔物を観察し続けている俺には、とても異質な存在に映っていた。

他のは白もしくは青白い半透明の体なのだが、彼は黒い霧のような物が体から溢れているのだ。そして、その顔に浮かぶ表情は憤怒の歯を食いしばり、血の涙を流し、その民家を覗き込もうと必死になっている。

『何故だ……何故そんなことができる……何故だっ！』

身の毛があればよだつであろう、血を吐きながら叫ぶ呪詛。その鬼気迫る姿に機械の体でも恐怖を感じるほどだった。

ある日のこと、昏過ぎだったか熊会長が不意に話しかけてきた。隣には園長先生もいるな。

「ハツコンは毎夜見張りをしてくれていると聞いている。最近、何か妙なことはなかっただろうか。特に目の前の民家周辺で」

タイミングばっちりな指摘だ。あるところか、どうにか相談しようと思っていたところだよ。

「いらつしゃいませ」

「やはり、何かあったのですね。ハツコンさん、最近この辺りで殺人未遂事件が多発しているのをご存知ですか？」

そついや、お客が結構話題にしていたな。確か、シーミという未亡人の知り合いが連続して襲われているのだったか。

「いらつしゃいませ」

「ご存知でしたか。あの事件はシーミさんの友人が何人も襲われているのですが、背中に太めの串か小さな杭で刺した後が数か所見つかり、死には至っていませんが日を追うごとに被害に遭われた方の傷は大きくなっています。このままでは近いうちに死者がでることでしょう。そのシーミさんのお宅が正面の民家なのです」

ああ、だから、噂話をしていた連中の殆どが正面を見ながら口にしてたわけか。

「そして、当の本人であるシーミさんからハンター協会へ依頼があ

つたのです。ハンター協会としても大事な討伐前の時期。憂いを残さないように早急な事件解決を望んでいます。私が今回、その一件を任せましたので、ご協力をお願いしたいのですが」

園長先生が担当なのか。でも、何でだ。こういつのつて探偵の仕事みたいなものじゃないのか。わざわざ園長先生がやらなくても、人の多いチームが一丸となって情報収集をする方が効率的だろうに。

「あ、そうでしたわ。ハツコンさんはご存じありませんでしたね。私は一応、治癒の力がある加護と光魔法を扱えますので、この階層の魔物相手には少々自信がありますの」

弓が凄腕で癒しの力と光魔法も扱えるのか。チンピラの一件で園長先生への見る目が変わったのだが、まだ見極めてはいなかったようだ。

「ハンター協会は、この一件、憎悪のあまり魔物と化した者の犯行ではないかと睨んでいます」

ここまで情報が提供されたら誰だっかわかる。毎晩、家を覗き込もうとしていた死霊魔が犯人もしくは関係者で間違いないだろう。なら、この数日何があったか教えるべきだよな。

俺は機能の液晶パネルを取りつけ、あの死霊魔を毎夜撮り続けた映像を流した。幽霊っぽいので映像として撮ることが可能なのが不安だったが、問題なく映っている。

「これは、怨霊魔と化しているな」

「いえ、会長。まだ、辛うじて意識は保っているようです。完全に怨霊魔と化していれば、襲われた者が助かるわけありませんので。」

この人……話を聞いてみましょう」

えっ、いやいやいや！ この人完全に怨霊というか悪霊にしか見えない。そんな相手がまともに話をしてくれるわけがない。あまりにも無謀すぎる。

「ざんねん」

「あら、ハツコンさんは心配してくださっているんですね。大丈夫ですよ、私はこういった案件に何度も関わっています。完全に怨霊魔となった魂は救われることがないと言われています。今ならまだ、成仏させる余地があるかもしれません」

「ホクシーがそう言うのであれば、心配はいらぬか。任せたぞ」

「お任せください」

熊会長は全幅の信頼を寄せているようだ。なら、俺が口を挟むことはないか。ただ、その結末は最後まで見届けさせてもらうけど。

深夜、いつものように見張りをしていると、宿屋の扉が開き園長先生が進み出てきた。手には弓を握っているので、話し合いが失敗したら強制的に排除することになるのだろう。

「こんばんは、ハツコンさん」

「どうもじゃいませ」

既に死人魔や骨人魔や死霊魔がうろついているので、園長先生が襲われるのではないかと気が気ではなかったのだが、魔物たちは彼女に一瞥くれるだけで、近寄ってくることはなかった。

「久しぶりにこの魔法を使ったのですが、問題ないようですね」

そう呟く彼女をじっと見つめると、仄かに体から光が溢れていることに気づいた。これが敵の認識を誤魔化しているのだろうか。

「ハツコンさん。あれから、シーミさんと襲われた方々の情報を集めたのですが、興味ありますか」

「いらっしやいませ」

もちろん、興味ありありだ。あの憎悪剥き出しの顔をした幽霊の真相がわかるなら、ぜひ教えて欲しい。

「今回の一件はハツコンさんに見届けて欲しいのです。そして、出来ることなら前に見せてもらったように、その光景を残しておいていただけませんか」

つまり、録画しろって事だよな。それは言われるまでもない。初めからやるつもりだった。

「いらっしやいませ」

「ありがとうございます。では、彼女について得られた情報をお話しますね。シーミさんは六年前に夫を亡くして独り身となり、女手一つでも仕事を得られる、この階層へ移り住んできたそうです」

このホラースポットは数日、肝試し感覚で過ごすならありかもしれないが、定住するには勇気がいるよな。やる気があれば仕事は幾らでもありそうだ。

「何とか仕事を見つけ働きたした彼女は一人の男性と知り合いました。二人は暫くして同居をする関係となり、順風満帆だったそうです。そんな彼は絵描きをしていて自画像も描いていたのですが、これがそうです」

懐から取り出した丸めてある紙を広げると、そこには、やせ気味で気の弱そうな顔をした男がいた。押し売りにあつたら言い値で押し切られそうなタイプに見える。

「彼の名はチキナ。売れない絵描きだったのですが、ある日、その絵が商家の男に見込まれて個展を開く準備をしていた矢先に……自殺しました」

えっ、何でそのタイミングで。栄光の未来が見えていた筈なのに、何で自殺する必要があるんだ。どう考えてもおかしいだろ。これって実は他殺だという流れなのか。

「死因は筆の柄で何度も胸を突き刺して死んだそうです。自殺では間違いのないことです。彼の遺書も残されていましたので。そこには 死んでも、あいつらだけは絶対に許さない と血で殴り書きされていたそうです」

それは壮絶な死に様だな。筆の柄で何度も死ぬまで刺せる程の憎悪とは一体何だったのだろう。栄光を掴む直前の手で筆を掴み、自身に何度も突き刺し、自殺するまでの怨みとは。

「ハツコンさん、この肖像画を見て思うところはありますか」

正面に肖像画を突き出されたのだが、何度見ても冴えない薄笑いを浮かべている男としか……おい、この輪郭と鼻。いや、そうか、そういうことか。

この男、毎夜民家を覗いている怨霊の男に似ている。表情が原形を留めていないので気づかなかつたが、特徴的な鼻の形とやせ気味の顔が男と一致するぞ。

返事の代わりに 液晶パネル に怨霊魔になりかけている男の映像を流す。

「そうです。彼がチキナで間違いないでしょう。彼が何故、そこまですみ魔物と化すまでの憎悪を覚えたのか。被害にあつた人々に話を聞いてみてわかったのですが、全員に共通点がありました。その共通点とは――」

核心に迫り、自動販売機でなければ身を乗り出して聞き入っていた俺に、

『何故だ……何故そんなことができる……何故だ』

と恨みの言葉を吐く、男の憎悪に染まった声が届いてきた。

愛、故に（前書き）

二話連続更新のこちらが二話目です。お気をつけください。

愛、故に

『何故だ……何故そんなことが……何故っ』

何度聞いても魂を揺さぶられる、怒りと悲しみの入り混じった怨嗟の慟哭。

やってきた彼は昨晚よりも黒いオーラのようなものを多く噴き出している。園長先生から情報を得た今、その顔は恐ろしくも何処か悲しげに見えた。

そんな怨霊魔となりかけているチキナに、園長先生は躊躇うことなく歩み寄っていく。

「チキナさん、何がそんなに恨めしいのです」

責めるわけでも咎めるわけでもなく、ただ優しく語りかける声。

そんな園長先生の声に反応して振り向いたチキナの顔には、恨みだけではなく躊躇いが見える。

『誰だ……あの女の……仲間かっ』

「いえ、私はただ、貴方のお話が聞きたいだけです。彼女に伝えたいことがあるなら、私が責任を持って伝えます。チキナさん、貴方は彼女に何か伝えたいことがあるのではないのですか」

『伝えたいことだと……はっ、俺はただ……あの女とその周りの、俺を嘲笑い騙していた奴らを……殺したいだけだっ！』

怒りの感情を吐き出したただけだというのに、全身から強烈な風が

吹き出し、砂埃が舞い上がっている。近くに来ていた魔物たちが、怯えたように離れて行く程の怨みの力。

「それをお聞かせ願えませんか。どうせなら、貴方の想いを彼女に知らせて、恐怖のどん底に叩き落としてから、殺害した方が恨みも晴れると思いますよ」

え、園長先生？ にこやかな笑顔で何てことを口にかけている。これが駆け引きとしてやっていることぐらい理解できるが、それにしても淀むことなくさらっと言い放ったな。

『なるほど……それは面白い……なら、聞かせてやるう……何故、ここまであの女を怨むのかをっ！』

乗ってきたか。事前に園長先生が言っていた通りだな。

「恨みを残した魂は、誰しもそれを誰かに聞いて欲しい、知って欲しいと願っています。苦しんで死んだ人は、その苦しみを知って欲しいが故に、怨霊魔となり人を苦しめて殺すのです。彼も本心ではその苦しみを誰かに知って欲しいと願っている筈です」

園長先生の予想通りに事が運んでいる。あとは彼の本心を聞かせてもらうだけか。

『俺は売れない画家だった。だが、認められもう少しで栄光を掴める直前だった。それまでは何かと彼女に苦勞をかけ通して、これだようやく彼女を幸せにして上げられる。これから幸せな家庭を築いていける』

語るチキナの顔からすつと怨みの表情が抜け落ちた。過去を懐か

しみ、口元に苦笑いすら浮かべている。

『そう思っていたんだ。幸せな未来予想図に胸を弾ませ、来るべき個展に向けて骨身を削り俺は絵を描き続けた。やっと彼女を楽にして上げられる。きつとこの先には素晴らしい世界が待っていると信じて……俺は最後の絵を描き上げた。全ての準備が整った俺は仕事場から彼女の待つ家に帰ったんだ』

ここまででは心が温まる物語だ。貧乏画家が幸せを掴むサクセスストーリー。よくある題材と言ってしまったえばそれまでかもしれないが、恨む要素など何処にもない。

『そんな俺を待っていたのは彼女の「好きな人が出来た別れて欲しい」という一言だった』

消え入るような声で呟いたチキナの顔は今にも泣きだしそうで、その辛さが見ているだけで鮮明に伝わってくる。

『頭の中に浮かぶ言葉は何故。何故、この時に、何故、今だ。確かに今までは不甲斐なく、彼女に負担を掛けていた。そのことで呆れられ捨てられるのであれば理解できる。だが、何故、幸せを掴めるかもしれない今、何故、この最高の瞬間を塗りつぶすような絶望をぶちまけたのかっ！俺には俺にはわからなかったっ！』

仰け反り天に向かって吠えるチキナの姿は痛々しく、胸の奥を鷲掴みにされたような苦しみを俺も味わっていた。

『幸福から絶望。混乱と憎悪と懇願。ありとあらゆる感情に侵されそうになったが、何とか俺はそれを抑え込んだ……今までの自分に非があったから。だが、彼女の説明を聞いて、俺は理性が吹き飛び

かけたつ。その男とは前から仲良くしていたが、付き合っつきつかけになったのは、数日前に自宅で開いたパーティーの席だと言うじやないかつ！ 俺は忙しくて参加できなかったが、自宅に友人を呼んで騒いでもいいかという懇願に快く頷いた。彼女は魅力的だし、参加する友人に男が多いことには正直嫉妬もしたが、彼女が喜んでくれることだけを願い、承諾したんだつ！』

ああ、そうか。彼が何に絶望したのか見えてきた。ここは、口を挟むような場面じゃないよな。彼の想いを全て吐き出させてやるべきだ。

『そのパーティーに参加していた奴らは全員、俺の愚痴を零す彼女の話の聞いて、そんな男捨てて、こいつにしたらどうだって、ずっとそそのかしやがったんだ！ その方が幸せになれるってな。俺はそんなことも知らずに部屋を掃除して飾り立て、笑顔で彼らを家に招き、わざわざ別れる後押しをしたんだ。滑稽だろ……振られる為の舞台を自ら整えた……』

掛ける言葉が見つからない。正直、この話は男の一方的な言い分なので、事実とは異なることもあるかもしれない。それでも、その悲痛さは本物だと確信できた。

『俺は感情を殺した。ほんの数日前まで、そんな素振りも見せず普通に接していた彼女の全てが嘘だとは思いたくなかった。大切な人を嫌いになりたくなかった。口を開くと罵倒してしまっそうだった俺は、身を引いて家を出た……一晩眠れぬ夜を過ごし、もう、恨み言も言わずに忘れ物だけを取りに行こうと、夜に彼女の家に戻った俺が見たのは……新しい男と楽しそうに家で過ごす彼女の姿だった』

そこまで語るとチキナは天を仰いだ。そこには漆黒の闇が広がっ

ているだけで、星一つ見えることはない。

『何故だ、何故そんなことができるっ！ あの家具も食器も雑貨も共に選り買い揃えた、そんな物たちや大切な思い出が数年分詰まった部屋に、別れた次の日の夜に男を呼び込めるっ！ 何故、男も土足で思い出を踏み潰しながら笑顔で愛を囁けるんだっ！ 奴らに人の心は無いのかっ！ 教えてくれっ、頼むから誰か教えてくれっ！ 何故、そんな酷い事を平然とやれるんだっ！ 俺には理解できないんだっ！ そこまでされないといけない程の罪を俺は犯したのかっ！ 頼むから教えてくれ……頼むからっ』

彼の嗚咽交じりの叫びに応える術を俺はもっていない。話せる口があつたとしても、そんな経験をしたことのない俺が言えることなんて何も無い。

「当人ではない私には残念ながらわかりかねます。貴方はその恨みを彼女にぶつきたいのですか」

静かに語る園長先生の声を聞き、男は怒りに顔を歪ませ大口を開く。

『当たり前だっ！ 俺はあの女に、この苦しみを与える為に呪い死んだんだっ！』

「本当にそうですか。貴方は何がしたかったのですか。本当に怨み呪う為だけに現れたのですか」

『そうだっ！』

断言するチキナに向かい、園長先生は一枚の絵を差し出した。そ

ここには優しく微笑む一人の女性が描かれていた。

「この絵は貴方が死んだ当日、彼女の家の前に置かれていた肖像画だそうですね」

これが渦中の人であるシーミという女性か。儂げで地味な印象はあるが素直に美しい。そう思える肖像画だった。この絵を描いたチキナの溢れんばかりの愛情が込められた、見る者が思わず微笑んでしまうような幸せに満ちた作品だった。

『その絵はっ……ああ……そうか……あの日、自分の非を認め最後に……今までの感謝を込めて描いた絵だけは受け取ってもらおうと家を訊ねたのか……そして、あの場面を目撃して……ああ、そうか……あの時、落とした絵を彼女に……怨みはあった。でもそれ以上に自分の不甲斐なさを嘆き俺は死んだんだ。あの温かい光景を守れなかった自分の愚かさ』

「怨霊魔というのは、強い想いを抱く者の魂に取りつき憎悪を増幅させ自害させ、怨霊魔として生まれ変わらせるのです。だが、その憎悪をもってしても貴方の本当の想いを塗りつぶすことはできなかった」

そうか……そうなのか。人の色恋沙汰に口を挟める程、人生経験が豊かではなかった俺だが、チキナが怨み妬み殺したいと無念は理解できたつもりでいた。だけど、そうじゃなかったのか。

「チキナさん。もう一度問います。貴方は何がしたかったのですか」

『俺は……』

「はい、どちら様でしょうか」

「シーミ様からの依頼を受け、ハンター協会からやってきた者です」

朝を迎え、宿屋の真ん前にある民家を園長先生が訪ねている。俺は最後までしっかり見届ける為に園長先生の横に並んでいた。

扉を開けた女性　シーミが俺を見て目を丸くしている。玄関開けて自動販売機があったら現代日本でも驚くだろっな。

「ええと、この箱は宿屋前に置いてある魔道具ですよね」

「はい。意思ある魔道具ハッコンさんです。それはさておき、依頼の件、無事完遂しましたのでご報告を」

その言葉を聞いたシーミが胸を撫で下ろしている。

「そうですね、ありがとございます。私に言う権利はないのかも知れませんが、これ以上あんな姿を見ていられなくて」

「ちゃんと迷わずこの世を去られましたよ。あと、この肖像画は返しておきますね」

「あ、いえ。私にはこれを受け取る権利はありませんので……」

そう言って肖像画を押し返そうとした彼女を見て　液晶パネルに輪郭が薄れていく彼を映し出した。

『シーミ、すまない。本当に迷惑ばかりを掛けた。捨てられて当たり前の生活をさせていたくせに、降ってわいた幸運に舞い上がり、あの時の俺は何も見えていなかった。友人の言い分だってもっともだ、収入が殆どない俺を心配するのは当たり前だよな。何度も俺にこのままの生活じゃいずれ駄目になる。堅実に働きながら夢を追うことだってできる。個展を開いても今後上手くいくとは限らない。って言っていたのに聞く耳を持たなかった。今なら、その言葉を素直に受け止められるよ。本当にごめん。あの日、肖像画と共に君に伝えたい言葉があったんだ。だから、遅くなっただけど受け取って欲しい。今までありがとう、幸せになっってくれ』

彼女の頬を涙が伝い、肖像画を抱きしめたまま膝から崩れ落ちる。これを録画してから直ぐに、彼は俺たちに深々と頭を下げて消えていった。最後に見せた顔は吹っ切れた満足そうな顔だったのが印象的だった。

自動販売機が恋愛を語るなんておかしな話だが、今回の一件は一概にどちらかが悪いということではないのだと思う。彼も今まで負担を掛けていた、彼女はその事について何度も忠告してきた。いつしか歯車が外れお互いが勝手に回りだし、最悪な結果を招いてしまった。

「自分の心すらわからないのに、他人の心を完全に理解することは誰にもできません。ですが、相手の立場に自分を置き換え、思いやる事が出来るかどうか。それだけの話なのだと思いますよ」

園長先生の言葉がすつと鉄の体に浸透する。さりげない話し方だというのに、思わず感じている程の説得力があった。きっと俺なんかが想像もつかないぐらい様々な経験をしてきたのだらう。酸いも甘いも乗り越えてきた年長者の言葉は重みが違うな。

「ハツコンさんは姿形こそ私たちとは異なりますが、人として最も大切なのは心です。孤児院で見せた、その優しさを忘れずにいてくださいね」

「ありがとうございます」

自動販売機の体を持ち、人の意識が宿る。肉体を失ったからこそ、心だけは人でいたい。そう思わずにはいられなかった。

顛末を見届けて思うことは……無性にラツミスに会いたくなった。無邪気な笑顔で微笑んでくれる、彼女の顔が唐突に頭に浮かぶ。

あの笑顔だけは、この身に代えても守り抜かないとな。

精鋭部隊と自己紹介

各階層の選り抜かれたハンターたちが集まり、集落内の大広間で決起集会が行われている。今回は敵が強大な相手なので、若手や中堅どころでは無駄死にするだけだという判断の元に、精鋭だけを集めたそうだ。

ざっと見回してみると、如何にも熟練なハンターたちも居れば、ラツミスと同年代か少し上ぐらいの若者も見受けられる。

「若い人も結構多いねー」

キヨロキヨロと物珍しそうに、周囲の人を観察していたラツミスも同じことを思っていたのか。

「若い奴らの殆どが強力な加護所有者か、複数の加護を得た者かのどちらかを見て、間違いはねえぜ」

なるほどな、流石、物知り博士ヒュールミだ。彼女は心停止の影響で未だに万全ではないのだが、戦闘に立つことが無いという理由で、今回の遠征に同行することになっている。

それに冥府の王が自ら殺した筈の彼女がいることで、相手の動揺を誘えるのではないかという目論見もあるようだ。

俺の 結界 や、ラツミスの 怪力 もそうだが、この世界において加護があるかないかで、人の価値が大きく変化する。

若かるうが強力な加護があれば、熟練ハンターの実力を遥かに凌駕する力を得ることも可能だからだ。

壇上で説明をしているのが何故か熊会長だ。普通はこの階層の会

長がやりそうなものだけど、会長の中でまとめ役のポジションは熊会長なのか。

決起集会は明日から各自本格的な調査と討伐に乗り込むということとで終了した。明日に備えて宿屋に戻るハンターが多かったが、何を思ったのか俺たちの集団に歩み寄ってくるハンターの一団がいた。

「何だ、この年寄りの集まりは。ここは介護施設じゃねえぞ。マジでやる気あるのかよ」

いきなり暴言を吐いたのはラツミスと同年代に見える、赤く短い髪を逆立てた、小生意気そうな男だった。

腕、胸元、足だけを覆う部分鎧は全て紫で、色彩センスは酷いといしか言いようがない。

付き従う仲間らしきメンバーも二人が若い女性で、もう二人は中年に差し掛かったくらいだろうか。この一団のシンボルカラーなのか全員が紫に染めた防具を身に纏っている。

「何だてめえ、いきなり失礼なクソガキだな、あああんっ！」

相手の無礼な物言いに真っ先に噛みついたのは、ヒュールミだった。自分が舐められるのも許せないが、仲間を罵倒され見下されることを人一倍嫌う彼女らしい反応だ。

「おい、クソアマ。誰に向かって生意気な口をきいてんだっ！俺たち紫炎の団を知らねえのか」

おっ、相手も負けずに凄んでいるな。紫炎の団と自慢げに語っているが、全く聞いたことが無い。俺が無学なだけで、実は有名なのだろうか。

「知らねえな」

「知らないよね、ハッコン」

「わしゃ、聞いたこともないぞ、婆さんは？」

「はて、支援の団とは優しそうなハンターさんたちですねえ」

「孤児院と同じような事業をされているのでしょうか」

「ゴルス、有名なのか？」

「初耳だ」

誰も知りませんでした。情報通のケリオイル団長やミシユエルがいたら反応も違っていたのかもしれないが、二人とも体を最良の状態に戻す為に、診療所でギリギリまで治療してもらっているのです。この場にはいない。

「て、てめえら、今、話題沸騰のハンターチーム、紫炎の団を知らねえって何処の田舎者だっ！」

田舎者って、このダンジョンに都会も田舎もないと思う。実は驚くほど発展している階層とかあるのかね。そんな場所があるならいずれ、ラツミスと一緒に行ってみたいが。

しかし、暴言を吐くこの男を、奴らの仲間は誰も止めようとしていないな。女二人は小馬鹿にした笑みを浮かべて、楽しそうに眺めている。後方に控えている男たちは無表情なまま、黙って従っているだけだ。

この男のワンマンチームなのか。如何にも引き立て役と言うか、

雑魚っぽい言動が目立つ男なのだが、かなり実力者なのだろうか。見た感じチンピラっぽくて、武芸を極めた感じはしない……さつき、ヒュールミが話していた強力な加護を所有している線が強そうだな。

「あんつ、何だ揉め事か。若いねえ、ラツミス軽く小突いて気絶させてやれ」

いきなり登場して煽っているのは、つばの広い帽子がトレードマークらしい、ケリオイル団長か。

「あ、なんだオッサン。てめえも、こいつらの仲間か。おいおい、ジジババばっかだ」

「ケリオイル団長、治療はもういいの？」

「おう、明日には完全復活だぜ。あの骨野郎に復讐する準備は万全だ」

ラツミスが男を無視して話しかけると、腕を叩いて力こぶを見せつけて復活をアピールしている。

「てめえら、無視してんじゃね……おい、お前、今、なんつった。そのオッサンを何て呼んだ」

お、さっきまでの強気の状態が少しだけ治まり、男がラツミスに問いかけている。

「えっ、ケリオイル団長だけど？」

「ふかしこいてんじゃねえぞ！ まさか、愚者の奇行団のケリオイ

ル団長とか、ぬかすんじゃねえだろうなっ」

「おう、間違いねえぜ。紫炎の団のリーダー、ニルクワ君」

相手の名を知っていたのか。ケリオイル団長は帽子のつばに指を這わせて、意味ありげな笑みを浮かべ相手に流し目を注いでいる。

「ひいうっ。そ、その帽子に腰の短剣……ま、まさか、いや……し、失礼しました！ 愚者の奇行団の方々とは存ぜずに、申し訳ありません！ 何卒、ご無礼の程をお許しただければっ」

見事なまでの手の平返しだな。何度も何度も頭を下げて完全に怯えている。

愚者の奇行団ってそこまで有名だったのか。だが、この過剰反応は有名だからってだけじゃないよな。

「おいおい、そんなに怯えなさんな。一緒に討伐に向かう仲間じゃねえか……馬鹿な言動を慎むなら何もしねえさ」

「は、はい！ 胆に銘じておきますっ！」

「皆さん、遅れてすみません。今、治療が終わったのですが、そちらの方は」

ミシユエルが駆け寄ってきている。身体の痛みや違和感を誤魔化している感じはなさそうだな。これで全メンバーが揃ったのか。

「おー、今回、一緒に行動する孤高の黒き閃光ミシユエルじゃねえか」

ヒュールミの説明台詞に、ニルクワと呼ばれた男の顔面が蒼白になった。相手がどんな反応をするか理解した上で口にしたろ、ヒュールミ。グツジョブだ。

萎縮した彼は脱兎のごとく、この場から立ち去った。力を笠に着的者は、それ以上の力を前にすると、あそこまで情けない姿になるのか。

「ビビり過ぎだろ。ったく、うちの名前が変に有名なのも困ったもんだ」

愚者の奇行団が有名なのは信じるしかないが、あれ程までに怯えるということは、どんな噂が広まっているのか興味がある。

「んじゃまあ、明日からよろしく頼みむわ……じゃねえ、よろしく頼みます」

年長者である三人には頭が上がらないようで、珍しくケリオイル団長の腰が低い。

後で知ったのだが、熊会長を含めた四人は、ベテランの間では知らない者がいないレベルの超有名ハンターチームだったらしく、過去に世話になったことがあるケリオイル団長は、頭が上がらないそっだ。

「あつ、全員が揃ったんだから、改めて自己紹介しようよ！　まずは、うちからね。ハツコンの相棒やっているラツミスです！　皆さん、よろしく願います」

返事も待たずに率先して自己紹介を始めたラツミスに老夫婦と園長先生が拍手をしている。他のメンバーも釣られて手を叩いた。

「しゃーねえな。オレはヒュールミ。ラツミスの幼馴染で魔道具技師だ。戦力にはなんねえが、知識だけはそれなりにある。敵の情報やら魔道具の修理なんかは任せてくれ」

何だかんだ言って付き合い良いよな、ヒュールミは。

「では、次に私が。ミシユエルと申します。偉大なる先輩方と共に戦える幸運に胸を震わせております。若輩者ではありますが、ご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願いします」

「となると次は俺か。清流の湖階層で門番をやらせてもらっているカリオスと言います」

「ゴルスです」

ミシユエルはイケメンモードでの挨拶なのだが、門番のカリオスはまだしも、ゴルスはもう少し愛想を良くしても、いいのではないだろうか。

「愚者の奇行団で団長をやらせてもらっています、ケリオイルです。今回は団員のこともありますので、力を貸していただきたい」

ケリオイル団長も続いて自己紹介を終えた。丁寧な口調の団長と言っレアな状態は一応録画しておいた。後で見舞いの時に団員に見せて上げよう。

そっいや、副団長は大食い団と団員の看病に回っているそうだが、恐怖を押し殺して参戦を希望したそうだが、団長が部下を頼むぞと押し留めた。とシユイが言っていた。

「年齢順のようなので、次は私ですね。始まりの階層で孤児院を経

嘗ていまして、ホクシーと申します。日頃は園長と呼ばれてい
ますので、お好きな方でお呼びください」

園長先生は前回の一件を考慮すると、一番この階層で頼りになる
人かもしれない。

「若い者順なら、次は私ですね」

「何、下らん見栄を張っておるんじゃ。それなら、次はワシじゃろ
うて」

「お爺さん……」

「そ、そうじゃった、婆さんが先じゃったな。いやー歳を取ると物
忘れが激しくなっていかなのう」

あ、お婆さんの一睨みでお爺さんが黙った。眼力が凄いというよ
りは、日頃の上下関係が垣間見えたというべきか。

「ユミテと申します。加護に癒しの光と、剣術を少々たしなんでお
りますが、皆様の足を引つ張らぬよう気を付けますね」

回復魔法も使える剣士か。ゲームならパーティーに一人は欲しい
人材だ。剣は仕込み杖の事だよな。以前、あの杖から刃が出てきた
のを目撃したことがある。

どの程度の腕なのか……たぶん、回復がメインで呼ばれている筈
だから、自分の身を守るぐらいの腕があれば、仲間が楽できそ
うだが。

「最後はワシじゃな。名はシメライ。魔法と幾つかの加護を所有し

ておる。遠距離はワシとホクシーに任せておけばええ」

お爺さんは魔法使いなのか。どうりで、武器を携帯していない訳だ。

前衛、回復役、後衛。かなりバランスのいいパーティーだな。後は各自の実力次第ということになる。老いさえなければ何も問題は無いのだろうけど、老夫婦は若くても六十代。園長先生はおそらく五十代。その年齢による衰えが心配になる。

期待と心配が入り混じっているが、敵の強さを目の当たりにしたケリオイル団長なら、全員の動きを観察して、適切な判断を下してくれるだろう。

搜索のススメ

決起集会の翌日、各階層のチームごとに決められた探索地域へ向かうこととなった。全チームには連絡用の魔道具が支給され、毎日の報告が義務付けられている。不測の事態や冥府の王を見つけた際の、連絡用でもあるのは言うまでもない。

清流の湖階層の探索チームは我々だけなのだが実力を見込まれ、亡者の嘆き階層の奥地まで向かうことになっている。

「皆、危険な役割を任せて申し訳ない」

荷猪車と並んで歩いている熊会長の詫びの言葉に全員が、全く気にしない素振りを見せている。リベンジでもある、ケリオイル団長とミシユエル、そしてラツミスとヒュールミも望むところであり、俺だって出来ることなら、冥府の王との決着はこの手で付けたいと思っている……手はないけど。

「お前さんは変わらんのう。堅苦しいところなんぞ、昔のままじゃ」

「そうですよ。仲間なのですから、詫びる必要等ありませんよ」

幌を外した荷台に座っている老夫婦にそう言われ、熊会長はバツが悪そうに頭を掻いている。先輩後輩関係が完全に身に染みているようだ。

「懐かしい光景ですわね。あつ、皆さん前方に魔物が十二体待ち構えているようです。準備をしてくださいね」

注意を促しているのだろうが、園長先生の穏やかでのんびりした声を聞くと、戦闘意欲が根こそぎ持って行かれそうになる。

しかし、園長先生は前方を眺めながらそう言うが、俺の目には全く敵の姿が見えていない。疑う訳じゃないが、本当に何かいる様には見えないな。

「おう、そうか。それじゃあ、ワシと婆さんとホクシーでやるとするか。最近現場に出ておらんかったからのぉ。身体を慣らしとかんといかん」

「準備運動は必要ですからねえ」

「先輩との共同作業。久しぶりでワクワクします」

年齢を感じさせない身軽な動作で、荷台から老夫婦が飛び降りる。園長先生は荷台に立ち上がり、弓を構えると弦を引いた。

この三人の戦いっぷりを見学できるのか。今後の方針にも関わってくることなので、見逃さないように録画しておこう。

「光よ鏃を包め」

静かにその言葉を園長先生が唱えると、矢の先端が電球になったかのように光が灯る。あれが光属性の魔法なのか。

「では、お先に失礼しますね」

そうやって矢が放たれたのだが、全く見えなかった。弦の鳴る音がしたかと思ったら、矢が消えていた。先端の光の軌道だけは残っている。まるで弓からレーザーが発射されたかのように見える。

「腕は衰えておらんようじゃな。お見事」

「あら、一気に三体貫いたのね」

老夫婦が感心しているが、それが事実かどうかとも判断できない。

「ええと、倒したのかな……ヒュールミ見える？」

「いや、さっぱりだ。あんたらは？」

ラツミスに問われて眉根を寄せた顔で、矢の行く先を睨みつけていたヒュールミだったが諦めて、ケリオイル団長とミシユエルに問いかけている。

「ああ、辛うじて確認できるが。相変わらず、えげつない腕してやがる」

「お見事ですな。この距離を一矢で三体も倒す。神技と言っても差支えがない腕ですよ」

二人が絶賛する程の実力なのか。これで園長先生の腕は問題ないどころか、格が違うことが判明した。残るは老夫婦の二人なのだが。

「やれやれ、距離が遠すぎて魔物がワシらの場所を把握しておらんようじゃ」

「それは困りましたね、お爺さん。私の刀届きませんよ？」

「そっじゃな。ならば、呼ぶか」

お爺さんが、友人を家に招くような気軽さで口にすると、帯に差し込んでいた扇子を一本引き抜いた。

ぱんつと扇子を振り下ろすようにして開くと、澄み渡る空に浮かぶ雲が描かれた扇面が飛び込んでくる。

その扇子を無造作に下から上に振り上げると、お爺さんの数メートル前の地面から巨大な風の渦が噴き上がった。

「えっ、えっ、えっ！」

強風に煽られ大口を開けて驚いているラツミスの顔が面白いことになっている。って、観察している場合じゃないか。これって、お爺さんが起こした竜巻なのか。

竜が天高く昇っていくかのように、竜巻が細長く上空へと伸びている。

「ほいっと」

今度はその扇子を横に薙ぐと、天に伸びていた竜巻が倒れていき、風の渦が地面に叩きつけられた。何がしたいのか、意図が掴めないでいたのだが、その答えは数秒後に判明した。

地面に伸びた風のトンネルから敵が十体飛び出してきたからだ。

竜巻に巻き込んでここまで持ってきたのか。凄まじいな、お爺さんの魔法は。

魔物たちは平衡感覚をやられ、状況がわからず、ゆらゆらと揺れているだけで攻撃に移る気力もないように見える。可哀想に。

「まあ、こんなもんじゃ。婆さんや、何体かやっておくか」

「大丈夫ですよ。もう、終わりましたから」

えっ、終わった？

鞘鳴りのような音がしたので、お婆さんに視線を移すと、仕込み杖から半分ほど見えていた刃を収納しているところだった。

カチリと仕込み杖に刃が納まりきると、ゆらゆらと揺れていた全部の魔物たちの体に十字の線が走り、身体が四分分される。

嘘……だろ。お爺さんの魔法に圧倒されて視線を向けていなかったとはいえ、そんなの数秒程度だ。そんな短時間で十体もの魔物を瞬殺したのか。

何かもう、偉そうに実力を測るとか考えていた過去の自分を殴りたい。俺が心配すること自体が失礼に値するレベルだ。

熊会長が自信満々で呼び寄せたのも今なら納得できる。

「流石ですね、御三方。腕は衰えていないようだ」

「いや、練度が落ちておるのう。やれやれ、魔力を練り直さんといかな」

「切れ味が鈍くなっていますよ。はあ、年は取りたくないものですねえ」

「もう少し精度を上げないと本番では使えません。これではシユイに偉そうなことは言えませんね。反省しなければ」

熊会長の称賛の言葉に謙遜……というより本気で反省している三人がいる。他のメンバーは会話内容に口元が引きつっているな。

「ゴルス。こっからは積極的に戦わせてもらおうぜ」

「ああ、自分が矮小な存在に思えた」

門番の二人の闘争心に火が付いたようだ。

「俺も負けてらんねえぞ」

「ええ、己が未熟さを痛感しました」

この二人もやる気スイッチが入ったようだ。あの年齢で自分より遙か高みに存在する人の活躍を見て、怖気づくのではなく、闘志を燃やせるのか。

「すっごいなあ。ハッコン、うちらも負けてられないねっ」

「いらっしやいませ」

そうだね、ラツミス。新たに増えた面子が尋常ではない実力者だということがわかった。心配は無用となれば、あとは俺たちが強くなるだけだ。

ラツミスは身体能力だけなら彼らと同等がそれ以上だろう。問題は有り余る怪力を思いのままに操れるか。彼女の今の状態はF1に乗っている新人ドライバーのようなものだと思う。

彼女に必要なのは時間と経験。急激な成長を期待するのは酷いものだ。

「……背中にいる。」

つまり、俺が強くなれば必然的に彼女の戦力アップに繋がるということだ。そして、その糸口はある。冥府の王との戦いが終わった後、手に入れた新たな加護 念動力 これを有効活用できるかどうか。

あれから、毎夜、自主練習を繰り返して 念動力 の長所と短所

はある程度は把握できた。

まず、短所なのだが。やはり、動かせる対象が商品のみということだろう。全く関係ない物が 念動力 の有効範囲にあっても、髪の毛一本動かせない。

だが、機能変化した身体の一部は問題なく操れるようで 高圧洗浄機 灯油計量器 等のノズルは動かすことが可能だ。それに、操作性はステータスの器用さが関わってくるらしく、器用度を上げてからは手足のように動かせるようになった。

もう一つ問題なのが有効距離の短さだ。自分から一メートル以上離れると、効果範囲外となり効果を失う。五メートルぐらい範囲が広がれば戦略性も上がるのだけど、それは贅沢な話か。

長所は先にも述べたが、自分の商品や身体の一部であれば自在に操れることだろう。これはかなりメリットが大きい。ざっと思いつくだけでも幾つかある。

今までだったら扱いが難しかった商品も、実際に使ってみせられる。結界で飛ばさなくても、商品を相手の前に置ける。

掃除機やノズル系の操作が可能となり、戦略の幅が増える。

他にもまだまだメリットはあるだろうけど、これだけできるようになれば、世界が変わるレベルの変化を得られる筈だ。

でも、今のところ 念動力 の力を見せつけることはしていない。AEDで蘇生した一件で電極パットや装置を操っていたのだが、それを目撃したラツミス、団長、ミシユエルは、AEDがそういう物だと思っているようで追及をしてくれなかった。俺が商品を自在に操れるようになったとは思っていないようだ。

冥府の王が二人を蘇生したことを目撃してないのであれば、俺が自在に商品を操れることも知らない筈だ。敵を欺くにはまず味方からと、念動力 についてはラツミスとヒュールミ以外には教えていない。

ラツミスは共に行動するので知っておいて欲しかったのだが、ヒールミに教えたのは目的があった。頭の回転が早いので、俺よりも 念動力 を有効に扱う方法を考え出してくれるのではないかと期待したからだ。

実際、教えた直後から様々な案を出してくれたし、活用できそうな道具の製作も始めている。

今も 念動力 を最大限に利用して、戦闘中のフォローや嫌がらせができないかと思案中だったりする。

もう一つ自分の能力についても疑問が解消されたのだが、それは戦闘で見せつけることにする予定だ。冥府の王が一度倒した俺たちを軽んじているなら、一泡吹かせてやる。

ハンターと思惑

年長者の活躍を目の当たりにして以来、その他のメンバーが活発的になった。

頻繁に現れる魔物たちに対して、臆することなく気合の入った動きで葬っていく。門番の二人の動きを観察していて実感したのだが、この二人、思っていたよりも強い。

メイン武器は両方槍で目にも止まらぬような速さで動いているわけでもなく、ラツミスのような怪力でもないのだが、動きに無駄がない。

おまけに二人とも目配せや、ちょっとした仕草で意思の疎通を完璧に行なっているようで、自分の死角にいる敵に視線も向けずに、穂先を突き刺すような場面が何度もあった。

ああいうのを阿吽の呼吸って言うのだろうな。

いつもは団員に働かせて高みの見物が多い、ケリオイル団長も今回ばかりは本気を出している。短剣を両手に構え、近距離戦では巧みな短剣捌きで相手を切り裂き、距離があると投げナイフを投げつけている。ちなみに命中率は100パーセントだ。

ラツミスも負けじと奮闘している。自分の力に振り回されることなく、基本の動きを大切にしながら魔物を打ち砕いている。

俺だって黙って見ている訳じゃない。味方の目が向いていない時に、念動力を活用して 高圧洗浄機 に化けた後にノズルを念動力 で操って水を撃ち出し、相手の不意を突いたりして戦闘でも役に立てるようになってきた。

今までだと、戦闘中は防御を担当するしかすることが無かったのだが、これからは彼女の力になることが出来る。それが、本当に嬉しい。

「ラツミスさん。もう少し重心を落としてみたら、楽になると思いますよ」

「は、はい！」

今も戦闘中なのだが、ラツミスの近くで老婆さんが指導してくれている。剣術と体術という違いはあるのだが、身体の動かし方や足運び等は共通点もあるようで、ラツミスが懇願した結果が今の状態だ。

お爺さんは魔法特化で園長先生は弓と魔法なので、体捌きはお婆さんが断トツで優れていることが判明した。熊会長は体術メインなので、お婆さんと入れ替わりで拳法のような物を教え込まれている。教師が優れているのと教え子が従順で真面目なのが幸いして、日に日にその動きに鋭さが増していくのが素人目にもよくわかった。そして、ラツミスが鍛錬を始めると、門番ズ、ケリオイル団長、ミシュエルがさりげなさを装いつつ、聞き耳を立てて観察しているのが面白い。

今も、少しでも盗めるものが無いかと真剣な眼差しを注いでいる。

「はい、そこで全力で踏み込む」

「といああっ！」

ずっと、背中越しに振動が伝わり、鈍い打撃音が響く。

今のはイイ感じじゃないだろうか。ずっと背中にいると手応えもわかるようになってきたようで、見なくても渾身の一撃かどうか判断できるようになってきた。

視線を向けると骨が粉碎され過ぎて、原形を留めずに欠片となって周囲に飛び散っていた。

実戦は何よりの鍛錬になるとの方針により、敵に囲まれた状態でラツミスの特訓は続いている。

敵の数は軽く二十は超えているというのに危機感は何も皆無で、荷台の上にいるお爺さんと園長先生とヒュールミは温かいミルクティーを啜りながら見物している。

時折、荷猪車に迫る敵もいるのだが、矢と魔法で瞬殺されていた。安心感が半端ないな。

とはいえ油断は禁物だ。いつ何時、冥府の王が現れて攻撃を仕掛けてくるか、わかったものではない。

「では、ハツコンさんがいない状態での立ち回りやってみましょうか」

「はい、わかりました！」

ラツミスの背から降ろされ、俺も見学者となった。

最近重点的にやっているのが、俺がいない状態で普通に戦うことだ。当たり前のことなのだが、ラツミスにはそれが上手くやれない。力が有り余り過ぎて、普通に一歩踏み出すだけでも、意識していないと飛び跳ねるような動きになってしまうようだ。

十数年、怪力を持って余す体で生きてきたので、日常生活なら自然に振舞える……時折、ミスする程度で済むが、戦闘で全力を出すとになると制御が上手くいかないようだ。

「自分の力を恐れないで。貴方はその怪力を行使しても壊れない体がある。力だけでなく頑丈さも兼ね備えているのです」

そうなのだ。お婆さんに指摘されるまで気づかなかった俺もどうかと思うが、普通あれ程の力で動けば骨や筋肉がもつわけがないの

だ。それを可能にしているということは、彼女は怪力だけではなく、それに耐えうる身体の頑丈さや、しなやかさがあるということになる。

身体は一流のハンターたちと同等かそれ以上というのが、お婆さんの評価だった。

「体を低く。上に跳ぶのではなく、前へ前へ跳ぶように。膝の関節をもっと意識して」

「はいっ！」

声だけを聴いているとスポーツの練習風景を彷彿とさせるが、視線を向けると、砂煙を上げて疾走するラツミスが、通りすがりに敵を粉微塵に消滅させているという絵が飛び込んでくる。

全力疾走するラツミスの姿を目で追うが、たまに追い切れずに視界から消えている。これは対戦相手にしてみれば、たまったもんじやないな。

ただ、全力で動くのは体の負担が大きいらしく、長時間の使用を禁止されている。今は治癒の加護を使える者が二人も居るので、自分の限界を把握する為にも、遠慮はいらぬそうだ。

何回か味方を跳ね飛ばしそうにはなったが、敵を殲滅し終えたみたいだな。

「敵もいなくなったので、ここまでにしましょうか。お腹空いたのでしょう、ご飯にしましょうね」

荷台から園長先生が声を張り上げ、全員が集まってきた。

戦闘に参加していた面々は幾つか軽傷を負っていたのだが、お婆さんと園長先生が即座に治療をして完治している。

「この治癒力、マジで凄まじいな、ゴルス」

「噂には聞いていたが」

門番ズが傷跡も残っていない自分の腕を見て、しきりに感心している。

この世界の治癒能力がどれ程なのかの基準が、王蛙人魔の時のみなので判断が難しいのだが、二人の驚きようを見る限り、相当な回復力なのだろう。

その治癒能力があるからこそ、実戦での鍛錬を実行できるそうだ。ここでの昼食は自動販売機ではなく、全員が調理をして食べることになっている。園長先生曰く、

「料理は毎日やらないと腕が鈍りますからね。料理はできて損はありません。それと、男女関係なく料理が上手だとモテますよ」

というありがたい教えに従い、当番制で料理を作ることが決められた。

俺はスープと飲料、そして食材の提供だけを担当している。遠征中に野菜や果物を豊富に摂取できるのはかなり貴重らしく、それだけでも充分ありがたいと感謝された。

「しつつかし、冥府の王は何がしたいんだ。見逃せば、情報が伝わりこうなることぐらいは予測できただろうに」

ヒュールミは誰に話しかけたわけでもなく、独り言のつもりだったのだろうが、その声は意外と大きく、全員の注目を浴びることになった。

「どづいことだ、ヒュールミ」

「っと、聞こえちまつたか会長。いやな、あいつの手口がどうしても腑に落ちねえんだよ。あれ程の実力があれば全員を殺すことは可能だった。ハツコンの結界は厄介だが、それだって対応策はあった筈だ」

確かに攻撃を続けられたら、いつかポイントが枯渇してそこで終わっていたし、防御一辺倒の相手なら、殺せなくても足止めや動きを封じる手段は幾らでもありそうだ。

「まるで、自分の強さを見せつけるのが目的だったかのようにすら思える。ラツミスとハツコンは、連絡係として初めから殺す気はなかった。自分はここに残るといふ伝言を運ばせる為に……ってのは考え過ぎか」

初めから殺す気はなかったというのか。

冥府の王は死霊王との戦いを見物していたかのような口ぶりだった。だとしたら、俺の 結界 は把握済み。あの一撃を耐えることも考慮して放たれた。

そして、復讐心を覚えるようにヒュールミとシユイを目の前で殺した。圧倒的な力の誇示と、自分を忘れないように強烈な印象を与える為に……と深読みすることはできるが。

「だが、仮にそうだとして、冥府の王に何の利点がある。自分を討伐に来てほしいって事か？」

カリオスの疑問は尤もだ。俺もそう思った。

「そこがオレもわかんねえ。普通なら挑発で済む話なんだが、何か目的があってダンジョンにやってきたのであれば、目立つことは避

けたいと思うのが普通だ。となると、目的を既に達したのか、もしくはこの行為が目的に繋がる何かなのか……」

「もしや、最近の階層主の復活が相次いだことや、清流の湖階層での異変が関わっておるのかもしれないな」

熊会長が腕を組みながら大きく息を吐いた。その息で焚火の炎が大きく揺れている。

階層の異変つて、青蛙人魔の発生、巨大過ぎる双蛇魔の強襲だよな。それに、各階層で計ったかのように階層主が復活をした。

何か関連があると考えた方が自然な気すらしてきたぞ。だとしたら、本当に何が目的だ。姿を晒してターゲットになるような真似をして各階層の猛者が集まってきた。

まさか……ドMなのかっ！ いや、それはないな。真面目に考えよう。

冥府の王の気持ちになって考えてみるか。魔王軍のナンバーズリで地位もある。自由行動も許されてはいるだろうけど、大掛かりな企みがあるとしたら普通は魔王軍に関係することだよな。

……普通は階層主のコインを集めて願い事を叶えると考えそうだが、あいつは死霊王のコインを投げ捨てている。何だ、何を狙っている行動だ。

「情報が少なすぎる。憶測は幾らでも立てられるが……確証がなければただの妄想に過ぎない」

ヒュールミは腕を組んで、唸りだしている。頭から湯気でも出てきそうなくらい、脳をフル回転させていそうだ。

「ふむ、滅する前に聞きだしたいところじゃが」

「そんな余裕を見せられる相手では、なさそうですね。困りましたね、お爺さん」

お婆さんがそう言うのと困っているようには全く見えない。

もし、ヒュールミの読みが正しければ、この行動には何かしらの裏があるということになる。倒せばそれで終わりということにはならないのか。

ただでさえ強敵なのに、更に問題が増えるとは。

「でも、まずは冥府の王を倒さないと始まらないよね！」

ラツミスという言葉に俯き考え込んでいた面々が顔を上げる。

その通りだな。勝たなければその先は無いんだ。相手の企みも考慮しなければならぬが、負けては元も子もない。

「オレは戦闘には参加しねえからな、冥府の王の考えは出来る範囲で一番確率の高い予想を立ててみるぜ。みんなは戦いに集中してくれ」

俺があれこれ考えるよりも、知識が豊富で頭の回転の早いヒュールミに任せただ方が妥当か。でも、心に留めて置こう。どうにも嫌な予感がしてならない。

まあ、予知能力があるわけでもないのだから、ただの杞憂で終わる確率の方が高いとは思わうが。

予感

更に数日が過ぎたが冥府の王との遭遇は無い。他のハンターチームからの連絡もないらしく、本当にまだこの階層にいるのか疑問を抱き始めている。

だが、熊会長の説明によると転送陣には、偽装や隠蔽能力を見抜く目を持つ加護所有者を特別に配置しているそう。魔法や加護の力であっても、その目は欺けないらしい。

熊会長の考えによると冥府の王は、人に化けて転送陣を利用して移動した可能性が一番高いとのことだ。転送陣を通らずにダンジョンに入った前例はない。

冥府の王との戦いが待ち遠しいわけじゃないのだが、どうにも不安が治まらないのだ。時間が経てば経つほど不安が増していくのがわかる。

ヒュールミも目を追うごとに表情が険しくなっている。どうやら、俺の様な曖昧な考えではなく、何かしらの答えに辿り着いたようだ。深夜、荷猪車の脇でぼーっと立っている俺の隣に、そっと腰を下ろしたのはヒュールミだった。

「ハツコンちよつといいか」

「いらつしゃいませ」

いつもと違い静かで感情の起伏が無い声だ。たぶん、あの事を話したいのだろう。

「あれから、冥府の王の考えを探っていたんだが……これはただの

憶測でまだ思案の最中だ。だから、口の堅いハツコンにだけ伝えておくぞ」

口が堅いというか人に話せないだけなのだが、信頼してくれて嬉しいよ。」

「今から話すのは、最悪な展開への予想だ。心してくれ。まず、冥府の王はわざとラツミスを見逃したと仮定して考えてみた。何故、そんなことをするのか。それは自分がここにいることを他の奴らに知らしめる為だ、とする」

確証がないので仮定に仮定を重ねる話になるのは仕方ないよな。

「となると、それを知った人々はどうするか。敵の知名度を考慮すると、ハンター協会としては、今のように討伐をしようという流れになるよな。」

実際そうなっているのだから、その点に関しての異論はない。

「ハンターが亡者の嘆き階層に集まり、自分を討伐しようとして何のメリットがあるのか、そこが問題になってくる。考えられるのは自分の力を見せつけて楽しんでいる変態。これだと話は早いが、それは無いと仮定する。となると……自分を討伐させること自体が、やつの目的だとしたらどうだ？」

どうだと言われても、まさか俺のDM説が正解なわけでもないだろう。英雄を望むような発言をしていたから、自分の相手になる強力なライバルを求めているとも考えられるが。

「たぶん、ラツミスに話した英雄の下りは、ただのハツタリだろう

な」

言葉が話せなくて良かったよ。恥をかくところだった。

「殺されたいというのは違うか……討伐隊を組ませたかった。力を持つハンターをこの階層に集めたかった。というのはどうだ？」

実力者をこの階層に集める。えっ、でも集めてどうする。有力なハンターを一掃したいということなのか。

「でだ、その狙いなんだが……正直、わかんねえ。畏が仕掛けてあって、力のあるハンターをまとめて殺すってのが妥当だが、冥府の王がそんなことをする理由が思いつかねえ。魔王軍の本拠地とここは離れすぎている。奴らとの戦争に邪魔になる者を処分するなら、帝国や防衛都市を先にどうにかすべきだ」

確か、最北端に魔王の治める国があり、その南に防衛都市があり帝国領地内になっているのだったか。その南にこのダンジョンが位置している。

そうだよな、防衛都市と帝国を攻めあぐねている状態でダンジョンに手を出す意味がわからない。

「ってことで、つまりよくわかんねえんだよ。各階層の異変も気になるしなあ。皆にこんな話しても混乱させるだけで言い出せなくてよ。悪かったな、答えのない無駄話に付き合わせて」

「いらっしやいませ」

気にするなと言いたかったが、それに相応しい言葉を話すことができない。温かいミルクティーでも飲んでリラックスしてもらおう。

「お、わりいな。いただくぜ」

缶を両手で包み込んで、ゆっくりと飲むヒュールミを見つめながら、彼女の言葉を反芻していた。

今朝は空がいつもの曇天模様とは違い、赤黒い。

朝焼けなのだろうが、乾く寸前の濁った血をぶちまけたような、気持ちの悪い色をしている。

「ふむ、魔力の流れがおかしいのう」

朝の早い、お爺さんとお婆さんが目を細めて空を見上げている。

「そうなのですか、お爺さん」

「うむ。大気中の魔力が増大して、荒れておる。これは一波乱ありそうじゃ」

異様な空模様にも、お爺さんの指摘。昨日のヒュールミの話もある。フラグが立ちすぎだろ。良くも悪くも今日何か起こりそうだな。

そんな俺の予感……的中することなく、あっさりと次の日の朝を迎えた。

やはり、今日も空が赤黒い。昨日は敵が一切現れず、異変が起こっているのは確かなのだが、それが何であるか一切不明のまま一夜を過ごした。

そして今日、歯と歯の間に食物繊維が挟まったかのような、気持

ち悪さを抱えていた俺たちの元に、待ちに待った一報が届いた。別の場所を探索中のハンター一行が冥府の王と遭遇したとの連絡。比較的近い場所にいた俺たちは、全速力で彼らのいる場所へと向かうこととなった。

一時間ぐらい経過しただろうか。指定場所まであと少しの距離まで近づくと遠方から、怒号と剣戟、何かしらの炸裂音のような物まで聞こえてきた。

「既に戦闘中のようだ、ホクシー戦況はどうなっている」

「冥府の王らしき個体が一。骨人魔、炎飛頭魔、死人魔及び、それらの上位種らしき個体が合計で……百ちよいでしょうか」

額に手を当てて遠くを見つめる園長先生の目には、戦場の様子がくつきりと見えているようだ。俺にはただの地平線にしか見えないが。

敵の数は百前後か。普通なら尋常ではない数なのだが、年長組は落ち着き払っている。

「ハンター側は二十ぐらいですね。今のところ冥府の王は高みの見物らしく、戦闘に一切手出ししていません。ハンター側には目立った負傷者もなく、押し気味の様ですわ」

「わかった。ならば、我らは相手の裏側に回り込み強襲する。他のハンターたちも近いうちに合流する筈だ。一気にねじ伏せるぞ」

熊会長の指示に全員が頷き賛同を示す。

敵を前後から挟み込む。基本の戦略だが、実力と数が揃っている状態なら一番効果的だろう。昔、読んだ戦記物でも数が有利であるなら奇策を用いるのではなく、相手の策に注意を払い正攻法で倒すのが最も効果的。とかどうとか書いていた気がする。

更に数分が過ぎ、相手の裏側に回った俺たちは、お爺さんと園長先生の遠距離攻撃……いやもう、これは砲撃と呼んでいいレベルの魔法と矢の雨を降らしながら突っ込んでいく。

牽制目的の攻撃だけで軽く十数体が削られた。この二人の戦闘力の高さにはもう何も言うまい。

冥府の王を取り囲むように配置されていた魔物たちが、こちらの存在に気づき二十近くが走り寄ってきている。

「お爺さん、ホクシー。あれには手を出さないくださいね」

「ああ、わかったわい。好きにしたらええ」

荷台から疾走するウナススの背にひよいと乗り移った、お婆さんが仕込み杖に手を添え姿勢を低くしている。

荷台に乗らずに並走している、ラツミス、ケリオイル団長、門番ズの視線がお婆さんに集中している。その一瞬の剣捌きを見逃すものかと。

相手との距離が徐々に詰まっていく、激しく揺れ動くウナススの背だというのに、振り落とされることなく仕込み杖を構えた状態のまま、じっと前を見据えている。

そして、その距離が数メートルまで迫った、その時、鞘鳴りの擦る音と同時に銀の残光が無数に走った。

棒立ちになつた魔物たちの間を荷猪車が疾走する。俺は身構えそ

うになったが、魔物たちが全員ピクリとも動かないのを見て悟った。カチリと、仕込み杖に刃が納まる音がすると、脳天から真下に切り裂かれ二つに分断された魔物が大地に転がる。

「数が多いと十字切りは面倒ですので、勘弁してくださいね」

お婆さんが手を合わせて頭を下げているのは、自分の切り裂いた魔物たちへのせめてもの供養なのだろうか。

その強さを何度も目の当たりにしてきたので、当たり前のように受け入れている自分がいることに若干驚く。

どう考えても剣の間合いじゃないのに敵が分断されたのは、剣撃を飛ばす技だそう。魔法や加護がある世界なので、思考を放棄して、そういう物なのだろうなと理解することにした。

漫画やアニメでも見たことあるし、ゲームでも一般的だもんな、うん、そういうことだ。

こちらが参戦してから敵を五十近く葬ったにも関わらず、敵の数が減っているようには見えない。次から次へと地面から魔物が湧いてきているようだ。

「荷猪車とヒュールミはここで待機。ホクシー、シメライは、ここから援護攻撃を担当してもらいたい」

「任せてください」

「適当に蹴散らしてやるとするか」

熊会長の指示に頼もしい答えが返ってくる。

「カリオス、ゴルスは万が一の為に荷猪車の護衛を頼みたい。いけるか」

「守ることなら、俺たちの右に出る者はいないぜ。なあ、ゴルス」

「このお二方に護衛が必要とは思えないが、承った」

防衛術に長けた二人なら、格上の相手が現れたとしても時間稼ぎができ、その間に火力がある二人の攻撃が加われば、ここは鉄壁の砦とかすだろう。ヒュールミを安心して置いていける。

「ラツミス、上手くやれよ。冥府の王には出来るだけ近づくな。今回は猛者が山ほどいるんだ、無理する必要は全くない。ハッコンも頼んだぞ」

「うん、頑張るよ！」

「いらっしやいませ」

前回と違い、頼りになり過ぎる仲間と凄腕のハンターがうじゃうじゃいるのだから、俺たちが無理する必要は全くない。

「残りは共に突撃する。冥府の王を倒すことが目的ではあるが、無茶はするな。仲間は増える一方だ。時間を稼げれば奴を倒すことも容易になる」

熊会長の言う通り、他のハンターもかなりの腕利きなのが一目見ただけで理解できた。危なげなく敵を処理しながら、殆ど怪我を負っていない。雑魚相手なら何時間でも戦い続けられそんな余裕を感じる。

「では、我らが力を見せつけようぞ」

口角を吊り上げ熊会長が笑みを浮かべると、前衛担当が釣られてニヤリと笑う。

迫力のある笑みと言うより邪悪な感じがするが、そこは突っ込まないでおこう。この面子で突撃するのか、魔物が不憫に思えるくらいだよな。

それでも、冥府の王が動いてないからこそその余裕。あれが動きだせば戦況は一気に変わるだろう。

俺の視線の先にいる四本腕の銀の骸骨は、黙って戦況を見守っているだけなのが、不気味で仕方がない。

逆境

こちらのメンバーが強すぎて悪目立ちするのではないかと警戒していたのだが、それは杞憂に終わった。他のハンターも相当な腕前でパツと見た感じでは派手さだけなら、向こうの方が上だった。

新たにもう一チーム参戦したようで、冥府の王は三方から同時に攻められている状況に陥っている。

少し焦ったのかどうかは不明だが、骸骨の腕が寄り集まった杖を振り上げると、地面が盛り上がり無数の骸骨が追加された。

「ふむ、骨人魔の上位種、骨武魔か。皆、気を付ける。武芸に秀でた者の屍だと言われている。今までよりも数段上の実力だ」

熊会長の警告を耳にして、新たな魔物を注意深く観察した。他の骨人魔よりも骨がどす黒く、何かしらの武器や防具を所有している個体が多い。

他の骨人魔は無防備な立ち姿だったのだが、骨武魔は武器を構える姿がさまになっている。確かに今までの敵とは違うようだ。

更に三メートル以上の背丈で、身体中に縫い目がある人型の魔物まで出現している。

「腐集人魔までいやがるのか。あいつは耐久力が異様に高い魔物だ。あと馬鹿力にも気を付けてくれよ！」

目の前の骨武魔を斬り捨てながら、ケリオイル団長が注意を喚起する。

フランケンシュタインを彷彿とさせる魔物だな。名前からして死体を縫い合わせて作り出された魔物か。筋肉むつきむきで見るから

にパワーキャラだ。

と呑気に考察していると骨の群れを掻き分け、腐集人魔がラツミスの前に現れた。

至近距離で見ると筋肉の圧迫感が……見上げているラツミスとの対比が大人と赤子のようだ。

腐集人魔はまさに赤子の手を捻るような感覚で、ラツミスの頭よりも巨大な拳を振り下ろした。

いつもなら結界を張る場面だが、ここは任したよ、ラツミス。

唸りを上げて迫る拳に対して、ラツミスは「左腕を引いて、右を突く！」何度も熊会長に教え込まれた、右正拳突きで迎え打つ。

拳と拳が激突すると、その衝撃は腕を伝わり肩に抜け、腐集人魔の右腕が腐肉を撒き散らして弾け飛んだ。

そして怯んだ相手の懐に滑り込むと、軸足を大地にめり込ませて、前蹴りを相手の腹に叩き込む。

腹から折れ曲がった腐集人魔が低空飛行で他の魔物を巻き込みながら、吹き飛んでいった。

一つ一つの動きに無駄が少なくなり、怪力をただ振り回すのではなく技を意識しているので、威力が格段に増している。鍛錬の成果が目に見えてわかるよ。

なら、今度は俺の出番だな。

右から迫ってきていた魔物たちに対し、取り出し口からゆつと飛び出てきた 高圧洗浄機 のノズルを 念動力 で操り先端を向ける。

そして、水を最大威力で噴き出すことにより、相手を吹き飛ばす。更に発射口の幅を狭くするイメージで高圧の水を放つ。

水が一本の線となり相手の死人魔の首を捉えると、そのまま横に振る。すると、首の肉が弾け骨ごと切断された頭が、ごろりと地面に転げ落ちた。

今までなら、こんな芸当は出来なかった。水の発射口を小さく操作することが可能だったのは器用さを上げたおかげだが、それだけでは威力が足りない。相手を吹き飛ばせたのも、切り落とすまでの威力を得たのも、筋力を40まで上げたからだ。

念動力 と器用さのメリットを把握した時、筋力にも必ず意味がある筈だと試しに10上げて実験を繰り返して、その効果が判明した。

筋力というよりは馬力が上がったという表現が当てはまる。

コイン式掃除機 を使えば吸引力が上がり、 高圧洗浄機 ならさっきの様に噴き出す水の威力を上げることが可能となった。

これにより、ただの水が魔物を倒す武器と化したわけだ。正直、この程度の威力では冥府の王には通用しないだろうが、直接的な攻撃手段を得たことが重要なのだ。

これにより自己防衛、迎撃機能を搭載した自動販売機へ進化した。いや、もう、これは、自動販売機じゃない気もするが、今更か。

「ありがとう、ハッコン」

「おおあたり」

敵はアンデッド系だけあって、仲間が倒されようと動揺することはないようで、次々と襲い掛かってくるのだが360度、全方位を見渡せる俺に隙は無い。

ノズルを自在に操り近づく敵を捉えると、高圧で飛ばされるウォーターカッターが魔物の体を穿ち、切断していく。

仲間の何人かが乱戦状態だというのに俺の活躍に気が付き、大きく目を見開くが、その後、大きく息を吐いて一度頷くと、それで納得したように見えた。

それはまるで「ハッコンなら仕方ない」と言っているかのように

感じたのは、気のせいだと思いたい。

自分が戦力になるとわかると冷静に周囲を見回す余裕も出てきた。お婆さんの周囲には生存している魔物が一体もない。滑らかな切断面を見せつけるようにして、分断された魔物が大地にひれ伏している。

時折、銀の軌跡が見えたかと思うと骸が一つ増える。その繰り返しだ。俺が魔物なら絶対に近寄りたくない相手だ。

さつきから空中に投げ出されている魔物は、熊会長にやられた奴か。鋭い爪で引き裂かれ、腕力だけではなく技術で払い吹き飛ばされた魔物たちが、面白いぐらい簡単に宙を舞っている。

ミシユエルは竜の姿を模った柄から伸びた刃で、敵を一刀両断しているのだが切り口を見ると焦げたような跡がある。両刃の部分はかなりの高熱を帯びているのかもしれない。

ケリオイル団長もかなりやる気を出しているようで、地味だが着実に相手を仕留めているな。普通なら目を見張る活躍なのだろうが、他と比べると目立たない。

周辺には魔物の死体が散乱しているのだが、敵の数が減っているようには見えず、いや、寧ろ攻撃が激しくなってきたくないか。

「無限に続くとは思いたくはないが、冥府の王を倒さねば埒が明かぬようだ」

「そうですねえ。予めこの地に何らかの術を施し、魔物の復活と召喚を速めているのやも、しれませんかあ」

熊会長の発言に、お婆さんが地面を杖で突きながら、そう返した。相手の魔力残量が目に見えてわかるなら持久戦もありなのだが、異世界には魔力を回復する道具があっても不思議ではない。無限湧

きだったら先に力尽きるのはこっちだ。

本体に近づくには、敵の群れを何とかしなければならぬ。だが、倒しても直ぐに地面から現れるのでキリがないのだ。

現状を好転させるには思い切った手が必要なのはわかってはいるのだが、その一手を誰も思いつかないよう、攻めあぐねた状態のまま時間だけが過ぎていく。

味方のハンターチームが二チーム追加されたのだが、援軍を嘲笑うかのように魔物も増量される。一進一退の攻防が続く中、戦況を変化させる一言が、突如吹き抜けた風になり、俺たちの元へと届いた。

『全員、一旦、そこから離れる。膨大な魔力が冥府の王に集まってきた。この魔力の質と流れじゃと、自分を中心とした爆炎系の大魔法である可能性が高い。時間は無い、急がなかつ！』

それはお爺さんの切羽詰った声であり、即座に俺たちは後退を始めたのだが、魔法で起こした風に運ばせた声は、清流の湖階層のチームにだけ届いたようで、他のハンターたちが誰も退いていない。

「会長このままじゃ、他の皆がっ」

「わかっておる。すううううう」

ラツミスを手で制した熊会長は胸部が膨らむぐらいに空気を吸引している。

「おやおや、皆さん手で耳を塞いだ方がええよ」

お婆さんは素早く両手で耳を閉じ、仲間にそうするように促す。

みんなは訳がわからないといった感じではあったが、大人しく従い耳を塞いだ。

え、えっ、塞ぐ手が無いのですがっ！ あ、耳も鼓膜もないか。

「大魔法が来る、退けえええっ！」

熊会長の口から放たれた咆哮は、大気どころか大地も震わせ、その衝撃波により近くの魔物が吹き飛んでいる。

戦場の隅までその大声は届いたようで、あまりの大声に敵も味方も動きが一瞬止まったのだが、我を取り戻したハンターたちが一目散に後退を始めた。

『余計な真似を、だが、間に合うかな』

今度のは脳に直接響く、冥府の王の声か。

疾走するラツミスの背から、後方の冥府の王の様子を窺うと、天を突き刺すようにして杖を掲げた瞬間、目の前が白で染まった。

これは閃光なのか。そう認識するよりも早く 結界 を発動させる。吹き荒れる爆風に、足元から伝わる振動を一瞬だけ感じた。

白の世界が終わると今度は視界が赤く染まり、爆炎が巨大な円柱となり天に向かって伸びている、信じられない光景が飛び込んできた。

仲間は全員、地面に伏せ吹き飛ばされないように耐えていたが、他のハンターたちは逃げ遅れた数名が無残に地面を転がされている。

視界が一変して、いつもの安定感が失われ不安に心が揺らぎそうになるが、何とか押し留める。

爆炎が消えると、そこには巨大なクレーターが穿たれていた。

こいつは前も魔法で地面に大穴を開けていたが、今回の大きさはその比じゃない。野球場一個がすっぽり入る大きさはあるだろう。

そのクレーターの真ん中、最深部に居座っていた冥府の王が、ゆつくりと浮かび上がっていく。

『精鋭だけあって、お見事と言っておこうか。まさか、今の魔法で死者がおらぬとは。ハンターも侮れないものだ』

口ではそう言っているが、穴の上に浮かんでいる冥府の王はきつとご満悦の顔をしているのだろう。あー、骸骨だから表情は無いか。

『魔物どもも朽ちてしまったが、補充は幾らでもある、心ゆくまで味わってくれたまえ』

杖を一振りしただけで穴を埋め尽くさん勢いで、魔物たちが現れる。

さつきと同量、下手したら増えた敵を前に、もう一度戦闘をやり直せと言うのか。あの大魔法は詠唱から発動までに時間がかかるとしても、あの敵を突破して辿り着いた頃には、魔法の準備は整っているに違いない。

それでも、味方のハンターたちは四方から、やつを滅ぼす為に攻撃を再開している。

この状況で戦況を覆す可能性があるのは 俺だよな。

自動販売機の意地

最近になって気づいたのだが、どうやら俺は命に対しての危機感が徐々に薄れているようだ。

一度死んで自動販売機の体になり痛覚も感覚も失い、自分の死にも他人の死に対しても認識が鈍くなっていったのだろう。もっと慎重になるべきだった。

ヒュールミとシュイがあんな目に遭って、復讐心を抱くのは当たり前だが、あれ程の力の差を目の当たりにしたのだから、一度冷静になるべきだった。仲間を大切に想うのであれば、止めるべきだったのではなかったかと、今更ながらに思っている。

とまあ、そんなことを考えてしまふのも、こんな状況だからだよな。

『我まで辿り着けば、相手をしてもらいのだが……おおつ、魔道具を背負いし、怪力娘もいるのか。ふむ、この短期間にしてはよく仕上がっている。これは今後の期待も大きいか』

念話の声がよく届くな。俺のように一メートル縛りもなく、広範囲に無秩序に飛ばしているのか。

冥府の王はラツミスを発見したらしく、値踏みしているような意見だ。クレーターのど真ん中に優雅に浮かび、ハンターたちを見下ろしている。

自分が負けるなんて微塵も考えていないのだろうな。圧倒的な強者に勝つ方法は、相手の実力を発揮させずに不意を突く。これに限る。その最たるものである暗殺が有効なのは歴史が語っている。

その為の策はラツミス、ヒュールミと一緒に何パターンも考えてきた、その成果を見せる時が来たようだ。

まあ、実はその作戦は既に開始されているのだが。

条件の一つである、冥府の王が俺とラツミスを目視して、その存在を確認するという項目はクリアした。

腹を括るか。俺が得た機能の一つに 氷自動販売機 があるのだが、これは専用の氷の自動販売機に変化できるようになる機能だが、実は別の 氷自動販売機 が未所得の機能欄にあるのだ。

これはランク2になってから現れたもので、他の自動販売機や機能と比べて大量のポイントを消費するので取る気はなかったのだが、今ここで取得する。

だが、まだその自動販売機に変化するわけにはいかない。まず 結界 の中の空気を排出することにより、位置を微調整する 真下に冥府の王が来るように。

今、俺は戦場の遙か上空にいる。爆発魔法のどさくさに紛れて、ダンボール自動販売機 に化けた俺は 結界 ごと、ラツミスに全力で上空に投げ飛ばしてもらったのだ。

ちなみにラツミスが今背負っているのは、俺から型を取ったヒュールミお手製、自動販売機風の折り畳み可能な箱だ。俺は戦闘前から自分とそっくりな一回り大きな箱に包まれていた。

なので 高圧洗浄機 のノズルで攻撃した時も、箱の内部で変化したので他の人からは、見た目が変わってないように見えたことだろう。ノズルを箱の下の取り出し口から出したのはその為だ。

話を戻そう、空高く舞い上がった俺は 風船自動販売機 へと変化する。素早さを生かして前回とは比べ物にならない速度で 結界 内部を風船で満たして、上空から戦場を観察していた。

風船を 念動力 で操り位置の微調整をして、冥府の王の上空を確保する。一度いつもの自動販売機に戻り、そこから新たに得た 日本一大きな自動販売機である 氷自動販売機 へとその姿を変

化させる。

この自動販売機はTVで紹介されていたのだが、とある漁港に置かれていて、全長十八メートルを越える大きさで、パツと見は細長い四階建てのビルのようなフォルムをしている。そんな珍しい自動販売機をマニアである俺が見に行かない訳がない。

その巨体が遙か上空から真つ逆さまに落ちて行く。

これが激突した威力は今までの自動販売機アタックの比じゃないぞ。慢心状態の脳天に直撃してやるよっ！

風の唸る音がうるさいぐらいだが、そんなものは無視して冥府の王の脳天だけを見つめ落下していく。

『さあ、足掻くがいいハンターたちよ。我が元に辿り着く勇者が現れるのを、我は待ち望んで……何だ、この風の鳴る音は……』

ご満悦でラスボスの様な語りを始めていた冥府の王が、周辺をキョロキョロと見回し、ふと上空に顔を上げる。俺と見つめ合うような形になった冥府の王の顎がぐんと落ち、骸骨だというのに驚愕していることが手に取るようにわかる。

「な、な、な、何だこれはっ！」

自動販売機だよっ！

冥府の王が慌てて杖を掲げると、杖の先端から灰色の壁が広がるが、そんなものは無視して突撃だっ！

俺の結界と灰色の壁が激突。その瞬間、衝撃波が波紋のように広がり、周辺の魔物が弾き飛ばされている。

「うぬおおおおお、何だ、何なのだっ！」

冥府の王の焦り取り乱した声を聞いて、今までの鬱憤が少し晴れる。

落下の衝撃と重量を空中で支えきれなかった冥府の王は、押し込まれて今はクレーターの上に立ち踏ん張っている状態だ。

このままでは決め手が足りない。だが、それも考慮済み。

この自動販売機は漁船に氷を大量に提供する為の機械。ここから流れ出る氷の量は半端ないぞ。

大量の氷をこの状況で落としていく。灰色の防壁を伝わり氷がクレーターへと流れ落ちる。あの爆炎魔法の影響で大地がまだ熱いのか、氷がすぐさま溶けて水へと液化していった。

「な、何だ、これは氷の粒……そんな物で我をどうにかできるとでもっ」

俺の体を支えるのが精一杯なのに、氷が解けた水に浸かった状態で饒舌だな。

これだけでどうにかできる何て思ってもいない。だがな、これだけじゃないんだよ。何で巨大なこの身体になる前に、一度いつもの自動販売機に戻ったと思っているんだ。

俺は身体に隠していた A E D を取り出す。

筋力の値を上げたことにより、電気ショックの威力の限界を超えた状態で電極パットを水に浸し、安全装置を無視して強引に作動させた。

「ぐあああああああっ、何だこの電撃がああああっ」

これで相手を倒せるなんて思ってもいない、この不意打ちで意識がそれてくれれば、それでよかった。そう、この防壁が揺らいでくれたら。

ギリギリで耐えていた状態で集中力が途切れた冥府の王を待つて

いたのは、巨大な自動販売機に押しつぶされる末路だった。

防壁が砕け散り、結界ごと俺の巨体が押し掛かる。最後の足掻きに四本の腕で支えようとしたが、受け止められる訳もなく、骨を砕け散らしながら水没していく。

着水時の衝撃で水飛沫が間欠泉の様に噴き上がり、それがこの戦いの終末を告げる合図となった。

水飛沫が雨のように降り注ぐ中、俺はクレーターの中で一台佇んでいた。時間制限はまだ余裕があるのだが、いつもの自動販売機に戻っておこう。

冥府の王が倒されると同時に一帯の魔物は消滅したようで、巨大なクレーターの縁にずらっと並び見下ろすハンターの姿が見える。

その中には清流の湖階層の面々もいるな。全員無事なようだ。ほつとしたよ。

「ハッコオオオオオン！ 大丈夫ううううううつ、怪我はああああああいいいいいい！」

口元に手を当てて叫ぶ、ラツミスの声がクレーター内に反響している。

大丈夫だよ、ピンピンしているから。そう、ラツミスに返事をしようとしたのだが、ふと気になることがあり、自分の現在の能力を確認した。

その途端、俺は結界を張り直すと同時に「ざんねん」と最大音量で周囲に向けて放った！

駆け寄ろうとしていた、ラツミスやハンターたちの動きがぴたりと止まる。くそつ、まだ終わって

『ほおおう、我をここまで追い詰めただけのことはある』

二度と聞きたくない声が直接体内に響いてきた。やっぱり、まだ死んでないのか。さつき、確認したのはポイントだ。冥府の王を倒したのにポイントが一切増えていなかった。

それはつまり、まだ奴が生きている証。

目の前の液化化した地面が盛り上がり、そこから骸骨の腕が絡み合うデザインの杖が生えてきた。その杖はそのまま上空へと昇っていき、地上から十メートル程離れた位置で停止した。

『これは貴重な杖だね、回収させてもらおう。さて、諸君。我が体の一部……左腕を変化させた分体とはいえ、よくぞ討伐を成功させた。これは称賛に値する』

あの化け物じみた強さだった冥府の王だと思っていた敵が、奴の左腕を変化させただけの存在だったというのか……冗談だろ。

『理想としては、ここで有能なハンターもまとめて処理したかったのだが、これは欲深すぎたようだ。まあ、本来の目的は達したのでよしとしよう』

本来の目的？ ヒュールミが危惧していた何かが、やはりあったというのか。

『おっと、この杖を攻撃しても構わないが、今からキミたちにとって貴重な話をする予定だ。それを聞いてからの方が良いと、老婆心ながら忠告させてもらおう』

流暢に話し続ける隙を突いて、攻撃を仕掛けようとしていたハンターたちを言葉で牽制している。ただの時間稼ぎの可能性もあるが、そう言われると攻撃を仕掛けにくくなる。

『これは我の一部を倒した、キミたちへの褒美だ。本来の目的とは、有能なハンターをここに集めることだったのだよ』

ここまでではヒュールミの予想が的中しているので、驚くべきことじゃない。問題は、そこから先だ。一体何を話すのか、聞き逃すわけにはいかないぞ。

ダンジョンとは

『キミたちは違和感を覚えなかったのかね。各階層で魔物が活性化するだけではなく、階層主がこぞって復活を始めた。それは全て我がやったことだ、実験の一環として』

階層の異変が今回の一件に繋がっていたのか。これもヒュールミと熊会長は予期していたが、断言されると結構ショックだ。

『今、魔王軍は防衛都市や周辺の国に同時攻略をしている状態なのだが、防衛都市を担当している左脚將軍の部下が思わぬ抵抗に遭い、手間取っていてね。同僚として何とかしてやりたいと思ったのだよ』

それは仲間想いな事で。関係のないような話に思えるが繋がってくるのだろうか。

『そこで、帝国と防衛都市を挟む位置にある、このダンジョンを利用できないかと思案してみたのだ。このダンジョンの魔物を支配下に置き、ここから近隣の町や村を襲い、帝国を荒らしたら楽しいことになるのではないかとね』

こいつ、同僚の為だと口にはしていたが、心底楽しそうな口ぶりから察すると嘘だろ。個人的に楽しんでる様にしか思えない。

『ダンジョンにある程度は介入できたのだが、まだまだ研究と実験の最中でね。だが、とても面白いことを発見したのだよ。魔物やハンターがダンジョン内で死亡すると、その者が力を持つ者であればあるほど、ダンジョンに大きな力が注入される。そして、その蓄積

された力を利用して新たな魔物を生み出せる。これがダンジョンの仕組みの一つなのだ』

ダンジョンを管理するゲームか何かで、同じようなシステムがあった気がするな。

魔物が尽きることが無いのは、死んだ魔物はポイントとして還元されるので、同じ個体を何度でも創造できるってことか。更に死亡したハンターもポイントとなりダンジョンに蓄積されるので、それを利用して魔物を生み出せると。

そんなゲームみたいな話あり得るのか？　だが、俺もポイントで能力を得ている。同じようなシステムで大規模になっただけだと考えれば、そうおかしくもない。

『そこで、我はこのダンジョンにいる人々を全て殺し、新たな魔物の群れを生み出せないかと考えたわけだ。さて、その方法なのだが、察しの良い者なら、そろそろ気づいたのではないか。この階層に腕利きを集めることにより各階層の防衛機能を低下させ、魔物の群れを襲わせたら……どうなると思うかね』

……最悪だっ！　じゃあ、今も清流の湖階層や他の階層も魔物の襲撃に遭っているというのか！

ハンターたちがざわついているが無理もない。俺だって、心が掻き乱され過ぎて今にも故障しそうだ。

『とはいえ、今回の戦いは我も消耗が激しい。暫くは傍観者に徹することとしよう。さあ、急いで戻った方が良いのではないのかね。ああ、そうそう。ここから各階層への転移は可能だが、ダンジョン外への転移は不可能とさせてもらっている。では、二回戦開始だ。精々足掻いて、良質な力をダンジョンに与えてくれたまえ』

暴露して満足したのか、杖がその場から消え去ると、冥府の王の
声も聞こえなくなった。

ハンターの殆どが踵を返して、集落への帰路を急いでいる。

「ありがとう。頑張ったね、ハツコン。一緒に喜びたいところだけ
ど、急いで戻らないと！」

クレーターの斜面を滑り降りてきたラツミスが、俺を背負いなが
ら称賛の言葉を口にした。そうだよな、今は喜んでいる場合じゃな
い。清流の湖階層のことが心配だ。

慣れた手つきであっという間に背負うと、クレーターから脱出し
て仲間の元へと駆け寄った。

離れた場所で荷猪車と共に待機していた、ヒュールミたちも既に
合流している。

「くそつたれな展開になっちまった。オレの考えが浅かった、すま
ん！」

ヒュールミが謝っているが、それを咎める者は誰一人としていな
い。

元々、情報が少なすぎた。そこから、相手の考えを全て予想でき
るわけがないのだ。

「これは誰も予期せぬ事態だ。まずは全力で集落に戻ることで考え
えよう。速度が重要となるが、ここからだ、どう足掻いても最速
で三日がいいところだ」

熊会長の言う通り、ここは集落からかなり離れている。これも冥
府の王の狙い通りなのだろう。ラツミスが俺を背負わずに全力で走
れば一日でいけるかもしれないが……一人で清流の階層に向かわせ

るのは危険すぎる。

こうなると、俺の重量が邪魔でしかない。軽いボディーに変化したとしても、一日二時間が限度。くそっ、完全に足を引っ張っている存在に成り果てている。

「この荷猪車をウナススだけではなく、我とラツミスも協力して押せば時間の短縮になる筈だ」

「うん、そっだね!」

熊会長とラツミスが加われれば、荷台の早さは倍増するだろう。だが、最速でも二日はかかりそっだ。

「ならば、ワシが風を纏わせ重量を少しばかり軽くするとしよう。孫が心配じゃ、出し惜しみはせんぞ」

「お爺さん、お願いします……」

「任せておけ、婆さん。大丈夫、馬鹿娘と孫はきつと無事だ。安心せい、ワシが婆さんに嘘を吐いたことなんぞ、無かつたじゃろっ」

手を合わせて祈り続けているお婆さんの手を、お爺さんはそっと包み込み、白い歯を見せて豪快に笑った。

心から男前と思えるお爺さんの行動に、男女問わず見入ってしまったっている。

「なんじゃお前ら、じろじろ見てからに。そんなことをしている場合じゃなかつ」

照れを隠すように少し怒ったような口調のお爺さんの言葉に、全

員が頷く。

熊会長は四つん這いになり、ウナススよりも前に並ぶ。その体には荷台と繋がるロープが巻き付けてある。ラツミスは荷台の後ろに回り、押す役目を担っている。

他の面子は荷台に乗り込み、お爺さんが風を荷台に纏わせると、重さで地面にめり込んでいた車輪が浮き上がった。

今は地面の上にそっと添えられているだけで、車輪が殆ど沈んでいない。

「ワシの魔力が尽きるまで、この風は維持をする。全力でとばすがええ！」

「行くぞっ！」

「はい！」

熊会長の合図に従い、荷猪車が発車　いや、発射した。あまりの勢いに体が後方に引つ張られたのではないかと錯覚するぐらいで、周りの風景が文字通り飛ぶように過ぎ去っていく。

先にスタートを切ったハンターチームを余裕で追い越し、荷猪車は亡者の嘆き階層を疾走する。

他のハンターたちを抜き去る際には、園長先生とお婆ちゃんから治癒の力が放出され、一瞬で他人を治療しながら走り去っていく。

これ何キロ出ているんだ。俺が高速道路で最高速を出した時より、速くないか。お爺さんの風魔法のおかげなのか、この速度でも荷台は安定していて揺れが少ない。

この調子なら想像以上の速さで集落に着けるかもしれないぞ。

途中、体力を消耗した二人に治癒魔法と体力回復の薬、そして俺からの食事が与えられ、一時間だけ休憩した後、無理を承知の上で、再び全力で駆けて行く。

本当はもつと休憩をして欲しかったのだが、寝ようとしてもどうせ眠れないと二人は首を縦に振らず、今も走り続けている。

出発してから、もう十時間は過ぎようとしている。熊会長とラツミスは疲労困憊で、ウナススに至っては限界を超えたので、食事だけ置いていき、後で集落にくるように指示を出した。

ケリオイル団長に言わせると、かなり頭のいいウナススなので大丈夫だとのことだった。

息も絶え絶えの本人たちが断るようなら、気絶をさせてでも眠らせようと荷台の仲間が苦渋の決断をする直前に、前方に集落が見えてきた。

もう既に夜なのだが、何と一日も経たずに俺たちは亡者の嘆き階層の集落に、戻ってこられた。

集落内には夜なので何体もの魔物がうろついていたのだが、園長先生の広範囲浄化魔法であっさりと一掃され、魔物の姿が消え去った。

「申し訳ありませんが、私は先に始まりの階層に帰らせていただきます。孤児院の子供たちが心配なので！」

返事も聞かずに園長先生が荷台から飛び降りると、転送陣のある建物へ一人駆けて行った。

「俺は診療所に行って団員の状況を確認次第……悪いが、始まりの階層に向かわせてもらう。シュイの故郷だ、仲間の大切な人を守ってやりたい。すまねえ、会長」

患者の奇行団は仲間の絆を大切にしているのは知っている。団長の判断に俺たちが口を挟む権利は無い。

「ケリオイル団長。ホクシーを頼む」

熊会長は肩にそっと手を添えると、大きく頷き団長の行動に同意を示した。

「すまねえ。あっちが片付いたら必ず、そっちに向かう！ 皆、死ぬなよ！」

ケリオイル団長が診療所の方向に振り返ることなく消えて行った。

「感慨にふけっている状況ではないぞ。ワシらも清流の湖階層へ急がねば」

お爺さんの言葉に全員が表情を引き締め、転送陣までそのまま移動する。

「会長、大食い団はどうするの」

「それは心配ない。彼らは動けるようになったら清流の階層へ先に戻れと言っている。既に戻っている筈だ」

大食いと言うデメリットはあるが、ハンターとしての能力は高い大食い団が先に戻っているのは吉報だな。今、どういう状況に置かれているのかは不明なままだが、少しでも明るい情報があるのはありがたい。

「ラツミス、ハツコン。皆が無事だと信じたいが……最悪な展開が待っていても取り乱すんじゃないぞ。嘆くのも自暴自棄になるのも全てが終わってからでいい。わかったな」

「うん……わかっている」

「いらっしやいませ」

そうだ。ずっと考えないようにしてきたが、下手したら全滅をしている可能性もゼロではない。普通の状態なら魔物の軍団が襲ってきたとしても、耐えているのではないかと期待させてくれる門番ズや、取り仕切る熊会長の手腕に期待ができた。

だが今はリーダーも不在。守りの要である二人もここにいる。嫌でも最悪の展開を思い浮かべてしまう。

「不幸中の幸いと言うべきか。今、清流の階層には多くのハンターが集まっている。大丈夫だ、きつと大丈夫だ。彼らなら耐え凌いでいてくれる。大丈夫だ」

熊会長の言葉は俺たちに向けているのではなく、自分に言い聞かせているように思えた。

「冥府の王が真実を語った証拠は何処にもない。お主ら、狂言に振り回されているだけかもしれない。考慮しておくがええ」

お爺さんは軽くその言葉を口にしたが、その目は真剣で口とは裏腹に心中穏やかではないのだろう。

ミシユエルは何も言わずに付き従っている。ダンジョンに思い入れが少ない自分が口を挟むべきではないと、自重してくれているのか。

カリオスは目が血走り、腕が小刻みに震えている。残してきた彼女のことを思っているのだろう。そんな相棒の姿を見つめ、ゴルスは口を一文字に噤んでいる。

各自が覚悟と期待と愛する人への想いを胸に秘め、清流の階層へと転移した。

現実

転送陣の光が消えると、そこは清流の階層にある転送陣の部屋で間違いなかった。

だが、扉は開け放たれ床には人が踏み荒らした跡がある。誰か、それも複数がこの転送陣を利用した、もしくはしようとした痕跡が残っていた。

「何かしらの異変があったのは間違いないうだ、急ぐぞ」

熊会長が廊下へ飛び出し、全員が後に続く。

以前の廊下は掃除も行き届いていたのだが、今は複数の人の足跡がそこら中にある。掃除をしている暇もないということなのだろう。廊下の窓には格子があり、外からの侵入を阻んでいるのだが、格子に擦り傷が無数に付けられ曲がっている物すらある。

「あちいな……」

ヒュールミが額の汗を拭っている。よく見ると、老夫婦と熊会長以外は顔中に汗を浮かべている。

そういえば、清流の湖階層には四季があつて今は初夏だったか。窓が完全に締め切っているから、かなりの気温になっていそうだ。自分が温度を感じないから、全く気付いていなかった。

廊下を走り抜け、ハンター協会のホールへ繋がる扉を開け放つと、そこには多くの人が身を寄せ合っていた。

突如大きな音を立てて開いた扉から現れた俺たちに、人々の怯えた視線が向けられる。

全員の顔には疲労の跡が色濃く残り、尋常ではない事態なのを即

座に理解させられた。おまけに風の通らない室内にいたので、その熱で余計に体力を奪われている様だ。

人の数は、ざっと数えて四十から五十ぐらいか。見知った顔は。

「会長！ 不在中に魔物の侵入を許してしまい、申し訳ありません！」

知り合いを探している最中だというのに視界に割り込んできたのは、汚れほつれたハンター協会職員の制服を着た、受付の一人だった。

「何があつた、説明を頼む」

「は、はい。四日前、突如魔物の群れが集落の外に現れ、抵抗虚しく集落への侵入を許してしまい。人々がハンター協会へと避難してきました」

ハンター協会は元々、避難場所として設定されているので強固さと迎撃態勢も整っている筈だ。ここで籠城すれば持ちこたえられる。現に双蛇魔が襲ってきた際も、ハンター協会の鉄壁の守りを打ち崩せずに、返り討ちに遭っているからな。

「ですが、人口が急激に増えたことにより、ハンター協会が避難場所であることが、以前からの住民以外に浸透しておらず、多くの住民がここまで辿り着けずに……」

そこまで話すと職員は俯き肩を震わせ言葉に詰まる。

やはり、犠牲者は……多いのか。以前の襲撃は住民も少なく危機意識もある人ばかりだった。だからこそ、集落があれ程までに荒ら

されていても、誰一人として死者が出なかった。

だが、今回は人が増えたことがネックになったのか。

「辛いだろうが、説明を続けてくれ。ここで最も大切なのは現状を知ることだ」

熊会長も辛いのだろう。職員の方に片手を添えているが、もう片方の手はきつく握りしめられている。

「も、申し訳ございません。亡者の嘆き階層にいらつしやる会長に連絡を取ろうと、転送陣を発動させようと試みたのですが、何故か起動せず、住民を他の階層に移動させることも叶いませんでした。何とか防衛は続けていますが、正直、これ以上は耐えきれないかもしれないと、覚悟を決めていた所に皆様が」

絶体絶命の状況だったのか。もう少し早ければと後悔もあるが、壊滅前に間に合って良かったとも言える。

「生き残ったのはこれだけか？」

「いえ、怪我人や女性、子供は二階の客室や個室を使ってもらっています。逃げ込めた住民はおそらく……百名前後かと思われます。ハンターの皆様は二階から備え付けのバリスタや遠距離武器、魔法を用いて迎撃や、飛行系の魔物の討伐に当たっていただいています」

「百かつ、そうか……ご苦労だった。後は任せて体を休めてくれ」

そう言つと緊張の糸が切れたのか、女性職員がその場に倒れそうになったのを、熊会長が受けとめている。

「会長、俺たちは二階で手伝うぞ。あと、周囲の状況の確認も任せ
てくれ」

「門番としての義務だ」

熊会長の返事も待たずに二人は二階へと駆けあがっていった。上
の階のテラス部分が迎撃に適した場所なので、そこに向かったのだ
ろう。

カリオスは恋人の安否を何よりも優先させたいだろうに。それで
も、私情を殺し、防衛へと参加している。

「私も防衛に回ります」

ミシユエルも後に続き二階へと向かう。

「ワシも行くぞ。老いぼれの魔法でも役に立つことはあるじゃろう」

「お爺さん、私も行きますよ。治癒の力が必要でしょう」

「爺さん、婆さん、あんたらの娘と孫は、役立たずのオレが探して
おく。カリオスの恋人もな。見つかれば次第すぐに連絡するから……
死ぬなよ！」

老夫婦の後姿にヒュールミが声を掛けると、二人は振り返り深々と
頭を下げ、二階へと消えて行った。

「う、うちも、げ、迎撃に」

「いや、ラツミスとハツコンは皆に食事と飲料を配ってくれないか。
碌に食事を取ってないように見える。まずは食事と休養だ。二人と

も頼めるか」

「いらつしゃいませ」

「う、うん、わかった！」

異論はない。ラツミスは今、この階層で一番仲のいい宿屋のムナミを探したいと思っっている筈だ。だけど、カリオスや老夫婦が自分の感情を押し殺し、みんなの為に行動したのを見て言い出せなくなっていた。

葛藤が続いている状態では、戦闘に参加しても足を引つ張る可能性が高い。それにラツミスと熊会長は疲労が限界近くまで蓄積されている。そこを見越したうえで熊会長は頼みごとをしたのかもしれない。

と考察はここまでだ。与えられた任務を素早くこなさなければ。本当は冷凍食品を温めて提供したいのだが、素早さを上げたことにより、温めが早くなったとはいえ時間はかかる。

それに室内の気温が上がり過ぎて、ここは不快指数が高い。となると、水分補給に優れたスポーツドリンクと、栄養と美味しさを両立させた携帯食品を提供しよう。

商品を次々と落としては 念動力 で流れるように排出する。そして、目の前に次々と並べていき、ラツミスが運んでいく。比較的元気な住民も手伝ってくれたので、物の数分でホールにいる人々に行き渡った。

追加で2リットルのキンキンに冷えたスポーツドリンクを二十本置いていく。

「うわぁ、この変わった味の水、冷たくて美味しい！」

「くはああああ、染みわたるぜ」

「生き返るようだ。この変な食べ物も結構うまいな！」

大好評のようで、汗と体力を消耗していた人々が、少し生気を取り戻している。

そして、口々に「ありがとうよ、ハッコン!」「助かったぜ!」

「冷たいお水、ありがとう!」と感謝の言葉を投げかけてくれた。そこまで喜んでもらえたら、自動販売機冥利に尽きるよ。

「次は二階だよ、ハッコン」

「いらっしゃいませ」

背負う時間も惜しいと、抱き抱えられて二階に運ばれると、廊下にずらりと並んでいる片開きの扉の脇に置かれ、ラッミスが隅の扉から開けて行く。

「食料の提供と援軍に来ました。人数を確認させてください」

そう言って、ラッミスが中を覗き込み、誰が何人いるかを確認して戻ってくる。

俺はただボーっと待っているのではなく、冷やしたスポーツドリンクと栄養ドリンク。怪我人でも食べやすそうな、ゼリー状で栄養のある食料を目の前に揃えていく。

取得しておいて正解だったな。念動力が大いに役立つてくれている。この少しの口スをなくすだけでも、作業効率はかなり上昇する。

一つ、二つ、三つと扉を開けて、ラッミスが中を確認していると、その動きが止まった。

「あつ、力持ちのお姉ちゃん！ お爺ちゃんと、お婆ちゃんは何処？」

あの声は老夫婦の孫だよな。確かメイちゃんだったか。

「ラツミスさん。父と母を知りませんか？」

続いて響いてきたのは娘さんの声。よっし、老夫婦の娘と孫の安否は確認できた。憂いが一つ減ったぞ。

すぐさま、ラツミスが説明をすると、二人は冷静さを取り戻したようで「よかった、よかったああ」と嗚咽交じりの声が聞こえてきた。

そこから再び扉を開け、飲食料を提供していたのだが途中、カリオスの恋人である道具屋の娘も確認できた。

先に二階へ上がっていたヒュールミは反対側から調べていたようなのだが、俺たちもいることに気づくと駆け寄ってくる。

「ラツミス、そっちはどうだ」

「お爺ちゃんたちの娘さんと、お孫さんも無事だったよ！ カリオスさんの彼女も元気だった！」

「おつ、マジか！ こっちは知り合いだと、あの金髪高飛車娘と黒服がいたぜ。後はハツコンが世話になっている両替商もいたぞ。それと……ムナミも無事だ」

「ほ、本当っ！ ど、何処にいたの！」

ラツミスに詰め寄られて、その勢いに体を反らしているヒュール

ミが、すつと指差した。

「右から三番目の部屋だ。ムナミも心配していたぞ。元気な顔を見せてこい」

「う、うん、ちょっと行ってくる！」

あつという間に視界から消え、扉が開いた音がしたかと思うと「ムナミイイイ！ 良かったあああ」という歓喜の叫びが響いてきた。

「ハツコン。戦っている爺さんたちに無事を伝えたい。付き合ってくれるか」

「いらつしゃいませ」

返事と同時に体を ダンボール自動販売機 へと変化させた。

これでヒュールミでも持ち運びが可能だ。早く三人に無事なことを教えたいし、戦況が気になっていたので丁度いい。

ヒュールミは俺を両腕で抱きしめるようにして持ち上げると、二階テラスへと繋がる扉を開いた。

不意の攻撃があるかも知れないので常に 結界 は維持しておく。う。

ぶわつと大量の空気が流れ込み、ヒュールミの髪をなびかせる。

扉の先に広がる光景を目の当たりにして、俺もヒュールミも言葉を失っていた。

復興作業が進み、集落内の瓦礫の撤去が完了間近で、新しい建造物も増えてきていた活気を感じられる街並みが、無残な姿を晒している。

焼け焦げて骨組みしか残ってない、二カ月前に完成したばかりの住宅。

双蛇魔の襲撃で運よく被害を逃れた一角に残っているのは瓦礫のみ。

テントは薙ぎ倒されて地面に転がり、魔物が踏みつけて行ったのだろう、ただのぼろ布と化している。

町の数か所から火の手が上がっているが、それを消化する人手がいるわけもない。ただ、周辺が既に炭化しているか、瓦礫と化しているので火事が集落中に広がることはないだろう。

「これが、オレたちの過ごした集落の姿だって言うのかよっ！」

視線を上げると、涙を零しながらも歯を食いしばり懸命に耐えている、ヒュールミの顔があった。

ヒュールミ、俺も同じ気持ちだよ。だけど、今は立ち止まってはられない。やるべきことがあるから。

意思の疎通

協会の周辺を取り囲んでいる無数の魔物が眼下に見える。

蛙人魔、双蛇魔、鰐人魔といったお馴染みのメンバーだけでなく、見たことのない個体もいる。今まで遭遇してこなかっただけで、清流の階層に生息している魔物なのかもしれない。

懸命に防衛していたであろうハンターたちは、疲労の限界が近かったのだろう。門番ズとミシュエル、最強の老夫婦に場を譲り、扉付近の壁に背を預けて乱れた息を整えている。

今、テラスで敵に対応しているのは、比較的元気な名も知らぬ五名ほどのハンター。門番ズ、老夫婦、ミシュエル、それと驚いたことに両替商の助手をしている大男のゴツガイ、いつもの露出度の高い服ではなく、体に張り付くライダースーツの様な格好をしたシャーリイまでいた。

ゴツガイは柄が長く先端が斧のようになってる武器、確かハルバートだったか。それを軽々と振り回し、トンボの様な羽の生えた魚を叩き斬っている。

シャーリイは鞭をしなければ攻撃を加えるだけではなく、敵に巻き付けて相手の動きを封じ、鉄串のような物を投げつけ敵を葬っていた。

えっ、二人ともそんなに強かったのか。ダンジョンの様な危険な場所で商売をする人にとっては当たり前前の嗜みなのだろうか。

集落の現状に我を失いかけていたヒュールミだったが、皆の活躍を目の当たりにして気を取り直した。

そして、大きく息を吸い込むと、戦闘中の三人に待ち望んでいた情報を大声で知らせる。

「爺さん、婆さん、娘と孫は無事だったぜ！ カリオス、恋人も元気だ！ みんな心配してたぞ！」

老夫婦とカリオスはすつと拳を上げ、振り返ることなく背中であえる。

何も言葉を発していないというのに、三人が喜び笑みを浮かべているのがわかった。

そこから、彼らの動きは勢いを増していった。

お爺さんが左と右に金色と鉛色をした色彩の扇子を握り、舞うような動作をすると、空に暗雲が広がり天からの落雷がハンター協会の周囲を薙ぎ払う。

お婆さんは自分を中心とした半径五メートル以内に入り込んだ敵を即座に斬り捨て、テラスの縁にそって歩くと、進んだ後には切断された魔物の死体が折り重なっている。

カリオスはハンター協会の壁を登ってきている蛙人魔を槍で次々と突き刺していき、地味な働きではあるが貢献している。

「咆哮撃！」

ミシユエルが竜の大剣を振る度に、赤い刀身から炎が扇状に広がり、群がってきていた魔物たちを焼き尽くしている。

老夫婦の無双っぷりが凄まじいが、ミシユエルも負けていないな。大多数の敵に通用する攻撃方法があるというのが、この状況ではかなりありがたい。

俺もボーっと見学している場合じゃないな。ヒュールミに降ろしてもらい、いつもの自動販売機に戻ると、休憩中のハンターたちにスポーツドリンクや軽い食事を提供する。

怪我は全てお婆さんが治したようなので、問題は体力と失われた血の補充か。鉄分豊富と言えばレバーだけど、そんなもの商品になかったしな。あとはココアがミネラルと鉄分や亜鉛が豊富とか……

お、ココアの缶の成分表に書いているな。

ココアの説明を読み、何もしいよりマシだろうと彼らにココアも提供しておいた。しじみの味噌汁も確か効果があったよな。どちらか好きな方を選んでもらうか。

「みんな、無事!？」

テラスに飛び込んできた小さな影は、ラツミスか。辺りをキヨロキヨロと見回し、俺を発見すると駆け寄ってくる。

「ハツコン、大丈夫？ 壊れたりしてない？ あっ、みんな休むなら屋内じゃないと危険だよっ」

そう言つと、壁際で休憩しているハンターを二人ずつ両肩に担ぎ、テラスに繋がる出入り口から中に手際よく運んでいく。

最近、瓦礫運びや負傷者の運搬が多かったから、動きに無駄がなく様になっている。

全員を運び終わると俺を背負い、ヒュールミに向き直った。

「後は任せて。ヒュールミは危険だから中に」

「おう、任せるぜ。無茶だけはすんなよ」

「うん、わかってる」

手を打ち合わせてニヤリと笑い、ヒュールミは屋内に入り扉を閉めた。

「よっし、うちも頑張るよっ!」

ムナミの生存を確認して、やる気も充填されたようだ。顔を両手で挟み撃ち、気合を入れて腕を回している。

「あら、元気ね。お久しぶり、ラツミスちゃん」

「あつ、シャーリイさん！ その格好……カッコイイね！」

「うふつ、ありがとう。ちょっと疲れたから、飲み物頂いてもいいかしら」

シャーリイさんの好物って実はフルーツ牛乳だったよな。風呂上がりに、顔をほころばせて飲んでいたのを覚えている。

念動力 で商品を取り出すと、すつと彼女の手元に運んだ。

「今のどうやったの？ ラツミスちゃんの風の魔法なの……それとも、操作系の加護も持っているのかしら」

「うづん、違うよ。これってハツコンの力だよ」

「あら、そうだったのね。ハツコンさん、ありがとう。本当に優秀な方ね。魔道具なのが惜しいわ」

艶かしい仕草をしてウインクされると、その色っぽさに生身の体なら勘違いしそうだ。

普通なら防衛中にこんな呑気な会話をするのは無謀の極みだが、時折飛んでくる矢や投石は 結果 で弾き飛ばしているので何の問題もない。

「シャーリイさんって強かったんだね！」

「うふふ。ダンジョン内で夜の仕事をするには、腕に覚えがあった方が何かと便利なのよ」

荒くれ者も多いだろうし、魔物と遭遇する確率だってゼロじゃない。言われてみれば、その通りだな。

「ここからは、こちらが踏ん張るから、ゆっくりお昼寝でもしていいね。寝不足は美容の大敵だって、前にシャーリイさん言ってたよね」

その言葉に目を丸くして驚くと、シャーリイは口元に手を当て、心底楽しそうに笑っている。

「これは、一本取られたわ。じゃあ、お言葉に甘えて、そうさせてもらおうかしら。ゴツガイさん、一緒に戻りましょう」

近くでハルバートを振り回していたゴツガイに、シャーリイが声を掛けると、振り返り重々しく一度頷いた。

「では、お先に失礼しますわ。身体を癒したら直ぐに参りますので」

「自分も一度休憩を取らせてもらいます」

二人が退場し、ここに残っているのは、老夫婦、門番ズ、ミシユエル、ラツミス、自動販売機となった。

お爺さんは戻る際に魔法を使えばなしだったので、魔力の量が乏しいのか大魔法は初めの一発のみで、それからは小規模な魔法を使用している。それでも十分な威力なのだが。

ラツミスもずっと引っ張ってきたから体力を消耗している筈なのに、テラスを駆けまわり乗り込もうとしてきた敵を、片っ端から吹

き飛ばしている。

あまり無茶はして欲しくないというのが正直なところだが、今無茶しなければ全てが終わる。止められるわけがない。

俺も 高圧洗浄機 に変化して手伝いたいところなのだが、堪えている。時間制限があるので、いざという時の為に取っておきたい。ポイントは冥府の王との戦いで激減したのだが、俺が金銭を力に変えていることを知っていた熊会長が、前払いと称して金貨を十枚投入してくれた。

これで、飲食料の提供も 結界 の維持も問題なくなり、ポイントにも余裕ができています。だからといって、無駄遣いが許される状況ではないので、何かを新たに得るとしても慎重に判断しなければなりません。

仲間の活躍を見守りながら戦況の確認をしているのだが、本当に酷い状況だ。

集落は半壊。守りの要だった作り立ての壁には大穴が開いていて、そこから侵入してきたことが容易に理解できた。

そこから集落中で暴れたのだろう。原形を留めている建造物が殆ど見当たらない。

生存者は約百名と言っていたが、生き残りの殆どが復興前から集落に住んでいた住民とハンター。全員の顔を確かめたわけではないが、何かと接することの多かった飲食店の店長数名の生存はまだ確認できていない。

復興中に人口が一気に増え五百は越える勢いだという話だった。その大半が亡くなった……ということだよな。

今もハンター協会に侵攻を続ける魔物たち、数えるのも虚しくなる圧倒的な物量が集落内に溢れている。

このハンター協会の材質はかなり硬度の高い鉾石を惜しみなく使

用し、分厚さもかなりあるようだ。窓にも格子が備え付けられているのだが、それも普通は高額の鎧に使用される材質で作られているので、蛙人魔ごときでは太刀打ちできない。

もちろん、入り口の扉もそうで、魔物側は唯一人間が出入りしている、テラスの二階から内部へと入り込もうとしている。

防衛側としても、敵の迎撃が唯一可能な場所なので、ここを押さえられると身動きが不可能となり、消耗して死を待っただけとなる。なので、ここだけは死守したいところだ。

しかし、この魔物の数は異様過ぎる。死んだ人の魂を魔物に変換するという話だったが、この階層で死んだ人を魔物化しているとすると、人間一人が魔物一匹分なのにもよるが、相手にはまだまだ駒がいるということになるのか。

それに、死んだ魔物は再び生み出すことも可能だと言っていたな。死亡から生み出すまでの間隔を何らかの操作により早めることが出来れば、相手は半永久的に敵を戦場に送り続けることができる……幾ら何でも、それはないと思いたい。

「はあはあはあ、まだまだああ」

飛び込んできた蛙人魔が肉塊となって、集落上空を滑空している。それをやったのは、拳を突き出した形で荒い呼吸を繰り返している、ラツミスだ。

休憩を殆ど取らず走り続けてきたツケが現れてきたか。強がってはいるが、足もフラフラで攻撃を避けられずに 結界 で防いでいる。

これは体を休めないでダメだな。

「ざんねん ざんねん」

「ハツコン、まだやれるよ、うちは」

無理をし過ぎだ。防衛戦は長丁場になるのは確実。ここは無理をする場面じゃない。引くことも重要だ。わかってくれ、ラツミス。そんな気持ちを込めて「ざんねん」を連呼するのだが、聞く耳を持たない。

「もう逃げない。あの時と違う……私は戦える。みんなを守れる……」

自分に言い聞かせるように呟く言葉を聞いて、全てを察した。以前、ヒュールミから聞いた生まれ故郷の村が滅ぼされた時の光景と、現状を重ね合わせているんだ。

だから、限界を超えても戦い続けようとしているのか。気持ちにはわかる、だけど、これ以上の無茶は命に関わる。何とかして止めないと。

どうしたらいい……AEDの電気ショックを利用して気絶させるか。いや、疲労困憊の状況でそれは危険すぎる。

それに、ラツミスに攻撃を加えるなんてしたくない。説得をするにも俺には定型文しか話せない。どうにか冷静にさせて判断力を戻させないと。

相手が驚くような、冷静になるような方法。

ずっと練習してきたあれを……試すか。器用さが上がった恩恵を見せつけるのは今しかない。これをするには、まだかなりの集中力が必要となるが、試すのは今だよなっ！

「らっ いす」

「えっ、もしかして、うちの名前……呼んだ？」

俺の発した声に反応して、ラツミスの動きがぴたりと止まる。

ちゃんとは喋れないが伝わってくれたようだ。この調子だ、油断はするな続けて言い切れ。

「さがりゅ」

ああもう、赤ちゃんみたいな口調になったが、これが今、俺ができる精一杯の発言だ。

「あ、うん、下がってことだよ。えと、うん」

俺が話したことが余りに予想外過ぎて、頭の上っていた血がすつと下がったようだ。

呆けたような表情で俺を担いだまま、扉を潜って屋内に入っく。

階段を下りて、二階の廊下に差し掛かったところで俺を下ろすと、くるっと振り返り俺の体を正面から両手で掴んだ。

「ええええええええええっ！ ハッコン、いつから話せたのおおおっ！？」

絶叫を上げて驚く、ラツミスがそのまま仰向けに倒れる。体力と精神が限界を超えたようだ。

ネタばらしは目が覚めてからにしようか。おやすみ、ラツミス。

会話

ラツミスの絶叫を聞いて駆け寄ってきたヒュールミと住民たちに担がれ、ベッドに運ばれていく。今はゆっくり体と心を休めてくれ。

「ハツコン、今、ラツミスが変なこと口走ってなかったか。話せるとかどうとか」

ラツミスを寝かせてきたヒュールミが、戻ってきて早々、疑問を口にした。

ヒュールミに黙っておく必要はないよな。

「うん」

「えっ、えっ、えっ、えっ？」

素直に答えたら、ヒュールミが硬直した。今まで同じことしか話さなかった俺が、普通に返事したら、そりゃ驚くよな。

「すこししか」

五文字話したので、少し間を置いて。

「いかん」

んー、文字数と言葉に制限があるので組み立てが難しい。どうしても、変な言葉遣いになってしまう。

「えと、その、つまり、なんだ……流暢に何でも話せるわけじゃないんだな」

「うん」

「その妙な話し方だと……文字数と話せる文字が限られているのか？」

ヒュールミと話していると理解が早くて、本当に助かる。

「いらつしゃいませ　ありがとうございます　またのごりようをおまちしています　あたりがでたらもういっばん　ざんねん　おおあたり　こうかをとうにゆうしてください」

今まで俺が話してきた定型文を全て発言する。ヒュールミは真面目な顔でじっとこっちを見てくれている。

「あ　い　う　お　か
「く　こ　さ　し　す
「せ　に　ね　の　た
「ち　て　と　ま　も
「ら　り　よ　を　ん
「が　ご　ざ　だ　で
「ぼ　っ　ゃ　ゆ」

と話せる全ての言葉を伝える。この異世界に五十音順はないだろうし、この世界の言葉が日本語ではなく脳内で勝手に変換されているだけなら、相手には意味不明に聞こえるだけかもしれない。

だけど、自動販売機が転生する世界だ。そこは都合よく変換されていることを祈るしかない。

「つまり……いつも話していた言葉から一文字ずつ抜き出し、並べ替えて発言ができるってことか」

「うん うん」

「あと、一気に発言できるのは五文字のみで、間違いないか」

「あたりでもす」

「こしちがう」

定型文から言葉を抜き出すと、スムーズに発音ができるのだが、一文字ずつ繋げると、どうしても一昔前の合成音声のようになってしまう。

ヒュールミの考察は八割方正解なのだが、正確に言つと定型文の中から五か所言葉を抜き取れるようになった。なので「あたりがでたらもういっぽん」から「あたり」という文字を抜き出した場合、これで一か所という括りになる。「あ」だけを抜き出しても一か所となる。

「なるほどな、大体は理解できたぜ。すげえじゃねえか！ これで今までよりも、いっぱい話せるなっ。ラッミスに教えたら、お喋りできるようになったんだ。って、めっちゃくちゃ喜ぶぞ」

俺の体をバンバンと叩き、顔をほころばせて自分のことのように喜んでくれている。

「だね」

「あ、オレだって嬉しいからな！ ハッコンのことを、もっと……」

知りたいからよ」

顔を背けて、身体を叩く速度が上がっている。柄にもないことを言っただけで照れているのだろうか。

これからは依然と比べて言葉による、意思の疎通も可能となる。ただ、もう少し話せる文字が多ければと思わずにはいられないが。贅沢を言ったら罰が当たるかもしれない。たぶん、器用さを上げれば話せる文字は増える……と思う。

もっと会話を楽しみたいところだけど、そうも言ってもらえない。

「てらすに」

「もっ　て　い　て」

「ああ、テラスに戻りたいんだな。わかった」

俺は疲労を感じないので、持久戦に最も向いている人材　自動販売機材だ。

変身をしなくてもやれることは幾らでもある。

再び、テラスに舞い戻った俺は扉の前に陣取る。この扉は一匹たりとも通さないという強い意志を見せつけるように。

ヒュールミは既に戻っているので、　結界　は今必要ない。

時刻は夕方には少し早い時間。あと二、三時間耐えれば陽が落ちて、少しは過ごしやすい気温になるだろう。

お婆さんとお爺さん以外は疲れを全く感じさせずに敵を撃退している。お爺さんは魔力を使い過ぎたらしく、扉脇で胡坐をかいている。そつと、ミネラルウォーターを渡しておいた。

テラスに登ってきているのは、殆どが蛙人魔であるとは飛行可能な魚か。鰐人魔は手足の短さがネックなようで、壁を上手く登れないようだ。

梯子が掛けられて、そこから這い上がってくることはあるのだが、すぐさま梯子ごと下に叩き落とされている。

圧倒的戦力差に対し、ここまで守れている理由はテラスの程よい大きさと、魔物側に遠距離攻撃が得意な個体が少ない事が挙げられる。

短い腕に水かきのある手。これでは投擲武器を扱うのも一苦労だろう。

飛行する魚は口から水の塊を撃ち出しているが、それは充分避けられる速度で、一撃で倒される威力でもない。

これは純粹に運が良かったとしか言いようがない。

とまあ、考察はここまでにしよう。俺も防衛戦に参加しないと。

時間制限のある変身機能の長時間使用は除外して考えて、今の俺に出来ることは何か。

よっし、まずは相手の邪魔をメインに考えよう。

2リットルのコーラを大量に並べ 念動力 で蓋を開ける。そして、久しぶりの 棒状キャンディー販売機 になって、棒状キャンディーを大量に取り出し口へと落とす。

体外に排出すると、元の自動販売機に戻り 念動力 で棒状キャンディーの包み紙を外し、中身をコーラの中へと放り込み、すぐさま蓋を閉める。

そして 結果 でテラスの外へと飛ばした。完成したコーラを次々と飛ばしながら、ペットボトルだけを消す。

「ギュゴゲツゴ！」

お、爆発したコーラに巻き込まれた蛙人魔の悲鳴が次々と上がっている。ダメージとしては大したことないのだが、その大きな目にコーラを浴びたら眼球がただでは済まないだろう。

さあ、ガンガン行くぞ。コーラ爆弾の数は充分だ。炭酸飲料塗れにしてやるぞ。

太陽が地平線の向こうに隠れようとしている。辺りは一気に暗くなってきたのだが、ここにきて敵の猛攻が止んだ。

計ったかのように魔物たちが攻撃を止め、ハンター協会から離れて行く。なんだ、何か裏があるのだろうか。

全員が不審に思いながら、撤退する敵を見守っていると扉が開き、黒服軍団が現れた。

あれは、スオリの護衛たちか。何しに来たんだ。

「皆様お疲れ様です。ここの魔物は陽が落ちると一旦引いて、夜中近くになると苛烈な攻めに転じます。この見張りは我々が受け持ちますので、身体をお休めください」

敵も一旦休憩を取るのか。これだけの数がいるのだから、入れ替えて攻めればいいと思うのだが、こっちが楽になるのだから文句は言うまい。

この場は黒服に任せて、俺も一緒に屋内へと帰還した。

「くああっ、この蒸し暑いのが何とかなんねえか」

「我慢するしかない、カリオス」

手で仰いでいるカリオスにゴルスが諭している。他の人は何も口にしていないが、汗を噴き出し不快そうな表情が全てを物語っていた。

室内でも熱中症は普通にかかる。ここはどうかして、室内の温度を下げないといけないな。

俺は 氷自動販売機 になり「こ お り お く」と発言して、氷を最高速で流し落としていく。目の前にあつという間に氷の小山が生成されると、箱や鍋や袋といったものに人々が詰めていき、部屋の四隅や自分の近くに置いて冷房器具の代わりにしている。

急場しのぎだが、ないよりはマシだろう。

「皆、遅くなってすまない。よくぞ今まで耐えてくれた。今日は我々に任せて、ゆっくりと体を休めてくれ。この失態の責任は全てが片付いた後に」

熊会長が深々と頭を下げ、この場に居る全員に向けて謝罪をした。

理解を示して気にするなと反応している者もいれば、仲間や身内が殺されたのだろうか、殺気漲る視線を突き刺す人も少なくはない。何故、この階層を離れていたのかは事前に説明はしているのだが、だからと言って納得できるかどうかは別なのだろう。

俺もこの階層に残っていて、このような事態に巻き込まれてラッミスやヒュールミを失っていたら、彼らと同等の想いを抱かないとは言い切れない。

人の上に立つということは、このような覚悟も必要だということなのか。

「まずは、魔物を撃退して生き延びることが最優先となる。この階層の魔物の大半は夜行性だ。特に今は初夏で気温が高い。気温の下がる夜中から早朝にかけてが最も活発になる時間帯になる」

蛙や鰐って基本的に夜行性だよな。田舎に帰ると、夜になると蛙が田んぼで大合唱をしていたのを思い出した。

地球の習性や生態がここでも適用されるなら、夜の対応方法はあ
る。

問題は反対しそうな、ラッミスをどう説得するか。それに尽きる。

自動販売機の単独行動

日を超える数時間前に俺は再びテラスに設置されている。

生き残ったハンターの半数と老夫婦以外の亡者の嘆き階層から戻ったメンバーが、ずらっとテラスに並んでいる。

老夫婦が不参加なのは、寄る年波の影響で回復が遅いらしく、無理はさせないでおこうと、満場一致で可決したからだ。

あと、熊会長が一睡もしない状態で参加しようとしたので、ヒュールミお手製の睡眠薬で眠らせて、強引に会長の部屋で体を休めてもらった。

もう少ししたら、魔物たちが再び集まり、総攻撃を仕掛けてくるそうだ。この四日で防衛側の被害が大きかったのが深夜の防衛戦らしい。

闇の中では人間側が不利なので、光の魔法を扱える魔法使いが周囲に、明かりの魔法を付与して協会の周辺だけは良く見えている。

まだ、魔物の姿はない。怖いぐらいに静かな夜だが、こういうのを嵐の前の静けさと言っのだろうな。

「気を付けてください。何者かが四体、こちらに向かって来ています！」

いち早く気配を感じ取ったミシュエルが注意を促す。

全員が武器を構え、ミシュエルが睨みつける方向に体を向けた。

「ただいまー、あれ、みんな戻ってきたんだね！」

警戒していたテラスに飛び込んできた四つの影は、大食い団だっ

た。

二日前から偵察に向かうと言ってから姿が見えなくなったので、生存は諦められていたのだが、無事だったのか……はああ、良かったよ。

あの逃走速度と察知能力の高さがあれば、そう簡単にやられることはないと信じてはいたが、その姿を確認して電力が落ちそうになる。

「わああ、ハツコンだ！ ご飯、ご飯、何かご飯！」

再会を喜び合う前に、俺の元に走り寄り食料を要求するところが、大食い団らしくて安心したよ。

彼らの好きなから揚げを山ほど提供すると、頬一杯に詰め込み、貪っている。

「集落内を、もぐもぐ、はひひまひやって、むしゃむしゃ、生存者んぐつ、と食料」

ええい、全部呑み込んでから話さない、ミケネ。

「ふうう、落ち着いた。ええとね、集落内の生存者と食料、あと魔物たちの情報を少しでも集めようと走り回っていたんだけど、生存者は残念ながら見つけれなかったよ」

ミケネが申し訳なさそうに頭を掻いている。

こんな危険な状況で敵陣の中を駆けまわってくれていたんだ、文句を言う奴なんているわけがない。

「あとね、置きっぱなしの食料はちょっとしかなかったから、持って帰ってこられなくてごめんね」

「でも、ミケネ。ハツコン戻ってきているならご飯の心配は、いら
ないねー。お肉おいひい」

ペルはまだ食べているのか。まあ、頑張ってくれたのだから、幾
らでも思っ存分食べてくれ。

「あと、敵なんだけど、夕方からこの時間帯は壁際に集まって食事
と睡眠をとっているみたい。壁に空いた大穴付近に密集しているよ。
半分以上は集落の外に一度出ているね。集落内部だと落ち着かない
のかな」

自然が少しもない場所だと休息を取り辛いのもかもしれないな。そ
こら辺は習性のようなものだろう。

「外にも出てみたけど、魔物の援軍はまだまだやってきているね。
一気に襲ってきた時の数ほどじゃないけど、遠くの方には大きな個
体が何体か見えたから明日か明後日ぐらいには、王蛙人魔が数体到
着するかもしれない」

その最悪な情報にハンターたちが大きく息を吐く。ざわついたり
しないのは、ここまでが苦難の連続だったので胆が据わっているの
か。

「皆さん、今回の指揮を取らせてもらっことになりました、ミシユ
エルです」

熊会長が現場を担当できないので、一番知名度の高いミシユエル
に白羽の矢が立った。

ちらちらと、手元に隠してある用紙に視線を向けている。

あー、首筋とか汗だくだな。頑張れ、ミシユエル！ コミュ障には辛いとは思うけど、周りの人はそれを知らないから……。それに、実力と知名度を考慮すると、やはり説得力があるのは彼だろう。

「まずはこの場を凌ぎましょう。私も微力ではありますが全力を尽くします。我々の実力であれば問題なく撃退できるでしょう。厄介な敵が現れた場合は、直ぐに声を掛けてください。私が斬り捨てますので」

おお、カツコいいぞ、ミシユエル。自信満々に言い切る、男前モードの彼は本当に魅力的に見えるな。握りしめた拳が微妙に震えてさえいなければ……。

「ってことだ。皆、無理をしないでくれ。怪我したら屋内に素早く撤退するように。治療班が扉の向こうに待機しているからな」

そこからは、カリオスが説明係を交代した。

ミシユエルが人の視線から逃れるように、俺の背後に回り胸を撫で下ろしている。

「お か だ よ」

「ありがとうございますっ、ハッコン師匠」

半泣きじゃないか。責任重大であれだけ注目されたら、ミシユエルには辛すぎるよな。本当に、ご苦労さん。冷たいココアでも飲んで、落ち着いてくれ。

「ハッコン。みんなを守ろうね。これ以上は、絶対に殺させないっ」

強い決意を口にする、ラツミスは意気込み過ぎている。やっぱり、自分の村が襲われたトラウマを簡単には克服できないよな。

今の実力なら少々動きが鈍っても大丈夫だとは思うが……彼女だけじゃなく、他の人たちの生存率を少しでも上げる為に、全力を尽くさせてもらおう。

「らっすいす」

み、が発音できないので、どうしても間抜けな感じになるな。

「なーに、ハッコン」

名前を呼ばれるのが相当嬉しいようで、満面の笑みを向けてくれた。

「あっちおと」

「してあっち」

そう言って、目の前に並べたペットボトルを 念動力 で矢印を作り、ハンター協会前の荒れ地となった場所を指す。

「ん、あそこに落として欲しいの……えっ？ だ、ダメだよ！ 今から敵がいつぱい来るんだよ！」

「しってう」

「かたいから」

「でも、それでも危ないよ。うちは認められませんっ」

ぶいっつと顔を横に向けて、断固拒否の構えか。

こうなったら何を言っても聞いてくれそうにない。となると、ヒュールミに頼むか。隣にいるし。

「おねがい」

隣のヒュールミに向けてそう言うと、しかめ面になった。何故に？

「ハツコンはオレの名前、呼んでくれねえのか？」

ええええっ、もしかして、ちょっと拗ねているのだろうか。そうだよな。仲の良い友達が片方を名前で呼んで、自分が呼ばれなかったら傷つくか。

でもなあ。俺の話せる言葉は「あいうおかくこさしすせにねのたちとまもらりよをんがござだでぼっやゆ」の三十四文字。濁音とかを除けば二十五文字。五十音の半分しか話せないのだ。

その中にヒュールミの「ひ」「も」「る」「も」「み」「もない。どうやって、呼べと。

あー、ヒュールミの口元が少し緩んでいる。俺が話せる言葉を理解した上で、試している顔だな。今、扱える言葉から組み合わせせて満足させるということか。

よっし、乗った。俺も話す練習になるからな。つまり、相手の意表を突けばいいんだろ。

「か あ い い ね」

「へえうっ！ な、なに言っただ、いきなり。そ、そんなあからさまな、お世辞で誤魔化さ、さ、れねえぞ」

と言いつつ、顔を赤く染めて指でミルクティー色の髪をクルクル

巻いている。動揺がわかりやすいな。

ヒュールミは男勝りで強気なので、こういう言葉を掛けられた経験が少ないのだろう。ストレートに褒められると弱いようだ。何の勝負か不明だが、勝ったな。

「ふーん、ハツコンはヒュールミが好みなんだ。ふーん」

あ、今度はラツミスが拗ねた。

言葉が話せるようになると、今まで以上に意思の疎通が楽になると思っていたのだが、そうではなかったようだ。ラツミスをなだめすかしながら、考えの甘さを反省している。

何とか機嫌を直してくれたのだが、ハンター協会前に移動させるのはダメか。

「ラツミス。ハツコンは何か考えがあるみたいだぞ。ここは任せてみないか。結界もあるんだ。やられることはねえって」

上機嫌のヒュールミの説得に、ラツミスの頬が益々膨らんでいく。どうやら、逆効果のようだ。更にへそを曲げている。

ヒュールミはラツミスの肩に手を当てて、俺から離れて行く。その際に、俺を見てウインクをしたのは、今の内に行けということなのだろう。ありがとう、ヒュールミ。助かるよ。

俺に背を向けて話している隙に 風船自動販売機 になり 結界内部をいつものように風船で満たす。そして ダンボール自動販売機 となり浮かんでいく。

そして、結界の側面に穴を開け、そこに 念動力 で風船の一つを持っていき、中のガスを一気に排出することにより、推進力を得て前に進む。

すーっと協会前の荒れ地と化した場所の真上に移動すると、風船

を一つずつ消していき、ゆっくりと地上に舞い降りた。

元の自動販売機に戻り、体内の時計で時間を確認する。0時まであと一時間と少し。今日は結構フォームチェンジをしたが、変身可能時間は一時間以上残っている。

ここからずっと別の機体になっても大丈夫だよな。日をまたげば制限時間は元に戻るから。

よっし、じゃあ 氷自動販売機 になるぞ。それも、あの巨大な方に。

ハンター協会の前に突如現れた巨大な建造物を前に、

「な、なんだあれ！」

「いきなり、どっから湧いて出やがった！」

ハンターたちが騒いでいるが、そっちは一緒に行動していたメンバーに収拾してもらおう。

大量の氷を吐き出し、 結界 でハンター協会の周辺に弾き飛ばしていく。

敵のメインは蛇、蛙、鱷の魔物だ。地球ではそれらは変温動物で、極端な暑さ寒さに弱い。実際、鱷人魔は寒さに弱かった。

そこで、協会の周囲を氷で埋め尽くして、気温を一気に下げようと考えたのだ。普通の氷自動販売機なら製造が間に合わずに、溶けていく一方だろうが、こっちは漁船へ大量に氷を提供する自動販売機だ。素早さを強化した俺が操れば、信じられない量の氷をあっという間に製造できる。

ハンター協会入り口の前に氷の壁が出来上がっていく。器用さを上げたことで 結界 で弾き飛ばす際にも狙いが正確になっている。思った通りに飛ばせるので、何か楽しくなってきた。

これが昼間の強烈な日差しの中なら、そうはもたないだろうが幸

いなことに今は夜だ。上手くやれば、結構長持ちしてくれる……と
いいな。

氷がかなり遠くまで弾き飛ばせるのは、もしかして筋力の影響なのだろうか。だとしたら、意味のないと思っていたステータスは全て無駄ではなかったということか。

この勢いで飛ばせるなら、もっと面白い事が可能じゃないか。そんなことを考えながら、氷の壁制作に夢中になっていると、魔物たちが周辺に現れ始めた。

自動販売機無双

暗闇の中から次々と魔物が現れるが、この巨大な自動販売機を前にして、どうしていいか戸惑っているようだ。

迂回して裏に回ったところで、そこには氷の巨大な壁がそそり立っている。

じゃあ、ハンター協会の裏側に回って、二階屋上まで移動して、そこからテラスを強襲すればいいのではないかと、ずっと思っていたのだが、四階建てに匹敵するこの高さになり、上から見下ろせるようになって理解できた。相手はしたくてもできなかったのだ。

二階屋根部分の側面と裏側には巨大な庇があり、壁を登れたとしてもそれが邪魔でそれ以上は進めなくなっている。何とか屋上に到達したとしても、そこには無数の鋭い棘がズラリと並んでいる。

登ったところで串刺しになる未来が待っているだけ。なかなか、えぐい仕様だ。

つまり、テラスの壁沿いに登るしか手が無い。正面には俺と氷の壁が控えているので、魔物としてはテラス側面からいくしかなく、そんな限定した場所からの進撃なんて防衛側からしてみれば、カモ以外の何ものでもない。

側面に回り込む魔物もいるのだが、大半は突如現れた俺に興味津々なようで、中にハンターでも潜んでいると思っただろうか、武器を構えたままにじり寄ってきている。

頑丈が上がっている今なら、蛙人魔の攻撃なら耐えきる自信はあるが、一つ試してみたいことがあった。

器用が上がっている今なら、氷を精製する際に思っただような形に作り出すことも可能なのかと。

今までなら無理だったが、ステータスの利便性を理解したことに

より、上げられない魔力と頑丈以外のステータスを40まで上げ、色々やれることが増えた。

意識を集中して、氷の形を頭でイメージする。氷を濃縮して集め、先端が鋭く尖った細長いひし形を頭で描く。氷を吐き出す時に、その形を強く願ひ捻り出すっ！

よっし、完成だ。流れ出た鋭利な刃物の様に先端の尖った氷の礫を、前方に密集している魔物の群れに全力で発射した。

遮蔽物となる建物は全て魔物に破壊されているので、氷の礫は全て邪魔されることなく魔物の群れに着弾していく。

ラグビーボールぐらいの大きさの氷の塊が、かなりの速度で着弾している。この威力があれば蛙の皮膚や革鎧を貫くことは可能のようだ。

俺の前方に倒れ伏す蛙人魔の死体が積み上がっていく。暫くは、無駄に戦力を消耗してくれるのかと期待していたのだが、あっさりと蛙人魔が下がっていった。

そして、代わりに鱈人魔が現れた。厄介な方がきたか。鱈の方は皮膚が鱗のようになっていて、その強度は革鎧を軽く上回る。下手したら金属鎧よりも硬く、弾力性もある為、鱈人魔の皮で作られた鎧は、軽く頑丈だとハンター内では人気らしい。

それでも可能性に賭けて氷の礫を放ってみたが、その皮膚を貫けなかった。

だが、ノーダメージではないらしく、怯んでいる。それなら充分だ、このままダメージを蓄積させてやるぞ。

氷の礫をマシンガンの弾のように撃ち出し、鱈人魔を一切寄せ付けない。側面から襲い掛かるうとする敵もいるのだが、氷の礫は念動力で自分の周りに既に配置済みだ。

360度視界を確保できるので、死角もなく俺に不意打ちは不可

能。全部まとめて一掃してくれるっ！

その時の俺は、今までにない攻撃手段を手に入れて若干舞い上がっていた。いや、若干どころか、かなり調子に乗っていた。まあ、そんな俺に冷水を浴びせる一言が降ってきたわけで。

「ハツコン！ お前の能力って金を消費するんだよな！ そんなにじゃんじゃん使って大丈夫なのか！」

この声はヒュールミか。口に当てているメガホンのような物は、お手製の魔道具で拡声器と同じ効果があるらしい。

って、何を心配しているのやら。熊会長から前払いで金貨十枚いただいている、つまりポイントで1万ポイントが増えたって事だ。大量の氷作っただけで、ポイントが激減している訳がないよ。

一応確認の為にポイントを確認してみると、残りポイントは6万になっていた。

激減したと……。え、何でっ！ 熊会長からもらった金貨を投入してから、ポイントを確認した時は10万ぐらい残っていたよな。今までの商品提供と氷の代金としても高すぎるだろ。何で、どうして!?

と驚いている間も敵が迫ってきているので、氷の礫を大量に弾き飛ばして牽制していると、今確認中のポイントが見る見るうちに減っていく。

えっ？ あれ、これって 結界 の維持で毎秒1減るのは、比べ物にならないぐらいの減少速度なのだが。

驚き過ぎて、氷の礫を撃ち出すことを忘れてしまった。その途端、ポイントの減少が少し緩やかになった。

あれ、もしかして 結界 で何かを弾き飛ばすのって、ポイントを消耗するのか!?

最近、数十万ポイントを維持していてポイントの細かいチェック

「あかんって、うちは言わんかった？ 何で言うことを聞いてくれへんの」

方言が出てきているということは、本気で心配させたようだ。ラツミスは俺が単独で勝手なことをして、いなくなるのを非常に恐れている。

俺の身を案じてくれているのは、わかってはいるのだが、事前に説得しようにも意外と頑固なので首を縦に振らないからな。

「ハツコンのことを信じてへんのやないんよ？ でもな、アカン言うていたことをしたらアカンと思うんや」

こういう時に取るべき行動は決まっている。反論せずに黙って反省して見せる、それだけだ。そして、台風が過ぎ去るのを待つ。

「反省している振りをしたら、許してくれると思ってへんよね？」

察しが良いのも良し悪しだよな……。

俺が怒られている間も敵が攻めてきているのだが、ハンター協会周辺の温度が著しく低下したので、魔物の動きが鈍くなってきているようで、ハンターたちが余裕を持って対処している。

ポイントを大量消費してしまったが、その成果はあったようだ。だけど、この方法は明日からは使えない。そのことを後でみんなに伝えておかないと。

「ちゃんと聞いてるん？」

「うん」

後はお説教が早く終わるのを願うのみだ。

この程度の攻勢なら主戦力は無用だと、俺たちは屋内で休むこととなった。

女性陣は二階の部屋を提供され、他の面子は一階のホールや二階の廊下など、好きな場所で雑魚寝することとなった。俺は一階ホールに置かれ、いつでも飲食料品を提供できるようにしておく。

そんな俺から商品を購入する人々が、氷の壁が近くにある影響で協会内が涼しくて、久しぶりに寝苦しい夜を過ごさなくて済むと喜んでくれた。

睡眠が取れないと疲れが取れないからな。今日はぐっすり眠って欲しい。

今夜は安心だと思うが、問題は明日からか。敵が深夜の攻撃前に壁の大穴から外に出ているというのが攻略のポイントだとは思うが……攻めるには敵の数が膨大過ぎる。そして、こちらの人員が足りない。

生き残りは百人前後、戦力となるハンターは四十人程度。テラスで防衛に当たる人数は十五から二十。敵に攻め入る余裕は無いよな、どう足掻いても。

方法としては一騎当千の強者を、少人数で送り込むぐらいしか思いつかばない。無謀かもしれないが、不可能を可能にしそうな面子が揃っているという現状。

あの穴を塞ぎさえすれば、かなり楽になるよな。方法としては、瓦礫や廃材で埋めるか、巨大な大岩か何かで蓋をすれば終わりとなる。

とまあ、色々考えてはみたが実行に移すにしても明日になってからだ。全員に疲労が残っている今、無理に行動を起こしても失敗す

るだけだ。

俺に出来ることは、皆が少しでも安らかに眠れるように
で花の香りでも流しておこうか。 芳香器

お金の力

「作戦会議を始める」

次の日の朝、一階にハンターたちや住民が集まり、今後の方針を決める重要な会議が始まった。

「やべえな。この冷たいのマジでうめえ」

「だよ、ヒュールミ。うちもこんなに冷たくて美味しいの初めて食べた。あ、一口交換しようよ」

「おう、いいぜ。ラツミスのも美味そうだよな」

ヒュールミとラツミスがお互いの手にするアイスを食べ比べしている。ちなみに、ヒュールミがラムレーズンで、ラツミスがチョコバナナ味だ。

他のハンターたちも全員、床に胡坐をかいて、アイスを手にながら参加している。生き残っている住民も気になるらしく、階段や二階の廊下に並び見下ろしている。ちゃんと彼らにもアイスは渡している。

もちろん、それを提供したのは俺だ。

朝日が昇ると一気に室内の気温が上昇してきたので、一応氷を配置したのだが夜と違い一時間持たずに溶けてしまった。なので、もう一度氷を配置してから、全員にアイスを配って今に至る。

好評のようだなによりだ。

「まずは、昨晚まで情報収集をしてくれていた大食い団リーダー、

ミケネ。色々教えてもらえるか」

「もう一個、この冷たいの欲しいなあ……え、ボク？ あ、はい。ええと、集落内を走り回って集めた情報を話すね」

食べ終えて、アイスの棒をじつと名残惜しそうに見つめながら、ミケネが立ち上がった。

後で全員にもう一本ずつ配ろう。

「敵の地上部隊は蛙人魔が殆どで、次の多いのが鱈人魔、その次が双蛇魔かな。ボクたちが見たのは、それぐらいだね」

「ふむ、清流の湖階層に生息している魔物だけか。他の階層の魔物はいないようだが、まずは一安心か」

「うん、そうだね。飛んでいるのも、飛魚魔と竜擬魔ぐらいだし」

確か、飛魚魔というのはトンボの羽が四枚背中から生えた鮎みたいな魔物だよな。

で、竜擬魔つてのが、全長一メートルぐらいのトカゲの背中から鳥の羽が生えた奴だ。名前通り、竜になろうとして失敗した感があるトカゲだ。

この階層は爬虫類と両生類と魚類の魔物しかないらしい。

「おおよその数はわかるか？」

「ええとね、地上部隊が全部で五千ぐらいかなあ。飛行部隊は数百だと思っよ」

数を比べると絶望的なのだが、こちらの人材は優秀で相手の魔物

はさほど強くない。この程度の物量なら力で覆させることが可能な気がしてくる。

「その程度なら……」

「あ、でも、会長。集落の外から次々と魔物がやってきているよ。王蛙人魔らしいのも数体見かけたし」

そうなのだ。現存する敵を倒すだけなら、このまま籠城を続けるだけで何とかなるかもしれないが、相手の援軍が今のところ尽きる心配が無いそうだ。

俺たちはまだ二日目だが、既に一週間近く戦い続けているハンターたちは、敵を幾ら倒してもキリがないとぼやいていた。

やはり、壁の穴をどうにかして塞がなければ幾らでも敵が入り込んでくる。

「しかし、あの壁の大穴は一体、どのようにして空いたのだ」

あ、それは俺も知りたかった。門が破壊されたのならまだ理解できるが、あの壁の大穴は誰が開けたのか。

「会長、それについては、こちらのハンターが詳しい事情を知っています」

ハンター協会職員がすつと立ち上がり、手で示す方向には一人の若いハンターがいた。

頭に手を当てる俯き気味で立ち上がると、ぺこぺこ頭を下げている。

「ええとですね、俺の元仲間が言っていたのですが、どうやら壁の

補修を担当していた、一部の職人とハンターが手抜き工事をしてきたようで、あそこは外観を取り繕っています。中はかすかすで……ちよつとした衝撃でああなつたみたいです」

その手抜き工事に彼が関わっていたのかどうかは不明だが、今はそこを追及しても意味がないだろう。今は少しでも戦力が欲しいところだからな。

「壁を修復することばかりを考え、検査が甘かったか……」

「会長は悪くありません。我々、職員の管理不行届きが原因です。申し訳ありません」

手抜きさえなければ、現状はここまで酷くなっていなかったかもしれない。もつと多くの人を助けられた可能性もあっただろう。それを理解した住民の何人かの殺気立った視線が熊会長から逸らされる。一概に熊会長が悪い訳ではない事を頭では理解できたが、まだ認めることができないようだ。

「過ぎてしまったことの責任は後に回すでしょう。まずは現状の打破が最優先事項だ。あの大穴をどうにかして塞ぎたいのだが、誰か案はあるか？」

熊会長が意見を求めると、ヒュールミが手を挙げた。

「ヒュールミ、何かあるのか」

「いや、案と言うか、大穴の周辺には瓦礫が山ほどあるだろ、それを使うか……あと、土を操れる人材はどれだけいるんだ」

「ふむ、そうだな。確か、キミとキミとキミだったか、土系の魔法を扱えるのは」

熊会長は土魔法を扱えるハンターを覚えていたようで、指という爪を指していく。

十代らしき青年が一人に、もう二人は二十代後半から三十代前半といったところか。

「それと、シメライか」

「土魔法か、得意ではないがそれなりには扱えるのう」

お爺さんは万能だな。この人の得意ではないは、普通の魔法使いの得意を遥かに凌駕していそうなのが怖い。

「それだけの土魔法と瓦礫を組み合わせたら、一時的な補修ぐらい何とかならねえか？」

穴の大きさは高さ十メートルぐらいだろうか、幅も同じぐらいだと思う。これって巨大自動販売機に変化したら穴に蓋をできそうだが、問題はポイントの消費量だよな。

「あの穴って、ハツコンが昨日化けたデカイ奴になれば、防げないか？」

ハンターの一人が同じことを考えついてようで、全員の視線が俺に集中する。

「またのぐりようをおまちしています」

取り敢えず惚けてみた。

「いや、考えは悪くねえんだが。ハツコンは姿を変えたり商品を出したりする時に、金を大量に消費するらしくてな。たぶん、あのバカでかいのに化けるのには、かなりの金額を必要とするんじゃないかね？」

ナイスフォローだ。いつも助かるよヒュールミ。

「うんおかね」

「たりません」

「すこししか」

「あかん」

駄目も無理も言えないもどかしさ。最後があれだけど、ラツミスの方が通用するのだから大丈夫だろう。

「少しでもあれば化けるのも可能だが、長時間の維持は苦しいのか。時間を稼いでもらえれば、こちらも壁の修復に取り掛かれる。そうになると、金か……ハンター協会の蓄えは、あとどれくらいだったか」

熊会長に問われ、職員の一人在「少々お待ちください」と言い慌てて二階へ駆け上っていった。確か奥の部屋に貴重な資料やアイテムが入っている倉庫があった筈だ。

暫くして戻ってきた職員の手には書類が抱えられていた。

「会長」

熊会長に耳に口を寄せて、何やら囁いている。まあ、ハンター協会の貯蓄額を教えるわけにはいかないよな。

「たったそれだけか」

「復興作業で大量に消費しましたので」

そうだよな。集落をぐるっと取り囲む壁を建てるだけでも、膨大な費用を必要とする。それに加え職人やハンターの人件費。金はいくらあっても足りない筈だ。

「ハツコン、金貨六十枚でどれぐらい維持できるか教えてくれないか」

六十枚!? ってことは日本円で約600万円。ポイントに換算すると100円で1ポイントだから6万ポイントか。こつやってみると、階層主を倒した時のポイントって、とんでもないことが実感できるな。

かなりの大金であるのは確かなのだが、それでも昨晚の消費したポイントと同じか。結果 を張らなければ長持ちするかもしれないが、ちよつと怖いところだよな。

昨日と同じぐらいは維持できると伝えたいのだが「きのう」「も」「さくばん」も言葉が足りない。「き」が使えないのが何より辛い。結構頻繁に使う言葉なのだが。

今話せる言葉だけで何とか伝えないと。「おなじ」「は」「な」「じ」が足りない。うーん。

「たりんかも」

言葉遣いが悪いのは勘弁してもらおう。正直、ポイントにはもう少し余裕が欲しい。作戦途中で維持できなくなったら、元も子もないからな。

「これ以上となると、高価な武具や魔道具、貴重な素材はあるが、この状況では売買は不可能だ」

物品はポイントに換算できない。コインの形をしていたら何とかなるかもしれないが、武器や鎧はどうしようもない。

「では、私が貸し付けましょう。担保は武器防具で結構です」

ここで名乗り出てくれたのは、スーツ姿の似合う両替商のアコウイだった。

「貸していただけなのか」

「もちろんです。お金は使われてこそです。これは慈善事業ではありません。ハンター協会とのパイプ確保と、我が社の宣伝になりますので」

何処までが本音かはわからないが、彼女の後ろで巨体を縮ませてゴツガイが申し訳なさそうに、頭を何度も下げている。

「感謝する。如何ほど貸していただけのだろうか」

「金貨五十枚はご利用立てできます。もっとも、こちらの倉庫に入っているのですが」

そういや、ハンター協会の地下には個人用の金庫があつて、銀行代わりに大金を預けていると聞いたことがある。証明用の個人カードがなければ、職員であっても開けられない仕組みとかどうか。

「本当に助かる。金貨五十枚相当の武具なら倉庫に幾つかある。後で職員に案内させよう」

「楽しみにしていますわ」

更に五十枚追加か。これで、もう少し耐えられる時間が増えた。贅沢を言えばもう少しポイントを稼ぎたいが。

「仕方ありませんわね。我が商会からも金貨百枚ほどお貸ししますわ」

そう申し出てくれたのは金髪ツインテお嬢様、スオリだった。すっかり忘れていたが、かなり大きな商会のお嬢様だったな。

「お、お嬢様、勝手にそんなことをされては」

「黙りなさい。お父様と連絡が取れない状況なのですよ。責任は全てわらわが負います。我々がここで死に絶えては、お金は何の意味も持ちませんことよ」

止めに入った黒服たちを一喝すると、胸を張って断言した。ただのツンデレ我儘お嬢様と見くびっていたことを謝らないといけないな。

「ただし、我が商会はここに預けずに、屋敷の地下の金庫に置いてありますの。そして、それを開ける権限があるのは、一族の者だけです。つまり、この場では、わらわだけとなります」

「つまり、屋敷まで、お前さんを連れて行って金庫から回収しろって事か」

「左様で。エスコートお願いしますわ」

ヒュールミの問いに、スカートの端を掴み優雅に頭を下げ肯定する。

次のミッションは決定したようだ。

護衛と探索

今日は日差しがかなりきつい。ハンター協会の室内の不快指数が上がり続けていたのだが、テラスの扉を開けて風魔法により、風を循環させて何とか耐えている。

テラスの扉を開けっ放しにするのは危険なのだが、どうやら暑すぎて魔物側も活力を失っているようで、勢いが無いようだ。

特に蛙人魔は乾燥に弱いようで、集落にある井戸付近で水を被っているだけで、動こうとしない個体をちらほら見かける。

そんな中、選出されたスオリ護衛の少数精鋭部隊がテラスに立っている。

まずは、索敵能力に優れた大食い団からミケネとショート。彼らは嗅覚、聴覚が人間よりも鋭敏で足も速い。そして、集落内部を一度探索済み。今回の作戦に欠かせない人材だ。

そして、ミシュエルも参加することになった。彼が選ばれたのは単純に戦闘力の高さ。熊会長も立候補したのだが、身体が大き過ぎて目立つとの指摘により却下された。

ここまでは、意外性のない妥当な人事なのだが、自ら立候補して参加することになった追加人員がいる。それが シャーリイだった。当人曰く、

「集落内の道は全て把握しておりますわ。裏道も人通りの少ない場所も」

との事だったので、戦力としても問題がなかったので同行してもらうこととなった。

残りは、ラツミスと俺だ。俺も大概目立つと思うのだが、集落内

でトラブルが発生して戻れなくなった場合、俺がいると食料の心配がないからという理由らしい。

あと、ラツミスの怪力があれば屋敷が瓦礫と化していた時、撤去作業に向いているからだそうだ。そこは納得できた。

選ばれた人材はこれだけだが、もちろん、スオリも参加する。それと、彼女の護衛役である黒服から一名付いてくることになった。

黒のスーツにサングラスを掛けた若い男で、これといって特徴が無い。中肉中背、普通の服装をして歩いていたら気づかないぐらいの、何処にでもいそうなタイプだ。

「皆さん、主共々よろしくお願いします」

「うむ、わらわの護衛頼むぞ」

いつものように威張り気味のスオリだが、その服装はいつものひらひらした高価なドレスではなく、動きやすさを重視したポケットの多いズボンと、茶色い半袖のシャツを着ている。

総勢、七名と一台という構成で屋敷を目指す。

「ふむ、揃ったようじゃな。では、派手に行くぞ！」

当初の予定通り、お爺さんが風の大魔法を発動させて協会が巨大な竜巻で覆われる。瓦礫や砂埃が舞う中、一か所だけ空いた風の隙間を抜けて俺たちは駆けて行く。

暴風の中を進み、まだ辛うじて原形を保っている民家の中に滑り込む。幸運なことに敵には見つからずに済んだようだ。

「ちよつと、周りを見てくるよ。行こう、ショート」

「ああ、わかった」

大食い団の二人は身体も小さく、肉球が足音を消してくれるので、偵察は一任することに決めてある。

潜んでいる場所は平屋の民家で、壁に大穴が空き内部も好き放題荒らされている。

ミシユエルは窓際に張り付き、外の様子を窺っている。その目つきは鋭く、自然にイケメンモードへ移行しているようだ。

「こちらは鱈人魔が多いようですが、熱さでバテ気味のようです。動きが緩慢で、あれなら気づかれずに進むことも可能かもしれませぬね」

暑さにやられているとなると、日陰がある路地や建物の物陰に居そうだな。移動する際に気を付けないといけないか。

「ただいまー。こつちの方向は敵が少なかつたよ。何体かはこつそり倒して欲しいけど」

戻ってきたミケネの報告に、全員が黙って頷く。

ミケネを先頭に一列となつて廃墟と化した民家の間を進んでいく。こつちは壁に空いた大穴と逆方向なので、比較的建造物が形を保っている。といつても、住めそうな家は皆無だが。

「止まって。この先の十字路の右で、蛙人魔が一体、民家の壁際で涼んでいるよ」

大人が二人並んで歩くことも困難な道幅の路地にいるのだが、視線を遠くへ向けると確かに十字路がある。

「近くに他の魔物は？」

「いないと思うよ、ねえ、ショート」

「ああ、音も臭いもしないな。少なくとも近くにはいない」

ラツミスの問いかけに自信を持ってショートが答えている。

「気配も一つしか感じません」

ミシユエルは気配が読めるのだったか。となると、そいつを処分したら暫くは安全が確保できる。

「では、僭越ながら私が一撃で仕留めてきます」

「待つていただけですか。力量は充分だと承知していますが、音を立てずに始末をするなら、私に任せてくださいな」

踏み出そうとしたミシユエルに替わり、シャーリイが進み出た。ただ歩いているだけなのだが、何と言うか存在が希薄だ。確かにそこにいるというのに、映像を見ているだけの様な違和感がある。

「お見事ですね……完全に気配が消えていますよ」

ミシユエルの感嘆する声に大食い団も頷いている。

「うん、匂いはするけど、音も立ててないよ」

「闇に潜まれたら、誰にも気づかれないんじゃないか」

絶賛だな。よく見ると、あの歩法も独特だ。肩の位置が一定で上

下にぶれることがないので、すーっと地面を滑っているかのような錯覚に陥る。

彼女もまた只者ではないってことか。

交差点の壁に張り付くと、腰に携帯していた鞭を取り外し、腕だけを伸ばし一回振るう。そして、無造作に右の通路から見える位置に飛び出すと、左手を横に薙ぐ。それだけだった。

こちらに振り返ると、艶やかな仕草で俺たちを手招きしている。

誰もが疑うことなく彼女の元に駆け寄ると、路地の先に蛙人魔が転がっていた。首には鞭が巻き付き外そうともがいた跡があった。その額には鉄串が深々と突き刺さっている。

相手に悲鳴の一つも上げさせずに、瞬時に葬ったのか。これから、シャーリーの見る目が変わりそうだ。

それから、何度か敵を発見してはシャーリーが手際よく処理していく。数体いる時は、ミシュエルや大食い団と協力して、何とか今のところ見つからずに済んでいる。

こういった戦いにはラツミスは全く向いていないので、今のところ出番はない。

「今、地図だとここら辺だけど、屋敷って何処？」

「そうですね、ここから更に北東に進んだところですよ」

ミケネが取り出した地図を覗き込み、スオリが現在地から自宅までを指でなぞっている。

まだ距離はあるようだが、この調子なら意外と早く着きそうだ。

「ここを真っ直ぐ行くと近道だけど、敵が密集しているよ。広場になっついていて噴水があるから」

ここぞとばかりに水浴びしていそうだな。

敵を倒すだけなら、このメンバーならやれるだろうが、増援を呼ばれることだけは避けたい。迂回していくしかないか。

「では、こちらの道を進んだ方がいいですわ」

シャーリイが別のルートを提案して、誰からも反論が無かったので、その道を進むことに決定した。

集落内に魔物が存在しているとはいえ、偵察がいるわけでもなく、結構自由気ままに行動している個体がいる。そういえば、この魔物たちを統率している存在はいるのだろうか。

いない……ということはないだろう。ハンター協会を執拗に狙っているのは指示があつてのことだろうし、そもそも、統率する存在がいなければ、魔物たち同士で争いを始め、殺し合いが始まる筈だ。蛙人魔、双蛇魔、鰐人魔は仲が悪く、天敵であるというのが周知の事実だ。それが、いがみ合うこともなく、共存している。

壁の穴を塞ぐよりも、リーダー格を見つけて倒した方が確実かもしれない。帰ったら提案してみよう。

「この辺は見覚えがありますわ」

スオリが辺りを見回して、少し寂しそうに呟く。

いつもの見慣れた光景だというのに、人影もなく廃れていることに思うところがあるのだろう。

この一帯は高級住宅地のようで、どれもこれも金持ちが住んでいるような立派な屋敷ばかりだ。こういった屋敷に住んでいる人は護衛を雇っていることが当たり前で、抵抗した跡が見受けられる。

血の跡や壊れた武器、破壊された門扉。死体が転がっていないのは魔物に食われたのか。

以前の優雅な暮らしが無残に踏み荒らされた、栄華の跡を目にし

強い想い

「取り乱して、申し訳ありませんでした。もう、大丈夫ですわ」

感情をむき出しにして泣いたことにより落ち着けたようで、スオリは涙をぬぐい、強い意志が漲る瞳を俺たちに向けている。

「金庫は地下にあります。ついてきてくださいませ」

しっかりとした足取りで、破壊された門扉の横を通り過ぎ、敷地内へ足を踏み入れる。

庭には打ち砕かれた像がそこら中に転がっていて、魔物たちの暴れっぷりが容易に想像できる。

一階の窓は全て破壊され、そこから見える室内も同様に荒らされた跡があった。

扉の存在しない入り口を潜ると、玄関から先には魔物の足跡がそこら中にある。ただ、抵抗したような跡がないので、スオリたちは躊躇いもせずに素早くハンター協会へと逃げ込んだようだ。

「まあ、想定内ですわ。一見、豪華そうに見える装飾品も実はたいした値段ではありませんので。ここに住む者として、当然の処置ですわ」

さっきまで泣きじゃくっていた当人とは思えない強気の態度に、他のメンバーが思わず口元に笑みを浮かべている。

それは馬鹿にしているわけではなく、優しさを感じる微笑みだった。

「お嬢様。時間に余裕がありません」

「わかっていますわ。皆様、ついてきてくださいな」

スオリを先頭に全員が列をなして屋敷に入っていく。吹き抜けのホールがあり二階に繋がっている階段が見える。だが、それを無視して奥へと繋がる、蝶番が外れかけている扉を開けて、更に進む。通路の突き当たりには左右に扉があるのだが、その両方を開くとなく、その場にしゃがみこんだ。

「地下への隠し通路はここですわ」

床と壁の境目にすつと指を滑らせると、床の一部がうつすらと光り、勝手に床が開くと地下へと通じる階段が現れた。

「こういうのも魔道具の一種なのだろうか。」

「こちらへ」

急勾配の階段はらせん状になっていて、壁際には魔道具らしき灯りが等間隔で設置されている。

「かなり涼しいですね」

「地下は夏場でも快適ですので、食料品の保存場所としても最適ですのよ」

ミシユエルの驚く声に、スオリが自慢げに応えている。隠された地下室か。ホラーゲームで良く見かける設定だが、実際に体験すると軽く感動するな。

三分近く潜ると階段が終わり、そこは円形の空間になっていた。

扉が壁沿いに四か所あるのだが、スオリは迷わず一つの扉の前に進み出た。

その扉は銀色の装飾過多で、よくわからない幾何学模様が彫り込まれていて、こんな地下室の扉に宝石を埋め込む意味があるのかと思っただら負けなのだろうか。

ノブもない扉でどうするのかと見守っていると、扉のど真ん中にある赤い宝石らしき物体に触れると、扉が横にスライドした。

中は真っ暗で何も見えない。スオリが一步足を踏み入れると、室内に明かりが灯ったのだが、殺風景な部屋だな。

壁も床も天井も灰色で、扉の正面には巨大な円形の扉がある。如何にも銀行地下にありそうな大金庫だ。

その扉にもノブがなく、扉脇の四角い突起物にスオリが手を置くと、円形の扉がゆっくりと開いていく。

「おおおおっ」

「おお おお おっ」

目の前に広がる圧倒的な光景に思わず声が漏れた。

壁際にずらりと並べられた装飾品。色とりどりの宝石が惜しみもなく使われているネックレスや指輪があるのだが、これって売ればどれぐらいの値段なのだろうか。

金貨や銀貨が満載された箱が無造作に床に置かれているぞ。それどころか金の延べ棒までピラミッドのように積み重ねられている。

あー、想像を軽く超える金持ちっぷりだな。そりゃ、皆の目の色が変わるのも納得だよ。こんなものを見たら誰だって驚く。

「うわあー！ こんなに貯め込んでいたんだっ。すっごい」

口元に手を当ててスオリが驚いている。いや、何で当人がびつくりしているんだ。

「私も初めて入りましたが、お嬢様も初めてでしたか」

黒服が感嘆しながら話してくれた内容で全てが理解できた。

ここに入る権限はあるが、今まで一度たりとも足を踏み入れたことがなかったのか。

「金の延べ棒は入れられませんかよね？」

「うん」

「では、金貨を全てお貸ししますわ。ここで入れますわよ」

「ありがとうございます おり」

スオリは俺の話せる言葉で名前を呼べるから、ありがたいな。

「あらあら、どういたしまして。ハツコンはわらわの名前は、キチンと呼べますのね」

自慢げに胸を反らして、みんなを見るのはやめなさい。見る見るうちに不機嫌になっていくから。

「ふ、ふんっ、うちの名前もハツコンは呼べるもんね」

ラッミス、対抗意識むき出しにしないでいいから。

「うん」

「呼んで、呼んで」

「らっ いす」

「ほーらね。ちゃんと呼んでくれたもん」

不完全で申し訳ない。「み」が言えたら完璧なのだが。

あ、ヒュールミが半眼で睨んでいる気がするが、そっちは見ないでおこう。

「ふっ、わらわのようにハッキリとは言えていませんわね」

「そ、それは、愛称みたいな感じだし」

何で張り合っているんだ二人とも……：そっいや、二人はあまり仲が良くなかったな。確か、スオリが俺を手に入れようとして、商談を持ちかけたのだけど、ラツミスが断ったのが原因だったか。

「お嬢様、時間がありません。お戯れは協会に戻ってから」

「わかっていますわ。皆様、金貨を集めて入れるのを手伝ってもらえませんか」

大食い団が金貨の詰まった箱を運んでくると、黒服が丁寧に金貨を投入してくれている。

あつと、金貨百枚入れてもらえるのだったな。じゃあ、スオリはオレンジジュースが好きだったから、粒入りミカンジュースを金貨百枚の値段設定にしておこう。

最終的には金貨百十枚入れてくれたので、ポイントが十一万も増

えた。これで今後がかなり楽になる。

「これはあくまでも貸しですので、事が治まり次第、きちんとハンター協会に請求させていただきますわ」

これって照れ隠しなのだろうな。腕を組んで怒ったように顔を逸らして言い放っている。

人は逆境で真価を問われるというけど、スオリは将来魅力的な女性になりそうだ。

「では、撤退するとしましよう」

「宝の山を前にハンターとして撤退していいのかな」

「人の物だからな……仕方ない」

じつと、倉庫の中を見つめたまま微動だにしない大食い団二人の襟首を、ミシユエルが掴んで引つ張っていく。

気持ちはわかるが、犯罪だからな。

地下室から出て、屋敷を後にしたのだが最後に名残惜しくなったのか、振り返り見つめていたスオリの後姿が印象的だった。

帰路は問題なく、敵との遭遇はあったが援軍を呼ばれることなく始末をしていき、夕方になる前にハンター協会の近くまで辿り着く。

付近に潜んだまま協会へ戻らないのは、敵がハンター協会に集中している隙に、周りの敵を排除しているからだ。どうせ、夕方になって敵が引くまで戻れないので、今の内に少しでも減らしておこうという判断になった。

防衛戦では魔法やバリスタの矢、投擲武器が降り注ぎ、怒号や悲鳴も飛び交っているので、少々音を立てたぐらいでは魔物に気づか

れることもない。

なので、結構、周りを気にせず立ち回れるので、不意打ちも効率よく行えている。俺も攻撃手段があるにはあるのだが、 高压洗浄機 や特殊な形に変化しないといけないので、ノーマル自動販売機状態で戦える方法を模索中だ。

今もラツミスが鰐人魔と戦闘中なのだが、一対一なら何の問題もなくねじ伏せられるので、ちよっかいは出さない事になっている。余計な手出しをすると邪魔になる恐れがあるから。

ただし、他の敵も手を出してきた場合、そこは俺の出番となる。

相手の槍を手袋の鉄で補強している部分で受け流し、体勢が崩れたところに裏拳が喉元に炸裂した。その一撃で相手の喉が陥没して口から血の混じった唾液が零れ落ちた。

鰐人魔の強固な皮膚でも、ラツミスの怪力を防ぎ切ることは不可能か。

崩れ落ちる鰐人魔の背後から、新たな敵が飛び出してきたので、息つく暇もなく戦闘が継続されている。

前方に意識を集中している、ラツミスの背後から忍び寄る敵が一体いるな。蛙人魔か。これなら俺でもやれそうだ。

商品の一つを昔懐かしい瓶ジュースに変更して、ラツミスに気づかれないようにそつと取り出し口に落として 念動力 で操作する。瓶ジュースの瓶はかなりの強度で底が分厚い。鈍器として充分使えるぐらいに。

なので、筋力で威力の増した弾き飛ばす力で発射した瓶ジュースが、顔面に命中すると、両手で顔を押さえ悶絶するレベルで痛い。目の前に倒れてもがいている蛙人魔を瓶ジュースで殴打しておく。これで倒すことは無理だろうが、相手の戦意を挫き、僅かながらもダメージを与えることは可能だろう。

「あつ、背後にいたんだね。ありがとう、ハッコン」

そう、ラツミスが他の敵を処理する時間が稼げればいいのだ。

足を掲げ、そのまま勢いよく振り下ろすと、いとも簡単に蛙人魔の頭が潰れた。正直、グロテスクだが命を懸けた殺し合いの最中なのだから、気持ち悪がるのも失礼な話か。

最近、戦うことが当たり前になってきているので、たまに自動販売機であることを忘れそうになる。もう少し、自動販売機らしく振舞った方が良さのだろうか。

そんなことを思いながら、俺は目の前の敵に瓶ジュースを投げつけていた。

帰還

かなり敵の数を減らし、夕方になって一旦敵が退いたので、その隙に縄梯子を降ろしてもらい、二階のテラスから帰還した。

防衛組に怪我人は出たようだが、お婆さんの治癒があるので問題なく回復したようだ。

歓迎ムードで迎え入れられたのだが、その理由は直ぐに判明した。押さないで、押さないで！　アイスと氷配るから、並んで、並んで！

暑さにやられた住民たちが俺に群がってきて捌くのも一苦勞な状態になっている。暑さは日を追うごとに酷くなっていき、住民たちの限界も近いように思える。

魔物は暑さに弱いようだが、持久戦はこちらにとっても不利。出来るだけ早く、この状況を改善しないと。その為にも近いうちに、門に空いた穴を何とか塞がないとならない。

飲食料品の心配がいらぬとはいえ、外に出ることができずに閉じ込められているという、圧迫感から生じるストレスは馬鹿にできない。子供たちにはお菓子や風船を渡したりはしているが、それでも、その場凌ぎが良いところだ。

そして、そんなことは俺に言われるまでもなく、熊会長たちも重々承知している。

「皆、よく集まってくれた。今から壁修復作戦の会議を始める。まずは、ハッコン。これまでの金額であるの巨大な姿にはなれるだろうか？」

敵が攻めてこない時間帯にハンターたちがホールに集まり、熊会

長の説明に耳を傾けている。今日も全員アイスを手にして参加だ。ある程度の時間は維持できるが、それを上手く説明するにはどう答えたらいいか。限りある言葉を組み合わせ、意味が通じるように並び替えないと。

「すこしのあ」

「いだかのう」

「何時間ぐらいならもつのだ」

余計なことをしなければ、一時間なら耐えられるかもしれない。だが、一時間の「ち」も「じ」も話せない。一つだと「ひ」と「つ」が足りないのか。

口頭で伝えられないのでペットボトルの飲料を一つ落とし。念動力で目の前に置いた。

「一つ……つまり一時間ぐらいなら大丈夫だということか？」

「あたり」

たぶん 結界 を調整すれば大丈夫だとは思う。ただ、確実性が無いので何かしらの対策を考えておいた方が良さそうだが。

「ハツコンを運ぶ方法としては、ラツミスに頼むのが妥当だとは思うが、ハツコンに空を飛んで行ってもらおうという手もある。ハツコンやれそうか？」

空からとなると、飛魚魔と竜擬魔が邪魔になる。夜に実行するのであれば、全身を黒に染めて上から強襲できそうだが。

「くらかった」

「らね」

「時間帯か、敵を強襲するのは奴らが一旦引く夕方を考えているが、異論や考えがある者がいれば、遠慮なく意見してくれ」

「会長いいか？」

全員が顔を見合わせて相談する中、ヒュールミが頭を掻きながら立ち上がった。

「夜襲には賛成だが、そうなるよここの守りが薄くならねえか」

「その通りだ。だが、敵陣に突っ込むことにより敵は混乱する筈だ。こちらへの攻撃は手薄になる。守りは最小限で構わないと考えている」

「戦える奴らは五十人程度。守りに十人残したとして、四十人で攻めるってことか」

数千の敵に対して四十。普通なら無謀極まりない戦いだ、やるしかないのだ。

「会長一つ策があるが……」

策を思いついたにしては、ヒュールミの表情が暗すぎる。胸を張ってお勧めできる策ではないということか。

「聞かせてくれないか」

「成功率を上げるには、夕方に敵が引いてから闇に乗じて、実行部隊のメンバーが屋外に出る。そして、敵がハンター協会を強襲するまで、敵に見つからないように穴付近まで移動する。ここまでは問題ない筈だ」

これは誰もが考えつきそうな手段なので、反論は出ない。

「でだ、そこからなんだが、ハンター協会に魔物が総攻撃を開始後、戦力を割くまで我慢して、目的地の敵が減ったところで穴を塞ぐ…これが一番単純で効率的な手段だと思う」

それが、どういう意味を持つのか瞬時に理解したハンターたちが息を呑む。

確かに、現在の状況ならこの方法が一番確実だろう。だが、それはつまり

「防衛側がかなりの危険に晒されるといえることか」

「ああ。それも、成功率を上げたいのであれば、必死の抵抗を見せて相手の注目を集めないといけねえ」

この作戦を実行するとすると、実行側も防衛側も命を懸ける必要があるだろう。どっちも危険度は大差ないかもしれないな。

「そうになると、人手が足りぬな…いや、それでも、やらねばならぬのか」

そもそもが無謀な作戦なのだ。成功率を少しでも上げたいのであれば、ヒュールミの策を起用すべきだとは思うが、熊会長としては

苦悩して当然だよな。

そうなると、防衛側の人員をどうするか。実行部隊は精鋭を送り込むべきだが、カリオスとゴルスの門番ズは、ハンター協会の防衛を頼みたい。と、みんな思うだろう。

守りに関しては、あの二人はプロフェッショナルだ。二人がいてくれるかどうかで安心感がガラツと変わる。

となると、実行部隊は老夫婦、熊会長、ミシユエル、シャーリイ、大食い団。そして俺とラツミスとなるのか。あと土魔法が使える三名のハンター。これで何とかしなければならぬ。

数千の敵を相手にこれで何とかするのか。ん、んー、無謀を通り越して自殺行為だ。だが、人々の限界がくる前に何とかしなければ……堂々巡りだな。

籠城戦は援軍が期待できれば効果はあるが、どの階層もこちらと似たような状況、もしくはもっと悪化している可能性がある。

やるしかないのか……。

決行日は明日ということに決まったのだが、まずは、今日の夜を乗り越えなければ話にならない。

現在、敵の猛攻を何とか凌いでいる状況で、守りの要となっている門番ズの立ち回りと的確な指示で何とか防衛中だ。

明日の予行練習も兼ねているので、主戦力は全員屋内で控えている。

俺は扉の脇に居座り、飲食料を提供しながら瓶ジュースを投げるを繰り返していた。

「たはあーっ。どんだけ敵がいるんだ。昨日より増えてねえか」

水分補給に来たカリオスにスポーツドリンクを渡しておく。

「おっ、ありがとうよ。んでよ、ずっと聞こうかどうか迷っていたんだが……さつきから、ずっと伸びたり縮んだり、姿を変えたり何やってんだ」

眉根を寄せて、じっと俺を見ている。あっ、気になっていたのか。

「ざ　　ま　　か　　い」

「いや、邪魔って程じゃねえが。気になってな」

新しい機能を一つ取得したから、その実験を繰り返しているだけなんだが、それを伝えるのが難しいな。

「あ　　し　　た　　の」

「よ　　こ　　う」

「何か考えがあるのか。じゃあ、とやかく言うことじゃねえな。何をしたいのかはわかんねえけど、頑張ってくれ」

「お　　う」

男らしく返事を返すと、少し驚いた顔をした後、嬉しそうに破顔した。

今の内にコツを掴めば、明日役に立つかもしれない。今度は　　ダンボール自動販売機　　になってもその機能が使えるか試さないとな。

どうにか昨晩の猛攻を防ぎ切り、決行日を迎えることができた。

敵の勢いが弱まった朝からは、スオリの護衛である黒服が担当してくれている。彼らは全員、護衛術には長けていて、対人戦は得意らしいが魔物の相手を少し苦手としているそうだ。

今回は防衛側に残って、スオリを含めた住人の護衛に当たってくれる。

時間が迫り、実行メンバーがテラスに上がってきた。ラツミスがいつもの背負子に俺を乗せると、全員がテラスの縁に並んだ。

夕暮れに染まる集落には敵の姿がまばらで、殆どが壁際まで撤退したようだ。

「この戦いは生死を分ける一戦となるだろう。特にハツコンの役割は重要だ。よろしく頼む」

「まかせて」

こういう時は、自信満々に言い切ることにしている。実際は不安でも、仲間にそれを悟らせずに振舞うことで、少しでも成功率を上げたい。

「万が一、我々が戻らなかった場合は、ここに籠城してくれ。飲食料は昨晩、ハツコンから大量に提供してもらっているので、一ヶ月は余裕がある。他の階層が片付けば、そこから援軍が来る可能性が高い」

と言いながらも、その可能性が低いことは、ここにいる誰もが理解している。それを承知した上で、防衛側のハンターたちが重々し

く頷いていた。

この気温で相手の動きが鈍っているからの強行策ではあるが、こちらも日々の熱帯夜でやられている。皮肉なものだ。

熊会長は不安にさせない為に口に出さなかったが、この作戦を押し通す最大の理由はハンター協会の耐久力の問題だろう。

昨日、外側からハンター協会を見てわかったのだが、外壁に無数の亀裂があった。このまま、衝撃を与えられ続けたら頑丈な壁とはいえ崩壊するのは時間の問題。結局、こうするしか手はなかった。

自動販売機の双肩にかかる期待が重すぎるが、災害時にも活躍を求められるのが最近の自動販売機だ。なら、期待に応えないとな。

作戦決行

闇に紛れて地面に降り立つと、ハンター協会の裏側に回り込んで、そのまま南下する。目的地である大穴は西側にあるのだが、真っ直ぐ進むのはあまりにも無謀すぎる。

事前に大食い団が調べた、人通りの少ないルートを、足音を忍ばせ、姿勢を低くして進んでいく。

魔物を何体か見かけはするが、この時間帯は本当に休息をしているようで、地面に腹ばいになって寝ている個体も少なくない。瞬時に倒せる魔物はその場で処分しているのだが、進むにつれて敵の密集率が上がってきた。

「ここから先は見つからずに進むのは流石に無理か」

「じゃのう。蹴散らすのであれば可能じゃが、それをすれば敵に気づかれるのは確実。時を待つしかあるまい」

殿の熊会長とお爺さんが小声で言葉を交わし、ハンター協会のある方向に目を向ける。

魔物の総攻撃が始まるまで、暫く待つしかないか。

「みんな……ヒュールミ、大丈夫かな」

「いらっしやませ」

「あはつ。そこは、うんじゃないんだ」

聞き慣れた言葉を聞いて、ラツミスの表情が少しだけ緩んだ。

きつと、大丈夫だよ。頼りになる門番ズもいるし、ヒュールミが戦場に立つこともないからね。彼らは引き際を心得ている。いざとなったら、屋内退去してくれるだろう。

全員に飲み物と食事を配り、辺りを警戒しながら休憩していると、遠くから争う音が響いてきた。どうやら、始まったようだな。

「行かないとっ」

「焦っては駄目だよ。逸る気持ちはわかるけど、もう少し待ちましようね」

飛び出そうとした、ラツミス肩に手を添えて、お婆さんが優しく微笑んでいる。

反論を口にしたようにしたが、娘と孫を残してきている、お婆さんの方が辛いことを思い出したようで、小さく頷くと腰を落とした。

「今の内に壁際に寄っておくでしょう。あちら側が少し手薄になっているようだ」

熊会長の指示に従い、壁際へと歩を進める。

「あらっ」

路地裏で眠りこけていた鱈人魔と遭遇すると、シャーリイが振った鞭が相手の長い口に絡みつき言葉を封じると、素早く飛び出したミシユエルが脳天に切っ先を突き刺した。

「妖艶なる影は顕在か」

「会長、その恥ずかしい呼び名はやめてくださいな」

頬に手を当てて珍しくシャーリイが照れている。熊会長が知っているということは、以前はハンターをやっていたのだろうか。この腕なら納得だが。

「少し速度を上げて強引にいこう。壁の向こうの魔物たちが雪崩れ込む前に、穴をどうにかしておきたい」

「いくよ」

じゃあ、俺も空へと旅立つか。風船自動販売機 になって 結界 を風船で埋め尽くさないとな。

地面に置かれた俺を、ラツミスがじつと見つめている。やっぱり、俺の単独行動には不満があるのだろうか。

「ハツコン……頑張つてね」

「んんっ」

予想外の言葉におかしな反応をしてしまった。引き留められるか、小言を言われるか覚悟していたのだが。

「束縛がきつい女は嫌われるって、お婆ちゃんも言ってたし、うちはハツコンを信じることにしました。だから、壊れないでちゃんと帰ってきてね」

ラツミスも成長しているのだな。信用してくれるのは本当に嬉しい。束縛が弱まったのもありがたい話の筈なのだが、ちょっと惜しい気もするのが男心の複雑さだ。

「まかせて」

風船を出し終えて、ダンボール自動販売機 になった俺は上昇していく。眼下ではラツミスが大きく手を振っている。俺も腕があれば振り返りたいところだが、今はこれで勘弁してもらおう。

彼女の手の位置に落ちるように調整して、ミルクティーを取り出した。ちゃんと受け取ってくれたか。じゃあ、行ってくるよ。

闇の中を飛ぶというのは恐怖心を感じそうなものだが、今のところ問題はない。

地上では魔物たちが行進しているのだが、松明を手にしているようで、ある程度の明かりは確保されている。大通りを真っ直ぐ進んでいるのか。

その先にあるのはハンター協会で間違いない。殆どが大通りから離れずに、規則正しく進んでいるようだが………どういった仕組みなのだろうか。蛙人魔も鰐人魔も武器を手にして仲間と意思の疎通も可能らしいが、それにしても、きちんと整列して行軍できるものなのか。

冥府の王の差し金だとはわかってはいるが、全部の階層の魔物を全て単独で操ること等、可能とは思えない。簡単な指示ぐらいは出せるかもしれないが、上から見た限りでは統率が取れているよな。

冥府の王の仲間があの中に潜んで、指示を出していると考える方がしっくりくる。だが、あの大群の中から指揮系統を見つけるのは至難の業だ。一目でわかる格好でもしていてくれたら、いいのだが。

とまあ、考えてはみたが時間があまり残されていない、現状ではまず穴を塞ぎ、後に指揮官がいるなら探し出せばいい。今は、自分のなすべきことをやるだけだ。

ハンター協会に蛙人魔が貼り付き、壁を登っているのがわかる。

鱈人魔は手にした棍棒や石斧らしきもので協会の壁を殴りつけている。防衛側も奮闘しているようだが、テラスを占領されなくても、外壁が壊されたらそこで終わる。

今日、決行したのは間違いではなさそうだ。

結界 内部の風船のガスを噴き出して、位置を変更しながら空を彷徨っているのだが、そろそろ、お目当ての場所の真上に到達する。

壁の外には数え切れない量の魔物がいるな。それに、遠くからこちらに近づいている火の粒に見えるものが、魔物が手にしている灯りだとしたら、まだまだ増えるということか。

この数、集落内に居る数よりも外の方が多いぞ。やはり、壁をどうにかしないと勝ち目がないな。

さてと、ラツミスたちは……まだ見つかっていないようだ。作戦では俺が上から真つ逆さまに落ちて、穴の前を塞ぎ仲間が飛び出す。そして、敵を掃討しながら土魔法とラツミスの怪力を掛け合わせて壁の修復を急ぐ。ということになっている。

なので、出来るだけ集落側の魔物が壁から離れた時を狙いたい。じれったいが、最良の時を見極めなければ。

壁の外に魔物は動きが無い。集落内にいる魔物の大半はハンター協会へ向かっているが、それでも百体近くが穴付近に居座っている。この数でも危険だが、外の魔物が動く前にやるべきか。踏ん切りがつかない状態で、見下ろしていると、魔物が一体だけ大通りを逆走しているのが目に入った。

戻ってきた？ 他の魔物は一体たりとも戻ってきていないのに、あれは連絡担当なのだろうか。

じつと観察していると、大穴前で佇んでいる魔物の群れの前で停止している。何か話しているようだが、この距離では全く聞き取れない。

戻ってきた個体は、暫く動かなかったのだが再び動き出すと、大通りの方へと戻っていった。どうも、伝令役っぽいな。

危険を覚悟で少し高度を落とすと、集落内の群れから数体が穴の方へと移動している。これって、外の奴らに進軍命令を出すつもりか！

あの数体の中に指揮官がいそうだが、ここからでは見分けがつかない。

穴の前でそいつらがピタリと止まり、何やらしていると壁の外にいた魔物たちが動き始めた。

躊躇っている暇はないか。投下ポイント確認！ 位置よし！ 角度よし！ 高さよし！行くぞ、降下！

日本一の大きさをほこる 氷自動販売機 に変化すると、真下へと落ちて行く。

集落の壁ギリギリを狙ったので、近すぎて壁を擦ることになったが、これぐらい密着しないと意味がない。

大地を揺るがす振動と激突時の衝撃波で周囲の魔物が吹き飛んでいる。真下にいた魔物たちは原形を留めずに圧縮されていることだろう。

突如、空から降ってきた巨大な自動販売機に戸惑い、壁の外の魔物が慌てふためていている。

あれ？ 蛙人魔が結構逃げ出していないか。元々、臆病で慎重な魔物なのは知っているが、ハンター協会を狙っている奴らは、仲間が死んでも決して引かず、決死の覚悟で戦いに挑んでいた。

もしかして、今の衝撃で何らかの方法で操っていた指揮が乱れたのか。洗脳か魔法で支配をしていたのかは不明だが、それならそれで都合だ。

敵の統率が取れていないなら、今がチャンス。一気に仕事をこなさせてもらおう。

俺はこの数日ずっとどうやれば穴を塞げるか、そればかりを考えていた。自分の商品を見つめながら、使えそうなものはないかと。穴を埋める工事に最も適しているのは、セメントだが俺は自動販売機で売っているのを見たことがない。

となると、他に何か壁を埋めるのに適した商品は存在しないのか。そう思い、血眼になって探したのだが、該当する商品は見つからなかった。

そこで、発想を変えてみた。機能に壁を修復するのに使えそうな能力はないのかと。

よっし、この自動販売機では初挑戦だが、他では練習済み。やれると信じて、あとは実行するのみ！

俺は新たに取った機能から 自動販売機設置据付用コンクリート石版 を実行した。

この機能はその名の通り、自動販売機を設置する際に下に敷くコンクリートの石版のことだ。本来はアンカーで固定して自動販売機が倒れないようにする目的の品なのだが、今回の用途は違う。

この巨大化した 氷自動販売機 の下に突如、地面に面している部分より少し大きなコンクリートの板が出現した。

よし、よし、想定通り。ここまでは様々な大きさの自動販売機で実験した結果と同じだ。発動時の自動販売機の大きさに合わせた自動販売機設置据付用コンクリート石版 が出現することは立証済み。

問題はここからだ。本来ならコンクリートの板にアンカーを埋め込み、自動販売機を固定するのだが、それはやらずに再び 自動販売機設置据付用コンクリート石版 を発動させる。

ずんつと視界が少し上に移動する。そして、更に 自動販売機設置据付用コンクリート石版 を召喚！ まだまだ、終わらないぞ！

三度 自動販売機設置据付用コンクリート石版 をっ！

と、相手がどう反応していいか戸惑っている間に、俺はコンクリートの板を次々に積み重ねていく。前の 自動販売機設置据付用コンクリート石版 を残したまま次のを発現させると、新たにポイントを消費することになる。

この巨体の場合、ポイントの消費量が一回につき1000減り、お世辞にも安くない消費だが、この程度であれば、みんなからの寄付で得たポイントでおつりがくるレベルだ。

このコンクリートの板は本来なら10センチ程度なのだが、この巨体を支えるとなるとその厚みは1メートルを越える。穴の直径が10メートルあったところで、十枚重ねれば済むだけの話。

一気に積み上げるぞ！

自動販売機の脅し方

魔物が我を失っている間にコンクリートの板を積み重ねていき、動き始めた頃には目標の十枚が重ね終わっていた。

今更敵が慌てているが、この自動販売機設置据付用コンクリート石版を壊すのも崩すのも、そう簡単にはいかないぞ。

普通の自動販売機の場合、自動販売機設置据付用コンクリート石版の重さは基本60キロぐらいだった。だいたい、十倍の大きさだと考えると重さは約600キロ。十枚重ねると6トン……いや、違うな。10×10だから1000倍で更に10枚で……まあ、あれだ、とてつもなく重いのは確かだと思う。

魔物が束になっても動かせない筈だ。時間稼ぎとしては充分だろう。

それに、何故か壁の向こう側の魔物の動きがバラバラなままで、今も統率が取れていない。集落内で見かけた好戦的な態度が嘘のように、眼下の魔物は戸惑い散らばっていく。敵が減るなら、文句はない。

外からの脅威がなくなれば、集落内に集中できる。

取り敢えず、身体を元の自動販売機に戻しておこう。

コンクリート板を重ねることにより、壁よりも高い位置に到達したので、後方の集落の様子も良く見えるのだが、穴を塞いで増援を封じたことにより何とか立ち回れているように見える。

「魔法使いを全力で守るのだ！ ラツミスは瓦礫や岩、壁の破片何でもいい、穴に放り込んでくれ！」

熊会長が体中から赤黒いオーラのようなものを噴き出し、敵を蹴

散らしている。

腕を一振りするだけで、堅い皮膚が自慢の鱈人魔を容易く両断し、赤い爪の軌跡に触れたものは敵であろうが瓦礫であろうが、温めたバターのように切り裂かれていく。

あれが本気の熊会長か。あの巨体のパワーと爪の切れ味、立ち向かう魔物が哀れに思える戦いっぷりだ。

大食い団は四人一組で、着実に敵を仕留めている。チームワークが抜群で、あの素早さで掻き回されたら、かなりの達人でも対応に苦しむだろう。

それに、タスマニアデビル族……じゃない、袋熊猫人魔が生まれつき得ている加護 咆哮 は耳にしたものの精神を揺さぶり、抵抗力の弱い相手を精神異常状態にさせることが可能となる。

蛙人魔にはかなり有効なようで、動きの鈍った相手の喉笛を容赦なく咬み千切っていく。

ミシユエルとお婆さんの動きは相変わらずで、穴の修復に従事している魔法使いに、一匹たりとも敵を寄せ付けていない。

今のところ問題なく事が進んでいる。俺が設置したコンクリートの板があるので、慌てて埋める必要はないかもしれないが、万が一俺が故障した場合、このコンクリートの板が消えてしまう可能性がある。今やれるなら、やっておいた方が良い。

上から戦場を見下ろすことにより、戦場の動きが良く観察できるので、怪しい動きをしている魔物がいないか、隅々まで目を通して

いる。
冥府の王の配下なら、骸骨系かもしれないが、それ以外の魔物だつてあり得るだろう。この階層に本来なら存在しない魔物が何処かにいないか。

穴の付近でウロチョロしていた何かが怪しいとは思っているが、遠すぎてどんな個体なのか判断がつかなかった。

普通、司令官ならこういった状況ならどうするだろうか。前線に立つことは避けて、後方に控えるというのが妥当。ただ、今回は圧倒的な数で攻めている状況。壁の前にいる仲間も守りに徹しているので、相手は身の危険をあまり感じていない。と仮定する。

突如穴が塞がれたことが気になり、現状を我が目で確認したいと思わないだろうか。

戦況を少し離れた場所から見守り、護衛に魔物を何体か配置している、そんな狙い通りの敵がいるわけがないよな……あつ、あそこにいるな。

条件にぴつたり当てはまる、魔物の集団がある。戦闘に参加せずに、少し離れた場所に佇む数十体の魔物たち。その中心部にいるのは、妙なデザインのフード付きローブを着込んだ何者かだ。

黒の下地に赤と青の幾何学模様の刺繍が施されているローブ。黒のローブと言えば、冥府の王と死霊王も似通った服装だったよな。見るからに怪しい。

あれが、もし指揮官だとして倒せたら、ハンター協会で奮闘している人たちの助けにもなる。敵は穴の前で暴れる仲間注目している。

この穴を塞いだ犯人が自動販売機だとは思ってもいないだろう。ただ、疑念としては、冥府の王の部下なら、奴から連絡があり俺の情報も流れている可能性だろう。

だとしても、暗闇で距離があるので、ここにいる自動販売機を目視するのは難しい。

今、自由に動けるのは俺だけだ。ならば、いつもの暗殺術を繰り出すしかない。

風船、ダンボール、という最近お決まりの流れで宙に浮かび、怪しい一団の上空を目指していく。

このまま、真っ直ぐ落ちれば押し潰せるだろうが、冥府の王の配

下なら情報を収集したいところだ。でも、こういうパターンって生かして捕えると、後々、酷い目に遭ったりするのが定番だよな。

あー悩むぞこれ。現状を打破したいなら、このまま潰せばいい。だけど、ダンジョンでの異変を解決したいなら、情報は必須。

視線をハンター協会方向へ移すと、明かりに群がる虫のように、ハンター協会を登ろうとする魔物の群れが見えた。距離があり過ぎて正確な情報は得られないが、今のところ耐え凌いでいてくれる。

壁付近で戦っている熊会長たちは、まだ余裕があるようだ。

巨大 氷自動販売機 になるだけのポイントはあるが……よっし、相手を掠めるようにノーマル状態で落ちてみるか。もし、当たって死んだらその時はその時。やるだけやってみよう。

ギリギリのポイントを狙い、いつもの自動販売機へ戻る。そして結界 を解除して風船も消しておく。

相手が動かないので、このまま落ちれば……いけるっ！

どんつと、身体を中心にまで響く衝撃。あえて 結界 を消していたので、結構ダメージを受けたが、それも考慮済みだ。

目の前には空から降ってきた俺に驚き過ぎて、声も出ないで硬直している男がいる。

えっ、人間の男なのか。てっきり骸骨だろうと勝手に思い込んでいたのだが、配下に人間がいても何らおかしくはないのか。

「ひ、ひう、な、何だ！」

我に返り、後方へと後退りしているのだが 結界 に阻まれて、俺から1メートル以上離れることができないでいる。

逃がす気はない。 結界 の外に出ることを禁じているからな。

「この、青い壁は何だっ！ で、出られないぞ！ お、お前らこの

壁を壊せ！」

頬が痩せこけている男が魔物たちに怒鳴り散らすと、周りにいた魔物たちが一齐に 結界 へ攻撃を加え始めた。

このままでも、ある程度は耐えられるがポイントは有限だ。止めさせるか。

商品の一つをバスタオルに入れ替えて、取り出し口から 念動力で取り出す。そして、わめき続けている男の首に回すと、両端を引っ張った。

「だ ま り」

正直「る」か「れ」が使えれば格好もつくのだが、仕方がない。

「な、何だ、誰が話しているっ」

「だ ま ら ん か」

この言葉遣いだと、どうにも間抜けだが通じることが最重要。

まだ、暴れてわめき散らしているので、更にタオルをきつく引っ張る。

「ま、待て、や、やめる」

話を聞く気になったようなので、タオルを少し緩めてやった。相手は、この攻撃が自動販売機自身によるものだとは思っていないように、辺りを警戒している。都合がいいので、このまま誤解させておこう。

「ま も の う い」

「かすのよせ」

こいつが司令官なら、こうやって詰問すれば何らかの反応を示すだろう。

「な、何を言っている。何のことだ」

まあ、普通惚けるよな。嘘を吐いて焦っているように見えるが、実際はどっちだ。命の危機に晒されて冷静な判断力を失っている、とも受け取れる。

尋問をするにしても、こちらは上手く話せず言葉が足りない。相手が自ら話したくなるように誘導するしかないか。

商品の中で相手の口を割らせるのに使えそうな物がなかったかな。辛いことで有名なハバネロが入ったスープ缶があるのだが、これはちょっと辛いけど普通に飲める味だった。無理やり飲ませて拷問　尋問で口を割ることはないだろう。

相手が怯えるぐらいのインパクトのある脅しとなると、やっぱりあれか。

「い　う　ん　だ」

「し　に　た　い　か」

脅し文句を口にして、俺は取り出したコーラを相手の目の前に念動力　で浮かべる。そっちに気を取られている隙に　棒状キャンデー販売機　へと変化して、キャンデーをそっと送り出しておく。

素早く元に戻り、キャンデーの包み紙を外す。怯える男の前でペットボトルの蓋を捻って取り外す。

そして、ふわふわともったいぶるようにキャンデーを浮かせて、コーラの中にそれを落とす。途端、飲み口から中身が真上に吹き出

した。

どういう意味がある行為なのか今一つわかっていない感じだが、俺は首に巻き付かせているタオルを少し強めに引っ張る。

「あぐああ」

たまらず、口を開いた男に新たに用意しておいたコーラを啜えさせて、強引に流し込んだ。

かなり酷いことをしている自覚はあるが、大事な人たちの命が懸かっているんだ、心を鬼にして決行しないと。

「げはっ、ぐほっ、何のつもりだっ。この妙な味は、まさか毒かっ！？」

勘違いしてくれるのは勝手だが、早とちり過ぎる。本当の脅しはここからだ。

さっきと同様に、キャンディーを男の目の前に浮かべさせて、わざとらしく左右に揺らす。

「これはさっきの……この液体に入れたら、爆発したや……っ。ま、まさか、それを飲ませる気かっ！」

抵抗する男の口に強くキャンディーを押し付ける。

「や、やめろっ！ やめてくれっ！ 体が中から爆発しちまっっ！」

予想以上の怯えようだ。実際は完全に飲み干して、ある程度時間が過ぎた今なら、口に含ませたところで問題は無いのだが。

魔物を統率していた存在だと思われる相手なので、もう少し威厳のある人物を想定していたのだが、思ったよりも雑魚っぽい反応を

するな。

いや、安全地帯から指示を出して、自らは高みの見物と洒落込むような奴だ。追い詰められたらこんなものか。

「さいごだ」

「いなか」

もう二つ追加でキャンディーを目の前に持って行く。

「わ、わかった！ 魔物の操作をやめるっ！ だ、だから、それを飲ませないでくれっ！」

未知の物体による脅しは、想像以上の成果を見せつけてくれた。

真実

脅しにあっさり屈して認めた男は右拳を前に突き出して、大きく息を吸った。

「冥府の王による束縛を解除せよ」

男の右手には冥府の王に模したデザインの指輪がはまっている。その指輪の目が血のように赤い光を放ち、その顎がカタカタと揺れる。

すると、ずっと俺の 結界 を殴り続けていた魔物たちが突如硬直して、ぼーっと虚空を見つめている。今までの殺気漲る姿を一変させて、呆けたまま辺りを見回し始めだした。

寝起きの人を見ているようだ。

「こ、これで、魔物たちは元の状態に戻った。も、もう、いいだろっ」

「てったい」

「させて」

このまま、ここから全て撤退させないと終わったとは言えない。

「む、無理だ。俺はたまに攻める指示をするだけの役割なんだ。この指輪が冥府の王の力を伝える機能になっていて、俺はただの中継地点なんだよ！」

つまり、アンテナの代わりなのか。まあ、こんな信念も根性もなさそうな奴に、全ての権限を譲渡する程、馬鹿じゃないよな。それに、撤退させるにも唯一の出入り口を俺が封じたから、そもそもが無理な話か。

「い、今、解除させたから、もう奴らは通常時の魔物に戻っている」

これは嘘じゃないな。我に返った蛙人魔たちは散り散りになって逃げてしまっている。鱈人魔は好戦的なので、まだ戦っている個体もいるが、蛙人魔を襲って喰らいついているのもいるな。

これが本来の生態系か。ずっと、操られていたので飢えているのかもしれない。

そこから中で魔物同士が争いを始め、熊会長たちが戸惑っているよ。うなので、最大音量で呼ぶことにした。

「こっちに」

穴の修復はまだ半分にも満たないが、俺の置いたコンクリートの板があるので、問題ないと判断したようで、全員が駆け寄ってくる。

「ハツコン、何かしたのか。そやつは一体、何者だ」

真っ先に辿り着いた熊会長が、息荒く問いただしてくる。中身は紳士だが、その外見は返り血を浴びた熊だ。その迫力に魔物を操っていた男が腰を抜かしている。

ここから、この男が何者であるのかを、足りない言葉で一から説明するのは一苦勞なのだが、俺には「防犯カメラ」と「液晶パネル」がある。録画しておいた、さっきのやり取りを再生しよう。

真剣に鑑賞している皆の邪魔にならないように、男の前にキャンディーを浮遊させて口を開かないようさせる。

最後まで見終えると、全員が考え込むような仕草を見せている。
えっ！

「死ねえええっ！」

轟音を上げて迫る拳が 結界 に激突する。

《ポイントが600減少》

なっ、ミシユエルの一撃をも上回るのか。怒りの形相で目に涙を溜めた……ラツミスの一撃は。

「らっ いす」

「結界を消して、ハッコン！ じゃないと、そいつ殺せないっ！」

どういうことだ。この怒りよう尋常じゃないぞ。ラツミスがここまで怒りをあらわにした姿を見たことが……一度だけあったな。まさか、そういうことなのか？

「落ち着くのだ、ラツミス。お主らしくないぞ」

再び殴りかかろうとした、ラツミスを背後から熊会長が羽交い絞めにしている。だけど、完全には制御できないようで、引きずられている。

大食い団も、ラツミスにしがみ付いて懸命に押し留めているが、それでも動けるのが彼女の怪力の恐ろしさか。

「その顔、忘れもしないっ！ そいつはうちの村を襲った魔物を操っていた仇やつ！」

やっぱり、そうか。薄々は感づいたが、ラツミスノ村を壊滅させた犯人がこいつなのか。

魔物を操っていたという条件が当てはまりはするが、このタイミングで出会うことになるとは。

「詳しいことはわからぬが、こやつからは、まだ聞きだしたいことがある。どうか、怒りを収めてはくれまいか。我が集落を破壊し、住民を殺した奴に対する憎悪は痛い程理解できる。だが、だからこそ、耐えてくれ。他の階層の人々も同様に苦しみ、今も逆境の中で生きる為に懸命に足掻いていることだろう。我々と同じ目に遭わしてはならぬ。少しでも多くの人々を救う為に……耐えてくれっ」

「う……ん。わかった、よ。ごめん、会長。うちは門の修復作業やっつくね」

ここにいと気持ちを抑えられないのだろう。俯き気味に大穴の方へと向かっていく。お爺さんと三人の土魔法使いも一緒に戻っていった。

「さて、こちらの質問に全て答えてもらう。無駄な駆け引きや誤魔化し、言い淀む度にお前の指を折っていく。殺しはしない……いや、簡単に死なせはしない。安らかに死にたいのであれば、全てを素直に白状することだ」

穏便で優しい熊会長は、ここにはもういない。野生の獯猛さを剥き出しにして、見る者の魂さえ萎縮させる野獣がいた。

日本であれば相手が凶悪犯であれ、この行為は許されないことなのだろう。だが、ここは異世界であり、法もルールも異なる。

それに、法として間違った行動であったとしても、俺は熊会長を

止める気にはなれない。

数百人も住民を無残にも殺されたのだ。何をされたとしても、こいつの自業自得。同情の余地はない。

隣には黙して何も語らない、お婆さんが静かに佇んでいる。温和な笑みはなく、表情の消えた顔でじつと男を見据えている。

その姿に熊会長とは別の凄味を感じてしまう。

「まず、その指輪を外してもらおう。ハツコンはラツミスと共にいてくれるか。このような汚れ仕事は我々が受け持とう。それが年長者の役割というものだ」

見届けたい気持ちもあったが、それよりも今はラツミスの傍にいてあげたい。なので、その申し出を素直に受け入れ、下に車輪を設置して大食い団に運んでもらった。

「ハツコン……ごめんね」

「ううん」

かなり気落ちしている。俺を背負ったまま、穴埋めの作業は続けているのだが、いつもの覇気が全くない。

親の仇と会えたというのに、復讐を成し遂げるチャンスを失えば意気消沈もするよな。だけど……甘いとはわかつているのだが、ラツミスが人を殺さずに済んで少しホッとしている。

何て言葉を掛けたらいいのだろうか。少しは話せるようになったというのに、気の利いた言葉が思い浮かばない。

これじゃあ、今までの自動販売機と何ら変わらない。

「うちはね、ずっと、おとんとおかんや、村のみんなの仇を討ちたかった。だから、少しでも強くなるうと思つて、ハンターにもなつたんよ」

「うん うん」

「だから、あいつを見た時、何も考えられなくなって……ダメだよね。師匠も言つていたんだけど……怒りを忘れなくてもいい。だが、どんな状況でも我を忘れるな。怒りも哀しみも呑み込み昇華させて、自分の力にしろつて」

感情の完璧な制御を十代の女の子に求めるのは間違っている。世の中には、まともに感情を制御できない大人がどれだけいることか。だけど、この異世界は平和な日本じゃない。ましてやダンジョンの中で危険を覚悟の上でハンターをやっているのだ、精神の乱れは自分の命を縮める行為でしかない。

それを全て理解した上で、俺は彼女の味方でありたい。自動販売機である俺とラツミスは一心同体のようなものだ。彼女の足りない部分は俺が補えばいい。

悲しみて心が塗りつぶされそうなら、喜びで塗り返せばいい。それが、相棒としての俺の役目だ。

「らっす」

「ん、なーに」

「いっしよだ」

「さいごまで」

つたない話し方で、ちゃんと伝わったのか不安だな。俺はそう簡単に死なないから、いつかキミがハンターを辞める日まで、ずっと一緒にいるよという想いを込めたのだが。

「えっ、ハツコン。それって、もしかして……求婚ってこと？」

「あっ」

ラツミスが頬を染めて、身をよじっている。え、ちょっと待ってください、ラツミスさん。

「で、でも、うち、未成年だし……お母さんが結婚したのは十八だったから、うちも同じ年で結婚するのが理想なんだあ」

あの、もしもし。

「嬉しいけど、まだ、ちょっと早いかなんて思うの。ほら、まだお互いのことをもっと知るべきだし。あ、そうなると子供どうしようか。ヒュールミに小さなハツコン作ってもらうのも、いいかな」

ええと、わたくしめの弁明を聞いていただきたいのですが。

「そうだ、やっぱり、ダンジョンの最後まで到達して、人間に戻してもらおうよ！今のハツコンも好きだけど、人に戻ったハツコンも見てみたいな！。そうしたら、手を繋いでデートかもできるもんねっ」

落ち込んでいた気持ちが吹き飛んでくれたのは嬉しいが、妄想がとんでもない方向に飛躍している。

気持ちが滅入っている時に衝撃を与え過ぎて、軽く混乱している

ようだ。好かれていることがわかったのは嬉しいけど、本気なのだろうか……。心が弱っている状態で優しい言葉を言われて、正しい状況判断ができなくなって、舞い上がっているだけだよな。

自動販売機と少女の恋愛は可能なのだろうか。い、いや、俺が落ち着け。

今度はここから夢見る彼女を現実に戻さないといけないのか。

「なーんてね。ハッコンは落ち込んでいる、うちを励ましてくれているんだよね。ありがとう。うん、おかげですっごく元気になった！」

くっ、からかわれていたのか。危うく、本気で信じるころだった。

腕をぐるぐる回して、元気なところをアピールしてくれているが、まだ表情に陰りがある。空元気でも落ち込んでいるよりかはマシだよな。

真実（後書き）

暗く真面目な展開ばかりでしたが、四章が終わりました。
次の話から五章となります。

一難去って

穴の修復作業が終わると、空が明るみ始めていた。

全員が疲労困憊だというのに、陽の光を浴びて嬉しそうに笑っていたのが印象的だった。死をも覚悟した夜を越えて昇った朝日は美しく、誰もが言葉を失い見惚れている。

本当はそこで全員休憩を取るべきなのだろうが、残してきた仲間が心配で居ても立っても居られず、軽食と水分を補給すると即座に行動を開始した。

こういう時、自分だけが疲労を感じず、ラツミスに背負われて運ばれることに、どうしても負い目を感じてしまう。俺に足があれば、疲れた皆を運んでやりたいくらいだ。

限界に近い体に鞭を打ってハンター協会に戻ると、そこには生きた魔物の姿はなく無数の死体が転がっていた。

無意識の内に死体の中に仲間のハンターがいないか探していたのだが、誰もいなかったので安堵していると、隣で熊会長が胸を撫で下ろしていた。きっと同じことを考えていたのだろう。

「帰ってきた！ 皆は無事かつ！」

熊会長の呼び声が響くと、入り口の扉が開き、防衛を任せていたハンターたちが飛び出してきた。

門番ズも含めて、全員無事か。かなりの激戦だったのは、姿を見れば一目瞭然だ。防具は穴や切り裂かれた跡だらけで、衣服も血と汗で変色している。

協会の壁も限界が近かったのか。亀裂が模様のようにそこら中にあり、外壁の破片が辺りに散らばっていて、死闘を物語っていた。

「会長、無事でしたか！ こっちは何とか守り切ったぜ！」

「辛うじて」

カリオスとゴルスのテンションの差は相変わらずだ。二人を含めたハンターたちの顔は達成感による自信に満ち溢れていて、数時間前とは別人のようだった。

「ラツミス、怪我はねえか！ ハツコン、何処か故障してないかっ！」

駆け寄ってきたヒュールミが俺とラツミスの体中を弄っている。

かなり心配していたようで、目が充血して赤く「大丈夫だよ」と、ラツミスが言っても、あれやこれやと世話を焼いている。

全員が再会を喜び合う中、服を頭から被せられて顔が見えないようにされた指揮官の男が、ハンター協会の地下牢に連行されていく。地下牢は魔法や加護を阻害する魔法陣が仕込まれているので、有力なハンターであっても抜け出すことは不可能らしい。

奴の顔を隠しているのは、ヒュールミへの対策だ。彼女もラツミスと同様に村を襲った犯人の顔を目撃している。祝勝ムードに水を差す必要もないだろうと、熊会長が気を利かせてくれた。

ラツミスが後で話をするそうなので、今はこのままにしておこう。

ハンターだけではなく、生き残りの住民も屋外に出てきている。

まだ、敵の残党が残っている現状では危険な行為だ。

そんなことは誰もが理解した上で、飛び出してきたのだろう。ずっと屋内に閉じ込められていた鬱憤を晴らす為に。

そんな彼らを止める権利は俺にはない。

熊会長もそれは重々承知しているようで、目配せをすると門番ズ

やハンターたちが、周囲の警戒に当たっている。

今は敵も混乱している最中の筈。少しぐらいなら、この解放感を味わう権利はあるよな。

酒を提供するのは油断しすぎだと判断して、乾杯用の飲み物はアルコール分を含まない飲料にすることにした。

それからは、集落内にいる敵の掃討と壁の完全修復が当面の目的となった。お爺さんとヒュールミは別で転送陣の調査を担当している。

「妙なことにはなっておるが、時間さえ掛ければ何とかなるやもしれんのお」

「だな。性質の悪いことをしてやがるが、オレと爺さんがここにいたのが、奴らの運のつきだったな」

と、自信満々で語っていたので、一任することになった。凄腕の魔法使いと魔道具技師である二人が組めば、いやがうえにも期待は高まる。

俺とラツミスは集落内の魔物掃討を担当しているのだが、身体を動かしていないと余計なことを考えてしまつらしく、いつもより戦いに集中しているようだ。

蛙人魔の頭を一突きで粉碎、振り向きざまに裏拳で木製の盾を砕き、その先にいる敵を吹き飛ばす。そこで油断することなく、素早く構え、周囲に視線を走らせる。

強くなったな、ラツミス。攻撃の威力もそうだが、戦闘中の安心感が以前とは比べ物にならない。俺が 結界 で守ることもなくなったのが少しだけ寂しくも思う。

「ハツコン」

戦闘中に消え入りそうな小さな声で、ラツミスが俺の名を呼んだ。

「ん」

「うち、どうしたらいいのかな。ずっと、おとんとおかんの仇を討ちたいって思っていたんよ。そやのに、仇を見つけたのに何にもできへんで……一度、牢屋にいるアイツを見に行ったんよ」

俺が知らない間に会いに行っていたのか。

「うん うん」

「ヒュールミと一緒にね。鉄格子の向こう側で怯えて震えている姿を見たら、何か、どうでもようだったんよ。あれ程、憎んで殺したいと思っていた相手なのに……。それに、会長は罪に値する罰を与えるとやってくれたんよ。だから、もう、うちらがすることは何もないんだって……」

遠い目をしながら、魔物を蹴散らしている。

この数か月、戦いの場に身を置いてきたので、頭で別のことを考えていても体が勝手に動くようだ。この程度の相手なら大丈夫だとは思いますが、俺だけでも集中しないと。

「ハツコン、うちどうしたらええんかな。目的がのうなってもうたんや……うち、これからどうしたらええん」

ずっと仇を討つことだけを目標に、ハンターにまでなって強くなるうとしてきた人生。その生きる目的を失い、彼女は戸惑っている。

何て言えばラッミスを励ましてあげられるのだろう。新たな目的を提示してあげるのが一番なのだが、生きる目標か。

「たのしもう」

「えっ、今なんて」

「たのしく」

「いこうよ」

励ましにもならない陳腐な言葉だが、俺の本音だ。

ラッミスの人生だ。目標なんてなくなっちゃって生きている人は腐るほどいる。だったら、楽しんだらいいじゃないか。自分の人生楽しんで者が勝ちだ。

自動販売機になってしまったが、俺は自分の境遇を楽しんでいる。不満が無い訳じゃない。でも、ラッミスたちと一緒に過ごした日々は日本では経験したことのない、充実した毎日だった。

だから、出来ることならこれからも、一緒にラッミスたちと共に過ごしたいと思っている。

「いっしょに」

「ハッコン……うん、そうだね。最後まで一緒にいてくれるんだもんね！」

屈託なく笑う顔を久しぶりに見た。うんうん、やっぱり、ラッミスは笑顔が一番似合っている。

「落ち込むのも、悩むのも一旦やめるね。まだまだ、することは一

杯あるし、始まりの階層に行った、みんなも心配だから」

「うん うん」

清流の湖階層は一段落ついたが、他の階層がどうなっているのか情報が入ってきていない。始まりの階層には、園長先生と子供たち。それに愚者の奇行団が向かっている。

きつと苦戦しているだろうから、何とか手を貸してあげたいのだが。

「まずは、ここで集落内の敵を全部倒して、安全にしないと！」

「いらっしやいませ」

敵の統率が取れなくなった弊害として、集落内に残党が散らばっている。全部を片付けないと、住民が安心して集落内で過ごせない。

「よっし、蹴散らすよー」

暫くは、集落内の掃除に没頭するとしてよう。まずは清流の湖階層の安全確保が優先だ。転送陣は二人に任せているので、移動可能になってから行動すればいい。

よっし、気持ちを切り替えて、俺も討伐に参加するとしてよう。

今日は十体ほど討伐したところで、暗くなり始めたのでハンター協会に戻ることにした。他のハンターたちも帰宅時間らしく、協会に着くまでに二組のハンターたちと合流した。

集落内の魔物討伐に協力しているハンターは、四人から五人組で行動することになっていて、必ず大食い団の一人が加入することになっている。

彼らの鼻と耳は敵の搜索に欠かせないので、毎日忙しく走り回っているそうだ。

「今日もよく働いたよー。戻ったら、ハツコン、お肉揚げたのいっぱい出してね」

「ペルはそればっかりだね。ボクもお願いします」

ミケネもペル程じゃないが、負けず劣らず大食いだからな。今日もから揚げが良く売れそうだ。

各組のリーダーはハンター協会の中に入って熊会長に報告の義務があるが、他のハンターたちは屋外で待機している。

ハンター協会の正面にテントが幾つか建てられているのだが、そこはハンターたちが寢床にしている。遠征に出た時は魔物が周囲に居て当たり前の状況なので、安全が確立していなくても全く問題が無いらしい。

それに見張りが常時立っているので、安心してぐっすり眠れているそうだ。

ハンターが屋外に出たことにより、住民の屋内でのスペースが増えたおかげで、不満も激減したらしく、お互いに良い結果に繋がっている。

この階層は俺の食料もあるので今のところ順調だが、他の階層はそうもいかないのだよな。予備の貯蔵がどれ程あるかは不明だが、早いうちに何とかしてやりたい。

特に始まりの階層に向かった、園長先生たちが気掛かりだ。転送陣に関してはヒュールミとお爺ちゃんに任せっきりだからな。後で、

差し入れを持って様子を窺いに行こうか。

いつものようにハンター協会の前で突っ立っていると、いつもの日常が戻ってきたような気がしてくる。だけど、それは違う。多くの血が流れ、住民の大半が死んだ。

集落での生活が楽しくて、ずっと楽しく穏やかな日々が過ごせると勘違いしていた。

ここは魔物が徘徊する異世界のダンジョン。日本の安全な世界と違い、死が隣り合わせなのだ。まだ日本人としての感覚が抜けていない自分にうんざりする。

自動販売機として人々の役に立ち、更に攻撃手段も手に入れた。それはもう、自動販売機としての概念を逸脱している自覚はある。

だが、この異世界で生き抜くには……ただの自動販売機では駄目だ。何もできず、商品売るだけの自動販売機では。

かき氷

集落内にいる魔物をほぼ倒しきつたので、屋外に仮設テントが増え始めている。

壁の外にいる魔物たちは、あれから襲ってくることもなく、野外で自然の摂理に従って暮らしているようだ。

数日前までの騒動が嘘のように、穏やかな日々が過ぎている。

望んでいた平穏な日常に、住民やハンターたちの表情にゆとりが見え始めていた。

だけど、そんな中でも熊会長やラツミスは各階層の様子が気になってるのだろう、その表情に時折、影が差している。

ヒュールミとお爺さんは、転送陣を何とかしようといふと日々籠っているのだが、あと一歩のところまで上手くいっていないようだ。

何か気分転換になるような事でもあればいいのだが。と思っている俺の心を読んだかのようなタイミングで、住民たちによる夏祭りが開催されることになった。

これは防衛戦が成功したお祝いも兼ねているそうで、熊会長も快く承諾したそうだ。

急ピッチでハンター協会前の広場が飾り付けられていく。といっても、物資不足なのでそんなに派手にはやれないのだが。

数時間で準備が終わり、手作り感満載の文化祭の様な祭りが開催されたが、久しぶりに思う存分弾ける場が提供されたことだけでも意味があったようで、みんな楽しんでいる。

今日ばかりは難しいことも考えずに、俺も楽しくやるつもりだ。

暗い気分を吹き飛ばす為に開催されたのだから。

露店の数が四つしかないのは寂しいが、老若男女問わず大盛況で人だかりができています。

まあ、それでも俺には勝てないけどなっ！

今は夏真っ盛り。日が沈んだとはいえ、快適な夜とはお世辞にも言えない蒸し暑さらしい。そこで、俺が提供する商品は、かき氷だ。アイスクリームなら既に商品として得ていたが、夏祭りと言えば、かき氷だろう。そこは譲れない。

商売として、かき氷はコストパフォーマンスが優れている。氷にシロップを掛けたただけだというのに、お客も満足だし、こつちも原価が殆どかかっていない。ポイント変換も驚くほど安かった。

既に機能として かき氷自動販売機 を選び終えている。白を基調とした本体の上部に、器に盛られたかき氷の写真が貼られている。緑、赤、黄色と三色のかき氷にシロップがたっぷりと掛けられている写真が、購買意欲をそそられる。味はメロン、イチゴ、レモンという定番中の定番だ。

ただ、この自動販売機の氷は質が悪いところもあり、季節外れの冬場に食べるとシロップの味が劣化していることもあるので注意が必要になる。

しかーし、ここで俺の器用さが生きてくる。氷はできるだけ細かく粉雪の様に砕き、シロップもけちけちせず新鮮なのをたっぷり注ぐ。

すると、なんとということでしょう。見るからに美味しそうな、かき氷が出来上がったではありませんか。

暑さの影響もあり、飛ぶようにかき氷が売れる。

「かあああっ、つめてええええ！ たまんねえなっ」

「もう、カリオスさんったら。赤い液が口元に」

カリオスと彼女が目の前でかき氷を食べながら、仲睦まじい姿を見せつけてくれている。

シロップのベツトリと付いた口元を、微笑みながら拭ってあげる彼女。

うんうん、微笑ましいね。祭りで野暮なことを言う気はない。こは、俺がかき氷の美味しい食べ方をカリオスに伝授してあげるとしよう。

「いっせいに」

「くちにばい」

「ん、一気に掻き込めばいいのか。よっしゃ」

浮かれているカリオスは疑いもせず、かき氷を一気に頬張った。その結果どうなるのか。日本人なら誰もが知っている。

「うぐあああつ、頭がキーンって、いてえええええ」

「だ、大丈夫ですかっ」

ふははははは、かき氷はゆっくり落ち着いて食べるものなのだよ。彼女が心配そうにカリオスの背に手を当てて、遠ざかっていく。少しだけ悪いことをしたような気がしないこともない。

二人の様子を観察していると、頭の痛みが治まったのか、離れた場所のベンチに並んで腰かけているな。

「もう、慌てて食べるからですよ。私が食べさせてあげますね。あーん」

「おいおい、こんなところで恥ずかしいじゃねえか」

「カリオスさん、食べてくれないんですか」

「じゃ、しゃーねえな。一口だけだぞ。あーん」

……イチゴシロップの代わりにタバスコをぶっかけるべきだったか。

そういや、シロップの味を変えられないのだろうか。三種類というのは少し寂しい。他にもフルーツのトッピングもできたら、もっと人気が出そうだが。

ってああ、俺には 念動力 があつた。俺の前には長机が置いてあるので、ここに リンゴ自動販売機 から取り出した、袋入りのカットされたリンゴを並べる。

このリンゴは食べやすい大きさにカットされていて、尚且つ、ハチミツやキャラメルで味が付いているから、かき氷のトッピングとして使える。他にもバナナや他の果物も出しておく。

今度は氷の自動販売機になって、大量の氷を操って机の上に氷の大きな器を作った。その上に 念動力 でへたを取ったイチゴや、皮を剥いた果物を並べて行く。

その作業に没頭していたのだが、気が付くと目の前に人垣ができていた。興味深げにこちらを覗き込んでいるな。

そういう意図はなかったのだが、パフォーマンスとして集客効果があつたようだ。観客がいるなら、更に速度を上げるか。

次に、もう一度かき氷自動販売機に戻ると今度はシロップを出さずに、ただの砕けた氷として、プラスチックの器に盛る。それを目の前の机にずらっと並べていく。

十分な数が確保されたので、更にここで新たに取った機能を披露するか。

自動販売機としては定番なのだが、今まで一度も使うことがなかった カップ式自動販売機 に。

今更説明する必要が無いぐらいメジャーな、紙コップの中に選んだ飲み物が注がれる自動販売機だ。

普通は紙コップに原液を注いで、水もしくは炭酸水で割り、そして氷が投入されるシステムなのだが今回は原液のみを活用させてもらう。

本来は紙コップが置かれる場所に 念動力 で、シロップ無しのかき氷を移動させる。そして、日本で最も有名な乳酸菌飲料である白い原液を、かき氷の上に放出。

こつやつてジュースの原液を掛ければ、シロップ代わりになるだろう。これならシロップの種類は数倍に増える。

更に予め準備しておいた果物をトッピングして、完成だ。

「おつ、ハッコン何だこれ。さっきの氷よりも、めっちゃ旨そうじゃねえか」

「うんうん、可愛くて、すっごく美味しそう」

いつの間にか人垣に紛れ込んでいた、ヒュールミとラツミスが喉を鳴らして見つめている。

「も っ て い っ」

「て い い よ」

今日の飲食代は全てハンター協会が受け持っているので、好きに持っていってくれ。

俺がそう言くと、一斉に特製かき氷に人が押し寄せ、あつという

間に売り切れてしまった。

思っていた以上に好評だったことも嬉しかったが、それよりも念動力を使用すれば簡単な料理ができそうな事実の方が重要だ。

ただ 念動力 は商品のみを操る能力なので包丁を扱えない。今まで刃物を売っている自動販売機を見たことが無かったので、商品に刃物が存在していない。

刃物があれば接近戦が可能になったかもしれないので、少々惜しい気がする。

「ごちそうさまでした！」

思考の海に沈んでいた意識を浮かび上がらせたのは、元気な子供の声だった。

空っぽになった、かき氷の器を握りしめて、にかつと笑う小さな女の子。って、常連四人組の一員である老夫婦の孫か。

「ごちそうさまでしたっ！」

「ありがとうございました」

二度同じことを言われて、咄嗟に礼を返したが正解だったようだ。さっきよりも笑みが深くなっている。

「ねえねえ、ハッコンって。どういう魔道具なの？ 武器とか防具じゃないよね。商売用魔道具？」

「考えたこともなかったが、万能商品供給魔道具とかになるのか？」

「ヒュールミ、それって長すぎるよ。万能魔道具でいいんじゃない？」

子供の素直な問いに対して、ヒュールミとラツミスが適当に答え
ている。

でも、そう問われると答えに困るな。この異世界では例えようの
ない存在だと思う。ここは正直に伝えておくか。

「しとう あん」

「あ い くい」

うつ、自動販売機と言うには言葉が足りな過ぎた。無理やりにも
程があつたか。最後の「くい」だけ、最速で繋いでみたが「き」に
聞こえなかつただろうか。

一文字を続けて言うだけで尋常ではない集中力を必要とするので、
滅多にできない荒業なのだが。

「しとうあんあい……き？」

「うん うん」

今はこれで満足するしかない。

いつか、もっと流暢に話せる日が来たら、正式に名乗らせてもら
うことにしよう。

夏の自動販売機

夏だ。燦々と容赦のない日差しが降り注ぎ、ハンター協会前に勢いで作った氷の山に人が群がっている。

直射日光が当たっているので一時間も持たないだろうが、あるとないのでは雲泥の差があるらしく、氷の山を人々が取り囲んでいる。今年の夏は例年と比べてかなり気温が上昇しているらしく、早めに集落を取り戻したのは間違いではなかったようだ。この状況で屋内に閉じ込められていたら、戦う気力は残っていなかったかもしれない。

集落内の残党も暑さにやられているらしく、殆どが水場に居たので退治も楽だったそうだ。そろそろ、集落内の魔物掃除は終わると熊会長が言っていたな。

順調に事が運んでいるが、この暑さをどうにかしないと復興作業が一向に進まない。

それに、夏祭りで少しは気分転換できたとはいえ、何かしらの娯楽というか住民のやる気を促すような、楽しみを提供出来ないかとずっと考えていた。

それが暑さ対策になれば、尚良しなのだが。

「ハツコン、ただいまー」

おっ、集落の見回りに参加していた、ラツミスが昼になって一旦帰ってきた。今日は珍しく一緒じゃなかったのは、住民の暑さ対策として残っていたからだ。

ハンターは身体づくりが一般市民とは違い頑丈なので、この暑さにも耐えられている。だが、住民の特に女子供は先日までの緊張

感とこの暑さで、体調を崩している者が続出しており、冷たい氷やスポーツドリンクを常に供給している。

「お か だ よ」

お帰りと言えないもどかしさがあるが、ちゃんと答えられるだけでも進歩したと、自分を褒めておこう。

「あつついねー。こういう日は川とか池で水浴びしたいけど、外に出るのはまだ危険かなあ」

魔物たちが撤退したとはいえ、いつもと比べて魔物の数が激増しているらしく、王蛙人魔まで数体うろついている状況で、壁の向こうに行くのは危険と判断されている。

門番ズが見張っていた集落の入り口にある門は、あれから一度も開いていない。

水遊びか。夏の定番といえばプールや海。海や川は無理だとしても、プールぐらいは何とかならないだろうか。

水なら俺が提供できる。なんなら氷を放り込んで溶かせばいいだけだ。

となると、場所と穴掘りか。都合よく大きな穴でもあれば、直ぐにでもプールが作れるのだけだ。

「かあーあつちいな。ハッコン、アイスクレルか。あの部屋、風も通らねえから、暑くて暑くて」

いつもの黒衣を脱ぎ捨てたヒュールミは、長い髪を後ろで束ねている。

「ご苦労様です。冷たいスポーツドリンクも提供させてもらおうよ。」

「ふいい、すまねえな。かああつ、蘇るぜっ」

「お疲れさま、ヒュールミ。転送陣の方はどう？」

「あと一歩つてところだな。完全復活はまだ先だが、もう少し弄れば二、三人なら転送陣で飛ばせるようになるかもしれねえ」

それは良い知らせだな。熊会長も喜ぶだろう。

毎日、転送陣を相手に悪戦苦闘しているヒュールミ。強がってはいるが夏バテ気味なんだよな。頭も体も一度リフレッシュさせてあげたい。

「あら、美味しそうですわね。私もいただけませんか？」

そう言つて、歩み寄ってきたのはシャーリイだった。袖のないシヤツと短パンで、いつものイブニングドレス姿とは違い、健康的な美を感じさせる。

とはいえ、短パンはかなりのローライズで、胸元も大きくカットされている。なので、道行く男たちの視線が彼女に集中しているのは、無理のないことだと思つた。

「シャーリイさんつて、そういう格好も似合うよね」

「だ、大胆な格好だな。男どもがじろじろ見ているぞ」

「うふふ。ありがとう。今は娯楽も少なく、夜の商売をする時期でもありませんからね。殿方の目を少しでも楽しませているのであれば、本望ですわ」

男性陣の目線に気づいたうえで、肌を露出しているのか。シャー

リイなりにこの集落に貢献しているのだな。男性代表として礼を言いたいぐらいだ。

「ありがとうございます。ハッコンさん」

バニラアイスを提供すると、お礼の言葉と共に妖艶な笑みを返してくれた。

「はああ、美味しい」

棒の刺さったバニラアイス舌で丁寧に舐めている。

遠くからこつちの様子を窺っている男たちが、ごくりと喉を膨らまし、彼女の口元に視線が集中している。

ワザとじゃないよな。髪を手で掻き上げながら、アイス舐め回す姿が妙に色っぽいのは、ただの偶然だよな。どうにも、彼女なら狙ってやっているのではないかと思ってしまう。

「あ、そうでしたわ。熊会長が何処にいるかご存じありませんか。あそこの、陥没している地面をどうするか、指示をいただきたいです」

食べ終わったアイスの棒で刺す方向には、テントが並んでいるのだが、その裏に陥没した地面があるというのか。そんな場所あったけ？

「あー、ハッコンが巨大な建物みたいなになって、落下した跡か」

「あっ」

犯人は俺か。巨大な氷自動販売機で上空から落下すれば、そりゃ地面凹むよな。復興作業中の皆様にはお手数をおかけします。

ってあれ、その穴って結構な大きさがあるよな……プールに利用できないか。

ラッミスに連れて行ってもらうことも考えたが、昼からも見回りだからやめておこう。それに、帰って来た時のサプライズとして自力でやれるだけやってみよう。

休憩が終わり、各自が持ち場に散っていった。俺は広場の氷を増量して、その上に飲み物を置いておく。

よっし、一人で移動するぞ。今の俺は自力で動くことが可能だ。風船、ダンボール、結界、浮かぶの流れでぶかぶかと空中を漂いながら、眼下の映像を確認する。

綺麗に四角く地面が陥没している。水を溜めるには十分な深さが確保されているな。水を入れるにしても、満杯にはしないでおこう。子供が落ちたら危ない。

風船の数を調整しながら、穴の縁に降り立つ。

高圧洗浄機 に化けて流し込んでもいいけど、あれって噴射口が狭いから水量最大にしても、溜めるまでに時間がかかり過ぎる。

いっそのこと温泉のお湯を流し込もうか。いや、ただでさえ暑いのに広場近くに、温泉できたら怒られそうだな。となると、やっぱり氷を入れて溶かすか。

あの自動販売機になるとポイントの消費が激しいのだが、普通の氷自動販売機 だと二時間縛りの時間を越えそうだからな。結

界 を張らなければ、消費ポイントは抑えられるので、何とかなるだろう。

巨大な 氷自動販売機 に変化すると、大量の氷を凹みへ投入する。

やっぱり流れ落ちる量と速度が違うな。物の数分で穴が氷で満たされた。素早く元の姿に戻り、ポイントの確認をする。

ポイントの消費は……許容範囲だな。後は氷が溶けるのを待つだけだ。ここまで暑ければ、皆が帰ってくる頃には水に戻っているだろう。

おっと、さつき巨大化したから、驚いた住民が数人やってきたか。まだ、プールとしては使えないけど涼むには最適かもしれないな。結局、この穴に敷き詰めた氷は、俺が予備で氷を溜め込んでくれていると勘違いしたようで、住民たちは戻っていった。

じゃあ、俺もいつもの定位置に戻るとしますか。

「疲れたあああああ。ただいま、ハッコン！」

「そろそろ、干からびるぞ、こんちくしょう！」

ラツミスは瓦礫の向こうから、ヒュールミはハンター協会から、疲れ果てた表情で現れた。

「お か だ よ」

見回りと掃討に向かっていたハンターたちも全員帰ってきたか。陽が沈むには、まだ少し早い。暑い日に無理をし過ぎると、身体を壊す羽目になる。

「冷たい水をくれええ」

「俺はあの甘くて冷たい奴を」

「この一杯の為に生きているのよおお」

疲れ果てた人々が、アイスと冷たい飲み物を求めて俺に群がってきたな。

ここで、俺の取る行動は一つしかない。風船を作って、上空への緊急退避！

「ちょ、ちょっと、ハッコン何処に行くのっ!？」

ふわふわと浮かんで流れて行く俺を、みんなが追いかけてくる。低空飛行でテントの隙間を抜けて、目的地へと誘導すると全員が目を見張っている。

氷が全て溶けて、丁度いい具合に水を湛えた臨時プールが目の前に広がり、どうしていいのか戸惑っているようだ。

「うわー、おっきな水たまりだー」

子供が歓声を上げて飛び出し、簡易プールに飛び込んでいく。深さは子供の肩ぐらいいままでので溺れることもなく、元気にはしゃいでいる。

「お母さん、すっごく気持ちいいよー!」

そんな子供の姿を見て辛抱ができなくなった若者が、次から次へとプールへと誘われていく。

「よーし、うちらも行こう!」

「ちょ、ちょっと待ってっ!」

ラッミスに手を掴まれ、強引に引つ張られていくヒュールミが抵抗虚しく、プールへ沈んでいった。

大人たちは縁に座り、足だけをプールに突っ込んで涼んでいる。シャーリイは一度中に入ってから、直ぐに出てきた。水で濡れたシャツがピッタリと体に貼り付いている。抜群のスタイルが更に際立ち、更に黒い下着が透けて見えているが、気にしている素振りはない。

「というか、絶対ワザとだと思う。」

プールの縁で足だけ水に入れている、スオリがいるのだが、飛び込みたくてうずうずしているのを、何とか自制しているようだ。

「何しているの。ほら、入ろ、入ろ」

「べ、別にわらは水遊びに興味わあああああ」

言い訳の途中で強引に引きずり込まれたな。見事な水飛沫が上がっている。

楽しそうに遊ぶ子供たちや、涼んでいる大人を見つめながら、やってよかったなと実感していた。

次の日。夜中に汚れた水を全部消したので、新たに水を入れようと思い、プール脇まで移動すると、復興作業を後回しにして、綺麗に石を敷き詰めプールを整備している大人たちがいた。

「どうやら、思っていた以上に好評だったようだ。」

選抜メンバー

最近は集落もかなり落ち着いてきている。

魔物は全て倒したようで、一応見回りは続けているが、この二日一体も見つけていない。

お手製のプールはヒュールミが以前発明したポンプのような魔道具を使うことにより、近くの井戸から直接水を流し込むことが可能になったので、俺が氷を入れる必要が無くなった。

清流の湖階層は水が豊富なので井戸水が尽きることはないらしいので、プールは毎日使用可能となっている。

排水用のポンプも設置しているので、水の入れ替えもバッチリだ。

この階層に戻ってきてから二週間以上が過ぎようとしている。清流の湖階層は騒動が嘘のように活気のある日常が戻りつつある。

あの酷い状況からここまで、よく立ち直れたものだと感じるが、これはこの階層に限ったことだ。他の階層がどうなっているのか連絡を取る手段もなく、同じように魔物を追い出していることを願うのみだ。

ここが平和であればある程、他の階層が気になってならない。いや、行ったこともない階層は正直、そんなに心配はしていない。俺が気に掛けているのは始まりの階層だ。

園長先生と孤児の子供たち。そして、愚者の奇行団。彼らがいるから、何とかやれていると思いたいが……。

「ハッコン」

っと、考え込み過ぎていて周りが見えていなかった。隣には真剣な表情のヒュールミとラツミスがいる。

「今から臨時の会議だ。参加してくれ」

「運ぶね」

これは、転送陣の修復が終わったのかな。だとしたら、ようやく救助に向かえるのか。そう思いながらも口に出すことはせずに、ラツミスに背負われて扉を潜った。

ホールには既に人が集まっっていて、全員が熊会長に注目している。「ハツコンも来たようだな。では、ヒュールミ説明を頼んでもいいか」

「構わねえぜ」

ヒュールミが熊会長の隣に移動した。やはり、転送陣関連っぽいな。

「全く移動できなかった転送陣を、オレと爺さんで何とか復旧させた」

「おおおおっ！」

人々がにわかに活気づくが、それをヒュールミが手で制した。

「落ち着いてくれ。話には続きがある。ただし、外とは未だに繋がらず、ダンジョンの外に直接転移することは不可能だ」

何人かは不満そうな表情を見せているが、大半はこの階層で長く暮らしている古参の住民なので、そっちは平然としているな。

「それも、今の調整だと無理やり他の階層と繋ぐとしても、一か所が良いところだと思う。更に、送れる人数は多くて三名ってところだ」

完全に制御できたわけではないのか。それでも、少人数でも送り込むことが可能で、階層の様子を見て情報を集められるのは、かなりの進展と言えるだろう。

「でだ、問題は誰を送り込むか。そして、どの階層に行くか。それを話し合いたい……で、いいんだよな、会長」

「ああ、そうだ。しかし、皆には悪いが送り込む階層は既に決めている。始まりの階層だ」

「会長や。その理由は話してくれるのじゃろうな」

お爺さんがすつと立ち上がり、鋭い眼光を熊会長に向けている。

「もちろんだ。始まりの階層は外と直接繋がっている、唯一の場所だ。あそこが一番生存率が高いと見て間違いがないだろう」

そついや、始まりの階層には巨大な扉があつて、その先にある巨大な階段で地上と繋がっているのだったか。転送陣に不具合が生じているとしても、地上と繋がっているのなら住民の退避も増援も容易か。

「今、転送陣はこちらからの一方通行となっている。向こうの転送陣も何とかすることにより、こちらとの行き来が可能になる筈だ。その為に送り込む人員の一人を、魔道具技師であるヒュールミとし

たい」

「ああ、わかっているぜ。オレじゃないと、こっちの魔法陣と繋がられないからな」

定員三名の内、一名はヒュールミで決定なのか。

「そして、ラツミスとハツコンにも頼みたい。防衛能力に優れた結界と食料が提供できることが、何よりも大きい。ラツミスはハツコンを運び、その力で皆を救ってやって欲しい」

「うん、いいよ。孤児院のみんなと、愚者の奇行団も心配だったから、立候補するつもりだったからね。ハツコンも大丈夫？」

「うん いらっしやいませ」

俺で力になれるなら、喜んで参加させてもらおうよ。

保存の利く食料を大量に出しておかないとダメだな。今のところ食事の殆どを俺がまかっている状態なので、最低でも一ヶ月ぐらいは耐えられる量を提供しておこう。

水は充分すぎる程に確保できているので、糖分の補充を考えて甘いジュースと、熱中症対策のスポーツドリンクも必要かな。

「それで、定員は後一人となるのだが、立候補、もしくは推薦はないだろうか」

ハンターたちが顔を見合わせて、話し合いが始まった。

参加したいと思っているハンターも少なくはないようだ、自分では力が足りないのではないか、といった声が幾つも聞こえてくる。転移先の状況が掴めない今、必要とされているのは戦力。それは

熊会長が口にしなくても全員が理解していた。なので、自然とこの場の強者に視線が集まっっていく。

一人は熊会長。強さは目の当たりにしたので、実力は問題ないのだが、熊会長にやるべきことが山積みだ。

お爺さんとお婆さんもチラチラ見られているな。この二人はどちらも、このメンバーではトップクラスなのだが、高齢なのであまり無理をさせたくないという気遣いと、回復力の遅さがネックだ。

特にお爺さんは、こっち側に残って魔法陣の操作や解析を、引き続き担当しなければならぬので、選ばれることはないだろう。それに、孫娘と引き離すのは申し訳ない。

となると、門番ズは守りの要なので清流の湖階層に残ってもらいたいし、大食い団は探索能力に長けているが、純粋な戦闘力となるとあと一歩って感じか。

多くの人が俺と同じ考えに至ったのか、消去法で一人に視線が集中した。彼も自覚していたのだろう。その場に立ち、自ら立候補するようだ。

「微力ではありますが、私も共に」

イケメンモードになった、ミシユエルの申し出を断る理由はなく、満場一致で最後のメンバーが決まった。

ちなみに後で、ミシユエルが零していたのだが、

「ハツコン師匠や、少しは仲良くなっていただいた、ラツミスさんとヒュールミさんがいなくなったら、私はどうしたらいいんですかっ！」

と、コミュ障全開で迫られた。

確かに、他の人とは、そんなに打ち解けてないからな。ここで取り残されるのは、彼にとっては拷問のようなものなのかもしれない。

最後の調整があるので出発は明日の早朝ということになり、俺はハンター協会の地下保管庫に食料品を積んでいく作業をしている。

缶詰の食べ物は賞味期限が長いから、こういった場面で本当に助かるな。缶詰パンとおでんを山盛りにして、他にも長期保存が利く食べ物は……カップ麺だな。これも一ヶ月ぐらいなら余裕で食べられる。

栄養バランスが気になるから、栄養補助食品であるカロリーなちやらも、大量に用意しておこう。そうなると栄養ドリンクも必須か。

「商品ごとに並べて置くよー」

「おねがい」

ラツミスが嫌な顔一つせずに運んでくれている。

「この煮物のやつ、もっと増やそうよ！ これって何て言う食べ物なんだろう」

「おでん」

「へえー、おでんって言うんだ。もっと、肉ばっかりのないの？」

「ペルは肉ばっかりね。私は果物がいっぱいなのがいい」

「スコだって甘い物ばっかりじゃないか。ボクはリーダーとして、気軽に食べられるイモのお菓子がいい」

「ミケネ、リーダーは関係ないだろ。個人的にはしゅわしゅわした飲み物を増やして欲しい」

大食い団も手伝ってくれているのだが、何かと要求が多い。今後の食生活に関わることなので、彼らにとっては命と同等の価値があるみたいだ。

冷凍食品を保存できる設備があれば、彼らの好物である、から揚げや他の食品も置いていけるのだが、夏場のこの状況では一日も経たずに腐るよな。

保管庫はかなりの容量があるので、満タンにしたら二ヶ月以上余裕でもちそうだ。それに、もう少し生活が安定したら、外に狩りに行く予定にしているらしく、自給自足で食料を得ることも可能になる。

この階層の心配はしなくていいと、熊会長も後押ししてくれたので、後の心配はせずに始まりの階層に集中できそうだ。

「ハツコン。始まりの階層どうなっているのかな。みんな、無事だ」といいけど」

食料品を運ぶ手を休めずに、ラツミスが顔を曇らせて呟く。

最悪な展開もあるかも知れないと覚悟はしているが、園長先生に患者の奇行団が揃っていれば、案外どうにでもなるのではないかと、楽観視している自分も同時に存在している。

地上と繋がっているのであれば、最悪全員地上に逃げてから、外からもう一度進行すればいい話。本来は外への扉を潜るには通行料が必要らしいが、この非常事態だ無料で開放されているだろう。

「あんしん」

「だんちゅう」

「もまもりに」

「そうだね。愚者の奇行団の人たちって、逆境にも慣れたと言っ
たもんね。うん、大丈夫」

言葉足らずだが、何とか伝わったようだ。

愚者の奇行団の面々がそう簡単にやられるとは、俺も思っていな
い。

だから、大丈夫。そう、大丈夫と信じるしかない。

援軍

「ラツミス、ヒュールミ、ミシユエル、そして、ハツコン。向こうの様子が全くわからない状況で送り出すのは申し訳ないが、これはとても重要な任務だ。が、しかし、最優先事項は言うまでもなく、己の命。危ないと思ったら、まず身の安全を確保する様に。本当に辛い任務になるかもしれない。だが、皆なら無事に戻ってきてくれると信じている」

ハンター協会のホールで熊会長が、俺たちに激励を飛ばしている。本当は危険な役割は自分がやるべきだと、熊会長は思っている。だが、こんな惨事があった後で清流の湖階層を離れるわけにはいかない。

「うん、大丈夫だよ、会長。みんなもいるから、死んだりしないって！」

「わが身に懸けても、守ってみせます」

「何とかこつちと繋がるようにしてみるから、そしたら援軍期待しているぜ」

「まかせて」

この面子なら、逆境に陥っても何とか凌げそうだ。

熊会長の推測によると、始まりの階層の危険度は低いらしい。

ダンジョンは町にとって大きな収入源だという話だった。多くのハンターを呼び寄せ、外とダンジョン内での物資の流れが出来上が

っている。

それを全て失う訳にはいかず、また、ダンジョンの魔物が溢れ出してくることになるかと町が消滅しかねない。それを、放置する馬鹿はいないだろう、とのことだ。

加えて、捕まえた指揮官からの情報によると、各階層に冥府の王の配下が一人ずつ配置されているそうで、彼らの持つ趣味の悪い骸骨の指輪を壊せば、魔物たちは支配から逃れられる。

現地で、その情報を伝えるだけでも充分な価値がある。進んで無理をすることはないと念を押されていた。

第一目標は始まりの階層の情報収集。

次に、戦力の補充と足りない物資の提供。そして、転送陣の正常化。

転送陣が元に戻り、始まりの階層が維持できないと判断した場合、清流の階層に人々を連れて逃げてくるように言い渡されている。

身を案じてくれる住民の言葉を背に、俺たちは転送陣へと繋がる廊下へと進んだ。

全員の顔には緊張の色が見えるが、気負い過ぎているという訳でもなさそうだな。

「まずは、みんなが無事か確認だよな」

「そうですね。状況によってはすぐさま戦闘に入る可能性もありますので、注意してください」

「その時は、ハッコン頼むぜ。信頼しているんだからなっ」

「まかせてよ」

ポイントにはまだ余裕がある。 結界 は数時間、軽く持つだろ

う。

近くにさえいてくれたら、全員を守ってみせる。

「じゃあ、いくぜ。覚悟を決めやがれ」

屈みこんだ、ヒュールミが転送陣に触れると眩い光が足下から溢れ出し、全員が目も眩む光に包まれた。

毎度おなじみの浮遊感が無くなり、光が消え去ると同時に、俺は念の為に 結界 を発動させた。いきなり襲われる可能性を考慮して。

光が消えた視界に飛び込んできたのは、始まりの階層の転送陣が置かれている部屋の内部だった。壁も天井も健在だということは、ここまでは魔物が侵攻していないということなのだろうか。

「足下に幾つもの足跡がありますが、これは魔物ではなく人間ですね」

ミシユエルの言う通り、清流の階層と同様に転送陣で逃げようとしたと思われる、人々の足跡が床を埋め尽くしていた。

やはり、転送陣が動かなかったということなのか。

「まずは、ここから出て、集落の様子を調べようよ」

「そうだな。ちょっと待ってくれ。ハッコン用の特製背負子を作っておいたから、これを取りつけて、よっし、バッチリだ」

今、ラツミスが背負子を使って俺を乗っけているのだが、ヒュールミは俺を挟んで背中合わせになるように、もう一つ背負子のような物を取りつけたのだが、それは鉄製の座椅子のように見えた。

「よいしょっと。座り心地も悪くないな。ラツミス、追加でオレも背負ってもらうことになるが、構わねえか？」

「余裕だよ。振り落とされないように気を付けてね」

「対策してあるから、気にせずガンガン動いて構わねえぜ」

ヒュールミは胸の前で交差するベルトをしっかりと取りつけている。シートベルトと同じか。

つまり、ラツミスは俺だけでなく、取りつけた椅子に座っているヒュールミも運ぶこととなったわけだ。これ、第三者目線から見たら、かなりシユールな光景かもしれない。

あつ、ミシユエルが苦笑いを浮かべたまま、言葉に詰まっている。でも、このおかげで 結界 の範囲にヒュールミが入ることとなり、守りやすさは格段に上がった。見栄えよりも安全性だよな。

物音を立てないように、ゆっくりとミシユエルが扉を開いていく。隙間から光が入り込むと、ほぼ同時に僅かながら争う音が流れてきた。

怒声と意味不明な叫び声。距離があるようで完全には聞き取れないが、片方が人間で、もう片方は……魔物で間違いない。

「誰かが戦っているようです。急ぎましょう！」

慎重にしている時間も惜しいと判断したようで、ミシユエルが扉を豪快に開け放つと飛び出していった。正義感が強いのは個人的には素晴らしいと思うが、当初の目的を完全に忘れてる。

情報収集が最優先事項だというのに。

「うちらも急いごう！」

まあ、俺の相方はミシユエルよりも更に上に行くけど。

続いて飛び出した、ラツミスの背に揺られながら、辺りの様子を観察する。

始めの階層は清流の階層に比べて立派な建物が多かったのだが、何処かしら損壊している建物が多いな。

だけど、損傷度は清流の階層程ではなく、少し手を加えれば住むことは可能な感じだ。

人間も魔物も死体は見当たらず、武器防具が転がっていることもなく、荒れてはいるが壊滅状態だとは思えない。

「一度攻められたが、何とか巻き返したといった感じか……」

「だね」

俺もそう思ったので相槌を打っておく。

声が響いてくる方角は集落からダンジョンへと繋がる唯一の出入り口からで、本気走りのラツミスが速攻で駆けつけると、丸太や木材を括りつけたバリケードが築かれていた。

ハンターたちがバリケードの隙間から槍を突き刺し、魔物たちを追い返そうと懸命な防衛を続けている。

その陣頭指揮を執っていたのが俺たちの良く知る人物、愚者の奇行団、ケリオイル団長だった。

「槍でずこずこ刺しちまえ！ 疲れたらすぐに言えよ。次の奴と交代だ」

声だけで判断するなら疲労を感じないのだが、服の汚れ具合と少しやつれている頬を見る限り、楽な状況だとは口が裂けても言えないな。

「団長！ 援軍に来たよーっ！」

「おおおっ、ラツミスと……ハツコンじゃねえかつ！ よく来たな、待ち望んでいたぞ、こんちくしょうっ！」

え、何でケリオイル団長は絶叫を上げて、今まで見たことのない満面の笑みで俺の体をガンガン叩いているんだ。気持ち悪いぐらいに歓迎されているぞ。

「挨拶は後だ、悪いがまずは食い物と飲み物を大量に出してもらえねえか」

それが目的の一つだから断る理由は無い。疲れているようなので、スポーツドリンクとすぐ食べられて大量に提供しやすい、おでん缶やパン、その他の缶詰食料品をずらっと並べた。

「おい、てめえら飯が来たぞ！」

ケリオイル団長の大声に反応して、近くの建物や路地裏から次々と人が飛び出してきた。

その数、ざっと四、五十人ぐらいか。ポロポロの服に血走った瞳。俺の前に置いてある飲食物品を指して、全力が一斉に駆け寄ってくる。

リアルゾンビ映画のような光景だ。

「飯だ、飯だっ！」

「何日ぶりのまともな食い物か」

「み、水、水を誰かつ」

碌に食事がとれていなかったのか、商品を奪い合いそうな勢いで手にしている。

これじゃ、全然足りないぞ。考えるのは後だ、今は最速で商品を取り出すことに集中するのみ。

素早さを最大限に生かして、途切れる間もない勢いで飲食物品を流し、念動力で素早く目の前に並べていく。

暴動が起きないように、やってきた他の患者の奇行団の面々が人々を並ばせて、決まった量を手渡している。

「食料は充分にある！ 焦る必要はねえっ！」

説得というより怒鳴りつけている、ケリオイル団長の言葉が浸透したようで、人々が列を成して並んでいる。

不満そうな表情の者もいるが、患者の奇行団の強さを理解しているのか、渋々ながらも従っている。

「マジで助かったぜ、ハツコン。かなり、節約していたが限界が近くてな。正直、最悪な選択をするか、真剣に考えていたところだった。ハツコン様には足を向けて眠れねえぜ」

最悪な選択という言葉に引っかけたが、ここは追及しない方がいい気がする。

「だんちやう」

「お、なんだ、ハツコン」

「かいだん」

「階段？ ああ、地上に繋がっている階段の事……おおっ！ 何しれっと会話してんだ。話せるようになったのか！」

「うん」

目を剥いて迫る、ケリオイル団長の顔が目の前にある。珍しく、本気で驚いているようだ。そういや、俺が話す前に別れていたのだったか。

「ハツコンの説明は後だ。今は現状の確認を優先だろ。そもそも、何で食料がねえんだよ。地上と行き来できるだろ、ここは」

俺とケリオイル団長の間割り込んできたのは、ヒュールミだった。地上と繋がる大階段があるって話だったよな。

「お、おう。そうだな。気になるが、ハツコンは後回しだ。それがよ、あの大扉、びくともしやがらねえんだよ。逃げることもできねえし、補給も断られた。俺たちが何とか敵を追い払い、集落の外まで追い返したんだが、食い物が無ければどうしようもねえからな」

こつちもギリギリだったわけか。俺が第一陣に選ばれたのは正しかったようだ。

詳しい説明もお互いの情報提供も後にした方が良さそうだな。飢えた人々に配り終わったら、涎を垂らしたまま俺を凝視している、シユイに腹一杯食べてもらわないと。

大食いの彼女にしてみれば、この状況は他の誰よりも辛かったことだろう。早く何か食べさせないと、俺ごと齧られそうな身の危険を感じる。

よ、よっし、ちと全員に食料が行き渡るようにしないと！

現状の確認

「つまり、あれか。地上と繋がっている扉が開かねえから、物資もこなけりゃ、人員の補充もねえってことか」

「そういうこつた。俺たちが、この階層に来た時は、もう酷い有様でな。戦闘の真っ只中に飛び込んで、集落内の魔物を何とか押し返したんだが」

焼きおにぎりを齧りながら、ケリオイル団長がカフェオレを豪快に流し込んでいる。

おにぎりにカフェオレという組み合わせに眉をひそめそうになったが、眉がなかった。それに、最近では弁当にコーヒーという組み合わせも珍しくない。

食べる姿を観察しながら、ヒュールミとケリオイル団長の言葉遣いって似ているな。と、どうでもいいことを考えていた。

「団長は食事を続けてください。説明を引き継ぎますので」

「わりいな、後は任せた」

フィルミナ副団長が変わってくれるのか。さっき渡した、たこ焼きを既に食べ終えたようで、口元についた青のりをハンカチで拭いている。

「では、続けますね。始まりの階層はハンターが多いのですが、初心者ばかりなので一斉に押し寄せてきた魔物に対処できず、尋常ではない被害が出ています。我々が来るのがもう少し遅ければ、壊滅

していたかもしれせん」

そうだよな。ここは初心者御用達の階層であって、実力者はもつと上の階層に進んでいる。本来、愚者の奇行団と園長先生のような強者は、この階層に見向きもしない。

「園長先生と孤児院の子供たちも無事で、ほんっと良かったよお」

ラツミスが園長先生と再会した時のことを思い出したようで、鼻をすすって涙ぐんでいる。

俺が食べ物を配っている時に、列に並んでいた園長先生と子供たちを見つければ、ラツミスが駆け寄って再会をひとしきり喜び合っていたからな。

正直、絶望的ではないかと思っていた、孤児院の子供たちが無事だった理由は、園長先生のおかげだった。

園長先生は始まりの階層を離れる際に、信用のおける元ハンター二人に頼み込んでいたのだ。自分のいない間、孤児院に滞在しておいて欲しいと。

何か不測の事態があったら、地下室に子供たちを匿って欲しいと、隠された地下室の場所も開閉方法も伝えてあったそうだ。

園長先生に言わせると、

「もしもの時の対策は、ハンターとして、子供を育てる身として当たり前前の備えですよ」

と、穏やかに微笑んでいた。

対策をしていたとはいえ、子供たちの身を案じていたようで、転送陣で移動した後の園長先生の戦いぶりは鬼気迫るものがあつたそうだ。愚者の奇行団は声を掛けることすら出来なかつたと、肩を抱きながら紅白双子が語っていた。

一矢で何体もの魔物を貫き、孤児院まで続く道には、息絶えた魔物の血塗られた道が出来上がっていた。偶然、その光景を目撃した人々から情報が伝わり、それ以来、園長先生の発言には誰も逆らわなくなっただけらしい。

「入り口を塞いでからは、隙間から槍や武器で突き刺し、何とか追いついていていいところですよ。この戦い方であれば、戦場に慣れていないハンターでも対応できますので」

だから、完全に通路を塞ぐのではなく、柵の様に組んでいたのか。始まりの階層が最悪の展開を免れた要因の一つは立地だろう。集落から奥へと繋がる道が一本で、その道幅が狭いのも幸運だった。五メートルあるかないかぐらいか。

敵が来る方向が決まっています、一気に押し寄せるには道幅が狭すぎる。そこさえ防いでしまえば、魔物からの侵攻が抑えられる。

「敵の脅威は取り除けたのですが、今度は食料問題が発生しまして。ここは、ダンジョンの観光で来る人々目当ての飲食店があるので、ある程度の食料は確保できたのですが、流石に一ヶ月も経つと、需要に供給が追い付かなくなり、困り果てているところでした」

「ハツコンがもう少し来るの遅かったら、あのバリケード破壊して打って出る予定だったんだよな、赤」

「そうだね、白。ちょっと奥まで行けば、魚の捕れる湖があるからね」

紅白双子は満腹になったようで、腹を擦りながら地面に寝っ転がっている。と思ったら寝息が聞こえてきた。腹が満たされて緊張が解けたのか。

愚者の奇行団と言えば、もう一人、シュイがいるのだが……食事の最中だ。

食べ終えた、食べ物の器や包装紙、それに空き缶と空になったペットボトルが、彼女専用の絨毯の様に取り囲んでいる。

もう、何人前食べたのかも不明だが、未だに食欲の限界が見えず、一心不乱に掻き込んでいる。

「ひひゃひゃへっふ！ ひひゃひゃへっふ！」

口の中に物を入れながら叫ばない。何を言っているのかは不明だが、ソースで汚れた顔には至福の笑みが浮かんでいるので、喜んでいることだけは確かだ。

「シュイ姉ちゃん、もっと落ち着いて食べなよ」

「うんうん、お行儀悪い」

「んぐつ、すまないっす」

孤児院の子供たちに怒られて、バツが悪そうに頭を掻いている。

孤児院たちの子供たちが一人も欠けることなく、こうやって軽口も叩ける現状。何とか間に合ってよかったと、口があれば、ほっと安堵の息を吐いているところだ。

多くの被害者が出たのも知っているが、それでも見知った人たちが無事だったことを、純粹に嬉しく思う。

「まったく、シュイは食事が絡むと、我を忘れるところは変わらぬのね。ハッコンさん、食事を提供してくださって、本当にありがとうございます」

シユイを咎めるような事を口にしてはいるが、目尻の下がった目で彼女たちを見つめている。声の響きにも隠しきれない喜びが残っていた。

「よ かつ た ね」

年上に対する言葉遣いとしてはどうかと思うが、俺の使える言葉からのチョイスではこれが精一杯なので、勘弁してもらおうしかない。

「ハツコンさんも、不完全とはいえ、会話できるようになって、良かったですね」

「ありがとうございます」

ただたとしくても、会話が成立するというのは嬉しいものだ。会話ができなかった時期が長かっただけに、しみじみと実感する瞬間が頻繁にあったりする。今のように。

「くはあああつ、久々に満足した飯だった。マジでありがとうございます、ハツコン」

ケリオイル団長が親指を立てて右腕を突き出し、白い歯を剥き出しにして笑っている。

当初は胡散臭い男というイメージが強かったのだが、最近は俺の前でも自然な姿を見せることが増え、団長に対しての警戒心がかなり薄れてきているのが自分でもわかる。

「食料事情が改善された今、始まりの階層の防衛がかなり容易になった。ヒュールミは転送陣の調査に集中してくれ」

「おつさ、まずは清流の湖階層と繋がるようにするぜ」

向こうと行き来できるようになったら、戦闘要員以外は即座に避難させる予定にしている。

「んでだ、ここの指揮は一応、俺に一任されているが、今後の方針となると独断で決めるわけにはいかねえ……」と、噂をすれば何とやらってやつか」

視線を横にずらし、顎でくいつとやり、あつちを視ると言っているようだ。

釣られて視線を移動させると、鮮やかな赤で染まった女性用スーツを着た、女性がこちらに歩み寄ってきている。

この人って確か、始まりの階層のハンター協会会長だよな。

二十代後半でも三十半ばでも通用しそうな、年齢不肖な顔つきをしている。美人なのだが、一目で気が強いことが伝わってくる。

まつ毛が長く、きりつとした目元に、スーツの色に負けていない真っ赤な唇。癖の一切ない腰付近まで伸びた金色の髪。シャリーイに負けずとも劣らぬスタイルの良さ。

胸元に刺している万年筆は、会議の時に手にしていた物だろうか。足元はハンター協会らしいというべきか、真っ赤で頑丈そうなブーツを履いている。ハイヒールだと動きにくいからな。

「久方ぶりだな。ハッコンと呼ばれる魔道具。貴様のおかげで助かった、礼を言う」

ヒュールミとは方向性の違う男っぽさを、この女性から感じる。

「ハッコンとヒュールミは知っていると思うが、始まりの階層のハンター協会会長だ」

「会長だと清流の会長と被って面倒だろう。始まりの会長とでも呼んでくれ。本名は伏せさせてもらおう」

地位の高い人だと、名前が知れ渡るのには不都合があるのかもしれない。

「今後の方針なのだが、転送陣が清流の湖階層と繋がり次第、ここを放棄して全員移動させる。清流の会長から許可は貰えているようだからな」

あっさりとその階層を捨てると断言した始まりの会長に、声が聞こえる範囲にいた全員が一斉に振り返っている。

「丁度いい、皆、聞いてくれ。この階層に留まるのは得策ではない。食料を提供してくれる魔道具のハッコンがいれば、防衛を続けることは可能かもしれない。だが、彼もいずれは清流の湖階層に戻らねばならぬ。そうだな」

「うん」

「食料を定期的に運んでもらえばいいと考える者もいるかもしれないが、転送陣は不完全な状態だ。一時的に復旧することは可能かもしれないが、いつそれが使えなくなるとも限らない。ならば、使用可能な内に、皆を安全な場所に移動させておきたい。ここを手放すのは身を切られる様に辛い。だが、キミたちの命と天秤に掛ければ、おのずと答えは決まる」

熊会長と同じ考えか。この階層のハンター協会会長も人命を優先するまともな人のようだ。

生存者は清流の湖階層と同じぐらいだと言っていたので、それぐらいの人数なら受け入れ準備はある。復旧するには人手が足りていないと熊会長が零していたので、歓迎されるだろう。

「それも、転送陣が復旧してからの話だ。今はこの階層を守りきることだけを考えようではないか。あと少しの辛抱だ、共に乗り越えていこう！」

「おおおおっ！」

野太い男たちの声が集落を満たした。

始まりの会長は男性陣からの人望が特に厚いようだ。女性も呼応して拳を振り上げているが、男性陣の勢いに完全に押されている。

「この会長はな、ハンターに厳しくも優しい……つまり、アメとムチの使い分けが巧みで、野郎どもにはそれが効果的で、熱心な信奉者がいたりするんだぜ」

ケリオイル団長が口を近づけ囁く。その説明がすとんと胸に落ち、現状に納得がいった。

このノリ、アイドルのコンサートにいるファンに似ている。

説明を終え、各自が思い思いの場所に散らばっていく。

俺たちの役割は食料提供と、集落内に隠れている人や要救助者がいないか搜索。防衛は今の人員で充分補えるそうなので、今回は戦闘に参加せずに済みそうだ。

となると、本来の自動販売機としての活躍が期待されるのか。商品欄を厳選しておいた方がいいかな。

この階層は少し寒いくらいの気温なので、温かい食べ物とスープ類が喜ばれる。かき氷やアイスの出番はない。カップ麺も売り上げ

が期待できる。

って、代金を全くもらっていない。これって、始まりの会長に請求するべきなのだろうか。熊会長に支払いを求めるのは、違うしな。

「っと、ハツコンだったか。すまなかった、支払いがまだだったな。取り敢えず、金貨五枚で構わないか。ハンター協会が半壊していて手持ちがこれだけしかないのだよ。後で瓦礫を排除して金庫を掘りだすまで、待ってもらえないだろうか」

丁度それを聞きたかったので、ナイスタイミングだ。

「いいですよ」

飲食料品の提供だけなら、それだけで充分だ。好きなだけ飲み食いしてくれて構わない。

これで、商品を大盤振る舞いしても損はしないことが確定した。

何か新商品と機能を追加しても良さそうだ。ここでは自動販売機業務に専念できそうだな。

要救助者の選別

夜が明け、充分な量の食料を臨時の倉庫に運んでから、俺とラツミスは集落内の搜索に参加することとなった。

全員に食料が行き渡り、体力も気力も回復したハンターたちに余裕が出てきたので、本格的に集落内に残っている住民の搜索を始めるそうだ。

こういった作業となると鼻の利く、大食い団の面々がいると楽なのだが、まだ転送陣は未開通だ。ヒュールミの頑張りに期待するしかない。

清流の階層の荒れ具合と比べたら、ここはまだマシなのだが、倒壊した住居も当然あるので、瓦礫の撤去に誰よりも活躍しているラツミスが称賛されていた。

「清流の会長は良い人材を得ているな。それ程の怪力を有する加護を見たことがない」

始まりの会長が胸を支えるように腕を組み、感心している。

集落の地理に一番詳しい、始まりの会長が同行しているのだが、ラツミスの怪力がこれ程のものだとは思っていなかったようだ。大きく頷き、頭の天辺から足の爪先まで見回している。

「会長ー！ この屋根って何処にやっいたらいいの？」

民家の屋根を軽々と持ち上げ、ラツミスが問いかけている。

「ああ、隣の空き地にも放り捨ててくれ。人員の搜索が優先だからな」

「はい」

投げ捨てられた屋根が空き地に墜落すると、その振動で近くにいたハンターの足が一瞬だけ浮いたように見えた。

捜索に参加していた、他のハンターたちが大口を開けてラツミスを見つめている。清流の湖階層では当たり前前の光景なのだが、知らない人たちには刺激が強すぎたらしい。

「これは、思ったより早く終わりそうだ」

建設機械に匹敵する活躍を見せつけるラツミスのおかげで、住宅街の捜索がかなり楽になっている。

ただ、生存者が見つかることはなく、遺体だけが荷台に積み重ねられていく。

ラツミスは口をキュツと嚙み、遺体の山をじっと見つめている。

「気に病むことはない。お主が見つめてくれなければ、彼らの亡骸を葬ることも叶わなかった。この階層の代表者として礼を言う。ありがとう、ラツミス」

「うん、そうだね。うん、ゆっくり眠らせてあげないと」

「うん うん」

助けてあげられなかったのは無念だが、このまま誰にも知られずに腐り果てていくことと比べれば、幾分かは救われるだろう。

「やはり、生存者は絶望的か」

襲撃を受けてから一ヶ月以上が過ぎている。もし、瓦礫の下で奇跡的に生き残っている人がいたとしても、餓死している可能性が高い。

それを理解した上で、微かな望みに懸けていた始まりの会長だったが、どうにもならない現実を目の当たりにして大きく息を吐いている。

「会長、次は何処に行くの」

「そうだな……気は進まないが、あの場所へ向かうか。集落の北東へ」

「か、会長、あそこは行かなくても」

会長の隣にいたハンター協会の職員らしき男性が、顔色を変えて止めに入っている。

あの場所とやらに何かあるのか。職員の青ざめた顔を見る限り、ろくでもない場所であるのは確かだろう。

「そういう訳にはいくまい。凶悪犯を閉じ込めている監獄だとしてもな」

そういうことか。昔の日本だと火事などの災害時は罪人を解放するといった話を、時代劇で見たことがあるが、この世界ではそういった処置をしなかったようだ。

「ですが、食料は尽きているでしょうし、あそこは魔物がかなり暴れていた地点です。生存者は絶望的かと」

「酷いようだが、それならそれで構わん。ただ、混乱に乗じて逃げ

出している可能性もあるだろ。その方が問題だ」

集落内に犯罪者集団が潜んでいるとなると大問題だよな。今後の憂いを無くす為にも、調べておく必要はあるよな。ただ、それにラツミスを同行させるのはどうかと思う。

力があるとはいえ、まだ十代半ばの少女だ。万が一、生き残っていた場合、極悪人と触れさせるのは情操教育に悪い影響を与えらると思われる訳で。

それに、そんな危険な場所に向かうなら腕の立つ者を同行させるべきだ。

「せんりよく」

「たりねえ」

うぐつ、意味は伝わったみたいだが、言葉遣いが酷い。もう少し、穏やかな文章になるように頭を働かせないと。

「そうだな。この面子では万が一の事態に遭遇した場合、いささか頼りないか。一度戻ることしよう」

監獄に向かうことは決定事項か。もし、ラツミスが同行するのであれば、もちろん、俺も参加するが、どうにも心配だ。

一度、戻ってからメンバーを選別して、監獄へと向かっている。最終的に誰が行くことになったのかというと、始まりの会長。男性職員。シュイ、ミシユエル、園長先生、ラツミス、俺となった。

戦力不足の新人ハンターは最悪人質に取られると厄介なので、連れて行かないそうだ。ケリオイル団長にも来て欲しかったのだが、現場の指揮を執る人間がいなのは問題なので、防衛に専念してもらうことになった。

前衛にミシユエル、遠距離担当のシユイ、園長先生。守りの俺がいるので、生き残りの犯罪者がいたとしても守りきる自信はある。最悪の展開にはならないだろう。

「ちなみに、そこってどんな悪党が閉じ込められていたっすか」

目的地まで距離があるので、暇を持て余していたシユイが始まりの会長に話しかけている。

「普通の軽犯罪はハンター協会の地下牢に放り込むのだが、どうしようもないクズ共は全て、監獄から出さないようにしている」

「というと、殺人犯とかっすか？」

「まあ、そういった輩が多い。殆どが死刑囚だからな。老人や女性ばかりを狙った強盗殺人犯。魔物を殺している内に殺人の快感に目覚めた、元剣士の快樂殺人犯。あと、やばいのは……あっ」

何かを思い出したらしく、始まりの会長は右拳を左手の平に打ち付けている。

「アイツはどうしている。あの、変質者は」

「ああ、あの人ですか。何度言っても奇行を抑えることなく、反省の為にあの監獄に放り込んでいましたね。襲撃前に解放されているとは思いますが……その際の資料が紛失しています」

始まりの会長が苦虫を噛み潰したような顔しているぞ。職員も表現しがたい顔になっている。苦みを限界まで増した苦笑いとも言えればいいだろうか。

「始まりの会長。その変質者ってどんな人なの？」

シユイは既に興味を無くしたようで、最後尾を歩く園長先生と雑談をしている。その代わりに、ラツミスが疑問を口にした。

「興味があるか。奴はそうだな、変態だな。それも、かなり特殊な変態だ。人を傷つけることは一切していないのだが、男女問わず苦情が殺到してな。牢に入れても周囲に悪影響を与えるので、軽犯罪……迷惑行為ではあるが、本人も望んでいたのな、特別にあの監獄に放り込んだ」

説明を聞いて、益々その人物像が掴めなくなってきている。迷惑行為で周囲に悪影響を与える。更に男女共から苦情ということは、性犯罪でもなさそうだが。

それに、本人が自ら監獄行きを望むというのもおかしい話だ。

「あの、ガクベルの様な奴が、そう簡単に死ぬとは思えぬ。だが、解放されずに一ヶ月となると……」

ガクベルというのは日本でいうところのゴキブリに似た虫だ。見た目と性質もほぼ同じらしく、異世界でも嫌われている。

そこまで言われる相手か。怖いもの見たさで興味が出てきた。だが、牢屋に一ヶ月も閉じ込められているなら生存は絶望的だろう。

「死ぬ程の罪ではなかったからな。奴が生きているなら、解放せね

ばなるまい。閉じ込められていたら、だが」

軽犯罪の常習犯で捕まり、タイミング悪く騒動が起こったのか。

「この状況下ならバカなことやらんだろう」

始まりの会長が凄く嫌そうな顔をしている。死ぬことはないが、助けるのも嫌なのか。怖いもの見たさで益々、興味が湧いてきた。

一体、どんな人物なのだろうか。こんな風に嫌われるタイプの犯罪者か。露出狂、痴漢、といった性犯罪者というのが一番あり得そうだが、あの口調だと違う感じがする。

でも、男女から苦情が来ているとなると……男女共にいけるのか。とまあ、勝手に妄想しているが実際は大したことないというオチが待っていきそうだ。異世界では異質な犯罪だとしても、日本ではそんなに酷い犯罪じゃないかもしれないからな。

それから三十分後ぐらいだろうか、目的地へと到着した。

監獄だけあって造りが頑丈だったようで、原形を保っている、どす黒い色彩の四角い建造物があった。見るからに重苦しい感じがして、監獄と呼ぶにふさわしい外観をしている。

「無事のようにだな。犯罪者たちは全員地下に居る筈だが……生きていれば」

入り口の重厚な鉄扉を押し開き、中へと足を踏み入れる。

受付のような場所があり、結構広いホールになっている。格子扉の向こうに下りの階段が見えるので、そこから地下牢へと繋がって

いるのか。

刑務所って特殊な自動販売機置いてないからな。受刑者は現金を持ち込めないの、受刑者用の自動販売機がそもそも存在しない。囚人服の自動販売機でもあれば、是非一度は利用したかったのだが。

「気を付けてくれ。おそらく誰もいないと思うが」

長い階段を降り切って扉を開くと、薄暗い通路の左右に牢屋が並んでいる。

あれ、格子扉が全部開いていないか。監獄の入り口と地下牢に続く扉も鍵がかかっていたのに、何故ここの牢屋だけ。

「腐臭もしないな。囚人たちは逃げたのか……奥まで進むぞ」

取り残された囚人がいるなら、腐敗が始まっていてもおかしくないと、始まりの会長は思ったのだろう。俺は鼻が利かないので嗅ぎ取れないが。

地下牢の奥の方まで進んだのだが、今のところ全部の格子扉が開けられていた。通路の行き止まりまであと数歩のところ、右手にひととき大きな牢があり中に　誰かいるな。

鉄格子を挟んで向こう側には　何だあれ。ブーツやサンダルといた靴がこんもりと盛られていて、その中に一人の男が埋もれている。

「おや、誰かいらっしやいましたか」

以外にも穏やかで丁寧な口調をした声が出たかと思うと、その靴山の中から一人の男が現れた。

「生きていたのか。煩惱聖職者」

始まりの会長が心底嫌そうに顔を歪めている。

聖職者って言ったよな。確かに、白いロングコートに似た法衣らしきものを着ているが。

糸のように細い目は弧を描き、笑顔を浮かべている。髪はきつちりとセンター分けで黒髪。年齢は二十代に見える。外見だけなら立派な聖職者っぽい。

「煩惱ではありません、本能に忠実に生きていますだけです」

「お前、牢屋に居たのに何で、そんなに大量の……靴を集められた」

何の目的があって靴に埋まっていた。理由は見当もつかないが、あ、うん、まぎれもなく変態だコイツ。

「う、うわぁ……」

明るさと優しさが売りのラツミスですら言葉を失っているぞ。正直言って、俺もどん引きだ。

「あっと、心配なさらないでください。私は男女問わず、使い古された靴が好きなのです。履いていた人には全く興味がありませんので、ご安心ください」

爽やかな笑顔で何を口走っているんだ、この聖職者……いや、この人を聖職者と認めたら、真面目に活動をしている聖職者の方々に失礼だな。

「質問に答える」

「最近めつきり寒くなってきましたので、扉の鍵を開けて、毛布代わりの靴を集めて帰ってきました。あ、魔物が騒がしかったのでついでに、牢屋の鍵を開けて囚人の皆様も解放してあげましたよ」

「お前……ここにいた奴らがどれ程の極悪人が知っているのかっ！」

始まりの会長が格子を蹴りつけて激昂している。ただでさえ混乱している集落に極悪人を解き放つたらどうなるか。子供でも理解できる。こいつは見た目に反して、クズ野郎なのか。

「もちろん、承知していますよ。魔物が闊歩し、住民が襲われている状況で少しでも魔物を討伐する為に……魔物を引きつける付与魔法を施して、解放しましたので。あと、全員に幻覚も施しておきましたので、喜々として魔物に襲い掛かったのではないでしょうが。その結果、彼らがどうなったかは定かではありませんが」

この人の性質が掴めない。ただの変態ではないのか。

「助かりたいからといって、口から出まかせを言うな！」

「いや、会長。残念だけど嘘言っていないですよ、そいつ」

鉄格子の間から手を伸ばし、男の胸ぐらを掴む始まりの会長の腕に、そつと手を添えたのはシュイだった。

意外な人物が止めに入ったな。

「これはこれは、我が親愛なる友、シュイさんではありませんか」

「誰が友っすか。最近見かけないと思ったら、こんなところにいたっすね」

二人は知り合いなのか。ハンター稼業をしていると意外な人と接点があっても不思議ではないのだろうが、彼女とこの変態が仲良くしている姿が思い浮かばない。

「始まりの会長、すまないっす。これ、残念ながら愚者の奇行団の団員の一人っす」

「えっ？」

「おっ」

思いもしなかった発言に、俺とラツミスの声が重なった。

聖職者と会長

「これって、愚者の奇行団で治癒担当だったりするっす。治癒と光精神に干渉する魔法が得意な変態っす」

「その説明では見ず知らずの人に誤解されてしまいますよ」

誤解も何も、男女の靴に埋もれていた奴が何を今更。

「でも、人の履いていた靴を集めるのが趣味なんだよね？」

こら、ラツミス。あんな変態に関わっちゃいけません。

「ええ、それは間違いありません。ですが、私は新品の靴には用がないのですよ」

穏やかな笑みを浮かべた顔で、そんな説明いらない。

「靴というのは男女問わず、生きる上で最も大切とも言える足を守る皆です。靴とは持ち主の人生を現す鏡なのです。靴を見れば、その人の歴史、経験、性格の全てがわかります。私はその人の歴史に触れ、想いを馳せたいのです」

饒舌な変態だ！

胸に手を当て、遠い目をしながら語るところが狂気を感じる。

「なので、使い古された……そうですね、年代の感じられる、かなり異臭のするブーツや、使いこまれ穴が開いていて、縫い目が綻び

ているものが最良の品でしょうか。特にハンターの方々が履く靴は、いい具合に熟成されていますからね」

「こだわりはわかったけど、それでも人の靴を盗むのは良くないよ？」

うむ、ラツミスらしい、まっとうな意見だ。これにはぐうの音も出ないだろう。

「盗みは人として最低な行為の一つですよ。神に使える者として、そのような愚かな過ちを犯すわけがありません」

矛盾してないか。中古の靴が好きな変態だというのに、そこは認めずに嘘を吐くのか。

「そんな、嘘を……」

「ラツミス、それがな嘘ではないのだ。コイツの厄介なところが、好みの靴を履いている相手を見つけると、その場で直接交渉して買い取ろうとするのだ」

「うわぁ……」

始まりの会長の説明に、二人を除く全員がどん引きしている。

残りの二人は始まりの会長とシュイで、額に手を当てて、大きく息を吐いている。

「その人の歴史を覗き見させてもらうのですから、それなりの代価を支払うのは当然のことですよ」

「ここだけ聞いたらまともな人っぽいのが嫌だ。つまり、要約したくないが、中古靴フェチということでもいいのか。」

「盗んでいる訳ではないのだが、そんな交渉を持ちかけられた住民が怯えて……迷惑行為として注意したのだが聞く耳を持たず、仕方なくハンター協会の牢に閉じ込めていたのだが、熱い靴談議に洗脳されかけた見張りが現れる始末でな。それで、本人も望んだので仕方なく、この監獄に閉じ込めたという訳だ」

何というか……ご苦労様でした。

「洗脳ではありませんよ。元々、彼には素質があっただけです。新たな扉を開くお手伝いをしたに過ぎません。まったく、監獄には使い古された履物が無数にあると期待していたのですが、意外と清潔で使い捨てだったのでびっくりですよ」

悪びれないなこの人。

「これ、へブイって言うんですけど、能力は有能なだけに厄介で。唯一にして最大の欠点がどうしようもないです。愚者の奇行団の良くない噂の八割がこれのせいっす」

「いえいえ、私ごときにそれ程の影響力は無いですよ」

照れながら手を振って謙遜しているが、決して褒めてはいない。この聖職者っぽい人の名前はへブイというのか。性癖はあれだが、それ以外はまともらしいので戦力にはなるのだろうか……あまり、ラッミスに近づけたくないなあ。

「へブイ、お前は魔物が集落内に押し寄せて来てから、ずっとこの

場所に籠っていわけではないのだろう。靴をそれだけ集められたのだから」

「ええ、何度か集落内を散策しましたが。それが何か」

「助けを求める住民はいなかったのか？ 愚者の奇行団の一員と言ふことは、それなりの実力者と見て間違いない筈だ。死にゆく住民を見捨てて、ここに籠っていたのかっ」

軽い口調で受け答えをするへブイに、始まりの会長が静かな怒りをぶつけている。

個人的にはへブイが住民を見捨てたとしても、咎められることではないと思っっている。自分の命を最優先にするのは人として当たり前な行為だ。

ラツミスならば必ず助けに入っただろうが、それを強要するのは間違っている。心情としては助けてやって欲しかったと思うので、始まりの会長の気持ちもわかるのだが。

「私は自分の手に余ることはやらない主義です。私の両腕はそれ程大きくありませんので」

静かに言葉を返すへブイを見て、始まりの会長も冷静になったようで、頭を豪快に掻き「くそっ」と悪態を吐く。

「そうだな、すまない。住民を見殺しにしても、自分の命を最優先に考えるのは間違いではない。それに、多くの住民を見捨てる決断をしてきた、私が言えた義理は」

「あ、いえ。見殺しにはしていませんよ。魔法を解きますね」

へブイがそう口にして、胸の前で両の指を絡ませて印を組むと、格子の一本一本が蛍光灯にでもなったかのように輝き、入り口の階段付近まで光が走っていく。

すると、そこまで誰もいなかった格子の向こう側に、突如人が現れた。

老若男女問わず、数十人もの人々がホツとした表情で視線を向けている。

「幻覚と気配を霧散させる魔法を併用して、隠れていたかいていました。もっと、多くの人を救いたかったです、不徳の致すところです」

彼は刑務所から極悪人を放出して魔物たちの的にさせ、その間に生き残りの住民を監獄に匿っていたというのか。立て籠もるには最も適した建造物だと判断して。

「監獄には備蓄が結構ありましたので何とか耐えられましたが、そろそろ限界でした。助けに来ていただき感謝の言葉もありません」

へブイが頭を下げている。

印象が二転三転する人だな。性癖さへ除けば、立派な聖職者に見えるてしまう。

「気配を一切感じなかった。この人、侮れないですよ、ハツコン師匠」

ミシユエルはかなり高性能な気配察知が使えた。だというのに、彼の能力から隠し通せる程の実力があるってことか。

「皆、無事だったか。へブイ、貴様を誤解していた。この通りだ許

してくれ」

さっきのヘブイよりも腰を深く曲げ、始まりの会長が体と言葉で謝罪の意を示している。

自分の非を素直に認め、頭を下げる事が出来る上司。こういう人は意外と少ない。

熊会長を加えて二人しか会長を知らないが、このハンター協会の職員は上司に恵まれているようだ。

「お気になさらないでください。日頃から何故か誤解を招きやすい体質です」

それは誤解ではなく、間違いなく日頃の行いだ。

この人は靴フェチさえ除けば、まともな人間だと思う。そもそも、どんな性癖でもオープンにすると大抵引かれる。靴フェチだって黙っていれば無害なのだが、彼は曝け出しているから変態扱いされるのだろう。と、思うことにした。

「住民を救った礼は、詫びも兼ねて私にできることなら何でもしよう。魔道具、武具、金となると、ハンター協会を掘り起こしてからとなるが、何か要望があるなら言ってくれ」

何でもとは大きく出たな。俺に対しても十二分な支払いをしてくれることになっているので、恩賞には糸目をつけない方針のようだ。ヘブイは首を傾げて悩んでいたようだ、何かを思いついたようで、ぱんつと手を打ち鳴らした。

「要望ですか……そうですね、では、会長が履いているそのブーツを是非」

うん、見直したのが台無しだ。

その後、生存者を連れて皆が待つ広場に戻ると、歓声を上げる人々に取り囲まれた。そこまでは良かったのだが、人々が落ち着くと始まりの会長は一度その場から姿を消した。暫くして戻ってきたのだが、

「一言は無い」

と、口にして苦渋に顔を歪めながら、始まりの会長はブーツを脱ぎ、新たなブーツに履き替えた。そして、脱ぎたての靴を渋々だがへブイに手渡した。

「貴方の蒸された足の臭いも、確かに全て受け取りました。今晚は楽しめそうです」

春風が吹き付けてきそうな爽やかな笑顔で酷い台詞を口にしていく。

あつ、気の強そうな始まりの会長が若干涙目だ。あんな表情もするののか。

「ご安心ください。会長自身はタイプでもなんでもありませんのであくまで靴だ」

話の途中で鈍い音がしたかと思うと、へブイが受け身を取ることもなく、うつ伏せに倒れた。

倒れ伏したまま、びくびく痙攣しているへブイの頭の横に巨大な

氷の塊がある。あれが、ヘブイの頭に激突したようだ。

「病気はまだ治っていませんでしたか」

「治療役が戻ってきたのはありがたいが、こいつの場合は素直に喜べねえんだよなあ」

患者の奇行団、団長、副団長が俯き肩を落としている。こういった状況に慣れているようで、紅白双子が手際よく、ヘブイを縛り上げた。

「会長、靴返しておくぞ」

「いや、報酬の約束を違える訳には」

「いいんだって。コイツに靴を渡すと……」

律儀に約束を守ろうとする、始まりの会長にケリオイル団長が耳打ちをすると、顔色が一気に青ざめた。

そして、渡す予定だったブーツを抱きしめると、そのまま、走り去っていく。

何を言われたのか非常に気になる。少なくとも、靴を収集して眺めるだけでは終わらないようだ。

そういえば、靴の自動販売機って見かけたことがない。海外ではあるようなのだが、何故か自動販売機大国である日本にはないのだ。探せばあるのかも知れないけれど。

ボウリングシューズの自動販売機は近所のボウリングセンターにあったが、心当たりのある靴の自動販売機は、あれぐらいか。

あっ、靴なら珍しいところで、靴磨きの自動販売機があったな。ヘブイに見せてやったら喜ぶかもしれない。

目が覚めてブーツを失ったことを知ってへそを曲げたら、変化して試してみるか。

愚者の奇行団と自動販売機の種類

「でも、へブイさんが愚者の奇行団とは思わなかったな」

幸せそうな顔をして、簀巻き状態で転がっている靴フェチをチラチラ見ながら、ラツミスが素直な感想を口にした。

「おう、残念ながらも。出会った頃はまともな振りをしていたが、団員になってから本性を現しやがった」

「治癒役を手に入れたぞって、喜んでいましたよね……」

団長と副団長が揃ってため息を吐いている。

期待していた新人からの落差にやられたのだろうな。可哀想に。

「でもまあ、優秀だよな、アレ」

「そうだね、赤。何度かアレに命助けられているし」

紅白双子は実力を認めているのか。靴フェチに対しても、それ程、嫌悪感があるようにも見えない。

「お前ら、へブイと結構仲良いよな」

「性癖は人それぞれだから、そんなに気にならないかな。なあ、白」

「結構、そういうこと言わない奴の方が、やばい性癖隠していたりするんだよな」

それも、一理ある。よくよく考えると靴だけなら、人体に影響はない訳だから、ある意味安全なのか……安全、なのか？

「でも、久しぶりっすよね。これだけ患者の奇行団が揃ったのって」「言われてみれば、そうだな。自由奔放な奴らばっかだと、団長は苦労するぜ」

ケリオイル団長が苦労している感を出しているが、団員たちの目が「お前が言うな」と雄弁に語っている。

団員といえば、初めて会った時に他にも数名団員が……確か総勢八名とか言ってたか。

「だんいんの」
「のこり」

「おつ、ハツコン、他の団員が気になるのか。まあ、それは会ったのお楽しみってやつだ」

言葉を濁したか。まだ、何人かいるのは本当のようだが。他のメンバーと会うのが楽しみのような、不安なような。

「まあ、もう少し早く合流していれば、もっと活躍の場もあったが、今は治癒能力に優れた園長先生がいるからな」

ケリオイル団長の言う通り、園長先生がいれば大概の傷は完治する。とはいえ、一人に任せっきりは体力の問題もあるので、居てくれてありがたいのは確かなのだが。

「だが、ヘブイと合流できたのは別の意味で大きい。愚者の奇行団で別行動する際に、かなり動きやすくなった」

「とはいえ、この階層では防衛と転送陣の復旧に専念するのでは？」

「フィルミナ副団長。ラツミスから教えられた貴重な情報を忘れた訳じゃないだろ。この階層の敵を指揮している奴を見つけ出しちまえば、ここも安泰だ」

「まさか、打って出るつもりですか」

ケリオイル団長は黙って頷き、フィルミナ副団長の言葉を肯定する。

あのバリケードを外して行くというのか。食料もあり、住民の状態も安定している。残りのハンターたちでも防衛は可能な状態だ。無謀な考えでもないのか。

「といっても直ぐにじゃねえぞ。転送陣が繋がり行き来が可能な状態になって、防衛側の人員が少し増えた状況が理想的だがな」

まずは転送陣が作動してからの話か。まだ、集落内の搜索も終わっていない。清流の湖階層のことも気掛かりなので、早く繋がってくれればいいのだが。

今も転送陣を相手に奮闘している、ヒュールミにお気に入りのアイストスポーツドリンクを持って行かないとな。

始まりの階層に夜が訪れた。

俺はバリケードの近くに設置されて、防衛担当のハンターを見守りつつ、飲食料品をいつでも販売できるよう徹夜で見張りも担当している。

とはいえ、話し相手がいないので暇でしようがない。久しぶりに自分の能力の確認をしておこうか。

まずは、初心忘れべからず。自動販売機の分類について復習しようと思う。

こんなことは一般常識なので覚えていて当然なのだが、マニアの心得として忘れないように思い返すことも、必要な行為だと思っている。

さてと、初歩中の初歩だが国で定められた自動販売機は大きく二つに分けられる。 物品自動販売機 と 自動サービス機 だ。

物品自動販売機 とは、そのままで物品を売る自動販売機を指す。

更に分類すると、飲料自動販売機の分類だけでも、清涼飲料自動販売機、コーヒー飲料自動販売機、アルコール飲料自動販売機、乳飲料自動販売機、各種飲料併売自動販売機、その他の飲料自動販売機に分けられる。

そして、食品自動販売機になると、菓子自動販売機、調理商品自動販売機、冷菓及び氷自動販売機等、細かく分類されている。

後は、たばこ自動販売機、券類自動販売機、切手・はがき・印紙及び証紙自動販売機、新聞・雑誌自動販売機、日用品・雑貨自動販売機、各種物品複合・併売自動販売機、その他の自動販売機となっている。

この情報は総務省の日本標準商品分類で記載されているので、自動販売機マニアなら一度は目を通して欲しいところだ。もっと細かく分類されているので、きっと楽しめると思う。

以前、友人にも勧めたのだが、ホームページを見た途端、眉根を

寄せて俺の顔を二度見していた。どうやら、お気に召さなかったようだ。

っと、思考が脱線してしまった。

自動販売機という括りには、サービス情報自動販売機 も含まれていて、たまに 自動サービス機 とごちゃ混ぜになって勘違いしてしまう人がいる。たぶん、これは初心者あるあるだと思う。と、その友人に話したのだが、

「普通、そんなこと知らねえよ」

と、冷めた口調で言い放たれた。何故だ。

話を戻そう。自動サービス機 に何が分類されているかという
と、自動両替機、玉・メダル貸機、自動貸出機（ビデオソフト他）、
自動改札機、自動入場機、自動写真撮影機、コインロッカー、コ
インランドリー、その他の自動サービス機となっている。

この 自動サービス機 を自動販売機として認めるか。ここで意見の食い違う人が出てきて熱い討論が繰り広げられるのも、よくある話だ。

とまあ、偉そうに考察してみたが、この情報を正確に思い出したのは最近なのだ。昔にちゃんと調べて、頭に叩き込んでいた筈なのだが、自動販売機になったことにより自覚はしていないが、記憶の混乱が僅かながらあるのかもしれない。

話を戻そう。俺は事実を知る前から 自動サービス機 も自動販売機だと思っていたので、 物品自動販売機 と同様に愛情を注いできた。

だから、俺の機能の欄には 自動サービス機 に分類される 高圧洗浄機 等が入っているのだと思う。

最近気づいたのだが、ランク2を取得してから選べるようになって

た機能の多くが 自動サービス機 に分類される物だ。少なくともランク2を覚えるまでは 自動サービス機 に含まれている機能は一切使えなかった筈だ。

そろそろ、新たなランク2の機能を覚えてもいい時期かもしれない。幾つか、気になるものがあるのだが、ポイントの無駄遣いはできないので取得するとしても、一つか二つがいいところか。

あと、どんな条件だったのかは不明なのだが、最近になって機能欄に新たな項目が増えていた。それが何かというと ランク3。どうやら、俺の自動販売機にはまだ進化の先があるようだ。

それを見つけた瞬間、迷わず選ぶとしたのだが、ランク3を得る為に必要なポイントは300万ポイント。尋常ではなかった。

くっ、それだけ膨大なポイントを必要とするのだから、ランク3への期待は高まるに決まっている。何ができるようにするのか、色々妄想するのが最近の暇な時の日課だ。

前までは100万ポイント貯まったら 念話 を取るつもりだったのだが、今は正直、もう後回しでもいいかなと思っている。ただししいが何とか会話も可能になっているので、今すぐに必要な加護ではない……よな。

決して、ランク3に期待を寄せて、自動販売機マニアを満足させる何かを求めて、妥協したわけではない。

とまあ、心の中で言い訳を試してみたが真面目な話、最近は何かと物騒な事が多すぎる。各階層の現状を調べることもそうだが、冥府の王とやらの今後の動向も心配の種だ。

ここで新たな力を得ようとするのは当たり前前の行為だと思っている。ポイントにはまだまだ届かないが、希望があるというのは生きる糧になる。

自動販売機である俺でも進化の夢を見られるというのは、どれだけ嬉しいことか。

「冷たいお茶をいただいても、よろしいでしょうか？」

俺の前にいつの間にかやってきてた、白い法衣姿のヘブイが突っ立って商品を眺めている。

「こうやって見ていると、まともで理想的な聖職者に見えるのだが。

「いらっしやいませ」

「やはり、見たこともない商品だらけですね。ラツミスさんのお勧めは確か、この妙な色合いの飲み物でしたか」

ミルクティーを選んだのか。開け方は昼間に学んだようで、蓋を開けるとペットボトルを口に付けて飲むわけではなく、懐から取り出した

「ま て い」

「おや、本当に話せるのですね。何か不都合でも」

不都合しかない。懐から取り出したそれは、何だ。

「もしや、このコップが珍しいのでしょうか。かなりの年代物ですからね」

茶色く変色した布製のそれは、コップじゃないからな。どうみても、靴だろそれ。

「ああ、中身が漏れることを心配されているのですか？ 大丈夫ですよ、ちゃんと木製のコップが中に入っているので」

よく見ると靴のかかと部分から取っ手のはみ出ている。なるほど、靴でコーティングされた、ただのコップか……いやいやいや！

「ちなみに、この靴は十年履かれ続けた品で、魔物の皮を使っているのだから頑丈な逸品ですよ。持ち主は有能な女性ハンターで、彼女の汗と経験が染み込んだ素晴らしい靴だとは思いませんか」

マニアって自分の好きなことになるかと饒舌になるよな。俺は話したくても話せないから大丈夫だ……気を付けよう。

「ああ、もちろん、綺麗に洗っていますので匂いはしませんよ」

そうなのか。ちょっとだけ安心できた。

「大体……匂いを楽しめるのは一週間程度ですからね」

今、ぼそつと何を言った。やはり、間違いなく変態だ。知っていたけど。

「貴方は中に人の魂が入っているそうですね」

「うん」

「中々に数奇な運命を背負っていられるようですが、もう少し気楽に過ごした方が良くもありませんよ。緊張でこんなに体が硬くなっているじゃないですか」

俺の体をポンポンと叩きながら、ニヤツと口元に笑みを浮かべている。場を和ますためのギャグなのだろう。

「ありがとうございます」

「お礼よりも笑っていたいただきたかったです。それよりも、ハッコンさんは靴を履かないですよね」

期待に添えなくて悪いが、自動販売機は靴を履かない。じろじろと足元を見られても、足が生えてくることはない。

「人生なんて一度きりです。やりたいことやらないと、損ですよ」

好きなようにやっているヘブイが言うと説得力があるな。俺は二度目の人生だが、今度は自動販売機生を満喫すると決めている。

「何となくなのですが、ハッコンさんは、私と同じような特殊な趣味人の気配がするのですよ」

「ちがいます」

それは断固として否定させてもらおう。

反撃（前書き）

書籍化が決まりました。

詳しい話は活動報告をご覧ください。

反撃

朝になると駆け寄ってくる見慣れた四人組がいた。

「ハツコン発見したよ！ からあでえええ！」

うん、から揚げだけど、上手く発音できなくてすまない。

以前、大好物の名前を覚えてくれと言われたので、何とか伝えたのだが言葉が足りずに「からあで」となってしまい、その名前が定着してしまった。

それを求めて粉塵を巻き上げて爆走してくるのは、大食い団の面々。ということは、転送陣が復旧したのか。

「からあで、からあで、からあで」

取り囲まれて、口から涎を垂らしながら連呼されると若干恐怖を感じる。

向こうの様子を聞き出したところだけど、落ち着くまで無駄っぽい。

彼らが満足するだけのから揚げを大量に提供するのだが、次から次へと消えていく。わんこそばを食べさせているかのような消費速度だ。

「蛙の肉も美味しいけど、やっぱり、ハツコンのが一番だよねっ」

「そうだね、ペル。ボクもそう思うよ」

ミケネとペルのやり取りを聞いてみると、こっちまで幸せな気分

になる。全員が美味しそうに頬張っている姿に、自動販売機でなければ顔がにやけてそうだ。

「相変わらずの食欲だな。ハッコン、オレにも、からあでくれよ」

ヒュールミが目元を擦り、欠伸を噛み殺しながらやってきた。

徹夜して転送陣をいじっていたのか、見るからに眠そうだ。

「いらっしゃいませ」

から揚げと、寝起きなのでカフェオレも渡しておく。

「ありがとよ、ハッコン」

「てんい」

「せいこう」

最後の「う」だけ音程を上げると、疑問文のように聞こえる筈だ。扱える言葉が少ないので、こういうテクニクが必須になってくる。

「ああ、完全じゃねえけどな。一時間に四人か五人なら問題なく運べるぜ。まずは、子供と老人を優先させるつもりだ」

お疲れさまと労わってあげたいが、「つ」も「れ」も無いのが痛い。だが、言葉を組み合わせれば称賛の言葉を送ることも可能！

「よっ だい と」

「うり よ う」

「よだいとう利用？」

やっぱり、ダメだった。そもそも、この世界に大統領っていないだろうしな。言葉って難しいね。

「よくわからねえけど、これでまずは非戦闘員を清流の湖階層へ送って、安全な生活をさせることができる。ここの住民にはわりいが、空のない場所に閉じ込められているのは精神的にも良くねえだろ」

頭上を見上げると、そこには岩肌があるだけ。

そっぴや、孤児院の子供たちは空を見たことが無いと口にしていた。

今は非常時だから転送陣の利用代金も必要としないので、本物ではないとはいえ空を見る絶好のチャンスでもある。

子供たちの驚く姿を見られないのが残念だが、まずは先に送ってあげないとな。

「おっはよー、ハッコン。ヒュールミもいたんだね、おっはー」

「おう、おはよう。今日も元気はつらつだな」

某栄養ドリンクを右手に持たせたら似合いそうだ。ファイト一発！とか言わせたい。

「元気だけ取り柄だからね！」

「それ以外にもいっぱいあるだろ」

ヒュールミが呆れて小さく息を吐いた際に、ちらっとラツミスの胸元に視線がいったが、見なかったことにしよう。

「大食い団が来たんだね。これで集落の搜索も楽になりそう」

「鼻と耳が異様に利くからな。こういった場面で役立つ貴重な人材だ」

二人に褒められている当人たちは、から揚げを咀嚼するのに忙しくて全く聞いていない。

そして、いつの間にかシユイが大食い団の輪の中に加わり、一緒から揚げを食べていた。彼女だけは大食い団に加入しても違和感がない気がする。

今日は忙しくなりそうだな。寝起きの人々がこちらに向かってくるのを見て、そんな感想を抱いていた。

朝から転送陣で次々と住民が運ばれていく。

本来なら、始まりの階層を一度攻略しなければ別階層へ転移することはできないのだが、正常に動いていない状況を逆手に取り、ヒュールミが転送陣の仕様を変更して誰でも転移可能になるよう改良したそうだ。

ただし、清流の湖階層のみに繋がっている状態なので、好き勝手に別の階層に行けるというわけではない。

ハンターたちは後回しになるので、バリケード前で防衛を担当している者と、昨日に引き続き、集落内の生き残りの搜索、及び取りこぼした魔物討伐に当たる者とに別れていた。

大食い団が搜索側に加わることにより、効率が一気に跳ね上がるだろう。彼らの能力の高さは既に経験済み。

俺は搜索に参加することなく、今日は転送陣の近くに配置されている。初めての転送陣に怯えている子供たちが多いので、風船やお

菓子を提供して気を逸らすのが役割だ。

「うわー、ハッコンすごいっ！」

瞳を輝かせて、子供たちが風船を見つめている。

ただ、風船を膨らますのではなく、細長い風船を取り出し 念動力で捻じり結び、犬を作ったり花を作ったりしている。

学生の頃、バイト先で覚えた簡単なバルーンアートを異世界で活かせるとは思わなかったな。よし、ノッてきたぞ。次は幾つもの風船を繋ぎ合わせた熊でも作るか。

思いの外、はまってしまい、気が付くと転送陣の周りにバルーンアートが並び、部屋の中がファンシーな感じになっている。

入ってきた利用者が予想外の光景に未知の恐怖など吹き飛んだように、緊張せずに転送陣で運ばれていく。

入れ違いで清流の湖階層から人がやってくることもあるのだが、全員がぎょっとした目で辺りを見回しているのが面白い。

「どうだ、順調にやれている……か」

視察に始まりの会長がやってきた。いつもの引き締まった表情が崩れ、無意識なのだろうがポカーンと口を開いている。

始まりの会長は常に厳しい表情を浮かべているイメージだったが、昨日のヘブイとのやり取りといい、結構、表情豊かな人ではないかと思いは始めている。

それを無理やり抑え込んでいるので、しかめ面の様な顔つきになっているのではないだろうか。

「可愛いな……んっ、あー、子供が喜びそうな内装になっているではないか」

慌てて取り繕っているが、さっきの無防備な顔、バツチリ録画しておいた。特に理由もなく撮ってしまったが、後で何かに活用できないだろうか。

「ハツコンのおかげで子供たちがビビらずに、転送陣に乗ってくれたぜ。子供と老人は全員移動できたから、次は女性でいいのか」

「ああ、頼む。ハンターは最後に回し、住民を優先で。残っている彼らには危険手当を支給しなければならぬ。問題はその後……ここをどうするかだ」

「転送陣を残しておくか、それとも破壊するかってか？」

「そうだ。この階層を放棄するとなると、転送陣を魔物に悪用されれば他の階層に迷惑がかかる」

転送陣を使って階層の魔物が他の階層に移動したら、内と外からの挟み撃ちで戦況が悪化するのが目に見えている。

しかし、壊すとすると二度と始まりの階層に行けなくなってしまふ。

「壊すのは簡単だが、始まりの階層に戻る手段が無くなると、魔物がいとも簡単に地上に出ることが可能になっちゃうぜ」

「そうなのだ。非戦闘員を清流の湖階層に送ったのはいいが、ここを奪われると地上の町が壊滅する恐れがある。だが、私としては集落の人々の安全を最優先としたい。現場放棄として後に裁かれることになったとしても」

大局を見るなら、死に物狂いでここを死守すべきなのだろう。だ

が、見知った人々を最優先にして助けたいという想いも、間違っているとは言えない。

何が正しいなんて自動販売機の俺が偉そうに語るべきことじゃないよな。悩みに悩み抜いての決断なのだろうから。

「この場を凌ぐ方法は幾つか考えられるが……一つ目は迷宮と繋がる道を完全に封鎖する。入り口に瓦礫を詰めるか、通路を崩落させれば敵が集落に入り込むには時間がかかる」

腕を組んで唸っていたヒュールミが、顔を上げると指を二本立てて、始まりの会長に突きつけた。

集落から奥へと繋がる道はたった一本しかない。あそこを完全に塞げば魔物も進入できなくなるな。瓦礫を詰めるのは不可能ではないかもしれないが、それだといずれは撤去される。時間稼ぎにはなるけど。

「二つ目は敵の指揮をしている冥府の王の部下を見つけ出して、指輪を破壊する。統率が取れなくなれば、防ぐのも容易になるからな」

「それも考慮したのだが、始まりの階層は結構入り組んでいてな、指揮をする相手を探すのは至難の業だ。防衛をする人員も確保しなければならぬ。そんなに多くのハンターを割くわけにはいかないぞ」

「あー、それなら、愚者の奇行団と大食い団のみでの行動ってのはどうだ」

入り口の扉に背を預け、帽子のつばをピンッと指で弾いている男がいた。

ケリオイル団長、無駄に格好をつけているな。実は結構似合っ

いるのが、何となく腹が立つ。

「やってくれるのか」

「構わないぜ。冥府の王についての情報も得たいからな。あと報酬は弾んでくれよ」

「ああ、わかっている。成果に応じて、報酬を増やそう」

「交渉成立だな。任せてくれ」

笑みを浮かべ握手を交わしているが、断られても行くつもりだったくせに報酬をゲットするのは、ケリオイル団長もやり手だな。たぶん、この話題が出るタイミングを扉の陰で見計らっていたのだろう。

何にしろ、これで始まりの階層を探索することが決定したわけか。

「ハツコンも仮だが患者の奇行団の一員だからな。よろしく頼むぜ」
そうくると思っていたよ。断る理由もないので、快く返事しておくか。

「お かね ください」

「お、お前もちゃっかりしているな」

「いやいや、ケリオイル団長殿には負けますよ。」

愚者の奇行団と一緒

非戦闘員の全てが清流の湖階層への移動が終わると、バリケードの前に進軍するメンバーが揃っていた。

愚者の奇行団は全員参加となり、ケリオイル団長、フィルミナ副団長、紅白双子、シュイ、靴フェチ聖職者へブイの正規メンバー六名に加えて、仮団員であるミシュエル、ラツミスと俺も、もちろん参加する。

大食い団は全員が参加を希望したのだが、集落内の搜索がまだ完全に終わっていないので、ミケネとショートの二人が加わることとなり、ペルとスコは居残りとなった。

総勢十名＋一台の結構な人数になったのだが、大量に待ち構えているであろう敵に対して、これでも万全とは言いがたい。

ただ、始まりの階層は雑魚敵単体の強さが蛙人魔を下回っていて、通路幅も殆どが五メートルから十メートル程度らしい。なので、上手く立ち回れば、この人数でも対応できるとケリオイル団長が断言していた。

「ここで、威勢よく出発といきたいところだが、邪魔だなこいつら」
バリケードの向こう側から、ひっきりなしに魔物が押し寄せ、槍で貫かれて仲間が死んでいっているというのに、物怖じもせず次から次へと湧いて出ている。

刺殺された魔物は即座に別の魔物に奥の方へと引きずられていくので、死体で通路が埋まることはないのだが、追加で現れる魔物をどうにかしないと、一向に進むことができない。

今のところバリケードに押し寄せてくる魔物は、全身緑の醜い顔をした、髪の毛が無い小柄なオッサンみたいなものが多い。確か、緑

魔だったか。

強さは非力な人間並で、初心者ハンターでも一対一なら問題なく倒せる相手だそうだ。緑魔を一人で倒せるかどうか、ハンターになれる最低限の条件らしい。

「フィルミナ副団長、魔法でこいつらどうにかできないか」

「数体なら倒せますが、すぐさま補充されるだけだと思われませう」

防衛するだけなら槍を突き出すだけの簡単な作業だが、バリケードを外す暇がない。

バリケードを無理やり外して、敵が少数入り込むのを覚悟の上で強引に特攻するしかないのか。

安全に通路に入り込む方法は本当にはないのだろうか。隙間から見る感じでは敵が途切れなく現れる。下の方から緑魔の頭が見えたかと思うと体、足……あれ？

「だんちよう」

「何だ、ハッコン」

「ここさかに」

「ん、ああ、そうです。あそこから暫く一本道の下り坂になっている」

下り坂になっているのか。なら、やりようはあるな。

「あつちに」

「もっていて」

ラツミスにバリケードの前まで運んでもらうと、まずは張り付いている緑魔を追い払うところから始めることにした。

ハバネロが大量に入った缶スープを取り出し、バリケード近くの緑魔にぶっかける。

「ゴシユルウウアアアッ！」

大きな目にスープが入り込み、緑魔たちが絶叫を上げて悶えている。

坂道はそれなりに勾配があるようで、暴れ狂う仲間に巻き込まれて、何体かが転げ落ちていく。

よっし、バリケード前にスペースが開いた。まずは 灯油計量器に変化して緑魔に浴びせる。ガソリンもありかと考えたのだが、ガソリンは岩肌の床にぶちまけても滑らないので灯油にしておいた。案の定、スケートリンクに立った子供のよう緑魔が転び、立ち上がることもままならない。

商品の一つであるタオルを 念動力 で操って灯油に浸し、ライターを取り出し口に落とすと、同様に 念動力 で操作してタオルに火をつけた。

そして、 結界 で燃え盛るタオルを弾き飛ばし、灯油まみれの緑魔に命中させる。

すると、通路が火の海と化した。押し寄せる熱気にバリケード近くにいたハンターたちが顔を背けている。

酷い有様だが、これも戦法だ成仏してくれ。

残虐非道な行いだとは理解しているので、非難されるかと愚者の奇行団に視線を向けると、平然と炎を見つめている。ラツミスも特に何も言うこともなく炎に照らされていた。

「ハツコンのおかげで、進みやすくなったぜ、ありがとよ」

「ハツコン、さすがっすね。これで、突っ込めるっす」

「緑魔は靴を履かないのですね……なら、燃えても一向に構いません」

非難されるどころか称賛されている。最後のは判断が難しいが。命を懸けた戦いで倒し方にこだわる方がおかしいのかもしれない。まだ、日本人としての感覚が抜けきっていないようだ。

バリケードをラツミスの怪力で横にずらして、全員が通路に入ると、再びラツミスの手によりバリケードが閉じられた。

「もし、俺たちが戻らずに敵の攻撃が激しくなった場合は、迷わずここを放棄して清流の湖階層に逃げてくれ。無理して待つ必要はねえからな。会長にも伝えておいてくれ」

防衛担当のハンターたちに言伝を頼むと、通路の奥でまだくすぶり続けている炎に向かって、進軍を開始した。

しかし、初心者向けの第一階層だけあって親切設計だな。壁や天井が薄ら光っている。都合よく光る苔のようなものが付着しているらしく、灯りがなくても不自由しない。

迷宮の探索となると、俺のイメージでは多くても五人ぐらいで行動するものだど認識していた。ファンタジーな世界が舞台のゲームだと一チーム四、五人というのが基本だから。

だけど、普通に考えたら多いに越したことはないよな。数の暴力は単体の性能を凌駕する。食料の問題はあるだろうが、そんなもの各自が携帯しておけばいい話……シユイのような大食いがメンバーにいる場合を除いて。

じゃあ、何故、大人数で探索しないのか。ゲームだと多くのキャラクターを毎ターン操作するのと、武器防具の管理の面倒さや、単にゲームの容量の問題もあるのだろう。

となると、小説や漫画でも少人数のチームが多いのは何故か。きっと、キャラクターが多すぎると描写が難しくなる。なんて、裏事情を考えたらダメなのだろうな。

主人公が勇者でずば抜けた才能の場合、仲間は足手まといにしかならないから、という作品は見たことあった気がする。

と、どうでもいいことに意識を取られていると、戦闘が始まっていた。

炎は消え去り、黒こげの死体が辺りに転がる通路で、前衛が横並びに三人武器を構えている。

ミシユエル、紅白双子がまずは前衛に立つのか。

このメンバーだと、ケリオイル団長、大食い団のミケネ、シヨート、ラツミスも前衛だ。

後衛はヘブイ、シュイ、フィルミナ副団長となっている。結構バランスのいい構成だと思う。

敵は緑魔と少し体格の大きいバージョンもいるようだ。知らない魔物は録画しておいて、後でヒュールミに教えてもらおう。

ミシユエルの戦いぶりはいつも通りで、格下の魔物に後れを取ることとはなく、まるで紙でも斬るように大剣の一振りで、魔物の首と胴体が幾つも宙に舞っている。

紅白双子は各自の得意武器である槍と剣を、派手さはないが無駄のない動きで相手に叩き込み、時折、お互いの背中に目でも着いているのではないかと、疑いたくなるようなコンビネーションを見せてつけてくれる。

赤が視線を背後に向けてことなく攻撃を避けて、槍を後方へと突き出す。穂先が双子の片割れである白の脇ギリギリを通り過ぎて魔

物の額を貫いているが、白に驚いた様子はない。

二人だけに通じる念話のようなものが使えるらしいので、それで状況を伝えあっているかもしれないな。

後衛のフィルミナ副団長とシユイから援護攻撃が飛んでいるが、それがなくても前衛だけで押し切れそうな勢いだ。

「いやー、皆さんお見事ですな。ハツコンさん、飲み物いただいても、よろしいでしょうか」

支援魔法を飛ばすわけでもなく、ポーッと突っ立っていただけのヘブイが冷たいミルクティーを選び、戦闘を尻目に美味しそうに飲み干している。

「さんかせん」

「でいいの」

「私は治癒が主な仕事ですので。攻撃魔法も所有していませんから、基本戦闘中は傍観者なのですよ。適材適所ですね」

あの尻の下がった糸目の奥の瞳を覗いてみたくなるな。冗談めかして口にはしているが、本気なのかどうなのか、ヘブイは感情が読み取りにくい。

この編成で敵を処理しながら少しずつ進んでいるのだが、尽きる心配がない。おかわりは幾らでもあるようで、戦闘を始めてから一時間が過ぎようとしているが、百メートル進めたかどうかも怪しい現状だ。

「うーし、そろそろ前衛交代すんぞ。俺とミケネ、ショート、あとラツミスも頼むわ。後衛は、まったり休憩でもしておいてくれ」

「やっと、交代かよー。マジ疲れた」

「疲労感半端ねえな」

肩で息をしている紅白双子にスポーツドリンクを渡すと、旨そうに一気に飲み干した。もう一本……いや、二本追加しておこう。あと軽食も。

「ハツコン師匠、後はお任せします」

ミシユエルは平然としていて、紅白双子との格の違いが見える。同じように商品を渡すと、女性なら一発で堕ちそうな笑顔を向けられた。

「ありがとうございます。ハツコン師匠の心遣いが胸に染みます」

普通なら冗談で済ませるところだが、彼の場合、目が本気なのだ。従順な後輩に慕われるような状況は正直嬉しいのだが、ミシユエルが変な目で見られないか心配になる。

「それじゃあ、ハツコン、いっくよー」

「いこうか」

敵は蛙人魔に劣る実力。油断をしない限り負けることはない。

そして、ラツミスが油断をしたとしても俺がいる。馬鹿なことをやらない限りは、安定して戦える。

背負われて戦う時は防御と牽制担当なので、それを疎かにするわけにはいかない。だが、少しでも戦力になるように、瓶ジュースを二本、取り出し口に落としておくことにした。

探索と思惑

前衛が入れ替わり、ラツミスとの戦闘をじっくりと観察して思うことは、本当に強くなったなという感想だ。

俺と出会ってから戦いの中に身を置き、多くの戦闘経験を積んできた。更に惜しみなく技術を伝授してくれる、熊会長やお婆さんとの出会いもあった。

身体能力だけなら一流のハンターに匹敵する素材なのだ、こうなるとは確定事項だったのかもしれない。

特に相手の魔物が雑魚だと、その怪力がどれほど異常なのか一目で理解できる。

繰り出された拳は、熟れすぎの果実の様に容易く緑魔の頭を弾けさせ、振り上げられた蹴りを喰らった魔物は、天井に激突して圧縮された哀れな軀を晒していた。

完全にオーバーキルだな。もう少し威力を抑えた方が体力の消耗も減ると思うのだが、微妙な力加減が、まだ苦手なようだ。

普通、圧倒的な力を前にすると逃げるか、怯えて体が萎縮するなりするものなのだが、緑魔たちは戦意を失わず無謀な突撃を繰り返している。

やはり、冥府の王に操られているのだろう。指揮官を倒さないと本当にキリがないな。

ラツミスはこのまま安心して見ていられる戦いぶりなので、他のメンバーに目を向ける。

ケリオイル団長は相変わらず、無駄の少ない老練な動きだな。最小限の動きで最良の結果を生み出している。

相手の急所に迷わず突き出される一撃。相手の動きを予測してい

るらしく、まるで相手が自ら切っ先に飛び込んでいるように見える。敵の攻撃も少し体をずらす程度で、楽々と躲している。戦いの最中だというのに、たまに欠伸をする余裕。団長は心配する必要が皆無だ。

大食い団の二人はこのメンバーでは目立たない戦力だが、それは比較対象が凄過ぎるだけで、充分すぎる活躍を見せている。

背の低さを生かし、四足歩行で戦場を駆け回り、通りすがりに相手の足を鋭い爪で切り裂き、動きを鈍らせていく。そして、時折、咆哮を放って集団を混乱させ相手の注意力を削ぐ。

隙だらけの相手の首筋に噛みつき、一瞬にして引き千切ると新たな獲物を探して、再び疾走する。野生の肉食獣の狩りを見ているかのようだ。

「彼らも靴を履いているんですね……」

不意に後ろの方から声が響いてきたので視線を向けると、すぐ近くまで歩み寄ってきてたヘブイが、ミケネの足元を興味深く見つめ、熱い眼差しを注いでいる。嫌な予感しかしない。

「ヘブイさん。こんな場所まで来たら危ないよ！」

変態発言に気を取られていたが、治療役が敵陣の真っ只中に居るのは問題があり過ぎる。

「お気になさらず」

お気になるよ！ 何で、ちょっと散歩している感を出しているんだ、この人。ヘブイの役割は後方での怪我人の治療だと自分でも言っていただろうに。

「団長、そろそろ、交代の時間ですよ」

敵は大声を出しているへブイの横を素通りしている。何で、無防備で突っ立っているへブイを魔物は無視しているんだ。

「お、交代の時間か。んじゃ、へブイ、後頼んだ。一度、後方に下がって休憩すんぞ」

ケリオイル団長はそう言い放つと、後衛の仲間の元へと戻っていく。何か強力な魔法でも使うのかと思ったのだろうか、ラッミスも首を傾げながらも従っている。

前衛が撤退しているというのに敵が襲ってくることもなく、何故か辺りをキョロキョロと見回しているだけだ。

俺たちと魔物の間に壁でもあるかのように、そこから先へ進んでこない。

そして、魔物と俺たちの間に立つのは、へブイだった。

「あ、あれ、何で魔物動かないの」

「あー、たぶんっすけど、魔物たちの目には、見えない壁が見えてるんじゃないっすかね」

シュイが説明してくれたが、ラッミスには理解できなかったようで眉根が寄っている。

「シュイ、それでは説明不足ですよ。へブイは光を操り幻影を見せることや、脳に直接影響を与える精神干渉系の能力に優れています」

牢屋で住民の姿を隠していた時のようにか。

「緑魔の前には巨大な壁が立ちはだかっているように見えている筈ですよ」

フィルミナ副団長の話を聞いてラツミスも納得したようだ。安心して、その場に座り込むと提供した飲み物と軽食を口に行っている。

「抵抗力の弱い相手だと、精神干渉系の威力えぐいんだよなあ」

「俺たちでギリ耐えられるけど、防ぐのに精いっぱい動くのが辛いんだよ。広範囲で無差別だもんな」

紅白双子がへブイを見つめながらぼやいている。

対象相手を絞れない。だから、一人で敵の前に突っ立っているのか。

「靴を履かない相手に興味はありませんので、遠慮なくやらしてもらいましょうか」

何処から取り出したのか、両手に一本ずつ鉄の棒を握っている。

その先端にはソフトボールぐらいの大きさで凶悪な棘の生えた鉄球が乗っている。

確かモーニングスターだったか、あの凶悪な鈍器の名前は。モーニングスター二刀流とはマニアックな。

錯乱状態で武器を構えることもなく、拳動不審な緑魔に歩み寄ると無造作にモーニングスターを振り上げ、脳天に無慈悲な一撃を落とす。

力も相当なものらしく、陥没した頭が半分体に埋まっている。そのまま、無抵抗な魔物を次から次へと葬っていく。

「アイツな、ラツミス程じゃねえが怪力の加護があるんだぜ。幻覚で動けない相手を一撃で葬っていく戦いを得意としている。格下の魔物との戦いだと、ヘブイ以上に頼りになる奴はいないかもな」

それは戦いと呼べるものではなかった。一方的な殺戮。

棒立ちの相手を潰していくだけの作業。魔法の範囲は少なくとも通路の道幅よりは広いようで、通路を抜けてこっちまでくる魔物がない。

異世界に来てから多くの戦いを見てきたが、あまりにも異質な戦法だった。

「あんな戦いぶりだから、人と組むことができなかつたそうだけ。おまけに、精神に干渉する魔法つてのは、結構恐れる奴が多くてな。患者の奇行団に入るまでは、単独で仕事をしていたそうだ」

ケリオイル団長は軽い口調で語っているが、そんな相手をあつさり受け入れる患者の奇行団の懐の深さに驚きだよ。

精神干渉系の魔法か。それも、これ程までに強力となると、見知らぬ間に何をさせられるかわからないという恐怖がつきまといそうだ。

武術や普通の魔法は目に見えて威力がわかる。見えない力に怯えるのは仕方のないことかもしれない。ヘブイは苦勞してきたからこそ、あそこまで達観しているのか。

地面に杭を打ち付けるように数十体倒したところで疲れたらしく、突然座り込むと胡坐をかいている。

すると、魔物たちは動きを止めるのではなく、今度は仲間を襲い掛かりだした。

「魔物たちの目には、仲間が人間に見えています。暫くは同士討ちをしてもらいましょう」

ヘブイの魔法の範囲に入ってきた緑魔は目の色を変えて、後方から列をなして行進する仲間へ、躊躇うことなく武器を振り下ろしていく。

「まあ、暫くはのんびり体を休めようぜ」

全幅の信頼を寄せているのだろう、愚者の奇行団は各々が楽な体勢で休憩を始めている。

派手さは無いが、恐ろしい力だ。血みどろの同士討ちを始めている魔物たちを、ぼんやりと見つめているヘブイの後姿に、底知れぬ力を感じていた。

あれから数時間経過すると、魔物のストックもかなり減ったようで、やってくる魔物の数が激減している。需要に供給が追いつかなくなっているのか。

軽く魔物を蹴散らしながら行軍速度も上がり、順調に進んでいた俺たちの目の前に分岐路が現れた。

「さてと、道が二つに分かれているわけだが。どっちに行くかね」

ケリオイル団長が道を交互に指差しながら、顔をフィルミナ副団長へ向けた。

「地図によりますと、右は少し進んだ先に大きめの空間に小さな湖があります。その先に道は無いようですね。左はかなり先になりますが、三方向へ別れた道があるようです」

「まずは湖の方を調べたいが、全員で向かって指揮官がこっちの道から現れて、通り過ぎたら笑い話にもなんねえな。んじゃ、二つに分けますか。湖の方を探索するのと、ここでやってきた魔物の討伐ってことで」

それが妥当なので、誰からも反論の声は上がらない。

チーム分けとなったのだが、まずは大食い団と紅白双子は一人ずつ別れることになった。大食い団の聴覚と嗅覚は必須の能力で、双子はお互いに連絡が取れるので携帯電話代わりに重宝するからだ。

「あとは、遠距離担当のシュイと副団長を分けて、へブイとラツミスは好きな方でいいぞ」

「私は湖の方に参加させていただきます」

即答したな。へブイはにこやかに微笑んでいるが、あの細い目の奥で怪しい光が見えた気がした。

湖に向かうことで、彼にとって何のメリットがあるのかわからないが、何かよからぬことを考えていそうだ。

「ハツコン、うちらどうしようか」

うーん、どつちかと言えば迷宮の湖を見てみたいけど、へブイが一緒なのが気になる。

凄く下らない事を考えていそうな気がしてならない。でも、悪党じゃないしな……変態だけど。ラツミスに実害はないだろう。

「あ　　ち」

そう発言して、予め取り出していたペットボトルを湖に続く道の方向へ倒した。

「湖に行きたいんだね。うん、わかった。団長、こちらは湖に行くよ」

こうして、俺たちは湖の探索へ向かうこととなった。
気のせいだとは思うが、ラッミスが選んだ瞬間、ヘブイの口元が一瞬笑ったように見えたのだが……。

水辺と企み

結局池に向かうメンバーは、ラツミスと俺、ヘブイ、シユイ、ミケネ、双子の片割れ赤となった。

事前の情報だと地底湖っぽい水溜りがあるだけで、特に何もないらしい。なので、メイン戦力であるミシュエルとケリオイル団長は分岐路で敵の掃討を担当となったのだが、ミシュエルはこっちに到着してきたがっていたな。

人見知りを治す訓練だと思って頑張ってもらおう。戦闘に集中していると大丈夫なようなので、問題はないと信じている。

湖探索一行は通路を進んでいるのだが、さっきまでと比べると道が細くなっていないか。先頭は三人横並びだったのだが、今は二人に変更している。そうじゃないと、動く際に邪魔になりそうだからだ。

「地面が土になっていきますね」

ヘブイの呟きに全員の視線が足下に向けられる。

さっきまでは岩肌だったのだが、確かに土に変わっているようだ。ラツミスに運ばれながら、じっと地面を見つめていて気付いたのだが、微かに足跡が残っていた。

指の形がわかるので素足。だとすれば、緑魔の足跡か。大きさも一致する。

「足跡の凹み具合からして、数時間前に通った痕跡がありますね。それも、湖に向かっていている足跡の数の方が多く、新しいですよ」

「ってことは、湖に敵が残っているってことっすか」

「そうなりますね。足跡の差異からして十二、いや、十三体でしょう」

へブイが自信を持って口にしてはいるが、砂に残っている足跡は全て同じ形にしか見えない。本当に当たっているのだろうか。

「相変わらず、足跡から情報を読み取るのが得意だよな。んで、気持ち悪いぐらいの的中率だし」

赤が、屈んで足跡を調べているへブイを見下ろし、怯えたような表情をしている。

「靴を愛するにはまず、履く足に対しての理解が必須です。これぐらい、基本中の基本ですよ。靴裏の方がより詳しく情報を得ることができのですが」

変態も極めると技能へと変化するのか。敵の数が正しければ、へブイへの認識を改めないといけないかもしれない。

「緑魔の臭いがしてきた。密度が濃いから、十体以上いそうだ」

ミケネの嗅覚の性能は熟知している……へブイ恐るべし。

足音を忍ばせて、壁際を慎重に進む。緑魔十三体なら、この面子なら余裕で対応できるのだが、用心するに越したことはない。

湖に近づくと道が湾曲していて、湖側から通路の中が見えないようになってる。

俺たちは限界ギリギリまで近づくと足を止め、耳を澄ました。

緑魔らしき魔物の声が微かに聞こえてくる。結構いっぱいいるな、ぐらいの判別しか俺にはできない。

「さて、これからどういたしましょうか。私が姿を消して敵の様子を見てきましようか？」

牢屋で住民の姿だけではなく気配を完全に消したヘブイなら楽勝なのだろうが、ここは少し試してみたいことがあるので、立候補させてもらおう。

「まかせて」

「ハツコン、何か考えがあるの？」

ラツミスが俺を下ろし、正面から見据えている。

「うんおして」

そう言って足下に車輪を出し、身体の色を変更して周囲と同化させる。これで準備万端だ。

ラツミスはすぐにピンときたようで、俺の横に回ってゆっくりと横にスライドさせた。

「とまっつて」

丁度いい位置で止めてくれた。湖が良く見える。

思ったよりも広いな。母校の体育館が余裕ですっぽり入るぐらい余裕のある空間だ。天井がやたらと高い。始まりの階層の集落の天井と同じぐらいか。

通路と同様に壁に光る苔がそこら中に貼り付いているので、明るさも問題なし。

湖が半分以上を占めているので、陸地の面積はそれ程でもないな。水辺で呑気に休憩しているようだが、俺に気づいている様子はない。

緑魔が十体。倍近く身長があつて筋肉量も上回っているのが三体。他には誰もいないようだ。さてと、じゃあこの映像を録画しておくか。

全体図と魔物の姿を撮り終わると「しゅーりよ」と発言すると最後の「う」を言う前に引き戻された。

録画した映像を 液晶パネル で放映すると、全員が見入っていた。ヘブイは初めてなので真剣に観ているようだ。

「凄いですね、ハツコンさんは。数多くの商品を提供できて、このような能力まで有しているとは。これで、中古の靴を売って下されば完璧なのですが」

「ヘブイ、気持ち悪いっす」

同意するよ、シユイ。中古の靴を売る自動販売機なんて嫌すぎる。

「緑魔十に、大緑魔三か。この程度ならごり押しで余裕っしょ」

あの大きな個体は大緑魔と言うのか、そのままだな。ファンタジ一の定番だとゴブリンとホブゴブリンといった感じか。

俺たちが初心者ハンターなら苦戦は必至なのだろうが、過剰な攻撃力特化のメンバーだからな。ゲームならタンクや壁と呼ばれる守り担当のキャラが一人はいるものなのだが、愚者の奇行団には一人もいない。

そもそも、盾を持った団員が一人もいないのを疑問に思い、拙い言葉遣いで質問したことがあるのだが、ケリオイル団長は渋い顔をして、ゆっくりと口を開き答えてくれた。

「守り担当と言うよりは……防衛特化の団員ならいるぜ。ハツコンは会ったことないだろうけどな」

八人いる患者の奇行団で、まだ会ったことのない残りの二人のどちらかなのか。

その後は言葉を濁して追及されるのを避けていた。その反応はヘブイについて触れた時とよく似ていたと今更ながらに思う。

つまり、ヘブイ程ではないが問題があるということなのだろう。

患者の奇行団を名乗る割には、他のハンターと比べても問題の少ない良識のある一団だと思っていたのだが、残りのメンバーが濃そうだ。

「じゃあ、一気に殲滅しようか。ねっ、ハッコン」

ラツミスに話しかけられて我に返った。考え込むと周りが見えなくなるのは直さないとな。全員が問題ないと判断したのであれば従うまでだ。

「いらっしやいませ」

久しぶりに、この言葉で返事をする、ラツミスとシユイ、そして赤がニンマリと笑った。比較的付き合いの長い連中には、こっちの方が馴染んでいるようだ。

「んじゃ、いつちよやりますか」

赤の合図と共に全員が突っ込んでいく。

寛いでいた魔物が慌てて立ち上がるが、態勢を整える前に眉間に矢が突き刺さり、大緑魔一体、緑魔二体が射抜かれた。

真っ先に魔物に跳びかかったのはミケネで、大口を開けて喉笛に噛みつき肉を齧り取る。獣じみた戦い方だが、野蛮でありながらも洗練された動きで、一撃離脱を繰り返している。

赤は白がないせいも前の戦いよりも動きが大人しい。それでも、堅実な槍捌きで敵を貫いているのだが。

ヘブイは精神干渉系の魔法を今回は使っていないようで、敵に取り囲まれている。そんな状況でも慌てることなく、飛びかかってくる緑魔を一振りで打ち砕いていく。

格下相手とはいえ、淀みない動きで蹴散らしていることから、接近戦での純粋な戦闘力も相当なものだろう。

「みんな、強い、ねっ！」

仲間に関心しながら振り向きざまに放った裏拳は、緑魔の顔を陥没させるだけでは終わらず、そのまま頭だけが体を残して壁にぶち当たり、肉片を飛び散らせた。

ラツミスも劣ってないよ。一撃必殺という言葉がこれ程似合う者もないなと、感心しながら戦いぶりを見学していた。

ものの数分で魔物が全滅したので、時間が余った俺たちは湖周辺を調べている。

澄んだ水を湛えた湖で、シュイが言うには飲むことも可能らしい。水の中に魔物が潜んでいるという定番の展開もないそうで、安全な休憩場所の一つだそうだ。

「予想より早く片付いたので、軽く水浴びでもされたらどうですか？」

何も発見できずに戻ろうとしたところで、ヘブイがいきなりそんなことを口走った。

分岐路で敵の対応をしている味方がいるのに何を言っているのだと、文句の一つも口にしようとしたら、先にラツミスが口を開いていた。

「みんなが待っているから、早く戻らないと」

「ですが、始まりの階層に来てから、体も碌に洗ってないのでありませんか。体を清潔に保つことにより、痒みや不快感が消え、集中力も増しますよ」

「ああ、それいいかもしれないな！ 俺は賛成だぜつ。団長も三時間以内に帰ってくればいいって、言ったじゃねえか」

ヘブイの提案に赤が乗り気だ。あの弛みきつた下心満載の表情を見れば、何を期待しているのか手に取るようにわかる。

「いやつす。赤の考えはお見通しつす」

シユイが胸元を両腕で隠すようにして赤を睨んでいる。ラツミスはその姿を見て、ようやく何を考えているのかを理解したようで、半眼で赤を睨んでいた。

「じゃあ、ボクは水浴びさせてもらっね！」

人間のやり取りを無視して、ミケネが上着と靴を脱ぎ捨て湖に入り、体を沈めて全身を擦っている。顔を洗う姿があまりにも可愛かったので録画をしておいた。

その姿が本当に気持ち良さそうで、赤たちがじっとミケネを見つめている。

「お前らは入りたくなかったら別にいいんだぜ。俺も頭と足洗うか」

赤が靴と服を脱ぎ捨て、下着一枚で湖に飛び込んでいった。

はしゃぎながら水浴びをするミケネと赤を、シユイとラツミスが羨ましそうに視線をチラチラ向けているな。

集落では桶に温泉を溜めて、濡らしたタオルで体を拭くぐらいはしていたのだが、澄んだ水で洗えるという誘惑は、かなり魅力的なようだ。

あと一押し何かあれば参加しそうな雰囲気なのだが。

「お二人とも、私がここで周囲を見張っていますので、水浴びをされたらどうですか。別に裸にならずとも、靴を脱いで足を水に浸して、髪を洗うだけでも違うと思いますよ」

「そ、そうっすね。ラツミス、行く?」

「じゃ、じゃあ、ちょっとだけ行こうか。ハツコンは……水浴び無理だよね。じゃあ、ちょっとだけ水浴びしてきていいかな」

「いって」

「らっしやい」

快く二人を送り出すと、すぐさま 高圧洗浄機 に姿を変えた。へブイが慈愛すら感じる優しい笑みで二人を送り出すと、すーっと横にスライドして、その場にしゃがみ込んだ。

「やれやれ、こんな場所に脱ぎっぱなしにしては、誰かに盗まれるかもしれないね。私が大切に保管しておかないと……ふうう、ラツミスさんとミケネさんのは、どんな匂いがするのでしょうか。乙女の体臭は独特の臭気がありますからね。想像しただけで、昂りますねえ」

「ざんねん」

予想通り過ぎる展開に呆れつつ、最大出力で水流を放った。

「あぶっ、あぶぶぶぶぶ」

顔面に命中してよろめいたところに放水を続け、湖まで押し続けると見事に水没した。

心も体も綺麗にリフレッシュしてくれ。ついでに煩惱も洗い流してくれ。

自販機コンビ二

「おっ、戻ってきた……か。何で、ヘブイだけびしょ濡れなんだ」

「一身上の都合により湖に落ちました」

「なんだそりゃ」

戻ってきた俺たちを胡散臭そうに見ている、ケリオイル団長。

まあ、一人だけずぶ濡れで帰って来たら、不審にも思うか。

分岐点を守っていた団長たちは目立った傷もなく、疲労も殆どないようだ。

突入時に比べて敵の数が減っているようで、今はミシユエルだけが敵の対応をしている。

「もうそろそろ、昼だがどうするよ」

投げナイフを手首のスナップだけで投げつけているケリオイル団長が、欠伸交じりに呑気に訊いてきた。ちなみに、ナイフは緑魔の喉に突き刺さっている。

「動きつばなしでしたから、皆さんお腹空いているでしょう。ハッコンさん、少し多めに提供していただけますか」

もちろんだよ、フィルミナ副団長。

休憩を挟んでいるとはいえ、あれだけ多くの敵を倒してきたのだから、全員かなりカロリーを消耗している筈だ。

さて、飲食料品を何にするか。今までだと、定番の商品を並べる

だけだったのだが、少し面白い機能を選んだので、それを試してみようと思っっている。

食べ物となると最近定番のものばかりだったので、ここで心機一転、商品を選ぶ楽しさを思い出してもらおう。

この機能は今まで選択画面になかったのだが、最近になっていきなり現れた。ランク3のように、何かしらの条件があったのかもされない。食料品と飲料品を一定数以上仕入れるとか、何種類以上揃えるとか。

そんな条件があっても不思議ではないぐらい、新たな自動販売機は高性能だ。

他の機能に比べるとポイントがかなり割高だったのだが、必要経費と割り切り新たに得た 自販機コンビニ に姿を変えた。

この自動販売機はその名の通り、コンビニの商品が24時間買える自動販売機だ。実際に大手のコンビニが提携している。

シンプルなデザインで白を基調としているのは、通常時と同じなのだが右上に『Kazoku Itiba』という文字が青で描かれている。身体の幅も殆ど同じだが、少しだけ厚みが増している。

そして、一番の違いは商品のラインナップだ。コンビニに置いてある商品がズラリと並んでいる。おむすび、パン、弁当、総菜、カップ飲料、菓子が何種類もあり、この自販機になるとコンビニに置いてある飲食料品の殆どが選べるようになる。

本物の自販機コンビニは毎日業者が商品の入れ替えをしているそうだが、俺の場合は好き勝手に入れ替えができるのが強みだ。ポイントは消費するが。

同時に並べられる商品の数には限界があるので、どう配置するのかも腕の見せ所となる。

六段あるので、最上段はおにぎりで揃えるか。鮭、マヨツナ、昆

布は外せない。後は梅干し……うーん、異世界では無理かな。鳥五目が個人的に好きだったから入れておくか。

二段目はサンドイッチにしよう。卵、ハム、ミックス、カツ、海老カツかな。ホットドッグと焼きそばパンも捨てがたいな。

三段目と四段目はお弁当だな。まずは定番から揚げ弁当。かつ丼、親子丼、中華丼と丼ものを三種。中華弁当と焼き肉弁当は必須か。生前、よく食べていた。

五段目はスイーツで埋めるか。最近のコンビニのスイーツって侮れないからな。我が家の近くにあったケーキ屋よりも遥かに美味しい。プリン、シュークリーム、タルト、チーズケーキと俺が好きなスイーツポテト置いてみるか。

最後の六段目は飲み物だ。缶やペットボトルの飲料ではなくカツプ飲料とパック飲料で攻めるぞ。ちよつと割高だけあって味にこだわっているラインナップで、みんなを虜にしてみせよう。

よつし、理想的なラインナップだ。さあ、小さなコンビニと化した自動販売機の力を思う存分、味わってもらおうか。

「いらっしやませ」

ずらりと並ぶ、今まで一度も見せたことのない商品の数々に、戦闘中のミシユエルを除く全員が見入っている。

「えっ、ハッコン、見たことない食べ物がいっぱいあるよっ!？」

ラツミスが目を開いて驚いている。その顔が見たかった。

「う、うわああああ。宝の山じゃないっすか……と、取りあえず全部食べるしかっ」

「ボ、ボクも上から下まで全部制覇しないとっ!」

「落ち着け、ミケネ。飲み物は後回しだっ」

大食いのシュイとミケネとシヨートは目の色が変わっている。荒い息を繰り返して、口の端から湯気のような物が吹き出ているのは、きっと気のせいだと思いたい。

「パンがマジで旨そうなものばかりだな。こっちのは飲み物か。ほおう、こりゃ迷うぜ」

「これはお菓子ですよ。これは、試してみないといけません」

団長と副団長も興味津々のようだ。やはり、女性はスイーツに目がいくのか。

「どれにするよ。なあ、どれ食おうか、赤」

「白、落ち着けて。お互い違うの選んで、半分こしよう」

双子の話聞いて、その手があったかと、わかり易く表情を変えている副団長とラツミスがいる。

ラツミスは結構食べるが、副団長は見るからに食が細いからな。目移りするスイーツを全部食べるのは無理だと考えていたようで、ラツミスに相談を持ち掛けている。

お互い満足そうに頷いているので、話しはまとまったようだ。

「私の靴コップに注ぎ込むと栄えそうな色合いの、この飲み物をいただきましようか」

靴の中に注がれる苺ミルクはどうなのだろうかと思ったが、もう

突っ込むのも面倒なので、放置することにした。

おむすびは開け方がわからないだろうと、念動力で実演すると歓声が上がった。

そういや、三歳ぐらいの姪っ子のおむすびを開けたら、同じような反応をしたことがあったな、懐かしい。

ずらっと並ぶ飲食料品は、コンビニと全く同じ商品なので間違いなく美味しいのだが、俺としては缶入り食品や飲料の独特な味わいの方が、自動販売機らしくていいとも思っている。

自販機コンビニの方が食の質は高いが、良くも悪くも自動販売機独特の物珍しい品がないので、マニアとしては少し不満だったりする。

俺の感想は兎も角、どの商品も大概は好評なのだが、お弁当は微妙な反応だった。

「美味しいけど、これ温かかったらもっと美味しいんだろうね」

少し残念そうに、ミケネが呟いているのを聞き逃さなかった。

そうなのだ、それがこの自販機コンビニの数少ない欠点。商品が豊富で味も文句なしなのだが、自動販売機内の温度設定が弱冷蔵と冷蔵しか選べないので、温めると旨味が増す商品も冷たい状態で提供しなければならない。

だが、普通自販機コンビニはオフィス等に置かれることが一般的で、そういう場所だと電子レンジが常備されているので問題はない。

持ち帰る場合も家で温めればいいだけの話で、異世界だからこそ問題点なのだ。

温かい飲み物が欲しい場合でも、隣に普通の自動販売機が並んでいるのが普通なので、これも現代日本では問題にすらならない。

後は、基本の自動販売機以外は二時間縛りがあるので、長時間この姿になれないことか。避難場所が多くの人間を相手にする場合、時間がオーバーする恐れがあるので、少人数で時間に余裕があると、き以外は控えた方が良さそう。

つまり、たまの贅沢をする時に使う機能となりそうだな。

常連のお客にサービスで提供するぐらいが丁度いいかもしれないな。合計で金貨一枚分をご購入の方にだけ利用できる特別バージョン、というのはどうだろうか。

そうになると、門番は余裕で条件を満たしているな。今度、二人だけの時に変化してみよう。楽しみだ。

「あ、あのー。おくつろぎのところ、申し訳ないのですが。そろそろ、誰か交代していただけないでしょうか」

美味しい物をたらふく食べて、思い思いの格好で寛いでいる仲間に、ミシュエルが申し訳なさそうに声を掛けている。

あつ、ごめん、ミシュエル。一人だけ戦闘中だったな、すっかり忘れていたよ。

「ボク、お腹いっぱい動けないー」

「ああ、無理だな」

大食い団二人は漫画みたいに腹が膨張している。どれだけ食べたんだ。

「申し訳ないっす。まだ食事中っす」

シュイはスイーツに取り掛かったところのようで、両手にシュークリームを握りしめて、ご満悦だ。それ置いて、弓と矢を持ちなさ

い。

「皆さん、敵が弱いとはいえ油断しすぎですよ」

「うんうん、そうだよね」

非難するような言葉を口にはしているが、フィルミナ副団長も同意しているラツミスも、どうやら限界に近いようで、動く気配が全くない。スイーツ食べ過ぎたか。

「かぁー情けねえな。団長として恥ずかしい限りだぜ。後は頼んだへブイ」

大の字で地面に転がったまま、団長が帽子を振っている。

いやいや、危機感をもう少し持とうよ。食料を提供した俺が言うのもおかしいけど。

「皆さん、危機管理がなっていないよ。ここは魔物の巣くう迷宮の一部なのです。常時、気を張って節度ある行動を心掛けなければ動けなくなるぐらい食事を取るなんて、ハンター業を営んでいる者にとつて恥でしかありません。誘惑や欲望に耐える理性がなければ生き残れないのが、この稼業なのを忘れていませんか」

へブイによる見事なまでの正論なのだが、全員が反省しながらも何とも言えない表情を浮かべている。

日頃の言動と比べて文句の一つも言い返したいところなのだろうが、自分たちが間違っていることを理解しているので、何も言えないようだ。

それを完全に理解した上で、へブイは口にはしているよな。あのドヤ顔が、仲間の怒りを誘っている。

「ミシユエルさん、お疲れ様でした。頼りにならない仲間ばかりですみません。後はお任せください。ゆっくり食事を取って下さいね」

穏やかに微笑むヘブイと対照的に、ミシユエルは頬が引きつり、こめかみからすーっと汗が流れ落ちていく。

ミシユエルの方向だと、ヘブイの後方に座っているメンバーが良く見えるからな。

紅白双子は仲良く中指を立てて、怒りを体で表現している。シユイは黙って弓を構えているし、副団長は杖を掲げている。先端に水が集まっているのだが止めた方がいいのだろうか。

団長は我関せずと帽子の縁を傾けて、視界を閉じている。大食い団の二人に至っては、気にもせず寝ているな。

ラツミスだけが反省しているようで、何度も頷いている。偉いな、ラツミスは。

「さて、皆さんの尻拭いをするのでしょうか。そうだ、もし迷惑を掛けたと反省しているのなら、皆さんの悪臭漂う靴をいただければ、それで構いませんの。」

その言葉を最後まで口にすることはできなかった。自分に向けて飛来する、石礫と矢と魔法を避ける必要があった為に。

その攻撃をヘブイが軽々と全て交わし、流れ弾が魔物たちを撃ち抜いていく。

とんでもない光景だな。仲間の攻撃を微笑みながら避け、それに巻き込まれた魔物たちが次々と倒れ伏す。

「ははははっ、それは残像ですよ」

集中攻撃に晒されているというのに、ヘブイは楽しそうだな。

「アイツがいると、途端に愚者の奇行団らしくなるな。まったく、困ったもんだ」

ケリオイル団長は、ぼやきながらも何処か楽しそうだ。

これが愚者の奇行団の本来の姿なのか。彼らの態度はヘブイの合流も大きな要因なのだろうが、素の状態をさらけ出してくれているということは、俺たちが仲間として受け入れられている証明なのかもしれないな。

見極め

「いい運動になりましたね。その膨れた腹も少しは凹んだのではありませんか？」

へブイがにこやかに仲間を煽っている。

無数に転がる魔物たちの大半が愚者の奇行団の投擲により倒されている。狙われていたのはへブイなので、とばっちりで死んだようなものだが。

敵の増援も一時的に尽きたようで、へブイもスポーツドリンク片手に休憩している。

「ぐぎぎぎぎ、くっそ、当たんねえな」

「投擲用武器の練習をするべきかなあ、白」

紅白双子は一発もへブイに当てられなかったのが、相当悔しかったようで歯ぎしりをしている。

「毎回毎回、矢を避けられるのが納得いかないっす。結構、本気で射ているのに、何で躲せるっすか」

「魔法も避けるからくりを教えて欲しいところだけど」

シユイもフィルミナ副団長も腕に自信があるだけに、一発も命中しなかったことがかなり不満のようだ。

実はその理由はわかっている。攻撃を仕掛けている側がへブイから少し離れたところに、攻撃を繰り返していたからだ。これはわざ

と外しているのではなく、おそらく、精神干涉系の魔法をへブイがこっそり発動していて、その影響を知らぬうちに受けているからではないだろうか。

俺は自動販売機だからなのか精神干涉系の能力が効きにくいようで、その様子を正確に見て取れた。

仲間の攻撃を黙って見ていた団長は気づいてそうだけど。

「腹ごなしの運動はこれぐらいにしまして、団長、今後どうされるのですか？」

「この先の分かれているところまで、まずは移動だな」

地図によると、暫く進んだら三つに分かれているのだったか。今のところ、驚くぐらいに順調だが、こういう時に限ってアクシデントが発生したりするものだから、油断はしないようにしないと。と、警戒していた俺を嘲笑つかのように何事もなく分岐路に着いた。現実はそのまんまか。

「さーて、道が三つに分かれているが、どうするよ」

「ちょっと待ってください。地図で確認します」

フィルミナ副団長が地図を広げ、全員が覗き込んでいる。

真っ直ぐ道が伸びていて、確かに先で三方向に道が分かれているな。

「右はグネグネと蛇行していて、途中分岐が幾つかあるが、どれも少し進めば行き止まりになっているのか。面倒くせえな」

「仕方ありませんよ。初心者向けなので、無駄に道が入り組んでい

たりしますから。真ん中の道は弧を描くようになって先に巨大な空間が広がっています。左は迷路状に無数の分岐地点があるようです」

指揮官が見つからなければ風漬しにあたるつもりらしいが、運が悪ければターゲットと出会うまでにかかなりの時間を必要としそうだ。

「真ん中の広場みたいな場所が本命っぽい。お前らどう思う？」

「そこって、魔物が大量発生する場所だったよな、白」

「そうだね、赤。初心者頃に、ここで一度死にかけたんだよなあ」

紅白双子が遠い目をして天井を見上げている。若かりし頃の思い出が蘇っているようだ。今も充分若い。

「魔物を統率しているなら、その広場が一番やりやすいんじゃないっすか」

「そうですね。私も、そこが怪しいと思います」

シユイとフィルミナ副団長は同意見か。この地図だと、ここなら敵を大量にストックできるし、指示を出すのも楽そうに思える。

「ただ、そこが当たりだとしても、全員で行ってしまうと外れた場合、指揮官を逃がすことになりませんか」

失礼な話だが、ヘブイが普通の意見を言うだけで違和感を感じるようになってきた。

「ヘブイさんのおっしゃる通りですね。また二手に分けた方が」

「でも、その広場に大量の敵がいるとしたら、分けるのは危険じゃないかな」

「ミシユエルとラツミス意見も間違いじゃねえな。大食い団はどう思うんだ？」

「んー、もっと近づけば臭いで判別できるかも？」

「風向きにもよるけどな」

真ん中の道の先に敵がいると仮定して全員で攻めるか、数人残して二手に分けるか。判断が難しいところだ。

「ハツコンはどう思う？」

あ、俺にも意見を聞くのか。限りある言葉で上手く伝えられるといいけど。

「ここで」

「まものが」

「おおくでて」

「くりゆとこ」

「あたり」

大食い団は首を傾げているが、他の人はそうでもない。意味が伝わったのだろうか。

「えと、ハツコンは、ここで少し待って、魔物がいっぱい出てくる道が当たりじゃないかって、言いたいんだよね？」

「いらつしゃいませ」

一発でラツミスが理解してくれたことが嬉しくて、前までの返事の仕方ですべてしまった。この調子だと、これからも彼女の通訳に助けてもらう場面がありそうだ。ごめんな、もう少し流暢にわかりやすく話せるように努力するよ。

それからも様々な意見が出たのだが、最終的に俺の意見が採用されることになった。

分岐路から少し下がり、まずはミシユエルとシヨートが先頭に立ち、前衛を担当することになった。後衛はシユイで残りは休憩している。

「ハツコン、商品に矢ないっすか？ 矢って結構持ち運ぶ時に邪魔で重いから、売っていると、かなり楽になるっす」

「ざんねん」

唐突にそんなこと言われてもな。シユイが物欲しそうに指をくわえて、こつちを見ているが無い袖は振れない。

未だかつて、矢を売っている自動販売機を見たことがない。こればかりはどうしようもないな。

そもそも、武器の自動販売機があるのかという話だ。もし売っているのなら、この世界では需要があるだろうけど、平和な日本でそんな物を商品として売ったら、警察のお世話になることになる。

そういえば、アメリカには銃の自動販売機があると知って、銃大国は怖いなど本気で信じかけたことがあるのだが、実際は拳銃のレプリカが飾っているだけで、銃を無くす為の募金を集める自動販売機だったという話だ。

生前は貯金をして、海外の珍しい自動販売機巡りをする予定で色々調べていたのだが、その願いはかなうことはなかったな。まあ、珍しい自動販売機や新商品を見つける度に買っていたので、お金が全然貯まっていなかったが。

諦めて立ち去るシユイの背中が寂しげだ。申し訳ないが、そこまで万能じゃない。

自動販売機の商品をこの世界の物に入れ替えることが可能なら、商売の幅が広がりそうだが、それは贅沢過ぎる望みか。

新たな活用方法を模索しつつ、戦闘を眺めているのだが、やっぱり真ん中の通路から敵が溢れてくる。時折、左右からもやってくるが真ん中とは比べ物にならない。

どうやら本命は真ん中の通路で間違いなさそうだ。ただ、敵が大量に湧いているとはいえ、そこに指揮官がいるという保証はない。難しい決断を迫られそうだな。

「んー、やっぱり真ん中で当たりみたいだぜ。ハッコン、前に大穴を塞いだ時の方法で、左右の通路を塞ぐつてのは可能か？」

俺の脇に立つケリオイル団長の発想は悪い考えではないと思う。

でも、この通路では無理だ。通路の高さが五メートル程度しかないので、巨大自動販売機になることができない。無理やり変化したら体が潰れるか、天井が崩落するかの二択だ。

普通のサイズでコンクリート板を出すことは可能だが、このサイズだと相当な数を出さないと無理なので現実的じゃない。それにポイントの消費量も心配だ。

「ざんねん」

「無理か。いい案だと思ったんだが。となると、他に埋め立てる方法も思いつかねえな。敵が手ぐすね引いて待っているとしたら、全

員で向かわないとやべえか。真ん中に突っ込んでみるか」

メンバーを分けるつもりはないようだ。

俺も真ん中が怪しいと睨んでいるが、万が一のことを考えると何かしらの対策をしておいた方が良いと思う。

「それでは光魔法の応用で、右と左の通路には土砂で崩れたような幻影を作りだしましょうか。継続時間を上げれば半日ぐらいは維持できると思いますが」

ヘブイの能力って派手さは全くないが便利だよな。一チームに一人欲しい人材かもしれない。変態なことを除けば。

「あれ、お前の魔法ってそんなに長時間いけたか？」

「ええまあ、無理をすれば。その代わりに、魔力の大半を持っていきます。残りの魔力は治療用にとっておきたいので、他の魔法はもう使えないと思ってください」

精神干渉系の魔法は広範囲に影響を与えるから、集団行動では使えないそうなので、特に問題は無いだろう。

「おう、わかったぜ。んじゃ、ヘブイ頼むわ」

「かしこまりました」

幻影を見せる魔法は設置型で、尚且つ発動までに時間が必要らしく、終わるまでやってくる敵を討伐しながら待つことにした。

大体、三十分ぐらい経過しただろうか。左右の道に幻影を設置し終えて、満足げに額の汗を拭うヘブイがいた。

左右の通路には本物にしか見えない土砂がみっちり詰まっている。お見事としか言いようがない。

「へブイのおかげで後顧の憂いは消えた。さーて後は、この先に指揮官がいることを祈るしかねえな」

これでけりがつくのが理想的ではあるが、こればかりは本当に運だと思う。

敵側の立場になって考えると、集落から距離が近い方が襲いやすく、情報の伝達もスムーズにいく。多くの魔物に対して一度に指示を出すなら、それだけの魔物を確保できるスペースが欲しいだろう。真ん中の通路の先は、その条件に当てはまる。

司令官がいるか否か。そして、どれだけの戦力を整えているのか。不安はあるが、このメンバーを見てみると負ける気がしない。

油断は大敵だが、頼れる仲間がいる心強さはありがたいな。

まあ、どれだけ敵がいようと窮地に陥ろうと、ラツミスは俺が守ってみせる。

総力戦

「敵、現れないね」

ミケネが首を傾げている。

敵の存在を素早く察知する為に、先頭は大食い団の二人が担当しているのだが、その能力が活かされる場面が今のところ皆無だ。

耳をぴくぴくと動かし、鼻を鳴らしているが、真ん中の通路に入ってから一度も敵と遭遇していない。

「こりゃ、相手にも感づかれたか。ちとばっか、面倒なことになりそうだぜ」

「団長。敵は戦力を集めて待ち構えていると？」

「まあ、そう考えるべきだろうな。ちよくちよく現れていた魔物が全くこねえとなると、そう考えるのが妥当じゃねえか」

ケリオイル団長とフィルミナ副団長の会話を聞いて、団員たちの顔に緊張の色がない。

「雑魚なんて、密集したって雑魚なのにな、そう思うだろ、白」

「だね、赤。副団長の魔法で一掃してもらおうよ」

「矢を適当に撃ち込んでも、当たりそうじゃあ楽しそう」

「私は治癒に従事しますので、皆さん頑張ってください」

相手を舐めているというより、自然体なのだろう。仲間としては頼もしいことなのだが。

「ハツコン師匠。露払いはお任せください」

ミシユエルは最近、イケメン弟子モードという新たな進化を遂げている。というより、イケメン状態で弟子として振る舞うので、何もしてないのに俺への評価が勝手に上がっていく。

名の売れている評判のハンターが自動販売機を師匠と崇めていたら、そりゃ目を引くに決まっている。

心配なのは第三者から見たらただの鉄の箱に、礼を尽くすミシユエルの評判が下がらないか、それだけだ。

「指揮官が見つかるといいよね。そうしたら、始まりの階層の集落を捨てないで済むし。頑張ろうね、ハツコン」

「うん」

ラツミスはいつも通り元気はつらつだ。変に気負っている感じもない。

昔は蛙人魔一体に対しても、緊張して戦っていたのに……大きくなつて。

ずっと彼女の背から見守ってきただけに、肉体も精神も急成長していることが嬉しくてならない。ただ、このままだといつか、俺が必要なくなりそうで少し寂しくもある。

「和気藹々なのは構わねえが、もうちつとで着くぞ。ちょい、静かにしてくれ」

団長の忠告に雑談をしていた団員たちの会話がピタリと止んだ。さっきまではしゃいでいた人たちと同一人物とは思えない真剣な表情で、まとう雰囲気も一変している。

こういった切り替えの早さが、患者の奇行団がトップクラスのハンターチームと呼ばれる、ゆえんの一端なのだろう。

弧を描いて進んでいるのだが、ここも下り坂になっているな。地面は岩肌が剥き出しなので硬く、足跡が一切残っていない。

ちらつとヘブイに目をやると、足元を見つめて少し不満げな表情をしている。この人、ぶれないな。

「この先を曲がったら敵が待ち構えているぞ。あー、ミシユエルは気配察知できたな。あと、ミケネ、ショート、音と臭いで何体ぐらいいるかわかるか」

「敵の数ですか。あまりに密集しすぎていて気配が混ざりあって…
…少なくとも百は覚悟した方が良さそうです」

「臭いは緑魔が臭すぎてわかんないよ。あと、話し声は全く聞こえないかな」

「そうだな。音は呼吸音ぐらいしか聞こえない」

「そんなもんか。通路から出るところにはいねえようだが、気配を殺せる个体がいることも考慮しねえとな。んじゃ、先頭で突っ込んでもやられる可能性が低い、俺とミシユエルが前衛でいいか」

「私は問題ありません」

敵が最低でも百体いるというのに、ミシユエルも団長も全く物怖じしていない。

「このメンバーが一番緊張しているのはラツミスのようだ……いや、俺か。」

あれこれ考え過ぎているのも緊張を誤魔化す為に、無意識でやっていたのかもしれない。よっし、落ち着こう。敵が不意打ちしてきたら即座に 結果 を張れるように意識を集中しておこう。

仲間が飛び込む前に俺ができることなんてない…… 本当じゃないのか？ 灯油をまくのは今から突っ込む仲間の足止めになってしまうから、却下。

勾配のある坂道だから何かを転がすことは可能だろうけど、この状況で缶やペットボトルを出したところで仲間が動く邪魔になるだけで、相手にも何の影響も与えない。

潜んでいる相手に影響を与えて、密集している魔物たちに嫌がらせをする方法。敵の動きを鈍らせるには、移動を困難にさせればいい。動きにくくなる方法が。

ランク2の機能欄にあるこれは使えそうだな。人生で二度だけ友達の付き合いで遊んだことのあるパチンコの 玉貸機 に変化しよう。

最近各パチンコ台の横に設置しているらしいが、俺が昔に付き合いでやった時は、かなり古い店だったので自分で取りに行くタイブだった。

古びた藍色の体の上部には赤く太字で『自動玉貸機』と描かれている。

中心より少し下に湯沸しポットの注ぎ口を無骨にさせた感じの出っ張りがあり、そこに玉を入れる箱を置いて上に押し上げると、玉が流れ出る仕組みになっている。

「え、ハッコン、どうしたの」

重さが変わったので、ラツミスが気づいたようだ。いつもより小さくレトロな感じになった俺を全員が取り囲んで、物珍しそうにこちちを見ているな。

「また、珍妙な姿になったな。何だこりゃ」

「きつと、美味しいお菓子か食べ物がここから出るっすよ」

シユイの願望に大食い団の二人も反応している。そこから、出てくるというのは当たりだが、残念ながら食べ物ではないぞ。

「のいてね」

本当は「どいて」「離れて」と言いたかったが、ラツミスの方言が通用するのだから、意味は通じてくれるだろう。

ちゃんと理解してくれたようで、全員が俺から離れてくれた。

これだけ坂が急ならいけるだろう。パチンコ玉を大量放出すると、坂道を勢いよく転がっていく。玉のポイント変換は異様に安いので、千個ほど転がしておくが。

「ハツコン師匠、何ですか、この鉄の玉は!」

どう説明していいものやら。ミシユエルだけではなく、みんなが疑問に思っているようで、詰め寄ってくる顔が近い。

「うごく」

「こてんっ」

あ、眉間にしわが寄っている。やっぱ、これじゃ通じないか。

「えっと、動くと言が邪魔で、こてんって転ぶってこと？」

「せいかい」

大正解だよ、ラツミス。ハツコン通訳検定一級を進呈します。

「広場から魔物の悲鳴かな、変な声と倒れるような音がしているよ」

ミケネの耳が広場の混乱を聞き取ってくれた。思惑が上手くいったのか。

「おっし、ハツコンがお膳立てしてくれたんだ。俺たちも突っ込むぞ」

「了解！」

元の自動販売機に戻って、ラツミスに背負ってもらおう。いつも、すまないね。

足下にパチンコ玉が残っていないか確認すると、全員が通路を疾走して広場へと飛び出した。

そこは野球場が入っても余裕があるぐらいのスペースがあり、地面は通路と同じく硬質の岩でできている。砂や土ならパチンコ玉は直ぐに動きを止めていただろうが、思いの外、遠くまで転がっていて、入り口付近には一つも見当たらない。

やはり、近くで待ち伏せていた緑魔が十数体いたのだが、パチンコ玉に足を取られ倒れているか、正体不明な玉に異様なまでに警戒して、手にした棍棒で必死になってパチンコ玉を払っているかのどちらかだった。

「お手柄だぜ、ハッコン」

足下のパチンコ玉が気になり注意力が散漫の魔物に攻撃を加えようと、団長たちが駆け寄っていくのを見て、近くのパチンコ玉を消しておいた。これで仲間が転んだらシャレにならない。

倒れている敵にはシュイの矢と、フィルミナ副団長の魔法が容赦なく突き刺さり、抵抗一つできないまま倒されていく。

入り口付近にいた敵はあっという間に一掃されたのだが、問題は本命だ。

広場の半分以上を埋め尽くしている、魔物の群れ。数えなくてもわかる、百は余裕で超えているぞ。

緑魔、大緑魔だけではなく、更に大きな緑魔や、弓を手にしている個体と、副団長の持つような杖を持っている者までいる。

「やっぱいるよな。弓緑魔に將軍緑魔に魔法緑魔も揃い踏みときたか」

団長の苦々しい表情を見ながら、口にした魔物の名前を反芻していた。

確か、この階層の魔物は緑魔ばかりで、他の魔物も緑魔という種族に属するものらしい。弓や魔法が使えるだけで別の呼び名があるというのは違和感がある。

ただ、將軍緑魔は清流の階層で言うところの王蛙人魔のような存在なので、階層主ほどではないが注意すべき相手だ。それが、見える範囲だけでも五体か。

「だが、これだけ揃っているってことは、指揮官がいると見て間違いないねえな」

団長の確信めいた呟きに、全員が顔を合わせ頷く。

数が数だけに乱戦は必至だろう。ラツミスはもちろん、愚者の奇行団や大食い団、ミシュエルの動きにも注意して、危なくなったら手を貸せるように立ち回るぞ。

鈍器

圧倒的な差がある戦闘の火蓋が切られた。

数の差ならどう見ても魔物側が有利だ。押し寄せてくる魔物の群れは緑の津波を彷彿とさせる。

その津波を迎え打つのは、十人と一台。

後衛であるフィルミナ副団長とシユイは下がり、広場と通路の境目に陣取っている。敵に接近された時は通路に一旦後退して、対応する手はずになっている。

後衛の護衛は、ミケネ、シヨートが担当する。そして、残りのメンバーは半円状に陣取り、後衛に敵を寄せないようにするという手筈だ。

それも五人で弧を描き、余った一人だけ陣に加わらず自由行動となっている。

敵の強さに応じてメンバー交代する予定で、まずはミシユエルが担当することになった。

「皆さん、お任せください。我が力、お見せしましょう」

黒で統一された鎧に竜の頭を模った大剣。そして、イケメン。

相変わらず、絵になる男だ。押し寄せてくる敵に怯むことなく突っ込む姿は、映画のワンシーンのようだ。

魔物の波に呑み込まれる直前、ミシユエルは大剣を抜き放ち、赤い刃を一振りした。

赤い軌跡が放射線状に広がり、赤に触れた魔物の体がいとも容易く切断されていく。鋭利な切断面からは炎が噴き出し、ミシユエルに辿り着く前に黒い消し炭と化している。

「派手だねえ」

「仮、ではなく、正式な団員になっていただきたいです」

団長と副団長は目を細めて、ミシユエルの活躍を見守っている。

「ミシユエル、マジかっけーな、赤！」

「くっくっくっ、派手な攻撃って羨ましいっ！」

双子は心底感動しているようで、興奮しすぎて足を踏み鳴らしている。

気持ちはわかる。理想の英雄像にしか見えない。そりゃ、人気があつて当たり前だな。

「あの脚甲は譲ってくれませんよね……っと、皆さん。私たちの出番ですよ」

ヘブイの指摘に全員が武器を構える。ミシユエルを迂回して何体もこっちに向かつて来ている。

今回の戦いはサポートに徹しよう。攻撃用に瓶ジューズを取り出し口に十個ぐらい置いておけば、打撃武器としても投擲武器としても使えるだろう。

本当は常時 高压洗浄機 になっておきたいのだが、時間制限があるので長時間労働には向いていない。

「ほっ、ふんぬっ、とっっ」

ラツミスは可愛らしい掛け声だが、その破壊力が衰えることはない。

しかし、どんな時でも全力を尽くすというスタイルは嫌いじゃないけど、破壊力過多だよな。

体力も無尽蔵かと思えるくらい疲れ知らずなのだが、もう少し力の制御を覚えたら持久力も更に向上しそうだ。

今のところ危なげなく戦えているな。ラツミスも含めた全員が、まだ余裕があるように見える。

一人、敵陣のど真ん中で暴れているミシュエルは未だに攻撃を一発もくらっていない。初心者ダンジョンで高レベルのプレイヤーが遊んでいるような安定感だ。

大緑魔も一撃で脳天から真つ二つか。接近戦で負ける要素を見つけるのが難しいぞ。そうになると、遠距離攻撃なのだが。

俺の心配を後押しする様に、矢と火の球がミシュエル目指して飛来する。

ちらつと横目で確認したかと思うと、足元に転がっている緑魔の死体を蹴り上げて盾代わりにした。おー、ワイルドな戦い方もできるんだな。

剣術とか詳しいことはわからないが、剣捌きは綺麗で模範的な動きのように見えて、柄で殴ったり、蹴りで体勢を崩したりもしている。

基本が完璧でありながら、応用も利くという鍛え上げられた戦闘スタイル……のように思える。剣道もしたことのない俺の選定眼が当てになればの話だが。

おっ、仲間の魔物を押しつけてデカいのがやってきたな、将軍緑魔だったか。

ボディービルダーの世界チャンピオンの筋肉を更に増強したような筋肉の塊。腹筋は八つに分かれている。身長もミシュエルの倍近い。

普通なら、どう考えても勝ち目はないのだが、全く危機感がない。

当の本人も落ち着き払っているから、たぶん大丈夫。一応、いつでも瓶ジョースを投擲できるようにはしておこう。

「將軍緑魔がお相手か。久方ぶりの戦いだ」

「グオルギアアグルウウ！」

何か意味のありそうな叫び声を上げて、將軍緑魔が手にした大剣を振り上げた。刃が潰れて切れ味は悪そうだが、破壊力としては充分な無骨な作りの大剣。

あれを叩きつけられたら、俺の頑丈を上げた鉄の体でもダメージが通りそうだ。人があれをまともに受けて無事で済むとは思えない。距離があり仲間たちと魔物の争う音が、そこから中から響いているというに、將軍緑魔が振り下ろした大剣の風を切り裂く音が、ここまで届いた。

ミシユエルは竜の大剣を頭上に掲げ、正面から受け止めたように見えたのだが、切っ先を地面に刺して身体の側面に這わせる。

刃同士が激突するが、斜めに傾けられた刃の腹を將軍緑魔の大剣が滑り降り、地面と衝突した。威力があり過ぎるが為に、刃こぼれをした大剣の刃が地面にめり込んでいる。

「力だけが圧倒的な戦力の差ではないのですよ」

そんな隙をミシユエルが見逃すわけもなく、またも一振りで將軍緑魔の首が飛んだ。

やはり、ミシユエルの実力は格が違う。始まりの階層が初心者向けだとはいえ、この強さは異常だな。

「ミシユエルは凄いいよね。うちもあれぐらい強くなれたら、もっとみんなの力になれるのに」

大丈夫だよ、ラツミス。

殴られて吹き飛ばされた緑魔が密集地帯に飛んでいき、激突した魔物たちを薙ぎ倒しているのを見て、ツツコミを入れたくて仕方がなかった。

みんなの戦いに見惚れている場合じゃないな。俺も活躍しないと。瓶ジューズを二本 念動力 で浮かばせて、背後から近寄ってきていた緑魔二体に投げつけた。器用さが上がっているおかげで頭に命中して、緑魔がその場に倒れた。

筋力が上がっているので以前に比べて投げつけた速度も上がっているおかげで、緑魔を倒すぐらいの威力は確保できているのか。

「グギャギャギャ」

おっ、後方から大緑魔が奇声を上げながら突進してきた。

二本の瓶ジューズを投げつけて、一本は棍棒で弾かれ、もう一本は額に当たったが少し顔をしかめた程度か。注意を何とか逸らすくらいはできそうだ。

一度足を止めたが、すぐさま立ち直って駆け寄ってくる。

それでも、相手に少しはダメージが通っているので足止めとしては役に立つ。基本の自動販売機形態だと、これ以上を望むのは酷かもしれない。

さて、どうしようか。商品を入れ替えてみよう。二リットルのダイエツトなコーラと棒状キャンディーをミネラルウォーターと交換した。

今までは棒状キャンディーは専用の自動販売機でしか販売できないと思っていたのだが、普通に商品入れ替えで置けることに最近気づいた。人間 自動販売機、やってみないとわからないものだな。キヤップを開けてキャンディーを放り込む作業にも慣れてきた。

手際よくこなすと、飲み口を將軍緑魔に向けた。

「ブグギャギャギャ！」

將軍緑魔だけでなく、周辺の緑魔にもぶっかけておく。

目を押さえて暴れ狂っている魔物たちを眺めながら、さりげなく

玉貸機 に変化する。

パチンコ玉をジャラジャラと流しながら、 結界 で全て吹き飛ばす。

これだけ敵がいるので殆どのパチンコ玉が命中したのだが、これだと緑魔でも倒すには至らない。それでも、それなりには痛いよう動きは止まっている。

予定通りなので、第二段階へと移行するか。

「ハッコン、暫く後ろの敵を任しても大丈夫？」

「いらっしやませ」

咄嗟の返事だと、この返し方が楽でいい。というより、自然と口から出る。

今までなら無理をしても、全部の敵に対処して俺を傷つけないようにしていたラツミスだが、こうやって任せてくれるのは信頼の証だ。

それに応えるのが男だよな。

このまま、パチンコ玉での牽制をしておけば時間稼ぎにはなるが、決め手にかける。足元に転がったパチンコ玉も再利用して、範囲内であれば再び弾き飛ばすというのもあり。

だが、俺は別の方法を考えていた。パチンコ玉だけではなく、これを組み合わせることで新たな攻撃方法を創造する。

「ガギユガアグアア」

パチンコ玉の横殴りの雨を無視して、大緑魔が突っ込んでくる。この程度の威力だと強引に来られたらどうしようもない。相手も俺の攻撃は脅威にならないと考えているのだろう、口元に笑みを浮かべているのがイラッとするな。

顔だけをカバーしたまま、あと二歩も進めば攻撃範囲に入るぐらいの距離まで詰めてきている。パチンコ玉を踏みつけて転んだら面白かったのだが、思惑通りに事は運んでくれないようだ。

相手は武器を手にしていないので、かなり至近距離まで近づかないと拳が届かない。殴られたところで 結界 で弾けばいいだけの話なのだが……あの勝ち誇った顔を歪めてやるか。

俺の攻撃にかなりイラッしていたのか、パチンコ玉を完全に無視して拳を振り上げている。防御無視か、完全に舐められているな。自分がやられるとは微塵も考えていない大緑魔の頭に、自動販売機の上にそつと置いておいた二リットルのペットボトルを操り叩きつけた。

「グンツギイ……」

目の前で白目をむいて、仰向けに倒れる大緑魔。本当に倒せたのか疑問が残るので、これがオスかどうかは知らないが、無防備に晒された男の急所をペットボトルで何度も殴りつけておく。

たまたま近くで俺の戦いぶりを横目で見ていた、紅白双子の顔色が悪い。男として痛みが想像できてしまうのだろう。

普通ならジューズの詰まった二リットルペットボトルの一撃程度で沈む相手ではないが、このペットボトルは中身をキャンディーで噴き出させた後の物だ。

空になったペットボトルに足元に幾つも転がっているパチンコ玉

を 念動力 で拾って、中に詰めていなければ、ここまでの威力は出なかった。

これ、鈍器として充分通用するな。新たな攻撃方法の一つとして今後も活用させてもらおう。

よっし、これで俺も接近戦用の武器が手に入った。ラツミスの背後から襲い掛かってくる敵は俺がお相手しようじゃないか。

数と戦闘力

個々の戦力差があるので、こちらが押し気味に戦えているのだが、敵は無増殖でもしているのかと、疑いたくなるぐらいに押し寄せてくる。

もし、魔物が倒されて即座に呼び出せるのであれば、不利になるのはこつちだ。幾ら強くても体力には限界がある。今は総力戦なので休憩を挟めず、消耗していく一方。

ポイント大量消費を覚悟の上で、巨大自動販売機になるという手も考えはしたが、ここも天井が低すぎる。変化したら潰れるか、崩落するかの一択だ。

ドライアイスをばらまき二酸化炭素を充満させる方法も考えはしたが、野球場並の空間を満たすには、どれだけ時間が必要なのか見当もつかない。

ガソリン等を撒いて火を放つのも、俺が単独ならありだが仲間を巻き込むだけ。今まで試してきた戦闘方法の殆どが封じられた状態だ。

倒すと即座に新たな敵が現れるということは、相手は体力も万全で怪我もない状態で復活するということだ。

ミシユエルの殺傷力をもってしても、敵の群れを割って敵陣の奥まで進むことが叶わない。切り倒されても、吹き飛ばされても、敵が減っては増える。ジリ貧とは、まさにこのことだろう。

「キリがありませんねっ！ 咆哮撃！」

おっ、ミシユエルの必殺技が炸裂している。

発動時に技名を叫ぶ必要があるのかとか、野暮なツツコミはしな

いでおこう。

その一撃は凄まじく、二十近くの魔物が消し炭と化している。その瞬間、奥の方で同時に幾つもの光が見えた。たぶん、殺されたことにより魔物を新たに召喚して補充したのだろう。

死んだ数だけ即座に増えているなら、勝てる見込みはないぞ。

これって、勝つ方法はどうか指揮官を倒すか、敵を殺さずに無力化するかだよな。無力化する方法なら、心当たりがある。

該当する人物を目で追うと、鉄棒の先に棘のついた鉄球で魔物を陥没させている男がいた。ヘブイなら精神に干渉する魔法で、奴らに幻覚を見せることも可能じゃないだろうか。

だが、分岐路の幻覚を発生させたことにより、殆ど魔力が残っていないという話だった。一旦引いて回復を待つて再出撃も考慮しておかないとな。

もう一つの方法である指揮官への直接攻撃なのだが。魔物の群れに遮られて、目当ての敵が何処にいるかすらわからない。

たぶん、一番奥の壁際だろうが、ただの憶測なので確証はない。というか、そもそも、そこまで辿り着く手段がない。

いつものように、風船、ダンボールコンボで空からの奇襲も考えたが、天井が低すぎるので敵から撃ち落とされる確率が高すぎる。ラツミスに壁際まで投げてもらったら、楽なのだが絶対にやってくれないと思う。

駄目で元々頼んでみるか。

「らっ いす」

「呼んだ？ とおおう！」

戦闘中の忙しい時に話しかけて悪いが、何とか説得しないとな。

「あつちに」
「ぼいして」

瓶ジュースの飲み口を敵陣の奥に向けて説明すると、限界まで首を回したラツミススの横眼がジト目だった。

戦闘が疎かになっても大丈夫なように 結界 で覆っておこう。

「向こうに、投げて欲しいんだよね。やだ」

即座に俺が何を言いたいのか理解してくれるのは嬉しいが、頬を膨らませてご立腹のようだ。

俺が頑丈なのはラツミスも理解しているのに、未だに乱暴に扱うのを嫌っている。

彼女の優しさだとはわかってはいるが、俺としては胴体に鎖でも巻いて、振り回して武器にしてくれても構わないとすら思っているのだが。

結界 を張った状態で敵に投げつけたら、かなりの威力が出て、俺も移動距離を稼げるというメリットがある。

「かたいいから」

「いやっ。ハツコンを道具みたいな扱いしたくない」

自動販売機は道具みたいなものなのだが、ラツミスは俺を対等の存在として見てくれている。それは嬉しいことなのだが、時には厳しく突き放していいんだぞ。

最近、依存もなくなってきたと思っていたけど、未だに俺が傷つけられることを極端に恐れている。いや、自分が傷つけてしまうことを怖がっているのか。

「あいぼうだ」

切実に「ぼ」という発音が欲しい！ あいぼうって、締まらないにも程がある。相棒って言いたかったのにつ。

「あいぼうって……ぷっ、あははははは！ うん、相棒だもんね」

「だからしん」

「ようして」

声を少し低く設定して、少しでも説得力が出るように調整してみただけだろう。

ラツミスは屈むと俺を背負子から降ろした。そして、俺を両手で挟み込むようにして掴むと、額を付けた状態でじっと見つめている。

あの真剣な眼差し、理解してくれたのか。

「相棒として言わせてもらおうね。いや」

「うっ」

今、同意する流れだったよね……。

「投げて指揮官がいなかったらどうするの？ ハツコン動けないでしょ。ずっと敵が現れていたら、誰も迎えに行けないよ？」

そうだけど、そこはガソリンとか灯油を散布して、一面を火の海にするとかやりようが。

「もしかして、火を付けようと思っているのかな。でも、そんなこととしても敵が違う場所から現れたら、火が邪魔で近づけないし、誰

がうちを守ってくれるの？」

賭けに失敗してラツミスが乱戦状態で孤立してしまう、デメリツト。考えていなかったわけじゃないが、守るべき彼女から言われて何も返せなかった。

最近、自分の思惑通りにいくことが多く、今回も全てが上手いくと何処か樂觀視してなかったか。最悪の展開を考慮していたのか俺は。

「ハツコン。うちを心配して自分だけ無茶しようとしているでしょ。こんなこと思っていない？ 自分を過剰に心配しすぎて、無理をさせてくれないって」

うつ、まるで心を読んでいるような鋭さ。初めて会った頃から、そうだったよな。定型文しか話せない言葉足らずの俺を、いつも気遣い察してくれた。

「それは、うちも同じなんよ。ハツコンがうちの身を案じてくれるように、うちもハツコンに傷ついて欲しくないんよ」

そうか……そうだよな。相棒を名乗っておきながら、ラツミスに無理をさせずに、自分だけ無茶ばかりしていたら、怒って当然だ。

「すまん」

「謝らなくていいよ。うちらは一心同体でしょ。攻撃はうち、守りはハツコン。二人がいれば何でもできる！」

「うん」

何かも粉碎する力と、どんな攻撃も通さない守り。二人がいれば何でもできる。今までだって、そうやってきたのだから。

自分一人で何とかしようとするのは、もう卒業しないとな。これからは二人で力を合わせて、無謀なこともせずに着実に勝利する方法を話し合って

「ということで、一人より二人。一緒に特攻するよ！」

「うっ」

ちよ、ちよっとお嬢さん？ 何を口走っていらっしやるので。それはあまりにも両極端過ぎませんかねっ！

止める間もなく、身体が前に吹っ飛んだ。いや、俺が跳んだというか、ラツミスが全力で地面を蹴って、走り出したのかっ。

「お お お お」

久しぶりに本気走りをするラツミスの背に乗ったのだが、何百キロもある俺を背負っているとは思えない走りっぷりだ。

「えっ、ラツミスさん、ハッコン師匠!？」

背後から怒涛の勢いで背後から迫る、ラツミスの気配を感じたのか一度チラツと視線を向けただけのミシュエルが、今度は慌てて振り返っている。

「え、え、えつと、蹴散らします！」

俺たちが特攻しているのを即座に理解して、ミシュエルが大剣を肩に担ぎ、大きく踏み込むと渾身の振り下ろしを放った。

横に薙ぐのではなく、真っ直ぐ縦に振り下ろした大剣の刃から赤い光が真っ直ぐに伸びる。赤い軌跡に触れた魔物たちが真っ二つに裂けながら、攻撃の余波で左右に吹っ飛んでいる。

敵の群れの真ん中に、黒く焼け焦げた一直線の道が開けた。

「ハッコン師匠、どうぞ、お進みください！」

「いやいや、止めてくれていいんだぞ!？」

「ありがとう、ミシユエル。さすが、ハッコンの一番弟子」

「いやあ、そんなことないですよ。頑張ってください！」

ミシユエル、褒められて嬉しそうだな。満面の笑みで見送っているよ。

ラツミスは迷わず突っ込んでいくし……ええい、腹をくくるぞ!

無謀とも思える突撃は俺に対する信頼の証とっておこう。こう

なったら、二人で指揮官を探し出して捕縛、もしくは倒すしかない。

「蹴散らすよ、ハッコン！」

「おうさ」

孤立しているなら、それはそれで戦いようがある。思う存分、ラツミスには暴れてもらおうとしよう。

メインとサポート

「ちえい、やー、とおおう」

おー、緑魔が面白いように吹き飛ばされていく。まるで、中身が綿のぬいぐるみかと疑ってしまうぐらい簡単に宙を舞っている。

ラツミスが拳を振るうたびに凄まじい勢いで敵が排除されていくが、敵が減っている感じが全くしない。確実に減らしているのに、前に進むことができない。

敵陣のど真ん中で完全に孤立してしまっているのだが、今のところは余裕がある。敵が密集しすぎていて、相手は上手く立ち回れないでいるようだ。

後方からの攻撃は全て俺が 結界 で防ぐか、パチンコ玉入りペットボトルで撃退しているので、ラツミスに傷を負わずどころか触れさせてもいない。

普通の戦いなら、このまま殲滅してしまえばいい。だが、敵が延々と現れ続けて終わりの見えない状況。どうにかしないと、仲間共々、消耗したところを一網打尽にされてしまう。

殺せば新たに現れる。なら、殺さずに戦闘不能状態に持っていくしかない。

となると思いつくのは……パチンコ玉か。あれを周辺に転がせば足を取られて転ばす策を入り口で前回実行したのだが、思ったよりも効果が薄かった。

地面が岩肌とはいえ、まっ平らではなく凹凸があるので踏んで転ぶという王道を実行してくれた緑魔は少数しかいなかった。

となると、組み合わせだ。パチンコ玉を灯油に漬けることにより

コーティングして、更に滑らせる策はどうだろうか。あ、でも、引火の可能性が出てくるな。燃やすと敵を殺すことになり、また新たな敵が湧くだけ。

他に滑る商品となると 全く関係ないのだが、ふと過去の思い出が頭をよぎった。

そう、あれは生前、自動販売機マニアとして各地の珍しい自動販売機を求めて、田舎の山奥を走っていた時のことだ。

人気のない山道の脇に、何とも言えない怪しげな建物を発見したのだ。

青いプレハブの建物があり、店名らしき文字が太文字で書かれていて、下には二十四時間。雑貨、おもちゃ、本、映像等の文字が並んでいた。

俺のレア自動販売機センサーが過剰な反応を示したので、車を停めて好奇心に従い、その怪しげな建物へと侵入した。

そこは俺が想像していた物ではなく、アダルト商品が満載された自動販売機が所狭しと並んでいた。そう、俺が全く予想だにしていなかった商品の数々があったのだ。あくまで自動販売機マニアとしての好奇心に従っただけで、下心は全くない行動だったことを強調しておきたい。

それも驚くことに商品の中身が最新の物もあり、多種多様なアダルトグッズが取り揃えられていた。

とまあ、そんな唐突に思い出した過去はどうでもいいのだが、新たに仕入れた商品はローション。つまり潤滑剤だ。滑る転ばすのに最適な商品といえば、やはりこれだろう。

バラエティー番組で使われることもあるので、見たことがある人も多いと思うが、あの滑り具合は尋常ではない。

そのローションを取り出すと蓋を開けて、パチンコ玉の詰まったペットボトルに中身を注ぎ込む。そして、上下にシェイクすると

結界 でペットボトルを弾き飛ばした。

山なりに飛んでいくペットボトルを消し去ると、ローションがベ
つとりと付着したパチンコ玉が周囲に散らばる。

その結果、どうなったか。面白いぐらいに足を取られて、そこら
中で転びまくっている。そして、一度転ぶと立ち上がれずに暴れ周
囲の緑魔を巻き込んでいく。

お、これは面白いぞ。更に追加しよう。

敵の攻撃は全て 結界 で対応して、せっせと 念動力 で、ロ
ーションパチンコ玉ペットボトルを量産していく。完成したら、即
座に投げつけて辺りにぶちまけていく。

おー、転ぶ転ぶ。初めてアイススケートを経験した子供のようだ。
しかし、調子に乗って撒き過ぎたかもしれない。

ラツミスと俺の周囲に立っている者が存在しなくなっている。新
たに乱入してこようとした緑魔も足を滑らせて、地面に転がってい
る連中の仲間入りをしている。

「ハツコン、ところで指揮官は何処？」

かなりの広範囲で魔物が転がっているのだが、全部が緑魔で指揮
官らしき相手の姿は見えない。

緑魔の中に指揮官がいるのではないのかという疑念はあったのだ
が、ヒュールミの考察によるとこうだ。

「緑魔は魔法を扱える程度の知能がある個体は存在する。だが、基
本的に理解力は低い。冥府の王の配下となり指揮を託せる程の緑魔
がいるとは思えねえな」

とのことだった。人間、もしくは同程度の知能がある魔物の可能
性が高いそうだ。

緑魔はそれに値しない魔物らしいので、緑魔の群れならそれ以外の種族を探すのが手っ取り早い方法らしい。

辺りを見回してみるが緑魔ばかりで、それ以外の種族は全く見当たらない。もっと、遠くの敵にもぶつけて調べるしかないか。

「ハッコオオオオオオオツ！？」

大声を張り上げて走って 滑ってくるのはミケネか。全力疾走でローションゾーンに足を踏み入れてしまったようで、真っ直ぐこっちに向かって、うつ伏せで起立の体勢のまま頭から突っ込んでくる。

「ミケネ？ えいつ」

ラツミスは屈みこんで正面からミケネをあっさり受け止めた。

かなり勢いがあったのだが、足腰の強さに加えて何百キロもある俺を背負っていれば、その程度の衝撃ではびくともしない。

「うわああ、ぬるぬるだあ。何これ、何これ」

体毛にローションがべつとりとついて気持ち悪そうだ。舐め取るうとして舌を伸ばしたのだが、躊躇っているな。

「ミケネ、どうしたの。大声で呼んでいたみたいけど」

「あ、そうだった。ええとね、さっき、あっちから人間の悲鳴っぽいのが聞こえたよ」

そう言って、ミケネの指す方向に目をやると、転んだ緑魔が密集して小山が出来上がっていた。

冷静に見ると不自然極まりないな。じっと観察していると小山に吸い寄せられるように緑魔が近寄っては、転んで小山に衝突している。

そして、小山の麓がどんどん広がっていく。

「あの塊の中ぐらいだと思つよ。今も呻き声が微かに漏れているね」
ミケネを濡らしていたローションを消してやると、ようやく落ち着いたようで耳を立てて音を探っている。

あの中にいるとすると、転んで焦り緑魔たちに自分を守らせようとして呼び寄せたら、ああなったといったところか。

敵の場所が明らかになったのなら、やることは決まっている。

今度は 高圧洗浄機 に変化してから最大出力で放水して、指揮官がいるらしき場所までの道を洗い流す。ついでに転がっている魔物も吹き飛ばしておく。

ローションをその部分だけ消すことも可能なのだが、こうした方がラツミスにどうして欲しいか伝わるだろう。

「あそこにいるんだね。よっし、いつくよー！」

腕をぐりぐりと回し、やる気も充分なようだ。

もう止める必要はない。さあ、蹴散らそうか！

「いこう」

俺が水流で敵とローションを吹き飛ばし、綺麗になった地面の上をラツミスが疾走する。後方からはミケネも付いてきているようだ。魔物たちは何とか立ち上がって、俺たちを阻止しようとしているようだ。更なるローションを全身に塗りつけているだけ。そのまま、暫く大人しくしててくれ。

ぬるぬるした緑魔小山の前に到着すると、ラツミスは深く腰を落とした。

「すううううううううう」

右腕を限界まで後方まで捻り、肺一杯に空気を吸い込んでいる。そして、左足を全力で地面に叩きつけ、岩肌にめり込む威力の踏み込みと同時に、鋭く呼気を吐く。全身のバネを解放して剛腕に力を伝えると、緑魔の密集地帯に拳を突き出した。

「はあっ！」

裂ぱくの気合と共に放たれた拳は衝撃波を生み出し、触れてもいない緑魔たちが暴風に煽られた枯れ葉のように飛び散り、広場の壁に激突していく。

壁に貼り付けられた魔物たちに視線を走らせ確認していく。あれは違う、これも緑魔、これもそれも、あっちは……いたっ！

壁にくっついていて緑魔の中で、一人浮いている存在がいる。黒のローブを着ている女のフードが外れて顔があらわになっている。

三十代半ばらしき女は人間か。激突の衝撃で意識が朦朧としているようで目が虚ろだ。

ラツミスは気づいていないようだ。ならば、壁から剥がれ落ちそうになっている女の頭上に高圧の水を撃ち込む。

「あっ、人がいる。あれが指揮官だね！」

俺の行動を即座に理解して、ラツミスが女の足元に駆けこんでいくが、ローション外にいた壁際の魔物たちが妨害する為に飛び込んできた。

「邪魔、じゃーまつ！」

走りながらなので力の入らない手で払うだけの動作だというのに、緑魔たちを軽々と吹っ飛ばしていく。

さっきの一撃も圧巻だったが、ラツミスの方が増している気がするな。技を学んだことにより、力を効率よく扱えるようになったのは確かだが、単純なパワーも増していないか。

そんなことを考えている間に、ラツミスは真つ逆さまに落ちてくる女の下に着き、受け止めると顔を覗き込んだ。

白目をむいて気絶している。これは魔物を止めさせる指示も出せないか。

「相手が止められない場合は、指輪だったよね」

ラツミスは女の右手を掴むと、そこにあつた頭蓋骨の指輪を外して指で摘まむと、押し潰した。

相手が抵抗した場合と、何らかの理由で命令を出せない時の手段として、指輪の破壊を命じられていた。指輪を破壊すれば魔物たちは意識を取り戻し、命令を聞かなくなる。

それは、清流の湖階層で捕まえた男が口を割った情報だそうだ。更に指輪は、その階層での魔物の発生にも関わる装置らしく、壊せばダンジョンの本来の姿を取り戻すらしい。

「これで一安心だね」

無邪気に微笑むラツミスに「うん」と返してあげたいのだが、そうもいかないよな。

ダンジョンと魔物が通常に戻ったということは、周囲の緑魔たちが本来の魔物の生態に戻ったということだ。

「さがりゆよ」

自我を取り戻した魔物たちが、殺気交じりの視線を突き刺してくる。

そう、まだ百体近い魔物の相手をしなければならぬ。それも、この冥府の王の配下であるう女を庇いながら。

でもまあ、そこまで警戒をしなくてもいけるか。

「ハツコン師匠！ 退路は開きます！」

敵を薙ぎ払いながらやってくるミシユエルを見て、緑魔たちが怯えている。

恐怖という感情が蘇った魔物たちの闘志が萎んでいく。これはもう、勝ち確定かもしれないな。

各々の望み

ミシユエルと合流して敵を薙ぎ払いながら、愚者の奇行団がいる場所まで後退した。

今も戦闘は続いているのだが、血気盛んな個体だけが攻撃を仕掛けてくるのみで、大半は壁際まで後退して戦況を見守っているだけだ。

意識があるなら、こんな理不尽な強さを有しているハンターに手を出そうとは思わないよな、普通。

「全滅させても構わねえが、ここまで削ったら集落も安泰だろう。通路まで下がるぞ」

ケリオイル団長の指示に従い、フィルミナ副団長が水の礫を撒き散らし、俺も高圧洗浄機で水を浴びせておく。

怯んでいる緑魔たちを尻目に俺たちは通路まで下がり、素早く撤退した。

分岐路まで逃げたのだが敵が追ってくる気配はない。もう二本の通路には今も幻覚の土砂が詰まっていて、敵が行き来した跡もないようだ。

「よっし、任務完了だな。このねえちゃんは、集落に戻ってから尋問すっか」

団長が肩に担いでいる指揮官の女性の尻を軽く叩き、ニヤリと口元に笑みを浮かべている。

「そうですね。ですが、団長。どさくさに紛れて、女性の尻を叩く

のはどうなのでしょうか？」

フィルミナ副団長の顔から表情が消えて、団長に詰め寄っている。

「い、いや、今は勢いというか、そういう流れだろ。別にけつを触りたかったわけじゃねえぞ」

「どうだか」

フィルミナ副団長の尻に敷かれているよな、ケリオイル団長は。口論も多いようだが、何だかんだ言って仲の良い二人だと思う。

二人は歳が十以上離れてそうだが、カップルとしてもそこまですごい自然じゃないよな。実際のところ、どういう関係なのかはわからないが。

「仲いいよね、あの二人って」

「うんだね」

ラッミスも同じことを考えていたのか。今の反応だって忠告というよりは嫉妬だよな。

「二人ともいい年して、何やっているんだろうね、赤」

「だよな。毎回、見ているこっちが恥ずかしいぜ」

紅白双子が肩を落としてため息を吐いている。二人のやり取りを毎回見せつけられていたら、うんざりするのわかる。

「二人ともいい年？ フィルミナ副団長って若いよね？」

そうだよな、今の言い方だとフィルミナ副団長まで結構な年齢の様に聞こえる。団長は見た目、三十後半から四十代っぽいけど。

「あ、知らなかったっすか。副団長ああ見えて、団長より年上っすよ」

「見た目は若くても、靴から漂う臭気が正しい年齢を告げていますからね」

シユイと変態　へブイの発言に納得いかないラツミスが首を傾げている。俺も同じだよ。どうみても、フィルミナ副団長が年上には見えない。

「えっ、えっ、でも若いよ?」

「ええと、副団長は半分……何かの血が混ざっていたっすよね」

「吸血魔ですよ、シユイ」

吸血魔?　聞いたことのない種族だな。名前からのイメージだとあれだよな。

「ええと、ヒュールミが前に言っていたような。確か、吸血魔って人の血をご飯にしている種族だよな。人間そっくりで綺麗な人ばっかりの」

あ、やっぱり、ヴァンパイアっぽいのか。ニンニクが苦手かどうか試してみたくなるな。今度ペロンチーノを勧めてみるか。

改めて副団長を見ると、青い髪も白い肌も言われてみればヴ

アンパイアの妖艶な美しさの様に見えなくもない。

「補足しますと、吸血魔とは血だけではなく、似たような成分の体液でも補えるそうですよ。なので、人間と結ばれ子を成すことも珍しくない……でしたか」

「そうなんだ、運命的だね！」

胸の前で両手を合わせて、祈るようなポーズでラツミスが感動している。

あれ、この世界では別種族とのハーフって禁忌というか、毛嫌いされたりしないのか。ハーフエルフが迫害されたりするのは良くある話だと思っていたのに。

「ラツミスは何とも思わないの？ え、半分吸血魔なのわかってる？」

「ほら、魔物との混血だよ？ 忌み嫌われる存在だよ？」

ラツミスの反応が意外だったらしく、紅白双子が一気に距離を詰めて口々に質問攻めをしている。

なるほど、普通は嫌われる存在なのか。にしても、紅白双子の口調からは嫌悪といった感情は全く感じられない。純粹な疑問を口にしているだけに見えるが。

「え、そうなの。でも、種族や見た目が人と違ってても、その人に変わりはないから、うちは気にしないけど。ねえ、ハツコン」

「うん うん」

だよな。むしろ、ハーフヴァンパイアだなんて、日本なら人気の出そうな種族だ。正直、嫌うどころかカッコイイと思う。

「愚者の奇行団でも受け入れているよね。なら、みんなと同じなだけだよ」

同情して口にはしているわけじゃないことが伝わったのか、紅白双子が安心したように息を吐いている。自分のことのように安堵しているのは、フィルミナ副団長のことを慕っているからの反応か。

「ほら、愚者の奇行団って変わり者ばかりだから、基本的に何でも大丈夫だったりするからさ」

白がそう口にすると同時に、全員の視線がへブイに向いた。

「私は許容範囲が広いですからね。基本的に靴を履く種族であれば、何だっていけますよ」

胸を張って、そんなことを言い切るへブイを仲間に行っている愚者の奇行団なら、誰でも大丈夫な気がする。

「お前ら、雑談は構わねえが歩きながらにしてくれ。集落に戻るぞ」

こっちの会話が聞こえていなかったようで、団長が女を担ぎ直すと副団長と並んで歩きます。

話は一時中断となったが敵も現れず平和な帰り道となったので、暇を持て余した団員たちとの雑談が再開した。

「そつえば、愚者の奇行団って叶えたい願い事があるって聞いたけど、みんなの願い事って聞いても大丈夫？」

ラッミスがそう切り出すと、場の空気が一変した。

さっきまでは談笑していたというのに、紅白双子から表情が一瞬だけ消えたのを俺は見逃さなかった。その後は何もなかったかのようになり、いつもの軽薄そうな薄ら笑いを浮かべているが。

「ごめん、言いたくない事もあるよね」

「大丈夫っすよ。望みはただ一つ、お金一杯貰って孤児院の経営を楽にするっす！ 毎日、子供たちと一緒に腹一杯になるまで美味しい物食べるっす！」

重くなった空気を払拭するように、シュイが大声を上げて宣言した。

簡潔でわかりやすい望みだと思う。孤児院の状況を知っているだけに純粹に応援したくなる。でもこれって、ダンジョンを制覇して階層主コインと引き換えにする望みにしては……しよぼい気もする。

「じゃあ、次は言い出しっぺの、うちが言うね。望みは、ハッコンを人間に戻すこと！」

あの時に言っていたことは本気だったのか。そう言ってくれるのは嬉しいのだが、望みは自分の欲を満たす為に使っていていいんだよ。

「ということは、ハッコンもラッミスも同じ願って事っすね」

「うん」

ということにしておこう。色々言いたいことはあるが、ここは話を合わせておいた方が、ややこしくなくていい。

「では、私の望みも告白させていただきましようか。誰もが予想もつかない願望だとは思うのですが、世界中のく」

「へブイはいいわ」

紅白双子の声が被さり話を遮った。両腕を広げて熱弁を振るおうとしていたへブイが話の腰を折られて、若干不満そうだ。

「いえいえ、皆様の願望を聞いておきながら自分だけ口にしないのは、人としてあるまじき行為です。恥ずかしくも卑しい望みではありませんが、聞いてもらわなければ。私は嘘と裏切りだけは許せない性質なので」

もっともなことを口にしてはいるが、ただ言いたいただけのように見えるのは、俺の心が汚れているからなのだろうか。

「止めても言うんだろ。ならとつとと話してくれ」

「聞き飽きているけどな……」

「そつっすね……」

団員三名はうんざりした顔をしている。へブイの望みを聞かされたのは一度や二度ではないみたいだな。俺も何を言うのか予想がつかないので気が進まない。

「私の願いは、世界中の履き潰す直前の靴を集め、それで大きな城を建造することです。城下町では靴職人を集め、年に一度の税は一年間使い古した靴を納めさせるといって、あまりにも壮大な夢がある

のです！」

本当に恥ずかしい望みだなっ！

それは悪夢の方の夢だ。その城の風下に住んでいる人は地獄だろ。毎日、悪臭が漂ってくる城って最悪にも程がある。この野望だけは本気で阻止した方が世の為、人の為になるかもしれない。

「んじゃ、次は俺たちの番か。俺も白も望みは一緒。な、白」

「そうだな、赤。俺たちの望みは同じ」

二人は芝居がかった動作で背中合わせになると、同時に手を前に突き出した。

「モテモテになることさっ」

同時に髪を掻き上げる仕草が腹立たしさを倍増させる。

当人たちはカッコいいつもりなのだろうが、こちらの女性陣は二人とも呆れた顔をして、左右に首を振っている。

「まあ、今でも女には不自由してないけど、男に生まれたからには世界中の美女を抱きたいと思うのが常識じゃね？」

「だよな、赤。世界中の美女は全て俺たちの前で悶えるのさっ」

「二人とも童貞のくせに、よく言っつす」

ぼそつと呟いたシユイの言葉に紅白双子の時が止まった。決めポーズのまま硬直している。

「ごんねん」

俺の発した素直すぎる一言で紅白双子が崩れ落ちた。どうやら、本当のようだ。

あれだ、今度大人の自動販売機になってエロ本幾つか提供するから、それで自分を慰めておくんだよ。

「残りは団長と副団長だけだ」

前に団長も副団長も同じ願いだと言っていた気がする。あの二人の共通する願いか。深刻そうな表情をしていたから、気軽に聞いている話題ではなさそうだ。

「それは、知らないです。昔、質問したことがあるんですけど、はぐらかされたっすね」

「右に同じ」

「左に同じ」

シユイたちも知らないのか。団員にも話さない内容なら、俺たちが訊くのはお門違いってものだ。

「人には誰しも秘密があるものです。それが嘘や相手に危害を与えるものでなければ、詮索する必要はありませんよ。私はこういう性格なので隠し事はしません」

靴が絡まないとまともなことを言うんだよなへブイは。

恥ずかしい性癖も暴露しているへブイだからこそ、妙な説得力があった。

「おい、お前ら立ち止まってんじゃねえぞ。今日中に集落に帰れなくなるぞ」

気が付くと先頭のケリオイル団長たちとかなり距離が開いていた。俺たちは慌てて走り出し、団長たちに追いつくと、今度は足並みを揃えて帰路に着いた。

その際、団長たちの望みが気になり何度も視線を向けたのだが、そこには無精ひげで考えの読めない表情をしている、いつもの飄々とした顔があるだけだった。

米と心

帰り道は一度の戦闘もなく集落へ無事戻ることができた。
バリケードをラツミスが押しつけて入ると、残っていたハンター
たちから歓声上がる。

「おおおー！ どうでしたか！」

「その担いでいるのはっ？」

詰め寄ってくるハンターたちへ、団長が腕を伸ばして制す。

全員が黙ったのを確認してから大きく息を吸い込み、待ちかねて
いるハンターたちに大きな声で言い放った。

「こいつは指揮官だ。目的は達成したぞ！」

途端、集落が揺れているのではないかと錯覚するほどの歓喜の声
で満たされていく。

俺たちは始まりの階層で起こった惨劇を詳しくは知らない。だけ
ど、想像はつく。

清流の湖階層と同じく凄惨な状況を乗り越えてきた、彼らの平和
を取り戻せた実感と喜びが爆発している。

ケリオイル団長は捕えた指揮官の女を牢屋に閉じ込めようと、
副団長、紅白双子を引き連れて監獄へと向かっていった。

彼らと入れ違いで現れたのは真っ赤なスーツが目立つ、始まりの
会長だった。

「諸君、よくやってくれた！ ハッコン、すまないが宴用の料理と

飲み物を提供してもらえらるだろうか。必要経費は全て私が出す」

「いらつしゃいませ」

もちろんだよ。自動販売機の本来の役割はそつちだからね。

今日はアルコールも出して大丈夫だろう。あとは酒にあう食べ物か。から揚げは外せないとして、焼きそば、たこ焼き、枝豆、フライドポテトとかになるか。そうになると、冷凍食品メーカーの自動販売機無双だな。全部取り揃えてあるからな。

お酒を提供する居酒屋に、このメーカーの自動販売機置いたら結構売れそうな気がする。

自販機コンビ二 になることも考えたのだが、今日は何度も変化したので残り時間が微妙だな。止めておこう。

バリケード近くの広場に机や椅子が運び込まれて、俺が提供する料理が次々と並べられていく。お酒も行き渡り宴会が始まったのだが、俺は飲食ができないので飲食料品を取り出しては机に並べている。

新鮮なサラダが食べたいとヒュールミが言っていたので、俺が野菜の自動販売機になって何種類もの野菜を並べると、ラッミスが手早く調理してくれた。

野菜は幾つか余った状態で長机の上に置かれている。あと、料理を提供すると伝えると何を勘違いしたのか、大鍋を持ってきた人がいて必要がないことがわかり、ここに置いて宴会を楽しんでいる。鍋、包丁、まな板、それに野菜があるのか。ちよつと暇だし、前から試してみたかったことをやってみるか。

まずは以前に取った機能なのだが全く出番のなかった お米自動販売機 に変化する。

炊き立てのご飯を彷彿とさせる真っ白の体の上部には、十キロと

五キロのお米が並んでいる。その下にはご飯が盛られたお茶碗の絵がある。

異世界で米ブームを起こす為に選んだ機能なのだが、異世界では米が食べられていないらしく、どうやって調理するのか理解してもらえなかったのだ。

だが、今なら 念動力 があるので自ら調理することも可能……だと思う。試してみる価値はある。

米の種類も商品の欄から選べるのだが、今回は五キロのコシヒカリ無洗米を選ぶ。

無洗米なら米を研ぐ必要もないので手間が省ける。

取り出し口から五キロの米を持ち上げて、鍋の隣に運ぶと地面に置いて上部を開く。そこにカップ用の自動販売機から拝借した紙コップを入れ、すりきり一杯まで米を入れる。

そして、それをお鍋へと移していく。

いち、にー、さーん、しー、ごー、ろーく、ひーち、はーち、きゅう、じゅう。こんなもんでいいか。

さて、ここからだ。普通に白米を炊いても面白くないので、炊き込みご飯にしよう。

具材で使えそうなのは、しめじは千切るだけなのでいけそうだなあと、ゴボウも入れたいところだが、包丁が使えないので断念するか。大根も同じ理由で却下だな。

しめじだけじゃ、あまりにも寂しいから他に具材は……あー、以前おでんで利用した、お土産用の竹輸入れよう。

鶏肉も入れたいところだが、から揚げの衣を外して入れるのはやりすぎか。

今回は実験なので具材は寂しいが先に進めよう。あとは、これも前に使用したペットボトルのアゴ出汁を使って炊くか。水で薄めて、量もちゃんと測って調節をして完成だ。

さて、これをどうやって炊くか……。実際にガスを使って土鍋でご飯を炊くのは、よくやるのでやり方はわかるのだが、どうやって火にかけるかが問題だ。

ここから先は一人では無理か。助力を頼もう。

「ねえ、ハツコン。それって何？」

集中しすぎていて周りが見えていなかったようだ。聞き慣れた声を聞いて視線を向けると、ラツミス、ヒュールミが覗き込んでいた。

「何か黙々とやってるから声を掛けられなかったんだがよ、料理だよな？」

見ての通り料理だね。

「鍋に浮かんだ食材がどんどん入っていくから、魔法の儀式みたいだったよ」

そうか。第三者視点で見たら、不可思議な光景に見えるよな。

誰も手を触れていないのに、紙コップが浮かんで米を流し入れてシメジと出汁まで鍋に飛び込んでいけば、ちよつとしたホラーかもしれない。

「りょうり」

簡潔に答えておいた。

二人がいるなら手伝ってもらおうかな。俺じゃ、この後がどうにもならない。

「ておかして」

「おねがい」

「うん、いいよ。何すればいいのかな」

「おう、構わねえぜ」

二人が快く承諾してくれた。

念動力 を覚えてから、何でもできるようになった気がしていたが、まだまだ仲間の助けが必要だな。自分の商品だけしか動かせないで調理となると厳しい。

手伝ってもらえるなら、あれが使えるな。久しぶりに ガス自動販売機 になってみることにした。八本足鰐の腹の中、以来の定番だな。

銀色の古びた四角い箱から伸びるガス管の先には簡易コンロがついている。

「おいて」

「この変なのに置いたらいいのか」

「うん」

結構大きな鍋なのだが、俺を背負えるラツミスには楽勝で軽々とコンロの上に置いてくれた。このコンロも俺が出した物だから商品扱いできそうだな。

前は 念動力 を得ていなかったのでコックを捻って火を付けられなかったが、今ならやれる。

コックを押してから捻ると、火花が散ってバーナーに火が灯った。

「お、これは火を出す道具だったのか。こんなこともできるなんて、

「ハツコンは芸達者だな」

ヒュールミが屈みこんで、コンロの火をまじまじと見つめている。ただ火をつけるだけのコンロでも、魔道具技師である彼女の好奇心を刺激するようで、目を輝かさせて俺の体やコンロを観察している。

じろじろと見られると少し照れるな。

火を弱火にして暫く放置するか。あつ、蓋しないと。

「のせて」

そう言って、空になったアゴ出汁のペットボトルを操り、鍋の蓋を叩く。

「これだねー」

「ありがとう」

よつし、米を炊くときの基本は初め弱火だ。これで火加減さえ間違えなければ、美味しい炊き込みご飯ができる……と思う。

我が家でやるときは三合だったから、これだけの量となると不安だけど、少々焦げててもそれが美味しかったりするから大丈夫だろう。最後の方は手伝ってもらったけど、簡単な料理なら何とかかなりそっこだ。

「でも、ハツコン、何で急に料理始めたの？」

「そっぴやそっぴだ。食べ物なら幾らでも出せるだろ」

二人が疑問に思うのも当然か。何故かそれは決まっている……何

でだ？

ただの思い付きでやってみただけだが、そうだよな、別に料理できなくても何も困らない。むしろ、炊事もこなせる自動販売機っておかしいだろ。

生前は自動販売機の商品を買い過ぎて、いつも金欠だったから安上がりの料理は得意だった。その時の習慣で料理がしなくなっただけなのかもしれない。

「あ、ぶくぶくなってるけど、これ大丈夫なの？」

っと、考え込んでいる間に火が通り始めたか。蓋が揺れて隙間から白い泡が膨らんでは破裂している。火加減はこのままでいけるか。

「うん」

「このまま」

暫くしてから火を消して蒸していると、いつの間にか多くの人に取り囲まれていた。

「ひっく、良い匂いだな……」

「お、何やってんだ。食わしてくれよお」

「ハツコンの新商品か」

匂いに釣られて酔っ払いが集まってきたのか。

嗅覚が無いので匂いがわからないのが辛い、これだけ引き寄せるということは炊き立ての香りが食欲を刺激しているってことだよな。

よっし、じゃあ、蒸らし具合もいい感じだし、配るとしますか。

「あ、お椀もってくるね」

「オレも手伝うぜ」

二人が用意してくれたお玉でご飯をよそっていく。

ちゃんとおこげもできているな。炊き込みご飯の美味しさは、ここに集約されているといっても大げさではないと思っている。

「くはああ、うめえなこれ！」

「あつたかいし、旨いし、腹も膨れるし、最強じゃねえか」

お、大好評だ。大食いが多いハンターなのであつという間に残り僅かとなった。

まだ食べていなかった、ラツミスとヒュールミにも渡すと、二人とも美味しそうに頬張っている。

あ、何だろっこの感覚。今、凄く幸せだ。

自動販売機の商品を喜んで購入してくれた時も嬉しかったが、自分が手を加えて調理した物を食べてもらえるのが、こんなに嬉しいとは思わなかったな。

自動販売機の商品を喜んでもらえるのは自動販売機マニアとしての喜びが強かったのだと思う。自分の好きなものを好きだと言ってもらえる喜び。

今は自分が何かしたことに対しての称賛。

自動販売機の商品は多くの人々が関わって作られたものだ。それを売っているのは俺だが中身の味に自分が関わっているわけじゃない。

商品を勝手に売らせてもらっている、それだけだというのに自分

の手柄の様に褒められることに罪悪感があった。企業努力を横取りして自慢しているだけの存在。

それが、ずっと心に引つかかっていた。

だから、無意識の内に自分の力で何かしたいと思っていたのかも
しれない。

自動販売機として人々の役に立っている自覚はある。だけど、それは他人の力だった。

今も食材は自動販売機の手だが、それを使って料理したのは俺だ。たったそれだけのことだというのに、人々の称賛を素直に受け取れた。

「ハッコン、いつもありがとうね」

無邪気に微笑むラツミスと、周囲で顔をほころばせて食べているハンターたち。

たまに料理してみるのもありだな。そう思わせてくれる笑顔だった。

秘密

宴会が終わった翌日から、集落は活気を取り戻しつつある。

非戦闘員は清流の湖階層に残したまま、始まりの階層を維持することにしようで、現在は大工、武器防具職人が力を合わせてバリケードの強化をしている最中だ。

「転移陣はここと清流となら安定して移動できるように調整したぜ。おまけに魔物に悪用させないよう、ちょっと弄っておいたから安心してくれ」

ヒュールミの説明によると、ダンジョンの中で産まれた魔物は特有の魔力を有しているのです、その魔力を微量でも発生させている個体は転移陣が反応しないらしい。

あまりにも専門的な用語が多すぎて半分も理解できたか自信はないが、たぶん、こんな感じだったと思う。

「おー、頑張っているねー。感心感心」

この呑気な声はケリオイル団長か。愚者の奇行団はあれから指揮官の尋問を担当していたのだが、清流の階層で得た情報とほぼ同じで、価値のある情報はなかったそう。

「ここが落ち着いたら、清流の階層に戻るとすっか」

「そうですね。もう、用はありませんし」

フィルミナ副団長が髪を掻き上げ同意している。実は団長よりも

年上という話を聞いて以来、見る目が変わってしまったている。

混血とかはどうでもいいのだが、どうみても二十代にしか見えな
い。これこそまさに、異世界の神秘か。

「団長、見回り終わったよー。ふああああ、だっりいー」

「集落に残党はいないみたいー。つつかれたああ」

紅白双子が武器を肩に担いで、瓦礫の向こうから欠伸交じりにや
ってきた。

最近はずっと二人で見回りを担当してくれている。愚痴を零しな
がらも、やることはやっているので文句は言われない。

「団長、何でこの変態と一緒になんっすか！」

「やれやれ、私は幻覚魔法を使っていませんよ。どこに変態がいる
というのですか」

同じく見回りから戻ってきたシュイが団長に食って掛かっている。
この数日、ヘブイと組まされ続けて鬱憤が溜まっているようだ。

「誰かが見張ってないとダメだからな。辛抱してくれや」

「いえいえ、お気になさらず。か弱い女性を守るのは紳士の役目で
すから」

しれっとヘブイが答えると、シュイが射殺しそうな目で睨んでい
る。

この場に居る全員が「見張りが必要なのはお前だ」と喉元辺りま
で声が出かけているが、ぐっと堪えたようだ。

「団長も副団長も最近直ぐに何処か姿をくまますし。代わってくださー!」

語尾に「っす」がつかないぐらい追い詰められているのか。団長に縋りついて懇願している。

「どうしたのですか、シユイさん。悩み事があるなら、私に幾らでも相談してくれていいですよ。懺悔や告白は聞き慣れていますので」

背後に歩み寄ったヘブイが、そっとシユイの肩に手を添えて、優しく微笑んでいる。

「うがあああああっ!」

シユイがヘブイの首元を掴んで激しく揺らしている。この数日で鬱憤が限界近くまで溜まってしまったようだ。

「ま、まあ、落ち着けシユイ。見回りを一緒にしているだけなら、変態活動も大人しいもんだろ」

「おーとーなー! いいいいい!? 毎回、崩れた民家を見つける度に玄関から靴を掘り当てて、そつと並べる! 名残惜しそうにじつと見つめて動かない! 素知らぬ顔をしながら、鼻をぴくぴくさせて臭いを嗅ごうとする! 靴を探して姿をくまます! マジキモいです!」

苦勞したんだね、シユイ。うん、後で甘い物、山盛り食べていいから。

見事なまでの取り乱しっぷりに、団長たちも反省したようで全員で慰めている。

「情緒不安定なようですね。可哀想に」

ヘブイが本気なのかボケているのか判断がつかないが、どっちにしろ……死なないといいな。

怒りが頂点に達したシユイが本気で矢を連射している。その攻撃を躲しながらヘブイが後退しているが、顔に笑顔を貼り付けたままだ。

目にも止まらぬ速さで矢をつがえ弦を弾き、俺の目では追いきれない速度で矢が迫っているというのに、脚捌きのみで全ての矢を避けていた。

ここだけ抜き出せば高い次元の戦いのだが、きつかけと内容は酷いもんだ。

「まあ、ストレス発散にちょうどいいか。放っておこうぜ」

「いつものことだし」

「そだな」

誰一人として慌てていない。見慣れた光景なのか……放置決定なのか。

飛び交う矢の中でも笑顔なヘブイを見ていたら、どうでもよくなってきた。俺も無視しよう。

「お、あいつらのせいで忘れていたが、この後、ハッコン暇か。ラツミスとヒュールミとミシユエルにも声かけてただけどよ」

「うん」

三人も呼んでいるのか。何の用事かは知らないけど、この階層は人が少ないから仕事も少なくて暇だから何の問題もなかったりする。

「そりゃよかった。お前らも一度、愚者の奇行団の拠点に来てもらおうと思っただけ」

「えっここに」

「ああ、始まりの階層にあるぜ」

意外だったな。始まりの階層に拠点があつたのか。冥府の王が手を出した時に、慌ててこの階層に戻つたのはシユイの事だけじゃなく、自分たちの拠点も心配だったのかもしれないな。

「一応、仮とはいえ団員だからな。そろそろ、拠点に来てもいい頃合いだろ」

「そうですね。知ってもらった方が……いいですね」

今、フィルミナ副団長の顔に影が差さなかったか。拠点に行くだけだというのに、そんな深刻そうな表情を何故。

何だろう、紅白双子のまとう雰囲気も変わった気がする。何かあるのか？

「おーい、お前ら。いつまでもじゃれ合ってたんじゃないぞ。拠点に帰んねえのか」

「ちょっと待って欲しいです！ もう少しで脳天に突き刺せそうっ

す！」

「おやおや、精神干渉系の魔法を使っていないのに幻聴が聞こえますね」

「よっし、そこを動くんじゃないっす！」

「動かなくても構いませんが、それ幻影ですよ？」

まだまだ終わりそうもない戦いに諦めたのか、ケリオイル団長が肩を落として息を吐くと、二人に背を向けて歩きだした。

紅白双子と副団長も後に続いている。

「ハツコン、悪いが。ラツミスたちを待って、その馬鹿共が落ち着いたら、一緒に拠点まで来てくれ。お前ら！ 終わったら、ハツコンたちを拠点まで連れて一緒に来いよ！」

「了承致しました」

「一人は死体運搬っすけどね！」

あーあ、団長たちが先に拠点へと帰っていった。

二人は飽きもせず無益な争いを続けている。これは、暫く終わらなさそうだ。

あれから十分が経過し、ラツミスたちが合流する頃には矢が尽きたようで、ヘブイの粘り勝ちとなった。

シユイも思う存分、矢を射たことで気分が晴れたようで、さつきよりかは機嫌がいい。

「愚者の奇行団の拠点がここにあるなんて初耳だぜ」

「目立たないようにしていたっすからね。ここに拠点があったから、知り合えたっす」

孤児院と同じ場所に拠点があったことが、シユイが愚者の奇行団に入ったそもそもの切っ掛けなのか。

「シユイって、愚者の奇行団に入って何年ぐらい？」

「まだ二年も経ってないっすよ」

「じゃあ、ヘブイさんの方が先輩ってことになるのかな」

ラツミスは素朴な疑問を口にしただけなのだが、シユイは唇を噛みしめ忌々しそうにヘブイを見ている。

「ええ、私が先輩です。とはいえ、愚者の奇行団には先輩後輩のわずらわしい上下関係などありませんよ。あるなら、私は赤さんと白さんも先輩として敬わなければなりませんし」

紅白双子の方が明らかにヘブイより若い筈だ。だというのに、彼らの方が先輩なのか。

「意外だな。あの双子の方が年下だろ」

「ええ、ヒュールミスさん。そうなのですが、愚者の奇行団の初期メ

ンバーは、ケリオイル団長、フィルミナ副団長、赤さん、白さんの双子。この四名ですよ」

戦士、戦士、戦士、魔法使い。って、バランスの悪い組み合わせだな。ゲームなら序盤で詰みそうな構成だ。

「私は勧誘されて入りましたので、五番目となりますね。当時から四人の連携は見事なもので、四人はかなり古くからの付き合いのようですよ」

「そうなんすか。知らなかったっす」

シユイは初耳らしく、素で驚いているな。同じ団に所属しているとはいえ、あまりプライベートな話はしていないのか。

「そういえば、四人は親し気な感じもするね」

「確かにな。文句を口にすることはあっても、本格的ないざこざもねえみたいだし」

「仲は……悪くないっすね。言われてみれば、四人が揃って姿を消したり、一緒に行動することが多いっす。今まで、気にしたこともなかったっすけど」

古くからの仲間だから、一緒にいることが当たり前になっているのかもしれないな。

今も四人だけで先に拠点に向かっている。まあ、二人が暴れているのが原因だが。

「気になるのであれば、後で訊ねてみてはどうですか、拠点で」

俺としては、そこまで詮索するつもりはないので、対応はみんなに任せておくか。

人のプライベートに口を突っ込むと碌なことにならないのは生前に経験しているので、自動販売機らしく聞き役に徹するでしょう。

そっぴや、さっきからずっとミシユエルが黙っているな。顎に手を当てて、何かを考え込んでいるようだが。

「どうした」

よっし、今のは我ながら上手く繋げられた。「どうした」と聞こえた筈だ。

「あつ、すみません。少し考え事を。先程の話を聞いて、一つ前から引っかかっていたことを考えていまして」

「うん」

何だろう、興味あるな。

「気のせいだと思っていたのですが、赤と白さんの気配が……いえ、忘れてください。ハッコン師匠。憶測でものを言うべきではありませんので」

そこでやめられると非常に気になるのだが、今は追及するのが難しそうなので、機会があれば、今度じっくり聞いてみよう。

歩き始めてから十数分経過すると、目の前に木製の骨組みだけの家があった。

壁もなし、屋根もなし、家具もなし。作っている最中の家にしては木材が黒ずみ劣化しすぎている。

「ここが、愚者の奇行団の拠点っす」

「風通しのいい家だな」

胸を張って説明するシュイにヒュールミのツッコミが飛んだ。

ここを拠点とするなら、そこら辺の広場でも同じだと思っつ。

「あ、違っつすよ。ここの隠し扉の先にあるっす」

屈みこんだシュイが石床の隅を軽くコンコンと叩くと、床の一部が回転して下に連なる階段が現れた。

拠点と告白

隠された扉に地下へ続く階段。元男の子としてはわくわくするシチュエーションだ。

秘密基地っぽくて、こういうの憧れるな。愚者の奇行団というネーミングセンスはあれだけど、この仕組みは素晴らしいと思う。個人的にだが。

「へえ、魔道具を扉に仕込んでいるのか。これは叩き方の感覚で反応しているか、それとも、団員のみが開け閉め可能な手続きをしているのか」

「えとね、両方らしいっすよ。関係ない人が真似して叩いても扉開かないっす」

入り口を見つめ感心しているヒュールミにシュイがあっさりと答えている。こういうのって秘密事項じゃないのかな。

地面にぼつかりと空いた入り口を覗き込むと、階段が見えるだけでその先は闇に沈んでいる。

「んじゃ、みんな行くっすよ」

シュイを先頭にミシュエル、ラツミス、俺、ヒュールミ、ヘブイの順で降りて行く。

途中、シュイが壁際を弄っていると階段に光が灯った。光源を見ると上の方に蛍光灯のような物が見えた。魔道具の一種なのだろう。螺旋階段になっているのか。ぐるぐると弧を描くように下まで降りると、目の前に鉄製の扉があった。その扉には手のひらサイズの

水晶が埋め込まれていて、そこにシユイが手を当てている。

この光景、スオリの屋敷でも見たな。この世界では結構メジャーな魔道具を使ったセキュリティーなのかもしれない。

力を込めているようには見えなかったのだが、ゆっくりと扉が押し開いていき部屋へと順番に入っていく。

そこは大きな長机があり、それを取り囲むように座り心地の良さそうな椅子が配置されている。壁際に大きな暖炉もある、大広間といった感じか。

上座に当たる場所にはケリオイル団長が座っていて、フィルミナ副団長と紅白双子も席に着いている。

「おう、好きな席に座ってくれ。ハツコン悪いけど、全員の飲み物出してもらっていいか。備蓄のお茶よりそっちの方が旨いだろ」

「いらっしやいませ」

全員お得意様だからね、好みは全て把握しているよ。自動販売機として喜んで提供させてもらおう。

ラツミスが全員に飲み物を運び終わると、俺の右隣の席に腰を下ろした。左隣はヒュールミが座っているな。

ミシユエルが隣を狙っていたようで、羨ましそうにこっちを見ている。キミはもう少し他の人と触れ合って慣れないと。

「おっし、みんな座ったな。ようこそ、愚者の奇行団アジトへ。まあ、何も無いが寛いでくれ。今日集まってもらったのは他でもない、俺たちの目的を話そうと思ってるな」

団長の望みを聞かせてもらえるって事だよな。興味があるから集中して聞かせてもらおう。

「まず、おさらいだが。このダンジョンを制覇した際に階層主のコインの数だけ願い事を叶えることができるってのは、覚えているな？」

「一番重要なところなので、みんな忘れていないようで大きく一度頷いている。」

「最下層に到達されし者。汝の願い一つだけ叶えよう。階層を守りし強靱なる主を討伐した証を捧げよ……でしたか、言い伝えでは」

ヘブイが朗々と読み上げた言葉に、ケリオイル団長が満足そうに頷いた。

「おう、そうだけ。これだけなら眉唾なんだが、ダンジョンってのはここだけじゃなく各地に存在している。実際、別のダンジョンの最下層まで到達したチームもあってな。話によると本当に願いを一つ叶えてもらったそうだ」

ダンジョンって各地に点在しているのか。仕組みはこと同じ感じなのかが、少し気になる。

「ですが、到達したという証拠はないのでは」

「ヘブイは結構情報通だったよな。南西の国にダンジョンがあったのは知っているだろ」

「十年前ぐらいに突如消滅したダンジョンですか」

「それだ、それ。あれは最下層に到達して願いを叶えたから消滅し

た。これは参加していたメンバーから直接聞いた情報だ」

願いを叶えるとダンジョンが消滅する。それはつまり……。

「えっ、ここも最下層まで行って願いを叶えたら、消えちゃうの！
清流の階層も!？」

その答えに到達したラツミスが椅子を吹き飛ばしながら、勢いよく立ち上がった。

そこまでの反応は見せていないが、ヒュールミとミシユエルも驚いた表情をしている。

ダンジョンが消えるのか。ここで商売している人たちはどうなるのか。いや、商売うんぬんよりも突然消えるとなったら、ダンジョン内の人は死ぬことになるのか？

「団長。ダンジョンが消える時にダンジョン内にいる人々はどうなる」

腕を組んだまま背もたれに全身を預け、鋭い目つきでヒュールミが疑問を口にした。

俺を含めた大半の人が同じ疑念を抱いていたようで、視線が団長の口元を集まっている。

「ダンジョンの外に強制排出されるようだぜ。ダンジョンと一緒に消滅なんてオチは無いから安心してくれ」

良かった。清流の階層の住民が巻き込まれて死亡、とはならないのか。もしそうだったら、ダンジョン制覇に手を貸すのを止めるところだったよ。

「じゃあ、安心だね。あ、でも、ダンジョンが消えたら住んでいる人は困るよね」

「まあ、そうだが。それは覚悟の上じゃねえか。自分が死ぬかもわからない状況で商売やっているような連中だぞ。ダンジョンが消えて追い出されても文句は言えねえさ。まあ、俺たちが願いを叶えたら、追い出された奴らに幾らか金を出してもいい。願い事以外に宝も手に入るだろうしな」

ダンジョン内に住居を構えている人は殆どが商売人がハンター。孤児院のような例外もあるが、子供たちだってハンターが残っていた孤児なので関係者ではある。

それに愚者の奇行団が制覇するとなれば、シユイの願いも叶うということだ。孤児院の心配はいらないな。

「願いさえ叶えられたら、お金はどうでもいいです。今まで積み立ててきた団の貯金も吐き出しましょう」

お金に厳しいフィルミナ副団長が躊躇なく宣言した。団長と副団長の願いは金には換えられないものらしい。

「んでだ、俺と副団長の望みを明かそうと思う。今までずっと誤魔化してきた悪かったな」

そう言って団長は立ち上がると、後ろの暖炉脇に移動した。

壁に手を這わせて何やら呟くと、壁が横にスライドして入り口が現れた。ここにも仕掛け扉があったとは。

「えええっ、そんなところに部屋あったっすか！」

シユイは知らされていなかったようで驚きの声を上げている。へ
ブイは眉がピクリと動いただけか。

あれ？ 紅白双子に驚いた様子がない。彼らは知っていたのか。
付き合いが古いみたいだから、二人は教えられていたのかもしれな
いな。

「おう、こつちに来てくれ」

団員にも隠していた部屋か。一体そこに何があるのか、期待もあ
るが不安も感じている。

秘密の部屋には禁断の宝や研究施設つてのが王道か。怪しげな生
物とかが謎の液体が入ったガラスの筒の中にいたりするよな。

そんな馬鹿なことを考えながら、ラツミスに背負ってもらい隠し
部屋に入った。

「えっ」

「何だこりゃ」

ラツミスが口元を押さえ、ヒュールミが目を見開きそれを凝視し
ている。

無機質で飾り気のない部屋には、簡素なベッドだけがぽつんと置
かれていて、そこには一人の少年が眠っている。それも巨大な水晶
の中で。

十歳にも満たない少年は死んでいるようにも見える。顔は血色が
よく動かないが、生きているのではないかと思わせる生気を感じた。
少年は布に穴を開けただけの様な粗末な服装。髪は灰色、目は閉
じられている。整った顔つきで、安らかな寝顔だ。

「微かですが気配は感じます。死んではいないようです」

ミシュエルが気配察知をしてくれたようだ。やはり、生きているのか。
団長と副団長はベッドの脇に立つと、愛おしそうに水晶を撫でて
いる。

暫くそうして満足したのか、団長はこちらに顔を向けて小さく息
を吐いた。

「こいつは俺とフィルミナとの子供だ」

……ん？ えっ、今何と。

「この子は私たちの子供なのです」

今度はフィルミナ副団長が言ったな。ええと、思考が追いつかないので周りを見回してみた。

ラツミス、驚き過ぎて硬直中。

ヒュールミ、少年、団長、副団長の順番で何度も視線を彷徨わせている。

ミシュエル、普通だな。驚くというより納得しているようだ。

へブイ、特に変化なし。

紅白双子、いつも通り。

あれ、俺と二人だけか驚いているのは。何でみんなリアクションが薄いんだ。ここは絶叫を上げて驚くシーンだと思うのだが。

「えええええっ！ 二人は夫婦だったの！」

そうだよな、その反応を待っていたよ、ラツミス。

いがみ合いながらも仲がいいとは思っていたが、まさか夫婦で子供までいたとは。おまけに子供は水晶の中で眠っているという状態。

ったようだ。ラツミスも似たり寄ったりだな。ヒュールミは平静を装っているが頬が痙攣している。

「だから、赤さんと白さんの気配が団長と副団長に似ていたのですか」

ミシユエルが慌てず納得していたのはそのせいか。気配というのは全く同じ気配が存在しないらしい。距離があると識別は難しいが近ければわかる、と前に話していた。

「大体は予想通りの反応だけど、ヘブイは驚かないのか。お前が取り乱している姿を見たことなかったから、期待していたんだがな」

「ご期待に添えず申し訳ありません。薄々ですが感じていましたので」

「ほんと、食えない男だよ」

靴が関わらないと頼りになる男だ。今も冷静沈着に状況を見守っている。

視線が寝ている少年の足元に向いて、靴を履いていないことだめ息を吐いたのは、見なかったことにしよう。

「あつ、ということとは……二人はこの子のお兄さんなんだよね？」

「んや、長男はこっちだ。俺たち三つ子だからな」

赤の言葉にラツミスが再び硬直した。

も、もう、驚かないぞ。二人よりどう見ても若いとか、実は三つ子だったとか衝撃の事実はスルーすることにしよう。

自動販売機は表情が出ないから助かるよ。

甘い誘惑

「さてと、俺たちの願い事を話す前に、眠り続けている息子について語らせてもらおうか。この水晶が何か……ヒュールミならわかるんじゃないか？」

コンコンつと巨大な水晶を小突きながら、その目はヒュールミを捉えている。

「おそらく、水晶の棺……だと思っぜ」

「ご名答。さすがだな」

二人のやり取りを聞いてもさっぱりなのですが。水晶の棺ってこの世界では有名なのだろうか。

「水晶の棺ってなんだろう」

「なんすかそれ」

あ、うん。取り残されているのは俺だけじゃないようで、ほっとした。

「っと、説明があるよな。オレが知っている範囲だが、水晶の棺ってのは大昔に作られた魔道具だ。どっかの権力者が永遠の命が欲しいって駄々こねて、町中の魔道具技師や薬師を集め、不老不死になるものを開発しろ三年以内に、って無茶振りをしやがったんだ。困り果てた魔道具技師たちが、無理して何とか作り上げた逸品らしい

ぜ」

不老不死になりたいって権力者あるあるネタだな。おまけにタイムリミット三年って無茶にも程があるだろ。当時の魔道具技師に同情するよ。

「何百年も研究されてきた不老不死をたった三年で、どうこうできるわけもないだろ。苦肉の策として魔力を封じ込めた水晶の棺を作り、この中で眠れば永遠の命が保証されますって説明したわけだ。まあ嘘じゃないんだぜ。本当に中に入れば永遠の命が手に入る代物だ。その中では時が凍結しているからな。永遠に時が止まったまま、その姿を保つことができる魔道具。それが水晶の棺だ」

間違っではないが、望んでいた物とはかけ離れているな。個人的にはかなり頑張ったと称賛の言葉を贈りたいぐらいだが。

「ヒュールミ、詳しい説明ありがとうよ。でだ、その水晶の棺に息子が眠っている理由なんだが。こいつは負の加護があつてな、その影響で日常生活もままならなかった。日に日に悪化する息子を見ていられなくて、助ける手段を見つかるまで水晶の棺で眠ってもらうことにしたってわけだ」

この子はずっと、この歳から時が止まったままなのか。

余りに殺風景で寂しそうなので花でも飾ってやりたいが、団長たちが世話をする暇もないか。造花みたいなのが商品でなかったかな。

「あ、あの、負の加護って何？」

ラツミスは恥ずかしそうにすつと手を挙げて質問を口にした。

俺もわからないことを聞いてくれるから本当に助かる。

「そうか、あまり知られてなかったな。加護つてのは、知つての通り善き神から与えられた超常の力だ。ラツミスなら怪力。ハツコンなら結界か。んでもって、負の加護つてのは悪しき神より与えられた碌でもない力だ。魔物を引きつける魅了。身の回りで良くないことばかりが起きる不幸とかだな」

加護という響きからプラスになる力が与えられるものだと思いついでいたが、負の加護なんてものが存在するのか。

「聖職者として補足しますと。この世界には百もの神が存在します。善き神は人々の助けになる加護を、悪しき神は人々を苦しめる加護を与えると言われていまして、悪しき神の加護を持つ者の大半は早死にする定めですね」

そついやへブイって聖職者だったな。すっかり忘れていたよ、その設定。

「まあ、うちの三つ子の内、二人は何の問題なかったんだが、こいつだけが負の加護を得てしまつてな。その加護つてのが」

「腐食です。触れたモノを腐らせる力でありながら、己の肉体も徐々に腐つていく最低最悪な加護」

言葉を引き継いだフィルミナ副団長の顔が苦渋で歪んでいる。

「それだけならまだしも、この子は超回復の加護を生まれつき得ていたのです。身体が腐り続ける痛みを味わいながら、超回復により体が再生されていく。死ぬまでその痛みを永遠に味わい続けなければならぬ」

「情けねえことによ、こいつが腐食の加護を押し付けられて、身体中に激痛が走っているのを暫く気づかなかったんだぜ。そして、俺たちが気づいた時には痛みで動くこともままならなくなっていた。情けねえ親だろ」

帽子のつばを下げ、表情が読み取れなくなったが、今どんな顔をしているのかは容易に想像がつく。紅白双子　本当は三つ子だが面倒なので双子でいいか。彼らも黙って俯いて、拳を握りしめている。

「団長。今、加護を押し付けられたと仰いませんでしたか？　その加護は後天的に得たものなのですか」

「ああ、そうだ。昔、俺と嫁が対立していたハンターチームがあつてな。一度壊滅状態まで追い込んだが、生き残りが俺たちへの復讐に、古代の呪いの品を使ってこいつに負の加護を与えやがったんだ」

「それは……邪神の像ですか。悪しき神の加護を一つ与えることが可能な呪われた像。確か、自分の命を生贄にして発動させる筈ですが」

「ああ、そいつは笑いながら死んでいったよ。俺たちを苦しめる為に子供を狙った下種野郎は、俺たち家族を見て満足そうにな。その時は目の前で自害した男の意図がわからなかったんだが……まさか、こんなことになるなんてな」

日頃の飄々とした態度からは想像もつかない壮絶な過去だ。ここまで話を聞けば馬鹿でもわかる。団長の副団長の願いが何であるか。

「すまねえな、無駄に長話をしちまって。話を戻すが、俺たちの望みは、こいつの負の加護を無くしてやることだ。その為なら何でもしてきたし、これからも何でもやるつもりだ」

「私も同じ意見ですし、この子たちも」

「兄貴は俺たちを庇って負の加護を受けたからな。復活したら三人で一緒にバカやりたいぜ」

「兄貴だけシヨタだけど、逆にナンパで需要が有りそうだ」

双子の口調は軽いがその瞳に宿る光は鋭い。家族としての強い決意がひしひしと伝わってくる。

団長と副団長、紅白双子が家族なのにも驚かされたが、願いを叶えたい理由がそんなにも重いものだったとは。

家族の為に愚者と呼ばれようが、奇行と嘲られようが、躊躇うことなく目的に向かって突き進むことができた理由がこれだったのか

「俺たちが何を求めて、何の為にダンジョンを制覇しようとしていたのか、理解してもらえたよな。水晶の棺の効力は残り僅かだ。あと長くて二年、早ければ一年持つかどうか。俺たちには時間がねえ。転送陣がまともに動けない今、手段を選んでいられる状態ではなくなっちまった。そこで、お前らに相談がある」

そこで一旦言葉を区切った団長に視線を向けると、凍てつくような冷たい光を湛えた瞳がツバの縁から見えていた。

何だ、この目つき。さっきまでとはまるで違う、感情を一切感じさせない瞳は。

「俺たちと一緒に冥府の王へ寝返らねえか？」

団長の口から出た予想外過ぎる言葉に 思考が止まりかけた。
正気を疑ったが、あの目は冗談を言っている目じゃない。自分が
何を口走ったのか理解をしている。

不意に影が差したかと思うと、俺たちを庇うようにミシユエルと
ヘブイが一步前に進み出た。

「ケリオイル団長。それが何を意味するかわかって口になっているの
ですか」

「ああ、わかっているぜ、ミシユエル」

ミシユエルの厳しく問いただす声にも平然と返している。

それを聞いてミシユエルが大剣を鞘から引き抜き、構えを取った。

「団長、おかしいっすよ！ 冥府の王はみんなを殺そうとしたやつ
だよ！ バカな考えはやめて」

「シユイ、俺たちは愚者の奇行団だぜ。馬鹿なのも愚者なのもわか
りきっていたことだろ」

彼女の必死な叫びも団長の心を揺らがせることはなかった。

彼ら四人はそこに佇んだまま、こちらをじっと見つめている。

「何で！ そんなの間違っているよ！ 今も平然とダンジョンに住
む人たちを殺そうとしているんだよ！ 思い直して！」

「わかっているさ。そんなこと言われるまでもねえ。だがな、俺は
家族以外の世界中の人々よりも家族が大事だ。ダンジョンに住む人
の命と引き換えに息子の苦痛を拭ってやれるなら、喜んで差し出す

ぜ」

狂気すら感じさせる親の愛。

俺たちがどうこう言ったところで、その考えが変わりそうにない。最近では、団長たちのことも気に入ってきていたのに、何でこんなことになったんだ！

「なあ、団長さんよ。冥府の王に寝返るって話だが、その方法はどうすんだ？」

激昂するわけでもなく冷静な口調でヒュールミが疑問を投げつける。

「それが。この階層にいた指揮官が取り持つてくれるそうだ。やつは通信用の魔道具を隠し持っていてな。冥府の王の命令で始めっから俺たちと接触する予定だったらしいぞ。俺たちは階層を制覇して願いを叶えたい。奴は……まだ解放されていない最終階層には、ダンジョンの意思により手出しができないらしくてな。俺たちを使って最終階層を突破させて、このダンジョンを完全に支配したいらしいぜ。願いを叶えた直後にダンジョンの制御が緩んだところを乗っ取る、って手筈らしい。利害の一致ってやつだ」

団長たちに手を貸してダンジョン制覇をさせたいのか。

確かにお互いに利益がある、手を組んでもおかしくはないのかもしれない。けれど。

「冥府の王がそれを守る保証は何処にもねえだろ」

ヒュールミの言う通りだ。あの冥府の王が律儀に約束を守るか？都合よく利用して使い捨てるとしか考えられない。

「ああ、そうだな。俺もそれを考えたさ。でもな、今、転送陣もまともに動かねえで、ダンジョン攻略も碌にできない状態だ。冥府の王の目論見を潰して、ダンジョンを正常化させるのにどれだけ時間が必要なんだ？俺たちにはそれを悠長に待っている時間はねえんだ。畏だとわかっていても、それにしがみつくしか……ねえんだよっ！」

団長の苦悩が激昂と共に吐き出された。

全てを理解したうえで、決断を下した団長たちに俺たちの言葉はもう届かないのか。

「やはり、このような結末になりましたか。危ういところが昔からありましたからね、貴方たちは。本当に残念ですよ」

既にモーニングスターを両手に握りしめているヘブイが、更に一歩前に出る。

「聖職者らしく神の名を借りて、俺たちを説得しないのか？」

「ここで説得して心が揺らぐ程度の決意なら、そもそも、こんなバカな提案に飛び付いたりしないでしょうに」

「違いねえな。でだ、お前らの中で俺たちと共に行く気がある奴はいねえのか。冥府の王はダンジョン最終階層の手前まで運んでくれるそうさぞ。俺たちが一番乗りしたら、どんな願いも叶うんだぜ。悪い話じゃねえだろ」

それに対する答えは 全員が構えを取った。

決裂（前書き）

書籍化の情報は活動報告で公開中ですので、是非、覗いてみてください。
さい。

決裂

「交渉決裂か、残念だぜ」

「こっちも ざんねん」

俺のたどたどしい話し方では邪魔になるだけだと思い、今まで口を挟まなかったが、最後にそれだけは言っておいた。

「この中で、ハツコン。お前が一番欲しかったんだがな」

「ハツコンは、うちとずっと一緒にいるの。誰にも渡さないんだからね」

愛の告白の様にも取れるが、ラツミスはそんなこと微塵も考えてなさそうだ。思ったことを素直に口にただけだろう

「団の仲間の愚行を止め、正しき道に導くのも聖職者としての務め。我が武器で頭を小突いたら、正気を取り戻すことでしょう」

「死ぬ死ぬ」

紅白双子が頭を激しく左右に振っている。こんな状況でも、余裕を感じさせるやり取りだ。

「考えを改める気は……ないのですね」

「くどいぜ、ヘブイ。説得しねえんじゃなかったのか。んでよ、お

「前ら俺たちを大人しく行かせる気はないのか。お前たちを傷つけたくないんだがな」

「それは理解していますよ。断った我々を排除したいのなら、一人ずつ話を持ちかけて断つたら殺せばいいのですから。全員一斉に話すメリットが、そちらにはありませんからね」

「じゃあ、黙って見逃してくれや」

「人殺しを平気でするような輩にホイホイと付いて行く、愚かな仲間を放っておけるわけがありませんよ」

ヘブイが言うまで気づいていなかった。そうか、この人たちは交渉が決裂しても、俺たちをどうこうする気はなかったのか。

両者が武器を手に睨み合っている状況だが、この人たちは本当にここで殺し合いを始める気なのだろうか。つい数分前まで仲間として共に語り合っていたというのに……。

「そちらが武器を捨て降伏して、大人しく牢屋にでも入って靴も渡すのであれば、怪我をさせるつもりはありません」

「靴も牢屋も勘弁してほしいところだ」

二人の会話を耳にしながら状況を再確認する。

この部屋は天井も高く広い。全員が戦えるだけのスペースはある。相手はケリオイル団長、フィルミナ副団長、紅白双子の四人。

こっちは、ミシユエル、ヘブイ、ラツミス、シユイ、俺、そしてヒュールミの五人と一台。

ヒュールミは戦力外なので四対四プラス一台ということになるのか。

俺の見立てだと、純粹な戦闘力ならミシュエルはケリオイル団長より格上だと思う。ただ、経験の差があるから油断はできない。

副団長の魔法は厄介だが、シユイが牽制するなりして攻撃に参加させなければいい。

問題は紅白双子だがへブイ一人で彼らを凌げるのか……実際の強さが未だに把握できないので、何とも言えないところだが。

あとは、ラツミスを戦いに参加させるべきかどうか、そこが問題だ。彼女は怪力を完全に制御できていない。その状態で彼らと戦うのは危険すぎる。

万が一、力の制御を間違えて誰かを殺してしまったら、立ち直れない程の傷を心に負うことになるかもしれない。

ただでさえ、戦いにくい相手に手加減の程度も難しいだろう。でも、大人しく何もせず黙っていられるラツミスじゃないのは重々承知している。

彼女が戦わないで済む理由があれば……そうか！

「しゅいと」

「あねご」

「こっちに」

非戦闘員であるヒョールミとシユイも 結界 内に入れることにより、ラツミスが動けない状況を作りだせばいい。

俺が 結界 を発動したのを見て、直ぐに悟った二人が駆け寄ってくる。

「ハツコン、助かるっす！」

「ちょっと待て、姉御ってオレのことか!？」

あ、ヒュールミがこめかみをぴくぴくさせて、口角が吊り上がっている。

まずかったか、今の呼び名は。ヒュールミって呼ぶことができないから、咄嗟に似合いそうなのを考えたのだが。

「すまんです」

「もうちょっと、ほら、他にあるだろ……可愛げのある呼び名がよ

顔を背けてぶつぶつ呟いている。そうだよな、ヒュールミだって女性なのだから、もっと相應しい呼び名を考えておかないと。

「いりくちに」

「いこう」

「ああ、入り口に陣取って逃がすなってことか」

「そういうことね。うん、わかった」

唯一の出入り口に俺たちが移動することにより、団長側は逃げ道を封じられた。

だが、こうなるとミシユエルとヘブイで団長と紅白双子に対応しなければなくなる。シユイは副団長の動きを封じる役目があるので、前衛の戦いに手を出す暇がない。

未だに両者睨み合っているだけで、お互いに様子を窺っている。敵対関係になったとはいえ、本気で戦う踏ん切りがつかないのか。何か切っ掛けがあれば壊れてしまふ危ういバランスだが、今のところその一步が互いに踏み出せない。

話し合いで解決するのが最良なのはわかっているが、俺の会話

能力で説得するのは無理がある。

「俺たちは別に人を殺したりするわけじゃない。ダンジョンを攻略する為に、冥府の王を利用するだけだ」

「相手も同じことを思っているのでしょうかね。お前たちを利用したら切り捨てよう」と

「だろうな。でも、俺たちは出し抜いてみせる。どんな手段を使っても、こいつに当たり前の生活と健康を与えてやりたい」

話は平行線をたどっている。どんな言葉を用いても団長たちの考えを覆すことはできない。

硬直状態かと思っていたのだが、摺り足でじりじりとミシユエルとヘブイが間合いを詰めている。

団長と紅白双子も少しずつ前へ前へと移動しているな。このままだと、残り数歩で互いの間合いに足を踏み入れることになるぞ。

「交渉決裂つてことで、やるかつ！」

「いいぜ、オヤジ！」

先に大きく動いたのは団長たちだった。

真っ直ぐ突っ込めば団長とミシユエル。ヘブイと紅白双子が戦う流れだったのだが、団長はヘブイに双子はミシユエルへと交差する様に走り込んでいく。

「俺はヘブイとやらせてもらっぜ」

「団長直々の御指名とは光栄ですよ」

両手に構えた短剣が交互に突き出され、それを棘のついた鉄球で弾いていく。

団長の攻撃が鋭く苛烈でヘブイの方が押され気味だが、両手に一本ずつ武器を構えているおかげで何とか凌いでいる。

「やっぱ、接近戦も強えなお前は」

「いっぱい、いっぱい、ですけどね」

短剣を防ぎ弾き、時折、蹴りも繰り出し、団長の猛攻を防いでいるが相手の方が一枚上手のようだ。法衣が切り裂かれ、浅い傷が体や頬に走り、鮮血が飛び散っている。

まだ、暫くは耐えそうだが楽観視もできない状況だ。高圧洗浄機に変化して手を出すことも考えたが、激しく動き回っているので団長だけを捉えられる自信が無い。

あっちの戦況はどうなっている。

ミシユエルは二対一でも負けてない。むしろ、戦況は有利か。

二人のコンビネーションに手を焼いているようだが、大剣の一振りを喰らうだけで戦闘不能に陥ることを理解して、紅白双子が攻撃されることを極端に恐れている。

常に正面にはリーチの勝る槍を得意とする赤が陣取り、後ろや側面に白が回り込み相手の集中力を乱そうとしているようだ。

「うわーマジ怖え！ 当たったら即死ぬぞ」

「赤が死んだら、前にナンパした女もらってやるから、安心しろ」

「殺したくないので、降参してくれるとありがたいのですが」

軽口を叩きながらも戦意の衰えない双子に降伏勧告をしているが、その首が縦に振られることはない。

実力差はあるが手加減をしてねじ伏せるのが難しいのか、相手を倒すまでには至っていない。殺していい相手なら、直ぐにでも勝負が尽きそうだが、攻めあぐねているな。

ミシユエルの咆哮撃や燃やす刃の力は威力があり過ぎて封印しているようだし、生きて捕えることの難しさか。

フィルミナ副団長は水の塊を浮かばせた状態で、じつとこっちを見ている。その視線の先に居るのは、片膝を突いた状態で弓を構えているシュイ。

一度シュイが放った矢は、水の塊が壁の様な姿に変化することによって、容易く防がれてしまった。

それ以来、副団長が魔法で攻撃を仕掛けたタイミングを狙って、撃ち込もうとしているのだが、向こうもそれを理解しているようで動きがない。

戦力は拮抗している。だが、こちら側が不利だと思う。

その差は躊躇いのなさだろう。こっちは相手を殺す気が全くない。向こうは殺したいとは思っていないだろうが、結果、相手が死んでもいいと考えているのか、動きにキレがあり急所を当たり前のように狙ってくる。

俺はフリーだが敵味方入り乱れた戦いになると、途端に役立たずになってしまう。

何かを仕掛けたいと思うが、この部屋だと味方を巻き込んでしまいかねない。結果を維持し続ける以外に何かできることはないのだろうか。

考える、考える。戦力にならないなら、自動販売機として何かできないか考えるんだ。

灯油やガソリンを撒いて火をつけたらどうだ……駄目だ、ここは室内だから一酸化炭素中毒になるだけか。団長たちだけじゃなく、ミシユエルもヘブイも巻き込んでしまう。

前にやったパチンコ玉、ローションも味方もろともだしな。高圧の水流を撃ち込むには動きが激し過ぎて、命中させる自信が無い。

このまま、ミシユエルとヘブイの頑張りに期待するしかないのか。

切り札

「へブイ、動きが鈍くなっているんじゃないか」

「まさか、毒を刃に塗っているとは思いませんでしたよ」

ケリオイル団長の指摘にへブイが苦笑いを返している。

さつきからへブイの傷が深くなってきているのは、疲労のせいだ
と想っていたのだが、まさかの毒か。

なりふり構わず、本気で倒しにきている。

「その毒は死に至らしめるようなものじゃねえから、安心しな。ただ、体内に取り込まれることにより、全身に激痛が走る。俺たちの息子の痛みに比べれば軽いもんだがな。さて、そろそろ負けを認め
てくれないか……起死回生の何かがあるなら別だが。お前の精神干渉系の魔法も幻覚魔法も広範囲に影響を与える。イチかバチか、ここで使ってみるか。俺は耐える自信があるぞ」

「でしょうね。ですが、団長は勘違いされているようですよ。私のそれは……魔法ではありません」

「おいおい、この期に及んでハツタリか」

と言いつつ、へブイの発言が気になるようで団長の手が止まり、睨み合う形になっている。

「時間稼ぎをするつもりならお前さんが不利になるだけだぞ。毒が全身に回り痛みが増すだけだからな」

「ところで、素朴な疑問なのですが。仲間とはいえ手の内を全て晒すような人間に私は見えますか」

「お前、嘘は許せないって言うていただろうが」

「嘘は許せず、自分の秘めた趣味も明らかにして、何でも素直に受け答えしている。そんな人間相手だと油断しませんか。こいつの能力は全て見切ったと。さて、今の私が激痛に苦しんでいるように見えますか？」

さっきまでは苦痛に顔を歪めていたのだが、今は平然と髪を掻き上げ、軽くステップを踏む余裕すらある。

「芝居……には見えねえな。へー、毒を解除する魔法も使えたのか」

「いえ、そんな便利な魔法知りませんよ。解毒剤も飲んでいません。今は痛くないだけです」

「おいおい、この状況で言葉遊びをする気はねえぞ。どういうことだ」

「痛みを一時的に消したのですよ。私の加護の力で」

「お前の加護の力は怪力だけだった筈だよな。痛みを消す加護だと？」

「ええ、幻覚も精神干渉も魔法ではなく……感覚操作の加護の力ですよ」

感覚操作の加護。初めて聞く加護の種類だ。

「初耳だぞ、そんな加護。ハツタリにしちゃお粗末すぎねえか」

「自分の知りうる知識が世の中の全てではないのですよ。ヒュールミさん、貴女なら聞いたことがあるのでは」

傍観者に徹していたところに話を振られて、ヒュールミは少し仰け反ったが姿勢と表情を整えてから口を開いた。

「聞いたことはある。ハツコンの結界に匹敵するぐらい希少な加護らしいが」

「どういう能力だ」

「教えていいのか、へび」

「ええ、構いませんよ」

今まで秘匿していた割には、あっさり情報を開示するな。何か狙いがあるのだろうか。

「相手の感覚、視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚などの感覚を操れる。その他にもへびが言ったように痛覚を操作することも可能みたいだな。それ以上の詳しいことはオレも知らねえが」

「ちょっと待て、マジで痛覚を操作できるのなら、息子の痛みを消せるのか!？」

団長が武器を構えることも忘れて問いかけている。
その悲痛な叫びを浴びせられたヘブイも武器を下ろした。

「ここで、そうです、たとえば凶行を止められるのでしようが、残念ながらそれは無理なのですよ。この加護には幾つか制限と制約があります。負の効果を与える……そうですね、視覚を操作して幻覚を見せるのは広範囲無差別で発生できます。ですが視覚を強化して視力を上げるのは、己にしか作用しないのです。感覚を強化する操作は人には施せません。痛覚を無くす効果は、残念ながら強化の方に分類されるようです」

この状況で思うことではないのかも लेकिन、感覚操作 面白い能力だな。やりようによっては、かなり強くないか。

「そうか、残念だぜ。お前の精神干渉系の魔法には期待していたが、もう用済みか」

「ご期待に添えず、申し訳ありません」

嫌味に対して慇懃無礼な態度で返す、ヘブイの神経の図太さには感心させられる。

再び両者が武器を構え、戦闘状態へと移行した。話し合いの結果、振り出しに戻っただけか。

ああ、くそ。何の策も思い浮かばないで、何もできない自分がもどかしい。

「もう、お互いに話したいこともねえよな。じゃあ、終わらせるぞ」

「そう簡単にいくといいですね。会話中に傷は癒しておきましたので、まだまだ粘りますよ」

ちやつかりしているなへブイは。確かに傷口から流れ落ちていた血も止まり、傷跡も消えている。自分の加護を明かしたのも治癒の時間を稼ぐためだったのか。持久戦になるとへブイの方が有利なようだ。

「それは無理だぜ。息子たちもやばそうだから、終わらせねえと」

ミシユエルと紅白双子の戦いは終盤に差し掛かっている。まだまだ余裕があり息も整っているミシユエルと、今にも倒れそうで疲労困憊の双子。

どっちが優勢なのかは一目でわかる。

「あーもう、マジだるい」

「もっと手加減を要求する！」

「そうしたら、逃げますよね」

会話だけ聞くならスポーツでもしているようだが、やっていることは真剣での戦い。だというのに双子の口調は軽く心が折れていない。

「うちらは口を挟めないよね」

「付き合いの浅いオレたちが、偉そうに語るべき場面じゃねえからな」

「うん」

完全に部外者の立ち位置にいるよな。

俺たちの仕事は入り口を見張って、逃がさないようにするだけか。

「フィルミナ、赤、白、いいか。やるぞ！」

「はい」「おう」「あいよ」

団長が大声を張り上げ、それに反応した副団長と双子が反応して武器を掲げる。

何か仕掛けてくるのか！ 一挙手一投足を見逃さないように全員から目を離さないようにしないと。

「ぐああああつ！」

突如上がった悲鳴は ヘブイのものだった。

膝を突き、額を地面にこすりつけて苦痛の呻き声を漏らしている。どうということだ、さっきまで平然としていたのに。

予想外の人物の反応に仲間の視線が集まってしまっている。その隙を見逃すことなく、紅白双子がミシュエルを迂回して壁際を走り、俺に迫ってきた。

フィルミナ副団長もこっちに走り寄ってきている。我に返ったミシュエルが副団長を遮るように動こうとしたのだが、団長が投げつけた短剣を弾く為に足が止まる。

その脇を通り抜け、四人が俺の結界の前まで接近してきた。

またも団長が短剣を構えて投げつけようとしているが 結果がある限り、そんな攻撃は通用しない。

ヘブイに何をしたのかはわからないが、何をされようとも 結果で全てを弾いてみせる！

「ヘブイだけが、実力を隠している訳じゃねえんだぜ！」

この状況で勝ち誇った笑みを浮かべる団長の瞳が紅く染まったかと思うと、青い光を放っていた 結界 が 消滅した。 なっ、解除してないのにどうして!?

絶対の自信があつた鉄壁の防御が崩され、団長が投げつけたナイフがシュイの弓の弦を断ち切った。

更に視界が白い靄で覆われる。これは鱈人魔との戦いで見せたフイルミナ副団長の魔法か。

「まさか、冥府の王用の切り札を使わされるとはな。今まで楽しかったぜ、すまねえな」

頭頂部に誰かの手が一瞬だけ触れた。そして、後方から遠ざかる足音と共に聞こえてきた声は、団長の謝罪だった。

逃げられたのか……今更追っても、間に合いそうにない。それに、胸を押さえて苦しんでいるへびを放つてもおけない。

「すみません、ハツコン師匠！ 逃がしてしまいました。今から跡を追いますっ」

「ミシユエルやめておけ。団長の能力がわからない今、一人で追うのは危険すぎるぜ」

「くっ、そう、ですね」

「まずは、へびさんを」

そうだ。まずは、苦しみがいているへびをどうにかしないと。

「はあ、してやられましたね。流石、団長と言うべきでしょうか」

へブイが平然と立ち上がり、頭を掻いている……って、おい。

「えっ、何、平然としているっすか！ まさか、団長たちを逃がす為の芝居っすか！」

「それは心外な。さっきまでは激痛で動けなかったのですよ。団長の加護だと思うのですが、それにより私の痛覚操作が打ち消されて痛覚が戻っていました。今はもう一度発動させて痛覚を消しているだけですよ」

詰め寄るシユイをあしらいながら、へブイは団長たちが立ち去った階段をじっと見つめている。

「痛覚操作を消し、ハツコンの結界も消し去る加護か。さっき、団長の目が紅く光ったよな」

「うちも見たよ。瞳が真っ赤になっていた」

「うん うん」

俺も目撃したよ。紅い光を発したかと思ったら、結界が消え失せた。

「となると、考えられるのは破眼の加護か。加護の力を打ち消せる伝説級の加護だな。書物によると、この世界を一度征服しかけた英雄が所有していたという噂があるぜ」

加護を打ち消す加護って、物語なら主人公級の力だよな。能力を無効化する能力か。小説や漫画で何度も見かけたことのある定番の

能力だ。

正直、今まで団長はパツとした目立つ能力がない人だと思っていた。地味に強いというイメージだったのだが、とんでもない能力を隠していたのか。

団長の 破眼 は俺にとって厄介過ぎる加護だ。 結界 念動力 を封じられたら、ただの便利な自動販売機になってしまふ……あ、うん、自動販売機としては問題ない。

でも、そんな加護があるなら何故、息子の負の加護は消せなかった。一時的に消す能力だから意味がないと判断したのだろうか。この辺の疑問は本人から聞きださないと答えが出そうにもない。

「完全にやられました。私たちを集めて告白したのも、互いの能力を理解した上で逃げ切る自信があったからなのでしょう。取りあえず集落に戻るとしましょうか。会長に報告もしないといけませんし」

誰も反論を口にすることなく、大人しく従った。

今になって疲労感が押し寄せ、団長たちの裏切り行為が心に浸透してきたようで、みんなの足取りが重い。

階段を上る前に振り返ると、そこには水晶の中で眠る少年の姿があるだけだった。

彼らが去って

地下室を出て、今更間に合わないとはわかってはいたが、駆け足でまず転送陣の置いてある建物へ向かった。

入り口を見張っていたハンターに話を聞くと、ここには誰も来ていないとの事だったので、団長を含めた四人が現れたらすぐに教えて欲しいと伝えておく。

ヒュールミが念の為に転送陣を操作して、暫くの間は使用不可にしてくれたので彼らが、これを利用して逃げることは不可能になった。

今度は通路前のバリケードに向かい、団長たちが来てないか訊ねると、

「はい、少し前に来て。ダンジョン内の調査に向かうから開けてくれ、と頼まれたので開けました」

との話だった。その時、フードを目深に被った五人目がいたそう
で、そいつは冥府の王の指揮官で間違いない。事実、その後に監獄を調べに行くと指揮官の姿はなかった。

その後、やってきた始まりの会長に全てを打ち明けると、熊会長への使いを出して臨時の会議が開かれることとなる。

この階層にやってきた熊会長と俺たちを含めた話し合いの結果、ハンター協会からの指名手配犯として、団長たちが扱われることに決定した。

「何だか、疲れちゃったね」

始まりの階層の広場前で瓦礫に腰かけて、両足をぶらぶら揺らし

ているラツミスが、ミルクティーを片手に呷いた。

会議が終わってから、団長たちが戻ってくる可能性を考慮して、俺たちはバリケード前で見張っている。

「予想外なことばかり起こったからな」

ヒュールミは俺の側面にもたれかかった状態で、スポーツドリンクを口にすると、残りを一気に飲み干した。

「団長たち、息子を残したまま行っただすね」

「我々が危害を加えないと思っているのでしょうか。彼には何の罪もありませんから」

「うちらにも結論を出す前に、ちゃんと相談して欲しかったす」

「昔からあの家族は自分たちだけで全て抱え込んで、突っ走る人たちでしたから。副団長の境遇も関係しているのでしょうかね。甘えるのが下手なのですよ」

「それでも話して欲しかったす」

「そう……ですね。大切な息子を残していったのは、愚者な団長なのメッセージなのかもしれませんよ」

取り残された元患者の奇行団の団員二人は物憂げな表情で、空の见えない頭上をぼーっと見つめている。

「まさか、ケリオイル団長たちが敵側に寝返るとは。考えが浅かったようだ、すまぬ」

「清流の会長。これは誰にも予期できぬ事態。謝罪をしなければならぬ者は、あの四人のみだ」

謝る熊会長の背を始まりの会長がポンポンと叩き、「気にするな」と口にした。

そうだよな。熊会長が謝る理由はない。ケリオイル団長も相手から持ち掛けられなければ、こんな結末にはなっていなかった筈だ。

ダンジョンに住む人々を裏切るような真似をした団長たちのことは切り捨てて、怒るべきなのだろうが　どうしても、そう思えない自分がいた。

「しかし、ハツコン師匠。バリケードの外に出た団長たちは、一体どのようにして階層を移動するのでしょうか」

「おくのてが」

何かしらの別の手段があるとしたか考えられない。

その方法が何かと問われれば……この場に居る全員の視線がヒュールミに向いている。この場で一番正しい答えを導き出してくれそうなのは、やっぱりそうなるよな。

「んー、まあ、いくつか考えられるぜ。階層を自由に移動できる魔道具のような物がある。冥府の王が予め配っている可能性もあるかな。ただし、その場合少人数での移動のみ可能だと思う。一気に何百人も運べるなら、他の階層を強襲することもできるだろ」

「制限がある移動方法ってこと？」

「だろうな。もし、大人数での移動も可能なら、清流の階層やここ

で現れた魔物の中に、別階層の魔物も存在していないとおかしいだろ」

確かに、どっちもその階層にしか生息していない魔物だけだった。それは別階層の魔物を運ぶことができないという証明にもなる。

「もう一つは単純に、この階層の奥にある転送陣を使って飛んだんだろうな」

そういや、この階層の奥には階層主がいて、それを倒せば各階層を移動できる転送陣が現れるのだった。団長たちの実力なら何の問題もなく倒せる相手らしいので、そっちの可能性も高そうだ。

「団長たちの言葉を信じるなら、最終階層に移動して攻略を始めているということになる。急いで後を追いたいところだが、まだ各階層の混乱も収まっていない状況で人員を割くわけにもいかぬ」

熊会長としては難しいところか。各階層を見捨てるわけにもいかないが、彼らを放置すればダンジョンが崩壊しかねない。

いや、崩壊するならまだマシだろう。冥府の王がダンジョンの力を完全に支配下に置いた場合、もっと最悪な事態が待っている。

「それなのですが、暫くはダンジョン制覇の心配はしないでよいかと思われます」

「どついうことだ、へブイ」

「どのダンジョンも最終階層は最大の難所です。それこそ年単位で攻略しても到達できないで、未だに存在しているダンジョンは幾つもありますから。それに、こここの最下層は誰も到達しておらず情報

が全くないのですよ。団長たちが向かったところで、そう簡単に攻略できるとは思えません」

なるほど。そうすると、慌てる必要はないのか。

「それに加えて、団長たちも攻略するには戦力不足です。冥府の王側の誰かが仲間になるのかもしれませんが、気心の知れない魔王軍の方々と上手くやれるとは思えません。更に、冥府の王を出し抜こうと考えているなら、信頼できる仲間が必要でしょう」

「となると、誰か勧誘をするか、知り合いを誘うつてのが妥当か」

ヘブイの発言を聞いて、ヒュールミがすぐさま意見を口にしましたが、直ぐに思い当たる節があったようで、ぱんつと手を打ち鳴らした。

「残りの団員二人か」

「あの二人は変わり者ですから。口車に乗せられて、下手したら团长に力を貸しかねません」

「あ、うん、ないとは言えないっすね」

元団員二人が言うのだから、そうなのだろう。しかし、ヘブイに変わり物呼ばわりされる団員たちって、どんな相手なのだろうか。純粹に興味が湧いてきた。

「となると、我々がなすべきことは各階層の平和を取り戻しつつ、団員たちと先に接触を図り、こちらの陣営に引き込むということか」

「そうなります。ですが、二人とも現在ダンジョン内に居るらしい

のですが、どの階層なのかはわかっていないのですよ。私は彼らを探す役目を担っていたのですが、監獄に閉じ込められていましたので」

大事な任務中に変態行為で拘留されていたのか。

「どつちにしろ、階層を自由に行き来できないから、今はどうしようもねえんだがな」

ヒュールミとお爺さんが転送陣を正常に動かす為に、今も奮闘中だった。

暫くはこちら側に打つ手はないのか。

「ならば、清流の階層に戻り、その時が来るまで各自好きにすればいい。復興を手伝ってくれるのであれば、それなりの給金は保証する」

暫く、清流の階層に戻っていなかったが、まだ復旧は始まったばかりだ。やるべきことは幾らでもある。

清流の階層に戻って腰を据えてから、じっくりと今後のことを考えた方がいいのかもしれない。

「じゃあ、みんな清流の階層に戻ろうか」

ラツミスの元気な一声に促されて、全員が転送陣に向かっていく。この階層には一ヶ月もいなかったが、多くの事があり過ぎた。

変態　へブイとの出会い。

もう一人の指揮官を倒し、始まりの階層の脅威を取り除いた。そして、団長たちの裏切りと別れ。

ここが異世界で平和な日本でないことは重々承知している。にし

ても、自動販売機には荷が重すぎる波乱万丈な日常過ぎないか。

一生懸命お金を稼いで能力を強化することが当初の目的だったのに、気が付けば魔王軍幹部の野望を打ち砕くという大事になっている。

これが伝説の勇者のポジションなら納得もいくのだが、自動販売機なんだよな。

と、考えたところでどうなるものでもないか。ラツミスやヒュールミは言うまでもなく、清流の階層に住むお客や、仲間たちのことは気に入っている。

身体は鉄だが心は人として、できることなら、みんなを救いたい。

「色々あったけど、一緒に頑張ろうね、ハッコン」

背負っている俺に向けて微笑む彼女を守る。それだけでも俺が異世界にいる価値はあるよな。

自動販売機として何処までやれるかはわからないが、これからもずっと彼女と一緒にいられるように、電力を振り絞って頑張りますか。

彼女の背で揺られながら決意を新たにしていると、転送陣がある建物に到着していた。

転送陣はヒュールミの調整のおかげで十人以上同時に運べるようになっていたので、全員が転送陣の上に乗った。

ちなみに、大食い団は先に清流の湖階層に戻っている。

「それじゃあ、発動させるぞー」

懐かしの我が階層に戻るのか。清流の階層は俺にとって憩いの場所だからな。

湖畔で目が覚めてから、清流の階層は故郷のようなものだ。

戻れるという事実だけでも心が安らぐ。久しぶりに戻るから商品も結構売れそうだな。門番ズには 自販機コンビ二 で驚かせて、シャーリイにはコンドームと、まだ夜の仕事が始まっていないなら大人の玩具や、エロ本を提供するのもいいかもしれない。

スオリもオレンジジュース飲みたがつていそうだ。あとは両替商の二人に銀貨を渡さないと。やるべきことは盛りだくさんだ。

足下の転送陣からいつものように赤い光が溢れ出し……赤い光？いつもは、こんな色じゃなかったと思うけどヒュールミが改良したのだろうか。

「干渉されているっ！？みんな、転送陣から離れる！」

取り乱したヒュールミの声が聞こえたかと思った時には、俺たちは赤い光に呑み込まれ、いつもの浮遊感が全身を包んでいた。

光が消えると、そこは殺風景な室内だった。足元には転送陣があり、十畳ぐらいの部屋の壁には魔道具の灯りが一つあるだけだ。

あとは金属製の扉が見えるだけで、他には何も無い。

それどころか、誰もいない。

これはもしかして、俺だけ別の階層に飛ばされたのか？

あのヒュールミの叫び声から察するに、転送陣に何らかのトラブルが発生したということなのだろう。

みんなは無事だろうか。俺はポイントも潤沢にあるから、今すぐどうこうなることはない。自由に動けないのはきついが、ここでじっと待つことができる。

もし、他の人たちが見知らぬ階層に飛ばされ、そこが冥府の王に

支配されていたら命の危機だ。

ミシユエルやヘブイは何があっても生き残れそうだが、ヒュールミヤ始まりの会長は戦う術を持っていない。

それに、ラツミスのことも気がかりだ。力が人並み外れているとはいえ、独りにするのは不安がある。向こうも俺のことを過剰に心配していそうなんだよな。

とまあ、こんな状況でもそれ程、焦っていない自分に違和感を覚えるが、俺も異世界に来てから成長したということなのだろう。自動販売機のようにどっしり構えられている。

考え込んでいても仕方ないか。誰かが転送陣で移動した際に、ど真ん中で俺が居座っていたら問題になるよな。確か転送陣は移動先で誰かが触れていたら発動しないと聞いたことがある。

狭い室内だが風船、ダンボールのいつものパターンで部屋の隅に移動しよう。

手慣れた手順で準備を整えると、ふわふわと浮かんで壁際に着地する。通常の自動販売機に戻って、さて、次はどうしたものか。

どうにかして扉を開けて出るべきか、じつとここで待つべきか。

その二択の選択に悩んでいると魔法陣から赤い光が放出され、光が消えた場所には。

彼らが去って（後書き）

第五章終了となります。

この章は自分の中で愚者の奇行団編のつもりで書いていました。第六章からもよろしくお願いします。

人と熊と自動販売機

転送陣が紅い光を放ち、部屋中が赤く染められる。

目も眩むような光が消えると、そこには ヒュールミと熊会長がいた。

あつ、敵が現れる流れじゃないのか。

「くそつ、してやられたっ！」

「皆は何処に……」

床を蹴りつけて悔しがるヒュールミ。辺りを見回し仲間の安否を心配している熊会長。

俺は一人でなくなったことに、ほっと安堵の息を吐きたい気分だ。

「いらっしやませ」

「おおつ、ハッコンもいたのか。何で部屋の隅にいるんだ？」

「お主も無事か。ここは清流の階層……ではないな。部屋の造りが違う」

熊会長は一目見て、この部屋の違いに気づいたのか。流石だな。ヒュールミは床の転送陣に手を当てて、何やら調べているみたいだ。

「転送陣に魔力が満たされてねえ。これじゃあ、こっちから飛ぶことは不可能か」

「ヒュールミよ、一体何がどうなったのか教えては貰えぬか」

「しりたいたい」

何があつたか予想はつくけど、専門家からの説明が欲しい。

「ああ、説明がまだだったな。始まりの階層の転送陣に何らかの手が加えられていたっぽい。ケリオイル団長たちの誰かがやった可能性がたけえな。転移系の誤操作を促すように発動の障害になる魔法が仕込まれていた……と思う。事前に調べたつもりだったが細工を見破れなかった、本当にすまんっ！」

唇を噛みしめ頭を下げるヒュールミを責める人間はここにはいない。

団長たちが離脱したばかりなのだから何か変化はないか、みんながもう少し慎重に行動すべきだった。

「ヒュールミが悪いわけではない。我々も油断していた。転送陣が制御不能になり、別の階層に飛ばされたという考えで間違いはないか」

「その認識でいいぜ。たぶん、仕掛けた側も誰が何処に飛ばされるかはわかんねえと思う。そこまで高度な仕組みを短時間で仕掛けるのは不可能に近いからな」

飛ばせる場所と人を選べるなら、俺は単体で別の階層に送られそうだからな。運ぶ人がいなければ、ただの鉄の塊だ。

「問題はここがどの階層かということか。迂闊にその扉から出る訳

にもいかな。敵に囲まれている可能性もある。すまんが、ハツコン。向こう側から開けられぬように、扉の前に移動させても構わぬか？」

「いらつしゃいませ」

扉は内開きみたいだから、俺がいればそう簡単に開けることはできないだろう。

熊会長は俺を抱え上げると、扉の前にゆっくりと下ろした。

そうか、熊会長の力なら俺を持ち上げるぐらいは平気なのか。ラツミスの怪力の陰に隠れていたが、その力は相当なものだよな。

そういえば、俺はこのダンジョンの階層が何階層なのか未だに知らない。ちようどいい機会だ、質問してみるか。

「かいせう」

「いくらあり」

「ますか」

「ハツコンはダンジョンあんま詳しくなかったな。んじゃ、状況の確認も兼ねて説明するとすっか」

ヒュールミは豪快に胡坐をかくと、大きく息を吐いた。少し落ち着きも取り戻せてきたようだ。

「このダンジョンは下へ下へと潜っていくタイプでな、上から順に始まりの階層、亡者の嘆き階層、清流の湖階層、迷路階層、灼熱の砂階層、闇の森林階層、犬岩山階層ってなってるんだぜ」

「補足すると、その下に永遠の階層があり、そこは攻略中だ」

今のところわかっているのは八階層までなのか。まだまだ、先は長そうだな。

「オレたちの拠点である清流の湖階層は第三階層とも呼ばれているな」

「各階層にはハンター協会と会長が存在する。優秀な者ばかりだ。この状況でも耐えていると信じたいのだが」

今のところ清流も始まりも滅んではない。だが、他の階層も耐えているかどうかは不明なのだ。この扉を開けた先が廃墟であつても何ら不思議ではない。

「今すぐにも清流の湖階層に戻りたいんだが、正常に使えるようにしたところで……転送陣の魔力が足りねえな」

「転送陣の魔力はダンジョンが存在しうる限り、尽きることはない筈なのだが」

「これも異変が関係しているんじゃないか。相当な魔力を注げば一回ぐらいは使えそうだけどよ、オレもそうだが熊会長も魔力殆どねえだろ」

「すまぬ。せめて魔法使いがいれば」

「いや、魔法使いが二、三人いたところでどうしようもねえ。魔力を蓄えた魔石のデカいやつがあれば、何とかなるかもしれないな」

魔力を蓄えた石か。魔法の電池みたいな物だと考えてよさそうだな。

そこからは特に案も浮かばないようで、ヒュールミは転送陣を調べ、熊会長は室内を歩き回り、時折、壁に耳を付けて外の音を探っている。

よっし、頭を使うと糖分が欲しくなるらしいから、何か甘い物を提供しよう。

二人を見た感じでは室内は寒くも暖かくもないようなので、クレープでも出そうかな。紅茶もセットで。

自販機コンビニ になってスイーツを出すのもありだが、何が起るかわからない状況だ。フォルムチェンジできる時間は二時間なので、万が一の為に時間は減らさずにおきたい。

二人は小腹が空いていたようで、美味しそうにクレープを頬張っている。

「まだ、オレらについてはいたよな。ハツコンがいるから食料の心配が必要ねえ」

「そうだな。飢え死にだけは避けられる」

お役に立てて光栄だよ。でも、そうになると、他のメンバーが気になっってしまう。

あの時、転送陣に乗っていた残りの人は ミシユエル、始まりの会長、シユイ、ヘブイ、そして……ラツミス。

戦闘能力が無いのは始まりの会長だけで、あとは個々の能力に優れているから、そう簡単に魔物に倒されるとは思えない。

「もし、始まりの会長が単独で飛ばされていたら、やべえかもしんねえな。戦う術がねえだろ」

ヒュールミも同じことを心配していたのか。自分と同じように戦

えないから、余計に気になっているのかもしれない。

「いや、それは心配に及ばぬ。始まりの会長はかなりの腕だ。そもそも、ハンター協会の会長は全て元ハンター、もしくは現役のハンターしかねんのだよ」

「お、そうなのか。それは知らなかったぜ」

そうなんだ、それは朗報だよ。じゃあ、無力な人は一人もいないのか。心配の種が一つ減ったな。

「となると、誰がどの階層に飛ばされたのか。始まりと清流に飛ばされたら問題はないが、外れは亡者、迷路、灼熱、闇森林、犬岩山、永遠の六ヶ所か」

「おそらくだが永遠は除外しても構わんだろう。あそこには第七階層の階層主を倒さなければ到達できぬ。冥府の王が完全に支配できておらぬ状況では、その操作は難しいと思われる。希望的観測ではあるが」

「いや、間違つてねえんじゃないか。転送陣を誤操作させる仕組みだったからな。本来いけない階層には飛ばないって考える方が妥当だ」

確率は五分のーに減ったのか。みんなが安全な階層に飛ばされていることを祈るしかない。もし、危険な階層だとしても一人じゃないといいのだけだ。

「まあ、そんな状況だが、他人の心配よりもまず、オレたちだよな」

「ここがどの階層であるのかを調べねばなるまい。扉を少し開けて、外の様子を窺ってみるとしよう。念の為にヒュールミはハツコンの傍に」

「おつさ、ハツコン頼むぜ」

「いらつしゃいませ」

何があるつとも守ってみせるよ。

ここがどの階層なのか不安はあるが、戦闘力と判断力を兼ね備えている熊会長がいる安心感がかなり大きい。

転送陣の問題もヒュールミがいるので、他の人たちと比べたら解決する可能性も高い。

俺は食料と守りを担当するのが主な役割だ。バランスが悪いパーティーじゃないよな。

熊会長が俺をそつと持ち上げて、扉脇に移動させた。

「では、開くでしょう。声を潜めておくように」

一応 結界 の準備をしたまま、扉の先は熊会長の大きな背に遮られて見えないので、耳を澄ませておくことにする。

ギーと扉の軋む音がして、外気と外の明かりが室内に入り込む。室内も灯りはあるが、外は昼間らしく光量が全く違う。それ以上の情報はこの位置からでは得られないので、熊会長の結果報告を待つしかない。

扉の隙間が少し大きくなり、会長が首だけ出して外を覗いている。その後ろ姿が少し可愛らしいが、黙っておこう。

三分程度だろうが、首をひっこめて扉を閉めるまでにかかった時間はない。

「ふむ、この階層がどこであるかは理解できた。迷路階層のようだ」
迷路階層か。清流の湖階層の次だよな。俺が階層割れだったかに巻き込まれて墜落した場所。

「迷路階層か……運が良かったのかもしれないな」

「ふむ、見た感じでは魔物が暴れている様子もなく、いつものように閑散とした風景ではあるが」

確か人が無くて人の出入りが少ない階層だった。俺たちが来た時も久しぶりの訪問者だったので歓迎されたのを覚えている。

「魔物がいねえってことは、迷路の結界が解かれていないってことだろ」

「ああ、迷路内部は魔物で溢れている可能性が高いが、外には出て来ておらぬようだ」

そついやこの迷路からは魔物が外に出られない仕様になっているのだったか。

迷路の中に入らなければ安全が保障されているのならば、確かに幸運だったのかもしれない。だけど、そうなると残りの面子が危険な階層に飛ばされた可能性が高くなる。

自分は助かったと素直に喜べる状況ではないな。

「まずは、この階層の住民に話を聞いてみるとしよう。道具屋に魔石が置いてあるやもしれぬからな」

「そつだな。まずは情報だ」

「うんうん」

ここは集落と呼んでいいのか迷うレベルで、建物が数件あるだけだから直ぐに情報収集は終わるだろう。俺も聞き逃さないように……ん？ あれ、ちょっと待って。移動手段どうするんだ。

背負子は今も装着されたままだが、もしかして俺はここで放置プレイなのか。

「おいてくの」

当たり前のように、いつもラツミスが背負っていたので、二人とも俺をどうするか全く考えていなかったらしく、俺を置いて扉を出ようとしたところでハツとした表情になった。

「そうか、ラツミスがいねえんだっただな」

「その背負い紐が調整できるのであれば、運ぶのは任せてもらおう。ラツミスぐらい軽々と背負えるわけではないが」

ヒュールミがベルトの長さを調整して熊会長でも背負えるようにしてくれた。

俺を担げたのだから背負えるだろうとは思っていたが、軽々とはいかないようだが問題なく背負えたようだ。

ラツミスが背負うと俺の方が大きいので違和感しかなかったが、熊会長は身長が二メートルを軽く超えているので、俺を背負っていても不自然な感じがしないかもしれないな。

「あれだ、妙に似合ってる。会長専用の背負い袋みただぜ」

「ふむ、結構な重量だが。移動する分には問題ない」

取り残されないで良かったよ。これで俺も移動手段を手に入れたことだし、迷路階層の調査に乗り出せそうだ。

再び迷路階層

入口を抜けると殺風景な光景が広がっていた。荒野に点在する建物は十軒もない。この階層の寂しさは相変わらずだ。

建物が全く破損していないということは、魔物が迷路を抜け出していないということだろう。

ここは安全なようなので緊張感が少し緩んだ。

「魔物はおらぬようだが、食料はどうしておるのか」

「転送陣が使えなくなっただけでかなり日数が過ぎているよな。下手したら餓死してねえか……」

ヒュールミと熊会長が顔を見合わせ、慌てて一番近い二階建ての素朴な住居　ハンター協会へと跳び込んでいく。

「あつ、ボミー会長！　転送陣が復旧したのですかっ！」

室内のカウンターの向こうにいた二人の女性職員が身を乗り出して、大声を張り上げている。

「この二人が無事で良かった。見たところ元気なように見えるので、食料の備蓄が大量にあったのか。」

「その話は後だ。食料は足りているのか」

「え、ええ。転送陣が使えなくなる三日前ぐらいでしょうか。道具屋の御主人が発注ミスをして大量の保存食を仕入れてしまったので

すよ。そこで、ハンター協会が立て替えて、地下倉庫に保存していましたので」

不幸中の幸いとはこのことだろう。どうりで、痩せ細ってもないのか。

「でも、助かりました。毎日、保存食しか食べていませんでしたので、ハツコンさんが来てくれて大助かりです！」

需要はあるようで安心した。じゃあ、自動販売機として活躍しますか。

災害時は料金が無料になる自動販売機は実際に存在しているので、俺も彼ら？ を見習い無料で提供することにしよう。

職員の一人が残りの住民を呼びに行き、もう一人の職員は二階にいる迷路階層の会長を呼びに行った。

待っている間に住民が来てから直ぐに食べられるよう、机の上に飲み物と食べ物を並べて置く。ここは子供がいなかったから、大人向けのラインナップでいいか。

栄養が偏っているだろうから、栄養補助食品と健康ドリンクは必須かな。あと、食後の果物でビタミンも補給してもらおう。

準備をしていると住民よりも早く二階から職員ともう一人 丸々とした小さな女性が下りてきた。

顔が大きく目と口も負けずに大きい。髪は肩より少し下まで伸びて、色は砂漠の乾燥した砂のような色をしている。服装は髪と同じ色のワンピースで手足には同色の手袋とブーツといった格好だ。

ハンター協会の会長は同色で揃えなければならぬというルールでもあるのだろうか。

それよりも気になるのはその見た目で……丸いのだ。たぶん、種族は人間だと思っが見事なまでの三頭身で、頭が大きい過ぎて体のバ

ランスが雪だるまのようだ。

「清流の会長、助けに来ていただけたのですか」

「ああ、迷路の会長。この度の異変には気づいておるか」

「転送陣が使用不可になったことですよね」

「それだけではない。魔物が大量発生しておるのだが、それを操っているのが魔王軍の左腕將軍だ」

「そんな大ごとになっていたのですか。ああ、やはり、私のような会長の中で最も実力がなく、この辺びな階層に送られるような女には、そんな情報も回ってこないのですのね。冥府の王が現れた際に優秀なハンターを送れなかった不甲斐ない会長ですから。ええ、わかっていきます。私が会長の器でないことぐらい。こう見えても、あら、その階層は暇でいいですわねえ、という陰口にも負けず、日夜涙をこらえて頑張っているのですよ。そう、あれは三日ほど前のことです……」

止めどなく愚痴が口から溢れ出しているぞ。

熊会長が口を挟む隙が見つからずに、横目でこっちに助けを求めている。

あつ、職員が二人とも目を逸らした。

「あのようになってしまうと、会長は止まらないので、落ち着くまで待ちましょう」

職員が関わり合いになろうとしないのも無理はない。かなりの話し好きらしく言葉が濁流のように溢れ、何処で息継ぎをしているの

か全くわからない。

ハンター協会にやってきた住民たちが食事を始め、職員も一緒に
なって食べている。

一通り食べ終わった住民に感謝されていると会話が終わったよう
で、疲れ切った熊会長と血色の良くなった迷路の会長が並んで歩い
てきた。

「貴方がハツコンさんなのですね、ご助力感謝いたしますね。悩み
が一つ消えて、私もお腹が空きましたので、何かいただけませんか
しょうか」

何が好きなかはわからないが、何となく甘い物とかこってりし
たのが好きではないかと予想して、カロリーが高そうなのを出して
おく。

「ここにいるのが、迷路階層に居る者の全てで間違いないだろうか」

迷路会長ではなく、職員に声を掛けている。

「住民はこれだけなのですが、迷路階層に出かけてから戻ってきて
いないハンターが五人います。もう、一ヶ月は過ぎていきますので、
生存している可能性は低いですが」

「ちょっと待って、もう一人いたでしょ。異変が起こる少し前に、
動物を連れた綺麗な女の子。あの子って転送陣で戻ったのかな」

眼鏡を掛けた方の職員が顎に手を当てて、首を傾げている。隣の
職員もつられて同じ動作をしている。

「えっ、そんな手続きしてないわよ」

「じゃあ……可愛らしい女の子だったのにな」

動物を連れてた女の子か。動物に芸をさせる大道芸人だったのかも
しれないな。

ダンジョンでは娯楽が少ないので、各階層を渡り歩く芸人がいる
という話を聞いたことがある。タイミングが悪かったのだな、可哀
想に。

「そうか。ただでさえ危険な場所で、迷路内には魔物が異常発生し
ていることだろう。希望はもたぬ方が良いか」

それから、何があったのか情報交換を終え、道具屋に転送陣を作
動させる為の魔石がないか、店主に質問している。

「迷路内で巨大な魔石が見つかることは多々あるのですが、一か月
前に向かったハンターたちも帰ってきていない状況ですので、あい
にく在庫はありません」

「そうか、ありがとう」

ここにいる限り安全は確保されそうだが、打開策が無いようだ。

「転送陣をどうにかしないと、どうにもなんねえぞ」

「すまないが、ヒュールミはいつ作動しても大丈夫なように、調整
してもらえるか」

「それは構わねえが、動力はどうすんだ」

「それについては考えがある。だが、まずは転送陣がまともに動かなければ話にならぬ」

「ふーん。まあ、あつちでコツは搦んだから、正常化させるのはそう難しくないぜ」

ヒュールミは違和感を覚えながらも、即座に転送陣へと向かった。熊会長の考えって何なのだろうか。この状況だと打てる手は限られている。

魔力が足りなくて魔法陣が作動しないなら、魔力を補う魔石とやらが必要。

でも、それは道具屋にもハンター協会の倉庫にもないようだ。となると……まさか。

「かいちよう」

「何かな、ハツコン」

「あそこに」

「いくき」

そこが何処か指摘していないというのに、熊会長には伝わったよ。うで重苦しく一度頷いた。

「ハツコンにはバレてしまっていたか。そうだ、迷路の中に取りに行くしかあるまい」

やっぱり、そうか。あの迷路には自然発生する宝箱が多く存在して、その中身は一獲千金のお宝が眠っているらしい。

その中に巨大な魔石がある可能性に賭けるといふのか。

「実際、迷路内部の宝箱から、膨大な魔力を内包した魔石が見つかったのは一度や二度ではない。そうだったな、迷路会長」

「ええ、そうですが、迷路の中は魔物の巣窟ですわよ。優秀なハンターを引き連れて行くのであれば止めはしませんが……熊会長だけではどうにもなりませんわ」

「確かに。だが、ここで手をこまねいている訳にもいきまい。危険を承知の上で進むしかない時もあるのだ」

熊会長の強さは知っている。実力は疑いないが、問題は体力だ。老夫婦と同年代ということは、かなりの高齢だということだ。

熊人魔は人間と歳の取り方や寿命が異なるのかもしれないが、だとしても、危険なことには変わりない。

魔物が溢れんばかりの迷路に一人で突入するなんて無謀すぎる。ただ、この階層にはハンターも戦力になる人も存在しない。ならば

「いっしょに」

「いくよ」

俺が同行するしかない。食料問題もサポート要員としても役に立つ自信はある。

「来てくれれば助かるが、良いのか。生きて帰れる保証はないのだが」

「うん」

「まかせてよ」

「恩に着る。ハツコンには助けられてばかりだな」

そんなことはないよ、熊会長。魔道具としてではなく、一人の人格として扱ってもらっていることがどれだけ嬉しいか。

清流の湖階層で過ごさせてもらっている恩に比べれば、お釣りで銀貨が溢れるぐらいだ。

それに早くこの階層を脱出して、何処に行ったかわからないラツミスたちを探しに行きたい。

問題なのは飛ばされた階層と誰と一緒にいるかだよな。

ミシユエルと一緒に戦力的には心配がない。ラツミス相手ならコミュ障も少しは改善されている。

始まりの会長も熊会長の口振りだと安心できるだろう。

シユイは後衛なので前衛のラツミスとの相性はいい。だが、食料問題が……食べ物一杯ある場所に飛ばされていますように。

でだ、ヘブイとだと……戦力的には問題がない。だけど、変態だからなあ。靴にしか興味ないから身の危険は全くないのだけど、別の意味で心配になる。

うん、やっぱり、この問題をさっさと解決して探しに行かないと！

繋がる物語

直ぐに迷路へ向かうことになったので、住民とヒュールミ用に飲料を大量に残しておく。二ヶ月近くは軽く維持できる量なので、探索に時間がかかっても残した彼らの心配はいらないだろう。

ヒュールミに無断で行くか迷ったのだが、彼女の性格だと追いかけてきかねないので、ちゃんと説得をしてから行くことになった。

「それ以外に手はないのはわかるが、無謀すぎるだろ……はあ」

頭がいいだけに他の手段がないことも即座に理解できてしまい、強く止められないのか。

「ま　っ　て　て　ね」

「オレがついて行っても邪魔になるだけだよな。わかった、大人しく待ってるが、危ないと思ったら戻ってこいよ。約束してくれ」

俺を正面から見据える目は真剣で、拒絶を許さない力があつた。大丈夫、絶対に死んだりはしない。俺の場合は壊れたりしないか。一度、命を落とした身だから、そう簡単に命を手放したりはしないよ。

「う　ん」

「ま　も　り　ゆ　よ」

「おう、約束だぜ」

相変わらず返事が締まらないが、そこは勘弁してもらおう。

準備も終わり備蓄も充分確保されたので、熊会長に背負われて迷路の入り口に向かった。

門もない迷路の入り口が大口を開けているのだが、見えない壁があるようで、前に進めず入り口で混雑している魔物たちがいる。

「迷路の結界は持続されているようだ。結構な量が押し寄せておるな」

入り口ギリギリまで熊会長が近づくと魔物たちが興奮して、見えない壁に激しく体当たりをしている。

無造作に腕を大きく振り上げると、熊会長の爪が赤黒い光に包まれた。そして、腕を勢いよく振り下ろすと爪から赤黒い光が走り、触れた魔物が切り裂かれていく。

たった一振りで、入り口を埋め尽くしていた魔物の大半が分断された死体と化した。

ラツミスは純粹な破壊力といった感じだが、熊会長はプラス技の冴えだ。何処に攻撃を叩き込めば一番効率がいいかわかっているのか、もう二度、腕を振るっただけで入り口の敵は死に絶えた。

「では、行くとしようか」

「うん」

見えない壁に突っ込んだのだが、何の問題もなく入ることができ。念の為に熊会長が迷路の外に一度出てみたのだが、入ったら戻

れない仕様ではないようだ。

迷路のど真ん中を貫くように走る大きな道を進むのかと思っていたのだが、団長は躊躇いなく脇の小道へと入っていった。

「本来、大通りには敵があまり寄り付かぬものなのだが、今はその法則が乱れておる。圧倒的な数の暴力には勝てぬからな。各個撃破しやすい細道の方が安全だろう」

「うん うん」

熊会長が強いとはいえ、四方八方から一気に襲い掛かれたら苦戦は必至。俺が 結界 で守れるとはいえ、無茶をする気はないよ
うだ。

小道を進み分岐路に差し掛かると、熊会長はコートの内ポケットから地図を取り出して、念入りに現在地を確認している。

「ハツコンの情報提供のおかげで迷路階層の攻略がかなり楽になった。感謝する」

「ありがとうございます」

どういたしまして、と返したかったが言葉が足りない。

上空からの映像を模写した物なので、今回の地図はかなり精度が高い。畏の位置や魔物の分布図まで描かれている。

「この先は岩人魔の密集地帯か」

岩人魔ってゴーレムみたいな奴だったよな。以前、ラッミスが粉砕していた。

刃物が効きにくい相手なので怪力で打ち砕くのが一番向いている

そつだ。熊会長の爪は刃物扱いなのだろうか。だとしたら、手間取る相手かもしれない。

慎重に進んでいると脇道から岩人魔が、いきなり飛び出してきた。足音がしなかったということは、そこに潜んでいたのだろう。

大きめの石を繋ぎ合わせた歪な人型。大人の間人と同じぐらいの身長なので、熊会長の方が圧倒的に大きい。

「ふんっ！」

岩がこすれ合う音を響かせながら駆け寄ってきた個体に熊の手が振り下ろされた。

俺の心配は杞憂だったか。いとも容易く岩人魔が脳天から二つに割られて地面に転がっている。

「この程度の硬度なら問題ないようだ」

追加で現れた二体は掌底と足を掴まれて地面に叩きつけられたことで、戦闘不能になっている。

安定感のある戦い方だ。一体目での戦いで、どの程度の力で攻撃すればいいかを理解したようで、ラツミスと違い全力で打ち込むのではなく、力を制御して戦っているのが良くわかる。

二時間ほど進み、単発で現れる魔物を駆逐していたのだが少し休憩を取ることになった。

俺がスポーツドリンクと軽食を用意すると礼を口にして、壁に背を預けほっと一息吐いている。

「ハツコンを背負って思ったのだが、ラツミスの桁外れの力を実感させられた。このように運ぶのは可能だが、彼女のように楽々というわけにはいかぬようだ」

足を伸ばして座り込んでいる熊会長が苦笑いを浮かべ、スポーツドリンクを一気におおった。

五百キロを超える俺を運ぶだけでも大したものだが、疲労が思ったよりも蓄積されている。ラツミスが軽々といつも運んでくれているので誤解しかけていたが、俺を運ぶだけでも普通は一苦勞なのが当たり前だよな。

「とはいえ、結界で守ってくれるのはありがたい。ゆっくり休憩ができ、食料の心配も必要ないというのは本当に助かるものだ」

守りは任せて、ゆっくり体力の回復に努めてください。

かなり体力を消耗していたようで軽く睡眠を取り始めた熊会長を結界でカバーしながら、周囲を見回している。

そういえば、階層主は復活しているのだろうか。あの燃え盛る骨巨人 炎巨骨魔がいるとなると、会長一人では対処しきれない。現状は上手く事が運んでいるが、この調子で最後まで行けると樂觀視する程、甘い考えは持ち合わせていない。

早くラツミスたちを探しに行きたいと、はやる心を抑え込み警戒を続けていると、微かな音が流れてきた。

複数の足音と衝突音だろうか。誰かが戦っている？

この階層の魔物で遭遇したのは、岩人魔、豊豚魔、炎飛頭魔、階層主である炎巨骨魔ぐらいだ。音だけで判断するのは難しいが、距離はそんなに遠くない。

助けるにしろやり過ぎすにしろ、熊会長を起こしておかないと。

「かいちよう」

「む、眠ってしまったか。すまぬ。何かあったのか」

元ハンターだけあって寝起きの良さは抜群だ。

「おとがした」

「音……確かに争うような音があちら側からするようだ。魔物たちの争い……は考えられぬか。指揮官がいるのであれば同士討ちはしないようだからな。とすれば、生き残りのハンターと考えるのが妥当。救いに行きましょう」

即座に考えをまとめると熊会長が立ち上がった。迷いが一切なかったな。

走り出した熊会長だったが、俺が重い為に走る速度は日頃とは比べ物にならない。一刻を争う事態かも知れないので、俺は一番軽いダンボール自動販売機にフォルムチェンジしておいた。

「助かるぞ、ハッコン」

背中 of 重さを気にしないでよくなると、熊会長は四足歩行で一気に加速した。

音は徐々に大きく激しさを増している。迷路階層に取り残されたハンターだとしたら一ヶ月も生き延びている時点で、かなり優秀だといえるだろう。

助けたいという純粋な想いもあるが、魔石を手に入れる為の戦力が欲しいというのが本音でもある。

曲がり角を抜けた先は、開けた場所になっていて、そこには豊豚魔の群れに囲まれた少女がいた。

まさか、少女の方が生き延びていたのか！？

見た目から判断して五、六歳だろう。温かそうな白いコートに灰色の手袋とブーツを履いていて、真冬のようなファッションをしている。

顔は雪のように白く、目は怯えた様子もなく強い意志が感じられる。閉じられた唇は薄紅色で、小さくて可愛い。髪も真っ白でまるで雪の妖精のようだ。

少女の容姿も目を引いたのだが、他にも注目すべきポイントがあった。

彼女の隣には荷台が置かれていて、それを引っ張っていたであろう白いウナスが、荷台という名の枷から外された状態で彼女の前に立ちはだかっている。

ウナス　つまりこの世界の頭から一本角が生えた猪のことなのだが、このウナスはかなり異質だ。

まず、俺が見たことあるウナスは全て茶色の体毛だったのだが、このウナスは少女と同じく真っ白なのだ。それに、頭から生えた一本の角が太く長く鋭い。まるで鍛え上げられたランスのような力強さを感じられる。

そして、何よりも身体のデカさ。今まで見てきたウナスの倍はありそうな大きさで、見ていただけでその力強さが容易に想像できた。

「力を貸すぞ！」

少女たちに気を取られ背を向けていた豊豚魔を二体切り裂いて吹き飛ばすと、熊会長は少女の隣に立ち並んだ。

「ありがとうございます……ます」

少女が俺を見て硬直している。ダンボール自動販売機を背負った熊と遭遇したらそうなるよな。

「この子は仲間です。あと、あの子も」

そういつて彼女が見上げた先には、闇を固めて作り出したかのような大きな鳥がいた。

それは巨大なカラスによく似ていたが、一目でカラスではないと断言できた。両目の上にもう一つ、第三の目があったからだ。更に、足も三本あった。

三本足のカラスで思い浮かぶのは日本神話に出てくる八咫鳥だが、あれは目が三つもなかった気がする。

「黒八咫、ボタン、この人たちは味方だから、攻撃しないでね。あ、申し遅れました、私はキコユと申します」

丁寧に挨拶をする、この少女のまとう不思議な雰囲気、何故か俺は目が離せないでいた。

動物楽園

「こちらの自己紹介は豊豚魔を片付けてから、させてもらおうとしてよ
う」

熊会長は俺を地面に置いたので、元の自動販売機に戻っておく。

「えっ、あれっ、形が変わりました？」

「詳しい説明は後ですが、そういう魔道具だと思っておいてくれ。自我もあり、会話も通じる頼もしい仲間だ」

「そうなのですね。初めまして、魔道具さん」

この子は見た目の割にしつかりとした話し方をする。六歳児ぐら
いに見えるのだが、実際はもう少し年上なのかもしれない。

「いらっしゃいませ」

「わあ、お返事してくれたあ」

無邪気な笑みを見せて、好奇心溢れる瞳が俺を見つめている。
こっつう反応は子供らしいな。

「あ、ええと、熊さんは後ろの魔物をお願いします。こっちの魔物
は黒八咫とボタンで充分ですから」

この二匹の動物で豊豚魔を相手にするというのか？

ボタンという名のウナススは見るからに強そうだが、あのクロヤタと呼ばれた三本足のカラスはどうやって攻撃するつもりなのだろう。

そんな俺の心配など嘲笑うかのように、クロヤタは上空から舞い降りてくるとボタンの背に乗った。そして、迫る豊豚魔に向けてその口を大きく開く。

「耳を塞いでください！」

「キュルクワアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

な、な、な、何だこの鼓膜があつたら破れてしまいそうな、爆音の鳴き声は！

放たれた鳴き声は音波となり前方にいた豊豚魔たちを襲ったようだ。

耳を押さえ仰け反り、その手からは血が溢れ出ている。鼓膜が破れたのかもしれない。

平衡感覚を失いふらついている豊豚魔たちを跳ね飛ばし、角で貫くボタンがいる。その背には、クロヤタが羽で腕組みをしたまま乗っかり、胸を張っていた。

あんなに激しく動いているのに、よく振り落とされないものだ。

まともに動くこともできない豊豚魔に避ける術はなく、ボタンにあっさりと蹂躪されている。動けない相手だとはいえ、あの肥えた腹を容易く貫き、接触した相手を数メートルも吹き飛ばす力。

それに音波攻撃をする三本足のカラス。

この二体、突然変異の動物なのだろうか。人間にも個体差があるように、この世界では動物も強さに差があるのかもしれない。

十以上の豊豚魔がいたにも関わらず、三分もかからず倒しきった。もしかしくなくても、助けに入らなくても余裕だったのでは。

熊会長も敵をあつさり倒した動物たちの活躍に、目を見開き驚いている。

「魔物を圧倒するウナススとキリセなど、聞いたこともないが」

「この子たちは特殊なのです。ある方の力で強くなった、とても優秀で優しい子たちです」

ある方というのが気になるが、その言葉を口にした時の優しい目を見てみると、悪い人だとは思えないな。

魔法か何かで強化された存在という認識でいいのだろうか。

こちら側の完全勝利となり、お互いの情報交換するには死体が転がっているここでは落ち着かないだろうと、熊会長が移動することを提案したのだが、少女は頭を軽く左右に振った。

「この死体なら処理しますので、暫くお待ちください」

そう言つて少女は背負い袋から丸い土の球を取り出した。ポーンと玉ぐらいの大きさで、愛おしそうに抱えている。

その玉を豊豚魔の死体に近づけると、すっと玉の中に死体と飛び散っていた血が吸い込まれていく。どう見ても玉の大きさよりも豊豚魔の死体の方が大きいのだが、そこは魔法や加護がある世界なので、突っ込むのも野暮な話か。

全部の死体を処理し終わると、少女は土の球を軽く撫でながら戻ってきた。

「その、土の球は一体……それに、お主のような少女が何故、こんな場所にいるのだ」

「お答えしてもいいのですが、皆様がどなたであるのか、お教え願

えませんか。その魔道具さんも」

そういや、こっちは名乗っていなかったな。熊会長がどう判断して答えるのか期待させてもらおう。

「これは失礼した。清流の階層でハンター協会会長をさせてもらっている者だ。こっちはハツコンと呼ばれている。硬貨を入れることにより商品を得ることが出来る魔道具だ。人の魂が宿っておる」

素直に受け答えをすることにしたのか。じゃあ、俺も定番の挨拶をしておこう。

「いらっしゃいませ」

「なるほど。人の魂が魔道具に宿っているのですね……ふふ、あの方に少し似ています」

あれ、不思議がるどころか笑っている。あの方と似ているって、その人も自動販売機マニア……なわけないよな。どういうことだろう。

「では、こちらも改めて自己紹介させてもらいます。私はキコユと言います。そして、白いウナススがボタン。黒いきりせが黒八咫です」

「ブオー」

「クワツカ」

二匹が頭を振って返事をしている。少女の命令に従っていたこと

といい、かなり頭のいい個体のようだ。

「私たちはある情報と解決への糸口。そして、あの方の欠片に力を与える為にこの場所にやってまいりました。迷路階層は魔物が豊富で、宝箱から役に立ちそうな魔道具が見つかる可能性もありましたので」

この子は危険を承知で迷路の中へ進んだのか。この動物二匹を引き連れて。

さっきの戦いぶりを見た限りでは、かなり強い個体なのは理解できる。上空はクロヤタ、地上はボタンが担当しているので、そう簡単にはやられないと思う。となると、この少女も何かしらの力が備わっているのだろうか。

「私の力は微量な冷気を操ることと、気配を消して移動することぐらいですよ」

へえーそうなんだ。完全に気配を殺せるなら、戦闘を任せて自分は隠れていれば済むのか。

「ええ、そうなのです。黒八咫とボタンにはいつも助けられてばかりです」

この子はさしずめ動物使いといった感じなのだろうか。

「動物使いではありませんよ。この子たちは自分で考えて理解する知能があります。私は一方的に助けてもらっているだけです」

「キコユよ。お主、誰と話をしておるのだ」

熊会長が訝し気にこっちを見ている。誰って、俺と会話……えっ、そっぴや今、声を出していないのに、キコユは返事していなかったか？

そう思いキコユを見ると、俺の体に手を添えた状態で笑みを返した。

「私は触れた相手の心の声を聞くことができますので」

マジですか……。念話の逆バージョンみたいな感じなのかな。

「マ、ジ、ですよ」

屈託なく笑いながら俺の質問を肯定した。

「って、勝手に心の声を読んでは失礼でしたね。すみません」

手を離すと深々と頭を下げている。

「いいよ」

切り返しと冷静な対応、この子を見た目より年上な気がする。フイルミナ副団長も見ただ目と年齢が違っていたから、同じように人型の別種族で年齢が異なることも考慮しておこう。

「こちらの事情をお話するのは問題ありませんが、私の質問にも答えていただけませんかでしょうか」

何か目的があると口にしていたから、ハンター協会の会長であることを知っての交渉なのか。

「ああ、それは問題ない。こちらが提供できる情報ならだが」

「はい、ありがとうございます。どうせなら、ご飯を食べながらお話しませんか」

食事なら俺の出番だな。一ヶ月もずっと迷路にいたのなら、食料があつたとしても保存食ばかりだっただろうから、美味しそうなのを選んで食べてもらおう。

「お礼に食べ物はこちらから提供しますね。少し待ってください」

えっ、いや、俺が出すつもりだったのだけど。

キコユは荷台の中から大きめの植木鉢を取り出すと、その中に抱えていた丸い土を入れている。

何をしているのかさっぱりなんだが、興味があるから黙って見守っていたいよう。

更に荷台から口を紐で縛った袋を取り出すと、種を取り出して埋め込んでいる。そして、土の上に手を添えると、土が変色している。湿っているのか？

って、今から植物を育てるつもりじゃないよな。え、ここから数日待ったら熊会長飢え死にする……んっ!？

土からあつという間に芽が出て、驚いている間に蔓が伸びて実となり、パンパンに膨らんだサツマイモが幾つも連なっている。あつという間に五十以上の実がなつたぞ。

テレビで植物の成長を早送りで流していた番組と似た映像がリアルタイムで見られるとは。これって、加護の力なのだろうか。急成長とがありそうだよな。

「これは、一体どういうからくりなのだ」

「この畑さんの欠片は、先程のように魔物を養分として取り込むだけではなく、種を植えて水を与えると、このように急成長させることも可能なのです」

説明しながら簡易コンロを設置してその上に、砂利を敷いた土鍋のような物を置いてある。そして、サツマイモにしか見えない植物を砂利の上に並べて、火を焚いて蓋をした。
ところで、畑さんの欠片ってなんだろう。

「焼き上がるまで暫く待つてくださいね。ポタンと黒八咫はもう食べたいからね」

二匹は生のままですがつと食べている。しかし、生野菜だというのに美味しそうに食べるな。俺が生身なら涎が垂れそうな食べっぷりだ。

「食事しながらと言いましたが、火が通るまでに時間がかかりますので、私たちが何者であるのか、それと目的をお話します。信じられないような話だと疑いになることでしょう。ですが、全て真実です」

少女がそう口にするとうんと食事をしていた黒八咫とポタンが食べるのを止めて、彼女の隣に並び座っている。

一体、少女が何を伝えようとしているのか。俺は一言一句逃さないように意識を集中している。

「これは、とても優しい畑の物語です」

畑転生（前書き）

キコユ、黒八咫、ボタンは私のもう一つの世界『俺は畑で無双する』
<http://ncode.syosetu.com/n5442cu/>

に登場しているキャラです。

その作品を読まなくても全く問題ありません。

もし、興味を持って詳しい話を知りたい方は覗いてやってください。

畑転生

彼女の口から語られた内容は本当に信じられないものだった。

「とある辺境の村にお婆さんが一人で暮らしていました。そんなお婆さんの畑に突如人の魂が宿ったのです。その人は異世界からやってきたのですが、畑なので会話をする術を持たず、日々お婆さんに耕されていました」

何だろっ、ツッコミどころがあり過ぎて、どうしていいかわからない。

畑に魂宿るっておかしいだろ……いや、自動販売機に宿った魂が言ったらダメか。

それに異世界からやってきたってことは、俺と同じ境遇の日本人の可能性がありそうだ。この話、ますます聞き逃すわけにはいかなくなったぞ。

「ある日、お婆さんが亡くなり、畑は独りぼっちになってしまいました。ですが、そんな畑にも友達ができたのです。それが黒八咫とボタン、そしてエシグの夫婦でした」

エシグって確かウサギに似た動物で、耳が刃の様に鋭いんだよね。ってあれ、これって前に劇団がやっていた劇の内容に似ていないか。もしかして、元ネタだったりするのだろうか。

「動物たちと共に穏やかな日々を過ごしていると、そこに一人の少女が逃げてきました。彼女は人間にある理由で追われていたのですが、不憫に思った畑は追手を懐柔して少女を救ったのです」

劇では焔から巨大な手が生えて、戦っていたよな……。あれって完全創作だと思っていたのだけど、本当だったのか。

「焔はもつと多くの人を救う為に旅に出ました。そして、北の防衛都市にたどり着いたのです」

焔が旅に出るといふ脳内で絵が想像できないシチュエーションに思考をやめてしまいそうだ。自動販売機の俺に言われたくはないのかもしれないが、焔は無理がありすぎないか。

劇の芝居では焔の元に人が次々とやってくるという話だったが、その後何があつたんだ。

「そこでは魔王軍との激しい攻防戦が繰り広げられていて、焔はその戦いに身を投じたのです」

焔なのにな。

移動手段を考えてみたのだが、おそらく、土を固めて人と同じような姿になって行動していたのだろう。高性能のゴーレムなら戦うことも可能だろうし。

「何とか撃退して、防衛都市は一時の平穏を得たのです」

凄いな、焔。

「だが、魔王軍をどうにかしないと本当の平和は訪れないと、焔は魔王軍の本拠地へと進行しました。そして、魔王軍との激しい戦いの末、身体を自由を奪われ意識が消える直前、仲間を何とか逃がした焔は意識を閉じました」

これが焔ではなく普通の勇者なら感動する物語にもなり得るかもしれないが、焔だもんな主役。彼女が持っていた土の塊を「焔の欠片」と呼んでいたことから察するに、彼女や動物たちが逃がされた仲間なのだろう。

「私たちを庇った焔……さんは、魔王軍の領地にいます。防衛都市から魔王軍の領地に繋がる唯一の道には巨大な土の壁があり、その先に進むことができません。私たちはどうしても焔さんに会いたいのです。その為に、残ったみんなが情報を集めている最中、以前とある魔王軍筋の方から教えていただいた情報を思い出したのです」

焔、焔と、焔がゲシュタルト崩壊を起こしそうだが、みんなに好かれていた焔だったのだな。

人間でもない焔でも仲間に、こんなにも慕われている事実を知って勇気を貰えた。俺も人ではない存在だが、その焔を見習って頑張らないと。

「このダンジョンを魔王軍の幹部である左腕將軍が狙っていると。その情報を頼りに藁にも縋る想いで、ここまでやってきました」

見た目はこんなに幼い子が動物二匹をお供に連れて、危険を承知の上でダンジョンに潜り、魔王軍の幹部との接触を図ったというのか。

「しかし、冥府の王と会えたとして、どうするつもりだったのだ」

「魔王軍の領地へ入る道はないか、教えてもらおうかと思っています。できることなら穩便に」

最後の言葉を口にした瞬間、目つきが鋭くなった。

つまり、交渉が決裂したら穏便に済ませる気はないってことだな。

「では、冥府の王が何を目論見、我々が今どういう状況なのかを教えよう」

熊会長の説明は既に経験済みなので聞き流しているが、キコユは前のめりになって聞き入っている。クロヤタとポタンも言葉がわかっているかのように、黙って話に耳を傾けているように見える。

「　ということになっている」

「そうのですか。話は通じそうですが、情報を提供していただけるとは正直、怪しいですね」

「抜け道を教える代わりにダンジョンの住民を殺せと命じられたら、キミたちはどうするかね」

穏やかな口調で問いかけてはいるが、熊会長ならその返答如何によつては迷いなく爪を振るいそうだが。

「受け入れません。そんなことをしたら畑さんに怒られますからね、黒八咫、ポタン」

「クワクワツカ!」「ブフウー!」

頭を激しく上下に振って同意している。この二匹、本当に言葉を理解していないか。

少女たちの発言に確証はないが、動物たちとの微笑ましい光景に、信用できるのではないかと思いたくなる。

「あ、焼き芋に火が通ったみたいです。ええと、ハッコンさんは食べられませんよね」

「ざんねん」

生のサツマイモをあんなに旨そうに動物たちが食べていたので、かなり興味があるが食べる方法がない。

向こうが食料を提供してくれるのだから、俺も飲み物ぐらいは担当させてもらおう。焼き芋って食べたなら口の水分を持っていかれるからな。

焼き芋に相応しい飲み物って何だろう。妥当な選択はお茶か。個人的な好みを言わせてもらおうと、焼き芋には牛乳が合う。

「では、会長さんどうぞ」

「ご馳走になる」

熱々の焼き芋を受け取った熊会長が、それを二つに割ると断面が黄金色でどろっとした汁が零れ落ちそうになっている。

かなりしっとりとしているな。あれは蜜なのか？ だとしたらかなり甘いサツマイモということになる。以前食べたことがある安納芋がそんな感じだったな。

「ふむ、ほふほふう、これは旨いっ！ 食感はしっとりとしていて甘味が口一杯に広がる。見た目はシテミウマだが、味は全くの別物だ」

くっ、熊会長の食レポを聞いたら食べたくなくなるじゃないか。自動販売機の飲食料品は全て一度口にしたことがあるので味が想像でき

るのだが、未知の食べ物に対する反応は結構辛いぞ。

「喜んでもらえて良かった！。でも、これって本来の畑さんの野菜と比べたら十分の一……いえ、もっと出来の悪い味です」

「これの十倍以上の味だというのか。そのような食べ物が存在するのであれば、伝説の畑の噂も納得がいく」

熊会長も劇を見ていたのか、それともハンター協会では有名な噂話なのかは知らないが、結構認知度が高いのかもしれないな。

でも、十分の一は言い過ぎだ。熊会長があんなにも驚いているというのに、あれの十倍の味だったら麻薬じみた中毒性があってもおかしくない。

おっと、飲み物を出すのだった。日本茶は異世界では今一つ人気がないので、牛乳にしておこうか。

取り出し口に牛乳を落とすと 念動力 で操り、熊会長とキコユの前に移動させた。

「あの、何か浮いています」

「それはハツコンが出した飲み物だ。浮かんでいるのも念動力の加護によるものだそうだ」

恐る恐る宙に浮かぶ牛乳を突いていたキコユが、ほっと息を吐くと掴み取った。

「蓋の開け方はこうやるといい」

熊会長は瓶牛乳が結構好きらしく、何度も口に行っているので開ける手際もいい。

キコユは見よう見まねで少し手間取っていたが、何とか開けるのに成功した。

「うわっ、冷えていて美味しいです！ ハッコンさんは飲み物を出せるんですね」

「それだけではないぞ。食料や様々な商品を出してくれる頼れる男だ」

熊会長、褒め過ぎだつて。キコユが牛乳瓶を握りしめたまま、輝く瞳で俺を見つめている。想像以上に喜んでくれているようだ。

「畑さんは野菜なら何でも作ることができました。やっぱり、ハッコンさんは似ていますよ」

一見無邪気な子供の笑みに見えるのだが、どこか寂しげなのは気のせいではないと思う。

つと、そつだ。キコユには是非聞きたいことがあった。

「いせかい」

「てんせい」

「いっしよ」

「えっ、異世界転生、一緒とおっしゃいましたか？」

「うん」

「以前、ヒュールミからハッコンの中の魂は別の世界から来たとの報告を受けている」

熊会長の言葉を聞いて、キコユが目を輝かせて俺を見つめている。これはどういつ反応なんだ。喜んでるようだが。

「もしかしたら畑さんと同じ故郷かもしれないですね！ 知ったらきつと喜びますよ」

満面の笑みを浮かべ、無邪気に喜んでいる姿は子供らしい可愛さがある。動物や小さい子供の可愛らしさというのは、どの世界でも微笑ましい。

「畑さんと再会したら、またここに来ますので、一度会ってくださいませんか」

「うん」

そんなのこちらからお願いしたいぐらいだ。もし、同じ日本人なら話したいことが山ほどある。それも、俺と同じく妙な転生をした同士なら話も弾むだろう。

「それと、もう一つお願いがあります。迷路探索に私も同行させてもらえませんか。一ヶ月の間、迷路の中をうるちよろしていたので、三分の一ぐらいは地図も埋まっています。私は無力ですが黒八咫とボタンは力になります。お願いできませんか」

キコユが勢いよく頭を下げると、隣に並ぶクロヤタとボタンも頭を下げている。

元から俺も熊団長も、足手まといになろうが少女たちを見捨てる気はなかったのだが、二匹が仲間になるのは心強い。

ここで断る理由は何もなかった。

動物と少女

キコユたちと行動を共にすることとなり、俺は荷台に乗せられることになった。

白く巨大なウナススであるボタンが引つ張る荷台は特別製で、木製ではなく金属で全てが作られていた。腕利きの職人が作った逸品らしく、頑丈で金属にしては軽い方らしい。

近くで見ると荷台というよりは古代の戦車　チャリオットみたいだ。

それでも木製に比べれば重く、荷物も積まれ、更にキコユと自動販売機である俺がいるというのに、ボタンは軽々と引つ張っている。一度ラツミスと力比べをさせてみたい。

上空では黒八咫が空を旋回しながら辺りの監視をしてくれている。かなり頭のいいカラスで話す言葉だけではなく文字まで理解できるそうだ……俺はまだ簡単な文字しかわからないというのに。

今は　念動力　が使えるので誰かに文字を教えてもらおうと思ったのだが、今はみんなやるのが山積みで、教えてもらえるような状況じゃないからな。

そうそう、クロヤタは黒八咫と書くそうで、自己紹介の後に荷台から紙を持ってきて、自分の名前はこうだとアピールしていた。そこに書かれていた文字は漢字だった。

畑に転生した魂は日本人で間違いないようだ。事が片付いたら必ず会わないと。

そういえば、キコユは頼りにならないと自ら断言していたが、そんなことはないと思うのだが。

使える能力は触れた物を冷たくする。気配を完全に消せる。触れ

た相手の心の声を聞くことができる。の三種類だけだと謙遜していたが、サポート役としては優秀な能力だよな。

改めて共に行動しているメンバーを眺めていると、ふと思ったことがある。

熊会長、ボタン、黒八咫、自動販売機、少女。これ、移動式動物園じゃないか……。

ここに大食い団を加えたら完璧だな。無事に合流できたら是非加わって欲しい。

そんな馬鹿なことを考える余裕があるぐらい、順調に進んでいる。上空から監視しているので分かれ道や曲がり角に敵が潜んでいても、黒八咫が直ぐに舞い降りて来て教えてくれるので不意打ちもなく、俺という重しから解放された熊会長は、その実力を思う存分、発揮してくれている。

黒八咫も上から滑空してきては、鋭い爪で切り裂き、嘴で貫き、敵を次々と戦闘不能に陥らせている。超音波みたいな鳴き声がなくとも充分すぎる活躍だ。

敵が多いとワンタッチで外れる荷台から解放されたボタンも加わり、殲滅力が一気に跳ね上がる。頼もし過ぎる動物たちだな。

「辺りが暗くなってきた。今日はここで野営するでしょう」

「はい、わかりました」

黒八咫は迷路の壁の上に着地すると、そこで周囲の警戒をしてくれているようだ。

この場所は通路が行き止まりになっているので、一方向のみに気を付けていれば問題がない。対処できない敵が現れた場合、逃げ場がないということにもなるが、そこは俺の 結果 で何とかすればいい。

「では、晩御飯は残っているシテミウマと新しく何か野菜を」

「ま っ た」

畑の欠片を植木鉢にセットしようとしていたキコユを止めることにした。

昼はそのサツマイモにそっくりなシテミウマに熊会長が虜にされたようだが、今度はこっちの番だ。日本の企業力を見せつけてやるぞ。

「お ら が だ す」

おつす、とか言い出しそうな話し方になってしまった。足りない言葉を補おうとすると赤ちゃん言葉か方言っぽくなるのが問題だ。

「ハツコンさんの、ご飯がいただけるのですね。楽しみです」

目を輝かせているキコユの期待に応えないとな。ここで野菜や果物で勝負をしても完敗するだろう。となると、加工された食品か。人気のある食べ物となると、まずはから揚げか。更にたこ焼きも珍しい筈だから、異世界にない料理で攻めるとしよう。

「うわぁ、何ですかこれ！ 温かくて美味しそう」

反応は上々だな。

ふーふーしながら、から揚げを口に入れ咀嚼している。ぱつと目が輝き、満足しているようだ。

「美味しいです、このお肉。鳥の肉なのでしょうが」

そついや、黒八咫がいるところで鶏肉を出してよかったのだろうか。同類の肉を出しやがってとか思ってたないといいが。

「この丸いのも、上にかかっている黒い液体と、中に入っている面白い触感の食べ物が癖になりそう。なんだろうこれ」

外国の人は蛸が苦手と聞いたことがあるが、キコユも中身を知らずにいた方がいいかもしれない。

舞い降りてきた黒八咫とボタンは昼間食べたシテミウマを食べている。動物は油ものとか駄目なものが多いから、食べさせるのは止めた方が良いか。

から揚げもたこ焼きも気に入ってもらえたようだが、本命はそっちじゃない。そう、レディーのハートを鷲掴みにするにはこれだっ！

俺は 自販機コンビニ にフォルムチェンジすると、ずらっと商品並べた。それも全部スイーツのみというラインナップだ。

最近のコンビニスイーツは専門店に引けを取らない味だ。むしろ、有名スイーツの店が協賛していたりするので味は折り紙付きだ。

「ふわぁ、何ですかこれは……見たこともない食べ物ばかりです」

「おかしだよ」

「これ全部お菓子なんですか。うわぁ、凄いなぁ」

子供、女性、お菓子。これで堕ちない訳がない。素材の味では圧倒的に不利だとはいえ、多くの人々に好まれるように調理された味なら勝ち目はあるだろう。

更にスイーツで大事なものは見た目だ。女性受けする可愛らしさも重要なポイント。

「どれも綺麗でこれ本当に食べ物なのでしょうかね」

迷いながらも、キコユはプリンとフルーツがたっぷり入ったケーキを選んだ。

開け方がわからないだろうから、念動力で運ぶ際にカバーを外しておく。それを少女の前に置くと、食べていいの、と上目遣いの視線で訴えかけてきた。

「いいよ」

「いただきます」

匙でプリンをすくい口に入れた途端、頬を押さえて口元に笑みを浮かべた。更に二口、三口と手が止まらないようで、瞬く間にプリンを食べ終える。

「美味しかったです。果物の甘さや味とは違った、別の甘味なのでしょうかね。こんな食感と喉越しも初体験です」

見事な表現力だ。見た目が少女の口から出た言葉とは思えない。

次にケーキを食べているのだが、さっきよりは反応が薄いけど、何やら考え込むようにしてゆっくり味わっている。

「美味しい……これって、畑さんの果物で作ったらもっと、とんでもないお菓子に……」

呟いている声を聞いて納得がいった。畑で採れた美味しい果物で同じ物を作れないか考えているのか。素材が良ければ味が増すわけだから、実現できたらとんでもないことになりそうだ。

「ごちそうさまでした。とっても、美味しかったです」

手を合わせてから、満足げにお腹を擦っている。

野菜や果物の味では勝てないと考えて、肉とスイーツで攻めたのが功を奏したようだ。あと、食後の飲み物も提供させてもらおう。

自動販売機としてのプライドも保てたし、満足のいく結果だった。

「そのなんだ、すまんが。こちらにも何かもらえないだろうか」

申し訳なさそうに、佇んでいる熊会長がいる……ごめん、熊会長のことがすっかり忘れてた。今から好物を直ぐに用意するよ！

熊会長も食べ終えたところで、先に会長が見張りをすることとなり、キコユと二匹は先に眠ってもらうことにした。

俺の体から漏れ出た光に照らされた熊会長が闇に浮かんでいる。

温かいスープを飲みながら通路の先を眺めている熊会長の姿は、熊だというのにダンディーで絵になっていた。これ録画しておいて流せばCM効果ありそうだ。

「ハツコンよ、キコユという名の少女をどう思う」

「よいこだね」

「そうだな。気遣いもできて頭もいい。精神と見た目が一致しないほどにな」

熊会長もそこが引つ掛かっていたのか。まあ、実際にあれぐらいの歳頃の子供と接したことがあれば、違和感しかないよな。

親戚の子供や友達の子供は、あの歳だったらもつと我儘も言ったり、理解力も低かったりするのが普通だ。あんなにしつかりしている子供は滅多に……いや、皆無だろう。

「初めは冥府の王の手者ではないかと疑っていたのだが違うようだ。それよりも、気になることがあったのだよ。キコユはおそらく……人の子ではあるまい。半分混ざっているだけかもしれないが」

フィルミナ副団長と同じなのだろうか。俺の見立てでは精神年齢は十代後半から二十歳。高校生か大学生というイメージだが。

「あの能力と外見の特徴が、とある種族に一致する」

熊会長はキコユが何者であるか、既に答えを導き出しているようだ。

まだまだ、この世界についての常識が足りないので、俺には見当もつかない。

「雪童ではないかと思っている」

ゆきわらべ？ 名前から想像すると雪女の子供バージョンだろうか。

「雪童というのは貴重な種族である雪精人の子供を指して、そう呼ぶのだ。成人になるまで見た目は六歳ぐらいの子供の姿を保っている。成人の日を迎えたその日に、大人の姿に急成長するらしい。雪童は特殊な力があり、それを狙う者が後を絶たず絶滅の危機に陥っており。実際、絶滅したものだと思っておったのだが」

ということとは、見た目と実年齢が異なるってことか。
それに、狙われる特殊能力って何だろう。良くあるパターンだと
願い事を叶えられるとか、食べたなら不老不死になるとか。ぱっと思
いつくのはそんなものだが。

「雪童が成人……十八歳になった日に首を刎ねると、永遠に溶ける
ことのない氷の彫像と化す。その首は呪詛の言葉を吐き続け、一帯
は呪いにより汚染されると伝えられている。実際にそれで滅びた国
があつたそうだ」

とんでもない能力だが、発動条件が酷すぎるだろ。首を刎ねて呪
いを掛けるって、最低な手段だ。

「実はそれだけではなくてな。首から下の氷の彫像は、傍に置くだ
けでどんな呪いも解くことが可能な解呪の像となる」

頭とは真逆の効果が生まれるのか。それは需要があるのも理解で
きる。だから、絶滅の危機になっているのか……えっ、ちよつと待
つてくれ。呪いを解けるって、それは

「だんちよう」

「ああ、そうだ。それがあれば、ケリオイル団長の息子に掛かった
呪いも解くことが可能だろう」

何てことだ。これをケリオイル団長が知つたら、どんな手段を用
いてもキコユを得ようとするだろう。

今、行動を共にしていないことが良い方向に転ぶとは思ひもしな
かった。

「故に、これは我らの胸に納めておく秘密だ。他言無用で頼む」

「うん」

団長が心から欲している存在がこんなに近くにいるのか。皮肉なものだな。

キコユが本当に雪童だったとしても、そんな目に遭わすわけにはいかない。この秘密は誰にも明かさないのでこつ。

ボタンのお腹を枕にして気持ち良さそうに眠っている少女。

どんな理由があろうと、この子を犠牲にしたらダメだよな。この秘密は絶対に漏らすわけにはいかない。

探検発見

「北は殆ど塗り潰されておるな。罨が多くて面倒だったのではないか」

「落とし穴に何度か落ちかけましたけど、黒八咫が助けてくれたので」

地図を覗き込む熊会長とキコユ。その地図はキコユが持っていた物で、既に移動して調べた箇所は全て赤く塗られている。

「もし、巨大な魔石を手に入れているのであれば、買い取らせてもらえないだろうか」

「すみません、宝箱から出たのは短剣とただの宝石や金貨です」

荷台の片隅に無造作に置かれていた、ずた袋を持ってきたキコユが、口を縛っていた紐を緩めて中身を見せてくれた。

おおおおっ、金銀財宝とはこの事か。金貨と銀貨が給食袋の様な革の袋に詰め込んである。

「ただの貴金属か。ふむ、ありがとう」

「私たちの目的は冥府の王との接触ですので、魔石が見つかった時は譲りますね」

「それは、ありがたいが……ボタンや黒八咫も含めた等分で金額を支払うこととしよう」

ハンター協会の会長として、そこは譲れないようだ。始まりの會長もそうだったが、労働には対価という考えを徹底している。日本のブラック企業に見習わせたい。

「ハンターたちからの報告をまとめると、ここにも頻繁に宝箱が現れる」

「まだそこには行っていません」

真剣に話し合っている二人の邪魔をしないように荷台で大人しくしていると、空から降ってきた黒八咫が目の前に着地した。

翼を広げると優に二メートルを越えるので、その大きさはカラスの比じゃない。その羽は闇よりも深い黒でありながら艶がある、美しいと思ってしまう程に。

三つの目が何を思ったのかじっとこっちを見つめている。カラスの好物は何だったか。光物が好きだというのは有名な話だが、食べ物には雑食だよな。

そもそも、日本のカラスと生態が同じなのかという疑問が発生する。

目が三つに足が三つ。顔はどこか気品というか品格を感じるのは気のせいなのだろうか。

「あら、黒八咫どうしたの。ハッコンさんが気になるの?」

「クワックワックワ」

「うんうん、黒八咫も畑さんとハッコンさんが、何処か似ていると思っっているのね」

焔と自動販売機。転生先は違うが境遇は似たようなものだからな。ただ、どう考えても俺の方が幸運だった。好きだった自動販売機だというのもあるが、直ぐにラツミスと出会えたのが何よりも大きい。

こんな体だというのにダンジョン内を渡り歩けたのも、全て彼女のおかげだ。それに、ここにいる熊会長やヒュールミといった人々にも恵まれ、正直な話、生前よりも充実した日々を過ごしている。俺や焔以外にも日本から物に転生させられた人はいるのだろうか？ いや、普通に人間として転生させられた人ならいるかもしれない。一人だけならまだしも、二人もいるのだから、三人四人と見つかったも何ら不思議ではない……と思う。

「お、やはり、宝箱があるようだ。アレを片付けてから中身を確認するとしてよっ」

通路の先に袋小路となった場所があり、奥に木製の宝箱が見える。ゲームでよく見るイメージ通りの宝箱だ。

その前に、岩人魔、豊豚魔、炎飛頭魔が揃い踏みしている。合計で十体なので、問題なく倒せる数だが。

「ハツコン、炎飛頭魔を頼む」

「りょうかい」

炎飛頭魔だけは先に倒しておかないと階層主を呼ばれかねない。

いつもの 高圧洗浄機 に変わり 念動力 でノズルを操る。

排出口を絞り、撃ち出す威力を最大にまで上げる。そして、迫りくる炎飛頭魔の眉間目掛けてレバーを引いた。

撃ち出された細い水流は炎飛頭魔の炎に触れた瞬間、じゅっと水が蒸発する音がしたが、水の威力が衰えることなく、その眉間を直

撃する。

ウォーターカッター並の水圧なので結構距離があつたというのに、魔物の骨を砕き沈黙させる。炎飛頭魔は火さえ消してしまえば脆いので、向こうにしてみれば俺は天敵だろう。

三体の炎飛頭魔を倒し、役割が終わつたので戦場へ意識を向ける。

熊会長は獅子奮迅の大活躍だ。この場合、熊奮迅の方がいいのだろうか。

黒八咫も空からの強襲で敵を葬ることにより、上空にも警戒をしなければならぬ敵の注意が逸れ、地上で戦う熊会長やボタンが楽に立ち回ることができる。

ボタンは荷台から解放されると、次々と魔物を串刺し、もしくは跳ね飛ばしている。この重量を楽々運べるボタンの体当たりは、猛スピードの車に跳ねられるのと同じぐらいの衝撃がありそうだ。

実際、衝突した豊豚魔はきりもみ回転で宙を舞い、壁に激突するとピクリとも動かなくなっている。

この強さ……移動式動物園というチーム名でハンター協会に登録したら、人気が出そうな気がする。もちろん、大食い団もスカウトして。

キコユは俺の傍から離れずにじっと戦況を見守っている。結界が使えることを既に話しているので、黒八咫もボタンも遠慮なく暴れられている。

「よっし、片付いたな。宝箱の開封といこうか」

あっさりと戦闘が終わわり、死体はキコユが土の球に吸収させている。死体処理をしなくていいのは結構便利だ。俺は嗅覚がないので気にもならないが、普通は血の臭いが気になるみたいだし。

キコユとしても土の球 畑の欠片に吸収させることにより、畑の力が増して意識を取り戻すのではないかと淡い期待を抱いている

ようで、積極的に死体処理をしてきている。

「キコユ、今まで宝箱を開けた際に罨はなかったのだろうか」

「ええと、危ないかもしれないからって、黒八咫が宝箱を掴んで上昇して、落として開けていました」

ダイナミックな開け方だな。それだと罨があっても関係ないけど、中に入っている宝が壊れやすい物だったら、どうするつもりだったのだろう。

「ふむ、では、今回は任せてもらうとしようか。あまり得意ではないのだが、少々の罨であれば失敗しても怪我を負うことはない」

宝箱には鍵穴があるのだが、熊会長は取り敢えず鍵穴を無視して宝箱に手を掛け、開けようとした。ガタガタと音がして宝箱が揺れただけで開く気配はない。

次にコートの内ポケットから針金のように細い金属を二つ取り出して、あの大きな熊の手で器用に掴むと鍵穴に針金を突っ込んだ。そして、鍵の解除作業をしていると不意に立ち上がり、針金を懐にしまった。時間はかかったが鍵の解除に成功　熊会長が爪を振り下ろした。

あ、鍵開け失敗したんだ……。

宝箱の鍵穴の部分が抉れ、宝箱の蓋が開くと中から何かが飛び出してきた。

それを熊会長は素早く掴み取り、こちらに振り返る。その手には一本の矢が握られている。

「やはり、細かい作業は苦手だ。この手だと無理があるのでな」

熊の手はお世辞にも細かい作業に向いているとは言えない。鍵開けが得意なハンターとかを雇った方がいいのだろうか。

でも、この階層にはハンターが他にいなかった。これからも強引に宝箱を開けていくしか手段はないようだ。

「今回は矢で助かったが、爆発系の罠があつた場合、魔石があつても粉碎される恐れがある。一度戻って対策を練る必要があるかもしれない」

道具屋や武器屋はハンター経験者の可能性もある。それに、手先は器用だから熊会長よりかは成功率が高いだろう。

「まずは、中身の確認だ」

開け放たれた宝箱の中から、熊会長は野球のボールぐらいの赤く輝く石を取り出した。

お、これって魔石なんじゃ。何かそれっぽい見た目だけど。

「魔石だが……これに内封されている魔力で転送陣が稼働するのがわからぬ。しまったな」

あつ、そうか。ヒュールミがいないと、どの程度魔力が必要なのが判断がつかないのか。俺も熊会長もすっかりしていた。

「すまぬが、一度戻ることしよう。キコユよ、構わぬか？」

「はい、いいですよ」

キコユの許可も得たので、一度ヒュールミの元へ戻ることとなった。

二度手間ではあるが、キコユと黒八咫とボタンという頼もしい仲間を得たので、無駄な探索ではなかった。

帰りは一度通った道に戻っただけなので、特に問題もなく半日も経たずに迷路の入り口まで辿り着いた……までは良かったのだが、ここでアクシデントが発生した。

「すみません、やっぱり通れないみたいです」

入り口に見えない結界をどうやっても、土の球である畑の欠片が通り抜けられないのだ。

「前も試してみたのですが通れなくて、諦めて迷路を探索していました」

だから一ヶ月の間、一度も戻らないですつとそこにいたのか。黒八咫もボタンもキコユも問題なく通れる。この結界はダンジョンの魔物の波長で判断して出入りを禁じているらしい。土の球が通れない原因は迷路の中にある魔物を吸収したことで、その波長が沁みついてしまったのではないかという、ヒュールミの見解だ。

ちなみに、ヒュールミは会長が呼んできたので、今、迷路の外から結界を調べている。

「一旦、土の球だけ置いて、戻るのはダメなのか」

「すみません。畑さんを置いて行って、その際に何か有ったら私は……」

土の球を抱きしめたまま、俯いているキコユは一緒じゃないとダメだと言いつ張っている。

「それに、出る手段がなければ、ずっと畑さんは迷路から出られないことになります」

「ま、そうだな。出る手段か。一つ試してみるとするか。ハッコン手伝ってくれ」

「いらつしゃいませ」

何をするのかはわからないが、ヒュールミの頼みなら断る理由なんてない。

ヒュールミの指示に従い、熊会長が結界を跨ぐように配置した。横向きで右側が迷路の中に、左側が迷路の外にある。

「んでもって、ハッコン結界発動を頼む」

何を狙っているのかわからないが 結界 を発動させた。

「おっし、そつから、ええと、キコユだったか。土の球持ったままで、ハッコンの結界に入ってくれ」

「は、はい」

キコユも良くわかってないが従ってくれている。

「よしよし。でだ、ハッコン。その結界で迷路の入り口の結界を弾けるか？」

ああ、なるほど。そういうことか。意識を集中して、迷路の見えない結界の侵入を許可しない！

見た目には変わらないが成功したと思う。何となくだが。

「い い よ」

「流石だな、ハツコン。じゃあ、ハツコンの結界から出ないように気を付けて、こっちに渡ってくれ」

キコユは意を決して、ぎゅっと目を閉じると俺の 結界 を走り抜けて、迷路の外へと飛び出した。

「で、できました！」

「おーっし、これで合流達成だな。改めて、よろしくな、キコユ…
…と黒八咫、ボタン」

「よろしくお願ひします、ヒュールミさん」

「クワックワー」

「ブフーツ」

振出しに戻る結果とはなったが、ある程度の情報と仲間を得たのだから収穫としては充分すぎるだろう。

今日はゆっくり休んでから、ヒュールミたちと相談して明日からの対策を練らないと。

役割分担

宿屋で一晩を明かし、心と体をリフレッシュした一行は再び迷路へと足を踏み入れた。

今度はヒュールミも同行しているのには、ちゃんとした理由がある。まず、魔石がどれくらいあれば稼働するか判断する為。

そして、もう一つは宝箱を開ける作業を任せたいからだ。ヒュールミは宝箱の知識もあり、実際に畏解除や鍵開けの技能は取得しているそうだ。

少し前ならそれでも危険性が高いので連れて行かなかっただろうが、今は頼りになる戦力が増え、ボタンが引いてくれる荷台もあるので移動もスムーズに行える。ヒュールミができてきても足手まといにはならない条件が整っている。

荷台には俺とキコユとヒュールミが乗り、戦闘に入ったら二人が俺に寄り添って 結果 で守るといふ流れが出来上がっている。少女と美女に寄りかかれるのは悪くないが、触感がないので変な気にはならないな。

キコユの場合は見た目が子供なので保護欲は湧くのだが。

順調に地図を塗りつぶしながら進んでいたのだが、大通りを横断した時、ふとあることを思い出して空を見上げた。

そこには雲一つない真っ青な空が広がっている。あそこらへんになるのかな。

空の一点をじっと見つめるが、ただの青空にしか見えない。

階層割れに巻き込まれて、自分が上の清流の湖階層から落ちてきた場所を探しているのだが、地上からは全く判断がつかないでいる。そついや、清流の階層側の階層割れ後はどうなっているのだろう。

熊会長なら詳しいことを知っているそうだな。

「かいちよう」

「なんだ、ハッコン」

先頭を歩いていた熊会長が歩く速度を落とし、荷台の隣に並んでくれた。

「かいせう」

「ごしやあ」

「しゅうり」

「したの」

「かいせう、ごしやあ？」

会長が首を傾げ、眉根を寄せて考え込んでいる。

やはり、無理があったか。少ない言葉を駆使して伝えようとしたのだが。

「会長、ハッコンはたぶん、階層割れを直したのか聞いてんじゃねえか」

よくわかったね、ヒュールミ。自分で言うておいて何だが、伝わったことにびつくりだよ。ラツミスの次に言葉を交わしているおかげかな。助かるよ。

「おおっ、階層がごしやあと潰れたという表現が、なるほど」

真面目な顔で考察されると恥ずかしいのですが。

「階層割れはもう修復して地面も再生されている。だが、一度階層割れが発生した場所は地面が脆くなっているので、目印を立ててそこには近寄らないようにハンターたちには忠告してある。再生中なので陥没していて小さな池のようになっていようだ。水の中はかなり強い衝撃を与えない限り、再び崩落することはあり得んのだが」

それを聞いて一安心だ。あの高さから落ちたら普通は即死間違いなしだからな。特殊な能力でもなければ、助かりようがない高さだった。

「普通の人間は階層割れに落ちたら、そこでおしまいだ。そこで、俺はハツコンの方法を参考にして、実はこそつと高いところから落ちても大丈夫な魔道具を制作していたんだぜ。他にも水を一瞬にして凍らす魔道具と、自己修復機能が付いた服も今度お披露目するから、ハツコンも見物していつてくれよな」

「うん」

ヒュールミはそんな物を作っていたのか。高所から落ちても大丈夫な魔道具……あれか、無重力状態になるとか、魔法の能力が付与されている感じかな。

清流の湖階層に戻れたら、喜んで見物させてもらおう。

「会長さん、地図だとそこを曲がったら、宝箱のある部屋っぽいです」

「お、そうか。話はまた休憩時にでもするとしよう」

熊会長が戦闘態勢に切り替わり、一人前に突出する。

黒八咫が空から舞い降りてキコユの前に着地すると、その背を撫でながら心の声を読んでいるようだ。

「豊豚魔が八体いるそうです。黒八咫ありがとう。会長さんを手伝ってあげてね」

「クワツカ」

漆黒の翼を羽ばたかせて飛び立っていく黒八咫。カラスって日本では苦手だったのだが、黒八咫は凜々しく絵になる。正直、格好いい。

俺たちが曲がり角を抜けると、既に戦闘が終わっていて豊豚魔の死体が転がっていた。

いつものようにキコユが死体処理をしている間に、部屋の隅に置いてある宝箱をヒュールミが調べている。

「鍵付きで、畏もあるみてえだな。まっ、簡単な畏だから問題ないがよ」

細い金属の棒を二本握り、数回動かしただけでカチャリと開錠された音がした。熊会長が苦戦していた鍵開けをあっさりと終わらすとは。

「畏も解除しておいたから、安心してくれ」

余裕の笑みを浮かべて振り返るヒュールミの頼もしさに思わず、姉御最高っす、とか言ったらきつと怒られるだろうな。

前回、姉御と呼んだ後、暫く機嫌悪かったから気を付けないと。ヒュールミはもっと可愛いのが良いつて言っていたから、俺の使える言葉でヒュールミが喜びそうな呼び名を考えてみるか。

俺の話せる言葉は「あいうおかくこさしすせにねのたちとまもらりよをんがござだでぼつゃゆ」だけ。更に一度に話せる文字数が五文字。

この文字を組み合わせて五文字以内で、ヒュールミを可愛く表現しなければならぬ。

となると、特徴的な部分を呼び名に含めると彼女もわかりやすいか。

んー、特徴的な箇所となると「たいらあ、うん、たぶんこれ言ったら壊される。」

あとは「あたまいい」これもわかり易いが可愛さが微塵もない。

意外と難しいな、可愛さと特徴を両立させる呼び名か。やっぱり姉御がびつたりな気がしてきた。

「外れかー」

ヒュールミの落ち込む声が聞こえたので、ネーミングについて考えるのは一旦止めよう。

宝箱の中から取り出されたのは、柄に凝った装飾のある短剣だった。

「質は良さそうだ。金貨一枚ぐらいで売れそうではあるが、今は無用か」

物は悪くないけど魔石ではなかったのか。まあ、いきなり大当たりとは都合よくいかないか。

それから、半日で三つも宝箱を見つけられたのは黒八咫のお手柄だった。空から宝箱のある場所を探り、最短距離で向かっているの
で手際よく事が運んでいる。

夜になり食後に本日の成果を確認しているのだが、小さな魔石が

「一つだけであとは武器と道具のようだ。」

「ふむ、直ぐに見つかるとは思っておらぬが、芳しくはないな」

「地図は結構埋まってるな。宝箱って一度取ったら次に復活するのに半年かかるって話だったか」

「情報によるとそつだ。およそ、半年で中身の詰まった宝箱が現れると言われている」

「そうになると、私たちが開けた宝箱は探索中には戻らないと考えていいですね」

「これって運が悪ければ全部調べても出ない可能性があるのか。他にもつといい方法があればいいけど。」

「一応、大きな魔石を確実に得る方法はあるが……正直、お勧めはできねえな」

「えっ、あるのか。でも、ヒュールミが腕を組んで唸っている姿を見ている限りでは、あまり期待はしない方がいいかもしれない。」

「するしないは別として、教えてもらっても良いか」

「ああ。この階層って階層主よりも厄介な敵がいるだろ」

「溶岩人魔か……」

「会長は直ぐに思い当たったようで、ヒュールミと同じく腕組みをして唸っている。」

「そう、あいつを倒すと巨大な魔石を落とすって話を聞いたことがある」

「ここ、十年、討伐された話を聞いたことがないが、何かしら高価な物を落とすのは確かなようだ。一獲千金を狙って毎年ハンターが挑み散っている」

「溶岩人魔とはどのような魔物なのでしょう？」

俺と同じく話についていけないキコユが、良いタイミングで疑問を口にしてくれた。

「身の丈はハツコンの三倍程か」

自動販売機の俺の身長から計算すると、五メートルちょいぐらいかな。

「体はその名の通り溶岩が集まり、人の様な形をしておる」

「厄介なのは火をまとっている訳じゃねえから、以前やった方法が使えねえってことだな」

それって階層主だった炎巨骨魔にやった、落とし穴に落としてドライアイスで火を消すって戦法のことか。確かに溶岩でできているなら効果はあまり期待できそうにない。

溶岩が海の中に入り込んでも暫く燃え続けていた映像を見たことがある。水を掛けたところで、まさに焼け石に水だろう。

ゲームとかだと氷の魔法をぶつけるとというのが定番中の定番だが、氷満載にして落とし穴に放り込んだとしても、一瞬で蒸発しそうだ。

「かなりの強敵ですね。でも、以前倒した人がいるのでしたら、その人たちはどうやって倒したのでしょうか」

小首を傾げる姿は可愛らしいが、口に出している言葉は大人びている。

「多分、強力な魔法で吹き飛ばすか、圧倒的な力で粉碎するかの二択じゃねえか」

「この戦力で倒すとなると、水か何かで表面を冷やして固め、そこに強烈な一撃を加えて粉碎するしかあるまい。その役目は担当しよう」

熊会長が危険な役割を買って出たが、そう簡単に冷やすことが可能なのだろうか。それに、表面は固めたとしても、攻撃をして溶岩が飛び散れば熊会長もただでは済まない。

「会長、これは最後の手段だぜ。今は宝箱を探す方が確実だ」

どうにもならない場合は、最終手段として俺がまた上空から押し潰すしかないか。結界で熱も遮断すれば溶かされることもないだろう。

ただ、ポイントの大量消費は覚悟しないと駄目か。巨大自動販売機にフォルムチェンジして結界が溶岩に触れるだけで消耗は激しくなる。

気になる点は、どうやって当てるか。やはり、前回と同じく落とし穴を使えばいくらか楽になるけど、溶岩人魔が何処に現れるかが問題になってきそうだ。

食の争い

迷路内での宝箱探しは順調で、あれから二日で更に五つもの宝箱を見つけた。中身は普通のハンターなら喜ぶ品もあったのだが、今の俺たちが求めている巨大な魔石は見つかっていない。

地図も六割以上が赤く染められ、残り四割に望みを託すしかないのか。

「会長、道幅の広い通路も手を出さないとダメっばい」

「ふむ、戦力が増したとはいえ、数で押し切られては危険か」

ヒュールミと熊会長が地図を睨みながら、あれやこれやと意見を交わしている。

このまま、じっくり迷路探索をして魔石が出るのを辛抱強く待つのが、一番リスクが低く確実性があるのはわかるが、あまり時間をかけたくはない。

これは全員が共通して思っていることだ。キコユたちは冥府の王との対話を求め、俺たちは仲間との合流と階層の正常化を何とかしたい。

せめて、離れ離れになった仲間たちの安否がわかれば、落ち着いて事を運べるのだが。

「後に回していた場所は罨が多く死亡率の高い場所だ。未だに全貌が明らかになっていないので、手を付けずにいたのだが」

「探索するにしても、時間がかかりそうだぜ。会長、どうするよ」

「無事に全て回れたとしても、魔石が見つからないかもしれないのですよね」

「ふむう」

熊会長が深く悩んでいる。慎重に進むとしたらどれぐらいの日数が必要なのだろうか。一週間程度じゃすまないよな、一ヶ月……下手したら数ヶ月も。

「これは、溶岩人魔を倒した方が確実やもしれぬ」

「溶岩人魔か。オレの知りうる情報は全て提供するが、間違いや補足は頼むぜ、会長」

「承った」

詳しい説明をヒュールミがしてくれるのか。聞き逃さないようにしないと。

おつ、黒八咫とボタンも俺の横に並んで話を聞くようだ。

「溶岩人魔の厄介なところは熱だ。あまりにも高温過ぎて、水をぶっかけても瞬時に蒸発するからな。それどころか、水が爆発して火が周囲に飛び散るそうだ」

前に動画サイトで溶岩にペットボトルの水を掛けて、炎が周辺に広がった映像を観たことがある。少しの水ならやらない方がマシだっつてことか。

「殴るにしても素手だと殴った方の手がやられる。メイスやハンマーといった鈍器で何とかするのが一番だ」

熊会長だと爪が溶けそうだな。

「ここには魔法を使える奴が一人もいねえ。だから、やるなら大量の水をぶっかけて身体の一部を冷やし固めることにより、熱を取り除き打撃が通じる状況を作り出すしかねえ」

「冷やすといつても、どうやってですか？」

キコユがすつと手を挙げてから質問を口にした。

魔法使いがないと断言されたら、疑問に思っただけだ。

「方法は幾つかあるが、担当はハツコンになる」

全員の視線が集まったので、小さい方の 氷自動販売機 にフォームチェンジして氷を出してみた。

コロコロと足下に転がってきた氷を掴んだキコユは、目を見開いて驚いている。

「これ、氷じゃないですかっ！ ハツコンさんは氷も作れるのですね」

「いらっしやませ」

仲間は最近、何に変化してもらリアクションが薄いので、こういった反応はとても心地いい。

本番では巨大氷自動販売機になって、一気に氷を浴びせてもいいな。短時間ならポイントの消耗も抑えられる。

「まあ、正直、一番楽で確実な方法は……ハツコンが一番デカイあ

れに化けてもらって、上から結果ごと押し潰す方法だけだな。結果なら熱も遮断できるんだろ？」

「うん」

やっぱり、その結論に達するか。ラツミスがいたら止められそうだけど、ヒュールミは俺の能力を把握した上で、大丈夫だと判断してくれたのか。

「ただ、そうなると足止めの方法だ。あの落とし穴の近くに溶岩人魔が現れりゃあ、いいけどよ。そんなに世の中は都合よくいってくれねえからな」

「では、黒八咫に溶岩人魔を探してもらいましょうか」

「おっ、頼めるか。手は出さなくていいから、場所だけでもわかれば、今後の作戦が立てやすい」

自由に空を飛べるというのは羨ましい限りだ。俺も空に浮かぶことは可能だし、移動もなんとかできるが、機動力は雲泥の差。

偵察は大人しく任せておこう。

「では、今日の探索はここまでとするか。野営の準備を始めるとしよう」

陽も落ちて辺りが暗くなってきたので、丁度いいタイミングだな。闇夜に飛ぶ黒八咫は闇と完全に同化しているので、敵に見つかることはないだろう。

ヒュールミが素朴な疑問として、夜に鳥が飛んでも大丈夫なのかとキコユに訊ねたことがあったのだが、「第三の目が夜の闇も見通

すそつです」との返答だった。

第三の目という響きに若干惹かれるのは、男子諸君ならわかつてくれると思う。

「今日はどつちが晩飯担当するんだ？」

ヒュールミが俺とキコユを交互に見て、口にした何気ない一言で空気が一変した。

そう、ここは戦場なのだ。自動販売機の品と畑の欠片から収穫される野菜はどちらの方が美味しいのか、それを競い合う場。

「昨日はハツコンさんが担当してくれましたので、今日は私が」

「いいから」

「だすよ」

「いえいえ、今日はゆっくりしてください。新鮮な野菜は美肌や病気の予防にもなりますので」

笑顔で拒否してきたか。

朝昼晩と交互に食事を提供してきたのだが、キコユとしては畑の欠片から採れる野菜の方が美味しいと思っているようで、食事担当をやりたがるのだ。

それは、自動販売機の食べ物に不満ではなく、畑の欠片から採れる野菜を食べてもらうことに喜びを感じているからだと思う。これも、畑に対する信頼の表れではないだろうか。

俺としても自動販売機の商品を売ることにプライドもある。それに、商品を喜んでもらえるのが何よりも嬉しい。

加えて、畑が俺と同じ境遇だと知り、負けたくないという対抗心まで生まれつつある。

「皆さんも、おいしいいい、野菜食べたいですよね」

くっ、先に熊会長とヒュールミに仕掛けたか。二人とも野菜の味を思い出したようで、満更ではない緩んだ表情になっている。

「おかしも」

「だすよ」

俺の言葉にヒュールミが過剰に反応した。実は彼女、甘い物に弱い。頭を使うと甘い物が欲しくなるらしく、密かに甘味が好物だったりする。

ただ、熊会長の反応は鈍い。ただのお菓子には興味ないと言わんばかりの態度だ。

ふっ、だがここは経験の差を見せつける。何度も購入してくれる常連の一人である熊会長の好みは完全に把握済み。

ここで俺は素早く 自販機コンビニへと姿を変える。

商品が並ぶ四段の内、下の二段は色彩豊かなスイーツコーナー。上の二段に並べる品はこれだ！

鮭おむすび、紅鮭おむすび、サーモンマヨ、寿司サーモン尽くし、焼き鮭の入った幕の内弁当。さあ、熊と言えば鮭。この怒涛の鮭尽くしに耐えられるかね！

「こ、これはっ！ ふ、ふむ。今日はハツコンの商品で良いのではないか」

「そ、そうだな。オレも異論はねえぜ」

熊会長は上の段、ヒュールミは下の段から目を逸らさずに素直な意見を言った。

「ずるいですよ、ハッコンさん！ 見たくて釣るなんて！」

「またのごりようをおまちしています」

「もうっ」

頬を膨らませて、ぷいっと横を向いている。

拗ねているように見えるが、目元が笑っているのを俺は見逃していない。

俺もそうだがキコユもやり取りを楽しんでいるようで、文句を言いながらも俺の用意したご飯に舌鼓を打っている。

でも、今日のやり口は大人げなかったな。お詫びにスイーツを一つ多く渡しておこう。

毎食、こういったバトルを繰り返しているので、キコユも急速に馴染んできている。新入りとして少し遠慮しているところがあったのだが、この調子ならもう大丈夫そうだ。

まあ、だからといって食事担当はそう簡単に譲らないが。食料が提供できなくなったら自動販売機としての価値が激減してしまうから。

女子供であろうがライバルに負けるわけにはいかない！

次の日の朝。

昨日は勝利の余韻に酔いしれて、珍しく睡眠を取ることにした。

深夜から早朝にかけての見張りを、キコユたちが担当してくれたので、気持ち良く眠り朝を迎えると、そこには 湯気を上げる鍋がどんと置かれていた。

「おはようございます、ハッコンさん。野菜たっぷりのスープが出来上がっていますので、朝ご飯は準備されなくて大丈夫ですよ」

してやられたっ！ 初めからこれが狙いで見張りを交代したのか。くっ、昼は絶対に譲らないぞ。

熱い決意を胸に秘めていると、寝ぼけ眼で荷台から降りてきたヒュールミが、眠気の取れない顔で鍋の前に座った。

「今日は野菜たっぷりのスープか。あれだな、どっちが担当でもオレは嬉しいけどよ。二人で分担したらどうだ。サラダとスープ、メインの料理とがつつり系とかよ」

不意に放たれた言葉を聞いて、キコユと目が合った……気がする。こっちの目はないが。

その日からお互いに一品ずつ担当することになった。

まあ、今度は食後に果物かスイーツかで、もめるようになったのだが。

溶岩人魔

黒八咫が朝の出発前に戻ってきた。

俺たちは既に食べ終わっていたが、黒八咫は朝ご飯がまだなのでキコユが与えた野菜を豪快に食べている。

全て食べきると羽繕いを始めた。何かを忘れていないだろうか、黒八咫は。

「溶岩人魔は見つかった？」

キコユに頭を撫でられて思い出したらしく、何度も頷いている。触れているだけで相手の声が聞こえる能力を発動しているのか、言葉にしなくても通じているようだ。

「見つかったそうです。溶岩人魔が」

「そうか、ご苦労だったな、黒八咫。場所を詳しく教えてもらえるか」

熊会長が地図を広げると、黒八咫が迷路の端を嘴で突いた。

北西部なのか。大通りから離れすぎているので、大通りまで引く張るのは難しそうだ。

「溶岩人魔は移動速度が遅く、動きも鈍重だ。それ故に、逃げるのは容易なのだが……誘き出すとなると厄介なことこの上ない」

「だな。通路が細すぎて、ハツコンが巨大化して落ちるスペースが
ありやしねえ。違う策を考慮すべきか」

地図を覗き見してわかったのは通路の幅が狭く、日本一の大きさを誇る自動販売機では、迷路の壁にぶつかり地面まで降りられないってことだ。

上から真つ逆さまに落ちて壁の上に乗っかるって、相当間抜けな図だな。

これで対溶岩人魔の必勝法が封じられたわけか。身体が溶岩なだけあって柔らかいらしく、圧倒的な質量で押し潰せば楽だったのだが、作戦の練り直しか。

あれ、この地図の場所は見覚えがあるな…… ああつ、そうか！俺が階層割れから落ちて、風船で何とか浮かんだ時に飛び込んだ映像だ。そこから、風に流されて大通り近くに降り立ったのか、なるほど。

「ハツコンの巨大な身体を配置できる空間は近くには皆無だな。さて、どうすつか」

「体の表面を冷やすだけなら、放水だけでも何とかなるのではないか」

「私が冷気をもっと上手に操ることが可能なら、お手伝いできるのですが……」

相手を冷やす方法か。氷、水、冷気だよな。

妥当な方法は大量の水か。 高圧洗浄機 になるよりは 温泉自動販売機 の方が放水量は多いか。筋力と素早さが上がっているので、かなりの勢いで温泉を出せる。

でも、水は冷えていた方がいいよな。溶岩が相手なので氷水でも気休め程度かもしれないが、やらないよりましだ。

溶岩人魔が歩いている通路の道幅は三メートル程度で、横向きに

しても巨大自動販売機は入りそうにない。今まで得た機能を使つて何とかならないだろうか。

迷路の壁は高さ十メートル以上。溶岩人魔は東へ進んでいるが、鈍足で亀の様な歩みらしい。通路は曲がりくねっているが分岐路のない一本道が続いている。

一つ、思いついたが上手くいく保証はない。とはいえ、試してみる価値はあると思う。

まずは、皆に伝えられるかだが……いざとなったらキコユに心の声を読んでもらえばいいか。

結局、準備に丸二日と少しかかったが、筋力や素早さを上げる前ならもつと日数が必要だった。それでも、かなり効率よくやれたと思う。

溶岩人魔はゆっくりと歩み続け、俺たちが待ち受けている場所へと徐々に近づいている。

真っ赤に溶解した体だというのに、溶岩が何とか人の体を保っている。歩く度に溶け落ちて減りそうなものだが、体積が縮むことはない。

目は黒い空洞で口も同じく黒い闇が見えるだけだ。

手の指も存在しているのだが、指先から溶岩がぼたぼたと垂れている。それが地面に触れる度に穴が幾つも穿たれていく。

あの曲がり角から顔を出したら作戦を執行する手筈になっている。しかし、空から見ると相手の動きが手に取るようにわかるな。これも黒八咫のおかげだ。

今、俺は黒八咫の三本足に掴まれたまま、空に浮いている。もちろん、ダンボール自動販売機 にフォームチェンジしてからだが。

頭上から羽ばたく音が流れてくるが、普通は鳥って蜂のように空中に静止　ホバリングはできないのに、僅かな揺れしか感じさせずに見事に静止している。

今日が無風だとはいえ、鳥ができることじゃないよな。どれだけ羽ばたく力が強いのか。本気で飛んだら凄まじい速度で飛行できそうだ。

溶岩人魔がいる場所は景色が歪んでいるな。熱で空気の屈折率が低くなって、どうやらこうやらという話を学生時代に聞いた気がする。陽炎の原因だったか。

ゆっくりと曲がり角から姿を現した溶岩人魔の動きが止まった。先に続いている筈の通路が行き止まりになっているからだろう。

通路の壁よりは幾分低いコンクリートの壁が、本来あり得ない場所にある。

それは　自動販売機設置据付用コンクリート石版　を並べて作られた壁だ。大きさの異なる何種類もの自動販売機を利用して、道幅ピッタリになるようコンクリート石版を並べて急遽作られた壁。

そして、その壁は　二枚ある。

溶岩人魔の前と更に奥にもう一枚。通路の前後をコンクリートの板で塞ぎ、そこに出ることも入ることも叶わない四方を壁で囲まれた空間を作り出した。

何故、そんなことをしたのか。それは壁の頂上近くまで満たされた、氷の浮かぶ水を見れば理解してもらえると思う。

さあ、思う存分、氷水浴びを楽しんでくれ！

溶岩人魔側のコンクリート石版を自分の意思で消した。

大量の水が解放され、激流となって溶岩人魔を呑み込んだ。

触れた途端、水蒸気が噴き上がり視界が白に染まる。少量の水ならそこで終わりだっただろうが、この水量を全て蒸発できるわけも

なく、氷水に溶岩人魔が沈む。

水面が泡立ち、後方へと流れる水の氷は全て溶けているが、溜め込んだ氷水はまだ流れ続けている。

キンキンに冷えた氷水をこれだけぶっかけたら、流石に冷えるだろう。

全ての水が流れ、全身を水に浸した溶岩人魔が片膝を突いた状態で、真黒な身体を晒している。表面の水は既に乾いているな。

あれだけ冷やしても表面が固まった程度に過ぎないのかもしれない。

だけど、今はそれで充分だ。

もう一枚の壁を形成していたコンクリート石版も消し去り、控えていたボタンが駆けだした。

当初は熊会長が突っ込む予定だったのだが、突進力はボタンの方が上だと判断して担当が入れ替わった。

全速力で駆けるボタンの背を目掛け、黒八咫が降下していく。

俺を掴んだまま風を切り裂き、ボタンの背へ降り立つと、予めボタンの背に装着されていた背負子に俺の体を固定する。

三本の足で器用にベルトを締め付けると、上に乗ったまま羽ばた

疾走するボタンの上に俺、更に上に黒八咫という動物サンドイッチ状態のまま、溶岩人魔へと突き進む。

溶岩人魔の急所は喉の少し下で、そこを貫けば倒せるかもというヒュールミの不確定な情報を元としている。今はそれを信じるしかない。

相手が膝を突いているが、このまま突っ込んでもその位置には届かない。だが、ボタンは数メートル手前で大きく跳躍した。

手足の短い猪の体格とは思えない見事なジャンプ力だが、手前過ぎて相手に到達する前に落ちそうだ。

しかし、そこで黒八咫が漆黒の羽を広げ、勢いを殺すことなく滑空する。

俺は ダンボール自動販売機 のまま 結界 を発動させた。自分から一メートル以上 結界 を広げることは不可能だが、ギリギリ二匹をカバーできた。

ボタンと黒八咫の体を青い壁が包み込むが、ボタンの角と黒八咫の羽は 結界 から飛び出ている。

黒八咫はぶつかる直前に羽を畳み、何とか青い壁の内側に収納できた。ボタンの角は鋼鉄よりも硬く熱にも強いそうなので、 結界 から突き出ているままだ。

「クカアアアッ！」

「ブフウウウウウ！」

おおっ、二匹が気合の鳴き声を発している。格好いいじゃないか。最速の勢いで突撃すると、 結界 から突き出された円錐状の鋭く尖った先端が、溶岩人魔の喉元へと突き刺さる。

やはり、固まっていたのは表面だけだったようで、角が挟り込む過程で灼熱の溶岩が周辺に飛び散っている。 結界 がこっちに飛んで来た溶岩を全て弾いているので被害はない。

そのまま、ボタンの角が溶岩人魔を貫き、俺たちは後方へと抜け出る。

背後では黒く変色した頭が地面に転がり、勝利を確信した。

黒八咫が羽ばたき、溶岩がない場所まで移動すると、ボタンと一緒に着地する。

「またのごりようをおまちしております」

決め台詞はいただいております。

動物たちとの見事なコンビネーションで倒せて良かったよ。キコ
コたちとここで会えたのは幸運だった。

溶岩人魔はあのまま冷えて固まるのだろうか、それとも消滅して
魔石だけ落としてくれるのか。前者だとあとで体を砕くのが少し面
倒だ。

後処理が面倒じゃないといいなと願いつつ、溶岩人魔の状態を確
認すると 首元から溶岩が膨れ上がっていく。

えっ！ 溶岩が溢れて丸く頭の形に……再生した！？

倒したと思っていた溶岩人魔の頭が見る見るうちに元に戻ってい
く。

首元が弱点じゃなかったのか。それも確かな情報じゃなかったの
だから、こつちが博打に負けただけの話。ここは一度撤退するべき
か。

判断に迷い動けずにいると、首から上を真つ赤に滾らせた溶岩人
魔が、膝に手を当てて立ち上がる寸前、唐突に天から降ってきた巨
大な氷が激突して 沈んだ。

な、なんだ！ この巨大な氷は一体どこから！

慌てふためいているところに、空から更に二つの巨大な氷の塊が
至近距離に落下する。

あつ、危なかった……飛び散った破片を 結界 が弾いているが、
下手したら俺たちに直撃していたぞ。

意味もわからず、降ってきた空を見上げると青空の一部に 穴
があるな。

穴？

更に、こつちに向かってくる小さな点が見えた。それが徐々に大
きくなるにつれ、姿がハッキリとしてくると体内の機械が軋み異音
を上げる。

手足を広げ落下してくる姿は見慣れた、見慣れ過ぎた人物と一致している。かなり距離はあるが俺には見分けがついてしまった。

何してんの、ラツミス!?

再会できて嬉しいと思う余裕もなく、迫りくる姿に焦りしかない。このままだと、地面に衝突して見るも無残な姿になるだけだ。ど、どうにかしないと!

風船を出しても、クッションの足しにもならない!

俺が浮いて捕まえるには時間がない!

ええと、あれだ、どれだっ!

混乱した頭で碌な考えが浮かばず、迫りくる彼女を見つめるしかできないでいた。

だが、次の光景を目撃した瞬間、驚きと安堵のあまり電源が落ちるかと思った。

彼女の背から何かが飛び出し、大きく膨らんだのだ。あれって、パラシュートなのか?

落下速度が一気に落ちて、ふわふわと揺れながら降りてくるラツミスが俺を見つけたようで、大きく手を振っている。

ふうふうふう。よくわからないけど、無事でよかったよ、本当に……。

「あのバカ、勝手にオレの発明品使いやがったな」

いつの間にか隣にやってきていたヒュールミが空を見上げながら、頭を抱えている。

発明品……あつ、前に話していた高いところから落ちても大丈夫って魔道具か。それを装着して空から落ちてきたのか。どうやって?

「ハツコオオオオオオン！」

叫びながら風に流されて、あらぬ方向へと落ちていきそうになったラツミスを感じて見えていた黒八咫は、俺を掴んだまま飛び立った。彼女の元まで運んでくれるのか。俺たちの会話で状況を瞬時に理解して判断したのか、本当に賢いな。それに比べ……笑顔で浮かんでいるラツミスには後で説教だつ。

天から降る娘

「ハツコン、無事だったんだね！ えっ、鳥さんに捕まっているよ！」

「こらこら、空中で暴れない。」

黒八咫に掴まれている俺を指差して、ラツミスが慌てふためいている。

「ともだち」

「クワツカー」

簡潔に伝える為に友達と言ったが、黒八咫もまんざらではなさそうだ。

「あ、そうなんだ。初めまして、ラツミスだよ！」

「クワツクワツ」

挨拶は大切だと思うが、空に浮かんだ状態ですることじゃないよな。

黒八咫は距離を調整して俺をラツミスに手渡すと、上へと昇っていく。パラシュートもどきを上から掴んで、運んでくれるようだ。助かるよ。

「ハツコンが無事でよかったー。うちはね、運よく清流の湖階層に戻れて」

「ら」

怒っているのが伝わるように大きめに音を調整する。

更にダンボール自動販売機には三つ缶が並んでいるのだが、全て温かいに変更しておいた。

「もしかして、ハッコン……怒ってる？」

「うんいかり」

「しんとぅ」

「ええええつ、違うのハッコン。うちはハッコンのことが心配で、転送陣も動かないから」

俺を心配して無謀な行動に至ったのは予想通りだよ。だからこそ怒っている。

下手したら死んでいたかもしれない無謀な行為で、無事に着地できたとしても迷路の中に降りたら、怪力があるうと無事で済むとは思えない。

無謀なことなら俺もするけど、それは他に方法が思いつかない切羽詰った状況でのことだ。

落ちてきた氷が当たりそうになったとかはどうでもいい。何よりもラッミスが命の危機に晒されたという事実が許せない。

「ええとね、階層割れを割ったら」

「言い訳ならオレたちにも聞かせてくれよ」

もう地面の近くまでできていたのか。

笑顔を浮かべながらこめかみをひくひくさせているヒュールミと、腕組みをしている熊会長がいる。

ラツミスに気を取られて溶岩人魔を放置していたのだが、足元に黒ずんだ岩の欠片が散らばっているな。爪痕があるので弱ったところを、熊会長が止めを刺したのだろうか。

「あ、あれ？　ここは、会えて嬉しいって流れじゃ」

着地したラツミスが片腕で俺を抱えたまま、もう片方の手で頭を掻いている。

「ラツミス。偶然にも階層割れから落ちてきた氷で溶岩人魔を弱らせた、それは感謝しよう。だが、何故、階層割れに跳び込むような真似をしたのだ。お主はハツコンが階層割れに落ちた時、どれ程心配したか忘れたとは言わせぬぞ」

熊会長に叱られて、自分が何をしたのかを理解したようで身を縮めている。

そうなのだ。再会でできて嬉しいし、偶然の産物だとしても最高のタイミングで氷を落としてくれた。それは本当にありがたかった、でも……あれ、何で氷が空から落ちたのかわからないな。

「まずは、あれから何があつて、どうして空から落ちてきたか教えてくれ。怒るのはそれを聞いてからだ」

「そうだよな。やむを得ない事情があつたのなら、怒るのはお門違いだ。俺も冷静にならないと」

ラツミスは横目でキコユたちを見ている。気になっているようだ。今はそれどころじゃないと自重しているのか。

キコユも空気を讀んで口を一切挟まないで、距離を置いて傍観者に徹してくれている。

「えつとね、うちは運よく清流の湖階層に移動できたの。あと、始まりの会長も一緒だったよ。それで、転送陣が全く動かなくなっていて、お爺ちゃんに何とかしてもらおうと思ったけど、調整に時間がかかるって言うから、うちなりに考えたの」

始まりの会長も清流の湖階層に移動できたのか。これは朗報だな。となると、まだ消息が不明なのは、ミシユエル、シユイ、ヘブイの三名か。

ミシユエルとヘブイはどんな境遇でも生き延びれそうだが、シユイが心配だな。遠距離攻撃がメインという点と……食糧事情が。

「お爺ちゃんが言うには、あと一週間もあれば上下の階層には繋がられるやもしれん。ってことらしいけど、うちは何もできない自分が嫌だったから何とかしようと思って」

そこで口を噤むと、ちらちらとヒユールミを見ている。

「ラツミス、続きはどうしたあ」

「えつとね、怒らないで聞いてね。会長が階層割れは衝撃を与えたら、また割れるかもしれないって話していたのを思い出して、階層割れを見に行ったら池になったの。だから、どうにかして階層割れを割れないかと思って、ヒユールミの魔道具が入っている箱を漁っていたら」

あ、ヒユールミの双眸が怪しい光を放っている。今までに見たこともない表情を……俺は聞き役に徹しよう。

「ほら、前に説明してくれた高いところから落ちても大丈夫な背負

い袋と、水を凍らせる魔道具が一杯あったから、どれぐらいで凍るかわからなかったから、全部池に放り込んでしまった。てへっ」

頭を軽く小突いて舌を出して、可愛さアピールをしているようだが、ヒュールミの目が糸のように細くなっただけだった。

「あの、冷気を閉じ込めた魔道具……製作費……幾らだと思っ？」

無表情なまま側頭部を肩に乗つけてヒュールミが首を傾げている姿。昔、ホラー映画で似たようなシーンを見た覚えがある。

「えっえっとお、銀貨十枚ぐらいかなあ」

「おっしいー、金貨十枚だ」

前半は明るく後半は凄味のある声でヒュールミが答えた。

「支払いは出世払いで、お願いしますっ！」

腰を九十度以上曲げる見事な姿勢だ。自分の非を体で表現している。

「はあ、まあ、それはいいや。で、続きを話してくれ」

「うん、それでね。凍った池を全力で殴ったら階層がまた割れちゃって、真っ逆さまに落ちて……こうなりました」

「はあー」

熊会長とヒュールミが同時にため息を吐いた気持ちだが、痛いほど

よくわかる。あまりにも無謀すぎる行動だ。

「ラツミス、迷路階層にオレたちがいなかったら、どうする気だったんだ」

「そうだ、何か確信があつての行動なら、まだ理解はできる。」

「えっとね、何となくいる気がしたの……」

まさかの勘だった。

「それに、魔道具が正常に動かなかつたら、どうするつもりだったんだ」

「えっ、ヒュールミを信じてるもん」

「うっ」

迷いなく言い切ったラツミスの信頼する言葉に、ヒュールミは思わず頬を染めて動揺している。

「小言はここまでにするでしょう。ラツミスよ、皆、お主が心配だからこそ、怒っていることだけは理解してほしい」

「うん、みんな、心配かけてごめんね」

「おう、また会えて嬉しいぜ、ラツミス」

「うん うん」

「無事で何よりだ、ラツミス」

落ち込んでいた表情が一変して破顔すると、眩しいばかりの笑顔を見せて大きく口を開いた。

「ただいま、みんな！」

「そうなんだ、キコユちゃんは畑さんに会いたいんだね。うんうん、わかるよ」

「わかってくださいますか。とても大切な方なのです」

説教も終わり、落ち着いて食事を取ることになったのだが、ラツミスとキコユは気が合ったようで食事中も食後もずっと話しこんでいる。

女子の会話に男が加わっても碌なことにならないので、熊会長と黒八咫とボタンと一緒に壁際にまとまって寛ぐことにした。

「ああいう、会話って苦手なんだよなあ」

何故、女子がこちらのグループにいるのだろうか、ヒュールミ。話の大半は聞こえてこないが時折「恋愛」やら「好き」とか近寄りがたい単語が響いてくるので、ヒュールミには似合わない会話だというのは予想がつく。

男勝りでさっぱりしている性格なので、ヒュールミがあのか話に和気藹々と自然に混ざるのは無理がある。というか、想像できない。

「こつちは実用的な話なんだが、溶岩人魔から出た魔石は転送陣の起動に使えるそうだが。あれだけ魔力がありゃ、お釣りがくるくらいだ」

「これで転送陣を使えるようになる。清流の湖階層にようやく戻れるか」

熊会長は清流の湖階層を取り仕切っているのに、最近は何かと階層を離れることが多かったからな。そろそろ、腰を据えて集落の復興に力を入れたいのだろう。

夜空を見上げているように見えるが、その目は空の先にある清流の湖階層を見据えているように思えたのは、気のせいだろうか。

「今度は転送陣も念入りに調べるから安心してくれ」

「ああ、期待している」

前回の失敗が魔道具技師として、かなり堪えたようで、二度と失敗をしないという意気込みが見て取れる。転送陣の事はヒュールミに任せておけば問題はない。

元の階層に戻る事ができれば、お爺さんとヒュールミが協力して取り組めるので、転送陣の問題も早めに目途がつきそうだ。

そうなると、どこの階層に移動すればいいのかって話になるよな。はぐれてしまった三人を探し出さないといけないし、各階層の問題も残ったままだ。

やるべことは、まだまだあるが、この階層に飛ばされて良かったこともある。

キコユたちに会えたことが何よりの収穫だが、畑に転生されたという同じような境遇の日本人がいることは、俺にとって大きな心の支えになってくれた。

いつか彼に会うことが、異世界での目標の一つだ。その日を夢見ながら、夜が明けるのを待つことにしよう。

転送陣

目的は達したので集落を目指して戻っている最中なのだが、俺は荷台ではなくラツミスに運ばれている。

荷台で揺られるのも悪くなかったのだが、やはり定位置は彼女の背中だな。

女の子に背負われて落ち着くというのも妙な話だが、例えるなら三日ほど旅行に出かけていて家に帰った時の感覚に近いかもしれない。安心感が半端ないのだ。

ラツミスが加わったことで大量の敵が現れても捌けるだろうと、大通りを真っ直ぐ進んでいるのだが、昨日までと比べて敵が少ない。それどころか、遭遇した敵も戦闘意欲が薄いというか、昨日までの死に物狂い感が消え失せていた。特に豊豚魔は仲間があっさりやられると、慌てて逃げるようになった。

前までは動けなくなるまで恐怖を感じることなく襲い掛かってきていたというのに。

この変化に気づいたのは俺だけではなく、全員での話し合いの結果、ある結論に達した。

「あれだな、指揮官、あの水に巻き込まれて死んだんじゃないか」

荷台に足を投げ出して、縁に頭を置いて寛いでいるヒュールミが、苦笑いを浮かべながら放った一言に全員が顔を見合わせている。

指揮官の存在はキコユたちにも教えていたので、納得しているようだ。

「あの激流に呑み込まれたら人間も魔物も一網打尽だろ。あの溶岩

人魔を後方から操って、入り口の結界をどうにかしようとしていたのかも、しんねえな」

そうか。溶岩魔人から距離を置いて後をつけていたのなら、水流の直撃を喰らったことになる。死んでいてもおかしくない。

この階層の指揮官は一度も出会うことなく退場したのか。敵ながら哀れな。

「では、この階層での問題は解決したと考えて良いのでしょうか」

「たぶんな。確証はないが、これ以上調べようがないからな」

荷台の縁に両手を置いて会話に参加してきたキココに、ヒュールミが頭を掻きながら答えている。

あの後、水の流れた先を調べに行ったのだが、先が分岐路になっていて更に複雑な道が連なっていたので、諦めて帰ってきた。

もし、激流に巻き込まれていたら、助かる確率は殆どないだろう。

「まあ、別の場所にいたとしても迷路の結界は解けないだろうからな」

「ダンジョンが安定するまで、この階層の住民は全て清流の湖階層へ、一時的にだが避難してもらおうことにしておる」

殿を担当していた熊会長が歩調を速めて追いついてきている。

この階層って人が訪れないのなら、手放しても問題がないだろうから懸命な判断かもしれない。

「んじゃまあ、清流の階層に戻るだけか」

「書類が山のように溜まっておるのだらうな……」

やっと戻れるという安堵と待ち構えているであろう仕事量を比べ、熊会長の顔が何とも言えない表情になっている。

そんな熊会長に癒しのハチミツレモンジュースを渡そうかと思っ
ていると、俺の側面に触れる小さな手があつた。

「ハツコンさん、大きなお世話かもしれませんが、ラツミスさんと話をしたいなら通訳しますよ？」

キコユが荷台から身を乗り出して、俺に触れながらそんなことを口にした。

心の声を読めるキコユを間に挟めば、不自由なくラツミスと会話ができる。それは魅力的で即座に「うん」と答えたかった。だけど、俺はその言葉を呑み込んだ。

ちんけなプライドだけど、俺は自分の力で彼女と会話がしたい。

もっと言葉を流暢に操れるようになるか 念話 を覚えるのが先かはわからないが、自分の力で彼女との会話を成立させたい、という願望がある。

それにキコユに頼むのは、もう一つ問題があるからな。プライベートな会話内容も全て聞かれてしまうということだ。

いつか、ラツミスと二人っきりで思う存分、気が済むまで話をしたいという夢があるから、今は辛抱をしなくてはならない。

「いい」

「そうですね。差し出がましいことを言って申し訳ありません」

「ううん ありがとう」

キコユは純粹な親切心で言ってくれただけ。だから、感謝をしても非難をすることはない。

必ず、いつの日かもっと話せるようになるから、それまで待っていてくれ、ラツミス。

「ん？ ハツコン何か言った？」

「ううん」

今はもどかしくて返せる言葉も少ないけど、いつか、声が枯れるぐらい話をしような。

「転送陣の魔力充填よーし！ 不具合なーし！ 魔力の流れ正常！」

ヒュールミが指差し確認をしながら、転送陣の周りをぐるぐる回っている。

前回、転送陣の細工を見抜けなかったのが悔しかったようで、念には念を入れて何度も確認をしている。ここまで慎重な彼女を見るのは初めてかもしれない。

「では、先に一人で試させてもらおう。住民の安全を確認するのは会長としての責務だからな」

転送陣の真ん中に進み出た熊会長が、口元に笑みを浮かべた。

「今度こそ大丈夫だと自信はあるが、そうだな、誰かに試してもらうべきか。会長失敗したら、すまん」

「信頼しておるよ。それに、ここで失敗するなら、先に乗った意味があるというもの。後悔はせん」

熊会長は人の上に立つ者として尊敬に値する。今後の清流の湖階層のことを思うなら、後方に控えて指揮を執ることだけを考えるのが正解かも知れない。

でも、それでも人々の為に自ら率先して危機に立ち向かうのは立派だと思う。

市長や議員なんて綺麗ごとを口にする人は山ほどいるが、実際に自らを危険に晒して人々の安全を守るうという人がどれだけいるのか。

ヒュールミが転送陣の端に触れ、何やら呟いている。起動させるキーワードのようなものらしい。

転送陣から青い光が溢れ出し、熊会長の体が光の中へと消えていく。

前回は赤い異なる光が出ていたが、今回は正常な光の色だ。

天井まで到達した光が消滅すると、そこに熊会長の姿はなかった。

「魔力の流れも正常。あっちの転送陣との繋がりも……感じられる。うっし、成功だ！」

拳を握り締めて喜んでいるヒュールミ。

強気の発言をしていたが、不安はあったようだ。

「んじゃ、順番に飛んでもらうか。次はあんたらからでいいぜ」

迷路階層の住人が五人ずつ転送陣で運ばれ、次にキコユたちが飛んでいった。彼女たちは一旦、清流の湖階層に移動して、今後どうするか決めるそうだ。

俺たちに力を貸してくれると助かるが、キコユたちには目的があるので無理強いはいできない。

「よっし、残るはオレたちだけだ。一緒に行くぜ」

ヒュールミも転送陣に入り、俺もラツミスに背負われたまま中に進む。

久しぶりに清流の湖階層に戻れるのか。離れてから一ヶ月近いかな。正確な日数を数えていなかったから曖昧だが、夏の盛りは過ぎていくよな。

俺たちがいない間に何かあったとしても、あそこには老夫婦も門番ズもいる。今は始まりの会長も滞在しているから指揮系統の心配も不要だ。安心して戻れるというのはありがたい。

「発動するぞー」

「いいよー」

「いらっしゃいませ」

俺とラツミスが元気よく返事をする。

向こうに着いたら、常連に飲食料品を売り捌かないと。

カリオスもゴルスもきつと待ちかねている。新たな 自販機コンビニの商品を見せつけて驚かせてやるか。

始まりの階層から移動してきた住民のその後の生活も気になっている。特に孤児院の子供たちは元気にやっているだろうか。

また、甘い物や好きな食べ物を出してあげないとな。

やるべきことを頭で整理している間に転送陣が起動して、足元から 赤い光が滲み出てきた。

……えっ、何で赤い光がつ!?

「どづいつことだ！ 転送陣におかしなところは何もなかっただろっ！」

異変に気づいたヒュールミが転送陣を睨みつけ、頭を振り乱し叫んでいる。

「転送陣から出ないとっ！」

「駄目だ！ 起動してから転送陣から離れると下手したら、身体の一部だけが飛ばされることになる！」

腕や半身だけ転移とかしたら大ごとだぞ！

どうすればいい。もう数秒で転移が始まる。何かできることはないのか……。

「嫌だっ！ もう、ハツコンと離れたくない」

背負っていた俺を下ろすと、正面からラツミスが抱き付いてきた。俺だつてラツミスと離れ離れになりたくはない。でも、この状況だと前回の二の舞だ。全員が何処に飛ばされるかわからない。

せめて、全員同じ階層に飛ばされるなら、マシだが。全員が一緒に……一緒！？

「こっちに」

気落ちして今にも膝を突きそうなヒュールミに向かって、最大音量で呼びかける。

虚ろな瞳が俺を捉え、反射的に反応して俺の元に走ってきた。

そして、ラツミスと同様に俺にしがみ付いている。

一か八かの賭けだが、分の悪い勝負ではない筈だ。俺は二人を包み込むように 結界 を発動させた。

これなら、二人も含めた状態で転移できるのではないか。

階層へのランダム転移はもう諦めるしかないが、せめて二人と一緒に同じ階層へ。

赤く禍々しい光が視界を埋め尽くすと、ラツミスとヒュールミが目を閉じて俺の体を強く抱きしめている。

頼む、全員が同じ場所へと転移してくれ！

闇の森林階層

赤の光が消えると、そこは薄暗く殺風景な室内だった。

壁際に魔道具の灯りが幾つか設置されている。壁は木製の丸太を繋ぎ合わせただけのようだ。今まで見たことのない転送陣の部屋だな。

ということとは、俺が一度も来たことのない階層ということか。別の階層に飛ばされたはしたが、ラツミスもヒュールミも一緒だ。結界を発動させたのは間違いなかった。一先ずは安心だが。

「ラツミス、ハツコン。そうか、全員一緒なんだな……だけど、何故だっ！」

地面の魔法陣は仄かに赤い光を宿している。

俺から離れて跪いて地面を調べているヒュールミが拳を叩きつけて、歯を食いしばっている。自信があっただけに、今回の誤作動は許せないのか。

「どういうことだっ！ 転送陣に問題はなかった。俺たち以外は清流の湖階層に飛べた筈。いったい、何がっ！」

「ヒュールミ。勘違いかもしれないけど、転送陣が動き出した時、ハツコンの頭から赤い光が出てたような……」

ラツミスがさつきからずっと俺の頭頂部を見つめているのは、その為か。

勢いよく立ち上がったヒュールミが俺に飛び付くと、強引に体をよじ登り頭の上に乗った。

「これは……そういうことか。転送陣ではなく、ハツコンに誤操作を起こす魔法を仕込んだのか」

頭の上で正座して納得しているのは別に構わないけど、詳しい説明が欲しいのですが。

「ヒュールミどういうこと？」

「ああ、すまねえ。ハツコンの頭に魔法陣が貼りつけていやがる。日頃は全く見えないが、転送陣に反応して発動する仕組みらしい。取り敢えず、解除しておくぜ」

ヒュールミが指を滑らせて何やらしているので、そっちは任せておこう。

しかし、転送陣の誤作動の原因がまさか俺だったとは。でも、いつ頭に魔法陣なんて仕込まれたんだ。寝ている間か？ でも、ケリオイル団長が裏切ることを決めたのは、あの数日だろうし、その時に俺は一度でも眠っただろうか。

「これはおそらく、魔法陣を仕込んだ特殊な紙か魔道具を使用したんだろうな。冥府の王ぐらい膨大な魔力を保有していたら、触れるだけで魔法陣を貼り付けられるだろうぜ」

触れるだけでか。でも、頭頂部を誰からに触られた記憶はあるな。あ

団長たちを取り逃した時、結界を破壊されて頭を触られた。あの時か……完璧にしてやられた。敵に回すと厄介な人だな、本当に。

「まあ、今度こそ転送陣の誤操作はなくなる。これからは安心して使えるが、その魔法陣の厄介な点がもう一つあってな。発動後に転移した場所の魔力を喰う作用もある。その魔力を利用して次の転移を邪魔するって寸法だ。迷路階層の転送陣もそれで動かなくなったみてえだな」

だから、魔石を使わないと動かなくなっていたのか。じゃあ、今回も転送陣は動かないのだろうか。

「今回は直ぐに魔法陣を消したから、転送陣の魔力はそれ程、食われてねえけど、それでも数日は魔力が充填されるまで待つべきだろうな」

「じゃあ、丁度いいね。どっちにしろ、階層のいざこざを解決しないといけないし」

暗い空気を吹き飛ばすように手を打ち鳴らし、ラツミスがいつもの笑顔を向けている。

そうだな。やるべきことがあるのだから、気持ちを切り替えないと。

「だな。まずは、ここがどの階層なのか調べてみるか」

ラツミスが俺を背負い、ヒュールミと一緒に扉に近づく。扉も木製のようだが、自然豊富な階層なのだろうか。

ヒュールミがノブを掴み、ゆっくりと開いていく。

隙間から見える光景は、まず丸太の杭が並んで打ち付けられた壁。その先には鬱蒼と木々が茂る森。それも、陽が殆ど通らないのか森全体が暗く、闇に沈んでいるかのようだ。

「ここは第七階層だな」

「ええと、闇の森林階層だっけ」

「そつだ。植物系の魔物が多く生息する、結構ヤバいところらしい」

一概には言えないそつだが、下の階層であればある程、危険度が増すらしく清流の湖階層が第四だったことと比べると、かなり危険な地帯だということだ。

「見える範囲の壁は健在で、破壊されていないようだ。集落も壊滅していないのか」

「これ以上はここから見ていただけじゃわからないよ。行ってみたいな」

「それもそつだな。ハツコン、ちゃんと守ってくれよ」

「まかせて」

そつと扉を開けて二人が並んで進み出る。

壁の内側には丸太小屋や木製の建造物が建ち並んでいるのだが、見渡せる範囲に人がいない。

ただ、集落内だというのに結構な数の木が生えていて、道の真ん中や家の玄関前にもあるな。正直、邪魔以外の何物でもないと思う。

「木の配置が不自然過ぎるぞ。道のど真ん中に木を植える馬鹿はいねえだろ」

「うん、邪魔だよな。それに、少し大きな木と小さな木が並んで生

えているのも多いし」

集落内に生えている木は殆どが俺より低く、形も普通の木とは異なり妙な形をしている。根元の幹が二つに割れていたり、太い枝が二本生えていて、まるで。

「この木、人間みたいに……見えない？」

ラツミスの呟きに俺もヒュルミも返事ができないでいた。

同じことを思っていたからだ。並んで生えている木も、親子が手を繋いで逃げているように見えなくもない。

「この階層には人間を木にする魔物がいるって聞いたことがあるぜ。抵抗力の強い大人やハンターは少し体が痺れる程度で殆ど影響を受けないようだが、女子供や老人はヤバいとか何とか」

だから、低い木ばかりなのか。そう思ってみると、どれも人間のようにしか見えなくなってきた。木の表皮の皺や窪みが恐怖に歪む人の顔に見えてしまい、直視するのが辛い。

静まり返った集落に人の形に見える木。本来なら、その不気味さに怯える場面なのかもしれないが、ラツミスに背負われて、上にヒュルミが乗っているので怖さは殆ど感じない。

そういえば、魔物の手によって木に変えられたと仮定しても、大人の男やハンターたちはどうなったんだ。

ヒュルミの情報が確かなら、木になっていないということになる。

「生き残りを探すか。ラツミスもハツコンも油断しないでくれよ」

ラツミスが静かに頷き、慎重に集落内を進んでいく。

木が点在しているが、建物の損傷は少ない。全く争いがなかったわけではないだろうが、建物には軽度の傷があるだけで、瓦礫と化している建物は未だに一件もない。

大通りらしき場所に出ると、遠くから争うような音が響いてきた。人の声と木と木を打ち鳴らすような、甲高い良く響く音が聞こえる。

「誰かいるみたい！ 本気で走るから、ヒュールミ、ハッコンに掴まって！」

「お、おう！」

前は俺とヒュールミを繋ぐ改良版背負子があったのだが、今はそれが無いのでヒュールミはどうするのかと思えば、俺によじ登った。そして、頭の上につつ伏せになってしがみ付いている。

これがラツミスなら巨大な胸が押し付けられて、感触はなくても見るだけで眼福なのだが、ヒュールミは胸部が潰れているか判断もできない。

「今、失礼なことを考えなかったか、ハッコン」

「ごうかをとうにゆうしてください」

動揺して変な返しをしてしまった。至近距離から半眼で睨まれているが、そっちは見ないようしておこう。

ラツミスの本気走りにヒュールミは振り落とされないように必死でしがみ付いている。土煙を上げて疾走するラツミスが大通りを駆け抜け、曲がった先には門があった。

門が少し開いていてそこから魔物が侵入してきている。

木の根を足のように動かして歩く巨木や、ニンジンに手足を付け

たような動く野菜。巨大な花から蔓が触手のように伸びている植物までいるな。

そして、そんな植物たちと戦っているのが、この階層のハンターや住民のようだ。

数は三十程度か。殆どが斧を手に戦っている。木が相手だと斧が有効なのだろう。

小さなニンジンもどきは素早い動きでハンターたちを翻弄しつつ、身体から汁を飛ばして目潰しを狙っているようだ。

斧は素早い相手には不利なので手をこまねいていたのだが、何処から飛来した矢がニンジンもどきを地面へと張り付けていく。

「参人魔は任せるっす！」

良く響く可愛らしくも高い声と特徴的な語尾。姿を見なくても誰か直ぐにわかった。

声の聞こえた方に視線を移すと、家の屋根の上から弓を構えているシューイがいた。今も次々と矢を放ち、ニンジンもどき 参人魔を矢で貫いている。

「悪花魔には近寄らないようにしてください。臭いを嗅ぐと幻覚を見せられますので！」

棘のついた鉄球を叩きつけて、ハンターたちに注意を促している男にも見覚えがある。

凜々しい表情でまともなことを口にしていたから、一瞬わからなかったが。

「靴に植物の汁が付いた方は後で、渡してください。体に害を与える成分が含まれているおそれがありますので」

口元が若干緩んでなかったら完璧だったな、へび。こんな時でも、靴にこだわるのは流石と褒めるべきなのだろうか。何にせよ、二人が無事でよかったよ。

「うちも加勢するよ！」

「オレは降りるぜ」

ヒュールミが慌てて飛び降りると、ラツミスが突っ込んでいき動く巨木を拳で粉碎した。

「おや、ラツミスさんではありませんか。助力感謝いたします」

「あつ、やつほーラツミス！ それと、ハッコオオオオオオン！ 待ってた、待ってたよおおおおおっ！」

冷静に返すへびと屋根の上で絶叫を上げるシュイ。あの歓迎は俺の商品が目当てだよな、どう見ても。目が爛々と輝き口元から涎が零れている。後で腹いっぱい食べさせてあげるから、今は戦闘に集中して。

「説明は後にするね。まずは、この敵、ぶっ飛ばしていいんだよね」

「はい。あの巨木、老木魔を担当していただけると助かります。皆さん、こちらの魔道具を背負った女性は我々の仲間です」

「おお、そうか！ 助かるぜ」

「あれが、シュイが散々言っていたハッコンって魔道具か！」

俺のことはこの階層のハンターたちにも知れ渡っているようだ。じゃあ、さっさと敵を片付けて自動販売機としての役割を果たさない。

ラツミスが戦闘に加わったことで、動きが遅いが頑丈な巨木があつさり粉砕されていき、戦況がハンター側へと一気に傾いた。

門の内側に侵入していた魔物を全て追い払うと、蔦が巻き付いて動かせなくなっていた門をラツミスの加勢で一気に押し込み、集落の門が閉じる。

生き残りのハンターたちが歓声を上げ、疲れ切った表情で地面に座り込んでいるのだが、その間を素早く駆け抜け、迫りくる一人のハンターがいた。

さてと、俺ごと齧られる前に飲食物を準備しますか。

木製の集落

「ハツコオオオオオオン！ 食べ物、食べ物！」

シユイが俺に飛び付いてから、ずっと食べ物を連呼していて怖い。既にから揚げを幾つか温め終えていたので、シユイの元へ運んでおく。

「はふっ、もじゃ、はうっうっ、うまあああいつす！」

食べながら叫ぶから肉の破片がそこら中に飛び散っているぞ。ほら、コーラも渡しておくから、喉に詰まったらちゃんと飲むんだよ。

「助かりました。話を聞く前に、皆さんにも食料の提供をお願いします。でもいいですか」

「いらっしゃいませ」

美味しそうに食べるシユイを羨ましそうに凝視していたハンターたちにも、食料品を渡して。念動力で物を浮かしているのが驚いていたが、ヘブイが説明するとあっさりと納得して受け取ってくれた。

自動販売機から食べ物が出ることや念動力についても、魔法や加護が当たり前に存在する世界だと、こういった不可思議なことへの理解が早くて助かる。

「くはああっ、久々の肉だぜ。たまんねえな」

「野菜はもう嫌だ……」

「脂身最高！」

ハンターたちは野菜ばかりを食べて過ごしていたそうで、俺が提供する肉類の食べ物に歓喜の声を上げている。栄養バランスを無視してこつてり系でいくのが正解のようだ。

から揚げや焼き肉弁当とかがいいだろうか。

「ところで、ヘブイ。ミシュエルはいないのか」

そうだった、ここにミシュエルがいたら転送陣で飛ばされた全員の所在が判明したことになるが。

「いえ、ここに飛ばされたのは私とシュイだけですよ」

「はうん、はん、ひょうふひゃひゃよ」

シュイは食事に集中していいから。

ミシュエルはいないのか。元々、一人でダンジョンを探索していたさうだから、単独行動はお手の者だろう。実力だつて俺の知りうる限りだがトップランクだ、一人でも安心できる。

むしろ、接点の少ない相手と一緒に飛ばされていた方が精神的な負担が大きいよな。ミシュエルなら何処に飛ばされていたとしても、おそらく大丈夫だろう。

「ここは自然が豊かで畑も多く、野菜だけはあつたのですが、肉類が乏しくてこの有様です」

そりゃ、肉に飛び付いて貪り食う訳だ。シュイなんてから揚げを

手にしてから口に運ぶまでが早すぎて、残像が見えている。

「野菜だとお腹が膨れないらしく、畑の土まで食べそうな勢いだったので、感覚操作でシユイの満腹感を操って誤魔化していました」

感覚操作の意外な使い道だな。

野菜ばかりとはいえ、食料がなかったわけじゃないから比較的元気なのか。

「集落内にあつた木ってやっぱ、元人間なのか」

「お気づきになりましたか。その通りです。門が一度解放されて大量の魔物が流れ込んだことがありまして、その際に階層主の花粉を吸い込んだ老人や女性、子供たちが木になってしまったのです」

「でも、魔物が集落内で暴れたのに家とか壊れていないよ？」

そうだよな。ラツミスの疑問はもつともだ。魔物が集落内に雪崩れ込んだにしては、瓦礫は見当たらないし、建物も無事だ。

「その事ですか。この階層の建物は全て木製ですよ。この階層の魔物は植物を傷つけることを極端に嫌います。それが切り倒された木だとしても、それがわかってるので壁も含めて、この階層は全て木製なのですよ」

「そうなんだ。でも、それって……家を建てる時に木を切り倒したら、もの凄く怒りそうだよな」

「そうですね。ここでは木を一本だけ切り倒すのも一苦労らしいで

すよ」

支配されている魔物でも本能には逆らえないのか。むしろ、支配されているからこそ、本能が強調されているのかもしれないな。

「でもよ、階層主が現れてよく生き延びられたな。ヘブイたちが倒したのか」

「いえいえ。植物は火が苦手だと相場が決まっていますので、全員で松明を手にして何とか追い払いました。火をつけてしまうと集落が火の海になりかねないので、脅しでしか使えませんが」

植物は火が苦手だと相場が決まっているが、木製の建物が多い集落内だと火事の危険性があるのか。

森に火を放つたら魔物を一網打尽にできそうだが、集落も全焼間違いないだろうな。

「確か、この間の森林階層は時折、強風が吹き荒れるって話だったよな。火は厳禁でこの階層で火の加護や魔法は禁止だったか」

「その通りです。火を使えば容易く倒せるのですが、諸刃の剣ですからね。特にこの階層の木々は燃えやすい性質なので」

弱点がわかっているのに使えないのは酷な話だ。住民を全員、清流の階層に避難させて火を放つという最終手段も考えたが、そうになると木になった住民をどうするかだよな。

「もとにもと」

「らねいの」

「もとにもとらねい？」

「木になった住民は元に戻らないのって、言ったんだよね、ハッコ
ン」

「うん」

通訳ありがとう、ラツミス。

まるで熟年夫婦のような以心伝心。父と母が「あれをあれしたか」「あれですよ。はいはい」「みたいな会話をしている、何故、話が通じるのか不思議でたまらなかったが、今になって理解できた。

「階層主を倒せば元に戻るそうですよ。この状態だと食事も不要だそうです」

光合成と根から水分と栄養を吸い上げているのだろう。魔物たちは植物に手を出さないそうだから、木になっている今はある意味安全なのか。

となると、ますます火は使えないな。まずは階層主を討伐か。指揮官も探さないと本当の解決にはならないので、同時進行でやらなければならぬ。

除草剤を散布すれば植物系の魔物は一網打尽にできそうだが、自動販売機で除草剤や農薬は売っていない。毒薬なので商品として置けないのだ。

塩水を大量に流し込めば草木は枯れるだろうが気の長い話だ。それに倒せたとしても土壌が死んでしまう。ダンジョンなので土壌が高速で回復しそうな気もするが、確証がないので試すわけにもいかない。

「でも、この森の中でどうやって階層主を探したらいいんだろう」

背の高い木々が生い茂る森で階層主を見つけるのは、厄介どころの話じゃないな。

「あー、見つけるだけなら容易です。ここの階層主はかなりの巨木ですので……あれですね」

へブイが指差す方向には、森から頭頂部が突き抜けている巨木の枝葉が見えた。

距離感がおかしくなりそうな大きさだ。かなりの距離があるというのにハッキリとその姿を捉えられる。どれだけの高さなのか見当もつかない。高層ビルぐらいありそうだけど。

幹も太く森の木々を圧倒する大きさなので、どこにいるか一目でわかる。

「でも、あんな巨体で動いたら森の木々が倒されるだろ」

「それが、階層主の能力なのでしょうね……あれが動くとき普通の木々も道を開けるのですよ。すーっと横に移動して、草木が一本も生えない道ができて、そこを歩くというか進んできます」

草木が自ら道を譲るのか。不謹慎だが、その光景を見てみたい。

そんなことができるなら、階層主は巨大な木で植物を操る力があるということだよな。

森の中で植物を操れる階層主か、これは一筋縄ではいかない相手っぼい。

「今日は皆さんこの調子なので、今後の話は明日にでも」

野菜以外の食事を腹いっぱい食べたハンターたちが寛ぎ始めてい

る。久しぶりの肉に胃袋の限界を超えてしまったようで、横たわったまま寝息が聞こえてくる者までいた。

居場所が不明なのはミシュエルだけだし、そこまで慌てる必要はなくなった。

早く、清流の階層に戻りたいという気持ちはあるが、熊会長たちは無事に戻れたらしいので、心配は無用だ。この階層は腰を据えてじっくり挑んでも大丈夫かな。

「私は見張りをしますので、皆さんも靴を脱いで体を休めてください」

「うちらは大丈夫だよ。見張り手伝うね」

「うん うん」

俺たちは転送陣で飛んで来ただけだから疲労は全くない。

あと、ヘビイはただの親切心で靴を脱ぐことを勧めたのか、それともやましい気持ちがあるのか判断が難しい。

「手伝っていただけなのですか、助かります。どこぞの誰かさんは、あの状態ですからね」

顔に笑みを貼り付けたまま、見つめる視線の先には腹部が膨れ上がり、大の字に寝転んでいるシュイがいた。

周囲にはペットボトルや包み紙が散乱している。

「もう、食えないっす。一步も動きたくないっす」

シュイは暫く役立たずか。まあ、限度を考えずに食べ物を与え続けた俺も悪いのだけど。

彼らの腹が凹むまでの時間ぐらいは、ラッミスと一緒に見張りを担当するよ。

門近くの見張り台に登って、壁の向こう側を見下ろすと薄暗い森が広がっていた。

輝くばかりの美しい緑を想像していたのだが、深緑色の明度を落とした黒に近い緑の森。

空は晴天で眩い日差しが降り注いでいるのだが……森のデザイン間違っていないか、あそこだけ暗いぞ。森の中が暗いのは理解できるが、陽の当たる木々の葉まで暗いのはおかしいだろ。

闇の森林階層の名は伊達じゃないのか。明らかに不自然だ。夜になっただどの程度まで暗くなるのだろうか。

「森が真っ暗だね。何でだろう？」

見張り台から身を乗り出して、楽しそうに覗き込んでいるラッミス。俺は見張り台の隅に置かれているのだが、見ているだけで落ちないかと心配になる。

高さは五メートル程度なので、ラッミスの身体能力なら落ちても大丈夫な気もするが、日本人だった頃の常識がそれを許さない。

「おちりゅよ」

「あ、うん。気をつけるね」

見張り台の手すりに腰かけて、楽しそうに足をぶらつかしている。こんな状況だというのに、不思議に思うぐらい嬉しそうに見える

のだが。

「あれだよ。こうやって二人きりで過ごすのって久しぶりだね」

言われてみれば確かに。迷路階層は別々だったし、一緒にいる時も他の人が必ず傍にいた。二人つきりであることが極端に減った気がする。

そんなことを考えている間に陽が落ち始めたようで、夕焼けが辺りを染めている。

夕日をバックに微笑むラツミスの姿に少し 見とれてしまった。元々、可愛らしい顔だとは思っていたが、やっぱり彼女は笑っている顔が一番素敵だな。

俺が一人の人間の男としてこの場に立っているのなら絵になる光景なのだろうが、自動販売機に微笑む一人の少女って変に思われそうだ。

「こんな時に言ったら怒られそうだけど、ハツコンと一緒にいたら何でもやれる気がするの」

俺もそう思うよ。ラツミスと一緒になら何でもできる気がする。

気障な言葉の一つも口にして微笑み返せば、さまになるかも知れないが俺は自動販売機だ。返せる言葉は少ない。

「うん ありがとう」

「ありがとうって変だよ、ハツコン」

そこで目を細めて嬉しそうに笑うんだ。

何だろうこの甘酸っぱい空気は……これはもしかして、いい感じの雰囲気というやつなのでは。自動販売機なのに。

あれ、ラツミスが潤んだ目でこっちに歩み寄ってきている。
いや、ラツミスさん、ちょっと待った。ええと、何だ、これは何
だ。無機物と少女のともでもラブコメ展開、開催のお知らせなの
か。

「ちえすとおおおっ！」

剛腕が繰り出され、俺の側面を擦った。

何かが粉碎される音が響き、遅れて拳圧の風が吹き荒れる。

動揺しすぎて全方位を見てなかったのだが、魔物が見張り台を登
ってきていたのか。はあ、自動販売機の身でありながら、何を勘違
いしているのか……かなり恥ずかしいぞ。

「むっ、見張り中だったね、残念」

また勘違いしそうなことを口に出しているが、これも俺の思い違い
だろう。

真面目に見張りやらないとな。

武器屋

「じゃあ、最近はこれ食べてたの？」

集落を取り囲む、丸太を突き刺して並べただけの壁を魔物が乗り越えてきたところを、シユイの放った矢が貫いた。

太めの大根から筋肉質な人間の様な白い足が生えた、奇妙な魔物をラツミスが驚掴みにしてシユイへと突き出している。これこそ、本物の大根足だな。

「そうっすよ。ここの野菜の魔物は味も良いつすからね。強い奴ほど美味しいっす」

畑の野菜だけで人々の食料を補っていたのかと思つたら、野菜型の魔物を食べていたのか。門が閉められてからは身軽な魔物がちよくちよく壁を乗り越えてやってくるのだが、殆どが野菜に手足が生えた魔物だ。

魔物たちが木材を傷つけないようにしているというのは本当で、門や壁を壊すことなく律儀に乗り越えようとして、射落とされていく。

「ここは木材が豊富っすから、矢の在庫には困らないから、ありがたいっす」

民家の屋根の上で構えているシユイの脇には、大量の矢が置かれている。武器屋から無料で提供されているので、矢の残りを考えずに射ることができると喜んでいる。

「シュイ、矢を追加で置いておくぞ」

「ありがとうっす」

大量の矢を背負って軽々と民家の屋根に登り、シュイの隣に矢を置いたのは筋骨隆々で長い髪を後ろで縛っている男性だった。見事な口ひげを蓄えている。

「お、妙な箱を背負っているのは、噂の怪力娘か」

「ラツミスです！」

悪気なく武器屋は口にしたのだろうが、ラツミスは若干怒ったように言葉を返す。

怪力なことを嫌っている訳じゃないのだが、面と向かって怪力と呼ばれるのは嫌らしい。

「おう、そうか。すまねえな。ラツミス嬢ちゃんは武器を持ってないが、徒手空拳で戦うのか」

「うん、そうだよ」

「折角の怪力がもったいねえな……そうだ、うちにこい。武器見繕ってやるよ」

おっ、武器屋に誘っているのか。折角、異世界に来たというのにファンタジーの定番である武器屋に一度も行ったことがなかった。

正直、かなり興味があるので今から楽しみだ。

「えっ、いいよ。うちは武器いらないし」

ええええええつ、そこは誘いに乗らないと。俺なんて完全に武器防具を品定めするつもりだったのに。

「あー、ラツミス行ったらどうだ。オレも一緒に行くからよ」

そう言っつて、口を挟んできたのはヒュールミか。昨日からずっと転送陣につきつきりだったが、もう修復が終わったのだろうか。

「ヒュールミ、もう修理終わったの？」

「修理つてか、異常がなかったからな。あとは魔力が満たされるまで、一週間ほど待っただけだ。つて、それはいいんだよ。武器屋で消耗品の補充と防具も見たらどうだ」

いいぞ、ヒュールミ。そのまま説得してくれ。

「うーん、ブーツとか手袋もくたびれてきてるから、替えた方がいいかな」

「そうだな。それってハツコンと出会う前から使っているやつだろ。金は結構貯まっつてんだから、もつといいやつを装備しようぜ」

よく見ると手袋を補強している鉄のパーツがすり減り変形している。そりゃそうか。ラツミスが全力で怪力を振るえば、消耗は他のハンターたちとは比べ物にならない。

「これ、お気に入り結構、高かったんだけどな」

ラツミスつて物持ち良さそうだからな。今装備している手袋とブ

ーツに愛着があるようだ。

「ラツミスの嬢ちゃんよ。うちで気に入った武器防具がなけりゃ、その手袋とブーツを改良してやるつか？」

屋根から飛び降りた武器屋のオッサンが、ラツミスの手袋をまじまじと見つめながらニヤリと笑う。

「それなら、お願いしようかな」

「おっし、それじゃ付いて来てくれ。そこの平らなねえちゃんも」

「誰が平らだ！」

どうやら、武器屋のオッサンは思ったことを考えずに口にする性格のようだ。

「どうよ、ここがうちの店だぜ」

武器屋のオッサンに連れられてたどり着いたのは、他の民家と比べて一回り大きな丸太小屋……いや丸太箱だった。

勾配のある屋根はなく、丸太を四角く組み上げた巨大な箱と言った方がしっくりくる。

「入ってくれ、さあさあ」

扉を抜けて室内に足を踏み入れると、そこは確かに武器屋だった。

壁際に掛けられている武器の数々。槍、斧、剣、刀のように反りがある剣もあるな。老夫婦の戦闘着が和服っぽかったので、やっぱり昔の日本に似た国がこの世界にもあるのかもしれない。

武器だけではなく防具も棚にずらっと並べられている。

これだよこれ。異世界ファンタジーなら武器防具だろ。こういう購入シーンは序盤にあるべきなのだが、自動販売機には装備必要ないからな。

あの巨大な鎧って無理したら俺も着られないだろうか。鎧を装着した自動販売機か……商品が取り出せない！

「あ、手甲もあるんだ」

「おうさ、格闘家用の武器防具も取り揃えているぜ。この棘のついたやつはどうだ」

武器屋のオッサンが取り出したのは、手の平以外が全て棘で埋まっている凶悪な外見の手甲だった。

強そうではあるけど、ラツミスには似合わない。

「うーん、これだとハツコンを傷つけそうだし、それに直ぐに壊れそう」

一応手に取ったラツミスだったが、お世辞にも好感触とはいえない。棘をつんつん突いている。

「この縞模様なマントって防具なのかな」

ラツミスが見ているのは黄色と緑が交互に並ぶフード付きのマントだった。それも自然な配色ならまだわかるのだが、濁りのない原色で無駄に派手だ。

「おう、それか。撥水加工もあつて水を一切通さず、暑さ寒さにも強く性能は抜群なんだが……何せ派手でな。どこぞの魔道具技師が作った逸品だが、まあ、売れねえよな」

ハンターがこれを着ていたら確実にからかわれると思う。

ラツミスは何気に気に入ったようで、実際に羽織ってその場でクルクル回っている。

「ハツコン、どう？」

あれ、意外と似合っている。まあ、ラツミスは何を着ても似合いそうだけど。

「ありがとうございます」

「それって、褒めてくれてるのかな」

「うん」

「そうなんだ……ふふ、ありがとう」

縦縞マントを元に戻しているが、後で買えないか武器屋のオッサンと交渉してみよう。

そのオッサンは武器屋の隅に置かれていた箱の中を覗き込んでいる。何かを探しているようだがなかったようで、俺たちに向き直った。

「嬢ちゃんのを一度見せてもらった方がいいな、ちょっと待っていてくれよ」

武器屋のオッサンは一度、店の奥へ姿を消した。

俺は周りの武器を見ているだけで楽しいので、何時間でも待てそうだ。男の子だったら、テンション上がるよな。

自動販売機で武器が売れたらハンターからの需要はありそうだが、生前に購入したことがある物という能力の縛りが邪魔をする。

何故、日本では刀やメイスの自動販売機がなかったのかっ！

あつたら、絶対に見に行つて購入していた自信がある。そしたら、武器を 念動力 で操るといふ、ハイクオリティな自動販売機になれたのに。

「これなんたる、箱に武器が山積みだけど」

「ええと、何か書いてるぞ。あー、在庫処分だつてよ」

俺がすっぱり入れる大きさの木箱の中に、種類もバラバラな武器が乱雑に入れられている。

この中に意外と掘り出し物があったりしないのだろうか。喋る魔剣とか所有者を選ぶ武器とかがあるつてのが、お決まりなのだ。

「魔力も感じねえし、使い古された物ばっかだな」

「そりゃ、ハンターから買い取った品だからなっ」

武器屋のオッサンが車輪の付いた台を押しながら、律儀に答えてくれている。

てか、何だあれ。台の上に幾つもの丸い石が置いてあるのだが、その全てが同じ形と大きさで、色だけが違う。

「さてと、この丸いのは魔道具の一種でな、握るまでは大して重く

ねえんだが、手に持った途端に重くなる代物だ。左から徐々に重くなって、これで力を測定するってこつた」

へえ、面白い魔道具だな。野球のボールぐらいの石でどこまで重くなるのだろうか。

「計測の石か。中々、珍しい魔道具持っているじゃねえか」

「平べったいのはわかるのか。通だねえ」

「その呼び方止める。オレはヒュールミだ」

「わ、わかった。ヒュールミだな。覚えたから、それしまってください！」

近くにあった刀を鞘から抜いて歩み寄るヒュールミに、武器屋のオッサンが慌てている。自業自得なので止めないでいいか。

「ねえねえ、これ持っていていいの？」

「お、おう。まずは一番左を手に取ってくれ」

話を逸らす為に武器屋のオッサンが意気込んで答えている。

ヒュールミが「ちっ」と舌打ちすると刀を鞘に納めた。

「よっ、軽いね」

「おー、軽々いくな」

まったく重いようには見えないのだが、本当に重くなっているのだろうか。

「ヒュールミも持ってみる？」

「貸してみてください……おおおおっ！」

受け取った途端、腰を落として両手で落とさないように懸命に耐えている。

生まれたての小鹿並に足と全身が痙攣しているな。

「ラ、ラツミス、取って、取ってくれ！」

「いいよー」

片手で軽々と受け取ったラツミスが台に球を置いた。

本当に重くなっているのか。ヒュールミが額の汗をぬぐって、両腕を振っている。かなり、やばかったようだ。

「その調子だと次も楽勝っぽいな。二つ右のを持ってくれるか」

「いいよー。よいつしよつと」

またも片手で軽々と掴み上げたラツミスを見て、武器屋のオッサンが顎が外れそうなくらい大口を開けている。

「ま、マジか。嬢ちゃん重くねえのか？」

「さっきよりかはちょっと重いけど、ハッコンよりもかなり軽いし」

「それ、俺の体重以上なんだが……こいつはおもしれえ。よっし、じゃあ、更に二つ右の一番端のを頼む！」

急に武器屋のオッサンのテンションが上がった。ここまでの重量を軽々と持つラツミスに興味が湧いて、武器屋の血が騒いでいるみたいだ。

「あつ、これハツコンぐらいかな」

その球、俺と変わらない重さなのか。それを片手で持ち上げていることについては、もう何も言うまい。やっぱり、ラツミスは俺を武器にして振り回した方が良いような気がする。

「ほえええ、はああ、こりやスゲエ。鉄の箱を背負っているから、相当なものだと思っていたが、これ程だとは。よっし、俺が嬢ちゃん用の最高の武具を作ってやるぜ！」

武器屋のオッサンの全身から炎が噴き出しているかのような映像が一瞬見えた気がした。最高の素材を見つけて、やる気の針が振りきれてしまったようだ。

「一週間は滞在するって話だったな。それまでに意地でも仕上げてみせるから、楽しみに待っていてくれよ！」

「お、おい、オッサン！ 武器と防具を選ぶ話はどうなった」

「んなもん、そこら辺にあるの適当に持っていけ。表示している金額の半額で構わねえぜ」

早口でまくし立てると、武器屋のオッサンは奥へと消えて行った。

先に工房があるのだろうか。あれはもう戻ってこないな。

「だってよ。適当に見繕って金置いていくか」

呆れて肩を竦めるヒュールミと一緒に武器防具を選び、カウンタ
ーの上に硬貨を置いて俺たちは立ち去った。

予想外な展開だったが、一週間後にラツミス専用の武具が出来上
がるのか、楽しみにしておこう。

ハンター協会の会長

闇の森林階層に来て二日目の朝になってふと思ったことがある。

この階層の会長に一度も会ってない。

ダンジョンの各階層にハンター協会の会長が存在するのは承知の上だが、今思えばキャラの濃い人たちばかりだったな。

上から順だと始まりの階層は全身真っ赤なスーツ姿で妙齢の女性。気が強そうに見えて実は可愛げがある。

次の亡者の階層は……会ってないな。勝手なイメージだと幽霊の様な見た目なら、あの階層の雰囲気似合いそうだな。

そして、清流の湖階層には我らが熊会長。見た目のインパクトで圧勝している。

迷路階層の会長は最近あったばかりだ。お喋りでぼっちゃりしていた。

灼熱の砂階層は冥府の王対策の時に集まった会合で、やたらと声の大きくて炎の絵が描かれていたアロハシャツのような服を着ていた人だよな。

その下がこの闇の森林階層で、更に下の犬岩山階層と永遠の階層は不明となっている。

亡者の階層の集まりで会長たちがいた筈だけど全員の姿は確認していない。あの時はそれどころじゃなかったから……じっくりと見ておけばよかったな。後で聞いた話によると代理で来ていた人もいるので、全員が会長ではなかったらしい。

この会長はどんな人なのか気になる。ちょうど、ヒュールミが隣でジュース飲んでいるから聞いてみるか。

「あのね」

「どうした、ハッコン」

「ここの」

「かいちよう」

「じつてりゆ」

おー、今回は完璧じゃないか。かなり上手に言葉を繋ぎ合わせられた。

「闇の会長か。そういや、まだ会ってないな。あいにく、知らねえな……へブイ！」

「はい、何でしょうか」

近くの民家前や休憩所付近をうろちよろしていたへブイを呼び止めた。

彼が何をしていたのかは追求しないでおこつ。たぶん、聞かない方がいい。

「ここの会長ってどんな奴か知ってるか？」

「ええまあ、面識はありますが」

珍しく薄い笑みが崩れて苦笑いになっている。ここの会長に何かあるのだろうか。

「どんな感じだ」

「そうですね……この階層の会長に……相応しい方かと」

歯切れが悪いぞ。いつもの靴を語るときの饒舌さは何処に。

「へブイが言い淀むとは、お前を上回る相当な変態なのか」

「私を上回るといのが何を意味するのか謎ですが、明るく楽しい方ですよ」

そう言い切るへブイをヒュールミが目を細めて睨んでいる。信用していないようだ。

今までの反応を見ていれば、信憑性は全くないので当たり前なのだが。

「あれ、何話しているっすか」

たまたま通りかかったシユイが声を掛けてきた。

へブイの説明じゃ納得できなかったので、同じ質問を試みようか。

ヒュールミと話した時のように訊ねると、彼女の表情が一変した。頬を痙攣させて無理やり笑顔を作っている。表現しがたいこの表情は一体なんなのだろうか。

「悪い人じゃないっすよ」

明るく楽しく悪い人じゃない。ここだけ聞けば素晴らしい人物に思える。でも、表情と反応が発言を否定しているよな。

どうしよう、興味がますます湧いてきたけど、会つのは遠慮した方がいいかもしれない。

「会長に興味があるのでしたら、いいタイミングかもしれませんね。」

皆さんが来たことを、お伝えしなければなりません」

「べ、別に急いでないからいいんだぜ。ほら、何かと忙しいだろうからよ」

俺と同様にヒュールミも良からぬ空気を察知したのだろう、慌てて手を左右に振っている。

「いえいえ、ご遠慮なさらずに。後回しにしたところで、いずれは会わなければいけない相手。早めに済ませておいた方が楽ですよ」

予防接種の注射みたいなノリだな。

「でもよ、ラツミスがないから、また日を改めてだな」

「あつ、みんなが集まって何しているのー！　まぜてまぜて」

用事でこの場を離れていたラツミスが、粉塵を撒き上げながら走り寄ってくる。

どうやら逃げ道が完全に閉ざされたようだ。まあ、彼らが言うように悪い人じゃないなら、問題ないだろう。

変わり者ならへブイで慣れたから、妙な性癖や趣味でも理解をしてあげられるだろう。

木造二階建ての建造物に連れてこられると、へブイは躊躇うことなく両開きの大きな扉を開け放った。

中はホールになっていてカウンターがあり、丸テーブルが幾つか

置かれている。一般的なハンターギルドの内装だ。

カウンターの向こうに並んで座っている二人の女性職員にへブイが歩み寄っていく。

「会長は、いらっしゃいますか」

「はい、二階の会長室にいらっしゃいます」

「彼らが是非、挨拶をしたいと申しているのですが、大丈夫でしょうか」

ちらつとこつちに視線を向けた職員の動きが静止した。どうやら俺を見て驚いているようだ。

「あつ、ハツコン様ですね。二階へお上がりください。会長も喜ばれると思いますよ」

あつさりと許可が下りたな。俺を見て即座に判断したようだけど、もしかしてこれが顔パスというやつなのか。

この集落に来てからまだ二日目だが、情報は伝わっているようだ。職員の二人も食料を買いに来ていた気がする。

「ありがとうございます。皆様、まいりましょうか」

職員さんは普通の対応だったな。会長が変な人だと決め掛かっていたが、本当は普通の人なのかもしれない。へブイとシュイが話を合わせてからかっていたというオチか。

二階隅の扉の前で立ち止まると、コンコンと軽く扉を叩く。

「会長、へブイです。新たに訪れた、ハツコン、ラツミス、ヒュー

ルミを連れてきました」

「どうぞ」

声だけで判断するなら明るい感じの男性で、四十から五十代といったところか。

ラツミスは背負って入室するのは失礼だと思ったようで、一度下ろしてから後ろから抱きかかえてくれている。

「失礼します」

数歩進んで俺を床に置いて、ラツミスが後ろから俺の隣に並ぶ。ラツミスと共に正面を見つめると、そこには 黒い人がいた。それは比喻ではなく、真黒なのだ。

闇を濃縮して固めて人型にした、わかり易く言えば影が直立して目の前にいる。全身黒タイトの人間にしか見えない。

「初めまして。闇の会長とでもお呼びください」

目も鼻も口もないのに普通に話している。それだけでも異様なのに何で……金ぴかのコートを着込んでいるのだろ。靴も履いてないのに。

「それでは、ごゆっくり」

俺たちが呆気にとられている間に、ヘブイが部屋から出て行き扉を閉めた。俺たちの驚く顔を見て満足したのか。

見た目は確かにインパクト抜群だったが、今まで何度も魔物を見してきたので、もう落ち着いたものだ。

「初めまして、清流の湖階層からきた、ラツミスです」

「ヒュールミだ」

「こんにちあ」

俺たちが挨拶をすると、闇の会長は大きく一度頷いた。

会長は窓際に立っていたのだが、軽い足取りでこっちに近づいてくる。

表情が全くわからないので不安になるな。怒ってはないと思うけど。

目の前まで歩み寄ってくると、その黒とコートの金との色彩の差に目が痛くなってきた。大きく手を広げているのは歓迎の意を示している……のだよな？

「いやー、初めまして。闇の森林階層の会長やらしてもらおうとります。こんななりやけど顔だけでも覚えて帰ってもらえたら、嬉しいですわ。って、顔が真黒でわからんやんけー。今んとこ笑うとこでっせ。種族は闇人魔で、闇なんて大層な名前付いてますけど明るさと元気が売りでっせ。闇人魔やからといって、イヤミなんて言わんから心配せんといてや。なんやごちゃごちゃして落ち着かん毎日やけど、会長としてどっしり構えて頑張っついていかなと思ったりますんや。そや、清流の湖階層から来はったんでしたな。熊会長は元気にしとりましたか。向こうも忙しいやろうに。毎日、くまったくまった言うとったんとちゃいます。わいなんて机仕事と農作業と深夜の見回りに煙突のすす落としまでやっottaから、ほらご覧の通り真黒ですわ」

一気にそこまでまくし立てると、こっちをじっと見ている。

表情は不明だというのに、今、この人はドヤ顔をしているのだろ

うと、わかってしまう自分が嫌だ。

言葉の濁流に呑み込まれた二人は硬直したまま微動だにしない。今ならわかる。二人の妙な反応と、ヘブイが速攻で部屋から出て行った理由が。

漫才師の様な話し方と間に挟まれる下らないギャグの嵐。こ、これはきつい。

大阪に住んでいる親戚のおじさんに似た感じの人がいたから俺は免疫があるが、二人にはかなりきつそうだ。

二人は表情を取り繕う余裕すらないようで、軽く仰け反ったまま硬直が持続している。

「会長言つてもそんな偉いもんやないから、そんなに緊張して硬くならんでもええんやで、ハツコンはん。ああ、元から硬いんやつたな。何でも聞いた話によるとハツコンはんは変わった飲み物や食べ物が出せるそうやないか。なら、わいも一つ御呼ばれしてもかまへんかな」

しまった、俺いじりが始まった！

こ、ここは相手にしないで関わらないのが正解なのだが、一応相手はハンター協会の会長。無下に断るわけにもいかない。

何が好みなのか判断も付かないし、それどころかどうやって飲食するのかも謎だが、清流の湖階層では人気のあつたミルクティーを出しておく。

ペットボトルを 念動力 で操り、蓋を回して開けた状態で闇の会長の前まで運ぶ。

「ほんまに物も浮かせて運べるんやね。いやー大したもんやわ。ほな、ごちそうになりませ」

あ、飲むときは顔に口らしき穴が開くのか。そこに中身を流し込んでいる。

「くはぁー、ごっつう旨いやん。甘いお茶だけに、旨すぎて……あーまいつちゃーって感じやな！」

額をぺしぺし叩いているのが鬱陶しい。

駄目だ、このまま放置していると永遠にオヤジギャグを聞かされかねない。どうにかして、対抗する方法はないのか。俺が話すにしてもたどたどしくて、あの早口に割り込めるとは思えない。

となると、自動販売機の機能だけど、相手の漫才を止める機能なんてあるわけが……あるわけが……あれ、もしかしてあれが使えるか？

まず 液晶パネル を設置してから、一生使うことはないと思っていた 漫才自動販売機 を取得して放映した。

この機能は関西のサービスエリアに本当に置かれている自動販売機で、紙コップに飲み物が注がれる間、約一分間だが本物の芸人のネタが、連続して流れる仕組みになっている。

これは 液晶パネル を手に入れたら新たに現れた項目なのだが、まさか使う場面があるとは。

「でまあ、そんなことがあってやな……な、なんやこれは」

流れるネタや一発芸に闇の会長が気を取られている。

俺の耳には日本語で流れているように聞こえているのだが、どうやら意味が通じているようで、液晶パネルにかじりついている。

さあ、本場のギャグを観て勉強するがいいさ！

全て観終わった闇の会長は驚くほど大人しくなり、「今日はわざわざありがとうな」とだけ呟き俺たちは退室した。

若干悪いことをした気もしないではないが、これで少し静かにな

つたら周りの人たちも助かるだろう。

次の日から、漫才に触発されたのか更に喋りに磨きがかかったのは俺のせいじゃないと思いたい。

伐採作業

丸太の壁を乗り越えてくる敵を撃退し続けても埒が明かないので、思い切って攻めに転じることとなった。

初めは様子見を兼ねた偵察となっている。

それで精鋭部隊を集めたメンバーが、ラツミス、俺、シユイ、ヘブイ、そして情報収集と解析担当としてヒュールミ。ここまでは理解できるが、何故か闇の会長も付いてくることになった。

参加メンバー全員がやんわり断ろうとしたのだが、

「会長やからいうて、安全圏でのんびりやるわけにはいかん。安心してや、わいは元ハンターやし、清流の会長と同じグループに所属していたんやで。体調も快調やしな、会長だけにつ」

ハイテンションで返されて、何を言っても無駄だという結論に達した。

しかし、熊会長と一緒に戦っていた過去があるのか。あのメンバーと共に行動していたのなら闇の会長の實力は大したものだが。

武器も手にしていないし、防具も金ぴかのコートのみ。戦いに赴く格好じゃないよな。

「あれっ、知り合いだったら、お爺ちゃんお婆ちゃんと園長先生も知っているの」

「もちのろんですがな。みんな元気にしとりましたか。シメライはんとユミテはんの夫婦は、清流の湖階層におるうちゅう話は聞いたりましたか」

「二人とも元気で仲良しで、園長先生も今は清流階層にいるよ。子供たちと一緒に」

迷路階層もそうだが、ダンジョン内の人々が清流の湖階層に集まってきたいるな。キコユたちもいるので、今やもつとも戦力が集中している階層ではないだろうか。

「安心しましたわ。人間は年取ったら直ぐに体が弱なるから、心配しとりましてん。まあ、あの夫婦なら老化していても、ろうかしそうやしな」

それを言うなら「ろうかじゃなくて、どうか」だろ、とツッコミを入れたいところだがやめておこう。この人は無理があってもギャグを入れないと落ち着かないのだろう。

強引な言い回しのギャグが俺の言葉足らずの発言と被ってないか少し心配だ。

「今回は門から出て、周りの木々を伐採して道を作り、魔物が襲ってきてやばいと判断したら速攻で帰るからな。今回は敵の実力を測るのが目的だ」

ヒュールミが今回の方針を熱心に語っている　俺の頭の上で。

また俺の体に自分の体を固定する道具を作ったのだが、ラツミスで挟み込むようにすると、視界が妨げられるので頭の上に場所を変えている。

頭の上で胡坐を掻いて座っているのだが、視界を真上に移すとい感じに潰れている尻が見えた。

深い意味はないが、これはこれでありな気がする。

「ハッコン、すまねえな。上に座り込んでしまっ」

「いいよ ありがとうございます」

「何があるがとうなんだ？」

つい本音が漏れてしまった。自動販売機にそういった欲望はないのだが、うん、まあ悪くないかな。

「まあ、いつか。んじゃ、ラツミス門を開けてくれ」

「はい。よいしょっと」

普通なら屈強な男性が二人がかりで何とか押し開けることができる門扉を、ラツミスは片手で苦も無く押していく。

「マジか……」

門番らしき人たちが、その光景に思わず声を漏らして目を見開いている。

自分たちが苦勞して開けている門扉をいとも容易く開けられたら、そうなるのも無理はないよな。

門から出ると素早く閉めて正面へと全員が向き直ると、鬱蒼と生い茂る森の前に多くの魔物が待ち構えていた。

「大歓迎ですね。では、まずは掃除しましょうか」

「そつじようか」

闇の会長がへブイの発言に絡んできたが、全員がスルーした。

野菜系の魔物は多種多様であらゆる種類の野菜が魔物化している

ようだ。

スイカは短い手足が生えているのだが、体の真ん中に口だけが存在していて、そこから種をマシンガンの弾のように吐き出している。俺の方に飛んできた種は 結界 で弾いているが、狙いが外れた種は地面に結構深くまで潜り込んでいるので、威力は馬鹿にできないようだ。

取り敢えず、側面から転がってきたスイカの魔物は、パチンコ玉入りペットボトルで砕いておいた。硬さは本物のスイカと大差ないらしく、簡単に割れて中身が飛び散っている。

スイカの中身と果汁が本物の血みたいで嫌だなあ。

小さな根菜類はシュイが矢で地面に縫い付けているので、止めは後回しにされている。

枝葉を振り回し迫ってくる動く木は、ラツミスの拳で幹を粉碎されていく。

本来は耐久力があり苦戦する相手なのだが、動きが鈍い時点でラツミスにとっては的に過ぎない。相性が抜群に良いようだ。

それがわかつているのだろう、いつもより激しく動き回って活躍を見せてつけている。

うん、凄いと思うけど、一つ忘れてないだろうか。俺を背負ったままということは、ヒュールミもセットなのだよ。

「う、うつぶ、もう、ダメかもしれん……すまん……ハッコン……」

ヒュールミ顔が蒼白で口元を手で押さえている。これはもしかや、酔ったのか。ちょ、ちょっと待って！　そこで嘔吐されたら俺の体にっ！

「今日は絶好調かも！」

「らっ いす」「らっ いす」

俺が連呼してようやく気づいたようで、急停止して首を限界まで後ろに向けている。

「どうしたの、ハッコン」

「あっ ち」

取り出し口からスポードリンクを出して 念動力 で俺の頭の方へ移動させる。それを目で追うラツミスが気づいたようだ。

「ヒュールミ、顔色悪いけど大丈夫？」

「だ、い、じょう、ぶに見えるか……わりい降ろしてくれ」

息も絶え絶えなヒュールミが何とか応えると、慌てて俺を置いた。久しぶりに 子供用自動販売機 にフォームチェンジして背を低くしたので、ヒュールミでも楽に降りることができた。

まだ辛そうなので、そつとスポードリンクを近くに運んで置く。

「ええと、それじゃあ、ハッコン。ヒュールミのこと守ってあげてね」

「まかせて」

俺とヒュールミは戦場のご真ん中で見学となった。

普通なら敵地のご真ん中に放置されたら殺されるだけなのだが、結果 があれば何とでもなる。

「あつ、上が空いたなら、乗ってもいいっすか！」

「いいよ」

駆け寄ってきたシュイが身軽に俺の上へ跳び乗った。

射手として高く見晴らしのいい場所から狙撃すると楽なのだろう。次々とさつきよりも効率よく野菜型魔物を地面に繋ぎ止めていく。

ああ、そうか。角度があるから地面に突き刺しやすいのか。結界で防御の心配も必要ないので固定砲台として優れている。

敵はそんなこともわからずに接近してくるので 結界 で弾かれるか、俺の改造ペットボトルで叩き潰されるかの二択だ。

「ハッコン、ありがたいつす」

「いらっしゃいませ」

いつものように返事をする余裕があるので、戦場を全体的に見回してみる。

俺という重荷が消えたラツミスは素早さが増している。前までなら制御できない強大な力を持って余して、まともに走ることにすら難しかったのだが今は何とかやれているようだ。

時折、目で追うのが辛い速度で動いている。

俺を背負っていると防御力が上がるが、降ろすと素早さが上がるもつと、状況に合わせて使い分けられることも考えた方が良くないのかもしれない。

その背中にいらなくなるのは、少し寂しいけど。

へブイは安定した戦い方だ。棘の付いた鉄球を花の魔物や植物型に振り下ろして、一撃で息の根を止めている。

死角から迫る敵や攻撃も余裕を持って躲しているのは、 感覚操作 で視覚や聴覚を増強させているからなのか。

闇の会長は金のコートが目立つな。突っ立ったままで何もしていないように見えるが、敵が近寄る前に地面から伸びた黒い影がその体を貫いている。

よく見ると闇の会長の足元から黒い影が伸び、それが自在に姿を変えて敵に襲い掛かっている。あれは闇魔法か何かなのだろうか。それとも自分の体を伸び縮みさせているのか。

どちらにしろ、敵を一切寄せ付けない強さだ。口が達者なだけではないらしい。

「野菜は真っ二つになりやさい」

影で野菜を切断しながら何か言っているが、聞かなかったことしよう。

ギャグは兎も角、あの能力は便利で強い。制限があるのかは不明だが、十メートルぐらいは軽く伸びているし、植物系の魔物を簡単に両断できる切れ味。

この階層は木になった人以外の被害が少なかったのは、会長の活躍によるものが大きかったのかもしれないな。

「ラツミスはん、敵も減ってきたんで、木々の伐採頼んます」

「はい！」

動く木を殆ど粉碎したラツミスは後を他の面子に任せて、目の前に生えている普通の木の幹にしゃがみ込むと、手を回して抱き付くような格好になった。

そして、そのまま指を幹にめり込まずと引っこ抜いた。根に大量の土が纏わりついている。

強引すぎる力技による伐採で抜かれた大木を立ち上がった時の勢いで、そのまま後方へと投げつけた。

大木が弧を描いて飛んでいき、集落の壁を乗り越え中へと落ちていく。

普通なら大惨事になりそうな暴拳に見えるが、予め計画していた通りの行動だ。門付近は広場になっていて、そこには誰も近寄らないようにハンターたちへ言い含めている。

門前の木々が凄まじい速度で消えていくのだが、木々を傷つけると魔物が大量に発生するので、伐採の手を休め再び魔物処理をしなければならぬのが面倒だな。

結局三時間程度戦ったのだが、引っこ抜かれた木は三十ぐらいで倒した魔物は数え切れない程だった。

門の前はさつぱりしたが森全体から比べるとほんの僅か。この戦法だと時間が幾らあっても足りないぞ。何か別の策を考えないと駄目かも知れない。

ある日、森の中の面々

妙案がほいほい浮かぶわけもなく、次の日は他のハンターも増員して木々の伐採を続けている。

ラツミスが集中して木を引っこ抜けるように、他のメンバーで戦闘を担当して邪魔をさせないように立ち回っているので、昨日よりも順調だと言えるだろう。

たまに魔物がラツミスに攻撃を加えようとしてくるが、背中の俺が攻撃を弾くか、手にした大木で薙ぎ払って倒している。

単体相手だと素手が強いが、大群相手だと武器を手にした方が効率よく敵を倒せている。武器といってもそこに生えていた木だが。

ラツミスに相応しい武器となると何だろうか、素手にこだわりのあるみたいだけど多対単の戦いの場合、リーチのある武器で一気に倒した方が強いと思う。

実際、今も一薙ぎで数体の魔物が吹き飛ばされている。巨大な剣は何となく彼女のイメージじゃないな。槍も違う。あれだ、ハルバートとかどうだろうか、両替商のゴツガイさんが手にしていた槍と斧がくつついたようなアレは似合う気がする。

もっと刃の部分を巨大化させたら怪力も生かせる武器にならないだろうか。

俺が彼女の武器についてあれこれ考えている間に魔物たちは倒されていき、木は次々と宙を舞って集落の広場に落下している。

魔物の数は多いが味方も精鋭が多いようで、下層になる程ハンターの技能が高いというのは嘘ではないようだ。全員が植物系の魔物対策をしているようで、無駄の少ない動きをしていて安定感がある。それともう一つ戦いを楽にしている要因はヒュールミが担いでい

る樽と、そこから伸びたホースだろう。ホースの先端には銃のような物を取りつけられていて、引き金を引くと樽の中身が放出される仕組みになっている。

あれはここにある物だけで作った道具で、俺の高圧洗浄機を参考にしたそうだ。それだけで、これを作り上げる技能は感服の一言だ。

あの樽の中身は 除草剤だ。俺は自動販売機に除草剤がないことを残念に思っていたが、この世界にも存在していたようで、ヒュールミがあのだと道具と一緒に何やら調合して一晩で作り上げた。

「おっしやー、枯れる枯れるー！」

調合した薬を散布している姿が喜々としていても楽しそうに見える。

何を混ぜ合わせたのかは知らないが、効き目は抜群でぶっかけられた魔物たちがのた打ち回っている。今回は一番の戦力かもしれない。

かなり数の木が抜かれているので門の前に木の生えない道が作られていく。根があつた場所の土が抉れているので、道といっても陥没した跡だらけだけど。

集落から離れてきたので木を投げ入れる精度が怪しくなってきたので、今は抜いた木を森に投げ込んでいる。

たまに、悲鳴のような声が森に響いているが運悪く巻き込まれた魔物のものだろう。

このまま続けたとして、いつになったら階層主まで届くのか考えたくもない。だが、考えなしに伐採をしている訳じゃない。

「まだ、動きがねえみてえだな」

ラツミスの背後に歩み寄ってきたヒュールミが、目を細めてはる

か先にある一点を見つめている。

それは森から突き出ている巨木の階層主。

この森を守護する存在なら森を荒らせば襲ってくるかと思っただけだが、今のところ全く動きがない。

「これは指揮官を探した方が早いかもしれないぞ」

魔物の統率が取れていて、恐怖を感じることもなく襲い掛かってきているので、今までの流れを踏まえて指揮官がいるのは間違いない。指揮官の権限は攻撃命令と撤退命令ぐらいだが、何よりも我を失って攻撃してくるのが面倒なのだ。仲間が死のうが自分が死のうがお構いなしに攻めてくる。

「指揮官ですか。今までの流れだと全員人間でしたが」

野菜の魔物を数体叩き潰したヘブイが会話に参加してきた。

「でも、それで人間だと思いつくのは、やばいっすよね」

更に加わってきたのは、矢を撃ちながら歩み寄ってくるシュイだった。

敵の数が一段落してきたようで、残りのハンターたちだけで充分処理できている。

「ハッコンに巨大化してもらって、空からの一撃もあの階層主の大きさが尋常じゃねえから、確実性がねえんだよね」

日本一の大きさをほこる自動販売機でも階層主の大きさには負けている。遙か上空から落ちれば倒せるかもしれないが、高すぎると自分へのダメージが大き過ぎて俺が壊れかねない。

高度が低すぎると威力が足りないだろうし……困ったな。

「ある程度知能がなければ指揮はできねえから、指揮官がこの植物系魔物ってことはねえと思うぜ」

なら、見分けはつきそうだが、今のところ怪しい人影や植物系の魔物以外を、集落の外で見たという話は聞いていない。

このまま、地味に森の木々を伐採していくしかないのだろうか。

「みんな疲れてきているみたいだから、そろそろ帰らない？」

ラツミスに指摘されて気づいたのだが、周囲のハンターたちの動きが鈍くなってきている。疲労が溜まってきているのか。

最近、仲間を基準に物事を考えてしまう癖がついてしまっていた。幸運にも俺の知りあった人たちは、ハンターとしては格上の存在で疲れ知らずに長時間戦えた。だが、普通は一時間も戦い続けることはできない。

これは、かなりの長期戦を覚悟しないと駄目かもしれないぞ。

「んじゃ、撤退するとするか。帰るぞー！」

ヒュールミの叫びに反応してハンターたちが武器を掲げる。

今日は闇の会長がいないので静かなのは良かったが、圧倒的に戦力が足りない。

何か起死回生の策が思いつけばいいのだけど、森の木々相手に策も何もあつたものじゃないと思う。

「しっかし、木が山のように積み上がってんな。これ、清流の湖階層に運んだら復興作業はかどるぞ」

集落に戻ってきて、ラツミスが投げ込んだ木々を自ら並べている後姿を眺めながら、ヒュールミが感心している。

俺は少し離れた場所に置かれ、休憩中のハンターたちに飲食料を配りながら、休みなく働く姿を見つめていた。彼女の体力は無尽蔵じゃないのかとたまに本気で思う。

「清流の湖階層は確か湿地帯でしたか。木々は幾らあっても困らないでしょうね」

ああ、そうか。ヘブイはまだ清流の湖階層に行っていないのか。

キャラが濃すぎるせいですつと一緒にいるかのように錯覚していたが、出会ってからまだそんなに経っていなかったな。

「転送陣の魔力が戻ったら木材にして運びたいところだが、使えるようになるには二、三日つてところか」

転送陣が使えるようになったら清流の階層から人材を派遣してもらえば、状況は一変しそうだ。それまでは地道にやるしかない。

こうやって時間を取られている間にも、ケリオイル団長たちは着実にダンジョン攻略をしているのだろうか。時間を稼ぐことが目的で冥府の王が転送陣の誤操作を狙ったのなら、思う壺だな。

だけど、焦っても仕方がない。やれることをやる、それだけだ。

「おつ、ここにいたか。探したぞ」

不意に聞こえてきた声に反応して全員が一斉に振り向いた。

視線の先にいたのは帽子を被った大きな熊。

真っ白で巨大なウナススが引く荷台の上で仁王立ちしている。その会長の背後から、ひょこつとキコユと黒八咫が顔を出している。手と翼を振っているのが可愛い。

「あれ、会長とキコユ、黒八咫、ウナスス！ みんなどうやって」

「すまんが、わしらもおるぞ」

「こついつ時は空気を読んで後で現れないといけませんよ」

荷台には老夫婦こと、シメライお爺さんとユミテお婆さんも乗っている。

和服のような服装ということは戦闘員としてやってきてくれたのか。

「どうやって来たのかっちゅう説明は、わしがしようかのう。魔力の流れが落ち着いたようじゃったから、こつちからちよいと多めに魔力を流し込んで、そつちの転送陣を活性化させただけじゃよ」

さらつと口になっているが、それって難しいことなのでは。

「流石だな。そんなことやれるの、爺さんぐらいだぞ」

「伊達に年は取っておらんよ」

ヒョールミの称賛にあっさり返している。

やっぱり、このお爺さんは魔法使いとして桁が違うようだ。

「しかし、よくこの階層にいるってわかったな」

「んなもんは、魔力の流れを追えばすぐにわかることじゃよ」

「いやいや、普通わからねえっての」

凄過ぎて呆れているヒュールミと少し自慢げな表情のお爺さんを尻目に、既に荷台から降りた人たちは会話が弾んでいる。

「始まりの会長はお留守番？」

「そうだ。事務仕事が得意なようなので、一時的にだが全ての権限を渡して任せてきた。誠実な人となりも良く知っておる。始まりの会長なら上手くやってくれるだろう」

熊会長は暫く現場を担当する気なのだろうか。

日頃の素振りからはわかりづらいが、亡くなった住民の為に、その手でこの異変を解決したいのかもしれないな。

「お婆さん久しぶりっす！」

「おやおや、よく食べるお嬢さん……シュイさんでしたか。団長のことは辛かったでしょうに」

「もう、吹っ切れたから大丈夫っす」

「ならいいんですけど。ええと、その後ろにいるのはヘイさんでしたか」

「久方ぶりですね。その節はお世話になりました。お履物が素敵ですよ」

まず、靴を褒めるスタンス。揺るぎないな。

始まりの会長の實力は未だに不明だが、老夫婦の参加はかなりありがたい。特にお爺さんの魔法があれば展望が開けるかもしれないぞ。

「ふえっ、着いたのかな。ふああああっ」

「もう、ごはんの時間？」

「睡眠不足は美容の大敵だってシャーリイさんが言ってた」

「朝か」

あれっ、荷台から体を伸ばして寝起き状態なのは大食い団の面々か。

彼ら四人も一緒だったとは……あ、これでチーム移動式動物園が完成した！

このメンバーだと半分以上が人間じゃないどころか動物の樂園だな。個人的には全く文句がないので、これでいいと思います。

癒し効果もバッチリだし、明日から頑張れそうだ。

幼女の力

メンバーが一気に増えてかなりの大所帯となった。

老夫婦がやってきたのは正直意外だったのだが、ボタンの荷台に乗って運ばれるなら、移動も楽だからという理由で参加を希望したそつだ。

あまりに軽い理由だったので、ラツミスも疑問を抱いたようです。直接問いかけていた。

「お爺ちゃんもお婆ちゃんも、本当にいいの？」

「まあ、森林浴をしないと、婆さんが言つとつたからのう」

「自分の足で歩かずに自然を楽しめる旅行なんて、ありがたいことですなえ」

本気が冗談なのか判断がつかない返しをされてしまった。

二人は顔を見合わせて微笑み合い、仲睦まじい姿を見せつけてくれている。

「二人を連れてきたのには理由がある。階層ごとの異変に時間を掛け過ぎないようにしたいが為だ。冥府の王とケリオイル団長の目的は時間稼ぎにあると考慮している。故に火力を増やすことにした」

「清流の湖階層は落ち着いてきているもんな」

「そつだな。カリオスとゴルスの防衛の要もいる。それに始まりの階層のハンターもこちらに移ってきた。念の為にホクシー……園長

にも残ってもらっている」

園長先生がいればかなりの戦力増強になるな。治癒能力もあるの
で怪我人が出ても安心できる。弓の実力はシユイを軽く上回ってい
たので、飛行系の敵にも充分対応できそうだ。

「時間短縮を狙っているとはいえ、焦って事を仕損じては元も子も
ない。効率的にやる為にも能力の高い者をぶつけるのが、もっとも
安全で確実だ」

お婆さんの剣捌きも尋常ではないが、こういった場面ではお爺さ
んの魔法による火力に期待したい。

ただ、火災に気を付けないといけないので火の魔法は厳禁となる
のか。

「さて、面倒だがクロククロに会いに行くか」

クロククロって誰だ。熊会長がため息を吐いて頭を左右に振ってい
る。

その人に会うのが心底嫌そうに見えるな。

「あいたたた、急に腰痛が悪化しおった」

「お爺さん大丈夫ですか。すみませんねえ、お爺さんの看病せんと
クロククロへの挨拶はお任せしますわ」

熊会長が視線を向けると、急に腰を押さえてお爺さんが苦しみ始
めた。お婆さんはお爺さんの腰を擦りながら、健気なことを口にし
ているが。

「ついて来てもらうぞ。一人であれの対応をするのは疲れる」

老夫婦が視線を逸らして、腰痛の筈なのにすくっと立ち上がると、熊会長と同じように大きくため息を吐く。

腰痛は芝居だったのか。ここまでの反応でクロクロと呼ばれた人物が誰なのか想像がついた。

あれだ、闇の会長で間違いない。以前は共にハンターとして活躍していたという話をしていたしな。

「いかなあかんか」

「面白いんやけど、くどいのがねえ」

元メンバーに、ここまで言われるのも大概だな。

でも、あの言葉の濁流を一度経験すると会話する気にならないのも無理はない。

「では、行くぞ……キコユ」

「はい、何ですか熊さん」

あれ、熊会長はキコユに熊さんと呼ばれているのか。

何だろう、満更でもない顔しているぞ。老夫婦もそつだがキコユに話かけられると、表情が見事なまでに緩んでいる。年寄りキラード。

とことこと歩み寄ってくる姿は見るからに可愛らしい。白のコートも似合っていて、その相乗効果で大半の人が思わず微笑んでしまう。

「あの件、任せておくぞ」

「はい、わかりました」

あの件って何だろう。表情が引き締まったから、大切なことだとは思うが。

熊会長たちが立ち去ってから、その言葉がずっとひっかかっていたのだが、それを察知したのかキコユが俺の体に触れた。

「ハツコンさん。熊さんから頼みごとをされているので手伝ってもらえますか」

触れた相手に声を届けることも可能なのか。直接、頭に声が響いた。頭というか機体だが。

いいけど、どんな頼みごとをされたのかな。

「それは秘密です。ここにいる人々がこの階層にいる全員でしょうか」

そうだね。闇の会長とハンター協会の職員以外は全員いるよ。

外から戻ってきたところで、俺もそろそろ食事を配る時間なので、階層中の人が集まってきている。

「ちょうど、いいですね。私がハツコンさんの商品を手渡ししてもいいですか」

どうぞ。その方が受け取る側も嬉しいだろうし。

売り子が可愛らしい少女の方が貰う方も喜ぶに決まっている。是非にと、お願いしたいくらいだ。

俺に頼みたい手伝いというのがこのことなら、狙いがわかった気がする。ただの憶測だが、注意深く見守っておこう。

「いらつしゃいませ」

大音量で声を発すると、俺の前にずらつと人が並んでいく。

誰よりも早く先頭に並んだのはシュイ。そして、ほぼ同じタイミングで跳び込んだのが大食い団の四名だ。

素早さだけなら大食い団の方が圧倒的に上だったのだが、食事の時間を把握していたシュイが、獲物を狙う肉食動物のように臨戦態勢で待ち構えていたから、スタートダツシュの差が露骨に現れたようだ。

「今日はあの豪華なやつにはならないっすか？」

それって 自販機コンビニ のことだよな。一度提供してから完全にはまったようで、何かにつれシュイが言ってくるようになった。今日の変身時間は二時間分残っているから余裕はあるが、どうしようかな。

目を輝かせているシュイと、豪華なやつという言葉に反応して尻尾を激しく振っている大食い団に負けて、俺は特別に 自販機コンビニ になることにした。

「あ、ハンター協会からの手配書を端の方に貼ってもいいですか」

「い い よ」

この階層にいる殆どの人が購入しているので、ここに貼るのが一番効率的だろう。

その張り紙は冥府の王の全身絵が書いてあり、その下に情報提供者に支払う金額が記載されている。その絵は俺が録画しておいた映像を元になっているのでそっくりだ。

シユイが大量に選んで、取り出し口に落ちてきた物を取ろうとしたら、キコユが先に掴んで手渡そうとしている。

「えっと、キコユちゃんだよ。ありがとっす」

「はい、どうぞ」

キコユの笑顔に釣られてシユイも笑顔を返している。

お金も手渡しで受け取り、お釣りは手を添えて返しているので、思わず頬が緩んでしまうのも仕方がないよな。

商品はかなり格安の値段で提供しているので、銀貨支払いでお釣りが出ることが多い。ハンター稼業をしているので小銭がかさばるのを嫌ってか、銅貨を大量に持ち歩く人が少ないようだ。

それから全員の選んだ商品を全て、キコユが代わりに取り出し口から受け取って渡しているのだが、今のところ特に変化はない。

真新しい商品が並び、可愛い幼女が手渡ししてくれているという状況に、お客の気も緩んでいるな。

十人、二十人と問題なく商品の受け渡しが行われていく。そして、二十五人目の人物にキコユが商品を渡した瞬間、表情に変化があった。俺は慌てて録画を始める。

その人物は三品購入していたので、二つ目の商品を取り出そうと手をつ込んだ際に声が頭に響いた。

『この人が冥府の王の指揮官です』

やっぱりそうか。手渡すことでキコユは相手の心の声を読んでいた。

手配書を目立つ場所に貼ることで購入の際に、嫌でも目に入るから冥府の王に関連したことを無意識に思い浮かべる。そこを読まれ

るわけだ。

相手の顔はばっちり録画済み。特徴のない一般的な顔をした女性だな。紛れ込まずには最も適した人材とも言える。

「ありがとうございます」

「いつも、美味しい食事ありがとうね」

爽やかな受け答えで好印象を与えるタイプだが、冥府の王側とわかった今、全てが演技に見えてしまう。

俺が自動販売機で良かったよ。生身の体だったら表情に出ていたと思う。

このまま 結界 で閉じ込めて逃がさないようにすることも考えたのだが、熊会長には何か考えがあるかもしれないので、手は出さないでおいた。

全員の食事を出し終わると、熊会長たちが戻ってきたのでキコユがとことこと走り寄っていく。

そして、口に出さずにそっと体に触れて情報を伝えているようだ。そのまま、相手の元に向かうのではなく俺のところには熊会長たちがやってきた。

「ハツコン、その人物を覚えているだろうか」

「うん」

周囲に指揮官がいないことを確認してから、俺を取り囲むように並んでいる熊会長と闇の会長と老夫婦とキコユだけに見えるように、録画した映像を 液晶パネル に映し出した。

「はあ、こいつはうちのハンターですわ。前からこの階層で頑張っ

とる若者で、将来に期待していたんやけどなあ。まさか、冥府の王の手の者やったなんて」

「そうか。前から忍ばせていたのか、団長のように勧誘されたのかはわからぬが。さて、どうすべきか」

「暫く泳がせて、他の人物と接触するのを待つってのはどうじゃ」

「あら、お爺さんにしては良い考えですねえ」

他の人物と接触するのであれば、見張っておいて一網打尽にするのは悪くないかもしれない。

でも、それにはどれだけ時間が必要かわかったものじゃない。もっと、手早く情報を聞き出せれば楽なのだが。

「おや、皆さん集まって何のご相談ですか。靴の話題でしたら、私も混ぜてください」

何でこの面子で靴の話題をしなくてはならないのだろう。

その発言内容で誰かわかるといいうのに驚きだが、へブイが足下に視線を向けたまま声を掛けてきた。

あつ、そうだ。いるじゃないか適任が。

「まかせよう」

そう言って取り出し口に落としたミルクティーをへブイへと運んだ。

俺の発言で全員がピンときたようで、大きく一度頷いてくれた。

「あの、すみませんが、何故に見つめられているのでしょうか。最

近は強引に靴の買取りをするのは控えていますよ?」

勘違いして罪の暴露を始めそうな勢いだが、ヘブイの 感覚操作
とキコユの心の声を読み取る能力を使えば、必要な情報を聞き出
すことは可能だろう。

ヘブイ式尋問

「ところで、今、そやつは何処にいるのだ」

「大丈夫ですよ、熊さん。黒八咫が上空から見張っているのです」

キコユが既に手配していたようで、見上げた視線の先には天空を優雅に舞う、黒い翼を広げた鳥がいた。

人並みに頭が良くて空から偵察も可能な黒八咫は重宝する存在だな。

ちなみに、キコユの心を読む能力は黙っていた方がいいとの結論に達したので、その能力を知っているのは俺と熊会長とヒュールミのみとなっている。

「ハツコンさん。今のところご飯を渡した相手で、他に冥府の王と繋がっている人はいないようです。ただし、意識的にそのことを考えないようにしていたら別ですが」

彼女の能力を明かさない理由のもう一つが、他にも内密者が紛れ込んでいないか探したかったからだ。

信じたいとは思っているが、愚者の奇行団だったシュイとヘブイは未だに接点がある可能性は捨てがたい。彼らが団を抜けたふりをしているだけ、と疑い始めるとキリがない。

そこで、キコユに二人の内面も探ってもらった。

「シュイさんは、ご飯のことばかり考えていました。ヘブイさんは、靴ばかり気にしていました」

汚れた大人の心を読ませて、申し訳ない！

一応、大丈夫ってことなのだろうか。二人の場合、欲望の心の声が大きすぎて参考にならない気もする。

キコユの力により親しい人物に敵側が一応いないことが判明した。

「場所がわかり次第、捕縛してヘブイとキコユに尋問を頼みたいのだが、構わないだろうか」

「はい、構いませんよ。幻覚と幻聴で情報を聞き出すか、心を揺さぶれば良いですね」

「私も加護の力でお手伝いします」

キコユの能力については詳しい説明はしないで、ぼかしておくことにしてもらっている。

二人の了承を得たことにより、捕縛後の尋問方法が決定した。

後は捕まえるだけとなった。こういった場合は全員で取り囲んで一気に捕縛するのが妥当なのかな。

「捕まえる役目はまかしてもらってええかな。わいんとこの不祥事やさかい。キツチリ落とし前はつけさせてもらうで」

黒過ぎて表情が全くわからないが、声からは秘めた怒りを感じる。闇の会長としては自分で後始末をしたいのだろう。

「それは構わないが、できることなら何があつたかわからないように気絶させて欲しい」

「了解や。即効で昏倒させたるわ」

ギャグを挟まないぐらい頭にきているのか。

着ている金色のコートが闇の会長の中に吸い込まれたかと思うと、姿が沈んでいき地面に黒く丸い影だけがそこにあった。

これが闇人魔の能力なのだろう。そのまま裏路地の方へスーッと移動したかと思ったら、直ぐに足元へ戻ってきた。

「あの一、場所は何処でっしやる」

ああ、うん。まだ場所教えてなかったよな。

「ちょっと待ってくださいね」

キコユが人差し指と親指を丸くして口に入れ、指笛を鳴らした。

黒八咫が上空で一度旋回すると舞い降りてきた。

「お疲れ様。何処にいるか教えてね」

労わるように体を撫でながら、心声を聞いているようだ。

「ありがとう、黒八咫。ええと、場所を伝えますね」

黒八咫に教えてもらった場所の特徴を伝えると一発で理解できたようで、闇の会長が今度こそ裏路地に消えていった。

「うちの偵察や情報収集を一手に担ってきた男だ。任せておいて問題はない」

同じ団に所属していた三人が一切の躊躇なく送り出したことが、闇の会長の実力の証明になる。

待つ間にまだ食事をしていない熊会長たちへ食事を提供しておく

う。

暫く待っていると言っていると影のまま闇の会長が帰ってきたので場所を移すことにした。

大食い団を除いた知り合いが全員付いてくることとなったのだが、正直な感想を言えば尋問にそんなに人は必要ないと思う。

大所帯で人気ない道を進んでいるのだが、ちらほら木が生えてい
るだけで人が出てくることはない。

要領よく捕まえたという話なので、何処かに縛って置いてきてい
るのだろう。

五分程度で到着した場所は小さな丸太小屋で、全員が入るのには
狭すぎる。

「ちょっと待ってやー」

影状態だった闇の会長が人型に戻ると、小屋の床の一部を持ち上
げた。

この世界では床下収納ならぬ、床下部屋が流行りなのだろうか。

「この下の部屋は防音にも優れててな、何しても大丈夫やでー」

尋問に適した隠し部屋になっているようで、闇の会長が下りて行
くと、みんな後に続いている。

薄暗い階段を下った場所には古ぼけた木製の扉があり、それを押
し開けると中は学校の教室ぐらいの大きさだった。

でも、肝心の指揮官がない。何も無い殺風景な部屋なので見落
としはない。どういうことだ。

「全員部屋に入ったようやから、出しまっせ。うおおおえ」

わざとらしい嘔吐をイメージさせる声を出すと、闇の会長の中から黒い縄で縛られた女性が出てきた。

あの闇の中って人も収納できるのか、便利な身体だな。

俺は異世界に肩までどっぷり浸かり過ぎてしまったようで、思ったよりも驚かずに済んでいる。

「眠り薬でぐっすり眠つとるから、卑猥なポーズさせたり、顔に落書きでも好きにしてや。ほな、この後は任せたで」

薬が良く効いているようで、床に投げ捨てられたというのに全く起きる気配がない。

「では、私の感覚操作で触覚や痛覚を消して、他の感覚も少し弄って夢だと錯覚させましょう。視覚も変更させて冥府の王が見えるようにしますか」

「触覚が消えているなら後ろに回って、体に触れていてもばれませんよね」

気を失ったままの女性を床に座らせて、闇の会長の影が体に纏わりつくことで、その体勢を維持している。

その後ろにキコユが回り込んで背に手を当てている。

「ならば、我々は出た方が良いか」

「それは大丈夫です。冥府の王の幻覚しか見えませんので」

改めて思うのだが 感覚操作 は便利な加護だな。精神力が下回る相手でなければ効き目が薄いそうだが、ヘブイはかなりの実力者なので大概の相手には通用するらしい。

あと単純で素直な性格な人も操作されやすいそうだから、ラツミスは注意した方が良くもしいないな。

「では、始めますよ。聴覚は生きていますので声は控えてください」

静かになったのを確認すると、ヘブイが女性の額を軽く指で叩いた。

すると、起きたようでゆっくりと瞼を開き寝ぼけ眼で正面を眺めている。

だが、徐々にその目は見開かれていき、驚愕のあまり大口を開けているのだが、身体は全く動いていない。

「今、お前の夢に直接語り掛けている。私の顔は理解できるか」

「は、はい。冥府の王……様ですよ……ね」

よっし、上手くいっているようだ。怯えながらも感覚がないので夢だと解釈したのか、少しだけ、落ち着きを取り戻している。

「理解しているようだな。では、我らからの依頼をした時の状況と内容を、一言一句違わず復唱してもらおうか。その程度のことも覚えていないようなら、指揮権の変更も考えねばならぬ」

「は、はい！」

ちょっと強引な話の持って行き方にも思えたが、すっかり信じてくれている。この調子なら全て聞きだせそうだ。

「え、ええと、あれは二ヶ月ほど前でした。人間の姿で私の前に現れて、提案を持ちかけてくれました。言うことを聞いて手伝えば、ギャンブルで作った借金を全て返済して、更に一生遊べる金をくたさると」

冥府の王は人間の姿にも化けられるのか、これは覚えておかないと。

しかし、目立たない外見で大人しそうにも見えるのに、ギャンブルの借金があったのか。人は見かけによらないな。

他の階層の指揮官も同様のことを口にしていて、昔から冥府の王の仲間だった者は誰一人としていなかった。

金や欲望を満たす代わりにここ一年以内で仲間になった者ばかりで、彼らから冥府の王の詳しい情報は得られていない。

「その提案の内容は」

「はい！ハンターとして防衛を手伝いながら、この指輪で魔物たちに攻める命令をしろと。これを付けている限り私が襲われることが全くないと仰っていました」

これも既に知っている情報だ。やはり、貴重な話を指揮官から聞くとはできなさそうだ。

現場の人間を雇うことで自分の尻尾を掴ませないようにしているのか。どうりで、有能な指揮官に一度も遭遇してない訳だ。

「思い出せることはそれだけか」

「は、はい。あっ、そうだ！二週間ぐらい前だったと思います。

新たに雇われた患者の奇行団の団長たちと会いました。ある人物を

探しているそうで、ダンジョン攻略には必須の存在だそうです」

「おっ、これは新しい情報だ。団長たちはこの階層に寄っていたのか。」

「探している人物については心当たりがある。残りの団員二名だろう。」

「その人物はこの階層にいたのか」

「い、いえ、特徴を聞いたのですが、この階層にはそんな人がいない。それを伝えると直ぐに帰っていきました」

「ここでは見つからなかったと。一先ずは安心だが、彼らは階層を自由に行き来できるのであれば、先に団員を見つけられる可能性が高い。」

「それから幾つか質問をしていたが特に役立ちそうな情報は得られないことなく、尋問も終わることになった。」

「最後に一つ、その靴を脱いでみてくれないか」

「おい、冥府の王の姿で何を言った今。」

「えっと、靴ですか。夢の中なので体が思ったように動かなくて」

「それでは、わしが自ら徐々に香りが溢れ出すよう、慎重に脱がしてやるうでは」

「そこで言葉が途切れたのは、後頭部にシユイが蹴りを入れたからだ。」

「冥府の王の姿で蹴りの一発で倒れる姿は、中々に情けないものだ。」

ある。

「えっ、冥府の王さ……ええっ！ 誰よ、あんたたちっ！」

今の衝撃で 感覚操作 が切れたのか。

取り乱し叫んでいた女性だったが、床から伸びた影が人の形となり金色のコートを着込んだ時点で、顔面蒼白となり黙り込んでいる。

「お前さんはギャンブル好きで危なっかしいところはあった。けどな、わいは信じてたんやで。前に金貸した時、泣きながら二度とギャンブルはしないって口にした言葉を……ほんまに、信じてたんやで」

胸に詰まった感情を吐き出すように囁く言葉を聞いて、女性が力なく頷垂れた。

後味の悪い結末だが、これで指揮官の問題は片付いたな。

残りは階層主によって木に変えられた住民を元に戻すだけか。

11の世界の強さ

強力なメンバーを取り揃えて森林破壊に励んでいる今日この頃、如何お過ごしでしょうか。

指輪を外され統率の取れなくなった魔物たちは集落を襲うことはなくなったのだが、木々を伐採すると目の色を変えて現れるのは変わりなかった。

結局、木を取り除くには魔物との戦いは避けられず、もう何匹の魔物を倒したのか数えるのも嫌になるくらいだ。

でも、次々と敵が現れることのメリツトもある。

ラツミスは木を引っこ抜くことに専念していて、俺は守りと野菜の魔物を殴り倒す仕事を任命されているのだが、強化ペットボトルの一撃で野菜系は倒せるのでポイントが良い感じで溜まっている。

汁を結構飛ばしてくるのが厭らしいが、それは全て 結界 で弾いているので俺とラツミスに実害はない。

大食い団は噛みついて倒すのがメインの攻撃方法なので汁が体に付着してしまい、匂いが強烈らしく鼻に皺が寄っている。味は悪くないらしいので、齧った箇所はそのまま咀嚼して呑み込んでいるようだ。

倒している最中に腹一杯で動けなくなるぞ……。

大食い団を眺めていたら考えが逸れてしまった。

ポイントについてだが、最近は自動販売機の商品の値段を抑えて販売するか、状況によっては無料で大盤振る舞いしているので、敵を倒して手に入るポイントはとてもありがたい。

そんなに強い敵ではないので階層主と比べては失礼なぐらい微々たる量だが、商品を提供するぐらいは軽く補える。

それに、溶岩人魔との戦いで水をぶつけたダメージが結構あった

ようで、思わず冷たいが温かいになるぐらいのポイントを手に入れている。

新たな加護を得られるほどのポイントはないが、枯渴の心配をする必要はないぐらいは余裕ができた。

「よいしょつとおおおっ！」

しかし、見慣れている筈なのだが凄いな。ラツミスの手には掛かれば、根を大地に張った大木も雑草を引っこ抜くような感じで抜かれていく。

改めて思うことなのだが、木を強引に力で引っこ抜くって尋常じゃない。

やっぱり、初めて会った頃より 怪力 が増しているよな。これは気のせいではなく、ずっと見てきた俺だから確信が持てた。

そもそも、この世界のハンターの存在に疑問があった。一般市民と実力差があり過ぎるのだ。前からずっと気になっていたのだが、何となくその仕組みの謎がわかった気がする。といっても完全に俺の勝手な妄想なのだが。

まず、俺は敵を倒すとポイントが与えられ、それを自由に割り振ってステータスの強化や商品の購入に充てることができる。

それがこの世界の住民にはできないのか、キコユに体を触ってもらい訊ねたことがある。

すると、こんな答えが返ってきた。

「ポイントですか。そういうのはないと思います。魔物を倒せばその生命力を貰い受けることで、身体が強化するというのがこの世界での常識ですよ」

それを聞いて思いついたのが、普通の人は敵を倒してポイントを

得ているのだが、それを自分で割り振ることができずに勝手に配分されるのではないかということだ。

ポイントで強化される値も個人差があつて筋力が上がりやすい人もいれば、能力の上昇率が低い人もいる。俗に言う才能の差。

ラツミスの場合、筋力が強化されやすいのだろう。

今まで数々の敵を倒してきた彼女だ。ゲームで例えるなら経験値を大量に獲得して、レベルアップしていてもおかしくない。

王蛙人魔と戦った際には下が沼地だったとはいえ、俺を背負った状態で大量の怪我人を乗せた荷台をゆっくり引くことしか出来なかった。

たぶん、今の彼女なら楽々と引つ張れるのではないだろうか。

「やれやれ、おつくうなことじゃ」

お爺さんが澄んだ空のような色の扇を振ると、強風が吹き荒れ木々が根元から切断されていく。

扇をくいと上に振ると、切断された木々が強風に煽られ空に浮かび、森中に吹き飛ばされていった。

あの常識外れの魔法だつて元から扱えたわけじゃないそうだ。

若い頃から才能はあつたそうだが、熊会長たちと修羅場を潜り抜け数多の魔物を討伐していく際に磨かれていったと、以前お爺さんがミネラルウォーターを飲みながら孫の前で自慢げに語っていた。

それだつて魔物からポイントを得て、能力が強化されたと考えたら納得がいく。

俺だけがそのポイントを効率よく自分の意思で割り振れる……と戦闘中に考察していると周辺の木々が綺麗さっぱり消え失せていた。

「あつ、抜いたり切った木は捨てないで置いておいてください。吸収しますので」

キコユが土の球　畑の欠片を手に倒木に駆け寄ると片っ端から吸収していく。あのボーリング玉程度の土の塊に木が吸い込まれる光景は違和感しかない。

キコユ曰く「植物だと吸収が早いんです」らしいが、それで納得するしかないのか。

そんなことができるなら、生えている木をそのまま吸い込めばいいと思ったのだが、それは無理らしい。

「他の土に根付いている植物だと、畑さんが遠慮して手を出さないみたいです」

意識がない筈なのに、そういう配慮はするのか……紳士だな。

ほんと、一度腹を割って話しこんでみたい人　畑だよ。

何にせよ、おかげで木の処分もはかどり階層主までの道が着々と整えられている。

引っこ抜かれて凹んだ地面は、お爺さんが土魔法で平らにしてくれているので、ボタンが引く張る荷台も滞りなく進み順調そのものだ。

階層主を倒した後も、この道は今後有効に使われることだろう。

闇の森林は光が入り込まない場所なので夜目に強いが　暗視　といった加護を持たない者以外は昼間であろうが、常時明かりを必要とするそうだ。

大きく開けた道だから、ここなら陽の光も射し込むので昼間の危険度がぐんと下がる。

「こここの階層主……老木魔がキレて襲ってこねえな」

荷台の上で寝転んでいるヒュールミが空を見上げながらぼやいている。

荷台にはキコユ、ヒュールミ、老夫婦がいるので余程のことがない。

い限り安全が保障されている。なので、まるで緊張感がなく欠伸を噛み殺しながら、ぼけーっと雲を目で追って今にも寝てしまいそうだ。

「まあ、元から温厚な階層主やからなあ。集落が今回襲われたんは異例中の異例やで。冥府の王の実力は馬鹿にできへんな」

近くの地面から影が噴き出たかと思うと、それが人の形となり派手なコートを着込んだ。

影状態だと闇の会長を見つけるのは不可能じゃないのだろうか。

「集落の側まで来たって話だが」

「そうやねん。あんなデカいのが朝っぱらからおっ立ちやがって、ほんまごつつう驚いたわ。壁と建物を傷つけとうないようで、花粉のみの攻撃やったから、まだマシやったけど」

あんな巨大な木が攻撃をしてきたら、普通は壊滅状態に陥る。

操られながらも木材を傷つけたくないという本能が残っていたから、ハンターや大人の男たちは生き延びられたのか。

「本来、老木魔は悪い奴やないんやけどな。攻撃されない限り手え出さへんし、この森の木々が燃えやすいつて話を聞いたことあらへんか？」

「おう、知ってるぜ。だから、この階層では火気厳禁なんだよな」

「そうやねん。せやけど、どこにもボケはおつてな。追い詰められて火を使うハンターが結構おるんや。そしたら、あっちゅう間に火が広がるんやけど、そないなつた時に木々を操って延焼を抑えたり、

水魔法を操って火を消すのが老大木魔の役目なんや。この階層の守り神みたいな存在やな」

命の危機に晒された時、火を使ったら大惨事になるとわかっていても、生き延びる為に火を使うハンターはいるだろうな。

操られて住民を木にした一件がなければ、老大木魔は見逃すべき存在なのかもしれない。

「しかし、ヒュールミよ。あの老大木魔を本当に倒せるのだろうか」

熊会長も会話の中身が気になったようで、荷台に近づいてきた。

「まあ、おそらく……だけどな。俺の作った薬は魔物たちへの効き目は抜群だった。それを、直接体の中に流し込めば倒せる……予定だな」

いつもは発明品のできには自信満々なヒュールミだが、今回ばかりは相手が相手なので歯切れが悪い。

「口と目ん玉あるから、まあ、流し込むことは不可能やないな」

老大木魔は目と口があるのだが、会話をする程の知能は無いらしい。その穴を狙って薬を流し込む予定なのだが。

ちなみに、その薬は荷台に満載されている樽に入っている。樽が合計六個あり、充分な量を確保できたとヒュールミが言っていた。

あの巨体なので直ぐに効き目がないかもしれないそうで、樽を口に放り込んだら一度撤退する手筈になっている。

「植物が苦手とする成分を濃縮して作り上げた、対植物用の毒薬だ。

人間が飲んでも死んだりはしないが、死ぬ程まずいから飲むなよ」

近くでじつと樽を見つめていた、シユイと大食い団に釘を刺している。

食べ物や飲み物が絡むと、この五人組は信用できない。ちゃんと説明しておかないと「隠すぐらい美味しい物に違いないっす」「そっうだそうだ！」「ぐらい言い出しそうだ……スナック菓子でも渡しておこう。」

今回の討伐はしっかりと対策も考えてあるので、俺の出る幕はないようだな。

「こっちの樽はなんっすか。もしかして、こっそり一人で楽しむよっうのお酒っすか」

まだ諦めきれないのか、シユイが並んで置かれている樽から少し離れた荷台の上に転がっている樽を指差して、じつと見つめている。

「空の樽だぜ。思ったより濃度を濃くしちゃってな。予定より一樽少なくなったが、その分、威力は増しているから安心してくれ」

「そっつすか……」

大食い団共々、意気消沈している。そこまで落ち込まなくてもいいだろうに。

仕方ない好物のから揚げ渡しておこう。あと炭酸ジュースで腹を膨らませておけば、暫く静かになるだろう。

「わーい、からあで、からあでっすー！」

「やった、やった」

もう、からあでで定着してしまっているな。

大食い団とシュイが輪になって喜んでいいる。何だろつ、凄く和む光景だ。

彼女たちは老木魔との戦いで、周りの雑魚討伐を担当する予定になっているので、やる気を持続させて今の内に英気を養っておかないと。

階層主を担当するのは、お爺さんとラツミス……それに黒八咫となる。

風の魔法で口に樽を放り込むか、ラツミスが投げつけるか、黒八咫が掴んで運ぶかぐらいしか手が無い為だ。

あまりに体が大き過ぎる相手なので口の位置がかなり高い場所にあり、普通なら樽を放り込むことが不可能。今までも似たような攻略方法を考えたハンターたちもいたようだが、その為の手段が無かった。

その点、こっちは魔法、怪力、空を飛んで輸送と選択肢が幾つも存在している。かなり恵まれている状況といえる。

ここまで準備万端で挑める心強さ。戦力、戦略共に充実した状況なので、正直、かなり期待している。とはいえ、何が起こるかかわらないのが現実。

油断をしないように気を引き締めていかないと。

オートレストラン

伐採と魔物討伐が順調に進み、陽が落ちてくる頃には集落から離れてしまっていたので、ここで野営することとなった。

夜目の利く大食い団の面々もいるので、夜襲への対応も問題ないと判断してのことだ。

今日は日が暮れてからも敵の攻撃が激しく、食事を取るタイミングを失ってしまい敵の攻撃が収まったのは二十二時を過ぎていた。

「ハッコオオオオン！ お腹空いたっす、もう動けないっす！」

「ボクもボクも」

シュイとペルが俺の体に縋りついて懇願している。

大食い団の残り三名も後ろにならび、涎を垂れ流しているのが不気味だ。

「うー、さっみいな。やっぱ森の中は冷えるぜ」

ヒュールミが寒そうに肩を抱いている。

闇の森林内部は冷たい風が時折吹き付けてくるので、防寒対策をしっかりとしておくのがここで狩りをするハンターとしての常識らしい。

「うちは全然寒くないよ。ハッコンからもらったこのマントがあるからっ」

ラツミスは縦縞のマントを着込んで、微笑みながらヒュールミに

見せびらかしている。

それは武器屋で売っていたマントで。ちゃんとお金を支払って俺が購入してラツミスにプレゼントをした。

戦闘中は邪魔になるので着ていなかったようだが、寒くなってきたので羽織ってくれたようだ。

「あれ、買ったのかよ……ハツコン、オレのは？」

「またのごりようをおまちしています」

「はぐらかしやがったな」

前に工具渡したじゃないか。まあ、拗ねている振りをしているだけで、半分以上は冗談だとは思っけど。

「いちやいちゃいするのは、後にして欲しいです。もう、お腹と背中がくっついて新たな生物に進化するっす」

それはそれで見たいが、シユイが本当に限界に近いようだ。

今日は寒いので、カップラーメンが美味しいだろう。ならいつものように……いや、ちょっと待て。もう二十二時を過ぎていて、今日は一度もフォームエンジをしていない。

制限時間は全く減っていないのか。なら、ちょっと趣向を凝らした晩御飯にしてみよう。

俺は自動販売機レトロシリーズから、うどん自動販売機を選
択した。

オートレストランという言葉聞いたことがあるだろうか。俺がまだ生まれる前、1970年代、自動販売機で自動調理をして食事を提供するレストランが流行った時期があった。

道路沿いに作られトラックや車の運転手を狙って作られた二十四時間いつでも食べられる、自動販売機のためのレストラン。

その後、テレビゲーム機が普及し始めてゲームセンターが現れると、そこに調理された料理が出てくる自動販売機が置かれることとなり、一大ブームが起こったのだ。

でも、それは長くは続かなかった……コンビニの存在である。

80年代になると各地でコンビニが増加して、二十四時間いつでも販売できることが売りの自動販売機を利用しなくても商品が購入できるようになり、その姿を徐々に消していったのだ。

四十年近く経っても未だにメンテナンスされ稼働している自動販売機は数少ないが現存していて、マニアの間では聖地の様な扱いになっている。

俺も車を走らせて食べに行つたことが何度かある。

偶然、古いホテルやゲームセンターで遭遇することもあり、そんな時は写真を撮ってから購入するのがお決まりだった。

そんなレトロな自動販売機の数々で売られている商品を今回は提供しようと思つている。

うどんの自動販売機も主なメーカーが二種類あつてどちらにしようか迷つたのだが、個人的に好きな方を選ばせてもらった。

ちなみにこのこだわりは、友人に言わせると「理解不能」らしい。フォルムと湯切り方式とか違いがあつて面白いのだが。

体が長細くなり身体の一部に、一見スタンドグラスのようなデザインで『うどん』と書かれている。体内をらせん状に配置されたうどんの入った器が下に流れ、お湯が注がれて上部を押さえて湯切りされたのがわかる。

そして、出汁が注がれうどんが完成となつた。

体内でうどんが作られる様子を覗けるというのは、自動販売機冥利に尽きるな。良い体験させてもらったよ。

「うわ、いつもの温かいパスタとは違うっすね！ 何か太いっす」

熱々の肉うどんを器ごと受け取り、シユイが好奇心に目を輝かせている。

後ろに並んでいたみんなも興味津々なようで、彼女が食べるのをじっと見つめている。

そんな周囲の視線を気にもせず、自分の背負い袋から取り出したフォークで肉ごとうどんを突き刺し、湯気の立ち昇るそれを口へと運んだ。

「はあああう、温かくて旨いっす！ パスタが太いから食べごたえがあつて、それにこのスープが格別っすよ。肉の味じゃなくて、不思議な味がするっす」

昆布出汁がこの世界ではないのか。それに、海が近くないと海の幸を食べる機会が全くないので、この味は初体験のようだ。

彼女があつという間に完食したのだが、こつちも素早さと器用さが上がっているので、普通の自動販売機と比べて製造速度が段違いだ。既に大食い団四名には渡し終えていた。

シユイが素早くまた後方に並んでいるな。お腹が少しは膨れただろうから、次の順番までは我慢してくれるだろう。

全員にうどんを渡し終えると再びシユイが待ち構えていた。

次も肉うどんを食べるつもりのようなが、そうはいかない。次のメニューは変更となる。

フォルムチェンジをして今度は ハンバーガー自動販売機 になった。

白い立派な顎髭を蓄えたお爺さんがハンバーガーを手にしている絵が、機体の上部三分の一を占める。

そして、下に三つのボタンがあり、シンプルなハンバーガーとチーズバーガー等が選べる。俺が見つけた一台目は全てチーズバーガーのみだったが、それも雰囲気があつていいものだ。

今はその中身も自動販売機を設置しているオーナーが手造りをして入れ替えている場合もあり、各地で味が異なりそれも楽しみの一つだったりする。

「あれ、また違つうのになつたつすね。この絵と同じのが食べられるつすか」

シユイが興味を持ってくれたようで、目にも止まらぬ速度でチーズバーガーのボタンを押した。

本来なら六十秒必要とするのだが、直ぐに出来上がり取り出し口に流れ出る。

「あれ、思ったより小っちゃいつすね」

絵はかなり大きい感じに書かれているから、小さめの箱が出てきた少しがっかりしているようだ。確かに箱の大きさは、某有名ハンバーガー店のより小さめだ。

ただ、値段がお手頃なのと後は……開けてみたらわかるかな。

箱を開けると包み紙に包まれたハンバーガーが出てきた。紙を剥がすとかなり肉厚でチーズがとろとろに溶けて絡んでいる。

そう、このハンバーガー意外に縦にかさばっているのだ。パテとバンズが厚めなので実は食べごたえがあり、箱の大きさを判断してはいけない。

まあ、これも自販機によって異なるので一概には言えないのだが。以前食べた中で一番の当たりをチョイスしておく。

「はうほうほう、肉汁が溢れてっ！ うん、これもいけるつすね！」

よっし、これも好評のようだ。

二巡目になった大食い団も既に並んでいたのでハンバーガーを渡し終えると、他の人たちも後ろに続いていった。

最後尾にシユイがいるのは、まあ当然だろう。

オートレストラン定番の自動販売機で今日はとことんやってみるか。

さて、王道でいくなら次はアルミホイルに包まれたトーストか、それともうどんと似たような仕組みのラーメンもありだな。

この自動販売機の良いところは、自動販売機でありながら手作り感があるところだ。味が統一された既製品との違いを感じられる。

どちらが優れているというわけではなく、このレトロな自動販売機の良さは他の商品とは異なる人の温かみだと勝手に思っている。

四十年もの間、稼働し続けてメンテも一苦労だろう。そんな手間を考えるなら、新しい自動販売機に置き換えるか、いっそ廃棄してしまった方が楽に決まっている。

だというのに、それを使い続ける人の優しさや、物を大切にす素晴らしさも含めて味わえる、そんなレトロ自動販売機がたまらなく好きだった。

「うわ、ハッコン、これすっごく美味しいよ。ポカポカするね」

「だな。オレはこの肉を挟んだパン気に入ってたぜ」

ラッミスとヒュールミが食事をしながら和気藹々と会話が弾んでいる。

その光景が少し羨ましく、一緒にご飯を食べられないこの体が少しいだけ……恨めしく思えてしまう。

だけど、生前の自動販売機マニアだった頃は一人で各地を巡り、

一人で商品を買って満足していた。こうやって自動販売機の良さをアピールできて喜んでもらえていることは、マニアとして嬉しいことだ。

自分が良いと思ったことは他の人にも知って理解してもらいたい。誰もが抱く感情だろう。

生前は無駄遣いだと家族や友人が眉をひそめていた趣味が、こうやって人の役に立っているのだ。贅沢を言ったら罰が当たる。

まだまだ途切れそうにない列を見ながら、日を跨ぐまで次々と出来たての食事を渡していった。

露天風呂

あれから、一度も集落に戻ることなく老木魔を目掛けて突き進んでいる。

食事は俺とキコユが担当しているので満足してもらえているようだ。といってもキコユが提供するの、生で食べられる野菜や果物なのだが。

女性が多いので遠征の場合トイレ問題が出てくるのだが、俺は災害用簡易トイレを提供できるので重宝されている。

食べることも大切だが、こういったことも馬鹿にできないくらい重要なことだ。

そんなことまで考える余裕があるのも、今までの行程が順調だからこそ。魔物に対してこちらの人員との戦闘力に差があるので、今のところ一度も苦戦をしていない。

戦力過多に見えるが、これでもあの巨大ビルディングに匹敵する老木魔を、正攻法で倒せるかは怪しいそうだ。

今までに老木魔が倒されたのはたった一回で、その時の戦い方を闇の会長に訊ねたのだが、表情は読み取れないというのに不機嫌になったのが即座に伝わってきた。

「何十年前やったかな、確かに一度だけ老木魔は倒されたことがあるんや……大火災と引き換えにやけどな。火の魔法を多用して燃やし尽くしたそうやで。その結果、この階層の全てが燃え尽きて、十年ぐらい魔物も人もいない寂しい階層になってもうてな」

だから、この階層では火気厳禁を徹底しているのか。

一度焼け野原となった苦い過去があるから、魔物に対して火を使

用した者は厳しく罰せられる。

大火災の前例を聞いた今となつては、誰も森林で火を使おうとは思わないだろう。

実際、食事に関しても普通は保存食を携帯して、森の中で火を使って調理する者は一人もいない。自動販売機の温かい商品は、そのこともあつて重宝されている。

そんな状況で木々を伐採しながら進む日々も四日目となつた。こ
うなつてくると、切実な問題が出てくるのだ。

汗と体臭。

彼らは肉体労働で汗もかなり流している。俺が渡す綺麗なタオル
を水で濡らして、身体を拭いているようだが、それだけでは限度が
ある。

髪の毛もミネラルウォーターで軽く洗つたりはしているようだが、
やはり全身さつぱりしたいと誰もが考えてしまう頃合い。

そこで、仲間たちはお手製の風呂を作ることとなつた。

魔物が徘徊する場所で風呂に入るとは並の神経では考えられな
いことなのだが、圧倒的な実力でねじ伏せている一行には些細な問
題らしい。

特にやる気になつているのが女性陣だったりする。風呂となる木
をラツミスが引っこ抜き、ヒュールミが斬るべき場所を指示して、
ユミテお婆さんが見事な剣捌きで木材へと加工している。

そうして、出来上がった木材を組み立てて木製の浴槽を作りだし
た。大きさも相当なもので、十人ぐらいなら一度に入れる立派な物
だ。

出来上がったそれは木々を伐採してできた道の端に置かれ、余つ
た木材で森側に足場も作つてある。そこで体や頭を洗つつもりによ
うだ。

更に木材での壁も制作済みで、周囲から見られぬように配慮もさ

れている。

木製の浴槽に注がれるお湯は 温泉自動販売機 になった俺が担当した。こうして、火を一切使わない安全なお風呂が完成した。

「おっし、完成したな。お前ら、覗いたら婆さんに三枚に下ろしてもらうから、それを覚悟してやれよ」

ヒュールミが男性陣に釘を刺したのだが、誰もが平然と頷いている。

残っている面子が、熊会長、ヘブイ、お爺さん、闇の会長、大食い団の残り三名となっているので、正直、覗きをやりそうな人が全くない。

「というか人間がヘブイとお爺さんだけで、お爺さんは歳だし、もう片方は靴以外に興味がないので覗きの心配はなさそうだ。」

「しかし、覗きを考える不逞の輩がいるかもしれませんので、私が見張りに立ちましようか。神の名に誓って覗きはしないと誓いますので。ええもう、女性の裸体なんて微塵も興味ありませんから」

聖職者として立派な宣言だと思われそうだが、全員が胡散臭そうにヘブイを見ている。

女性陣の足元を見ながらの発言じゃなければ、もう少し説得力があっただろうに。

「見張りは大丈夫ですよ。ボタンと黒八咫がしてくれますから」

空から舞い降りてきた黒八咫が壁の上に着地すると、二つの目が俺たちを睥睨している。

眼光鋭く知的な瞳が、どんな些細なことも見逃さないと語っているようだ。

ボタンも女性陣が着替える場所の手前で座り込んでいるので、覗きの防衛としては完璧な布陣だろう。

「じゃあ、ハッコンも行こうね」

ラッミスがそう言って俺を抱き上げると壁の向こう側へ運んでいく。

あれっ、俺は同行するの？

「タオルとか体洗う道具を出してもらわないと。それに風呂上がり一杯は大切だよ」

ああ、なるほど。以前、共同浴場でも女性の脱衣所で物品の販売を担当した実績がある。その時はシャンプー、トリートメントが飛ぶように売れたし、風呂上がりの牛乳やスポーツドリンクも大好評だった。

それに俺は自動販売機なので風呂場に存在していても何ら不思議ではない。

壁の向こうには木製の足場があるので、そこでみんなが着替えを始めるようとしていた。

先にお風呂に入るのはラッミス、ヒュールミ、シユイ、お婆さん、キココ、スコとなっている。

普通の一般的な男性なら、お風呂シーンを想像するだけで興奮しても仕方がないメンバーが取り揃えられている。

立派な胸部を所有している、ラッミス。

全体的にバランスのいい身体つきの、シユイ。

寂しい胸もそれはそれで需要のある、ヒュールミ。

一部の特殊性癖の人には人気が出そうな、キココ。

熟女というには熟れすぎているが、そっち系のマニアも存在する

らしい、ユミテお婆さん。

お風呂に入る動物担当、スコ。
選り取り見取りのラインナップだ。

「久しぶりの風呂が楽しみだぜ……って、ちょっと待てよ」

黒衣を脱いで内部に着込んでいた薄い布切れに手を掛けようとしていたヒュールミの動きが止まり、目を細めて何故か俺を凝視している。

「つい違和感なく勢いで脱ぎかけたが、何でハッコンがここにいるんだ」

「えっ、だって、タオルとか泡が出て綺麗になる液体とか使うですよ？」

既に下着一枚のラツミスが首を傾げている。

そうだね。何もおかしくないね。

風呂上がりに冷たい飲み物も提供するよ。ほら、コーヒー牛乳とか最高だよ。だから、何も不自然じゃないよ。

「いや、そうじゃねえよ。それなら、先に買っておけばいいだけだ。ラツミス、忘れてるだろ。ハッコンの中には人間の男の魂が宿っているんだぞ」

ちっ、そこに気づくとは流石と言っておこうかヒュールミ。

別に女性の裸体が気になる訳でもないし、こそつと録画して後で楽しもうなんて思いもしていない。ええ、もう、全く。

「あっ、そうだった……でも、ハッコンに見られるなら、うちは平

「気だよ」

そう言っただ着姿で堂々とメリハリのあり過ぎる体を晒している。スコは全く気にもせず全裸　まあ、上着を一枚脱いだ姿でお湯を浴びて俺から購入したシャンプーで全身を洗っている。泡だらけの姿も可愛らしくてグッドだ。

お婆さんも俺の存在なんて気にも留めてないようで、全裸で商品を購入してスコの隣に並んで座っている。

「二人とも何しているっすか。一応、敵のいる森の中っすよ。時間そんなに掛けてられないっす」

シユイも一糸まとわぬ姿で声を掛けてきたのだが、何故か俺の前にずっとラツミスとヒュールミが移動して視界を遮られてしまった。

「お、おう、直ぐに脱ぐぜ」

「うんうん」

シユイは踵を返し、お湯を一回浴びただけで浴槽に入ろうとしたところを、お婆さんに止められて、全身泡だらけにさせられている。二人が邪魔で良く見えないが。

「えと、じゃあ、脱ぐよ」

「まあ、オレもハッコン相手なら別に平気だけだよ……」

あれ、何で顔を赤らめてこっちをチラチラ見ながら下着に手を掛けているのだろう。

な、何だこの駆動音の高鳴りは。照れながら服を脱ごうとする姿

というのは、ここまで心が揺さぶられる効果があるというのか。

別に自動販売機が興奮したりはしないのだが、しないのだがこのシチュエーションは危険すぎる。久しぶりに自分の中の男の本能が目覚めそうな気がしなくもない。

下着姿になったヒュールミと既に最後の一枚となっているラツミスが下着に手を掛けた。

「あれっ、あっちの方、赤くないっすか！」

最後の砦を取り払う直前、シユイの叫ぶ声が響き、全員が指差す方向に視線を向ける。

ああもう、惜しいところぞっ！ じゃない、赤いって何が。

遅れて俺もそちらに目を向けると、確かに赤い光が飛び込んだ。た。

あれは、森が燃えているのかっ！

どういうことだ、誰からが森に火を放ったとでもいうのか。いや、森に入ったハンターは俺たちだけだし、後から追ってきたとしても誰にも抜かれていない。

異変中に森に入ったハンターがいたとしても、凶暴化した森の魔物たち相手に無事でいられるとは思えない。どういうことだ、何故、森が燃え盛っているんだ。

大炎上

呑気に風呂に入っている場合ではないと、入浴中の女性たちが一斉に体を乾かし服を着こんでいる。

ラツミスたちは風呂に入る暇がなかったがそれどころではない。目に映る赤い炎がさつきよりも範囲を広げ、視界の下半分が赤で染められている。

全体的に見回してみてもわかったのだが、森から突き抜けている老木が一番激しく燃え上っていた。

「どうなっているというのだ」

素早く服を着たラツミスが俺を背負って、風呂の順番待ちをしていた男性たちの元へ戻ると、全員が炎を見つめて放心している。

「クロクロ、どうなっている!」

「そんなん急に振られても困るんやけど……誰かが階層主の老木魔を焼き殺したっちゅうことやろうな」

熊会長に迫られながら、闇の会長が断言した。

この状況から、そうとしか考えられないよな。

「考察は後回しにせんか。現状を打破することが何よりも大切なことじゃろ」

お爺さんに扇子で尻を叩かれ、二人の背筋が伸びた。

こんな事をしている間に火は勢いを増し、こちらに迫ってきてい

る。うるたえるのは後回しだよな。

「そうであった。大食い団の諸君、お主たちは全力で集落に戻り、残って居る全員に清流の湖階層へ避難する様に伝えてくれ！」

「階層主が倒されたなら、木になっている住民も復活している筈だ。その人たちのことも頼むぜ！ あと、転送陣は乗って誰かが地面に触れて、転移と言えば作動するようにしてある！」

駆けだす直前の大食い団の背にヒュールミが怒鳴ると、四人とも手を挙げてそれに応えた。

彼らの足なら炎よりも早く集落にたどり着けるだろう。あつちはどうにかなると信じるしかない。

それに、彼らのことを祈っていられる程、こちら側に余裕はないのだ。

延焼は瞬く間に広がり、燃えて爆ぜる木々の音があちらこちらから響いてくる。熱さも増してきているようで、ラツミスは額に薄らと汗を浮かべていた。

「我々は老木魔が本当に倒されたのか確認をせねばならない！ もし、倒されていなければ木と化した人々が焼き殺されてしまうからだ！」

俺たちも逃げないと、と提案するつもりだったのだが熊会長の説明を聞いて、発言を自重した。

そうだった。老木魔が燃えているのは確かだろうが、これで倒されたという保証はないのだ。奴を倒さなければ木にされた人が元に戻ることはない。

となると、俺たちはここで炎に耐えて老木魔の現状を確認しなくてはならないのか。更に状況が厳しくなったぞ。

「ラツミス、シメライ、ユミテは周囲の木々を引っこ抜くか切倒すかしてくれ！ キコユはそれを片っ端から処理して欲しい。火を少しでも遠ざけられるように！」

「はい！」

「ふむ、了承した」

「未来ある若者を焼き殺させる訳には、いきませんからねえ」

「はい、頑張ります」

各々が生き延びる為に必死になっている最中、ヒュールミは手を掲げて、炎を睨みながら顔をしかめている。

「風は炎の位置からしてかなり強めの向かい風か。火の回りは益々早くなっている。このまま、森全体の炎上を止める手立ては……ない。闇の森林が全焼するのは免れない……」

呟く言葉に耳を傾けているのだが、耳ないけど。冷静に状況を分析している場合じゃないと思うのだが。このままでは近いうちに焼け死ぬだけだ。

周りの木々が猛スピードで伐採されていくが、それでも助かるだけのスペースを確保できるかは疑問でしかない。

「助かるにはやるしかねえか。ハツコン、頼みがある」

「いいいらっしやいませ」

真剣な眼差しで至近距離から見つめられて、思わずどもってしまった。

ヒュールミには何か秘策があるのだろうか。もし、あるなら協力は惜しまないよ。

「よく燃える油を出す機械に化けたよな、ハツコンは」

「うん」

「あれになつてくれ。そして、その油を全力でこっちより向こう側にばらまいて欲しい」

えっ、炎が迫っている逆方向に灯油を撒けてことなのか？

いやいやいや、そんなことをしたら自分の首を自分で絞めるようなものだ。ただでさえ、危機的状況なのに。

「これは考えがあつてのどこだ、信用してくれ、ハツコン。頼むっ」

俺の体を掴んで、額を当てて懇願している。

そんな姿を見せられたら、信じるしかないよな。わかったよ、ヒュールミ。どうせ、このままじゃヤバいんだ。やるだけやってみよう！

「いらっしやいませ」

「信じてくれて、ありがとよ、ハツコン」

そう言って嬉しそうに微笑むと強く抱きしめてきた。

ヒュールミなら大丈夫。そう断言できるくらいお互いに信じられる関係を築いてきた。彼女を信じるしかない。

ガソリンスタンドで見かける 灯油計量器 にフォームチェンジすると、灯油を全力で風下の方へばらまいた。筋力が上がっているので広範囲に届き、枝葉にしっかりと灯油が付着している。

「よっし、完璧だぜ、ハッコン」

ヒュールミは荷台に載せていた背負い袋の中から二本の松明を取り出して火をつけると、一本を地面に突き刺し、もう一本を大きく振りかぶった。

灯油を撒いた木々に松明を投げつけるつもりかっ！

そんなことをしたら……ああ、そういうことか！

ここで、ようやくヒュールミの狙いが理解できた。彼女が投げつけた松明は灯油まみれの木にぶつかると、一気に炎上した。

更にもう一本、道を挟んだ反対側へと投げつける。

後方からも燃え上り、仲間が驚いて振り返りその光景に啞然としている。

「何を考えておるのだ！ こちらにまで火を放てば炎に囲まれ、死を待つのみだぞ！」

駆け寄ってきた熊会長が激昂して、ヒュールミに掴みかかろうとしたので傍に立つ俺が 結果 で弾いた。

「何をする、ハッコン！ この状況がわからぬ、お主ではあるまい！」

「ちゃんと」

「ねらいが」

「ありゆよ」

最後が締まらないのはいつものことだ。

言葉足らずだが意味は伝わったようで、熊会長の表情から怒りが消え失せ、少し冷静になった顔が再びヒュールミに向けられた。

他の人たちも作業を進めながら注意はこっちに向いている。

伐採しながらじゃ声が良く聞こえないだろうと、昔の百円を入れて利用するカラオケの機器へと変化した。実はこれも自動販売機のジャンルに当てはまるのだ。

今の時代では見かけなくなった古いタイプのカラオケは、一曲歌うごとに百円を投入しなければ歌えなかったのだ。今の時代のカラオケボックスを利用してゐる若者には信じられないと思うが。

もつとも、俺だって近所の元スナック経営をしていた友達の家で初めて見て驚いたので、人のことは言えないのだが。

とまあ、過去を懐かしんでいる場合じゃない。カラオケになると、そのマイクを 念動力 で操りヒュールミの近くへ運ぶ。

「ここに先に火を放てば、風下へと燃えていく！ この木は異様に火が付きやすく燃え尽きるのも早い！ 先に燃やしておけば風上から火が届く前にここら一帯より後方の木々は焼き崩れて、俺たちが火に囲まれることはない！」

カラオケのスピーカーで増幅された声はみんなにも聞こえたようで、ラツミス以外は理解できたらしく、感心した表情で納得しているようだ。

一人キョトンとして首を捻りながら作業を続けているラツミスには、後で懇切丁寧に説明をしてあげてくれ。

つまり、先に後ろの方を燃やしておいて、そのまま風下へと火が移り燃えていくことにより、後ろの木々が燃え尽きて風上からやってきた炎はそこで止まるということだ。

ただし、これは火が消えたのではなく、風下の集落へ向けて炎の到達時間が早まることになり、集落の危険度が増すことになる。

俺たちは助かる見込みがでてきたが、集落へと火が迫る時間が少し早まった。それでも、先に送り出した大食い団なら間に合うと信じての行動だろう。

「そう、いうことが！ すまぬ、早合点をしたようだ」

「いや、これは賭けだけ。風向きが変われば俺たちが死ぬ率が上がる。だが、以前から風を探っていたが、この階層は一定の方向にしか風が吹いていない。だから、分の悪い賭けじゃない筈だけ」

そうやってニヤリと笑うヒュールミ。

くうう、男前だな。本心は兎も角、この場面で自信ありげに笑ってみせる彼女には感心させられる。

そこまでカツコいいところを見せつけられたら、俺も頑張るしかない。

今度はさっきなつたばかりの 温泉自動販売機 へ戻り、最大水量で近くの木々へと温泉をぶっかけておく。

強風が吹き荒れる風上とはいえ火が移ることが考慮されるので、木々を濡らすことで少しでも近くの木に火が燃え移らないようにしておこう。

「気が利くじゃねえか。やっぱ、ハツコンはオレの良き理解者だけ」

拳で軽く俺の体を叩くヒュールミの表情は、今にも泣き出しそうなくらい感情が高ぶっていたが、それは悲しいのではなく嬉しくて笑っている様に見えた。

火災の原因（前書き）

書籍に合わせて
転移陣

転送陣
に変更しました。

火災の原因

ヒュールミの一見無謀にも思える策は予想以上に上手く進んでいる。

強風が炎上を後押しして、ヒュールミが放った火が後方へと進み、近くにあった木々が真黒に焼け焦げ炭化していた。

これなら焼け跡に移動すれば、前方からの火から逃れられることができる。そう思い、口があれば安堵の息を吐くぐらい張り詰めていた気が緩んだ、その時。

「くそがつ、予想より向かってくる炎が早すぎるっ！」

目尻を吊り上げヒュールミが前方を睨みつけている。そこには今にもこちらへと到達する勢いの炎があった。

策としては悪くないと思ったけど、現実つてのは非情すぎる。

後方の焼け跡と必死で伐採した空間。そのおかげで直接火あぶりされることはないだろうが、熱と一酸化炭素中毒が問題になっている。

これは全員を 結界 で包み込み炎と熱から守るしかない。

だけど、ここにきて大人数で挑んだことがネックになるとは。ノーマルの自動販売機状態で自分からメートルしかカバーできない結界 では全員を守ることは不可能。

となると選べる手段はたった一つしかない。

「でっかく」

「いとうして」

言葉が足りないのは重々承知しているが、今は言葉を選んで

時間も惜しい。ヒュールミならきつと理解してくれる。

「でっかく……なるから、移動……離れろってことか」

「いらっしゃいませ」

俺の信頼に応えて即座に理解してくれたヒュールミが仲間にも伝えてくれたので、俺は以前変わったことのある、二人で協力しなければ買うことのできない背の高い自動販売機へとフォルムチェンジした。

本当は日本一の大きい自動販売機になりたかったのだが、あれをしてしまうとポイントが湯水のように減り、最後まで 結果 を維持できる自信が無いのだ。

このバージョンも普通の自販機よりもポイントの消費が激しいが、仲間の命とポイントならどちらを選ぶのかは考えるまでもない。

「ここに」

「しゅうごう」

最大音量で周囲に伝えると、全員が俺の周りに集まってきた。

自分から一メートルの範囲しか 結果 で覆うことができなくとも、この巨体自動販売機なら体沿いに人が並ぶだけではなく、上に重なってスペースを確保することができる。

荷台ははみ出していたので、ラツミスが荷物を全て取り出して、荷台を横に傾けて何とか押し込んでくれた。

熊会長の両肩にラツミスとヒュールミが座り、ボタンの上にはキコユ、黒八咫が乗っかっている。老夫婦は寄り添い準備は完璧だ。

シユイは熊会長に押し上げてもらって頭の上で胡坐をかいているな。

全員が俺の体に密着しているという奇妙な状況で 結果 発動！

青い光が全員を包むと、炎が目前まで迫っていた。

半径二十メートル以上は木々が取り除かれ、森の中に大きな空き地が出現している。

そこに俺がそびえ立ち仲間が体を預け、結界に守られた状態で炎が過ぎ去るのをただ待っている。

炎は完全に防いでいるが、その間にもポイントが湯水のように消耗されていく。火力が思っていた以上らしく、脳内でポイント消費の文字が滝のように流れているぞ。

これは魔物討伐や商売で稼いだポイントをかなり吐き出すことになりそうだ。

だけど、ここで節約するわけにはいかない。視界を埋め尽くす炎が消え周りの木々が焼け焦げ崩れ落ちたのを確認してから結界を一旦解除した。

酸素が不足していて呼吸が苦しくないか。有害な気体が辺りを充滿していかないか。皆が苦しむようなら直ぐにでも張り直せるように注意深く観察する。

「まだ、少し暑いが大丈夫みたいだぜ。ありがとよ、ハッコン」

「でういたし」

「まして」

ヒュールミが確認してくれたので俺は元の自動販売機へと姿を戻した。

それなりに貯め込んでいたポイントも残り僅か。久しぶりに万単位を切りそうだ。

みんなの命を守れたのだから、惜しいとは思わないが暫くは気軽に機能を使えなくなっただな。

「ぼいんと」
「あとすこし」

俺がポイントを消費してフォルムチェンジや機能を利用していることは、キコユの力を借りて正確に伝えてある。

なので、今の言葉で仲間たちは、俺が力を控えることに納得してくれるだろう。

「そうか……オレたちの為にありがとうよ、ハツコン。無事帰ったら、硬貨たんまり入れてやるからな」

「ごめんね、ハツコン。後でうちも貯金箱を壊して協力するから！」

ヒュールミ、ラツミス、その気持ちで充分だよ。

「すまん。今は手持ちが金貨一枚しかないが、これで少しでも足しにしてくれ」

「いらつしゃいませ」

熊会長が財布から手持ちの金貨を投入してくれたおかげで、少しポイントが回復した。これなら普通のフォルムチェンジなら大丈夫そうだ。

ありがとう、熊会長。

「ほな、わいからも金貨払つとくわ。戻ったらちゃんとは礼はするから安心してや。金は大切やけど、ここはケチるとこやない。闇の森林階層はケチで金に小汚いなんて思われたら、一生の恥やわ。見た目は腹も黒いんやけど、実際は腹黒ちゃうで」

闇の会長も一枚金貨を追加してくれた。後で報酬もあるようだから、それも期待しておこう。

よっし、少しはポイントも充填された。これなら、現状でも役に立てるだろう。

「皆、燃え残っている炎や崩れていない木々に気を付けて進んでくれ」

「有害な成分が排出されている恐れがある。全員濡らした布で口元を覆って進んでくれ」

俺がタオルを取り出して、ミネラルウォーターで濡らしていく。

この程度ならポイントの消費は微々たるものなので何も問題は無い。

いつもの自動販売機に戻るとラツミスに背負われて、全員が移動を開始した。

辺りの木々は焼け落ちているのが殆どで、辛うじて立っている木々も焼け焦げ、生物としての生命を終えてしまっている。

白い煙が地面から立ち昇り、吹きつける強風により後方へと流れていく。

「これで老木魔が倒されているのであれば、この階層の問題解決となるのだが……被害が甚大過ぎた」

「どこのポケがこんなことをしくさりやがった。見つけたらただで済ませへんで。ケツの穴から手え突っ込んで奥歯ガタガタいわしたる」

闇の会長は怒りが抑え切れないのか、黒い炎のように体の表面が揺らいでいる。

自分の階層を焼け野原にされたのだ、尋常ではないぐらいに激怒して当然だよな。

今回、老木魔に火を放ったのは、実際の話、誰なのだろうか。異変に気づかず森を探索していたハンターが階層主と遭遇して、助かる為に禁忌を犯した。

もしくは、初めから倒すつもりで森に火を放った。

どちらも、可能性としてはないとは言えないが、魔物が凶暴化している森林階層で今まで無事に過ごせる実力者なら、集落に戻るなりもつと違う手段があったのではないか。

それに、火を放てば自分たちもただでは済まない。何か別の意味や、想像もしないような理由があるのだろうか。こればかりは幾ら考えても予想でしかないのです、実際に現場を見て少しでも情報を収集しないと。

黒と白の世界となった元闇の森林は、以前と違い見通しが良くなくなっている。

そのおかげで目的である老木魔が良く見えるのだが、葉は全て焼け落ちて枝も細い枝は全滅しているようだ。

残った大きな枝が二本と未だに健在の太い幹。

まるで、巨大な黒い人影が天に向かい両腕を広げているかのように見える。

焼け野原に立つ黒く巨大な巨人。世界の終末を連想させるような光景だ。

「ハツコン、ヒュールミ、あれって死んでるよね」

「表皮が焼けているだけで、中は無事かも知んねえぞ。油断は禁物だぜ」

「うん うん」

木は生命力が強いし、それが階層主の魔物となれば常識では考えられないレベルだろう。でも、生きていても弱っているのは確かだ。

万が一、まだ死んでいないのであれば俺たちで止めを刺させてもらおう。

「少し急ぐぞ。火が集落に到達してからでは遅い」

会長が四足で駆けるとラツミスも俺を背負った状態で追従している。

ボタンは荷台に人を何人も乗せているというのに、俺たちに楽々と着いてきているのが驚きだ。

見る見るうちに焼け焦げた老大木魔に近づいていくと、前方の視界の全てを真黒な幹が埋め尽くしている。

接近して改めて思うことなのだが尋常じゃないぞ、このデカさ。

本当に高層ビル並みだ。こんなの俺たちは薬で倒せたのだろうか。高濃度の毒とはいえあれだけの量で、この老大木魔を枯れさせることができるとは正直思えない。

「あれだな……ここまでデカいのは想定外だったぜ……」

ヒュールミがてっぺんを見上げ呟いている。

近くで実際に見ると遠くからだ、実際の大きさを把握するのは難しいから仕方ないよ。

老大木魔は微動だにしていない。で、これどうやって死んでいるかどうかの判断をすればいいのだろうか。

「あっ、声がないです。お亡くなりになっているようです」

幹に手を触れてキコユがみんなに伝えている。

そうか、彼女なら心の声で判別できるのか。これで死んだことが確定したということは、集落の人々も元に戻り逃げ出せたと信じるしかない。

「ラツミス、念の為に全力で幹を殴ってくれ」

「いいよー。じゃあ、遠慮なくいっくよー」

本当に死んでいるのか確認の為に殴らせるのか。

ラツミスは半身になり腰を落として体を限界まで捻じる。

一步踏み込むと同時に、捻じった体を戻しつつ、左腕を逆方向に引いて突きの威力を最大にまで高めた渾身の一突きを放った。

焦げた表皮が弾け飛び、ビル解体用のハンマーでもぶつけたのかと疑いたくなる、大きく陥没した跡が幹に刻まれた。

風圧と轟音が遮蔽物の消え失せた焼け野原に広がり、この巨大な老木魔だったものが少し揺れた気がしたのは……気のせいだよな。これ程の衝撃を与えたというのに何の反応もない。つまり、死んでいるということなのだろう。

これにて目的は達成となるのか。あとは無事に集落の人々が逃げ出せたか確認して、この階層の騒動は終了となる。

「では、戻るとし」

「誰だよ、昼寝の邪魔をした奴は」

降って湧いた見知らぬ声に反応して、全員の視線が天へ向けられると、そこには

敵の刺客

黒く焼け焦げた老木魔をバツクに上からゆっくりと下降してくる者がいた。

重力に従わない落下速度なので、飛行能力があるのかそういった魔法が使えると考えた方がいいたろう。

それは、かなり異様な格好をしている。

体に貼り付く黒く光沢のある革製のワンピースで肩と胸元が剥き出しになっている。腰や首や腕には銀色の細い鎖が巻き付き、独特なセンスをしているようだ。

何と表現すればいいのだろうか。煽情的で画期的な格好をした囚人といった感じだろうか。

目元も黒くふちどりされていて唇も黒い。髪は黒髪で腰より下まで伸びている。

黒焦げた老木魔をバツクにそんな格好では溶け込みそうなものなのだが、何故か全身が少し発光しているのだ。

「靴はブーツですか……でも透けていますので脱がせそうにないですね」

へブイに言われて気づいたのだが、確かにほんの少し体が透けている。ということとは、幽霊や精霊といった存在なのかもしれない。ラッミスは相手を興味深げに眺めているだけだが、他のメンバーは自然体を装いながらも警戒しているようだ。

「お主は何者だ」

熊会長が問いかけると、透けている女性は空中でピタリと動きを

止めた。

こつちを面倒そうに見下ろす目つきは、お世辞にも友好的なものではないな。

「てめえらこそ、何者だああ！俺様は絶叫の歌姫と名高いカヨーリングスだぜえ！」

名乗り通り絶叫を上げて舌を出し、首を掻つ切る仕草をしている。女性なのに俺様って……キャラが濃い人がまた増えたのか。

ここ最近出会ったまともな相手は、キコユと黒八咫とボタンだけかもしれない。

本来なら驚く場面なのだろうが、見た目のインパクトは闇会長に劣るし、声が大きくて口が悪いだけで正直リアクションに困る。

もっとキャラを立てたいならへブイの変態性や闇会長ぐらいの個性が欲しいところだ。

見た目の奇抜さと目元の縁取りと唇の色のせいで誤魔化されているが、その変な化粧を落として大人しい格好をさせたら似合いそうだな。

「名高い？ ヒュールミ知ってる？」

「そつち系は疎いからな、聞いたこともないぜ」

ラツミスの素直な疑問に素っ気なく答えている。

仲間を見回し見ても誰一人として、名高いらしい絶叫の歌姫を知る者がいないようで、小首を傾げているぞ。

自称有名人だとしたら、中々に痛い人だ。

「ふむ、お主が何者かは知らんが、こんな場所で何をしている」

「おいおい、俺様を知らないなんて何処の田舎者だ」

「何処つて、ここは何処やと思つてんねん。ダンジョンに決まってるやんけ」

闇の会長が相手に手の甲を突き出す感じのモーション付きで、ツッコミを入れている。

実は外の世界では有名人なのだろうか。

「あーやだやだ。穴倉に引きこもつて世情にも疎い馬鹿共の相手をするのは。おつむまで暗くなってんじゃねえのかっ」

「ふむ、馬鹿で結構なのだが、お主はこんなところで何をしている」

熊会長は罵倒されても意にも介さずに、冷静な態度で質問をしている。

二人のテンションが真逆だな。

「けっ、俺様か。俺様の目的はこの階層を火の海にして、左腕將軍の邪魔をしている愚か者と、階層中の人を皆殺しにすることだぜええええっ！」

両腕を天に掲げる必要があるのかと問いたいところだが、今はその発言の方が重要だ。

火を放ったのはこいつで俺たちを含めた全員の殺害が目的だと言った。それにしても、標的である俺たちのことを把握していないようだ。

この場に居る殆どの人がそのことを考慮していたようで、全員が武器を構えている。

「つまり、冥府の王側と判断して間違いないのだな」

「そうだぜええつ。俺様は冥府の王の忠実なる配下の一人、小将軍カヨーリングス！」

小将軍ときたか。確か魔王軍では右腕将軍、左腕将軍、右脚将軍、左脚将軍と呼ばれる四人の肢体将軍がいて、その二十指将軍がいるのだったか。

俺たちが相手にしている冥府の王は左腕将軍で、配下に小将軍、薬将軍、中将軍、人差将軍、親将軍を揃えている。

小将軍ってことは五人の将軍の中では最も地位が低いのか。それでもかなりの強敵であるのは確かなのだが、冥府の王を相手にした経験があるので、あの時程の絶望感がない。

それよりも、ようやく内情を知ってそんな人物の登場に胸がざわつく。

この相手を捕えることができたなら、今後の展開が少しは楽になりそうだ。

「てめえら、どうやって生き延びやがった」

「こやつは死霊系か。普通の武器は通用せぬようだ、心してかかってくれ」

相手の質問には答えず、全員が臨戦態勢をとっている。

冥府の王の配下と知って戦うことに決めたのか。味方の強さは把握しているが、相手は仮にも将軍。どの程度の実力なのか正確に見極めなければ。

「おいおい、マジか。俺様とやろつてのかつ！　ここはもっと激しく罵りあう場面だろうがよおっ！　まあ、力でねじ伏せるのは嫌

いじゃねえ。おら、どつからでもかかってこいや！」

相手が挑発するまでもなく既に戦いは始まっていた。
半透明の体をしているので物理的な攻撃が通用しないと高を括っていたようで、飛来する矢を避けようともしていない。

「矢なんぞ、効くかよおおおおおっ！？ 何だ、いてええぞ、こらあっ！」

半透明の肩に見事に矢が突き刺さっている。

「それぐらい対策していますよ。魔法を付与した矢ですからね」

片膝立ちで弓を構えるシュイの隣に立つヘブイが、既に魔法を唱えていたようだ。

幽霊の様な存在にも魔法は通用するのか。現代日本なら幽霊対策なんて清めた塩ぐらいしか思いつかない。

「うるさい女は苦手じゃわい」

お爺さんが頭を軽く左右に振ってから、金色の扇子を上から下へと振り下ろした。

晴天だった空に突如雨雲が現れたかと思えば、そこから発生した雷撃がカヨーリングスを捉える。

「ギエエエアアアアアッ！」

稲光の直撃を喰らいその名の通り絶叫を上げているな。効果は靦面のような。

地面に叩きつけられて何とか立ち上がったはいいが、体中から煙

を立ち上げて髪がチリチリになっている。半透明なのに効き目があるのか。

体はふらつき俯き気味で、今の一撃は相当なダメージを与えたようだ。

「て、てめえらっ！ 俺様を舐めんなよオオオツ！」

体中に巻き付けてあった鎖が手を触れてもいないのに、まるで自我がある生物のように動き始めた。

地面に墜落したカヨーリングスに肉薄していた熊会長に鎖が襲い掛かるが、赤い光を纏った爪で全て弾いている。

「なんだ、なんだ、てめえら！ ただの雑魚じゃねえなっ！ まさか、左腕將軍の言つてた要注意人物つてのが、お前らかつ！」

取り乱しながら今頃思い出しても遅い。

驚愕の表情を浮かべるカヨーリングスの目の前には、ラツミスの怪力により低空飛行で投擲された 正座した格好のユミテお婆さんがいた。

「女性はもう少しお淑やかな方が好まれますよ」

仕込み杖から解き放たれた刃が煌めき、銀の光が幾条にも体を走り、声を上げる間もなく地面に倒れ伏した。

お婆さんはそのまま何処までも飛んでいきそうな勢いだったが、途中で空から舞い降りた黒八咫が肩を掴んで確保してくれた。出る鳥だな、黒八咫は。

殺したわけではないようで、相手の透明度は上がっているが消えてはいない。

碌に活躍もなく態度がデカいだけで、あっという間にねじ伏せら

れたカヨーリングスは目が覚めたらどんな気持ちなのだろうか。

火を放った悪党だとわかっていているのに、このメンバーに一人で戦いを挑んだ彼女に少し同情してしまいたいそうになる。

強いことは知っていたが、仮にも魔王軍の將軍相手にこんなにも一方的な勝利になるとは。人数差もあるが熊会長、シメライお爺さん、ユミテお婆さんの実力のおかげだ。

「美味しいところを婆さんに持っていていかれてもうた」

お爺さんが若干悔しそうだ。あの雷も大活躍だったが、止めを取られて納得いかないようだ。

いいじゃないか、俺なんて何もしてないよ。

今回の戦いは出番がなかった。あつという間の出来事だったな。

俺としても対策は考えていたのに。除草剤を結界で弾き飛ばすとか、新たな機能を使ってラツミスを活躍させるとか。

他にも、どんな敵がいるかもわからないと思って、空の樽に深夜一人でローションを溜め込んでいたのだけど、これどうしよう……。

「幹部の一人を捕まえられたのは大きい。これで、詳しい情報が得られると良いのだが」

半透明の体を特殊な魔道具の縄で括り、簀巻き状態のカヨーリングスを熊会長が小脇に抱えている。

この面子だから活躍の場もなく倒されたが、お爺さんやお婆さんがいなければ苦戦は必至な相手だったかもしれない。

この二人が常に行動を共にしてくれるのであれば、これからの戦いも楽になるのだが、高齢なのでダンジョンを連れ回すわけにもいかないか。こうやって手伝ってもらえるだけでも充分だと思わないと。

いざという時に頼りになる人が後ろに控えているだけでも安心感

が全然違う。

残る階層も少なくなってきた、このまま順調に全ての異変を解決すれば、ケリオイル団長たちと遭遇する日も遠くないのかもしれない。

あの人たちを止めたいという気持ちはあるが、会ってどうすればいいのか。未だに結論は出ていないが、お互い歩み寄ることは必要だろう。

その結果、意見が再び食い違い、最悪の展開が待っているとしても。

「はぁー、気が抜けたらお腹空いたっす！ ハッコン、ご飯くださいっす！」

「あつ、うちも欲しい！」

「オレも飲み物くれよ」

シユイとラツミスが砂煙を上げて本気走り、他の仲間たちはゆつくりと歩み寄ってきている。

難しいことを考えるのはここまでにして、俺は自動販売機らしく飲食物品を提供して、その胃袋を満たすとしますか。

敵の刺客（後書き）

これにて第六章終了となります。

第七章も続けていく予定ですので、今後ともよろしく願います。
あと数日で文庫として販売となりますので、皆さん、そちらの方も
どうぞよろしく願います。

全速力（前書き）

七章開始です。

キャラも増えてきたので序盤は穏やかに今までのキャラ説明も兼ねた展開にしようと思っています。

全速力

敵の幹部を捕え連行しつつ、闇の森林階層の集落を目指している。地面は炭化した木々で埋め尽くされ黒と灰色で染められている。自然豊かだった森林はもう何処にもない。

燃え広がった炎は全てを燃やし尽くして自然鎮火した。

「また、何十年かはこの階層を使えんようになってしまつたなあ」

漆黒の闇を人型に凝縮したような外見の闇の会長は、辺りを見回しながら大きくため息を吐いた。

闇の会長の纏う空気のせいか、派手すぎる色彩の金色のコートが今は色あせて見えてしまう。

表情のわからない真っ黒な顔だというのに、どこか寂しげだ。

「気を落とすな……と言われても無理であろうが、住民たちは全て清流の湖階層で受け入れる。そこは安心していい」

「ありがとうな、清流の会長はん」

巨大な熊である清流の会長が闇の会長を気遣って声を掛けた。

返す言葉は安堵した声で、いつも無駄にハイテンションな口調は鳴りを潜めている。

そりゃ落ち込むよな。自分が担当していた階層がこんなにも無残な姿を晒しているのだから。

この階層が元に戻るには数十年かかるそうだ。魔物も発生しなくなるそうなので、もうこの階層にハンターたちがいる意味もなくなってしまう。

「みんな、ちゃんと避難できたかな」

「大食い団の足なら火が到達する数時間前には着いている筈だぜ。それに、あの嗅覚と聴覚があれば、人を探して誘導するのも楽つてもんだ」

「そうだね、うん」

大きな胸を抱え込むように腕を回して不安そうなラツミスを励ますように、ヒュールミが大声で説明している。

小柄な体格なのに俺を楽々と背負う彼女の密着した背中が、少しだけ震えている。

そんなラツミスの不安を感じて、ヒュールミは闇の会長にも良く聞こえるように、わざと大きな声で言っているのだろうな。

彼女は話し方が少し乱暴できついことを言ったりもするが、姉御肌で実は根が優しいことを俺は知っている。今もミルクティー色の髪を掻きながら照れているのがその証拠だ。

集落を出てから約一週間でここまでやってきた。だけどそれは、木々を伐採しながら進んだので距離的にはそんなには稼げていない。大食い団の足なら全力で駆ければ半日も経たずに集落にたどり着ける。

そこからハンターたちに説明して彼らと一緒に木となっていた住民を探し、転送陣を起動させて清流の湖階層に送ればいい。

木に変化している住民がいた場所は闇の会長が集落の地図に書き込んでいたので、そんなに時間はかからないと思う。パニック状態だったとしても、大食い団の見た目の愛らしさで和んでくれるのを期待しよう。

「やるべきことはやったのだから、今更うじうじ考え込まんでええ。もし、最悪の結果が待っておったとしても、これ以上の成果は得られなかったと、わしは思うぞ」

「そうですね。人事を尽くしたのです、あとは天命を待つしかありませんよ」

シメライお爺さんとユミテお婆さんの声がすつと心に染み入る。酸いも甘いも噛み分けてきた老夫婦の言葉は重く、優しくかった。

二人も着物のようなデザインの服を着込んでいるので、たまにここが何処なのか混乱しそうになる。

和服に似た服が存在するということは、この異世界の何処かに日本と似た文化の国があるのか、もしくは俺や畑さんのように転生した日本人が遠い過去にいたのかもしれない。

「それに、みんな無事かもしれないっすよ！ 命があれば、全てを無くしても結構何とでもなるっす！」

明るく元気よく言い放てるのは、シユイが孤児院で育ってきたという経験があるからだろう。同じ言葉を平和な日本で生きてきた俺が口にしても説得力は皆無だろうな。

彼女は髪が短くて背も低いので一見、男の子のように見えるのだが体は立派な女性だった。一度、裸を見たことがあるので間違いはない。

「人は足と靴があれば歩いて行けるのです。それがどんなに困難な道であっても」

良いことを言っているように聞こえるのだが、ヘブイが靴を絡めると途端に胡散臭くなってしまふ。

見た目は理想的な人の良い聖職者で白いコートの様な法衣も似合っているのだが、中身は靴フェチの変態だ。

「そうですよね。諦めちゃダメですよ。強く想う心があればなんだって出来ます」

「ブフォオオ」

「クワツカ」

白いコートを着込んだ可愛らしい姿でキコユが何度も頷くと、それに合わせてボタンと黒八咫も鳴き声を上げている。

小さな少女にしか見えない彼女だが実年齢は不明で、実際はラツミスと大差ないか少し上ではないかと予想している。

ボタンは白いウナス 角の生えた猪なのだが、その体格は一般のウナスを遥かに凌駕している。

黒八咫はカラスに似たキリセという鳥で、目と脚が三つあるのが怖いという感情を抱くことがない。鳥だというのにきりつとした目つきで知的なのだ。実際、この二匹は人間に匹敵するぐらい頭がいいらしい。

そんな彼女たちは俺と同じく日本から転生してきた畑を救う為に俺たちと同行している。いつか彼に会って話してみたいものだ。

「そうだな、悩んでいても仕方がない。帰路を急ぐとしよう」

熊会長が二足歩行から四足歩行モードになり、本気で走る準備に入った。

ラツミスは俺を背負った状態で走るようだ。普通は自動販売機を背負えるだけでも凄いことなのだが、俺を背負っていても平然と走れるのだ。

「ボタン少し速く走ってもらっていい」

「ブフォブファ」

ボタンが嘶き、足元を前足で引っ掻いている。走る気満々のようだな。

特製の荷台を引っ張っているのだが、その上にはヘブイ、シユイ、キコユ、老夫婦、闇の会長、ヒュールミが乗っている。特殊な紐で簀巻きにされた冥府の王の配下であるカヨーリングスもいるが、彼女は幽霊みたいな存在なので重量はない。

あと、樽も幾つか載せていたのだが二つを除いて捨ててきた。除草剤はもう必要ないので邪魔になると。

一斉にスタートを切ったのだが、まずトップに躍り出たのは紳士な熊でお馴染みの清流の会長こと熊会長だ。

日頃は二足歩行なのだが、本気で駆ける時は四足になり速度が比べ物にならないくらい上昇する。

数メートル離れて後を追うのは俺の相棒ラツミス。自動販売機を背負うという尋常ではないハンディーがありながらも、常人よりも速く走っている。

このまま、熊会長の独走となるかと思った矢先、後方から追い上げてきたのは白い弾丸ボタンだ。

スタートダッシュは遅れたが、徐々に加速して今や最速で迫ってきている。

荷台を含めた重さはラツミスに匹敵……いや、それ以上だろう、だというのにあの脚力は流石の野生動物というべきか。ぐんぐんと距離が縮まっていく。

「あかんよっ、このままやったら負けてまう！」

何となくレース実況をしている気分になっていたが、全員が真剣に本気で競い合っているな。ラツミスも負けたくないようだ。

ここでフォームチェンジをして、ダンボール自動販売機 になったら一気に軽くなるが、二時間しか変化できないのでいずれ追い付かれる。となると、俺の取るべき手段は 商品を消すことだ。

自動販売機の中に満載されているペットボトルや缶を全て一時的に消した。

これにより数百キロ減ることになる。自動販売機は商品がない状態だと四百キロ程度で、商品を満載すると品にもよるが重さは八百キロ近くなる場合もある。

「あ、軽くなった！ ありがとう、ハツコン」

「いらっしやいませ」

相棒として当然のことだからね。お役に立てたのなら光栄だよ。

俺は自動販売機だから自分で歩くことも動くこともできなかった。そんな時、ラツミスに出会い世界が一気に広がった。

彼女がいてくれたから、今の俺がいる。

ただの駆けっことはいえラツミスを負けさせるわけにはいかない。二人が組めば勝利は間違いなしだ。

「う、うおおおおお、ちょ、ちょっと速すぎないかあああああ」

「ボタン、ねえ、ボタン。そんなに本気で走らなくてもいいんだよ。ねえ、ボタンさん、聞いてるっ!？」

ボタンが引く荷台でヒュールミの叫び声と、必死に説得して速度を緩めようとしているキコユの声がする。

そんな声には聞く耳も持たず、ボタンは前だけを向いて疾走している。野生の血が騒ぐのかイノシシの本能か。これこそ猪突猛進というやつなのかもしれない。

老夫婦と闇の会長は平然と俺から購入した飲み物を口にして談笑している。これが場数の違いか。

ヘブイは平然を装っているが汗が一筋流れ落ちたのを見逃さなかった。シュイは拳を振り上げて「いけいけー！」と煽っている。

熊会長も負けていられないと更に速度を上げた。会長とはいえ元ハンターとして勝負事で負ける気はないようだ。

くっ、このままではラツミスが負けてしまいかもしれない。こうなったらコーラスプラツシュで相手の妨害をするしかっ！

と邪魔をしようかとも考えたのだが、純粋な脚力勝負に水を差すのは駄目だと判断して大人しく見守ることにした。

かなりの距離を走り抜け、焼け焦げてはいるが辛うじて立っている門跡が目に入った。

ラツミス、ボタン、熊会長が一瞬だけ目を合わせて小さく頷く。

どうやら言葉にせずともあの門跡がゴールだとわかりあえたようだ……今更だが何やっているのだろうな。

全員がラストスパートをかける。ここまでの距離を走ってきたというのに体力を全員残していたようで、更に速度が上がっている。

ちらつと荷台に視線を向けると、キコユとヒュールミが荷台のへりにしがみ付いていた。万が一振り落とされても、お爺さんが魔法で何とかしてくれるだろう。

門跡まで残り十メートルぐらいか、ここでダンボール自動販売機にフォームチェンジだ！

背中が重量が一気に消え去り、足かせとなっていた重さから解放されたラツミスは、急に消えた背中軽さにバランスを崩して豪快に転んだ。

「あぶぶぶぶぶあぁあぁ」

俺を背負った状態でヘッドスライディングをしている……ごめんよ、ラツミス。体頑丈だから大丈夫だと思うけど、後でお婆さんがヘブイに治療してもらおうな。

ラツミスが俺のせいで自爆したことにより、ボタンと熊会長の一騎打ちとなった。

ゴールは目前で残り数歩で到達する。今のところ角の長さでボタンが有利だ。これはもう、ボタンの勝利確定か。

そう思っていた俺の考えを嘲笑うかのように、黒い弾丸がボタンと熊会長の頭上を掠め門跡に跳び込んでいった。

「なんと、黒八咫か」

すっかり忘れていたが黒八咫も上空から参戦していたようだ。

ゴールした熊会長とボタン、そして転んでいるラツミスと俺を見下ろし、優雅に上空を旋回している黒八咫がいた。

「鳥だけに、美味しいとこどりやな」

闇の会長の下らないギャグで競争の幕が下りた。

商売敵

門の先は燃え尽きた集落だった。

原形を留めている家はなく、全て焼け焦げ灰と化している。近く
の骨組みだけとなった家だった物にラツミスがそっと手を触れると、
力もいれていないのに脆く崩れ落ちた。

「まあ、落ち込んでもしゃーないわな。なくなったもんは今更どな
いもならへん。後は無事に清流の湖階層に逃げるとええんやけど」

「そうだな、転送陣の置いてあつた場所に向かうとしよう」

闇の会長の肩に熊会長が手を添えている。昔、同じチームでハン
ター稼業をしていただけあつて、他の会長と比べて親しげだ。

もしかして、火災のせいで転送陣が壊れているのではないかと心
配したのだが、その心配は無用で小屋は崩壊していたが転送陣は光
を放ち健在だった。

「転送陣は生きているぜ。問題なく稼働している。最近使つた形跡
もある」

「つてことは、みんな転送陣を使って避難できたつてことだよね！」

「みてえだな、ラツミス」

ヒュールミの言葉にラツミスが手を打ち合わせて喜んでいる。残
りの仲間もほっと安堵の息を吐いていた。

これで全員が避難できていたら最高なのだが。こればかりは、戻

ってみなければわからないか。

そういえば、清流の湖階層に戻るのってかなり久しぶりだよな。一ヶ月？ 二ヶ月ぐらい経っているのかな。夏の盛りが始まりの階層へ向かって以来だから、みんな元気でやっているだろうか。

「では、戻るとしようか……我が家へ」

熊会長にとってハンター協会は我が家のようなものだよな。

戻ったらやるべきことが山のようにある。常連やお客が商品を待ち望んでいるだろうし、飲食店に材料や調味料を卸さないよ。

また別階層に向かうことになるだろうけど、それまでは異世界の故郷でもある清流の湖階層でのんびり過ごしたい。

「んじゃ、起動させるぜ」

俺たちは転送陣から溢れる光に呑み込まれ、闇の森林階層を後にした。

何事もなく転送が終了した俺たちは扉を抜けて長い廊下を渡り、ハンター協会のホールへと入っていく。

「会長、お帰りなさい！ あ、皆さんも無事だったのでですね！」

カウンターの向こうにいた女性職員が立ち上がり、感極まった様子で駆け寄ってくる。

「皆、息災か」

「はい、魔物も大人しいですし復興も順調です。あつ、半日ほど前に闇の森林階層から大量の人々がやってきましたので、簡易の住居へ案内しましたが宜しかったでしょうか？」

「うむ、助かる。ということは、ハンター協会の北西部のテントだな」

「そうです」

それを聞いて闇の会長がハンター協会を飛び出していった。確認は任せても大丈夫だろう。それに、今、その場に居合わせるのは場違いだろうしな。

「無事かどうかの確認は闇の会長に任せるとしよう。皆、ご苦労だった。報酬は用意しておくので数日待ってくれ。次の階層への救援は情報を集めてからとなる。方針はその後、決めさせてもらおう。本当にありがとう。ゆっくりと体を休めてくれ」

熊会長が解散を伝えると、各自が思い思いの場所に散っていく。

老夫婦は家族の元へ。

熊会長は会長室へ。

キコユたちは荷台を引いたままなので、ホールにいると邪魔になると思ったようでも取りあえず外に出たようだ。

ヒュールミとラツミスは特に思いつかなかったようでも一緒にホールにいる。

「どうしよつか。お家でゆっくりする？」

「慌ただしかったから、それもありだが……ハツコンはどうしたい

んだ？」

俺はやっぱり商売がしたいかな。俺が帰ってくるのを待ち望んでいた人も多いだろうから。食料問題も心配の種だしな。

「おしごと」

「したい」

「久しぶりにここで商品売りたいんだね。うんうん、みんなもきつと喜ぶよ！」

ラツミスに背負われたまま扉を抜けて、いつもの定位置に降りしてもらった。

はあああ、落ち着くなこの場所。さあ、張り切って商売すると思いますか！

きっと人だかりの山となって、飛ぶように売れるのだから気合入れないと。

「いらつしゃい　ませ」

元気よく音声を再生しようと思ったのだが、有る光景を見てしまい音量が下がった。

俺の視線の先に人が集まっているのだ。そこにはスキンヘッドのカリオス、角切りのゴルスの頭も見える。

飲食店の店主たちもいるようだが、何をしているのだろうか。集中して声を拾ってみよう。

「俺は新鮮な野菜を頼む」

「果物はあるか」

これはカリオスとゴルスの声だよな。

「材料が尽きかけていたんだ。前に貰ったやつ三十ずついけるかい？」

この声はたぶん飲食店の店主の一人だよな。ということは、野菜の販売をしているってことか。

あ、うん、人垣の中にいる人物に思い当たる節がある。あれだ、キコユだ。

「皆さん並んでください。お野菜はたくさん用意しますから、ちゃんと一列に並んでください」

正解だ。あの声はキコユで間違いない。

取り囲んでいた人々が一列に並ぶと、土の球で即座に野菜を作り出している荷台に積んでいき、それを黒八咫が器用に三本足で掴み渡していつている。首元にお金を入れる袋をぶら下げているな。

「あー、前にキコユちゃんたちが、この階層に移動した時に、お野菜を売ったら大盛況だったって話していたよ」

なるほど。俺とラツミスとヒュールミは闇の森林階層に飛ばされてしまったが、他の面々は清流の階層に戻れたのだった。

その時に顧客を奪われたということかっ！

ぐぬぬぬぬ、これは鎖食堂よりも厄介な相手だぞ。

「いらっしやいませ いらっしやいませ いらっしやいませ」

並んでいる客の気を引く為に最大音量で放つ。

その場にいる全員が俺に気づいたようで、視線が一斉に集まった。

「おっ、ハツコンじゃねえか！ 帰ってきたのかっ！」

列の半分ぐらいがこっちに向かって走り寄ってきている。

カリオスとゴルスの門番ズは心底嬉しそうな笑顔を浮かべてくれているので、少しおまけしてあげよう。

ハンターたちの大半は俺の元に来たのだが、飲食店の店主や女性陣は殆ど向こうに残っている。後でこっちに来るかもしれないが、優先順位は向こうが先のようなのだ。

飲食店関係はわかる。野菜の品質では正直敵わないからだ。そりゃ、食事を提供する側としては美味しい野菜を提供したいだろう。主婦っぽい方々も食材が欲しいのだから納得だ。

だが、若い女性や一部のハンターは目的が違うように見える。あの緩んだ表情はキココと動物たちの可愛さにやられた面々か。売り子としてはかなり質が高いもんな。

ま、まあいい。俺は大人だし、いつものように販売をすれば直ぐに客を取り戻せる。そう、いつもと変わらない販売方法で対応するだけでいいのだ。

それだけで以前の賑わいが戻ってくる。

「ハツコン、マジで久しぶりだな！ 一ヶ月、いや二ヶ月ぐらいか。って、話しこんでいたら後ろの奴らに怒られそうだ」

ずらっと並んでいるので確かにそうかもしれない。

「んじゃ、まずはおでんを二つもらおうか。後は元気になる水がいかが……」

久しぶりなので真剣に悩んでいるな。

ちらつとキコユたちの方へ視線を向けると、あっちも盛況で列の長さはこっちと同じぐらいに見える。

さてとっ、別に深い意味はないけど 自販機コンビニ にでもなるのかなー。

別に目新しさで客を呼び込もうとしている訳じゃないけど、前からカリオスとゴルスにはコンビニの商品を提供するつもりだったしい。

自販機コンビニ にフォームチェンジをしてお勧めの商品を並べていく。

「おおおっ、なんだこれ!? 見たことがない商品しかねえぞ。この三角形のは何だ? 一番下の段の飲み物っぽいやつも見たことねえぞ!」

良いリアクションだ、カリオス。宣伝担当として百点を上げよう。その叫びに反応した住民たちが一斉に俺へ注目した。

列に並んでいた人々も体をずらして並んでいる商品を覗き込んでいる。見たことのない商品の数々に興味津々だな。

「あの下から二段目のは何だ。食い物だとは思っけどよ」

その質問を待っていたよ、カリオス。それに対する返答はこれだ。

「おかしだよ」

その声が聞こえたようで、キコユの列に並んでいる女性陣が目を限界まで見開き、こっちを凝視している。

女性を落とすには甘い物が一番というのは異世界でも変わりはない。

見るからに旨そうなケーキもあれば、見たこともない味の想像がつかないスイーツの数々。あっちの果物は素の状態でも旨いそうだが味の想像はつく。

こっちは見た目だけでは全く判断できない。さあ、どっちを選ぶかな。

ふらふらと女性陣がこっちに吸い寄せられてきた。よっし、こっで一気に虜にしてみせるぞ。

キコユがチラチラこっちを見ているな。若干悔しそうな表情だ。

別に恨みがある訳でもなく、彼女も食料が足りなくて困っていた人たちに売っただけの行為で咎められ恨まれるいわれはない。

だけど、商売とは客の奪い合い。これも世の中の非情さだ勘弁してほしい。と上から目線で調子に乗っていたら、翌日。

「はい、並んでくださいねー。あまーい、石焼きシテミウマまだまだありますよー」

焼き芋を始めるとは考えたな。

季節は夏を過ぎた秋。そこで焼き芋を出されたら、そりゃ女性客の大半がそっちに流れる。

ぐぬぬぬぬ、このライバルとは厳しい戦いが続きそうだ。

ミスダンジョンコンテスト その1

「ミスダンジョンコンテストを開催しようと思っています！」

二ヶ月近く清流の湖階層を離れていた間に完成した、ムナミ親子が営業する新築の宿屋に連れてこられたかと思えば、唐突にそんなことを切り出された。

ムナミの顔が俺の体に触れる直前まで接近している。あれだな、目立ったところのない素朴なイメージがあったけど化粧映えしそうな顔だ。

そういや、ダンジョンの女性って化粧してないな。稀に口紅を塗ったりするぐらいだろうか。

「ムナミ近づき過ぎ！」

「ごめん、ごめん。で、集落に人が集まってきたことだし、新しい住民との親睦を深める為にもここで一発、大きな祭りでも開催したいわけよ。そこで考え出したのがミスダンジョンコンテストってわけ」

なるほど。以前大食い大会を開催して盛況だったから、良い考えだとは思う。

地方でやるイベントの定番だよな、大食い大会とミスコンは。それは異世界でも発想が似ているようだ。

熊会長も暫くはのんびりしてくれと言っていたから、それぐらいの余裕はありそうだ。

「いいかも」

そう、ここは乗り気で肯定してはいけない。「そういう考えもあるよね、まあ、いいんじゃないの」というスタンスで通すべきだ。ここには、ムナミ、宿屋の女将さん、飲食店の店主数名、ラツミス、ヒュールミがいる。ミスダンジョンコンテストは男性陣にとつて得しかないが、女性にとっては差別の対象だと思う人もいる。なので、商売的にはありだと思うよ。というスタンスを貫かなければならない。

「それでね、少し手伝って欲しいの。前回の大吃い大会は負担ばかり掛けちゃったから、こちらからハツコンに金貨一枚……いえ、二枚支払います。それで、優勝者はハツコンから好きな商品を五十回分無料で購入できるってことにしたいんだけど、どうかな？」

それならこっちはぼろ儲けレベルの黒字だ、断る理由はない。ミスダンジョンコンテストにも興味があるから、協力は惜しまないよ。しかし、ミスダンジョンコンテストって長いな。短く略して、ミスダンコン。

なんだろう、深い意味はないのだが違う種類のコンテストに思えてしまう。このままでいいか。

「いらっしゃいませ」

「ありがとう、ハツコン助かるわ！」

交渉成立となった。この異世界は美人が多いのでかなり期待できるな。

優勝候補はパツと思いつくだけで数名いる。だが、その人たちが参加するとは限らない。どうなるか楽しみにしておこう。

「ミスダンジョンコンテストか、シャーリイさんが優勝候補かもしんねえな」

「あー、そうだね。見た目もそうだけど、人前に立つの慣れてるか」
「ら」

ラツミスとヒュールミがあれこれと意見を交わしている。

二人とも出る気は全くないようだが出ればいいのに。冗談抜きで優勝を目指せるだろうに。

「二人とも、他人事みたいに話しているけど参加してもらおうよ」

「はああああああああああつ!?!?」

あ、二人の声が重なった。

見物する気満々だったようで本気で驚いているな。二人がムナミに詰め寄っている。

「いや、出ねえぞ、そんなもん!」

「うちもやだよ、恥ずかしい!」

「うーん、ここでの食事代一週間無料にするけど?」

「いやーだー」

「こつこつ時は同じ発言をするのか。流石、幼馴染と言っべきか。」

「えー、ハツコンも二人の活躍見たいよね?」

くっ、そこで話を振ってくるのか。これはどう答えるのが正解か。ラッミスは目を見開いて俺の言葉を待っている。ヒュールミは少し怒っているように見えるけど頬がほんのり赤い。

俺がここで肯定したら二人の性格だと出てくれる気がする。だけど、冷静に考えると二人を衆目に晒して競わせるのはちょっと嫌だな。自動販売機なのに独占欲があるのもおかしい話だけど。

否定すべきか肯定すべきか。ここは

「ざんねん」

どっちとも取れる発言で誤魔化すことにした。普通に受け取るなら、二人が出られないのが残念という意味になりそうだが、俺の残念は「いいえ」という意味も含んでいる。

これで二人は自分の都合のいいように解釈してくれるだろう。後は二人の判断に任せるよ。

「それってどっちの意味なのかな」

「ハッキリしろよ、ハツコン」

あるえ、詰め寄られたぞ。都合よく事は運ばないか。

「まあまあ、二人の活躍が見られなくて残念って意味だよきつと。でも、無理強いは良くないわよね、仕方ないかなー。そういえばあ、シャーリーさんが優勝したら「感極まってハツコンさんに抱き付いて熱い口づけをしまいそうだわ」と言ってたけどおー、二人は不参加決定つと」

「ちょっと待って」

いつの間にか手にしていた紙にムナミが何かを書きこもつとしたところを、ラツミスに止められた。

「ん、何かなーラツミス」

「う、うちもミスダンジョンコンテスト出るよ！」

顔真っ赤にさせてラツミスが参加を希望した。

俺に対しての独占欲と依存があるから、相棒が他人に奪われることを警戒しているからの行動か。これで惚れられているなんて思うのは素人考えだ。

何度もそんな素振りを見てきた気もするが、思い込んで恥をかくのは自分だからな。なんせ自動販売機ですから俺。

色恋沙汰について真剣に考えるのは人に戻ってからだよな。

「はい、ラツミスは参加決定つと。ここでの人気はかなりのものだから、優勝候補筆頭かもしれないわね」

ムナミは楽しそうだな。思惑通りに進んでいて笑いが止まらないといった感じだ。

「オ、オレも参加するぜ。最近、男を魅了する魔道具の開発もしているな。その情報収集を兼ねて現場の空気を直に経験しておくのも悪くねえだろ」

そっぽを向いて耳まで真っ赤にしながらヒュールミも参加を決めた。

おー、ヒュールミも出るのか意外だな。二人が出るなら全力で応援しないと。

「はい、二人とも参加ね。うふふふ、面白くなってきたわぁ」

ムナミ、もの凄くゲスい顔をしていますぜ。シャーリーさんの話、嘘だろ。

話が決まっただけからの行動が早かった。熊会長からの許可も速攻で降りたようで、幾らか出資もしてくれたそうだ。他の会長たちからも共同出資という形で渡され資金は潤沢らしい。

こんな状況だからこそ、楽しめるイベントは必要だと会長たちは考えたようだ。

そしてチラシの製作となったのだが、ここで俺がフォルムチェンジしたのがコンビニに置いてある コピー機 だ。

学生時代に利用した人も多いのではないだろうか。俺も目ぼしい自動販売機マップや情報を何度かコピーさせてもらった。

その コピー機 でチラシを大量に印刷して集落中に貼りまくっている。

俺の脇にも大量に置かれていて、買い物に来た人に 念動力 で配るのを忘れない。

「おつ、美人が集まるのか！ マジ楽しみだな必ず行くぜ」

いつものように買い物に来たカリオスに勧めてみたら、予想通り過ぎる反応だった。こういうお祭り騒ぎが好きそうだなとは思っていたが。

「お前は彼女がいるだろ」

「そ、それとこれは別だろ。ほら、劇に役者を見に行くような感覚だ」

ゴルスの的を射たツツコミに、しどろもどろになって返している。

むしろ、道具屋の彼女に参加してもらったらどうだろうか。髪を上げると美人だったから、結構いい勝負できそうなのだが。

カリオスが言い訳をしながら立ち去っていくと、今度はツインテールお嬢様スオリがやってきた。

相変わらず、黒服の人たちがそこら辺に潜んでいるのだろう。

「ハツコンさん、お久しぶりですわ。この度、面白い企画を立ち上げたそうで、聞き及んでいますわよ」

集落中に広まりつつあるようで、にわかには活気づいてきている。スオリはいつものオレンジジュースを買いに来たついでに情報収集したいのかな。

「わらわにもチラシいただけますかしら」

こつちが目当てだったのか。はいはい、幾らでも持って行ってくれ。

一枚を抜き取るとスオリの前まで運んだ。

「なるほど、女性であれば年齢は問われませんね。優勝賞品はハツコンさんから無料で五十回分購入できると。一週間後に開催……わらわの商会からも幾らか出資させていただきますわ。では、当日を楽しみにしていますわよ」

彼女もこの住民として協力してくれるようだ。お金は幾らあっても足りないぐらいだからな。感謝しておかないと。

「ハツコンさん、先日はアレを大量に卸していただき、ありがとうございました」

今度はシャーリーか。イブニングドレス姿が凶悪に色っぽいですね。

豊かな胸元とすらりと伸びたおみ足を、今日も惜しげもなく晒している。

「そういえば、ミスダンジョンコンテストを開催されるそう。私も参加予定なのですが、大丈夫でしょうか」

「いらっしやませ」

やはり参戦するのか。これは二人にとってかなりの強敵だぞ。

一筋縄どころか普通にやったら勝ち目はない。若さをアピールしていくしか手はないかもしれない。

「こういうお祭りごとは楽しいですよ。一住民として協力させていただきますね。もし優勝した際に何処へ接吻して欲しいか考えておいてくださいね。ハッコンさんに口があれば良かったのですが」

妖艶に微笑み唇を舌で舐めて踵を返すと、思わず目がいつてしまふ豊かなヒップを揺らしながら去っていった。

あの話は本当だったのか。その唇でキスしてもらえるのか……それはそれでありのような……いや、俺は二人の味方だからな！ そう、惜しいなんて思ってはいけない！

見物側としてはシャーリーさんの参加は喜ぶべきなのだが、ラッミスとヒュールミの優勝が遠のいてしまう。何とか勝たせてあげたいが、商品に何か力になれる物がなかったらどうか。

まだ日数があるのだから、じっくり調べておこう。

ミスダンジョンコンテスト その2

「どつやったら優勝できるか緊急会議を始めるぜ！」

「わー！」

「やってやるっすー！」

夜も更けているというのに同年代の女性が三人集まると華やかだな。

司会進行はヒュールミ。ラッミスとシユイは今のところ聞き役のようだ。

シユイは俺の商品目当てで出場を決めたそうだ。予想通りにも程がある。

対策本部としてラッミスとヒュールミの住居であるテントが選ばれた。何故ライバル関係にある筈の三人が力を合わせているのか、それには理由がある。

ミスダンジョンコンテストは想像以上の反響で参加人数が相当な数になるそうだ。

優勝賞品も俺の商品だけではなく、スオリが提供してくれた魔道具や貴金属類も増えているそうで、それ目当ての女性が結構いるらしい。

そして、何よりも彼女たちの危機感を煽ったのはシャーリイの存在だ。

一対一では太刀打ちできないと考えたようで、全員で何とか力を合わせて現状を打破しようとしている。

「まず、当日の進行は順番に舞台に立って挨拶がある。ここは普段着で登場するのが決まりだそうだ」

「元気よく挨拶すればいいっすかね」

「うんうん、そうだよね」

「まあ、そうだな。日頃の自分らしさを見せるのが大事だろう。ただ、問題はその次の特技披露だ。その名の通り自分の特技だけではなく、魅力を見せつけなければならねえって話だぜ。格好は自由らしい」

つまりアピールタイムってことか。

最近ではどこかのアイドルさんたちが投票してもらっつ為に色々やっていたりするよな。

「特技っすか。じゃあ、弓っすね」

的を並べて矢で射抜く。単純だが、わかり易くていいかもしれない。観客に十分アピールできる特技だ。

「うちは重い物でも持ち上げるのがいいのかな」

怪力も見た目にインパクトがある。見るからに重そうな物を持ち上げると効果的かもしれない。

「俺は発明品を出してみるか」

ヒュールミの魔道具技師の腕は知っているので、これも目を引きそうだ。

何だ、特技披露では彼女たちはかなり有利じゃないか。これなら上位入賞、上手くいけば優勝も夢ではないのかもれない。

「ただ、問題は……服、だよな」

「これ以外だと寝巻きと普段着しかないっす」

「あっ、うちも」

「右に同じく。オシャレなんて気にもしてなかったからな」

何て寂しい会話だ。年頃の女の子同士が話す内容じゃないだろ。ハンターや魔道具技師をやっていると無頓着になるのか。

まあ、命懸けの職業をしているシユイとラツミスは防具や武器にお金を使っているのだろう。ヒュールミは研究に没頭していて、そういうことに一切興味なさそうだ。

「この階層にも服屋はあるが参加者が押しかけていて、目ぼしい服は全部売りきれちまっていたぜ」

「いつそのこと今ある服を組み合わせるか改良して、布面積を減らして勝負つてのはどうっすか！」

露出度を上げるといっなのは露骨でありながらも効果的だ。

ミスコンで水着審査があるのは基本中の基本だからな。ただ、この異世界では水着の存在がないようで、プールを作った時も水着を着用している人は一人もいなかった。

「いや、早まるな。露出度勝負では圧倒的にシャーリィが有利だ」

その一言で二人が黙り込んだ。腕を組んで唸っているが、脳内で彼女の姿を思い描いて勝てる見込みがないと判断したのか、揃ってうなだれている。

個人的な意見だと健康美で勝負掛けたら、いけそうな気がするのだけどな。特にラツミスは胸では負けていない。

でも……露出は控えて欲しい気もする。水着や下着の様な格好を見られている場面を想像すると、何故か体内で異音がする。

「特技の演出を考えた方がまだ可能性がたけえと思うぜ。まあ、服装も大事なんだろうけどよ」

既に服装を諦めかけている三人。

服となると自動販売機で購入したことがあるのはTシャツと下着類ぐらいだ。病院にはパジャマやスリッパの自動販売機もあるそうだが、俺が立ち寄った病院にはなかった。

それに今必要なのはオシャレな服ときている。

「服は生地だけなら売ってくれるらしいっすから、作ろうと思えば服を縫えるっすけど」

「えっ、シユイは服を縫えるの？」

「孤児院のみんなには好評っすよ。ダンジョンだと子供服を買うのも一苦労っすからね」

へえー、シユイは服が縫えるのか。繊細な作業だからシユイの性格にはあつてなさそうだけど、子供たちの為に裁縫を覚えたのか。

意外と家庭的なところが多くて、いいお母さんになりそうだな。

「じゃあ、デザインを何とかすればいいのか……オレは自信ないぞ」

「う、うちもそういうのわかんないかな」

「子供服は得意っすけど、オシャレな服ってのがわからないっす」

服のデザインか。あつ、あるよオシャレな服の見本。

俺がとある病気で病院に通っていた頃、病院地下の薬局の隣に自動販売機がずらっと並んでいて、そこに雑誌の自動販売機があった。健康関連や絵本やゴシップ誌もあったがファッション雑誌も置いていた。

どの雑誌もあまり興味がなかったのだが、一番読めそうな雑誌かなとファッション誌を買った覚えがある。

ええと、まずは 雑誌自動販売機 になって、そこにファッション雑誌……あ、あった。これを置けば完了。

「あれっ、ハッコン急に形を変えてどうしたの？」

「なんだこれ、綺麗な絵が描いた本みてえのが並んでいるが」

「見たことない服装してるっすよ」

取り出し口に雑誌を落とすと 念動力 で操って三人の前に運んでからページをめくっていく。

モデルの女性が微笑んでいる写真が左右に載っている。

「この服、カワイイ！」

「これなんかいいんじゃないか。これってハッコンが居た場所の服なのか、すげえな」

「あつ、こついつの好きっす」

三人は俺の存在も忘れて夢中になって読みふけている。やっぱり、女性なのだなと少し安心した。

この服を完全再現は難しいだろうけど、似た服にするだけでもかなりいい感じになると思う。

この異世界の服もオシャレで個性的な物もあるが、日本の服装の種類には負けている。その中から自分たちに似合いそうなものをチョイスすることが大切だ。

かなり盛り上がっているので、これ以上は俺が口出しする必要もないだろうと傍観者に徹することにした。

服装は朝まで討論が続いた結果、何とか決まったようで雑誌をシユイが持って帰って三人分縫うそうだ。

期限が残り一週間なので、暫く籠って作業すると言い残して去っていった。

残された二人はというと昼間は仕事をして、夜は特技の見せ方を研究しているそうだ。シユイは縫物で忙しいので、弓を使った見栄えのいいや演出はヒュールミが考えている。

お互いがライバルの筈なのだが、完全に共同作業となっているな。当初の目的を忘れて楽しんでいるだけの気もするが、ここ最近は色んなことがあり過ぎた。気分転換になっているのなら、良いことなのだけだ。

ちなみに選んだ服も特技の練習も一切見せてくれない。当日のお楽しみらしい。

いつものようにハンター協会前で商売をしながら、日に日に準備が整っていく姿を眺めているだけでも結構楽しいな。

横断幕が張られ、会場には舞台が組み上がっていく。闇の森林階層から送られてきた木が大量にあるので材料には困らない。

参加希望者が三十を越えたそうなので、厳選なる書類審査と面接の結果十名までに絞られたそうだ。あの三人はもちろん合格している。

そういえば本番での審査員は各階層のハンター協会会長が担当するそうだ。

公平な立場で判断してもらおう為のメンバーらしい。あの個性の強い面々が審査員なのか……みんな頑張れ。

参加者の中にはシャーリイさんは当然として、他にも俺と接点のある人が数名参加しているそうで熊会長が「当日を楽しみにするがいい」と口元に意味深な笑みを浮かべて教えてくれた。

誰が出るのかな。知り合いには綺麗な人が多いから、誰が出ても違和感は無さそうだ。

ラッミスとヒュールミに頑張っただけという気持ちはあるが、こういったお祭り騒ぎは楽しんだ者が勝ちだと思う。

誰が一位になっても素直に祝福したいな。

ミスダンジョンコンテスト その3

最近、みんな忙しそうだ。

深夜になると滅多に人が訪れないのだが今日は頻繁に利用されている。

ハンター協会前では夜中だというのに今も舞台設置や準備に追われている人々が、慌ただしく働いているので俺も眠らずに見守っておこう。

ラツミスたちも毎日頑張っているようで、接点が減っているのが少しだけ寂しいけど、コンテスト当日を楽しみにして辛抱しないと。

本当はこんなことをやっている場合ではないのかもしれない。現状は問題が山積みで他の階層へも救援に向かわないといけないだろう。

本来なら直ぐにでも俺たちが行くべきなのだろうが、最近休みなく稼働し続けている俺を気遣っていてくれるのかもしれない。

熊会長は「頼れる部下を先に偵察で向かわせている」と言っているので、その人が帰ってくるまでは待機することになっている。

何もかも俺たちだけでやらなければならぬ気になっていたが、他にも頼れるハンターはいるらしいので、暫くはお言葉に甘えて休養させてもらおう。

考えがまとまると途端に暇になってきた。ラツミスたちに渡したファクション雑誌でも読んでおこうかな。

自分から漏れ出る光に照らされている雑誌を 念動力 で操りペー지를めくっていく。

いやー、改めて 念動力 は便利だな。こうやって深夜暇な時に新聞や雑誌が読めるのは本当にありがたい。

夜の闇の中、光を放ち宙に浮かぶ雑誌を読む自動販売機って、日本なら都市伝説にでもなりそうだが、ここは異世界なのでそんなことは気にしないでおこう。

高校生特集があるのか、年齢的にはラツミスたちに丁度いいな。うーん、服装のところはスルーしてと、当日の楽しみがなくなるからな。

他にも色々あるな、可愛い小物やネイルや化粧か、ふむふむ。日本だと他にも読むべき物や娯楽が山ほどあったから、女性用のファッション雑誌を真剣に見ることなんてなかったな。

漫画雑誌も出せるのだが購入したのは週刊少年漫画雑誌が一冊なので、同じ話を延々と読み続けなければならぬ。もう、キャラたちの台詞を暗記してしまうぐらい読みこんでしまった。

次は何しようか。日課の現地語の勉強やっておこう。

幼児向けの文字の書き方を覚える参考書のような物をキコユからもらったので、毎日それを見ながらノートとボールペンを 念動力で操り勉強をしている。

ちなみにノートとボールペンは 自販機コンビニ で仕入れた物だ。実は 自販機コンビニ はこういった雑貨もコンビニに置いてある物ならある程度なら置けるのだが、俺が殆ど購入しなかったからな。

便利なのだがコンビニでも買える品なので購入を控えていた。自動販売機限定商品でもあれば飛び付いていたけど。

こういった雑貨も売れば大儲けできるのだが、文化レベルの高い品の流入は問題になりそうなので、親しい人物にしか提供していない。

「お、勉強してんのか。熱心だな」

カリオスとゴルスか。考え事をしていたから、こんなに近くに来

るまで気が付かなかったよ。今から夜勤かな、お疲れ様。

「いつもの頼むぜ」

「同じものを」

二人とも買う商品が決まっているからな。新商品が出ると試しに買うのだが結局、いつもの定番に落ち着くというのがパターン化している。

「ありがとよ。お、そうだ、ミスダンジョンコンテストに彼女も出ることになったから、その際はよろしくな」

カリオスの恋人も出るのか。あの全身赤一色はインパクトがあったな。

うんうん、お淑やかで美人だったから話題になりそうだ。また、ラッミスたちのライバルが増えてしまった。

イベントとしてはかなり盛り上がりそうだ。見物人として客観的に考えるなら、当日の参加メンバーには期待が持てそうだ。

各々の思惑と野望が渦巻く中、ミスダンジョンコンテスト当日の朝を迎えた。

とまあ大袈裟な表現をしたが、賞品目当てと売り上げ目当ての人が一番張り切っているのは確かだ。

会場は即席とは思えないぐらい立派で、前回の大吃い大会での経験が生きているのか。

観客席には既に長椅子が並べられて、収容人数は百を超えるだろ

う。

関係者は薄い水色の法被を着こんでいて、この階層のシンボルカラーが湖の色だと初めて知った。俺がこの世界で目が覚めた時に見た湖は、目を見張るぐらい綺麗だったから納得がいく。

「ハツコン、おっはよー」

「ういつす、ハツコン」

「目が覚める物、欲しいつす」

元気ハツラツのラツミスと少し寝不足っぽいヒュールミ。そして、かなり疲れているように見えるシュイがいる。

「やっと服が完成したつすよ……間に合ってよかったつす」

「ごめんね、シュイ。もし、優勝できたら約束通り賞品は渡すから」

「おう、オレが優勝はねえだろうけどよ、万が一優勝したら商品は譲るぜ」

「感謝つす」

シュイは今朝まで服の制作を頑張っていたのか。

三人分を一人で受け持つのは負担が大きいと思っていたけど、そういう交渉が成立していたのか。納得だ。

「それじゃ、ちゃんと見ててね。応援してよっ」

「いってくるぜ」

「頑張ってくるっす」

「いってら」

饑別にスポーツドリンクを三人に渡し、立ち去る背を見送った。

さて、後は観客席で見たいけど……しまった、ラツミスに運んでもらうべきだったか。ここでダンボール自動販売機と風船のコラボで移動するのは大袈裟だし、着地が難しいからな。折角作り上げた舞台を壊してしまったら大惨事だ。

「今日は晴天で何よりだ」

おっ、ハンター協会から出てきた熊会長が空を見上げ目を細めている。

いい天気で良かったよね。絶好のイベント日和だ。

「ここでは良く見えぬだろう。一番見える場所に運ぼうと思うが構わぬか？」

「ありがとうございます」

助かるよ、熊会長。どうしようかと思っていたところに渡りに船とはこのことだ。

熊会長に抱き抱えてもらい、舞台正面の最前列ど真ん中に設置された。

えっと、最高の場所だとは思っけど俺の両脇に腰かけている人物が非常に気になるのですが。

「おー、ハッコンはんも来たんか。今日は美女たちを拝めると聞い

て、ごっつう楽しみにしてまっせ。期待しすぎて目の下にクマできてもうてな、清流の会長もクマできてんとちゃうん？」

これは真黒な闇会長にはクマができていても見えないということと、その話題を熊会長に振ることでもクマと熊がかかっているギャグかっ！

まあ、スルーするけど。

「闇の会長さんは相変わらずお喋りですねえ。お喋りと言えば、昨日こんなことがありまして。私たちは清流の階層に住ませてもらうことになってから、この階層のルールを学ぼうと必死でしてお隣のテントに住んでいる方に挨拶に伺ったのですよ。そしたら、私の顔を見るなり眉根を寄せて「どっちだ」とか呟くのですよ。きっとあれは私の美しさに見惚れてしまって、既婚者なのか独身女性なのか判断がつかないって意味ですよね」

左は闇の会長、右は迷宮会長。最悪の多重音声だ。

熊会長は闇の会長の隣にいるわけだが、ちゃんとこっち側に来て一緒に挟まれようよ。そんな申し訳なさそうな顔をして誤魔化されないぞ。

「二人ともお喋りは程々にせんか。もうじき、始まる。審査員なのだから、ちゃんと審査する様に」

「わかりましたわ。お任せください」

「わかったで、あんじょう頑張りまっせ」

あんじょうって関西弁で上手くとかそんなニュアンスだったような。お喋りな親戚のおじさんが頻繁に使っていたな。

それはいいとして、一つ気になることがある。ここって審査員席のようだけど、何で俺がここにいるのだろうか。

「ハツコンには審査員をやってもらおうと思っている。本来は始めの会長がやる筈だったのだが、諸事情によりできなくなってしまった」

「ほんで、ハツコンはんが任命されたってわけか。仲間が参加しなくても、不正はせえへんと思込んでるんやな。清流の会長は」

そう言ってもらえるのは嬉しいことだが、審査員をさせられるのか。

確か持ち点が十点あって、一人ずつ点数を付けていくのだったか……責任重大だ。

とはいえ、自動販売機である俺にこんな大役を任せてくれたのだ、期待に応えないと。

見物人として気楽に見学するつもりだったが、真剣に評価するぞ。一挙手一投足に注意して、その人の魅力を見逃さないようにしよう。

今回の採点システムは審査員に全ての権限があるという訳じゃない。観客も一人一票投じることができて、それもポイントとして加算されるので、観客へのアピールが重要になってくる。

開始時間が近づくと後方の席はあつという間に満席となり、これだけでも今回のイベントを開催した価値があった。

やっぱり、みんな娯楽に飢えているのだな。今回の騒動で誰もが傷つき、表面上は明るく振る舞っているが心の傷は大きい筈だ。

今日一日だけでも嫌なことを忘れられるぐらい、楽しんでくれたらいいのだけだ。

そんなことを考えていると、舞台の脇から一人の女性が進み出て

きた。

メイド服っぽい作業着姿のムナミか。彼女もコンテストに参加するのかと思っていたので訊ねたのだが「私は自分を客観的に見られるからね。負ける試合には挑まないのよ」とのことだった。

少し地味目な感じなので、失礼だとは思うが言いたいことはわかる。周りが美人ばかりだと物怖じするよな。俺だって美男子コンテストに参加しろと言われたら即座に断る。

今は自動販売機なので生前よりかは外見に自信あるけど！

「皆様、長らくお待たせしました。これより、第一回、清流の階層ミスダンジョンコンテストを開催します！」

「うおおおおおおおっ！」

野太い声と黄色い歓声が会場を満たしている。

意外にも男性だけではなくて女性も盛り上がっているようだ。これは大成功の予感がするな。

嬉しい誤算に機械が異音を上げそうになったが、ぐっと堪えて出場者たちが現れるのを待った。

ミスダンジョンコンテスト その4

「では、お待ちかねの出場者の入場です。大きな拍手で迎えてください。記念すべき、一人目はこの方！」

ムナミが魔道具の拡声器を手に叫ぶと、舞台の袖から一人の女性が歩み出てきた。

黒縁の眼鏡に緑のワイシャツとスーツスカートの様な服装。あれっ、両替商のアコウイじゃないか。生真面目そうな人だから、こういったイベントには参加するタイプじゃないかと思っていたよ。

「商人や商店の方々は既にご存知でしょう。いつもお世話になっております、両替商のアコウイさんです！」

舞台は半円状になっていて観客席側の円形部分の縁を歩くのが決まりらしく、いつものように冷静な表情でただ黙々と歩き、司会進行役のムナミの隣でピタリと止まった。

「アコウイさん、意気込みを聞かせてください」

「狙いは優勝賞品のみです。この世で何のしがらみもない無料程、惹きつけられるものではありませんので」

「さ、流石、お金にシビアなアコウイさんといったところでしょうか。どうもありがとうございます！」

本音で話をすればいいってもんじゃないと思う。でも、アコウイと関わりのある人たちは拍手喝采だな。あの激しく手を打ち鳴らし

ている大柄な人は部下のゴツガイか。

以前、花を彼女に渡したそうだが二人の関係はどうなっているのだろう。少しだけ気になる。

「続きましての入場は、この方！」

次に現れたのはカチューシャで前髪を上げた長い黒髪。地味な色合いのロングスカートとエプロン姿の見るからに大人しそうな女性。この人って、あの人だよな。

「道具屋の看板娘、フィア！ 実は密かにハンターの男性陣に人気があったのですが、カリオスさんとお付き合いを始めて嘆き悲しんだ人が数多いと聞いております！」

公衆の面前に晒されて恥ずかしいのか、少し俯いて顔を真っ赤にしながら小さく手を振っている。

カリオスの彼女はフィアって言うのか。初めて知った、覚えておこう。

「くそう、カリオス死ねっ！」

「可愛いぜ、フィアさん！ カリオス死ねっ！」

「あんなに美人なものにもつたいねえなあ、カリオス死ねっ！」

野太い声援が飛び交っているのだが、語尾に「カリオス死ね」を付けなければならぬルールがあるのだろうか。

当のカリオスは彼女に見惚れていて声が聞こえていないようで、緩みきつた顔で大きく手を振っている。フィアさんも気づいたように照れながら手を振り返している。

そして、その光景を目の当たりにしたハンターたちの殺気が膨れ上がった。

隣にいるゴルスが大きいため息を吐いているのが印象的だ。気苦
労が耐えないな、頑張つて。

「意気込みをどうぞ」

「あ、あの、できるだけ頑張ります……」

照れた仕草と声が好印象を与えたようで男たちがざわついている。
そして、カリオスへの殺気が倍増する。

「続いての参加者はこの方！」

黒い艶のある体毛に愛嬌のある顔には大きな鼻。一枚しか服を羽
織っていないという大胆な格好。

「大食い団の紅一点。足の速さと大食いが自慢、スコちゃんです！」

短い足で歩いているだけだというのに観客の顔が緩んでいる。外
見の愛くるしさは人間には太刀打ちできない魅力となっている。

美人かどうかは判断できないが可愛いのは確かだ。

「スコちゃん、意気込みをどうぞ」

「優勝してお腹、いっつぱいになるまで、高い商品を食べたいで
す」

わかり易い目的でいいな。誰かと被っているけど。

「四番目の入場は……昨日飛び入りでエントリーされた、このお方！」

出てきたのは真つ赤な女性用スーツの上下にブーツまで同色で揃えた服装。一見、気が強そうに見えるが根は優しい責任者、始まりの会長だった。

いつもの少し怒ったような表情だが、頬が若干赤く舞台を歩いている際に何故かこっちの方を見て睨みつけている。

「ひゅーひゅー、カワイイでっせえ、始まりの会長はん！ ほら、笑顔、笑顔。にーっと笑わんと」

闇の会長が応援……いや、あれはからかっているようにしか見えない。

迷路会長と熊会長は視線を逸らして、始まりの会長と目を合わせようとしない。何かあったのだろうか。

「むっちゃ睨んでたわ、こっわー」

「お主が挑発したのが原因で参加する羽目になったのだから、当然であろう」

「挑発なんてしてへんで。ただ、折角の祭りやのに会長ももつと積極的に参加するべきやないかな。ここで会長自ら参加したら、始まりの階層の住民たちもこの階層に馴染むのが早くなるかもしれない。あー。って言っただけやん」

「それだけでは、なかったであろう。やっぱり自信が無いのか、その年で独身の理由はそういうことかぁーとか、煽っておったではないか」

「なんのことがさっぱりやわ」

闇の会長が始まりの会長を引つ張りだしたのか。あの人の性格で参加するのが不自然だとは思っていたが、そういうからくりだったとは。

「始まりの会長、意気込みを一言」

「我が階層の住民がお世話になっている。この祭りを少しでも盛り上げる為に参加させてもらった」

始まりの会長らしい真面目な意見だ。

彼女が急遽参加することになったから、俺が代わりに審判員としてここにいるのか。

「では、五人目の入場です！」

今度の出場者はかなり小柄な少女だった。これまでの出場者の中で最も高価な服を着た、ツインテールのお嬢様。

スオリも参加していたのか。まだ十歳前後なのでミスダンジョンコンテストには場違いのような。美少女コンテストならありだが。

「スオリちゃん、意気込みお願いできるかな」

「うむ、わらわが目指すのは優勝のみ。よろしくお願いいたしますわ」

スカートの端を摘み優雅に礼をしている。

少し生意気な態度もその可愛らしさと根はいい子だとわかってい

るので、住民からの受けは悪くない。集落が壊滅状態になった後、多額の寄付をしてくれたことが知られてからは、更に親しまれるようになった。

特に高年齢層に人気があるようで、今も微笑みながら拍手をしている。孫のお遊戯会に参加している感じなのかもしれない。

これで半分か。今のところ全員知り合いだ。残りの五人も予想がつくな。

「さつとと、六番目は……今度も可愛らしい参加者ですよー」

初秋だというのに暖かそうなコートを着ている一人の少女。髪も服も白雪の様な純白で統一されている。

キコユも出るのか、始まりの会長に続いて意外性のある出場者だ。見た目の年齢はスオリと同じか少し下に見えて、何処か儂げなところが保護欲を刺激するようで、年上連中の頬が上気している。女性はまだしも敵つい男連中は衛兵に逮捕してもらった方が良い気が。

「キコユちゃん、何か言いたいことあるかな」

「えと、新鮮なお野菜を売っていますので、よろしくお願いします」

宣伝効果を狙ったの参戦か。一瞬、俺の方を見たので間違いない。ここで知名度を上げることにより顧客を増やすつもりなのだ。

流石、我がライバル店だと評価しておこう。

「さあ、もう折り返し地点を突破しましたよ、皆様の一押しは見つかりましたか。まだな方はこの後もご期待ください。では、七番目の入場です！」

もう七人目か、今度は誰かな。

男の子の様な短く切りそろえられた髪型なので一見、男の子に見える弓を背負った女の子が一人。

俺の方を見て舌なめずりするのを、やめてもらえませんかね、シユイ。

優勝賞品である無料お食事券を想像しているのだろうな。

「意気込みをどうぞ！」

「優勝して、胃袋がはち切れるぐらい食べるっす！」

うん、やっぱりスコと同じ発想だ。

「残りはたった三名。次の挑戦者は一体誰だー！」

ムナミの進行が格闘技のアナウンスじみてきたぞ。飽きられないように言い方を変えている努力は認めるけど。

黒衣にミルクティー色の髪はいつものように所々が跳ねていて、今日も碌に櫛を通していないようだ。当日なのに自然体で勝負なのか、ヒュールミらしいけど。

不機嫌な表情に見えるがあれは必死に照れを隠しているな。口角がぴくぴくと痙攣している。

「ヒュールミ、意気込みあるかな？」

「ん、まあ、それなりにやるさ」

ぶつきらぼうだが、ヒュールミがこの場に立ったこと自体が珍しいことだし、あれでもかなりやる気がある方だと思っ。

「さーで、最後から二番目は……おおっ、本命の一人かつ！」

今までで一番テンションの高いムナミが声を張って紹介したのは、金髪のサイドポニーに青い短パン黒タイツでお馴染みのラツミス。今日は革鎧を装着していないので、凶悪な二つの房が歩く度に揺れている。

男だけではなく女性の視線もその揺れに合わせて上下しているようだ。って、お前らじろじろ見るんじゃない。

「ハッコーン！　うち頑張るからねっ！」

俺の前で立ち止まって両腕を激しく振っている。風が巻き起こっているから程々にな。

周囲の男たちの視線が殺気を孕んでこっちに向けられるが、俺の姿を見てなんとも表現し辛い顔になっている。

嫉妬した相手が鉄の塊だからな。それにジェラシーを抱くべきなのか戸惑っているのだろう。俺が生身の人間なら今頃逃げ出していたかもしれない。

「ラツミス、やる気全開だねっ！　意気込みどうぞ！」

「えとね、みんな応援よろしくねっ！」

笑顔で片腕を突き上げると、会場から地鳴りのような歓声が上がっている。

あれ、もしかして俺が想像している以上にラツミスって人気があるのだろうか。

若い男たちだけじゃなく老若男女が声援を送っている。あの人当たりの良さと復興作業での活躍で住民からの好感度が上がっていたのか。これは本気で優勝狙えるぞ。

「では、最後の出場者は……下馬評では大本命のこの方が、満を持しての登場だっ！」

未だに興奮冷めやらぬ会場のざわめきがピタリと静まった。全員が舞台の一点だけを見つめている。

そこには、青いイブニングドレスから惜しみなく肌を露出している一人の女性がいた。大胆すぎる胸元のカットイングと腰まであるスリットは、人によっては下品に映るかもしれない。

だが、シャーリイが着こなすことで、それは一つの芸術となる。

艶やかな黒髪は日光に煌めき、薄いピンクの小ぶりな唇が少し開くだけで男たちは生唾をぐくりと呑み込んでいた。

こ、この、圧倒的な色気は何だっ。今までの出場者とは明らかに質の違う雰囲気。

外見だけではなく、その足運びやちよつとした仕草の全てに釘付けになってしまう。

これが夜を支配し、一目で男を虜にする女帝と言われるシャーリイの実力か。

「あ、えと、シャーリイさん。今日もお綺麗ですね」

「ふふっ、ありがとう」

妖艶に微笑んだだけで一部の男性が腰砕けになっている。

ここまですると魔性の美しさだな。

「あの、意気込みをいただけますか」

「そうね、応援お願いしますわ」

シャーリイ がウインクをすると、男性陣が色めきだっている。

駄目だ、このままじゃ優勝を持って行かれるぞ。格が違ったか…
…この後のアピールタイムで何とか挽回しないと勝ち目がない。
シュイが作り上げた服と特技のインパクトで、情勢をひっくり返
せればいいのだけど。

ミスダンジョンコンテスト その5

出場者が全員、舞台の上に横並びで立っている。

ある意味一番目立っているのは、タスマニアデビルの外見をしているスコだろう。今回の参加者の中で見た目が人間ではないのはスコだけだ。

これは獣人系の票を集めるかもしれないな。あと動物好きは必ず一定数存在しているので、そういった相手に対する強みがある。

会場の盛り上がり具合から予想するのであれば、ラツミスは二番人気だろう。

個人的には一押しだが私情は挟まないようにしないといけない。

スオリとキココは片方だけが出場ならロリコン枠……もとい、少女としての可愛らしさで票が集まる可能性もあったのだが、同年代に見える二人が出場したことにより票が割れるのではないかと考えている。

他の出場者だって固定ファンがいるようで、外見だけではなく日頃の人当たりの良さや言動が票に繋がりそうだ。

そして、大本命は言うまでもなく、シャーリィだろう。

女性でも思わず見とれるような容姿。理想の女性像と表現しても過言ではないスタイル。

夜の商売をしているのだが店の評判は良く、色々とお世話になっている男性陣たちは間違いなく票を入れるだろう。

となると、女性から嫌われていそうなものなのだが、そんなことはない。

衛生面、金額、職場環境にかなり気を遣っているようで、そこで働いている女性から苦情が熊会長に寄せられたことは一度もないそうだ。

現代日本だと問題がある行為だとしても、この世界では違法ではなく一般的な仕事のひとつらしい。

噂によると見た目は人間と変わらないが人の精を糧にして生きる種族もいるそうで、そういった種族を結構雇っているそうだ。流石の異世界、日本の常識が通用しない。

つまり、何が言いたいかというと、シャーリーさんには死角がない。

日本ならシャーリーさんの仕事に対して嫌悪感を抱く層が結構いるのだが、ここでは殆どいないようだ。今のところ会場の反応から察するに一番人気は固い。どうやれば、ラツミスたちが勝てるのだろうか。

「では、皆さんもう一度大きな拍手を！」

手を打ち鳴らす音で俺は思考の海から浮かび上がってきた。出場者が一旦、舞台袖に消えて行く。

「今から、衣装替えをしてもらいまして、特技披露となります！自慢できる特技がない方は……観客の皆さんに好印象を与える何かを考えてもらうことになっていますので、乞うご期待ください！少し休憩となりますので、その間にトイレ、飲み物、食べ物の補給をされては如何でしょうか。各店舗が腕を振るった料理の数々が皆様をもてなして」

ムナミの台詞が途中から露店の宣伝に変わっている。話を聞き流しながら、第一印象での出場者の評価を脳内で纏めていた。

「ハッコン、わりい、ちょっと来てくれ！」

「ごめんね、ちょっとだけだから」

着替える時間の筈なのに、ラッミスとヒュールミが舞台上上がった時と同じ服装でやってくると、返事も聞かずに抱え上げられて運ばれて行く。

「あの」

「ごめんね、直ぐだから」

急いでいるようで詳しい説明もなく、とあるテントに運び込まれる。

そこには出場者たちが思い思いの服装に着替えている最中だった。もう既に着替え終わっている面子もいるのか。

カリオスの恋人であるフィアは 全身真っ赤だった。赤のワンピースに赤のマフラー赤い靴。以前見たことのあるストーカーフィアツシヨンか。

恋人の好みに合わせたのだろうか、一般から高評価を得られるかは微妙だと思う。始まりの会長はその格好を見て、良い趣味だと言わんばかりに感心しているが。

これで赤が被ることになるのか。普通ならインパクトのある格好なのだが、赤好きの始まりの会長がいたことが不運だった。

さて、やましい気持ちは全くないのだが、ラッミスたちを勝たせる為の情報を得る為に、渋々、着替えている最中の出場者の様子を、じっくり、見逃さないように観察をしないといけない。

「ねえ、ハツコン。変なところ見てない？ 明かりが点滅してるよ」

しまった、心の動きが照明とスイッチの明かりでわかると、以前もラッミスに指摘されたのだった。ここは平常心で対応しなければ。

「あたりがでたらもういっぼん」

「ハツコンって惚ける時に、よくその言葉使うよな」

くっ、ヒュールミから冷静な指摘をもらってしまった。迂闊な言動は自分を追い込むことになりそうなので、控えることにしよう。

この騒ぎに気が付いたシユイがこっちに歩み寄ってきた。彼女も一緒に何か頼みごとでもあるのだろうか。

「って、そんなこと言いたい訳じゃなかったの。このままじゃ、たぶん……うっん、きつと、シャーリイさんには敵わない。うちらじや、もうどうしようもなくて」

「都合の良すぎる頼みだとはわかってているが、女性の魅力を押し上げるような商品があったら、頼むっ！」

「お願いするっすー！」

三人が手を合わせて拜んできた。

ええと、俺も力を貸してあげたいのは山々だけど、服は既に用意している状態で目を引くような小物も用意できない。

後半開始までは一時間ぐらい休憩があるが、その間にやれることが。

正直な話、手が無い訳じゃない。一応、こんなこともあるうかと考えていたことはある。だけど、三人となると時間が足りない恐れが。

「さくがあり」

「ますでも」

「たりねい」

江戸っ子風になってしまった。「じ」と「な」が言えたらもつと上手く伝えられるのだが。

「ええと、考えがあるけど足りないんだよね。何が足りないのかな……道具？」

「さんねん」

「ってことは、時間？」

「いらっしゃいませ」

「こつやって言葉を繋ぎ合わせられるようになっても「はい」「いいえ」の「は」と「え」が言えないので、今まで通り「いらっしゃいませ」「さんねん」で返事をした方が早い。」

「策はあるが、それをするには時間が足りねえってことか。それって、三人分だと時間が足りないってことか？」

「いらっしゃいませ」

一人……いや、二人なら何とかなるかもしれない。

「じゃあ、何をするのかはわからないっすけど、二人がしてもらえばいいっす。二人が優勝したら商品は貰える約束っすから」

「えと、いいの？」

「いいっす！二人の方が優勝への想いは強いっすからね」

そう言って身を引いたシュイは眩いばかりの笑みを浮かべた。

「わりいな。まあ、オレはおまけだが万が一、優勝できたら絶対に賞品は渡すから安心してくれよ」

「うんうん、約束する！」

シュイはその言葉を聞いて満足したようで、俺たちから離れると服を脱ぎ始めた。

そして、二人は俺の視線から着替える姿が遮られる場所に移動した。わざとだよ……。

「ハツコン、何だって耐えるから、お願い！」

正直言って自信はないが、やるだけやってみよう。俺のテクニクで彼女たちを輝かせてみせるぞ。

俺は再び審査員席へと戻ってきた。時間ギリギリだったので控え室……控えテントまで迎えに来た熊会長に運ばれてだが。

「何をしておったのだ。公正な審査をせねばならぬ。賄賂などは厳禁だ」

「いらっしやませ」

やましい事をしていたわけではないので、そう返事しておいた。

手は貸したが審査に手心を加えるつもりはない。まあ、俺の好みで左右されるのは勘弁してほしいけど。

「始まったようだな」

舞台に視線を移すとトップバッターのアコウイが舞台に進み出ていた。

手には口を紐で縛った袋を二つ持っている。そんな物で何をする気なのだろう。先が読めないけど楽しみにさせてもらおう。

あれから、次々と出場者が現れては特技とお気に入りの服装を披露している。

フィアは全身を赤で統一したファッションで舞台上に作業道具を用意すると、ポーションの調合をしていた。

スコは自分の半分ぐらいはある肉の塊をあつという間に平らげていたな。

始まりの会長の服装は同じだったのだが、舞台に等身大の藁人形を用意すると目にも止まらない蹴りの連打を繰り返していた。蹴り技が得意なのか。

藁の人形が真黒に染められていたのは触れないでおこうと思った。隣で闇の会長が身震いしていたが気にしない。

スオリは社交界にでも行きそうな煌びやかなドレスで現れると、続いて黒服軍団がやってきて組体操のようなことを始めた。

ちなみにスオリは後ろで満足げに見ていただけだ。これはアピールになるのだろうか。お疲れ様です、黒服の皆さん。

キココも格好はそのままだったのだが、ボタンと黒八咫に芸をさ

せていた。これは会場も盛り上がっていた。でも、あれって芸を仕込んだわけじゃなくて、ボタンと黒八咫の頭がいいだけだよ……。そして、楽しみにしていたシユイの番が来た。どんな格好とアピールをしてくれるのだろうか。あのファッション雑誌から、どの服を選んだのか注目だ。

ミスダンジョンコンテスト その6

さて、シユイはどんな格好で出てくるのか。俺の予想だとアウトドアの格好……キャンプ場とかで見かけるファッションが似合うと思う。

あのファッション雑誌にも夏場のバーベキューやキャンプでモテ女になるには！ みたいな煽り文句が書いてあったからな。ボーイツシユなシユイにはピッタリだろう。

おっと、出てきたようだ。

白く清潔感のある半袖の服なのだが、袖と首元は黒い縁取りがされている。

そして、胸元には四角い布が張りつけられている。そこには、何か文字が書かれているのだが、まだ勉強中なので読み取ることができない。

たぶん、初めの文字は、し？ だと思うが残りがわからない。予想はつくけど。

そして、下腹部には一瞬下着なのではと目を疑いそうになったが、よく見ると黒い短パンにも見える。

冷静に観察してみたが、実は一目見てそれが何であるのかわかっている。

体操服だこれ。

まさか、これを選んでくるか……女子高生特集には今と昔のファッションの違いがあって、タイトルは女子高生の古今東西だった。

「見たこともない格好やけど、なんかぐっとくるで」

「ふむ、上手く言い表せないが、妙に目を引くものがある」

「動きやすそうな格好ですね」

審査員の会長たちの反応は悪くないな。会場の男性陣も盛り上がっているようだし、このチョイスはありのようだ。

舞台には色とりどりの風船が設置されて、それを側転や宙返りをしながら射抜いていく。これには子供も大人も大喜びだ。

彼女には風船でしか手を貸せなかったが、今までの中では一番の盛り上がりかもしれない。

全ての風船を破裂させると、シユイが両腕を大きく振り舞台袖へと消えてく。

次は順番だとヒュールミか。俺が手を貸したことがプラスに働けばいいのだけど。

「続いてはー、ヒュールミさんの番なのですが、当人たちの希望により、特別に二人同時に登場してもらいます！ はりきってどうぞー！」

おっ、同時に出てくるのか。上手くいけば相乗効果が期待できるが、失敗すると票が分かれてしまうかもしれないな。

駆動音の高鳴りを抑えつつ、舞台をじっと見つめていると彼女たちが現れた。

紺色の地味な色合いだが首元の大きな襟が特徴的だ。そして真っ赤なスカーフを襟の下に通して胸元に垂らしている。

下は足首辺りまでスカート裾があり、何故か肩に木刀のような物を担いでいる、ヒュールミがいた。

これ、昭和の一時流行ったスケバンだ。あれってセーラー服だよな……ビックリするぐらい似合っている。

髪は後ろで縛ってポニーテールにしているのもポイントが高い。まさか、そっちで攻めてくるとは。そうなるとラッミスは……。

続いて現れたのは、紺色のジャケットに白のワイシャツ。そして胸元には目が覚めるような青のリボン。下はチェック柄で裾が膝上の短いスカート。

こっちはブレザーの制服できたか。これは鼻負無しに可愛いぞ。こんな女子高生がいたら、クラスの男子が黙っていないだろうな。成程、二人とも自分に似合いそうな制服を選んだという訳か。

ヒュールミの格好は下手したら、滑稽に見える可能性もあるのだがこの異世界には存在しない服なので、好意的に受け入れられるようだ。

そして、異世界の人間にもわかるくらい似合い過ぎている。まるで彼女の為にあつらえたかのような違和感の無さ。

でも、もつと可愛い服もあつた筈なのに、あえてあれを選んだのはきつと……恥ずかしかつたからだろう。確かに似合ってはいるが色合いが地味で、ラツミスと並ぶとその欠点が際立ってしまう。

隣に並ぶラツミスはその明るさとスタイルの良さが、制服を装備することにより相乗効果を発揮しているな。日頃の格好も好きだが、この格好は新鮮味があつて多くの観客がどよめいているぞ。

そして、それだけじゃない。二人ともいつもより綺麗なのだ……顔が。これはお世辞ではなく、いつもと顔が少し違う。

顔全体に薄らとファンデーション、口紅も塗られている。濃い化粧ではないが、ナチュラルメイクを施している。

素材が良いので厚化粧は必要ないと判断したのだが、目が大きく見えて口紅は少し明るい色にしておいた。舞台では遠くの人にも見えるように、目立つようにした方が良さらしい。

そうやって彼女たちに化粧したのは 俺だ。

そう、あの化粧をしたのは俺なのだ。

彼女たちが出場を決めたその日から毎夜ファッション雑誌を読み

漁り、これでハートを鷲掴みメイク術というコーナーを参考に、朝まで練習を繰り返してきた。

俺の前には化粧を試し塗りされたペットボトルや缶がズラリと並んでいたの、買い物に来たお客が意味もわからず困惑していたな。

そもそも、化粧品をどうしたのかと俺の能力を知っていたら疑問が思い浮かぶかもしれない。商品は俺が自動販売機で購入したことがある物しか取り出せない。

その縛りがあるのに化粧品を出せたということは、化粧品を自動販売機で買ったことがあるということだ。

まず、化粧品の自動販売機は存在した。海外の化粧品メーカーなのだが2009年だったか、大手ショッピングモールや銀座等に置かれていた時期があった。

残念なことに二年ぐらいで撤退してしまったのだが、もちろんマニアとしてチェック済みで、その物珍しさにわざわざ車で遠出をして購入したのだ。

ああ、男が一人で化粧品をな！

「これが母さんが頼んでいた化粧品か、ええとこれとこれを」

と声に出しながらメモを取り出し、母親に頼まれて渋々やってきた感を出しながら買いましたとも！

実際、購入した商品は母の日に実家へ送ったので嘘ではないのだが、異様に恥ずかしかったのを覚えている。

あの時の経験がこうやって力になっていっているのだから、男なのに化粧品を買ったことは間違いなかったということだよな。うんうん。

そんな過去の思い出はどうでもいいのだけど、化粧をすることに關しては男性の中にはこういった考えの人がいるのではないだろうか。

「俺はノーメイクの方が好きだ」

と。ちなみに俺も昔はそうだったのだが、仲の良い女友達とそんな話をしていたらキレられた。どんな会話内容だったか詳しく思い出してみるか、確か

「男ってたまにそんなことを口にする世間知らずがいるわよね。元々、素材が良いなら化粧なんてしなくてもいいだろ、とかふざけたこと言う輩には美人ともてはやされている女優やアイドルが全員化粧をしている理由を説明して欲しいものだわ」

「えっ、でも、月曜の夜にやっているドラマに出ている女優さんって、風呂上がりのすっぴんの場面も綺麗だったよ？」

「ばっかじゃないの。すっぴん風ナチュラルメイクよ、あれ。あのね、すっぴんと化粧の差つてのは、モノクロのアニメと綺麗に色を塗ったアニメぐらいの差があるの。確かにモノクロでも見れるかもしれないけど、色が付くことによって魅力は数倍に跳ね上がるでしょ」

「あ、うん、まあ、確かに」

「その色塗りのテクニクも重要で何でも塗ればいいってものじゃないの、子供の塗り絵レベルだったら塗らない方がマシだし」

「そ、そうだな」

「化粧って美しくなる目的もあるけど、自分の欠点を隠せるというメリットが大きい。どれぐらい重要なのか見せてあげようじゃないの……今から化粧落としてやるから、どれぐらい変化するか勉強

しなさい。眉毛が無くなって、血色の悪い唇と、吹き出物やニキビを露わにした肌を見せてやるわ」

な、懐かしい思い出だな。あの後、素直にごめんなさいと謝った覚えがある。

外で会ったらわからないぐらい顔が変わったのだが、俺としてはすっぴんの顔も悪くないと思ったので、それを正直に伝えたら「ばっかじゃないのっ！」と更にキレられた。

その時の経験と毎夜の特訓が生きたようで、それなりに上手く化粧できたと思っっている。小学生の頃に絵画教室に通っていたのも少しは役だったのかもしれない。

二人とも元が良いので、ほんの少し後押しした程度なのかもしれないが、それでも力になれたのなら頑張った甲斐はあった。

昔を懐かしんでいる間に、舞台ではヒュールミの発明品をラツミスが運んできた。

それはマネキンのような等身大の人形で、ラツミスが渡された腕輪を装着すると、その動きを真似てマネキンが動き出した。

連動しているのか。これって、普通に凄い発明だな。

ラツミスが日頃の訓練と同じように拳を突き出すと、マネキンも同じ動きをしている。だけど、全力の突きの速さを完全に模倣するのは不可能なようだ。

ゆっくりした動きを完全に真似ているだけでも大したもののだが、素早く動く動きのずれが発生しているな。

面白がっているラツミスが、マネキンが寝転んでいた重そうな台を軽々と持ち上げる。そして、今度は少し位置をずらしてマネキンが持ち上げられるような配置になると、ラツミスは何もない場所で持ち上げる振りを試してみた。

「あっ、バカ、やめっ」

めきつ、と鈍い音が響いたかと思うと肘から千切れた腕を置き去りにして、マネキンが万歳をしている。

動きを真似ているだけで、その怪力を表現できるわけがない。

ラツミスが横目でヒュールミを確認して、拳を頭にこつんと当てて舌を出している。反省しているつもりだろうか。

隣で腕のないマネキンが同じことをしたので、観客からは笑い声が響いている。

そのまま、ヒュールミに追い回されながら退場していった。

会場の盛り上がりも一番だったし、彼女たちの格好と化粧も新鮮で評価も高いと信じたいが……問題はこの後の大本命か。

それは誰もがわかっているようで、さっきまでの騒ぎが嘘のように静まり返っている。みんな彼女　シャーリイを待ちかねているのだろう。

「では、皆様お待ちかねの……ってなに、母さん。えっとこれ読むの」

舞台の真ん中に進み出てきたムナミに宿屋の女将さんが走りよると、何か紙を手渡した。

それを読んでいるムナミの表情が驚愕から困惑へと変化した。何かあったのだろうか。

「失礼しました。皆様、申し訳ありません、シャーリイさんは急に体調を崩されたようで、棄権されるようです。一人減って九名による投票となりますので、振るってご参加ください！」

会場中がざわついているけど、無理もないと思う。大本命のシャーリイがいなくなると優勝者がわからなくなってきた。

まさかのリタイアか……シャーリイさんの体調は気になるが、こ

れでラツミスたちの優勝も見えてきた。これは誰が勝つか、投票結果を待つしかない。

「ハツコン、お主も審査するのを忘れておらぬか」

「あっ」

そうだった。何点を付けるか決めないと。

ミスダンジョンコンテスト 結末

採点表を係の人に渡し、後は結果を待つだけとなった。

自分の採点結果は十点満点がラツミス。続いて九点をヒュールミとシユイにした。残りは全員八点だ。

かなり悩んだのだが、臆目なしの的確な点数だと自画自賛している。ラツミスは会場の反応も一番良かったと思う。日頃の人気と制服が功を奏したのではないだろうか。

ヒュールミは似合っただけだが色彩が地味過ぎた。むしろ、ラツミスを際立たせる為にあえて地味な服を選んだのではないかと疑っている。それでも、発明品の凄さとラツミスとのやり取りが受けていたので九点。

シユイは体操服姿がボーイッシュな女子高校生に見えて、化粧を施さなかったのが逆に良かったと思う。

んー、三人に高ポイントを与える結果となったが、これは厳正なる審査の結果であり手心を加えたりはしていない……と自分に言い聞かせてみた。

ミスダンジョンコンテストは見た目だけじゃなく、全てをひっくり返して魅力的に見えた人が優勝するべきだと思っている。なので、この結果は必然……だといいな。

「誰が優勝するのでしょうか、楽しみですよわ」

あれ、背後から聞こえてきたこの声は。

視線を後ろに向けると、真後ろの観客席に座ったシャーリイがいた。いつものイブニングドレスではなく、ちょっと地味で一般的な格好をしている。

帽子を目深に被っているので周囲の人は気づいていないようだ。

「たいちょう」

「ざんねん」

「ええ、もう大丈夫ですわ。途中で棄権してしまったのは残念ですが」

そう言って頬に手を当てているが、見た感じでは血色も良く口調も滞りない。本当に体調が悪いのだろうかと疑念を抱いてしまづくらいに。

このまま、一人で考え込んでいても答えに辿り着くことはないだろう。なら、いつそのこと素直に訊ねてみるか。

「でまかせ」

「だったり」

俺がそう言っていると、帽子のつばが背中に当たるぐらい顔を寄せてきた。

「ふふっ、どうでしょうか」

悪戯つ子のような笑みを浮かべている。それが答えなのだろう。

ここからはただの憶測だが、シャーリイは初めから優勝する気がなかったのではないか。

優勝したら俺に接吻すると口にして、ラツミスたちを引っ張りだしたのも狙い通りだとしたらどうだろうか。初めから盛り上げる為だけに参加を表明しただけで、優勝は誰かに譲るつもりだったと。

だとしたら、大人の対応だなシャーリイは。彼女が出ることで他の出場者たちも、服装や特技で創意工夫に励んだはずだ。その結果、

イベントは大盛り上がりとなった。

「ありがとうございます」

「ふふっ、いえいえ」

彼女の反応を見る限り、俺の憶測はあながち間違っていないようだ。

今度、いつもの商品の売り値を少し下げよう。

「後は結果を待つのみですか」

シャーリーの隣にやってきたのはヘブイか。そういや、姿が見えなかったな。

目を細めていつもの胡散臭い笑みを顔に貼り付けているが、ミスダンジョンコンテストに興味があるのだろうか。ちょっと質問してみるか。

「いちいよ」

「せうしてよ」

「一位予想ですか……そうですね、個人的には始まりの会長の真っ赤なブーツが一番だと思いますよ」

「ざんねん」

まあ、そうくるよな。ほんと、ぶれないなヘブイは。

靴よりも履いている人物に目がいくことはないのだろうか。今も隣にシャーリーがいるというのに軽く会釈しただけだ。普通の男なら緊張しそうなものだが。

俺は自動販売機の商品は好きだが女性に興味がないという訳じゃない。だけど、ヘブイは本当に靴だけにしか興味がないようだ。

「皆様、大変長らくお待たせしました。集計作業が終わり、順位が決定されました！」

話しこんでいる内にムナミが舞台上に上がっていた。とうとう、結果発表か。

俺の評価と違う結果になっても受け入れて、非難せずに勝者を祝福しよう。

「では、第三位からの発表です。第三位は……赤と美脚で相手を悩殺よ、始まりの会長！」

おおっ、始まりの会長が三位か。これは男女問わずハンター票が流れたようだ。

このダンジョンで最初に足を踏み入れる始まりの階層で、誰もが会長に一度は世話になっている。なので、ハンターたちからの好感度がかかなり高い。それに、始まりの階層から移り住んできた人々の票も集まったみたいだな。

「始まりの会長、一言お願いします」

ムナミの横に歩み出てきた始まりの会長はきりつとした表情のまま、ゆっくりと口を開いていく。

「皆、投票感謝する。以上だ」

簡潔で愛想のない言葉だが、その表情はいつもより若干穏やかに見える。

「ありがとうございます。続いて二位の発表となります。誰が、二位の座を射止めたのか……第二位は可愛さ満点、笑顔二百点、女性票と高齢者の票を多く集めた可憐な少女、キコユちゃんです！」

ここでキコユが来るのか。

舞台袖から現れたキコユはボタンにまたがり、黒八咫が上空を旋回している。

清らかなイメージを抱かせる白一色と幼さ。そして、二匹の動物を従えてのアピールタイムが勝因のようだ。

「キコユちゃん、感想をもらえるかな」

「はい、皆さんありがとうございます。凄く嬉しいです」

キコユが頭を下げると、それに合わせてボタンと黒八咫も頭を下げている。

正直、二位も三位も予想外だった。この舞台でのアピールに対する客観的な評価だけではなく、票を投じた人々の価値観や感性の違いがここまで出るのか。

これで一位がわからなくなってきた。

「残すは一位のみです。さあ、優勝者は一体誰になるのでしょうか！ 泣いても笑ってもこれが最後！ 優勝者の発表です！」

舞台の奥で太鼓を小刻みに叩いている関係者の姿がある。やっぱり、こういう場面はドラムロールが必須だよな。

できることなら、三人の内の誰かが優勝して欲しいけど。

ピタリと太鼓の音が止むと同時に、ムナミが大きく息を吸い込んだ。

「栄えある優勝者は……元気ハツラツ怪力娘、ラツミスです！」

「うおおおおおおっ！」

おおおおっ！ やったな、ラツミス！

会場が地鳴りのような野太い歓声で満たされている。優勝して欲しいと願ってはいたが、本当にするとは。やっぱり、人気者なのだなラツミスは。

後頭部に手を当てて、ぺこぺこお辞儀をしながら舞台に彼女が進み出てきた。

「やったよ、ハツコン！」

満面の笑みを浮かべて、両手を残像が見える速度で振っている。嬉しさが溢れ出しているのが、見ている側に伝わってくるな。

「よ かつ た ね」

歓声に呑み込まれて俺の声は届かないだろうけど、心を込めてその言葉を贈った。

会場からは惜しみない拍手が鳴り響いている。それは優勝したラツミスだけではなく、出場者全てに向けられているようだった。

上位三名以外が舞台袖に消えると、舞台では表彰式と賞品の授与が行われている。

三位と二位にも結構いい物が贈られているな。これって、第二回目があつたら賞品目当てに参加者が増えそうなくらい豪華だぞ。

始まりの会長は苦笑いを浮かべて受け取っているな。賞品が目当てじゃなかったなので、貰うか迷っていたようだが、こういう場面で受け取らないと場がしらけると判断したみたいだ。

キコユは無邪気な笑みを浮かべて何度も頭を下げている。

一位のラツミスには俺の五十回分お食事券と、スオリの商会から提供された靴が手渡されている。あの靴は魔道具らしく、魔力を込めると特別な力が発揮できるとの説明があつた。

優勝者への商品となるので、スオリの性格からしてかなり高価な品だろうな。

見た目は黒がベースなのだが赤い縁取りがあり、文字のような物が表面に描かれていて結構オシャレなのではないだろうか。

「あの靴はっ!?!」

俺の背後から聞こえる取り乱した声に視線を向けると、いつもの落ち着いた雰囲気は消え去り、身を乗り出して正面を睨みつけている。ヘブイがいた。

「やっと、やっと……見つけたっ!」

血が滲み出る程に噛みしめていた唇を開くと、言葉に高ぶる感情を込めて吐き出している。

それは歓喜の声のようでもあり、憎悪の声のようでもあつた。

いつも飄々としていて感情の起伏を感じさせないヘブイが、感情を剥き出しにしてただ一点、賞品の靴を凝視している。

どういうことだ。彼が靴フェチなのは重々承知しているが、これはそういう次元じゃない。

あの靴に一体何があるのか。興味はあるがヘブイの様子を見ると、それを知るのが恐ろしく思えてしまう。

靴への執着

「ハツコンさんは、あの靴を提供したスオリさんとお知り合いでしたよね」

俺の側面に口を寄せ呟くヘイイの声は低く、顔を確認していなければ別人かと勘違いしてしまうぐらいだった。

「いらっしやいませ」

「私を紹介していただだけませんか。あの賞品の靴について訊ねたいことがありますので」

あの反応からして賞品の靴にかなりの思い入れがあるようだが、ここで断って単独で会った方が心配になるから了承しておこう。

「いらっしやいませ」

「ありがとうございます」

返事をする、それから席についてコンテストが終わるのを静かに待っている。

視線は靴のみを追っていて、表情に感情は一切感じられない。これは早めに何とかした方が良さそうだ。

閉会の挨拶があり辺りも少し暗くなってきた。もう、夕方か。

夕焼けに染められた舞台周辺には人が徐々に減っていき、客席にいるのは俺とヘイイのみとなった。熊会長が立ち去る際に運ぼうかと声を掛けてくれたが、丁寧に断りこの場に残ることにした。

「ハツコン、一位だったよおおおっ！」

駆け寄ってきたラッミスが勢いよく飛び込んできた衝撃で体が少し揺れる。

その後ろからはシュイとヒュールミ、そしてキコユもいるようだ。スオリはいないのか。

「これで腹いっぱい食べさせて欲しいっす！」

早速、無料お食事券を突き出してシュイが食事の要求をしてきた。ラッミスから無事もらえたようだ。今すぐ渡してもいいのだが、その前にやるべきことがある。

取り出し口にキコユの好きな飲み物を落として、それを念動力で操り彼女の前に運ぶ。

「こっちに」

今まで何度も頼んでいたのも、それだけで察してくれたようだ。キコユが歩み寄ると俺の体に手を触れてくれた。へブイがスオリに会いたいという意味を伝え、少し不穏な空気だから気を付けて欲しいということも話しておく。

『わかりました。黒八咫とボタンに守ってもらいますね』

俺の方でも警戒しておくからよろしく頼むよ。

「すおりに」

「よっ」

「まだ、舞台の近くにいると思うので呼んでくれますね」

近くで控えていたボタンにまたがり、舞台の方へと去っていった。黒八咫も上空から見張ってくれている。

「ハツコン、スオリちゃんに用があるの？」

「いらっしやいませ」

「いえ、私がお会いしたかったので、橋渡しを頼んだのですよ」

俺の背後で沈黙を守っていたヘブイが席から立つと、いつもの笑みを浮かべ微笑んでいる。何とか表情を取り繕うぐらいには落ち着いたのか。

「怪しいっすね。また靴が目当てっすか」

シユイは端から疑ってかかっているな。これこそ、日頃の行いの結果だ。

「そうですね。ラツミスさん、優勝賞品として渡された、あの靴を見せてもらっても構いませんか？」

「うん、いいよ」

ヘブイの性癖を知っているのなら躊躇いそうな場面なのだが、即答するのがラツミスらしいな。

まだ一度も履いてないから何をされても関係ないというのもありそうだが。

手提げ袋を手にしていたラツミスがそこから賞品の靴を取り出し

た。

形状は膝下まで覆うブーツではなく、足首辺りまでしかない一般的な靴に近いのか。材質は革のようだが鉄のように硬そうな感じもする。

赤い縁取りと表面に描かれている文字のような物が印象的だな。一文字すら読めないのは筆記体のように文字が崩れているからだ。

「大きさ、形……やはり、間違いありませんね……」

靴に穴が開きそうなぐらい真剣に見つめているヘブイは、何かに確信が持てたようで一度目を閉じると天を仰いだ。

そのいつもと違い過ぎる様子にシユイが眉根を寄せている。

「どうしたっすか。らしくないっすね。変なものでも食べたんじゃないっすか」

「貴女じゃあるまいし、拾い食いはしていませんよ」

「拾い食いはもうやってないっす!」

もうって、以前はしていたのか。否定するポイントがずれている気がするが黙っておこう。

それから二人の罵り合いが始まり、ヘブイも少しだけ調子を取り戻しているようだ。シユイもわざと突っかったのかもしれないな。この場で一番付き合いが長いのは彼女だから。

「ハツコンさん、スオリちゃん連れてきましたー」

ボタンの背にキコユが乗ったまま、その後ろにスオリが乗っかっている。

かなり楽しいらしく子供らしい笑みを浮かべていたのだが、俺たちの視線に気づくと表情を無理やり引き締めた。

その状態で澄ました顔をされても滑稽なだけだと思うのだが。

俺に触れるぐらい近くまでやってきたキコユたちは、そのままポタンに乗ったままこっちを見ている。　結界　の範囲にスオリを誘導してくれたのか。

これで万が一、何か起こったとしても守ることができる。でも、ヘブイが凶行に走るとは思いたくない。様子はおかしいが、そんな男ではないと信じているぞ。

「初めまして、スオリさん。私はヘブイと申します。ハツコンさんと共に魔物の討伐やダンジョンを探索する仲です」

「ご丁寧にありがとうございますわ。よいしょっと。わらわはスオリと申します、以後お見知りおきを」

ポタンにまたがったままでは失礼だと判断したようで、飛び降りると優雅に礼を返している。

こういうところを見るとお嬢様っぽいんだけどな。護衛の黒服もいつものように近くに潜んでいるのか。

「わらわに何か用があるとのことでしたが」

「ええ、優勝賞品として提供された靴は、疲れ知らずの神足で間違いありませんか」

「へえ、これがそうなのか」

ヘブイの質問に対してヒュールミが反応しているな。

疲れ知らずの神足というのが靴の名前だと予想がつくが、彼女が

知っているということは結構有名な品なのか。

「よくご存じですわね。靴職人として名高いログジエムの最高傑作の一つですわよ。これを履くだけで体が軽くなり、どれだけ歩こうと疲れを感じることがないと言われていますわ」

それが本当なら凄いことだが、疲労回復の魔法か何かが付与されているのだろうか。

「というかそんな希少な物をコンテストの賞品にしたらダメな気がする。」

「何足か作られたらしいが、全てデザインや色が微妙に異なっていて、こだわりの持つ職人だったって話だぜ」

なるほど。一品だけではないのか。そりゃそうか、そんなに便利な機能を備え付けられるなら、誰もが欲しがるとな。

「もし、宜しければ、その靴を何処で手に入れたのかを教えてくださいだきたいのですが」

譲ってくれと交渉するのかと思っていたのだが、購入先を知りたいのか。

「ええ、それは構いませんが。ええと、少々お待ちください」

スオリがその場で二度手を打ち鳴らすと、狭い路地の隙間から黒服の男が現れて背後に立った。

「この靴を何処で手に入れたかわかりますか」

「はっ、それは旦那様が灼熱の砂階層で手に入れたと仰っています」

「だそうですね」

「灼熱の階層ですか、どのような人物から購入されたかもわかりませんでしょうか」

「答えて差し上げて」

「はい。灼熱の砂階層の魔道具屋で購入されたそうです。かなりの掘り出し物だったので、旦那様が嬉しそうに話していたのを覚えています」

そんな大事な品をコンテストの賞品として提供して、スオリは後で怒られないのだろうか。

灼熱の砂階層はまだ行ったことのない階層だな。熊会長がハンターを向かわせているそうだが、未だに連絡がないと零していた。

「そうですね、灼熱の砂階層ですか。ありがとうございます。靴好きとしては、この珍しい靴をどうやって手に入れたのか興味があります」

理屈は通っている気がするが、頭を下げた際に見えた表情を見て寒気がした。

笑みが消え、細く開いた瞼から見える鋭い眼光。

彼は一体何を胸に秘めているのか。

その場はそれ以上何もなく、スオリたちも立ち去っていった。

へブイのことは気になっていたが、主催者による打ち上げがあり俺も連れ出されたので、その日は追求することも話を聞くこともで

きずに朝を迎えた。

いつものハンター協会前に設置されているのだが、俺の前には地面に転がっている人々の群れがあった。

昨晩は大量にアルコールが売れたな。ここが稼ぎ時とばかりにチユーハイやカクテルや日本酒を並べたら飛ぶように売れて、宴会が盛り上がり過ぎた結果がこれだ。

おつまみ類も大量に捌けたので俺としてはほくほくなのだが、結構な数の酔っ払いがそのまま酔いつぶれてしまい、この有様になった。俺は悪くない。

今日はスポーツドリンクとしじみ汁が売れそうだ。二日酔い対策の品を並べて、今日の売り上げを見込んでみると、駆け寄ってくる人影があった。

「ハツコン！　へブイ見なかつたっすか！」

悲痛な表情で叫ぶシュイの声が、清流の階層での楽しい日常の終わりを告げる音に　聞こえた。

灼熱の砂漠へ

「あの靴変態がこんな置手紙を預けて、姿を消したっす！」

シユイの騒ぎ立てる声に反応して、ラツミスとヒュールミがテントから姿を現し、ハンター協会から熊会長も出てきた。

取り乱した大声がかなりの音量だったので、二日酔いで地面に倒れている人々が頭を抱えて唸っているが、非常事態なので無視しておこう。

「落ち着くのだ、シユイ。その置手紙とやらを見せてもらえぬか」

「あ、うん。いいっすよ」

握りしめて皺が寄っている手紙を熊会長に手渡すと、ラツミスたちも覗き込んでいる。

「何々……一身上の都合により離脱させていただきます。こちらの要件が片付き次第合流を致しますので、ご心配なく。追伸、命と靴は大切に」

何ともへブイらしい文言だけど、何処に向かったかは予想がつく。昨日のやり取りを知っていれば誰だってわかる。

「これって、灼熱の砂階層に向かったって事だよな」

「昨日の様子だと、そうだろうな」

「どづいづことだ？」

あの時、現場に熊会長は居合わせてなかったな、誰か説明をしておかないと。

ヒュールミがあらましを口にすると、小さく一度だけ息を吐いた。

「靴に執着があるとは知っていたが、タダの物好きではなく何か理由があったということか。シユイは何か知らぬのか」

同じ愚者の奇行団で過ごしていた彼女なら何か知っているのではないかと、全員の視線が集まるが当の本人は首を傾げている。

「えと、ただの変態だと思っただけです。初めて会った時から、あんな感じだったですよ」

俺たちもあの熱い語りと日頃の態度からして、あれが芝居だとは思ってもみなかった。

目的の靴を探し出すために、靴フェチの振りをして人々の足元を見てきたのだろうか。そういう変態だと認識されていたから靴をじろじろ見ている、いつものことだと気にも留めてなかったな。

「賞品の靴を見て目の色を変えたということは、その情報を集める為に単独で灼熱の砂階層に向かったか。変態だが冷静な奴だと思っていたんだが、意外だったぜ。しかし、あの靴と一体、どんな因縁があるんだろうな」

「後を追った方がいいのかな……」

ラツミスがそう呟くと全員が答えに詰まっている。

個人的な理由で単独行動をしているへブイを追う理由がないから

だ。これがヒュールミヤラツミスとなると居ても立っても居られないのだが、相手がヘブイだからな。

彼には彼の目的があり、それを実行する為に動いている。非常事態だから手を貸して欲しいとは思うが、あの表情を思い返すと自分たちに止める権利があるのかと躊躇してしまう。

初めて見た、ヘブイの感情を剥き出しにした顔。

歓喜と悲哀という相反する感情が入り混じった泥沼を、怒りにより沸騰させたかの様な激情。今思い返しても身震いしてしまう程だ。

「灼熱の砂階層には近いうちに向かうつもりではいたが、あそこは少々厄介だな。暑さが尋常ではないのだ。故に毛の多い我らの様な種族は苦手としている」

熊会長や大食い団は参加できないということか。見るからに暑そうな自家製の毛皮を装着しているから無理もない。

「偵察に向かわせた人員がそろそろ帰ってきてても良さそうなのだが、その情報を聞いてから行動に移すつもりだったが。先に追うべきか」

「会長！ 灼熱の砂階層を偵察していた方が帰ってきました！」

ハンター協会の入り口から飛び出してきた職員が会長に向かって叫んでいる。

計ったかのようなタイミングで戻ってきたな。都合が良すぎる気もするが、こちらとしてはありがたいので報告を聞かせてもらおう。

「そうか。皆、中に入ってくれ。共に報告を聞きましょう」

ラツミスに抱き抱えられてハンター協会のホールに入ると、茶色

のフード付きマントを被った髭面の男がいた。
精悍な顔で歴戦の戦士といった風貌だ。

「よくぞ戻ってきた。早速だが灼熱の砂階層の現状を教えてくださいか」

「はい。灼熱の砂階層も同様に異変が起こり、魔物の群れが集落を襲ったそうなのですが、それを全て撃退。指揮官らしき人物も捕縛して牢にいます。食料も備蓄があり自給自足で食料の調達も可能らしく、平常時と変わらぬ状態です」

自力で解決したのか。各階層を助けに回っていたので勘違いしていたが、清流の湖階層のように自分たちで対処できる階層があっても、何らおかしくはない。

「流石は灼熱の会長と言うべきか。名の知れたダンジョン探索チームの元リーダーだっただけのことはある」

灼熱の会長って確か……会議でいた赤銅色の肌と逆立つ髪の毛が特徴的な人だよな。

格好はアロハシャツっぽい上着と短パン。夏が似合いそうな男だった。

「ただ、灼熱の階層は通常時よりも気温が上がってしまって、現地に古くから住んでいる住民は、今年は少し暑めだなあ。程度で済んでいるのですが、新参者やお宝目当てのハンターが暑さにやられています」

「更に暑さが厳しいのか。シメライとユミテは無理か……ホクシーも控えさせた方が良さそうだ」

老夫婦と園長先生は高齢なので避けた方が良いよな。

現代日本でも高齢者の熱中症は問題になっている。地球人よりも頑丈な元ハンターとはいえ、無理をさせるわけにはいかない。

「となると、面子が限られちゃうな。オレとラツミスとハツコン。んでもって、シュイぐらいか。キコユたちも来て欲しいとこだが黒八咫がやべえよな、どう考えても」

あの羽に光を吸収する黒。その暑さは人間とは比較できないレベルだと思う。

下手したら降りつける陽射しに負けて燃え上りそうだ。ボタンも毛がふさふさしていたので暑さには弱いだろう。

それに、キコユは雪精人。雪の精霊のような存在なので暑さには弱いというのが定番。彼女たちの協力を仰ぐのも難しそうだな。

「戦力としては今のままで充分らしいのですがオアシスの水を節制しているようで、飲料や生活用水に不自由しているようです」

「お あ し す」

最後だけ半音高めに発音すると、俺が何を疑問に思ったのか伝わったようだ。

「ふむ、ハツコンは知らぬか。灼熱の階層は殆どが砂漠なのだが、オアシスが数か所が存在している。その内の一つを本拠地として集落を作っておるのだ」

オアシスの町。砂漠といえばそうだよな。

「ってことは、水問題ならハツコンが行けば解決だぜ。先行してラツミスとハツコンに灼熱の砂漠に行ってもらうのが妥当かもしれない。俺は何か役に立ちそうな魔道具を作ってから行くぜ。水を凍らす魔道具が残っていたら、それを持って行きたかったんだがなあ」

ヒュールミがラツミスに視線を向けると素早く目を逸らした。階層割れの水溜りを破壊した時の魔道具だよな、それって。

「シユイはどうする。ラツミスと一緒に行くか？」

「ん、んー、別にヘブイはどうでもいいんですけど、灼熱の階層の現状が気になるから、行ってもいいっすよ。暑いのは平気っす」

口ではそう言っているが今朝の取り乱しようからして、気に掛けているのは確かだ。

元愚者の奇行団の団長たちに付いて行かなかった二人は、俺たちが思っている以上の絆があるのかもしれない。

「じゃあ、うちとハツコンとシユイが先に灼熱の砂階層に行くのでいいのかな」

「おう、魔道具作ったら即行で行くからよ」

「申し訳ないが頼んだぞ。何かあれば連絡してくれ、直ぐに対処する」

こうして、灼熱の階層に向かうメンバーが決定した。

急遽決定したことなので、今日ではなく明日旅立つことになったので告知すると、今日の内に買い溜めをする人が後を絶たない。

「酒とつまみ、大量に頼むわね。清流の階層に移り住んでくる人が多いから、食堂が大忙しでさ」

ムナミが大量に仕入れて、それを荷台に載せてラツミスが運ぶ手筈になっているようだ。これは未だに働かされている訳ではなく、友達として手伝っている。

「ラツミスもハツコンも階層を行ったり来たりで慌ただしいわね。うちの店としてはハツコンには腰を据えてもらって、この階層に留まって欲しいんだけど」

「んー、暫くは無理かな。うちもハツコンもやることがあるから」

「あんまり、無理しないでよ。あんたはちょっと無謀なところが前からあるし、暴走しないか心配だわ」

口煩いようだが、ラツミスの身を案じての忠告だ。それをわかっているのです、反論せずに大人しく頷いている。

「あつ、でも、ハツコンがいれば大丈夫よね。何かあったら、守ってあげてよ」

「いらっしやいませ」

ご期待に添えるよう、粉骨砕身して彼女を守ってみせるよ。まあ、骨ないけど。

「頼りにしているからね、ハツコン」

「まかせて」

灼熱の砂階層の照りつける陽射しも、皮膚をなぶる熱気も完璧に遮断して快適な旅路を保障するよ。

問題は……ポイントと俺自身が壊れないかだ！

たぶん、熱でやられるようなことはないと思うが、不具合が発生した場合は常時 結界 を張ることを考慮しておかなければならない。

熱暴走したりしないよな……大丈夫だよ、な。

本物の暑さ

「あづい……」

「焼け死ぬっすううう」

転送陣で灼熱の砂階層に着き、暑さを確かめたいとラツミスが口にしていたので、結果、で熱を遮断することもしなかった。

保冷 保温 の機能は触れている人にも影響があるので、それも切った状態で扉を開け放ち、外に踏み出して開口一番さっきの言葉だ。

地面から陽炎が立ち昇り景色が揺れて見える。俺は温度を感じない体なので実害はないのだが、背負うラツミスの背が一瞬にして汗で濡れている。

隣に立つシユイの暑さに強い宣言は熱で蒸発したようで、顔中汗まみれだ。

「この暑さ尋常じゃないよ……」

元気が取り柄の一つであるラツミスが一瞬にして活力を失っている。

このまま放置していたらあつという間に汗が蒸発してしおれそう
だ 保冷 保温 機能を復活させよう。

「あつ、急に涼しくなった！ ありがとう、ハッコン」

これなら 結界 を発動しなくても充分か。ポイント消費を気にしなくて済みそうだ。

一応、対策として 太陽光発電 でポイントを補充して賄うつもりだったが、必要ないならそれで構わない。とはいえ燦々と輝く太陽光を逃す手はないので頭頂部に設置はしておこう。

「あつ、ラツミスだけずるいつす！ ハツコンにくつつくと涼しいつすかつ」

シュイが俺に抱き付いてきた。途端に涼しくなったようで、頬を俺の体に擦り付けて冷たさにご満悦のようだ。

「はづつづうう。この冷たさ、たまらないつす」

俺に貼り付いたまま離れる気はないようで、ラツミスはシュイがくつついた状態のまま歩き出している。

「うちも灼熱の砂階層に来たの初めてやけど、ほんまに暑いんやね」

体感したあまりの暑さに、まだ動揺しているようだ。久しぶりに訛りを聞いた気がする。

「あつ、ハツコンに貰ったあのマント着ておこうつと！」

もう暑さ対策はしなくても良い筈なのだが、俺が贈ったマントをわざわざ着てくれるのがラツミスの優しさだな。

縦縞で少し派手だがラツミスには似合っていると思う。

「どっ、この格好」

「か あ い い よ」

「えへへ、ありがとう」

素直に褒めたらラツミスがはにかんでいる。ちゃんと反応してくれると褒める甲斐があるよな。と和んでいる場合じゃないか。

この階層の住居はレンガか石造りばかりだ。見た感じだと立派な建造物は石造りで、一般の住居はレンガのようだ。

これだけ熱いと日干しレンガとかに向いているからな。粘土とかを成型して干して作るレンガは暑い地帯に向いていると学生時代に習った気がする。エジプトとかがそうだったよな。

「この建物って面白いね、赤っぱいよ」

「土を乾燥させて使っているらしいっすよ」

「いらっしやいませ」

レンガだからね。同じダンジョン内なのに風土も違うというのは冷静に考えると意味不明なのだが、異世界だからという便利なキーワードで納得するしかない。

これだけ暑いと人の行き交いがなく、みんな涼しい場所に引きこもっているのかと思えば、普通に人々がうるついている。

暑さ対策としてターバンのような物やフードや帽子を被っている人が大半だ。

男性は上半身裸か薄い胸の空いたシャツを着ているぐらいで、下は半ズボンが主流で足元もサンダルが多い。

女性は逆に肌の露出が少ない。薄手の服なのだが暑くないのかな。日焼け対策なのかどうかはわからないが、露出度の高い姿を若干期待していたので正直がっかりだ。

「えっと、ハンター協会にまず行くべきだよな」

「そうっすね。そこで情報収集した方がいっすよ。会長からの手紙も渡さないといけないっすから」

「そっついや熊会長から預かってたな。あの暑苦しい灼熱の会長に挨拶もしておかないと。」

「ハンター協会の場所は予め聞いていたので、そこへ向かっている最中なのだが人々の視線が痛い。」

「巨大な鉄の箱を軽々と運ぶラツミスに加えて、その鉄の箱に貼り付いているシユイまでいるのだ、注目を浴びない方が嘘つてものだ。奇異の視線を浴びながら何とかハンター協会に辿り着いた。建物は石造りで清流の湖階層程ではないが、このハンター協会も頑丈な造りをしている。」

「両開きの扉を開けてロビーを抜け、カウンターの職員の前まで歩み寄った。」

「いらっしやいませ。ハンター協会に……」

「営業スマイルを浮かべて対応していた職員が硬直した。俺の姿を捉えて咄嗟に反応できなかったようだな。」

「清流の湖階層からやってきました。清流の会長から手紙を預かっていますので、灼熱の会長に取り次いでもらえないでしょうか」

「えっ、あ、はい。少々お待ちください」

「席を外して職員が二階へ向かう際にも視線は俺に釘付けだったのだが、階段前に移動した際に俺の側面が見えたようで、背中側に貼り付いているシユイを見て目を擦っていた。」

「待っている間は職員とロビーにいたハンターたちが、じろじろと」

こつちを見ている。

ここで新人いびりの中ランクハンターが絡んでくる展開を何度か小説で見たことがあるが、彼らは純粹に興味本位で見ているだけのようだ。

むしろ、素行の悪い奴から距離を取って観察しているような、関わったらヤバいという空気を感じる。

「おい、声かけてみるよ。どっちも結構可愛いぞ」

「えっ、無茶言つな。鉄の箱を担いでいる女とそれにしがみ付いている女だぞ。どっちも尋常じゃねえ」

「ちげえねえな……」

ハンターたちの声が微かに届いたのだが、警戒度がマックスのようだ。

自動販売機を初見で尚且つこの光景。近づいてくる勇者がいないのも当然か。

「あああつ！ ハッコン、師匠！」

そんな空気を吹き飛ばして駆け寄ってくる人物がいた。

俺を師匠と呼ぶ人はたった一人だけだ。この暑い階層でも黒塗りの全身鎧を脱ぐこともなく、背中には竜を模った大剣。

ミシユエル、久しぶりだな。

「ご無沙汰しておりました。ご心配をおかけして申し訳ありません」

「いらっしやいませ」

全く心配していなかったとは言えない。というか最近ダンジョン
コンテストで頭がいつぱいで、その存在を若干忘れていたりはして
いないぞ、ほ、本当に。

これでバラバラに飛ばされた全員と合流できたことになるのか。
まずは、一安心だな。

「私だけこの場所に飛ばされてしまいましたして帰る術もなくどうしよ
うかと悩んでいると魔物の群れが集落に襲い掛かってきまして防衛
に関わっていたのですが最近ようやく落ち着いたのでそろそろ戻ろ
うと思っていたのです」

この長文を良く一息で言い切ったな。そんなに慌てて言い訳しな
くても気にしていないのだが、ミシユエルは律儀な所があるから。

「ミシユエルが無事でよかった。他のみんなは清流の階層にいるか
ら、安心してね」

「無事でなによりっすよ」

「お二人ともお元気そうで良かったです。他の皆さんも既に合流さ
れたのですね」

貼り付いたままのシユイに物怖じしてないな。

ミシユエルと会えたのは嬉しいのだが、別れてから一人で何とか
やれていたのだろうか。戦闘では全く心配していないが……人間関
係はどうだったのだろうか。

コミュ障が少しは改善されていればいいが。

そんな心配をしていた俺にそつと近寄ると体に顔を寄せてきた。

「師匠に来ていただいて助かりました。気を抜く暇もなく、緊張の

日々に胃が、胃がっ」

胃の辺りを押さえて眉根を寄せている、イケメンが台無しだぞ。やっぱり直ぐに改善という訳にはいかないか、精神的にお疲れ様。

「会長がお会いになるそうです。こちらへ」

上の階から降りてきた職員に案内されるまま、会長室へ向かうことになった。

ミシユエルはこの階層の情報に俺たちより詳しいだろうからと、付いて来てもらうことにした。俺と離れたくないようだったので、丁度いい。

太陽のように赤く塗られた片開きの扉を開けて、会長室に足を踏み入れた。

意外にも殺風景で普通の会長室だな。立派な机の向こう側には会議で見た時と同じ格好の灼熱の会長がいた。

炎を描いたアロハシャツもどきが妙に似合っている褐色の肌。茶色の髪は天井に向かって逆立っている。この世界には整髪料が存在するのか、それとも地毛なのだろうか。

「よく来たなっ！ あの時以来か、歓迎するぞ！」

声がでかい。会議室と違い部屋が狭いのでよく響くな、この声。

「おっ、ミシユエルも一緒か！ 色々と世話になったなっ！」

「いえいえ、困った時はお互い様ですので」

ただでさえ暑い気候に暑苦しい会長。そんな状況でイケメンモードに切り替えて、爽やかに受け答えをするミシユエルに感心してし

まう。

汗一つかいていないが、あの鎧はラツミスのマントと同じように熱を遮断する機能があるのかもしれないな。

この部屋が涼しいのかとも思ったのだが、一旦離れたシユイが直ぐに俺へ体をくっつけているので、ここも暑いようだ。

「熊会長からの手紙を預かっています」

ラツミスから手渡された手紙の封を豪快に破ると、ざっと目を通している。

「へえー、そつちも結構大変だったのか。ハツコン、水を提供できるってのは本当か」

「うん」

会長に対して無礼とも取れる返答だが、この人は気にしないだろう。

「それは助かるぜ！ オアシスの水も減ってきていてな。魔物が大量発生していた時には一滴も雨が降らねえから困り果てていたんだぜ。金は出すから、後で請求してくれ！」

水ならミネラルウォーターでも氷でも出せるだけ出すよ。

「あの、一つ調べて欲しいことがあるのですが、構わないっすかね」
話が一段落ついたところで、おずおずとシユイが会長に話しかけた。

「おつ、何だ。遠慮すんなよ、何でも言ってみろ！」

「白の法衣を来たへブイって聖職者が、この階層に来ている筈なので見つけて欲しいっす」

「そんなことか、お安い御用だ。職員に言いつけておくから安心しな」

これで灼熱の会長の力も借りられることとなり、へブイ探索もはかどりそうだ。

俺は水の提供があるので暫くは動けそうもない。なので助力を得られたのは大きい。

「早速で悪いんだが、まずは飲み物の提供を頼む！ハンター協会の前の広場なら、何処で始めてもらっても構わねえぜ！」

じゃあ、ハンター協会前に設置してもらって飲み物を売るとしますか。

あそこなら見通しも良いし、販売中に情報を得られるかもしれない。

行方不明

商売繁盛で客が離してくれず、夕方まで一步も動けない状態だった。

初めは誰もが遠巻きに眺めているだけだったが、ラツミスが購入したスポーツドリンクを美味しそうに飲んでみると、人々が次第に集まり休む間もなく夜まで販売を続けた。

食料も販売するかどうかで悩んだのだが、飲料だけで今は事足りているようなので暫くはこの販売方法を続けるつもりだ。

余裕ができたならアイスやかき氷も売ってみようか。ぼろ儲けできるのは間違いないだろう。

「ハッコン、お疲れ様でした」

ずっと俺の隣に立って、使い方がわからない人たちに懇切丁寧に説明をしていたラツミスなのだが日焼けは殆どしていない。

化粧品の日焼け止めクリームが効いたようだ。元値が結構いい値段していただけのことはあるな。

「ありがとう」

「この後どうしようか。シュイは何処か行っちゃったし、うちらも一応あの靴を売っていた魔道具屋に行ってみる？」

どうしようかな。その魔道具屋の正確な場所は既に聞いてあるけど、この時間まで店を開いているのだろうか。異世界では大人の店以外は夜が更ける前に閉めるのが当たり前なので、魔道具屋が開いているかどうかは微妙な所だ。

「散歩がてら行ってみない？」

そうだな、夜の観光も乙なものだ。治安は悪くないそうだし、俺とラツミスが組めばただの暴漢なんて相手にならない。ダメで元々行ってみようか。

それに昼間と違って夜は肌寒く感じるぐらい気温が下がっている
そうなので、運動に適した気温でもある。

「いらっしやませ」

「うん、じゃあ行こう！」

いつものように背負われて灼熱の砂階層の集落を眺めながら、目的地へとゆつくり歩いていく。当たり前のように運んでもらっているが、人間に戻れた暁にはラツミスを背負ってあげたいな。

陽が落ちた夜の集落は静かで暗く、家の明かりがぼつりぼつり漏れ出ているだけだ。

日本の夜がどれだけ明るいのかを実感させられるな。街灯が存在しない路地に入るとメートル先も見えない。

自動販売機の照明を最大にすると、近くは問題なく見えているが。

「足下が良く見えるから歩きやすくていいね、ハッコン」

きっと今、俺を背負っているラツミスは正面から見たら、後光が射しているように見えるのだろうな。背中を合わせるように背負われることが多いのだが、明かりが必要な場合は俺が正面を向くようにしている。

お役に立っているようで何よりだよ。

そこは職人が集まっている一帯らしく、夜も更けているのに至る所から音が響いてくる。金属を叩く音や何かが焼けているような臭

い。弟子らしき人が怒られている声もするな。

「職人さんたちって夜まで仕事しているって聞いたことあるけど本当なんだね。ヒュールミも朝方まで何かしていることが多いし、物作りする人って似ているのかな」

夜に集中力が増す人は結構いるらしいからね。他にも完成するまで鍛冶職人とかは夜通し作業しているのかもしれない。火入れしたら最後までやり遂げるとか、刀鍛冶のドキュメント番組で観た記憶がある。

それにこの階層は夜になると涼しくなるので、作業も夜の方がやりやすいだろう。

「えつと、地図だとこの路地を右に行つた場所の……あつた、あれだよね」

指差す方向には石造りの立派な建物があつた。看板があるが、勉強不足で何を書いているが読めない。この世界の数字は覚えているのだが、文字はもう暫くお待ちください。

「魔道具屋って書いてあるから間違いないよ。灯りが付いているから、お邪魔しても大丈夫かな」

「いらつしゃいませ」

ラツミスが入り辛そうだったので、扉の前で大声を出してみた。ここまで来て何もしないで帰るのもあれだしね。

「えつ、いらつしゃいませ」

偶然近くにいたのだろうか、扉を隔てた向こう側から戸惑いながらも返事をする女性の声がした。かなり若い声をしているが、女性を声だけで判断することは難しいからな。

「あの、入ってもいいですか」

「どうぞどうぞ」

扉を挟んで何をやっているのだろうか、開けたらいいのに。

ラツミスがドアノブに手を掛けて開くと、そこには小柄で紫のコート……いや、ヒュールミの黒衣に似たデザインの着か。それを着た小柄な女性がいた。

胸元で手を握りしめていて、瞳が激しく動き視線を合わせようとしない。人見知りなのだろうか。

おかつぱ頭で紫色の上着の下には地味な色合いの着物に似た服を着ている。老夫婦の服装と同じ系統だよな。似合っているのだが、紫の上着を脱いだら何かに似ているな……おかつぱ頭に着物……あ、あ、座敷童だ！　そうか、納得がいった。

「あの、まだやっていますか？」

「はい、大丈夫です、よ。み、見て行ってください」

拳動不審だが、こんな人が店番をして大丈夫なのだろうか。

店の隅のカウンターの向こう側に回って、本を読む振りをしながら何度もこつちの様子を窺っている。ラツミスよりも俺が気になっているようだな。

直ぐに情報を聞き出してもいいのだが、ラツミスはまず店内を物色しているようだ。そうだな、何か買った方が向こうも口の滑りが良くなるだろうし。

店内には様々な道具が置かれているのだが、これは全て魔道具なのだろうか。

「メートルぐらいの蛇腹のホースの両端にボールのような物がくっついているこれは、どうやって使うものなのだろうか。」

コンパスの先がハサミっぽいのは小型の高枝切りハサミに見えなくもない。ヒョールミがいたら説明してもらえるだろうか、この階層に着いたら連れてこよう。

「ええと、これってどんな魔道具なのかな」

俺も気になっていた蛇腹のホースを掴んで、ラツミスが彼女の前に持って行った。

「あつ、これですか。えとですね、この丸い部分をお風呂に入れて、もう片方を桶に入れます。そしたら、お風呂の水が綺麗になって桶に溜まる仕組みです」

つまり汚れを濾過して飲み水にするということか。災害時の便利グッズにこういうのあったな。

この階層は暑い日に水風呂というのが常識らしく、その後の水を再利用しようとして考え出された魔道具なのかもしれない。

「それって凄く便利そうだね！」

「え、えと、でも売れなくて。人の入ったお風呂の水なんて飲めるかって……」

まあ、非常時以外は使いたくないよな。本当に綺麗になっていたとしても気分が良いものじゃない。嫌悪感を抱くのが当たり前前への反応だと思う。

「でも、いざという時に便利そうだから、これくださいな」

「あ、ありがとうございます。最近ついているなあ、新しいお客さんが三人も来てくれて」

「ご機嫌に魔道具を袋に入れている店員の言葉を聞いてラツミスが反応した。

残り二人の新規の客に心当たりがあり過ぎる。

「新しいお客って聖職者の様な格好の男性と、弓を背負っていた短い髪の女性？」

「は、はい、そうですね。あの、もしかして、お知り合いなのですか」

おどおどとしている店員にラツミスが鼻息荒く詰め寄っている。怯えてる、怯えてる。興奮する気持ちはわかるけど落ち着いて。

「らっ い す ざんねん」

「あう、ごめんね。その話、詳しく聞かせて欲しいの」

「えと、その、今、男の人の声その箱から……」

怯えてはいるけど好奇心もあるようで、口元が引きつっているが目は俺をしっかりと捉えている。

「その説明は後ですから、その二人について教えてください！」

ラッミスが深々と頭を下げたので頭一つ以上飛び出している俺が、もう少しで店員の頭に激突するところだった。

「は、はい！ な、何でも答えますう」

結果、脅すような形になったが誤解は話が終わってから解けばいいだろう。

涙目の店員から聞いた話によると、聖職者の男性が店に来て以前売った靴を誰から仕入れたのか聞いてきたのだが、守秘義務があるので売りに来たハンターの名前は伝えなかったそうだ。

「あ、でも、その時の記憶が曖昧で確か直ぐに諦めて帰られたと思うのですが」

この発言を聞いてヘイブが 感覚操作 や魔法を使用して聞き出したのではないかと考えた。あの加護の効力は尋問の際に見せてもらったからな。

もう一人の女性は今日の昼前にやってきて、俺たちと同じように聖職者が来てないかと訊ねたそうだ。来た時のことを教えると納得して帰ったらしい。

「やっぱり、二人とも来たみたいだね。その売りに来たハンターが誰かは教えてもらえないのかな？」

「すみません。商売人としてそれは……」

個人情報の漏えいは異世界であっても問題になるようだ。となると、訊き出す方法としてはあれがあったな。

「てがい」

「また、男性の声が……」

「てがい、手紙ね。あっ、そっか。ここの会長とスオリちゃんから紹介状もあつたね。これでダメかな」

「えっと、これは灼熱の会長と、ええっあの商会からの!？」

灼熱の会長よりもスオリの紹介状の方が、効き目が抜群だとは。自ら大商人の娘と名乗るだけのことはあるな。

「あと、えと、特別にお伝えしますう。逆らったら、この業界で生きていけないので……」

店員さんが怯えきっているじゃないか……何が書いてあつたのか非常に気になる。

「売りに来たハンターはこの階層で活躍しているタシテという方です。ハンター協会で訊ねたら直ぐにわかると思います。えと、評判も良くて人気のある方なので」

そんな人がへブイの求めていた靴を売りに来たのか。その人が目当ての人なのか、更にその先にいる靴を所有していた人を求めているのか。

そこはへブイに会ってみないと答えは出ない。

俺たちは怯えていた店員に礼を言つと店を後にした。あの蛇腹のホースは情報料として忘れずに購入すると、少しだけ震えが治まって辛うじて営業スマイルを浮かべていたな。

今度、ミシユエルをお使いに行かせてみようか、人見知り同士で共鳴しそうな気がする。

執着の理由

「ハツコン師匠。何故、私も夜の散歩に誘っていただけなかったのですか？」

朝から商売をしているとミシユエルに迫られた。

昨日のことをラツミスが教えると、どうでもいいことに突っかかってきたな。

「一人で食事をしていると女性が寄ってくるので気疲れしてしまっ
て……」

世の中のモテない男性が聞いたら助走をつけて殴りかかってきそうなことを、悪びれることもなく口にしている。これって嫌味でもなく本心なのが彼の凄いとところだろう。

ミシユエルとはこうして会えたのだが、シユイはあれから一度も姿を現していない。同じようにへブイの情報を得た後も彼を探し続けているのか。

タシテという靴を売りに来たハンターについては、灼熱の会長から詳しく教えてもらっている。

滾る爆炎の団というハンターチームのリーダーらしい。一年ほど前にこの階層にやって来ると、拠点を設けて主にここで活躍しているそうだ。

素行も問題なく評判はすこぶる良いらしく、魔物の群れが襲ってきた際にも活躍したハンターチーム。団員は総勢十名で今は灼熱の階層の砂漠地帯にある遺跡に探索へ向かっている。

「そのタシテさんと話をするのであれば、遺跡に向かうしか手が無

「さそうですが」

「そうになると、あの砂漠を進まないとダメなんだよね」

ただでさえ、その気温と足元の砂で移動が困難な砂漠だというのに、今は更に気温が上昇していて難易度が跳ね上がっているそうだな。念入りに準備を整えて慣れたハンターでもお勧めできない現状なので、灼熱の会長も追うのは危険だと口にしていたな。

ただ、タシテたちもそうだが他のハンターたちも、こういった状況だからこそ需要があると無理をして向かった連中が結構いるらしい。

そのハンターたちが心配なので救助隊を向かわせたいのだが、ミイラ取りがミイラになるという可能性が高いので躊躇っている。砂漠だけにと笑う場面ではない。

「うーん、追うかどうかは別にしても、砂漠にいるハンターの人たちは何とかしてあげたいね。あつ、うちらだけなら何とかならないかな？」

まあ、俺に触れていれば暑さでやられることもないし、飲み物も食べ物も提供できる。救助隊に最適なのは俺たちで間違いないよな。

「いらっしやませ」

「だよね！ うん、灼熱の会長に話してみるね！」

思い立ったが吉日とばかりにハンター協会へ突撃していった。

「ハツコン師匠。私は連れて行ってもらえないのでしょうか……」

そんな捨てられた子犬の様な目で見られても困るぞ。男女差別をするわけじゃないが、そんなごてごてした鎧で常に引っ付かれてもなあ。

ここは上手く誘導して誤魔化すか。

「でしよし」

「とたのもう」

「ハツコン師匠が弟子と……何でも仰ってください！」

感極まった声を上げながら涙目になるのは止めてもらえませんかね。

ほら、お客さんの目もあるから、もうちょっとリアクションを抑えてくれ。

ミシユエルには集落でヘブイとシユイを見つけるように頼んでいた。早速、意気揚々と駆け出していったので、その背に心の中で手を振っておく。

扱いやすくていいのだが、従順過ぎてたまに心配になる。

「ハツコン、会長から正式に依頼を受けてきたよ。是非頼むって」

俺の能力をラツミスが伝えたのだろうな。よっし、じゃあこの商品を探したら探索に向かおうか。シユイたちと合流するまでは救助者を見つけたら、ここまで戻ってくることにしよう。

「これで二組目だね」

砂漠に入ってから二時間もしないうちに一組目を見つけたので、飲み物を売ってから集落まで連れて行くことにした。

目印は遠くにある巨大な遺跡なのだが、屢気楼に騙されてあらぬ方向に進み途中で力尽きかけているハンターが多く、二組をまとめて集落まで案内している。

スポーツドリンクと食料で渴きと飢えを満たしたハンターたちは、幾分か元気を取り戻して自力で歩いている。ラツミスが担ごうかと提案したのだが、プライドがあるらしく首を縦に振る者はいなかった。

ちなみに救助者の探索方法なのだが、ある程度進んでから俺がダンボール自動販売機 と風船を組み合わせて宙に浮かび、体に括りつけた紐をラツミスが手にして周囲を調べるといふ手段を取ったのだが思いの外上手くいったようだ。

砂しかないので上空から見下ろすと見通しが良く、かなりの広範囲をカバーできた。

「到着しましたー」

「ありがとうよ、お嬢ちゃんと、シトウアンアイキのハツコンだったか。命拾いしたぜ」

「ああ、完全に諦めていたからな……マジで感謝だぜ」

もう二度と戻れないと思いついていた集落に帰れたことで、安堵のあまり力が抜けて座り込んでいる。

ラツミスがハンター協会に生存を伝えるに行き、その後にハンターたちは暫く宿屋で体を休めることになるそうだ。

もう一度砂漠に向かうには時間が足りないと判断して、今日の捜索はここまでにしようかとラツミスと話していると、こちらに駆け込んでくるミシュエルが視界の端に映った。

「師匠ーっ！ お二人を見つけたのですが、その、もめていまして来ていただけないでしょうか！」

「え、喧嘩しているのかな。直ぐに行かないと！」

「いらっしやいませ」

何があったのかはわからないけど、最悪の展開だけは避けないとラツミスの背に揺られながら、二人が早まらないようにと祈る。としか出来なかった。

「何で、一人で抱え込もうとするっすかっ！」

「これは私事なので皆さんにご迷惑をおかけするのは」

シユイの怒鳴り声とヘブイの冷静な声が路地を曲がった先から聞こえている。

一方的にヘブイが責められているだけのようなので、喧嘩という訳ではなさそうだが。

路地を抜けると小さな空き地になっていて、そこには正面から向かい合う二人がいた。

「曲がりなりにも仲間じゃないっすか！ なのに、相談もしないで勝手に決めて……ケリオイル団長たちもヘブイも一緒っす！ 頼りないかもしれないっすけど、話して欲しかった……そしたら、もっとう違う未来があったかもしれないじゃ……ないっすか……大切な仲

間じゃ、なかつたつすか……」

最後は小さく嗚咽交じりの声でシュイが俯いている。

あの言葉はへブイにだけ向けられているのではないのだろうか。
ここにいない愚者の奇行団の仲間たちへの後悔と怒りの叫び。

ケリオイル団長の例えがへブイの心に響いたようで、言葉を発することなく目を細めて燦々と輝く太陽を眩しそうに見つめていた。

「シュイ……」

ラツミスの眩きにへブイが気づき顔をこちらに向けた。

無理に笑みを作ろうとしている顔が泣いているように見えるよ、へブイ。

「皆さんもいらっしやっただのですね。すみません、ご迷惑をおかけしたようで」

「迷惑を掛けたと思うなら、ちゃんと話して欲しいです」

「そつだよ。何も言わずにいなくなったら、みんな心配するよ」

「うん うん」

俺たちの言葉を聞いてへブイが無理やり微笑んで見せた。

そして、目元を拭いながら睨みつけているシュイの頭にそつと手を添える。

「そうですね。面白くもない話ですが聞いてもらえますか」

全員が黙って頷くと、へブイはゆっくりと口を開く。

「まだ、愚者の奇行団に入る前の話です。私は幼馴染と二人でハンターをしていました。お互いを知り尽くしていたので、連携も滞ることなくそれなりに活躍していたのですよ。新進気鋭の二人組と噂になったりもしていましたね」

昔はパートナーがいたのか。以前訊いた話だと、愚者の奇行団に勧誘される前はソロ活動がメインだったらしいので、それよりも前の話だよな。

「ある日、幸運が重なり驚く額の報酬を受け取りまして、これをどう使うかと相談した結果、誕生日が近かった幼馴染の靴を新調しようという話になったのです。以前から欲しがっていた靴があるのを知っていましたからね……もうわかりだとは思いますが、それが疲れ知らずの神足でした」

「うちが賞品としてもらった靴」

「ええそうです。かなり高価な靴なので彼女……幼馴染も喜んでくれましたね。それからというものの何処に行く時もその靴を履いていましたよ。絶対に誰にも渡さないから、といつも口にして笑っていました」

遠い目をしながら優しく微笑んでいる。その表情だけで幼馴染がどれ程大切な相手だったのかが伝わってくる。

「そんなある日、商人の護衛任務中に盗賊の襲撃を受けてしまい、奮闘したのですが私は相手の一撃を受けて地に伏してしまったのです。気が付いた時には辺りに無残な死体だけが転がり私以外の生存者は誰一人としていませんでした。そして、そこには……足首から

先を失った幼馴染の死体もありました。斧か何かで無理やり切り落とされたのでしょうか。この靴は大切なものだからといって、きつく紐を絞めていたので奪う際に解けなかったようです」

何も言えなかった。淡々と感情を込めずに話すへブイの言葉を、ただ聞くことしかできなかった。

「相手は仮面をしていたので顔もわからず、唯一の手掛かりは奴らが持ち去った彼女の履いていた靴だけでした。それから、僅かな希望にすぎり人の履いている靴に注目する様になり……今に至ります」

この壮絶な過去がへブイの靴を追う理由だったのか。

何て声を掛ければいいのか。こういう時に慰める言葉の一つも思いつかない自分が情けないよ。

「聖職者でありながら復讐のことだけを考えて今まで生きながらえてきました。ケリオイル団長たちに偉そうなことを言っておきながら情けない話です。私にはそんな資格はないというのに」

語り終えたへブイの横顔は人生に疲れ切った老人の様だった。

「バカっす！ 団長たちもへブイも大間抜け野郎っす！ ちゃんと相談してくれていたなら、もっと早く靴を見つけたかも知れなかったじゃないっすか！ お互いに腹を割って秘密を打ち明けていたら、団長たちも家族のことを教えていてくれたかも知れないじゃないっすか！」

誰もが口を挟めない空気を吹き飛ばしたのはシュイだった。

感情の高ぶるままに思いついたことを口に行っているだけのようだが、だからこそ、その言葉が真っ直ぐにへブイの心へ突き刺さって

いるのがわかる。

「ですが、これは私だけ」

「ですがじゃないっす！ みんな秘密だらけだから、こんなことになっっているのがわからないっすか！ もう、嘘も秘密もいらない！ 手伝ってほしいなら、事情を話して手伝ってくださいって頼めばいいだけの話でしょ！ 無理なら嫌なら、ちゃんと断るよ。それが間違っていることなら仲間として全力で止める！ だから、勝手に迷惑だとかこつちの考えを代弁するのはやめて欲しい……っす」

胸ぐらを掴んで背伸びして詰め寄っているシュイの顔を、へブイは至近距離からじっと見つめている。

シュイも目を逸らさずにじっと睨みつけている。暫くそうしていると、先に折れたのは へブイだった。

「そう、ですね。私が間違っていたようです。ありがとうございます、シュイ」

「ふ、ふんっ！ わかったらいいっすよ」

今になって恥ずかしくなってきたようで、手を離すと顔を真っ赤にして顔を背けている。

そんなシュイの後姿にへブイは一礼すると、俺たちに向き直った。

「皆さん、手を貸してもらえますか」

真摯な対応をするへブイに対する答えは決まっている。

「うん、当たり前だよ！」

「手伝ってやるっす、感謝するっすね」

「もちろんです」

「どうもじゃあ」

砂漠に行く者（前書き）

12時に予約投稿していた筈なのですが消えていました。

おそらく私のミスだと思います。お盆のごたごたで確認を怠ってしまいました申し訳ありません。

砂漠を行く者

「遭難している人を救助しつつ、遺跡を目指したいと思います。何か意見のある人はいらっしやいますでしょうか」

夜に宿屋の一階の部屋に仲間たちが集まり、今後の方針を決める会議が始まった。

メンバーはラツミス、俺、シュイ、ヘブイ、ミシユエルだ。

頑張って、ラツミスが司会進行役をしているのだが口調に無理がある。

「問題は、あの灼熱の砂漠をどうやって進むかですね。あまりの暑さにリケデも嫌がっているそうなので、自力で何とかしないといけませんよ」

ヘブイが口にしたリケデというのはラクダに似た動物だ。

地球のラクダと同じくこぶがあるのだがお尻の付け根辺りに一つだけあって、それが背もたれ代わりになるのでこっちのラクダの方が乗りやすい。

「歩くだけでも相当な体力を消耗するらしいっすから、乗り物欲しいっすね」

「幌の付いた荷台があれば陽射しが遮られて少しは涼しいですよ。私はこの鎧が熱を防いでくれるので、熱でやられることがありませんが」

やっぱり、ミシユエルの鎧は熱を遮断するのか。大剣といい高性能

能な武具を取り揃えている。自分の稼ぎで手に入れた物なのか、それとも実家に代々伝わる武具なのだろうか。

口調からして騎士っぽいから後者のような気もするな。

「ですが、砂漠となりますと車輪が砂に呑み込まれて、相当な力が必要れば引つ張ることは不可能かと思われまます」

言われてみれば砂漠で馬車とか見たことがない。となると歩くしかないのか。

飲食料の問題は俺がいるからいいとして、暑さ対策だよな。俺を背負っているラツミスは問題ない。ミシュエルもあの鎧を着ている限りたぶん安心。

となると、ヘブイとシュイか。灼熱の陽射しから身を守ってくれる魔道具の一つでもあればいいのだが。

ここで売られているターバンのような物やマントは、ある程度なら防いでくれるそうだが、最近の暑さだとほんの少しだけ和らげる程度らしい。

「あの魔道具屋さんに、そういった商品何かな」

「お困りのようだな！」

何の前置きもなくバンと部屋の扉が勢いよく開け放たれると、そこには仁王立ちをしているヒュールミがいた。

扉の前で息を潜めて会話に聞き耳を立てて、タイミングを見計らっていたっぽい。

「ヒュールミも来たんだね」

「おうよ。さつき着いたばっかだぜ」

「私たちもいます」

部屋に乱入してきたヒュールミの背後からひよこっつと顔を出したのは、キコユとボタンと黒八咫だった。

ええと、この暑さで大丈夫なのかな。

俺の心配が伝わったのか、部屋に入り俺の隣に腰を下ろしたキコユが体にそつと触れた。

『雪精人だからといって、熱で溶けたりしませんよ。それに、冷気を操るのは得意なので体の周りの冷気を纏わせたら大丈夫です』

俺の心配は杞憂だったのか。黒八咫とボタンも熱ごときでやられる程、やわじやないのだろう。

「でだ、頭を悩ませている案件は、これで解決だぜ」

そう言っ取り出されたのは、フード付きのマントだった。黒で統一されているのは何か深い意味があるのかもしれないが、黒衣からしてヒュールミの趣味っぽいよな。

確か黒は熱を吸収しやすいが紫外線を反射するので、日焼け対策としては黒い服の方が良いという話を聞いた覚えがある。そこまで考慮して黒にしたのであれば、ヒュールミに謝らないといけない。

「これは熱を遮断して、尚且つ内側に仕込まれている水分を冷やす作用のある魔道具が、吹き出した汗や大気的水分を冷気に返還してくれるって代物だ」

「それは凄いですね。これがあれば、灼熱の砂漠も乗り越えられそうです」

「だろ、人数分は作ってあるから安心してくれ」

これで暑さ対策は何とかなったな。

「じゃあ、これで解決なのかな？」

「他の荷物をどうするかですね。夜は冷え込みますので、防寒具も必要となります。それに、ハツコンさんがいるとはいえ、予備の食料は各自で所有しておくべきでしょう」

ボタンに荷台を引かせることができないので、他の荷物をどうするか。少し荷物になっても各自で運ぶしかないか。

「まあ、それでも荷物はかなり減らせますので、大丈夫だとは思いますが」

「そうだな。んじゃ、明日は早朝から足りない物を補充してから、出発ってことで構わねえか？」

ヒュールミの提案に反論はなく、今日の会議はお開きとなった。

俺は宿屋の前に置かれ、隣には立て札を立ててもらった。

そこには『明日から救助に向かいますので、商品は今の内に購入してください』と書かれている。夜も更けているので利用者は少ないかと思っていたのだが、昼の暑さにやられて動けなかった人々が夜になると、そこから中から現れている。

昼間の気温と比べると夜の方が活動しやすいようだ。

集落の中も他の階層と比べて夜なのに灯りが多く活気がある。夜に活動的になるのは職人たちだけかと思っていたのだが、そうではなかった。階層ごとに特色があつて面白いな。

商品の売れ行きが好調で、冗談で置いていた温かい飲料も結構な量が売れていく。夜は半袖姿の者がいないので秋ぐらいの寒さなのかもしれない。

体内時計が四時を指す頃になると、客足も途絶えたので暇つぶしに本日の売り上げの計算をしていた。

昼間はスポーツドリンクとミネラルウォーターがバカ売れで、夜はコーンスープとホットミルクティーが好評だった。寒暖差があると商品がバランスよく売れていいな。

「ハツコンさん、私にも温かいお茶をいただけますか」

いつの間になつてきたのか、ヘブイが俺の正面に立ちホットのミルクティーを購入した。

慣れた手つきで開けると口に含み、ほっと息を吐く。

「色々とお騒がせしました」

シユイとのやり取りのことを言っているのだろうな。もっといい加減な人だと思っていたのだが、今日の一件で印象はガラッと変わった。

道化を演じて、やるべき目的があつたということだ。

「うん」

「本当は誰にも話すつもりはなかったのですが……シユイのおかげ

ですかね」

話したことによる後悔はないように見える。会話中に垣間見える表情も以前と比べて自然な笑みだ。

ずっと一人で抱え込んできた重荷を、ほんの少しだけでも降ろせたのかもしれないな。

「今回のことで全てが解決するとは思っていませんが、何かしらの区切りがつけば……迷いを断ち切れますので」

そうだよな。靴の持ち主に会えたところで、奪った盗賊の居場所が明らかになる確率は低いだろう。

もしヘブイが運よく盗賊と出会えたとしたらどうするのだろうか。法治国家の日本人として、復讐は復讐しか生まない　なんて綺麗ごとを言うつもりはない。

ラツミスの村を襲った輩の一件も、情報収集の目的がなければ本心では……彼女に仇を討たせてあげたかった。

捕まえた主犯の男は牢に閉じ込められていて、一度ラツミス、ヒユールミと共に会いに行ったのだが……薄汚れた格好で怯えている男を見て二人は殺す気も失せたようだ。

怒りも恨みも消えたわけじゃないのだろう。今だって何とかその想いを誤魔化しているだけで、今も殺したいと思っているのかもしれない。

あの時、　結界　で防いだことが良かったのか今でも悩んでいる。単純にラツミスに人殺しをさせたくなかっただけの自己欺瞞なのではないか。

仇を討たせてあげたいと思う心と、人殺しをさせたくないという心。どちらも俺の本心なのが厄介だよな……。

今更、過去を振り返ったところで答えが出る訳もないのだが、後

悔と疑念が体内で渦を巻いている。

「どうなされました」

へブイの話を聞いている最中に、自分のことを考えてどうする。どんな結末を臨もうと次は邪魔をする気はない。あの時は怯えて戦意を失っている相手を殺すような真似をさせたくなかっただけ。そう思うことにしよう。

「いらっしやいませ」

「よくわかりませんが、大丈夫なようですね」

こつちが心配されてどうするんだ。まずはタシテというハンターを見つけることが最優先事項。後のことは後で考えればいい。体が動かない分、余計なことを長々と考えてしまう癖がついてしまっているな。

「うまくいく」

「と　い　い　ね」

上手くいくというのは違うか。でも、俺の言葉だとこれが精一杯だ。

「そうですね。何かしらの情報が得られれば良いのですが」

夜空を眺めているへブイの顔を眺めていると、一つ引つかかっていたが口に出さなかったことを思い出す。

そのタシテという輩が盗賊と繋がりのある人物ではないかということだ。魔道具屋との会話中に訊きだせた情報の一つに「この魔道

具を何処で手に入れたのか」という店員の質問に対するタシテの答えがあった。

「こいつが以前、魔道具屋で新品を購入して愛用していたんだが、引退することになってな。物入りらしいから売りに来た」

とのことだった。その場にいた仲間というのが優男で、見た感じでは足のサイズが合うようには思えなかったそうだ。

それに新品を購入したという話も矛盾している。購入した店の主人が補修をして、高く売りつける為に嘘を吐いただけなのかもしれないが、気に留めておいた方がいいだろう。

砂漠横断

朝早く集落を出発してから、数時間が過ぎた。

今は天から降り注ぐ凶悪な陽射しを浴びながら黙々と進んでいる。ヒュールミとキコユは体力の問題があり、砂漠の砂を歩くのはきついだろうとポタンの上に乗っているので、今のところ問題はないようだ。

予想通り　いや、それ以上の暑さのようでヒュールミのお手製マントを羽織っているというのに、全員が辛そうに歩いている。

違うな、全員じゃない。

「みんな、もう少ししたら休憩しようね！」

「ブフウウ！」

ラツミスとポタンは元気だ。

俺の　保冷　保温　の力により熱さを全く苦にしていないどころか、人一倍張り切っている。前に購入した縦縞マントを着て、足取りも軽い。

ポタンは背中中のキコユが冷気を纏わせているので、ひんやりして気持ちいいのだろう。

あ、ラツミスに関してはもう一つご機嫌な理由がある。真新しい手袋とブーツの存在だ。

以前、闇の森林階層で武器屋のオッサンが、ラツミスの為に新しい武具を作ると言って張り切っていた。その完成した物をヒュールミが受け取り再会の際に手渡し、彼女が喜んで装着して今に至る。

デザインは以前の物と殆ど変わらないのだが、鉄で補強されていた部分が謎の材質に変化している。黒みがかった金属で硬度は鋼鉄

を遙かに上回るそうだと。それだけではなく、もう一つ大きな相違点がある。

「あ、本当に重さ変えられるんだね！」

ラツミスが今試したようだ。この手袋とブーツに仕込まれている謎の材質は、武器屋に置いてあった力を計る際に使用した重さの変わる丸いあれと同じらしい。

意識的に力を注ぐと重さが変化することにより、攻撃力の増加。全力を出した時に空回りする力を上手く制御できるように考えられている。

中々の逸品だと思う。だけど重さが調整できるようになったことにより、俺を背負う理由が防御面のみになりそうなのが少し寂しいが。

「いいよな、その武具。口は悪いが、腕は確かだったようだぜ」

ヒュールミもキコユの後ろでその恩恵にあずかっているので、涼しげな顔をしている。

ミシュエルもある程度の熱は鎧が防いでいるようだが目に見えて元気がない。

へブイとシュイは一言も発していない。俺が十分ごとに渡す飲み物やアイスで復活しているのだが、数分の内に生気がなくなる。死と蘇生を繰り返しているかのようだ。

空を舞う黒八咫は平然としていて、たまにキコユの近くに降りて涼むと、また元気に飛び立っていく。

シュイがおぼつかない足取りで俺の近くまで来ると、いきなり抱き付いてきた。

「ああ、ひゃっこいっす……この階層の間だけ恋人になって欲しい

ぐらいつす……」

「では、私はマブダチということだ……」

「師匠は……渡しませんよ……」

ふらふらとよるめきながら、俺に貼り付く人が増えた。シユイもへブイもミシユエルも何を言っているのか、自分でもよくわからなくなっているのだ。

「三人ともハツコンに触れたまま歩いていいよ。ねっ、ハツコン」

「いらっしやいませ」

無理して倒れても困るし、こういう時に男女差別をする気もないから、もっと密着してくれてもいいよ。

右側面にシユイ、左側面にへブイ、正面にミシユエル、背中越しにラツミス。四方を取り囲まれてしまった。

「ハツコンが、カツコよく見えてきたっす……もう、このまま抱かれてもいいっす……」

「よく見ると四角い体が精悍な体つきに見えないことも……」

「師匠、一生ついて行きますっ……し、師匠が望むなら私も……」

茹で上がっている頭で無理に褒めなくてもいいから。そんなお世辞に釣られるほど素直な性格もしてないからね。

あと、ミシユエル現実に帰ってきなさい。意味不明な発言が怖すぎる。

正気を取り戻す為に、スポーツドリンクを好きなだけ飲んで。

念動力 で三人に渡す際にキャップを捻って開けやすくしておいた。今は少しでも体力を温存しないと。

「前から結構、この水が好きだったすけど、砂漠で飲んだら格別に美味いっすね」

「体中に水が浸透するかのよう、心地いいですよ」

「師匠の体から出た水……最高です」

水分補給といえればスポーツドリンクだよな。熱中症対策に特化したドリンクもあるので、それも後で渡しておこう。

虚ろな目をしていた三人の瞳に光が若干戻り、ひと塊になったまま砂漠を歩き続けていたのだが、太陽が真上に達したところで昼食と本格的な休憩をすることとなった。

折り畳み式の大きなテントを設置して、その中に全員が雪崩れ込んでいく。

このテントはヒュールミ特製の逸品で、薄い布だというのに熱を遮断する優れたものだと言っていた。

大きさも十畳ぐらいあるので、全員が入っても大丈夫なスペースが確保されている。

俺が氷を大量に流し出して、それを器に入れてからテントの四隅に置かれた。それに加えてキココが冷気を操りテント内の気温が一気に下がり、心地よい空間へと様変わりしたようだ。

「ふいい、天国っす」

「生き返りましたよ」

「流石、ハツコン師匠です」

枯れかけていた三人が見事に復活したか、安心したよ。

全員に冷たいかき氷を配ると、一気に掻き込んだシユイとラツミスが頭を抱えて悶えている。かき氷はゆっくり食べましょう。

暑さも解消されたようなので食事を配り、落ち着いたところで雑談が始まった。

「しっかし、尋常じゃねえ暑さだぜ。まさか、このマントでも耐えきれねえとはな」

「でも、効き目はあるっすよ。ちょっと脱いでみたら、数秒で枯れ果てて死ぬかと思うぐらい暑かったっす」

効果はあるのだが、防ぎ切れない程の猛暑ということか。

「でも、こんなに暑いのにタシテさんたちの滾る爆炎の団の人たち、どうやって砂漠を渡っているのかな」

「確かに……オレたちはキコユとハツコンがいるから、どうにかなっているようなもんだ。対策をしているとはいえ、この暑さを凌げるとは思えねえな。高性能の魔道具でも保有しているのか」

ラツミスの素朴な疑問にヒュールミが腕組みをして考え込んでしまった。

十人組のハンターのチーム全員がこの暑さに耐えられるレベルの魔道具を身に付けているとしたら、素人考えだが金額が相当いきそっうだよな。

途中、遭難したハンターたちを数人見つけたのだが、全員、見事な乾物になっていた。ここで死んだら一日も経たずにミイラになり

そつだ。

死者の中に滾る爆炎の団らしき人物はいなかったので、彼らは無事だと思いたいが。

「ここを拠点にしているそつですから、備えがあつただけかもしれないよ」

へブイの言う通りかもしれないな。慎重な人なら対策の一つや二つ考えているだろう。命に関わる問題だからな。

それに彼らの対策が不足で死なれていては手掛かりが途絶えてしまふ。なので、へブイの口にした言葉は願望も含まれているのだらう。

全員が黙り込んでしまったので、何となく全員の顔を見回しているとキコユがコートのポケットから手帳のような物を取り出していた。

何気なくそれを覗き込んでみると、異世界の数字が順番に書き込まれていた。これつて、この世界のカレンダーか何かかな？

「こよみ」

こよみ、つまり暦と言いたかつたのだが「み」が言えない。これで理解してもらつるのは難しいか。

「えと、何でしょうかハツコンさん」

自分に向けられた言葉だというのは理解してもらえたのか。キコユが俺に振り返り、そつと体に手を触れている。

それつて、この世界の暦なのかな。その数字つて日にちだよな。

『ええ、そつですよ。今日が何日なのか確かめていました。今日は

「ここになります」

数字は何とか読めるのでわかったのだが、今日は十一日なのか。あれ、直ぐ近くに赤く丸で囲っている数字があるな。

『これは……ある記念日なのですよ』

そう言って微笑んでいたので、それ以上は追及するのを止めた。プライベートを根掘り葉掘り訊きだそうとする男は嫌われるからね。話は一旦そこで終わり、体力の回復も兼ねて全員が仮眠することになったので、俺は外に出してもらい見張りをすることにした。

黒八咫も付き合ってくれるようで、俺の頭の上に乗っかっている。ミネラルウォーターを渡すと三本の足で器用にキャップを開けて、飲み口を啜ると一気に中身を呷っている。

一滴も零さずに飲みきるとは、本当に頭がいいのだな。

畑に転生した人は黒八咫やボタンと意思の疎通ができればいい。俺も試しに強く想ってみたのだが、心の声が届いた様子はない。

「クワツクワツクワツク」

黒八咫が三つの目で遠くを見つめながら、語り掛けるように鳴いている。

何となくだがあつちを見る、と言っている気がするな。

視線を三つの視線が向いている方向へ向けると砂埃が見えた。何かがかつちにやってきているようだ。人間……じゃないな。四足歩行のトカゲっぽい。

ファンタジーお馴染みのドラゴンではなく、巨大なトカゲのようだ。尾が紫だがそれ以外は砂と同色だな。あんなに勢いよく走らなければ、接近するまで気づかない恐れがあった。

全長は三メートルぐらいかな。距離があって比べる物が何も無い

ので、もう少し前後するかもしれない。

これは皆を起こした方が良さそ

「クアアアア」

俺が決断するより早く、黒八咫が飛び出していった。低空飛行で相手に接近すると、向こうが反応する前に黒八咫が大きく口を開く。

「クルアアアアッ！」

結構距離があるのに良く響く鳴き声が届くと、正面の砂を巻き上げ見えない何かがトカゲに向かって突き進んでいく。

それが命中したらしきトカゲが粉塵を噴き上げ宙に舞った。あれは口から音波のような物を吐き出したのか。

今の一撃で倒したわけではないようだが、足場を失ったトカゲが空中で足掻いている。

黒八咫は更に速度を上げると羽を畳み、黒い弾丸の様なフォルムになるときりもみ回転を始めた。

そして、腹を無防備に晒しているトカゲへと嘴を突き刺して抉り込むと、そのまま腹を貫通して背中へと突き抜ける。

上下に両断されたトカゲが血を撒き散らしながら地面へと墜落した。

「圧勝じゃないですか……黒八咫さん。」

分断されたトカゲの下半身を掴んで、黒八咫が戻ってきた。

あの堂々とした態度。人間ならドヤ顔の一つでもしてそうだ。

俺の隣でトカゲの下半身を食べているので、そつとミネラルウォーターを差し出しておく。

この調子なら単体の魔物ならみんなを起こさないで任せても大丈夫かな。

ここまで常識外れな実力を見せつけられると、あの三つの目からビームを出しても違和感なく受け入れられそう。まあ、そんなことはあり得ないだろうけど。

その後も三回、魔物が近くまで寄ってきたのだが全て黒八咫が処理してくれた。

ボタンもそうだが、動物の範疇を越えている二匹の戦闘力はどれぐらいなのだろうか。黒八咫は飛行能力に加えて、音波による遠距離攻撃が可能。ボタンは突進力と足の速さか。

以前、キコユにどっちの方が強いのか尋ねたことがあった。その時の答えはこうだった。

「ええと、たまに喧嘩はしますけど、本気で争ったことはないのだからわかりません。たぶん、黒八咫とボタンに同じ質問をしたら、自分の方が強いって言うと思いますよ」

と苦笑していた。何度か戦う姿を見た感想としては、二匹とも中堅どころのハンター相手でも勝利をもぎ取れそうな気がする。

特に黒八咫は大抵の相手には圧勝できそう。飛行能力は有利過ぎるからな。

ボタンの突進力もラツミスぐらいの怪力がないと止めることは無理だろう。いや、十分な助走を取った突撃だとラツミスでも吹き飛ばされかねないか。

一点突破の破壊力が自慢のボタンと、飛行能力と音波攻撃で多数の相手にも対応できる黒八咫。コンビとしてはバランスがいいのかもしれない。

当の本人というか本鳥は頭の上で優雅に羽づくろいをしている。その姿が悠然としていて、思わず見惚れてしまった。

何というか仕草の一つ一つから知能の高さを感じる。幾ら何でも

人間よりも賢いということはないだろうが。

黒八咫が頭の上から前に降り立つと、前に渡したペットボトルを目の前に置いた。

な、なにに。ラベルが剥がされていてキャップも外して分別済みだと……前に何となく生前の癖で 念動力 を使ってやっていたことを見て覚えていたのか。

それにしても頭が良すぎる気が。黒八咫の中身って転生者じゃないだろうな。

砂漠の遺跡

砂漠にある遺跡を目指しているのだが、距離感がつかめないので近づいているのか時折不安になる。遺跡自体は目立つ外観をしているので目印としては最適なのに。

「まだつかないね、あの塔」

ラツミスがぼやくのも無理はない。集落を出る前からずっと見えている一本の棒。

当初は砂漠に揺らめく一本の長い毛にしか見えなかったのだが、砂漠横断四日目にもなると結構太い棒に見えてきた。

「砂漠の柱はクソでけえらしいからな、近寄ったら壮観だろうよ」

ヒュールミの口にした砂漠の柱というのは、遺跡である塔の別称らしい。本当の名前は別らしいが、いつの頃からかハンターたちの間で広まった呼び名だそうだ。

砂漠の柱は百階建てだそうで最上階には階層主が居座っている。十階ぐらいまでは中級ハンターチームなら容易に到達できるらしく、結構儲けが良くてこの階層に住みついているハンターの大半がその稼ぎ目当てだと、灼熱の会長が言っていた。

「はああ、暑いっす……アイス欲しいっす」

今日五個目になるアイスを強請るシュイに、さっぱりオレンジ味のアイスを渡しておいた。暑いのはわかるけど、あんまり食べ過ぎるとお腹壊すよ。

前は常時俺の体に貼り付いていた三人だったが、今は少し暑さに慣れてきたようで少し距離を取って歩いては、限界が近くなるとくつつくを繰り返している。

シユイに至っては「暑さを耐えてからのアイスや冷たい飲み物が格別に美味いっす」と言っていたな。わざと暑さを感じることにより食事の美味しさを増す作戦のようだ。食べることが何よりも好きな彼女らしい発想だ。

最も熱くなる昼は長めの休憩を取っているので進行速度はお世辞にも速いとは言えないが、魔物の討伐も順調で今のところ問題は発生していない。

「あれから誰とも会ってねえな」

ヒュールミの言う誰ともというのは死体も含まれている。二日目までは何体かの干からびた死体と遭遇したが、それ以降は魔物以外と会ってない。

風景に変化がないというのは結構きつくて、本当に進んでいるのかという疑心暗鬼が生じている。砂漠の柱が徐々に太くなることだけが進んでいる証となっている。

集落を出発してから一週間が過ぎているのだが、そろそろ着いてくれないだろうか。

「灼熱の会長の話だと順調に行けば十日前後って話だったよな。オレたちの移動速度は相当なもんだろ、もうそろそろ着いてもよくないか」

ボタンの背に乗っているヒュールミが目を細めて、砂漠に立つ一本の棒を睨みつけている。

砂漠の柱は日に日に太くなっているのだが、それでも結構太い棒程度にしか見えない。どう見ても、まだまだ距離があるよな。

「黒八咫、ちょっと前方を見て来てもらえるかな」

「クワツク」

俺の頭の上で休んでいた黒八咫にキコユが声を掛けると、一鳴きして飛び立って行った。

雲一つない空に漆黒の体が映えるな。大きく羽ばたきながらスーッと滑空していく姿は何処か幻想的でもある。

その姿が徐々に小さくなっていくのをぼーっと見つめていると、唐突に姿が掻き消えた……えっ？

「あれっ、黒八咫!？」

「今、突然消えたよねっ!」

「ああ、確かに消えたぞ」

「視覚を操作して視力を上げていたのですが、何の前触れもなく消え去りましたよ」

「ハツコン師匠、私にも消えたように見えました」

俺の見間違いじゃないのか。全員が消えた瞬間を目撃している。

何が起こったのかは不明だが、それを確かめる為に全員が歩く速度を上げた。口を開いたら不安が零れ出るのを警戒してなのか誰も何を語らず、黙々と歩を進めていた。

一時間ぐらい歩き続けて黒八咫が消えた辺りまで辿り着いたのだが、何もおかしな点はない。

「んー、何もねえな。確かここら辺だと思ったんだが」

「黒八咫……大丈夫かな」

「ブフオツブフオ」

心配しているキコユをボタンが頭を激しく上下に揺らして、慰めているように見える。

最悪の展開としては何者かに撃ち落とされたのかとも考えたのだが、死体もなければ体の一部が転がっているような事もない。

「何で消えたのかな……一瞬だったから良く見えなかったけど、急に速度を上げたとか」

ラツミスは言葉を選んでる訳ではなく本気でそう思ってそうだな。

俺としては黒八咫がそう簡単にやられる訳がないと信じているので、死んでいるとは思いたくない。そうになると、何故消えたのかという疑問に戻る訳だが。

「あれ、何かここ変じゃない？」

ラツミスが俺を降ろしてから虚空に顔を突き出して、じっと見つめている。

別に変な所は無いように見えるのだが、何でそんなにも真剣に見続けているのだろうか。

俺も釣られて同じ場所を見ているのだが……特に……おっ、あれ、何か揺らいでない？

ほんの少しなのだが目の前の映像が少し揺れた気がした。まるで水面に映る風景のように波打ったような。

「また、揺れたよね。何だろう……」

ラツミスが無造作に手を伸ばして、その部分に触れようとしたので、慌てて取り出し口のペットボトルを飛ばした。

手が触れる前にペットボトルが揺らいでいた部分にぶつかると消えた。黒八咫の時と同じように消えたぞ。

「うわっ、消えたよ！ ハツコン、消えた、消えたよ！」

うん、見ていたから知っているよ、ラツミス。ちょっと落ち着こうね。

テンションが上がっている彼女の頬にキンキンに冷やした缶ジュースを当てると「ひいやうっ！」と叫んで静かになった。

もう一本ペットボトルを取り出して 念動力 で操り消えた場所にゆっくりと近づけていく。今も少しだけ揺らいでいる部分にそつとペットボトルの先端を当てると……触れた部分が消えた。水面に沈んでいくかのように触れた部分だけが綺麗さっぱり消え失せたのだ。

さらに半分ぐらい押し込んでみたのだが完全に消滅している。消えた部分の切断面が気になったので引き戻してみると あれ、消えた筈のペットボトルが存在している。

「あれっ、あれっ？ 元に戻ったよ」

もう一度繰り返し返してわかったのだが、どうやら水面のような部分から先に進むとこちらから見えなくなるだけで、消滅している訳じゃないようだ。

「どうなってんだこれ」

俺が実験をしている間に仲間たちが集まっていたようで、全員がその不思議な光景に首を傾げている。

ヘブイが自分の武器であるモーニングスターの鉄球を、突っ込んで引き抜いてを繰り返している。その隣でシューイも矢で同じ事をしてるな。

「私の加護と似た設置型の幻覚の一種っぽいですね。ここが境界線になっていて先は全く違う光景になっているのではないのでしょうか」

ということとは黒八咫も消滅したわけじゃなく、消えたように見えただけなのか。

「面白いねっ」

って、考えなしに頭突っ込まない！

ラツミスの首から先が消えて完全にホラーだ。声は聞こえるので視覚のみを誤魔化しているようだ。

「あれ、すっごく近いよ！ 塔が目の前にあるよ！」

驚く声に反応して全員が顔を突っ込んだ。

うわぁ……全員の頭が消えた。何だろっこのシユールな光景。

でもちよつと羨ましい。俺だけ参加できないのが、若干寂しく思ってしまう自分が嫌だ。

「本当に砂漠の柱が近くにありませんね。この幻覚で距離を偽り近寄らせないようにはしていたのでしょうか。私の加護と似たような力ですか」

「まだまだ距離があるように見えていたからな。途中で挫けて集落に引き返したくなるように錯覚させていやがったのか」

「誰かが近づけたくなかったから、こんな小細工していたってことですか？」

「何でこんなことしたのかな。灼熱の会長はこんな仕組みがあるって言ってなかったよね」

「言っていないませんでした。そうですね、ハッコン師匠」

「いらっしゃいませ」

灼熱の会長がそんな重要なことを話し忘れることはないだろう。となると誰かが仕込んだということか。その目的として考えられるのは、この塔に人を近づけたくなかったということだよな。

「一気に胡散臭くなってきやがったな」

「そうですね。一筋縄ではいかないかもしれませんよ」

「誰の仕業ですかね」

「ハッコン師匠には傷一つ付けさせませんので、ご安心ください！」

「黒八咫は怪しんで周辺を調べてくれているのでしょうか」

この状況を即座に理解して仲間たちが警戒している中、ラッミスが小首を傾げた状態で眉根を寄せている。

「どついつことなのかな……ハツコンはわかる？」

自分だけがわかってないことに気づいたようで、小声で俺に訊ねてきた。

警戒するのは俺の役目だから心配しなくても大丈夫だよ、というのは甘やかしすぎだろうか。こういつ少し抜けたところも彼女の魅力の一部なのだが。

頭が冴えて危険を事前に察知するのはラツミスのキャラじゃないよな。俺を背負っている限り、足りない部分は補えるから今のままでもいい気はする。

とはいえ、危険なハンター稼業だ。命の危機に晒されることも多いので、理解力は必要になってくる場面が多い。ちゃんと説明しておかないとな。

俺が伝えたところで言葉足らずで時間がかかるので、ヒュールミが今の状態から予想できる現状の説明をみんなにすると、やはりラツミス以外は既に把握していた。

「ええと、誰かが砂漠の柱で悪巧みをしているかもしれないから、気を付けろってことだよな」

「ああ、その通りだぜ」

そして、その悪巧みにへブイが探しているタシテと滾る爆炎の団が、加わっているかもしれないということだ。

これは確定ではなくあくまで予想でしかない。だけど、警戒するに越したことはないからな。

全員が気を引き締め直して波打つ境界線を越えると、塔は本当に目の前にあった。距離は百メートルもないだろう。

巨大な一本の柱が天に向かって伸びている。見上げてもその先端が見えず、最上部がどれ程の高さにあるのか、想像しただけで目が

眩みそうだ。

「あっ、黒八咫！」

砂漠の柱の裏側から現れた黒八咫が何事もなかったかのように舞い降りてくると、キコユに歩み寄りじつと見つめている。

「お疲れ様。どうだった、何か見つかった」

頭に手を触れて幾つか質問をしている。黒八咫が今まで何をしていたのか情報を訊きだしているようだ。

「ええと、塔が高すぎて最上部までたどり着けなかったそうです。周辺には人の気配もなく、見張りらしき人影が塔の二階部分から見下ろしていたとのことです。散々からかったら矢を取りに引っ込んだそうで、行くなら今の内だっと言っていきますよ」

至れり尽くせりだな。黒八咫の作ってくれた、このチャンスを逃すわけにはいかない。

俺たちは残り僅かな距離を一気に駆け抜け塔の大きな鉄扉に貼り付いた。ここだと上から覗いたとしても底部分が邪魔になって見えないうら。

さてと、ここからが本番だ。気合入れて行かないとな。

砂漠の柱

「ちょっと下がってくれ。扉に仕掛けが無いか調べるからよ」

ヒュールミが聴診器のような物を取り出し、両開きの巨大な鉄扉を調べ始めている。

全員が言われた通りに少し下がって様子を窺いつつ、辺りを警戒しているようだ。

「塔の中の気配は……探れないようです。何かしらの対策が施されているようですよ、砂漠の柱には」

ミシユエルの気配察知はかなり優秀だったよな。外側から内部の様子が探れなくなる仕様にでもなっているのだろうか。

「畏はねえが、内側に門でもしてるみたいだぜ。どうするよ」

遺跡の入り口に門がしてあるって、どう考えてもおかしいよな。誰かが住み着いているのか。鉄扉の前に見張りはいなかったが、扉の向こうにいないとは限らない。注意しないと。

「じゃあ、ぐるっと迂回する？」

「黒八咫がここ以外、入り口はなかったと言っています」

となると選択肢は一つしかないわけか。

「じゃあ、強行突破でいいのかな」

「それしかないっすよね」

何でラツミスとシユイは嬉しそうなんだ。

このチーム、女性の方が血気盛んじゃないか。男性陣の方が慎重派だよな。

「仕方ありませんね。ですが、十分に警戒してくださいよ。視覚と聴覚を強化しておきます」

「先頭は私が受け持ちますので」

ラツミスが扉に両手を添えて一気に押し込んでいく。

ヘブイとミシユエルが両脇に並び、開け放たれたら中へと突入できるように、膝を曲げて腰を落としている。

「よいしょおおおっ!!」

気合の言葉と共に鍵が破壊されて扉が大きく開け放たれると二人が中へと滑り込み、俺たちも遅れて内部へと侵入した。

「えっ、涼しい」

予想外だったのだろうか、ラツミスの口から驚きの声が漏れた。

砂漠の柱内部は涼しいのか。それはこちらにとってはありがたいことだが。

内部はただっ広い空間だった。砂漠の柱の外壁があるだけで、それ以外は何も無いように見える。奥の方は広すぎて何かあったとしてもわからないぐらい距離があるぞ。

壁の高い位置に窓が取りつけられていて、そこから入り込む日差

しで塔内は外と変わらぬ明るさを維持している。

よく見ると窓以外にも壁際に灯りの魔道具が設置されているので、夜も明るいのかもしれないな。

それだけなら殺風景な光景なのだが、そこには尋常ではない数の魔物がひしめいていた。

砂漠で何度も見た巨大なトカゲ。生理的にきつかったムカデのように無数の足が生えた蛇。異様に手足が長いネズミ。口元がグロテスクな巨大ミミズ。その他もろもろ、灼熱の階層に住みついている魔物が大集合している。

「な、何体いるっすか」

「百、いや二三百はいるか。でも、何でこいつら反応しやがらねえ」

あれだけ大きな音を立てて扉を開け放ったというのに、魔物は無反応を貫いている。ただその場にポーッと突っ立っているだけだ。

「指示を待っているように見えますが、ここの指揮官は捕えられたのですよね」

「そうですね、ヘブイさん。灼熱の会長はそう仰っていました。ですよね、ハツコン師匠」

「いらっしやいませ」

指揮官を捕まえて指輪を奪い、牢屋に放り込んでいると言っていた。間違いない。

だけど、この状況は何だ。これだけの数の魔物が大人しくしているなんて、普通ではあり得ない。誰かが魔物を制御していると考え

た方が合点がいくよな。

「捕まった指揮官は偽物で、本当の指揮官が存在する。そして、それは灼熱の会長を油断させておいて戦力を集め、一気に集落を襲う……ってシナリオはどうだ？」

軽く口にしたヒュールミの考察に誰も言葉を返せなかった。あり得ると思っってしまったからだろう。俺と同じように。

「そう考えるとじっくりきますよ」

「敵もちよつとは頭が回るのがいるみたいっす」

「となると、ここの敵を放置するわけにもいきませんね」

へブイ、シュイ、ミシユエルが武器を構えて戦闘態勢に移行しているが、このまま戦っていいのだろうか。

今のところ敵に動きはない。だが、敵対行動を示した途端襲い掛かって来たら、このメンバーでも数の暴力には勝てない。

「早まるなよ。お前さんたちでも、この数を相手に勝てる可能性は低いだろ。相手が攻撃してこない今の内に策を練るべきだ。まずはラツミス、扉の片方だけ閉めてこつちも俺たちが通れる程度にだけ隙間を開けてくれ」

「うん、わかった」

ヒュールミの指示に従い巨大な鉄扉の片側が閉じられて、もう片方もギリギリ俺たちが通れる隙間だけ残して閉められた。

「へブイ、こいつらに幻覚を見せるとしたらどれぐらいの範囲まで可能だ、あと時間も教えてくれ」

「そうですね……私を中心として半径二十メートルなら範囲内でしょうか。時間は敵を誤認識させるなら、十分程度いただければ何か」

「シユイ、矢は何本ある？」

「三十つすね」

「ミシユエル、見える範囲以外に敵はいるか？」

「いえ、気配を探る限りでは見えている場所以外に敵が潜んでいる様子はないです」

「ハツコン、あの良く燃える油はばらまけるか」

「いらつしゃいませ」

「それに加えて、黒八咫、ボタンもいる……」

全員が答えるとヒュールミが目を閉じて腕を組んで唸っている。頭の中で作戦を組み上げているのだらうと、黙って見守っていると、瞼を勢いよく開いて、大きく息を吐いた。

「よつし、いつちよやってみるか。逃げるにしても見張りに気づかれるだけだ。ならここで、敵を掃討しちまおうぜ」

普通なら無謀だと止める場面なのだが、ヒュールミが自信あり気

に言つただから勝算があるのだらう。それなら、この命……預けるよ。

作戦の概要を伝えられ各自がやるべきことを把握して行動に移った。

まずヘブイとミシユエルが敵の密集している場所へ、ゆっくりと歩み寄っていく。

ミシユエルは自分の気配も完全に消すことができず、それは隣接する仲間にも影響を与えるということだったのでヘブイと同行してもらった。

敵が反応するのではないかと冷や冷やしながら見守っていたのだが、目の前にいるというのに微動だにしない。

ある程度進むと、そこで止まり何やら詠唱が始まった。

感覚操作 の力により広範囲の魔物の目に映る全ての者を敵と誤認識させるには、時間が必要となるので終わるまでに敵が動くことが無いように祈るしかない。

その間に俺は周辺に灯油をばらまいている。ここまで巨大な空間だと少々燃やしたところでそう簡単に一酸化炭素中毒になることはないだらう。

そうこうしている内にヘブイの準備が整ったようで、幻覚を発動させて戻ってきた。

魔物たちはそれでも全く動きがないのが不気味だが、無抵抗で死んでくれるならこちらとしてもありがたいから、そのままのキミでいてくれ。

「あの指輪つてのは簡単な指示しか不可能だった。攻める、止める、ぐらいのやつだ。指示されない内は敵対行動を示さない限り、襲ってこないってのも間違いないようだな」

事前に仕入れた情報を十二分に生かしている。こちらから攻撃を

仕掛けるか、相手の指揮官が命令を下さない限り、この魔物は何時間でもこのままの状態なのだろう。

「爺さんがいたら大魔法の一発でもかましてもらうんだが、贅沢は敵だ。でも、これだけの面子が揃っていたら、これぐらい余裕だろ」

「いらつしゃいませ」

それは半分本気で半分強がりだとわかっていたので、俺が元氣よく聞こえるように発音した。

俺の思いが通じたのかヒュールミが笑みを深くした。

「そうだね、うん。こちらならやれるよっ」

「師匠がそう仰るのであれば間違いありません」

「うんうん、やれるっすよ」

「もし、皆さんが倒されたら形見の靴は私が受け取りますので」

みんないつもの調子だな。いざとなれば巨大化して結界でみんなを守ればいい。少々の無理は覚悟の上だ、やるだけやってみるさ。

「それじゃあ、開幕の合図は誰がやる？」

全員が顔を見合わせると、何を思ったのか視線が俺に集中した。え、自動販売機に任せるの？

「この階層で一番の功労者はハッコンだしな」

「冷たいアイスと飲み物がなかったら、今頃干からびていたっす」

「そうですね。ここまで辿り着けることはなかったでしょう」

「黒八咫もボタンも任せるって言っていますよ」

「師匠、お願いします!」

「うん、そくだよね。ハツコン、お願い」

仕方ないなあ。こんな大事な仕事を俺に任せるなんて、そんなに褒められておだてられても嬉しくないんだからねっ!

とツンデレを装ってもしょうがないので、俺らしく派手にやってみるか。

二リットルのコーラを出して、その中にあのキャンディーを放り込み直ぐに蓋を閉じる。こうすると、爆発が抑えられるのでその間に敵陣へ向かって投擲した。

そして着弾する寸前、ペットボトルだけを消すと中身が大爆発をする。

これは魔物たちも敵対行為と判断したようで、一斉に動き始めた。さあ、蹂躞劇の幕が上がった……みんな、信じているよ。

蹂躪

「では、僭越ながら先陣を切らせていただきます！ 咆哮撃」

前に進み出たミシユエルがお得意の一撃を放つと、火を纏った斬撃が敵の先頭集団を薙ぎ払った。

炎の軌跡に触れた魔物たちは瞬時に切断、炎上させられただけでは済まず、燃えたままばら撒いてあつた灯油に触れると、辺り一面が火の海と化す。

魔物は俺たちを敵と認識したのだが、数十体の魔物は俺たちを攻撃せずに仲間に襲い掛かっている。あれはへブイの幻覚で仲間の姿が全て俺たちに見えているそうだ。

「でも、あのおっきくて長い魔物が、私たちの姿に見えるって無理ないかな」

ムカデの様な足が生えている蛇のことか。確かにサイズの無理があるよな。長さが五メートル以上あるし。

「あの場合は私たちが四つん這いになって、更にその尻に他の人が頭をくつつけて四つん這いで連なっているように見えている筈ですよ」

へブイの説明を聞いて想像してみた……人間相手だと無理がある幻覚だ。ギャグにしか思えない。

余裕を持って他愛のない会話ができるくらい、今のところは順調だ。

炎の壁を強引に乗り越えてきた魔物はシユイの矢と黒八咫の上空

からの音波爆撃が降り注ぎ、こちらに近づくことができないでいる。遠距離攻撃はそれだけではない。最近、マイブームであるパチンコ玉入りペットボトルをラツミスに全力で投げつけてもらい、その剛腕から繰り出された投球　投ペットボトルは唸りを上げて魔物へと向かう。

途中でペットボトルだけを消せば、中のパチンコ玉が散らばり広範囲の敵を撃ち抜くことが可能となる。散弾銃も真つ青な威力だ。

「これだと命中させなくてもいいから、凄く便利だね！」

俺とラツミスとの見事なまでの協力攻撃。

だが、この状態でも数が尋常ではないので、仲間の死体乗り越えて隣接する個体が数体いるのだが、それは全てへブイとボタンが潰し、吹き飛ばし、粉碎してくれる。

ミシユエルは一人で突出して幻覚のかかっている敵だけを狙って奮闘しているな。腕の良さと大剣の切れ味が相乗効果となり、全ての敵を一撃で両断する姿は男でも惚れそうになるぐらい格好いい。そりゃ、モテる筈だ。

このまま一気に押し切りたかったのだが、さっきから敵が次から次へと現れて、倒しても倒しても増援がやって来る。

「やっぱ、そう簡単にはいかねえか。やべえな、時間を掛け過ぎると……気づくよな」

「ええ、奥にある上へと繋がる階段に先程、人影が見えましたのでこれを操っている指揮官に情報が伝わったと見るべきでしょう」

へブイが視覚を増強させて奥を観察していたのか。

指示を待つ魔物と人影。それに上の階では外を見張る人がいたという黒八咫からの報告もある。この魔物たちを操る指揮官と靴を売

り捌いたタシテたちが関係者である可能性が強まったな。

答え合わせは会ってからすればいいか。今はこの魔物の殲滅だけを考えないと。

「ちよつと、この武具試してみるね！ ハツコンはギリギリまで手を出したらダメだよ」

釘を刺されてしまった。砂漠では出番がなかったから、うずうずしていたみたいだな。

拳を手の平に打ち付け、ラツミスが前屈体勢で魔物の群れに突っ込んでいく。

「えつと、内側のこれに指先を触れて……重くなれえ」

口にしくなくてもいいんだよ。考えるだけで発動するらしいから。

「うわつ、本当に重くなった。うん、丁度いいかなつ！」

踏み込みと同時に目の前に現れた巨大なトカゲの顎に、下からすくい上げるように打ち込まれた拳を激突させた。

衝撃に耐えきれなかった頭が吹き飛び、頭蓋骨の欠片と血飛沫を撒き散らしながら首から上を失ったトカゲの体が、空中で風車のように後方宙返りを繰り返し返している。

「うん、いい感じー！」

更にラツミスの破壊力が強化されたのか。

謎の素材は重さの調整だけではなく硬度もあるので、あの怪力で振るわれている攻撃で破損することもない。

重さの調整が徐々に慣れてきたのだらう、速さと力強さの使い分

けが上手くなっているな。ここって清流の湖階層と比べて上級者向けなのだが、その魔物に引けを取らないどころか圧倒している。俺もこの世界に転生してから、かなり強化された自信があるが、ラツミスは俺の成長速度を上回っているのではないだろうか。

元々、戦闘のセンスがあつたのに機会に恵まれなかっただけで、ここ最近で一気に花開いたのかもしれないな。

「凄まじいですね、ラツミスさん。悔しいですが、ハツコン師匠の相棒として相応しいですよっ！」

大剣を振るいながら、近くまで来ていたミシュエルが素直に称賛している。

「みんなに比べたらまだまだ、だよっ！」

魔物を吹き飛ばしながらラツミスが言葉を返す。

みんなか…… 実際環境にも恵まれているからな彼女は。周りのハンターたちは凄腕ばかりで、あらゆる面で参考になることが多い。彼らに触発されて日頃の鍛錬にも力が入っているようだし、このまま成長を続ければ最上級のハンターになることも夢ではなさそう
だ。

俺も引き離されないようにしないと。

近場は全てラツミスに任せて、離れた場所で身構えている虫が口から酸のような物を吐こうとしていたので照準を合わせて、素早く
高圧洗浄機 にフォルムチェンジをする。

発射口を絞り最大圧力で放たれた高圧の水をぶつける。

それは高威力のウォーターカッターとなり魔物の皮膚を貫く。この攻撃は距離が開くほど威力が落ちるので、中距離の相手にしか効かないのだがラツミスの攻撃範囲外の敵を葬るには都合がいい。

敵は無尽蔵ではないのかと思う程に魔物が現れ続けていたのだが、その攻撃が唐突にピタリと止んだ。その全てを斬り捨て粉碎し尽くしたのだ。

砂漠の柱の一階床を埋め尽くすおびただしい数の魔物の死骸。数百体もの魔物を本当に殲滅したのか。

途中、危険を覚悟の上で敵陣に突っ込み、暴れ続けていた二人に護衛を頼んで、敵に幻覚を再び掛けたヘブイの活躍が大きかったな。その時、ミシュエルは幻覚を完全に防いだのだが、ラツミスが幻覚に掛かって魔物が全て仲間に見えて攻撃できないというハプニングもあつたが、ヘブイが即座に解いたのでそれはもういいだろう。

格下の敵相手だと感覚操作が凶悪な威力を發揮する。同士討ちをさせられるというのは多人数戦だと効果的だ。

「何とかなるものですね、意外と」

死屍累々の魔物たちを見下ろしながら、ヘブイが大きく息を吐く。

「今回は結構疲れたね……はうう」

元気はつらつが売りの一つであるラツミスでも、今回の戦いで体力の消耗が激しいらしく、俺に背を預けて何とか立っている状態だ。

「矢も尽きたつすよ。回収しないと」

途中から矢が無くて使い慣れていない投げナイフで何とか対応しようとしていたもんな、シュイは。結局、あまり役に立たないことがわかって死体から矢の回収をする為に走り回っていた。

「黒八咫、ボタン、お疲れ様」

二匹を労わっているキコユは邪魔にならないように入り口の扉付近でじっとしていた。黒八咫は空からの一方的な音波攻撃で敵を錯乱させつつ、囷も兼任する大活躍ぶり。

ボタンは近寄ってくる敵を軽々と吹き飛ばしながら、砂漠の柱内부를所狭しと走り回って性質の悪いひき逃げをしていたな。角の貫通力も大したものだが、あの速度で突撃された魔物が面白いぐらいに容易く宙を舞っていたのが印象的だった。

「このまま、二階へ進みたいところだが、一旦休憩しようぜ。体力の消耗が半端ねえだろ」

後方で控えていたヒュールミは体力が余っているようだが、仲間の疲労状態を見て休息を提案した。

魔物の死体と血が散乱している場所では気が休まらないのではないのかと思ったのだが、焔の欠片である土の球で周辺の死体を吸い込み、キコユが掃除をしてくれている。

「これでかなり焔さんの力が溜まりそうです」

彼女の目的は焔の復活なので、欠片に力を与えて遠くにいる焔の本体と合流する為なら、どんな苦勞もいとわない覚悟らしい。

それは黒八咫とボタンも同じらしく、他にも同じ目的の仲間がいるとのことだ。

その話を聞いて、少しだけ焔に転生した見知らぬ人を羨ましく思った。 فقط

「ハッコン。どうしたの、何か考え事？」

「おっ、悩みがあるなら相談しろよ。オレたちは仲間なんだからよ」

「そうつすよ、仲間に隠し事はなしっす」

「悩みですか！ ハツコン師匠の為ならドラゴンの巣穴でも同行いたします！」

「モテモテですね、ハツコンさんは。畑さんもそうでしたよ。助力が必要ななら何でもおっしやってください」

俺にもこんなに素敵な仲間がいる。羨むなんてお門違いだ。

ここまで恵まれた自動販売機が存在するだろうか。いや、存在しないと断言できる。

俺に出来ることは自動販売機としての能力。大切な仲間たちに今日も美味しい食事と飲み物を提供するとしますか。

和気藹々と食事を続けながらも、完全に気を緩めているわけじゃない。今いる場所は壁際で、入り口の扉付近に陣取っている。

扉の向こう側の音を探り、二階へ続く階段を誰もが注目しているようで、ちらちらつと何度も視線が向けられていた。

「問題はこっからだな。二階に潜んでいそつな本命共は一階がどうなったか気づいていると仮定するぞ」

「これだけ派手に暴れましたからね。様子を窺っていた人影が何度も見えませんでしたし」

魔物を殲滅してからは一度も顔を出していないのは、二階で歓迎の準備をしているからかもしれないな。

「待ち伏せ、罾を警戒しつつ突撃するのが妥当だが。この場合、先頭はかなりの危険が生じる。誰を行かすかってことだが」

「うちが行くよ！」

「いくよ」

「ここは俺たちが立候補するべきだろう。結界が張れる俺なら相手が何を企んでいても、防ぐことが可能だ。ラツミスも同じ考えだったようで声が重なった。」

「そうだな、それが妥当か。ハツコンの結果があれば大概は防げるだろうけどよ、油断だけはしないでくれよ」

「うん うん」

俺は兎も角、ラツミスを傷つけさせたりはしない。彼女と一緒にいる時の俺は相乗効果で何倍にも強化されるからな。あらゆる攻撃を防いでみせると胸を張って言えるよ。

「あのう、お話し中にお邪魔して悪いんですけど……追加で食べ物いっすか？ お腹空いたっす……」

申し訳なさそうに無料券を差し出してきたシュイの言葉により、自動販売機としての仕事を再開することにした。

狂気と歓喜

階段を慎重に上っているが敵が上から現れることもなく二階へと到達した。

二階は細い通路がぐるっと砂漠の柱を取り囲むように一周していて、俺たちは全員でその通路の進んだのだが敵の姿もなく、上の階に繋がる階段も存在していない。

通路の外側には窓が幾つか設置されていて、黒八咫の見た見張りはこの窓から外の様子を窺っていたのだろう。

「窓際に足跡が残っていますね。それもつい最近までいたようですよ」

へブイがしゃがみ込み窓付近の床をじっくりと観察している。言われてみれば確かに窓から吹き込んだきた砂を踏み荒らした跡が幾つかある。

「ってことは、途中であった扉の向こうに逃げ込んだってことっすか」

「窓から降りてなければな。まあ、ロープの痕跡もねえから扉から逃げたって考えるのが妥当だぜ」

この砂漠の柱は上へ上へと続いているので、もっと上の階層に移動している可能性も高いが警戒するに越したことはない。

通路の途中にあった扉の前まで移動すると、ヒュールミが再び聴診器の様な物を取り出し、扉をじっくり調べている。

「罨はねえな、音は……扉が分厚過ぎてわからねえ。確か、二階の間取りも何もない広々とした空間だったよな」

「ええと、そうですね。会長さんから頂いた地図ではそうなります」

キコユが背負い袋から取り出した地図には砂漠の柱の簡単な見取り図が書かれている。五階までは内部に壁も殆どなく広々とした空間に魔物が徘徊しているだけらしい。

なので、腕に覚えのあるハンターチームは各階層で狩りをして、魔物の高く売れる部位や魔石を集めているそうだ。

「一階と同程度いるとは思えませんが、ハッコン師匠、無理をなさらないでください」

「いらつしゃいませ」

心配するミシユエルに返事をして、ラツミスが扉を押し開いた。内部は一階と同じく内壁もなく広いだけの空間があった。ただ、ここを誰かが拠点にしていたのだろう。椅子や机が幾つか壁際に置かれている。

生活感が溢れていてそこら中にゴミや素材として売れそうな魔物の部位が転がっている。この感じだと一人や二人では済まない人数が住んでいたようだ。

やはり、滾る爆炎の団が住み着いていたと考えた方が良さそうだな。

人は見当たらず魔物もない。対面側の壁に上階へと繋がる階段が微かに見えるな。他に目に着くのは円柱が等間隔で立っているくらいか。人が余裕で隠れる太さはあるので一応注意しておこう。

「じゃあ、こちらが進むからその後から付いてきてね」

何もないように見えるが、罨が仕込まれている可能性がある。それは、砂漠の柱に元々設置されていた罨なのか、ここに住みついてきた何者かが新たに設置した罨なのかはわからない。

ラツミスは俺を信用しているのか大きめの歩幅でずんずん進んでいく。

すると常時展開している 結界 に何かが触れた感触があったかと思うと、近くの床に幾つもの細い穴が開き床から槍の穂先が飛び出してきた。

まあ 結界 で全て防いだけど。

「うわっ、びっくりした！ ありがとうね、ハッコン」

「いらっしやいませ」

罨に怖気づくことなく歩み続けるラツミスは次々と罨を発動させていく。

散乱しているゴミや家具に紛れて仕込まれていた、足首付近に張られていたワイヤーを引つ掻けるとタンスがこっちに向かって吹き飛んできたが 結界 で防いだ。

足下の床が陥没したかと思うと辺り一面が爆炎に包まれたが 結界 で防いだ。

円柱の裏に隠してあった巨大な刃物が飛び出してきたが 結界 で防いだ。

二階は罨が多いという話だったが、幾つかの罨は元からの物ではなく人為的に設置されたものだろう。家具を利用したトラップなんて人でなければやらない。

住んでいた輩は罨の場所を把握していなければ住めないだろうから、あまり寛げない空間だよな。

しかし、強引な罠の排除方法だな。確か地雷の除去もあえて地雷を爆発させるのが主流らしいから理にかなった方法ではある。

結局、罠以外に何もなく三階への階段まで辿り着いた。

「到着！ みんな、もういいよー」

距離を取って後ろからついてきていた全員が駆け足でやって来たのだが、ヒュールミが何とも言えない表情をしている。眉根が少し寄った表情で自分たちが辿ってきた道を振り返っている。

「あれだな、効率的なのはわかるが……罠を仕込んだ輩がこの解除方法を知ったら傷つくだろうな……」

ああ、なるほど。結構、凝っていた罠もあつたからね。たぶん、一つ設置するにも相当な時間と道具を費やした筈だ。それを、何の策もなく真っ直ぐ突き進まれて全部防がれたのだ。俺が罠担当なら声も出ないと思う。

「でも、一階ごとに罠とか魔物が配置されていて、最上階まで逃げられていたら面倒じゃないっすか」

「あー、それはたぶん大丈夫だろ。さっきざつと調べたが食料の大半がこの階に残されていた。慌てて逃げたとしたら碌に食料も持つて行ってねえ。それに、二階に住みついていたのは利便性があるからだろ。見張りとしても丁度いい高さで一階が近いことにより行き来が楽だからだ。ここより上に拠点を築く必要性が薄い。まあ、非常時に逃げ込めるように三階は何らかの手を加えて待ち構えているかも知んねえけどな」

一階の大量の魔物とこの罠。ここまでの備えがあれば侵入者は

普通死んでいる。

俺が当事者なら力押しで抜けてくるとは思いもしないよな……。

「たぶん、今頃上で慌てふためいて、簡単なバリケードでも作っているんじゃないか」

あり得るな、それは。一階でかなり時間を取られたが魔物を掃討されるとは思ってもいなかっただろうから、終盤に差し掛かってから使えそうなものを掻き集めて、上に逃げこんでいく姿が容易に想像できる。

「ってまあ、憶測だからあんま信用するなよ。敵のリーダーが頭の回る奴だったら、何か仕込んでいるだろうしな」

そうだった。今回の相手は囷の指揮官を捕まえさせて、油断させた上で魔物を集めていたのだ。無能な相手という訳ではない。

罨だって俺の 結果 があつたから楽に抜けられたが、それがなければ足止めされていた。

「三階も二階とほぼ同じだ。今度は通路にも罨が仕掛けられているかも知んねえから、注意してくれよ」

ヒュールミの忠告に頷き、俺たちは三階へと上がる。

また外壁に沿って通路があり、途中に扉もあつた。

扉の前に仲間を残して、黒八咫にだけ付いて来てもらい通路をぐるっと一周してきたが敵の姿は何処にもない。

「よう、帰ってきたな。その顔だと収穫は無しか」

「うん、人っ子一人いなかったよ」

「クワツクワツ」

黒八咫も肯定しているな。お利口さんだ。

「となると、本命はこちらですね」

「たぶん、待ち構えているだろうな。この状況で俺たちは無関係なんだ、とか見え透いた嘘も言ってくるほど馬鹿じゃねえだろ……交渉することなく攻撃を加えてくるだろうな」

「じゃあ、うちとハツコンが先頭で突っ込んだ方がよいよね」

「危険な役割を任せて悪いが、頼めるか」

「まかせて」

どう考えても 結界 という絶対防御を所有している俺が行った方が良いに決まっている。本当ならラツミスは連れて行きたくないのだけど、一緒に行くと言って譲らないと断言できるので話し合うだけ時間の無駄だ。

相手の出方を窺いつつ、戦力も確認するのに最も適した人材……自動販売機材は間違いなく俺だからな。

この面子ならごり押しでも勝てる気がするが油断は禁物。まずは情報収集が何よりも大切だ。

「全員、扉の脇の壁に貼り付いておいてくれ。おっし、それじゃあ、ラツミス派手に頼むぜ」

「よーし、いっくよー！」

ラツミスはぐるぐる回そうとしてしたのだが、俺が背中にいるのでぶつかってしまった。

そんな悲しそうな目で見られても、勢いを削いで悪かったとは思っけど。

邪魔にならないように一旦 ダンボール自動販売機 なっておいた。これで腕を思う存分回せるだろう。

「よーし、いくよおおっ！」

そこからやり直すんだ。

風が巻き起こるぐらい思う存分に腕を回して満足してから、床石が碎けるぐらい全力で踏み込み、渾身の正拳右突きを扉へぶつけた。凄まじい衝突音がしたかと思うと、分厚い鉄製の扉が内側に向かって吹き飛んだ。

「ぐがっ」

その音に混じって男の悲鳴が聞こえた気がしたので中を覗き込むと、ひしゃげた扉を抱きかかえるように吹っ飛び、床を派手に転がっている男が二人いた。

扉の後ろに潜んでいて、開いた瞬間に襲い掛かる手筈だったのだろっ。

ミシユエルがその気配に気づいてなかったようなので、気配の操作に長けた逸材だったのかもしれないが、床に寝転がったままピクリともしていない。

この扉の開け方は予想外だったようだ。

ラツミスが気にもせず堂々と中へ侵入する。ざっと見回してみたら、正面の奥に机や椅子、後は廃材だろうか、そういう物を繋ぎ

合わせだけの簡易バリケードがある。

その裏からこちらの様子を窺っている者が七名、見え隠れしているな。確か滾る爆炎の団は十名。他に協力者がいないとしても、床で気を失っている二人を加えても一人足りない。

何処かに潜んでいるのか。二階と同じく円柱があるので、その裏辺りが怪しいけど。

それと気になるのはバリケードの近くに黒い布を被せられた大きな何かだ。高さは三メートルぐらいだろう、置物か何かだと思いたいが。

「てめえら、何者だ！」

バリケードから顔を出して叫んでいる男の特徴が事前に教えてもらったタシテの容貌と一致する。

「うちらは清流の湖階層からきたハンターだよ」

「他の階層の奴らが何しにきやがった！」

「少々お話を聞かせてもらえないかと思ってやってきたのですが、思ったよりも歓迎していただけたようです」

取り除かれた扉跡から姿を現したヘブイが俺の横に並んだ。

その顔にはいつもの笑みが貼り付き平常時と変わらぬように見えるが、細めた目から見える瞳が鋭い光を放っている。

「話だと……俺たちが魔物を集めていることを何処で知りやがった！」

「質問はこちらがしたいのですが」

「魔物を集めているのは、ここに来てから知ったよ！」

「ふざけるなっ！ 偶然やってきて集落襲撃用の魔物を殺したとでも言っつもりか」

「うん！」

「なめてんのかああっ！」

ラツミスが全て素直に答えているが全く信じていない。

俺が相手の立場なら……信じないな。襲撃を予期して送り込まれたと考えるのが妥当だ。キレル気持ちも理解はできるが、同情をす
る気はない。

頭の回るタイプかと思ったのだが、思い通りにいかないと取り乱すのか。計算高い人で予定通りに事が運ばないとパニックになる人
たまにいるよな。

「まずは、そっちの話を片付けないと話が進みそうにないですね。
皆さんは冥府の王の傘下となり一階の魔物で集落を襲おうと悪巧み
をしていた。それで間違いありませんか」

回りくどい言い回しは必要ないと考えたのかズバリ切り込んだな。

「そこまで知られているなら、今更しらばっくれても仕方ねえか。
ああそうだぜ。一時的だが協力関係にある」

ケリオイル団長たちと同じような立場か。

人格者の仮面を完全に取り外したか。今俺たちの前にいるのは有
能で人のいいハンターなんかじゃない、下種野郎だ。

「何で魔王軍の味方をするの！ みんな、迷惑しているんだからね！」

迷惑どころの騒ぎじゃないけど。ラツミスなりに本気で怒っているようで、腰に手を当てて前屈みになって怒鳴っている。

「おうおう、お利口ちゃんなご意見ありがとうよ。金だよ金。一生遊んで暮らせる金が貰えるなら普通従うだろ。誰だって自分さえ幸せになれるなら、何だってやるだろうがよ」

小憎たらしい顔をして語っているな。日頃の評判の良さは本当の姿を隠す為のカモフラージュか。

「やはり、日頃からお金儲けを主流に考えて、結構違法行為を行ってきたのですか」

そんな中、笑みを崩さず穏やかに話しかけるへび。落ち着き払った言動が逆に俺の恐怖を増幅させていく。その姿に静かな怒りを感じずにはいられない。

「ああ、そうだけ。強盗、強姦、依頼者をぶつ殺したのも何度かあったな。一時期、山賊もやっていただけ。弱者を蹂躪してやりたい放題ってのは最高に気分が良いもんだ、なあお前ら！」

「最高でさあ！」

バカみたいに大口を開けて手下どもと笑っている。

何でこういう輩は自慢げに悪行を話すのだろうか。俺の元親友も高校で非行に走り、今までやった犯罪行為をこんな感じに語り幻滅

したのを思い出す。それとは犯罪のレベルが桁外れで違うが。

俺は周囲の人々に恵まれてきたが、法も行き届いていない世界で力を得たこういった輩が蔓延るのは珍しくもないことなのだろう。

清流の湖階層で目が覚めてラツミスに拾われ、集落での人々との幸運な出会いに感謝しないとな。

「そうですね……では、この靴に見覚えはありませんか」

ラツミスから預かっていた靴を取り出したヘブイは、相手にも良く見えるように近くに近くに放り投げた。

「何だこの靴は」

「タシテさん、これって最近高値で売れたあの靴じゃねえっすか」

下っ端らしい男の言葉で思い出したようで、タシテが大きく頷いた。

「ああ、昔、駆け出しっぱいハンターから奪った靴か！ 思い出したぜ、靴の紐をバカみてえにきつく縛っていてイライラして切り落としたあれか。そういや何か言ってるやがったな……これは大切な人からもらった靴だから絶対に渡さない、とかほざきやがって、ムカついたからついやつちまったが、もつと楽しんでおけば良かったぜ」

「あれは、滑稽でしたよ。切り落とした足に抱き付いて抵抗する頭のおかしい女でしたから、変な病気でも持ってたんじゃねえっすか」

「違いねえ。しかし、わざわざ持ってきてくれるなんて良い奴らじゃねえか。後である女店主やった後に返却願ってから、別のところで売り捌く予定だったが手間が省けたぜ」

とことんまでクズだな。だが、今の返答でヘブイの求めていた答えが明らかになった。

タシテは自分が何を口にしたかも理解していない。それが死に繋がる言葉だということ。

「そうですか。やっと、私の目的が果たせそうです。何年も待ち望んでいた瞬間は、こんなにも簡単に呆気なく訪れるものなのですね……泣いて許しを請おうが、激痛に喚こうが、貴方が悔い改めようが 確実に殺します」

聖職者とは思えない言葉を口にしたヘブイの顔に浮かぶ表情は、歓喜。怒りではなく喜びに満ち溢れる、狂気すら感じさせる口元の笑み。

「ざけんじゃねえぞ！ てめえらやっちまえ！」

バリケードから飛び出す男たちを見て、仲間たちも一斉に雪崩れ込んできた。

話が急展開しているが、ここで全てを終わらそう。ヘブイがどんな結末を選ぼうとも。

本気

バリケードの裏から飛び出した敵が俺たちに殺到している。仲間も駆けつけているが、敵の攻撃を俺たちだけで一度は凌がなければいけないようだ。

ある程度はラツミスの任せて危なくなったら 結界 で防ぐつもりだったのだが、ヘブイが俺たちを庇うように前に進み出た。

「お任せください」

両手にモーニングスターを握り締め、先陣を切って飛び出してきた軽装の男へ振り下ろした。

どう見ても武器の間合い内ではない一振りを敵も見切っていたのだろう、避けもせず正面から突っ込んでくるが、棘の生えた鉄球を頭にめり込ませ地面に沈んだ。

「え、伸びるの」

武器の先端に付けられた鉄の玉から伸びた細い鎖が武器の柄に繋がっている。

柄の中に鎖が収納されていて伸び縮みが可能な仕様になっていたのか。

もう片方のモーニングスターを薙ぎ払うと同じく油断していた敵の脇腹にめり込み、壁際まで吹き飛ばしている。

「えっ、その武器、そんな仕組みをしていたっすか！」

駆け寄ってきたシユイが目を丸くして驚いている。愚者の奇行団

で共に過ごしていた彼女も知らなかったのか。

「これは私の出る幕はないかもしれませんが、ハッコン師匠」

鎖の長さは手元で自在に調整できるようで、右手のモーニングスターは鎖を長いまま振り回し、それを抜けてきた相手には左の通常時と同じ長さのモーニングスターで迎え打っている。

加護である 感覚操作 をフル活用しているようで、相手に目を向けることなく背後の敵にも対応している。今まで見たことのないキレのある動きにも驚かされたが、それ以外にもヘブイの動きを見ていると違和感を覚えてしまう。

「ヘブイって、あんなにも怪力だったか？」

ヒュールミの呟きはまさに俺が抱いていた疑問だ。

ラツミスと同じく 怪力 の加護を所有しているのは知っていたが、その力はラツミスには遠く及ばない力だった筈。

今も彼女と対等とまではいかないようだが、以前から見せていた力が本気でないことを証明するかのようには、鉄の鎧がまるでダンボール製のようにひしゃげ潰されていく。

「これも隠していたっすか……嘘を吐くのが嫌いってというのは何処いったっすか」

初めて見るヘブイの本気にシユイが怒っているような口調だが、顔を見ると子供が拗ねている様な表情だった。

自分の知らない彼の姿に不満があるのか。

そんなこちらの心中も知らずにヘブイは鉄球を操り、敵をただの潰された肉の塊へと変化させていく。

物の数分で向かってきた敵を一人で全て蹴散らした、無傷で。

奴らだつて敵に寝返つたとはいえ、その実力はこの階層で通じるレベルだった。中級と呼ぶに相応しい実力だったというのに……。

「て、てめえ、化け物かつ！ 聖職者が人を殺めていいのかよっ！」

一人だけバリケードの裏に残っていたタシテが髪を振り乱して叫んでいる。

錯乱一歩手前といった相手を前にして、ヘブイは一歩一歩確かめるように足を踏み出していく。

仲間は誰も口を挟まず止めに入ることはない。

「聖職者である前に一人の人間ですよ」

「わ、悪かった！ 悔い改める！ だ、だから命だけは助けてくれ！ 改宗だつてする、だから頼む！」

バリケードの横に出てきたタシテが土下座をして許しを請う姿は哀れ過ぎて、戦意が急激に萎えていく。

この姿を見たらヘブイも敵討ちを実行する気も失せるのではないか。そんな楽観的な考えでヘブイの後姿を見つめた。

ここからは顔が見えないのでどんな表情をしているのかはわからないのだが、土下座をしていたタシテが何も言わないヘブイを不審に思つたのか、そつと顔を上げた。

「ひっ、ひiiiiiiii」

土下座が一瞬にして崩れ、尻もちをついた状態で後退っている。

「神はこうおっしゃっています。生まれや環境は平等ではありませんが、死は安らぎであり全ての人に平等に訪れると。私としては異

を唱えたいところです。下種に訪れる死は平等であってはならないと」

そう言つてへブイが右腕を振り上げてから下げると、

「うぎゃああああっ！」

男の悲鳴が空間を満たす。

男の右足に鉄球が落ち、押し潰された足は原形を留めていない。

誰もが目を逸らさずにへブイの行いを黙って見守っている。

本音を言えば見たくなかったが復讐を止めないと誓っていたのだ、自分の決断がどういった行為へと繋がるのか最後まで見届ける義務がある。

「や、やめろおおっ！ 金なら幾らでもやる！ 女も抱き放題だ、ぎいいいい！」

最後まで言うことは叶わなかった。今度は左足が潰された。

両足を失い腕の力だけで後退るタシテを淡々とへブイが追つていく。

その必死な逃走もあつたという間に終点へと到達した。その背が黒い布が被せてあつた何かに触れたからだ。

タシテは一度後方を確認してから振り返ると、脂汗の浮かんだ顔を醜く歪ませた。

「て、てめえら、もう終わりだ！ 俺をここまでコケにしてただで済むと思つなああっ！」

黒い布を掴むと何を思ったのか、それを引き剥がす。

床に流れ落ちた黒い布の向こう側には巨大な双首の 鬼がいた。

俺の倍はある人型の体は限界近くまで膨らませた風船のように、パンパンに膨張した筋肉があり血管が体中に浮き出ている。それだけでも十二分に化け物なのだが、目を引くのはその体の上に乗る二つの頭だ。

体は薄汚れた紫色なのだが顔は片方が青でもう片方が赤。鋭く伸びた犬歯が口から飛び出し、額には三本の角がある。

そこまでは両方とも同じなのだが、顔つきが明らかに違う。片側は敵つい男の顔だ。もう片方は異様でありながらも妖艶な美しさを感じさせる女の顔。

今は両方とも目が閉じられていて、彫像のようにピクリとも動かない。

見るからに強そうな魔物だが、これが奴の切り札のようだが。

「こいつは、階層主かつ！」

「これが砂漠の柱最上階に居座るといふ鬼の階層主ですか」

ヒュールミは知っているようだ。傍観者を決め込んでいたミシユエルが武器を構えたということは、強敵と見て間違いないようだ。階層主らしいが冥府の王が用意していたのだろうな。

「もう、おしまいだてめえら！ さああ、目覚めろっ！ 双対鬼」

タシテが手を振り上げると指にはめられていた髑髏の指輪が眩い光を放つと、鬼たちの双眼がゆっくりと開いていく。

「飯力」

「飯ダ」

開口一番口にしたのは予想外の言葉だった。男女の顔は声も異なり、声質からして見た目通りの性別らしい。

会話できる知能はあるのか、甘く見ていたら痛い目に合いそうだ。

「あの人間たちを喰っていいぞ化け物！」

わめき立てて命令をするタシテをじっと四つの目が睥睨している。その目は従順な配下のもではなく、虫けらでも見るような強者の目つきだった。

「マズ軽ク腹ヲ満タス」

「下半身デイイ」

二つの頭は互いに納得したようで頷くと、足元にいるタシテに爪の伸びた巨大な手を向ける。

「お、おい、やめろ！ 俺はお前らの御主人だぞっ！」

髑髏の指輪を突きつけて叫んでいるが、双対鬼と呼ばれた魔物は意にも介さずタシテを掴む直前、体に鎖が巻き付いたかと思うと後方へと体が吹き飛んだ。

握りしめた手に獲物がいないことに気づいた双対鬼は何度も手を開閉してから、こちらに視線を向ける。

殺される直前だったタシテは俺の隣に転がっている。体に巻き付いていた鎖が解けると、勢いよく鎖が吸い込まれていく。へブイのモーニングスターの柄に。

先端の鉄球は取り外し可能だったのか。そんなどうでもいいことを思いながら、仇であるタシテを助けたへブイを見つめていた。

「獲物を魔物に譲る気はありませんよ」

人道的な理由で助けたのではないのは誰の目にも明らかだ。

「才前、横取りスルナ」

「ソウダソウダ」

「それはこちらの台詞ですよ。先に目を付けていたのは私です」

鼻息の荒い双対鬼の前に一步も引いていない。

ここまでは傍観者だったが、ここからはそういう訳にもいかないよな。

「いこう」

「うん、そうだね！」

ラツミスが飛び出すとミシユエルとシユイが並走している。更にボタンが続き、黒八咫が黒い翼を羽ばたかせて宙に浮かんだ。

「こいつは逃がさねえから安心して行つて来い！」

「皆さん、お気を付けて！」

ヒュールミとキコユが協力してタシテを縛り上げている。大量の血を失っていて、抵抗する力もないようなので任せても大丈夫か。

俺たちがヘブイの脇にずらっと並ぶと、ヘブイの張り詰めていた表情がほんの少しだけ緩んだように見えた。

「こんな魔物、さっさと片付けようね！」

「ハッコン師匠と皆さんがいれば問題ありません」

「手伝うって約束したっす！」

ちらつとこちらに視線を向けたヘブイが大きく息を吐いた。胸に詰まっていた何かを全て排出する様に。

「ご協力感謝致します……頼りにしていますよ」

「クワアアー」

「ブフウウウ」

その言葉に上空の黒八咫とボタンが自分たちもやるよ、と言わんばかりに返事をした。

「もちろん、貴方たちにも期待しています」

二匹の姿に良い意味で力が抜けたようで、ヘブイが穏やかに微笑んでいる。

「モウ食べテイイノカ。肉ダ肉ダ」

「太股ト臍物ガイイ」

そんな俺たちのやり取りを律儀に黙って見下ろしていた双対鬼が、両腕を振り上げて迫ってくる。

今度こそ、この階層での最終決戦だ。

誤算

ヒュールミとキコユは扉の前まで下がり、直ぐにでも逃げられる位置で様子を窺っている。

ラツミス、ミシュエル、ヘブイが駆け込んでいくが、双対鬼は大欠伸をしたまま構えを取ろうともしない。

武器も手にせず質素な布きれを上半身と下半身に巻き付けているだけの格好なので、己の肉体のみで戦うスタイルのようだが、それがどれだけ甘い考えなのかその身をもつて味わうがいい。

間合いに入ったミシュエルが大剣を薙ぎ炎の軌跡が、双対鬼の体へ斜めに走る。

更に伸ばした二つの鋭利な棘が生えた鉄球が、左右の頭を挟み込むように左右から激突した。

そして間髪入れずにラツミスの拳が相手の腹へと突き刺さる。

呆気ないものだ。こっちの能力を甘く見ていたのだろう、敵は防御することもなく全ての攻撃が命中した。

どの攻撃も尋常ではない破壊力を秘めている。特にミシュエルとラツミスの破壊力は散々目にしてきたので、まともに喰らえば階層主であろうが再起不能となる一撃だ。

「人間を甘く見過ぎで……なっ！ 逃げてくださ、がはあっ！」

勝利を確信した笑みを浮かべていたミシュエルの姿が視界から消えた。

何が起こったかわからない俺の耳に何かか激突して崩れる音が届く。それが何かを判断する前に俺は 結果 を発動させる！

視界の高さが一気に数十センチ下がった。床の位置がラツミスの足元から膝辺りに変わっている。こ、これは俺たちの体が 結果

ごと地面に埋まったのか!?

見上げると結界の上部には馬鹿でかい拳が叩きつけられ、青い半透明の壁に亀裂が走っていた。

《ポイントが2222減少しました》

はあああつ!?

あの、怪獣の様な八足鱔の体当たりを受けた時ですら1000ポイントの減少で済んだというのに、この双対鬼が殴りかかっただけでここまでポイントを消耗するダメージなのか。

「潰レナイゾ」

「コノ青イノ食エルノカ」

二つの鬼の頭が首を傾げて俺たちを見下ろしている。

言動は馬鹿っぽいがその実力が桁外れだ。全員の攻撃が命中したというのに平然と立ち、振り下ろされた一撃は今まで経験したどの攻撃をも上回っていた。

「えっ、えっ、何で倒れてないのっ」

ラツミスも手ごたえがあったのだろう。傷一つ負っていない双対鬼を見て啞然としている。

彼女にとって今まで自分が本気で殴って壊れなかった存在は、これが初めての経験なのかもしれない。

甘かったのはこっちだったのか……今思えば、階層主と正面から正々堂々戦うのはこれが初めてだった。

八足鱔も炎巨骨魔も搦め手で倒し、死霊王はラツミスとの共同作業で倒しはしたが、あれは冥府の王の配下だったので、本来の階層

主よりかは実力が劣っていた気がする。

闇の森林階層の老木魔に至っては、俺たちは一切手を出していない。

それでも今までの戦いぶりから考えても勝ちは確実だと見込んでいた。それが、どれだけ甘い考えだったのか思い知らされた。

「ざんねん ざんねん ざんねん」

言葉を組み立てる思考時間も惜しい。ラツミスへ敵の異常性を伝える為に残念を連呼した。それだけで、ラツミスは何となくだが理解してくれたようで後方へと跳び退る。

「これは、桁外れです！ 撤退してください！」

へブイが叫び扉まで懸命に走っている。俺たちも相手に背を向けて扉まで全力で駆けている。

背を向けたことにより俺は正面から双対鬼を見る羽目になったのだが、二つの顔が嬉しそうに邪悪な笑みを浮かべ、緩んだ口からは白い蒸気のような物が吐き出されている。

俺たちを当然見逃すつもりはないようで、その巨体からは想像もつかない健脚で直ぐ後ろに迫っていた。

これじゃ逃げ切れない。何とか足止めしないと、 灯油計量器にフォルムチエンジだ！

ノズルから灯油を足元の床にぶちまける。警戒して足を止めてくれたら、それはそれで助かるのだが、躊躇うことなく灯油まみれの床へ踏み出した。

「ウゴガッ」

「滑ル」

理想的な足の取られ方をして前のめりに倒れた。隙だらけな状態だがこちらの攻撃が一切通用しなかった。今、襲い掛かるのはあまりにも無謀だろう。

今は逃げることだけを考えよう。あつ、吹き飛ばされたミシユエルはどうなった！

あの剛腕を生身の体で喰らったのだ、タダで済むとは思えない。激突音がした方向へと視線を向けると、黒八咫に掴まれボタンの上にそつと乗せられたミシユエルの姿があった。

あの二匹で回収してしてくれたのか、ありがとう！

俺たちはそのまま合流すると扉を抜け、一気に階段を駆け下りる。逃げる際に後方へ灯油を撒くのは忘れていない。

強引に立ち上がっては転んでいる音が後方から何度も響いてくる。

「ゴロズウウウー！」

「逃ゲルナアアッ！」

逃げるなど言われて逃げない人はいない。

転びながらも追ってきている双対鬼は壁をぶち抜き、床を陥没させながら這いつくばった体勢で駆けている。まるで四足歩行の獣のようだ。

足下の滑る感覚に慣れてきたのか、転ぶ回数が減り距離が再び縮まっている。仲間はあるが見えないからいいが、俺はその大迫力の光景を目の当たりにしている。

鬼気迫る表情の巨大な鬼の顔が二つ、あらゆるものを破壊しながら接近してくる姿はホラーゲームも真つ青だよ！

二階の残っていた罨が次から次へと発動しているが、双対鬼は蚊が刺した程度にしか感じないのだろう。全く気にもしていない。

逃がっている状況はこんな感じだ。ヒュールミの身体能力では追い付かれると判断して、ラツミスがお姫様抱っこで担ぎ、キコユはヘブイの後ろに乗って落ちないように支えている。

シユイは何度も後方へ矢を放っているが、全て弾かれ足止めにもなっていない。黒八咫が音波を飛ばすと少しだけ移動速度が落ちたが、その程度の効き目しかなかった。

「ねえ、ハツコン！ 後ろでどがしゃーんとか、ごがーんって音しているけど、どうなっているのお!？」

「あたりがでたらもういっぱん」

「それって誤魔化す時に使うよねっ!」

「あー、あれだ見ない方がいいぜ」

ヒュールミは俺の体が視界を遮っているので良く見えないようだが、それでもチラチラと双対鬼の姿が見えているのだろう、顔色が優れない。

このままでは追い付かれると判断して、自動販売機の商品であるライターを取り出すと地面に撒いている灯油に引火する。

視界が一気に赤で染まり怯んでいる双対鬼も燃え上る。予め灯油をぶっかけていたので、その体はあつという間に炎で包まれた。

だけど、この程度で奴が死ぬとは思えない。ここは逃げの一手を貫くべきだ。

魔物の死体が散乱する一階を駆け抜け、後方からは煙が体中からくすぶった状態の双対鬼がまさに鬼の形相で追いかけてくる。

これだけ死体があると灯油をばら撒いても効果が薄そうだ。どうしたらいい、考える。相手を足止めする方法を何でもいいから考え

る！

日本一の大きさをほこる氷の自動販売機になるには天井が低い。それになったところで、あの攻撃を受けたらポイントがあつという間に0になり、スクラップになるだけだ。

水、氷、炎どれも俺の能力じゃ効き目は薄い。

灯りで目を眩ます方法はどうだ。昼間でも自動販売機の蛍光灯を付ける裏技を知っているが、俺は自在に点灯させられるから全く無意味だし、砂漠の柱内部は明るいのですだけ無駄だ。

ローションを大量にぶちまけるしかないのか。

「メシイッパイ」

「肉ダ肉ウウウウウ」

俺たちを追いかけていた双対鬼は急に立ち止まると、床に転がっている無数の死体を鷲掴みにすると、そのまま骨ごと貪りだした。

そうか、この双対鬼は飢えていた。怒りよりも空腹が優先されたのか。むしろ、怒りを喰うことにより誤魔化しているのかもしれない。

ストレスが溜まったら馬鹿食いする人って結構いるから、そんな感じなのかもしれないな。

何にせよ、俺たちにとつては都合のいい展開だ。今の内に屋外へ。あれが食事をしている間は大丈夫だろうと考え、商品から焼き肉のたれを選ぶと魔物の死体に振りまいておいた。

味覚が人間に近いなら味付けがあつた方が飽きない。この焼き肉のたれは本格的でちよくちよく買い求めていた商品だ。

双対鬼は床に胡坐をかいて本格的に食事をしている。もう、こつちらへの興味を失つたようだが油断は大敵。砂漠の柱から出るまでは注意を怠らないでおくぞ。

一階の扉をラツミスが押し開き、そこから仲間たちが次々と外へ跳び出す。そして、扉を閉めると緊張感と死の恐怖から解放された面々がその場に座り込んでいた。

外は真っ暗で夜になっていたことに全く気づいていなかった。砂漠の柱内部の魔道具の灯りが付いていた事にも気づかないぐらい余裕がなかったってことか。

「まだ、ここは危険だ。外壁沿いに移動するぞ。扉からいつ奴が現れるかもわかんねえからな」

みんなは残った力を振り絞って、外壁に手を触れながら移動を始める。

ミシユエルは移動する前にヘブイが治癒してくれたようで、今は安らかな寝顔を見せている。命に別状はないようで気を失っているだけらしい。

まずは一安心だ。

しかし、敵の強さが想定外過ぎた。いや、それ以前に……仲間の強さとラツミスの成長に目が眩んでいた。

本来、階層主というのは準備を万全に整えて、策を練って討伐する相手だ。今までが上手くいきすぎていたので完全に慢心していた。あれが階層主のあるべき姿。何十、何百ものハンターが挑み返り討ちにされてきた階層の主。それも、ここはダンジョン内でも深い階層。下がれば下がる程、敵は強力になる。それは階層主も含まれているのだ。

「ハツコン、どうしたらいいのかな……」

いつもなら元気に「いらっしやいませ」とでも返すところだけど、本当にどうしたらいいのだろうな。俺もわからないよ。

鬼退治

外壁に沿って移動を続け、ここなら大丈夫だろうという位置まで移動すると体を休めることになった。

ここは俺の出番なので大量のスポーツドリンクと冷たい物がいいかと思っただが、夜も更けているのでここは温かい食事の方が喜ばれそうだ。

死が迫っていた状況に精神的負担はあつたが、肉体的には余裕があるようで全員が徐々に生気を取り戻している。ミシュエルも高性能の鎧のおかげなのか、直ぐに目を覚まして食事を取るぐらいの元気はある。

「済まねえ。俺が階層主の情報を事前に伝えておくべきだった」

ヒュールミが砂の上に座り込んだ状態のまま、深々と頭を下げている。

「そんな、ヒュールミは悪くないよ」

「そうですね。私も頭に血が上り過ぎていました。皆さんを危険に晒し、申し訳ありません」

「私も役立つどころか足手まといに……どんな処罰も受け入れます、ハッコン師匠！」

みんなで謝りあっている。我が強く責任転嫁しない人ばかりだといふのは恵まれていることなのだろうが、これじゃ話が進まない。

「さくせんを」

「たてよう」

「そうですね。誰が悪かった何て追及は後でゆっくりすればいいのです。今はあの鬼をどうするか、そこが問題です」

俺の意見に追従してキコユが口にしてくれた。見た目と一致しない大人びた口調だが、年齢はやはりラツミスよりも上なのかもしれない。

「そうだな。あの双対鬼をどうするかだ。選択肢は二つだ。このまま逃げるか、倒すか」

「敵が強すぎましたからね、逃げるのもありだと思いますよ」

へブイがそう切り出すと、隣に座っていたシュイがじっとその顔を見つめている。

「へブイ、いいんつか。タシテ置いてきたっすよ」

「あの様子だと、双対鬼に食われるか既に出血で死んでいるかのどちらかでしょう。あの髑髏の指輪で全く制御できていませんでしたからね」

「あの指輪は簡単な命令しかできねえからな。階層主ともなると、攻撃の合図を送るのが精一杯なんだろうぜ。そして、制御できなくなつて襲われたつてオチだろうな。合図を送るまで、冥府の王の手によって仮死状態が眠っていたのかもしれないぞ」

目を閉じて微動だにしていなかったからな。眠るといふよりは仮死状態の方がしっくりくる。

「髑髏の指輪って今もタシテが持っているよね。それを食べたら双対鬼に指揮権が移るってこないよね？」

「はっはっは、それは流石に……あり得……ないとは言えねえな」

「もしそうだったら、この砂漠の柱の魔物を制御して操る双対鬼の誕生ですか」

ただでさえ、常軌を逸した強さを誇る双対鬼が魔物たちを自在に操ることができれば、どういう展開が待っているのか考えることすら恐ろしい。

「一階にいた魔物たちはこの階層では下級の魔物だった。この砂漠の柱は上の階ほど強力な魔物が住み着いていて、それを制御して集落に襲い掛かられたら……やべえな」

「では、ここで今の内に討伐するべきではないでしょうか。ハツコン師匠はどう思いますか」

そこで話を俺に振らないでもらえないでしょうか、ミシユエル君。全員の視線が俺に集中している。

自動販売機に何を期待していらっしやるのでしょうか。今までは策が当たって上手くいったけど、時間もない状況で通用する策がほいほい浮かぶわけがない。

「おにの」

「のうりよく」

まずは情報だ。双対鬼がどんな能力を有しているのか、それを知らなければ始まらない。

「おつ、そうだな。オレの知りうる範囲だが双対鬼について話しておくぜ。まず、頭が二つあるが右側が男で左側が女。意見が異なることもあるようだが、基本的には仲がいいそうだ。体は鋼鉄よりも硬く、力は見ての通りだ。ラツミスが正面から力比べをしたら、勝てねえだろうな」

あの防御力と怪力は経験したから理解できる。三人の攻撃をもろに喰らったというのに、ノーダメージに見えた。

「ですが、私の攻撃は兎も角、ミシユエルさんとラツミスさんの攻撃であれば鋼鉄の強度があるうと、その防御を貫ける筈では」

「そうだな。ここからは双対鬼の加護について話すぞ。まずは怪力。これは納得できるだろ」

あれを見たら誰もが納得するに決まっている。

「そして、厄介なのが硬化だ。全身の皮膚の強度を跳ね上げる加護だな。その効果はお前らの攻撃を弾く程だ。怪力と硬化。単純だがそれ故に手が付けられねえ」

鬼に棍棒と鎧を与えたようなものか。シンプルな能力だが双対鬼がそれを得ることにより、強さが倍増している。

「硬化は団長がいればなんとかあったかもしれないっすね……」

呷くシユイの横顔は寂しそうに見た。

ケリオイル団長の加護である 破眼 の力か。相手の加護を消すことが可能な能力。あれがあれば、確かに硬化を解除させることが可能だったかもしれない。

「ないものを強請つてもしょうがねえさ。俺たちの出来る範囲でやるしかねえ」

良いこと言うね、ヒュールミは。

ここにいる仲間もみんな有能だ。力を合わせれば何とかなると信じていたい。

敵の加護は把握した、他に知っておくべき情報は何かあるかな。

「あと、双対鬼について知っていることは……大食漢で大酒飲みらしいぜ」

日本の鬼の特徴と共通しているな。酒飲みの鬼と言えば酒呑童子が有名だ。

酒か……ここは定番だが酒で酔わせて襲うつてのはどうだろうか。硬化 も意識して発動しているのであれば、油断して眠っていれば攻撃が通じそうな気がする。

今なら大量に飯を食って喉が渴いているだろうから、酒を提供したらあつさりと飲みそうな気がするぞ。

酒なら幾らでも提供できる。俺は滅多に酒は飲まなかったが、飲めない訳じゃない。友人との飲み会で酒を仕入れる時は酒屋の前の自動販売機で購入していた。

友人たちには「店内の方が安いだろ」と言われたがそこは譲らなかつたな。懐かしい思い出だ。

酒好きの友人がいたおかげでアルコール類の種類も豊富だ。何が幸いするかわからないものだな、今だけは友人に感謝しておこう。

となると酒の種類なのだが、酔わせるならアルコール度数の高いものが良いよな。そういえば、アルコールとスポーツドリンクと一緒に飲むと、吸収率が高まって酔いやすくなるという話を聞いたことがあったがあれは嘘らしい。

なので純粹にアルコール度数の高い酒で勝負することにしよう。酒といえば面白いのがあったな。大阪の空港内にあった日本酒を利き酒できる自動販売機が。三十ぐらい銘柄があって、百円でおちよこ一杯分飲めるシステムだった。

物珍しさと自動販売機マニアとしての意地で全種類飲んだのは無理しすぎだったよなあ。

あの巨体だとおちよこ一杯では何の足しにもならないだろうけど、二リットルのペットボトルの中身を消して、その中に酒を満タンになるまで注ぎ込めばいけるんじゃないか。

他にも普通に自動販売機で売っていた度数高めの酒を用意して、やるだけやってみよう。一応ネタとして鬼殺しも選んでおくか。

俺が酒を並べていくと即座に理解してくれたようで、皆が手伝ってくれている。

普通のサイズの瓶や缶では、三メートルを越える巨体の双対鬼だと飲むのにも一苦労だろう。全部二リットルのペットボトルに詰め替えないとな。

結構な数を揃えると、そこで今度は新たな問題に遭遇した。

「で、これをどうやって飲ませるんだ？」

一所懸命詰め替えてくれていた全員の動きがピタリと止まった。美人が酒を提供して飲ませるとというのが定番中の定番だが、そもそも鬼の美的感覚が人間と同じなのかという疑問が発生する。

あの二つの顔の片側の女顔は気の強い美人系なので、似たような

感覚かも知れないが、男と女がいるなら酒を運ぶ側も、男女取り揃えた方が良いのだろうか。

「あれだけの魔物の肉を喰らった後なら、腹は膨れているから喰われる心配はいらないかもしれないが、殺されないうって訳じゃなねえ」

「んーと、あの双対鬼が殺さない対象っていないのかな、同じ魔物で」

「あー、この階層にいる鬼族には一切手を出さないらしいな。それがどうした」

「うーん、幻覚で鬼に化けたらいけない？」

あつ、その手があったか。

視線を向けられたヘブイは手の平に拳を打ち付けて、俺と同じような反応をしている。

「時間を掛ければ不可能ではありませんよ。鬼族なら何度か遭遇したことがあるので、自分にその映像を重ね合わせれば、誤魔化すことは可能かもしれません」

「言葉はあの双対鬼のように片言を話すか、ぐあ、ぐお、といった返事しかできないそうだ」

それなら何とか対応できるかもしれない。それでも危険極まりない役割だが、ヘブイはやる気満々のようだ。

それ以外に策が思いつかないのなら、やるしかないのか。

もしここで逃げたとして、集落に戻る前に双対鬼と魔物たちに砂漠で襲われたら生き延びる術はないだろう。危険を覚悟の上で挑ん

だ方が生存率は上がるかもしれない。

「やるだけやってみようぜ。受け渡しの方法については一つ考えがある」

ヒュールミが自信満々に言う時は根拠がある。なら、彼女を信じ
て従うことにしよう。

何に化けるかの相談を二人が始めたので、その間にペットボトル
入りの酒を大量に製造しておこう。

ウオツカがあれば簡単に酔い潰せるかもしれないが、俺は一度も
自動販売機でウオツカが売られているのを見たことがない。ここは
商品のアルコール度数チェックをして、高い順から選んでいこう。

屋外で風の吹き抜ける場所だからかもしれませんが、これ屋内の密室でや
っていたら臭いだけで酔いそうだな。俺は自販機だから問題ないか
らいいけど。

鬼と酒

「いいか、発音はぐあう。これは、はいつて意味だ。んで、ぐおい。これは、いいえだ。やってみてくれ」

「ぐあう、ぐおい」

「語尾をもう少し上げる感じだ。いいか鬼の一族つてのは、上位の存在は共通語を話すが、下位の鬼どもは鬼語しか話せない。それも簡単な受け答えのみだ、そこは気を付けてくれ」

ヒュールミ先生の鬼語発音講座が開かれている。

化ける相手は岩石鬼という、その名の通り体が岩でできた鬼らしい。背中に大きなこぶがあつて猫背のようにも見える姿で、身長は二メートルより大きいぐらいで人間より一回りか二回り大きな身体つきだそうだ。

ヘブイの幻覚は人を別人に化けさせる場合、少々の体格は誤魔化せるが小さく見せるのは難しいらしい。なので、人間より少し大きい岩石鬼がベストだと判断された。

今回もヒュールミの博識ぶりに助けられているな。幻覚で体をコーディネートしたときも外見の細かいポイントの指摘をしていたし、まさか鬼語にも通じているとは。

実はそれ以外にも魔物たちや異種族の言葉はある程度学んでいるそう、簡単な挨拶や受け答えだけなら百通りできるそう。本当に天才なのだ。と改めて感心している。

酒の準備を終え、発音も納得の出来になったようなので準備は万端だ。幻覚も見事なもので何処からどう見ても岩石鬼にしか見えな

い。

全員が砂漠の柱の入り口扉付近まで来ると、酒を注ぎ込んだ二リツトルのペットボトルを、三十本まとめて紐で括った物を岩石鬼に化けたヘブイに渡す。

この方法もヘブイの 怪力 があつての作戦だな。これだけの量になるとラツミスかヘブイでは運ぶことは不可能だ。

「ふああ……失礼しました」

キコユが大欠伸をしている場面をたまたま俺以外にも数人目撃していて、恥ずかしそうに頭を掻いている。

もうすぐ日を跨ぐ時間だ。こんな深夜まで作業していたら眠くて当たり前だよな。もう少し頑張つて。

眠気を少しでも覚まそうとしているのか、砂漠でも見ていたカレンダーをじっと見つめている。カフェイン強めの飲み物出しておくかな。

「では、行ってきます」

「危ないと判断したらすぐに戻って来いよ」

「気を付けてくださいね」

「ブフウウ」

「クワツカ」

キコユたちも心配してくれている。

これはかなり危険を伴う行為なので保険は掛けてある。相手が攻撃してきた際に対応できるよう、ヘブイが俺を背負っているのだ。

岩石鬼のこぶの位置が俺の体になっているので、幻覚で上手い具合にカバーされている。

通常時の大きさだと無理があるから子供用の小さな自動販売機にフォームチェンジして対応しているの、はみ出ることもない。

扉をそつと開けて中を覗き込むと、鬼は俺たちに背を向けてまだ食事をしていた。だが、食べる速度が落ちているので、もうそろそろ限界なのかもしれない。

お酒を抱えた状態で歩くヘブイだが、まだ双対鬼は気づいていない。岩石鬼はぐあう、ぐおいでしか意思の疎通ができないらしいので、それで相手にばれないように会話が成立することを祈ろう。

「ナンダ、何故、ココニ岩石鬼ガ」

「後ヲツイテキタノカ」

「ぐあう、ぐあう」

ヘブイは頷きながら抱えている酒の入ったペットボトルを双対鬼の近くに置く。

「コレハナンダ、水力」

「イヤ、匂イガ……酒カツ！」

「ぐあう、ぐあう」

やはり酒好きは本当のようだ。酒と知った途端目の色が変わった。

「喉ガ乾イテイタ、ヨクヤッタ」

「人間ガ隠シテイタ酒力」

「ぐあう」

今のところ問題なく会話が成立しているようだ。

双対鬼は言葉を話せるが、頭のいい個体ではないとヒュールミが言っていた。物事を深く考えず、直感で動くタイプなので騙しやすい相手らしいが。

「飲ム力」

「飲モウ」

双対鬼がペットボトルを一本抜き取ると、キャップを捻るのではなくつまんで引き千切った。豪快にも程があるだろ。

そのまま一気に飲み干すと「プハアア」と満足げに息を吐いている。

「コツチニモヨコセ」

男顔の方が全部飲み干したので女顔が怒っている。

次は女顔が一気に飲み干し、頬が緩みきっている。どうやら、気に入ってもらえたようだな。

「旨イゾ！ 飲ムゾ飲ムゾ」

「ガンガンイクゾ」

もう岩石鬼に化けたヘブイは眼中にないようで、次から次へと酒を口にかけている。

少し離れた壁際まで移動すると、その場で双対鬼の様子を窺うことにした。

十本目のペットボトル入りの酒を水でも飲むように飲み干した。赤と青の顔をしているので赤い方は酔いが顔に出ないが、青い方の顔がほんのり赤らんできている。

「アレ、岩石鬼八鬼語ジャナイノニ理解シテイナカッタカ」

「ドウデモイイデハナイカ。酒ガ旨ケレバ」

「違イナイ、ガハハハ」

いい加減な性格で助かったよ。そうか、双対鬼が話している言葉は俺たちにも理解できているということとは、この世界の共通語だ。岩石鬼は鬼語のみを理解して話せるという話だったので、共通語に対して返事するのは矛盾している。

……鬼語で話しかけられていたら、終わっていたな。

二十本目に差し掛かったが、まだまだ余裕が感じられる。さつきから笑い声が響いているので、酔いが回っているのは間違いないだろう。

「シカシ、岩石鬼八共通語ヲ……理解デキタカ」

「ドウデモイイデハナイカ。考エゴトヲシテイルト酒ガマズクナル
ン」

「ソレモソウダ、グハハハ」

「飲メ飲メ、ガハハハハハ」

女顔の方が豪快な性格をしているのか。酔った頭で違和感を口にしている男顔を女顔が笑い飛ばしている。男顔だけなら今頃失敗していたかもしれない。

「眠イゾ、ダガ酒ヲ飲ミタイ」

「アア、眠イナ。シカシ、酒ガモツタイナイ」

残り二本となっている。飲むペースが激減して二つの顔が左右に揺れ始めているので、そろそろ限界なのかもしれない。最後の二本は一番アルコール度数の高い酒だ。止めとしては最適だ。

最後の一本を手にしたまま、双対鬼は仰向けに転がった。四つの目を閉じ、高いびきを立てている。完全に酔い潰れたように見える。へブイがそつと近づいて、その体を指先で突いているが起きる気配がない。ヒュールミの説明によると酒で酔い潰れた鬼はちよつとやそつとでは起きないそうだ。

鬼に捕まった商人が酒で鬼を酔わせて、その隙に逃げ出したという話は頻繁に耳にするそうで、この世界では有名な鬼の対処法の一つらしい。

岩石鬼に化けたままのへブイが入り口に向かって手招きすると、仲間たちが足音を忍ばせて歩み寄ってきた。

完全に眠っているのを確認すると、先端が細く尖った注射器と銃を混ぜ合わせたような物を、ヒュールミが取り出して双対鬼に向ける。

「これは注射器っていう医療道具を改良した奴でな、本来は老木魔の体に直接薬を注入する為に作ったんだが、こんなところで役立つとは思わなかったぜ。ちなみに中身は酒だ」

直接血管に酒を入れるつもりか。そんなことをしたら急性アルコ

ール中毒になるのだったか。以前、海外で点滴にアルコールを混ぜて子供を殺害した事例があった気がする。

それぐらい血管にアルコールを入れるのは危険らしい。

「毒薬を入れてもいいんだが、毒に耐性があるかもしれないしねえし、途中で暴れられたら厄介だからな。泥酔してもらうぜ」

鬼の人体にも精通しているようで、皮膚が薄く針の通しやすい場所を確認すると、そこに針を差し込み一気に中身を注入した。

「やつぱ、硬化は意識して発動させるものらしいな、針がすんなり通ったぞ。これで周りで騒ごうが踊ろうが、ちよつとやそつとでは起きねえだろうよ」

全員が恐る恐る双対鬼に接近するが、気持ち良さそうに眠ったままだ。

「えと、どうしようか。寝ているところを襲うのって悪い気がするね」

「心苦しいところではありますが、殺し合いに情けは無用かと。ですよね、ハツコン師匠」

「うん」

正攻法で勝てないのだから策を用いて倒すしかない。

これも戦法だ、悪く思わないでくれ。

「うん、そうだよな。私が女顔の方するから、ミシユエルに男顔の方を任せていいかな？」

「わかりました、ラツミスさん」

仲間も異論はないようで、二人を除いて少し距離を取った。
あつ、ちよつと待った。ラツミスに頼んでみよう。

「らっすいす」

「何、ハツコン」

「おらで」

「たおして」

俺が発言するとラツミスが小首を傾げた。

「えっ、ハツコンで倒すの？」

「うん」

俺で倒してくれたら、ポイントが増えるかもしれない。最近、ポイントの溜まり具合が微妙で双対鬼の攻撃を防いだ際にこっそり持って行かれたからな。稼げる時に稼いでおきたい。

「敵を倒したらハツコンのポイント増えるって話だったろ。それを狙っているんじゃないか」

その通りだよヒュールミ。キコユを通じてポイントの仕組みは全てラツミスとヒュールミには話してある。それを覚えてくれていたようだ。

「ああ、あの話！ うん、わかったよ。ええと、ハツコンで倒したらしいのかな」

「うん うん」

「かおに」

「ごしやあで」

俺を武器にするという行為を良しとしてない、しかも面のラツミスに頼むのは気が引けるのだが、これもポイントの為だ我慢して欲しい。

自動販売機を武器とするのはマニアとしても心苦しいが、これも強くなるための手段だ。

それを理解しているのでラツミスは渋々ながらも俺を抱えると、頭上に振り上げた。

「ラツミスさん、タイミングを合わせましょう。痛みで起きる可能性がありますので」

「うん、いいよ。いつせーのーで！」

俺の足元で何かが潰れる音がする。それが双対鬼との戦いに終止符を打つ一撃となった。

熱気と寒気

寝込みを襲って勝利という悪役側のような戦法で勝利を収めたわけだが、勝てば官軍負ければ賊軍という言葉もあるように、勝たなければ意味がない。

これはゲームじゃないのだから、何十分も粘りながら相手のHPを削る戦法なんて使えない。姑息であろうが手段を選んでいたら死ぬだけだ。

と、心の中で言い訳を終えたところで、改めて双対鬼の死体を見た。

二つの頭の一つは潰されて原形を留めておらず、もう一つは切り飛ばされて生首が転がっている。第三の首が生えて復活という展開もなく完全に死んでいる。

その証拠に俺のポイントが激増している。下層の階層主だけあってミシユエルとラツミスと俺で三分割された筈のポイントだということに一気に100万ポイント以上増えた。今後はポイント不足で悩まされることはないだろう。

ちなみに、今までなら 念話 を取るか悩む場面だが取る気はもうない。これは貯金して300万ポイントを必要とするランク3へのバージョンアップを目指すつもりだ。

「ええと、双対鬼を吸収してもいいですか？」

キコユが焔の欠片を手にした状態で吸い込みたくてうずうずしている。これだけの強敵だったのだから吸い込めば、焔の欠片にかなり力を与えることになるのではないだろうか。

「ちょっと待ってくれ、貴重な部位があるからな。そこを回収したら構わねえよ。ラツミス手伝ってくれ」

「はい。ハツコンはみんなに飲み物渡しておいてあげてね」

作業が一段落するまで休憩することになり、俺はその場に降ろされた。

全員の好みは把握しているので飲み物を選び一人一人に渡している。

へブイはちらちらと何度も上階へ繋がる階段に視線を向けている。早く行きたくて仕方がないといった感じだが、今までのことがあったので単独で暴走するのは止めようと自重しているようだ。

「っと、終わったぜ。キコユ、吸っていいぞ」

「ありがとうございます！」

喜び勇んで飛び出したキコユが土の球を死体に押し付けると、あの巨体が一瞬で消え失せた。あの土の球の仕組みが不可解すぎる。

「へブイ、待たせて悪かったな」

「いえ、ほんの三分程度なら問題ありませんよ」

そういつて笑みを返すぐらいの余裕はあるようだ。

落ち着かない様子のへブイが今何を考えているのかは理解している。上の階には置いてきたタシテが気がかりなのだろう。

あの時、両足を潰され出血をしていたので、普通なら死んでいるだろうが回復薬や加護や魔法によって止血の手段があってもおかしくない。

「敵は掃討したと思うけどよ、油断すんじゃないぞ」

ミシユエルを先頭に階段をゆっくりと上がっていく。

二階はかなり酷い状態になっていた。逃げるのに必死でよく見ていなかったのだが、双対鬼が追いかけてくる際にぶつかった壁には大穴が開き、地面も数か所陥没している。

「扉まで行かなくてもいけそうだな」

ヒュールミが壁に手を当てて、そう判断した。

階段付近の内壁の大穴は人が余裕で抜けられる大きさで、そこから中へと侵入する。

「うわっ、寒い」

「何だ、さっきより気温が下がってるぞ。真冬みたいじゃねえか」

「めっちゃ寒いつす！　ここ本当に砂漠のご真ん中っすか」

「どういうことでしょうか、ハツコン師匠」

「おかしいですね。夜間の寒気が流れ込んだとしても外気より寒い何てことは、あり得ないと思うのですが」

中に入った途端、仲間の吐く息が白くなり、気温が一気に下がったのが見て取れた。

本当にどういうことだ。あまりの気温差にみんなが寒がっている中で平然としているのは俺とキコユと二匹ぐいらいだ。

「えっ、この寒さ……この感覚」

そのキコユは落ち着きがなくなり辺りを見回している。どうしたというのだろうか。

中には滾る爆炎団の死体が転がり、何体かは双対鬼に踏まれ圧縮されている。タシテは何処に行ったのだろうと三階への階段近くの壁際に目をやるとそこには 氷に包まれたタシテがいた。

「はああっ、氷漬けだっ!?」

砂漠に最も相応しくない状況にヒュールミが目を向いて驚いている。

仲間たちもその光景が理解できず硬直しているようだ。ただ一人、キコユを除いて。

「これは、まさかっ！ 皆さん、ハツコンさんの周りに集まってください!」

珍しく慌て取り乱した声を荒げるキコユの言葉に、意味もわからないながらも全員が従う。ここで俺に求められている役割は 結界か。

状況が把握できていないが取りあえず 結界 発動だ!

俺が周囲に 結界 を張ったのとほぼ同時に、辺り一面が白で埋め尽くされた。

「えっ、雪? 灼熱の階層で?」

「おいおい、灼熱の砂階層に冷気を操る魔物があるなんて初耳だぞ。それもこの規模、尋常じゃねえぞ」

この吹雪は威力も相当なものらしく、結界の維持で減っていくポイントの減少表示が滝のように流れていく。さつき、ポイントを補充できて助かったな。

暫く吹き付けていた吹雪が弱まると、そこは一面の銀世界だった。この光景だけを見せたら、ここが灼熱の砂階層だと誰も信じてくれないだろう。

外の寒さが不明なので、結界を発動させたまま辺りを警戒していると吹雪が消え、氷漬けのタシテの背後から一人の女性が姿を現した。

それは息を呑む程、美しい女性だった。切れ長で涼やかな目に鼻筋の通った顔。顔色は真っ白で温かみが一切感じられない。腰まで伸びている髪も同様に白く、それが女性の幻想的な美しさを後押ししていた。

服装は白のコートでロシアの人たちが着ているようなデザインだ。

そんな女性を見て誰もが連想したのだろう、仲間の視線が全てキコユに向いていた。

身長や顔の造りの差はあるが、あまりに似ているのだ。服装、髪、肌が。姉妹と言われても納得できるくらい。

そんな俺たちの視線に反応することなく、キコユはボタンと黒八咫と共に、結界の外に一步踏み出した。

「貴女は雪精人ですね」

これは質問というより確認なのだろう。その声にも態度にも揺るぎがなく確信を持った問いかけだった。

女性は一度頷いただけで返事はない。

「どうして、こんなことをするのですか。雪精人は無暗に人を殺したりしない一族ではないですか。私たちを敵とみなしているのなら

間違いです。そこにいる男に会いに来ただけです」

雪精人らしき女性が隣のタシテを一瞥すると、タシテごと氷が砕け散ると凍った死体ごと崩れ落ちた。

「なっ、何を！」

「何故、雪童と一緒にいるの」

初めて発せられた声は小さく辛うじて耳に届く音量だったが、とても澄んではいたが抑揚がない冷たい話し方。

「この人たちは仲間です」

「人間はクズ。貴女も知っているでしょ」

相手の言いたいことはわかる。キコユから詳しく聞いた話によると、雪精人とは成人の日を迎えたその日に強力な魔力を得て一気に大人へと急成長する種族だ。

大人の雪童は雪精人となり膨大な魔力を有し、冷気を自在に操ることができる。目の前の女性のように。

それだけではなく、大人になる直前に首を刎ねることにより、首から上は国を亡ぼす程の呪いを込めた存在になり、首から下はどんな呪いをも解呪する雪の彫像となるそうだ。

その価値は言うまでもなく、昔から多くのハンターやごろつきだけではなく、力を求めた国家が敵に回ることもあったそうだ。その結果、雪精人は絶滅の危機に瀕していた。

「確かに私も人間に追われ生きてきました。ですが、信頼できる人もいます！ 人だけじゃなく頼れる畑さ……ええと、そういう方は

いっぱいいるんです！」

ここで転生した畑を例えに出しても冗談と思われるだけだよな。キコユの叫びに少しでも耳を傾けて理解を示してくれたらいいのだが。

期待を込めて相手に目を向けると眉尻が吊り上がり、人形のように感情の感じられなかった顔が怒りに染まっていく。

「可哀想……騙されているのね、人間どもに」

「違います！ 誤解です！ 私たちは敵ではありません！」

再び強く吹き荒れ始めた吹雪がピタリと止んだ。キコユの言葉が届いたのだろうか。

「敵ではない？」

「はい」

「じゃあ、冥府の王の配下なの？」

「えっ？」

そう来たか。そもそも、雪精人が何でこの場に居るのか。その理由として考えられることは幾つかある。一つはタシテに連れてこられた被害者。盗賊まがいのことやっていたのだから、誘拐監禁なんてお手のものだろう。

もう一つはタシテの仲間。もしくは冥府の王の配下。つまり敵側だということだ。

今思えばヒントはあった。タシテたちの一団がああ灼熱の砂漠を

どつやって越えることができたのか。この女性がいれば冷気で温度調節も可能となる。

「違うのね……よくみたら、その鉄の箱。冥府の王が仰っていたハッコンとかいう魔道具にそっくり」

知らぬ間にあちら側では有名人になっていたのか。今更フォルムチェンジしても誤魔化せないだろうな。

「そう、敵なのね」

「貴女は冥府の王の配下なのですか」

「ええ、私は薬將軍のスルリム」

二十指將軍クラスか。加えて絶滅の危機にあるキコユと同種族。迫害に遭って魔王軍の傘下となった感じか。戦い辛い、厄介な相手が現れたな。

雪精人

「魔王軍の將軍なのですか」

「ええ。人間に捕まり殺される直前のところで、左腕將軍に助けを
いただいでから、ずっとお傍にいるわ」

危機に陥った際にタイミングよく助けられたのか。命の恩人とな
れば相手に従うのも理解はできる。

ただ、穿ったものの見かたをみると、雪精人の力を得る為にタイ
ミングを見計らって救い出した……ということも考えられる。冥府
の王は謀略を張り巡らすのが好きなタイプだからな、考え過ぎぐら
いがちょうどいい。

まあ、それも偶然だったのか必然だったのか、冥府の王に直接問
いたださなければわからないのだが。

そしてそれが謀略であれ偶然であれ、彼女は冥府の王に助けられ
て、人間に追われていたという事実は覆らない。

そんな彼女を今日会ったばかりの俺たちの言葉で説得することは
不可能だろう。

「あの御方の言葉は私の全て。貴女たちは邪魔」

「やめてくださいー！」

キコユの悲痛な叫びも相手の耳には届かなかったようで、スルリ
イムが手を突き出すとそこから大粒の雪と共に強風が吹き荒れた。

黒八咫がキコユの肩を掴み、ボタンと共に俺の 結界 へと跳び
込んでくる。

外は再び白銀の世界となった。

《ポイントが10減少　ポイントが10減少　ポイントが10減少
……》

今度は吹雪だけではなく、さつきから　結界　に大粒の氷が何発も撃ち込まれている。氷の碎ける音が耳障りだが、ポイントが潤沢な今ならこのまま耐えられる。

「やべえなこれ。この吹雪だと外に出た瞬間に、カツチカチになるぞ」

ヒュールミの言葉が本当かどうか実験してみるか。取り出し口にペットボトルのお茶を落として　念動力　で操り半分だけ外に出してみた。

そして直ぐに引き戻したのだが……たった数秒なのに完全に凍っている。　結界　を消したら全員が凍死するのは間違いない。

「キコユ、雪精人つてのは誰もがこんなにも強烈な吹雪を発生させられるのか」

「個人差はありますが、誕生日を迎え成人になると魔力量が跳ね上がります。ここまでの威力は中々お目に掛かれませんが、かなり実力のある方だと思われます」

「どれぐらい維持できる。このまま永遠に吹雪を発生し続けられる訳じゃねえだろ？」

ヒュールミの問いに対して、キコユは眉根を寄せて「うーん」と唸っている。嫌な予感しかしない。

「これが屋外であれば持続は難しいと思うのですが、屋内で既に冷え切っていますからね。寒い場所だと雪精人は力を増しますので…このまま、二、三日ぐらいならこの状態を維持できるかもしれないません」

ポイントがあるとはいえ数日 限界 をこのまま張り続けられるか、ざっと計算してみると…あ、うん、無理じゃないかこれ。

「ハツコン、どれぐらい耐えられそう？」

ラッミスが心配そうにこっちを見ている。不安が表に出ていたようだ、無意識の内に照明が点滅していた。

ちよつと真面目に計算してみるか。

耐えられる時間がポイントが100万を越えているけど、この減少速度から考えて…普通でも毎秒1ポイント消費するのに、今はダメージの関係で消費ポイントが増えている。

毎秒10ポイントは減っているので一時間で36000ポイント、24時間で86万4千ポイント。一日は耐えられることになるのか。

「いちにち」

「だったら」

「一日耐えられるなら余裕だね！」

だといいけど、今のところ吹雪が止む気配はない。

「流石に丸一日もやらねえと思うが」

「でも、しないという保証もありませんよね。ハツコン師匠にだけ

負担を掛ける訳には」

そんな心配しなくていいんだよ、ミシユエル。みんなを守るのは俺の担当だから。

「しかし、この状況で外に出ると一瞬にして凍り付きますね」

「へブイが試しに出てみるといいます」

「お断りします」

へブイとシユイはこんな状況だというのにじゃれあっている。以前と同じとまではいかないが、関係は修復されつつあるようで安心だな。

「もう一度、私が説得してみます」

「い かん」

キコユが 結界 の外に出ようとしたので即座に止めた。ボタンと黒八咫も俺と同じ意見なのか、キコユを押し留めてくれている。

「どうしてですか。私なら外に出ても大丈夫です」

あの寒さでも雪精人なら平気なのかもしれないが氷の礫は別だろう。

それに敵の幹部であるスルリムが説得に応じるとは思えない。いうことを聞かせたいなら力でねじ伏せるしかないだろう。非暴力で世の中が上手く運ぶなんて安易な考えに走るのは死にたがりと

同等だ。

同種族として争わずに話し合いで解決したいという気持ちはわか
らなくもないが、みすみす死なせるわけにはいかない。

相手の境遇には同情する余地はある。だからといって死んでやる
気も義理もない。

「こっち」

そう言うとキコユが体に手を当てた。

『同じ雪精人である私なら、吹雪でも問題ありません』

でも、キコユはまだ大人じゃない。大人の雪精人と張り合える実
力はないよね。

『そうですが、それも問題ありません』

何で自信満々に返せるんだ。強がっている……という感じでもな
い。本当に何とかなると信じているのか。この状況で、その根拠は？

『心配してくれてありがとうございます。でも、私は彼女を止めた
のです。あの人は畑さんに会わなかった私です。私は畑さんに会
えたから、こうしていられます。もし、冥府の王と先に出会ってい
たらきつと同じように……』

キコユもその体を狙われ追われていたところで、畑に転生した人
と出会ったのだったな。

そして、身体も心も救われて、こうしてここにいる。自分の境遇
と照らし合わせて、スルリムに同情しているのか。

『同情していないと言えば嘘になりますが、それだけではありません。信じてください』

真剣な眼差しは自暴自棄になった者の目ではない。その瞳には強い意志が宿っていた。

何か策があるのか。たととしても、行かせていいのか？

『ハツコンさん、今、何時ですか？』

唐突にそんなことを言われ、体内時計に目を向けた。

ええと、時間は……あと一分も待たずに0時になるのか。夜中だとは自覚していたが日を跨ぐ時間帯になるまで戦っていたのか。

そう心の声で伝えて、キコユに意識を戻すと 結界 から飛び出していくキコユの背が見えた。

「行ってきます！」

相手を捕まえる為の腕がない俺は、白の世界へ跳び込んでいく彼女を止める術がなかった。

やられた！ 意識を逸らしてその隙に……くそっ、解除するわけにはいかないし、足もない俺は追いかけることすらできない。

ただ、キコユが殺されるのを黙って待つしかないというのか。

「クワツ、クワクワ」

「ブフウウウウ」

あれ、黒八咫とボタンがどっしりと構えて、焦りが微塵もないように見える。さっきは俺と一緒に止めていたというのに、何か考えがあるのだろうか。

キコユの消えて行った方を黙って見つめる後ろ姿が落ち着き払っている。

どういうことだ。この短時間で心変わりするようなことがあったとでもいうのだろうか。

一番付き合いの長い二匹が信じているのであれば、俺がとやかく言うべきではないのだろう。でも、それでも……やはり、心配なのは心配だ。

他の仲間はキコユが飛び出したことに気づいていないようだ。ただ、黙って吹雪を見つめている。

ああ、もどかしい！ キコユのことを仲間伝えても事態は好転しないだろうし、心配させることになるだけだ。

「あれっ、吹雪が妙な感じになってねえか」

ぼそつと呟くヒュールミの言葉に反応して目の前の吹雪を注意深く観察してみた。

風の向きが変わった？

さつきまで 結界 にぶつかっていた氷の礫も消えている。今も吹雪いてはいるのだが、俺たちに向けられてはいない。ということは、キコユに狙いを変更したということか。

「んー、何か勢い弱まったね」

結界 に貼り付いていた雪を弾き飛ばすと、外の光景が見えるぐらいには視界が確保されている。

少し離れた場所であらぬ方向を睨み手から吹雪を発生させているスルリム。そして、少し離れた場所で同様に手を突き出して、同威力の吹雪で対抗している 誰？

白く伸びた髪にすらつと伸びた手足が白のコートから伸びている。着込んでいる白のコートはキコユと着ていたコートと同じデザイン

のようだが、その女性の体には少し窮屈そうに見える。

その女性は思わず声が漏れる程に美しい。細くならかな曲線を描いた肩。その下には黒い水晶を埋め込んだかのような輝きを放つ瞳。歳は二十歳前ぐらいだろうか。

初めて見る女性だというのに何処か懐かしいような、前から知っているかのような親しみが感じられる。

「あの人誰なんだろう？ ええと、キコユちゃんたちと同じ種族の人だよな」

「たぶんそうだが、何で争ってんだ」

「助けに来てくれたっすかね」

「それは都合が良すぎる解釈では。それにあの女性の履いている靴……キコユさんと全く同じ靴ですよ」

「ヘバイがそう断言するということは、見間違いということは無いだろう。」

となると、考えられることは……。

「ハツコン師匠。以前とは比べ物にならないぐらい気が膨れ上がっています。キコユさんと同質の気を感じます。どっぴつことではないか」

ということはつまり、あの女性は　キコユってことになるよな。そうか、大きくなったね短時間で……えええええええええええええええええええええつ!?

大人の力

え、はっ、ええと、つまり、どういうことだ。

あの涼やかな美人にはキコユの面影がある。歳の離れた姉と言われた納得してしまうぐらい共通点もあるが、しかし、ほんの数分で大人になったとでも。

「あれは、キコユなのか。聞いたことはあったが、マジだったとはな」

へブイとミシユエルの言ったことを聞き逃していなかったヒュールミが、成長したキコユを見つめ感嘆の声を漏らしている。

彼女の急成長の理由を知っているのか、ヒュールミ。

「えっ、あの綺麗な人ってキコユちゃんなの!？」

「みたいだぜ、ラツミス。雪精人ってのは自分の誕生日を迎えたその日、幼い身体が一気に急成長して大人の体へと変貌するそうだ」

「じゃあ、今日がキコユちゃんの誕生日だったんだ!」

そうか、そういうことか。数日前からキコユが頻繁に見ていたカレンダーに、赤丸で囲んでいた日にちが今日だ。

そして、今の時間は0時を越えている。日付が変わり、彼女は雪精人として成人となり体が急成長した。

「ここまで変貌するものなのですね。大人になると魔力が増大するとは聞いていましたが、以前とは比べ物になりませんよ」

「魔王軍の将軍と張り合っているなんて、凄過ぎっす！」

完全に傍観者となっている患者の奇行団の二人が見入っているな。

「拮抗……いえ、キコユさんの方が押していますよ」

ミシユエルの判断は正しかった。ぶつかり合う冷気は中央付近でせめぎ合っていたのだが、今は徐々にスルリムへと冷気が迫っている。

キコユらしい女性は冷静なのだが、対するスルリムの表情からは余裕が失われている。唇を噛みしめ腰を落として踏ん張っているが、相手の威力に圧されて体が後退していく。

「退いてもらえませんか、スルリムさん。同胞を手にかけてくはありません」

「だ、黙れ。私はあの御方の為に、貴方たちを排除しなければなら
ないっ」

完全に立場が逆転している。冷気を放出したまま、キコユが踏み出すとスルリムが一步下がる。そして、そのまま壁際まで追い込まれていく。

「最後の提案です。退いてくれませんか。私にはやるべきことがあります」

「くっ、ここで死ぬわけにはいかない。私には使命がある……わか
った退こう」

キコユが手を止めるとスルリムも冷気を止め、忌々しげに俺たちを一瞥すると足下から雪が噴き上がりその姿を包み込んだ。

そして、雪が消えるとその場には誰もいなかった。

逃がすべき相手ではないのかもしれないが、何もできなかった俺たちが口を挟む権利はないよな。

「あつ、まだ少し寒いですけど大丈夫ですよ」

キコユ？ が顔を向けてそう言っているのだから 結界 を解除した。ラツミスが身震いしているが、凍え死ぬような寒さではないようだ。

「えっと、キコユちゃんだよな？」

「はい、そうですよ」

その一言で、誰もが抱いていた疑問が氷解した。

ボタンと黒八咫が嬉しそうに駆け寄ると、その背を優しく撫でている。

その仕草と雰囲気はキコユだな。今までなら大人びた子供にしか見えない動作が、落ち着きのある美女となった今は様になっているな。

「はああ、噂には聞いていたが……どうせなら、大人の姿に変わる瞬間を目撃したかったぜ」

それは俺も思った。どんな感じで急成長したのだろうか。勝手なイメージだと日曜の朝にやっている魔法少女系の変身シーンを思い浮かべてしまうが。

「見る程の物じゃないですよ。妙な感覚で思わず変な声が漏れてしまいましたか」

嬌声を上げながら体が大人へと変わっていく少女。是非、録画しておきたかった。深い意味は全くないけど。

「ハツコン、また変なこと考えてない？」

ラツミスがジト目でこつちを睨んでいる。また照明が点滅していたのか。

「あたりがでたらもういっぼん」

「また、そうやって惚ける」

はっはっは、何のことかわかりませんな。

「それにしても、キコユさんのおかげで助かりました」

「やめてください、ミシユエルさん。同胞を止めるのは当然のことですし」

頭を下げて礼を言うミシユエルに対して、困ったように両手を振っている。

彼女がいてくれたおかげで助かったのは間違いない。ラスボスを倒したと思ったら、もう一体いたなんてのはゲームでは良くあることだが、リアルでやられると本当にきつい。

都合の悪い展開と都合のいい展開が繋がった今回は不幸中の幸いと言つべきなのか。

「まあ、これで一応、この階層も解決ってことでいいのか……へブイには悪いが」

「そうっすね」

最後は声を潜めて言うヒュールミとシユイは、壁際に歩いて行ったへブイに気を遣ったのだろう。

砕け散ったタシテの死体を見下ろし、何を思っているのか。

仇を見つけたというのに途中で邪魔が入り、納得のいかない結末を迎えることとなってしまった。

俺たちは変わってしまったキコユにあれこれと質問しながらも、視線はへブイの背を何度も捉えている。

暫く、雑談をしているとへブイがこちらに歩み寄ってきた。顔にはいつもの薄い笑みが貼り付き、平常時と変わらぬように見えているが。

「すみません、お待たせしてしまって」

「もう、いいっすか？」

「ええ、タシテは十二分に責め苦を味わいましたからね。足を潰され、鬼に喰われかけ、生きながらにして氷漬けにされました。苦しむ姿を目の当たりにしたところで、きつとこの胸の靄は一生晴れることはないのでしょうか……ですが、これでいいのです。そう、これで」

晴れやかとした表情を見せるへブイ。なんだ、こんな爽やかな表情もできるのか。強がりではなく本気で吹っ切れた、男でも見惚れるようないい笑顔だ。

「もう、大丈夫そうっすね」

「おや、私のことを心配してくださっていたのですか？」

「誰が靴変態の心配なんかするっすか！　ってああ、もう靴はどうでもいいっすよね」

「そうだな。今までは仇を見つける為に靴フェチの振りをしてきただけで、目的を達したのだから、もう変態の振りをする必要はなくなっている。」

「これからは普通の聖職者として生きることになるのか。靴フェチさえなくなれば理想的な聖職者だよな。他者に危害も加えないし、女性に対しても欲情することなく真摯な対応ができる。」

腕っぷしも強く女性の人気を集めそうだ。

「へー、これからどうすんだ」

「そうですね、皆様が協力してくださったから仇を見つけることができました。恩は返さなくてはなりません。このダンジョンの異変を解決するまで傍にいさせてもらっても構いませんか？」

「いらっしゃいませ」

「もちろん、大歓迎だ。以前のへーだと趣味が若干不安だったが、あの姿が偽りだとわかった今、不安材料は全くない。」

「隠していた実力を発揮した戦いを見る限り、その実力はミシユエルと同等かそれ以上かもしれないからな。」

「これからも、よろしくね！」

「頼りにしているぜ、へブイ！」

今までは若干距離を置いて対応していた二人だったが、今回の一件で信頼に値する男だと認識を改めたのだろう。すっと手を差し出して固い握手を交わした。

「あの戦いはお見事でした、今度お手合わせ願えますか」

「お手柔らかにお願いしますよ」

ミシユエルもへブイのことを認めたようだ。あと、成長したな……ちゃんと作り笑いじゃなく自然な笑みで握手を求められるとは。コミユ障も仲間相手だと、かなりマシになってきている。

「黒八咫とボタン共々、これからもよろしくお願いします」

「はい、こちらこそ」

そう言ってキコユとも握手をして、寄ってきたボタンと黒八咫の頭を撫でている。

ん？ キコユの表情が今、一瞬だけ揺れたような。少しだけ目を見開き、動揺したように見えたが気のせいだろうか。

「しかし、残念っすね。まだ落ち込んでいるようなら、この履いている靴上げても良かったっすけど落ち込んでもないし、もう靴に興味ないっすもんね」

「あつ、シユイさん……」

笑顔でそんなことを口にするシユイに対してキコユが何か言いた

げだ。

へブイは表情を変えずに、すつと顔をシユイの眼前へと近づけた。

「今の言葉に偽りはありませんか？」

「へっ、何で食いついてくるっすか。もう靴なんてどうでもいいっすよね？」

「何を仰っているのですか。仇を探す為に靴を探していたのは本当ですが、靴を調べていくうちにその魅力に気づいたのです。使い潰された靴の色あせ具合。長年履き続けたことにより持ち主の臭いが染みつき、靴本来の臭いと混然一体となり新たな境地へ誘う香り…まだまだ若輩者ではありますが、靴愛好家であることには変わりありません」

えっ、ということは今までの言動は芝居ではなかった？

執念が趣味へ変貌して今の彼を作り出しただと。

だから、キコユが妙な顔していたのか。握手をした際にへブイの靴フェチは本物だと理解してしまったのだろう。

「マジだったんすか！？ やっぱ、今のは無しっす！」

「今更遅いです。さあ、今すぐその靴を脱いでください。貴女自身には何の興味もありませんが、その靴は以前から目を付けていたのですよ。常時履きっぱなしで、格好に無頓着な貴女が履き続けた靴は、いい具合に熟成されていることでしょう…：さああ、脱ぐのです！」

「死ねっ！ 変態！」

執拗に迫るヘブイに足下の雪を丸めてシユイが投げつけている。それを紙一重で躲しながら、両腕を掲げて迫るヘブイ。日本なら警察のお世話になりそうな光景だが、何だかんだ言いながら二人とも楽しそうなのでそっとしておこう。

これにて灼熱の砂階層の異変は本当に、今度こそ解決だな。予想外過ぎる怒涛の展開だったが、ヘブイが吹っ切れて隠していた実力が明らかとなり、キコユが大人になり戦力がかなり強化された。

悪い結末じゃない。今後の展望が開けてきたな。

「うちも混ぜて欲しいっす！」

「そんな巨大な雪玉投げつけるんじゃないやねえええっ！」

「雪なら幾らでも出しますよ」

二人の雪合戦にラツミスとヒュールミも加わったのか。

あっ、ミシユエルがその光景をじっと見つめ羨ましそうにしているぞ。

「ハツコン師匠、私たちも参加しませんか」

やっぱり、一緒にやりたかったのか。そうだね、俺も参加させてもらつとしようかな。

自動販売機だと思って舐めてもらっては困る。手も足もなくともやりようは幾らでもあるからね。

「いらっしやませ」

大人の力（後書き）

第七章終わりました！。

さあ、頑張って続き書きますよ！

ライバル再び

灼熱の砂階層での騒動も一件落着となり、またも砂漠を横断することになったのだが、帰り道は行きと比べて快適な行程だった。

キコユが大人となり冷気を自在に操れるようになったので、照りつける極悪な陽射しも全く苦にならず、全員が暑さにやられることなく集落へと辿り着いた。

そして、灼熱の会長に報告をすると暑苦しい笑みと対応で称賛された。直ぐにでも清流の湖階層に戻るつもりだったのだが、集落の人々に引き留められて数日だけ残ることとなり、今に至る。

「熊会長には連絡してくれるって言ってたよ」

「じゃあ、急いで帰る必要もねえか」

俺の傍で冷たい炭酸飲料を口に行っている幼馴染コンビのラツミスとヒュールミの会話に耳を傾けている。

熊会長も何かと気に掛けていたから、今回の一件の報告を耳にしたら安堵してくれるだろう。

灼熱の砂階層は今日も馬鹿げた暑さらしいが、これでも俺たちが異変を解決した後はかなり過ごしやすい気候になっているそうだ。以前と比べてだが。

今日からアイスの販売を本格的に始めたのだが、予想通り飛ぶように売れている。真夏の暑さだとアイスよりもかき氷の方が売れるという話を聞いたことがあるが、ひとまずはアイスで様子を見ることにした。

それに、かき氷よりもアイスの方が種類豊富なので、人の好みを

調べるのに丁度いい。暫くアイスの販売を続けさせてもらうことにする。

魔物を倒して稼ぐ方がポイントを集めるには効率的なのだが、こっちはお客様のお喜びの顔を見ながら商売する方が好きなので……といふより自動販売機としてあるべき姿はこっちはだ。

最近、自動販売機らしからぬ活躍をしているような気がするが、きつと気のせいじゃない。

「やっぱり、アイスって美味しいっすね」

今日は三回目の購入になるけど、お腹大丈夫かいシュイ。

「ぼんぼんい」

「たくねい」

「全種類を制覇するまで快進撃は終わらないっすよ」

このアイスの自動販売機は十七種類のアイスがあるので、この調子なら二日で全種類クリアされそう。

だが、アイスの自動販売機はこれだけじゃない。アイスクリームを販売している自動販売機は種類が幾つかあり、俺が実際に利用した機種だけでも四種類ある。

制覇した際にはこちらもよろしくお願いします。

「暑い日にはやっぱりアイスっすねえ。でも、あの凍った果実も美味しかったっす」

アイスを頬張りながら口にした言葉を聞き逃すことはなかった。

今、何て言った。凍った果実だと……その瞬間、俺の脳天に電気が走った。まあ、自動販売機なので当たり前なのだが。

凍った果実を売る店舗なんて情報は今まで聞いたこともなかったが、果実と凍らせるというキーワードに思い当たる節がある。

「こおらせた」

「そつつすよ、ハツコン。ほら、あそこでキコユが」

俺の視界の隅に人だけりができてるのは知っていた。あそこはキコユが新鮮な野菜を売っているのは定番の光景だ。

灼熱の砂階層は自給自足で賄えているとはいえ、新鮮で旨味の凝縮されている野菜は大人気だった。こちらが飲み物限定で売っている間は気にもしていなかったのだが。

流石、商売上の我がライバルといったところか。ここでも俺の前に立ち塞がってくることになるうとは。

「あー、キコユちゃん……じゃない、キコユは大きくなってから凍らせるのが得意になったもんね」

ラツミスは思わずキコユを「ちゃん」付けて呼んだのだが、あわてて訂正している。

前までの癖でキコユに対してみんなが「ちゃん」を付けてしまうのだが、大人の姿になった彼女に対してだと違和感しかないので、全員が何とか堪えているのだが一部を除き上手くいってない。

「あー、あの新鮮な果実を凍らせて売るのが。上手い商売じゃねえか」

「ベダエを凍らせたのめっちゃ美味しかったすよ!」

ベダエって葡萄みたいなあれか。葡萄を凍らせるのは俺も良くや

っていた。冷凍庫で凍らせるとシャーベットのようで好きだったな。

「うちも食べてみようかな」

くっ、相方まで誘惑しようというのかっ！

敵を知る為にはまずは情報収集だ。あの群がっているお客たちの外見から客層を理解することから始めよう。

男女比率は男性の方が多い。年齢は十代後半から三十代がメインだな。職業は鎧を着込んだハンターもいれば、一般市民の格好をした人もいる。特定の職業に受けているという感じでもない。

ただ、気になる点が一つある。お客の男性の顔が全員緩みきっている。

涼やかな美人へと急成長したキコユの魅力に負けて虜になっている顔だ、あれは。

実際、彼女は見事なまでの美女へと変貌している。あの姿でミスダンジョンコンテストに参加していたら、結果は変わっていた可能性が高い。

やばいな。味もそうだが集客力の差が出てしまっている。美女に加えて黒八咫とボタンのマスコットキャラ。子供は動物が好きだと相場が決まっているので、子供たちまでも奪われてしまいそうだ。

このまま、一方的にやられるわけにはいかない。

俺は意思のある魔道具としての物珍しさで当初は人も集まっていたが、今は存在を認知されて普通に対応されつつある。つまり、慣れられてしまった。

対して、キコユの場合は少し前までは可愛らしい少女、今は冷気を纏わせた美女。そのギャップと単純に見た目の美しさで男たちの心を鷲掴みにしている。

そうになると、俺もビジュアル面の強化をするべきなのか。久しぶりに 電光掲示板 を取りつけて、最近覚えたての現地語で「いら

「っしやいませ」の文字を流す。

「あっ、ハッコンってこんなこともできたの！」

「おおっ、この文字は覚えたんだな」

ラッミスとヒュールミの反応は良好なのだが、通りすがりの人々の反応は薄い。

ちらつとこつちに視線を向けているが、それだけだ。もしや、話す魔道具の箱というインパクトが強すぎて、文字を表示したところで印象が薄いのか。

一度戦略を練り直した方がいいかもしれない。

空から光が失われ夜が訪れる頃にはキコユたちも宿屋へと戻り、俺の独壇場となっている。

ここから一気に気温が下がるので、冷たい物の売れ行きは落ちる一方。半分ぐらいの商品を冷たいから温かいに変更しておこう。

夕方から早朝にかけては相変わらず売れ行きは順調なのだが、問題は暑い時間帯だ。

客を呼び込むには、こちらでも売り子を手配してみるのはどうだろうか。ラッミスとヒュールミとシュイならビジュアル面でも張り合える。

いや、まて………いつそのこと、男性客は切り捨てて女性客にターゲットを絞るのもありかもしれないぞ。ミシユエルとヘブイに頼んで客寄せをもらうというのはどうだ。

ミシユエルの観た目と知名度は有名芸能人並だ。その中性的な顔

立ち是一部の男性にも人気があるらしいが、これは当人には黙っておこう。

へブイは黙っていたら優しい気な聖職者で通る。顔の造りも悪くないので、一見、穏やかで人当たりの良さそうな感じが女性の心を掴むことだろう。

ただし、両者とも問題を抱えている。一人はコミュ障、もう一人は靴フエチ。

ミシユエルに何時間も接客をさせるとストレスで胃に穴が開く恐れがある。

へブイに関しては相手の足元をじろじろと観察して、女性客を警戒させる才チが既に見えている。

うん、この案は廃案でしょう。俺の切れる手札はもうないのか……このまま、キコユ相手に負けを認めなければならぬということなのか。

その後も朝まで試行錯誤を繰り返し、朝日が昇る頃によろやく代案がまとまった。

早朝に元気よく現れたラツミスに頼み込むと快く引き受けてくれた。それから、準備を整えて決戦の時を迎える。

大人になったキコユがボタンの引く荷台ごと颯爽と現れると、俺の定位置から右斜め前方に陣取る。

こちらを一瞥して、冷笑を浮かべたのを見逃さなかったぞ。ほう、勝ち誇った笑みを浮かべているな。昨日は若干そちらが有利だったので手ごたえを感じているのか。

ふっ、笑っていられるのも今の内だ。その笑みを凍らせてやる。

敵陣には客が並び始めている。今日の向こうの武器は……桃かつ！
それも予め切り分けられている桃を凍らせているだつ！

昨日の内に準備していたというのかっ！

向こうも考えてきたな。ただ凍らせるだけではなく、お客の二一

ズに応える加工をしてくるとは。余裕の笑みを浮かべたのも納得がいった。

俺が認めたライバルなだけはある。停滞せずに日々進歩しているというのか。

だが、俺の快進撃はここからだ！

「いらつしゃいませー、昨日とは違う美味しくて濃厚なアイス販売中ですよー」

「今日は特別に高級アイスを低価格で販売しています！」

売り子二人がやってきてくれた。

客をどちらかに絞るのではなく贅沢に男女両方をいただく作戦に変更をしたのだ。

ミシユエルは何時もの黒の鎧姿ではなくタキシードを着ているのだが、一目見た女性が思わずため息を吐くぐらい様になっている。

ちなみにその服装は転送陣で清流の階層に戻って、スオリから借りてきてもらった。ミシユエルが小刻みに震えているのが気になるが少しだけ我慢してもらおう。

その隣で大声を張り上げているのは制服姿のラツミスだ。ミスダンジョンコンテストで好評だった制服姿で呼び込みしてもらっているが、男性たちは短めのスカートから伸びる健康的な美脚と、見たこともない服装に引きつけられているな。

そして、更にアイスクリーム自動販売機の中でも最も商品が高額な、とあるメーカーの物にフォルムチェンジしている。

カップは小さいのに子供が手を出すには躊躇う値段のコンビニで良く見かける、あの海外メーカーのアイスだ。

それを昨日のアイスと変わらない値段で提供する。この三段構えのラツシュの前にはキコユたちも敵わなかったようで、今日の売り

上げは俺の圧勝となった。

健闘したのじゃないかな、キコユ。うん、良くやったよ。だけど、これが自動販売機の実力というものだよ。悪いがここでの売り上げでは一歩も二歩もリードさせてもらうから。

と余裕ぶっこいていた翌日、キコユの荷台が見えなくなる程の人だかりが、そこにはあった。

そう……キコユは清流の湖階層から援軍を呼んだのだ。大食い団四名が傘下に入り呼び込みをしている。

くっ、食べ物で釣られたな大食い団！ ならば、こちらも本気を出そう。今日はヒュールミとシユイ、それにヘブイにも手伝ってもらって勝利をもぎ取る！

こうして四日間、お互いの持ち得る全ての手札を出しきった結果、売り上げはどうなったかという……俺もキコユも赤字だった。

俺も向こうも値段をギリギリまで下げて、手伝ってくれた人たちへの報酬を物品としたのだ。お礼に商品を好きなだけ食べていいと。

その結果、高い商品ばかりをここぞとばかりに食べるシユイに、薄利多売でやりくりしていた売り上げの大半を持って行かれた。

向こうは大食い団の四人相手に自分のところで栽培した野菜や果物を与えては売る物がなくなってしまふ為、わざわざ他の店で購入した食べ物を買っていたので、出費が収入を上回ったらしい。

つまり、このオチは両者痛み分けとなった。

祝いの日

灼熱の砂階層で商売上の儲けは大したことはなかった……どころか最後の激戦が響いて赤字だったのだが、まあそれはいいだろう。この階層でやるべきことは終えたので、清流の階層に戻ることになった。

灼熱と清流の二つの階層は転送陣が正常に作動しているので、頻繁に連絡を取りあうことに決まり、今後は交流も盛んになるだろう。何かあればお互いに助け合うことになっているので、再びここに来る機会があるのかもしれない。

「何かと世話になっちまったな。滾る爆炎の団があんな奴らだと見抜けなかったのは、後悔してもしきれねえ。マジですまなかった！」

見送りに来てくれた灼熱の会長が、九十度より深く腰を曲げて謝罪している。

今回の一件がかなり堪えたようで報告を受けてから、灼熱の砂ハンター協会に所属しているハンターたちの身辺調査をやっているらしい。

「また何かあったら手伝いにくるからね」

「もうちょい涼しくなったらいいんだがな」

「暑いと冷たい物が美味しくて最高っすよ」

女性陣は和やかなムードだ。砂漠の柱での一連の出来事は命の危機に晒され、一歩間違えたら全滅したというのに。

これは男性も同じなのだが、ハンターの精神の強さとも言うべきか、誰も後に引きずっていない。

「この階層の方はサンダルがメインですので面白味がありませんよね」

ヘブイは今回の一件で吹っ切れたようで、良くも悪くも自然体と
いった感じた。

「今度の戦いでハッコン師匠の素晴らしさを再認識させていただきました！ 清流の湖階層でもよろしくお願いします」

特に何もしていないのにミシユエルの好感度が日に日に上がっている。何故、こんなにも慕われているのか不思議でならない。

そんな和気藹々と会話している仲間から少し離れた位置で、黒八咫とボタンを撫でてしているキコユがいた。

真剣な顔つきでずっと撫で続けている。会話にも混ぜられてこなかったし、何か悩み事でもあるのだろうか。

悩み事として思い当たるのは、体が急成長して大人になったことぐらいだ。ずっと子供の体だったので大人となった体に馴染まないのかもしれない。

そうだとしたら、自動販売機である俺に出来ることはそつと生理用品を出すぐらいだろうか……いや、これはセクハラだな。女性のデリケートな部分に男が口を出してはいけない。

まさか、俺との商売対決で相打ちとなったことで悩んでいる訳ではないだろうし、軽い悩みであればいいのだが。

そんな心配事を抱えながらも、我が家でもある清流の湖階層へと戻った。

やっぱり、落ち着くねえ。何だかんだ言っても我が家が最高だ。まあ、我が家と言っても屋外でハンター協会前の定位置なのだが。

「帰ってくるのが遅かったから、もうちょいで灼熱の砂階層まで買出しに行くところだったぜ」

「これを飲むと心健やかになれる」

俺の姿を見つけるとすぐさま駆けつけて、いつものセットを購入した門番のカリオスとゴルスが嬉しそうに話しかけてくる。

「ありがとうございます」

そう言ってくれるだけでも自動販売機になって良かったと思うよ。

二人の格好は半袖ではなく長袖へと変更されている。灼熱の砂階層にずっといたので真夏の間だったけど、ここはもう秋だ。

自動販売機になってから二度目の秋か。ここにきて一年ぐらい経ったんだよな、あつという間の出来事に感じるよ。一年も付き合っているのに体も完全に慣れてしまった。

もし生前の姿に戻れたとしても、普通に歩けるかどうかも怪しいぞ。

人間に戻る方法はダンジョンをクリアした時の褒美、何でも叶えることのできる願い事に託すしかない。正直言って眉唾だが。

この異世界には魔法や加護といった超常的な力が当たり前のよう
に存在している。このダンジョンだって階層ごとに別世界の様な空間だ。

何があっても不思議ではないと思うが、何でも願い事を叶えると

いうのは誇大広告すぎるだろ。じゃあ、この世界の全てを俺の物に、なんて無茶振りにも応じてくれるのだろうか。

とまあ商売中に考え事をしているのだが、注意力が散漫で考えもうまくまとまらない。さつきから視界の隅に映る彼女のが気になるって仕方がないのだ。

上辺は取り繕ってお客の対応をしているのだが、時折見せる真剣な表情とため息を吐く姿を目にすると心配になる。

この階層に戻ってきてきても悩みは晴れていないようだな、キコユ。自発的に相談に来てくれたら幾らでも話を聞くけど、こっちの方をちらちらと見ては慌てて視線を逸らしている。

キコユのことはもちろん心配なのだが、もう一つ気になっていることがある。いつも俺の傍から離れようとしないうラツミスが最近あまり近寄ってこないのだ。

ここ数日、忙しらしくヒュールミも顔を出さないので少し寂しい。

そんなことを悩んでいると夜も更け、いつも通り夜も商売を続けるつもりだったのだが、ラツミスに懇願されてヒュールミと一緒に住んでいるテントに運ばれることになった。

「最近忙しくて碌に話せなかったから、今日は一緒に遅くまでお話ししたい」

と、ラツミスに上目遣いで頼まれて断れる男がいるだろうか。いないと断言できる。

若干、浮かれ気分で迎えに来てくれたラツミスに担がれてテントに入った。

「ハッコン、お誕生日おめでとう!」

えっ？

おめでとうの合唱と鳴りやまない拍手。ヒュールミしかない筈のテント内には今までお世話になった人々の姿。

熊会長、始まりの会長、迷路会長、闇の会長、カリオス、ゴルス、ムナミ、シメライお爺さん、ユミテお婆さん、園長先生、スオリ、シャーリイ、大食い団の四人、シュイ、ヘブイ、ミシユエル、キコユ、黒八咫、ボタンがいる。

そして、ヒュールミとラツミス。親しい人たちが全員テントの中に集まってくれていた。

「正確な誕生日はわからないけど、うちとハツコンが会った日から近い今日に勝手に決めちゃった。迷惑じゃなかった？」

俺を輪の中心に降ろして、照れたように微笑むラツミスに感謝の言葉を伝えないといけないのはわかっているのだが……言葉が出なかった。

驚き過ぎて、嬉し過ぎて、何を言えばいいのか回路がショートしそうだよ。

「ありがとう」

何とか言葉を振り絞り、そう伝えた。

俺を取り囲んでいたみんながもう一度声を揃えて「おめでとう」と祝福の言葉を投げかけてくれる。

ああ、くそっ、不意打ちすぎる。まさか、自動販売機になっこんなにも多くの人に誕生日を祝ってもらえる日が来るなんて。

たぶん、ラツミスが企画してくれたのだろう。俺にはもったいない相棒だよ。

「そしてー、ちょっと遅れたけどキコユちゃんもおめでとうー！」

そうか、キコユも誕生日を迎えたばかりだったな。合同誕生日会になるのか、賑やかでいいね。

「えっ、えっ、私もですか」

キコユが本気で驚いたようで啞然としている。これで最近の悩みが吹き飛んでくれたらいいのだけど。

「本当はご馳走を食べて欲しかったんだけど、口がないからそれは人間に戻った時の楽しみにしておいてね！　じゃあ、二人ともみんなからの贈り物を受け取ってください」

ラツミスがそういうと俺とキコユの前にはずらっと仲間が並んだ。

「まずは俺たちからだ。ゴルスと一緒に選んだのはこれだ！」

「気に入ってくれるといいのだが」

そう言って二人が差し出したのは看板だった。

それも黒板のようにチョークで文字を書きこむことができるタイプの、飲食店の入り口に手書きのメニューが書きこまれていたりするあれだ。

これは便利だな。新たな場所で使い方の説明をここに書きこんでおけば手間が省ける。新商品の説明にも使えるから本当にありがたい。

「ありがとう」

自動販売機へのプレゼントなんてどうするのだろうかと思ったの

だが、ちゃんと使えそうな物を考えてくれたんだ。

「ハツコン、いつも世話になっている。これはハンター協会からの贈り物となる」

「うむ、ハツコンのおかげで始まりの階層も陥落せずに済んだ」

「ハンター協会としてはハツコンさんの活躍を多いに評価していません。その証拠としてこれを皆で贈ろうと考えました。ええ、言い出しっぺは熊会長ですが私も同じことを考えていたのですよ。嘘じゃありませんわ。ちゃんとして、私としても評価を形として」

「はいはい、迷路会長しゃべりすぎや。ハツコンはんも困ってるやないか。見てみい、困惑して魔道具だけに、まあどうしようって思っている顔してんで」

突っ込まないぞ、闇の会長。

ハンター協会会長を代表して熊会長が渡してくれたものは、一枚のカードだった。これはハンターの証であるカードだね。俺は既に清流の湖階層のハンターとして登録されているので、似たようなカードを貰っている。

このカードは既に持っているカードと違い縁が金色ではあるけど。

「これはハンター協会が認められた者にしか授けない特殊な証明書だ。これを見せれば転送陣の代金は無料となり、どの階層も自由に行き来することが可能となる。加えて、例えばハンター協会の会長から直接命令されたとしても拒否する権利が与えられる」

VIPカードみたいなものだろうか。あまりの好待遇なので心配になるが、俺がそれを悪用しないと信じて託してくれたのだろ

う。なら断る理由はない。

更に老夫婦と園長先生からはお手製の湯飲み。二つあるのは人に戻ってから嫁と使えるようにという配慮だった。

ムナミからは永久無料宿泊券。人間に戻っても使えるそうなので、今後の生活は安泰のようだ。

次のスオリはとてもわかり易い。

「ハツコンさんはお金をポイントとして力を得るとのお話でしたので、わらわからは金貨の詰め合わせですわ」

装飾過多な小箱を黒服の人が運んできてくれた。あの箱の中には何枚の金貨が入っているのか。考えるのが怖いぐらいの金額だよな。これ受け取っていいのだろうか。買取り金額じゃないよ……ね？

「遠慮なさらず。わらわの屋敷にあった調度品を一つ売り捌けば補てんできる程度の金額ですので」

若干怖いポイントが喉から手が出るぐらいに欲しい。喉も手もないけど。

話し方はあれだけど根はいい子だから、裏がないと信じよう。

「スオリちゃんの後だと物怖じしてしまいますわね。ハツコンさん」

シャーリイさんが声を潜め寄り添うようにして、凶悪な二つの実り過ぎた果実を押し付けてきた。これが生身の体だったら理性が空の彼方へと吹き飛びそうだ。

「これを受け取ってください。人間に戻られた暁には私が自らお相手しますので」

そう言って釣り銭の受け取り口に入れられた紙は 彼女のお仕事に関連する男性向けのサービスだった。

贈り物は受け取るのが礼儀だ。そう、使う気はなくとも相手の気持ちを最優先にして、この場は受け取らなければならぬ。

全く関係ないのだが、いつか人間に戻れるようにもっと努力しないとな！

「いつもお世話になってるから、頑張って用意したっす！」

「ハツコンさん、私とシユイからは粗品ではありますが、これを」

へブイがそう言っただきめの袋から取り出したのは バカげた大きさの靴だった。大人が数人余裕で入れる大きさの革靴。これ特注品で作ってもらったのだろうか。

「これは闇の森林階層からこちらに移住された職人さんに頼んでも作ってもらいました」

その説明で脳裏に髭面でラツミスの武具を作った職人の顔が思い浮かんだ。

で、この巨大な靴は……もしかしなくても、俺の靴なのか。

「靴の大きさは心配無用ですよ。こと靴に関しては私が測り間違っことはあり得ませんので」

その無駄な自信が怖い。お礼を言っただいいものか迷っていると、へブイが俺を持ち上げて止める間もなく靴へと挿入された。

あ、うん、ピッタリだ。身体の下半分がすっぽり靴に納まっている。

「に、似合ってるっすよ……」

じゃあ、こっちを見ながら言ってみなさい。何で背を向けて肩を震わせているのかな。

へっぴ以外が全員同じ動きをしているのは何故でしょうかねえ。

誕生日会

「ぼくたちからは、これを渡すね」

大食い団を代表してミケから渡されたのは一枚の紙だった。

何か手書きで書いてあるが全く読めない。勉強中というのもあるのだけど、それ以前に字が汚いような。

「これはいざという時、からあでをくれれば、どんなことでもするという誓約書だ」

シヨートが説明してくれているが、こんなもの無くてもから揚げ渡せば何でもしてくれるよね。でも、ありがたく受け取らせてもらうよ。

「ハツコン師匠、私からはこの指輪を。これは我が一族に代々伝える指輪でして、永遠の忠誠を誓う証でもあります。己が認めた者に渡す決まりになっています」

重い！ 重すぎるよ、ミシユエル！

これ誕生日プレゼントで気軽に受け取れる品じゃないよね。いや、そんな潤んだ目で見つめられても困るんですけど。

「駄目ですか」

「あ う ん ありがとう」

取り敢えず、受け取っておこう。後で落ち着いたら返せばいいだ

ろう。

「私たちからは畑さんが旨味を凝縮させて創りだした作物の種の一つ。これは普通の土で栽培しても意識が吹き飛ぶぐらいの美味しさですので、いつか味わってくださいね」

キコユから渡された種も人間になってからの楽しみにさせてもらうよ。

今は悩み事を忘れていいのか優しい笑みを浮かべている。この時だけでも悩みが消えたのならいいけど。

一時期は人間に戻るべきではないかと悩んでいたが、戻った際の楽しみをこんなにも提供されてしまったのは、悩むこと自体が馬鹿らしく思えてきた。

いつか戻った際には、みんなからのプレゼントを使わせてもらおうよ。

「残りはオレとラツミスだな。何が良いか前から考えていてな、最近出来上がったこれを受け取ってくれ！」

ヒュールミがテントの奥から持ってきたのは背負子だった。今まで使用していた物より見るからに頑丈そうで、摩耗が激しそうな箇所が金属で補強されている。

「固定する紐の伸縮機能を強化させているから、急激な形状の変化にも対応できるはずだぜ」

それは助かるな。たまにフォームチェンジをした際に振り落とされそうになることがあるから、これがあれば安心していつでも変わることができる。

「えと、じゃあ、最後はうちやね。うちからの贈り物は……」

ラツミスは一度奥に引っ込むとタイヤの付いた台を二つ引っ張ってきた。その上には白い布が被せてあって、大きさは直径一メートルの半円状のようだが。

「これです!」

布を取り去ると、そこには巨大な誕生日ケーキが二つあった。

そこには現地の言葉でハツコンと書かれていて、たぶん下の文字は「おめでとう」だと思う。もう一つの方はキコユだな。

俺と並んで立つキコユが目を輝かせてケーキを見つめている。

「前にミスダンジョンコンテストの時にもらった本にお祝いの絵があつて、これが何なのかハツコンに訊ねたの覚えてる?」

ああ、あの時の。誕生日に着る服みたいなコーナーがあつて、誕生日ケーキと彼女たちが何をしているのかを説明したな。

「いらっしやいませ」

「あの時に絶対、ハツコンの誕生日にはこれを作ろうって決めてたの。ええと、喜んでくれた?」

「うん ありがとう」

まさか異世界で誕生日ケーキと対面するとは。見た感じはシンプルなショートケーキのようだ。上には大きめのローソクが一本立っている。

そうか、俺は異世界では一歳なのか。

キコユの方のロウソクの数は触れないのが女子に対する礼儀だ。

「じゃあ、テントの明かり消すぞ」

魔道具の灯りが煌々と照らしていたのだが、消えるとロウソクの光が優しくケーキを照らし出している。

「キコユ、ハツコン、これ吹き消せる？」

ああ、任せてくれ。フォームチェンジだ。

俺は コイン式掃除機 になるとノズルの先端から風を吹きだした。

威力を調節したのでロウソクの火だけが消え、辺りが闇に包まれる。キコユも無事吹き消せたようだ。

「二人とも誕生日おめでとう！」

拍手が降り注ぐ中、俺は泣きそうになっていた。機械の体で助かったな……涙が出る機能があったら漏電の心配をしないといけなところだったよ。

自動販売機に生まれ変わった時に人としての幸せは、もう二度と訪れないと覚悟していたのに、まさか生前よりも充実した日々が過ごせるなんて。

それからはラツミスお手製のご馳走をみんなで食べ、俺の取り出したお酒で場が収拾付かなくなっている。

双対鬼との戦いで様々な酒を取り扱ったのだが、その時と同様にアルコール度数の高い酒を提供したのが悪かったのかもしれない。と反省したが後の祭りだ。

「ゴルスよー、俺は彼女のことを好きだが、お前をないがしろに

しているわけじゃあ、ねーんだぜええ。お前は最高の相棒だあああ
「わかったわかった」

酔いが回って絡んでくるカリオスをゴルスが軽くあしらっている。
彼女ができたことで確執が生まれるかとも思ったのだが、関係が
良好なようでホツとしたよ。あと、大量に料理を食べながら期待す
るような目で二人を見るんじゃない、スコ。そっち系じゃないから。

「この料理美味しいですねえ、お爺さん」

「余ったら詰めてもらえんか。孫にも食べさせてやりたいのう」

「子供たちに食べさせたいので、私も持ち帰りさせてもらいたいの
ですが」

老夫婦と園長先生が料理に舌鼓を打ちながら感心している。

テーブルに並んでいる料理はラツミスの手作りトスオリが専属の
料理人に作らせたものらしい。そして食材の提供者はキコユだ。く
つ、食べられないのが悔しいな。

「ちょっと、遠慮するっす！ みんなの分がなくなるっすよ！」

「両手に料理抱えて言っても説得力ないよ。それボクの！」

「ペル、落ち着いてしゃへらないふお、だふえふあふお」

ああ、シユイと大食い団が争いながら料理を流し込んでいる。

この展開は予想できていたようで、高カロリーな料理を別テーブ
ルに山盛りにして、彼らを隔離しているようだ。

「はあああ、このお酒、喉越しも良くてほんのり甘いから、うちの子たちに受けそうだね。ハッコンさんに商談しておかないとお」

シャーリイさんが酔うことにより色気が倍増しているぞ。

言動が艶めかしくて、男共の視線が釘付けになっている。熊会長と大食い団は種族の関係で興味がないみたいだけど。

「師匠、師匠、私は師匠の為なら何でもできます！ 身も心も捧げる覚悟がありますっ！ 人間に戻られても捨てないでくださいいい」

テントの支柱に泣きながら話しかけている酔っ払いの弟子がいるが放っておこう。

「わらわもあの綺麗な酒が飲みたい！」

「駄目です。お酒は若いうちから飲まれると脳に影響を与えるそうです。適正年齢になられてからお飲みください」

「いやじゃ、いやじゃ。あれが飲みたいの！」

「こちらの飲み物はどうですか。甘くてしゅわしゅわしていて美味しいですよ」

俺が用意した酒に興味津々のスオリを黒服たちが懸命になって押し留めている。

ちなみにこの世界では十五歳を超えると酒を飲んでもいらしい。年齢制限が定められている訳じゃないのだが、一般常識としてそう広まっているそうだ。

「今度の発明は凄いでおお。ハツコン、お前もみてみれるふよ。あー、オレの話がきけないだとお、なりや、こうしてやふう」

地面に座り込み、俺の背に額をぶつけながらヒュールミが何か言っている。完全に酔いが回っているようで呂律も怪しく、自分が何を言っているのか理解していないようだ。

「ハツコオオオン、元気いい。うちはめっちゃ元気やでえ」

酎ハイの缶を片手にラツミスがやってきた。顔面が真っ赤で何処からどう見ても酔っ払いだ。

千鳥足でこつちに向かってくると何もないところで躓き、俺にしがみ付いてきた。

「ふへへへ、ハツコン冷たくて気持ちええなあ」

俺の体に頬をくっつけてすりすりしている。体が火照っているから鉄の体の冷たさが心地いいみたいだ。

「楽しんでるう？　うちはすっごくたのしいでえ」

それは見ていてわかるよ。俺も楽しいよ、心からそう思える。

「いらっしやいませ」

「良かったあ。ほんまは迷惑やないかってずっと、心配しとったんにやかふあ」

大欠伸をして俺にしなだれかかっている。

もう限界が近いみたいだな。既に酔いつぶれている人と食い倒れ

ている人も続出しているようだ。後で全員にバスタオルでもお腹に掛けてあげよう。 結界 で上手く弾き飛ばしたら何とかかなるかな。

「ハッコン、聞いてんのお」

「いらっしやいませ」

「これからもずーっと一緒やらかなあ、ずっとやでえ」

「いらっしやいませ」

「人間に戻れなくても、一緒やからねえ、わかってんのお」

「いらっしやいませ」

「ちょっといらっしやいませ以外の気の利いたこと言わんと、女の子は逃げるんやよお」

うつ、ワンパターンな返事を返していたらダメ出しをくらってしまった。

そんな潤んだ瞳を向けて期待されてもな。生前でもこういった場面は苦手だったから、どうしていいものやら。

「きゅんとさせる一言、欲しいなあ」

くっ、酔っ払いにおねだりされてしまっている。こういうのも可愛いと思ってしまう時点で俺の負けな気がする。

きゅんとさせる一言か。俺の浅い知識を総動員して、こういう場面でも最も相応しい言葉をチョイスしてみよう。ドラマや漫画を参考に、それっぽい言葉を選び出して。

よっし、ちよつと恥ずかしいが決まったぞ。あとは使える言葉が限定されているから上手く組み合わせせて、完成だ。

「よっ たすが」

「たも かあ い」

「いよ」

どうだ、この台詞！

何かの漫画でイケメンが壁ドンしながら言っていた気がする。さあ、限界を超えて振り絞ったこの言葉でラッミスも

「んー、くうう……すうー、ハッコン」

爆睡していた。あ、うん、わかってたよ、このオチ。むしろ、聞かれなくて良かったと思うべき。冷静に考えたらとんでもない一言だった、これは赤面レベルの失言だ。

近くに誰もいないようだし、眠ってもらって助かった。

「聞いたでええ、ハッコン」

床の影が盛り上がると、そこには金ぴかコートの黒い人影、闇の会長がいた。

くっ、影になって潜んでいたのか！ 寄りにもよってこの人に聞かれるとは。動く拡声器みたいな人だから、明日には集落中に広まっつていそうだ。

「カツコええ言葉やないか。今度、わいも使わせてもらって構わんか。あー、誰にも言わへんから安心しいや。男なら女性を魅了する言葉の一つも言わんとな、うんうん」

「ありがとう」

あれ、意外と話のわかる人だ。からかったり茶化したりギャグにするのを好む人だが、ちゃんと大人としての分別はつくのか、少しだけ見直さないといけないな。

そうして、騒がしくも楽しい夜は更けていった。

翌日。いつものように商売をしていると、

「ハッコン、あの二日酔いに効く飲み物あるか」

「同じのを頼む」

昨日、見事に酔いつぶれていた門番コンビがやってきた。

額に手を当てて頭痛に耐えているようだ。スポーツドリンクと栄養ドリンクの二日酔いセットを二人に販売する。

「くはあああ、助かったぜ。頭がスッキリしないと勢いで、酔った姿も可愛いよ、なんて口走りそうだからな」

「おい、カリオス。それは黙っておけと」

ん？ カリオス、今何を口走った。その台詞聞き覚えがありまくりだが。

「もういっつか」

「いって」

音声を低く設定して発言すると、カリオスが引きつった笑みを浮かべている。

逃げようとしたカリオスの後頭部と膝裏にペットボトルをぶつけて動きを止めた。

「ってええ、わ、わかった！ 全部話す！ 闇会長が帰り際に楽しそうに全員に話していたんだよ。小芝居を交えてな」

となりでゴルスが頷いているので間違いないようだ。ほおおお、闇の会長がねえ。秘密にしておいてくれるという話は何処に旅立ったのかな。今度ちゃんとお礼をしないと。

「ほら、素直に話したからいつもの頼むぜ、ハツコン」

冷えたおでんと冷えたコーンスープと 念動力 で振りまくったコーラ持っていっていいよ。ゴルスにはいつものを普通に渡そう。

「えっ、ハツコンこれ違う……いえ、いいです、はい」

何か言おうとしていたので背の高い自動販売機にフォームチェンジをして見下ろしたら、言葉を呑み込んだようだ。

彼らが立ち去って暫くすると、向こうの方から黒い影がやってきた。

飛んで火にいる夏の虫とはこのことか。

「ハツコン、今日もええ天気やなあ。なんか、すつとする飲み物頼むわ」

俺が知らないと思っっているようで上機嫌だ。

「いらつしゃいませ」

任せてくれ。俺はコーラを受け取り口に置くと、続けて棒状キャンディーも隣に落とした。そして、取り出し口から出す前に、念動力でコーラのキャップを開けて、中にキャンディーを二つほど投入して素早く閉める。

何食わぬ顔でそれを闇の会長に渡した。

「これはしゅわしゅわするやつやな。刺激的でおまけに、わいと同じく黒つてのがええと思わへんか。ほな、いただくとしますか」

蓋を開けた途端にコーラが爆発的に噴き出し、狙い通りに闇の会長がコーラまみれになる。

「こおらがか」

「かってこお」

「らまいった」

俺がそう言うと、びしょ濡れの闇の会長が苦笑いを浮かべたような気がした。

それぞれの物語へ

最近キコユが今まで以上に変だ。この数日、小さなミスを繰り返している。

商売をしている時も上の空で聞き逃しや、お釣りを間違えているようだ。そんな彼女をボタンと黒八咫が心配そうに見守っている姿を何度も目撃していた。

心ここにあらずという有り様で、道を歩いているだけで人に何度もぶつかったりしている。

これは思ったより重症だな。余計なお世話でも俺が積極的に関わるべきだと判断して、声を掛けようと思っていたのだが、一足先にキコユが相談を持ち掛けてきた。

「今晚、お話があります。時間はありますか？」

「いらっしやませ」

言葉だけ抜き取るなら恋愛関連の告白のようにも思えるが、別の告白をされるのだろう。

深刻な表情で彼女は一体何を語ろうというのか。

相談を持ち掛けてくれたのは嬉しいが、その内容には不安がある。何を言われようと動揺しないようにしないと。

購入者が途絶え集落内を行きかう人々も消えた深夜。

約束の時間にキコユが黒八咫とボタンを引き連れて現れた。両腕

で畑の欠片である土の球を大事そうに抱えながら。

「夜分にすみません」

「い い よ」

夜は冷え込むので温かいスープを彼女に渡しておく。

少しだけ緊張の色が薄れた彼女が一口飲んで、ほうと息を吐いた。

「ハツコンさん、私たちはダンジョンを去ろうと思っています」

小さく呟くように吐き出した言葉に、俺はあまり衝撃を受けなかった。ただ、そうなのかと納得している。

「異変が解決もしていない状況で離れるのは、身勝手なことだと重々理解しています」

そんなことはないさ。キコユが抜けるのは痛いけど、キミがここにいるのは別の目的の為だろ。感謝はしても咎める理由なんてない。だけど

「何故、急にこんな事を言い出したのには理由があります。成人となつて魔力が増大したことにより、この畑さんの欠片から声が聞こえるようになりました。本体のある場所へ運んでもらえたら本来の力を取り戻し復活できると。微かな声でしたが、確かにそう言ってくれたんです。そして、その為の道は畑さんの欠片が開いてくれるそうです」

彼女が畑の欠片を愛おしそうに撫でながら微笑む。

ずっと畑に転生した人と会う為だけに苦心してきたのだ、その喜

びはひとしおだろう。

畑の人は確か魔王軍の領地内で彼女たちを逃がす為に犠牲になって、その後どうなっているのかわからないのだったか。唯一の道には巨大な土の壁が立ち塞がっていて、その壁を越える方法がなかったという話だ。

立ち去る理由は理解できた。だが、疑問がある。どうやってダンジョンから出るつもりなのだろう？

今は外とダンジョンは冥府の王の手によって隔離されている。外に出る為の手段が無い筈だ。

俺が悩んでいるのを感じ取ったのか、キコユが俺の体にそっと手を触れて考えを読み取ってくれた。

「以前、ヒュールミさんに話を聞いたのですが、転送陣に膨大な魔力を注ぎ込めば、一時的に外へと繋げることができる……かもしれないそうです。それは確証もなく危険を伴うのでお勧めはできないのですが」

それを試そうというのか。今のキコユなら魔力の条件は満たしている。

だが、それは可能性であって博打要素が強すぎるのではないか。

「それはわかっています。それでも、私は畑さんの元へ駆けつけたのです！」

髪を振り乱して強い口調で言い放つキコユに、俺は口を挟むことができなかった。

人には優先順位がある。世界中の人々を敵に回しても息子を助けたいと願った、ケリオイル団長たちのように。

彼女にとって畑に転生した人は何よりも大切な存在。それは自分の命を懸けるに値するのだろう。

「うん」

「わかっていただけましたか。私の魔力ならこの子たちも一緒に運べるでしょう。この後すぐにここを発つことにします。皆さんに話せば引き留められるかもしれませんが。それに、皆さんの顔を見たら決意が揺らぎそうです」

そんな風に寂しそうに笑ったらダメだよ。キコユは大事な人を助けたいんだろ。だったら、胸を張って笑顔で元気よく別れの挨拶をしないと。

こっちのことは大丈夫、俺やみんながいるからね。だから心配しないで安心していいよ。

むしろ、今日までありがとう。キコユと黒八咫とボタンがいてくれて本当に助かった。楽しい日々を過ごさせてくれて感謝だよ。

「こちらこそ、ありがとうございました。色々ありましたけど、私も凄く楽しかったです」

「クワツクワツ」

「ブフウー」

キコユに倣って黒八咫とボタンも頭を下げている。二匹とも彼女と行動を共にすることを決めているのだな。

彼女がいなくなることで、俺の心の声を読める人がいなくなるが、それは以前に戻っただけの話。

むしろ、今まで頼りつきりで最近話すことに関して努力をしてこなかった。初心に戻ってもっと頑張らないとな。

立ち去る彼女に相応しい言葉はどれだろうか。やはり、これしか

ないか。

「またのごりようをおまちしています」

朝になりキコユがいなくなったことが知れ渡り、彼女が何処に行つたか知らないかと熊会長から訊ねられたので、俺は去り際に彼女から預かった手紙を手渡した。

熊会長の指示で親しかった人たちが会長室に集められ、代表してヒュールミが手紙を読み上げる。

「皆さん、お世話になりました。勝手ながら最愛の人を助ける為にダンジョンの外へと向かうことにしました。身勝手な私をお許しください。畑さんを助け出した暁には必ずここに舞い戻ってきます。どうぞ、それまでお体ご自愛ください。だってよ」

堅苦しい挨拶ではあるがキコユの誠実さが伝わってきた。

「ダンジョンの外へ向かうとあつたが、転送陣では出られないのではないか？」

「会長、それがよ……馬鹿げた魔力を注いで当人が飛ぶのであれば、何とかなるかもしれないよ。キコユなら黒八咫とボタンを連れて飛ぶのも不可能じゃねえな」

ヒュールミの説明に熊会長が腕を組んで唸っている。

「だけど、今それが可能なのは爺さんぐらいだと思っぞ。それぐら

い魔力を必要とするからな。おまけに上手くいく保証はねえ」

「この方法は使えぬということか……キコユが無事、外へ出られたことを祈るしかあるまい」

「キコユさんの気持ちはよくわかります。私もハツコン師匠が危機に陥ったら、全てを投げ捨てても助けに向かうでしょうから」

「ちゃんと想い人に会えるといいっすね」

「そうですね。僅かでも可能性があるのであれば、行動に移すべきです。失ってから後悔するよりは」

へブイは思うところがあるのだろう。手を組み合わせて神にキコユの無事を祈っていた。

この場に居る誰もがキコユを責めるような発言をしなかった。むしろ、その無事を願い応援している。

「寂しくなるね、ハツコン」

「いらっしゃいませ」

キコユが戦力としていなくなるのは、正直かなりの痛手だ。あの膨大な魔力と冷気を操る能力があれば今後の戦いが楽になっただろう。

それに飛行能力と音波を操る黒八咫には何度も助けられた。ボタンもそうだ。ラツミスに匹敵する怪力で荷台を引っ張ってくれたおかげで、どれだけ旅が楽になったか。二匹の存在は大きかった。

だけど、それはもう過ぎたことだ。彼女たちが今まで力を貸して

くれたことを幸運だと思わないと。

今、この機械の体を感じる寂しさは戦力を失ったことではなく、共に過ごした日々に対するものだ。

俺の商売敵として競い合ったことも、強敵に挑んだことも忘れな
いよ。必ず、もう一度会おう。その日を楽しみにしているからね、
キコユ。

戦力の補充

「残る階層は犬岩山階層と永遠の階層の二つとなりましたが、ここで戦力の強化を図るべきではないでしょうか」

会長室でキコユの置手紙を読んだ後、ヘブイが唐突にそんなことを口にした。

言いたいことはわかる。キコユたちが抜けた穴が大き過ぎるので、その為に人員の補充をしようというのは至極当然の意見だ。

最下層の永遠の階層は未だに攻略中で階層主を倒せないでいる。その一つ上の階層である犬岩山階層は、十年近く攻略が進まなかった難所らしい。

「ふむ、そうだな。だが、割ける人員にも限度がある」

現在の固定メンバーは、俺とラツミスのコンビ。サポート役としてヒュールミ。弟子のミシユエル。元患者の奇行団からヘブイとシユイとなっている。

他には流動的に熊会長や老夫婦や園長先生、それにカリオスとゴルスの門番コンビが手を貸してくれるぐらいか。

あとは大食い団の面々もいるのだが、下層になると彼らの実力では頼りないらしく、偵察任務なら大丈夫だが戦力となると微妙だと当人たちが言っていた。

闇の会長や始まりの会長も戦力としては申し分ないのだが、人の上に立つ役職なので引つ張り回すわけにはいかない。

日頃は固定メンバーで進んで、いざという時に力を貸してもらおうというのがベストなのだが。

「灼熱の砂階層の人たちはどうつすか？」

「現在、所属ハンターたちの身元調査中だな。おまけに、最有力候補だった滾る爆炎団があんなことになってしまったので、人材が不足気味らしい」

階層の異変が解決したとはいえ、いつもと変わらない日常に戻っただけ。魔物は現れるので必要最低限の人員は確保しておくべきだよな。

「そこで、患者の奇行団の一人を勧誘に行こうと考えています」

そついや前に話していた残りの二人か。かなりの曲者らしいが。

「正気つすか！」

上半身を大袈裟に仰け反らせて驚いているシュイがいる。曲者揃いの患者の奇行団に所属していた彼女が、思わず拒否反応を示すレベルなのか。

期待よりも不安が大きいのですが。

「実力は確かですからね。それにこのメンバーで必要とされる能力がありますから。性格は兎も角」

「あー、実力はあるつすよね、実力は。中身はあれつすけど」

知っている二人が内面を一切褒めないというのは恐怖でしかない。

「その団員さんの居場所はわかっているのかな？」

「わかっている訳ではないのですが、今までの階層にはいませんでしたので」

時折姿を眩ませていたヘブイは靴の情報を集めていただけではなく、団員の行方も調べていたのか。

「となると、永遠の階層か犬岩山階層にいるってことっすか」

「彼女はダンジョンから出ることはないでしょうからね。あちらはもう居ないかもしれませんが」

「あー、ダンジョンから出ることはないっすね」

残りの団員は女性なのか。何か理由があってダンジョンから出ないのであれば、残りの階層のどちらかにいると考えるのが妥当だよな。

「ってことは、まずは犬岩山階層に行って調べるべきか。そっちの方が転送陣も繋ぎやすいぜ」

「お手数をおかけしますが、よろしくお願いします」

次は犬岩山階層へ旅立つのか。こんな状況だけど、どんな場所なのか楽しみだ。団員については不安でしかないけど。

二日後、ヒュールミの調整が終わり転送陣により、俺たちは犬岩山階層へと飛んだ。

メンバーは俺、ラツミス、ヒュールミ、ヘブイ、シュイ、ミシユエルとなっている。キコユたちがいないのが寂しいが、これでも戦力としては相当なものだと思う。

「犬岩山階層ってのはその名の通り、巨大な犬の形をした岩があるところでな、小さい島が幾つか点在している水の階層だ」

転送陣の置かれた部屋でヒュールミの説明を聞いていたのだが、水がメインの階層なのか。これは予想外だったな。

「外で待ち伏せしている気配はありませんが、お気を付けて」

ミシユエルの忠告に頷いたラツミスが扉を開け放つと、目も眩むような光が注ぎ込んできた。

光に目が慣れると、そこには丸太を組み合わせた家が建ち並んでいた。小さな家の屋根は藁や乾燥させた植物の葉を使っているようだ。

破損している家が見渡せる範囲にはない。既に壊滅しているというオチじゃなくてよかったよ。

陽射しの強さは灼熱の砂階層程ではないが、清流の湖階層よりかは強い。

足下は粒子の細かい砂が敷き詰められている。水辺が近いので俺が初めに目覚めた湖畔に似ているが水平線が見えるぞ。

集落を木の杭で囲っているようだが、水辺には杭が無いので他の集落に無い解放感がある。

海外のリゾート地でありそうな海辺を彷彿とさせる。バカンスで来るなら最高の階層かもしれない。

「この階層はのんびり釣りするのが最高っす」

「団長が釣り好きでしたからね。ただ、魔物が時折ですが海から現れるのが難点でした」

流石、異世界だ。人が餌になるのか。って、今聞き逃しそうになったが、海と口にしていた。ここは湖じゃなくて海なのか……ダンジョンの中なのにといつツツコミは今更だな。

正直、このままバカンス気分を味わいたいところだが、目的があるので遊んでいる場合じゃない。

「んじゃ、とつととハンター協会に行くぜ」

もはや定番となった、階層移動してからの会長への挨拶。
この階層の会長はどういった人なのだろうか。

「お、おい、あんたら。転送陣から来たのか？」

俺たちが呑気に会話していると、先端が三又の槍を手にして袖のない革鎧を着た中年男性が駆け寄ってきた。

「うん、清流の湖階層から来ました」

「おー、そうか！ 会長に伝えてくるから、少し待っていてくれ！」
俺たちを手で制すと背を向けて全力で走り去っていく。どうやら向かう手間が省かれたようだ。

ヤシの木の様な植物の木陰に陣取り、兵士が戻ってくるのを俺たちは待つことにした。ラツミスが地面に降ろしてくれたので全員に冷たい飲み物を配っておく。

まったりしていると、遠巻きにこっちを見ている住民らしき人目が合った。

若い男性が三人に女性が二人か。男性は無地の襟付きのシャツを着ているが胸元は開いている。下は短パンか。

女性は袖のないシャツと同じく短パン。足元は足首を革紐で固定している通気性の良さそうな靴だ。

「あれでは足が蒸れることはなさそうです……」

「はぁー、変わんないっすね」

残念そうにぼやくへブイを一瞥して、シユイがため息を吐いている。

住民たちは物怖じしているのではなく、物珍しさに見物しているように思える。数ヶ月、他の階層から人が来ていなければ当然の反応か。

そんな感想を抱きながら相手と同じように観察していると、若者たちが歩み寄ってきた。

「あんたら、別の階層から来たのか？」

「うん、そうだよ」

おずおずと話しかけてきた相手に、ラツミスが警戒心を吹き飛ばす笑顔で応えた。

その対応に若者たちも気が緩んだようで、力が抜けたのが見て取れる。

「やっと、転送陣がまともに動いたのか。魚介類以外の物がようやく食えるぜ」

「飢えることはなかったけど、魔物と魚ばっかじゃ飽きるよな」

海辺だけあって魚介類が豊富なのか。海の幸かー、網焼きしたところ、醤油垂らしたら旨いだろっな。

醤油を商品として置こうかな。醤油専門の自動販売機は存在していて、もちろん購入済みだ。もろみも売っていたが並べるのは醤油だけでいいか。

「ここは魔物被害出てないの？」

「んー、そーいや魔物が頻繁に襲ってきたけど、転送陣がおかしくなる少し前に来ていた、凄腕のハンターの人たちが暫く滞在してくれてな。その間に態勢を整えて、今じゃ無理なく討伐できているぜ」

その話を聞いて仲間たちの表情が一変した。誰もがその人物に思い当たる節があったからだ。

「えっと、そのハンターたちって、もしかして……愚者の奇行団じゃなかったすか？」

「そうそう、良く知っているな。あの有名な愚者の奇行団の四人組だったぜ」

来ていたのかこの階層に。

彼らの目的は考えるまでもなく、俺たちと同じだろう。数か月前に先に来ていたということは、既にもう一人の団員と合流している可能性が高いか。

諦めるのはまだ早いが過剰な期待はしないでおこつ。

「やばいっす……でも、大丈夫かもしれないっす」

「先に接触されてしまいましたか。問題は彼女が誘惑されているか否かですね。団長たちだけなら説得は不可能だと思つのですが」

ケリオイル団長たちの誘いに乗っていないければいいけど……まずは、情報収集だ。向こうからやってくるのは、さっきいた兵士のようだから会長とご対面となるのか。

この階層のハンター協会会長はどんなキャラだろうか。今までの会長たちを思い返すと……期待半分、不安半分だ。

犬岩山階層と釣り

「やあやあ、よく来たね。歓迎するよ」

兵士が連れてきたのは男の子だった。服装は一般的に想像する貴族の格好から、袖を取り払って短パンにしたようなデザインだ。センター分けの茶色い髪にくりくりとした大きな目。利発そうな子供としか思えない。

だが、この対応から見て犬岩山階層の会長だよな。この世界では見た目は人間でも違う種族の場合がある。キコユだって見た目は子供だったが中身は成人前だった。

安易に外見だけで判断したら痛い目に遭いそうだ。

「ええと、会長さん？」

「うん、そうだよ。犬岩山階層のハンター協会の会長さんだよ」

胸を張って威張っている動作も子供らしい無邪気さが垣間見える。あれも相手を油断させる為の芝居かも知れないな。

「お姉ちゃんはオツパイ大きいね！」

目をキラキラさせて何言ってるんだ。子供らしい発言として聞き流す場面なのかもしれないが、問題は子供会長の中身。

「あ、うん、ありがとう」

ほら、ラツミスも対応に困っているじゃないか。

「隣のお姉ちゃんはまだ平らなのよね！」

「今……なんつった」

「こ、こら！ ヒュールミのこめかみに血管が浮き出て、怒りの形相になっているから早く謝るんだ。命が惜しくないのか！」

「え、ペツタンコって言ったただけだよ。あ、そっちの人は男の子かと思っただら女性だったんだ、色気皆無だね。聖職者っぽい人は笑顔が嘘っぽいし危ない感じがするよ。うわー黒い鎧とその剣カツコイイね。物語に出てくる伝説の勇者の物真似みたいだ！」

悪意はないようだけど、さらっと的確に人の嫌がるポイントを突く子だな。

「す、すみません！ うちの会長は思ったことを素直に口にするところがありません、何卒ご容赦ください」

子供会長の頭を押さえつけて兵士が平謝りしている。

必死にフォローしているのは理解しているが、つまりそれって自分もそう思っていると言っているようなものだぞ。

仲間たちの口角が吊り上がり小刻みに震えているが見なかったことにはしておこう。

「あ、えと、その清流の湖階層から来ました」

一番心のダメージが少ないラツミスが対応するのか。

「うん、知ってる。で、何しに来たの？」

「えっと、色々あって……」

交渉役には向いてないから考えがまとまらないようだ。ここは助け船を出すか。

「てがにくま」

「手蟹熊？」

子供会長には通じてないが、本命はそっちじゃない。

「あ、そっか。熊会長から手紙を預かってるから、これを読んでもらえるかな」

「そうなんだ、貸して貸して」

手紙を手渡すと素早く目を通している。隣に立つ兵士が覗き込んでいるが機密文章とかじゃないのか。

会長は何度も頷きながら笑顔で最後まで読みきったな。

「あー、だから魔物が活性化しているんだね、納得だよ。じゃあ、この異変解決は任したから！ 解決したら教えてねー、じゃあねー」

手を振って立ち去ろうとした子供会長の頭を、兵士が鷲掴みにして動きを止めた。

「じゃあねーではないでしょう。重ね重ね、ご無礼をお許しください」

何度も頭を下げて謝罪する兵士を見ると、ふとスオリの護衛という名の子守を担当している黒服たちのことを思い出した。

「痛いっ、痛いっば！ 指が脳にめり込むううう」

かなり本気で力込めているようで子供会長が逃れようと本気で暴れている。

兵士は涼しい顔をしたまま、更に握力を強めているようだが。

「手紙には人員の搜索を手伝ってほしいと書いていましたが、どのような方でしょうか。特徴を教えてください。部下たちに命じて調べさせます」

この兵士さん実は結構上の立場の人なのか。子供会長より頼りになりそうだから、協力を要請した方がいいな。

患者の奇行団についてと、探している二人の団員の特徴を詳しくへブイが説明するそうで、兵士たちの詰め所に行くことになった。

子供会長は手を離れた隙に走って逃げたので、俺たちはすることが無くなりへブイが帰ってくるまで自由行動となり、各自が思い思いの場所に散らばっていく。

シユイはこの階層の料理に興味があるので、食事のできる場所を探そうだ。

ミシユエルは予備の武器が欲しいらしく、勇気を振り絞って武器屋の場所を通りすがりの女性に訊ねている。声を掛けられた人が頬を染め潤んだ瞳で見つめているのは、いつも通りだな。

「オレは魔道具屋を見てくるついでに情報収集してくるぜ」

そう言ってヒュールミもいなくなってしまったので、残っている

のは俺とラッミスだけになった。

「何しよっか、ハツコン」

南国リゾート地の様な場所なので生身の体があつたら海水浴もいけど、今やつたら錆びる。それに魔物がいるのに泳ぐのは無謀だろっ。

となると、海の醍醐味といえば……釣りか。魚でも魔物でも釣つたら食材になるみたいだから、今晚のおかずをゲットするのも悪くない。

釣りはどうかと提案したかったが「っ」が言えないな。他の言葉でどうにか伝えて見るか。

「さかあっり」

ラッミスが眉根を寄せて口をへの字にして考え込んでしまった。いくら察しのいい彼女でも「さかなつり」には聞こえなかったか。「っ」「な」が言えないので代用してみたが無理がありすぎた。

「うおとり」

これならどうだ。意味的には同じだろう。

「さかあっり、うおとり……同じことを言いたかったのなら、うおとさかな、そして、あつりととりが同じ意味だとしたら……もしかして、魚釣り？」

おおっ、ラッミス凄いな。我ながら無理があり過ぎると思ったのに、正しい答えを導き出してくれるなんて。

「うん うん」

「やった、当たってたんだね。ええと、魚釣りかー。川魚を捕まえるのは得意だったけど、釣りはしたことないなあ。ヒュールミは好きだったみたいだよ」

釣りをせずに魚を捕まえていたのか、網とか使っていたのかな。ヒュールミが釣り好きなのは意外だ。大きな岩で胡坐をかいて釣りをする姿を想像してみたが、結構似合う気がする。

「ん、釣りがどうしたんだ？」

「あれ、魔道具屋探すんじゃないかったの？」

いつの間にか近くまで戻ってきていたヒュールミが会話に加わってきた。

「探すのに時間かかりそうだったから飲み物を買ってから行くこうかと思っただ。んで、釣りがどうした」

「ハッコンが釣りでもしたらどうだって言ってくれたの」

「お、いいじゃねえか。オレも混ぜてくれよ」

「うん、いいよ。じゃあ、久しぶりに一緒に魚捕ろうよ」

「岩投げついたり、水面殴って魚捕るのはやめろよ……」

なるほど、ラツミスの魚を捕まえていた方法が理解できた。

こうやって昔話を楽しそうに二人が話しているのを見てみると、

仲の良い幼馴染だったことが伝わってくる。

昔からこんな関係が続けてきたのだらうな、少しだけ羨ましい。

「釣り竿、どうすつか。道具屋で売っているか」

「海辺の集落だからありそうだけどね。なかったら、誰かから借りてもいいんじゃないかな」

釣り道具をお探ですか。ならば、とっておきの物がありますよ、御兩人。

俺は基本の自動販売機形態はそのまま、側面と正面のデザインを変更した。そこには赤い文字で『釣りえさ』と日本語で書きこんでおく。

商品を全て入れ替えて釣り餌だけではなく、浮きや釣り糸や針とといった釣り具を並べる。

釣りをしない人には馴染みがないかもしれないが、釣りの餌を売っている自動販売機というのは意外とあるのだ。

釣り具の専門店前もそうだが、海釣り施設で置かれていることがある。父親が釣り好きだったので、子供の頃によく連れていかれ目にするが多かった。

加工された袋に入ったアミエビだけでなく、生きたままのミミズや青いそめを売っていたのが印象的だったな。今思えば生き物売っている自動販売機って、これが初体験だったのか。

「お、なんだこれ。この文字ってハツコンの世界の文字だよな」

「いらっしやいませ」

ミミズや青いそめは陳列するとぐろいから、商品名しか書いてなかったのも再現している。釣り糸や浮きは袋に入っている状態で並

べているが。

池や川釣りならルアーの自動販売機もあるのだが、それはまた別の機会かな。

「袋の絵からして、これは浮きか。んでもって、これは針がついた糸や仕掛けか。じゃあ残りの字だけの奴は餌か？」

御明察だよ。さあ、好きな餌を選んでくれ。

「流石に竿はなさそうだな、そうだろハッコン」

「うん」

「じゃあ、竿はそこら辺の枝でも加工すりゃいいか。仕掛けを買って……餌は適当に選ぶか」

「うちが選んでいい？」

「おう、いいぜ。好きにしな」

海釣り用の仕掛けだけしか並べてなかったの、それを選んだみたいだ。

問題はここからだ。海釣り用の餌というのは女性や子供が初体験すると、悲鳴を上げて泣く子もいるぐらいの見た目をしている。

ミミズはご存知の通りだが、青いそめというのは濁った深緑や灰色の体に小さい足が無数に並んでいるミミズのような生き物だ。

慣れてしまえばどうってことはないのだが、子供の頃は触りたくなかったの餌つけは父に任せていた。

そんなグロテスクな青いそめを見た時の二人の反応を密かに期待している。ちょっとした悪戯心だが、驚いたときの可愛いリアクシ

ヨンを見せて欲しい。録画の準備もバツチリです。

「じゃあ、餌は違うのを二つ選んでみるね」

おっし、青いそめも選んだようだ。紙に包まれた小さな箱を取り出して二人が覗き込んでいる。包装紙を破いて透明のパックの中に蠢く青いそめの団体。

おう、何だろう。久々に見たら俺が衝撃を受けてしまった。体の中にこれがあるのか……商品速攻で入れ替えよう。

でだ、肝心なのは二人の反応だ。

じつと、パックの中の青いそめを見つめているのだが、表情に変化がない。

「ちょっと、見た目は違うけど川にも似たのいたよね」

「こんなもん、魔物に比べたら可愛いもんだよな」

あ、うん、そうだね。異世界で魔物や自然に慣れ親しんでいる彼女たちが、この程度で驚くわけないよね。

キヤーとか、気持ち悪くて触れない、ってリアクションは無しですか……。

フィッシング

ヒュールミがナイフで枝を削り、釣り竿もどきが出来上がったので釣り糸を括りつけている。

何の躊躇いもなく青いそめに釣り針を刺しているな。やはり、この世界の女性は遅しい。

リールが欲しいところだがない物はどうしようもない。砂浜には木製の波止場があったので、端まで移動して釣り糸を垂らしている。こつやつて海を眺めながらのんびりするのも悪くない。ちなみに俺も釣りに参加をしている。ペットボトルに釣り糸を巻き付けて念動力で操っている。正直、竿代わりのペットボトルは必要ないのだが雰囲気の問題だ。

商品として売っている物なら全て操れるので、こつやつて釣りを楽しめるのはありがたい。

「ハツコンもやれるなら、釣り勝負でもしようぜ」

「うん、いいね！ ハツコンと一緒に遊べるの嬉しいな」

「いらっしやいませ」

俺も異存はないよ。自動販売機として仲間と一緒に釣りができる日が来るとは思いもしなかった。だけど、勝負事となるなら容赦はしないからね。

「普通にやっても面白くねえから、そうだな……一番大きな魚を釣ったやつは負けた奴に何でも一つ命令できるってどうだ」

「いいよー、負けないし」

「いらつしゃいませ」

面白いじゃないか。俺が勝ったら何させようかなー、楽しみにしておこう。

時間はヘブイが迎えに来るまでとした。こっちに向かう前にハンター協会に行つて、職員に言伝を頼んでおいたので会長との話が終わったら来る筈だ。

「じゃあ、釣り勝負開始！」

ラツミスの試合開始の号令と共に勝負が開始した。

昔は面倒だと思つていた父親との釣りだったが、最終的には結構ハマったんだよな。あのポーっと何も考えずに釣りをしている感覚が好きだったような気がする。

だから、バス釣りといったスポーツフィッシングには全く興味がなかった。釣った魚は自分で食べるというのが常識だと父親に叩き込まれていたから。

「おおっ、引いてるぜ」

昔を懐かしんでいる間にヒュールミの竿に当たりがあつたようだ。釣り竿がかなりしなっているので大物なのは間違いない。

「ぬおおおっ、せいやああっ！」

裂はくの気合と共に竿を振り上げると、海面から元気よく魚が一匹飛び出してきた。

秋刀魚に見えるが背びれが異様に大きい。あと体が長過ぎる。通

常の秋刀魚二匹分ぐらいの長さがある。

「よっしゃあ、シワミが釣れたぜ！ それもかなりの大物だな」

ヒュールミが無邪気に喜ぶ姿って結構貴重だよな、録画しておこう。

「ぬぬぬぬ、うちも負けへんからね！」

「かとう」

気合を入れなおしているラツミスに負けないように俺も勢いよく発音する。

レディーファーストは大切だよな。一番手はヒュールミに譲ろう。だが、次は俺

「きたああああっ！」

今度はラツミスの竿が尋常じゃないレベルで曲がっている。あれは折れる寸前じゃないか。

「ラツミス、竿じゃなくて釣り糸を掴め！ 折れるぞ！」

「あっ、うん！」

釣り糸を直接掴んでいるが強化された手袋を装着しているので、糸で手が切れることもないようだ。

どんな魚であろうとラツミスと力比べをして勝てる訳もなく、見事な一本釣りで波止場に打ち揚げられた巨大……魚？ いや、これは人魚なのか？

全体的なフォームはマグロなのだが口がサメのように大きく裂けている。まあ、それだけなら異世界の魚なのだろうと納得できたのだが、腕が生えているのだ二本。

人の腕と似ているが指の間には水かきがある。その腕で波止場の上を這いずり海へ戻ろうとしているが、リアクションに困るな。

「これは……魚腕魔じゃねえか。逃がすなよ、ラツミス。身がかなりうめえらしいぞ！」

「捕獲うう！」

あ、やっぱり魔物なんだ。ぎょわんまって響きがいいな。

紐で腕を背びれ側に縛られている。この魚型の魔物の捕縛方法ってそうなんだ……。

改めてここが異世界なのだと達観していると、俺の釣り系にも動きがあった。

これは凄い引きだぞ、たぶん。糸を括りつけたペットボトルがミニミニ軋んでいる。念動力で糸を手繰り寄せようとするのだが微動だにしないな。

根がかりかこれは……海底を釣り上げたみたいだ。うーん、これ以上引つ張ると糸が切れそうだ。でも、万が一の確率で巨大魚過ぎで引つ張れないのかもしれない。

全力で引つ張ってみるか。切れたらその時はその時だ。

俺が悪戦苦闘していると、魚腕魔を見事に縛り上げたラツミスが近づいてきた。

「もしかして、魚がかかったの？」

「いらっしゃいませ」

海底かもしれないけど、見栄を張って魚ということにしておこう。

「手伝う?」

「おねがい」

「まっかせてー」

ラツミスが手伝ってくれるなら、本当の意味で百人力だ。糸が耐えられるなら、海底すら釣り上げられそうだ。

俺の前に進み出たラツミスが糸を掴み「とおおう!」気合一閃、一気に引つ張り上げる。水面が一気に膨らみ、そこから水しぶきを上げて飛び出してきたのは茶色い物体だった。

これは巨大な二枚貝か?

膝を曲げれば人が中に入り込めそうな大きさの貝のように見える。金属の様な光沢をしているが金属製の殻を持つ生物がいても不思議ではない世界だからな。

「でつけえ貝だな。こんな形状の魔物は覚えがねえから、突然変異の貝かね」

「美味しいのかな?」

「どうだろうな。俺も興味あるから焼いてみるか」

各自一匹釣ったことで満足したらしく、戦利品を焼いてみる事になった。ちなみに勝負は俺のが魚じゃないから判断が難しいという事で勝負は持ち越しとなり、また今度、日を改めて勝負らしい。ラツミスの外交力の高さで近くにいた漁師から薪と鉄の網を借りて来てくれたので、大きめの石を集め簡易コンロを作り上げて火を

焚いた。

秋刀魚っぱいのと魚腕魔は枝を刺して、そのまま火炙りだ。巨大な貝は別に石でコン口を作ってその上に置くことにする。

「ハツコン師匠！ 探しましたよ、何をしているのですか」

砂浜を駆けてくるのはミシュエルか。その後ろから何人かの女性がそつと後を付けてきているのは、今更触れる必要もないな。

「いらっしやいませ」

「おおー、見事な魚と……貝ですかこれ？」

ミシュエルも見たことなかったか。有名なビーナス誕生の絵で乗っていた貝も大きかったが、これはそれを上回る。上から見れば完全な円で二枚貝だとは思いが……まあ、焼き上がった時の中身を楽しみにしておこう。

商品の醤油を用意して、貝が開いたら中に醤油をぶっかけて完成だ。

「ミシュエルも食ってけ食ってけ」

「うんうん、この大きさだと食べきれないからね」

「では、遠慮なく。シュイさんがいたら一人で食べきりそうですよね」

確かにこの貝も魚腕魔もあつという間に平らげそつだ。

「呼んだっすか！」

「うわっ、びっくりした」

ミシユエルに気を取られている間に近寄ったようで、炙られる魚のすぐ側にシユイがいた。その目は脂がしたたり落ちる魚を凝視している。

「そんないじましい目で見てはいけませんよ」

あ、ヘブイも来ていたのか。全員が集まったのなら、このまま海鮮バーベキュー開始だな。

じゃあ、野菜も出すか。バーベキューといえば玉ねぎは必須だろう。栄養のバランスは大切だからね。

「それは貝ですか……おや？」

「めっちゃ大きいっすね……あれっ？」

俺が釣り上げた貝を見つめヘブイとシユイが首を傾げている。二人はこの貝を見たことあるのか。近寄ると周りを歩きながらじつと見つめて視線を一切逸らさない。

「シユイ、これってあれじゃないでしょうか」

「ヘブイもそう思ったっすか。やっぱ、そうっすよね」

ぶつぶつと小声で言葉を交わしている二人を訝し気に見ながら、ヒュールミが貝の乗っかっているコンロの薪に着火した。

「あっ、ヒュールミ、炙るのちょっと待って欲しいっすー！」

慌てて止めているが、既に火を付けた後だ。

意味がわからないヒュールミの眉根が寄っている。シユイが自分で火を消せばいいのにと思っていると、貝が大きく揺れた。

「これは危険ですね」

ヘブイがモーニングスターを取り出すと貝の側面に叩きつけて、コンロの上から吹き飛ばし砂浜に落とした。

あの反応からして魔物なのかこの貝は。それにしてもシユイもヘブイも構えを取っていない。

「どういうことだ、ヘブイ」

「失礼しました。その貝っぱいのに見覚えがありません。実は」

ヘブイが説明をしようとしていたのだが、その言葉は途切れた。目の前で二枚貝がゆっくりと開いたからだ。

「熱い……です……」

中から現れたのは前髪で目が隠れている、新緑を彷彿とさせる髪色の女性だった。

もう一人の団員

「ピティーンが……引きこもりだからって……あんまりです……」

貝の中から現れた女性は砂浜に崩れ落ちると、めそめそと泣いている。

服装は髪色と同じで袖の長い緑色のワンピースだ。その下にはジーンズのような厚手のズボンを穿いている。

炙ったのは悪いと思うけど何で貝の中に人が。もしや、異世界では珍しくもないことなのだろうか。貝人間という種族がいるのかもしれない。

「いや、焼いたのは悪かったが、何で貝の中にいたんだ？」

「貝の中にいる種族なんて聞いたことないよ？」

「私も存じてないです。ハッコン師匠は知っていますか？」

「ざんねん」

知る訳がない。この世界でも異質な状況で間違いないようだ。

俺たちは予想もしなかった現状についていけないのだが、ここに冷静な人物が二人いる。

「何をしていたのですか、ピティーン」

「とうとう、引きこもりが悪化して自分の盾に住むようになったっすか」

盾って……この貝の殻みたいなのこれだよな。この二枚貝は盾だったのか。言われてみれば円形の盾に見えなくもない。

でも、体を折り曲げて入っていたとはいえず、自分の身長より少し小さいぐらいの盾をこの痩せ気味の女性が扱えるのだろうか。そもそも、海の中にいたのに何で窒息していないのだろうか。

それに、この二人が親し気に話しているということはこの女性、探し人である愚者の奇行団の団員っぽいな。

「ピティーは……小さな島であの人の……帰りを待っていたの……そうしたら……団長たちが……家から出そうとするから……断つたら帰ってくれたの……でも、最近また……攻略がうまくいかないから……来てくれてしつこいから……盾を被って逃げたの……ぶかぶか浮かんでいたと……思ったら……沈んでいたみたい……」

声も小さく途切れ途切れに話すので、聞き手は忍耐が必要となるぞ。あと説明内容が異質過ぎて、映像が全く頭に浮かばない。

要点を抜き出すと以前、勧誘に来たケリオイル団長たちを断つたのだが、最近になってまた口説きにやってきた。

そして、あまりにしつこいからピティーは貝のような盾を被って逃げ出したと。

今の会話内容で重要な情報が一つあったな。ケリオイル団長たちのダンジョン攻略が、はかどってないということだ。まだ巻き返すチャンスがありそうだな。

「相変わらず無駄に高性能な盾ですね。操作すれば一回り小さくすることも可能で、魔法を弾き熱を遮断までは盾として有益だと理解できます。ですが、精神力を消耗して水と空気を少量なら生成できる機能は盾に必要なのでしょうか」

「ご飯があれば……暮らして……いけるわ……」

盾なのに住めるのか。盾なのに。

「まだ、捨てた男を待っていたっすか、懲りないっすね」

「シユイ！」

呆れて吐き捨てるように口にしたシユイにへブイの叱責が飛ぶと、「しまった」と声を上げて恐る恐る貝から出てきた女性に視線を向けている。

「捨てた……捨てられた……違う、違うわ……あの人はきつと帰ってくる……そう、ピティーの元に帰ってくるのおおお」

あ、泣き崩れた。まるで悲劇のヒロインのように。

「こうなったら暫くは聞く耳を持ちません。失礼しました、皆さんには何のことかわかりませんよね。この方はピティーという名で愚者の奇行団の一員です」

まあ、そつだよな。そこは今までの会話を聞いていたら予想がつく。

「えっと、泣いているけど放っておいていいの？」

「大丈夫です。発作みたいなものですから、暫く放っておけば元に戻ります」

冷たく突き放すような意見だがシユイもため息を吐いているだけ

なので、放っておいても問題ないようだ。

「彼女は昔に自分を捨てた男性のことが忘れられなくて、いつか自分の元に帰ってくると信じています。あり得ないのですが」

「だって、あの男は結婚詐欺師だったつすから。今は富豪の娘を騙した罪で、遙か北方の牢獄で一生過ごすことになっているつすよ。それを何度も説明しているのに信じようとしないうつす」

良く言えば一途。悪く言えば自分の世界に逃避するタイプなのだろうか。

今も泣いているが、その表情は悲しんでいるというより、哀れな自分に酔いしれているように見えなくもない。

「こういつちやなんだが、そんな奴を引き入れてどうすんだよ。あれ、まともに働けないだろ」

ヒュールミの言葉を濁さないストレートな物言いだが咎める声はない。誰も口には出さなかったが同じことを思っていたようだ。

「性格精神共に難ありなのは確かなのですが、能力がずば抜けて優秀なのですよ」

「口で説明しても納得できないと思うから、実際見てもらった方が早いっすね」

ヘブイとシユイが目を合わせて頷くと、砂浜に指で文字を書いているピティーに向き直った。

「会えない日々は……辛くて死にたい……でも、あの人に会いたい

……私には生きる価値は……ああ、でも待ち続けないと……」

地面しか見ずにぶつぶつと妄言を呟く彼女に対して二人は武器を構える。って、何しているんだ。シュイの目つきは冗談じゃなく本気で狙っているぞ。

何か考えがあるのだろうかとはわかってはいるが、それでも無防備なピティーに攻撃を加えるのを黙って見てもいいのだろうか。

いや、信じよう。苦楽を共にしてきた仲間を信じないでどうする。

「いきますよっ！」

ヘブイが鎖を伸ばしたモーニングスターを振り下ろし、シュイが矢を放つ。

砂浜を指で掘り始めていたピティーが、よろめくように立ち上がっただけのように見えたのだが、棘付きの鉄球も矢も彼女に触れることはなかった。

素早い動きには見えなかった。だということに、最小限の動きで避けたというのか。

「凄いですよ、この人。完全に攻撃を見切っていました」

ミシユエルが絶賛している。弟子がそう言うのなら間違いないのだろう。俺には何がどう凄い動きだったのかわからないけど。

更に二人が攻撃を加えようとすると、ピティーは貝殻と見間違えた盾を拾うと両腕に装着する。あんな巨大な盾を二枚とも使うというのか。

「何故、ピティーを襲うの……わかった……あの人をたぶらかす女からの……依頼ね……ピティーは負けない……」

脳内で妄想による物語がリアルタイムで組み上がっているようだ。どうやら設定は自分と彼を別れさせる為に二人は雇われている刺客らしい。

しかし、見事なまでの盾捌きだ。鉄球を盾の丸みを帯びている部分で受け流し、矢は正面から弾いている。

ヘブイとシユイの腕は重々承知しているので、それだけに彼女の盾を操る防御の腕には舌を巻く。

「このようにっ、プレイヤーは防御能力だけでは抜けてっ、いるのですよっ」

鉄球を操りながらヘブイが状況説明をしてきている。

「代々、盾を使った防衛術を専門に教える一族の才能を引き継いでいるっす。幼少から防御の技を叩き込まれていて、自然に体が動いているそうっすよ」

あんな重そうな盾を軽々と操り、全ての攻撃を完璧に防いでみせている。ラツミスやヘブイと同じく 怪力 の加護持ちなのだろうか。

この人は防御特化型か。盾を両腕に装着しているということは武器が持てないということだ。攻撃手段が全くない防御能力だけが高い人材。

なるほどな、確かにこのメンバーに必須の人物だ。攻撃力はミシユエルとラツミスの二人がずば抜けている。だが防御面となると俺の結果 頼りになることが多い。

もう一人、防衛能力に優れた人がいれば今後の立ち回りがかなり楽になる。ネットゲームでは相手の攻撃を引きつける役割は必須だからな。ゲームと現実を比べるのは失礼な話かもしれないが、その重要性は理解できるよ。

でもこれ、どうやって收拾をつけるのだろうか。相手はこっちを刺客か何かとと思っているようだから、話し合いに応じてくれそうもない。

二人は攻撃を止めたのだが、盾一枚を被るようにして構えている。ピーターは警戒を解くことがない。前髪の隙間から時折見える鋭い視線が二人を射抜いている。

「ピーター、シュイツすよ。もう攻撃はしないから盾を下ろして欲しいっす」

「嘘よ……シュイはもっと……背が高かったわ……ピーターは騙されない……」

「まあ、悲劇状態に切り替わった貴女には、普通の説得は無意味ですからね。ここはお任せください」

防御態勢を解こうともしないピーターにヘブイが無造作に歩み寄っている。

武器を背に戻して両腕を広げて、無害であることをアピールしているな。

「近寄らないで……貴方たちは……あの人との仲を裂く……敵なの……」

そもそも、攻撃を仕掛けた時点で説得に応じるとは思えない。仲間だと言われても信用しないのは当たり前なことだよな。

それ以前にこんな不安定な精神状態で、愚者の奇行団はどうやって彼女と共に戦えたのだろうか。ケリオイル団長たちの勧誘からも逃げていたみたいだし。

考え込み過ぎていたようで体の照明が点滅している。

「ハツコン、心配しなくても大丈夫っすよ。へブイだけは彼女を制御することが可能っす」

自信満々に言い切るな。何かしらの制御方法があるのか、期待させてもらおう。

近づいていくへブイに対して後退るピティー。今のところ状況が悪化している様にしか見えない。

そのまま、波打ち際まで彼女が追いこまれるのかと思えば、突如、動きを止めると盾を外してじっとへブイを見つめている。

胸の前で手を組み合わせているだけではなく、瞳が潤んでいる。まるで恋する乙女のように。

えっ、何をした？ こちらからは背中しか見えないのだが、何かやったようだ。

「やっと……迎えに来てくれた……のね……」

「いや、すまない。今は一時的にへブイさんの体を借りてキミと話をしている」

へブイが頭のおかしなことを口走り始めた。

「そんなっ……まだ迎えに来てくれないの……」

「本当にすまない。だけど、必ずキミを迎えに行く。僕とへブイさんは相性がいいらしくて、こうやって精神を移して体を借りることができるが……それ以外の人では難しいみたいだ……」

「そうなんだ……だったらへブイの……近くにいれば……」

「たまにこうして、話ができるかもしれない」

へブイの作った声と悲劇のヒロイン役の三文芝居はいつまで続くのだろうか。

「そういうことが。何をしているのか理解できてきたぞ。へブイがお得意の幻覚でピティの待ち人である男の顔を自分の顔に重ねているのか」

「ヒュールミ、大正解。ピティはあの屑の言うことなら何でも聞かす。こういう強引な設定でも盲目的に信じるっすよ。で、悲劇状態が解除されたら、少しまともになるっす。前までは月に一度彼氏が訪れて、団長たちと冒険を頑張るように説得する設定をやっていたっす」

取り扱いの難しい人だ。だけど、そのおかげでケリオイル団長たちの仲間にならずに済んだのだから、結果良しとしておこう。

「でも、騙して利用するのは気が引けるね」

「ラツミスの言い分もわかるけど、現実を一切見ないっすからね。赤と白が前に説得した時なんて暴れて飛び出して行って、行方知れずになっていたっす」

こういうのって精神科医でもなければどうしようもないよな。少なくとも騙されている彼女は今、とても幸せそうな顔をしている。いずれ、現実と向き合うことになる日が来るのかもしれないが、今はこれがベストな選択なのかもしれない。

「んー、オレは専門家じゃねえから、ただの憶測なんだが……わか
って芝居しているように見えるけどな。根っからの役者で、完全に
悲劇のヒロインになりきっているだけじゃねえか？」

「あなたが間違っているのではないのかもしれませんが、気には揺らぎがな
いですから」

ヒュールミとミシユエルの発言を聞いてもう一度ピティーに視線
を向ける。

確かに言動は芝居がかっているし、テレビドラマのワンシーンを
見ているかのような感じはする。もし、自分自身を騙すぐらいの演
技だとしたら恐ろしいな。

う、うーん。こういう時、キコユがいてくれたら心の声を聞いて、
本音を教えてもらえばいいのだけど。

まあ、全て憶測なのでこればかりは当人しかわからない。心は
誰にも見えないのだから。

今後の対策

「つまり、ケリオイル団長たちが勧誘に来たのですが、断って脱走して海に浮かんでいた筈が沈んでしまい、釣り上げられたということとで間違いありませんか」

「そう……よ……」

既に想い人の魂は離脱したことになっている設定のヘブイが訪ねると、ピティーは静かに頷いている。落ち着きを取り戻したみたいだ。

ちなみに魂が乗り移るとか無理な設定が通用するのは想い人が日頃から、

「僕と君とは魂で繋がっているのさ。どんなに離れていても魂になつても必ず会いに行くから」

と口にしていたのであっさり信じてくれている。彼女の思い込みの強さが怖いです、はい。

そんな二人はラブラブなカップルだったのかと誤解しそうだが、実は手も繋いだことがないそうだ。ふらつと現れては口車に乗せられて、稼いだお金を渡していたらしい。

シユイ曰く「財布代わりにしか、思ってたかったすよ」だそう
だ。

彼女の恋愛事情に関しては一旦置いておいて、別なことがさつきから気になっている。あんな重そうな盾なのによく海に浮かんだな。実はああ見えて重くないのだろうか。特殊な軽い金属で加工されているとか。

「ぬおおおつ、これ持ち上がんねえぞっ！」

「こ、これはかなりの重量ですねっ！」

砂浜に置かれている盾をピティーの許可を得てから、ヒュールミが興味本位で持ち上げようとしているが全力で踏ん張っても盾が浮くことはなかった。

続いてミシユエルが手にかけると、苦戦はしているが何とか持ち上がったようだ。ただ、自在に扱うのは無理なようで、苦労して盾を構えてはみたがよろめいている。

そんなに重いのか。それをあんな細腕の女性が二枚も軽々と……ラツミスと同じく怪力の加護持ちの可能性が高そうだ。

「普通の人じゃその盾は扱えないっすよ。ピティーは重さの加護があるっすから」

「重さの加護って何？」

こういう質問はヒュールミにするのがお決まりとなっているので、みんなの視線が彼女に集まっている。

「重さの加護ってのは、触れている物の重さを変えられることができる加護だぜ。確かその手で触れた物の重さを軽くしたり重くしたり自在に操れるのだったか」

そして、期待に込めて丁寧に説明してくれるヒュールミ。

「そつ……でも……手で触れた……物だけ……」

「プレイヤーも肯定しているので間違いない。触れた物の重さを変えられるから両手に巨大な盾を装着できるのか。」

「服装が軽装なのは重さを軽くする能力が両手で触れるという制限があるから、重量のある防具を装備できないってことかな。」

「その重さの加護で盾の重さを軽くして海に浮かんでいたのか、なるほど。」

「勧誘ってどれぐらい前に」

「お腹が……空いているから……二日前ぐらい……」

「つまり、二日も何も食べてないってことだよな。それはダメだ。痩せ型なのに食事をちゃんと取らないと美容と健康に悪影響を与える。」

「しゅい」

「なんっすか」

「あのこくう」

「そう言って コンビニ自販機 にフォームチェンジして食べ物を選ばずらつと並べる。何が好きなかわからないので、シュイに選んでもらおう。」

「ハツコンはプレイヤー食べるっすか？」

「シュイには通じなかったか。ハツコン語検定ではまだ初級だ……じゃない、俺がもうちょっと言い回しを考えないとダメだな。」

「ピティーは何が好物なのか聞いているみたいだよ」

流石だよ、ラツミス。ハツコン語免許皆伝を授けよう。

「そういう意味っすか。確か甘い物が好きだったっすよ」

じゃあ、スイーツ系のラインナップを増やすか。商品を全てスイーツで揃えると、女性陣がじろじろとこっちを見ている。そっちが釣れたか。

「いらっしやいませ」

いつもの挨拶をして女性陣にスイーツを売り、シュイがピティーの分も購入すると彼女の元へ持って行ってくれた。

「ピティーお腹空いているっすよね、これを食べるといいっすよ。ハツコンのは美味しいっすから」

「ハツコン……?」

「あの四角い箱があるでしょう。優秀な魔道具で人の魂が宿っています。お金と引き換えに様々な商品を購入することが可能なのです」

へブイの説明を聞いても良くわかってないようだが、渡されたエクレアが気になっていようので、じっと手元を見つめている。

「こっやって開けて、齧りつくっす!」

同じ商品を手にしていたシュイがエクレアを頬張ると、瞬時に表情が緩み幸福を顔中で表現している。

その姿を見て警戒が薄れたようで、ピティーもエクレアを口にしていた。

「あつ……美味しい……」

前髪が邪魔で口元しか見えないのだが、口角が垂れ下がり喜んでくれているのがわかる。

好評のようで何よりだよ。何をするにもまずは腹を満たして活力を回復しないと。

「最高つすね、この中にクリームが入っているのは！ あと、これと、これと、これも三つずつ買うつす！」

シユイは程々にしような。

全員がスイーツに夢中になっている間に魚も焼けたので、このままピティーの歓迎会も兼ねて本格的に食事をする事になった。

先にスイーツを食べたので順番は逆になってしまったが、魚も魔物も俺の提供した醤油を掛けたら驚くほど味が良くなったそうで、問題なく食べきりそうだ。

「食べながら今後どうするか話し合いましょうか」

「そうだな。団員のピティーを勧誘できたから、当初の目的は完遂できちまったな。しいーしいー。後は指揮官を探して指輪の奪取、もしくは破壊ってところか」

ヒュールミ、女性なのだから野菜を刺していた串で、堂々と齒の隙間に詰まったものを取らない。俺は気にしない方だけど、オツサ
ン臭いよ。

「ケリオイル団長はまだこの階層に居るのかな。だったら、会えるんじゃないかな？」

「そうか。勧誘に失敗したようだけど、未だに探している可能性はあるのか。」

「でも、見つけたところでどうするよ。叩きのめしてふん縛るか」

「協力関係ではあるようですが、冥府の王についての情報は最低限しか知らないでしょうし。ただ、監禁しておけばダンジョン制覇は不可能となりますが」

「やはり、今の内に何とかしておいた方が良いのではないのでしょうか。ですよ、ハツコン師匠」

「う、うーん、ここで同意を求められても困るな。」

「今捕まえておけば時間制限がなくなり精神的にも有利にはなる。だけど、一つ心配事がある。」

「ぼていさん」

「もしかして……ピティーの……」

「うん」

「ごめんね、俺の話せる言葉だとこれが精一杯だから。」

「よにんだっ」

「たのだんち」

「ようたち」

「四人……ううん……二回目の……勧誘に来た時……白い女性……もいた……」

あー、やっぱり団長たちだけで行動していたわけじゃないのか。それに白い女性ってもしかして、彼女のことか。

「このかた」

そうやって 液晶パネル を取りつけて、砂漠の柱で会った雪精人であるスルリイムを映し出す。

「そう……この人……」

「マジかよ。スルリイムがいるとなると話が違ってくるぜ。やっぱり、転送陣を利用しないで移動する方法があるみてえだな、奴らには」

逃げる際も瞬間移動したように見えたから、階層を自由に移動する方法があるのかもしれない。そうなると、清流の湖階層も危険だということになるので、熊会長たちに伝えておいた方が良さそうだ。

「私の咆哮撃で吹雪を掻き消すには……まだまだ精進が足りず申し訳ありません」

「あの吹雪は厄介過ぎますね。それにここは海です、水が豊富にありますので多種多様な攻撃が予想されます。キコユさんがいない今の我々では避けるべき相手ですよ」

「ちょっときついですよね。本気でやりあうなら、助っ人が欲しいところっす」

助っ人はありかもしれない。熊会長に得た情報を伝えて誰か助力を願ってみようか。あの吹雪も魔法のような仕組みだろうから、シメライお爺さんなら対応できそうな気がする。

勝てなくても構わないからスルリムを封じてくれる人さえいれば、手の内を明かした団長たち四人なら俺たちで対応できる。

「じゃあ、一度、熊会長に聞いてみようよ。誰か手が空いてませんか」

誰も反論する人がいなかったので、ラツミスの意見が通ることになった。

全員で戻る必要はないだろうとヒュールミだけが転送陣で一旦、清流の湖階層に戻ったので、俺たちは今度こそ各自別行動となり、俺は犬岩山階層で商売を開始する。

カリオスたちに貰った看板を活用して購入方法を記載して置くと、物珍しさに人が集まり順調に商品が売れていく。

暑い場所だとアイスと水の売れ行きが好調だ。ジュースも売れるには売れるのだが、本当に喉が渴いていると水を欲するようだ。

それに、この井戸の水よりも冷たくて美味しいとお客が言っていた。

順調に商品売り捌いてお客の波が途切れたところで、視界の隅にヒュールミが映った。どうやら、交渉を終えて帰ってきたようだ。なんか俯き気味で元気がないように見えるな。

「おう、ハツコン。俺にも何か冷たい物貰えるか」

「いらっしゃいませ」

声に覇気がない。助っ人を借りられなかったのかもしいな。そんなに気にしないでいいのに、お疲れ様でした。

「はあああ、助っ人の交渉はいけたんだが。まさか、そっちが来るとはな」

あれ、助っ人は頼めたのか。お爺さんは無理だったようだけど、熊会長が選んだ人材なら間違いはないと思うのだけど。

「ひっさしぶりに、犬岩山階層に来たが！ 灼熱の砂には勝てねえな！ 温い、温すぎるぜえっ！」

突如響いてきた脳天を揺さぶるような大声に聞き覚えがある。

何故、灼熱の砂階層の会長をチヨイスしたんだ、熊会長。

暑苦しい

「もっと、もっとだ！ この身を焦がすような暑さがたんねえぞっ！」

灼熱の砂階層で世話になったお礼にやってきてくれた、灼熱の會長がうるさい。

暑いとテンションが上がる人らしく、會長としての事務作業よりも現場で戦うことに特化した人だそうだ。

「すっごく元気な人だね」

「あれは元気って表現に当てはまらないだろ。無駄に暑苦しいぞ」

ラツミスは高評価のようだがヒュールミがうんざりしている。

しかし、熊会長は何故あの人を選んだのだろうか。お爺さんに助力を頼むものだと思います。

「本当は爺さんに来てほしかったんだが、熊会長の依頼で大食い団と死者の嘆き階層に向かっていてな。雪精人の話をしたら灼熱の會長を紹介された」

ということはあるの冷気攻撃に対して何かしらの対応ができる人材なのか。

こう言うてはあれだが、魔法系の能力を保有しているタイプには見えない。俗にいう脳筋タイプの格闘家としか思えないのだけど。武器も所持していないみたいだし。

「熊会長が勧めたのだから実力はあると思うぞ。ただ、あの暑苦しさに付いて行けるかだが」

「ピティーさんが元気ないから、灼熱の会長と足したらちようどいいよー!」

その発想はなかったよ、ラツミス。バランスという点では確かにそうかもしれないな。

「まあ、あれだ、全員戻ってくるまで待つか」

探しに行く気力もないようで、俺たちはみんなが戻ってくるのを待つことにした。遠くの方から「海だぜええええ!」やら「うおおおおっ!」という叫び声と共に水飛沫が見えたりしているが気にしないでおこう。

一時間ほどして全員が戻ってきたので灼熱の会長が助っ人に来てくれたことを説明する。そうしていると晴天の空に映える太陽に負けない笑顔の灼熱の会長も戻ってきた。

「思う存分、体を動かすと気持ちいいな! 海水浴最高だぜ!」

これがテレビの映像なら、この人が話している時だけ音量を下げるたい。

「ひいひい……」

ピティーが灼熱の会長を見て眩しそうに目を細めて怯えている。陰と陽の関係だよな、この二人。

「お前さんちゃんと飯を食ってるか! 元気出せよ!」

「ひい……た、助けて……」

空気の読めない灼熱の会長が距離を詰めると巨大な盾の中に引きこもってしまった。

「お、何だこの貝みてえな盾！ 面白いじゃねえかつ！」

貝のように見える盾に興味を持った灼熱の会長が小突き回している。この二人、最悪に相性が悪いな。

「灼熱の会長、そこら辺で勘弁してあげてください。少し人見知りなのですよ」

「おっ、そうか。そりゃ悪かったな！ がははははっ！」

これっぽっちも悪びれる様子もなく灼熱の会長が腰に手を当てて笑っている。

灼熱の会長がいるだけで雰囲気が出るいを通り越して熱い。暑いじゃなくて熱い。

「では、今後の方針ですが。まずはピティンが引きこもっていた島を目指しましょう。持って行きたい私物もあるそうですから。そこにケリオイル団長たちがいるかもしれませんのでご注意ください」

「団長たちへの対応はどうするっすか」

俺たちとしては説得が無理なら捕縛したいところだが、元団員の三人の意見を尊重したいと思っている。

「私は一応説得を試みますが、頑固ですからねあの人たち。意見を
変えることはないでしょう。そうになると、力でねじ伏せて清流の湖
階層の牢屋にでも放り込むのが一番かと」

「そうなるっすよね。仕方ない……ことっすよね」

「団長と副団長……夫婦……紅白が息子……私も……いずれ……夫
婦に……」

団長たちの現状は隠さずに当人たちからほぼ正確に伝えられてい
て、俺たちが現状を説明するまでもなくピティーは理解していた。

団長たちの行為の善悪がどうというわけではなく、無理やり外に
出されるの嫌だったという理由でピティーは抵抗していたようだ。

他を犠牲にしてまで誰かの為に行動することは否定しない。

だからこそ、団長たちはまだ説得の可能性があると考えて、残っ
ている可能性もあると考えている。

「そこで争いがなければ、今度は指揮官を探しに行くことになりま
すが犬岩山階層は広いので、まずはあの犬岩山を目指しましょう」

へブイが指差す方向に全員が目を向ける。

階層の名の元となったお尻を付けて座る犬の形をした岩山が、海
の上にちよこんと乗っているように見えた。

距離があるというのに正確にその姿が見えるということは、かな
りの大きさと見て間違いない。

「確かあそこに階層主がいるからな。おまけに魔物がわんさか密集
しているらしいぜ」

「それだけに指揮官がいる確率が高いかと。ただ、ここの階層主に

関しては手を出さないようにしてください。このメンバーでも勝てるとは思えませんので」

この意見には誰もが同意している。灼熱の会長なら「気合で倒すぜ、気合だ！」ぐらい言い出しそうなイメージがあるが黙って頷いている。

それには訳がある。信じられないことに、あの巨大な犬岩山がこの階層主なのだ。十年前に一度倒されてから一度も倒されていない。こちらから仕掛けなければ無害な岩山なので誰も手を出さないでいる。

近くに寄らないと正確な大きさはわからないが、あれと戦うなんて怪物を相手にするようなものだろう。

前回、あんなものをどうやって倒したのか気になるが、当時参加したメンバー以外には討伐方法が知らされていない。

「我々の目的はあくまでダンジョンの異変の解決です。冥府の王に関する情報を集めてはいますが、余計な戦いは避けられるのなら避けていきましょう」

ヘブイは靴以外に関しては優秀な指導者になれそうな器だな。そういうや、このチームのリーダーって誰なのだろうか。全員の立場が公平でまとめ役はヘブイかヒュールミなのだがリーダーという感じではない。

知名度と実力ではミシユエルが適しているのだが、コミュ障の彼に任せるのは酷だろう。

ラツミスはムードメーカーの立ち位置だよな。今になって個性の強い面子を取りまとめていたケリオイル団長の有能さが理解できたよ。

「となると、まずは船をどうするかだな。犬岩山会長に相談してみ

っか」

ピティーンのように盾を船にするわけにはいかないから、船の確保が最優先事項か。

船といえば客船でもあるフェリーの中は貴重な自動販売機が多くて、何度か自動販売機目的で乗船したことがある。

いつでも利用できるという点が評価され、自動販売機のラインナップが充実しているのだ。飲み物だけではなく独創性のある自動販売機が置かれていてお勧めだ。

パン、お菓子、アイスは言うまでもなく、そこにしかない手作りのパスタが置かれていたり、他では見たことのない冷凍食品が並ぶ自動販売機もあった。

そこで購入してから備え付けの電子レンジを使って自分で温め直さないとダメだったが。味に関しては……当たり前外れが大きかったとしておこう。

船に関しては自動販売機としては昔を懐かしむことぐらいしかできない。商品に船はないからね。ここは話し合いの結果を大人しく待つしかないな。

交渉事はヒュールミとヘブイ、そしてハンター協会の会長がいた方がいいだろうと、灼熱の会長も同行してもらった。

また待つことになった俺たちは再び波止場に向かい、残った全員で釣りを再開する。

メンバーは俺、ラツミス、ミシユエル、シュイ、ピティーンとなった。

意外なことにピティーンが一番釣れていて、次にミシユエル、そして俺。シュイとラツミスは竿がピクリとも動いていない。

「釣りは……穏やかな……心で……」

穏やかというか存在感がないので魚が警戒心を抱かず釣られている気がする。この階層で生活していたので釣りの技術もあるようだが。

「でし たいり」

「よう だね」

「ハツコン師匠、お褒めにあずかり恐縮です。魚の気配を探って釣り糸を垂らしていますので、そのおかげかと」

意外な気配を読み取る能力の利用方法だな。魚のいる場所がわかるのなら釣れるのも納得だ。

「大物くるっすよー。美味しく食べてやるから、さっさと釣られるっす！」

その食い気を感じて魚が寄り付かないのじゃないかな、シユイ。いっそのこと水面近くにいる魚に矢を撃ち込んだ方が効率的な気がする。

「あれっ、あの魔物が釣れてから全然釣れないね。何でだろう、ハツコン。ちゃんと餌も付けているし、同じ場所ですつと頑張っているのに」

「ごんねん」

前回、魔物が釣れたのは運が良かっただけかもしれないね。

基本的に落ち着きがないタイプだから釣りに向いてないようだし、常に俺に話しかけていて波止場から足を垂らして揺らしているから、それを見て魚が逃げているのかも。

俺は釣り系も商品なので 念動力 で操れるメリットが大きい。感覚はないが浮きが沈んだ瞬間に一気に引き上げることが可能だから、魚を逃がすことはまずない。

結局、ヘブイたちが戻ってくるまでシユイとラツミスは一匹も釣れなかったが、その代わり俺たちが大漁だったので晩飯のおかずは確保できた。

こんな状況でもまったりとした日常を送れるというのはありがたい。息抜きは大切だからね。

その後、実は俺が釣り上げた中に微量ながら毒を含む魚がいて、俺と灼熱の会長以外が腹痛となり半日潰れることになったのは、こだけの秘密だ。

海洋ロマン

この階層は小さな島が点在していて、幾つかの島にはピティーのように変わり者が住み着いているそうだ。島によっては魔物がいるのだが、島の数が多すぎてこの階層の会長も全てを把握している訳ではない。

今回、ピティーと会えていなかったら調べられていない数十もの島を、しらみ潰しに探す予定だった。

「でも、ピティーはなんで犬岩山階層に住むことにしたんっすか？」

腹痛から復活した面子と波止場で船が来るのを待っていると、シユイがピティーに話しかけていた。俺も興味があるので聞き耳を立てている。

「彼が……海の見える……二人きりの……場所で……住みたいって……言っていたから……」

「そういうことっすか。一人じゃ不便じゃないっすか」

「一人の方が……気楽……彼は別……」

寂しい告白だが、ミシユエルが目を閉じて大きく頷いている。コミュ障の彼としては同意見のようだ。

その後もあれこれとシユイが話しかけているが、ピティーはポツリポツリと小声で言葉を返すだけなのだが、独りが好きだと言った割には迷惑そうな感じではない。

「あの性格だとシユイのような明るく朗らかな性格は苦手そうなのなんだが、心なしか楽しそうだな」

「不思議なことに何故かシユイとだけは会話が普通に成り立ちます。二人は昔からこんな感じですからね。何だかんだ言って仲が良いみたいですよ」

幻覚で想い人の振りができるヘブイと、患者の奇行団の中では仲の良いシユイがいる俺たちのチームに彼女が加入してくれたのは、今思えば必然だったのか。

「船まだかなー、交渉上手くいったんだよね？」

「おう、ガキ会長が「ついでにこの階層の異変も解決するならいいよー」って、機嫌よく貸してくれたぞ」

波止場で足をぶらぶらさせながらラツミスがヒュールミに質問している。そっぴや、最近では交渉事を彼女に任せっぱなしだな。

口が悪いので誤解されがちだが頭の回転は断トツで早いし、口も達者なので一番向いている人材だ。ただ直情的なところがあるので補佐がいると尚良し。

船を思ったより簡単に借りられたのは助かった。階層の異変解決は目的の一つだから、これこそ渡りに船というやつか。いや、何か違うな。

なんにしろ、これで海へ繰り出すことが可能となった。自動販売機としては海上ではフェリーや漁港で見かけた商品縛りとか面白そうだ。

「あつ、あれかな！」

勢いよく立ち上がったラツミスの指差す方向には一隻の船があった。

大きさとしては結構立派なクルーザーぐらいだろうか。総勢、七名プラス一台が乗り込んでも余裕がありそうだ。

木製の船体なのだが至る所が金属板で補強されている。魔物がいるのでこうでもしないと、直ぐに沈められるのか。船首には犬の頭が彫り込まれているのが印象的だ。

「先つちよの犬がカツコイイね」

「あれは魔物避けを兼ねているそうだけ。ここの階層主である犬岩山に似せることで、敵じゃないですよって、アピールしているつもりなのだろうな」

「それって、効果あるのかな」

「さーてな。まあ、気休めにはなるんじゃないか」

実際の効果は不明だが船員にとってはお守りのようなものなのだろう。精神的に少しでも気が楽になるなら意味はある。

「さて、お話はここぐらいにして乗り込むと致しましょう」

へブイがそう言うと全員が手荷物を担いで乗船していく。

船旅楽しみだなー、唯一の心配事は海に落ちたら壊れそうなことぐらいだ。ポイントが潤沢なので 結界 で暫くは維持できる。だから、落ちても直ぐに壊れる訳じゃないけど。

「ハツコンは何処に置いて欲しい？」

甲板でラツミスがそんなことを訊ねてきた。

配置場所か……船内に置かれるのが自動販売機として正しい立ち位置かもしれないが、折角の海だから景色を楽しみたいよな。

船の揺れが激しくなればラツミスが中に入れてくれるだろうから、船内に繋がる入り口付近がベストか。

俺は商品のペットボトルを取り出し 念動力 で浮かせてから 結界 で扉脇に吹き飛ばした。

「あ っ ち」

「うん、わかったよー」

念の為に設置用コンクリート石版も出して安定させておこう。これでちよつとやさつとの揺れで海に放り出されることはないだろう。この船を操作する船員も三人同行してくれるので、船のことは任せっきりで大丈夫らしい。お礼に船員割引を実施させてもらおう。

船員は陽に焼けた褐色の肌をしている中年の男性だ。服装は半袖半ズボンでシンプルなデザインをしている。

「海のことなら俺たちに任せな！ 着くまではのんびり過しておいてくれや」

真つ白な歯を剥き出しにして豪快に笑う顔を見ているだけで、頼りになる感が溢れている。

準備は万端。さあ、船旅の始まりだ！

「マジで……死ぬ……」

「船って……こんなにきついんだ……」

ヒュールミとラツミスが仲良く揃って船のへりにしがみ付いて、顔を海上へと向けている。さっきまでは口から別の物が出ていたので話す余裕がなかったのだが、今は胃が空になって出す物がなくなり、代わりに愚痴が零れている。

船酔い辛そうだな。他の面子は船には慣れているのか平然としているのだが。

乗り物酔いの薬は商品に無いけど、少しでも症状を緩和させる物はなかったかな。蜜柑とかの柑橘系は酔いが悪化すると聞いたことがあるような……やっぱり、胃をさっぱりさせるのが良さそうだ。

個人的な感覚だと炭酸ジュースがいい気がする。微炭酸の物を選んで近くでへばっている二人に声を掛ける。

「いらっしやいませ」

そう言って二人の足元にジュースを転がす。血の気の引いた二つの顔が振り返ると、力なく片手を上げて受け取ってくれた。

二人は暫く復帰できそうにない。色々と食べ物も用意していたのだが、食べるにしてもゼリー系やあっさりした物じゃないと胃が受け付けないだろう。

「かなり酷いっすね。まあ、二日もあれば慣れると思っつすよ」

豪快にカップ麺をすすりながらシユイが二人の背を見つめている。彼女は相変わらず食欲旺盛で、食べる姿を見るだけでも吐き気が込み上げる二人から、近寄らないでと釘を刺されていた。

平常時ならハムスターのようで微笑ましい食べっぷりなのだが、二人には心の余裕がないからな。

「気分が優れないのであれば靴を脱いで、足の締め付けを解放した方が良いのですが」

ヘブイが言うのと純粋な親切だったとしても、まず疑ってしまう。今回の発言も二人の足元を凝視しているので判断が難しい。

船首付近ではミシユエルが大剣を素振りしている。結構揺れているのだがバランス感覚が人並み外れて優れているようで、全く苦にしていない立ち回りだ。

師匠として何も言うことはないな、うん。

「海もいいな！ 砂漠に海を掘るか！」

船首にある犬の頭に乗っかり、大海原に向かって意味不明なことを叫んでいるのは灼熱の会長か。悪い人ではないのだが、ピティーが目を合わそうとしないくらい苦手としている。

近くに巨大な二枚貝が転がっているが、たぶんまた絡まれて引きこもってしまったのだろう。

光と影というよりは灼熱の太陽と深淵の底と表現した方がしっくりくる二人なので、一生分かり合えないような気がする。

「おいおい、ピティー折角の海だぞ！ 盾の中に閉じこもっているんじゃないよっ！」

「ほつといて……お願いだから……」

まあ、灼熱の会長はガンガン踏み込んでくるけど。

巨大な貝にしか見えない物体に話しかける、アロハシャツの男……今日もいい天気だ。

折角、異世界の海に来たのだから大海原を満喫しないと。水平線

を眺めていると、海の上にぽつんと小さな点があるのが見えた。あれって島なのかな。距離があり過ぎてよくわからないけど、進路方向にあるのでたぶんそうだと思う。

「おっと、何かありますね。どれどれ」

へブイが 感覚操作 で視覚を強化して、俺が見ている方向に目を凝らしている。

海だと目印が無いので距離感がつかめない。だから、あれまでどれだけ距離があるのかさっぱりだ。

「これはこれは、皆さん敵のようです。迎撃の準備を」

えっ、島じゃないのか。もう一度、それを観察すると……僅かだが動いているように見えなくもない。

甲板にいた仲間たちが一斉に集まってきているのだが、ラツミスとヒュールミが這いつくばったままにじり寄る姿がちょっと怖い。

「どのような敵なのでしょうが」

「触手のような物が何本か見えますね。正確な大きさはわかりませんが、この船より少し小さいくらいでは」

ミシユエルの問いに応えたへブイの触手という発言を聞いて、海の生き物としてあり得そうな相手が二種類思い浮かんだ。

ファンタジーの海といえば定番中の定番、大きなタコカイカだろ
う。

「遭遇……したんだ……」

大きな貝が少しだけ開き、そこからピティーの声漏れる。

この貝で魔物が釣れないだろうかと一瞬そんな発想が頭に浮かんだが、口にするのは止めておいた。

初の海上戦となるのか。仲間の実力は把握しているけど、船上だと勝手が違うよな。

みんな油断だけはしないでくれよ。

海上戦

水飛沫を上げて、巨大な何かが迫ってきている。

確かに触手のような物が何本もうねうねしているようだが、この距離だと正確な形がわからない。

「よくわかんねえな、距離があり過ぎて。海の魔物は手が多いのが結構いるから、判断が難しいんだよ」

魔物についての知識が豊富なヒュールミが目を細めて前方を睨みつけているが、距離があり過ぎて識別がまだ無理なようだ。

双眼鏡や望遠鏡つて自動販売機の商品として見たことが……あつ、あれがあつたな。展望台に置いてある、有料の双眼鏡が。

遠足や旅行先で一度は利用したことがある、あの百円を入れたら数分だけ見ることが可能な、据え付けてある双眼鏡。

これは 物品自動販売機 ではなく、ランク2から使えるようになった 自動サービス機 の方だ。ジャンル分けについては熱く語りたいが、今は時間もないので自重しよう。

フォルムチェンジしたボディーは深緑色で統一しておいた。小学生の時に初めて使った双眼鏡がこれだったからね。

「あれ、ハッコン……瘦せたね」

かなりすらつとしたフォルムで、元の自動販売機の名残が微塵もない。

「おつ、これって望遠鏡みたいなやつか？」

興味津々といった感じのヒュールミが俺の体を撫でまわし、体の隅々まで観察している。好奇心が船酔いを上回ったのか、すこぶる元気だ。

しかし、そんなに熱心に見つめられると照れるな。

望遠鏡はこの世界にもあるのか。双眼鏡って望遠鏡よりも後に作られたって話を聞いたことがあるけど、物知りのヒュールミが知らないってことは、この世界には存在していないっぽい。

「おつ、銅貨一枚で見えるようになるのか。おっし、使っぜ」

硬貨が体に入り込む感覚があり、俺の視力も一気に増す。

ヒュールミが覗き込んで見ている風景が俺にも見えているように操られるままに視界が変わっていく。

「めっちゃ見えるじゃねえか。おっし、いたいた」

「おーあれが、迫ってきている魔物……か。何だあれ、タコでもイカでもないぞ。」

触手に見えたのは真っ白で異様に細長い人間の腕。それが何本も魔物の体から生えていて、クローリングして泳いできている。

頭は人のように丸く胴体もあるのだが、触手の様な腕を除けば白いおたまじゃくしのようなようだ。ただ、頭には黒い粒のような目が無数に付いていて、かなり気持ち悪い。

「オレ、ああいうの苦手なんだが……」

青いそめは平気だったのに、あれはダメなのか。でも、気持ち悪さはわかる。何と云うか人型に近いから余計に気持ち悪さが強調される姿だ。

「あれは、多腕人魔か。海で死んだ人々の魂が集まり魔物と化したって話だぜ。身体のデカさはこの船より一回り小さいくらいか。強さは結構ヤバいぜ。地上なら負けねえだろうが、ここは海だ。海に引き込まれたら、助からねえだろうな」

「ということは、遠距離で倒した方がいいんだよね」

「まあ、そうだが……こっちで遠距離担当はシュイぐらいだろ。ヘブイのあれも鎖が伸びたとしても、あの腕には負けるだろうからな」

魔法を使える人材もないし、今後の課題としては魔法関係の能力者か。今はない物ねだりをもどうしてもしようもないから、現状の仲間たちで何とかしないと。

「銚ならありますぜ、使ってくださいえ」

船員が船倉から大量の銚を運んできてくれた。これだけあれば、近づかれる前になんとかなるかもしれない。

「ありがとう。じゃあ、投擲開始していい？」

「私もお手伝いしますよ」

ラツミスとヘブイが銚を手に行っている。二人は 怪力 の加護があるのだから期待できる。ただ、問題は船酔いで足元がおぼつかないのと、元来の 。

「おっし、やってくれ！」

ラツミスとヘブイが銚を全力で遠方の敵を目掛けて投げつけた。

風を切る音が聞こえ、風圧でヒュールミの髪がなびく程の威力を秘めた鎧が多腕人魔を目指して突き進んでいく。

単純な腕力の差でラツミスは投げた鎧が一足先に多腕人魔に届きそうだが、当たることなく少し離れた位置に着水している。

あー、やっぱりな。ラツミスはコントロールがあれだからね……。

そして、ヘブイの投げた鎧は敵の肩口へと突き刺さった。一本程度では殆どダメージを与えていないようで、泳ぐ速度に変化は感じられない。

「つ、次いくね！」

「投げ続けましょう」

第二投目、ラツミス外れ。ヘブイ背中付近に命中。相手の速度変わらず。

第三投目、ラツミスの鎧は後方の海面に突き刺さる。ヘブイの鎧は頭を掠めたようだ。

「距離がかなり詰まってきましたね」

「矢も一応撃ち込んでみるっすけど、あの巨体だと期待はしないで欲しいっす」

「では、私も参戦させてもらいます、ハツコン師匠！」

うん、俺へのアピールはいいから早く投げて、ミシュエル。

かなり距離が迫ってきているから、そろそろ何とかしないと船がヤバいかもしれない。

シュイの矢が相手の目らしい黒い粒を一つずつ潰しているが、これじゃキリがないし、あれが本当に目なのかも怪しい。

銛もあの多くの手で弾き出したぞ。向こうもこちらの攻撃に対応してきたのか。

「もおおおっ！」

そして、相変わらずラツミスの銛は当たらない。

「これは……危ないわ……あの人に会うまで……死ねないから……じゃあ……頑張ってね……」

「ピティー、ずるいつす！」

ぼーっと眺めていたピティーは盾の中に退避した。自分だけ安全な場所で生き延びるつもりか、良い性格をしている。

「もっと、大きくて当てやすい物ないかなっ！」

ラツミス地団駄踏まない。甲板に穴が開くよ。

もっと大きな投げられる物と言われてもな、俺ぐらいしかないと思うけど絶対に投げないだろうし。

重くて強力で威力のありそうな物。その時、全員の視線が一つの物体へ向けられた。巨大な二枚貝に見える盾を重ね合わせたあれに。

「なあ、ヘブイ、シュイ。これって水に浮くんだよな」

「ええ、重さの加護で軽くすれば海に浮かぶようです」

「こっやって鎖で括っておけば、後で回収も楽っすよね」

ヒュールミの問いにヘブイが頷き、シュイが手際よく細めの鎖を

巻き付けている。その鎖は錨に繋げる予備の品みたいだ。

一瞬だけ止めようかとも思ったが、他に案が思い浮かばなかった
ので口を挟まないことにした。

「えっ……何を……しているの……」

盾の中で状況が把握できていないピティーの焦る声が流れてくる
が、全員が聞こえなかった振りをしている。

「ラツミス、これ投げていいぞ。外れても回収できるから安心して
いいからな」

「えっと、本当にいいのかな」

「あと数十秒で魔物が到達するぞ。迷っている時間はねえ。なら代
わりにハツコンに飛んでもらうか？」

「いらっしやいませ」

まあ、俺は 結界 で浮かべるからそれでも構わないけど。女性
を危険に晒すより自分が飛んだ方がマシだから。でも、悩んでいる
時間はないみたいだよ、ラツミス。

敵がハツキリと確認できる距離まで迫っている。

ここまで接近してくると敵の気持ち悪さが際立つな。あの巨大な
顔の無数の目らしき突起物に、異様に白く細長い腕。

それを見たラツミスは吹っ切れたようで、ピティーが入った盾を
持ち上げた。

「な、何が……ねえ……何が起こって……」

「ごめんね、ピティー。水に落ちたら重さを軽くして浮かんでねっ
！」

「どづいう……ことな……のおおおおおおお」

助走を付けてから、ラツミスが全力で放り投げる。

風を切り裂く空飛ぶ二枚貝が、悲鳴を響かせて遠ざかっていく。
残り十メートルを切っていて相手の巨体もあり、投げつけられた
盾は相手の顔面のど真ん中にめり込み、そのまま後方へと突き抜け
ていった。

「どんなもんだい！ ってね。見てくれた、ハツコン！」

かなり鬱憤が溜まっていたのだろう。攻撃が命中して、ラツミス
が飛び跳ねて喜んでいる。気持ちはわかるけど、威力があり過ぎた
みたいだよ。

敵を真つ二つに切り裂いた盾が、そのまま水面を跳ねて遠ざかっ
ていくのを見て、体内で機械が異音を上げている。

あっ、これはいけない。

「がしっしして」

最大音量でラツミスに注意を促す。

盾に括りつけていた鎖が凄まじい速度で海へと流れていく。

このままだと、あっという間に全ての鎖が海へ飛び込んでしまう。
早く鎖を掴まないと、ピティーと二度と会えなくなるぞ。

気づいてもらう為にペットボトルを鎖に向けて放り投げた。

釣られて視線を向けたラツミスたちが現状に気づいてくれたよう
で、全員が一斉に鎖へと向かって駆け寄っていく。

「わっわっわ、ああああ！」

慌てて鎖を挿んでラツミスが踏ん張ると、船が急加速して海を突っ切っていく。

自分の投げた盾の威力が強すぎて、体が海上へと飛び出しそうになったラツミスの背に、仲間たちがしがみ付いて耐え忍んでいる。

まるで子供の頃に学芸会で演じた、大きなカブの劇を見ているようだ。

しかし、結構な速度が出ているぞ。これは新しい推進方法かもしれないなど、大海原を疾走する船の上で呑気にそんなことを考えていた。

貝と自動販売機

多腕人魔との戦いは呆気なく終わりを告げた。

触手に何故か女性陣だけが捕らわれるお色気シーンも、船が破壊されて海に放り出され仲間が分断されるというお決まりの展開もな
いままに。

ファンタジーな世界とはいえリアルはこんなものだ。まあ、実際にそんなことになっていたら生命の危機なのでこれで良かったのだ
けど。

ちなみにピティーは無事回収された。引き上げられたピティーは
自分の身に何が起こったのか正確には把握できていないので、暫く
拳動不審だったことを付け加えておく。

非常事態だったとはいえ悪いことをしたので、俺の厳選したスイ
ーツを思う存分堪能して貰うことにしよう。

「ピティー、こっちの方角で間違いないっすか」

「うん……お家……早く帰りたい……外怖い……」

引きこもりが悪化しているようで、食事とトイレ以外、盾から出
てこなくなってしまった。

そして、そんな彼女を心配して灼熱の会長が何かと話しかけてい
る。

「おいおい、殻に閉じこもっているともったいねえぞ！ 陽の光を
浴びねえと元気でねえだろうが！ 出て来いよ！ 一緒に泳ごうぜ
っ！」

「放っておいて……お願いだから……」

説得という名の迷惑行為だよな、ピティーンにとっては。強引な性格というのは時と場合によっては事態を好転させる起爆剤になるのだが、相性が悪いと悪化の一途をたどる。そろそろ、止めた方が良さそうだ。

「かいちよう」

「何だ、ハツコン」

「せつとく」

「こうたい」

「代わりに説得してくれるのか。じゃあ、任せませ！俺は釣りでもしておくぜ！」

元気良く手を挙げて船尾の方へと走っていった。悪い人じゃないのだけど、考えるよりも体が先に動く人のようだ。

目の前で転がっている二枚貝の中身をどうにか外に出したいところだけど、言葉足らずの俺が彼女を慰められるとも思えない。

ここは少し予定より早いが厳選スイーツで懐柔してみよう。

「ぼていさん」

「ピティーンです……なに……ハツコンさん……」

返事はしてくれるのか。小声で生気を感じないのはいつも通りなのだが、声を聞いている限り思ったより動揺していないように思えるのは、気のせいなのだろうか。

「おかししん」
「ていします」

前回エクレーアが気に入っていたので、今回はプレミアムなシュークリームをどうぞ。あとはプリンも渡しておこう。

貝の前に置くとほんの少しだけ口が開き、隙間から手が伸びて二つとも中へと消えていった。これだけだと喉が渴きそうなので、飲み物も準備しておこう。

「美味しい……ありがとうございます……ハッコンさん……」

「こちらこと」

「ありがとうございます」

「うふふ……面白い……魔道具……人？ ですね……ハッコンさんは……」

貝と自動販売機が会話しているというのは傍から見たら恐怖映像かもしれないが、少しでも暗い気分が晴れたのなら嬉しいよ。

「みんなには……迷惑ばかり……かけてしまっています……もっと……しっかりしたいのに……」

俺が魔道具だから話しやすいのか、ピティーが独白を始めている。ここは聞き役に徹しよう。

「あの人についても……わかっているの……ずっと騙されて……いたことも……でも諦められない……頭では……理解しているのに……感情が……ついていけないの……」

「うん うん」

「自分のこと……ばかり……考えて……嫌な女……ですよね……だから……みんなに嫌われる……」

自分に自信が無いから想い人に縋ってしまうのかな。自分に優しく接してくれた人を好きになる気持ちは理解できる。

俺だって学生時代に何かと話しかけてくれる人当たりのいい女子に惚れかけたことがあるから。モテない人生を歩んでいる時に、普通に接してくれるだけで恋心を抱く単純な若者でした、はい。

ピティーンはもう少し自分に自信が持てたらいいのだろうけど、カウんセラーでもなく女性経験も豊富じゃない俺に何が言えるのか。

どうにか、みんなが嫌っていないことだけでも、わかってもらいたいな。

「すいていま」

「すよここの」

「ともだちあ」

俺の発言できる言葉を繋ぎ合わせて何とか説得を試みたけど、意味がちゃんと伝わっただろうか。

反応は……ない。貝の微かに開いていた隙間も今は完全に閉じてしまっている。どうやら、言葉のチョイスを間違えたようだ。

「本当……に……嫌われてない……の……」

おっ、言葉を返してくれた。ちゃんと心に届いたようだ。

「うん」

「面倒な……女って……思われて……ない……」

「うん」

一瞬返事が遅れてしまったのは仕方のないことだと思う。ここは自信を付けてもらう為にネガティブな意見は避けないと。

「私……役に……立てるかな……」

みんなといることが嫌なわけじゃないのか。成り行きで嫌々付いてきているのかと思っていたのだが、考えを改めないといけない。あの防衛術は称賛に値する見事な腕だった。もっと誇ってもいいぐらいなのに。

「私みたいな……女を……頼ってくれるのは……本当に……嬉しいの……でも、怖い……期待を……裏切って……捨てられる……のが……だから……いっそのこと……初めから……何も……しなれば……幻滅……されることもない……から……」

そうだったのか。拒絶して逃げ回っているのも、期待を裏切って幻滅されるのが怖かったから。想い人の存在も彼女の逃げる言い訳の一つなのかもしれないな。

「防御しか……できないけど……本当に……役に立てるかな……」

「うん」

「しんして」

「りゅよ」

カッコよく決めたいのに、言葉が足りなくて間抜けな言い回しになっちゃいます。

「しんしてりゅ……信じている……ってことなの……かな……」

「うん うん」

期待しているじゃなくて、信じているよ。俺の勝手な考えだけど、期待は他者が勝手にあてにして想いを押し付けている気がする。

でも、信じているは自分が相手に対して見返りも期待せず信じているだけ。それは結果を伴わなくても構わない。ただ、そうやって欲しいと願っている。それだけなのだ。

それを言葉にして上手く伝えられないのが本当にもどかしいよ。

「頼りなくても……怒ったり……しない……？」

「うん うん」

「情けなくても……嘆いたり……しない……？」

「うん うん」

「じゃあ……もう少し……頑張つて……みるね……」

「ありがとう」

ほんの少しだけ打ち解けてくれたのかな。

こういつ対応は「甘やかしているだけだ、そんなことだから改善されないのだ」と頭ごなしに否定する人もいるだろう。

実際、彼女はそういった環境で育ってきたらしい。

シユイたちの話によると彼女の実家は防衛術を代々教える、国からの信頼も厚い一族でそれ故に教育は厳しかった。物心つく前から徹底的にしごかれ、強い心を持ってと父親からは毎日のように教育という名の罵倒を浴びせられていたようだ。

そういつた経験を経てこの性格が築かれてしまった。自分に自信が持てず誰からも優しくされなかつた自分を好きだと言い、全てを受け入れ甘やかしてくれた存在。

詐欺師に依存してしまうのも無理のない話かもしれないな。

根は悪い人じゃないと思うから、少しずつ改善されていくといいのだけだ。

「このお菓子……あの人にも……食べさせて……あげたいな……」

まずはクズからの脱却を先にした方がいいかもしれない。

こういう時は他に頼れる対象がいればいいらしいが、ヘブイとくつつけてみるのはどうだろう。靴を除けば悪い人じゃないからな。靴を除けば。

いつそのことネガティブ思考同士、ミシユエルと気が合うのではないだろうか。でも、あれだけのイケメンを前にするとピティーが益々落ち込みそうだ。

あれ、俺の知り合いに手放して勧められる男性がいないぞ……いや、待て。冷静に考えてみよう。親しい男性を一人ずつチョイスしていくか。

まずは熊会長。種族が違うから却下。

大食い団の面々も同様の理由で問題外。

シメライお爺さんはユミテお婆さんがいるので、年齢差以前に紹介したら俺が切り刻まれる。

門番のカリオスは彼女持ちだから爆ぜればいいのに。ゴルスは恋愛に興味がないみたいだよな。惚気話を聞いても無関心だし。

青年商人も両替商も思い人がいる。あ、うん、お勧めの男性いな
いや。

良い人が現れるまでは俺で良ければ話し相手ぐらいはするから、
まずは貝から出てこられるようになるうか。

再び会う

「あれが……住んでいた島……です……」

巨大な二枚貝の口が少し開き、そこから伸びた手が指差す方向に島が見える。

そんなに大きくない島なのか。高校のグラウンドぐらいの大きさかな。島の半分に木々が生い茂っているが、もう半分は平地で丸太小屋が一軒だけ寂しそうに建っていた。

「あんな所に住んでいたっすか」

「食料はどうしていたのです？」

元団員の二人がピティーに話しかけているが、貝の口は再び閉じている。中から声が微かに聞こえてくるので返事はしているようだ。

「ハツコン師匠。あちらをご覧ください」

ミシユエルの指差す方へ視線を向けると、砂浜に一隻の船が接岸していた。

俺たちの乗る船よりかなり小さく、大人が五、六人も乗れば限界だろう。

「あれはケリオイル団長たちの船なのか、それともピティーのなのか、どっちだ？」

ヒュールミの問いに貝の内部から返答があった。

「ピテューは……この盾が船代わり……だから……」

「ってことは、団長たちの船っぽいぜ。みんな、言われるまでもないだろうが、油断するなよ」

船が残っているということは、団長たちが残っている可能性が高い。

予想はしていたがいざ対面となると警戒よりも緊張が先にくる。あんな別れ方をしておいて、今更何と言って顔を合わせていいものやら。

「私が小細工をしてから、あの船の脇に止めましょう。船長さん、お願いできますか」

「お安い御用だ」

見事な操舵技術で小型の船近くに停泊した。

船長と船員を残して俺たちは砂浜に降り立つ。俺たち以外が来ても船は動かさないようにと念を押しておいたが、団長たちが脅してきた場合は自分たちの命優先でも伝えてある。

「ピテューさん、自力で歩かないと自宅の靴を堪能しますよ?」

「歩くから……やめて……」

二枚貝を頭から被るような格好でピテューが歩いている。この姿を見たら新種の魔物だと勘違いされそうだ。

先導する彼女の後に俺たちは並んで進んでいる。

砂浜から少し進んだ先は岩場になっていて、そこには手作り感溢

れる木製の階段があり、そこを登り切った小高い丘に彼女の家があった。

塀はなく耕された畑があり、色彩豊かな花が家の周りをぐるっと囲っている。

「綺麗な花に囲まれた、素敵なお家だね」

「いずれ、こういう場所で隠棲するのも悪くないな。ハッコンがいれば食料も困らねえし」

幼馴染コンビには好評で俺もこういう一軒屋に憧れがあるので、二人と一緒に住むのなら悪くないと思う。

「その時はハッコン師匠、私も同居させていただけないでしょうか」

「じゃあ、俺も会長辞めて住むか！」

「ハッコンがいるなら住みたいっす。部屋一つ開けておいて欲しいっす」

何かここに移り住むことが前提で話が進んでないか。妄想が膨らみ過ぎだ。

「私と……あの人の……愛の住処が……」

いや、みんな本気じゃないからね。例え話だから、そんなに悲しそうな声を出さないでピティー。

「戯言はそれぐらいで。そろそろ、お静かに」

唯一話に乗ってこなかったヘブイに注意を促され全員が黙り込んだ。

ミシユエルが人の気配を察知したら直ぐに知らせることになっているのだが、未だに無反応なのでケリオイル団長たちは既に去った後なのかもしれない。

だとしたら、あの船は何なのだろうか。

「ただいま……」

ピティーが木製扉のドアノブを捻り、扉を押し開いた。

「おう、やっとこさ、帰ってきやがったか」

中から響く声に反応して後退っていくピティーを追うように、ケリオイル団長とフィルミナ副団長、それに紅白双子が現れた。

全員の表情が少し硬い。こっちを見ていつでも武器を抜けるように構えている。

「まったく、何処かで沈んでねえかと心配したぜ。って、その後ろの奴らは誰だ？」

四人とも俺たちを見つめて警戒しているようだが、俺たちだと気づいていない。

それもその筈。事前にヘブイが幻覚を重ねてくれたので、彼らには全くの別人に見える。

ちなみに俺は ダンボール自動販売機 にフォルムチェンジして手荷物の幻覚が被さり、ラツミスの小脇に抱えられている。

「最近……海の魔物……暴れている……から護衛……雇った……」

「お前さんは攻撃が苦手だからな。そうか、ご苦労さん。俺からも幾らか報酬渡すぜ」

「いらぬ……勝手に……人の家に入るの……やめて……出て行って……」

ピティーの声色が変わったな。少し音量が上がって声に凄味が増してきた。自分の愛の巢に足を踏み入れられたことに本気で怒っている。

「それは、悪かった。居間と風呂だけ借りたが、後は何にも触っちゃいねえ。お前さんの部屋にも入ってないと誓うぜ」

「ええ、馬鹿共をしつかり見張っていたから間違いないです」

「下着漁ったりしたら、殺されるからな。なあ、白」

「実際、未遂で海に放り込まれたよな、赤」

何やってんだ、紅白双子。

相変わらずと懐かしむべきか、敵の戯言に耳を傾けるべきではないのか。

今は敵対してしまっただが、未だに彼らの扱いを持って余している。ダンジョンに住む者たちの敵と割り切れたら楽なのだけど、共に過ごした歳月が、感情が、それを許してくれない。

「頼むから、力を貸してくれよ。攻略が不調でな、防御特化のお前さんがいたらかなり楽になるんだ」

「あの人を……待たないと……だから無理……」

「アイツを探すのも手伝つてやるから頼むよー。このままだと、あつちに追いつかれそうなんだよ。手を貸してくれるなら、赤を自由にしたいからよ」

「えっ、白が体を捧げるよ!」

「やだよ。俺はボンツキュッボンしか燃えねえっての。ピティーは無理む、ぐべしっ!」

白の脳天にフィルミナ副団長の杖がめり込み、床でのたうち回っている。

そんな白を見て腹を抱えて笑っている赤。この人たちはこんな状況でも自然体なのだな。

「ピティー、考え直してくれませんか。攻略が済みましたら、全力で支援しますので」

「貴方たちは……ダンジョンの人々……よりも……子供が大事……なの?」

「ああ、そうだぜ。それはお前さんもそうだろ。誰だって他人の命なんかとは比べ物にならない、大切な存在がいるもんだ。といつても、俺たちだってダンジョンの住民の命を犠牲にしようとは思っていないねえぞ」

ケリオイル団長は嘘を言っていない。実際、この階層の人々の手助けをしているし、階層を襲う魔物たちに直接手を貸している訳じゃない。

ダンジョンの攻略だけをメインにやっている。そして、当人たち

の言い分を信じるなら、冥府の王を欺こうと企んでいるようだ。

「白い人……前にいた……どこにいるの……」

「スルリムか。島を散歩しているぜ。部屋に籠ると室内の温度が
一気に下がっちゃうからな」

この島にはいるのか。海辺にはいなかったから島の森の中にいる
のかもしれないな。いつ現れるかわからないので、 結界 をいつ
でも発動できるようにしておこう。

「俺たちも時間がねえからな、これが最後にするが共に来てくれね
えか」

「ダメ……私は……貴方たちとは……いけない……」

きっぱりと断る際に一度だけピティーの視線が俺を捉えた。あの
目は強い意志が宿った目だ。良い意味で吹っ切れたみたいだな。

「はああああ、やっぱ無理か。しゃーねえな」

髪の毛を豪快に掻き毟り、ケリオイル団長が大きいため息を吐い
た。

副団長と紅白双子もこの答えは想定済みだったようで、肩を竦め
ただけで何も口を挟まない。

「んじゃ、外に出るか。ここで争ったら、ピティーの家がボロボロ
になっちゃうからな。なあ、ハッコン」

「いらっしゃいませ」

やっぱり、見抜かれていたか。破眼 の加護を持つケリオイル団長に幻覚は通じないとわかっていたので、予想通りの展開だ。ただ、意図的に発動して無ければ効力は発揮されない可能性も考慮していたのだが、幻覚程度は普通に見破れるのか。

「えっ、ハッコン!？」

「って、こいつらもしかして……」

「そういうことですか」

ケリオイル団長以外は気づいていなかったか。本気で驚いているようで、紅白双子が俺たちを指差して右往左往している。

「おう、全員揃っていやがるぜ。何故か灼熱の会長もいるけどよ破眼!」

ケリオイル団長の瞳が血のように紅く染まり、俺たちに掛かっていた幻覚が解かれる。

この加護があれば今後の戦いがかなり楽になるのだが、敵に回すと厄介なことこの上ないな。

俺たちから小屋の外に出ると、後に続いてケリオイル団長たちが歩み出てきた。

そのまま小屋から離れて、森の前の雑草が生い茂る一帯で足を止める。

「さて、酒でも酌み交わしながら雑談でもして盛り上がるか？ 久々に、ハッコンの飯食いたいしな」

「揚げた肉としゅわしゅわする飲み物が懐かしいぜ、なあ白」

「ああ、思い出しただけで喉が渇くぜ」

「懐かしいですね……本当に」

そんな穏やかな目でこっちを見ないでくれ。俺たちは敵対する間柄なのだから。

追い詰める手段

「で、どうする。直ぐにやりあうのは芸がねえから、少し話さねえか」

「話し合えば大人しく投降していただけるので？」

「そりゃ、無理つてもんだぜ、へブイ」

表面上は穏やかに言葉を交わすケリオイル団長とへブイだが、両者の間には張り詰めた空気が漂っていた。

全員武器を構えてはいないが、いつでも戦闘態勢に移行できるように身構えている。

ケリオイル団長たちの子供に対する気持ち否定する気はないが、だからといって人々を危険に晒していいわけじゃない。

冥府の王を出し抜けるかどうかは博打要素が強すぎて、正直上手いくとは思えない。このまま戦闘になるのは避けられないだろう。ならば、その戦意を少しでも挫いておくか。

「らっ いす」

「よ ん で」

突如、声を上げた俺に全員の視線が集まる。名前を呼ばれたラツミスには事前に説明していたので、直ぐに理解してくれて腰の小さな鞆からメモ帳を取り出してくれた。

「ごほんっ！ ケリオイル団長たちの行動をどう思うか、清流の湖階層で百人に聞きました！」

大声でそんなことを言い放ったラツミスを見つめる全ての人が、意味がわからずキョトンとしている。

これは事前に清流の湖階層で買物に来た人たちへ、患者の奇行団である四人が裏切ったことに関してのアンケートを実施していたのだ。いつか再会した時の為に。

「問一、子供の為にダンジョンの人々を危険に晒した冥府の王に協力したことをどう思うか。許せる、許せない、どちらとも言えないの三つから選んでもらっています」

驚愕の表情から少し冷静になったのか、ケリオイル団長たちは口を挟まずにラツミスの発言を待っている。吹っ切れたように見えても、やはり気になっているのだろう。

「許せる十二名。許せない六十名。どちらとも言えない二十八名です」

「意外と非難されていないのか？」

結果を聞いてケリオイル団長が零した声を聞き逃さなかった。ほんの少し安堵したような声色に聞こえた。他の三人は神妙な表情をしている。

「許せると書いた人の意見としては、自分も同じ境遇の子供がいたら、同じことをしたかもしれない。子を持つ親なら頭ごなしに非難はできません。とあります」

フィルミナ副団長が胸元をギュツと握りしめている。子を持つ人の意見が胸に染み入ったのか、苦しそうな顔をしているな。

「許せないと書いた人は、人の命を危険に晒して許せる訳がない。尊敬していたのに幻滅した。その他もろもろです」

紅白双子が小さく息を吐き肩を竦めている。これぐらいの罵倒は覚悟の上だよな。

「問二、正直、ケリオイル団長にはフェルミナ副団長はもったいないと思っ」

「うおいつ！ それはここで発表する必要があるのか!？」

「あら、興味ありますわね」

「面白そうだから静かにしてくれよ、オヤジ」

「白しっかり抑え込んでおけよ」

実の息子二人に羽交い絞めにされているケリオイル団長。ここで襲えば楽に勝てそうな気もするが、おどけているように見えて目つきは鋭い。

もう少し動揺させて様子を見てみよう。

「もったいない六十二名。死ねばいいのに二十二名。お似合い十六名」

「おいおい！ 選択肢がおかしいだろっ！ てか、俺たちが夫婦だつてことばらしやがったのか！」

「皆さんもそう思いますか。やはり、もう少し素敵な殿方を探すべ

きでしたか……妥協せずに」

頬に手を当てて憂鬱な表情でため息を吐く、フィルミナ副団長。

「いやいや、フィルミナさん。妥協って何ですか。そっちらから求愛してきましたよね?」

「えっ、何のことですか?」

口調がおかしくなっている団長の問いかけに、首を傾げて否定している。

その後ろで紅白双子が腹を抱えて笑っている。うーん、敵対関係だとは思えない状況だ。

「最後の問三、四人が戻ってきて謝り罰を受け入れたら……許してやってもいい」

四人の表情が豹変した。和みかけていた空気が一気に張り詰めたが、この問三が本命なのだ。これだけは聞かせておかなければならない。

ケリオイル団長たちが姿勢を正し、じっとラツミスを見つめている。まるで罪状を聞かされる罪人のように。

「許してやってもいい、八十名。許せない二十名」

「えっ」

団長たち四人の口から驚きの声が漏れる。予想だにしていなかったよつで、放心状態でぼーっとこっちに顔を向けている。

これは冷静に考えれば充分あり得る結果だった。団長たちが敵の

傘下に入ったのは、清流の湖階層の異変を解決した後で、尚且つ、目立った敵対行動をとっていない。

ただ、最下層の攻略をしていただけで、直接被害を受けた者はいないのだ。それは他の階層から移り住んできた者も同様だった。

それに、清流の湖階層の住民は懐が大きい。それは自動販売機でありながら受け入れてもらえた俺が誰よりも知っている。

許せないと答えたのは身内や知り合いが、この異変で死亡した人たちだ。そんな敵に寝返ったのだから、直接かかわっていないとしてもこの答えは当然だろう。

「みんなからの意見です。お前たちはもつと他人を頼るべきだった。話してくれば力になれたのに馬鹿が。さっさと帰って来い、俺たちの酒代だけで許してやるよ。親が子の幸せを願うのは当たり前のこと、ですが本当にあなたの子供が望んでいるのかももう一度考えてください。全員一から鍛え直してやるかのお。だからとつとと帰ってこんか」

最後の二人はユミテお婆さんとシメライお爺さんだな。団長たちが苦しんでいたことに、気づいてやれなかったことを人一倍後悔していた。自分たちを慕っていた団長たちの力になれず、無謀な決断をさせてしまったことを今でも悔やんでいる。

「つたく、お節介な奴ばっかだぜ」

帽子のつばを下ろしたので、こちらからは目元が見えなくなってしまう。それが何を意味するのかは理解しているので、野暮なツッコミはしないが。

「あと、シャーリイさんから伝言があるよ」

ちょっと待ってラツミス、それはこの状況なら読む必要はない

「えっと、ツケが溜まっているので支払いをお願いします。それから、懇意にしていただいていたうちの子たちが、団長と赤さん白さんがお店に来てくれるのを、首を長くして待っていますので、お早いお帰りをお待ちしておりますわ……だって」

あつ、ケリオイル団長と紅白双子が直立不動の姿勢をとっている。顔中に脂汗が流れているな。

「あ、な、た、た、ち。どういふことでしょうか」

その背後に立つフィルミナ副団長の青い波打った髪が、蛇のようにうねっているように見えるのはきつと気のせいだ。目の錯覚に違いない。

「ち、違うんだ、これは……そ、そう。こいつらが一度経験したいって強請るから、しゃーなしに連れて行ったんだよ！」

「ふっざけんなよ、オヤジ！ 母さんには黙っておけて念を押していたくせによっ！」

「そうだ、そうだ！ オヤジは常連だつて自慢してただろ！」

醜い罪のなすりあいだ。罵倒が飛び交い自分は悪くないと主張する彼らだったが、後方から吹きつける殺気に気づいたようで、再び硬直している。

「私が節約に節約を重ねている時に……そついうことをしていたのね。綺麗で若い女性と一緒に飲むお酒は、さぞ美味しかったでしょ

うね」

このまま放っておいたら仲間割れしてくれそうだ。憔悴しきったところで投降を呼びかけたら上手くいくような気がしてきた。

仲間たちもどうしていいかわからずに戸惑っている。襲い掛かっていいような空気じゃないからな。

「貴方たちは敵の前で何をしているの」

突如、涼やかな声が流れてきたかと思うと、森の方角から氷の礫が 降ってきた！

このタイミングで来たか。いつもの自動販売機に戻り、準備していた 結界 を素早く張ると、ヒュールミ、ミシユエル、ラツミスが 結界 内に飛び込む。

ヘブイとシユイは巨大な盾を構える。ピティーの背後に回っている。氷の礫を 結界 と二枚の盾が全て弾く。

今の攻撃を誰がしたかなんて問う必要はない。森からゆっくりと歩み出てきたのはスルリムだった。

そこまでは想定内だったのだが もう一人いるだと。

スルリムと手を繋いだ同じ色のコートを着込みフードを目深に被った何者か。身長だけなら子供にしか思えないが、かなり背の低い女性ということもあり得る。それに人間だとは限らない。

勧誘に来た人数を真に受けて、増員を考えてなかったのは迂闊過ぎた。

「本当に邪魔な人たち。無駄話はそこまでにして。まさか、あの方を裏切る気じゃないでしょうね」

「そんなこと、あるわけがないだろ。俺たちは恩があるからな……裏切れるわけがねえ。悪いがお遊びはここまでだ」

今までの流れでもしかして説得に応じるのではないかと考えていたのだが、ケリオイル団長たちは武器を手にして、こちらへと向き直っている。

しかし、今の会話には不審な点があった。団長が口にした恩ってなんだ？ 最下層に運んでもらいダンジョン攻略をしていることか？ いや、それを恩と言うには無理がある。ダンジョン攻略は互いの目的が一致している為の協力関係だ。一方的な恩ではない。だったら……。

「懐かしさに和んじまったが、すまねえな。これがもう少し前なら違う未来もあったかも、しんねえが。今はもう、俺たちはそっちは戻れねえ」

「すみません。本当にすみません」

「ってことだ、わりい」

「しゃーない、よな」

深々と頭を下げるフィルミナ副団長に、バツが悪そうに頭を掻く紅白双子。

スルリムが現れただけで状況が一変した。

あの口振りだと何を言っても無駄のようだ。ダンジョン攻略を冥府の王の下で行うことに躊躇いがないように見える。

何かあるのか。スルリムは冷笑を浮かべ、団長たちが裏切ることはない信じ切っているようだ。何かがおかしい、何だこの違和感。

団長たちはスルリムをじっと見つめて……違う、見ているのは手を繋いでいるフードを被った相手だ。

それも、表情が　　何で優しく微笑んでいるんだ。

「みんな、おかしいよ！　冥府の王の手伝いなんかしなくても、息子さんを助ける方法はきつとある筈だよ！」

ラツミスンの叫びを耳にした団長たちは目を逸らし、視線を足元へ落とす。

何だ、さっきから感じる、この違和感は本当に何なんだ。

「ふふふふ、あははははは！　あーおかしい、子供を助ける方法ですって。そんなこと、もう望んでいないのよ」

「ど、どういふことー！」

望んでいない？　彼らの望みはそれ一択だった。望んでいない訳が　もしかして。

彼らが恩と口にして、スルリムが現れた途端に態度を豹変させた。そして、彼らは助ける方法を望んでいない。その全てが組み合わせわり、一つの答えを導き出した。

「だって、子供は　　」

スルリムが手を繋いでいた者のフードを払うと、そこには水晶の棺で眠っている筈の、ケリオイル団長の子供がいた。

敵対する理由

「大事な子供がここにいるのだから、彼らが負の加護……呪いを解く必要はないわ。そして、痛みを無くして上げているのは、この私」

スルリィムが上機嫌で訊きもしないことまで話をしてくれている。あの勝ち誇った表情はこれが理由だったのか。

「でも、どうやって呪いを……だって雪精人って」

「そう、雪精人は成人を迎えたその時に首を切り落とされれば、体は呪いを解く彫像になるわ。じゃあ、殺されもせず大人になった雪精人はどのような性質を持つか知っている？」

キコユからも聞かされていない情報なので俺たちが知る由もなく、黙り込んでしまった。

答えはわからないが予想はできる。彼女が手を繋いでいるということは、彫像になった時と同じような効果があるということだろう。つまり

「雪精人は元来、呪いを解く能力を生まれつき所有しているのよ、成人になるとその効果が比較にならないくらい増すわ。ただし、一定距離内に居る相手のみに効果がある。だから、無理にこの子を連れ去ろうとしたら、痛みでもがき苦しむだけだから気を付けた方がいいわよ」

「つまり、団長たちへの人質ってわけかよっ」

吐き捨てるようにヒュールミが言うと、スルリムが嬉しそうに唇を緩めた。

キコユと戦っていた時も感じていた事だが、彼女は人間を苦しめることに喜びを感じている節がある。今も相手を見下して悦に浸っているようにしか見えない。

迫害された日々が彼女をここまで歪めてしまったのだろうか。

「人質じゃないわ。大事な子供の呪いを解除してあげたの。この子は私から離れられないだけ。団長たちも恩義を感じて協力してくれているだけよ」

そんな邪悪な笑みを浮かべて言われても説得力は皆無だよ。

手を繋いでいる団長の子供は悲しそうな表情で口を噤んでいる。

長年の眠りから覚めたかと思えば、家族の足かせとなっている現状。ケリオイル団長たちの話によれば、この子は三つ子の中で最も責任感があり、優しい子だったそうだ。この状況を良しとしているとは思えない。

何とか救ってあげたいが、自動販売機である俺になにができるのか。

「そういうことだ。だから、俺たちは冥府の王の配下となりダンジョンを攻略しなくちゃならねえ」

短剣を両手に握り、大きく息を吐くケリオイル団長。完全に吹っ切れてはいないようだが、俺たちと戦うことに迷いはないように思える。

彼らの目的だった息子の呪いを解く目的は、完全ではないが達せられたことになるのか。だとしたら、それを叶えてくれた相手に尽くすのは筋が通っている。

これまでなら、団長たちを説得する手段はあるのではないかと淡

い期待を抱いていた。

「ただ、呪いを解かれ人質を取られることになった一家はもう、こちら側に戻ることはない……だろう。」

「こつやって兄貴と話せるようになったのは、スルリイムの力だ。だったら、恩は返さねえといけないよな」

「人の道に反したことであっても、曲がりなりにも兄貴を助けてくれた礼はしなくちゃなんねえ」

紅白双子も腹をくくっているようだ。

「清流の湖階層の皆さんの温情はとても嬉しかったです。でも、私たちはもう冥府の王の手下。遠慮はいりません」

フィルミナ副団長も覚悟を決めているのだな。

完全に決裂してしまったのか。キコユがいれば、あの子を取り戻して仲間に引き入れる手段も選べたが、いない者に縋っても仕方がない。

「そうですか、もう後には引けないのですね。わかりました、ならば力尽くで過ちを正してあげましょう」

「息子さんには悪いっすけど、完全に魔王軍の手先になったのなら、もう容赦はしないっす」

「愛する者の為……わかるけど……でも……愛は他人を……犠牲にしちゃ……ダメ……」

元団員二名が一步踏み出す。

それに倅い、ラツミスたちも武器を構えている。ヒュールミは既に家の中へ退避したようだ。

勧善懲悪の展開なら迷うことはないのにな。俺も甘い考えは捨ててやるべきことに集中しよう。

「見たところ、雪精人はいないようね。なら私を止められる者はいない。全員氷漬けにしてあげるわ。前を開けなさい、貴方たち」

繋いでいない方の手を俺たちに伸ばし、前に並ぶケリオイル団長たちに命令をするスルリム。

だが、団長たちは顔を見合わせただけで、その場から動くことはしなかった。

「何をしているの。どきなさい」

「待ってくれ。こいつらへの対応は俺たちに任せてくれ」

「バカなことを。人数差でも戦力差でも負けているのがわからない程、愚かではないでしょう。どかなければ、貴方たちこと凍らせるわよ」

それでも渋って動かない団長たちをスルリムは睨みつけていたのだが、不意に目を見開き口元に笑みを浮かべた。

「そう、逆らうのね。じゃあ、この子がどうなってもいいの。そう」

スルリムは繋いでいた手を離すと、その子を軽く突き飛ばした。すると支えを失いその場に崩れ落ちた子供の口から、

「がああああつ、いたいいたい！ ああああ、いいいいいいいい

い！」

絶叫が迸る。自分の体を抱きしめ痛みあまり地面をのた打ち回り、口の端から泡が噴き出し、全身が激しく痙攣していた。

「や、やめろっ！ 悪かった、歯向かわねえ！ だから、早くっ！」

「やめてっ！ 酷いことをしないで！」

団長たちが取り乱して叫びながらも、彼女の前から退き道を開けた。

「わかればいいのよ、わかれば」

片膝を突いて子供の腕を掴んだ途端、子供は暴れることも叫ぶこともなくなる。

「さてと、茶番劇はここまででいいわよね。あの方に逆らう、貴方たちはここで死ぬのよ」

相手の攻撃を絞らせないように、左右に分かれて走り始めようとした矢先、独り真正面から歩み寄っていく男がいた。

「ったく、ねちっこい真似しやがってよ！ 戦いは熱い思いをぶつけ合うもんだろっがっ！」

手の平に拳を叩きつけ、灼熱の会長が怒りの形相でスルリムへと向かっていく。

「とんだ間抜けがいたものね。雪精人の私に何の策もなく突っ込ん

でくるなんて。暑苦しい男は嫌いよ。あいつらを思い出すから」

俺たちが止める間もなく、スルリムから放たれる極寒の冷気が灼熱の会長へと襲い掛かった。

今更引き留めることも出来ず、俺たちは冷気に吞まれる灼熱の会長の最後を看取るしかできない。

「生温いぜっ！」

冷気が触れる瞬間、何を思ったのかそれを灼熱の会長が蹴り上げると、冷気が掻き消され代わりに爆風が吹き荒れた。

凍り付くことなく平然と突っ立っている灼熱の会長の全身が、真っ赤に燃えている。

それは比喻ではなく、全身から本当に炎を噴き出した灼熱の会長がそこにいた。

「雪精人つてのは、陰気な奴らばかりで面倒くせえなあ！」

炎の人となった灼熱の会長がびしっと指をスルリムへと突きつける。

突きつけられた当人は目尻を吊り上げ、同じように相手を指差しているのだが、怒りで指先が震えているのがここからでも見えた。

「まだ、絶滅していなかったのね、忌まわしき種族……炎精人！」

「雪精人ごときに、忌まわしいなんて言われる筋合いはねえがなっ！」

憎悪のこもった言葉と視線をぶつけ合う二人。

「灼熱の会長って人間じゃなくて、えんせいびと？　って種族なんだね。ヒュールミ知ってる？」

困った時のヒュールミ頼り。あの二人を除いた全員の視線が一斉に彼女へと集まっている。

「おう、知ってるぜ。雪精人と真逆の性質を持つ種族らしくてな。炎を自在に操り、性格は豪快で豪胆。雪精人とは仲が悪く、昔からいざこざが絶えない種族らしい」

冷気を操る人に似た一族がいるのだから、炎を操る一族がいてもおかしくはないのか。

熊会長が灼熱の会長を推薦した意味が今わかった。あの力ならスルリウムと対等に戦える。

「この冷血女は俺に任せな！　お前たちはお前たちでやるべきことをやれ！　俺たちはあっちで楽しもうぜ！」

全身を燃え盛らせて森の方へ走っていく。少年の手を引きながらスルリウムが後を追っている。

「会長！　その子は傷つけないでね！」

「善処するぜ！」

ラツミスの大声に背を向けたまま手を振って答え、森の中へと突っ込んでいった。

「ああ……私の森が……」

ピテイーが悲痛な声を上げている。

非常に申し訳ないので、いつか畑さんに植林を頼んでみよう。欠片であれだけの力があるのだから、きつと以前よりも立派な森を作り上げてくれる筈だ。

キコユならきつと畑さんと合流できるだろうから。

「んじゃ、こつちも始めるとするか」

「団長。あの頃とは違うのですよ。私も本気を出させてもらいますので」

「靴の一件が解決したそうだな。自分を偽るのはやめたのか」

ケリオイル団長はへブイの秘めた実力を見抜いていたのか。

「こりゃ、厄介そうだな。スルリウムがないなら丁度いい。赤、白、本気を出すのを許可する」

「あいよ、オヤジ」

「しゃーねえな」

おいおい、紅白双子も実力を隠していたとでもいうのか。強がりや虚言を口にした……わけじゃなさそうだな。

ほんと、食えない親子だ。

このままなし崩しで対話による解決ができるのではないかと甘い考えを抱いていたが、結局はこうなるのか。

引き延ばしになっていた戦いが始まるうとしている。

総力戦

こちらの現戦力はラツミス、ミシユエル、ピティー、ヘブイ、シユイ。

敵側はケリオイル団長、フィルミナ副団長、紅白双子。

五プラス一台対四で、尚且つ個々の戦力でもこちらが上だと……思っていた。

ケリオイル団長の加護 破眼 が厄介なのは覚悟の上でも、総合力でこちらが上回っていると考えていたのだが。

「ハツコン師匠、ケリオイル団長はお任せください」

加護の力に頼り切っていないミシユエルが団長の対応をするのは、予め決めていたことなので、ここは任せることにした。

「まかせたよ」

「はい！ ケリオイル団長お手合わせ願えますか」

「おっ、俺の担当はミシユエルか光栄だね」

ケリオイル団長ならこちらの意図ぐらい読んでいるだろうが、あえて乗ってきたのか。それぐらい、家族を信用しているとも取れるが。

「では、残りの我々は副団長と」

「バカ息子の相手をするっす」

「うるさいの……苦手……」

「人のことをバカって言う人がバカなんですー」

「そうですー」

「はいはい、真面目にやりなさい」

元同僚だけあって気負いが一切ない会話だな。まるで今から訓練でも始めそうな雰囲気だが、今からやるのは本気の戦いだ。

どちらも相手を本気で殺す気はないようだが、手を抜く気はない。その結果、死ぬことになっても受け入れる覚悟はしているのだろう。

「しかし、元仲間相手にマジで戦う日が来るなんてな」

「マジでやらないとこっちがやべえから、しゃーねーだろ、白」

紅白双子が顔を見合わせて笑うと、俺たちに向き直り同時に片腕を掲げた。

そして勢いよく振り下ろすと、二人の体から黒い闇が溢れ出し、彼らの体を覆っていく。変貌はそれだけではなかった、白は右肩から、赤は左肩から蝙蝠の様な羽が一枚だけ生えたのだ。

「そういえば、副団長が吸血魔の血を引いているのでしたね」

ヘブイはノーリアクションだが、隣のシュイは目を限界まで見開いて顔で驚きを表現している。

ピティーは前髪に隠れて表情がわからないが、頭が忙しく動いているので動揺しているのは確かだ。

「ちょっと、カッコイイね」

ラツミスは呑気だな。フィルミナ副団長が吸血魔という種族だったから、その血を引いているので、あのような姿になったのか。よく見ると眼球も紅く染まっているな。

「では、私も本来の姿を晒させてもらいますね」

フィルミナ副団長はそう言うと両腕を大きく広げ、それに合わせて蝙蝠の両翼が黒い霧と共に現れた。こっちは一对の羽が揃っているのか。

彼女の場合、吸血鬼や悪魔というより墮天使に見える。

「皆さん、お気を付けてください。吸血魔というのは人よりも身体能力が優れた種族です。今までの彼らのイメージを払拭しなければ、やられかねませんよ」

真剣な表情で警告するヘブイに仲間たちは神妙な面持ちで頷いた。視界の隅では既にミシユエルたちが戦いを繰り広げている。ミシユエルの洗練された剣技を団長が短剣で受け流しつつ、斬り込んでいる。鎧の継ぎ目を狙っているようだが、少し体をずらすことで斬撃を弾く。

ケリオイル団長の動きは驚愕する程素早くもないのだが、受け流しの技能と相手の懐に跳び込むタイミングが秀逸だ。

「その瞳、厄介ですねっ！」

「流石だな、この目の効力を見抜いているのか」

二人の会話から察するに 破眼 は加護を打ち消す能力だけではないということか。

「オヤジ、張り切っているな。こっちもガンガンいくとしますか」

「活躍しないと後でどやされそうだからな」

二人の戦いに触発された紅白双子が前傾姿勢で駆けこんできた。赤は短い槍、白は刀身が真っ直ぐな小剣。二人とも素早い攻撃を得意としていたよな。威力は低いので耐久力のある魔物を相手には苦戦していたが、人間相手となると十分な殺傷力がある。

「相手……は私……」

巨大な盾を構えたピティーがすつと俺たちの前に出て、無造作に二人へ歩み寄っていく。

二人が同時に武器を突き出すのが、難なく盾で弾く。左右、上下、側面、裏側、残像が見える速度で周囲を駆け回り、あらゆる角度から攻撃を仕掛けているのだがピティーの体を掠めることすら叶わない。

紅白双子の身体能力の向上にも目を見張るものがあるが、ピティーの防御はまさに鉄壁だ。

盾が大き過ぎて相手の姿は見えない筈なのだが、的確に盾を操り一切攻撃を通さない。

「思ったより……速い……怖い……」

「くっそ、当たんねえなっ！」

「マジでスゲエな！」

苦戦している割には声が若干嬉しそうに聞こえる。これは二人の気質なのだろう。

ピティーに手間取っている紅白双子が突如、その場から大きく跳び退った。

「不意打ちなんて悪役のやることだぞ！」

「そっだそっだ！」

「うるさいっす。勝てばいいっす、勝てば」

「ええ、世の中勝利した者が正義ですので」

どっちが味方なのか疑いたくなるような事を口に出しているのは、矢をつがえているシュイト、鎖の伸びたモーニングスターを手にしたヘブイだった。

攻撃に集中している二人に矢と棘の生えた鉄球をプレゼントしようだ。

「ちゃんとしないと、お父さんに言いつけます……あらっ」

そーっとフィルミナ副団長の裏側に回り込んでいた俺とラツミスが奇襲したのだが、背後に水の壁が現れ、ラツミスの拳が激突すると爆風と共に水飛沫が散った。

俺たちは何もせずに観戦していたわけじゃない。後方で控えている副団長を狙ったのだがあっさりと防がれてしまった。

しかし、今の水の壁は水量が尋常じゃなかった。本気を出せばあれぐらいの水は操れるということか。

「バレてた？」

「ええ、大気に含まれている僅かな水分がこの羽に接近を伝えてくれていますので」

その羽はセンサーの役割も果たしているのか、チートっぽい能力だな。今までのフィルミナ副団長と同じだと思ったら、痛い目を見る程度では済まない。

「まもり」

「まかせて」

「うん、頼りにしてるよ！」

余計なことはせずに防御に集中しよう。攻撃はラツミスに全て託して 結界 の発動と維持に集中するぞ。

ラツミスが踏み込むと大地が爆ぜ、たった一步で五メートル近くを一気に詰める。

フィルミナ副団長が一瞥しただけで、またも巨大な水の壁が進路方向に現れた。加速のついた拳を叩き込むと、水が弾け飛び二人を隔てる壁が消滅した。

あれだけの水量を拳一つで吹き飛ばすとは思っていなかったのだろう、驚きを通り越して呆れ顔の彼女が見える。

「捕まえたっ！」

跳び込んだ勢いそのまま殴ると彼女の威力だと原形を留めないミンチができあがってしまうので、その両腕でしっかりとフィルミナ副団長を抱きしめると 爆ぜた。

「ぎゃあああつ！ ハッコン、フィルミナさんが爆発した、どうしよう！ 力込め過ぎたのかなっ!？」

半泣き状態で騒いでいるラツミスはびしょ濡れになっている。捕まえた瞬間、相手の体が水になったのを見逃していなかった。

つまり、抱き潰したように見えたのはフィルミナ副団長の形をした水の塊。

「あ　っ　ち」

落ち着かせる時間も惜しいので、取り出したペットボトルをラツミスの目の前に漂わすと　結果　で上空へ飛ばす。

ラツミスの視線がペットボトルを追うと、上空に浮かんでいるフィルミナ副団長がいた。背中の蝙蝠の羽が忙しなく羽ばたいて空中で停止している。

「惜しかったですね。貴女の攻撃は脅威の一言ですが空に逃げれば済む話です」

ただの魔法使いなら俺の　結界　とラツミスの破壊力で完封する自信はあったのだが、空に逃げられると手の出しようがない。

「あの水を撃ち出す攻撃も止めた方がいいですよ。この状態の私は水を手足のように操れますので」

あれだけの水量を操る相手に高圧の水をぶつけても、水鉄砲で遊んでいるようなものだろう。下手したら逆に利用されかねない。

確かに今までなら対空手段はなかった。ここで黒八咫がいてくれたら話は違ったのだが、いつまでもいない相手に頼るような自動販売機ではない。

今までなら手段はなかった。そう、今までなら。

以前からずっと考えていたのだ、空中の敵に対する攻撃手段の確立を。

みんなには一度も見せたことはなかったが、前に取得していたあれにフォルムチェンジをするぞ！

「かたち」

これは新しく形を変える時にラツミスが戸惑わないように、あらかじめ決めておいた台詞だ。

俺の体は横にぐんぐん伸びていく。高さは基本の自動販売機と変わらないのだが、横幅が三倍以上になり、ラツミスが小さな壁を背負っているような姿になっている。

ただ長方形の箱になったのではない。前面には無数の小さな青い扉が規則的に並んでいて、取っ手の傍には硬貨の投入口があり鍵が突き刺さっている。

そう、俺がフォルムチェンジしたのは コインロッカー だ。駅や空港、プールや銭湯の脱衣所で一度はお目にかかったことがある、あれだ。

本来はここに荷物を収納しておけば、いつでも取り出せるのではないかと思って選んだのだが、あれこれ実験している最中にもう一つの用途を思いついた。

「また、妙な姿になりましたね。そんな大きな箱でどうするのですか」

「こうすりゅ」

ラツミスの体が触れている部分の扉以外を全部開く。

開いた扉の先には、闇の森林階層の武器屋で投げ売りしていた中

古の武器が大量に収納されていた。

「うでくんで」

「えっ、うん」

状況を把握していないラツミスだったが、俺の指示通りに腕を組んでくれた。

ちなみに全く意味のないポーズなのだが気分の問題だ。

フィルミナ副団長を見上げているので角度もバツチリだな。俺はコインロツカー に詰め込んでいた中古の武器を 結界 に入ることを拒否する！

ラツミスの背後から勢いよく飛び出していく無数の武器たちが、彼女を貫く為には解き放たれた。

互いの実力

多種多様な武器がフィルミナ副団長を指して突き進んでいく。筋力と器用さのステータスが上がっている俺の結界弾きは、命中率も高く威力もそれなりにある。

何十もの武器が迫りくる状況で彼女は右手を前にかざした。前方に円盤状の水が現れたかと思うと渦を巻き、正面衝突した武器たちが呑み込まれていく。

おー、驚きの吸引力だな。水というのは派手さがないけど、結構万能な能力だよな。まあ、防がれると思ったから、この攻撃を発動させたのだけど。

「どうしよう、ハツコン。全部防がれているよ！」

まだ慌てる時間じゃないよ、ラツミス。本命はこれだから。

右端の棚に置いてあるアレは弾き飛ばさないでおいたのだが、ここで使うべきだよな。

ヒュールミから預かっていた発明品を水の渦に向けて放った。中古武器と同様に渦に呑み込まれると、瞬間にそれは凍り付いた。

ラツミスが階層割れの上でできた池を凍らせた際に使った発明品の威力は流石の一言だ。

「えっ、何故、スルリウムが!？」

水が突如凍りついたので雪精人のスルリウムがやったことだと誤解して、森の方へ視線を向けている。隙ができたな。

コインロッカーの左端に予め入れておいた二リットルペットボトルを四つ、凍った渦を避けるような放物線を描く軌道になるよう弾

き飛ばした。

「スルリィムは戦闘中よね……あつ」

上から落ちてきているペットボトルに気づいたようだが、もう遅い。ペットボトルを消して中身を解放した。

「水なら私が操れ……えっ？」

ただの水だと思って油断したな。彼女は水を操れると口にしていただけから、一見透明の水に見える液体を目にして操れると思いついてしまった。それが敗因だ。

結果、それを頭から大量に被ることになった。

「このぬるぬるした液体は……始まりの階層で」

正解だよ。潤滑剤　つまりローションで全身を濡らしたフィルミナ副団長は、色々と危険な見た目になっているが狙いはそこじゃない。

「は、羽がっ」

蝙蝠の羽は薄い膜が張つてあるのだが、それに大量のローションが付着すれば必然的に飛ぶことが困難になる。

これが容赦の必要ない相手なら灯油を入れた方を投げつけていたが、敵対しているとはいえ割り切ることができなかった。

バランスを崩したフィルミナ副団長が左右に揺れながら落下してくる。

基本の自動販売機に戻った俺は、駄目押しとして大量のペットボトルや缶を弾き飛ばす。まともに飛ばない状況でも水を巧みに操り、

ペットボトルを水の弾丸で叩き落としていく。

そして、何とか地上に降り立った彼女はローション塗れでこちらを睨んでいる。

「してやられましたが、私の水をうち破ることはでき」

その言葉を最後まで言うことなく、彼女は前のめりに倒れた。

背後には拳を突き出した格好のラツミスがいる。俺が攻撃を続けることで意識を向けさせていたのだが、思いの外、上手くいったな。完全な不意打ちとなった一撃をもらって、あっさりと気絶している。

大気の水分を感じて相手の居場所がわかると口にしていたが、そのセンサーもローションで覆ってしまえば役に立たなかったみたいだな。

ラツミスが素早く彼女の体を縄で縛っている。あれは相手の魔法や加護を封じる特製の捕縛縄なので、途中で目覚めても無力なままだ。

まずは一人目の身柄確保。他の戦況はどうなっている。

「あーもう、うぜえええっ！」

「なんだよ、その戦い方っ！」

苛立ちを隠そうともせずには叫びながら攻撃を続けている紅白双子だが、その全てが盾に阻まれている。それだけではなく、二枚の盾内部から時折、矢が飛び出してきて攻撃に集中できていない。

シュイがピティーと背を合わせていて、盾の内側から狙撃を繰り返している。

更にヘブイが鉄球を振り回して牽制しているので、二人のコンビネーションがまともに機能していない。

「手伝うよー」

駆け寄っていくラツミスに気づいた紅白双子が顔をしかめた。攻めあぐねている状況で俺たちが参入すると勝ち目は消えたといつても過言ではない。

「母さ……副団長も倒されちゃったのか」

「こつなつたら、オヤジかスルリムが助けに来てくれるまで、時間稼ぐしかねえぞ、白」

「おうよ、赤。倒せないなら倒されなけりゃいいってわけか」

さっきまでは果敢に攻撃を加えていたのだが、今は周囲を走っているだけだ。

「おらおら、悔しかったら倒してみろよ！」

「へいへい、殻にこもってないで出て来いよっ！」

挑発する姿が似合っているな、と感心している場合じゃない。

動きを目で捉えるだけでもきついのに、逃げの一手となるとこの面子では倒すのは困難になる。

わざと攻撃を躲す際に変なポーズを取るところが、挑発の意味を理解している。ヘイはさほど気にしていないようだが、シユイがかなり苛立っているようで矢の精度が落ちている。

「注意を逸らして足止めが出来れば、仕留められるのですが」

俺の近くまで歩み寄ってきたヘブイが物騒なことを口に出している。平静に見えて実は怒っているのだろうか。

「うちが殴っても当たりそうにないよ」

あの速度で走り回られたら、ミシユエルだとしても攻撃を当てるのは容易ではないだろうな。でもまあ、実は全く焦っていない。

紅白双子に対する策は既に練っている。

脚を封じるならローションを地面に撒けばいいと思われがちだが、この地面は海岸の砂地に近いので、撒いたところで染み込んでしまっただけで効果は薄い。

でも、一瞬だけでいいなら注意を引きつけて足を止めることも可能だ。

「なるほど、そういう手ですか。あの二人なら引つかかるでしょう」

「えっ、ハツコン何かしたの？」

俺が商品を変えるとヘブイが一瞬にして何をしたいのか理解してくれた。ラツミスからは見えない位置なので気づいてないようだが、商品を取り出し口に落として 念動力 で操り周囲に浮かび上げらせる。

「ハツコン、何しているの、見えない見えないよ」

見せる気がないからね。

素早く後ろに振り返るが、背負っている俺も半回転しているのでラツミスが見ることはできない。

「らっ っ い す」

「とっ ころ」

「何か考えがあるんよだね？ 後でちゃんと教えてよ！」

ラツミスが二人に向けて走り出し、ヘブイも並走している。

突っ込んできた俺たちをちらつと横目で確認したな。あの商品は相手から見えないように背後に隠している。もう少し距離を縮めてからが本番だ。

あと数歩で手が届く範囲に詰め寄ると、二人がこっちを見てニヤリと笑い距離を取ろうとした。

今だ！

俺は隠していた商品を 念動力 で操り、紅白双子に突きつけるように範囲ギリギリまで移動させた。

「へっ、ぬおおおっ！」

「おおおおっ！」

紅白双子の足が止まり、その口から絶叫が上がる。

その目は俺が取り出した エロ本に釘付けになった。

特にエロい写真が掲載されている袋とじを開封して、広げた雑誌の破壊力が凄まじかったようだ。

妖艶な格好をして誘惑する女性の姿。色々と修正が施されているので、スタイルも顔も文句のつけようがない女性の裸体がそこにあつた。

現状を忘れて無防備なスケベ面を晒している双子に、鉄球と矢が迫る。

「って、あぶねえっ！」

間一髪のところでは、二人とも我に返り、その場から大きく跳躍している。

「おいおい、そんな手に引つかかるかよ」

ちっ、引つかかりかけていたくせに。女好きでエロの化身の様な二人でも、そこまで間抜けではなかったか……備えて大切だよな。跳び退いた二人が何故か着地で体勢を崩し、鉄球を脇腹に喰らって吹き飛んだ。

体が横にくの字に折れ曲がっていたが、二人とも死んでないだろうな。

「卑怯だ……ぞ……ハッコン……」

痙攣している赤がそれだけを口にして気を失う。良かった、死んではないようだ。

最後の捨て台詞は人聞きが悪いから、策略と言って欲しかった。

「今、何で二人は着地を失敗したの？」

「そうつすよ、何で変な動きをしたっすか？」

盾の内側から出てきたシュイも二人の最後に納得がいかないようだ。

「答えは単純明快。あの二人の足元をご覧ください」

へブイは俺の策を理解していたからこそ、あの二人の着地際を狙ってくれた。

彼の指差す場所には、地面に散乱したエロ本があった。俺が予め

周囲にエロ本をばら撒いていたからな。

ただの写真だとわかっていても、魅力的な女性が足下にあることに動揺して、一瞬だけでも踏むのを躊躇った結果がこれだ。

「最低つす、バカ双子もハツコンも」

「ハツコン……」

あれっ？ ジト目で二人に睨まれている。

何故に俺が責められる展開に。ここは見事な策略だと称賛される場面では。

「私は評価しますよ」

俺の体をポンポンと優しくへびイが叩いてくれた。

くっ、へびイに同情される日がこようとは。

強者とは

フィルミナ副団長と紅白双子を無力化した俺たちは、少し離れた場所で激しい戦いを繰り広げている二人の元へと向かう。

戦況は一進一退のようだが、僅かながらケリオイル団長の方に余裕があるように見えた。

ミシユエルの攻撃は掠りもしていないのだが、団長の短剣は何度も鎧を捉えている。だが、鎧の性能のおかげで体にまで到達した傷は一切ない。

素人目にはミシユエルの剣戟はケリオイル団長を上回っているように見えるが、全ての斬撃をのりくらりと躲している。

ステータスではミシユエルが上回っているが、戦場における経験の差と 破眼 の秘めた力に対応しているのか。

「団長、もうおしまいっすよ！」

言葉と同時に放たれた矢に対し、首を傾げる動作のみで避けたケリオイル団長が、こつちを見て眉をひそめた。

その目はラツミスが引っ張ってきた三人に向けられている。

「おいおいおい、マジで全員倒されちゃったのか。正直、こつちが勝つと見込んでいたんだがな。成長したなお前ら」

「ハツコンのおかげですよ。私たちだけだと正直どうなっていたことやら」

「いらっしゃいませ」

へブイの称賛に、ここで謙遜するのも嫌味になるので勢いで肯定してみた。

実際はほんの少し手を貸しただけで、全員で勝ち取ったのだが。

「ったく、ハツコンは予想外過ぎるだろ。お前さんともう少し早く会えていたら……まあ、今更か」

呑気に会話しているように思われるかもしれないが、今もミシュエルの斬撃を巧みな足捌きで躲しながら話をしている。

一振りごとに風が巻き起こり、団長の前髪が揺れているが当たる心配が全くしない。

この状況でも余裕の態度を崩さないケリオイル団長と、無駄に会話を楽しんでいた訳じゃない。既に遠巻きではあるが全員で四方を取り囲んでいる。

正面にはミシュエル、後方にはラツミスと俺、左にはへブイ、右にはピティーとシユイ。包囲網は完成した。

「こりゃ、絶体絶命ってやつか」

この状況でも自虐的とはいえ、笑みを浮かべられるのか。

「団長、もう無理っすよ。武器を捨てて降参して欲しいっす」

「元団員の温情って奴か。それに縋りたいところだが……俺が負けたら息子はどうなる」

ニヤついていた口元が引き締まり、避けるのではなく両手の短剣を交差させてミシュエルの大剣を受け止めた。

「これで勝負を決めますよっ!」

力ではミシュエルの方が勝っているようで、全身に力を込めて押し切ろうとしている。

ケリオイル団長の膝が崩れたのを見て勝利を確信した瞬間に、ミシュエルの体が大きく横にぶれた。

大剣を支点にして体を半回転させて、側頭部に蹴りを叩き込んだのか。

「鎧が頑丈なら、無い箇所を狙えばいいだけの話だな」

膝を突く羽目になったミシュエルに追い打ちを掛けようとしたようだ、鉄球と矢に阻まれ距離を取る。

この人数差なら楽勝だと甘い考えを抱いていたが、そんなものは捨て去って本気で対応しないとイケないようだ。

普通の相手ならラツミスで包んで、相手の攻撃を無効化して一方的に攻撃を仕掛けることも可能なのだが、加護を打ち消す破眼が面倒過ぎる。

それに俺たちの足元には縄で縛った三人がいるので、この場から離れて万が一にも奪われる訳にはいかない。

向こうに置いてくるかで迷ったのだが、まだ敵が潜んでいる可能性もあるので迷いはしたが連れてくることにした。

包囲網を縮めて一斉に仕掛けるのが正しい選択なのかもしれないが、ケリオイル団長なら相手の意表を突いて逃走しそうだ。

復活したミシュエルが果敢に仕掛けているが同じことの繰り返しだな。このままでは時間が流れるだけ。持久戦に持ち込めば、こちらが有利なのかもしれないが相手にはスルリムが残っている。

森の方角から爆炎や吹雪が見え隠れしているので勝負はついていないようだが、あちらの勝敗に全てを託すわけにもいかない。

う、うーん、膠着状態を打開するには行動に移さないとダメだな。

幾つか手段は思い付くのだが、それをやるのは……こう、なんとか、あれだ、躊躇いがある。

だが、ここは悪役を演じてでもケリオイル団長を止めないといけない。自動販売機の脅しテクニクを見せつけてやるうじゃないか。まずは定番のあれからだ。

俺はいつものコーラを取り出し、更に棒状キャンディーも用意する。そして、コーラのキャップを開けて準備を整えると、音量を最大に設定した。

「だんちよう」

「何だ、ハッコン」

左目はミシュエルに右目は俺に向けるという器用な真似をして、こっちを見ている。凄く気持ち悪いです。

視線が向けられたのを確認すると俺はコーラの中にキャンディーを一つ投入した。

間欠泉のように噴き上がるコーラ。俺が何をしようとしているのかを瞬時に察知したラツミスは俺を地面に降ろして既に離れている。

「何がしたいんだ？」

何度かコーラを爆発させたシーンを目撃しているケリオイル団長の反応が薄い。目潰しや注目を引きつける為に使ったことがあるかな。

そこで、俺はアシスタントのラツミスを呼ぶことにした。

「らっす」

「えっと、嫌な予感しかしないけど、なーに」

相変わらず察しが良いな、ラツミスは。

「あ か お こ し」

「て くだ さ い」

ちなみに赤を選んだ理由は白の「ろ」が発音できなかっただけの理由だ。

地面に転がっている赤の背中に手を当てて上半身を起こし、背後に回って活を入れた。

「へっ、あ、ここどこだ……え？」

寝起きの赤の口にコーラのペットボトルの飲み口を突っ込む。

「うぶっ、げはっ、げはっ。おいおい、このしゅわしゅわ嫌いじゃないけど、もっと優しく飲ませてくれよ」

この状況で呑気なことを口に行っている赤の目の前に 念動力 で操作したキャンディーを浮かばせた。

「ちょっと待て！ それはないだろ、ハッコン！」

俺が何をしようとしているのか理解した、ケリオイル団長の取り乱した声がする。

さつきコーラがどうなったかを知るだけに、このコーラスプラットフォームを恐れているようだ

「えっ、何？」

赤は全く状況を把握していない。

そして、仲間のどん引きした目が俺に集中しているが気にしない。これは相手を動揺させる為にやっていることであって、本当はしたくないんだこんなことは。

更にコーラを用意する。その中にキャンディーを落として同じ光景を見せると、赤の顔色が変わった。血の気が一気に引いて頬が痙攣している。

「お、おい、まさか、同じことを俺の胃でやるってことじゃあぶぶぶ」

追加でコーラを相手の口に押し込んでみたのだが、激しく頭を振って抵抗している。

「好き嫌いはいけませんよ。さあ、あーんしてください」

いつの間にか背後に回り込んでいたヘイブイが赤の口を掴んで強引に開かせている。

「良い子っすねー、じゃあ、いっぱい飲むっすよー」

シユイまで来ていたのか。何だろーう二人がとても楽しそうだ。

俺が脅してやっているだけで本気じゃないことを理解したのだから。からかい半分で遊んでいるようにしか見えない。

自分たちに嘘を吐き続け、離脱した彼らへの腹いせも若干含まれている気がする。

「おひ、ひょうひゃんひゃよひゃ。やへへふへええ」

あーあ、口の中にコーラを強引に注がれている。元は自分がしていたことだが、客観的に見ると酷いな。

一気に飲ませると苦しそうに赤がゲップをしている。二人はキャンディーを手に取り悪魔の様な笑みを浮かべて団長へ顔を向けた。

「団長……元団員として、貴方たちの愚行を見過ごすわけにはいかないのです。投降してください。今なら私も会長に掛け合って温情処置を願いますから」

胸に拳を当てて苦しそうな表情を浮かべるへび。

「そつつすよ！ もう、仲間同士で争う姿なんて見たくないっす！」

髪を振り乱し、悲愴な感じで叫ぶシユイ。

「お前ら……まず、その粒から手を離しやがれ！」

激昂したケリオイル団長が怒鳴り散らしている。

それもその筈、二人は片手にキャンディーを掴み、嫌がる赤の口に押し付けながら話していた。

「おや、いつの間にこんなものを」

「不思議なこともあるっすね」

何だろう、たちの悪いコントに見えてきたぞ。

今はただの脅しだが、悪ノリした二人ならやりかねないと思っていそうだな。

ケリオイル団長の動揺が表に出始めているようで、掠りもしなか

ったミシユエルの攻撃が服を切り裂いた。

あと一押しといったところか。

「そうですか、私たちの想いが届かないのですね。っと、まだ二人は気絶したままでしたね。こういった場合は靴を脱がせて熱を冷ますのが良いと聞いたことがあります。では、僭越ながら私が脱がさせて」

「おい、やめろ！」

副団長の靴に手を掛けたへブイへ、今日一番の大声で叫ぶケリオイル団長がいた。

「くそつ、敵に回すと厄介過ぎるだろ、お前ら！」

それは同意する。

「それは、お互い様ですよ」

それも同意する。

仲間だった者同士が胸を痛めながら真剣な戦いをしている……と
思っていたのだが、彼らとの争いとなるとこうなってしまう定め
のようだ。

完全なシリアス展開はもう諦めよう。自分がきっかけの気もする
が、そこはスルー！

集中力が乱されてしまったようで、動きにキレがなくなっている。
何とか防いでいるようだが、ここでへブイが参戦したら簡単に捕縛
されそうだ。

愚者の奇行団との衝突もこれで終わりかと思ったその時、森の木
々が吹き飛び、爆炎と吹雪が同時にこっちへと迫ってきた。

二度目の経験

「子供がいるからやり辛えなっ！」

「それはこっちも同じ」

木々が燃え上がったかと思えば一瞬にして氷結する。

怒鳴りながら飛び出してきた炎と雪の種族に巻き込まれた森の木々には、ご愁傷さまと言うよりほかない。

結構近い場所から現れたな、ここからだと言いつつ距離にして十メートルあるかないか。熱風と冷気が入り乱れているようで、大気が歪んで見える。

素早く 結界 を発動させるとラツミスたちが飛び込んできた。人の体で外にいたら体に異常をきたすレベルだったようだ。

ピティーだけは自分の盾を合わせて閉じこもっている。あれで防げるみたいだが、ただの置物か岩みたいだ。

「熱寒かったから助かったっす」

「うん、温度が変わり過ぎて気持ち悪かったよね」

「数分なら耐えられるかもしれませんが、あの戦いに加わるのは難しいです。申し訳ありません、ハツコン師匠」

「あの次元の戦いは魔法や特殊な加護の使い手でなければ、難しいでしょうね。ピティーなら何とかかなりそうなのですが、あの調子ですし」

ピティーは貝になっっているので戦闘不能状態だ。

全員が俺に張り付いて戦況を見守っているのだが、縛り上げておいた紅白双子とフィルミナ副団長はラツミスが運んでくれている。俺の背中側に背を預けて座るような形で三人が並んでいるので、外の争いに巻き込まれる心配はない。

「あつ、団長はどうしたっすか！」

シュイの叫びを聞くまですっかり忘れていたケリオイル団長の存在だったが、その場を動かさず熱気と冷気が渦巻く中で、平然と二人の戦いを見守っている。

「団長さん我慢強いね」

「いえ、どうやらあの破眼が吹雪と炎を掻き消しているようです」

よく見ると吹雪も炎も団長の前で消滅している。見た所、立っている場所の五メートルぐらい先から消えているようだ。

団長の 破眼 の有効範囲があれぐらいなのか。これは覚えておく価値がある情報だな。

それにしても 破眼 は加護の力を打ち消す能力だという話だったが、あの二人の力も加護扱いになるのか。それとも、超常的な力なら何でも消せるのか。だとしたら、魔法も通じないということになる。

ケリオイル団長への警戒レベルが二段階ぐらい上昇した。

嫌な状況だな……炎を纏う灼熱の会長と球形の冷気に包まれているスルリィムと少年。少し離れてケリオイル団長と俺たち。

灼熱の会長は少年が邪魔で本気を出せないようで、攻めあぐねているのが見て取れる。

スルリイムも少年を守りながら戦っているので、冷気を自在に操れないようで苦々しい表情を浮かべている。

正直、少年を見捨てて戦うのではないかと危惧していたのだが、団長に利用価値があることを理解しているのか、今のところは守られているようだ。

この場で少年を手放したら、即座に団長が敵に回ることを警戒しているだけかもしれないが。

これは事態を好転させる為に動くべきなのだろうが、あの火と雪が吹き荒れる空間に手を出すのは危険度が高すぎるよな。

この 結界 があれば近づけるが 破眼 で消されたら全員が危機に陥る。今、戦況を握っているのはケリオイル団長なのか。

「まったく、埒が明かないわ。ケリオイル団長、あの炎男の火を消さない！」

吹雪と炎の嵐に負けない大声で叫んでいるな。硬直状態を打破しようとしてスルリイムが動いたか。

命令されたケリオイル団長はじつと灼熱の会長を見据えていたが、頭を左右に振って無理なことを態度で示している。

「距離が遠すぎる！」

「使えない男ね。なら、使えるようにしてあげるわ」

灼熱の会長を牽制しながらスルリイムが団長の元に駆け寄り、自分を取り囲む吹雪の球の中に取り込んだ。

そのまま、じわじわと灼熱の会長への間合いを縮めている。

やばいな。それ以上、近寄られると 破眼 の有効範囲に入ってしまう。

「ハツコン師匠。団長の加護は射程距離が決まっているのですよね。このまま、近づかれて炎を消されては危ないのでは」

「ミシユエルも気づいていたか。仲間たちも今の意見で現状の危うさを理解したようで、表情が一変した。」

「敵が会長に集中している今なら我々が不意を突くことが可能かもしれない。こちらに攻撃を仕掛ける余裕はないでしょう。それに、数分であるなら冷気にも耐えられる筈です」

「私の鎧なら五分は耐えてみせます」

「それしかないっす」

「今、灼熱の会長が負けちゃったら、勝ち目ないよね」

「ここで動かないと全員がやられかねない。少しでも可能性を上げる為にこれをみんなに配っておこう。」

「俺は本日二度目の コインロッカー にフォルムチェンジすると、真ん中あたりの扉を開いた。そこにはヒュールミ特製の防寒具が置いてあったので全員に渡しておく。」

「これがあったら、もう少し耐えられそうですね。では、行きましょーっ！」

「ハツコンはここで待っていてね。副団長たちを連れて行くわけにもいかないから」

縛っておいてある三人を放置していくわけにはいかない。

ラツミスの背にいけないのは不安が残るが、ここは任せるしかない

いか。

「いらつしゃいませ」

結界 から飛び出していく仲間の背を見つめながら、無事に戻ってくることを祈るしかできないでいる。

いや、他にも何かできないか頭を働かせないと。動けなくてもやれることは何かある筈だ。

スルリムが飛び出してきた仲間たちを一瞥して 笑っている？
何だあの嫌な感じの笑みは。誘い出されたのか……いや、でもこ
うちに攻撃を仕掛けたら、灼熱の会長の炎を防ぐ術を失う。何か秘
策があるとしてもいっただろうか。

「ふふふ、あはははは。ここまで上手くハマると笑いしか出ないわ
ね」

余裕の笑みを浮かべている。何だ、何を考えている。この状況下
で何故大口を開けて笑えるんだ。

一見、自暴自棄になったかのように見えたスルリムだったが、一
瞬にして顔から表情が消えたかと思うと、口元に氷の微笑を浮かべ
た。

その瞬間、彼女の足元から噴き出した吹雪により姿が覆い隠され
る。この光景、一度見たぞ。灼熱の砂階層の塔の中で逃げ出した時
と同じだ。

まさか撤退したのか。

「団長、やりなさい」

俺のすぐ側で感情のこもっていない冷たい声がした。

「すまねえ、ハツコン。破眼！」

周囲に発生していた青い光の壁が崩れ去り、無防備になった俺にスルリムがそつと手を触れた。

やばい。直感が警告を鳴り響かせている。何かしなければ取り返しつかないことになると思つた矢先、俺の前の光景が一変した。

背を向けていた仲間の姿もなく、炎も吹雪も消え、灰色の壁と床が見える。

「上手くいったわね。初めから、目的は貴方だったのよ……ハツコン」

前に回り込んできたスルリムの、狂気すら感じる勝ち誇つた笑みを見て全てを理解した。

俺は連れ去られたのか。

雪精人である彼女は一度俺たちの前から消えたことがあつた。そして、階層を自在に移動できるのではないかと俺は予想を立てたことがある。

つまり、考察が当たっていたということか。彼女は瞬間移動が可能で階層を自在かどうかはわからないが行き来することが可能。

そして、その能力は自分から一定の範囲内にいる相手も一緒に飛べる。

触れた相手だけかとも思ったが、俺の背にもたれかかっていた三人と触れていなかったケリオイル団長もこの場に居るので、有効範囲があると考えた方がいい。

自分の考察を信じてもつと警戒しておくべきだったな……完全にやられた。誰が考えたシナリオかは知らないが、手の平で踊らされていたのか。

これで自動販売機になってから二度目の誘拐だ。

「珍しく人間も役に立つのね。さて、積もる話もあるでしょ。私は自室で寛いでいるから、話が終わったら来なさい」

そう言っつてスルリイムが少年の手を引いて部屋の扉を開けて出て行った。

ここは殺風景な部屋で家具も何もなく、唯一ある窓には鉄格子がはめてある。牢獄みたいだな。

「強引に連れて来て悪かったなハツコン。ここはダンジョン内の奴らの拠点だ」

つまり、冥府の王もいるってことだよな。

お、おう、いきなりラスボスの住処に連れてこられたのか。自力で動けない俺が敵の本拠地に一人……一台でいるなんて。これはピンチとかいう次元を超越しているぞ。

「あおう……もう戦いは……終わったの……」

俺の背後から聞き慣れてしまった小さな声が聞こえる。

視線を向けると、重なり合った盾の隙間からこちらの様子を窺うピティーがいた。

ああ、有効範囲内にピティーもいたんだね。ご愁傷様です。

敵地滞在

状況を全く把握していないピティーが忙しなく部屋を見回しているが、こちらもそれどころじゃないので説明は後回しにさせてもらおう。

ケリオイル団長が紅白双子たちの縄を短剣で斬って束縛から解放している。止めてもしょうがないので黙って見守るしかない。

気を失っていた二人も目が覚めたようで、全員が俺をじっと見ている。

スルリィムのように勝ち誇っている訳でもなく、ほんの少しだけ悲しそうな表情に見えるが何を考えているのだろうか。

「さてと、まずは状況の説明と確認といこうか。ここは冥府の王が拠点としている、ダンジョン内のある階層だ」

どの階層かは秘密なのか。窓の格子越しに見える空は曇っていて、高い位置にあるので外の様子は見えない。

「最終階層を攻略していたんだが、食料や色々物資が不足してな、お前さんの力が必要になったわけだ。そこで、ピティーを勧誘すると見せかけて、ハッコンもどうにかできないと考えた」

「ピティーは……おまけ……」

盾の隙間から覗き見ているピティーの声が落ち込んでいる。

「んでだ、ピティーとお前さんたちが合流しても、してなくても、あの場所を突き止めると信じて待ち構えていたってのが真相だ」

「思ったより上手くいったな、赤」

「ハツコンたちが想像以上に強かったのは誤算だったけどな、白」

「皆さん、見違えましたよ」

称賛してもらえるのは嬉しいが、素直に喜べる状況じゃない。

敵地だというのにケリオイル団長たちがいるおかげで、そこまで危機感はないのだが……自動販売機に何ができるのだろうか。

「面倒な駆け引きはしねえぞ、ハツコン。俺たちと一緒に最終階層を探索してくれ、頼む」

「ごんねん」

「どうしても駄目か」

「ごんねん」

悪いが即答させてもらうよ。子供を助けたいという、ケリオイル団長たちの苦悩はわかる。でも、その為に今まで世話になったダンジョンの人たちを裏切る気にはなれない。

直接的に害を与えていないとしても、そんなことをした冥府の王の手助けなんてまっぴらごめんだ。

「そうか……まあ、ハツコンならそう言うと思ったぜ。じゃあ、ピティー。もう一度俺たちの仲間にならないか」

あっさりと引き下がると、今度はピティーを勧誘するのか。

「ピティーは……ヘブイたち……の手伝いを……するって……約束した……」

「もし、俺たちを手伝ってくれるなら、ダンジョン攻略の暁には願い事を一つ叶える権利をやるぜ。俺たち四人の願いはたった一つだからな。階層主のコインは余っている」

その誘惑に重ねられた盾が大きく縦に揺れた。

ダンジョン攻略後に叶えられる願いが実在するものなら、ピティーの想い人を振り向かすぐらいは可能だろう。

「あの人をお前だけのモノにすることも可能だぜ」

盾に近づきケリオイル団長が甘い言葉を口にする。それは悪魔の誘惑にも似た囁き。

これはダメか。ピティーの望みは想い人を独り占めにするかどうか。その手段を提示されたのから、彼女の答えは決まっている。

「ダメ……彼の気持ちは……自分の力で……そんな……怪しい力に頼ったら……ダメ……」

思いもしなかった返答に、俺はまじまじとピティーの顔を見つめてしまった。

前髪の間から垣間見えた瞳には強い意志が宿っている。

彼女の想い人への依存は褒められたものではないけど、恋愛に対する真摯な考えは嫌いじゃない。

「ほんとと、そういうことは頑固で譲らねえよな。まあ、時間はあるからなじっくり考えてくれ。お前さんたちが仲間にならない限り

は、ここから出すことはできない。明日また来るぜ」

そう言って踵を返した団長たちだったが、双子がぐるりと振り返り詰め寄ってきた。

「あつ、ハツコン何か売ってくれよ。あの肉の揚げたやつとか、食わせてくれよ」

「俺も俺も」

ふむ、敵対しているとはいえ客は客。売ること自体はやぶさかではないが、素直に売るのも癪に障る。
ということ商品を変更してみた。

「おい、ハツコン！ 全部水じゃねえか！ 意地悪しないでくれよ
お」

「肉とか甘い飲み物とかあるだろ！ 頼むよお」

紅白双子が縋りついて懇願してくる。団長と副団長も商品が欲しいようで、何も言わずにじっとこっちを見ているのが怖い。

うーん、捕らわれの身だから、あんまり反発すると身の危険に晒される可能性も出てくるか。ここはちゃんと商品を入れ替えてあげよう。

売り上げの良い商品をずらっと並べて、普通に売ることにした。

「いらっしやませ」

「おー、ありがとうな、ハツコン。さーて、何を買うか……って、
おいー」

「たけえよっ！ 一つ十銀貨って酷くないか！」

スキー場や山の上だと商品が高くなるのは自動販売機あるあるだからね。敵地価格となっております。

「こうかをとくにゆうしてください」

「ひでえ、ぼったくりだ！ くっ、くそお、でも買わずにはいられないっ」

悔しがっているが、口が商品の味を思い出してしまったのだろう。生唾を飲み込みながら銀貨十枚を投入した。

双子は結局、三つずつ購入してくれた。

ケリオイル団長とフィルミナ副団長も幾つか購入して立ち去っていく。

売り上げとしては悪くないな。こうやって彼らの懐を軽くするという攻撃手段もありか。

改めて室内を見回すが、少し高い位置にある格子の入った窓が一つ。団長たちが出て行った金属製の扉。他には家具一つない殺風景な部屋で大きさは八畳ぐらいありそうだ。

うーん、俺は屋外でも平気だから、この環境に不満はないのだけど問題は

「ここ……おトイレも……ないわ……」

上の盾を取り外して下の盾の内側に座っているプレイヤーが、下半身に手を当ててもぞもぞしている。

団長たちプレイヤーの存在忘れていただろ。トイレもない部屋に女性を残すなんて最低だぞ。

「ど、どうしよう……これで……どうにかする……しか……」

空のペットボトルを見て何を考えているのかな。

かなり切羽詰っているようで、思考がおかしくなってきた。

「ぼ て い さ ん」

「ピテュー……です……」

団長たちも俺がいるから安心して放置したのかもしれない。

限界に近い彼女の為に 災害用簡易トイレ をセットした。冒険のお供に女性ハンターから大人気のこれを 念動力 で操り、俺の隣に設置した。

「えっと……これは……なに……」

限界が近いのか声が震えているように聞こえた。

「だ し て こ こ」

言葉が限られているので上手く言えないのだが、何とかこれで理解して欲しい。

首を傾げているだけで、理解していないようだ。仕方がない、わかり易く表現しよう。

簡易テントの中に置かれた穴の開いた椅子に袋があつて、吸収率が高く消臭効果もある素材が底に敷かれている。

そこにミネラルウォーターを持って行き、キャップを開けて中身を袋に注いだ。そして、袋だけを取り外して上を括り地面に置いた。袋の予備を再び椅子にセットしてから、彼女に視線を向ける。

完全に理解した。ピティは慌ててテントの中に入って入り口を閉めた。こういう時、音を聞かれるのを女性は嫌うらしいので、ジュークボックスにフォルムチェンジしてクラシックの曲を流しておいた。

無事にトイレ問題も解決したので食事を用意して、今日はもう寝ることになった。ベッドが無いのでどうするのかと思っていたのだが、盾の中で寝るようだ。

バスタオルを数枚出して、盾の中に敷いてあげるとピティがじつとこつちを見ている。

「ありがとう……ハツコンは……優しいね……」

目が見えないので感情が読み取りにくい嬉しそうだ。喜んでくれたのなら何よりだよ。

盾の中で丸まって眠る彼女から寝息が聞こえてきたので、バスタオルを二枚追加して上に被せておいた。

眠っている彼女を起こさないように 風船自動販売機 で風船を膨らます際には音声を切つて動かして 結界 内部が風船で埋め尽くされると ダンボール自動販売機 になって宙に浮かんだ。

ぶかぶかと浮かび上がると窓の格子越しに外が見えた。

闇だ。真っ暗で何も見えないな。朝か昼に同じ事をしてもう一度調べよう。

地上に降り立ちいつもの自動販売機になったのだが、することがない。敵地で眠る気にはなれないし、夜の間にかかしておくか。

「おーい、起きてるか……って、何だこりゃあつ!？」

「えっ……何、何……どうしたの……ってええ……」

俺たちの様子を見に来たケリオイル団長と、その驚く声で起きたピティーが室内を見回して、あんぐり大口を開けている。

室内には色とりどりの花が花瓶代わりのペットボトルに活けられ、以前やった風船アートや、とある空港で買った下駄を壁際に並べてみた。

あと、手ぬぐいや扇子や浴衣を壁に貼り付けて殺風景な部屋を飾りつけたのだがどうだろうか。

もちろん、全て自動販売機で売られていた物だ。こういった土産物は空港や観光地で売られていることがあるので、見かけたら迷わず購入してきた成果がこれだ。

「うわぁ……綺麗……これだったら……何日でもいられそう……」

思いの外、ピティーが喜んでくれている。こんな牢獄のような部屋に女性を閉じ込める訳にはいかないからね。

ヒュールミの時も機能が今くらい増えていたら、華やかな部屋に模様替えできたのにな。

「何と言うか、お前さんたち立場わかっているのか」

呆れ顔のケリオイル団長だったが、俺たちが怯えていないことに安堵しているようにも見えた。

どんな場所であっても俺は自動販売機として、やれることをやるだけだ。

口を滑らかにする薬

「で、考えを改める気になったか？」

朝っぱらから何をしに来たのかと思えば昨晚の繰り返しか。

「いやよ……」

「のう」

「さんくう」

「のうさんくうってのが何かわからんが、断られたことは伝わったぞ」

やっぱり英語は現地の言葉に翻訳されない。他の人でも試したことがあるので知っていたが、これが通じたら言葉が足りない部分を補えるのに残念だ。

「なあ、少し真面目に考えてくれよ。俺がこうやって勧誘している間は、お前たちを傷つけさせたりはしねえけどよ……スルリィムや冥府の王は甘くねえぞ。今は俺が何とか説得するからと願いでいるから許されているが、長くても一週間ぐらいしかもたねえ」

拒絶し続けていると焦れて魔王軍の奴らが強引な手段を取るのか。まあ、そうだよな。

俺たちは敵対しているのだから、従わない奴らを生かしておく理由はない。

「わかってるな、期限は一週間だ。忘れるなよ」

そう言ってケリオイル団長が立ち去っていく。

最後の一言は脅しというより俺に言い聞かせている様だった。まるで

「一週間以内に……逃げろって……言っているみたい……」

ピティーもそう思ったのか。

期限は最長で一週間。その間に逃走経路と手段を確保しなければならぬ。

ラツミスたちが助けに来ることを期待したいが、場所もわからない敵の本拠地に都合よく現れることはあり得ないだろう。

となると、まずは本拠地の内部構造を把握しておきたい。敵の数も調べておかないとな。その為にはどうすればいいのだろうか。

考える、自動販売機である俺に何ができるのか、考えるんだ。

「ハツコンさん……ご飯……もらっていい……お腹空いた……」

お、ごめんごめん。朝ごはんの時間はとっくに過ぎていた。

腹が減っては戦ができぬって言うからね、まずはお腹を満たしてもらおう。

用意した料理を美味しくそれに頼張るピティーを見つめると、ふと一つの案が思い浮かんだ。

ドンツと、扉が開かれた音がしたので視線を向けると紅白双子が揃って現れた。

「ハツコン、飯と飲み物頼む！ あと、もう少し割り引いてくれっ」

「あんまり金ねえんだよっ！ 頼むよ、ハツコン様あ」

縋りつく二人が鬱陶しいので商品の金額を戻しておく。

「おおっ、ハツコンさんマジかけえっ！」

「食いまくるぞおおお」

あまり良い物を食べていなかったのか、二人が好物を貪っている。その姿は適度に飢えた状態のシュイのようだ。

「おごりだよ」

「おおっ、わりいな」

「最高の魔道具だぜ、ハツコンは！」

彼らに俺からカクテルをプレゼントした。甘口で飲みやすいものを選んだので、彼らなら水のように幾らでも飲み干すことができるだろう。

うんうん、好きなだけ飲んでくれ。こっちのちょっとアルコール度数の高い日本酒もどうぞ。おー、いい飲みっぷりだね、こっちも遠慮なくぐっつとやってくれ。

一時間後、ぐでんぐでんに泥酔した二人がいた。

「ハツコンよおおお、聞いてくれよおお。俺たちだつてよおおお、ダンジョンのやつらもよおおお、大切なんだよおおお」

何回目だこの話。白は絡み酒なのか、もう少しアルコール度数を抑えておくべきだった。

「えっぐえっぐ、会長にも世話になってるから、うっうっうっ、心苦しいんだぜ、うおおおおお」

赤は泣き上戸だし。前に飲ませた時はここまで酷くなかったのだが、ここでもかなりストレスが溜まった結果なのだろうな。

口が軽くなつた二人から情報を引き出した結果、わかったことが幾つかある。

ケリオイル団長たち四人はここでは歓迎されていない。ダンジョン攻略に必要なだから仕方なしに置いてやっているぐらいの立場。

優秀な配下がいるなら何で人間にダンジョン攻略をさせているのかという疑問があつたのだが、外から来た魔物が争つた場合、ダンジョンの魔物に対する力が弱体化するそうだ。

なので自軍の魔物を投入してもダンジョン内の魔物に一方的に蹂躪される可能性が高い。

スルリィムは雪精人という異種族ではあるが魔物扱いではないので、このダンジョンの魔物相手でも普通に戦える。これはキコユもそうだったから納得だ。

ただ、魔物に対して力が半減するだけで対人間相手なら問題ない。そもそも弱体化してくれるなら冥府の王の相手も少しは楽になるのかな。

「ここにはよおおお、五指將軍つてのがいてよおおお。威張りくさつていてむかつくううう」

冥府の王の配下が全員ここに揃っているのは面倒なことこの上な

い。

「でもああ、冥府の王も五指將軍も最近、見かけないよな、うつつづくすつ」

「小指とおおお、人差し指とおおお、親指がいねえなああ、あれ何でだ？」

自分で口にして疑問に思ったようで、酔っ払い二人が顔を見合わせて同時に首を傾げている。

小指は闇の森林階層で捕えた敵だよな。今は清流の湖階層の地下牢の中だ。残りの親將軍と人差將軍は未知の相手だがここにはいないのか。

藥將軍はスルリムのことだから、もう一人の中將軍がこの拠点には滞在していると。忘れないでおこう。

「こまもの」

「おおいの」

「ああー多いぞおおお、下っ端は骨ばっかだけで、辛気臭いけどなあああ」

「最低でも百は、うつつつ、いるんじゃないうおおお。あの骨、話し相手にもなってくれないんだぜ、悲しいじゃないかあああ」

俺が酔わせておいてなんだが面倒臭いなこの二人。

しかし、情報は有益だ。冥府の王が骸骨なので配下はスケルトン軍団なのだろうか。確かこの世界では骨人魔という呼称だったか。

「がいことう」

「いがいあ」

「骸骨以外は、人間もいるぜえええ。辛気臭いコート着たのがよお
おお」

「うつつ、人間なのか人間っぽい種族なのかは、ぐすつ、わかん
ないけど」

骸骨は単純な命令だけを守って動いている感じなのだろうか。全員ちゃんと意思があると厄介だが、もし思考力がないのであれば何とかなるかもしれない。

となると、問題は人間かそれっぽい種族だな。

酔っ払い相手にそれからも情報を引き出すと、二人は完全に酔いつぶれて眠ってしまった。

無駄も多かったが、有意義な時間だった。この情報は全て 防犯カメラ で記録したので、いつでも引き出せる。

「この酔っ払い……どうするの……扉……開きっぱなし……」

本当だ。扉は開いて二人は眠りこけている。普通なら絶好のチャンスなのだが、内部の構造も不明だし、敵の配置もわからない。

おまけに自力で動くのが無理なので、早まらない方が良い気がする。

「ぼていさん」

「ピテイーです……何……」

「からだまさ」

「くつて」

「体まさくって……もしかして……まさぐって……かな……」

「うん うん」

少しはハツコン語が通じるようになってきた。ここに連れてこられてから、何だかんだで言葉を交わす機会が多いからな。

「寝ている……男子に……いたずらなんて……できない……」

そんなこと頼んでいません。何を勘違いしたのか、頬を染めて照れている。

「とうぼうに」

「やくたち」

「とうぼうに……やくたち……逃亡に……役立つ？」

「うん うん」

いいよいいよ、ピティー。そろそろ、ハツコン語初級認定してもいいかもしれない。

理解してくれたようで、双子の体を調べてくれている。

「こんなの……あつた……」

「こっちに」

俺の前に突きつけられたのは拠点の見取り図だった。

更に敵の数や配置場所も記入されている。紅白双子たちも見回り

をさせられていたのかもしれない。その全てを録画しておいたので、いつでも確認できる。

覚えてしまったらもう必要ないので元に戻してもらった。他に重要なアイテムはなかったようで、ピティーが盾に戻っていつものように中に籠った。

ケリオイル団長たちの立場と、拠点の構造はこれでバツチりだ。後は骸骨の対応力と人間たちがどういった相手なのかを見極めないと。

今後のことに思考を巡らせていると、半開きだった扉が大きく開け放たれた。

「何しているのかしら、この子たちは」

そこには冷たく子供たちを見下ろす、フィルミナ副団長がいた。

魔法で生成した水を紅白双子の顔面にぶちまけると、慌てて飛び起きている。

「貴方たちには後で話があります……ハツコンさん、スルリム様が呼んでいますので、同行願えますか。ピティーさんは結構ですの
で」

俺だけ呼び出しなのか。

断ることにデメリットしかないから、ここは大人しく従おう。

俺に何の用があるのかも気になる。いざとなったら 結界 で耐えられるから直ぐにスクラップなんてことはないだろう……きつと。

表と裏

「もっと力入れて」

「ラツミスの偉大さが初めてわかったぜ、なあ、白」

「マジでマジで」

檄を飛ばすフィルミナ副団長の指示で、俺の体を懸命に紅白双子が押している。

初めは持ち上げようとしていたのだが、二人ではどうしようもなかったので足元に車輪を出してあげた。

拠点は石床で平らに均されているので何とか押せている。それでも結構きついようだ。

酔いつぶれている隙に見せてもらった見取り図を参考にすると、俺たちのいる場所は皆の様な建造物三階の一番東側。

スルリイムのいる部屋は真逆の西側。角部屋でやたらと大きかった。幹部ともなると部屋の間取りも選り取り見取りなようだ。

俺のいた部屋と比較すると約三倍はあった。あの部屋も一人で住むには充分だったのだが、スルリイムの部屋ぐらいになると大き過ぎて俺なら落ち着かない。

「ふぬううううう」

顔を真っ赤にして全力で押している彼らに楽をさせてあげるなら、商品を一度全部消して中を空っぽにするかフォルムチェンジでダンボール自動販売機 になればいい。だけどポイントがもったいないので、このまま頑張ってもらおうしよう。

「さあ、着いたわ。スルリイム様、ハツコンを連れてまいりました」
「そう、中に入れて」

三回ノックして声を掛けると、扉の向こう側からスルリイムの冷たい声がした。

木製両開きの扉を開けて、俺が運び込まれる。
予想はしていたが豪華絢爛な部屋だな。

毛並みが良い見るからに高そうな絨毯。アンティークの店で一桁値段違うんじゃないかと、目を疑うようなデザインの家具つぼいのが取り揃えられている。

天井からぶら下がっているのもシャンデリアみたいだな。異世界でも金持ちのイメージは地球と大差ないようだ、少し古い時代考証だが。

そんな中で一番目を引くのは対面にある巨大な窓だ。壁がなく一面ガラスの窓なので、外の景色が良く見える。

燦々と輝く太陽と何処までも広がる青い海。巨大な湖という線もあるが、何となく海のような気がする。嗅覚があれば潮の香りで判断ができたのに。後でピティーに訊ねてみよう。

「ご苦労。そのハツコンとやらを置いて下がって。戻す時は骨たちに頼むから」

窓際に立ち海を見下ろしている後姿はスルリイム。何かバスローブみたいなものを着て首にバスタオルを巻いているな。この部屋の雰囲気と相まって、完全に昭和のありがちな金持ちスタイルじゃないか。

後は高級そうな椅子に腰かけて膝の上に猫を乗せて撫でながら、ワイングラスを片手に持っていたら完璧だ。

「失礼しました……気を付けてください」

最後に俺の耳元で囁き、注意を促してくれたフィルミナ副団長が退室した。

敵側に回ったとはいえ、ケリオイル団長たちは俺の身を案じてくれている。不思議な関係だよ。

「貴方、意思のある魔道具だそうね。人間は嫌いだけど、その他の種族は敵視していません。敵対するなら容赦はしませんが」

いつもの高飛車で怒りの感情を露わにしている時とは全く違う雰囲気だな。落ち着いているようだし、口調も穏やかだ。

って、あれ？ いつも手を握っている団長の子供がない。触つてないと『腐食』の加護が緩和されず、全身に激痛が走るのだよな！？ 慌てて、子供の居場所を探るが部屋の中には何処にも見当たらない。

まさか必要なしと見限ったのか。いや、フィルミナ副団長たちが落ち着いていたということは、子供の姿が見えなくても大丈夫だということか。

となると、あの水晶の棺がここにもあって、必要のない時だけ眠らされているのかもしれない。そう考えると合点がい

「お姉ちゃん、どこにいるのー」

スルリムと同じバスローブ姿の少年が髪を濡らしたまま、隣の部屋と繋がっているらしい扉から跳び出してきた。

お姉ちゃん？ 敵対している間柄で人質なのにお姉ちゃん？

「こら、頭ちゃんと拭いてないじゃないの。こっちに来なさい、拭

いてあげるから」

「うん、ありがとう、お姉ちゃん」

駆け寄ってきた少年の頭を優しくスルリムが拭いている。

その表情は今まで一度も見たことのない穏やかさで優しく微笑んでいる……誰だあなた。

年の離れた姉弟か若いお母さんと子供にしか見えない。少年も完全に油断した表情で懐いているのがわかる。

えっ、んっ、あれ？

「あの時、突き飛ばしてごめんなさいね。痛くなかった」

「うん、全然平気だよ。痛い振りはあれでよかったのかな」

「完璧よ。すっごく上手だったわ」

あの痛みにのた打ち回る姿は芝居だったのか。泡まで吹いて演技力半端ないな、ケリオイル団長の息子。

そういや、三つ子の中で一番頭が良くてしつかり者だったって話だったが、あれが全て芝居で計算した行動だということのか。

となると、スルリムの少年に対する冷たい態度も全て演技ってことになる。

「でも、あまり離れないようにしてね。この部屋でも端から端まで離れると、その負の加護を抑えてあげられないから」

「わかった、気を付けるね」

そう言って二人は微笑み合っている。うん、何処からどう見ても

仲良しな家族だな。

呪いの効果を打ち消すのにも有効範囲があるのか。それは手を繋いでなくても大丈夫で、部屋の端から端となると二十メートルぐらいは安全圏だな。

あと完全に俺の存在を忘れられている気がする。二人の世界に入らないで欲しいのですが……いや、待てよ。この秘密を俺が知ったらやばいんじゃないか？

あれ、これは口封じフラグが立ってない？

「あつ、お姉ちゃんあれが噂のハツコンなの」

「ええそうよ。貴方が一度使ってみたって言うていたから、持って来てもらったの」

「でも、意思があるんだよね。だったら、僕たちの関係を見せたのはダメなんじゃ？」

そこは気づいて欲しくなかったな、少年よ。お利口なものも困ったものだ。

恐る恐るスルリイムの顔色を窺うと 平然としている。

「大丈夫よ、固定の言葉しか話せないそうだから。意思の疎通ができる相手もここにはいないわ」

団長があえて正確には伝えなかったようだ俺の情報を。都合よく解釈してくれているなら話を合わせておこう。

「いらつしゃいませ」

「わっ、本当にしゃべった！ ねえ、ねえ、これでお買い物してい

いの？」

「ええ、いいわよ。好きな物を買って」

「ごつかをとつにゆつしてください」

「ここは普通の自動販売機に成りきらなければ。」

「あつ、お金……」

「はい、これを好きなだけ使っていいわよ」

硬貨が満載された小袋を少年に渡している。銀貨だけではなく金貨もちらほら見えるな。どんだけ甘いんだ、この人。

まさかの少年の為にだけ呼び出されたオチとは。このまま、従順な自動販売機の振りを貫いて相手に悟られないようにしよう。

あと、ピティーにも口裏を合わせるように言っておかないと。

「変わった飲み物がいっぱいあるね、ど、れ、に、し、よ、う、か、な」

くつ、そつち系の趣味はないが可愛らしいじゃないか。

後ろで見つめているスルリイムの顔がとろけきつっているぞ、呼吸も荒く頬も紅く染まって……ヤバくないですか、この人。

あれ、何かさつきと目つきが違うぞ。優しいお姉さんから発情期の獣みたいな目つきになっている。

「お姉ちゃんは何が飲みたいの？ あつ、食べ物にする？」

くるつと少年が振り返ると、スルリイムの表情が一変して優しい

笑顔になる。

「うーん、お姉ちゃんは何でもいいわ。好きなのを選んで……食べたいのは別の物だし」

最後の呟きは少年には届いてなかったようだ。俺は聞こえたぞ。逃げて！ ケリオイル団長の息子、早く逃げて！ きつと、そいつシヨタコンだ！

少年が大事にされているのがわかって、命の危険がないことに安堵する間もなく、今度は貞操の心配をする羽目になるとは。

今のところ汚されていないようだが、どう考えてもヤバイ状況だろこの子。

長年の眠りから覚めて人質になったかと思えば、こんな状況に……不憫でならない。でも、無理やり引き剥がしたら少年は激痛で悶絶することになる。

スルリイムの理性がある間は大丈夫だが、さっきの様子を見ている限りだと、いつ手を出してもおかしくない気が。

これ、どうしたらいいんだ？

何でこの状況で予想もしなかったが新たな問題が発生しやがった。少年もスルリイムのことを慕っているようだし、もうこのままでもいいのではと思わなくもないが、どう見ても犯罪行為です。

あれか、雪精人って成人になるまで体が子供のままだから、欲情するタイプが少年の年代なのかもしれないな。

って、そんな考察何の役にも立たない！

余計な悩み事が増えてしまった……助けて、ラツミス。

俺の悲痛な心の叫びが届くわけもなく、ひたすら目の前でいちやつく二人を見続けることとなった。

逃走経路

二人は本当に仲睦まじいように見える。何も知らずにこの光景を見たら本物の家族としか思えない。

ケリオイル団長の息子の身の安全が確保されたことに安堵はするが別の悩みが増えたのは……取りあえず後回しだ。人間嫌いのスルリムのプライドを信じたい、不安しかないけど。

今日会えたことは俺にとってかなりの収穫となった。子供の現状と俺をどう認識しているのかということ。

そしてもう一つ、窓の外の風景からおそらくここは犬岩山階層だろう。

ここまでの情報で色々と策が頭に浮かんだ。逃走方法も思いついたのだが、前提条件が厳しい。ピティーと共に逃げなければならぬからだ。

彼女一人を置いて逃げた場合、最悪責任を取らされて処刑される可能性がある。それを団長たちがかばった場合、もつと最悪な未来が待っているだろう。

なので、どうしても彼女と一緒に逃げ出さなければならぬ。

「ちょっと、お昼寝していいかしら。瞬間移動って体力の消耗が激しくて……まだ、完全に回復してないのよ」

「うん、おやすみなさい。えっと、もう少しだけハツコンから買い物していい？」

おどおどしながら上目づかいで許可をもらっている少年。

これは凄まじい破壊力だ。平静を装っているが口角がびくびく痙攣しているぞ、スルリム。理性の針が振りきれそうで怖い。

「え、ええ、幾らでも使っていていいわよ。甘い物食べたら後で歯を磨いてね」

「はい」

満面の笑みで手を振りながら扉の向こうへと消えて行った。

少年がとことこ俺の元へと歩み寄ってくる。こっやってじっくり観察すると、ケリオイル団長とフィルミナ副団長の良いところを総取りした顔をしている。

紅白双子と似ているのだが、この子の方が中性的で容姿は上回っているな。

俺の前で止まった少年はじつと俺の体を純粹無垢な瞳で見つめていたのだが、

「ハツコンさん、お話があります」

声質と表情が一変した。子供らしい無邪気な笑みがすつと消え、大人びた落ち着いた顔。

何だこの変化は。今まで見せていた姿は芝居だったのか？

「スルリイムさんの目があるので、子供らしさを強調していました。騙すような真似をして申し訳ありません」

深々と頭を下げて謝罪する姿は、十歳前後にしか見えない子供とは思えない。

「僕のせいで家族を苦しめているのは重々承知しています。僕が死ぬば全てが解決するのですが、それは両親と弟たちの今までの苦勞に、後ろ足で砂を掛けるような最低な行ないです」

もし、少年が自殺したら家族はその場で後を追うか、スルリイムを殺そうとしてもおかしくない。そうなった場合待っているのは破滅だ。

賢い子なので家族のその後も予想はついているのかもしれない。

「今はスルリイムさんに従い内部情報を集めている最中です。呪いに関して、家族も騙しているのは心苦しいのですが……弟たちは口が軽いので。貴方の本当の能力は父と母に教えてもらっていますので理解しています。ここには無理やり利用されるか、拒めば破壊される未来が待っています」

「うん」

「逃げる手段は思いついているのでしょうか。もし、何かしら僕に手伝えることがあるなら、遠慮なく仰ってください。やれる範囲ですがお手伝いします」

この子の力が借りられるなら、あの逃走手段が使えるかもしれない。

少年が罪に問われることのない状況で俺たちが逃げるのがベストだろう。本当なら少年もケリオイル団長たちも一緒に逃げたいが……今のところスルリイムから引き離すことができない。今は諦めるしかない。

今はそこを割り切って協力を要請させてもらおう。

それから一日一回、スルリイムの部屋に呼ばれて商品を提供する

のが日課になっている。

一日のスケジュールとしては朝目が覚めるとピティーの朝食を用意する。その後、スルリイムの部屋に招かれて商品を売る。

昼前になると二階の食堂らしき場所に運ばれて、拠点にいる人間と獣人たちへ商品を売り捌く。

三日もやり続けていると拠点の人数と大体の人間関係がわかってきた。

人間や獣人はケリオイル団長たちを除いて全員ローブを着ている。これが冥府の王軍のユニフォームらしい。骸骨は全裸だ。

人間も獣人も細身で不健康そうな人ばかりなのだが、双子たちの話によると骨以外は殆ど魔法や加護を利用した戦いをメインとしているらしく、近接戦闘ができるような人材が乏しい。

冥府の王が魔法使いなので配下も似たようなタイプが集まっているようだ。近距離戦は骸骨が担当して後方から戦うというスタイルなのだろう。

彼らにも分け隔てなく売っているのだが、売れ行きは悪くない。

初めは怪しんでいたがケリオイル団長たちが買っている姿を見て、次々と人が集まり今では躊躇うことなく購入していく。

全員が陰気なので殆ど会話が無いが無口な分、俺という存在がありがたいようだ。人と接するのが苦手な人は自動販売機を利用したりするからね。

食堂での会話はぼそぼそとか細い声でしか話さないの、残念ながら聞き取ることができない。

そついや、五指將軍の一人である中將軍が拠点にいるという話だったが、一度もお目にかかっていないな。

不安の種は全て取り除いておきたいのだが、それらしい人物もしくは魔物が見当たらない。紅白双子に特徴を訊き出しておきたかったのだが、泥酔していてまともに会話が成立せずに眠ってしまった。後日、再び酒を飲ませようかと企んだのだが、フィルミナ副団長

に釘を刺されているようで、あれから一滴も酒を飲んでいない
中將軍はスルリムと同じく自室に籠って出てこないのなら、こ
のまま最後まで引きこもっていて欲しいが、どうなることやら。

昼飯の時間を過ぎたので俺の周りに骸骨が集まり始めた。

骸骨が十体集まって俺の体をそつと横倒しにすると、全員で俺を
持ち上げる。担がれる御神輿ってこういう気分なのか……。

全員がほぼ同じ能力なので足並みも揃っていて安定感はあるのだ
が、あのか細い骨の様な体 いや、骨そのものの体を見ていると
ポキッと折れそうで不安になる。

心配は杞憂に終わり無事部屋へと運ばれて、部屋の隅に配置され
た。奥には二枚貝の中に逃げ込んでいるピティーがいるだけだ。

俺が部屋に居ない時は常に盾を重ねて引きこもっている。そして、
俺が戻ってくると少しだけ隙間が空いて辺りを見回し、誰もいない
ことを確認してから出てくる。

「おかえりなさい……今日は少し……早かったね……ハッコン……」

「ただいま」

「ご飯……お願いして……いい……」

朝に昼食分も多めに出しているのだが、万が一に備えて部屋の隅
に蓄えているそうで、俺が帰ってくるまで何も食べてないことが多
い。

俺がご飯を用意すると歩み寄ってきて、俺の側面に背を預けて食
べるとというのがいつものパターンだ。

「今日は……もう……何処にも……いかない……」

「うん」

急用で呼ばれない限りは今日の仕事はお終いだ。

「よかった……ふふふ……」

昨日あたりから気づいたことがある。ピティーに懐かれてないか、俺。

親しみを持ってくれるのは嬉しいことなのだが、最近何かにつけて俺に触れていることが多いし、前に比べて自分から話しかけてくれる。

そういえば想い人のことも全然口にしていないような。前までなら何か話したと思えば、あの人があの人がばっかりだったのに。

それに前より声が明るいというか弾んでいるような気がするのだ。もしかこれは、吊り橋効果というやつなのか。

いやいやいや、それはないだろ。相手が詐欺師だと理解しても、ずっと一途に思い続けていた人が簡単に他の人に気持ちがるなんてことあり得ない。

その時、俺の脳裏に過去の映像が唐突に蘇った。

これは友人が生まれて初めて彼女ができた時の話だ。見ているこっちが照れるレベルの熱々ぶりで、まだ付き合い始めて一ヶ月だというのに将来を誓い合っていた二人。

そんな友人がある日、突然何の前触れもなく振られたのだ。

休日に会社の同僚と夜の街を歩いている時にチンピラに絡まれてしまい、その同僚が身を挺して庇ってくれた姿がカッコよくて心変わりしたと切り出されたそうだ。

そもそも、休日に何でその同僚と夜の街を歩いていたのかと突っ込みたかったが、ぐっと堪えた。

更にとある映画のワンシーンが頭に浮かんだ。喧嘩が絶えなかつた二人が危機的状況に陥ったらころつと恋に落ちていたことを。そして、そのヒロイン役の女性が続編で前作の男を捨てて新たな男と結ばれたことを。

人は危険を感じると本能として子孫を残そうとするらしい。あと、高い所の恐怖心で鼓動が激しくなるのが好きな人という時の感覚と似ているから恋と錯覚するとか。

つまり何が言いたいのかといえば、この状況良くない気がする。

前日

拠点に連れてこられてから五日目の朝を迎えた。

俺の体にぴったりと背中をくっつけてピティーが朝食を取っている。

「今日も……朝ご飯……美味しいよ……ハッコン……」

今更なのだが、前までハッコンさんと呼ばれていたような気がする。いつの間に呼び捨てに変化したのかは覚えていない。

以前と比べて自ら話しかけてくれて、口調も明るくなっているのは嬉しいことなのだが、言いようのない不安が込み上げてくるのが不思議だな！

あと、何故か怒っているラツミスの顔も思い浮かぶのが謎だね！
依存が完全に移ったか。そういや、生前にテレビ番組で洗脳された人をカウンセリングで元に戻す時の話をしていたな。洗脳した相手より自分の方が魅力も能力も優れていると思わせることはご法度だとカウンセラーが口にしていた。

それをするとは洗脳が解けるのではなく、カウンセラーに対象が移るだけらしい。

「今日は……いい天気だと……いいね……」

優柔不断と言われそうだが、この状況下で懐いているピティーを突き離せないよな。

後にややこしいことになりそうだが、今は従順だと今後の作戦もやりやすいので、それで良しとしよう、うん。決して政治家のように問題を先送りしている訳じゃない、うん。

一見和やかなムードで朝食の時間が終わり、いつもの乱入者がやってきた。

「ハツコン、飯頼む！」

「俺も俺も！」

「私もいただけますか」

「ハツコン……苦労するぜ」

雪崩れ込んできた家族が次々と商品を購入していく。

ケリオイル団長が俺とピティーを見て口にした言葉はあえて無視だ。

一応、敵対関係の筈なのだが、毎朝この家族が転がり込んできてここで朝食を取るのが当たり前になっている。

前に息子としたやり取りは録画済みで、ケリオイル団長たちにも観てもらった。

監視カメラの様な魔道具や魔法で見張られてないか警戒をしながら、ケリオイル団長の破眼で調べてもらったので、その心配はない。

ここに連れてこられた初日と次の日は魔法で見張られていたらしいが、もう疑われていないようだ。

「あれは明日か……準備は万端か？」

「いらっしやませ」

ケリオイル団長のさりげない問いに俺も普通に返す。

「明日だったつけ、白。屋上での飲食会」

「いいよなー、ハッコンとピティーとスルリム、兄貴だけ参加なんだろ」

羨ましがる紅白双子を眺めているとほんの少しだけ緊張感が和らぐが、頭の中は明日の予定でいっぱいだ。

捕らわれの息子に頼んで明日の昼間に拠点の屋上で、バーベキューパーティーを開催してもらうこととなった。といっても、参加人数は三名プラス一台なのだが。

これが許可されたのには理由がある。

「お姉ちゃん、ボクね大空の下でご飯食べてみたい。外はダメだから、屋上は無理かな……」

と上目遣いと媚びるような仕草の併用で、スルリムが速攻で落ちたそう。想像以上にチョロいな。

当初、ピティーを参加させることに渋っていたのだが、ピティーの重さ操作の加護があればハッコンを移動させるのが楽だよと説得してくれた。

決行は明日。その日を逃せばもう可能性は皆無に等しくなるだろう。

団長たちも協力してくれるようで、屋上には誰も近づけさせないようになっているそう。

「やっぱ、中將軍は近くにいるそう。配下の奴らが話していた。だが、俺たちも顔を見たことなくてな、すまねえ」

「あいつら暗いから話しかけても無視するか、直ぐ逃げるんだよ。なあ、赤」

「女の配下もいるけど、一切誘いに乗らねえからつまんねえ」

「はあ、教育方針を間違えましたかね」

家族の団らんを眺めながら今までに得られた貴重な情報を整理する。

この砦には今のところ薬將軍であるスルリムと中將軍が滞在中。ただし、中將軍の姿は不明。息子にも訊ねてみたのだが知らないと言っていた。

ここは犬岩山階層で間違いなく、この砦は犬岩山の裏にある小さな島に建てられている。なので、向こう側からこの島は隠れているので気づかれることはないそうだ。

ここの海は異様に広いので仲間たちが俺たちを見つけることはほぼ不可能。自力で脱出しなければならない。

ラツミスたち心配しているだろうな……無茶言ってヒュールミたちを困らせていなければいいけど。俺のことが絡むと無謀なことも平気でやるから不安しかない。

無事に帰還して早く安心させてあげないとな。俺もみんなに会いたいし。

録画しておいた見取り図を一人で確認していた時に思ったことは、俺が普通の人間ならどうにか砦から脱出して船を奪って逃げるという手段も使えた。

もし、それをやったとしても直ぐに追い付かれるか、下手したら船を沈没されかねない。そもそも、俺もピティーも操船技術がないので無謀すぎる。

作戦は既に彼女にも話しているので後はぶっつけ本番に挑むしかないのだが、未だに無茶ではないかと躊躇い悩み続けていた。

「ハッコン……大丈夫……きつと……上手くいく……」

また不安が表に出ていたようだ。灯りが点滅していたのを見て、ピティーに励まされてしまった。俺は万が一のことがあっても臨機応変に対応できるが、彼女はそうもいかない。不安はきつと俺より上だ。

「ありがとう」

お礼の言葉を口にするると嬉しそうに微笑んでくれた。

こうして見ていると魅力的な女性に見えるのに、もったいない。日頃からもう少し表情豊かに日々を過ごせば、あんなクス男なんて選ばずに済んだのにな。

「くそつ、この姿を見ていると今後のハッコンを取り巻く展開が楽しみで、冥府の王から離脱したくなるぜ」

「わかるぜ、オヤジ」

「争奪戦開始か！」

「そんなことを言っではいけません。ラッミスさんと再会した場面をちゃんと記録しておいてくださいね、ハッコンさん」

この一家はニヤニヤしながらこっちに横目で視線を向けて、何を期待している……。

ピティーは意味がわかってないようで、不思議そうにこっちを見ているだけだ。

脱出が無事成功したら、彼女とはじっくり話し合わないとダメだな。優柔不断な態度をし続けて肝心な部分だけ聞こえない、なんち

やって難聴ラブコメ主人公のようにはなりたくない。

って、何で自動販売機なのにこんなことで頭を悩ませないといけないんだ。

まずは明日のことだけに集中しないと。頭に頬を膨らませてこつちを睨んでいるラツミスの顔が幾つも浮かぶが、今は気にしないでおう。

「んじゃ、そろそろ運びますか」

雑談が盛り上がり過ぎてもうスルリムのところに行く時間のようだ。

車輪を出して紅白双子に押されて部屋を出ようとすると背後からピティーの声がした。

「いつてらっしやい……帰りを……待っているね……」

新婚夫婦の会話っぽいなと一瞬思ってしまったが、頭に浮かぶ幻覚のラツミスが笑顔のまま血管が浮かび上がらせていたので、思考を遮断した。

俺は自動販売機。余計なことはカンガエナイ。

いつもの日課を終えてピティーの待つ部屋に戻り、晩御飯を食べる姿を眺めている。

食べ終わると、フィルミナ副団長が持ってきてくれた大きめの桶に温泉を溜めると、彼女が清潔なタオルを濡らして体を拭いている。もちろん、その際には視界を閉じ見ないようにしている。紳士として当たり前判断だ。

共同浴場では俺は仕事としてその場にいるので、目を閉じていては商売にならないから、あえて周囲を観察していたが。そう、別に女性の裸体を合法的に見たかったわけではない。

「ハッコン……見てない……」

「うん」

何処か残念そうに聞こえたのは聞き間違いだな、きつと。

真っ白なバスタオルで体を拭き終えた彼女は盾の中で丸まって眠った。

寝巻きは俺が用意した大きめのTシャツだ。彼女が脱いだ私服は俺の傍に折り畳んで置かれている。

フォルムチェンジでコインランドリーに置いてある コイン式全自動洗濯機乾燥機一体型 になると、予め準備しておいたペットボトル四本を操り、彼女の衣類を洗濯機の中に何とか運ぶ。

そして、器用さの高さを利用してできるだけ静音になるよう注意をしながら、洗い、すすぎ、脱水、乾燥をする。

全てが終わると籠の中に放り込んで洗濯は終了だ。

だが、今日やるべきことはまだ残っている。明日のバーベキューの仕込みを始めないとな。

肉はスルリムが雪精人の能力を生かし、大量に冷凍保存しているそうなので向こうに任せている。

俺の担当は野菜だ。野菜自動販売機 になって大量の野菜をコンクリートの台の上に並べた。この台は 自動販売機設置据付用コンクリート石版 で事前に俺が出しておいたものだ。

今回はまな板代わりに使用する。もちろん、綺麗に洗浄済みなので衛生面も問題が無い。

さて、今までなら商品に包丁が無いので野菜を切ることを諦めて

いたのだが、意外な抜け道を見つけた。むしろ今まで何故気づかなかったのだと己の間抜けさに呆れたくらいだ。

またも姿を変えて 高圧洗浄機 になる。そう、発射口を絞り高水圧を撃ち出すことで、ウォーターカッターと化し野菜を切断する。コンクリートをまな板変わりにしたのはこの為だ。

野菜は商品なので 念動力 で操ることが可能なのでコンクリートまな板の上に固定をする。そして、圧力を高めた水を撃ち出して野菜を斬る！

高水圧のウォーターカッターは狙い通り野菜を真っ二つに切断したが、コンクリートにも切れ目が入った。

威力調整頑張ろう。床に零れた水は即座に消しているので水浸しになることもない。

何度か試し撃ちをして最適な威力を理解すると、そこからは結構スムーズに事が運んだ。切った野菜は団長たちが用意した籠の中に入れた、布製の取っ手が付いたトートバックへ移しておく。

このトートバックは自動販売機で売られていた商品なのは言うまでもない。ちなみに二十種類以上あってその中から好みのデザインを選ぶことができる。

玉ねぎ、ピーマン、ニンジン、サツマイモ、キャベツぐらいだけど、これだけの量があれば四人分には多いぐらいか。

野菜の鮮度が落ちないように今度は コインロッカー になって収納しておく。鞆の中にわざわざ籠を突っ込んだのはこの為だ。これなら 念動力 で運べる。

コインロッカーに入れた物は実験の結果、他の機体になっている間は劣化しないことがわかってる。アイスで試してみたのだが半日後に戻ってロッカーから出して見たが、殆ど溶けてなかった。

こうして夜なべをして野菜の下ごしらえをやり遂げた。あと少しで夜も明けそうだな。

決行日

鉄格子の入った窓から注ぐ朝日は眩しく、危惧していた雨天中止にはならなくて済みそうだ。

目覚めたピティーが私服に着替えたので、いつものように朝食を準備する。

今日の結果によっては彼女が命を落としかねない。これが最後の朝食になるかもしれないのか。いや、弱気になるな。一緒にここを脱出してみせる、必ず！

ピティーに全ての計画を明かし、彼女が断れば別の手段を考えるつもりだったが、俺の案をあっさりと受け入れてくれた。

「ピティーには……他の方法……思いつかない……だから……ハッコンを……信じるね……」

そう言っつて全幅の信頼を寄せてくれた彼女の心意気に応えなければ、男が 自動販売機が廢る。

時間までまつたり過ごしていると扉が開き、ケリオイル団長一家が勢ぞろいで呼びに来てくれた。

「準備万端みてえだな。んじゃ、行きますか」

移動する前に俺の頭の上に盾を二枚重ねて置いたので、自動販売機が帽子を被っているように見えるかもしれない。

いつもは紅白双子が押していくのだが今日はピティーが一人で押している。

二人が力を合わせて何とか押せる重さを軽々とこなしているのは重さ操作 の加護があるからだ。

この 重さ操作 はかなり強力な加護なのだが無制限という訳ではない。重さは最大千分の一まで減らせるそう、現在の自動販売機の重さは400グラムといったところだろう。

更に盾が一枚100キロ近いらしいので、それが同じように軽くされて合計600グラム前後といったところか。

触れている物しか重さを操作できないのだが、こつやつて重ねておくと一つという判定になる。

もう一つの制限は対象の大きさだ。高さ幅奥行きが三メートルまでが限界らしい。そういう縛りがなければ、この砦を軽くして持ち運ぶという無茶も可能になるからな。

「昼過ぎまでは何があるかと誰も屋上に上げさせないから安心してくれ。スルリムにもそう命令されているからな」

廊下を歩きながら何気なく話しかけてきたケリオイル団長が、ちらつとこつちに視線を向けると意味ありげに微笑んでみせた。

「絶対に誰も通さねえぜ、なあ白」

「何があってもな」

「そうですね。命令には従わなければなりませんので」

今日、俺たちが何をするのかは団長たちに話していないというのに、全てわかっているかのような口ぶりだ……実際、わかっているのだろうか。

今思えば酔っぱらって口を滑らせたのも、見取り図を確認できたのも、全て相手の思惑通りだったのかもしれない。それを問うような事はしないでこつ。

「そういや、中將軍の姿は今日も見えねえな。一度も見たことないんだけど」

「赤もそうなのか。俺も見たことねえな。冥府の王なんて一度しか、ここで見かけたことねえよ」

「じゃあ、今、ここには葉將軍と中將軍しかいないのね。警備をしっかりと見かけないといけないわ」

若干、芝居臭いが貴重な情報の提供に感謝しないと。

やっぱり、中將軍の存在が気になるが、どんな見た目をしているかも謎なので警戒のしようがない。これが杞憂で終わってくれればいいけど……フラグじゃないぞ。

三階通路奥に屋上へ繋がる階段があり、その手前まで付いてきてくれた団長たちは、そこで背を向けて横並びになる。

「じゃあな、達者でやれよ」

「また、ハツコンの商品を買えなくなるのか、寂しいぜ」

「もっと買い溜めしときゃ良かったな」

「皆さんによろしくお伝えください。あと、容赦は必要ないとも背中を向けているので顔は確認できないが、彼らなら笑っていそうだな。」

「みなさん……お世話になりました……さようなら……」

ピティーンが最後に深々と頭を下げる。

それでも振り返ることなく、ケリオイル団長が拳を突き上げて応えた。

「またのごりようをおまちしています」

さよならは言わないよ。そもそも「な」が言えないから言えないしね。

もう一度、必ず会うことになるだろう。その時は

ピティーが俺を掴み持ち上げると階段を一步一步慎重に上っていく。屋上に繋がる扉には鍵がかかっておらず、俺を抱えたまま体重を掛けて押し開けた。

眩い光とピティーの髪を波打たせる風が吹き付ける。今日は風が強いようだ。

屋上はかなり広くバーベキューどころか運動会ができるレベルだ。バーベキューには不向きな、装飾が施された机と椅子は既に配置されていて、スルリムと少年が座っている。

そういや、最後まで少年の名前を知らないままだ。次の機会がもしあれば教えてもらうことにしよう。

「来たようね。その人間、おかしな真似をしたら氷漬けにするから、そのつもりでいなさい」

「はい……気を付けます……」

「じゃあ、あっちでさっさと準備をして」

特設のテントが設置されていて、レンガを積み上げたコンロの上に網が置かれている。肉も台の上にドンと置かれていて、包丁やまな板もあるようだ。

そこまで俺は運ばれて行くとすぐ側に設置してもらう。盾も頭の

上から外されて地面に置かれた。

まずは大量の飲み物を取り出し口に落として、ピティーに運んでもらった。酒は相手が求めるまで出さなくていいだろう。酒とジュースの区別がつかないだろうから、間違えて少年が口にしたら惨事になる。

甘めのミルクティーをメインで運んでもらうとするか。

「ありがとうございます。お姉ちゃん、一緒に飲もうね」

「ええ、焼けるまでお話しでもしてましょ」

給仕もピティーがすることになっているので、一生懸命肉を切り分けている。一人暮らしが長いので料理はお手の物だそうで、見た感じかなり手際が良い。

「この飲み物美味しいよ。お姉ちゃんも一口飲んでみてっ」

「えっ、飲みかけのこれを」

「あっ、ボクが口付けたのは嫌だよね」

「そ、そんなことは、ないわ。むしろご馳走さまよ」

危ない発言をしているが、完全にこっちを無視して二人の世界に没頭しているな。今の内にフォルムチェンジをしよう。

素早く コインロッカー になると先に準備しておいた野菜たちをトートバックごと取り出す。そして、元の自動販売機に戻る。

十秒程度で終わらせたがスルリムは……気づいてないな。飲みかけのジュースを飲むのに集中していて、こっちは全く目に入っていない。

自動販売機の商品から焼き肉のタレを選び、それも台の上に置いておく。

ピテューが切り分けた肉と野菜を焼き、食べごろになったものを皿に載せて運んでいる。バーベキューは自分で焼いて食べた方が旨いと思うが、まあ都合がいいか。

今のところ問題もなく時が過ぎている。焼き肉のタレが濃い味付けなので飲み物を頻繁に口に行っているな。

良いペースでミルクティーを消費している。始まってから一時間近くが経過しているから、そろそろだと思っが。

「お姉ちゃんどうしたの。なんか、落ち着かないみたいだけど」

「ちよつとおトイレ行って来てもいいかしら」

よしきた。カフェインの多い紅茶を飲ませ続けた甲斐があった。カフェインには利尿作用があるから、あれだけ飲めばトイレも近くなるだろう。

「じゃあ、一緒に行くね。ボクも限界だったんだ」

呪いの関係で離れられない少年としてはついて行くしかない。

このチャンスを待っていた。屋上から二人が消えるタイミングを。

「ピテューだったかしら。妙なことを考えないことね。逃げ出すなんて不可能よ。ここは屋上で万が一地上に降りられても、絶海の孤島なのだから」

そう言い残してスルリムと少年が扉から消えて行った。

二人が出て行ったのを確認して、ピテューが小走りで駆け寄って

くる。

「ハッコン……急いで……」

「うん」

勝負はここからだ。風船自動販売機 になって 結界 を張り内部を風船で埋め尽くす。素早さが上がっている俺なら一個作るのに三秒も必要ない。

少なくとも百個は作っておきたい。一個三秒として三百秒は必要だということか。計算すると完成するまでに五分……微妙なんだよな。

自室まで戻っているだろうから往復で三、四分、トイレに数分。少年が時間稼ぎをしてくれることも考慮して、七から八分は猶予があると思うが。

大急ぎで目的の数の風船を製作すると、ピティーが俺の体を横たえらせた。そして、その上に盾を置いて彼女も俺の上に乗っかる。

上が風船で埋まっているので寝そべらないと乗れないぐらい窮屈だが、そこは我慢してもらうしかない。

室内で一度試したから大丈夫だとは思うが、どうか上手くいきませよように。

「ぼていさん」

「ピティー……もうそれで……いい……発動させるね……」

俺の体に手の平を押し当てて 重さ操作 を発動させた。

自動販売機とそれに触れている盾の重さとピティーの重さが激減して、ふわりと宙に浮かんでいく。強めの風が吹いているので、そのまま俺たちは屋上の外へと押し出された。

だが、この程度の風だと遅すぎる。スルリムが戻って来たら即座に撃ち落されそうだ。ならば、ここでもう一度フォルムチェンジだ。

今度はコイン式掃除機になり、ノズルの先端だけを 結界 から突き抜けさせて、吸い込むのではなく風を吹きだした。

推進力を得たことにより、かなりの速度が出ている。見る見るうちに屋上が遠ざかっていく。

もう、拠点が手のひらサイズになっている。屋上を観察していると扉が開き、そこから豆粒大の人が飛び出してきたが後の祭りだ。

こつちを見て叫んでいるようだ。だが声の届く距離じゃない。氷の礫を飛ばしてきているが射程範囲外。ここまで届いた氷は一粒もなかった。

「やったね……ハッコン……」

「うん ありがとう」

これにて大脱出劇の幕は下りた。結界の維持にポイントを消耗しているが100万ポイントを越えている今なら丸一日飛んでいても余裕で足りる。

ただ 高圧洗浄機 でいられるのは二時間までなので、一時間半ぐらいで基本の自動販売機に戻ることを忘れないようにしないと。それまで、距離を稼げるだけ稼がないと。

あまり高度を上げると万が一、墜落したら即スクラップになるので高さを調節するか。ノズルの角度を調整して海面へと近づいていく。

落ちても辛うじて助かりそうな高さを維持して滑空している。進んでいる方角を変更して追手を撒くことを意識して進む。

何処かに島は無いかな。理想としては集落のある島がいいけど、見える範囲内は大海原が広がっているだけだ。

一時間以内に一度地上に降りたいけど、見つからない場合はこのまま空を漂うしかないか。

「あつ……ハツコン……」

どうした、ピティー。もしかして、島を見つけてくれたのかな。

「あれ……何……」

前髪に隠れて目は見えないが顔の向きで何処を見ているのか察すると、同じ方角に視線を向けた。

海にポツンと浮かんでいる点が見える。

「こつちに……向かって来て……」

ああ、確かに何か接近している。やはり追手が来たか、でも今日は波が荒れているというのにあの船速はどうなっている。追い風ではあるが帆があるようには見えない。

じつと目を凝らしていると小さな点だったモノが徐々に大きく鮮明になっていく。

それは水飛沫を上げて迫りくる巨大な背びれのように見えた。

一方的な蹂躪劇

大海を掻き分けて泳いでくる一匹の巨大生物。

距離があるので正確な大きさは不明だが、全長が五十メートルを優に越えていそうだ。清流の湖で遭遇した八足鱔よりデカいのは確かだ。

姿は一見サメなのだが皮膚が鮮血の様に赤く、頭から牡牛を彷彿とさせる立派な角が二本生えている。そして、大きな目が顔の中心に一つだけ存在していた。

『まーたーぬうーかー』

頭に重低音の渋い声が響く。この脳に直接届く感じはキコユの念話 と似ている。ということは、あの巨大なサメの声か。

『冥府の王が居らぬ時に逃がしたとあれば叱責は免れぬ。中將軍として見過ごすわけにはいかぬ』

あの巨大サメが中將軍なのか。本拠地で一度も見かけなかった理由が良くわかるよ。あんなのが拠点に入ったら完全崩壊する。

近くの海中で過ごしていたのだろう。しかし、あんな巨体でどうやってこのダンジョンに入り込んだんだ。って、そんな疑問は後にしよう、今は緊急回避を最優先だ！

再び 風船自動販売機 にフォルムチェンジすると 結果 内部に風船を増やし急上昇する。

ぐんぐんと海面から離れていくが相手の動きが予想より速い。

真下に陣取られたのだが、見下ろすとその巨大さに戦慄を覚える。海にいる巨大生物というだけで全身が身震いしてしまう。青一色の

世界に赤い巨大な物体が横たわる光景は驚愕の一言だ。

『逃がさぬぞ』

かなり上空に達しているのでも相手の攻撃は届かない。そう高を括っていたのだが、中將軍の背中に穴が開いたのを見て体内のパーツが異音を上げた。

あれはヤバい！

その穴から大量の水が噴き出し、真上にいる俺たちへと突き進んできた。

視界一面を埋め尽くす水流を避ける術はないと判断して 結界の維持に集中する。

《ポイントが918減少》

頭に浮かぶポイント消費の文字に構っている場合じゃない。限界まで軽くなっていた体に激流が衝突したことにより、俺たちの体が更に上へと跳ね飛ばされた。

「ひいひいひい」

その衝撃にピティーの手が離れ、重さを取り戻した体が上昇する速度が徐々に落ちていき、空中でピタリと止まった。

ちよつ、ちよつとピティー！

「てを てを」

「えっ……あっ……」

慌てて手を体に触れてくれたことで重量が戻ったことにより、空

中で何とか停滞できた。

想像以上に打ち上げられたようで中將軍が小さな米粒に見える。

この高度を保って移動すれば安全に逃げ切れそうだな。

眼下をぐるぐると円を書くように泳いでいる中將軍は、こちらの姿を見失っているのか。

「ハッコン……このまま……逃げよう……」

ピティーの言う通りここは逃げるべきだろう。だが、敵が真下で彷徨っている今は絶好の好機だよな。

俺の能力である巨大サメをどうにかして仕留められないだろうか。ここでやれるなら今後の冥府の王との争いで、少しは優位に立てるかもしれない。

倒すだけなら方法はある。俺が巨大自動販売機にフォルムチェンジをして落下すればいい。この高さなら相手が如何に巨大だとはいえ、致命傷を与えられるだろう。

ただ、問題が幾つかある。まず、外れたらそこで終了だ。海底に沈んでいくか、中將軍に壊されるかの二択が待っている。

更に当てたところで、その衝撃で俺も破壊されかねない。幾ら頑丈な自動販売機とはいえ、この高さを落ちて無事はあり得ない。

下が水面だから大丈夫なんて考えは、ある程度の高さまでしか通用しない。この高さから落ちた衝撃は、コンクリートの地面であるうが海面であろうが対して差はないだろう。

それにピティーも巻き込んでしまう。だからこの作戦は却下だ。となると俺の能力でこの高度を生かした攻撃手段は……あっ、良いこと思いついた。

風船を幾つか 結果 の外に排出して高度を下げていく。すると、中將軍も俺たちに気づいたようで俺たちが風に流される方向に付いてきている。真下の位置をキープしたまま。

再び穴からの潮吹き攻撃があつたのだが、俺のいる場所までは届かないようだ

『卑怯なり。降りて来て正々堂々と勝負するがいい』

と言う声が頭に響いたが無視した。

空の敵に対する攻撃手段がそれしかないので、常に俺の真下を陣取って降りてきたところに撃ち込むつもりなだろう。それが敵の敗因になるとも知らずに。

「ぼ て いた て」

「に く く っ て」

風船の一つを 念動力 で彼女の前に運び、盾に括りつけるように指示する。

「えと……何か……考えが……あるの……」

「ま か せ て」

そう断言すると、ピティーは風船と盾を紐で結んでいく。従順で信頼を寄せてくれていると、こういう時の対応が楽だけど、その素直さが少し心配になる。

全ての風船が盾と繋がったのを確認すると、盾の上に乗っておくように頼んでおいた。これは念の為であって、実際は意味のない行動で終わるかもしれないが。

じゃあ、そろそろ開始しますか。

体を大きめのサイズの自動販売機に変更する。といっても日本一の大きさをほこる自動販売機だとピティーの 重さ操作 が通用しないので三メートル手前ぐらいの体にしておく。

今も未練がましく眼下を泳ぐ中將軍の背中を見つめ照準を合わせると 自動販売機設置据付用コンクリート石版 つまり自動販売機の下に敷くコンクリート基礎を呼び出す。

本来は固定用のボルトで体と繋いで動かないようにするのだが、あえてボルトは出さずにコンクリートの板だけを出現させた。

その結果、コンクリートの板が真下へと落下してく。ただ落とすだけじゃなく 結界 で勢いよく吹き飛ばす！

高高度からのコンクリート板の爆撃。それも一枚や二枚じゃない。高速で何枚も続けて出現させているので、無数のコンクリートの塊が上空から降り注いでいく。

重量と落下速度でどれぐらいの威力が出るのかはわからないが、コンクリートの板は易々とサメの皮膚を貫き、深々とその体に埋没していくのが見えた。

『ぐおおおおっ！ どうなっておる！』

状況が掴めずに海面で暴れ狂う巨大サメ。

さつさと海に潜ればコンクリート爆撃から逃れられるというのに、パニック状態に陥っているのか海面で身をよじらせているだけだ。

コンクリートの板を発射し続けながら風船の数を調整して高度を徐々に下げているのだが、相手はそれどころではないようで全く気づいていない。

かなりのダメージを負っているようで海面が血で染まっている。だが、まだ倒しきれてはいない。止めの一撃が必要か。

この高さなら経験上、大丈夫の筈だ。よっし、 結界 を解除だ。

「えっ……ハッコン！」

ピティーの本気の叫び声って初めて聞いたかもしれないな。

結果 が消えたことにより、風船の浮力を得られなくなった俺は真つ逆さまに落ちていく。

遠ざかっていくピティーが手を伸ばして俺の名を叫んでいる。まるで映画のワンシーンのようだが、死ぬ気はないから安心して。体を日本一大きな自動販売機に変化させ、幾つも穿たれ血塗れとなった中將軍の背中へ墜落していく。

『ぬあにー！ 何処から現れたその物体うがあああああつー！』

背骨の位置に激突した自動販売機の角が皮膚と肉を貫き、背骨を砕いてそのまま内臓を破壊すると体の中心でピタリと止まった。

久しぶりの巨大自動販売機アタックが炸裂した。ここまで体を傷つけられて生きていられる生物はいない。体を素早く元の自動販売機に戻し、大きく抉れたサメの死体の上で今後のことを思案していた。

暫くしたら中將軍も沈むだろうから、この場から撤退した方がいい。

となると風船とダンボールという、いつもの組み合わせで空に退避した方がいいな。

早速行動に移そうとした、その時。空から巨大な二枚貝がすぐ近くに落ちてきた。って、これピティーだよね！？

無茶なことを。風船を割って盾の中に入って落下してきたのか。皮膚に突き刺さってないから、重さを調整して衝撃を緩めたのはわかるけど生身の体で大丈夫なのだろうか。

「ぼ て い」

「良かった……無事で……」

盾が開き中から這いずり出てきたピティーが俺の体をペタペタと

触っている。

かなり心配かけたようで、乱れた前髪から覗く瞳が潤んでいる。説明不足で申し訳ない。

謝罪も説明も後に回すとして、今はこの場から離れないと。再び結界を張って風船を作り始めた俺を見て何をすべきか理解してくれただようで、盾を引き寄せて出番を待っている。

前と同じように大空へと浮かび上がると、タイミングを計ったかのように巨大サメの体が海へと沈んでいく。

その際に腹の部分が見えたのだが、そこには短く太い足が何本も生えていた。どうやら水陸両用だったようだ。

五指將軍の内の一人を倒したことが広まれば俺への警戒度が高まりそうだが、死体は海底へと沈んでいき戦闘現場を目撃した証人もいない。

俺を追って倒されたという事実がある以上、何らかの関与は疑われそうだが犯人は自動販売機だなんて、荒唐無稽過ぎて誰も疑わないだろう。

「あっ」

「どうしたの……ハッコン……急に……大声出して……」

同じ方法で冥府の王の腕を撃退したのだった。死体の傷を視られたら俺の仕業だとバレるなきつと。どうか、このまま海底で魚たちの餌になって浮かび上がってきませんように。

そう祈りながら俺たちは犬岩山階層の空を彷徨い続けていた。

一方的な蹂躪劇（後書き）

八章はこれにて終了となります。
話数も200を越えてかなりの長編になっていますが、今後ともよろしく願います。

扉だって守りたい（前書き）

この物語は書籍化記念として購入者対象の企画で募集した『擬人化して欲しい無機物』でいただいたお題を元に行っています。

一話完結のちよっとした小話ですので、息抜き程度にご覧ください。

扉だって守りたい

おはようハニー、今日もいい天気だね。

燦々と降り注ぐ太陽の陽射しに、若人たちのはしゃぐ声。

僕たちはここから動くことができないけど、キミがずっと隣で寄り添っていてくれるから幸せを感じられる。ずっと一緒にいようね。

「ちーっす、何か手頃な依頼ないっすかー」

ギーッ

何処に行くんだハニー！ そんな男について行くんじゃ……お帰りハニー。まったく、浮気なのかと焦ったじゃないか。

あんな粗野でハンターなんて魔物を狩る仕事をしている乱暴者について行ったら、だ、め、だ、ぞ。

「みんな、準備を整えて狩りに行くぞ」

ギーッ

うわあああつ、違うんだハニー！ これは俺の意思じゃなくて、こいつが俺の体を押して無理やりキミと引き離されているだけなんだっ。

ただいま。ほら、直ぐに戻ってきただろ。僕と君は二人で一つ、一心同体さ。どちらがいなくなっても成り立たない、そんな存在だからね。

「職員さん！ この扉建て付け悪いんだけど。開くとき重いんだが」

おいこら、オッサン！ そんな汚い手で俺を掴んで揺らすな！

お外から帰って来たら手を洗うのが常識だろ！

あつくそ、磯臭ええ！

そんな手で俺のハニーに触れるな！

「ギーギー軋んでうっせぞ、このボロ扉」

ふざけるなよ、扉に逆らってたで済むと思うな。喰らえ、ギリギリまで開いてからのー、勢いよく閉める！

「へぶしっ！ おいつ、この扉勝手に動いたぞ！」

「そんなわけないじゃないですか。油を注しておきますからどいてください」

いつもの職員さんがやってきてくれた。ここの職員で一番まともで可憐で素敵な女性だ。

顔は童顔でパツと見は十五、六歳に見えるが実は二十八歳らしい。異世界恐るべしだな。

「どうしたのかな。一か月前ぐらいから急に苦情が増えたけど、扉におかしいところはないのに。ちょっと蝶番が緩んできているかしら」

全身を優しく擦る動作に生身なら興奮を覚えるかもしれないが、ナニも失ってしまった俺に性的興奮は皆無だ。

「こつち側の扉は問題ないのに」

隣に寄り添う俺の恋人、左扉のヒダコは従順で素直だからな。

いつも嫌なことでも大人しく一言も文句も言わず従って、俺と一

緒に居れるだけで幸せと……言うこともないが、俺にはその熱い思いが伝わってくる。

「みんなが乱暴に使うから蝶番がずれたのかもしれないわね。職人さん呼んで今度見てもらわないと」

首を傾げながら童顔の職員が室内へ戻っていった。

今日もカウンター越しに魔物の討伐依頼や、収集品の売買業務をするのだろう。

もう少し日が昇ればハンターが次から次へとやってきて、また俺は揺さぶられることになる。

そろそろ日課の現実逃避、左側の扉との恋愛ごっこにも飽きてきた。あいつ全く話さないし、何の反応も示さないから面白くないし！ はああああ、どこをどうやったら異世界の扉になんて生まれ変わるんだよ……。

あまりにツツコミどころが多すぎて現実逃避に磨きがかかり過ぎていたが、もう正気になってもいいだろう。

まず、異世界ってなんだ。学生時代にやり込んでいたゲームと世界観が似ているから、勝手に異世界設定をしたが間違いはないと思う。

手から火や水を出す人間がいて、服とか鎧を着た猫や犬や動物が二足歩行で言葉を話しているから日本や地球ではない。

異世界だけでも大ごとなのに、よりにもよって魔物を倒して金銭を稼ぐ荒くれ者の総本山である、ハンター協会入り口の扉になっただよ。

どうせなら共同浴場の女風呂の扉とか、女子トイレの扉……これは変態か。もっと他の施設の扉にして欲しかった。

ここは海の近い場所らしく、屋外側に開いたときに視界の端に海

が見える時がある。

基本的にハンター協会一階ホールと真正面の風景しか見えないので、面白味も何にもない。

俺が何故か生まれ変わった扉は一風変わっていて、西部劇で観たことのある腰辺りの高さにある二枚の無駄に分厚く短い扉の右側だ。この扉に何の意味があるのか毎日疑問を抱いている。雨風が入り放題の扉って無意味だよな。外からも丸見えで防犯の役にも立たない。何も無いよりマシ程度だろう。

存在意義も感じられないので扉としてのやる気もなく、最近の趣味は妄想と人間観察ぐらいだ。

文明レベルは俺のいた世界の数百年前ぐらいだと思っただが、魔法みたいな不可思議な力が存在しているので、どうにもちぐはぐな印象を受ける。

服装も現代日本でもおかしくない格好をしている人もいれば、素朴な格好でうろついている人も少なくない。

機械もないようだが同じぐらい便利な魔道具と呼ばれる不思議アイテムがある。こういうところは深く考えたら負けなのだろう。俺、扉だし。

正直、異世界であろうがどうでもいいことだ、扉ですし。

俺はここで開閉を繰り返すしかないので異世界でありがちな冒険ができるわけでもない。一応気合を入れたら扉の開閉を自力で行なえるが、これだけでどうしろと。

「おい、今回の依頼嘘ばっかじゃねえか、どうしてくれんだよ！」

どうおおおつ、くっそ痛えなああつ！

怒鳴り声と共に俺の体を蹴りつけて、乱暴に扉を開く荒くれ者が現れた。

こいつは嫌われ者で有名なハンターだ。

身長が軽く二メートルを越えていて、もみあげから顎髭までが繋がっている。髪もぼさぼさで獣人のように見えて普通に人間のオッサンらしい、あれで。

自分の不手際でも職員に責任を擦り付けようとするクズハンターだ。

毎回毎回、飽きもせず俺を蹴り飛ばしやがって、今日こそ目に物見せてくれる。

直ぐに戻らないでタイミングを見計らってから股間を強襲した。

「何とか言った、げひああああっ！」

筋肉の塊でもそこは鍛えられないだろ。おうおう、蹲っていやがるぜ。

更にもう一度限界まで扉を開いて、大男が顔を上げたところにダイレクトアタックだ！

「ほぐうおあっ」

会心の一撃だ。顔面を押さえてもんどりうつっている。

「アイツ馬鹿じゃね。自分の押した扉に当たってやがるぜ」

「バツカでー」

「間抜けにも程があるだろ」

痛みに身悶えていた大男だったが周りからの嘲る声が聞こえたよ
うで、そそくさと逃げるように外へ跳び出していく。

やればできるじゃないか、俺。

怒りに任せた行動だったが扉の開閉だけでもやれることがあると

わかって、少しはこの新しい人生……扉生を楽しめる気がしてきた。

「扉壊れてないかしら」

童顔の職員さんが慌てて俺に駆け寄って、体の隅々を調べてくれている。そして、何も壊れていないことを確認すると安堵の息を吐いて、綺麗な布で俺が蹴られたところを丁寧に拭いてくれた。

すまない、ヒダコ。無口で根暗なお前とはもうやっていけない、俺はこの童顔の職員さんと添い遂げるから！

今日から俺はここで職員さんに迷惑を掛ける輩を排除する門番と化す！

どんな厄介な敵でも身を挺して彼女を守ってみせる！

「ふむ、やはりここは熱いな」

外から洪い声が出たかと思ったら、俺の体に影が落ちた。彼女をじっと見つめていて気づいていなかったが、扉のすぐそこに誰かが歩み寄っていたのか。

それが何者か確かめる為に視線を向けると 巨大な熊がいた。

二足歩行の熊なのにロングコートを着て帽子まで被っている。熊だというのにその顔は知的な感じがして、イケメンならぬイケクマだ。

「これは清流の会長、どのようなご用件で」

彼女が慌てて駆け寄ってきているな。会長ということは、うちの子供にしか見えないハンター協会の会長と同じ役職なのか。

あれが会長を出来るぐらいだから、ハンター協会の会長というのはお気楽な仕事だと思っていたが、この熊さんは見るからに優秀そうだ。

「犬岩山会長に相談があつてな」

「今、会長は席を外してしまして、昼前には帰ってくると思うのですが」

犬岩山会長つてあの子供にしか見えない会長の呼び名だよな。改めて聞いても変な名前だ。

うちの子供会長つて落ち着きがないから、一日中、ハンター協会にいたためしがない。今日も朝から何処かに出かけて行った。

昼前に帰ってくるのはお腹が空いて食事をする為に戻ってくるだけだ。

「集落の見回りに行ってくるね」

と言っていたが絶対に遊びに行っただけだ。

「では、待たせてもらつても構わぬか」

「はい、ご案内しますね」

彼女が二階に熊さんを連れて行っているのだが、その光景は熊を檻へと誘導する飼育員のようだ。地味な色合いの制服が作業服に見えるてきた。

あれから子供会長が帰ってきて、待ち熊がいることを知った途端に逃げ出そうとしたのだが、いつの間にか背後に回り込んでいた熊さんに捕まり運ばれて行く。

巣穴に連れていかれて食われる姿が思い浮かぶが、あの熊さんは頭が良いので大丈夫だろう。

でも、何の話なのだろうか。俺はここで目が覚めてからまだ日が

浅いので、この世界のこととハンター協会のことも殆どわかっていない。

ゲームや小説でいうところの冒険者ギルドみたいな場所なんだろうな、ぐらいの認識だ。

正直、世界観を知ったところでどうしようもないので、よく利用するハンターの個人情報や優しい職員さんのことを知る方が重要だったりする。

「初めての方ですね。ようこそ、犬岩山階層へ。お名前と職業の確認をさせていただいて宜しいでしょうか」

職員さんは今日も丁寧な口調と優しい笑顔で対応している。

はぁー癒されるわぁ。扉になって唯一良かったことが、ほぼ毎日彼女の姿を見ることができなことだ。

だから、休みの日になると俺のテンションが駄々下がりになって扉の開閉が重くなる。

今日は朝から忙しそうに仕事をする職員さんを眺めるのが、俺の仕事だ。

門番をすると意気込んだところで、バカなことをするのは髭面のハンターぐらいなので特にすることはない。だから、じっと観察していても何の問題もない。

「ふうー、今日は忙しかったわね」

夜も更け、営業時間をとくに越えたハンター協会の前に職員さんが看板を運んでいる。今日は遅くにハンターが駆け込んできたので、その対応をしてもより遅くなってしまった。

あの看板はたぶん『営業終了』とでも書いているのだろう。今日もお疲れ様です。

ホールに戻ってから奥にある扉の先に消える。あそこは職員の変更

衣室になっっているので、彼女も私服に着替えて帰るのだろう。

夜から朝まで寂しくなるが、待つ時間があるからこそ会えた時に嬉しさが増すと自分を慰めておく。

彼女に対する感情は恋愛ではなく憧れなのだろうな。扉と人間の恋愛が成立すると思う程、馬鹿じゃないつもりだ。手に届かない憧れの存在を影ながら応援する……アイドルの追っかけやっているファン心理が今ならわかる。

そんな馬鹿なことを考えていると、砂を踏みしめる音が微かに届いた。

もう営業時間外だぞ。今、職員さんは着替えている最中だろうか、ここは通さんっ！

と意気込んだのに扉の前に来ないで扉脇の壁際に屈んでいる。巨体を丸めているアレは前に俺が叩きのめした髭面ハンターか。

何してんだあんなところで。無い耳を澄ましてみると、何か呟いている。

「くそが、俺に恥をかかせやがって。ムカつくぜ、あー、いらいらする」

かなり酔っぱらっているようで、あの抱えている樽には酒でも詰まっているのだろうか。

おいおい、そんなところで吐いたりしょんべんするなよ。そこからだと、ここまで臭ってくるから勘弁してくれ。

扉の癖に嗅覚があるのが厄介なんだよな。ハンターのオッサンたちって何日も風呂に入らないで、汗だくだったりするから悪臭が酷いんだよ。

心配をしながら髭面を注視していると、手にした樽の中身を壁にぶちまけ始めた。

何考えてんだ酒をハンター協会の壁に……えっ、何だこの臭い。

酒じゃないぞ、これって油か!?

何やってんだこの髭面、ハンター協会の壁に油なんて撒いてこいつまさか放火するつもりか!

おいおいおい、待て待て待て!

俺扉なんだぞ火事になつても逃げられないし、それに今は中に職員さんがいる。

どうにかしてコイツの凶行を止めないと!

扉である俺に何ができる。考えろ、何か、何か扉にもやれることはないのか。

声は出ない。足も手もない。扉の開閉ぐらいしかできることはない………だつたら!

「なんだつ、扉がギーギーうるせえな。今日は風が強いから揺れてやがるのか」

音と動きにびびって逃げ出せばいいと思ったが、酔っぱらって気が大きくなっているのか一瞬だけこつちを見て、それだけで終わった。

うおおおおつ、更に速度を上げるぞ!

「へへへ、これで火を付ければハンター協会も終わりだぜ。俺をバカにしたことを後悔しやがれっ」

やばい、火を出せるライターみたいな魔道具を取り出した。あれで着火されたらおしまいだ。うおおおおつ、更に加速しろ俺の体!

限界を超えた俺の速度に付いていけなくなった蝶番が弾け飛ぶと、俺はその勢いのまま吹き飛んでいく。髭面の方向へと。

喰らえ、扉で頭を打って後悔しろアタック!

「ぶべつ、とび……ら……」

顔面のだ真ん中に扉の角がぶつかり鼻骨を破壊してめり込む。血を撒き散らしながら男が仰向けに倒れ、俺はばら撒かれていた油が零れて染みだした地面の上に落ちた。

ざまあみろ。これが扉の力だっ！

手があるなら中指でも立てたい気分の俺が視線を上げると、赤く火の灯った魔道具がゆっくりと落ちてくるのが見えた。

えっ、ちよっと待って。その落下コースにいるのは……俺なんですけどっ！

その魔道具は俺の体の上に着地して、運悪く落ちた衝撃で飛び散った油が俺の表面にも付着していたようで、俺の体が炎に包まれた。

あああああああつ、熱くないけど赤い！

自分の体が表面から炭と化していくのがわかる。ダメだ、このままじゃ俺は消えてなくなってしまう。

異世界で扉に生まれ変わり燃やされて死ぬだけの扉生だったのか。体が焦げて崩れて行く度に意識が薄れていくのがわかる。

ああ……これで……終わるか……扉としては……カッコイイ……結末だよな。

足掻くことも出来ない俺は紅く染まる視界を見つめながら、意識を閉じようとした。

「えっ、火事！ 何でこの人と扉が！ えっと、水、お水！」

最後に聞く声が彼女で良かった、うん、満足な扉生だった

「扉新しくなっただね」

「うん、前の扉が外れて燃えちゃったから」

「あれでしょ。放火しようとしていたバカに扉が激突したんだっけ。あれがなかったら今頃ハンター協会も燃えていたらしいわね。怖いわー」

「あんな離れた場所に扉がどうやって飛んだのかが良くわからないの。だけど扉がハンター協会を守ってくれたのかもしれないわ」

「ないない。って言いたいけど……最近小耳にはさんだ噂話知ってる？ 清流の湖階層には意思があって話す魔道具があるらしいわよ。その燃えた扉もそういうのだったりしてね」

「だといいな。ねえ、扉さん」

「そうだね！」

俺は彼女の仕事場であるカウンターの片隅に置かれている。

あの時、全身が燃え尽きたと諦めかけていたのだが、全てが燃え尽きた訳じゃなく生き残った中心部だけを削りだして、職員さんが木製のトンファーにしてくれたのだ。

ハンター協会を守った俺を彼女の護身用の武器としてくれた。元々優秀なハンターだったらしい彼女が持てばトンファーでも充分な威力を発揮するらしい。

扉に生まれ変わったと思ったら、今度はトンファーとして生きることになるようだ。

新しい人生の扉が開いたのだから、元扉として恥ずかしくない生き方をしないと！

苦難は続くよどこまでも

ピテューと一緒にの旅は一週間続いた。

といつてもずっと空にいた訳じゃない。丸一日経過したところで島を見つけたので、そこで休憩をしていると、どうやら元々誰かが住んでいた島のようなのだ。

探索中に小型の船を見つけたので、何とか補修をして船旅に変更したのには訳がある。

ずっと 結界 を張っているとポイントの消耗がシャレにならないので、空よりは移動速度が落ちてしまいが安全策を取らせてもらうことにした。

それから数日後に俺たちを捜索してくれていたハンターたちに見つけてもらい、犬岩山階層の集落へ運ばれていく。

仲間たちは各階層に散らばり連れ去られた俺の捜索をしている最中らしく、各自に連絡を伝えにいつてくれたようだ。全員と合流するには少し時間が必要となるとのことだった。

この階層を担当していたのはカリオスとゴルスの門番ズで、俺との再会をひとしきり喜んでくれた後に清流の湖階層に帰っていった。仕事が溜まっているらしい。

本来の仕事を休んでまで俺の捜索に付き合ってくれたのには感謝の言葉しかない、本当に、ありがとう。今度サービスするよ。

それから二日間は自動販売機として犬岩山階層で商売を続けていると、仲間の二人が転送陣から現れ、俺目掛けてまっしぐらに突っ込んできた。

「はっこおおおおおん！」

砂煙を上げて爆走しているのはラツミスだ。デジャブだろうか、全く同じ経験をした覚えがあるのだが。

いつもより助走距離があり身体能力も向上している彼女の突撃を受け止められるだろうか。ここは 結界 を張っても許される場面……否！ 相方として受け止めなければならぬ！

彼女の豪快なハグを拒否したらきつと傷つくだろう。俺だけは彼女の想いを全身で受けとめられる存在でいたいから。

ラツミスと再会した際の伝統行事になりつつある、渾身のタックルを受け止める為に身構える。後方から小走りで駆け寄ってくるヒールミが苦笑いを浮かべているな。

あつという間に距離が縮まり、両腕を広げてラツミスが飛んだ。

衝撃で倒れないようにコンクリート板を三枚足下に設置したので準備万端。衝撃に備えて体内の商品も収納しておく。

風が唸りを上げて大砲の弾のような勢いでラツミスが……耐えてくれ俺のボディー！

「ふ、ふええええっ!?!」

突如俺とラツミスの前に滑り込んできたのは、巨大な貝 盾を構えたボディーだった。

円形の盾の曲面部分を利用して力の方向を逸らし、あの突撃を後方へと受け流す。俺の脇を滑空していくラツミスが砂浜に墜落する。激突音がした場所を恐る恐る覗き込むと、小さなクレーターができていた。そろそろ、頑丈も上げておいた方がいいかな、うん。

「な、何するの、ボディー！」

クレーターの中から這いずり上がって来たラツミスがボディーに詰め寄っている。

いつものボディーなら怖気づいて盾に隠れるぐらいの迫力なのだ

が、一歩も下がることなく相手を見据えていた。

「再会の……ハグは……もっと優しく……しないと……ハッコンが……危ない……」

かばってくれたのは嬉しいけど、そこは言葉を濁して欲しかったな。ラツミスが目を見開いた後に、顔を曇らせて俯いてしまった。自分の怪力を知っているから、人と接している時は常に意識して力を制御しているのを知っている。だからこそ、俺には力を隠すことなく自然体で接することができるような関係になつて欲しいのだが。

ピティーだって、嫌がらせて苦言を呈している訳じゃない。俺の身を案じてくれただけなのだろう。

「らっすいす」

「ごめんね、ハッコン。うち、嬉しくてつい……」

落ち込んだラツミスは見たくない。元気いっぱい笑顔が一番の魅力だろ。

花の自動販売機 にフォームチェンジすると売ることが可能な花を全種類取り出して 念動力 で纏めてラツミスの前に差し出す。言葉が足りないので行動で示すしかないよな。

「ただいま」

ポカーンと大口を開けてこっちを見ていたラツミスが、涙目のまま満面の笑みを浮かべる。

「おかえり、ハッコン！」

うんうん、やっぱり笑顔が一番だよ。心配かけてゴメンな。

「おっ、いいもの貰ったじゃねえかラツミス。ハッコン、心配したんだぜ。オレのはないのか、んー？」

「ただいま」

ニヤニヤ笑いながら、ヒュールミが俺の体を拳で突いてくる。

半ば冗談で催促しているのだろうけど、ここで同じ花束を渡すのは芸がないよな。彼女が喜びそうな商品って何だろう。

あれを出してみるか。孤児院の子供たち用に取得していたのだが、使う機会がなくてお蔵入りしていた。

俺は体を カプセルトイ に変化させた。

正式名称とは別で地域やメーカーによって様々な呼び名があるあれだ。ガチャ、ガチャガチャ、ガシャポンというのがメジャーだろうか。ちなみに、俺はガチャガチャ派だ。

カプセルトイの面白いところは商品が多様多様な所だろう。正直、これはどこの層に需要があるのか悩む変な商品がかなりある。

自動販売機マニアとはいえ、ガチャガチャシリーズの商品を全て手に入れると破産を覚悟しないとイケないので、あえて避けていた。そんな俺でも惹きつけられた商品が幾つかあって、そのうちの一つがミニチュア工具セットだ。これは一回二百円でカプセルサイズ of 工具が入っている。

何故、これを集めようかと思ったのか。それは、ミニチュアの自動販売機が家に幾つかあるのだが、その隣に工具を置いたら本格的に見えるのではないかと考えたのだ。

ちなみに修理担当の作業服を着たファイギアも置いてある。

とまあ、それはどうでもいいか。そんな俺が集めたミニチュア工

具を五種類取り出し、ヒュールミに渡した。

「また、珍妙な格好になったな。って、この球は何だ？」

開けていいのか迷っている様だったので、念動力で開いて中身を取り出した。

「おっ、これって工具っぽいな。その玩具か……へええ、なるほど、こつという形の工具があれば便利かもしんねえ。こつという発想はなかったな、参考にさせてもらっぜ。ありがとうよ、ハツコン！」

喜んでもらったようで何よりだ。

俺の捜索に協力してくれた仲間全員に、何らかのお礼の品を考えておこつ。

何が喜ぶか頭を悩ませていると、俺の側面を指で突く人がいた。つてピティーが頬を膨らませて、こつちをじっと見ている。

「ぼていさん」

「ピティーです……」

呼び名は、ぼていで納得してしてくれたのにどうしたのだろうか。

「ピティーには……何も……くれないの……」

ああ、女性二人に渡しておいて、自分だけのけ者にされたと思っただのか。

そつだよな。こつというのは公平に接するのが人としての常識だった。

ピティーは甘い物と花が好きだったな。花はもう使ったから、こ

ここで甘い物を渡すのも何か違う気がする。

甘い物……ああ、姪っ子に強請られてガチャガチャで購入した、パフェのキーホルダーがあったな。日本の食品サンプル技術は世界に誇るレベルだから、きつと喜んでくれるだろう。

赤が映える苺パフェのキーホルダーを取り出してピティーに渡すと、機嫌が直ったようで前髪の隙間から見える表情が嬉しそうに緩んでいた。

「ありがとう……ハツコン……」

俺の側面に体を寄せてじっと見つめてくるピティーの背後でじっと見つめて 睨んでいるラツミスがいる。

あれ、機嫌が直った筈なのに、さっきより怒っているというか拗ねているように見えるのですが。隣に立つヒュールミも何故か半眼でこつちを見ていますね、はい。

「ハツコン。ピティーと凄く仲良しに見えるのだけど、うちの気のせいかな？」

「別れる前とは距離感が全く違うように見えるぜ」

あー、まあ、ずっと二人で過ごしていたから、ピティーが俺に懐いたのは確かだけど。たぶんそれは、頼れる人がいない状況で俺に依存したただだよ。

俺のことを頼れる魔道具か兄か父親みたいな感覚で接しているのだよな。ねっ、ピティー。

「ハツコンと……仲良し……ずっと……二人で……暮らしてきた……トイレも……食事も……一緒……」

うん、間違っていないけど言い方には気を付けて欲しいかな。確かに簡易トイレも出したし、食事も一緒だったけどね！

「うちだって、ずっと体密着していたもんね！」

「そこは張り合つとこじゃねえと思うが……」

俺が生身の人間ならこの状況も理解できるのだが、自動販売機だよ？

ちよつと、みんな落ち着こう。ほら、鉄の箱だよ、商品出せるぐらいしか取り柄ないよ。便利で手放したくない魔道具だとは思っけど。

「ハツコンはうちがないと困るんだから。ねっ、ハツコン」

「いらっしやいませ」

それは確かにそうだ。彼女がいてくれないと移動もままならない。

「ピティーなら……ハツコン……運べるよ……」

ラツミスの目の前で 重さ操作 の加護を使い俺を軽々と抱き上げている。

ピティーの加護にはお世話になりました。その点については感謝しております。

「う、うちはもっと軽々運べるもん！」

反対側にラツミスが抱き付き俺を持ち上げた、ピティーが抱き付いたまま。

ああそうか、重さを軽くしているだけだから踏ん張れないのか。って、ピティン想い人はどうした。彼を待ち続けているのだよね？

「モテモテだねえ、ハツコンさんは」

あの、ジト目で見てないで止めていただけないでしょうか、ヒュールミさん。

その後、ミシユエルがやってきて参戦することになり、益々カオスと化して熊会長が来るまで小競り合いが続いた。

俺の所有権を主張していた二人に「ハツコンは誰の物でもなからう」と二人を説得してくれたおかげで本当に助かりました、熊会長。懐いてくれているピティンには悪いけど俺の相棒はラツミスなので、そのことをもう少し流暢に話せるようになったら、ちゃんと伝えておかないとな。

「女として参戦した方がいいっすかね？」

俺の渡した大量の食べ物を抱えながら、合流したシユイがそんなことを言ってきた。

「かんにんし」

「てください」

今後の方針

全員が犬岩山階層に集合して、ハンター協会の会議室で今後の方針が検討されている。

「ハツコンが提供してくれた情報をもう一度、確認しておく」

やはり、この場でも取り仕切るのは熊会長なのか。

会議室にいるのは探索の主要メンバー全員とハンター協会会長、シメライお爺さんとユミテお婆さんの夫婦となっている。

「階層主である犬岩山の真裏の小島に拠点がある。ここを崩せば、冥府の王のダンジョン掌握の計画を大幅に遅らせることができるだろう。ただし、相手も戦力を整えており、相手の五指將軍の三名と冥府の王が戻ってきている可能性も考慮しなければならない」

「もう、逃げ出しているという可能性はないのか」

始まりの会長が今日も真っ赤なスーツを嫌味なく着こなしている。会長の中では知将ポジションだよな、この人は。

「確かに始まりの会長の意見はもっともだ。だからといって、敵の拠点を見過ぎすわけにもいかぬ。敵が撤退していたとしても拠点を潰しておくことに意義はあるだろう」

そうだよな。あの砦を制圧して調べれば何らかの貴重な情報が得られるかもしれないし、二度と利用できないようにしておけば、冥府の王も今後の活動が難しくなる。

「でもよ、場所が厄介すぎねえか！ あれが、動いたらヤバいぞ！」
大声を張り上げなければ会話ができないのかと、問いたくなるぐらい灼熱の会長の声は良く響く。

「犬岩山か。こちらから攻撃を仕掛けなければ、あの階層主は動かないらしいが、今までの傾向を考えれば……冥府の王の指示で動く可能性が高い」

闇の森林階層の老木魔が集落を襲ったという事実がある。犬岩山が動いても何ら不思議ではないのか。

「あれが敵に回って、魔王軍も相手にするのはそりゃ無茶でつせ。全勢力をぶつけても無理ちゃうかな。あんな大きな犬に襲われたら、かなワンわ」

最後に犬の鳴きまねを入れた闇の会長は、今日も目に優しくない金色のコートを羽織っている。ちなみにボケには誰も突っ込まず、完全にスルーされた。

「今、偵察任務に特化したハンターを向かわせている。状況によっては、闇の会長にも探りに行ってもらうつもりだが」

「大丈夫やで。忍び込むのは任せてや。女子更衣室やスカートの中にもばれずに侵入する自信あるで」

下らない冗談に女性陣から冷たい視線が注がれているが、真黒な闇の会長は顔色がわからないので動揺しているのか判断すらできない。

「偵察に向かわせた者が戻ってくるまでは、各自自由に過してもらって構わない。最速でも明日の夕方まではかかるだろう」

会議は解散となり退室していく。

ラツミスが俺を背負って会議室を出ようとすると、俺にピティーが寄り添っている。

「ピティー、そこにいると危ないよ」

「ハツコンと……離れたく……ない……」

また二人が睨み合っている。う、うーん、転生する前はこんな状況に陥ったことがないので、どう対応していいのか正直わからない。

「ヒュールミは傍観していていいですか」

「うっせえ」

少し離れた場所で、シュイとヒュールミがこっちを眺めながら何か話している。

ここは心を鬼にして、ピティーにビシッと言うべき場面か。

「ぼていさん」

「何……ハツコン……」

「らっすいす」

「あいぼう」

「あいぼう……って……何……」

うん、言葉足りずでそこはゴメン。

「相棒って言いたいんだよ、ね」

「うん」

「相棒……じゃあ……大丈夫だね……うん……わかった……」

あれ、素直に離れてくれた。何だ、話せばわかってくれるじゃないか。これならあれこれ考えずに初めからそうしておけばよかった。

「わかってくれたんだ。良かったね、ハツコン」

「いらっしゃいませ」

これで「一件落着とか思ってたそつだな、二人とも」心の声と被ったのはヒュールミか。

俺とラツミスが視線を向けると、肩を竦めて小さく息を吐いている。

「どつしたの、ヒュールミ？」

「まあ、いつか。すまん、気にするな」

何か言いたげな表情だがこれ以上触れるのは危険だと、俺の勘が警鐘を鳴らしている。

「ミシユエル……頑張ろうね……」

「ええ、お互い頑張りましょう！」

いつの間にミシユエルとピティーは仲良くなったんだ。コミュニケーションで感じ合う部分があったのか、熱い握手を交わしている。

「まっ、頑張れや、ハッコン……オレもな」

「あね」

「いや、だからその姉御やめろよ」

ヒュールミの呼び方って難しいんだよな。無理やりヒュールミと発音してみるか。

「い ゆ う う し」

「おう、頑張ってくれたのは伝わるが意味不明だな」

相応しい呼び名を生み出さないといけない。彼女だけ呼ぶ時に困るから。

「じゃれ合っている時に邪魔して悪いが。ハッコンを借りて構わぬか」

「いらっしゃいませ」

熊会長がその巨体をぬつと割り込ませてきたので即座に返答した。別にこの空間からとっと逃げたいわけじゃない。

「では、奥の部屋に運ばせてもらう。へブイ、シュイ、それにピテ
イーも来てもらえるか」

久しぶりに熊会長に抱えられてハンター協会内を移動している。
今のところ俺を単独で運べるのはラツミス、ピティー、へブイ、
熊会長ぐらいか。

何も家具のない個室のど真ん中に設置されると、その前に熊会長
が立つ。部屋の隅に突っ立っていた老夫婦もこっちに歩み寄ってき
た。

「話は全て聞かせてもらったが、ハツコンと元団員のお主たちから
見て、ケリオイル団長たちが戻ってくる可能性はどれぐらいあると
考えている」

「あのバカは何度が稽古を付けてやったことがあってな。まあ、な
んだ、ちつとは心配しておるんじゃないよ」

「お爺さんは素直じゃありませんね。子を持つ親として、彼らの行
動を否定できないところがありましたねえ」

この三人は元団員の次にケリオイル団長たちと親しかったメンバ
ーなのか。

アンケートでも心配している様子が窺えたからな。

「息子さんの呪いを解く方法があれば、直ぐにでも冥府の王から離
れるでしょう」

「今はスルリイムに頼り切っているから、難しいと思っつす」

「ただ……スルリイム……息子さんを……とても気に入っていた……」

…から……」

そこでスルリィムと息子さんの日常風景を隠し撮りした映像を流してみた。

全員が注目しているが、ピティーを除いた全員の表情に陰りが射す。見ている内に頬が引きつり眉根が寄っていく。

妙な空気が部屋を満たしていくのがわかる。

「あれっすね。命の心配はしないで良さそうっす」

「ええ、その心配だけは無用なようで何よりですよ」

へブイもシュイも安堵しているようだが、目を逸らしながら表情が晴れていない理由は、新たに生まれた別の心配事のせいだろう。

「あれですよ、何と云うのでしたかねえ、こういうのは。お爺さん知っていますか？」

「小児性愛じゃったかのう」

ストリートですね、シメライお爺さん。まあ、あの目つきは尋常ではなかったけど。

「雪精人は子供の姿でいる時期が長い故に、幼い外見の相手の方が親しみをもつのかもしれぬな」

熊会長が言葉を選んでいる。その考えは同意見なので異論はないけど。

ケリオイル団長の息子は落ち着きがあって頭も冴えているから、一線を越えない微妙な距離感を保ち続けると信じているよ。

スルリイムも少年には甘い人間を毛嫌いしているのは変わりないので、それ以上踏み込むことはないと思っている。信じているぞ。

「話によると、雪精人は呪いを解くもしくは緩和する力があるそうだが、そうなるとキコユが離脱したのが大きい」

「ですが、それだと今度はキコユちゃんから離れられなくなってしまいますよ。ねえ、お爺さん」

「そうじゃな。キコユは別の目的があるから、ずっと傍に居てもらおう訳にもいかぬ」

彼女がいれば一時的には救うことができたかもしれないが、その場しのぎでしかない。

何らかの打開策が見つければ、団長たちを仲間に取り入れられるのだが。

「水晶の棺を持ち歩くわけにもいかぬから、今のところは仲間に取り入れる有効策はないと……考えるべきか」

熊会長の出した結論に重々しく頷く一同。

何かしら起死回生の一手が思いつけばいいのだけど。

「それよりも、私が心配なのはハツコンを逃がした責任を、スルリイムが罪に問われないかということです。そのことにより、団長たちや息子さんが危険な目に遭うのでは」

「ふむ、それはあり得るのう。魔王軍の規律の厳しさは知らぬが、ハツコンは攻略の要になった筈じゃから、叱責は免れんじやろう」

「そやけど連れ帰ってきたのも彼女ですよ、お爺さん」

「だったら、ちょっと怒られるぐらいっすかね？」

シユイの純粹な問いに誰も答えられずにいる。

冥府の王の管理体制に思うと思う。今までのイメージだと人を見下し、配下の者にも容赦がなかった。

スルリイムは助けられた恩があると言っていたが、それも気まぐれか雪精人を手なずけておきたかっただけのようない気がする。

「それを詮索したところで、我々にはどうすることもできぬか」

屋上に連れて上がったのはスルリイムだから、団長たちが直接責められることはないと思うが、息子の問題があるので事が大きくなりすぎても困る。

やはり、子供をどうにかするか、見捨てるのかの二択しかなさそうだ。

個人的にはどうにかして救ってあげたいが、一介の自動販売機にどこまでやれるのか。

俺には逃げるのを手伝ってもらった恩がある。恩が大事なのはこっちも同じだよ、団長。

進軍

あれから二日が経過して、偵察に向かっていたハンターが戻ってきた。

その人は背中に翼の生えた天使のような姿をした翼人魔と呼ばれる種族らしい。

空も飛べて 隠蔽 千里眼 暗視 転移 気配操作 と
偵察に特化した加護を所有しているので、今回の危険を伴う任務には彼しかないかと抜擢されたそうだ。

戻ってきたばかりの彼が会議室にいらしたことなので、緊急招集に従い主要メンバーである俺たちも向かっていた。

「偵察の人、無事に戻ってきてよかったね」

「偵察に特化したハンターらしいからな」

俺はいつものようにラツミスに背負われて、頭の上にヒュールミが座っている。

急いで向かわないといけないので上に乗ってもらった。少し離れた後方からピティーとミシユエルが追ってきているな。

最近、二人は何かと仲がいいようで頻繁に会話をしている姿を目撃している。全く違うように見えて共通点がある二人なので、このまま友人になってくれると俺も心配事が一つ減るのだが。

会議室に入ると白鳥のような白い大きな羽を背負った、金色の髪の毛のイケメンがいた。本当に天使みたいな人だな。

「来たか。皆揃っておるぞ。好きな席に座ってくれ」

「どうやら俺たちが最後だったようで、入り口に近い位置に俺は設置された。」

「では、ムキオラ。何があったか教えてもらえるか」

「はい。犬岩山の背後には確かに小島が存在していました。そこに皆も存在していましたので、私は夜に屋上へと降り立ち内部へと侵入しました」

「そこまでやったのか。あそこに潜り込むのは危険すぎる行為だよな。そんな無茶な頼みごとをしていたのか……ハンターの命優先を信条にしている熊会長らしくないな。」

「依頼は外部からの偵察のみだった筈だが」

「ええ、そうだったのですが、敵の気配が全くなかったのですよ。物音一つせず、気配が皆無でしたので、そのまま帰る訳にはいかず侵入を試みました」

「独断専行だったのなら、納得だよ。」

「中はもぬけの空でして人っ子一人いませんでした。一階の船着き場を見たところ船が一隻もありませんでしたから拠点を捨てたのではないでしょうか」

「情報が流出したので潔く拠点を移したのか。他の場所にも同じような拠点を設けておくのは戦術の基本だと、昔読んだ小説で軍師が言っていた。」

「ふむ。大半が骨人魔の兵だったと聞いている。奴らは冥府の王が

召喚し操る下僕だろう。奴にしてみれば下僕を送り返すなんてことは朝飯前……数少ない人間や亜人だけを逃がせば拠点には何も残らぬか。スルリウムが転移を扱えるという話だったな。それで別の階層に移動した可能性も」

「会長、それは恐らくないかと。私も転移を扱えますが、この能力は扱いが難しく発動には精神力と体力を大量に消耗します。私の魔力では自分以外に三人を運ぶのが限度で、一度使うと三日は回復に時間を必要とします。雪精人の膨大な魔力をもつてしても、十人ぐらいを運ぶのが限度ではないでしょうか。それも長距離の連続使用は無理かと」

そうになると、考えられるのはスルリウムとケリオイル団長たちだけが転移で逃げて、他の面子は船で脱出か。

「清流の会長よ！　なら船で逃げた奴だけでもとっ捕まえて、縛り上げようぜ！」

今日も会議室に響く大声だな、灼熱の会長。

「灼熱の会長の意見も尤もだが、冥府の王は捕まる可能性の高い彼らを船で逃がしてどうするつもりだったのか。私が冥府の王なら砦を死守させて時間稼ぎをするか、自害させるが」

さらっと恐ろしいことを口にした始まりの会長だったが、冥府の王と接触した経験があるので、あり得ないことだとは言えなかった。

「何か別の目的があるのかな？　その冥府の何とかって性格悪そうだし」

子供会長　　犬岩山会長が素直な意見を口にしている。

「別の目的か……ヒュールミはどう思う」

熊会長に意見を求められたヒュールミは腕を組んで目を閉じて思案していた。

おもむろに瞼を開くと、前を見据えて口を開く。

「これはただの憶測だということをお先に断っておくぜ。船で逃げたと思われる下っ端はそもそも、碌な情報も知らされていないという可能性が高いと思う。なので捕まったところで向こうさんとしては何の問題もない。って考えるのが妥当じゃねえか……ただ、もっと有効活用しようと考えたら」

そこで一旦、言葉を区切ってヒュールミは会議室にいる全員の顔を見回す。

「髑髏の指輪を渡して、階層主である犬岩山を動かす。拠点も跡形もなく崩れて証拠隠滅、この階層も終わるだろ」

誰かの息を呑む音がした。

確かにその方法が冥府の王にとっては最良の策かも知れない。

「あり得ないと一蹴できる話ではないな。念の為にもう一度偵察に出してもらう必要がある」

熊会長の言葉を遮るように会議室の扉が大きな音を立てて開け放たれた。

そこには肩で息をしている兵士が一人、顔面蒼白で悲痛な表情をして立っている。

「緊急事態です！ 犬岩山がこちらに向かって来ています！」

嫌な予感や予想ほどの中率高いよな。

心構えができていたおかげで意外にも冷静に現状を受け止めることができていた。

「住民を全て清流の湖階層に移動させるのだ！ 皆も住民を送り終わったら順次、清流の階層へ移動するように！」

素早くて確かな指示を出す熊会長が立ち上がり会議室から飛び出していく。

俺たちもその後が続いて、外へと駆け出していった。

「ねえっ、どうしたらいいの！ どうしよう！」

「し、知るかよ！ 逃げねえとっ！」

集落内はパニック状態に陥っていて、住民が右往左往している。

兵士たちがなだめ転送陣へ誘導しているが、住民の殆どが海を見つめ絶望に顔を染めていた。

視線の先には悠然と海を歩く巨大な犬の姿がある。一歩進む度に大波が発生しているようで、海沿いの民家は波に吞まれてしまい壊滅状態だ。

「これはどうこうする前に津波に吞まれて終わりそうじゃのう。ほいっ」と

シメライお爺さんは懐から岩肌が剥き出しの山々が描かれた扇子を取り出し、下から上と振る。

砂浜の中から突如巨大な岩壁が飛び出し、海沿いに雄々しく立ち塞がる。高さは五メートル近くあるように見えた。

「おおおっ！」

住民たちの口から歓声が上がっている。

この壁の高さだと遠方にいる犬岩山の姿が完全に覆われているので、住民の恐怖感も少しは薄れたようだ。

「今の内に、早う誘導せんか」

近くで住民と同様に驚いていた子供会長の背を叩き、シメライお爺さんが活を入れている。

「あつ、そうだった！ みんなー、ここは凄腕のハンターが何とかしてくれるから、さっさと避難するよ！ 転送陣に急いでっ！ 子供とお年寄り優先でねっ！」

「皆さん、慌てずに転送陣まで向かってください。大丈夫です、十分に間に合いますので！」

子供会長とハンター協会職員、そして兵士たちが集落内に散らばる住民に声を掛けている。避難誘導はあちらに任せておけばいいだろう。

お年寄りや子供に手を貸しているハンター協会の女性職員がいるのだが、手にトンファのような武器を持っているな。この世界にはトンファーも存在するのか。

確か警棒にトンファーを起用している国もあるそうだから、職員が持つには適しているのかもしれない。

って、そんなことを考えている場合じゃない。問題はあの犬山岩

をどうするかだ。

お爺さんが作りだした岩壁に主要メンバーが登って、こちらに迫りくる階層主を観察しているのだが、あそこまでの大きさになると特撮の怪獣だな。

海からの上陸というのも某映画のワンシーンみたいだ。

「アレは勝つの無理じゃねえか。そもそも、前ははどうやってアレを倒したんだ」

ヒュールミが呆れたように言葉を漏らす。

映画と違ってこちらには兵器も爆弾もない状態で怪獣に挑まなければならぬ。無茶とかいう次元を超越しているな。

「前ははどうやって倒したんじやったかの。婆さん覚えとるか？」

「いやですよ、お爺さん。ポケチャいしましたか。全員でアレに食べられて中で暴れまわったじゃないですか」

「うむ、ギリギリの戦いであつた」

「あれは今思い返しても無茶苦茶やったわ。よくもまあ、生き延びたもんやわ」

老夫婦、熊会長、闇の会長が過去を思い出し懐かしんでいる。

「って、あの犬岩山を前回倒したのって、熊会長たちのチームだったのか！」

「えっ、一度倒したことあるの!？」

驚きの声を上げたのはラツミスだったが、当事者を除いた全員が

同じ気持ちで熊会長たちを見つめている。

「ああ、若かりし頃に皆で挑み、内部から破壊して何とか勝利を収めたのだよ。若さゆえの大胆さが掴み取った勝利だった」

「じゃあ、今回もその時のやり方で倒したら」

「ラツミス、それがのう。あの時の方法は正直、お勧めできかねる。あ奴の体内は消化液で満たされておつてな、並の物なら一瞬で溶かされてしまう。当時は対策を練って有効な加護を持つ者の協力を仰ぎ、何か月にも渡って鍛錬を重ねて挑んだのじゃ」

「液体を操る加護と風操作の加護、後は時間差で爆発する魔道具もこしらえてもらいましたねえ。それでも、幸運が味方してくれなかつたら、今頃ここにはいませんよ」

対策を練って何とか勝利を掴み取った相手に、即席で挑むのは無謀すぎると老夫婦は忠告してくれている。

あの犬岩山にしてみれば俺たちなんて蟻にも等しい存在だろう。

怪獣相手に正面から生身の人間が戦って勝つなんて、ファンタジ―でも荒唐無稽な話のようだ。

「となるとオレたちにできることは……避難が終了するまでの時間稼ぎか」

「陸上であればそれも可能だと思われませんが、海となるとかなり難しいのではないのでしょうか。ハツコン師匠はどう思われます」

「ミシユエル、いつも変なタイミングで無茶振りするのを止めてもらえないでしょうか。」

ほら全員が俺の方を見ている。そんな期待した目で見られても困るのですが。

うーん、無理だとは思うが考えてみるか。熊会長たちが以前やった攻略法は八足鰐に俺がやった倒し方と発想が同じだよな。

でもあれは、鰐が生き物だったから内臓が弱かったという話。そもそも、あの犬岩山って生物なのだろうか。内臓とかあるのかね。

「あのかいせ」

「うねしのう」

「ちがあお」

「しゆてください」

ちょっと無理がある言葉のチョイスだったが通じてくれただろうか。

みんなの視線が自然とラツミスとヒュールミに向けられている。ハツコン語免許皆伝の二人ならわかってくれる……かな？

「えっと、あれの中がどうなっているのか教えて欲しいんだよね」

「そうだな。内部構造を教えて欲しいってハツコンが言ってるぞ」

二人のおかげでかなり助かっているよな、実際。頼り切っていないで、もう少し上手く話せるように言葉選びに磨きをかけないと。

「あの中身か。岩肌が剥き出しの洞窟といった感じか。膝上まで溶解液で満たされているのだが、その威力は鉄でも数分で溶かし尽くすぐらいだ」

「後は……なんやったかな。人の頭ぐらいの岩に羽が生えた奴が、むっちゃおって邪魔ばっかしてきて、鬱陶しかったわ」

「まあ、婆さんが全て叩き切ってくれたから、助かったがのう」

「的が大きかったですからねえ」

結構な修羅場だった筈なのに楽しそうに話しているな、この人たち。

実際に討伐した人たちが仲間にいる心強さはあるのだが、参加していた人たちが全員止めている時点で無謀な真似は止めておくべきか。

俺だけが特攻するならまだしも、仲間をそんな危険な目に遭わせたくない。特にラツミスは絶対に付いてくるだろう。

「しかんかせ」

「ごう」

「時間稼ぎだね」「時間稼ぎだな」

ラツミスとヒュールミの声が被った。

みんなもこの方針で納得してくれたみたいだけど、問題はどうやって時間を稼ぐか。犬岩山の姿は徐々に大きく、押し寄せる津波も高くなっている。

防波堤代わりの岩壁もこのままだと乗り越えられてしまいそうだし、もう一度日本に戻って怪獣映画を観られたとしたら、今まで以上に真剣に考察しながら観賞できるだろうな。

そんなことを考えながら、迫りくる犬岩山を見つめていた。

対怪獣戦

映画で毎回毎回、怪獣に挑まされる自衛隊の方々の気持ちが多分理解できそうだな。

「で、どうするよ」

ヒュールミの問いかけに全員が無言で顔を見合わせている。時間稼ぎを提案したけど方法は……どうしようか。

「ピティーンと……ハツコンで……空から……あれ落とす……」

無言を貫いていたピティーンが珍しく自ら意見を口にした。

何故かラツミスがじっと俺を見つめている。若干、怒っていらっしやいませんでしようか。

作戦としては悪くないというか、それ以外で俺が活躍できるとは思えないな。

「それって、敵の中將軍を倒した時の手か。悪くねえな、だったらこれ大量に渡しておくぜ。海だから使い道があるかと思って、大量生産しておいて正解だったな」

ヒュールミから大量の魔道具を手渡された。これは水を凍らす魔道具か。フィルミナ副団長との戦いで使い切ったから助かるよ。

「経費は後で請求してくれ」

熊会長がスポンサーになってくれるようだ。この魔道具は安くな

かった筈だから、これで遠慮なく使える。

「うーん、矢なんて何の役にも立たないっすよね。避難誘導手伝うっすー!」

「そうですね。ハツコンとシメライさんぐらいしか役に立ちそうもないので、邪魔にならないようにしておきましょう」

足止めは俺とピティ어의コンビ、それとシメライお爺さんが担当することになり、何人がサポートを残して各自散っていった。

「ハツコン……一緒に……飛ばうね……」

「いらっしゃいませ」

ピティ어의 重さ操作 があれば上空からの爆撃も可能だ。

「ハツコン、ちゃんと戻ってきてね」

ラツミスが俺の体に手を触れて心配そうに見上げている。

「うんまかせ」

「てよありがとう」

そう言うと手を離してくれた。掴んでいた部分が指の形に凹んでいるが、これは今直さないでおこう。これがあると彼女と繋がっている気持ちになれるから。

風船を大量に制作して、横倒しになるとその上にピティ어가寝そべっている。

ラツミスが頬を引きつらせて横目で睨んでいるが、彼女は素知ら

ぬ顔で俺の体に頬を寄せている。わざとかな、わざとなのかなつ。

ここは、俺の為に争わないで！ と言う場面なのだろうか。やめておこう、事態が悪化する未来しか見えない。

二人ともただの自動販売機である俺に依存しすぎている気もするが、独占欲が出るぐらいに気にいられている事実は素直に嬉しい。もう少し、仲良くして欲しいが。

ピテイーが 重さ操作 をしてくれたようで、ふわっと宙に浮き高度がぐんぐん上がっていく。

充分な高さを確保できたので、今度は コイン式掃除機 の風を出す機能を使い、犬岩山を目指して滑空する。

暫く飛び続けると、その巨体が徐々に全貌を現していく。

近くで見ると全体の造形がシベリアンハスキーのようだ。彫りが荒いのが逆に迫力を増す効果があり、その大きさと相まって圧倒的な暴力性を感じさせる。

犬岩山はその巨体で暴れる以外の特殊な攻撃方法はないらしい。遠距離攻撃も保持していないと説明を受けている。

上空からなら一方的な攻撃が可能となる。

中將軍を倒した方法、コンクリートの板を出してからの撃ち込み。相手が岩でできていようが、この高さから勢いよく弾き飛ばされたコンクリートの板を喰らって無傷とはいかないだろう。

連続で五枚射出する。あの巨体なので外れることなくコンクリート板が着弾した。

眼下でコンクリートの板が命中、爆散している光景が目に入る。相手の岩肌に小さな窪みができているが、犬岩山は前足で首筋を軽く搔いただけで平然と歩き続けている。

思ったより岩が硬いのか。あれだと自爆覚悟で高高度から巨大自動販売機で落下して、激突しても倒せるか怪しい。

めげずにコンクリート板の雨を降らしているが、表面の岩を砕い

ている程度でダメージとしては微々たるもののようにだ。

「効いてない……みたいだね……」

ピテイーもそう思うか。俺の体から少しだけ身を乗り出して下の様子を窺っているが、やっぱり効果は薄いように見えるよね。

じゃあ、弾の種類を変えよう。フォームチェンジで コインロッカー になるとヒュールミから渡された魔道具を投下した。

犬岩山の足元に当たるように狙い、思った通りの場所へ着水していく。

魔道具が落ちたあたりが一気に凍り付き、膝下まで海水に埋まっていた脚を上げようとして、犬岩山が硬直している。

「あつ……止まったね……」

わざと後ろ脚の付近は凍らせず、前足周辺を重点的に狙ったので前のめりになって顔が海中に没したな。直ぐに顔を上げたが、氷を砕こうと必死に足掻いている。

これで少しは時間が稼げるが、いずれ砕かれそうだ。少しでも気をそらせる為に上からコンクリート板の狙撃を続けておく。

相手にしてみれば背中が虫が暴れている程度の効果かも知れないが、集中が少しでも乱れているのなら意味はあるだろう。

あれ、凍っていない箇所海面の動きが妙じゃないか。

犬岩山が暴れるので海面が大きく波打っていると思っていたのだが、真逆である集落の方向から巨大な津波が押し寄せてきた。

これはシメライお爺さんが発生させた津波か。

なら、この攻撃に便乗させてもらおう。津波が被さる直前に凍らせる魔道具を撃ち込む。

体に海水を大量に浴びた状態で一気に凍り付く。上半身が津波と

同化しているかのような光景になっているぞ。

これで時間稼ぎとしては充分だろう。残りの魔道具もばら撒いて後ろ脚の周辺も凍らせておこう。

氷漬けになった敵を眺めながら勝利の余韻に浸りたいところだが、氷の至る所に小さなひびが入っていくのを目撃して、俺たちは集落へと撤退することにした。

集落に戻ると住民と兵士の避難が全て終わっていて、残るは仲間たちだけだった。

全員待っていてくれたのか。みんな律儀だな、そういうところ好きだよ。

「おっ、戻ってきたな。早く来い！ とつとと逃げるぞ」

「ハッコンっ！」

まだ空中にいたのだが、ラツミスに飛び付かれて地上に引きずり降ろされた。といつても、ちゃんと抱えられてダメージは一切受けていないが。

転送陣に全員が飛び込むと、お爺さんが魔力を発動させて一気に清流の湖階層に飛んだ。

いつもの部屋に転送されると、ヒュールミとお爺さんが転送陣に触れて何か細工をしている。

「犬岩山階層との接続を切っておくぞ。万が一にでも海水が流れ込んできおったら大惨事になるからのおう」

「だな。壊滅状態は免れねえだろうし、生き残った冥府の王の配下
に乗りこまれても厄介だからよ」

こういった作業は二人に任せておけば間違いない。

これで犬岩山階層の騒動に一区切りついたわけか。相手の戦力や
ケリオイル団長たちの現状も理解できた。だからといって事態が好
転したわけじゃないのが問題だ。

でも、攻略中の永遠の階層以外の異変は一応だが終焉を迎えた。
残る階層は一つか。

「うつつ、ボクの階層がああ。三食昼寝付きの職場がああ」

子供会長が膝を抱えて泣いているが、最後の一言を聞いて同情す
る気が失せたよう放置されている。

「また住民が増えたか。人員が増えることは喜ばしいことだが、仕
事量が……」

「清流の会長。我々も手伝う故にそう落ち込むな」

「そうですね。私なんて存在が手伝ったところで微力にも程がある
でしょうけど、それでも何もしないよりもマシだと思いますわ。あ
つ、そうそう、そう言えば昨日朝起きたら外で住民たちが楽しそう
にお話をしていたので、私も混ぜてもらおうと階段を駆け下りてい
ましたら、つい慌て過ぎて」

「迷路会長は話が長すぎるっちゅうねん！ こういう時は簡潔にわ
かり易く要点を伝えるっちゅうのが大切やで。つまり、清流の会長
はん、お駄賃なんぼくれるんや？」

闇の会長のボケに老夫婦が同時に後頭部を叩いている。元同僚だけあって息がピッタリだな。

ハンター協会の会長たちが手分けして手伝ってくれるそうなので、今回移り住んでくる人々の今後の生活環境の取り決めも滞りなく行われるだろう。

じゃあ、俺も自動販売機として移り住んできた人々の為に歓迎せーるでも開催しますか。

全品全て半額でご奉仕。犬岩山階層から来た人は脅威の九割引きを実施させてもらおう。金品を持たずに避難した人には無料で提供しようか。

こういうことをすると、この人たちだけ無料で提供してずるいと絡んでくる輩が必ずいるのだが、そこは我慢してもらおう。

販売人は俺であり、割引も鼻屑をするのも自由な筈だ。

商売人としては間違っているとは思うが、利益より人情を重視して文句を言われるなら幾らでもどうぞ、というスタンスなのでどうでもいい。

地域と人に優しい自動販売機というのがモットーだからね。

新装開店

人が急激に増えると問題も発生するわけで、熊会長たちは毎日忙しそうに集落内を駆け回っている。

今回、犬岩山階層の住民が全員移り住んできたのだが、あの階層は気候も温暖で海もありダンジョン内ではかなり人気の階層だったらしく、大量の住民が流れ込んでくることになった。

住居は事前に仮設テントを大量に建てておいたので、何とかなっているそうだ。

一番心配される食料面は俺が手伝っているのも大きいのだが、手助けをしなくても住民の食料は充分まかなえていたりする。

実は清流の湖階層では農作物を栽培する人が増えているのだ。

キコユが残っていた異世界転生した畑で品種改良をされた種や苗があれば、少量の水やりだけで大量の農作物を育てられるので、集落の隅に農園が作られ自給自足で食料が確保できるようになった。

衣食住の食と住は充実しているが残りの衣、つまり服が問題になると思われたのだが、清流の湖には様々な服が溢れていたので何の問題もなかった。

これには理由があって、あのダンジョンコンテストを開催後、多くの女性だけではなく男性もオシャレに目覚めた者が現れたのだ。それも大量に。

服屋もコンテストの色とりどりの服装を見て刺激されたらしく、清流の湖階層に一大ファッションブームがやってきた。不足していた服の素材は魔物の体毛や革で補い、衣類が不足することはなくなった。

衣食住に不便しなくなると、次に人が求めるのは娯楽となる。

特に犬岩山階層は解放感があり自由な気質の住民が多く、欲望のはけ口を求め犯罪行為に至らないか心配されていた。

女性はファッションブームと俺が広めたお菓子が充実していることで不満が和らいでいるようだが、なら男性はどうすればいいのか。そこで、多くの男性が待ちに待ったあの店が新装開店することになった。

「ハッコンさん、ありがとうございます」

「いらつしゃいませ」

シャーリイの依頼で数日前から暫く深夜営業の場所を移すことにした。

夜の仕事を切り仕切る彼女の仕事場が新装開店することになり、俺は店の入り口で客引きを担当している。

今日はシャーリイも隣に並んで一緒に客に声を掛けて、躊躇いがちな男性を店内へと誘惑しているのだが、流石の一言に尽きるな。

「いらつしゃいませ、一時の夢を共に見ませんか」

たったそれだけの言葉だというのに、シャーリイの唇から発せられただけで男は腰砕けになり、まるで催眠術にでもかかったかのよう店内へと吸い込まれていく。

あれだけ魅力あふれる女性に誘われたら仕方ないよな。現に今も道行く男性の視線を集めているからな。

大きく胸元の開いたイブニングドレスから零れ落ちそうな胸に、通りすがりの男性陣の目が釘付けになっている。

そして足が止まったところに流し目で微笑まれ、客引きをされたら面白いぐらい簡単に客が釣れる。シャーリイの魅力を越えた女の魔力恐るべし。

「店内が慌ただしくなってきたようですので奥に引っ込みますね。後はよろしく願います」

「が ん あ っ て」

「はい、頑張りますね」

髪を掻き上げながらそんな艶やかに微笑まないでください。鉄の塊なのに妙な感情が湧き上がりそうになるので。

シャーリイが引っ込むと客足も途絶えるまではいかないが、かなり少なくなった。

「いらっしやいませ いらっしやいませ」

一人で客引きをこなしながら、もう一つの仕事の声が掛かるのを待つ。

もう一つの仕事の内容は俺の横に設置してある、誕生日プレゼントに貰った看板に書いている。

『お気に入りのあの手に土産を渡して好感度を上げませんか。家で待つ家族へのお土産も用意しています』

つまりお気に入りの女性に渡すプレゼントや、家で帰りを待つ家族へのごますり用のお土産も売っているアピールだ。

ここはシャーリイが取り仕切るお店が建ち並んでいるのだが、幾つかは健全な飲み屋だったりする。そういったお店を利用したお父さんたちは、酔っぱらって帰る際に土産の一つでもあれば、妻の風当たりが少しでも弱まるのを理解している。

なので利用客が多く、これが結構良い商売になるのだ。それとは

別の目的で商品を購入する人もいるのだが。

「ハツコン、ロシエミちゃんの好きな物知ってるか？」

とある店の常連の一人が小声で俺に話しかけてきた。

顔が狼なので牙が鋭く人間の子供なら泣きだしそうな容貌をしているが、女性には奥手のハンターさんじゃないですか。

ロシエミって確か犬人魔の女性だよな。好きな物はこれだったな。フォルムチェンジをすると体が半分以下の大きさに縮む。身体もピンクが主体になり側面と正面に英語で文字が描かれる。低い位置に匂いが出る箇所がありそのボタンに触れるとドッグフードが出てくる仕組みだ。

これは小型犬専用自動販売機で、とあるショッピングモールに置かれていた。小袋に入ったドッグフードを 念動力 で操り狼男のハンターに渡す。

「これか、ありがとよ、ハツコン！」

「ありがとうございました」

ご機嫌な様子で手を振りながら狼男が奥へと進んで行った。

ここで夜の仕事をしている女性へのプレゼントに買って行く人が多く、こうやってアドバイスを求められることがある。

常連の好みは覚えていることが多いので、的確なアドバイスと商品提供が話題になり相談されることが増えてきた。

つとまた人が来たな。俺の正面に立って見下ろす体格のいい男性……角切りの頭に一文字に口を噤んでいる姿が男の無骨さを表している。

「ハツコン」

「じりす」

「ゴルスだ」

最近一人でいることが増えた門番コンビの片割れゴルスじゃないか。

たまにシャーリイのお店を利用している姿を見かけていたが、ここで俺に話しかけてくるなんて珍しいな。

一人の時は言葉を発することが殆どないので、何かあったのかと身構えてしまう。

次の言葉を待っていたのだが、沈黙状態のまま時間だけが流れる。

「いらっしやいませ」

焦れた俺がいつものように発言すると、ゴルスの体が縦に小さく揺れた。

相変わらず表情の読めない顔をしている。怒っている訳じゃないのは付き合いが長いのでわかってはいるが、知らない人はこの表情に怯えてしまう。

「シャーリイさんの好きな物を知っているか」

あー、お目当ての女性がシャーリイなのか……はっ……えっ？
ん、えと、あの……えっ？

ゴルスが意を決して口にした言葉が予想外で思考が停止していた。珍しく冗談を口にしたのかとゴルスの顔に視線を向けると、顔面が炉に放り込まれた鉄のように真っ赤に燃え上っている。

本気なのか。よりによってシャーリイ狙いなのか。難易度が高いなんてものじゃない。ベリーハードを越えたインフェルノクラスだ

ぞ。

今まで多くの人が挑み軽くあしらわれて轟沈していく場面を何度も目撃してきた。ゴルスは真面目で誠実でいい男だと思うが、うーん。

「何かないだろうか」

シャーリーの好きな物か。良く購入してくれるのは避妊具とお酒だけど、これは商売で使うものだからな。コンドームをプレゼントで渡したら即座に振られること間違いなしだ。

俺から購入した花束を持って告白した人もいたけど、見事に散ったらしく帰り際にうなだれていた。

お酒は好きなようだけど仕事でたらふく飲んでいるから、プレゼントとして相応しくない気もする。

今更だがシャーリーのプライベートって全く知らないな。昔ハーターをやっている凄腕だったという情報と、夜の仕事をしていたサービス精神が旺盛だというのは知っているが。

う、うーん、困った。俺としては二人とも好きだから上手くいった欲しいと思うが、これといって有効なプレゼントが思い浮かばない。

一番のお得意さんなのに何も知らないな、彼女のこと。

「またこんと」

「わかった。今度また頼む」

軽く頭を下げてゴルスが立ち去っていった。少し猫背気味なのは落ち込んでいるのだろうか。力になって上げたいが、シャーリーの好みか。

カリオスの恋も実らせた自動販売機としては、その相棒であるゴ

ルスの恋愛も成就させてあげたいよな。

よっし決めたゴルスの為にシャーリーの日常を観察して、あらゆる情報を集めてみよう。

前々から、どんな生活をしているのか興味もあつたから丁度いいよな。

人の生活を覗き見するのは良くないことだが、これはゴルスの為だ決して己の欲望を満たす為じゃない。

どんな方法が効果的だろうか。尾行は難しいけど姿を同化させるのはお手の物だ。使えそうな商品がないか今から目を通しておこう。

昔は探偵に憧れていたから一度やってみたかつたんだよなあ。

自動販売機探偵

シャーリイさんの日常を探る為に協力者を募ったところ、ラツミスとヒュールミ、そして大食い団のスコが手伝ってくれることになった。

女性の身の回りの情報を集めることになるので女性限定にさせてもらった結果が、このメンバー構成だ。

シユイも誘ったのだけど色気より食い気らしいので興味がなからしい。

「ハツコン、ここでいいのかな」

「いらつしゃいませ」

庭付きの小さな白い家の向かい側に設置された俺は、体の配色を変更して民家の塀と同化した。

シャーリイの家は従業員に訊ねたらあっさりと教えてもらうことができた。たまに店員たちを家に招いて食事会をするらしく、住宅の場所はみんな知っているそうだ。

集落を囲む壁沿いの門から結構近い場所なので、魔物の被害に遭うことも考慮されてこの土地は安いという話を聞いたことがある。しかし、意外だな。いつも露出度の高い服を着て、あんな煌びやかな世界で生きているのに木造のこぢんまりとした平屋に住んでいるのか。

白く塗られた木製の塀があり庭の芝生は短く刈り揃えられていて花壇も置かれている。あれは俺が販売している花たちだな。

あれ、意外と乙女な一面がある人なのだろうか。

「じゃあ、塀の裏に潜んでいるから、何処かに出かけるようだったら声を掛けてくれよ」

ヒュールミたちは民家の中へと入っていった。ここの住宅は最近建てられたばかりで売り出し中の物件らしく、熊会長に許可を貰い今日一日は自由に利用していいらしい。

まだ早朝なので動きがないが、暫く様子を窺うことにしよう。

遠くから車輪の回る音が聞こえてきた。ふと視線を向けると大八車のような物を引っ張る一人の若者がいる。

荷台には瓶がずらっと並んでいて中身は動物の乳のようだ。そういや、牛っぱい生き物から乳を搾って売っている、牧場のようなところがあるとは聞いていた。

家々の扉前にある蓋つきの小さな箱に瓶を入れているな。早朝の牛乳配達のような仕事らしい。純朴そうな青年が朝から一生懸命働いている姿は思わず応援したくなる。

その青年がシャーリイの家の前に差し掛かると、急にソワソワし始めた。瓶に自分の姿を映して髪を手櫛で整え服装のチェックを始めている。

あー、ここにシャーリイが住んでいるのを知っていて、万が一遭遇した時の為に身だしなみを整えているのか。気持ちにはわかるが夜遅くまで仕事しているから、この時間帯に起きることはないと思うよ。

辺りをキョロキョロと見回してから手作り感溢れる木製の門を押し開き、玄関前まで忍び足で進んでいる。眠っている彼女を起こさないように気を遣ってくれているのだろうか。中々できた青年だな。手にしていた瓶を小箱に入れて、代わりに空き瓶を二つ取り出した。

そして、その瓶の飲み口にゆっくりと唇を……って何してやがる。

それ洗った後だから、そんなことしても無意味なのだが何となく気持ち悪いので、栄養ドリンクを 結界 で弾き飛ばし、青年の頭に直撃させた。

「痛っ、えっ!?!」

慌てて周囲を見回しているが、俺の存在には気づかないようだ。ぶつけた栄養ドリンクも即座に消しておいたからな。

青年は慌てて瓶を回収すると足早に走り去っていった。

思春期にありがちな暴走でシャーリーなら知ったところで笑って許しそうだけど、まず人としてダメな行為であるのは間違いなく、おまけにお客に対してやってはいけないことだ。自動販売機としてそこは譲れない。

そんなことを考えていると、今度は中年のオッサンがシャーリーの家の前を行ったり来たりを繰り返している。

ロングコートに帽子を深々と被りサングラスを装着した小太りな男。理想的な不審者だな。とはいえ、家の前を歩いているだけの可能性が僅かにあるので、まだ手を出すわけにはいかないのだが。

塀に手を添えて必死に中を覗いているな。あの位置からだと庭を挟んで、住宅の大きなガラス戸が見えるのか。カーテンが締まっているので家の中は見えないが。

暫く観察していると、周囲を気にしながら塀を乗り越えて庭へと侵入した。あ、これはアウトだ。

「すこ」

「なになに、どうしたの」

小さな音量で名を呼ぶと、すぐさまスコが隣に現れた。大食い団

の面々は耳が良いのでこの程度の音量で問題ない。

「あのおとこ」

「うわっ、完全に不審者だね。ちょっと脅かしてくる」

楽々と扉を飛び越えると、庭へと繋がる大窓に手を当てて強引に開けようとしている男の背後に回り込んだ。大きく息を吸い込み胸元が膨らんでいる。

「ヴアアアアアッ！」

「う、うわあああっ!？」

背後からの大声に腰を抜かした中年の男が、必死になって後退りながら何とか扉を越えて逃げていく。

スコヤリ過ぎだ、朝っぱらからそんな大きな音を立てたら。

早朝に響き渡る咆哮に近所の人々が家から飛び出してきている。

スコは既に俺の後ろに逃げ込んでいるな。

住民が何もなかったことを確認すると直ぐに家に引っ込んでいった。

全員の姿が消えた後に遅れてシャーリイの家の大窓が開いた。

そこから現れたのは一人の女性。

ヒュールミのようにぼさぼさの髪を無造作に掻き、ゆったりとした紺色の地味なトレーナーの上下を着て、もう片方の手は腹をボリボリと掻いている。

大欠伸をした口の端に涎の跡があり、表情がだらしなく緩みきっていた。

「あれえ、叫び声が聞こえた気がしたけどお、気のせいかしら」

寝起きが悪いようで半分も開いていない瞼で庭をさつと眺めただけで、中へと引っ込んでいった。

シャーリイって、家ではあんな感じなのか。いつも色気を溢れ出して気を遣っていたら気疲れするだろうから、当たり前ではあるのだけど。

彼女に崇拜にも似た憧れを抱いている人が見たら幻滅するかもしれないが、俺としては気の緩んでいる日常の姿は可愛いと思う。

「いつもはあんな感じなのね。わかるわかる、女って家じゃあんな感じだもん」

スコが何度も頷いて同意している。大食い団の面々はいつも気を抜いている気がするが、同じ女性として通じ合う部分があるようだ。

「何かあったの、大声が聞こえたけど」

「うーっす。目が覚める飲み物なんかねえか」

二人も出てきたか。ヒュールミは少し眠っていたようで、さっきのシャーリイみたいに頭を掻いている。

三人はもう家に戻る気はないらしく、俺と塀の隙間に潜り込んでシャーリイさんの自宅を見守っていた。

それから人通りが多くなる時間帯になるまで、住宅の周りをうろちよろする不審者が二人ほど追加されたが、互いにけん制しているようで何もなくなっていく。

いつか大事になりそうな危険性があるが、シャーリイさんって腕が立つから普通に返り討ちにされそうだな。一応、さっきの不審者の姿は録画しておいたので、後で衛兵にでも見せて注意してもらおうとしよう。

美人は人生で有利だと耳にするけど、こういった厄介ごとに巻き

込まれやすいのは同情してしまうな。

「出てこないね、まだ寝ているのかな」

「夜遅いからな。起きるのも昼前じゃないか」

「ご飯の匂いも生活音もしてこないわ」

スコが鼻をひくひくさせて耳を澄ましている。

大食い団の面々の嗅覚聴覚が人並み外れているのは周知の事実なので、彼女の言ったことを誰も疑っていない。

昼をとくに過ぎた時間によく動きがあった。

家の扉が開き中からシャーリイさんが姿を現す。

短パンにブーツ、上は革ジャンのようなデザインを着ている。サングラスもしているな。髪も邪魔にならないように後ろで縛り動きやすそうな格好だ。

背中には大きめの袋を背負っている。

いつものイメージと異なる格好だが何を着ても似合う。

「ドレス姿も素敵だけど、あの格好もいいね」

「大食い団の服と似ているわ」

「素肌の上からは着てねえけどな」

靴にジャケットしか着ていない大食い団と一緒にするのはどうかと思うが、この三人の中だとラツミスとスコの格好を合わせたように見えなくもない。

いつもの色気溢れる格好も似合っているが、今の格好は素直にカッコイイ。

彼女の姿が路地の中に消えるとスコが充分に距離を取ってから後
に続く。そうでもしないと気づかれる場合があるからだ。気配の察
知に長けているそうなので、念には念を入れている。

そして、スコから少し離れた後方から俺たちが尾行するという流
れだ。

「今日は一日休みらしいが、何すんだろうな。あの人の日常が想像
できねえんだが」

「そうだよな。いつもオシャレな格好をして高級な飲食店で優雅な
昼食なのかなと思っていたのに」

この集落で高級飲食店はスコりが経営している一軒しかない。ハ
ンターばかりがいる集落で高級店が必要なのかという疑問はあるが、
それなりに繁盛しているそうだ。

装飾過多な外観に比べてお手頃の価格で提供しているそうで、デ
ートやたまの贅沢に利用されることが多い、とスコりが前にオレン
ジジュースを飲みながら威張っていた。

そんな高級店に寄ることもなくシャーリイは大通りを無視して路
地裏を進んで行く。

結構な距離を歩いているとスコが路地裏の曲がり角でピタリと動
きを止めた。そして、俺たちに振り返って手招きをしている。

足早に近づき、尖った爪を指す方向に目をやると、そこには四角
く大きな木造建造物があった。

シャーリーの日常

「あれ、ここって……孤児院？」

「だよな。最近もシュイと一緒に来たから間違いねえぞ」

「大食い団のみんなと遊びに行ったことあるよ」

彼女たちの言う通り、そこは清流の湖階層に住居を移した、ホクシー園長先生が運営している孤児院だった。

熊会長の全面協力により、前の騒動で住民を失った古びた住居を園長先生に譲渡して孤児院に改装した元屋敷だ。俺たちも改装工事や掃除を手伝ったので間違いない。

ヒュールミの発明品が至る所に設置されていて、現代日本の家屋並に便利な仕様になっている。俺が自動販売機でなければここに住みたいぐらい居住性が抜群だ。

「でも、シャーリーさん孤児院に何の用なんだろう」

「おおよその見当はつくが……後で園長先生に聞いてみようぜ」

俺たちは物陰に潜みながらシャーリーの様子を窺っていると孤児院の扉を叩く。数秒の後に扉から子供たちが飛び出してきた。

「あつ、シャーリーのお姉ちゃん！ 遊びに来てくれたのっ」

「今日は何して遊ぶ？」

「ハツコンからもらった、このボールで遊ぼうよ!」

人気者だなシャーリイ。子供たちに取り囲まれて、優しい笑みを浮かべている。あれは営業の時に浮かべる表情じゃなくて、自然な母性溢れる笑顔。

うん、こっちの笑顔の方が素敵だ。

「ちょっと待ってね、園長先生とお話があるから。それが終わったら一緒に遊びましょう」

「わかったー、園長先生! シャーリイお姉ちゃんが呼んでるよー!」

早く彼女と遊びたいらしく、子供たちが叫ぶようにして園長先生を呼んでいる。

すると、奥の方から小走りで園長先生が駆け寄ってきた。

「はいはい、聞こえていますよ。あら、シャーリイさん、よく来てくださいました」

「今日も子供たち元気いっぱい何よりですわ。あ、そうそう、これいつものです」

そう言って大きめの袋を取り出し、園長先生に手渡している。

「毎回多額の寄付をいただき助かっております。ささ、立ち話も何ですし、子供たちも待ちわびていますので中へ」

「失礼しますわ」

園長先生に促されるまま、シャーリイが孤児院へと入っていった。孤児院に寄付をしていたのか。

園長先生は凄腕のハンターだが、子供たちの世話があるので自分で稼ぐわけにもいかず、二人ほど臨時の職員さんも雇っている。それに加えあれだけ子供たちがいるから出費も激しい。

シユイも幾らか寄付をしているそうだが、園長先生はあまり受け取ってくれないそうだ。俺たちも「寄付より遊びに来てあげてね」とやんわり断られたもんな。

どうやって運営しているのか疑問だったのだが、そういうことだったのか。

夜の商売をしている従業員への支払いも滞ることなく給料はかなりのいらしいが、自分は質素な暮らしをしているシャーリイ。

儲けの大半を孤児院に渡しているのかもしれない。

「そういえば、前にシユイがシャーリイさんも孤児だったとか言っていたような……」

ラツミスがふと思い出したようで、首を傾げて必死に記憶を掘り起こしている。

同じ境遇の子供たちを放っておけなかったのか。

「何ていうか、シャーリイさんやべえな。女として尊敬しちまいそっだ」

「同じ人間の男だったら、絶対惚れますよ!!」

「うんうん、そっだよな」

三人の意見に俺も同意するよ。まだ半日程度しか観察していないけど、シャーリイさんの株が俺の中で急上昇している。

ゴルス、あの人は高嶺の花どころの騒ぎじゃなさそうだ。秘境の奥地に眠るドラゴンを倒して手に入れなければならない宝ぐらいの難易度だぞ。

「ごつやって尾行しているのが、とても悪い事をしている気がしてきた……」

「そうだな。今日のことを謝って、俺たちも一緒にガキ共と遊ぶか」

「じゃあ、お熊さんごつこしてあげようかな」

「いらっしゃいませ」

それがいいよ。こそこそと嗅ぎまわることには罪悪感があったから、ここは素直に謝って一緒に過ごした方がいいに決まっている。

全員で孤児院の扉を叩くと子供たちが現れ、問答無用で中へと引きずり込まれた。

奥の大部屋には子供たちとシャーリイが無邪気にはしゃいでいる。

「あら、皆さん尾行はもういいのかしら？」

気づいていたのか。悪戯が成功した子供のように微笑んでいる。

今日はシャーリイさんの色んな笑顔が見られて得しているな。

「バレてたんだ。ごめんなさい、シャーリイさん。いつもは何しているのかなーって、気になっちゃって」

「すまねえ、興味本位でつけまわして、わるかった」

「ごめんなさいです」

「すまにゅ」

俺だけふざけているように聞こえるな。うーん、普通に謝るにも言葉が足りない。

「いいですよ。家を出たあたりから気配は感じていましたから」

あれ？ 早朝の騒ぎには気づいてないのか。朝弱いのは芝居でもなんでもないようだ。

「そうですね、悪いと思っっているなら……子供たちと遊んであげてもらえるかしら」

「うん、いいよ！」

「オレが開発した新しい玩具を使う時が来たな」

「熊さんごっこ誰が一番先にするー」

女性四人が子供たちを遊ぶ姿を部屋の端で眺めながら、夕方まで孤児院で過ごすことになった。

途中のおやつと晩御飯と一緒に取った後は俺の温泉自動販売機で浴槽に温泉を張り、全員が入浴を終えると今度は、はしゃぐ子供たちを何とか寝かしつけることに成功する。

「今日はありがとうね。子供たちも喜んでいたし、私も楽しせてもらいました。またいつでもいらしてください」

園長先生に見送られながら俺たちは孤児院を後にした。

夜道を俺の体が照らしながら進んで行く。スコは遊び疲れたのか俺の頭の上で爆睡している。

「シャーリイさんは休日いつもこんな感じなの？」

「うーん、そうね。お買い物もあまりしないし、ご飯もお店で余った材料を持って帰ることが多いから、外食も滅多に行かないわね。服は貰い物が沢山あるから買う必要もないし、いつもは家でボーっとしてることが多いかしら」

夜の煌びやかな世界で活躍しているのに実生活は地味で贅沢はない。子供好きで愛想も良く包容力もある。お嫁さんにするには最高の女性ではないだろうか。

和やかなムードのままシャーリイと別れ、俺はいつもの定位置に設置してもらい、ラツミスとヒュールミも自宅へと戻った。

今日の一件で意外な一面も知れて良かったと思うが……あ、結局好きな物とか全くわからないままだ。子供好きなのは何の参考にもならないし、花で庭を飾っていたけどこれ以上、花を渡しても困らせてしまいそうだ。

最適なプレゼントが思いつかないな。ゴルスの為にもそこは把握しておきたかったのだけだ。

「ハツコン」

考え込んでいると、いつの間にかゴルスが目の前に突っ立っていた。

もうすぐ夜が明ける時間なのだが仕事帰りのようだ。コートが魔物の返り血で汚れている。相棒のカリオスは一足先に彼女の元へ向かったようだ。

「いらっしゃいませ」

「何かわかっただろうか」

いつものように無表情に見えるが、若干緊張しているのが伝わってきた。

常連として接していると些細な違いでも見抜けるようになるものだな。

「いちにち」

今日一日ずっと録画していたのでそれを 液晶パネル に映し出して見てもらうことにした。

シャーリーさんの家の周辺をうろつく不審者を観て眉根が寄り、普通でも厳しい顔が更に凄味を増している。

「後で注意しておこう」

この一件についてはゴルスに任せておけば問題なさそうだ。

彼女の無防備な姿を観て頬がびくびくと揺れている。あれはにやけそうになるのを必死に抑えているのか。

孤児院で楽しそうに子供と遊ぶ姿も堪能したゴルスは、夜空を見上げると大きく息を吐いた。

「想像以上の素晴らしい女性だ」

「うん」

「彼女と恋仲になろうなどと、おこがましい考えだった」

えっ、諦めてしまうのか。愚直なぐらい真面目なゴルスなら可能性はありそうだが。結構お似合いの二人だと思う。

シャーリイを口説き落とすことが、かなり難しいのは覚悟して挑まないとダメだけど。

「俺は彼女の幸せを遠くから守ることにする。迷惑にならない程度に」

そう呟き俺が言い返す間もなくゴルスは立ち去ってしまった。

当人がそう決めたのなら、口を挟むべきじゃないのかな。少しだけもやっとした感情が残るが、自動販売機である俺にはこれ以上やれることはない。

あれから一週間ぐらいシャーリイの開店記念を手伝っていたのだが、今日がその最終日となる。

最後の客を送り出すと、いつもなら俺に感謝の言葉を告げて奥に引込むシャーリイが俺の隣から動こうとしない。

商品の補充でも頼みたいのかと横顔を眺めていたのだが、珍しくポーっと焦点のあつてない瞳を夜空に向けている。

「しゃりい」

「あつ、すみませんわ。少し考え込んでいました。最近、少し不思議なことがあります。お話しを聞いてもらえないでしょうか」

「うん うん」

シャーリイがこんな風に話しかけてくるなんて珍しいな。悩み事なのだろうか。

「以前から私の家の周りで不審者を見かけることが多いと、近所の方が教えてくださっていたのですよ。よく、干していた下着が盗まれることもありましたので警戒はしていたのですが、一度寝てしまつと恥ずかしいことに寝起きが悪いもので」

知っている。やっぱり、あの姿は素の状態だった。

下着泥棒つて異世界でも存在するのか。まあ靴フェチが存在するぐらいだからな、うん。

「話が逸れてしまいましたね。それが、最近下着が盗まれることもなくなり、不審者も見かけなくなつたので、ありがたいことなのですが少し不思議です」

あー、ゴルスが頑張ってくれたのか。あれから夜勤終わりに周辺を見回っているようだし。

うーん、これは俺が教えた方が良さのだろうか。でもゴルスは陰から見守ると断言していたから、余計なお世話になりそうだ。悩みどころだな。

「むっ、遅かつたか」

夜勤終わりで風呂に入ってから慌てて来たらしいゴルスが、体から湯気を立ち昇らせた状態で駆け寄ってきた。

「ハッコン、店は終わったか」

「ざんねん」

俺の側面にいるシャーリイがその位置から見えていないようで、
ゴルスは全く気付いていない。

「一杯飲んでから帰ろうと思ったのだが。ハツコン何か酒を貰えな
いだろうか」

「あら、では私もいただけますか。私も今日は殆ど飲んでいません
ので」

「シャーリイ……さん」

「いつもご利用ありがとうございます、ゴルスさん」

俺の陰から姿を現したシャーリイを目の当たりにして、ゴルスの
背筋がピンと伸びた。

二人にアルコールを取り出し、念動力で二人に手渡そうとしたが
ゴルスの距離が遠い。

「ちかくに」

念動力の有効範囲外にいるゴルスに、もっと近づいてと酒で
手招きするような動きをすると、関節が曲がらない状態で歩み寄っ
てきた。

緊張しすぎだよ、ゴルス。

期せずして俺を挟んで二人が寄り添う様な形になった。

「ゴルスさん、お疲れ様でした」

「シャーリイさんも、お疲れ様です」

二人がカクテルの缶を乾杯と軽く合わせ酒を口にする。
ぎこちない会話を交わしているだけなのだが二人とも楽しそうに
見える。

大人な二人の恋愛事情に経験の少ない俺がどうこうできるわけじ
やないけど、影ながら応援させてもらうよ。

「ハツコンさんも、お酒が飲めたら良かったのにい。そうしたら、
いつでも私が晩酌しますわ」

「ハツコン……」

あの、このタイミングで艶やかに微笑みながら、からかうのは勘
弁してもらえませんかでしょうか。酔っていますよね！

羨ましそうにこちらを見つめるゴルスの顔が凄く怖いのですがっ。

永遠の階層とは

清流の湖階層でのんびり怠惰な日々を過ごしていたわけじゃない。熊会長が次に挑む永遠の階層についての情報や事前の準備をするから、暫く待っていてくれと告げられていた。

「そつえば、永遠の階層ってどういうところなの？」

今後の話し合いをする為に深夜、ラツミスとヒュールミの住宅であるテントに呼ばれて真ん中に設置されている。

テントの中にはラツミス、ヒュールミ、シユイ、ピティーがいるのだが、メインのメンバーであるヘブイとミシユエルは男性なので深夜の会議には省かれたようだ……俺も男性なのだが、それ以前に自動販売機なので問題がないらしい。

「永遠の階層ってのは、このダンジョンで攻略中の最下層だ。犬岩山を突破してから十数年、数十年だったか、まあ結構な時間が経つてのに、未だ階層主を見つけないことすらできてねえ」

「団長は面倒な所だから手を出す気はねえ、って言っていたっすね」

「うん……あそこは……最後に回すって……」

ケリオイル団長が避けていた難所か。これは面倒なことになりそうだ。

「ずっと攻略できないのは敵が強いのかな」

「んや、逆だぜ、ラツミス。その階層は今のところ一度も敵と遭遇していない。敵もない安全極まりない階層だ」

ヒュールミを除いた全員が首を傾げている。俺も生身があれば同じ動作をしていた自信がある。どういうことだ？

「ヒュールミ、そのボケはちょっと難しいかな」

「ボケてねえよ。永遠の階層は敵と戦ったという情報が一切報告されていない。そこは、まず大きな空き地が存在する。そして、その先には底が見えない深い谷があり三本の道が伸びているそうだ」

深淵にかかる三本の道か。高所恐怖症の人にはきつそうだ。

「んでもって、その三本の道で攻略済みなのは右端の道だけだぜ。右の道はずっと真っ直ぐ伸びている、そう、ずっと真っ直ぐに伸びている……それだけだ」

「それだけ？」

ラツミスの問いは、この場のみんなが思った疑問だろう。

「おう、それだけだ。探索したハンターが一年間歩き続けた結果、一本道が永遠にも思える長さで続き、最終的には道が途切れて終わりだったそうだ。そこから永遠の階層と呼ばれるようになったらしいぜ」

一年間歩き続けるって相当の苦行だぞ。それも谷に架かった一本道ってことは風景も代わり映えしないだろうし、新種の拷問か何かじゃないか。

「想像しただけでうんざりするっすね」

「ピティーは……そんなの無理……」

ピティーは普通に耐えられそうな気がするのだが。シユイは確実に飢え死にするだろうな。

「一年間歩き続けたハンターは更に一年かけて戻ってきたわけだが、途中で魔物もいない、植物も生えていない。普通なら餓死確定な所を加護の力で乗り切ったそうさ。何でも、消費を抑える加護の所有者らしくてな」

そんな加護でもないと思うけども無理だよな。二年分の食料を確保して移動するのは不可能な筈だ。特殊な魔道具でもない限りはああ、そういうことか。なるほど。

「だから、ケリオイル団長はハツコンを欲しがっていたのかな」

「だろうな。もしそうだとしたら、ケリオイル団長はまだ永遠の階層を越えられていないってことだ。スルリムの転移の加護を利用して何とか進んでいるようだが、転移するのは一度行ったことがある場所にしか飛べねえらしい。んでもって、飛ぶには体力をかなり消耗しちまう」

「つまり、少しずつ更新しては転移で戻って食料を補充して、また限界まで進んで……の繰り返しっすか」

気の遠くなるような作業だな。そりゃ、俺のことを本気で狙ってくるわけだ。ある程度お金を入れてくれれば、一年や二年なら食料

を提供し続けることが可能だから。

そこら辺の事情はケリオイル団長たち話してくれなかったな。

「でも……永遠の階層……に挑むなら……ピティーたちも……長期戦は……覚悟しない……と……」

そうだよな。俺が最適だとは思うけど攻略に最低でも一年かかるぐらいは覚悟して挑まないといけない。

一年は長いな。清流の階層にも暫く戻ってこられないのか。

「何か上手くやる方法があればいいんだが……ちなみに、今は真ん中の道を重点的に攻略しているらしいんだが、何年もただひたすら進む苦行をやりたがるハンターがいなくて、殆ど進んでねえって話だけ」

誰だってやりたくないよな。右の道と違って他の道はもっと長いかもしれないのだから、挑む者が少ないのも納得だ。

ショートカットする方法や移動速度を上げる秘策でもあればいいけど。

だけど攻略は可能だと思う、食料の心配がないからだ。日用品も殆ど俺が提供できる。長期戦に必要なものがあるならコインロッカーで預かればいい。

問題は日数のみだ。これだけ長期間になると会長職の人たちを連れて行くわけにもいかない。シメライお爺さんとユミテお婆さんも論外か。こんな長旅に連れ回すのは無理がある。

挑むとすればいつものメンバーで行くしかない。

「誰かがやらないと、冥府の王の思う壺っすよね」

「みんなで長旅に出るぐらいの感覚で挑めばいいんじゃないか？」

「この面子なら一年なんてあっという間だぜ、きっと」

「そつだよな。うちはハツコンがいたら平気だから！」

「ピティーも……大丈夫……だよ」

勢い良く手を挙げるラツミスに続いて、ピティーも小さくだが手を挙げている。

「オレも行くぜ。敵が来ねえなら足手まといにはなんねえだろ」

「ハツコンがいるなら食事の心配いらないつすよね。だから、問題ないつす！」

女性陣は四人とも永遠の迷宮に挑むようだ。

残りはヘブイとミシユエルの二人か。長期間男女が共に共同生活をするというのは若干の不安はあるが……ヘブイが女性に手を出す場面が想像できない。

ミシユエルの場合はまずコミュ障の克服からだ。だが気を付けなといいけない点もある。言動が稀に俺の思考を凌駕するからな。特に俺が絡むと。

明日になったら二人とも相談だな。

「もちろん、私も同行させていただきます。師匠の行くところならば地の果てでも構いません！」

予想通りの答えだ。ミシユエルは何故か俺を崇拜しているから、

こうなるだろうとは思っていたよ。

「私も共に参りますよ。長旅で自分を見つめ直すのも乙なものです」

へブイは人生の目的を果たしてから、以前より穏やかで包容力が増した気がする。自然体で同行を申し出てくれた。

あの一件以来、人間として一回り大きくなったような気さえする。

「長旅では靴もくたびれてしまうのでしょね……予備を大量に買い込まなければなりません。もちろん、履き潰した靴の処分は私に任せてください」

前言撤回、気のせいだったようだ。

これで誰一人欠けることなく永遠の階層に挑めるのか。追加の人員はそれほど当てにしていけないので、これだけの人数がいれば大丈夫だと思いたい。

男女比率が偏り過ぎているので、もう一人か二人男性がいるとバランスが取れそうだが、俺の知り合いで有力な男性が思い浮かばない。

カリオスとゴルスの特番コンビは清流の湖の守りの要だし、何よりの二人を清流の湖から引き離すのは気が引ける。カリオスは言うまでもないが、ゴルスも前回のことがあるので無理だな。

闇の会長は……失礼だとは思いますが、毎日相手にすると疲れそうだし、最低でも一年間あのトークに付き合うのは、ちょっとご遠慮させていただきます。

熊会長は長期間、清流の湖階層を離れるわけにはいかないよな。となると、やはりこのメンバーで確定か。

やはりネットは距離と移動手段となる。ウナススに荷台を引いて

もらって進むしかないのだろうか。キコユと一緒にだったボタンなら、かなりの時間短縮が期待できるが普通のウナスだとこれだけの人数では、人が駆け足で進む程度の速さしか期待できない。

移動方法と移動時間の短縮、これが最大のポイントになりそうだがポイントといえば驚くほどポイントが溜まっている。

中將軍を一人で撃退したことで100万ポイント以上を得ることができた。既に100万ポイントを溜めていたので、合わせて200万ポイントを超えている。

正確な数字を出すなら、現在237万ポイントだ。

自動販売機ランク3の300万ポイントまでもう少しな気がしてくるが、63万ポイントは遠い。

階層主をもう一体倒せば届くかもしれないが、そう簡単に倒せる相手ではないから階層主をやれているわけで。ランク3への夢は地道にポイントを稼いでいくしか手はない。

問題はあるが、俺たちが永遠の階層の攻略に動けば冥府の王は焦るだろう。彼らよりもこちらの方が効率よく攻略ができる。

何かしらの妨害工作をされる可能性はあるが、このメンバーなら大抵の敵は撃退できる可能性が高い。

先手を打たれる前に行動した方が得策かもしれない。

騒乱再び

熊会長に朝から呼び出され、主要メンバー全員がハンター協会の会議室に集まっていた。

今後の対策と既に得ている永遠の階層の説明を聞いている最中、血相を変えた職員が一人、室内に飛び込んできた。

「会長、会議中申し訳ありません！ 緊急にお伝えしたいことがっ」

「何だ、何があったのだ」

職員を咎めることなく促すと、胸元に手を当て大きく息を吸った。

「閉じ込めていた小將軍カヨーリングスが脱獄しました！」

おいおい、五指將軍の一人が逃げたのか。

あの時はフルメンバーだったからあっさり倒せたが、少人数で挑んでいたら勝てたかどうか。そんな危険人物の脱獄を許したとなると担当者はただじゃすまないぞ。

「何とっ！ 見張りを担当していた衛兵たちはどうなった！」

「全員が眠らされた状態で命に別状はありません」

「そうか……詳しい説明を頼む」

逃げた相手のことより見張りの心配を真っ先にするのが熊会長の美点だよな。

集落を仕切る者としては、そんなことより逃げた敵のことを考えるべきだと言う人もいるだろうけど、俺はそんな熊会長だから住民たちに信頼され親しまれているのだと思う。

「今朝、人員の交代の際に眠りこけている見張りを発見、慌てて牢屋に向かうと小將軍の姿は消えもぬけの殻だったようです。特殊な合金で作られた格子は、鋭利な刃物で切断された跡があったとの報告を受けています」

「加護を防ぐ特殊な牢屋の格子を切り落とすか……純粹な武芸の腕のみでやったということになる。ユミテ、それは可能なのだろうか」
刀の使い手として並ぶ者がいないと言われているユミテお婆さんに視線が集中する。

「ええ、可能だと思いますよ。同じことをやれますからねえ」

「流石婆さんだ、おっかないのう」

茶化すお爺さんに見えるように仕込み杖の中から刃を覗かせると、一瞬で姿勢を正し黙り込んだ。

「どの程度の腕が必要だと思う」

「そうですねえ、切り口を見れば大体の腕はわかりますよ」

「すまぬが、切断された格子を持ってきてくれ」

「わかりました、直ちに！」

熊会長の指示に従い職員が踵を返し、足早に退室していった。問題が追加されたことに頭を抱えそうな熊会長が気を取り直して、会議を続けようとする。

「会長、やべえぞ！」

今度はカリオスが息を切らして室内に乱入してきた。

「小将軍が逃げ出したことは連絡を受けている」

「えっ、そうなのか！？　って、こっちは別の要件だ！」

おいおい、ここで更に問題事が追加されるというのか。

カリオスがここまで取り乱しているのは珍しい……この先の展開を知りたくない。

「正直、勘弁してほしいが聞かぬわけにもいくまい。何があった」

「遠征に出ていたハンターが慌てて帰ってきたんだが、そいつがこの先に魔物の大群を発見して、それが集落に向かって来ているそうなんだ！」

会議室の面々がざわついている。この展開前にもあった。

冥府の王により異変が起こり始めた時、清流の湖階層は魔物の襲撃を受け、壊滅状態に陥っている。それから、何とか魔物を追いだし異変を解決してここまで復興したというのに……また同じことの繰り返しなのか。

「どの程度まで魔物の群れは近づいている。数は」

「肉眼ではまだ発見できてねえ。数はそいつが言うには五百以上は確実にいるそうだ」

五百ときたか。この集落には犬岩山階層の住民が雪崩れ込んでいたので、総人口は今五百を超えていると思う。ただ、戦える人はどれだけいるのか。

「戦えない住民たちに避難させるしかあるまい。ここに住民を集め、女子供優先で協会内に匿うようにしてくれ。衛兵、ハンターたちは門の前に集合するように連絡を頼む」

「わかりました！」

会議室でメモを取っていた職員がカリオスと一緒に跳び出していた。

「皆、会議はここまでだ。各自、人手の足りない部署の手伝いを頼みたい」

全員が黙って頷き、俺もラツミスに担がれて協会の外へと出ていく。

既に話が広まっているようで協会目指して駆けてくる、住民の姿が目に入る。

「うちらはどうしよう」

「もんこ」

「うん、わかった！」

先ずは門に向かって、敵の確認をしたい。逃げ出した小将軍力コ
ーリングスも気になるが、この状況だ追手に人員を割く余裕はない
よな。

素直に従ってくれたラツミスに運ばれて門に辿り着くと、壁を登
って上に設置してもらおう。

そこで備え付けの双眼鏡にフォルムチェンジをする。もつとも拡
大率の高い双眼鏡になり遠方を注視すると確かに蠢く無数の群れが
見えた。

大地を埋め尽くす魔物の群れ、これは五百じゃ済まないぞ。四桁
は確実にいる。おまけに王蛙人魔や双蛇魔の姿もある……階層主の
八足鱈はいないか。

これは冥府の王が仕掛けてきたと考えて間違いないだろう。仲の
悪い三種の魔物たちが争いもせず、こちらに向かって来ている時
点で確定したも同然だ。

他の魔物で面倒なのは空にいるのは羽の生えた魚か。あれはハン
ター協会で籠城戦の時に厄介な敵だった。

魔物の大群相手に地球の戦国時代の戦略を用いて圧勝する話を、
漫画や小説で読んだことがあるが正直無理のある話だよな。

まず、ここは魔法や特殊能力が存在する異世界なので、そもそも
の戦略が成り立たない場合がある。更に相手は魔物なので思惑通り
進むとは限らない。

更に鳳翼の陣やら釣り野伏せといった戦法もある程度の戦力差な
ら埋められるかもしれないが、一桁違う数の相手に勝つのは夢を見
過ぎだろう。

ここは地球の知識は捨てて、この世界ならではの戦略を考えるべ
きだよな。ファンタジーな異世界だからこそ可能な戦い方を。

まあ、それを決めるのも自動販売機の役目じゃなくて会長たちな
のだが。

「うわっ、前より酷い数だよな」

「こりゃ、ひでえな。ただ、こっち側からしか現れていないのが、マシか」

集落の四方を取り囲むのではなく、門のある側からしか敵は進軍してきていない。門を死守できれば何とか凌げる可能性も出てきた。敵も今のところ、この階層に存在する魔物だけのようだ。冥府の王がある程度、ダンジョン内を操作できるとはいえ、他階層の敵を呼び出すのは無理らしい。

下に降りてヒュールミが門を守っていたゴルスに情報を伝えると、門を人がギリギリ一人だけ通れるだけの隙間を残して閉じた。

まだ外で狩りをしているハンターがいることを考慮しての行動だ。

続々と門前の広場にハンターたちが集まっている。元々、清流の湖階層に居たハンターもいれば、他の階層から流れてきたハンターも多い。

下の階層になれば敵の強さが上がる為、ハンターも実力者が増えていく。闇の森林階層と犬岩山階層のハンターはかなり期待できる。

「遠距離攻撃が可能な者は壁の上に移動してくれ！ 千里眼や情報収集に適した加護持ちはこっちに！」

ゴルスが大声を張り上げて指示を出している。こんな状況なのでいつもの物静かなキャラを貫いている場合じゃないのだろう。

前回破壊されてから壁は改良を施していて、厚みも高さも増したので上に人が乗れるようになっていた。

シユイも壁の上に陣取っているな。あれっ、隣にいるのは園長先生か。弓の腕ならこの階層どころかダンジョン内で一番との噂がある人なので、そこに居てくれるだけでも頼もしい限りだ。

「シユイお姉ちゃんも園長先生も、頑張ってねー！」

壁の近くまで来ていた孤児院の子供たちが、大きく手を振って応援している。

「はい、頑張りますよ。みんなは大人の言うことを聞いて、迷惑かけないようにしてくださいね」

「みんな、良い子にしていたら、ハッコンが後でお菓子くれるっすよ」

「いらっしゃいませ」

そんな話は初耳だが、ウィンクをするシユイに話を合わせておいた。

大人たちに手を引かれて子供たちがハンター協会へ向かっていく。この子たちの為にもここは死守しないと。

まだまだ距離があるので開戦までには時間があるが、その間にやれることはやっておくか。

「らっ いす」

「なーに、ハッコン」

「くあ ろう」

そう発言して飲み物と食料を 念動力 で浮かせる。

「これをみんなに配るんだね」

それだけ理解してくれたラツミスと一緒に、壁の上で武器の手入れをしているハンターたちに手渡ししていく。

腹が減っては戦ができぬって言うからね、食料を渡しておいて損はないだろう。

それから、災害用簡易トイレを幾つか設置して、一度ハンター協会に戻って住民たちの食料と飲み物を大量に提供した。

これだけ住民がいてもこの食料の数なら二日はいけるだろう。

「すまぬな、ハツコン。お主がいてくれるだけで、随分と楽になった」

熊会長が腰を九十度折り曲げて深々と頭を下げてくれた。

「ハツコン、ありがとうな！」

「マジで助かるぜ。今度大量に購入させてもらうから！」

「このタオルもありがとうね」

住民も口を揃えて感謝の言葉を投げかけてくれる。

「こまったら」

「おたがいさ」

「まだよ」

俺だつて随分お世話になっているのだから、こついつ時ぐらいは恩返しさせてもらわないと。

「そう言ってくれると助かる。消費した金銭は後程支払わせてもら

うので安心して欲しい」

これを断つても熊会長は律儀に支払おうとするのはわかりきっているので、「いらっしやいませ」と返しておいた。

再び門周辺に戻ると、黒服の男女とスオリが大声を張り上げて大量の武器防具を配っていた。

「矢や投げナイフ等の飛び道具の補充はこちらでお願いします！」

「武器防具の修理も承っております！」

「非常時ですので全て無料で提供しておりますわ。遠慮なくご使用くださいませ」

無料で配るとは太っ腹だな。

俺たちが近づくとスオリがこっちに駆け寄ってきた。

「お二人ともご苦労様ですわ」

「スオリちゃんも頑張っているね」

「しかし、無料提供とは大盤振る舞いじゃねえか」

「当然ですわ。父上が良く申しておりました、損して得取れと。我が商会の名を売るには絶好の機会。前回の騒動後に武器防具職人に大量の注文をして、備えていた甲斐があったというものですわ」

実はスオリって商才があるのだろうか。

今回の一件で知名度が上がり好印象を与えたのは確かだ。これから利用する際にはスオリの店の品を買おうと思ってしまうのが人情

だろう。

宣伝として考えるなら彼女の行動は正しく理にかなっている。だけど、それが本心かどうかは怪しい。

「そう言っているけど、実は集落の人のことが心配で備えていただけだよな」

「ヒュールミもそう思ったんだね。うちもそう思う」

「いらっしやいませ」

俺も同意するよ。理屈を並べていたけど結局はスオリの優しさだと思う。素直になれないところが、可愛らしいところでもあるけどね。

前回と違って準備は万端に近い。冥府の王がどんな妨害を仕掛けてこようと、集落の仲間たちと乗り越えてみせる。

選抜隊（前書き）

10月1日に2巻発売となりました。書店でお求めいただけると、続巻へと繋がりますのでよろしくお願ひします。

選抜隊

「これってやっぱり冥府の王がちょっかい掛けてきたんだよね」

「そうだろうな。オレたちが永遠の階層に向かうと色々面倒なんだろうよ」

集落を囲む壁の上で徐々に姿が見え始めた魔物の群れを眺め、ラツミスとヒュールミが雑談をしている。

何度も修羅場を潜り抜けてきた経験があるので、二人とも無駄に力入り過ぎていることもなく自然体に近い。地平線を埋め尽くしそうな魔物の群れに体がすくみ、怯えているハンターも少なくないというのに。

このまま勢いで攻めてくるものだと思い込んでいたのだが、魔物たちはある程度まで壁に近寄ると、そこから動かなくなってしまうた。

「一キロ以上まだ距離があるよな」

双眼鏡にフォルムチェンジをした俺を覗き込み、ヒュールミが目測で距離を調べている。

今は昼過ぎだから夜を狙っているのか。確か蛙人魔も双蛇魔も鰐人魔も夜行性だという話だった。

全員が警戒態勢を維持したまま夜を迎えたのだが、相手が動く気配もなくそこに居座っているだけで状況に変化がないまま日が昇る。

「んー、動かなかったね」

「時間稼ぎか兵力を蓄えて一気に滅ぼすつもりか、両方ってこともあり得るが……ふああああ、ねみい」

一晩を明かしたヒュールミは眠たそうに目元を擦っている。
見張りに立っていた面々も一斉に交代するようで、ラツミスたちも一度テントに戻って体を休めることになった。

「ハツコンも無理しないでね」

「わりいな、先に休ませてもらうぜ」

「うん」

二人と入れ替わりで俺の隣にやってきたのはピティーとミシユエルだった。

両方とも仮眠を取っていたようなので体調は万全のようだ。

「夜まで……一緒だね……」

「ハツコン師匠、お疲れの様でしたら、いつでもお休みください」

「ありがとう」

二人に朝食のセットを渡してから、今度はピティーに持ち上げてもらい見張りを代わったハンターたちに飲食料品を配っていく。

ミシユエルは護衛らしく俺と同行してくれている。一人になると自分が不安になるから付いてきているのだろうな、とは思ったが口には出さないでおいた。

壁の上のハンターたち全員に配り終わると、壁から降りて広場で待機中のハンターたちの元に向かおうかと思ったのだが、露天商た

ちが商売を始めていたので自重しておく。

ハンター協会に避難した人々も元氣らしく、子供たちは協会の周りで元氣良くはしゃいでいるようだ。

敵の襲撃も初めてではないとはいえ、ここの住民は適応能力が高すぎるよな。

そもそも、ダンジョンの中に住むことは博打要素が強く命の危険性が高い。なので、ここに住む人の殆どが元から覚悟を決めている人が大半らしい。

前回の一件でも取り乱している人が殆どいなかったし、あれだけの死者を出しても異変が解決した次の日から遅しく働いていた。見習わないといけないところだ。

「敵はいつ動き出すのでしょうか」

「このまま……何も……ないのかな……」

戦力を蓄えられても困るが、一気に攻めてこられるとこちらの被害も覚悟しなければならぬ。壁の厚さや高さが以前とは違い堅硬な守りとなり、一番の問題点である食料の心配も無用なので籠城戦が妥当だということはわかる。

今の内に相手を削っておいた方がいいような気もするが、中途半端に手を出して総攻撃に移られても面倒になる。

団体戦の駆け引きは会長たちが考えることであり、俺はその指示に従うだけなのだが、あの軍勢を目の前にして何も考えずに落ち着いていられるほど肝っ玉は大きくない。

俺の心配をよそに今日も動きがなく、それから二日が経過した。

日に日に増え続ける魔物の軍勢に焦りを覚えた会長たちは作戦会議を開くこととなり、俺も参加するようので会議室に運ばれて全員に飲み物を配っている。

「さて、皆集まったようだな。魔物に対する今後の方針を定めよう
と思っっている。このまま籠城を続けるか打って出るか、それとも別
の策か、忌憚のない意見を聞かせてほしい」

熊会長がそう切り出すと、すつと手を挙げたのは灼熱の会長だっ
た。

「んじゃ、遠慮なく言わせてもらっぜ。さっさと攻めるべきじゃね
えか。このまま放っておいても敵が増える一方で状況は悪化するだ
けだろ」

その意見に頷く者が多いな。俺も敵の増加を危惧していたので、
灼熱の会長寄りの考えかもしれない。

「だが、打って出るのであれば多くの犠牲を覚悟しなければならな
い」

始まりの会長が続いて意見を口にする。気持ち的には灼熱の会長
と同じなのだが、その事も考慮していた人が多いようで、どちらの
意見も理解した上で踏み切れないようだ。

「えと、少数精鋭で敵の戦力を削るってのはどうなのかな」

今度はラツミスの発言か。

「オレもラツミスと同じ意見だ。ただし、遠距離からの強力な火力
で相手の戦力を削るのが最適だと思うぜ」

ヒュールミが助け舟を出して、ラツミスの意見の補足説明をして
いる。

ただ手をこまねいて状況が悪化するよりも、その方が俺もいいと思う。

強力な遠距離からの火力となると、自然に全員の視線が一点に集まる。注目の人物は懐から扇子を取り出して、パタパタと風を自分に送っている。

「ふむ、ワシの出番か。広範囲殲滅魔法が必要であるなら、幾らでも撃ち込もうではないか」

「お爺さん、張り切り過ぎないでくださいよ」

ここで頼りになるのはシメライお爺さんの魔法だよな、やはり。仲間たちの腕が立つとはいえ数の暴力は馬鹿にできない。近距離攻撃は控えるべきだろう。

「ハッコンと……ピティーの……共同作業で……空から……攻撃する……のは……」

おずおずと手を挙げ、小声だがハッキリと意見を口にした。その姿にラツミスが頬を膨らませているが、見なかったことにしよう。

「その攻撃方法は魅力的だが、空を飛ぶ魔物がいるので止めておいた方が良さそう」

熊会長の指摘はもっともだ。確かに空飛ぶ魚が厄介だよな。結界で囲っているので敵の攻撃を防ぐ自信はあるが、魔物の攻撃でまともに飛行することが困難になる。

「魔法の攻撃範囲まで近づき撃ち込んでもらうのが妥当か。護衛を

何人が同行させて、荷車も用意させよう。敵が攻撃を仕掛けて来たら迷わず撤退するように」

その意見に反論はないようで、護衛のメンバーを決めると会議は解散となった。

昼までには準備が整うらしいので、選考メンバーは門の前に集合して荷車が到着するのを待っている。

シメライお爺さんに同行するメンバーを選ぶ際に真っ先に決まったのが、シユイと園長先生だった。敵が押し寄せてきた際に相手を足止めするにも遠距離攻撃が必須だと考えたからだ。

更にミシユエルとユミテお婆さんが選ばれた理由は、単純に戦闘力の高さを期待しての人事。近距離戦で二人に敵う者はいないとの判断だった。

ピティーも選ばれたのは防衛能力の高さもあるが、逃げる際に荷車の重さを減らす役割がメインらしい。

ちなみに灼熱の会長も選ばれたのだが、火力と連れて行かないとうるさいからというのが理由だ。

他に二人追加で熊会長とラツミスも選ばれたのだが、役割は戦力ではなく荷台を引っ張る係として選ばれている。

そして、最後のメンバーは俺となった。万が一の事態に陥っても結界で仲間を守ることが可能で、いざとなれば自力で浮いて戻ってこられるとアピールしたら採用してもらった。

今回はそれだけじゃなく、実は一つ考えがあって参加を希望したのだが、それは現場に行ってから試してみようと思っている。上手いけば有力な攻撃方法となってくれる……といいな。

念の為に大量の飲食物品を大量に取り出して広場に並べて置いた。これでもし、俺が帰らぬ人ならぬ自動販売機になっても一週間は軽く耐えられる。

「いいか、危険を感じたら速攻で戻って来い。ラツミス無茶すんなよ」

「うん、わかっているよ、ヒュールミ。危なくなったら急いで逃げ帰るから！」

ラツミスの身を案じて、さっきからずっとヒュールミが提案と忠告を繰り返していた。

本当はついに行きたいようだけど、自分が戦場では役に立たないことを理解しているので、ぐっと堪えているのが強く握りしめた拳から伝わってくる。

「まかせて」

俺がハッキリと言い切ると、ヒュールミが驚いて俺を見つめた後、ニヤリと満足そうに笑い「頼んだぜ」と拳を俺の体に軽く当てた。

荷車を熊会長が引っ張ってきてくれたので俺たちは乗り込む。先頭は熊会長で後ろからラツミスが押す並びで行くようだ。

門が開け放たれ俺たちは集落の外へと進んで行く。

「無理そうだったら、攻撃しないで戻って来いよ！」

「無事を祈る」

カリオスとゴルス、それに壁の上で手を振る多くのハンターに見送られ俺たちは集落を後にした。

出来るだけ広範囲の敵を巻き込むように魔法を放つには、最低五百メートル以内まで近づかなければならない。その間に敵が攻撃を仕掛けてこないのであれば何の問題もないが、こればかりは臨機応変に対応しないとな。

仲間の命優先なので無理は極力避けたいが、その駆け引きは熊
会長に一任しているので大丈夫だろう。

火力と戦略（前書き）

新作始めました。よろしければお読みください。

暗殺思考の狂戦士^{ベルセルク}
http://ncode.syosetu.com/n8588dn/

火力と戦略

荷台を前後から挟むようにして熊会長が引つ張り、ラツミスが押す。

他のメンバーは荷台の上に陣取り敵陣を眺めているのだが、みんな焦ることもなく平常心どころか、ピクニックに行くのかと勘違いしそつなぐらい落ち着いている。

「お爺さん、そろそろ射程範囲じゃないですか」

「そつじゃのう。よつこらせつ」

シメライお爺さんが腰を上げると、懐から天高く伸びる竜巻が描かれた扇子を取り出した。

「会長、ラツミスそこで止まってくれんか」

「わかった」

「はい」

荷台が急停車したのだが立ち上がったシメライお爺さんは転ぶこともなく、平然と敵を見据え荷台の前へと移動する。

「あつ、荷台後ろ向きにしておいた方がいいよね。攻撃を仕掛けたら直ぐに逃げられるように」

「それもそつだな。魔法は少し待ってもらえるか」

百八十度荷台を回転させて、今度は荷台の後ろへとシメライお爺さんが移動する。

魔物たちはこっちの存在に気づいているようだが仕掛けてくることはない。指揮官が存在するだろうから指示待ちのようだ。

だが、前回学んだ経験を思い出すと、操られている魔物たちは危害を加えられると連鎖的に反撃をしてきた。だから、魔法が撃ち込まれたら一気に襲い掛かってくる可能性が高い。

「ホクシー、シュイ、迎撃の準備を頼む」

「お任せください」

「任せて欲しいっす！」

弓を構え矢も大量に確保している。二人の実力なら蛙人魔程度なら一発で仕留めてくれる。

仲間に頼り切っていないで、俺も敵の反撃に備えておこうか。

「らっ いす」

「なーに、ハッコン」

「さかさ に」

「して」

今回はちゃんと問題なく伝わった筈なのに、ラツミスが首を傾げて眉根を寄せてじっと俺を見つめている。

「えっ、聞き間違いかな。もう一回いい？」

「さかさにし」
「てからだ」

今度は周りで聞き耳を立てていた仲間たちも首を傾げている。
あれ、発言間違えてないよな。

「体を逆さにしてって聞こえたけど、逆さって上下逆さま？」

「うん うん」

「えと、本当にひっくり返すけど、いいんだよね」

「おねがい」

納得がいかない感じのラツミスだったが、俺を持ち上げると上下逆さにして荷台の上に置いてくれた。

おー、視界が逆さまに映っている。

「らっ いす」

「よこに」

「う、うん」

俺の意図が読めないラツミスが納得のいかない表情で荷台の側面に移動する。

よっし、これで俺の準備も万端だ。

「よつわからんが、もうええよつじゃな。では、魔法をぶちかますとするか」

もう一つ同じ柄の扇子を取り出したシメライお爺さんが両腕を大きく広げ、魔物たちを扇ぐように腕を動かした。

荷台のすぐ近くに巨大な二本の竜巻が現れると、大地を撒き上げつつ魔物の軍勢に迫っていく。

本当にお爺さんの魔法の威力はとんでもないな。あの竜巻一本だけでも民家なんて軽く解体できるだけの威力を備えていそうだ。

見惚れている場合じゃなかった、あれが魔物に到達する前にこっちも行動に移そう。

逆さになった状態のまま俺は足下に基礎用のコンクリート板を出した。今は逆さになっているので、コンクリートの板は仲間たちから見て上に載せられているように見える訳だが。

「ぽいっして」

隣で竜巻を見入っていたラツミスに話しかけると、慌ててこっちを見てから瞬時に何をして欲しいのかを察してくれた。

「ああっ、だから逆さになったんだね！ うん、わかったよ！」

コンクリート板を掴んだラツミスは軽々と片手で持ち上げると、大きく振りかぶって放り投げた。

敵があれだけ密集していれば不器用な彼女でも当たるようで、風を破壊する音を撒き散らしながら飛来するコンクリート板が魔物の群れへと着弾する。

彼女の狙った場所ではなかったようだが、剛腕から繰り出されたコンクリート板の一投は凶悪すぎる破壊力を秘めていた。軌道上の敵を粉碎しながら地面に着弾後、地面ごと敵を空高く巻き上げている。

「見た、見た、ハッコン！」

「うん また」

自慢げに胸を張るラツミスに追加のコンクリート板を提供する。
気を良くしたのか楽しそうに魔物の群れへ次々とコンクリートを
投擲していく。

「ピティーも……する……」

対抗心が湧いたのかピティーもコンクリート板を掴み 重さ操作
で軽くしてから持ち上げて投げたのだが、そもそもの力が弱い
ので数メートル先で地面へと落下していた。

そんなことをしている間に竜巻が敵陣を縦断して、何十もの敵が
空へと巻き上げられ地面へと叩きつけられていく。

コンクリートと竜巻、そして矢の雨が降り注いだ後の敵陣は無残
なもので、一方的な暴力により百以上の敵が散ったようだ。

ここまでされたら敵も黙っている訳もなく、敵が一斉に猛進して
きている。

「一定の距離を保ちながら撤退する！ ラツミスは荷台に乗り、ハ
ッコンと協力してそれを投げ続けてほしい。ピティーは荷台を軽く、
シユイ、ホクシーは片っ端から射ってくれるか」

「はい」「了解」「わかりましたわ」

熊会長の指示に従いラツミスが荷台に飛び乗ると同時に荷台が急
発進した。

ピティーの加護の力で荷台の重さが激減して、一人で引っ張って
いるというのに二人で押していた時より速いぐらいだ。

コンクリート板と矢が追手を容赦なく吹き飛ばし貫く。

「燃えろ、燃えろ！」

腕だけを炎と化した灼熱の会長が突き出した手のひらから火の球が射出され、魔物たちをこんがり焼き上げていく。

向こうも槍を投げつけてきているのだが殆どが届かず、届いたところでミシュエルとユミテお婆さんに切り落とされるだけなので、一発も命中することがない。

敵は俺たちしか見えてないようで、がむしゃらに追いかけてきている。

「これならば、第二案で行くぞ」

「はいっ！」

熊会長の叫ぶ声に全員が大きく頷いた。

相手の動きに応じて幾つかの策を考えていたのだが、これは一番都合のいい方向に動いた場合の作戦だった。

真っ直ぐ門へ向かうのではなく、門扉が面している壁の右端へとルートを変える。

追いかけている魔物の群れが先端を歪に伸ばした二等辺三角形のような並びへと変わっていく。

そのまま、こちらに惹きつけながら迎撃を続け大きく迂回しながら壁際に到達すると、今度は壁に沿って左へと走り続ける。

敵も壁を左手にした状態で俺たちを追い続けているのだが、そんな敵の頭上から槍と矢の豪雨が叩きつけられ、魔物たちが針の代わりに武器の柄を生やしたハリネズミのような姿へと変貌していく。

一方的な蹂躪劇に普通の状態であれば撤退するか、俺たちの後を

追うことを止めて集落を襲うかに切り替えるところだが、髑髏の指輪による洗脳状態がどういったものなのかは既に学習済みだ。

単純な命令しか通じない魔物たちは今、俺たちを襲うことしか考えられなくなっている。

指揮官は襲うか撤退するかのも二択しか命令ができず、尚且つ俺たちの遠距離攻撃に警戒したのか、魔物たちに全てを任せてあの場から動いていないようだ。

その証拠に王蛙人魔と百体ぐらいの魔物だけが後を追ってきていない。あの中心にでも指揮官がいるのだろう。

命令が届かないので魔物の暴走を止められず、むざむざと魔物を殺される羽目になっている。

壁の端から端まで移動する際に追ってきた魔物の三割近くが屍を晒したが、まだ終わっていないぞ。

そこから更にUターンして再び壁の前を走る、それを繰り返していく。あれ程いた魔物たちが見る見るうちに数を減らし、三往復した時には数える程となり門から飛び出してきたハンターたちによって殲滅させられた。

「うおおおおっ！俺たちの勝利だあああっ！」

灼熱の会長が叫ぶように勝ちどきを上げると、ハンターたちがそれに同調して拳や武器を掲げ、雄たけびを上げている。

圧倒的な数の差を物ともせずには圧倒したのだ、その興奮具合は最高潮に達している。まだ、敵の指揮官と王蛙人魔が残っているが、それを口にして気分を害することはないよな。

戦力が無傷で残っている今なら、問題なく王蛙人魔と指揮官を倒すことが可能だろう。

歓声を上げ喜び合う人たちをバックに、遠くで動きのない魔物の残りを見つめていた。

切り札

沸き立つ民衆を前にして熊会長が天に向かって吠える。

大気を揺るがす咆哮に騒いでいた人々の視線が熊会長に集中した。

「盛り上がっているところ悪いのだが、まだ終わっておらぬ。これから、残る魔物の討伐に向かう。半数はこの場に残り続いて防衛を頼みたい。共に残りの魔物を討伐する意思がある者は門前に集まって欲しい」

それだけ伝えると熊会長と俺たちは門から集落の外に出る。

ハンターたちも集まり始めているな。これなら、直ぐにでも規定人数に達しそうだ。

「会長、俺たちは門番を継続しておくぜ」

「裏があるかもしれない」

カリオスとゴルスのコンビが残ってくれるなら、後顧の憂いが無くなるので安心して掃討戦に参加できる。

元から清流の湖階層を拠点にしていたハンターたちは防衛に回るようだ。闇の森林階層と犬岩山階層からやってきたハンターの大半が参加を希望しているのか。

腕利きが集まっているだけあって好戦的なのだろう。

「相手の戦力が削られ、動揺している今が好機だと考えている。他のハンターは始まりの会長と闇の会長が指揮を担当してくれるそうだ。我々だけ先行するでしょう」

このタイミングを逃すべきじゃないと判断したのか。
さっきのメンバーに加えてヘブイとヒュールミと大食い団の四人も手伝ってくれるとのことだ。この階層の敵なら問題ないので頼りにさせてもらおう。

一足先に出発すると大食い団は自分の足で並走している。

俺は双眼鏡になって遠方の敵を観察しているのだが、鰐人魔が数十体、王蛙人魔とその周りに蛙人魔が十体程度。双蛇魔の五メートル級が二体という編成だ。

「鰐人魔が多めなのが厄介だが、この面子だと負ける気がしねえな」

ヒュールミが仲間の顔を見回しながら苦笑いを浮かべた。

鰐人魔が蛙人魔より強力とはいえ、楽々と一刀両断するような人物が揃っているからな。ラツミスだって以前戦った時とは比べ物にならないぐらい腕が上がっている。

王蛙人魔だって今なら逃走を選択する必要もないだろう。

「ボクたちは蛙人魔担当するね」

「後で焼いて食べようよ」

荷台と並走するミケネがそう言つと、ペルが舌なめずりをして同意した。

大食い団の身体能力なら蛙人魔に後れを取ることはないので、安心して任せられるよ。

「王蛙人魔は体が燃えて、打撃を吸収すると聞いたことがあります。私が担当しても問題ないでしょうか、ハツコン師匠」

「うん」

ミシユエルの実力ならタイマンでも勝てそうだが、もっと余裕を持って戦いたいな。

「おつ、燃える蛙だったか！ ならば、俺も参戦させてもらっぜえええええっ！」

荷台の縁に足を乗せ雄叫びを上げる、今日も暑苦しい灼熱の会長が手伝ってくれるなら蛙軍団の戦力としては充分か。

「では、あの蛇二匹は私たちでなんとかしましょうかねえ、お爺さん」

「少々物足りんが、まあええじゃろう」

「先輩たちと戦うと昔を思い出しますね」

「ということだ。双蛇魔は我ら四人に任せて欲しい」

歴戦のハンターであるシメライお爺さんとユミテお婆さんの老夫婦コンビに加え、園長先生と熊会長が担当してくれるなら何の問題もない。

元チームメイトだから連携にも不安がないので大船に乗ったつもりで見学できそうだ。

「では、鰐人魔は私たちで対応しましょうか。皆さん靴を傷つけられないようにしてください」

「最低な指示っすね」

「ハツコンは……傷つけさせない……」

元患者の奇行団の三名の実力は疑う余地がない。少し敵が多いがそこは

「うちらも鰐人魔担当だね！」

「いらっしやませ」

俺たちが加われば問題ない。それに後方から追いかけてきているハンターの一団もいる。

その場を凌げばいいだけなら、予想外のアクシデントに遭遇しない限り余裕だろう。

魔物の群れは距離が詰まっているというのに動きがない。指揮官らしき人物も見当たらないが、もしかして一人だけ逃げ去ったのだろうか。

俺たちは荷台から飛び降り、各自が担当する魔物たちへと向かっていく。

「オレはここで待機しておくぜ。無茶すんなよ！」

ヒュールミの声援を背に受け、みんなが拳を掲げる。

そこでようやく相手にも動きがあった。俺たちを敵とみなしたように狙い通り担当メンバーへと押し寄せてくる。

鰐人魔が駆け寄ってくるのだが次々と射抜かれて地面へと倒れ伏していく。

皮の分厚さで防御力に定評のある魔物なのだが、目や関節部分といった比較的柔らかい場所を的確に射抜いている。

「ガンガン射るっすよ！」

遠距離では分が悪いことを理解したのか、急所を守るように体を丸めながら突進してくるのだが、中距離まで近づくと今度は棘の生えた鉄球の餌食となる。

ヘブイの振るう鎖を伸ばした鉄球の威力は 怪力 の効果もあり、鱈人魔の防御力を容易く打ち抜き砕いていく。

「鱈革で靴を作るのも良いかもしれませんがね」

二人だけでも敵を殲滅しそうな勢いだが、あの数なので流石に無理があるようで敵の接近を許している。

ヘブイは伸ばした鎖を元に戻し、本来のモーニングスターとして武器を振るい鱈の頭を粉碎している。シユイは接近戦に持ち込まれると分が悪いのだが、前に滑り込んできたピティーが全ての攻撃を弾き逸らした。

「ありがとう、ピティー！」

「うん……守りは……任せて……」

紅白双子戦でも見せた、二人が背中合わせになり攻防一体の攻撃を繰り広げ、鱈人魔たちが近づけずにいる。

最近が強敵ばかりを相手にしていたので仲間の実力を測りかねていたのだが、やはり一つ頭の抜けた腕利きの集まりだよな。

「うちらも、やるよ！」

「いらっしゃいませ」

彼らの活躍に触発されたようで、ラツミスが近くにいた鰐人魔に突進していく。

こちらに手にした槍を突き出してきたが、意にも介さず懐に飛び込むと掌底を相手の胸元に叩きつける。

胸が陥没して軽々と宙を舞うお馴染みの光景に驚くこともなく、今日の吹っ飛び具合を計測しておいた。

ふむ、今日は一突きで五メートルか。昔はもっと飛距離を稼いでいたが、これは威力が落ちているという訳じゃない。

力の配分が上手くなったのと、相手へ与える衝撃が効率よく加えられるようになったということでもある。と熊会長が言っていた。

俺は格闘技の経験もないので完全には理解できないが、蛙人魔にも苦戦していた彼女が鰐人魔を粉碎する姿を目撃すれば強くなったことは理解できる。

そんな彼女を見守りながら忍び寄ってきた鰐人魔の顔面に瓶ジュースをぶつけておく。

仲間の戦いは安定しているし、後続のハンターたちも追いついて戦いに加わっているので勝ちも確定した。

仲間たちは残った敵を後続に任せようで、全員が俺の周りに集まってきている。

「誰か指揮官らしき人影を見た者はいるか」

「うちは見てないよ。ハツコンは見つけられた？」

「ざんねん」

誰も指揮官らしき人物を発見できなかった。先に逃げたと結論を出し、最後の敵が倒されたのを確認してから、ハンターたちに撤退する様に熊会長が促そうとした、その時。

「まだ終わつとらんよつじやな」

「ですね、お爺さん」

「あらまあまあ、本命はこちらでしたか」

「ふむ、それが狙いだつたか」

熊会長たち元ハンター四人が真つ先に異変に気づき、全員が同じ方向を睨みつけている。

釣られて同じ方向へ顔を向けた仲間たちも、ソレに気づいたようだ。もちろん、俺もだが。

「こちらに迫ってきているアレは……もしや、以前ハツコン師匠が倒したという階層主ではありませんか」

「せい かい」

ミシユエルの問いに答えた俺の視線が捉えているのは、八本の足を生やした巨大な生物。清流の湖階層の階層主である八足鱈だった。前回は喰われてからの内臓爆発で倒したが、今回も同じ作戦でやれるか？

「ハツコン、また食べられるのは無しだからね！」

うつ、先に釘を刺されてしまった。ラツミスの膨らんだ頬が背中側から見える。これは何を言っても説得できそうにないな。

「まあ、正攻法で倒せるじゃろつて。なあ婆さん」

「そうですね、ここにいる全員でかかれれば問題ありませんよ」

老夫婦の意気込むわけでもなく自然体な物言いに、比較的若いメンバーの緊張した表情がほぐれていく。

そうだね。あの時とは実力も違いは仲間もいる。顔を見回してみて思ったのだが、このメンバーで負ける方が難しい気すらしてきた。それだけ頼もしい仲間たちに囲まれていることを忘れてはいけな
いよな。

「これだけの面子が揃った状態で戦えることなんて滅多にありませんからね、先輩方の戦いぶりを堪能させていただきますよ」

「今日こそ園長先生を超えてみせるっす！」

「どんな攻撃も……受け流して……みせる……」

「よーっし、頑張るよー！」

主要メンバーである比較的若い仲間たちが、先輩たちを意識して気合を入れなおしている。

そんな若者の姿を見て熊会長たちは嬉しそうに口元を緩めた。

「では、我々も若い者に良いところを見せなければならぬな」

「まだまだ、若者には負けてられんのか」

「足の一、二本は斬り落としましょうかね」

「シユイに負けたらこの弓を譲りますよ」

熟年チームも若者の活気に当てられて、やる気が湧いてきたようだ。

本当に負ける気がしないな、仲間を見ていると。

「いいねええっ！ 燃え盛ろっぜ！ 魂を燃やせっ！」

灼熱の会長が文字通り燃え上っている。いつもなら暑苦しいだけなのだが、この雰囲気だと邪魔になっていない。

大地を揺らし迫りくる八足鱈を見据え、全員が一步踏み出した。

八足鰐再び

「まずは足止めかのう」

シメライお爺さんが今度は地面が陥没した絵が描かれた扇子を取り出した。

あの絵はどんな効果を表現しているのだろうか。地面が陥没しているということは土系の魔法だろうか？

扇子を頭上に掲げると、勢いよく振り下ろした。

ズンツと腹に響く重低音がしたかと思うと、八足鰐が足を止めている。

「えっ、あれ、何かしたのかな。何も見えないけど」

ラツミスの言う通り、魔法が発動したようには見えないが注意深く観察すると、体勢が低くなり八本の足が深く地面までめり込んでいる。

もしかして……重力系の魔法なのだろうか。上から見えない何かに押さえつけられているような

「あ奴は体の重さが数倍に跳ね上がっておるからのう。あとは何とかせい」

やはり重力系の魔法なのか。それを聞いて前衛の面々が八足鰐向かっていく。

シユイと園長先生は矢で八足鰐の四つある目を射抜こうとしているが、咄嗟に瞼を閉じて弾かれた。

中距離からヘブイが振るう鉄球が八足鰐の左前足の関節部分に何

度もぶつかり、皮膚が裂けて血が飛び散っている。

「逆の……脚に……投げて……」

俺を背負うラツミス隣で並走していたピティーが、こっちを見ながらそんなことを口にした。

無茶過ぎることを言い出したので、訝しげにラツミスが見ている彼女の目は真剣で……本気で言っているのか。

「本当に投げるよ？」

「うん……やって……」

ピティーが盾に籠る二枚貝バージョンになったので、ラツミスはそれを掴み振り上げると全力で相手の右前脚に向けて投げつけた。

剛腕から繰り出された一投はいつもの展開ならあらぬ方向に飛んでいくのだが、的が大きいのと対象が近いこともあり 左前脚に激突してヘブイの攻撃による蓄積ダメージとの相乗効果で関節を完全に打ち砕く。

右前脚を狙った筈なのだけど、結果オーライだよな、うん。

「め、命中ね！」

確かに脚には命中したね、ラツミス。

そんなやり取りをしている間に右前脚が炎上している。

「おらおら、燃え上れやあああっ！」

炎人間と化した灼熱の会長が巨大な脚をサンドバッグにして、目にも止まらぬ速さでパンチとキックを繰り出していた。

格闘術に長けているのというのは本当だったのか。炎の派手さに目を奪われがちだが、苛烈極まる連続攻撃は男として血が騒ぐ。両前足を破壊された八足鱈だったが、まだ六本の足が残っているので倒れることなく踏ん張っている。

無抵抗の相手を一方的に叩きのめしている図は見栄えの良いものではないけど、命懸けの戦いでそこにこだわる理由はないよな。

それにあの魔法を何処まで維持できるのかもわからない今、一気に攻め切るべき。

「私も良いところを師匠に見せないと！」

燃え盛る右前脚の後ろの足も炎上している。それはミシユエルが炎を纏わせた竜の大剣で何度も斬りつけているからだ。

如何にも硬そうな皮膚を容易く切り裂き、傷口が紅く焼けただれている。八足鱈の脚があれだけ太くても、あれだけ深い傷を負わされては巨体を支えることができず膝を突いた。

「お婆も頑張らんといかんねえ」

ミシユエルと逆方向に向かっていたユミテお婆さんは、砕かれた左前足の一本後ろの脚に向けて一度刀を振るった……と思う。仕込み杖から刃が煌めき鞘走りした音がしたと思ったら、もう鞘に収まっていたので確信が持てない。

その放ったかどうか目視できなかった斬撃は巨大な足に一本の線を残した。

「この居合は疲れるから、あんま使いたうないんよ」

腰を軽く叩くお婆さんがこちらに振り向くと、その背後で斜めの線が走る脚から大量の血が噴き出し、切断面から脚がずれていく。

たった一刀であの脚を切断したのか。やはり、この老夫婦は桁違いだな。

八本の内、半分の脚を失った八足鱈はその巨体を支え切れなくなり、前のめりに地面に伏せることとなった。

「このままでは、出番がなくなってしまうな」

「だよ、会長」

並走する熊会長が苦笑いを浮かべると、崩れ落ちた八足鱈の体を駆け上っていく。

鋭く伸びた爪に赤黒い炎のような何かを纏わせて、八足鱈の体に突き刺しながら首元から背中に向けて走っている。

俺とラツミスも背中に飛び乗ると、腰骨辺りに陣取ると膝を軽く曲げて足を踏ん張った。

軽く一度相手の皮膚に拳を添えてから、息を鋭く吸い込み拳を掲げると一気に振り下ろす！

「といやあああっ！」

俺の全身に震えるような衝撃が駆け抜けると同時に、八足鱈の体がすり鉢状に陥没した。

ベギベギと硬質の物が割れる音が八足鱈の内部から微かに響く。

「もういっちょおおっ！」

更にもう一撃、ラツミスの遠慮なしの正拳がクレーターにめり込む。

今、八足鱈の巨体が跳ねた気がする。そこまでの衝撃を与えられる攻撃力があるのか。立派になったところの騒ぎではないぐらい成

長したな。

「とう、ちよいや、あちようー!」

よくわからない掛け声を上げながら、凶悪な破壊力を秘めた拳が連続で叩き込まれていく。陥没した腰が見るも無残な姿になっているが、それでもラツミスか拳を止めない。

これだけの巨体だとこのダメージでも倒しきれぬのか確信が持てないでいる。

「そろそろ、動き始めるぞ」

後方に居る筈のシメライお爺さんの声が耳元で話したかのようにハッキリと届いた。どうやら、風に声を乗せて届けたようだ。

みんなが離脱していく中、ラツミスはじっと俺を見つめてまだ動いていない。

「あれをやる?」

おっ、流石ラツミスだ。俺が何をしたいのか言う前に察してくれた。

俺の必殺技をこの状況で放つのか確認してくれている。それに対する答えは決まっているよ。

「いらつしゃいませ」

最大威力をほこる最近の決め技をここで放たないで、いつやるんだ。

「本当はハツコンにこんな事させたくないけど……相棒は信じない

とね！」

「うん」

以前までなら俺を武器扱いすることを極力避けてきたのだが、最近はお互いの理解が深まってきたような気がする。

「じゃあ、いつくよー！」

背負子から俺を外して肩に担ぐようにして持ち上げると、真上に勢いよく放り投げた。

体がぐんぐんと上空へと昇っていく。眼下には八足鰐の背から撤退していくラツミスの姿が見える。

充分な高度を確保すると、そこからは急降下が始まるのだが、ここでいつものフォルムチェンジだ！

最近定番の日本一大きな自動販売機に成ると、更に足下にコンクリート板の基礎を召喚する。これで重量を上げて威力を更に増す！

重力の拘束が解けたらしい八足鰐が歩み始めようとしているようだが、半分の脚を失い思うように動けず地面でもがいている。

無防備な背中を晒す八足鰐に急降下した俺が激突すると、その衝撃で八足鰐の体が海老ぞりになった。

足下から肉が弾け骨を砕いた音と振動が伝わってくる。前回は内部から破壊したが今回は外からの破壊だ。

ラツミスの攻撃で皮膚が破れていたのも威力を上げた要因だったのだろう。俺の一撃は相手の腹まで突き抜け八足鰐は真っ二つに分断された。

元の自動販売機に戻ると周囲はグロ画像だった。臓器や骨や肉の断面図に取り囲まれている。自分がやったことなので消えるまで大

人しく視界を閉じておこう。

暫くすると肉が全て消え去り骨だけが残っている。前と同じ状況だな。

これだけあっさり倒せたのは、みんなの協力があったからこそ。美味しいとこだけいただくことになって申し訳ない。

「ハツコン師匠、お見事でした！」

いち早く駆け寄ってきたミシュエルが目の前で片膝を突いて頭を下げた後に、眩しい笑顔を見せて褒め称えてくれている。

どうやら彼の中でまたも俺の評価が上がったようだ。

「ハツコン、大丈夫！ どこか壊れてない？」

続いて現れたラツミスが俺の体を隅から隅まで撫でまわしている。

「もんだいね」

「いよ」

「よかったー。ちょっと高く投げ過ぎたかと思ったから」

肉のクッションもあつたし、頑丈も上がっているから平気だったよ。

これで冥府の王の嫌がらせも一段落ついたのだろうか。

逃げ出した小將軍カヨーリングスの行方と永遠の階層の探索が残っているが、まずはこの勝利を喜ぶべきだな。

今日はお祭り騒ぎになるのは間違いない。今から酒とおつまみの選定をおこつ。

最下層

懲りない面々が地面に倒れ伏している。

男女問わず呻き声を漏らしながら、俺を指して這いずり寄ってくる姿はゾンビの群れのようだ。

「二日酔いが……ましになる……あれをくれええ」

「あ、あかん、しんでまううう」

一番に辿り着きそうなのはカリオス、時点で闇の会長か。というか、闇の会長はあんな体なのに二日酔いになるのか意外だ。

スポーツドリンクが一番妥当かな。お酒って利尿作用があるから脱水症状になるらしい。あとは定番のしじみの入った味噌汁缶が好きなのを選んでもらおう。

炭酸の独特な感覚で胃と頭がスツとするとという人も多いらしく、大体この三種が二日酔いの定番商品になっている。

「死屍累々だな。もう少し上手く酒を飲む努力をするべきだ」

「あら、皆様。早く復活してくださいね。今日もお店でお待ちしておりますわ」

熊会長とシャーリイが平然と歩み寄ってきているが、この二人は横たわる酔っ払い共よりも酒を飲んでいたよな。

酔いが一切残っていないように見えるが。

「嘘だろ……俺たちの数倍は飲ませたよなあ」

「シャーリーさんを酔い潰すのは無理なのかつ」

下心満載の男性陣の悔しがる声が届く。そういや、昨日、シャーリーさんの周りに群がっていた男たちが次々と沈んでいく光景を目の当たりにした。

男たちが数人で取り囲み返杯を続けていたのだが先に酔いつぶれていき、最後まで残ったシャーリーが夜空を眺めながら酒を煽っていたのが印象的だったな。

「ハツコン、こやつらの看病が終わったら永遠の階層に向かってもらいたいのだが、大丈夫だろうか」

「いらつしゃいませ」

最終階層らしき永遠の階層へ挑む時が来たようだ。

最低でも片道一年もの距離を進まなければならないらしく、共に攻略をする仲間たちは長い旅を覚悟している。

一年かけて右の道を制覇した人は中級ランクのハンターだったそうだが、そんな人でもそれだけの日数が必要だった。普通に道を進む気なら一年では済みそうにない。

「ハツコン、早くううう、すつとする飲み物をくれええ」

悩むのは後にするか。まずは、この屍の群れを何とかしないと。

酔いつぶれた人々の介抱を終えると、転送陣へと運ばれて行った。

永遠の階層に挑む面子は既に揃っていて、全員の顔を改めて見まわしてみる。

ラツミス、ヒュールミ、ピティー、シュイ、ミシユエル、ヘブイ。やはり、固定メンバーで決定したようだ。

灼熱の会長と闇の会長が同行したがっていたが、全員一致で御遠慮していただくこととなった。あの二人と一年間以上も毎日共に過ごすのはきついと判断したようだ。

そもそも、俺たちが断らなくても会長たちが同行するには無理があるのだが。

今回、清流の湖階層が襲われたことにより、まだ壊滅していない階層への警戒度も増すこととなり、特に灼熱の会長は自分の階層を守る仕事がある。

「では、永遠の階層に向かうとしましょうか」

「昨日あれだけみんなで騒いだから、お別れは必要ないよね！」

「そうつすね、死に行くわけじゃないっすから」

「だな。ちよいと一二年旅に出るだけの話だ。湿っぽいのはなしにしようぜ」

「うん……ハツコンと……ずっと一緒……嬉しい……」

「私もハツコン師匠と一緒にいられて嬉しいです！」

みんな思ったよりも元気いっぱいなようで何よりだよ。

この面子だったら数年もの間、道を進むだけだったとしても退屈はしないな。

「んじゃ、転送陣を発動させるぜ」

ヒュールミがいつものように操作をすると転送陣から青い光が溢れ出す。

これも見慣れた光景だ。このダンジョンの最下層らしき永遠の階層か、事前に情報は得ているとはいえ、この目で確かめてみないと正しい判断はできない。

自動販売機として体が動かせない分、人より物事を深く考えるぐらいのことはしないと。

光が消え去ると、そこは暗い闇の中だった。

正確には松明や魔道具の灯りに照らされた数件の建物が闇に浮かんでいるのだが、明かりの届く範囲外は真っ暗で何も見えない。

足下は湿り気のない固い土で地面は平らに均されている。円状に灯りが設置されているようだが、内側には建造物があるが外側には何も無い。そこから先は断崖らしく闇が佇んでいるだけだ。

「思ったより狭いですね、ハツコン師匠」

「うん」

「ここは宿屋と道具屋、あとハンター協会しか存在しない。迷宮の階層と似たような感じだな。必要最低限の人員と建物だけ。敵とも遭遇しなけりゃ、ただひたすら前に進むだけの階層だからな、こんなもんだろ」

ヒュールミの説明を聞いて納得はできるのだが、それにしてもこれがダンジョンの最下層なのか。もっと、攻略に力を入れているのかと思っていた。

「えっと、まずはハンター協会に顔を出すって話だったよね、ヒュ

「ルミ」

ラツミスの質問にヒュールミが軽く頷く。

このメンバーを取り仕切るのはヒュールミということでは話しているのだが、戦闘中はヘブイが指揮を執ることになっている。

「それじゃあ、まずはハンター協会に行ってみるか」

ここでは迷うことなく目的のハンター協会を見つけていることができた。建物が三件しかなくご丁寧に看板を掲げているので、間違いないのだけだ。

簡素な木造平屋建ての扉を開けると、ハンター協会の制服を着た小太りのおじさんが、もう一人の制服を着た、同じ体格のおばさんと談笑している。

「今日は何して過ごすか」

「煮物を限界まで煮込むというのはどうですか」

暇を持て余しているのが即座に伝わる会話内容だ。言葉に力も感じられず、全身から力が抜け出ているかのような二人だった。

魔物が襲ってくることもなく常に薄暗い階層で暮らし続けていたから、こつなるのも頷けるけど。

「すまねえが、ここはハンター協会の間違いないよな」

「おや、お客さんか」

「あっ、清流の会長が前に言っていた、攻略目的のハンターさんですか」

事前に話を通してしていると熊会長は言っていたが、この二人は忘れていたようだ。業務に対する意欲が薄れているのか。

「ああそつだ。この階層の攻略具合を教えてください」

「はいはい、資料は整えていますよ。ええと、ここだったかな……あれ、こつちか」

「いやですよ。あそこの棚に片付けたじゃないですか」

手間取りながらも取り出された資料を渡され、全員が目を通して
いる。

「数年前までは結構頻繁にハンターも訪れていたのですが、右の通路を制覇して帰ってきたハンターの報告があつてからは人足が途絶えましたね。稀に現れる野心あるハンターが挑むことがあるのですが、殆どが一ヶ月で戻ってきましたよ」

「帰つてこなかったハンターいたのか？」

「ええ、十人に一人ぐらいの確率でお戻りになられていません。右の通路を制覇された方は途中で餓死されたハンターの遺品を持って帰ってきていましたね。それを知って挑む人が減つたようなものですし」

死因はやはり餓死なのか。

それから資料を詳しく調べ、魔物に襲われたという前例がないことと三つの分岐路の内、まだ調べ終わっていない真ん中と左端は、現在の報告では半年間進んだが終わりが見えなかったそつだ。

何処まで進んだかわかるよう引き返す前に、ハンターは細く軽い金属の赤い棒を突き刺すことが決まり事らしく、俺たちもその赤い棒を渡された。

「つまりこの赤い棒が途切れたところが最深部ってことか」

「うちらは一番奥まで到達するから、これ刺すことなさそうだよね」

「まあ、そうっすね」

「うん……何年かかっても……大丈夫……」

女性陣は職員の話聞いても全く動じてない。それどころか何処か楽しそうだ。本当にただの旅行に行くノリに見えてきた。

「最大の敵は変わりのない日々のような気がしますね」

「体が鈍れば鍛錬をすれば良いのです。そうですね、ハッコン師匠」

男性陣もいつもと変わらない様子だ。

全員が覚悟した上で果てしない道を進むことに決めた。もう、俺が口を挟むことじゃないよな。

「あのう、先日清流の会長から渡された荷台は引き取ってもらえるのでしょうか」

申し訳なさそうに話に割り込んできた職員の男性が唐突にそんなことを口にした。

「あれっ、そういえば荷台がどうとか言っていた……ような気がするっす。食事に夢中で忘れていたっすけど」

「オレはちゃんと聞いていたぜ。徒歩では限界があるからな。立派なウナススも用意してくれているんじゃないか」

ヒュールミが期待を口にすると、周りの仲間も同調して頷いている。

職員の男性が促すままにハンター協会を一度出て、脇に設置されている物置小屋の扉を開けた。

そこには清流の湖階層で活躍した荷台　だけが置かれている。ウナススは何処にもいない。

「んんっ？　ウナススがいねえようだが」

「はい、ウナススは必要ないと仰っていました。何でもハツコンさんという方に任せておけばいいと」

全員の視線が俺に集中した。

ふふふふっ、とうとう俺の新たな力を見せる時が来たようだ。

今までのポイントと清流の湖階層での騒乱で稼いだポイントを合わせて300万を超えた俺が得たランク3の力をつ！

ランク3

全員からの熱い視線を浴びながら、昨晩のことをふと思い出す。宴会が終わった夜更け。ハンター協会前のいつもの場所で俺は一人佇んでいた。

酔っ払い共が全員、いびきをかきながら眠っている。明日の朝は二日酔いの対応で忙しくなりそうだな。

でも、みんな幸せそうにあれだけはしゃいでいたのだから、少々の頭痛は覚悟の上だろう。客足も途絶えたことだし、ずっと気になっていたあれを調べておこうか。

既に200万ポイントを超えていた状況から、俺の召喚したコンクリート板をラツミスが投擲して倒した多くの魔物。そして、八足鰐に止めを刺した一撃。

これが加算されたことにより、予想では届いている筈なのだが。

恐る恐る現在のポイントを覗き見ると 324万ポイントとなっていた。

よっし、夢の300万ポイント突破だ！

機能欄に増えた ランク3 の文字を見て以来、ずっと気になって気になってしょうがなかったのだが、ようやく手が届く。

ランク2 を覚えた時に増えた機能は 自動サービス機 とオプシヨンプーツの追加だった。最近愛用しているコンクリート板もランク2 から使えるようになった機能の一つ。

ならば ランク3 になれば何が増えるのか、自動販売機マニアとしては弥が上にも期待は高まる。

何の説明も表示されていないことに若干の不安を覚えるが、ランクが上がって損をすることだけは無いと断言できる……と思う。今までがそうだったから。

これだけのポイントがあれば加護を三つ新たに覚えることも可能なのだが、俺はどうしてもランクアップをしたい。この成長は仲間たちとのこれから絶対に必要だと信じている。

決して、自動販売機マニアの血が騒いで盲目になっている訳じゃない。そこは信じて欲しい。そうこれは仲間の為なのだ！ ま、まあ、少しは俺の為でもあるかもしれないけど。

自分への言い訳は完了したので、そろそろランクアップさせていただくでしょう。

俺は今まで貯めた300万ものポイントを注ぎ込み、ランク3へと進化した。

ぬおおおおおつ、何だこの体中に溢れるパワーはっ！ これがランク3の実力なのかっ！ と、なることもなく特に変化が感じられない。

自分の能力の欄には確かに ランク3 が存在する。これは久しぶりに心の中でカーソルを持って行くようなイメージで説明を聞いてみるか。

頭に浮かぶイメージ映像で ランク3 を調べてみると、脳内に説明の文章が浮かんだ。

《ランク3になると、加護と念動力の有効範囲が一メートルから二メートルへ伸びます》

おおつ、これは嬉しい変更点だ。こういった能力の強化はないと思っ込んでいたので純粹に嬉しいな。 結界 念動力 の距離が増えたら使い勝手が更に良くなる。

まだ文字は続いているようだから期待できるぞ。

《他の自動販売機へのフォームチェンジ可能時間が二時間から四時

間に増えます》

地味にありがたい。今まで時間制限でやれなかったこともあったので、倍に伸びるのは夢が広がるな。

《選べる自動販売機や機能が大幅に増えます。実際に存在している、もしくはしていた自動販売機全て選ぶことが可能となります。未購入未使用でも可能となります》

な、なんだとっ。つまり、海外にある自動販売機や過去に存在していたが既に姿を消した自動販売機も選べるようになったのか！

これは凄過ぎる。海外の自動販売機で幾つも利用したいと思っていた物があつたので、それが選べるとなるとテンションが上がるな！

イギリスのアレとか、アメリカのアレも選べるのか。それに自動販売機で売られていた全商品を選べるのもかなり嬉しい。飲食料品のレパトリーも一気に増えるぞ。

喜び勇んで新たに増えた機能欄を凝視すると、自動販売機の種類と機能が驚くほど増えていた。

こんなにあつたら、嬉しさのあまり頭がおかしくなりそうだ。

おーっ、大昔の自動販売機もあるぞ。たった二年しか稼働しなかったと言われている幻の自動販売機まであるじゃないか。

日本では無理な物を販売している海外の自動販売機は面白いな。これにフォームエンジンできたら今後の旅が楽しくなりそうだ。

ざっとだが目を通して満足しかけていたのだが、一番欲しいと願っていた自動販売機が見つからなかった。それに、幾つか俺の知っている自動販売機が存在していない。

これって、何かしらの条件を満たさないと現れない仕組みなのだろうか。日本一の自動販売機も前提条件があつたからな。それにレアな自動販売機や大型なサイズはポイントの消費が激しい。

新規追加も俺が購入したことのある自動販売機や商品と比べてかなり割高だ。ランク3 で追加された物は気軽に購入するのは避けられた方がよいのは確かだ。

でも、ランクアップをしたらもしや選べるのではないかと、期待していたあれが選べないのは痛いな。あつたら、永遠の階層の旅が一気に楽になるというのに。

もう一度追加された自動販売機を今度はじっくり見ていると、とある自動販売機を発見した。これは ランク3 になってから追加されたもので間違いない。

消費ポイントは幾つだ……21万！ よっし、これなら足りる！ 残りポイントが3万と少しになってしまいが、背に腹は代えられない。それだけの価値がこれにはある。それに、後で熊会長が報酬を持ってきてくれるそうなので、数万ポイント補充できるかもしれない。

それに今回の防衛戦で大量消費した飲食料代金も支払われ、尚且つ別の階層での活躍に応じた報酬。更に八足鰐の骨は高額で取引される素材らしいので、その買取り金額の一部も貰えるそうだ。

それだけあれば永遠の階層を進むのに問題はない。

ポイント計算が終わったので、後は朝まで新たな機能と自動販売機の種類を愛でることにしよう。いやー、久しぶりに心が弾むようだ。

それから俺は一晩中、新たな自動販売機と商品を眺め続け、興奮冷めやらぬ夜を過ごしたという訳だ。

そんな俺が新たに得た自動販売機をここでお披露目するでしょう。

「のいて」

俺がそう発言すると、ラッミスが地面に降ろして距離を取ってく

れた。

全員が充分離れたのを確認すると、お待ちかねのフォルムチェンジをする。

「えっ、何これ!？」

「な、なんだこれ!　おい、ハツコン、これなんだ!」

ラツミスが口元に手を当てて驚き、ヒュールミに至っては俺の体に両掌を当てて額をぶつけて凝視している。今までで一番のリアクションだ。

残りの仲間もソレが何であるか理解できないようで、目を見開き大口を開けて、そのまま硬直している。

どんな姿に変貌したかというと、体は横に伸び奥行きが増えベースが黒になった。

更に正面の八割以上をガラスが占めて、中にある商品が見える仕組みになっている。

この自動販売機の中身はたった一つしかなく、黄色のボディに四つの車輪。二人が座れる座席しか存在しない　コンパクトカーだった。

つまり、二人乗りの自動車が入った自動販売機に俺はフォルムチェンジをしたのだ。

この自動販売機は実際に購入できるわけじゃなく、商品の代わりに缶を模したパンフレットを貰うことが可能になっている。

だが、中に入っている車は本物なので俺が商品として扱える。

海外の有名なメーカーの車でプロモーションの一環として東京タワーやデパートに実際に置かれていた。

変わり種の自動販売機の中でも中々の逸品だ。

この自動販売機には重要なポイントがある。自らが車にフォルム

チェンジしたわけではなく、車はあくまで商品の為、制限時間関係なく使用できる点だ。これで時間制限なしで車を運転することが可能となる。

張り付いているヒュールミに離れるように頼んでから、コンパクトカーだけを残すイメージで自動販売機の体を元に戻した。自動販売機から解放された車に仲間たちが群がっている。

「これは車輪があるから、幌付きの荷台っばいが……いや、それにしては」

「丸くて可愛いね、この子」

「中は椅子が二つだけっすか。それだと、荷台として役立たずじゃないっすか」

「ハツコンと……ピティー……専用……」

「かなり重い物体の様ですが、どういう意図で出されたのでしょうか」

「ハツコン師匠は深い考えがあつてのことですよね！」

全員からの期待と疑惑の視線を向けられているので、ここで俺の力を見せる時が来たようだ。

まずはここでもう一度フォルムチェンジをしなくてはならないガソリン計量機へと。仲間が見守るなか 念動力 で車内の操作をして給油口を開き、そこにノズルを差し込んでガソリンを注入する。

この操作も ランク3 になって距離が二メートルに伸びたおかげでスムーズにやることができた。

みんなが俺のしていることが理解できないようだが、今は余計なことをするべきではないと考えているようで、真剣な眼差しを注いでいる。

元の自動販売機に戻ったのはいいが、これからどうしようか。運転席に乗ることも考えたがコンパクトサイズの二人乗りなので、この体で乗り込むには無理があるな。

上に乗ってもらってもいいのだが、ここはわかり易く見せつける為にダンボール自動販売機になり、自動車の扉を操作して運転席を開いた。

「らっ いす」

「のせて」

「え、うん」

呆けた表情をしていたラツミスが慌てて駆け寄ってきて、運転席に俺をそつと置いてくれた。

「ありがとう」

「えと、よくわからないけど頑張ってね」

ラツミスが離れたので扉を閉めて 念動力 でエンジンをかけてギアを操作してアクセルを踏んだ。

ゆっくりとスタートした車を見て「おおおおっ！」と仲間たちから歓声上がる。

ここは広々とした空間で人もいないので、ちょっとだけ速度を上げてぐるっと一周してから停止した。

車の運転は自動販売機巡りの旅で鍛えられているから問題は無い。

しかし、異世界で車を運転する日が来るとは思いもしなかったな。このタイミングで ランク3 になり 念動力 の射程範囲が伸びたことで、車の運転も問題なくやれそうだ。これで永遠の階層の攻略時間がかなり短縮される筈。

しかし、車を運転する自動販売機か……俺は何処に向かって進んでいるのだろうか。

自動車の旅

俺が何をしたいのかを理解してくれたヒュールミが早速、荷台の改造を始めている。車の後ろに接続できるようにしてくれるようだ。自動販売機の体では運転席も助手席にも乗れないので、後ろのトランクカバーを上げてもらい、そこに体を押し込んでもらうしか方法がない。

さつきみたいにダンボール自動販売機では四時間が限度なので、通常の運転はそうやってやるしかないのだ。

安全性も考慮しないといけないので適当に済ませる訳にもいかず、今日は宿屋で泊まることとなり、俺は作業を続けるヒュールミと一緒に付き合うことにした。

ラツミスたちも当初は必要な部品を清流の階層へ取りに戻ったりしていたのだが、改造となるとやる事がなくなり、邪魔になっても悪いからと宿屋へ引っ込んだ。

「ハツコン、もうちょい明るくできるか」

「いらっしゃいませ」

周囲に松明や魔道具の灯りがあるとはいえ、永遠の階層自体が暗いので光量が足りないようだ。自動販売機の明るさを増したのでこれで少しはましになるだろう。

「おっ、ありがとっな。これなら手元も見やすいぜ」

額の汗をぬぐいながら工具を手に荷台の改良を続けている。

仲間たちもここに残って終わるのを待つと言っていたのだが、ヒ

ユールミが強引に宿に行くように促した。

「終わったらオレは荷台で寝させてもらうしな」

そう言われたら何も言い返せないよな。俺は眠らなくても平気だからこうやって見守っているけど。

集中しすぎていると寝食を忘れることがあるから、タイミングを見計らって飲み物を提供しないと。

「そついや、荷台に会長からの手紙と小箱が置いてあつたんだが、言つの忘れていたぜ。ハツコンは手紙の内容知りたいか？」

「うん」

「んじゃ、覚えているから言つぜ」最下層の最深部に到達したらこの箱を開け、中に入っているものを使ってくれて構わない。年寄り共からの贈り物だ」だつてよ」

何だろつ非常に気になるぞ箱の中身が。最深部に到達したらという言葉がヒントなのだろうか。ちょっと箱を開けて中を覗いてみたのが自重しないとな。

それから一時間ぶつ続けて作業をしていたので、手が止まった瞬間を狙ってキンキンに冷えたミネラルウォーターをほっぺたにくつつけた。

「ひうあつ！ な、なにすんだよ、ハツコン！」

「の ん で」

「お、おう。ちょっと休憩するか」

地べたに座り込み俺に背を預けると、頭を後ろに反らして見上げている。

上気している肌と額に張り付いた前髪が妙に色っぽい。見下ろしても胸の隆起が殆どないのがラツミスとの違いだよな。

「ハツコン、変なこと考えてねえか」

最近、ヒュールミも勘が鋭くなってきている気がする。

「ウウン」

「発音が変だぞ、うりうり」

目つきが鋭くなって後頭部をぐりぐりと押し付けられた。

こういう姿を見せるのって二人っきりの時だけだよな。口が悪くて気が強いというのは彼女の一面でしかなくて、こういうた素の状態の彼女も可愛らしくていい。

いつもの姉御肌な感じも好きだけどね。

「しかし、ハツコンが動く荷台を出したのは驚いたな。あれってなんて言う乗り物なんだ」

「くりゅま」

「クリユマか。かけえな」

うん、まあ、それでいいか。

荷台の改良が終わったらヒュールミを車の運転席に座らせてあげようかな。まずは俺が運転するけど彼女なら直ぐに運転を覚えそう

だ。

「このクリユマがどれぐらいの速さがわかんねえけどさ、かなり時間が短縮できそうだけ。ありがとうな……でもさ、ハッコンと一緒に何年でも一緒に旅してもいいんだぜ」

自分で口にして照れたように頬を指で掻いている。

「いっしょだ」

「とたのしい」

「よね」

「だろ」

それから、初めて出会った時の話で盛り上がり、和気藹々とした空気で朝まで一緒に作業を続けていた。

「うーっ、完成したぜえ。つつかれたああ」

「ありがとう」

お疲れ様と言いたいのだが、「っ」「れ」がないからな。

言葉が足りないなら行動で示さないと。コンビ二自販機 になつてちょっと高めのロイヤルミルクティーとスイーツを二種用意した。

「お、ありがとうよ。頭使うと甘いもんが欲しくなるよな」

口一杯にクレープを頬張る幸せそうな顔を眺めていると、彼女の背後に突如指をくわえてしゃがみ込むシユイが現れた。

「美味しそうっすね」

「ぶほっ、ごほごほっ。びびらすなよ、シユイ」

「すまないっす。良い匂いがしたからつい」

「楽しそう……ハッコン……」

うわっ！？ ピティの顔が闇の中に浮かんでいる。ここまで近寄られていたのに全く気配を感じなかった。

闇に佇む姿が似合っているのが怖い。ホラー映画とゲームで何度か見たことがある光景だ。

「出遅れたっ！」

ラツミスが寝起きで慌ててやってきたようで服が着崩れしている。元々露出度の高い格好だからかなり危険な格好になっているぞ。

全く女性ばかりでまともな男性がいないからいいものを、ハンターとはいえ女の子だから身だしなみはちゃんとしなないと。

白く細長い自動販売機にフォルムチェンジをする。これはホテルに置いてあるヘアセット自動販売機でヘアリキッド、ヘアトニック、クシがセットになっていて、その中から櫛だけを取り出して念動力で操り寝癖が付いたラツミスの頭を梳く。

「んー、ありがとう、ハッコン」

気持ち良さそうに目を閉じている。寝起きが弱いから、たまにこうやって髪の毛をセットをしてあげてもいいな。

「次は……ピティ……」

ラツミスの後ろに並んでじっとこっちを見つめている。断れる雰囲気じゃないので後でやってあげよう。髪の毛がかなり長いからやりがいはあるそうだ。

「お忙しいところ悪いっすけど、朝ごはん欲しいっす」

シユイは相変わらずだな、宿屋で朝ご飯は出なかったのだろうか。よく見ると口元に食べかすが付いている。あれだ、量が足りなかったな。

「皆さん、お早いですね」

「髪を梳いてもらっているのですか」

男性陣もやってきた。ミシユエルがラツミスを羨ましそうに見ているが、弟子にもやってもいいのだけど、これ以上懐かれると色々危ない気がする。

全員が揃ったので食後のスイーツを提供しておく。

食べ終わり準備も全て整ったのはいいのだが、問題は誰が車に乗るかだ。一番頑張ってくれたヒュールミを運転席に乗せるのには反論がなかった。

となると助手席に座るのは誰になるのか。ヘブイは早々に荷台に乗り込んだのでどうでもいいみたいだ。だが、他の面子は譲る気がないようだ。

四人が視線を合わせて互いを牽制している。

「ヒュールミが一番仲がいいのはうちやから、隣に座った方がいいと思うんだ」

「そんなの関係ないっす。みんな仲良しっすよ」

「ピティーンも……あれに乗って……みたい……」

「どういった乗り物が判明していないので、弟子である私が代表してまず乗ってみるといっのはどうでしょうか」

うん、一歩も引かないな。

初めて見る車が目の前にあつたら乗ってみたくなるのはわかる。俺も彼女たちの立場なら乗ってみたいと思うだろう。

「皆さん、順番に乗ればいいじゃないですか。出発しないといつまでも目的地にたどり着けませんよ」

へブイの正論に黙り込み、今度はお互いに譲り始めた。

「もう、ハツコンに決めてもらおうぜ。隣の席には誰が座ったらいいんだ」

「らっ いす」

俺が即答するとラツミスが拳を握りしめて喜んでる。

そもそも、隣に座るのは親しい人間の方が良いと思っていたから、これがベストチョイスだと思う。

個人的にも最初には二人に乗って欲しいので、この二人と自分の運転する車でドライブできるのは嬉しい。

「しゅっ ぽっ」

俺のしまらない出発の号令をしてから車のエンジンをかけ、アクセルを 念動力 で踏み込む。

後ろの荷台を含めれば乗車人数を軽く超えているが、そこはコンパクトでありながらターボもついてある高性能なエンジンと、ピテイーの 重さ操作 があるのでスムーズな発進をした。

数少ない施設の間を抜け、闇の上に伸びる一本道を進んで行く。辺りが真っ暗なので車のライトを付けて走っていく。

道幅が十メートル近くあるので崖下に落ちる心配はないと思うが、慣れるまでは安全運転を心掛けよう。

「うわあああつ、凄い、凄い！」

「動力源はどうなってるんだこれ。それに振動で尻が痛くなることもねえし、スゲエな。後でじっくり調べさせてもらっせ」

二人ともフロントガラスから前を覗き込んで盛り上がっている。

「ウナススより、断然早いつすよ」

「風が……気持ちいい……わ……」

「これは爽快ですね」

「流石です、ハツコン師匠！」

好評みたいだな。車の速度でも長い旅になりそうだが、全員で楽しく日々を過ごせたらいいけど。その為には自動販売機として何でもするつもりだ。

文明の利器

三十分ほどドライブを楽しんでいると分岐路に差し掛かったので、そこでいったん停車をする。

そこには魔道具の灯りが設置されていて、三つの道を照らし出していた。

三方向とも道幅が十メートルはありそうで、車で充分通れる道幅だ。経験からすると三車線の道路ぐらいはありそうに見える。

右の通路の真ん中には看板が設置されているのだが、そこには異世界の文字で何かが書かれていた。

「何々、この先行き止まり探索完了済み。つてあるぜ」

「聞いていた通りだね。じゃあ、真ん中と左端どっちに行くの？」

運転席と助手席で会話しているのだが、どっちに進むのかはヒュールミに一任している。

じつと道の先を見つめて腕組みをして黙り込んでいたのだが、ぱんつと勢いよく太股を叩き真ん中の道を指差した。

「ど真ん中を突っ切ろうぜ。わかんねえなら、真ん中一本勝負だ！」

「うん、間違えてもこのクリュマに長く乗れるだけだし。みんなもそれでいい？」

ラツミスが振り返ると、荷台のメンバーは全員親指を立ててOKサインを送っている。

全員の許可が取れたことだし、じゃあ真ん中の道を進むとします

か。

車は順調に真ん中の道を進んでいる。速度は今のところ50キロに留めているのだが、運転に安定性が出たらもう少し飛ばしてもいいかと思っている。

人の歩行速度がだいたい5キロだったとつる覚えしているので、単純計算で十倍の速さとなる。まあ、人は休憩も必要だし、その速度を持続できるわけでもないから実際はもっと差が開くだろう。

半年進んだ人の報告によると道は平らで曲がりもせず真っ直ぐに伸びているだけらしいので、事故の心配もない。

重量で道が崩れる可能性も考慮しているが、ピティーの重さ操作でかなり軽くなっているので安全性は高い。もちろん万が一谷底に落ちた時の対応策も考えている。非常手段なので使わないで済めば、それに越したことはないのだが。

真っ直ぐひたすら進み続けて一週間が過ぎた。今日は運転席にミシュエルが座り助手席にヘブイがいる。

今、車の運転席と助手席は二時間前後で交代することが義務付けられている。その理由はDVDやブルーレイが再生できる高性能ナビゲーションシステムの存在だ。

異世界ではナビゲーションシステムに何の価値もないと思っていたのだが、再生機能が思わぬ活躍を見せている。

運転席と助手席にいる二人は真剣に洋画を鑑賞中だ。荷台にいる残りのメンバーはどうかして覗き込もうとしているが、俺の巨体が邪魔でどう足掻いても無理らしい。

何故、こんなにも好評かというと、みんな暇なのだ。暗闇をひたすら真っ直ぐ進み続けているのもなく、初めは雑談や道

具の手入れをしていたが暫くするとやる事がなくなってしまった。
そこで、俺は DVDレンタル自動販売機 にフォルムチェンジ
をして、言葉が通じなくても大丈夫そうな作品をジャンル選ばず取
り出し、ナビで再生したところ絶賛となり運転席と助手席の人气が
さらに上がってしまったのだ……うん、俺のせいだね。

アクション映画とアニメと地球の自然や動物の映像が特に人気の
ようだ。

ずっと車に乗っているのも体に良くないので、丁度映画が一本終
わるタイミングで休憩をしてから席の移動も行っている。

じゃあ、後ろの荷台の人は何をしているのかというと、俺が出し
たカードゲームや玩具を使って盛り上がりたりしているんだよな、
これが。

「ここでカードを伏せて終わりっす！」

「ふっ、甘いぜシユイ。ここで罠カードを発動するぜ！ 更にスペ
ルを発動してお前の壁モンスターに光の一撃を喰らわしてやるっ！」

「うああああっ、やられたっす！」

ヒュールミがシユイにカードを突き出すと、上半身を仰け反りオ
ーバリアクションで応えている……楽しそうだね、二人とも。

ランク3 になって購入したことのない商品も出せるようになり、
ガチャガチャで買えるカードゲームを取り出して簡単なルール説明
をしたら、局地的ブームを巻き起こしてしまった。

ちなみに最強のプレイヤーはヒュールミだ。

他にも遊び道具は充実している。古い機種なのだが、子供のおも
ちゃを詰め込んだ自動販売機が昔にあって、それからトランプやマ
グネット式のオセロを取り出して楽しんでもらっている。

灯りは俺の体の光とヒュールミの発明品があるので充分に確保で

きていて、暇つぶしはできているようだ。

アニメ映画を観終えた男性二人が涙目で感動しているようだ、スタップロールが流れているので休憩と交代の時間か。

車を停止すると全員が地面に降り立ち、体を伸ばし柔軟を始めた。乗り心地は車の方がいいようだが、やはり窮屈なようで交代する際には体をほぐすのが習慣になっている。

「さて、それでは昼ごはん前にいつもの鍛錬を開始しましょう」

「うん、今日こそは負けないよっ！」

ラツミスが拳を打ち鳴らしながら、車から離れていく。

ヒュールミ以外が車の前へと移動したので、ライトの明かりで前方を照らす。

体が鈍らないように毎日二時間ずつ、昼前と夜に組み手をやって互いを高め合っている。時間のロスだと思われそうだが、睡眠時間は俺が寝ずの運転をしているので実際に歩いて進んだ人とは雲泥の差がある。

最近慣れてきたので車の速度も上げているから、この調子だと予想より遥かに速く最奥部に到達しそうだ。

ちなみに車のタイヤがパンクしたり部品が壊れたとしても、ポイントを消費して修理が可能なので少々の無理は問題ない。

仲間たちの戦いを眺めていると、唯一参加していないヒュールミのことが気になり視線を向けると、車を隅々まで調べている。

ボンネットを開けて中を見て感心しているが、彼女の頭脳でも外から見ただけではエンジンの仕組みは理解できないだろうな。

「分解してえなあ」

「い かんよ」

「ちっ、やっぱ駄目か」

一応釘を刺しておいた。この階層攻略が終わった後なら別にいいけどね。

今のところ順調と言っていいだろう。一日合計で四時間は体を動かし、睡眠も充分にとれている。野菜も提供して健康にも気を遣っているので、病気や体調不良もない。

ハンターは一般人より体が頑丈なので、その心配はあまりしなくてもいいらしいが健康が一番だからね。

鍛錬が終わりに近づいてきたので、全員の食事の準備を始める。いや、正確にはシユイの食事を先に大量に用意しておく。

折り畳みの机をヒュールミが地面に置いて、商品を次々と並べてくれている。

戦闘で役に立てないことを悔やむことが多い彼女だが、それ以外のことですら充分すぎるぐらい活躍してくれているので気にしないで欲しい。

「ふいー、お腹空いたっす」

「そればかりですね、シユイは」

「ハツコンの……ご飯……」

「今日のご飯は何かなー」

「ハツコン師匠、いつもありがとっございますー！」

全員が揃ったので食事を始める。みんな今日もいい食べっぷりだ。

運動不足を心配していたのだが、毎日四時間思いつきり体を動かすことでなんとかなっている。

「そう言えば、赤い杭見かけなくなったね」

ラッミスが道の端を注視しながら口にした。

「そうだな。昨日あたりから全く見かけなくなったぜ」

「もしかして、もう一番奥まで到達したっすか？」

「まだ……一週間……だよ……」

「ですが、この速度ならあり得るのでは。そうですね、ハッコン
師匠」

「うん」

毎日寝ずに走り続け、速度も最近では80キロを超えている。

徒歩の数十倍の速さで進んでいるので、あっさりと最長距離を越えた可能性は高い。この調子ならあと一週間ぐらいで行き止まりか、当たりだったのが判明しそうだ。

「おや、皆さん。アレは何でしょうが」

さつきから会話に加わずに、じつと車のライトが照らす道の先を凝視していたヘイブイが静かに立ち上がるとすつと指差す。

全員が釣られてその方向へと目をやると、そこには……赤と白い何か闇夜に浮かんでいた。

会合

ライトに照らされた赤と白い何かが左右に揺れている。それは徐々にこちらへと近づいているようだ。

「魔物でしょうか。ここにはいないかと思っていましたが現れたのなら仕方ありません」

「そうっすね。仕方ないっす」

「うん……倒さないと……」

「ここは私が先陣を切りますので、ハッコン師匠は見守っていてください」

「うちがやるっか」

ヒュールミを除いた仲間たちが立ち上がると武器を手にしている。若干嬉しそうに口元が緩んでいる気がするのだが。

あれか、ずっと鍛錬ばかりで思いつきり体を動かす機会がなくて、鬱憤が溜まっているのかもしれない。

「まてって、何か変だ。先に進んでいたハンターかもしんねえぞ」

ヒュールミが止めに入ると、全員が目を細めて揺れる物体を注視している。

赤と白のソレが近づくにつれ、違う部分も明らかになっていった。赤と白の下にはそっくりな痩せ衰えた顔があり、ふらつきながら

こちらに向かって来ている人間のように見える。
って、あれはもしかして!?

「赤と白じゃないっすか!」

「こんなところで再会するとは……」

驚くシユイとヘブイの声に反応して、頬のこけた顔の虚ろな瞳が俺たちに向けられた。

途端に瞳に光が宿り、ふらつきながらも懸命に駆け寄ってくる。

一応、敵対関係にあるので武器を構えかけた仲間たちだったが、数歩進んでその場に倒れ伏した二人を見て武器を下ろし、慌てて駆け寄った。

「どうしたのですか、そんなに痩せてしまつて」

「み……水と……何か食い物……を頼む」

赤が息も絶え絶えにそれだけを何とか口にした。

俺は即座に飲む点滴と言われているスポーツドリンクを出して

念動力で二人に渡す。もちろん、蓋は開けておく。

更に コンビニ自販機 にフォルムチェンジすると、ゼリー状の飲む栄養食を取り出しておいた。極度の飢えた状態だと固形の食べ物ではダメらしいので、消化に良さそうなこの食料品が適切だろう。

ペットボトルを掴み勢いよく飲み干そうとしているが、途中でむせて口からスポーツドリンクが零れ落ちている。

「がはっ、ごほごほっ」

それでも再び口に含み中身を全て飲み干した。続いて、ゼリー状

のソレを一気に吸い込んでいく。

そこでようやく人心地がついたようで、赤が大きく息を吐いた。

「マジで助かったぜ。今回ばかりは死を覚悟したんだが、賭けに勝つてやったぞ」

「何故、そんな飢えていたのですか、ケリオイル団長や副団長はどうしたのです」

問い掛けるへブイの声に耳を傾けていた赤が目大きく見開くと、勢いよく立ち上がるうとしたのだが力が入らないようで、その場に力なく崩れ落ちる。

「そうだ、オヤジたちがこの先にいるんだ！　こんなこと頼める立場じゃないのは重々承知しているが頼む、みんなを助けてくれ！」

震える手でへブイの襟元を掴み、赤と白が懇願している。

「落ち着けつて。この先にケリオイル団長たちがいるんだな。救ってほしいってことは魔物が現れたのか、それとも食料が無いつてことか」

暴れている白の頭を軽く押さえ、ヒュールミは優しく声を掛ける。彷徨っていた焦点が定まり、じっと彼女の顔を見つめていた。

「す、すまん。食料がないんだ。だから、俺たちはイチかバチかに賭けた。こつちに向かって来ているハンター……つまり、お前たちに会えるんじゃないかって。僅かな食糧で一週間歩き続けた。オヤジたちもまだ生きている筈だから。信じてもらえねえかもしれないが、俺たちは冥府の王の傘下から抜けた。オヤジたちを助けてくれ

頼む、何でもするから……」

「いらつしゃいませ」

弱々しい声でそんなことを言われて断れるわけがない。特に俺は本拠地から逃げる手助けをしてもらった借りがある。

それに冥府の王の配下を辞めたのが本当だとしたら敵対する理由はない。双子の兄の件があるので簡単に信用するわけにはいかないが。

「詳しい話は移動しながら聞け。ハツコンちょっと急いでもらうていいか」

「うん」

紅白双子をそつと荷台に横たわらせる。俺が出したバスタオルを重ねて敷いているので、少しは振動も抑えられると思う。

二人の話だと罾もなく一本道が続いているだけとのことだったので、アクセルを踏ませてもらうよ。さあ、飛ばしますか！

時速100キロで道を進みながら、双子たちの話に耳を傾けている。

「あれから俺たちがハツコンの逃亡に加担したと疑われてな、冥府の王が俺たちを切り捨てようとしたんだよ」

スルリムだけが咎められるという都合のいい展開にはならなかったのか。

ケリオイル団長たちの助力がなければ迷宮の探索は滞るというのに、思い切ったことをしてきたものだ。

「おまけにスルリイムも罪を問われ、部下への見せしめとして一緒に処分されそうになってな。そうになると兄貴も用済みとなるだろ。そこでスルリイムは兄貴や俺たちと一緒にここへ転移した」

「なっ、スルリイムも冥府の王を裏切ったのか！」

「ああ、俺たちもスルリイムが裏切るのは予想外だったが、かなり兄貴と仲が良くなっていてな。なあ、白」

「まさか、子供の兄貴に本気で惚れてるとは思いもしなかったよな」

その時、紅白双子以外の脳裏に俺が見せた、スルリイムと双子の兄との仲睦まじい映像が浮かんでいたのだろう。目を逸らして何とも表現し難い笑みを浮かべている。

「で、スルリイムに助けられたんだが、冥府の王の束縛の魔法を撃ち破り、強引に転移したツケで動けなくなっちゃったんだよ。食料も殆ど持っていない状態でスルリイムは動けねえ。そこで、俺たちはハッコンたちが近くまで攻略してくれていることに賭けた。もしくは他のハンターが近くにいなえかってな」

「オヤジたちはスルリイムの面倒を見ている。兄貴は離れることはできねえし、死なれたらまたあの痛みで苦しむことになるからよ」

団長と副団長は動きたくても動けない状況なのか。確かにスルリイムに死なれると団長たちのしてきたことが全て無駄になってしまっ

「一週間歩き続けて二人が死ななかつたってことは、団長たちが生存している可能性は高いか」

「でもよ、俺たちに渡した量より少なかったんだ。だから、少しでも早く……あと二、三日耐えられるかどうか……もう、ダメかもしんねえが」

赤は暗闇を見上げ苦渋の表情を浮かべている。

そうか、二人は暗闇しか見えない状況なので、今どの程度の速度が出ているのか理解していないのか。

食料の殆どない二人が不眠不休でそんなに進める訳がない。100キロで走らせれば一日もかからないだろう。

「安心しな。このクリュマはめっちゃ速いぜ」

「うんうん、絶対に間に合うよ！」

自信満々に言い切るヒュールミとラツミスの態度に安心して緊張の糸が切れたのか、赤と白が気を失った。

絶対に間に合ってみせるから、安心して寝ていていいよ。

全国自動販売機巡りの旅で鍛え上げたライビングテクニクを見せてやるうじゃないかっ！

と意気込み、真っ直ぐ伸びているだけの道を猛スピードで進んで行く。

いつもなら晩飯時の時間になったが、ここは団長たちを見つける方が優先だ。みんなもそれを理解しているようで何も言っていない。シュイも手持ちの保存食を齧ることで耐えてくれている。

そろそろ、給油しないと危ないぐらいメーターが減っていたのだが、ライトの照らす先に複数の人影が浮かんだので慌ててブレーキを踏んだ。

「きゃあああっ！」

「うおおおっ！」

可愛らしい叫び声と野太い悲鳴が前後から聞こえたが、謝罪は後でしよう。

もう少しで交通事故になるところだったが、何とかギリギリのところまで止まってくれた。

「な、なんだ、これは……」

この声はケリオイル団長だな。立ち上がって警戒しているようだから、落ち着かせる為に「いらっしやいませ」と元気よく発音した。

「ハツコン？ えっ、ハツコンなのか……また妙ちくりんな形に」

いや、それは俺じゃなくて商品だけど、その説明も後だな。

荷台から仲間たちが飛び降りるが、ラツミスは俺を抱き上げてから一緒に降りてくれた。

「お前さんたちがいるってことは、バカ息子共は」

「いりゅよ」

「そつか……はは、ありがとう……よ」

残る力を振り絞って立ち上がって警戒していたのだろう。膝から崩れ落ちたところを、ヘブイに支えられた。

副団長もスルリムも兄も地面に横たわって目を閉じている。死んでいるのかと焦ったが、胸が上下しているので眠っているだけのようだ。

「死んじやいねえよ。体力を温存させる為に、フィルミナが睡眠の魔法で眠らせているだけだ」

それを聞いて安心した。じゃあ、紅白双子に渡したセットを全員分用意させてもらおう。

この後、もめることになるとしても、まずは体力回復させないと話し合いもできないからね。

昨日の敵は今日の

「人間の施しは受けない……」

声を出すのもやっとな状態で気丈に振る舞うスルリィム。

全員を眠りから覚まし、スポーツドリンクと食料を渡したのだが一人受け取るうとしない。ここまで人間嫌いを貫き通すと感心するよ。

「駄目だよ、スルリィムお姉ちゃん。このままじゃ、死んじゃうよ」

少し元気になった双子の兄　灰が涙目で彼女の手を握っている。この灰という呼び名は「弟たちが赤と白ならボクは灰と呼んでください」と自ら提案した。

「私は人間に情けをかけられるなら、死を選ぶわ。それに、何が入っているかわかったものじゃない……」

毒の心配をしているのか。そんな弱り切った状態の相手をわざわざ毒殺するわけがないのだが。

「お姉ちゃん。ほら、ボクが一口飲んで毒が無いのは確かめたら。これを飲んで」

そう言っただけ飲みかけのペットボトルをスルリィムに差し出している。

当然拒むものだと思って見ていたのだが、瞳に生命の光が宿りペットボトルの飲み口を凝視している。そして、呼吸も荒くなってきた。

ているなあ。

「そ、そこまで言うのなら、もらおうかしら」

飲むんだ……周りのみんなもどん引きですわ。

顔を赤らめながら飲み口を含み、ゆっくりとその中身を流し込んでいく。

灰が協力してくれればスルリイムの説得も可能だと考えていたのだが、これは思ったより楽に事が運びそうな気がする。

俺は予め器に移しておいたレトルトのおかゆを灰に渡していたのだが、今度はこれを匙ですくって食べさせようとしているようだ。

「はい、お姉ちゃん。あーん」

「えっ嘘。そこまでしてくれるなんて……あ、あーん」

もう、何も言うまい。チョロすぎるとは思うが、あそこまで幸せそうに頬を緩めている顔を見たら、どうでもいい気がしてきた。

結局、おかゆを食べきりスルリイムは会話ができるぐらいは回復したようだ。

今は灰が背中を支えて上半身だけ起こしている。

「弱っている時に悪いが話し合いを始めさせてもらっせ」

「人間に話すことなどない」

碌に動けないのに強気の状態を全く崩さないな。

「じゃあ、ケリオイル団長と話をすっか。あんたは反論があれば口を挟んでくれてもいいんだぜ」

口を噤んだままそっぽを向いている。まともに対応する気はないようだ。

ケリオイル団長はスルリムと違い何でも受け入れる気のように、胡坐をかいて勢いよく飯を喰らっている。

「んじゃあ、ケリオイル団長たちはもう冥府の王に従う気はないということ、間違いないんだな」

「おう、そうだけ。従うも何も、もう戻れねえからな」

「戻っても殺されるだけです」

フィルミナ副団長はまだ動けないようで、ケリオイル団長の脚に頭を乗せて寝ころんだまま答えている。

こうしていると仲の良い夫婦に見えるな。

「ただ……息子のことがあるから、スルリムには逆らえないぜ」

今も灰の命を握っているのは彼女だから、それは仕方ないとは理解できる。

一番の方法は仲間に引き込むことだが、どうすればいいのか。

「お姉ちゃんも冥府の王の所に戻れないのだから、今は一緒にいようよ」

「で、でも、私は人間と……」

「ボクだって人間だよ。お姉ちゃんはボクのこと……嫌い？」

スルリイムの手を包み込むように握りしめている涙目の灰。
そっちの気は全くないが、中性的な少年の懇願する姿はかなりの破壊力を秘めているようで、仲間たちにも影響を与えている。女性陣は目を輝かせてことの成り行きを見守り、紅白双子は憔悴しているというのに親指を立てて応援しているつもりようだ。親であるケリオイル団長とフィルミナ副団長は息子の説得方法に感心しているようで、立派になってと言わんばかりに頷いている。

「灰のことは、好きよ……でも、それとこれとは」

「別じゃないよ。人間が信じられないなら、ボクを信じて！ ボクは絶対にお姉ちゃんを裏切らないからっ！ ボクも大好きだよ！」

断言する灰の一撃が止めを刺したようで花が咲いたように笑うと小さく一度頷いた。

「だ、大好きなんて……わかったわ。今は協力することを誓う。慣れ合う気はないけどね」

「ありがとう、お姉ちゃん！」

後ろからスルリイムに抱き付いた灰の頭を優しく撫でている。

その表情は優しく慈愛に溢れているようにも見えたが、頬が上気して鼻から血がすーっと垂れていなくなったら完璧だったな。

これで味方が増えたと純粹に喜びたいところだが、一度裏切られた過去があるので本当に信用していいのか不安が残る。

こついつ時にキコユがいてくれたら、相手が本心かどうか探ってみられるのに。今頃何をしているのだろうか。畑さんには合流できたかな。

と、人の心配をしている場合じゃないか。彼らを荷台に乗せてこの道を進んで行かないと。

彼らが完全復活するまで待つことも考えたが、時間は有限だ。この道が何処まで続いているかもわからないのだから、少しでも進んでおかないと。

全員を詰め込むと、やはり荷台がかなり狭くなってしまっている。この荷台、ピティーの加護の有効範囲に合わせて幅と奥行きが三メートルなのだが、団長たち六人が追加となるとかなり限界に近い。ということ、二人ほど車の屋根に移動してもらったこととなった。

「風が気持ちいいな……白」

「そうだな赤……この役割は俺たちだっつてわかっていたさ……」

振り落とされないように縄で固定されて寝そべっている紅白双子が、何か言っているが気にしないでおこう。

体に力が入らないようだから丁度いいよな、うんうん。

車内には助手席にスルリムが座り、その上に灰がちよこんと乗っている。正直、狭いと思うのだが至福の表情を浮かべているので問題ないようだ。

運転席にはケリオイル団長が座っている。かなり無理をしてきたようなので、席を倒してゆっくり体を休めてもらおうことにした。

「ハッコン、これマジで最高だな。天気の良い日に草原で思いっきり飛ばしたら最高だぜ、きつと」

「いらっしやませ」

いいよね、天気の良い日のドライブ。ダンジョンでの騒動にケリが付いたら、ラッミスやヒュールミたちと車でピクニックでも行き

たいな。

「ハツコン、本当にすまなかった。お前さんを利用しようとしただけじゃなく、敵になって仲間やダンジョンの人々を裏切っちゃった。もう信じてもらえないかもしれないが、今度こそは絶対に裏切らねえ。あ、いや、息子のことがあるから断言は……んー」

前半は謝罪だったのだが今は発言を躊躇っている。

つまり、スルリウムが味方である限りは裏切らないってことだね。信じるよ、ケリオイル団長。

「私はスルリウムが再び敵に回る場合、説得を試みてそれでも無理な時は敵につくかもしれないませんが、決して皆さんの寝首を掻くような真似はしません」

絶対に裏切らないと口先だけでも言っておけばいいのに、団長も副団長も正直に話してくれている。

彼らの苦悩は既に知っているのです、スルリウムに注意をしておけば大丈夫だと信じたい。

「うちは信じるよ！ だって、仲間だしね！」

「だな。この飢えて衰えた姿が芝居だとしたら、どんな嘘を吐かれてもどうせ見抜けねえし」

「ハツコン師匠が信じるのであれば、異論はありません」

ラツミス、ヒュールミ、ミシユエルは団長たちを受け入れるつもりのようなのだ。しかし、元患者の奇行団所属だった残りの三人は黙ったままにいる。

付き合いの長い分、彼らの心中は複雑なようで真摯な眼差しを一人に注いだまま、何も口にせず沈黙を守っていた。

「すまなかった、へブイ、シユイ、ピティー。わかってくれとは言わねえ。お前たちを捨てて裏切つちまったことは謝罪する」

「本当に申し訳ありません」

謝罪をする夫婦に加え「おーれーもーわーるーかーったー」「おーなーじーくー」屋根の上から風圧に負けずに叫ぶ紅白双子の謝罪の声が聞こえる。

「皆さん、わかっていませんね。私たちはそんなことで怒っているのではないのです」

へブイの言葉が意外だったのか、ケリオイル団長たちは眉根を寄せ小首を傾げると、考え込むような仕草をした。

「シユイ、言わないとわからないようですよ」

そう促されたシユイは胡坐をかいて勢いよく膝を叩くと、大きく息を吸った。

「怒っているのはそんなことじゃないっす！ もっと仲間を信じて相談して欲しかったっす！」

へブイが靴の秘密を隠していた時にシユイは言っていたな。仲間ならもつと自分たちを信じて相談しろ、勝手に決めつけるなど。

「行き詰って間違った道に走るなら、全力で止めたっす。納得でき

ることなら喜んで手伝ったつすよ。何でみんな勝手に抱え込んで勝手に判断するっすか」

「ピティーンは……みんなに相談……して……怒られたのに……」

不満を吐き出したシユイに続いて、ピティーンが台無しにすることを呟いているが愚痴は後で聞かせてもらおう。

「私も靴の秘密を黙っていたことでシユイに怒られましてね。自ら愚か者だと名乗っているのですから、カッコ悪いことも情けないことも悩みも暴露していきませんか。あつ、性癖や女性関係は秘密にされて結構ですので」

前半は良いことを言っていたのだけど最後に台無しになったな。フィルミナ副団長が鋭い視線を運転席に居るケリオイル団長に突き刺している。

「私としては女性関係の方が知りたいのですが」

「あつ、はっはっは、へブイも面白い冗談を言えるようになったじやねえか。あーそのなんだ、へブイ、シユイ、ピティーン、ありがとうな」

「こんな私たちの為に怒ってくださってありがとうございます……で、団長、女性関係についてなのですが」

まだ動くのも辛い筈なのにずると荷台を這いずり、運転席に近づいて行くフィルミナ副団長。運転席は逃げ場がないので、このまま追い詰められて白状させられる羽目になりそうだ。

これで愚者の奇行団関係の一連の事件は幕を下ろしたのかな。わ

だかまりが全て溶けた訳じゃないけど、今は素直に彼らの合流を喜んでおこう。

永遠の果てに

人数が大幅に増え、積載量を軽々とオーバーしている一行だったが、今のところ順調に進んでいる。

これも全てピティンのおかげだ。重さ操作 との相性の良さが抜群で彼女がメンバーに居ることを、これ程ありがたいと思ったことはない。

あれから三日が過ぎ、ハンターの驚異的な回復力を見せつけるようにケリオイル団長たちが復活すると、俺の提供したゲームに興じている。

スルリイムはというと常に灰と一緒に行動して、こつちが何を提案しても灰を通してでなければ対応する気がないようだ。だんだん彼が通訳に見えてきた。

あえて敵対するような行為をするわけでもなく、大人しくしてくれているので今はそれでいいと思っている。少し機嫌が悪くなるとそれを察して灰が甘えたりすると一撃で機嫌が直る。

最近では甘えてもらう為にわざとやっている節があるが黙っておこう。

休憩タイムになったので簡易トイレと飲み物を用意しておく。今日からはケリオイル団長たちも鍛錬に付き合うそうで、総勢八名が暴れているので崖から落ちないか冷や冷やしながから見守っていた。

「ハツコンは変わった魔道具ね」

スルリイムが俺の前に歩み寄ると氷のように冷たい目で俺を見ている。

少し離れて後方に灰が控えているが、いつもの子供らしい表情で

はなく真剣みを帯びた大人の顔だ。スルリムが余計なことをしな
いか警戒しているのだろう。

どんな相手でも俺のすることは決まっている。

「いらっしやいませ」

「この茶色く甘い飲み物を」

そう言ってココアのボタンに白く細い指を伸ばす。

カコンと取り出し口にココアが落ちたので 念動力 で目の前ま
で運んでいく。

「結界と念動力を操る魔道具。そんなもの見たことも聞いたことも
なかったけど、外では魔王軍に敵対する動く焔がいると聞いたこと
があるわ。眉唾物だと笑っていたけど、嘘ではなかったのかもしれない」

あ、それはキコユが言っていた焔さんのことだ。

確か魔王軍と戦って仲間を逃がす為に犠牲になったんだよな、男
として尊敬したくなる焔だ。

「まだ警戒しているようだけど、もうこやつらを襲うつもりはない。
魔王軍にも捨てられた身。これ以上敵を増やすのは得策ではないわ」

表情に影が差した。命の恩人として慕っていた冥府の王にあっさ
り処分されそうになったのだ、どれだけショックだったことか。

今も冥府の王にもらったと言っていた、銀の茨が腕に絡みつくよ
うなデザインの趣味の悪い腕輪を擦っているのが、吹っ切れていな
い証拠だろう。

「何があってもボクはスルリムお姉ちゃんの味方だからね！」

完璧なタイミングで灰が彼女の腕にしがみ付いた。落ち込んでいた時に優しい言葉を口にする癒しの存在。彼女がメロメロになるのも納得できる。

「私は灰がいればそれでいいのよ」

「くすぐつたいよ、お姉ちゃん」

抱き寄せて頬をすりすりしている姿は性別が逆転したら完全に犯罪だ。いや、この状況でも日本ではアウトか。

この調子だと灰さえいれば裏切ることはないだろう。だからといって油断はせずに警戒態勢を持続するけど。

俺の前で堂々といちゃついている二人の後方から狙いが逸れた流れ矢が飛んで来たので、結界で防いでおいた。

「あら、こんな私でも庇ってくれるのね。人間よりは信用できそう」

「ありがとう、ハツコンさん」

「またのごりようをおまちしています」

客は守る。商売をする者としての常識だよ。

実際の話、スルリムが仲間になってくれれば戦力として期待できる。雪精人の強さは何度もこの身で経験しているので、このままなし崩し的にこちらの陣営へ引き込めたらいいのだが。

これで実は団長たちがぐるになって俺たちを騙しているとしたら、もうどうしようもない。そうなたら命懸けで仲間を守るしかない。

考え事をしている間に鍛錬が終わりそうだ、いつものように好物を用意しておこうか。ヒュールミも手慣れたもので折り畳み式の机を用意してくれている。

ずらっと並ぶ料理の数々をスルリイムが横目でチラチラ見ているのだが、いつもこうやっていられるだけで一緒に食事を取ることなく灰が持つてきた食事を食べているだけだ。

まあ、好物はあの拠点に居る時に学んだので知っているのだが、あの時は俺の性能を隠していたので、今のように種類が豊富ではなかった。

彼女の視線を追っているとピティーに用意した食後のスイーツとパスタ類に興味があるように見える。

「あに」

俺は灰と発音できないので彼を呼ぶときは「あに」としている。俺に歩み寄ってきたので、スルリイム用に用意したプリンとカルボナーラを渡した。

「これって……スルリイムお姉ちゃんにですか？」

あえて彼女に聞こえるように大きめの声で問いかける頭の良さ。こうすることにより、俺は貴女に好意的なのですよ、というアピールを手伝ってくれている。

「うん」

「ありがとう、ハツコンさん。お姉ちゃん、これ食べてっつて！」

とことこ歩く後ろ姿に思わずほっこりしてしまう。あの動きも灰が計算したうえでやっているのだとしたら、もう脱帽するしかない。

「そう。でも、別にそういうものに興味があるわけでは」

「一緒に食べようね！」

「し、仕方ないわね」

笑顔で押し切ったな、お見事。

お得サイズだから二人で分けられる量だけど、おかわりを用意しておこうか。

人間を毛嫌いしている彼女だからこそ、自動販売機の俺なら突破口が開けるかもしれない。昔から胃袋を掴んだら勝ちというからね、徐々に魅了してみせよう。

更に一週間経過したのだが、スルリムは俺に対してだけ態度が軟化してきている。そんな彼女の対応の変化を感じてなのか、ラッミスとピティーが目を細めてこっちを見ている時がある。

疑う気持ちはわかるけど少しでも打ち解けてくれている今は、温かく見守っていて欲しい。

旅は順調だとおもつ。魔物は現れず邪魔もなくひたすら真っ直ぐ進めている。

毎日最低四時間は体を動かし、移動中は映画鑑賞とゲーム、それに購入したことがない物を出せるようになったおかげで、雑誌の類も豊富に準備できるようになった。

日本語は読めないが漫画の絵を見ているだけでも楽しいらしく、週刊漫画雑誌が大人気でヒュールミは既にひらがなとカタカナをマスターしている。

これが晴天の草原ならもつと楽しいのだろうが、車のヘッドライトと魔道具の灯りで照らされている範囲以外は漆黒の闇。

ここを一人で歩き続けたハンターは尊敬に値する。俺なら途中で気が触れてしまいそうだ。

最近では気分転換にカラオケ大会が移動中に始まることがある。俺が ジュークボックス で曲を流すことがたまにあったのだが、お気に入りの曲を覚えたらしくラツミスたちが口ずさむことがあった。

折角だから歌わせてみようよと カラオケ にフォルムチェンジを試みたのだが、これが大好評となり曲を覚える為に ジュークボックス で流す曲を注文されることも増えている。

近所迷惑を考えずに大声を出すというのはストレス発散にもってこいなので、この陰気な雰囲気吹き飛ばすのに役立つてくれると思う。

そんな大所帯でのにぎやかな旅は唐突に終わりを告げた。この階層に挑んでから三週間程度で道が終わってしまったからだ。

既に攻略済みの右の道と同じように道が途絶え、そこから先は深淵が口を開けている訳ではない。道の先には両開きの扉が堂々と佇んでいた。

「ここが終着点か。真ん中が当たりだったようだな」

ケリオイル団長が荷台から飛び降りて扉に近づいて行く。俺たちも少し遅れて扉へと歩み寄る。

正面に堂々と佇む両開きの扉は岩肌埋め込まれているように見えた。

扉の幅は道幅とほぼ同じで高さは倍以上あるだろうか。表面には巨大な木が精密に彫りこまれているのだが、葉が一枚も生えていな

い。
無数に枝分かれをしていて小さなリンゴのような木の実が描かれているだけだ。だけど、その木の実の部分だけ妙に深く彫られている。

「ここに何かはめ込めそうな形をしてやがるな」

ヒュールミが一番下の方にあつた木の実を覗き込み、ぼそりと呟く。

こういつた扉の仕組みとしてありがちなのが、何か重要アイテムをハメたら鍵が解除するというパターンだが。

「まずは、うちが押し開けてみるね」

「畏はねえようだが、ハツコン気を付けてやってくれよ」

「いらっしやませ」

ラツミスの怪力で開くか試してみるのなら 結界 をいつでも張れるようにしておこう。

両手を扉に押し当てて、一気に押し込んでいる。足下が陥没しているので全力で挑んでいるのは確かなのだが、扉はびくともしない。

「ふんぬっつっつ、うごおおお、ぬっつっつおおああー！」

気迫は伝わってくるが、どうやら開かないようだ。それでも一分間粘っていたが、諦めて扉から距離を取る。

「ごめんね、全然動かなかった」

「ラツミスの方で無理なら、何かしら特別な方法で開ける必要があるってことか」

全員で扉を隅々まで調べてみたのだが、怪しいところはその木の
実の部分ぐらいしかなかった。

ラツミスに降ろしてもらい目の前の木の実が彫られた部分を観察
していたのだが、ふと思いついたことがある。

この大きさ形にぴったり一致しそうな物を自分が持っていること
に気が付いた。

「こいん」

俺の発言に全員が反応してこっちを見た。

「かいせうね」

「しのこいん」

「階層主のコイン……か！」

真っ先に通訳してくれたヒュールミの言葉に全員が息を呑んで、
扉に彫られた大樹を見つめている。

俺の勘が的中していたら、階層主のコインはこの為にあつたとい
うことか。

階層主とコインと願

「ちよっくら試してみるぜ」

ヒョールミの指摘が当たっているのか確かめる為に、ケリオイル団長が階層主のコインを一つ取り出し、近くに会った木の実の穴と大きさを比べている。

「こりゃ、ぴつたりだな。てことは、階層主のコインはここで使って扉を開けてることか。穴は合計幾つある？」

扉の全体図が良く見えるように車のヘッドライトをハイビームにした。

全員で扉を調べコインがはまる穴を数え始める。

調べた結果、穴は全部で七つあった。

「七つの穴ってことは、この永遠の階層を除いた階層の数と一致するぜ」

「偶然にしては出来過ぎだな。階層主のコインを八めるつてので間違いなさそうだが、問題はコインの種類が同じでも大丈夫かってことだ。俺が持っているコインは四種だが、始まり、亡者、清流、迷路だけだぜ」

ケリオイル団長が袋から四枚のコインを出して俺たちに見せた。コインに階層主の姿が彫られているので間違いはない。

「えと、階層主のコインはハッコンが持っていたよね」

「いらつしゃいませ だすよ」

俺の中に入っていたコインを取り出してみる。

清流の湖階層の八足鰐、灼熱の砂階層の双対鬼、闇の森林階層の老大木魔の三種しかなかった。

これで合計七だが、清流の湖階層の八足鰐がダブっている。

「数はどんぴしゃだがよ、八足鰐が二枚で犬岩山がねえな。どうする、試してみるか？」

「ここまで来てやんねえのは無しだろ。これはハメる順番とかあるのかね」

手の平の上に四枚のコインを重ねながら、ケリオイル団長が疑問を口にした。

「おそらくだが、大木はこのダンジョンを表しているんじゃないか。となれば、一番上の木の実が始まりの階層の階層主のコインだろうな」

ヒュールミの指摘に頭があれば頷いていた。ダンジョンの上の階層から順にコインをハメていくわけか。木の実の一つも横並びをしていないので、上から順に当てはめることはできる。

「まあ、やってみつか」

一番上の高いところには扉の凹凸を利用して赤と白がするすると登っていく。

念の為に上から順に入れていくこととなり、始まり、亡者、清流、

迷路、灼熱、闇の六つをはめ込んでいった。

コインを入れる度に木の実が金色に輝き眩い光を放っていく。扉の前はその輝きで昼間のように明るくなり、残すは一番下の木の実だけとなる。

「階層主のコインで正解みたいだね、後は一番下のここに八足鱈のコインをハメるよ?」

ラツミスが全員に確認を取ると静かに頷いた。

できればこれで正解であって欲しいが、間違っていたらこの道を引き返して犬岩山を倒しに行かなければならなくなる。正直、二つの意味で勘弁してほしい。

恐る恐るラツミスが八足鱈のコインを穴に入れると 特に反応がなかった。身が光ることもなく扉が開くこともなく、ただ沈黙だけがその場を支配していた。

「おいおい、マジかよ。犬岩山のコインが必須ってか、はああああ」

ヒュールミが額を叩き真つ暗な天を仰いでいる。

今から戻って犬岩山をどうにかしないといけないことを理解して、肩を落としたため息を吐く者が続出していた。

ここは扉を開く方法がわかっただけでもよしとしないと。かかる日数も把握できたし、今度はもつと早く移動できる自信がある。

気を取り直して帰宅準備を始めようとしていたのだが、突然「ちよつと待ってくれ」とヒュールミが声を上げた。

そして、荷台に駆け寄ると中の荷物を探り、一つの小さな箱を取り出す。

あつ、それって荷台に置いてあった熊会長からのプレゼントか…
… ああつ、もしかして!

「これは熊会長が最深部に到達したら開けてくれって手紙を添えて、荷台に忍ばせていてくれたものなんだが、オレの想像が的中していたら」

願望と期待を込めて小箱が開く瞬間を見守っている。

その中から出てきたのは一枚のコインで、表面には岩肌の犬が彫り込まれていた。

「やっぱりな！ 犬岩山を唯一倒したのが会長たちのチームだって聞いてたから、もしかやと期待していたんだが」

熊会長としては最下層でコインの数だけ願い事が叶うというのを知っていたので、その願い事の数を増やせるように気を遣ってくれたのだらう。用途は違うが熊会長には感謝しないとな。

「これで揃ったのか！ 会長には感謝しても感謝しきれねえな」

「熊会長マジカッコー！」

「色熊男っ！」

ケリオイル団長と紅白双子が熊会長を褒め称えている。

みんなもつられて熊会長を褒める言葉を口に行っているので、俺も心の中で感謝の言葉を呟いておいた。

「よっし、感謝はこれ位にして、コインをハメようと思うがその前に……この扉が開いた後のことを話し合っておこうぜ」

ヒュールミは焦ることなくコインを手にしたまま、その場に座り込んだ。

興奮状態のまま勢いで扉を潜りそうだった仲間たちだったが、その言葉に少し冷静さを取り戻したようで全員がその場に腰を下ろした。

全員の顔を見回してから満足そうに一度大きく頷くヒュールミ。自分だけ戦力になれないことを悔やんでいる場面を何度も目撃しているが、冷静に状況を見極める姿に何度助けられてきたことが。

「ここから先は未知の領域だ、情報が全くない。ここが最終階層で扉の先に願いを叶える何かがあるのかもしれない。実は階層主やもしくはダンジョンの主が待ち構えているのか、それは誰にもわかんねえからな。対処方法を決めておこうぜ」

「そうだな。落ち着かねえとな。俺たち家族はもし願いを叶えられるなら、願いはたった一つ……灰の負の加護である腐食を無くすこと、ただそれだけだ」

ケリオイル団長と家族が全員に頷いている。その隣でスルリイムが複雑な表情を浮かべているな。微笑んでいるようにも、泣いているようにも見えた。

「ボクはスルリイムお姉ちゃんはずっと一緒に居てくれるなら、呪いを解かなくても大丈夫だよ」

そう言つてスルリイムを見上げる灰の表情は明るい。でも、彼は今の状況を崩さないように無理しているのではないだろうか。握りしめている拳が軽く震えている。

「私は灰から離れないわ。でも、灰は呪いが解けても私と一緒にいてくれる？」

「もちろんだよ、お姉ちゃん！」

そこで即答する決断力。空気を読んで最適な答えを導き出した筈なのだが……見つめ合って微笑んでいる二人を見ると、灰の言動は本心のように思えた。

これだけの時間を共に過ごして愛情を受け続けていたら情が湧いてもおかしくない。

「あ、でも、願い事の数に余裕があったら、美人で性格が良くて料理ができて一途で胸のデカい彼女が欲しい！」

「あつ、ずるいぞ、赤！俺も同じ条件で！」

赤と白がビシツと手を挙げて台無しにする発言をしている。

ケリオイル団長とフィルミナ副団長からの容赦のない一撃を後頭部に受けて、地面をのた打ち回っているので暫くは大人しくなるだろう。

「願い事ですか。私はもう叶いましたので皆さんに譲りますよ。もし余ったら、靴の城を要求させてもらいましょうか」

へブイは人生の目的を達成したことで一定の欲以外が消えたよな。その残った欲が問題なのだが。

「願い事は他の人に譲るつす。代わりに腹一杯食べさせてもらったらいいつすから」

シユイもぶれないな。それでいいなら幾らでも食事を提供させてもらつよ。

「ピティーも……願いは……叶ったから……必要ない……」

長い前髪の間隙から垣間見える目が、じつと俺を見つめていた。ここで叶った願い事を問うのは止めておいた方が良く、男の本能が叫んでいる。

愚者の奇行団の願いは灰の呪いを解くことだけ。みんな、何かしら強い願いがあつてダンジョンを攻略していたという話だったのに、共に旅をするうちに満たされ解決していったのか。

愚者の奇行団と一緒に過ごした時間は無駄じゃなかったんだな。

「私は望みがあるにはあるのですが、こればかりは自分で手に入れなければならぬものですので、ご遠慮させていただきます」

ミシユエルは俺を正面から見据えてきつぱりと願い事の権利を放棄した。

俺を慕う弟子。彼のことは実はよくわかっていない。姉や兄が多いらしいが、故あつて仲が悪いらしい。

姉の一人とは気が合うのだが、最近会ってないと以前零していたな。

謎多き美青年だ。何か手伝えることがあるのなら、ダンジョンで一件が片付いたら力になってやりたいのだが。

「オレも別に叶えて欲しい願いはねえな、ラツミスは？」

「うちもないよ。自分のことに関してならだけどね」

そう言つてヒュールミとラツミスが俺を見つめている。

二人が何を言いたいのか問いただすまでもない。二人の願いは伝わっているよ。

全員の視線が俺に集まっているのがわかる。何を待っているのか

も、理解しているつもりだ。

「にんごんに」

「もとりたい」

願いを口にしたのだがカッコよく決まらないのは、もう仕様と
思っ
て諦めよう。

俺が全員の前でハッキリとこの望みを口にしたのは初めてのこと
じゃないだろうか。

仲間たちが笑みを浮かべて大きく一度頷いてくれた。

「ありがとう」

心からの言葉が自然に漏れる。

今まで自動販売機から人に戻ることへの葛藤はあったが、どんな
結末が待っているにしろ人となり、みんなと共に自分の脚で歩みた
い。

これが偽りない今の本心だ。

「でもね」

「だんちよう」

「ねがいから」

ここは譲れない。幾つ願いが叶えられるのかはわからないが、た
った一つだけだった場合は灰の呪いを優先したい。

「でもよ、願いが一つだけだったとしたら、それだとお前さんの人
間になる願いが」

「だんしよん」
「まだありゆ」
「あとまあし」
「でいいよ」

別に今、無理して叶えなくてもいいのだ、俺の人間に戻る願いは。

「ああそうか。この世界にはまだダンジョンあるもんな。ここで願いがかなえられなかったとしても、別のダンジョン攻略すればいい話か。オレもそんな時は同行するぜ」

「うちも、もちろん一緒に行くよ！」

「師匠、私を置いて行かないくださいね！」

三人は即座に察して俺に付き合ってくれる意志を示してくれた。それが本当に嬉しくて、咄嗟に「ありがとう」と返せないぐらい動揺している。

「ありがとよ、ハツコン。俺たちも万が一そうになったら、一緒にダンジョン攻略するぜ。拒否権は無しだからな」

「ええ、嫌と言っても付いて行きますよ」

「だな。ハツコンといたら美人と仲良くなれる機会が増えそうだし」

「何気に美人遭遇率たけえよな、ハツコンは」

「そして、弟たちはフラれて、ハツコンさんがモテるんだね」

「ふふふっ」

灰の鋭い突っ込みに、赤と白がうなだれている。隣で笑っているスルリムも含めて、仲の良い家族に見えるよ。

年齢差の壁はあるかもしれないが、いつの日かスルリムも本当の家族になる日が来るのかもしれない。

「団長が行くなら団員として同行しないといけませんね」

「仕方ないっすよね、うんうん」

「それが……団員の……お仕事……でも……ハッコンが……一緒に……喜んで……」

三人が今も団員であることを口にする、ケリオイル団長が大きく目を見開いて、口元を押さえている。俯き微かに肩が震えているが、そこは触れないでおこう。

「お、おう。団長命令だ、頼んだぜお前たち」

「はい！」

ニヤリと無理して口元に笑みを浮かべたケリオイル団長の言葉に、団員たちが即座に声を揃えて返事をした。

ここまで色々あったけど、愚者の奇行団は復活したとみていいよ
うだ。

「うっし、願い事と今までの争いはこれですべて解決だ！ 後はこの先に待ち構えている……かもしれない敵についてだが」

「ヒュールミ、んなもんは、やってみねえとわかんねえだろ。それに、この面子で負けると思つか」

ケリオイル団長が仲間たちを見回し、自信満々に両腕を広げる。過信は危険だと思うが、確かにこの面子だと負ける方が難しそうだ。

「ちげえねえな。まあ、それでも幾つかの行動を決めておこうぜ。あと、ハツコン、飯頼む！」

「いらっしやいませ」

ダンジョン攻略前の最後のご飯になるかもしれないのだ。豪勢にいかせてもらおうよ！

その後、昔話と俺の用意できる最高の食事で盛り上がり、十分な休養を取った。

全員の疲れが取れた体調万全の状態最後のコインを扉に はめ込んだ。

扉の先へ

犬岩山のコインがはまると扉全体が光を放ち、両開きの巨大な扉がゆっくりと開いていく。

ヒュールミ以外は車や荷台から降りて門の前に並んでいる。俺はいつもの特等席であるラツミスの背負子の上だが。

そして、俺の真後ろに車が並んでいる。二メートル以上離れると車を運転できなくなるので、これ以上は離れるわけにはいかない。

今の隊列は前衛が数歩前に出て横並びで武器を構えている。そして後衛が次に位置して最後尾にラツミスが入る訳だが、その背後に車と荷台が続きヒュールミはそこにいる。

扉が完全に開き、その先にあるのは巨大な空間だった。磨き上げられた床石に巨大な柱が何本も規則正しく配置されているのだが、天井までが異様に高く人工的に作られたとは思えない。

全て白で統一された神殿のような内観だ……本物の神殿を見たことないので、ただのイメージだが。

「奥が見えないぞ、おい」

運転席に居座っているヒュールミが窓を開けて、感嘆の声を漏らしている。

「広いねー、ねっ、ハッコン」

「いらっしやいませ」

本当に広いな、この神殿っばい所。

はしゃいでいる二人に同意しながら、目の前の光景に感動してい

た。

魔道具らしき灯りが見当たらず頭上には天井があり、陽が射し込んで見える様には見えないのに晴天の屋外のように明るい。

「魔力が満ちていますよ、ここは」

「確かに濃密な魔力だ」

魔法が操れるフィルミナ副団長とスルリムが鼻を鳴らして嗅ぐような動作をしている。両者とも魔力を操れるようなので、俺たちにはわからない何かを感じ取っているのだろう。

「何かあると言わんばかりの場所だぜ。お前ら気を付けろよ」

「任せてくれよ、オヤジ」

「大丈夫だって」

団長親子は気負いもしてないし、油断もしてないようだ。

あまりに広くて何処から手を付ければいいかわからず、取りあえず前へ進むことにした。足下に赤い絨毯が敷いてあるので、これが道標だと信じるしかない。

廠かで最終ステージに相応しい場所だが、このまま何もなく終わってくれそうにない雰囲気だよな。

ラスボス……いるよな。柱が規則的に並んではいるが、間隔が広いので問題なく立ち回れる。目も眩むような明るさでもなく、動きに支障が出るような暗さでもない。

周囲を警戒しつつ一同が前進していたのだが、進む方向に壁が見えてきた。どうやら、行き止まりのようだ。

「おうおう、如何にもって感じだな、おい」

徐々に明らかになる進路方向の光景にケリオイル団長が苦笑いを浮かべている。

正面の壁には巨大な大樹が描かれたタペストリーが掛けられている。色彩豊かな糸で織られた見事な逸品だ。

金色の実がなっているな、コインをはめた扉に彫られていた大樹とデザインが同じか。ここまで強調しているということは、この絵には何かしらの意味があるのかもしれないな。

巨大なタペストリーの下には玉座があるのだが、そこには誰もいない。

意味深な感じはするが、魔物も人も存在しない寂しい空間だ。

「誰もいないね、ハツコン。どうしたらいいのかな」

正直、拍子抜けだな。この玉座に願いを叶える存在でもいれば完璧だったのだが、俺たち以外は人っ子一人存在しない。

はっ、もしかして某ゲームを参考にするなら、王座の後ろの隠し通路があったりするのだろうか。

『よくぞここまで辿り着いた』

バカなことを考えていた脳に直接声が響く。

尊大な口のきき方だというのに、何故か嫌な印象を感じない低く威圧感のある声だ。

こういった展開が待っているかもしれないと身構えていたので驚きは少なかったが、紅白双子とラツミスとシユイがキョロキョロと慌てて周囲を見回している。

『最下層に到達したお主たちには願い事を叶える権利がある』

おつ、願い事の件は実はそんなに期待していなかったのだが、実際に叶えてくれるのか。これで灰の負の加護が解除されればいいのだが。

そして、もしまだ願い事が叶うなら……俺の願いも聞き届けて……。

『だが、お主らの中に我が迷宮を脅かす者の臭いが染みついておる輩がおる』

この声が指摘する人物に心当たりがあり過ぎるな。
全員の視線がスルリムへと注がれる。

「それは、私のことだろう。冥府の王の元配下だ」

『ふむ、元か……冥府の王は我が聖樹から創り上げた迷宮を乗っ取るうと暗躍しておる愚か者。我が力の多くが奴に削がれ奪われてしまった』

語尾が小さくなった声の主。魔物を操られている自覚はあるのか。

「ハッコン、ハッコン、あの立派な椅子につ」

ラツミスが慌てて俺の体をコンコンと叩いている。周りの仲間にもその声が聞こえたようで、王座に視線が集まる。

さっきまで誰もいなかった王座に中年男性が一人ポツンと座っていた。

頬杖をついてため息を吐く、痩せこけた覇気のない中年が一人。
茶色の地味なローブを着た五十代半ばに見える髪の毛の薄くなった男は　人生に疲れたサラリーマンにしか見えない。

迫力どころか存在感が無い。ラスボスかそれとも願いを叶える者なのかは判断がつかないが、俺の想像していたイメージと違い過ぎる。

人生に疲れ果てたサラリーマンが哀愁を漂わせている……コスプレをして。いや、違う。そう見えるがダンジョンを創造した存在だ。見た目で判断してはいけない。

『ちょっと、聞いてくれるか。ああ、この口調も面倒ですからやめますか。ちょっと聞いてくださいよ、まさかダンジョンを乗っ取るうなんて馬鹿げた者が現れるなんて思いもしなかったので落ち込んでいるのですよ……はああ』

威厳に満ち溢れていた声は何処に旅立った。同一人物とは思えない憔悴しきった声で語り掛けてきた。

「ど、どうするよ」

「話聞いた方がいいのでは」

動揺したケリオイル団長夫婦が仲間を集めて円陣を組んだ。

ラツミスが小突いただけで死にそうな気がする相手だが、怒らせるのは得策ではないと考え取りあえず話を聞くことにした。

交渉役はケリオイル団長に一先ず任せることになっている。

「あなたは、このダンジョンを創った者で間違いないのか？」

『ええ、まあ、そんな感じですよ。ダンジョンマスターと呼ばれる存在らしいです。一応、昔は天才と呼ばれていた時期もありましたよ。ああ、過去の自慢話をする嫌われてしまいますね、いやはや、申し訳ない』

腰が……低いなあ。緊張を解くのは危険だとわかっているのだが、話し方と頭をぺこぺこ下げている姿を見ると、警戒するのが馬鹿らしくなってきた。

『おおつ、すみません。おもてなしもせず』

ダンジョンマスターらしき男が指を鳴らすと巨大な長机と椅子が目の前に現れた。

その光景に仲間たちの緩みかけていた緊張感が戻ってきたようだ。武器に手を掛けることはしないが、少し膝を落としていつでも行動に移せる状態になっている。

『ささつ、お座りください。色々と聞きたいこともおありでしょう。私に答えられることなら何でも質問してください構いませんので』
畏の可能性がないとは言い切れないが、相手の機嫌を損ねることも避けたい。

「す あり ゆ よ」

「うん、そうだね。うちらがまず座ろうか」

何を言いたいのか察してくれたか。俺には 結界 があるから何かあったとしても防ぐことが可能だ。まずは俺たちで安全性を確認してから、みんなが試した方が良い。

俺を椅子の隣に置いてラツミスが腰かける。挟んで隣に車から下りてきたヒュールミが座った。

特におかしなところはない。ヒュールミも座る際に何かしらの仕掛けがないか椅子を調べていたようだが、何も言ってこないという

ことは怪しいところがなかったのだろう。
仲間たちは訝しみながらも全員席に座った。

『では、飲み物と茶菓子を』

「いらつしやいませ」

相手の言葉を遮って発言をする。飲み物と茶菓子提供は自動販売機として譲れないところだ。それに、飲み物に細工をされることもこれで防げる。

『貴方が代わりに提供していただけるのですか。貴方たちの様子は見物させていただいていましたので、前々から興味があつたのですよ。お願いしても構いませんか？』

初めから何か仕込む気はなかつたのか。あっさりと役割を譲ってくれたな。

仲間の好物は理解しているので、全員別々の物を提供した。ダンジョンマスターは好みがわからないので、俺の好みだが炭酸飲料とミルクティーでいいか。

ラッミスとヒュールミに配ってもらう。ダンジョンマスターはペットボトルを手に取り『ほおう、これがあの』と手に取って嬉しそうに観察している。

『素敵な物をいただきありがとうございます。では飲食しながらで構いませんので、質問を受け付けますよ』

穏やかな表情に笑い皺が見える優しい顔。それだけで信用したくなるが、見た目だけで人の中身が判断できれば苦勞はしない。

それだけでわかるなら自動販売機の見た目の俺はどうなるって話

だ。

さて、何から質問して何を訊きだすべきか。この柔らかな中年が本当にダンジョンを創った当人なのか。全てはこの話し合いで明らかになる。

ダンジョンマスター

「オレから質問させてもらっせ。そもそもダンジョンとダンジョンマスターってなんだ？」

ヒュールミの質問は大雑把でありながら誰もが抱いていた疑問だった。

この世界のダンジョンは何故存在するのか知られていない。ただ、最終階層まで制覇すると願い事が叶うということだけが広まっている。

『なるほど。そうですねダンジョンとは大昔の魔法使いが己の能力を見せつける為に、創り上げた芸術作品……いや娯楽施設といったところでしょうか。そのダンジョンを創った者がダンジョンマスターと呼ばれています』

「大昔の魔法使い？」

『今よりも遙か昔、この世界を支配していた偉大なる一族が存在していました。馬鹿げた魔力を有し、万物を支配していた……まあ、理由あつて滅びてしまいましたが、それは別の話なので今は関係ありませんね』

へええ、この世界の歴史を殆ど知らないから、そんな一族がいたなんて聞いたこともなかったな。異世界の住民にとっては常識なのだろうか。

そう思つて仲間の様子を窺つたのだが、全員が眉間に皺を寄せて考え込んでいる。あー、この世界で知られていない情報っぽいな。

「そんな偉大な存在がいたなんて聞いたことがないが」

ヒュールミが知らないのなら、普通の人を知る訳がないよな。

『色々あって、以前の歴史と記憶は葬り去られたようですからね。ここは神の遊び場なのかもしれませんよ。異世界人を頻繁に送り込んだりしていますから』

意味深なことを口にしたダンジョンマスターが俺をじつと見ている。

その歴史について詳しく知りたい気もするが、今は優先すべき事柄があるから後回しだ。

「偉大な魔法使いがダンジョンを創り、互いに作品を自慢していた……って認識でいいのか」

『ええ、それでいいと思いますよ。魔法使いたちは他人のダンジョンに支配していた奴隷や部下を送り込み、その様子を見物して楽しんでいました。そして、自分のダンジョンの方が優れていると他者へ自慢するわけです。で、別の魔法使いがダンジョンに人を送り込む。これの繰り返しですね』

本当に娯楽施設だな。現代日本に無理やり当てはめるなら、ダンジョンマスターはゲームクリエイターか。自分の作ったゲームを他人にさせて、それを見物して楽しむと。

「そうか……ここからが質問の本命なんだが、最下層に達したらどんな願いも叶えるというのは本当なのか」

ヒュールミがとうとう切り出したか。ダンジョンの成り立ちは物語として興味はあるが、俺たちがダンジョン制覇を目指した本当の目的はこっちだ。

相手の返事を待つケリオイル団長一家の顔が真剣みを帯びる。この答えを求めてずっと彼らは冒険を続けてきたのだから、無理もない。

『ええ、本当ですよ』

きっぱりと断言したダンジョンマスターの言葉に仲間たちが歓声を上げそうになるが、

『ただし、何でもではありません』

続く発言に表情が曇る。

偉大な魔法使いとはいえ、そりゃ何でもは無理だよな。勝手に期待していただけなのだが、少しだけ失望した。

「ダンジョンマスター、息子の負の加護を消すことは可能なのだろうか」

今まで発言を控えていたケリオイル団長が、我慢できずに口を挟んできた。

ダンジョンマスターが一瞥すると、口元に笑みを浮かべる。

『可能ですよ。私の魔力を用いれば望まざる加護を消すことは可能です』

「おおおっ！ な、なら、うちの息子の腐敗を消して欲しい！」

身を乗り出し懇願するケリオイル団長をダンジョンマスターが手で制する。

『慌てないでください。ダンジョン制覇の褒美についてまだ語っていませんでしたので、ここで詳しい説明を入れておきますよ』

そうだった。願い事を叶える条件も聞いていないし、幾つ叶えられるのかも知らないでいる。

『願い事の数に関しては上限がありません。可能であれば幾らでも構いません』

予想外の大盤振る舞いに息を呑む音がした。

しかし、今の説明には含みがある。素直に喜ぶのは全て訊きだしてからにしよう。

『例えば金銀財宝が欲しいのであれば、私の貯め込んだ魔道具や宝石を譲りますので、その願いは叶えられます。このように』

ダンジョンマスターが軽く手を振ると玉座の隣に金銀財宝の山が現れる。

金貨銀貨だけでも信じられない量なのだが人の拳ほどの大きさがある宝石や、無駄に飾り立てた剣や鎧も埋もれていた。

信じられない量の財宝を前にして仲間の目の色が変わっている。

『先程の加護を消去するような普通では叶えられない願いの場合は魔力を消費します。その魔力の上限が願いの限界となります』

「その魔力はどの程度あるんだ？」

『このダンジョンに満ちている魔力全てですよ。なので、願いを叶えた後は魔力が尽きてダンジョンが崩壊するのです』

願いを叶えるとダンジョンが消えるというからくりは、これが原因だったのか。

このダンジョンの魔力全てとなると、相当な量だとは思いますが魔力を還元して叶えられる願いつて何処までが可能なのだろう。

「じゃあ、灰の腐食を消して、ハツコンを人間に戻すのは……可能か？」

ヒュールミが一度こっちを見てから、ダンジョンマスターに問いかけた。

彼が俺のことをじっと見ている。疲れ切った中間管理職っぽい雰囲気だというのに、その瞳を見ているだけで吸い込まれそうだ。

『ええ、ギリギリですが可能ですよ。その場合、魔力を使用した願いはもう叶えられなくなります』

人間に戻れるのか？ えっ、あっ、そうなのか。期待はしていたが実際に可能だと言われると、感情が付いてこない。頬があるならつねって欲しいくらいだ。

「おおおおっ！ マジかつ、やったなハツコン！」

「良かったね、ハツコン！ 人間に戻ったら絶対に手料理食べてね！」

「ふふふ……生身の……ぬくもり……」

両隣に座っていた二人が立ち上がり、感極まって抱き付いてきた。後ろにはいつの間にか傍に来ていたピティーもくっついていてる。

「おめでとございます、師匠！」

「よかったじゃねえか、ハツコン。これで心置きなく息子の加護を消してもらえませ」

仲間が俺の元に集まり、自分のことのように喜んでくれている。

そうか、人に戻れるのか。嬉しいのか不安なのか、感情が入り混じって自分の気持ちがわからない。でも、みんながこんなにも喜んでいてくれるなら、人間に戻る価値があると思いたい。

それにこの手でみんなに……ラツミスたちに触れてみたい。だから、もう迷うのはやめだ。ここで俺は人間に戻

『盛り上がっているとそろすみませんが、説明の途中ですよ。確かに、その二つの願いは叶えられますが、そうするとダンジョンの人々をダンジョンの外に逃がすこともできず、ダンジョンが崩壊してしまいますが、宜しいでしょうか？ ああ、貴方たちをダンジョンの外に出すぐらいの魔力は残りますので安心してください』

喜び合っていた仲間の動きがピタリと停止して、顔だけがダンジョンマスターに向けられている。

俺たちの盛り上がったこの気持ちを返してほしい。

つまり、俺の願いを叶えるとダンジョンが崩壊を始め、俺たちは助かるが今ダンジョンに居る人は全員生き埋めになるってことか。

そんなことを聞いて自分の願いを叶えてもらう訳にはいかない…

…よな。

「ハツコンが人間に戻れると思ったのに」

「くそっ、どうにもなんねえのかっ」

落ち込む仲間を尻目にダンジョンマスターの言葉を頭の中で反芻していた。

二つの願いを叶えると魔力がほぼ尽きる。そうなるとダンジョンが崩壊するので住民たちが逃げる暇がない。

ここで最良の答えは、願いを叶えて住民をダンジョンの外へと逃がすことだ。

熊会長たちと話し合って、住民たちがダンジョンから出ることは同意を既に得ている。なので住民がダンジョンを捨てることは問題がない。

となると、逃げるまでの時間稼ぎが必要となる……あれっ？ これって別に悩む必要はないような。

『おや、ハツコンさん何か思いついたようですね』

ダンジョンマスターはキコユのように人の心が読めるのだろうか。絶妙なタイミングで話しかけてきた。

「だんちよう」

「ねがいして」

「あとでこっ」

「ちかのう」

『ええ、可能ですよ。先に息子さんの負の加護だけを解除して、ダンジョンの人々が逃げてから、もう一度ここを訪れてくだされば人間に戻せます』

通訳なしで通じてくれた。俺の考えは間違えてなかったようだ。

一度清流の湖階層に戻って、また来ないといけないのが面倒だが、それぐらいの手間は我慢しないと。

灰の負の加護だけでも解除してもらえば、最悪俺の願い事は叶わなくても構わない。

『冥府の王が入り口を閉じているようですが、それも一時的なら解放は可能です。本来なら二人の願いを叶えても魔力には余裕があったのですが、冥府の王が私の力を奪ってしまって、今はこれが精一杯なのです』

申し訳なさそうに頭を下げてハンカチで額の汗をぬぐっている。やっぱり、冴えないサラリーマンに見えてしまうな、この人。

「ハツコンがそれでいいなら、お言葉に甘えさせてもらうが……本当にいいんだな」

「いらっしやいませ」

俺が先に願いを叶えることも可能だろうけど、長年待ち望んでいた子供を呪いから解放できるチャンス。それが目の前にあるのに我慢させるのは、人としてどうかと思う。

まず、灰を自由に上げて、その上で全てが片付いてからゆっくり人間に戻らせてもらおう。俺もその間に頭の整理をしておきたいし。

『では、息子さんの腐食を解除しますね。こちらに来てください』

信用できる相手だとは思いたいけど、今までの偽りの姿ではないという保証はない。

それは灰も理解しているだろう。スルリムと一緒にダンジヨ

ンマスターの元へゆっくりと近づく姿に油断は感じられない。

『生来得ていた加護を取り除くとなると、もつと手間と魔力が必要なのですが、強引に擦りつけられた加護であれば、さほど難しいことではありません』

目の前に来た灰の頭に痩せ細るえた手を添える。そして、ゆっくりと手を離していくと頭頂部から闇の霧を濃縮したようなナニか引きずり出されていく。

ソレはダンジョンマスターの手の平から離れられないようで、逃げ出そうと暴れているようだったが、そつと手を閉じると同時に綺麗さっぱり消滅した。

『これで腐食の加護は消えました。もう、体を蝕む痛みに悩ませられることもありませんよ』

まだ実感が湧かないのだろう、灰は自分の手の平を何度も閉じたり開いたりしている。

スルリィムはその光景を寂しそうに見つめながら、静かに後退していく。そして、彼女の力による呪い無効化範囲の外になっても、苦しむ素振りを一切見せなかった。

「痛みが……ない。痛みがないよ！」

目に涙を溜めて勢いよく振り返った灰に、赤と白が駆け寄って抱き付いた。

感極まった二人は何も言わず、ただ灰を抱きしめ泣いている。

ケリオイル団長はフィルミナ副団長の肩を抱き寄せ、音もなく泣き続ける嫁の背を優しく撫でながら帽子のつばを下げて、視界を遮られたまま天井を見上げていた。

彼らの念願が叶ったのだ。俺たちは口を挟まず、そつと見守っておこう。

俺の隣ではラツミスとヒュールミが涙目で微笑みながら、羨ましそうにケリオイル一家を見守っている。

暫くの間そうしていたのだが、不意に灰が顔を上げて誰かを探すように視線を彷徨わせると、目的の人を発見して駆け寄っていった。

「スルリイムお姉ちゃん、今までありがとう！」

「良かったわね。これでもう、私と一緒にいなくても……」

満面の笑みを見せる灰を眩しそうに見つめていたスルリイムは、寂しそうに微笑んでいる。

諦めの言葉を呟く彼女を遮り、灰は大きな声でこう言い放った。

「これからよろしくね、スルリイムお姉ちゃん！」

「呪いが解けたのだから、もう自由なのよ、貴方は」

「うん、自由だから、自分の意思でお姉ちゃんと一緒にいるね！」

スルリイムは口元を押さえて肩を震わせると、何も言わず強く灰を抱きしめた。

始まりはお互いを利用し合う関係だったが、時を経てそれは絆となり二人を強く結んだと思いたい。あの緩みきった目つきと口元を見ていると若干の不安を覚えるが。

これで本当に愚者の奇行団がらみの問題は全て解決となった。後はダンジョンの人々に報告して外に出てもらって、もう一度戻ってくるだけだな。

『この時を 待っていた!』

そんな俺の考えを嘲笑うかのように何の前触れもなく、聞き覚えのある歓喜に震える声がこの場を満たした。

望み

『くっははははっ、ここまで思惑通りの事が運ぶと笑いが止まらぬなっ！』

声の発生源を探るより早く、スルリイムの腕が膨張して蠢き白いコートの袖が千切れる。

中から銀の何かが飛び出すと、それは完全な不意打ちとなりダンジョンマスターの額に突き刺さった。

『がああっ！　そこに、潜んでいたかっ』

額のソレを強引に引き抜き大量の血で顔面を染めて、ダンジョンマスターは片膝を突いた状態で相手を睨みつけている。

ソレはスルリイムの腕に巻き付いた骨の腕輪から伸びた骨。

「スルリイム、お前っ！」

ヒュールミが怒鳴りつけるが、当の本人は驚いた表情で硬直している。

彼女が自分の意思でやったことではないのか？

ダンジョンマスターを守るように仲間たちがその前に並び、顔面蒼白で小刻みに震えているスルリイムに武器を構えている。

「わ、私は知らぬっ！　本当に、知らないのだっ！」

髪を振り乱して叫ぶスルリイムから目を離せないでいるが、さっきから腕輪から伸びた骨が俺たちをからかうように、ゆらゆら揺れ

ているのが癪に障る。

『責めないでやってくれぬか。スルリィムは本当に何も知らぬのだよ』

「冥府の王……様」

その傲慢な声は彼女の右腕から漏れている。あの骨の腕輪が声を発していた。

『我は待ち望んでいたのだよ、この時を。願いを叶えた代償により力を失い、容易く葬ることができこの時をな！』

腕輪の骨が解け、それは頭上へと絡み合いながら昇り一度、銀色の球へと変貌してから再び解けた。

ソレはもう原形を留めていなかった。緻密な刺繍が施されたロ―ブを着込んだ骸骨が宙に浮かんでいた。

四本の腕を生やした巨大な骸骨の臀部からは骨の尻尾が伸び、眼球のあるべき場所には何もなく暗闇が覗いているだけなのだが、体が萎縮するプレッシャーがその窪みから押し寄せてくる。

腕輪になって潜んでいたのか。ここで本当のラスボス登場とはたちが悪いな。

「冥府の王っ！」

『久しいな、ケリオイル。我を裏切るとは良い度胸だ。その心意気に免じて死体を我が配下に加えてやるとしよう』

「腐った体に興味なんてねえよっ！」

団長たちは武器を構えて冥府の王と対峙している。まだ少し団長たちを疑っていた自分を恥じないとな。

『わざわざ我を運んでくれた礼をせねばならぬな。こやつが張った魔物避けの結果が厄介でな。こうでもせぬと入り込むことが叶わなかったのだよ』

『この階層の魔物除去の結果をこのような手段で……抜けるとはな

だから、この階層には魔物が一体も現れなかったのか。冥府の王がケリオイル団長たちを利用していた理由が納得いった。

自分に手は汚さずに暗躍するタイプなのかと思っていたが、それだけが理由ではなかったのか。

『今の一撃でかなりの力を得ることができたぞ、ダンジョンマスター。もう、このダンジョンの力の大半が我の物となった。スルリイムよ、この成果を持って我が陣営に戻ることを許そう。さあ、こちらに来るがいい』

宙に浮かんでいた冥府の王が地面すれすれまで降りてくると、その手をスルリイムに差し伸べている。

俺たちは動くこともできず状況を見守っているようにみえるが、全員膝を少し曲げていつでも動けるように戦闘態勢を保っている。

スルリイムは自分の手を冥府の王の手を交互に見比べ、一度だけ俺たちの方へ顔を向けた。いや、俺たちじゃなく灰を見たのか。

そして、スルリイムはその手を冥府の王へと伸ばしていく。

やはり裏切るのか……違うな元の鞘に収まるだけ。期待していただけに残念に思うが、予想の範疇だ切り替えよう。

諦めきっていた俺の目の前で、スルリイムは冥府の王の手を取る直前、溢れ出した冷気が冥府の王を包み込んだ。

『どういうことだ、スルリイム』

「私を利用していたのですね、冥府の王」

『利用も何も、お主は我が拾った物。所有物を使って何が悪いのだ』
悪びれないな、この骸骨。いつそ清々しいよ。

「お姉ちゃんはモノじゃないぞ！」

冥府の王に対して物怖じすることなく、灰が感情の高ぶるままに怒鳴りつけている。

その姿にスルリイムの頬がほんの少しだけ緩んだ。そして意を決したのか冥府の王を正面から睨みつけた。

「以前なら貴方の物であることに喜びを感じていましたが、もう違うのです。もつと大切な眩く輝く宝を見つけてしまったのです」

『物が意思を持ち齒向かうとは、片腹痛いわ。もうよい、不良品はこの手で処分しなくてはな』

冥府の王が右腕を突き出すと、巨大な黒い渦が現れる。魔力の無い俺でもあれが凶悪な力を秘めていることが理解できた。

スルリイムが咄嗟に氷の壁を五枚並べて出現させるが、黒い渦が触れただけで一瞬にして蒸発していく。

五枚の氷板が消滅して、彼女を守る物が消え失せ黒い渦に呑み込まれるのを黙って見ているしか　そこに割り込んだ影が一つあった。一緒に渦に呑み込まれる直前黒い渦が掻き消える。

「息子の将来の恋人候補を死なすわけにはいかないよな！」

帽子のつばを人差し指で押し上げ、紅く光る瞳が冥府の王を見据えている。

ケリオイル団長が 破眼 で魔法を掻き消したのか。

「息子の為ですからね。ですが、大きくなるまで清い交際でお願いします」

隣に立つフィルミナ副団長が手にした杖を冥府の王へと向けた。激流が冥府の王を襲うが体から溢れる黒い霧が全てを弾き落としている。

「目が覚めたばかりの兄貴に彼女ができて、何で俺たちにはっ！」

「差別だ、格差社会だ！」

文句を言いながらも、スルリイムの前に滑り込み武器を構える、
紅白。

「お姉ちゃん、ずっと一緒なんでしょ。だったら、一人で突っ走ったらダメだよ、めっ」

呆けた顔のスルリイムの額を人差し指で軽く叩き、天使の様な笑みを見せている。

灰はどうやってたら自分が可愛く見えるか、わかってやっているよな。

「貴方たち……ありがとう。うん、無茶はしないわ、誓って」

美しい家族愛だけど、あまり相手を挑発して欲しくなかったかな。冥府の王が全ての腕を掲げると頭上に四つの黒い渦が発生する。それが全て投げつけられケリオイル団長たちを覆い隠す。

団長の 破眼 で渦の一つは消えたが残りの三つが直撃するコースだ。

「危ないなー！」

寸前で飛び込んだラツミスと俺の 結界 により団長たち全員をカバーして、魔法の一撃を防ぎ切った。ポイントが3000も減ったが命あつての物種だ。

『ことごとく邪魔をしてくれるな、異世界からの魂が宿りし、魔道具よ』

睨みつけないで欲しいな。怖すぎて温かい商品まで冷たくなってしまいそうだよ。

さーて、どうするか。冥府の王が現れたのは予想外の展開だが、今の一撃を防げることが判明した。やりようによっては倒せる気がするぞ。

冥府の王から目を離さずに頭の中で今後の展開を計算していると、横合いから伸びてきた光の帯が、相手の体を直撃した。

轟音と爆風が吹き荒れるが、俺は 結界 で全員を包んだまま視線を逸らさない。

今の光を放ったのは片膝を突いたまま手を伸ばしているダンジョンマスターか。

『先の一撃で葬れなかったのは残念でしたね』

『力の大半を失っても、まだ足掻くか』

全身から煙を立ち昇らせた冥府の王が忌々しげに、ダンジョンマスターを見下ろしている。

『ここは魔物の魔力を抑え込む細工が施されています。ここなら奴も本来の力を発揮できぬ筈です』

それならこつちも勝機が出てきたが。それを聞いた冥府の王は焦るそぶりも見せず、不遜な態度を維持したまま宙に浮かんでいる。

『このまま相手をして構わぬのだが、少し遊んでやるとするか』

骨の指を鳴らすと足下から振動が伝わってくる。

「な、なんだ。大地を揺らす魔法かつ！」

「ハッコン、落ち着いて！　だ、大丈夫だからねっ」

ヒュールミもラツミスも慌て過ぎだ。これぐらいドンと構えておかないと。

体感では震度三ぐらいだろうか。日本人としては驚くレベルではないのだが、仲間たちがうろたえている。

『冥府の王よ、もしやこのダンジョンを崩壊させるつもりか！』

『その通りだ、ダンジョンマスターよ。我はこの戦力を手中に収めるのが目的でな。ダンジョンを維持させるつもりは毛頭ない。魔物たちは全て地上へと移動させるとしよう。お主たちはここで殺すよりも、ダンジョン内の人々が死にゆくさまを見せつけた方が堪えるであろう』

冥府の王が左腕の一本を掲げると、天井にスクリーンを張ったかのように映像が浮かび上がった。

そこは清流の湖階層で住民たちが慌てふためいている姿が映し出されている。

『さあ、阿鼻叫喚の地獄絵図を共に観賞しようではないか！』

二度の復興を終え、ようやく平穏を取り戻した街並みが崩れていく。

会長たちが住民を懸命に誘導する姿や、大食い団が女子供を救い背に乗せて運搬している。みんなが懸命になって生き延びようと踏ん張っている。

「いい加減にして！　こんな事をして何が楽しいのっ！」

『魔道具を背負いし娘か。魔物というものは本来人を苦しめる存在なのだよ。負の感情というのは美味でな、絶望に染まりし顔に悲痛な叫び。これ程の美食があるうか。だというのに、魔王はそれもわからず共存の道を探ろうとしておる、情けない』

上司批判を始めたぞ。魔王という名からして極悪非道の存在だと思っ込んでいたが、こいつの口振りだと人道的な相手なのか？

「情けないのは、そっちゃんか！　もう、許さへんからねっ！」

俺はコンクリート板を呼び出して、それを　念動力　で操りラツミスの手元に運んだ。

掴み取ったコンクリート板を大きく振りかぶると、迷いなく冥府の王に投げつける。

周囲を漂う闇の霧にあっさり砕かれてしまったが、冥府の王の注意は引き付けられた。

『自ら命を縮めるか、愚かな。まあよい、その両手足を砕き動けなくしてやるう。我の力を衰えさせていると思っっているようだが、ダンジョンの力を取り込んだ我に通用すると思わぬことだ』

その言葉が本当だとしても、ここで引くわけにはいかない。ダンジョンの崩壊を止めるにはここで奴の息の根を止めなければならぬ！

終わりの始まり

全身が揺さぶられる状態でも仲間たちは優れた平衡感覚で問題なく立っている。

焦りさえなくなれば、彼らの身体能力ならこれぐらいの揺れは何の問題もないようだ。

頭上から大小様々な天井の破片が落ちてきている。時間を掛ける生き埋めになりそうなくらい崩壊が進んでいく。

速攻で勝負を決めなければ俺たちが先に瓦礫で押し潰されそうだ。遠距離攻撃担当のシュイとフィルミナ副団長が攻撃を加えるが、冥府の王に纏わりつくように漂う闇の霧が全てを防いでいる。

「あの闇は濃厚な魔力の霧のようです。防御能力は見ての通りですので、牽制攻撃はほぼ無意味かと」

フィルミナ副団長が背中から蝙蝠の羽を生やし、全力で水流をぶつけているのだが冥府の王を濡らすことすら叶わないでいる。

『吸血魔があるのか。左足將軍の配下にも確かおったな。力としてはそれなりといったところか。ほう、完全に敵に回るのだな』

水流とは別方向から巨大な氷の塊が冥府の王を捉えるが、闇の霧に弾かれている。

その氷を放ったのは苦渋の表情を浮かべるスルリムだった。

「貴方に助けていただいた恩は忘れていません。ですが、私はもう貴方の所有物ではないのです」

「そつだぞ、息子の恋人候補だからな！ 男も女も干からびた熟年より、ピチピチの若い奴の方が良いに決まっているからな！」

「そんなことを……思っていたのですね」

「ち、違つぞ。お前はいつもほら美人でカワイイじゃねえか、な、なあ、お前ら」

「お、おう。母さんはビジンダー」

「キレイヤワー」

「母さんは若々しくて素敵だよ！」

スルリイムの決別宣言を台無しにするケリオイル団長一家だったが、そのやり取りで仲間の緊張感が少しだけ緩み、良い意味で無駄な力が抜けたようだ。

『我を前にその余裕、お主らは普通のハンターとは違つようだな……そんなお主らの顔を益々、絶望に染めたくなった。そうだな、逃げる機会を与えよう。今から我は魔物たちを始まりの階層へと送り込む。その魔物を凌ぎつつ人々をダンジョンの外へ逃がすがいい』

力を手に入れて調子に乗っているな。敵側が力に溺れ余裕を見せてつけて後で後悔するという、悪党の王道パターンをやるうとしているのか。

俺が向ここの陣営なら止めているが、見逃してくれるなら文句はない。

『崩壊が先か全滅が先か、どちらにしる楽しませてもらえることを

期待しておこう。キサマらはまだ死んでくれるなよ……」

言いたいことを全て言って満足したのか、冥府の王は闇の霧に包まれ収束すると、そのまま消え去った。

それでも、全員が警戒態勢を維持したまま暫く武器を構えていたのだが、本当に消えたことが判明すると脱力して大きく息を吐いている。

「助かったのか……いや、見逃されたのか」

「強がってはいましたが、冥府の王も力の制御が上手くいかないでしょう。皆さん安心している時間はありませんよ。今から清流の湖階層へ直通の転送陣を描きます。それで戻って住民の方々と一緒にダンジョンから離れてください」

ダンジョンマスターがよろめきながら立ち上がると、宙に淀みなく指で魔法陣を描き、手を地面に振り下ろすと足元に青い光を放つ魔法陣が浮かび上がった。

「九割近く力を奪われてしまいました。地上へと繋がる扉は何か解放させました。とはいえ私の力が何処まで通用するか不安が残りますので、急いでもらえるとありがたいです、はい」

最後の力を振り絞って俺たちを逃がそうとしてくれているのか。

結局ダンジョンの事もダンジョンマスターの事も詳しく知ることができなかったのは心残りだが、みんなが住むこの場所を創り上げた人が悪い人じゃないことがわかっただけでも、大きな収穫だったと思う。

「ハッコンさんでしたか、貴方の人に戻る望みが叶えられずに申し

訳ありません』

「いいよまた」

「がんある」

他にもダンジョンはあり願い事が本当に叶うとわかったのだから後悔は全くない。

この一件が片付いたら、別のダンジョン制覇を目指してもいいし、暫くはのんびり仲間たちと暮らすのも悪くない。

自動販売機の体にも慣れてしまっているので、慌てる必要は皆無だ。

『面白い方だ。この階層の魔物避けの結界をこの神殿に全て集めますので、貴方たちが立ち去った後、冥府の王は手出しできなくなる筈です。私の力が尽きるまでは守り通します。ダンジョンの崩壊も何とか遅らせてみましょう』

永遠の階層全域に張られている魔物を寄せ付けけない結界をここに集めれば、確かに冥府の王も近寄れないだろう。

「でも、そんなことをしたらダンジョンマスターさんが……」

『良いのですよ。ダンジョンマスターはダンジョンを制覇された時、その魔力を全て解放して望みを叶えダンジョンを崩壊させ共に消え去るのが決まり事です。私も長く生きすぎましたからね。予想外の終わり方ですが、これもまた一興ですよ』

そう言って微笑む姿は無理をしているのではなく本当に嬉しそうに見えた。

今日会ったばかりの俺たちにダンジョンマスターの心情を理解す

るのは難しい。当人がそれを望んでいるのであれば、それを否定する権利はない、よな。

『そうです。ハツコンさん、願いは叶えられませんでした。せめてこれだけは持って行ってください』

俺は最後にダンジョンマスターからの土産を貰ってから、転送陣に乗る。

『では、聖樹のダンジョンを制覇した勇敢なるハンターの進む道に輝ける未来がありますように。おめでとう、そして、ありがとう。私のダンジョンを最後まで……楽しんでくれて』

穏やかに微笑み手を振るダンジョンマスターの言葉を最後に、俺たちは青い光に包まれ、永遠の階層を後にした。

いつもの浮遊感が消えると即座に扉を勢いよく開き、全員が見慣れた廊下を疾走している。そして、ハンター協会のホールへと飛び込むと既に避難している多くの住民がいた。

その中に熊会長の姿を見つけた俺たちは、人を掻き分け何とか辿り着く。

「皆、もう戻ってきたのか。お主らの話を聞きたいところだが、それどころではなくてな」

「ああ、それは理解している。現状を一番詳しく把握しているのはオレたちだ。説明は後ですが、今は全員を転送陣で始まりの階層に送って、そこから外に脱出させてくれ」

そこまでまくし立てたヒュールミだったが周りの目が気になったようで、熊会長の耳元に口を近づけて詳しい話を囁いたようだ。

「まさか、そんなことになっておったのか。了解した。職員たちには集落の住民の誘導と他の会長たちへの言伝を頼むとしよう」

熊会長がてきぱきと職員と衛兵たちに指示を出している。この数年で騒動に慣れきっているので全員の対応が素早くて確だ。

あつという間に協会を跳び出していく。

「戻ってきたばかりのお主らに頼むのは心苦しいが、先に始まりの階層へ移動して魔物の襲撃に備えてはくれまいか。既に襲われているようであつたら、その場のハンターたちと協力して欲しい」

「うん、わかった。みんなも、いいよね？」

ラツミスの言葉に反論する仲間がいる訳もなく、再び転送陣に乗り始まりの階層へと飛び立つ。

慌ただしいが今は一刻を争う。ダンジョン崩壊と魔物の侵攻を食い止めなければならぬので、一人でも多くの住民を生かす為に力を惜んでいる場合じゃない。

転送の光が消えると全員が始まりの階層へと雪崩れ込んだ。集落内の光景は以前と同じなのだが、遠くから激しく争う音がする。

もう敵の侵攻が始まっていたのか、急がなければ。

誰も声を発することなく顔を見合わせると、以前バリケードを築いて通路を封鎖した場所を目指して駆けていく。

目的地が見えてきたのだが、そこにはバリケードを必死になって守っているハンターたちが二十人近くいたが今にも決壊しそうだ。

崩壊寸前のバリケードの隙間から魔物たちの腕が伸び、何かを掴もうともがいている。ハンターたちは手にした武器を魔物に突き刺しているのだが状況は圧倒的に不利だ。

「手伝うよー！」

ラツミスが速度を一気に上げ、跳ぶように走りバリケードまでの距離を一気に詰めた。

「おおつ、前の怪力ねえちゃんじゃねえか！ 助かるぜ！」

「援軍が来たかつ！」

以前活躍した俺たちのことを覚えていたようで、防衛していたハインターたちが沸き立っている。歓迎ムードは嬉しいが、まずはバリケードの補強だ。

俺がコンクリート板を次々と生み出して、それをラツミスが軽々と運びバリケードに重ねていく。

遅れて追いついたピティも加護の力を使って、コンクリート板を運ぶのを手伝ってくれている。

これで一時的にだが敵の侵攻を押し留められそうだ。ヒュールミが更に板材や縄を使ってバリケードを強化しているので、そう簡単に崩されることはないだろう。

「ラツミス、こっちは落ち着いてきたから、外へ繋がる扉の方を見て来てくれねえか。避難の状況が知りたい！」

「わかったよ、ヒュールミ！」

即答即決でラツミスが踵を返して、逆方向へと走っていく。そして、その背にはもちろん俺がいる。

集落の光景が飛ぶように過ぎ去る中、進路方向に巨大な両開きの扉が見えてきた。その扉の大きさは、永遠の階層の大樹が彫られて

いた扉に匹敵するほどだ。

その前には人々が密集しているのだが、避難している人が減るところか徐々に増えている。扉を開けるとダンジョンマスターが言っていたのだが、あれは嘘だったのだろうか。

距離が近づくにつれて扉とその周辺の様子が詳細に確認できるようになったのだが、何故避難が進んでいないのか理解できた。

扉は確かに開いているのだが、その隙間がほんの僅かで大人が二人ギリギリ並んで通れる程度しかない。

残された力ではあれが精一杯なのか。

懸命に人員整理をしている会長たちの元へ駆け寄りながら、今後どうすればいいか考えを巡らせていた。

避難 襲撃

「すみません、通してください！」

ラツミスが人並みを押しつけ扉まで強引に進んで行く。

割り込む俺たちに嫌そうな顔を向け、文句の一つでも口にしようとしていた住民たちだったが、それが俺とラツミスだと知ると道を開けてくれる。

日頃から住民たちとの付き合いをしてきたおかげかな。

「ありがとうございます」

住民たちへ感謝の言葉を口にしながら、何とか扉まで到達できた。そこには大声を張り上げて避難誘導する熊会長と始まりの会長がいて、人波から飛び出してきた俺たちを見て驚いている。

「会長、向こうは補強したから暫くは敵の侵攻を防げるよ。その扉はそれ以上開かないの？」

「そうか、ご苦労だった。この扉はこれ以上どうやっても開かぬよ
うでな」

「じゃあ、うちが試してみてもいい？」

「うむ、頼めるか」

このダンジョンで随一の力持ちであるラツミスが扉に手を掛けて踏ん張っているが、彼女の怪力をもってしても扉は一ミリたりとも

動かない。

魔法や何かしらの特殊な力でしか扉を開くことは不可能なのか。

「うーん、無理みたい」

「やはりそうか。こちらは我らに任せて防衛を頼んでよいだろうか」

「うん、みんなにも伝えておくね！」

今度は周りの迷惑にならないように一旦脇に抜けてから、バリケードを守る仲間の元へと疾走する。

再びバリケードまで戻ると人員が増えていた。清流の湖階層から直接こつちに来ているハンターが結構いたのか。

バリケードもコンクリートを重ねているおかげで、少し揺れる程度ですんでいる。更に補強して強固な壁を完成させてもいいな。

ここは通路の入り口がそれ程大きくないので、もしバリケードを突破されてもこれだけハンターがいれば何とかかなると思いたい。

後はダンジョン崩壊までに間に合うかどうか。出口の僅かな隙間からだど避難するには時間がかかり過ぎる。

扉の先は長い階段になっていて地上まで繋がっているという話だが、その道が崩落しなければいいけど。

しかし、この階層は微振動だけで意識していなければ感じない程の揺れだ。清流の湖階層だと揺れはもっと強かったので、今の状態ならここが即座に崩れることはない。

ただ、いつ揺れが増すのかわからない状態で安易な推測に縋るのはやめておかないと。今やれることをやろう、自動販売機にやれること限定だけだ。

「ハッコン、もう少しあの石の板を出してもらえるか。念の為に」

つと頑丈にしておこうと思ってよ」

「いらっしやいませ」

ここさえ抜けられなければ集落に敵がやって来ることはない。そう考えて、ハンターたちと一緒にバリケードの補強をしていた。

「いたいたいたあああつ！ みんな、手伝って！」

そんな俺たちの元に飛び込んできたのは、大食い団の面々だった。リーダーのミケネが息を切らして駆け寄ってくると、大口を開けてあたふたしている。

「落ち着け、ミケネ！ 何を手伝ってほしいんだ」

「あ、うん、えと、集落内に魔物が発生しているんだよ！ 避難中の人は何とかみんなが守っているけど、人が足りないんだ！」

「つまり、集落内に敵が現れて襲われているってことだな！」

「うん、そうだよ！ だ、だからみんな早くっ！」

そこまで聞けば充分だった。この場に最低限の人員だけ残して外へと繋がる扉へ向かって走っていく。

疾走する先頭集団は身体能力の優れた仲間たちで形成されている。俺を背負うラツミスがいて頭の上の特等席にはヒュールミがしがみ付いていた。

「冥府の王が力の大半を奪ったせいで、魔物を好きな場所に発生できるようになったってことか。あの場所を守っている意味がなくな

「つちまっ たな！」

走り続ける全員に聞こえるようにヒュールミが大声を上げて、現状の説明をしてきている。ということはバリケードを強化したことが無意味になってしまったのか。

大通りの進路方向にはさっきまでは一体もいなかったというのに、今は無数の魔物が蠢いている。ハンターたちが数名対処しているが、お世辞にも優勢とはいえない現状だ。

その魔物も種類がバラバラで始まりの階層、清流の湖階層、闇の森林階層、その他の階層で見かけた魔物が入り混じっている。

魔物の召喚に規制がなくなり好き勝手に呼び出せるようになったようだ。

「敵を片付けながら進むぞ！」

苦戦しているハンターたちの敵を蹴散らして合流しながら、外へと繋がる扉へと猛進していく。

扉が近づいてくると多くの敵が群衆に群がっているのが目に入った。

戦えない人々を取り囲むようにハンターたちが輪になり、魔物たちを撃退している。

人々が扉に押し寄せパニック状態になっているのではないかと危惧したが、意外にも人々は冷静に対応していた。

「皆、大丈夫だ。必ず我々が守る！」

「女子供老人が先だ！」

「焦りは何も生み出さないぞ！」

熊会長が吠え、ゴルスとカリオスが敵を捌きながら人々を扉へ誘導している。

「うっせえっ！ 先に俺を通しやが」

「こういう時に男の価値が見えますよね。このような場面で男気を見せる人って素敵ですわ」

子供を押しつけ先頭に行こうとしていた男の前にすつと体を押し入れ、胸を密着しながら艶やかに笑っているのはシャーリーか。

男の顔が怒りからにやけ面に変わり鼻の下が伸びている。周りの苛立っていた男たちが急に大人しくなり、指示に従うようになっていく、流石だ。

「スオリ様も早く避難を！」

「商人が客を第一に考えないでどうするのですか！ わらわは最後で構いません！ 人々の誘導と護衛を優先にしてください！」

「立派になられて……」

よく見ると脚が少し震えているというのに気丈に振る舞うスオリ。そして、成長している主を見て感動している黒服集団。

このまま成長すれば、あの子は将来きつと名の売れた商人になってくれるだろう。

「お爺ちゃんお婆ちゃんも逃げないと！」

「そつだよ。お父さんもお母さんももう現役じゃないのよ」

小さな女の子と母親が老夫婦を説得している。あれは、シメライお爺さんとユミテお婆さん。ということはあの親子は孫と娘さんか。

「はっはっは、心配はいらぬよ。爺ちゃんは強いからな」

笑いながら自分を扇子で仰ぐと、後方から押し寄せていた魔物が数体を宙を舞い天井に叩きつけられる。

「お爺さん張り切り過ぎないくださいね」

銀の光が何条も走って仕込み杖に刃が納まる音がすると、近くにいた魔物が細切れになった。凄惨な現場を見せないように娘さんが咄嗟に孫の目を手で覆っている。

うん、あの一帯は心配がいらぬ。

「おらあ、炭になって暖炉でも温めていやがれっ！」

あの大声と火柱は灼熱の会長か。人が多すぎて姿が見えないのだが、あの人だけは何処に居てもわかる。

「どんな状況でもハンターは焦らず冷静に、人々の為に戦うようにそして、何よりも自分の命を最優先にするのを忘れるな！」

若手で冷静さを失っているハンターたちに始まりの会長は指示を出しながら、魔物たちをすらりと伸びた足で蹴り飛ばしていく。

実際に戦う姿を初めてみたが、足技のみで戦うのか。結構短めのスカートを穿いているのに何故か下着が全く見えない。それも含めて神業だな。

魔物の姿に錯乱して飛び出した若い男に魔物が殺到するが、地面

から黒い影が伸びて相手を切断、もしくは体に絡みつき影へと呑み込んでいく。

腰を抜かしている若者の影からすっと黒い人影が伸びるのだが、それは金色のコートを着た闇の会長だった。

「自分だけすたこらさっさはあかなあ。男はここでドンと構えるのがカツコええんやで。どんな時でも沈着冷静なワイを見習わんとアカンで、うわああっ!? なんやビックリしたなあ」

背後から鰐人魔が手にした槍で胴体を貫かれたというのに驚いただけで、痛がる素振りも見せず相手の顔に影を巻き付けるとへし折っている……闇の会長の体はどうなっているのだろうか。

無尽蔵にも思える敵が押し寄せているのだが、強さの桁が違う知り合いの奮闘により怪我人は出ているようだが、今のところ死者は出ていないらしい。

そこに俺たちが参戦したことで守りが万全となり、押され気味だったところが今は防衛の輪を広げ押し返せるくらいにはなっている。

魔物側には何体も空を飛ぶ敵がいるのだが、次々と矢で射落とされている。あれはホクシー園長先生の放つ矢か。百発百中は彼女の為にあるような言葉だ。

他のハンターから放たれる魔法や投擲武器で空の敵にも対処できている。このまま、全員が逃げ出すまで時間が稼げそうだが……つてこういう考えはフラグになりかねないから、考えるのはよそう。

「溶岩人魔と王蛙人魔が現れたぞおおおお！」

ほーら、こうなった。敵が魔物を自在に召喚できるのなら、強力な魔物を出してくるに決まっている。

ハンター以外の住民はまだ半分以上残っている。足下の振動はま

だ微弱だから天井が崩れることはない。となれば、全力で魔物退治を手伝うしかない。

全員無事で帰還して戦いではなく、自動販売機として本来の業務を早くまっとうしたいな。

男ならやってみたいこと

以前の異変時に被害を免れていた建造物が、魔物たちの手によって次々と崩壊していく。

ダンジョン崩落が決定した今、ハンターたちも遠慮する必要がなくなつたので集落の被害は度外視で戦っている。

新たに出現した溶岩人魔と王蛙人魔は強敵ではあるが階層主ではない。能力の大半を奪つたとはいえ階層主は自在に召喚できないと……信じたい。

辺りの瓦礫を燃やしつつ迫る溶岩人魔にはケリオイル団長一家が向かうことになった。しれっとそのメンバーにスルリムが加わっているが、雪精人である彼女がいれば溶岩人魔の対処がかなり楽になるだろう。

となると俺たちは王蛙人魔を担当することになるのだが、こつちにピヨンピヨン飛び跳ねながら向かっている最中に、シュイと園長先生とラツミスの投げつけたコンクリート板であつさりと沈んだ。

苦戦していた頃が懐かしく思えるな……なむなむ。

溶岩人魔もスルリムの冷気に押され表面の溶岩が固まり始めている。あのままなら、ケリオイル団長たちに任せておけば大丈夫か。住民の避難状況は残り僅か。あとはハンターたちを逃がしつつ、何とか耐えるだけ。

遠距離からの矢とシメライお爺さんの援護もあって、溶岩人魔も手間取らずに討伐できたようだ。この調子なら全員を避難させられるかもしれない。

『いやはや、ここまで粘るか。ダンジョンに挑みしハンターたちを甘く見積もり過ぎたか』

何の前触れもなく、二度と聞きたくなかった声が頭に響く。

周囲の人々が狼狽して辺りを見回す中、誰かがソレに気づき大声を上げて指を向けた。全員が誘導されるように天井に近い位置に浮かぶソレを目の当たりにする。

冥府の王、このタイミングでできたか。

『諸君らの健闘に感動した。そこで、その扉を開放しようではないか』

ほんの僅かな隙間しかなかった扉が開け放たれ、人々が一斉に地上に繋がる階段へ向かって走り去っていく。

どういうつもりだ、ここで人々を逃がしてやるほど優しいキャラじゃないだろ。

『更に頑張るキミたちに追加の土産だ』

開け放たれた扉の前に並ぶハンターたちを嘲笑うかのように、地面から無数の魔物が姿を現していく。

今までがただの遊びだったというのが一目で理解できる魔物の群れ。視界を魔物が覆い尽くして地面が見えない。

「冗談だろ……おいおい、やめろよ」

「む、無理だ。これは無理だつて！」

「に、逃げろっ！」

ここまで耐えていたハンターたちが敵に背を向けて一目散に逃げていく。

後ろに視界を移すと長い階段をまだ人々は上りきれず、今ここに魔物が雪崩れ込めば壊滅状態になるのは目に見えている。

仲間たちと一緒にこの扉付近を守るか？ いや、幅が十メートル近く高さも同等にある。飛行系の魔物も多く、全てをここで防げるとは思えない。

それに加えて地面の揺れが激しくなってきた。いつ崩壊してもおかしくない状況だ。

『いい逃げっぷりだ。逃げ惑う獲物を追い込んでいたぶるのが、狩りの楽しみだとは思わないかね』

本気で性格が悪い骸骨だな。自分以外の存在は生きる価値が無いとも思っているのか。

誰よりも強い力を手に入れて調子に乗っているのだろうが、こういう奴には死んでも成りたくない。

うちの家訓に「自分より弱い相手に対して優しくなれない人は生きていく価値が無い」というものがある。まあ、母さんが勝手に考えただけなのだが。

人ではない自動販売機に成ってから、その言葉を思い出し心底納得するなんて皮肉だな。

身体は鉄で中身は商品と機械。だけど心は人間のつもりだ。

「ど、どうしよう。うちらも逃げへんと！」

ラツミスが絶望に顔を染めて取り乱している。

押し寄せてくる魔物の群れに、数々の修羅場を乗り越えてきた仲間たちも体が萎縮してしまっている。

頼りになる仲間たちでもこの数の暴力には勝てない。それは誰の目にも明らかだった。

そうになると、あの魔物の軍勢に対処する方法はたった一つだ。

俺は即座に ダンボール自動販売機 へとフォームチェンジをして 結果 で弾き背負子から飛び出す。

地面に降り立った俺は一度いつもの自動販売機に戻る。

「あ っ ち に」

俺が最大音量で発言すると、即座に俺が何をしたいのか悟ってくれたようで、全員が扉を抜けた階段付近まで進んでくれた。

付き合いが長いところという阿吽の呼吸が嬉しいよ。

寸前まで迫ってきている魔物の群れを見据えた状態で俺は、日本一の大きさを誇る自動販売機へとフォームチェンジした。

俺の巨体は扉を完全に塞ぎ、外へ繋がる階段に完全に蓋をする形になる。

この状態から 結界 を発動することにより鉄壁の壁が誕生した。魔物たちが 結界 に突っ込んでいるがどんな攻撃も魔物も通す気はない。

『ほほう、そこで立ちはだかるか、ハツコンと呼ばれし魔道具よ。最後まで我的足を引っ張るのか。しかし、既に情報は得ておるぞ。その姿は長く維持できぬのであろう』

確かに、この巨体で 結界 を張るとポイントの減りが尋常ではない。永遠の階層に挑んだ時のポイントなら一、二分耐えるのが限界だった。

だが今は違う、俺のポイントは潤沢だ。

何故ポイントに困らないのか、それは転送陣に乗る直前に全ての財宝をダンジョンマスターが俺に譲ってくれたからだ。

金貨銀貨のコインはそのまま投入してもらえればポイントにできたが、他の貴金属類はどうすればいいのか。

そこで俺は コイン式掃除機 になって吸い込んでみたところ、

ポイントに変換することが可能だった。

今の俺はとんでもない量のポイントの貯蓄がある。このまま全員が逃げきるまで 結界 を維持し続けてやるよ。

「ハツコン、ハツコンはどうするの！ このままじゃ、ハツコンだけ逃げられないよ！」

まだ逃げていなかったラツミスが後ろから、泣きそうな声で叫んでいる。

自分には 結界 があるのでダンジョンが崩壊して生き埋めされたとしても、当分は生き延びられる。いつか掘り起こされる日が来るまで、待ち続けることも可能だと……思う。

だから、ここで俺の言うセリフは決まっている。

「ここであおら」

「にまかせて」

「いくんだ」

切実に「わ」と「れ」が欲しい！ それさえ発言できたら完璧だったのにつ！

俺は自暴自棄になっているわけでも、華麗に散りたいと考えているでもない。

冷静に判断してこれが最良の策だと思ったただけだ。ちょっと、憧れのシチュエーションではあるけど。

「駄目だよ！ ハツコンが残るなら、うちも残るからね！」

「ピティーも……残るよ……」

「ハツコン師匠、お供しますー！」

三人が予想通りの言葉を口にしている。俺を見捨てられるような性格じゃないのは重々承知していた。

崩壊寸前か避難が全て終わるまで粘って三人を引き連れて逃げるのもありなのだが、リスクが大き過ぎる。生き埋めになった場合
結界の維持、食料の提供、それに酸素、全てを三人分補うとなると消費ポイントが激しくなる。

正直、俺一人の方が生き延びられる確率が増すのだ。これをここで一から説明してもいいのだが時間が惜しい。

それに今のところ動きを見せない冥府の王の存在が怖いのだ。特に慌てる様子もなく四本の腕を組んで睥睨しているのみ。以前の経験を活かして対応策を既に考えついている可能性もあるだろう。

骸骨なので表情は読めないが落ち着いているように見える。

状況が一変する前に、皆には安全な場所まで避難しておいて欲しい。

「オレたちがいない方が、ハッコンが無事に帰還する可能性が高い……そうだよな、ハッコン」

「うん」

黙ってじつと見つめていたヒュールミが眉根を寄せて、俺の考えを代わりに口にした。

彼女は冷静に思考を続け俺が何をしたいのかを察し、その考えに到達したのだろう。

その表情から納得していないのは一目瞭然だが、それでも仲間に説明する為に言葉にしてくれたことに感謝しかない。

「で、でも、それじゃ、ハッコンが」

「ラツミス、お前だってわかってるだろ。オレは前回生き埋めになった時、ハツコンの足手まといにしかならなかった。だから、ここは引くべきだ」

一緒に生き埋めか、懐かしいな。誘拐されて初めて出会った時だよね。

ヒュールミが説得している間も魔物たちは 結界 へ無謀な攻撃を繰り返しているが、その度にポイントが大きく削られていく。

まだ余裕はあるが早めに安全圏へ脱出してくれないと、俺としても落ち着かない。

「で、でも、でも、でもっ！」

頭では理解できて心も拒絶しているのか。激しく髪を振り乱しながら俺の背中に張り付いている。

大丈夫だよ、ラツミス。死ぬ気……じゃない壊れる気なんてないから。

だから、俺は 彼女が 結界 に入ることを見可しない。

結界の外に押し出されたラツミスが呆けた顔で俺を見ている。何が起ったのかわからないようで、涙で潤んだ瞳が俺を捉えて離さない。

「またのこりようをおまちしています」

そう告げると彼女は涙をぬぐい、無理に笑って見せてくれた。

「わかった。うん、もう我儘言わないね。でも絶対に死んじゃだめだよ！」

「いらっしゃいませ」

正確には壊れたらだけどね。うん、約束するよ。ちゃんとラツミス
スの元に戻るって。

「絶対に絶対だよ！」

「ま も り ゆ よ」

「うん、わかった。もし、埋まっちゃっても絶対に掘り起こしてみ
せるから、その時はちゃんと待っていてよ！」

大きく手を振りながらラツミスが階段を駆け上っていく。

話が終わるまで待っていてくれた仲間たちは、一度俺に頭を下げ
てから後に続いた。

小さくなっていく背中を見つめ、全員に向けて「ありがとうござ
いました」と感謝の言葉を口にする。口はないけど。

やるべきことが決まれば後は……やるのみっ！

自動販売機の限界

正面の敵に意識を集中すると 結界 に張り付いていた魔物たちが後方へと下がっていく。

どういうことだ、諦めてくれた展開が一番望ましいけど、そんなに物事は都合よく進まないよな。

『仲間を逃がす為に犠牲になるか。我には理解できぬ発想だが、その実力は見事だと言っておこう』

「ありがとう」

褒めてもらったので一応礼を言っておく。

『ただ、お主のその結界は以前見せてもらった。それに対して対策を考えていないのは、余りにも愚かだとは思わないかね』

その言葉に全身が凍りつくような感覚を覚えた。

それは俺も考えていた。自分が敵側なら 結界 の厄介さを知れば普通は考えるよな。だけど、自慢じゃないが 結界 を打ち破るのは容易くない。

方法として考えられるのはポイントを使い果たさせるか、もしくは

『以前、その結界を破壊された経験があったそうだな』

その言葉が俺の考えていた対処方法を指摘しているように聞こえ、生身の体があれば冷や汗の一つでもかいていたかもしれない。

『我はスルリイムの体に腕輪として潜んでおった、そしてお主たちがダンジョンマスターの元へ我を運び、こうして力を得ることができた』

そんなことは説明を聞くまでもなく知っている。

『実は腕輪の全てがこの体になった訳ではない。まだ腕輪の一部がスルリイムの腕に残っている。そして、あれは我の体の一部だ。膨大な魔力を得た現状ならば、その腕輪を使い所持者を操ることも容易い。手駒は最後まで有効に使わなければ勿体ないと思わないかね』

回りくどい言い回しだが、冥府の王が何を言いたいのか理解してしまつた自分がいる。

スルリイムを操ることで 結界 に対処する方法。それは

『こういうことだ』

宙に浮かんでいる冥府の王のすぐ側に現れたのは、スルリイムと……灰、ケリオイル団長、そして……ラツミスだった。

最悪な予想ほどの中率が高いな。

四つの手で一人ずつ頭を鷲掴みにして、頭蓋骨の顎の骨がカタカタ笑つように揺れている。

「なっ、ここはっ!」

「えっ、ハツコンさんに冥府の王っ!？」

「な、なんで、ハツコン!」

状況が掴めていない仲間が咄嗟に手を振り払おうとすると、体に稲光が走って全身がびくびくと痙攣する。

「がああああっ!」

「ぐっ」

「きゃあああっ!」

や、やめろっ、くそ骸骨!

飛び込んで殴りかかり助けたいが、自動販売機である俺にはどうしようもない。

体が小刻みに震えているが死んではない、大丈夫だと信じている、信じているぞ。

怒りで冷静さを失うな、こういう時こそ冷静な判断力が必要となる。落ち着け、落ち着け、俺。

ケリオイル団長とラツミスの声からは激痛に耐えかねて声が漏れるが、長年体を蝕まれてきた灰の方は痛み慣れているのか声を押し留めている。

スルリィムは何の反応も見せず、虚ろな瞳の焦点が合っていない。

『無駄な抵抗は止めることだ。ここで死にたくはあるまい。これを見て理解してもらえたかと思うが、スルリィムの転移の力を使い三人をお招きした』

拠点であっさり逃亡を許したことは、ダンジョンマスターの元へたどり着く為の布石だったことは理解していたが、まだ利用価値があると考えていたのか。

ラツミスの息は荒いが、それは生きて呼吸をしているということだ。

『さて、ケリオイル。破眼の加護である結界を消してもらえらるか。おっと、無駄なやり取りは省かせてもらう為に、一言付け加えさせてもらう。断ると同時に息子や怪力娘の頭を弾けさせるので、考えて返事をしてくれたまえ』

断るつもりで口を開きかけていたケリオイル団長だったが、その口を嚙み冥府の王を睨みつけている。

そんなことをさせなくても、ラツミスの命を条件に直接俺に交渉すればいい。だというのに回りくどい方法でケリオイル団長に苦渋の選択をさせる底意地の悪さ。根っからの悪党で下種野郎だ。

「駄目だよ、父さん！ ボクがこうしていられるのもハツコンさんがいてくれたからだよ。例え死ぬことになっても、家族と過ごせた時間は忘れない！」

「だ……め……」

ラツミスの声は弱々しいが灰は話せるくらいには回復している。

叫び説得する灰を止めることなく冥府の王は見物していたのだが、長く大きな骨の尻尾で顎を擦り、考えるような素振りを見せた。

『立派な少年だ。しかし、そんな彼が苦しみから解放されて、これから素晴らしい人生が待っているというのに、ここで終わらすというのかね？ あの結界を消し去ってくれるのであれば、キサマらには危害を与えないと誓おうではないか。我はキサマらと違って一度たりとも契約を違えたことはないつもりだが』

冥府の王の言う通り、契約を破棄して先に裏切ったのはケリオイル団長たちの方だ、それを皮肉っているのだろう。

だが、ここで相手が口約束を果たす義務はない。

『ここで断り共に死ぬか、それとも結界を消して家族と人生を謳歌するか。好きな方を選びたまえ』

ここで断れば確実な死が待っている。仮に受け入れたとしても殺されるだけかもしれないが、助かる可能性があるのも確か。

結界を消した場合、自分たちは助かるかもしれないが、逃げている最中の魔物が住民たちに追いついてしまえば凄惨な展開が待っている。

ケリオイル団長は血が出るぐらい唇を噛みしめ、苦渋の表情で頭がおかしくなるぐらいに悩んでいるのが伝わってきた。

その気持ちはわかるよ。目の前でぐったりとした体を晒しているラツミスを見ていると、回線がショートして火花が散りそうだ。

何かできないのか。今の俺に現状を打破する起死回生の手はないのか。

『ハツコン。妙な動きを見せた途端、こやつらは死ぬぞ。自重することだな』

俺の心を読んだようなタイミングで釘を刺してきた。

これで俺に出来ることは……あれしかなくなった。

『さあ、どうするのだ。決心がつくように制限時間を決めさせてもらおうとしよう。では、十秒以内に決めてくれたまえ。十、九、八、七』

もう悩んでいる時間はない。俺は自ら 結界 を解除した。体を包み守ってくれていた青白い光が消滅する。

ケリオイル団長が目を見開き俺を凝視している。何かを言おうと

したが俺の気持ちも汲んでくれたようで、声に出さず「すまない」と口の動きだけで伝えてきた。

いいんだよ、団長。これは俺が決めたことだから。それにこのやり取りが人々の逃げる時間稼ぎになる。

「結界を破眼で消してくれたか。子供の為に全てを犠牲にする親の心というのは、いやはや滑稽……いや、健気なものだ。我は約束を違えることはない。この魔道具が破壊されるのを見届けた後に仲間の人元へ運んでやるとしよう」

胡散臭い言い回しだが、今は信じるしかない。

魔物の群れが 結界 を失った俺の元に押し寄せてくる。巨大な自動販売機の体に手にした武器を容赦なく叩きつける度に、

《2のダメージ。耐久力が2減りました》

《0のダメージ。耐久力は減りません》

と文字が頭の中に豪雨のように降ってくる。

頑丈が高いので蛙人魔程度の雑魚であれば、防御を貫けずダメージは全くないのだが、鰐人魔以上の魔物となると僅かだがダメージが通り、この数になるとあつという間にダメージが蓄積されてしまふ。

このままでは破壊されるのは時間の問題なので頑丈を更に上げ、100に達すると殆どダメージを受けなくなる。その代わりに大量のポイントを失う羽目になったが。

もっと上げたかったのだが、100が限界のようでそれ以上はポイントを注ぐことすらできない。代わりに耐久力を限界の1000まで上げてそう簡単には壊れないようにする。

体の修復にポイントを費やし、今までとは比べ物にならない頑強

さを手に入れた俺は、ほぼ無傷状態で攻撃を受け続けている。

これなら時折通る僅かなダメージを修復すれば、結界よりも長く耐えきることが可能だ。

よっし、狙い通りだ。この状態なら相手に従順であるように装いながら、試行錯誤の時間も稼げる。

『なかなかどうして、この程度なら耐えてみせるというのか。ならば、この溢れんばかりの魔力を試させてもらうとしよう』

冥府の王の尻尾が伸び四人に巻き付く。そのまま拘束した状態で下に垂らしているのだが、全身が痺れた状態のままらしく抵抗できないようだ。

自由になった四本の腕を掲げると小さな渦が頭上に発生した。

それは大気や瓦礫、崩れ落ち始めている天井の岩を吸い込み、見る見るうちに巨大な渦へと変貌する。

『さあ、これを受け止めてもらえるかね。もしくは……その巨体を縮めて通してくれるというのであれば見逃してもよい。言うまでもないが、それ以外の妙な動きをしたら……わかっておるな』

「いらっしやいませ」

と答えたものの、あの渦がやばいのは試してみるまでもない。

結界 を出せば止められるが、そうなると団長たちやラツミスの方が失われる。

映画とかでどっちの命を天秤に懸けるかなんて究極の選択があるが、今がまさにその時か。自動販売機に生まれ変わってそんな選択を迫られるとは思いもしなかったな。

この世界で最も大切な存在はラツミス、そして仲間たち。ならば、迷う必要はない。

「ただ俺は……割り切ることができない。甘く我儘な考えだとは重々承知しているが、みんなを助けたい。」

「だ……め……ハッ……コン……」

口を開くのもやっとといった感じなのに、俺の身を案じて心配してくれている。

大丈夫だよ、ラツミス。俺は異世界で得た自分の体を信じたい、一緒に旅を続けて共に成長した、この自動販売機の体をつ！

迫りくる巨大な渦を眺めながら　　結界　を張らずに受け止める。

今まで感じたことのない衝撃が全身を揺さぶり、視界が黒に染まり尚且つ稲光が幾つも飛び散って見えた。

轟音が今も耳に残り、自分の状況が全く掴めない。

何だこの感覚は、痛覚も感覚もないというのに全身から力が抜けていくような、おぞましい寒気がする。

《979のダメージ。耐久力が979減りました》

ギリギリで耐えてくれたかつ！　本当に辛うじてだが。

自分の体を見下ろすと、巨大な自動販売機の至る所が欠けて穴が開いている。ごめんな、こんなに傷つけてしまった。

それでも助かったことに安堵して、気が緩みかけていた俺の頭に再び文字が浮かぶ。

《九割以上破損した為、元の自販機へと戻ります》

「なっ、そんな仕様があるのか。今までここまでの損傷を受けたことがなかったから知らなかったぞ。」

《尚且つ、この自動販売機はもう使用することができません》

ここまでボロボロになると、二度とこの自動販売機にフォームチエンジがでなくなってしまうのか。

今まで、日本一大きい自動販売機には何度も助けられてきた。本当にありがとう、すまない。

心からの感謝の言葉を伝えると、体から金色の光が漏れだし一気に縮んでいく。そして、俺は元の自動販売機へと姿を戻した。

体は地面にひれ伏すように前倒しになっている。

『あれを耐えきるか。しかし、あの姿を保つことも叶わぬようになったか。見たところ限界ではないのかね』

いつもの自動販売機に戻ったはいいが、内部がショートしているようで時折、火花が散るボロボロの状態。耐久力は減ったままなので見るも無残な姿を晒している。

今すぐにでも修復したいが、感づかれたらラツミスたちの命は無い。

《1のダメージ。耐久力が1減りました》

ここまで壊れていると何もしなければ耐久力が減り続けていくのか。

『……が、天晴れた……では……』

駄目だ音声も碌に聞き取れ無くなってきた。自動販売機として死を迎える直前はこんな感じなのか。

ラツミスが泣きながら何かを叫んでいる。大丈夫……大丈夫だよ。冥府の王が右腕を前に突き出している。ああ、魔物の群れが向か

ってきた。最後は魔物の波に呑み込まれ、蹂躪され踏み潰されて終わるようだ。

《1のダメージ。耐久力が1減りました》

くそ、視界もぼやけてきた。

ここで修復して結界を張っても、誰からも咎められることはないだろう。ラッミスや団長たちだって納得してくれる、そういう人たちだ。

《1のダメージ。耐久力が1減りました》

抵抗を見せれば団長たち……ラッミスが死んでしまう。

迫る足音が雪崩のように耳で反響している。魔物の足が俺を踏みつけ、ひび割れた身体が砕けて、火花が激しく散る。

《1のダメージ。耐久力が1減りました》

体から漏れだす煙が辺りに充満している。

もう耐久力は二桁を切っただろうか。体が限界を迎えたのか能力を確認することすらできない。

《1のダメージ。耐久力が1減りました》

《1のダメージ。耐久力が1減りました》

魔物の巨大な足が俺の上を通り過ぎていく、密集して……いて……天井すら……見えな……い。

《1のダメージ。耐久力が……減りま……》

「
5
つ
い
す

エピソード

それは突然だった。

町の収入の大半を支えるダンジョンから無数の魔物が溢れ出したのだ。

いや、正確には前触れはあった。数か月前からダンジョンの入り口が封鎖され、誰も中に入ることが叶わず、そして誰も出てくることなくなくなった。

ダンジョン絡みの収益で町が成り立っているので、町長は懸命になって原因を探っていたのだが何の成果も得られずに月日だけが流れてしまう。

ダンジョン目当てのハンターや商人たちは行き来が不可能になったことを知ると、ここに留まるのは得策ではないと判断したようで、別のダンジョンが存在する町へと移っていった。

町は日に日に廃れていき、住人の半数以上がこの町を去り衰退の一途をたどっていた。

そんな折にソレは現れた。何の前触れもなく妙な鉄の塊に荷台がくっついた、理解不能な物体がダンジョンの入り口脇に現れた。

人々は好奇心と未知への恐怖で遠巻きにそれを眺めていると、今度はダンジョンから人が溢れ出してきたのだ。

それを知った町長や住人たちは喜んだのだが、ダンジョン内を取り仕切っていたハンター協会の会長たちが口々にこの場を離れると、血相を変えて訴えてくる。

状況が掴めない人々だったが、ダンジョン内から現れた人々は何の躊躇いもなく逃げ出す様を見て異常事態を察し、町の外へと避難を始めた。

不幸中の幸いと言うべきか、残っていた住民の大半も近日中にこを離れる予定だったらしく、荷物をまとめていた者が多く大半はスムーズに事が運んだ。

ハンター協会とダンジョン内に居たハンターたちの誘導により、人々はダンジョンの入り口とは逆方向に逃げ、町の近くの小高い丘の上に陣取る。

そこは町の全貌を見ることができるとして最高のポジションだった。

だがそこを選んだ故に、彼らは町が壊滅する様を目撃することとなる。

一度、体が浮くほどの大きな揺れがあり、それは激しく何度も繰り返される。立っていられなくなった人々が地面に這いつくばりながらも、その目は町に向けられていた。

外壁や建造物が地震により容易く崩壊していく最中、ダンジョンがあつた場所から土砂が天高く噴き上がる。

いつの間にか大地の揺れが鎮まっていたのだが、そんなことは誰も気が付かないぐらい目の前の光景が信じられなかった。

町の中心部に空いた大穴から次々と魔物溢れ出したのだ。

住民は見たこともない魔物の大群に悲鳴すら上げられず、ダンジョンから逃げ出してきた人々はその光景を険しい表情で見つめている。

魔物の群れは人々が避難した丘の方へ向かうことなく真逆の北へと進路を取っているように見えた。数えることも馬鹿らしくなるほどの魔物の大群だったが、それもようやく終わりを告げるようだ。

長く伸びた魔物の列が穴から途切れ、数分が経過した。

ようやく魔物が尽きたのか、人々が安堵の息を吐いたその時、それが穴から這い出てきた。

それはあまりにも巨大な岩の犬のように見えたのだが所々が歪な形をしている。

右前脚は骨でありながら炎を肉の様に纏い、左前脚は爬虫類のそれだった。左後ろ脚は樹皮が見える木としか思えない。それを目撃したヒュールミが声を漏らす。

「階層主を融合させやがったのかっ」

女の言葉に人々は戦慄した。この町の住民はダンジョン内部の知識もそれなりにある。だからこそ、その言葉の意味を正しく理解できてしまったのだ。

何十、何百ものハンターを振り返りにしてきた階層主を守る魔物。一体だけでも驚異の存在である階層主が一体に融合したという事実は、人々を絶望に突き落とすには充分過ぎた。

碌に立ち上がることも出来ない町の住民たちとは対照的に、ダンジョンから現れた人々は既に動き始めていた。

「あ奴らの向かった方角は防衛都市か。飛行能力、足の速い者は帝国や近隣の町村へと向かい現状を伝えてくれ！」

「はいっ！」

コートを着た二足歩行の熊人魔 熊会長の指示に従い、翼の生えた獣人たちが宙に浮かぶ。瞬足の加護を持つハンターたちは既に駆けだしている。

「戦う意欲のある者はどうか力を貸して欲しい。あの数をまとともに相手にすることはできぬが、少数を削り妨害工作程度であれば我々にもできる！」

戦意が衰えていない者が意外にも多く、ハンターたちの大半が熊会長の指示に従い、あの魔物の群れを追うようだ。

残された人々はこの町の逃げ遅れた住民の搜索をしつつ、この場所
で救助が現れるのを待つことになった。

「我々は奴らを追うがお主らはどうする」

熊人魔の周りには数名のハンターが集まり、顔を見合わせていた。
そこには冥府の王に捕らわれていた四人の姿もある。

あの時、冥府の王はケリオイル団長の力でハツコンの 結界 を
消していると油断をしていた。そこで 破眼 の力でスルリイムの
洗脳を解き、全員を連れて 転移 で飛び、今に至る。

「俺たちは魔物の討伐に加わるぜ。少しでもハツコンの心意気に報
いたいからな」

「ええ、どんな危険な任務でもこなしてみせます」

「何でも言うてくれ。ここでやらなきゃ、男じゃねえだろ、なあ赤」

「ああ、何だつてやってやるぜ。ハツコンばかり、カッコつけさ
せねえよ」

「ハツコンさんの為にも時間を稼がないと」

「私も付き合うわ。それで罪をあがなえるとは思わないけど」

ケリオイル団長一家とスルリイムは強い決意を秘めた瞳で、魔物
たちの最後尾を睨みつけている。その視線の先は巨大な魔物ではな
く、その上に浮かぶ小さな魔物に向いていた。

「団員としては同行すべきですね。個人としても奴らを許せそうに

ありませんので」

「そうつすね。許すわけにはいかないっすよね」

へブイとシユイも同じ意見のようで後を追うことを選んだ。

「我々も参戦させてもらおう。この場は迷宮会長と犬岩山会長に任せ
る」

「お任せください、始まりの会長。微力ではありますが、尽くさせて
いただきますわ」

「あれ、今日は静かだね、迷宮会長は。面倒だけど、一応頑張るよ
」

始まりの会長に住民を託された迷宮会長と子供会長のコンビは少
々頼りないように思えるが、ハンター協会の職員が残るので何とか
なるだろうと熊会長は考えている。

「俺はあの魔物たちを焼却しねえと気が済まねえ！ さっさと追い
かけようぜ！」

全身から炎を吹きだしている灼熱会長の周辺から人が去っていく。

「ワイはここに残るで。ハツコン掘り起こすなら場所探らんとあか
んやる」

闇会長の闇に潜る能力があれば、地中を調べることがも可能なので
かなり有益な能力といえるだろう。

「ピティーも……ここで……手伝う……」

「オレも残るぜ。誰かが制御しねえといけないからな」

ピティーには 重さ操作 があるので瓦礫の撤去や土砂の運搬に向いている。

ヒョールミは手持ちの魔道具を用いて、廃墟と化した町で材料を集めて掘削に向いた魔道具を作る気のようにだ。

「私は、ハツコン師匠を探すのを手伝いたいのですが、ですが、魔物討伐にいかねばハツコン師匠は怒る筈です！ 涙を呑んで、ここは皆様にお任せします！」

唇を噛みしめ苦渋の表情を浮かべ、残ると断言した仲間には深く頭を下げている。

何よりもハツコンを大切に思う弟子としては、身を斬られるような辛さなのだが、師匠を思えばこそ討伐に向かう決意をした。

「ラツミスは……訊ねるまでもないか」

熊会長は問いかけようとしたのだが途中で口を嚙み、既に大穴の方へと駆けだしているラツミスの背を見つめ優しく微笑む。

仲間の誰一人としてハツコンが壊れた……いや、死んだと思っていないことが何よりも嬉しかったのだ。

この日、それぞれの道を選択した彼らは一旦別れることとなった。彼らが何を思い、何を成し、何を手に入れ、何を失うのか。

ダンジョンの外へと場所を移した彼らを、この先何が待ち構えているのか。

後世に名を残す歴史的な大戦に、その身を投じることになること

を今は誰も知らない。

エピソード（後書き）

九章が終わりました。おそらく次が最終章となります。

気合を入れて書くことになるので次の投稿が11月1日からになる予定です、どうぞよろしく願います。

（訳：227話毎日更新を達成しましたので、暫く休ませてください。半年以上よく頑張った！ 自画自賛終了。あと書籍の方もよろしく願います。既に購入された方々には感謝、感謝、圧倒的感謝）

弟子として その巻（前書き）

暫くハツコン視点ではなくなります

弟子として その巻

「ミシユエルさん、疲れたらクリユマの操作を変わりますよ」

隣に座るヘブイさんが心配して声を掛けてくれる。

崩壊した町を出発して、まだ四時間程度なので疲労は感じていない。

「大丈夫です。ヘブイさんは今の内に体を休めておいてください」

ハツコン師匠の説明だと、この丸いゲージの針が下に達すると動けなくなるそうだが、そうなる前に荷台に積んだ樽の中に入っている、ガスリンという物を入れなければならないらしい。

こんな物まで召喚できるハツコン師匠の実力には感服してしまう。あの白く美しく輝く神々しさもありながら、思わず見とれてしまう艶めかしい光沢がある鋼鉄の体に、優しさと強さを秘めた心。あれ程に素晴らしい師と出会えたことに感謝しなければ。

「順番で運転のやり方を学んでおいて正解でしたね」

「はい。ハツコン師匠の負担を減らす為に学んだのですが、思わぬところで役立ちました」

永遠の階層を進んでいる際に、クリユマの操作に興味がある人は操作方法をハツコン師匠の個人授業で教えていただけだ。

私やヘブイさんだけではなく同行していた大半の方々がクリユマを操れる。ここにはヘブイさんしかいないが、疲労が溜まったら交代していただく。

「このクリユマがあるということは、ハッコンさんがまだ無事だということに他なりません。彼が呼び出した物ですからね。意識的に消そうとするか、維持できないようにならない限り、召喚物は世界に留まるというのが、召喚魔法の決まり事ですから」

へブイさんの言葉は偉大なる魔法使いであるシメライ様も仰っていた。

初めからハッコン師匠が死んだとは思ってもいないが、クリユマを運転していると師匠との繋がりを感じられて、心が温かくなる。

「魔物の軍団はもう抜いたでしょうか」

「うむ、とうの昔に抜いたようだ。このクリユマの速度には改めて驚かされるな」

後ろに備え付けられた荷台から清流の会長の声がした。

いつもはハッコン師匠の特等席である、私が座っている席のすぐ後ろに座って正面を見据えている。

一応、街道を進んでいるのだが、草がないだけで整地も進んでいない道を普通はこんな速度で進めば、揺れが激し過ぎてまともに走ることができない。

だというのに、何とか走ることができている。それに、荷台の方もヒュールミさんが永遠の迷宮を進んでいる最中にクリユマを参考に改良を加えてくれたので、驚くほど揺れが少なくなり乗り心地が向上している。

詳しいことはわからないのだが、クリユマに付いていた鉄らしき渦を巻いた物を荷台にも仕込み、更にハッコン師匠が出してくれた予備の車輪を荷台に付け替えたらしい。

魔道具も利用しているそうだが、私には難しくてせっかく説明し

ていただいたのに殆ど理解できなかった。もう少し勉強にも身を入れなければならぬようだ。

昔、姉上にも「武だけではなく知も鍛えなければなりませんよ」と口を酸っぱくして何度も言われていた。

もう何年も会っていないが姉上は元気にされているだろうか。

「この調子であれば、一週間も経たぬうちに防衛都市にたどり着けそうだが。問題はこの先にある殺意の森を迂回しなければならぬことだ」

「あそこは凶悪な魔物が多く、人を迷わせる呪いが施されているそうです。魔物の群れも避けて通るのでは？」

「私もヘブイさんと同意見です」

以前単独である森に挑んだことがあったが、魔物の強さは何とかなったが迷ってしまい餓死寸前まで追い込まれたことがあった。

「普通ならばそうなのだが、あ奴らには階層主をまとめた魔物があるからな。あれを先頭にして木々をなぎ倒しながら進めば、安全な道が確保される」

清流の会長が言うことを全く考慮していなかった自分の愚かさ到头を抱えそうになる。

ハッコン師匠なら、すぐさま気づき対策を練られるのだろう。四角い身体に秘められた賢者顔負けの知識には、いつも助けていただいていた。

「クリユマで森を突っ切るのには無理がある。迂回するしか手が無いのだが、ここで時間を短縮されるのは痛いな」

我々先発隊は清流の会長、ヘブイさん、カリオスさん、ゴルスさん、私の五名しかない。

会長は顔が利くので防衛都市での交渉を担当してもらおうことになっている。

カリオスさんとゴルスさんは防衛戦に関しては一番頼りになることだ。二人は集落を守り続けてきた猛者。あの二人の息の合った動きで攻められたら、正直、勝てるかどうか怪しい。

ヘブイさんは負傷した時の回復と、クリュマ操作の交代要員として同行してくださった。

「としても、どうしようもないよな」

「迂回しかないと思われる」

カリオスさんとゴルスさんも迂回を勧めている。

私もそれしかないとと思うが、せつかく距離を稼いでいるのここで距離を詰められるのは……。

「森に潜んで相手の数を削るってのはどうだ？」

「するにしても兵力が足りないだろ、カリオス」

「罾を仕込むには道具も人材も足りぬか」

御三方の意見を聞きながら頭を悩ませている。ハツコン師匠がこの場に居れば妙案が浮かび、とんでもない策で我々を驚かせてくれただろう。

だが、今は我々しかない。無い知恵を絞りだすしかないのだ。

「皆さん……私だけ殺意の森で降ろしてもらってよいでしょうか」

「何を考えている、ミシユエル」

「私は複数の相手への立ち回りを得意としています。それに、いざとなれば森に火を放つことも容易いので、少しはお役に立てるか」と

私にはこの竜を模した剣がある。我が家に代々伝わるこの剣は灼熱の炎を刃に纏わせ、放つことも可能だ。

この火力であれば森を焼き、魔物の軍勢を巻き込むこともできる。逃走の際にも上手く立ち回る自信はある。

「それは、あまりにも無謀だ。死に行くようなものだ」

「そうですよ。あれが十数体の魔物であれば任せますが」

清流の会長とヘブイさんが止めてくれている。私も逆の立場なら無謀だと考えなおすように説得しただろう。

「そつだそつだ。それにそういう危険なことは俺たちのようなオッサンがやる仕事だぜ」

「だな、カリオス」

門番のお二人は止めるどころか、足止めの役割を代わりにやろうと言いだしてきた。

「いえ、ここは私が向いています。それに、死ぬ気はありません。死んだらハツコン師匠に怒られますので。目的は相手の妨害のみです、無理だと判断した森を焼いて逃走することを誓います。詳しく

は話せませんが私には人々を守る義務があります。どうか、私に任せてもらえないでしょうか！」

勢いよく頭を下げると操作する円形の輪にぶつかってしまった。
ブーッ！

あっ、ここを押すと音を発するのだった。ヒュールミさんが運転中にやって、酷く驚いたのを覚えている。

「はあ、言っても聞かぬようだ。命を捨てるようなことはせず、無事帰ってくることを……ハッコンに誓えるか」

「誓えます！」

私が即答すると皆さんは説得を諦めたようだ。死ぬ気は本当になり。ギリギリまで頑張るつもりではいるが、無事生き抜いてハッコン師匠に褒めていただきたいから。

「ならば、任すでしょう。くれぐれも命を大事にするのだぞ」

「そうですね。命があつてこそその趣味ですからね。命と靴は大切にしてください」

「死んで英雄になろうなんてやめろよ。生きねえと好きな女と過ごすこともできなくなっちまうからな」

「ああ、そうだな」

皆さんの激励の言葉が胸に染みる。

ハッコン師匠と出会い多くの人と触れ合うことができた。そのおかげで仲間内だけだが、こうやって自然に話せるようになった。

これも全て師匠との出会いがあったからこそ。その恩に少しでも報いたい。

そして、この国の住民を守らなければならない。この命に代えても……矛盾している考えだ。この心の声を聞かれたら怒られそうです。ね、ハツコン師匠。

一族の義務と皆さんとの絆。どちらも守る為に私は 魔物の軍勢に挑まなければならない。

正面にはまだ森は見えてこない。殺意の森に到着するまでは、皆さんと過ごすこの時を思う存分、満喫させてもらおうことにしよう。

「無茶をするでないぞ。ハンターは生き延びることも仕事の内だ」

「神のご加護がありますように。無事を祈っていますよ」

「やばくなったら、すたこらさっさだぜ？」

「逃げるのも策の一つだ。蛮勇と勇気を履き違えるな」

殺意の森の前で降りた私は、皆さんへ深々と頭を下げた。

足下には大量に食料が詰められた袋がある。これだけあれば一週間は余裕で過ごせ、足りなくても森で動物や魔物を狩って、自力で食料を確保すればいい。

小さくなっていく皆さんの姿が見えなくなると、木々の生い茂る森へ足を踏み入れた。

昼間だというのに密集しすぎていて光があまり差し込んでこない。

「薄暗いな……っと、もうお迎えですか」

まだ少ししか進んでいないというのに、辺りから無数の魔物の気配を感じる。

しかし、十数体だが一目散にこちらに突っ込んできているようだ。妙だな、この気配は決して弱くない魔物だが、気配の質がバラバラだ。

異なる種族の魔物が群れを成すなど、魔王軍でもない限りあり得ないのだが。

大剣を構え、魔物が飛び出してくるのを待つ。

木々の間を抜けて肉食の一つ目狼が一体と、額に剣の刃のような角が三本生えた猿の姿をした魔物が現れた。

視線が合うと 驚いたように目を見開いた。何故だ、私を狙って現れたのではないのか？

一瞬、戸惑うように足を止めたが、すぐさまこちらに向けて突進してきた。

斬り下ろしと横薙ぎで葬ると、更に種類の異なる魔物が三体出てきたのだが、やはり私を見て驚いているな。

脚の止まった魔物を切り捨てようと構えると、その魔物たちは目の前で体中に線が走ると細切れになった。

文字通り、何分割にもされた魔物だった肉片が地面を赤く染めている。

「何が……」

こちらが手を出していないというのに、切り刻まれた魔物。見事な切れ味と目にも止まらぬ速さの攻撃。

今の自分の実力で抵抗できるのか。いや、ここで引くわけにはいかない。

「姿を現したらどうですか」

木々の後ろから漂ってくる気配に対し声を掛ける。

魔物にしる人にしる、油断ならない相手なのは確かだ。気配の形からして人型であるのは間違いない。

この太刀筋はまるでユミテ様のような腕だ。

どんな相手が現れようと平常心を失わず、全力を尽くし生き延びる。

もう一度、ハッコン師匠に会う為に！

弟子として その式

「我が気配に気づくとは、僥倖^{じやうじやう}」

姿を現したのは一体の骸骨。頭には少しだけ長髪が残っていて風になびいている。

服は着ているのだが、それはこの世界ではあまりお目にかかったことのない服装をしている。シメライ様の戦闘服に似ているが、それとほぼ同じ服を最近見たことを思い出していた。

クリユマで観た映像の一つに、ハツコン師匠の世界での剣士たちを描いた物語があった。その時の剣士と格好がそっくりだ。腰に下げた片刃の武器 刀を収めた鞘も同じ。

確かハツコン師匠の説明では「り お う に ん」と呼ばれる職だった。

ユミテ様も刀を操る凄腕の剣士だが、目の前の骸骨はそれに匹敵する実力かもしれない。

「何者ですか」

「名か、この体になってから忘れてしまつたわい。今は人差將軍と呼ばれることが多いが」

その名を聞いた途端に大剣を正眼に構える。ここで、五指將軍の一人と遭遇するとは。

いや、ここで会えたのは幸運か。ここで奴を倒すことが叶えば、相手に痛手を与えられる。

「そういえば、小將軍が逃げた際に牢屋の格子が見事に切断されて

いたそうですが、それは貴方の仕業ですか」

「ああ、あの娘の尻拭いをしてやった」

あつさりと肯定した。格子の切り口を見てユミテ様が思わず息を吐いていたのを思い出してしまふ。確か「これは油断ならぬ相手ですねえ」と目を細め呟いていた。

あの方が警戒する腕だということは……私が敵う相手ではない。だが、それは以前の自分だ。ハツコン師匠と苦難を乗り越え、鍛え上げられた今なら勝てなくとも相手に痛手を負わすことぐらいはこの敵を自由にさせてしまえば、後続の皆さんが大きな損害を受けかねない。ここは私がなんとかしなければ！

「お主、我との実力差を見抜いておりながら、挑むというのか」

「退けぬ理由がありますので」

「それは僥倖。逃げ惑う相手を斬るのにも飽きておつてな」

腰を落として刀の柄に手を掛けた瞬間、鞘走りの音がする前に自分の喉元に大剣を移動させた。

金属がぶつかり合う音が森に響く。一撃を刃で受けただけだといふのに手がしびれている。

何という威力だつ。

「僥倖、僥倖、いやはや、居合を防がれたのは何時ぶりか」

感心してもらえているようだが、今のはユミテ様の戦いとクリユマで観たものを思い出して、体が反応したに過ぎない。実力で防いだとはいえない偶然に近い動き。

冷汗が背中を濡らしている。相手から視線を離すことができず、自分の呼吸と鼓動がうるさいぐらいに焦りを伝えてくる。

すみません、ハッコン師匠。私はここで終わりを迎えるようですよ。ですが、最後に一撃、我が全身全霊の一撃を相手に叩き込んでみせます。

刃が紅く輝き炎を噴き上げる。天に向けて突き刺すように掲げると、大きく息を吸う。

「ほう、玉碎覚悟の一撃。面白い、受けて立つ」

相手の実力であれば今すぐにも私を切り捨てるのが可能。だというのに、応じてくれる。こちらとしては、その心意気に甘えさせてもらうしかない！

一歩踏み出し、渾身の一撃を放とうと剣を振り下ろす直前、人差將軍が先に動く。

斬られた、自分の死を覚悟して続く痛みにも身構えたが、いつまで経っても痛みがやってこず、血の流れる感覚もない。

思わず閉じていた目を開くと、刃の軌跡が幾条にも空間に走っているのが見えた。

キンキンと刃同士がぶつかり弾かれる音が何度も響き、人差將軍が刀を振るい何者かの攻撃を防いでいる。

目にも止まらぬ速度で斬り込まれているのは理解できるのだが、人差將軍を襲っているソレを見て、脳が思考を止めようとするのを懸命に堪えた。

「エシグ……」

草食の動物で頑丈な前歯と長く伸びた耳が特徴の動物が四匹、人差將軍と渡り合っているのだ。

大きさは普通のエシグに比べたら二回りほど大きいけど、それでも

私の膝ぐらいまでしかない。だというのに、信じられない速度で飛び跳ね刃の様に鋭く尖った耳で襲い掛かっている。

エシグの耳は剣のように硬く非常時にはそれで敵対する相手と戦うと聞いたことはあるが、所詮は小動物、最弱の魔物にすら勝てない……筈なのだが。

「ウサッター殿、ウツサリーナ殿、ウサリオン殿、ウサツピー殿、そのまま、敵を封じ込めてもらえるか！ その御仁、今の内に早く逃げるがいい！」

エシグに続いて現れたのは、栗色の長い髪を後方で縛っている、凜々しい顔つきの女性だった。銀色の全身鎧を着込み片手剣を抜いてはいるが、戦いには参加していない。

ウサッター殿というのは、あのエシグたちのことだと推測できる。つまり、動物を操って戦わせる動物使いなのだろうか。

「ありがとうございます。ですが、私はここで引けぬのです」

「心意気は立派だが、ウサッター一家にここは任せた方が……ん？ もしや、お主……ミシユエルか！？」

大声で私の名を叫ぶ女性の顔を驚きながらもまじまじと見つめる。あの利発そうに見える整った顔にこの口調。もしや。

「ハヤチ姉さん！」

何故、こんなところに！

父親は同じで母が違う。つまり腹違いの姉弟。私たちだけではなく多くの兄弟がいるのだが、皆一様に仲が悪かった。特に私は正式には認められていない子だったので、かなりの冷遇を受けた。

そんな中、この国の 第八王女であるハヤチ姉さんだけは違っ
た。

責任感が強く、立場の低い私をかばい正義について熱く語る、姉。

「おお、やはりミシユエルであつたか。大きくなつたな、息災か！」

「ええ、まあ。ハヤチ姉さんはいつから動物使いになつたのです。
それもこんなに強力な」

四対一とはいえ、五指將軍の一人を完全に封じ込んでいる。見事
な体捌きと剣技？ 耳捌きで対等どころか押し気味だ。

剣の腕はそれなりで、自分の力の足りなさにいつも嘆いていたハ
ヤチ姉さんだったが、知らぬ間にこんなに強力な力を得ていたなん
て。

「動物使いではない。ウサッター殿たちは我が友だ！」

胸を張り堂々と言い放っている。昔から動物は好きだったが、近
寄るといつも逃げられて寂しそうにしていたハヤチ姉さんが……。

動物を自在に操れるのが信じられなかったが、その口ぶりだとエ
シグたちは自分で考えて動いているかのようだ。

「積もる話は後にしよう。今は、奴を倒すことが最優先ではないか」

「そうですね、ハヤチ姉さん。お友達にそのまま相手を動けないよ
うにしてもらえるよう、伝えてもらつてもいいですか」

「構わないぞ。ウサッター殿、そのまま、相手を削つてもらえるか」

エシグたちは戦いながら頷いたように見えた。こちらの言葉を理

解しているのか、まるでキコユさんたちと一緒にいた黒八咫さんやボタンさんのようだ。

私が何をしたいのか察したかのようにエシグたちの戦い方が変わった。相手の下半身を重点的に狙い、上半身には一切攻撃を加えていない。

腰を落とし、相手の居合切りを真似るように大剣を構える。このエシグたちなら俺の動きを察して動いてくれると信じよう。

刃に炎を纏わせるとエシグたちは人差將軍の注意を惹きつけるように、激しく動き回り自分に視線が向くことのない立ち回りをしてくれた。

大きく一步鋭く踏み込むと同時に鋭く腰を回転させて、大剣を全力で横に薙ぐ。

以前からユミテ様の剣技を参考に高速の炎を飛ばす技を練習していたのだが、それがここで活きる！

半月状の炎の刃が大気を歪ませながら人差將軍に襲い掛かった。気づき振り向いたときはもう遅く、相手の腰を捉え真つ二つに分断すると上半身と下半身が激しく燃え、あっという間に燃え尽き灰となる。

全ての力を込めた一撃が命中して安堵のあまり全身の力が抜けた。片膝を突くと大きく息を吸う。

「見事だったぞ、ミシユエル。成長したな！」

「エシグさんたちが協力してくれたからですよ」

エシグにしては大きな個体の四匹が、ピョンピョンと跳ねて寄るとハヤチ姉さんの足元に並んでいる。

「さすが、ウサッター殿たちだ。ミシユエル紹介しておこう、こち

らが一家の主、ウサツター殿だ。そして、隣の美しい毛並みをしているのがウツサリーナ殿。こちらの少し小柄なのが子供たちでウサリオン殿、ウサツピー殿だ」

正直、私の目では見分けがつかないがハヤチ姉さんには違いがわかるらしい。

「ところで、こんなところで何をしていたのだ」

「ええ、そのことなのですが」

今何が起こっているのか詳しい話をすると、ハヤチ姉さんは真剣な表情で何度も頷いていた。

「それで合点がいった。私はこの森の様子が変わたと報告があつてな、防衛都市からやってきたのだ。守護者殿の一件が片付いたかと思えば、ダンジョンでそんなことがあつたとは」

「守護者殿？」

「防衛都市を守り、魔王とも渡り合った御方だ。戦いで痛手を負つて、最近まで消息が不明だったのだが、つい先日復活を果たされた」

「そんな方がいらっしゃるのですね。ダンジョンに籠っていましたので、世事には疎くて申し訳ありません」

「最近、噂も聞かぬようになったので心配していたのだが、ダンジョンにいたとは。ミシユエルが師事する、ハツコン殿とはどのような御方なのだ？」

それを聞きますか。本気でハッコン師匠のことを語れば丸一日は覚悟して欲しいところですが、この状況だと簡潔に伝えないといけません。

「そうですね、誠実で寛大な心。どんな苦境に陥っても決して辛い顔一つ見せず、仲間を守り癒す方です」

「私が守護者殿に会えたように、ミシユエルにも素晴らしい出会いがあったのか」

「ええ、守護者様もご立派なようですが、ハッコン師匠はもうそれは素敵な方で」

「ちよつと待て、ハッコン殿の素晴らしさは認めるが、守護者殿より勝っているかのような発言は控えてもらおうか」

「これは失礼しました。貶めるつもりで発言したのではないですよ。ただ、ハッコン師匠に匹敵する方など、この世にはいらっしゃいませんので」

「いやいや、守護者殿も寛大でおおらかで、何よりも大きい存在だ」

「いえいえ、ハッコン師匠もとても大きくなることか」

と盛り上がり過ぎて口論になりそうだったが、エシグたちが、耳で鎧をこんこん叩くので話が中断された。

「じほんっ、この話は全てが終わってからにするとしよう。今は、ここで魔王軍の足止めをしなければならぬのだな」

「ええ、そうです。少しでも魔物の軍勢を足止めしなければ、あっという間に防衛都市が呑み込まれてしまいます！」

拳を握り締め、現状の厳しさを訴えたのだが、ハヤチ姉さんは平然と構えている。事の重大さは伝わっている筈なのだけど。

「防衛都市に連絡を伝えておるのだな。ならば、大丈夫だとは思うが念の為に罫を仕掛けるのを手伝おう。ウサツター殿たちがいれば木の加工も可能だ」

それは嬉しい申し出なのだが、緊張感が足りない気がする。作業しながらもっと詳しく敵の情報を伝えるところでしょう。

待っていてくださいね、ハツコン師匠。私はここでハツコン師匠が追い付くまでの時間を稼いでみますから！

大食い団が行く

「こっちだったよね、確か！」

「ああ、間違いない。あの小さな山の麓に村があると地図に書いてあった」

団の副リーダーであるショートが言うなら間違いない。

いつ見ても羨ましい黒褐色の毛並。ボクもあんな感じの毛の色が良かったな。

「ねえねえ、ミケネ。お腹空かない？」

「もうちょっと、我慢しようよペル」

ペルはいつもお腹空いたって言っている。確かにボクたちは大食漢で人よりご飯を食べるけど、もう少し我慢しないと。

「呑気に話している場合じゃないでしょ。それにペルはもうちょっと離れて、ミケネとショートは寄り添うように走らないと」

「近くで走ると邪魔だよ？」

うちの紅一点であるスコは垂れた耳が自慢らしいけど……まあ、そこは可愛いと思う。でも、ちょっと気になることがあるんだよ。ショートと話をしたりしているとミケネはもつと近づいてとか、たまにハアハアしながらこっちをじっと見ている。

あの姿が不気味過ぎて、男が全く寄りつかない。最近ではハッコ

ンとミシュエルや紅白双子が仲良くしている姿を見ても呼吸を荒くしている。

「ヘブイ、団長もありよね……その場合どっちが……」

そんなことを口にしながら血走った目で仲間を凝視していたスコを見て、ハツコンが前に「くさっ て う」と呟いていたけど、どういう意味だろう。

まあ、団で色恋沙汰が発生すると崩壊の危機だから、この状況は悪くない気もする。

ハツコンが呼び出したという動く鉄の塊から途中で降りたボクたちは、魔物の軍団の進路方向に重なりそうな村に避難を呼びかけるのが仕事だ。

脚の速さには自信があるので、ボクたちが選ばれた。ここら辺にいる魔物ならボクたちでも倒せるので、命の危機に晒されることもないと思う。

「んー、何か焦げているような臭いがしないか」

シヨートがそんなことを言うので鼻に意識を集中すると、確かに微かだけど焦げたような……違うな、炭の匂いがする。

「焦げているというより、炭じゃない？」

「前に焼き肉した時に使った炭の臭いだよこれ、ああ、お腹空いてきたあ」

嗅覚だとペルがもつとも優れているので間違いない。

「でも、炭の臭いって……もしかして、焼け跡なのかな」

スコに言われてボクもピンときた。そうか、この臭いって。その推理が正しかったことは数秒後に判明した。

目の前に広がるのは焼け崩れた元は村だった廃墟。規模はそんなに大きな村ではなかったようだけど、全焼を免れた住居も数件あるが全く被害のない建物は一軒もない。

少なくとも住める状態の家はどこにも見当たらないので、住んでいる人は誰もいないだろう。

「廃村だね」

「人の臭いも生活音もしないな」

「食べ物も残ってないね」

「うーん、どうしよっか。一応村を調べてみるから、ミケネとシートでどうするか相談して」

スコは考える気がないようで、ペルを連れて廃村の探索を始めている。

焼けた跡がかなり古いので燃えてから数年は過ぎているみたい。

「この地図の村はここで間違いないのか、少しだけ期待していたので残念だ」

「期待って何が？」

「以前、噂で聞いたんだが、この村の食堂ではほっぺが落ちるぐらいの美味な料理を出すらしくてな。ご飯目当てで村を訪れる者も多かったそうだ」

「えっ、本当に！ それは、残念だなあ」

ペルほどじゃないけど、ボクたち一族は他と比べて大食い食べ物に対しての執着は強い。だから、そんな美味しいご飯を食べられるお店がなくなっているのは純粹に悲しい。

「食べ物、なーんにもなかったよー」

「でも、こんなのは見つけたわ」

帰ってきた二人から手渡されたのは、鉄の箱に入っていた手紙だった。

内容は「生き残った者はその山の頂上で生活をしています。家族や知り合いの安否を知りたい人はそちらに来てください」と書いてある。

「その山って、あの低い山か」

「うん、走ったら直ぐに頂上につきそうだね、先にご飯食べない？」

「どうせなら、上に登ってからご飯食べましょーよ」

「そうだね。頂上を調べてからご飯にしようか。誰か住んでいたらご馳走してくれるかもしれないし」

ボクがそう言つとペルの目の色が変わった。この調子なら山登りが終わるまでは我慢してくれそうだ。

山を一気に駆けのぼると、そこは妙な光景だった。

池がポツンとあるだけで他には何もなかった。池の周りには雑草

が一本も生えていない。木々が生えている一帯は自然豊かなのに、山の頂上だけは植物が遠慮して生えるのを躊躇っているかのようだ。

「うーん、何にもないね」

「そうだな。綺麗さっぱり何も無い」

「でも、この池変じゃないかな。お弁当箱みたいに四角だよ」

「あつ、本当ね。結構、大きな池なのに正確に測つてくり抜いたみたいに、真四角だわ」

ペルとスコの言うとおり、その池はかなり大きいのに綺麗に四角形だった。

溜池を作るときにこだわって切り取つたのだろうか。でも、溜池にしては水路が見当たらない、なんの為に作つたんだろう。

「あれ、こんなところに鉄の箱があるよ。焼け跡にもあつた箱と似ているよ」

ペルが見つけたのは、確かに廃村で見つけた物と酷似していた。

開けると中にはまたも手紙が入っていて「ここから北西の村に移住しました」と書いてあつた。移住した人の名前も書いてあつたが、たつた四人だけで火事の被害が酷かつたのがわかる。

「その村は進路から少し離れているけど一応向かってみようか」

「そうだな。こっちに近づかないように伝えておいた方がいいだろう」

「あつ、ちよつと待って、手紙の裏にまだ書いてあるよ」

ペルにそう言われたので裏返して書かれていた文字を覗き込む。

「えつと、北西の木々を抜けた先に野菜を植えて放置している、食べられる様なら好きにして構わない。って書いてあるわ」

もう何年も前に書かれた文章なので、野菜が植えてあったとしても腐り果てるか、動物や魔物に荒らされているだろうとは思っただけ、念の為に確認して見るとここにした。

徒歩で一分もかからず、目的の場所は発見できた。

「嘘、凄い……」

スコがその光景を見て啞然としている。いや、みんな大口を開けてポカーンと間抜けな顔をしていた。あつ、ボクもいつの間にか口が開きっぱなしだった。

目の前に広がるのは色とりどりの野菜が豊かな実を付けている自然の農園だった。手入れをしていないのは一目瞭然で、野菜たちがお互いの領地を侵略しながら実を成していて、ズユギウマの隣にタミタが並んでいたりしている。

「野菜ってそんなに好きじゃないのに……凄く美味しそうだよ！」

「この青青しい匂いが、こんなにも腹に響くとは」

「食べていいのよね、これを」

「う、うん。でも、食べ尽すのはなしだよ。きっと動物たちも食べたりするだろうし」

みんなに注意をしながらも、ボクは目の前の野菜に貪りつきたい欲求を抑えるのに必死だった。それぐらい、目の前の野菜たちは魅力的に見えている。

「じゃ、じゃあ、いただくこうか！」

「いただきます！」

みんなが野菜に飛びかかってくる。ボクも一番手前のタミタを手に取り、軽く服で拭いてから噛り付いた。

「ひああううう、な、何これ！？ 口の中いっぱい広がる溢れ出す水が、鮮烈な刺激と豊潤な旨味がああああっ」

自分でも何を言っているのかわからないけど、この野菜とんでもなく旨い。それだけは確かだ！

「何これ、何これ、なひほへ、なふふほおおおう！」

ペルの頬が倍以上に膨らみ、目元が幸せそうに垂れている。

口元が野菜の汁で濡れているが、そんなことは全く気にせず野菜を食べ続けていた。いつもは肉ばかりなのに、信じられない食べっぷりだ。

「これは、キコユに貰った野菜以上の旨さ……だが、何故かあの味が頭に浮かんでくる……どうしてだ」

冷静に味わっているシヨートの呟きが聞こえたので、ボクも少し冷静になってもう一口齧ってみた。

あつ、うん、確かに旨さはこっちの方が格上だけど、味が似ている気がする。

「これを食材にしてラッミスに手料理してもらいたいなあ」

スコの意見には同意するよ。生でもここまで美味しい野菜を、料理が上手なラッミスが使ったら、想像するだけで涎が溢れる料理が出来上がるに決まっている。

「ハツコン無事かな……」

ラッミスのことを考えると、いつも背中にいたハツコンを思い出してしまう。

みんなが逃げる時間を稼ぐ為に、出口を守ってダンジョンに埋まったらしい。ボクたちを含めた仲間は誰一人として、ハツコンが死んだ？ ……壊れたとは思っていない。絶対に戻ってくると信じている。

「野菜食べていると、ハツコンの甘いお茶欲しくなるな」

「そうだね。からあでと一緒に食べたいな、この野菜」

「ここで食べて一息吐いたら、他の村に向かしましょう。さつさと連絡終わらせて、皆に合流しないとね」

みんなと顔を見合わせて、にかつと笑った。

そうだよ。さつさと終わらせて、ハツコンに合流していつものシュワシュワする飲み物と、からあで食べないと！

「気合の雄叫びしようか！」

僕たち暴食の悪魔団　いや、大食い団が気を引き締める時の叫びを実行した。

「ヴオオオオオオッ！」

防衛都市へ

ミシユエルさんと別れて五日が経過しました。

我々はクリユマのおかげで予想よりも早く防衛都市へ到着しそうです。今は小高い丘の上に居るのですが、遥か遠くに既に防衛都市の立派な城壁と大扉が見えています。

私の加護『感覚操作』で視力を上げているので良く見えています。皆さんの目には辛うじて見える程度でしょう。

今は昼食の時間なので降りて休憩していますが、長時間操っていると、さすがに肩が凝りますね。柔軟運動ぐらいしておきましょうか。

「すまない、ヘブイにはかり運転させてしまい」

「構いませんよ。会長の手は運転に向いていませんので」

清流の会長が申し訳なさそうに頭を掻いているが、あの体ではそもそも操作席に入りませんからね。

カリオスさんとゴルスさんも交互に隣の席に座って操作方法を学んではいますが、練習してもらおう時間も惜しいので、ここは私が無理をしても運転すべきです。

「この調子なら夕方までには着きそうだな、ゴルス」

「ああ、可能だろう」

二人は以前、防衛都市にいたことがあるそうなので、ここら辺の地理にも詳しいそうです。

「十数年ぶりにここを通ったが、こんなにも農業が盛んな町じゃなかったよな」

「これほどまでに豊かな農園が広がっているとは」

感嘆の声を漏らす二人と同様に、私も目の前に広がる色彩豊かな農園に目を奪われていました。

青々と茂る野菜。天高く葉を伸ばしているのは穀類でしょうか。赤が点在している一帯はタミタでも育てているのでしょうか。

「皆が知らぬのも無理もない。資料のみでだが目を通したことがある。最近の防衛都市は農業都市としても名が通っておってな、ここで採れる野菜は高品質で帝国でも噂になっているらしい」

会長の説明を聞き、思わず頷いてしまう。

眼下に広がる畑はそれだけで全てを納得させる存在感があります。

「少し仮眠をしてから向かうとしよう。ここで何かあっては全てが無駄になってしまうからな」

会長は私の身を案じてくれているのでしょうか。ここは大人しく従って、少し眠らせてもらおうとしますか。

私は操作席を後ろに倒し、ベッドのようにして眠りに落ちた。

目が覚めると、頭上にあつた太陽がかなり傾いている。眠り過ぎたようだ。

「すみません」

「起きたか。構わぬ、このクリユマなら暗くなるまでには着くだろう」

「そうだけ、あんま無理すんなよ」

「ああ」

誰も私を咎めることなく、むしろ心配されてしまいました。

ハツコンさんも含めてですが、ダンジョンでは出会いに恵まれました、心からそう思います。

再びクリユマを操作して進んで行くのですが、ここから道が驚くほど整備されていて振動を殆ど感じません。

農園を貫くように大きな道があるのですが幅も統一されていて、大きな石が落ちていることも一切ない見事に整地された道です。この領主はかなりのやり手なのでしょうか。

「会長、防衛都市の領主様をご存知でしょうか」

「有名人だからな、むしろ知っている。数年前に若くして父の後を継いだ……美しい方らしい。そうであった、皆に伝えていなかったな。領主と目を合わせない方がいい、人間の男は特に危険だと聞いている」

妙なことを仰いますね。目を合わせない方がいいとは、まるで絶世の美女で一目見たら惚れるかのような言い回しですが。

「会長それは大袈裟じゃねえか。まるで目を合わせたら恋に落ちる

みたいな物言いだぜ」

「そう言っておるのだ。目を合わせたら、意思の弱い人間の男性は即座に惚れると報告を受けておる。お主たちなら精神力も高いので大丈夫だとは思っておるが」

会長がそういった冗談を言わないのは重々承知しているので、誇張でもなく真実なのでしょう。

となると、本当に絶世の美女なのか『加護』の力なのかもしれませんね。

「さて、門が近くに見えてきたようだ。門番が慌てて駆け寄ってきておるな」

「そりやそうだぜ。門番だったら、こんな鉄の塊が走って来たら警戒するに決まっている」

「ああ、警鐘を鳴らしても良いぐらいだ」

本物の門番の意見は参考になりますね。

私は扉の窓を下げ速度を落としながら、走り寄る門番を見つめていると気が付いたことがあります。若干、焦りの色が見えるのですが予想よりは落ち着いているような。

警戒はしているのですが、なんと言いますか……肝っ玉が据わっているような印象を受けます。

「すまない、止まってもらえるか」

「はい、わかりました」

「珍妙な乗り物のようだが魔道具の一種なのだろうか」

三人の門番が警戒しながらも物珍しそうにクリユマを観察している。

「うむ、これはクリユマと呼ばれる魔道具だ。私はここより南にある聖樹のダンジョンよりやってきたハンター協会の者だ。取り急ぎ、領主様に伝えたいことがある」

会長が荷台から降り、身分証らしきものを取り出し手紙と一緒に渡していますね。

一通り目を通した門番は顔色を変え、仲間と相談をしている。

「事情は分かりました。取りあえず、門の脇にある詰所の中でお待ちいただいでよろしいでしょうか。直ぐに使いを出しますので」

「充分だ、感謝する。このような魔道具を見ても冷静で的確な対応、防衛都市の兵は鍛えられているというのは本当のようだ」

的確な指示を出している隊長らしき人物に、会長は称賛の言葉を贈っています。

私も同じことを思いましたよ。驚きながらも取り乱すことなく礼節を守っているところも素晴らしいです。

「お褒めいただき光栄なのですが、一度、腰を抜かす寸前の驚愕を経験しましたので、それ以降度胸がついたようです」

苦笑いを浮かべて謙遜する門番は嘘を言っている様には見えません。どんな経験をされたのか非常に気になります。

待っている間にと、もてなしをされたのですが、目の前には野菜

をふんだんに使った料理が並べられ、見るだけで何故か涎が零れそうになります。

ただ野菜を切って盛っただけのサラダや、簡単な野菜の煮物だというのに信じられないぐらいの香しさ、噂には聞いていましたが本当に美味しそうですね。

これは気合を入れて口にしなければ、意識をもっていられる恐れがありそうです。では、実食！

こ、これはっ、適度な噛みごたえが心地よく、溢れ出す野菜の汁が口内を幸せの草原へと誘うっ！

はっ、あ、危ない事前に気を張っていたから助かりました。皆さんはどうなっているのでしょうか。

「あー、懐かしの我が故郷。皆、元気で……」

「うごあああ、ひううう、何かが溢れだすううう」

「いかん、いかん、これは、いかん」

男三人が見事なまでに悶えていますね。見るに堪えない光景です。私も油断していたら、あぁなっていたのでしょうか。しかし、本当に恐ろしいぐらいに美味しい野菜ですね。いや、美味しいで片付けられるようなものではありませんよ、これ。

「お、耐えましたか。守護者様が丹精込めてお作りになられた野菜は強烈な味わいですから。正気を保つのに一苦労なのですよ」

笑顔で何を言っているのでしょうか、この人は。

話を聞いた限りですが、この町を訪れる人の通過儀礼らしいです。ここの野菜を食べて一度正気を失いかけるのが……ダンジョンの外

の世界は斬新ですね。

この野菜、一体どのようにして育てられているのでしょうか。神々が授けた神秘の宝と言われても信じてしまいそうですよ。生産者に一度お会いしてお話を伺いたいものです。

「はっ、今、何をしていたのだ……」

「お、おう、あまりの快感にヤバかったぜ……」

「シャーリイさんに囲まれる夢を……」

どうやら御三方は夢の世界から戻られたようです。

しかし、この野菜は兵器としても使える気がしますよ。尋問の道具としても有効でしょう。いやいや、野菜をそんな風に使うなんてありえませんか。

「丁度、良い時に戻ってこられました。領主様がいらっしやいましたよ」

門番の言葉を聞き、我々が詰所から出ると一人の美しい女性が、男女の従者を連れて歩み寄ってきたではありませんか。

従者の女性はメイド服を着て感情と気配を見事なまでに消していますね。ただ歩いているだけでも、あの無駄のない足運びから腕利きであることが伝わってきます。

もう一人の執事らしき服装の初老の男性は優し気な笑みを浮かべていますが、更に上の実力者の様です。

領主がたつた二人の護衛しか引き連れていない理由が一瞬にして理解できました。

そんな尋常ではない力を秘めていそうな二人に負けず劣らず……

いえ、更にも上の衝撃を与えたのが領主です。

何処か儂げな印象を与えつつ、凜とした美しさを放っています。金色の腰まで伸びた髪は艶やかで真っ直ぐに伸び、風に揺れる度に甘い香りが漂い腰砕けになりそうです。これはいけませんね。

薄いピンクのドレスも意匠がこらしてあって、かなり高価な品であることがわかるのですが、彼女であれば粗末なぼろ布であっても、その魅力が失われることはないでしょう。

お世辞抜きに絶世の美女という言葉はこの方の為にある言葉と断言できます。

「お待ちせして、申し訳ありません。この町の領主をやらせていただいています、ジェシカと申します」

声まで完璧なのです。澄んだ聞き心地の良い声を聞いて、鼓膜が喜び震えているような錯覚すら感じます。

「お、俺には彼女がつ、くつ、駄目だつ、耐えろつ俺！」

「シャーリイさん、シャーリイさん……」

門番のお二人もジェシカ様の魅力に抗っているようです。私も負けていられません。

会長は種族が違うので問題ないようですね、助かりました。交渉は全てお任せします。

魔性の魅力

ジェシカ様の美しさに目が離せない自分に内心驚いています。

あれから、私はずっと女性に惚れることはありませんでした。だが、目の前の……いや、私の想いはそんな軟なものではなかった筈。目を逸らすのです。このまま、ジェシカ様の顔を見続けていたら魅了されて、まともな思考力も奪われてしまいます。

目線をもっと下に、下に、下げなければ！

強い意志で視線を強引に下げると、裾の広がったスカートを抜け、美しく白い肌が眩しい足を滑り、目的の場所へとたどり着く。

そこにはドレスと同じく薄いピンクのヒールの高い靴があった。飾り気は少ないのですがあの素材は竜系の革を使用していますね。中には弾力性のある底敷をしているようで長時間の歩行にも優れています。

確か、オシヤレと機能性を追求した靴の匠ケテミヌイの作だったと思われます。

いやー、眼福です。表面も磨き上げられているところから、大事に履かれていることが伝わってきますよ。

ふうう、これで私はもう靴の魔力に目を奪われてしまっているの
で、ジェシカ様への想いは霧散しました。

「ジェシカ坊……お嬢様。むやみやたらと魅了を振りまくのはおやめください。お困りになられていますよ」

執事服を着た男性がジェシカ様の隣に並ぶと、囁く振りをしながら結構大きな声で忠告しています。

今、呼び方が少しおかしかった気がしますが、気のせいでしょう

か。

「ステック様の言う通りです。男をエロ紳士にしてしまつその目、閉じておいた方が良くはないでしょうか。皆様にご迷惑ですよ」

丁寧な口調に聞こえるが、メイドの身でありながら主に注意を促すことを口にして大丈夫なのでしょう。

「ステック、モウダー控えなさい。従者の身でありながら、主に意見を口にするとはい」

やはり、叱られましたか。領主でもある主に対して従者が口にしている言葉ではありませんでしたからね。

従者のお二人も反省して頭を下げています。

「これは差し出がましいことを。イケメン老執事と名高い私としたことが失言を。領主様にこのままでは喰われることになる方々を、見過ごせなかつたものでして」

……ん？ 喰われる？

「男も女も食べまくる雑食なのは少し控えた方がよろしいかと」

……ん？ 男も女も食べまくる？

えっ？ 私の耳がおかしくなつてしまったのでしょうか、とんでもない発言が聞こえた気が……人に見えますが、人食いの種族なのでしょう。ならば魔性の美しさも納得できますが。

「失礼なことを言わないで。私の想いはあの方にだけ注がれているのです。あと、給料半年減額です」

「ジェシカお嬢様は本日も美しく、太陽さえもその輝きの前では萎縮してしまい、空に雲がかかっております」

「あの方は優しく寛大なジェシカ様が素敵だと仰っていました。給料は満額でお願いします」

主の機嫌を損ねた二人がすぐさまお世辞と言い訳を口にしていきますね。

しかし、敬っているように見えて砕けた内容、主と従者の関係が非常に良好なようですね。普通なら、主に対してあのような口の利き方をすれば、その場で処刑されても文句は言えません。

だというのに、まるで家族でじゃれ合いながら会話しているように私の目には映っています。

「あー、すまぬが、こちらの要件を伝えても構わないでしょうか」

「これは失礼しました。聖樹のダンジョンのハンター協会の会長様とお伺いしていますが」

「はい、そうです。あちらでは清流の会長と呼ばれていました。急ぎお伝えしたいことがあります、この魔道具、クリユマを使い移動してきました」

清流の会長が指差す方向には荷台がセットされたクリユマが置いてあり、周囲には人だかりができています。

「あの珍しい魔道具ですね。そんな貴重な物を用いてまで、伝えたいことはどのような？」

「ダンジョンが魔王軍の左腕將軍に奪われ崩壊。ダンジョン内の魔物の大群がここへ押し寄せてきます」

熊会長がそう口にする、頬笑みを浮かべていたジェシカ様の表情から笑みが消えました。

隣に並ぶ従者は表情こそ変えませんでした、纏う気が一変しましたよ。

「中で詳しく聞かせていただけますか」

このまま屋外で話す内容ではないと判断したようで、全員が詰所の中へと入り、会長が詳しい説明をしています。

全て話し終えると、ジェシカ様が大きく一度息を吐きました。

「そうですね、そんなことが。そのような軍勢が押し寄せることになれば、少し前までなら魔王軍との挟み撃ちになり絶望しか待っていないかったのですが……」

「今は違いますからな。しかし、魔王軍との交渉の最中に動くとは独断なのでしょうか？」

「情報が左腕將軍まで届いていないのかもしれないかもしれませんが、ジェシカ様」

「申し訳ないが、魔王軍との交渉とは何なのだろうか」

会長その質問はともありがたいです。私も気になっていましたので。

「正式な停戦の交渉中として。既に話はまとまりかけています。最

後の詰め作業でして、数日中に代表者が帰ってきますので、その進軍も心配いららないと思われますよ」

我々の知らぬ間に停戦の条約が結ばれていたのですか。となると、左腕將軍である冥府の王は命令違反ということになります。

話が伝わってないだけなら、あの進軍は止まるのですが……。

「ジェシカ様。左腕將軍といえば謀略家ともつばらの評判です。情報収集に長けた者が停戦交渉中だということを知っていないとは思えないのですが」

「ステックはわかったうえで、左腕將軍が動いていると考えているのですね」

「はい。噂によりますと自尊心が高く、魔王に対しての忠誠心が他の將軍と比べて低いとの情報も」

「つまり、下剋上ですか。部下の忠誠心が低いと上の人間は苦勞致しますね、ジェシカ様」

「本当に……ね」

ジェシカ様が従者の二人を見つめ大きく何度も頷いています。二人は知らぬふりをしていますが。

「ステック、敵の軍勢がこちらに到達する前に戻ってきていただけよう、魔王領へ使いの者を」

「はっ、承りました」

「モウダーは兵と町の人々に状況の説明を」

「お任せください」

二人の従者が踵を返し、詰所を出ていきました。

「皆様、長旅でお疲れでしょう。宿を用意させますので、ごゆるりとおくつろぎください」

この状況下でも笑みを浮かべ、焦りなど微塵も感じられない余裕のある対応を見せるジェシカ様は、相当に肝っ玉が大きいのか、それとも自信があるのか、どちらなのでしょう。

「領主様、余裕があるようにお見受けしますが」

「ジェシカで結構ですよ。それに、私の方が年下ですので、もっと自然体でお話してください。堅苦しいのは苦手です。あっ、うちの従者たちは問題外ですが」

最後の言葉を口にした時に笑顔に凄味が加わりました。日頃の言動に対して色々と思うところがあるようですね。

「では、ジェシカ様。何か策でも？」

「策と呼べるようなものではないのですが、あの御方がお戻りになられたらどうにかなるのではないかと考えています。それに左足將軍とは懇意にさせてもらっていますので、左腕將軍の説得にもご助力願えるかと」

「四肢將軍の一人である左足將軍とですか」

「はい。以前は敵対していたのですが、今はとても仲良くしていた
だいていますよ」

魔王軍の將軍と……冥府の王を知っているとわかには信じがた
いですが、ジェシカ様が嘘を吐く必要はありませんからね、真実な
のでしょうか。

しかし、あのお方と呼ばれる人の信頼度が尋常ではありません。
一体どのような方なのかとても気になります。

優秀で頼りになる妙齢の男性なのでしょうか。私がそれを領主様
に問うのも失礼な話ですから、いつか会えるその日を楽しみにさせ
ていただくとしましょう。

自ら我々を宿まで案内してくださるそうで、町の中を優雅に歩く
ジェシカ様の後姿を眺めていると、微かに声が聞こえた気がしまし
たので聴覚の感度を上げてみました。

「お帰りが楽しみです……問題は最大の敵も帰還されることでは
よね……今はあちらが一步有利ですが、いつまでもこの状況に甘ん
じる私ではありません……相手を籠絡する手段は既に幾つも……」

何か不穏なことを呟いていらつしやいますね、ジェシカ様。

話の内容から察するに、あの御方と呼ばれている人物に好意を抱
いていて、その恋敵も戻ってくるということでしょうか。

他人の色恋沙汰は関わらないに越したことがないので、色恋
沙汰といえばハッコンさんは今後どうなされるのでしょうか。

当人は気づいていないのか、気づいていない鈍感な振りをしてい
るのかは判断が難しいですが、早めに手を打っておいた方がいいと
老婆心ながら心配してしまいます。

人は見た目じゃない、を体現していますからね、ハッコンさんは
今頃、発掘されているでしょうか。私もそうですが、皆さん無事

できると信じています。早く合流する日が楽しみですよ。

一家団欒

「後続に追いつきそうですぜ」

風を切り突き進む荷猪車の御者席で、目を細めて前方を注視しているケリオイル団長　父さんが家族へ声を掛ける。

「あの合体した階層主が先頭に向かって助かりましたね、団長」

「そうだな、副団長。あれを相手にするのは無理がある。他の魔物たちなら俺たちで削ることが可能だ」

夫婦なのに人前では団長、副団長って呼び合っただね、父さんたちは。

「マジでやるぜ、赤」

「あたぼうよ、白」

弟たちは紅白の頭を掻き上げながら自信ありげにニヤリと笑っている。

暫く見ないうちに大きくなったな、二人とも。自分だけが小さいままだから、凄く違和感があるよ二人の姿には。

「僕も頑張るよ」

「灰は無理しなくていいのよ。私はその分、活躍するから安心してね」

そう言ってから抱きしめるのはスルリィムさんだ。今日も優しい笑みを浮かべて僕を甘やかしている。

初めは呪いを解除してもらおう為に媚びを売っていたのだが、今は。

「ありがとう、スルリィムお姉ちゃん。でも、無理はしないでね」

「うん、任せてちょうだい」

あの笑顔を見ていると僕まで幸せな気持ちになる。

僕や家族を助ける為に、冥府の王を裏切った彼女を疑う気持ちは消え失せ、今あるのは信頼と家族と同様かそれ以上の愛情。

スルリィムお姉ちゃんが望んでくれるなら、いつか一緒になりたいと本気で思っている。

「世の中間違っているよな。なんで兄貴の方がモテるんだよ……」

「だよな。あの身体じゃ満足させられねえのによお……」

バカな弟たちがこっちをチラチラ羨ましそうに見ながら何か口に出しているが、無視しておこう。

「貴方たちは、見た目だけにこだわり過ぎで中身を磨いていなかったからでしょ」

「でもよ、母さん。男も女もまずは外見で惚れるもんじゃね？」

「俺も赤と同じだぜ。どう考えても、外見重視だろ」

フィルミナ母さんがたしなめているが、弟たちは納得がいかないように反論している。

言いたいことはわかるのだが、人は外見が全てじゃないと思う。

「お前ら、何もわかつちやいなえな。男の魅力はここだ」

御者席の父さんにも話が聞こえていたのか。振り返り自分の胸を親指で差ししながら、口を挟んできた。

「でもよー、ミシユエルだってあの顔だから、あんだけモテるんだろ」

「そつだそつだ、所詮人は顔だぜ」

弟たちは一步も譲る気はないようだ。ミシユエルさんは確かに同性の目から見ても格好いいと思う。僻む気持ちもわかるけど。

「赤、白。見た目が重要なら、ハツコンさんはモテないってことになるよ?」

僕がそう言うと、途端に二人が黙り込んだ。

見た目で勝負するなら四角い鉄の箱であるハツコンさんは、どうなるのかという話だ。仲間内で最もモテているのは、ハツコンさんで間違いない。

「そ、それを言われちゃ、ぐうの音も出ねえな」

「くつ、赤、俺たちの負けだっ」

人は内面が大事だという見本だからね、ハツコンさんは。

今考えても不思議な存在だよ。飲食料品だけじゃなく様々な珍しい品を出せる、人の魂が宿った魔道具。僕も助けてもらったし、家族も何度も救われているそうだ。

「ハツコン、そろそろ発掘されているといいんだが。あいつには借りが山ほどあるからな。無事で復帰してもらわねえと、困るぜ」

「そうですね、団長。子供たちと私たちの恩を返させていたただかないと」

母さんが父さんの隣に移動して腰を下ろしている。何だかんだ言っても、仲が良い両親だと思う。父さんが尻に敷かれることが多いけど

「ハツコンが合流したらモテ技を伝授してもらわねえとな」

「お、それは妙案だぜ」

そんなことを言っている間は、ハツコンさんのようにモテる日は来ないよ。

ただ、心意気や考え方を学ぶという発想は悪くないと思う。僕も色々と教えてもらいたいから。いつか、ハツコンさんのように優しく男気溢れる大人になりたい。

「この凍り付いた心を溶かすきっかけになってくれた、魔道具。もう一度、あの甘い飲み物も飲みたいし、協力は惜しまないわ」

スルリィムお姉ちゃんもハツコンさんを気に入っているらしい。本当に不思議な人？ だよ、ハツコンさんは。

「つと、無駄口はここまでにするぞ。魔物の最後尾に追いついたぜ」

前方数百メートル先に魔物の群れが見える。

群れの中でも足の遅い魔物が他から少し引き離されているようだ。操られている敵は命令を最優先するそうだから、今なら最後尾から削っていくことも可能だと思う。

「俺たちのやるべきことは、少しでも魔物を倒すこと。だが、命を捨てるなよ。愚者の奇行団の最優先事項は……命大事に、だ」

「おうさ、任してくれよ、オヤジ。悪即斬だぜ」

「今宵の我が魔槍は血を求めておるわ」

弟たちがクリュマで観た芝居に影響を受けている。ハツコンさんの世界の言葉がある程度は理解したヒュールミさんに、決め台詞を教えてもらってから気に入ってしまったようだ。

影響を受けやすい弟たちが少し心配になる。

「まずは魔法を放ちますね」

「私も手伝おう」

御者席で杖を掲げる母さんと、僕を背後から抱きかかえたまま片手を天に伸ばすスルリムお姉ちゃん。

杖の先端から大量の水が放たれ、激流に吞まれた魔物たちへ巨大な氷の礫が降り注ぐ。直撃した魔物は即死したようだが、幸運にも氷の礫を避けられた魔物たちも、濡れた身体が一気に凍りつく。

「嫁姑混合魔法か……えぐいな」

ぼそつと呟く父さんの声が聞こえた。

「団長何か仰りましたか？」

あーあ、母さんに睨まれて目を逸らしている。

「嫁だなんて……ぼつ」

スルリィムお姉ちゃんが僕に熱い視線を注いでいるけど、こういう時は深く踏み込まないで流した方がいいって、父さんたちが言っていたから触れないでおこう。

「んじゃ、俺たちもやりますか」

荷猪車が停止して、父さんと弟たちが下車した。

僕も手伝いたいけど、この体で近距離戦は避けた方がいい。シュイさんから譲り受けた予備の弓を取り出し、矢をつがえる。

昔から弓は得意だったので、魔物に当てるぐらいなら問題ない。ただ、非力な子供の身体なので、威力はお察しだけ。

魔法の範囲外にいた魔物が十数体、凍り付いた仲間を容赦なく碎きながら進んでくる。

他の魔物たちもこの騒ぎに気づきそうなもののだが、他の魔物は黙々と進軍を続けて、こちらに目をやることもない。

やはり、ヒュールミさんの言っていた通りだ。攻撃されたと判断した魔物は襲い掛かってくるけど、それ以外は命令を順守するので無視して進んでいる。

これなら各個撃破も可能だから、ボクたちだけでも充分敵を削ることができる、頑張ろう。

父さんたちの動きは手慣れたもので、全く危なげなく敵を葬っていく。みんな強くなっている……それだけに、この無力な体が恨めしい。でも、今の自分にできることが限られているのなら、やれることをやるだけだ。

近くまで寄ってきていた蛙人魔の脳天に矢を放つ。浅く突き刺さっただけだが、相手が怯んだ隙に弟が槍を突き刺してくれた。こうやって、少しでも貢献するしかない。

向かってきた敵を全て倒すと、再び荷猪車に飛び乗り後を追う。そして、魔法で攻撃を加え、向かってくる敵の排除。これの繰り返しをしている。

何万もの大群に見える魔物からしてみれば、この程度の敵を倒したところで痛くも痒くもないのかもしれないが、今は少しでも戦力を削るしかない。

敵を減らすことで、後の総力戦で一人でも誰かを助けられるなら無意味じゃない。

家族のみんなも同じことを考えているのだろう、誰一人、不平不満を口にしないで戦っている。そんな家族を誇りに思いながら、五度目の攻撃を加えようと敵の背後に近づいたその時、僕たちと魔物との間に半透明の人影が突如、姿を見せた。

それは妙な格好をした人だった。肩が剥き出しの黒革のワンピースはまだいいのだけど、体中に銀色の鎖が巻き付いている。正直、動き辛いと思う。

顔は目元と唇を黒く塗っていて、黒髪が腰下まで伸びている。

この半透明の人は見たことがない。父さんたちも初見のようではかめ面をしている。一応警戒して荷猪車を止めて、馬車から飛び降りた。

「何者だ、あんた」

「はっ、冥府の王を裏切ったためえらに名乗る名はねえと言いたいが、一応名乗ってやるぜえええっ！俺様はカヨーリングス！絶叫の歌姫と名高い、あのカヨーリングス様だぜえええっ！」

絶叫を上げて名乗る女性を、僕も含めて訝し気に眺めている。

言動には目を瞑るとして、半透明ということは死霊の類いなのだろうか。死霊で知能がある個体は強力な魔物だと聞いたことがあるので、見た目に反して実はかなり厄介な魔物なのかもしれない。

「久しぶりだなあ、薬將軍スルリムよお」

お姉ちゃんの知り合いなのか。思わず見上げると、感情の消えた表情で相手を見据えていた。

「ええ、捕まっていたらしいけど逃げ出せたのね、小將軍」

今、お姉ちゃんは確かに、小將軍と口にした。相手は五指將軍の一人なのか。

僕は気を引き締めると、お姉ちゃんのぬくもりを背中に感じながら弓を構えた。

一家奮闘

「一番忠実だと思っていたお前が裏切るなんてよおおおお、驚きだぜえええっ！」

この人は叫びながらじゃないと話せないのかな。頭を激しく振りつつ、舌を出しながら話すなんて器用だ。あと、半透明なのに鎖がジャラジャラうるさい。

「本当に大切なものを見つけたのよ」

「はっ、冷血女がよく言うぜ。でもよおおお、実は嬉しいんだぜえええっ？ 前々からためえは気に喰わなかった。この手で殺せるなんて最高じゃねえかよおおっ！」

同じ將軍だったのにスルリムお姉ちゃんと仲が悪かったのか。お姉ちゃんも半眼で睨んでいるし。

「ふっ、カヨーリングス、貴女は小將軍。私は薬將軍。格が違うのよ、勝てると思っっているの？」

確か、五指將軍つて下から、小、薬、中、人差、親と將軍の中でも順位が決まっているのだった。小將軍つてことは將軍の中で最弱なのか。

「てめえは、いつもそうだよなあああっ！ いつも俺様を見下しやがって！ 確かに単体の戦闘力ではてめえの方が上かもしんねえがよおおおっ、だがな、ここじゃ負けねえぜえええっ！ 俺様の能

力離れた訳じゃねえだろおつ？」

相当自信があるのか、自慢げに胸を反らして鎖を振り回している。

「死霊使い……まさか、この場所」

「そうさ、ここはなあ、半年ほど前に大発生した魔物と人間たちが小競り合いをしている最中に、その崖が崩れて生き埋めになったんだぜえええ」

鎖の先端が指す方向に目を向けると、確かに崖崩れが発生した跡がある山の斜面があった。

ここは左側に山の斜面があつて後は遮蔽物がない平野だけど、言われてみると他と比べて地面が盛り上がっている。雑草もここの帯だけ生えてないからおかしいなと思っていたけど、そういう理由だったのか。

「目障りなてめえを殺して、更に地位を上げ、鬱陶しい奴らを好き放題に殺しまくってやるぜえええっ！」

絶叫と共に鎖を地面に突き刺すと、地面の至る所から腐りかけの死体が土を押しわけ湧き出てくる。その数は軽く見積もっても百は軽く超えていないか。

「ふっ、この程度の腐った死体なんて、物の数じゃないわよ」

そう言つて魔物に向けて手を差し向けたスルリムお姉ちゃんだったが、その手がカヨーリングスに向けられる。

あっ、目の前に銀色の光が迫っている！

それがぶつかる直前に氷の壁が目の前に発生すると、半透明の鎖

が弾かれた。

「てめえの相手は俺様だぜええっ！ その足手まといと一緒に碌に戦えねえだろうがよおおおおっ！」

敵は僕と一緒に居るスルリムお姉ちゃんを狙ってきたのか。

僕がいると確かに邪魔になってしまふ。後方に下がっていた方がいいのか……でも、魔物たちが取り囲んでいる状況だと、単独行動は命取りになりかねない。

父さんたちは既に動く死体との戦闘に入っているし、どうしたらいいんだろう。

「足手まとい……ですって？ ふふふふつ、死にたいようねっ！」

今まで聞いたことがない低い声に振り返ると、見ているだけで全身が凍りつきそうになるくらい冷たい目をしたお姉ちゃんがいた。

僕たちの周囲には吹雪が舞い、周囲の地面が一気に凍り付いている。

遠くで戦闘をしているお父さんたちも寒いみたいで更に距離を取っているのに、僕はちっとも寒くない。ちゃんところちを避けて吹雪を出しているなんて凄いな。

『兄貴、一生尻に敷かれるぜ』

『正直、美人を捕まえて羨ましくて悶死しそうだったけど、今はあんま羨ましくねえや』

赤と白の声が脳内に直接届く。三つ子である僕たちはお互いに声を届ける加護を所有している。それを使って声を送ってきたのか。

『お姉ちゃんにあつち側冷やしてもらつように頼もうかなあ』

『兄貴めつちや羨ましいぜ！ 美人の嫁さん候補なんて最高だよなつ！』

『かああつ、流石俺たちの兄貴！ 俺たちにできないモテっぷり！』

「冗談でからかうと媚びてきた。そういう、弟たちの変わり身の早さは嫌いじゃない。

こんな体の小さい僕をちゃんと兄扱いしてくれることが、何よりも嬉しかったりするのだが、それを口にするのではない。だって、調子乗りそうだから。

敵の数は多いけど体が腐っているから敵の動きが鈍くて、みんなの敵じゃないようだ。着実に敵を倒している。任せても大丈夫そうだね。

「はっ、色ボケに負ける俺様じゃねえよっ！」

銀の鎖が正面から二本伸びてくるが、お姉ちゃんの生み出した氷の壁にあつさり弾かれている。

鎖の蛇のようにうねり、何度も四方八方から襲い掛かってくるけど、全てボクたちに届くことなく氷の壁に阻まれた。

「小蠅が飛んでいるようだけど、攻撃はしないのかしら？」

頬に指を当てて小首を傾げているスルリムお姉ちゃん。可愛らしく見えるけど、目が笑ってない……。

対するカヨーリングスは目尻を吊り上げ顔に血管が浮き出ている。激怒しているみたいだ。

「てめえのそういうところが、前からムカついていたんだよおおおっ！ なめんじゃねえぞ、この俺様をっ！」

合計十以上の鎖があらゆる方向から飛びかかってくるが、氷の球体に包まれた僕たちに、その攻撃が届くことはない。
本当にスルリムお姉ちゃんの方が格上みたいだ。

「やれやれ、攻撃してこないのならこっちからいくわね……あっさり逝かないでね」

一つが大人の身長以上はある氷の槍が眼前を埋め尽くす。数える気すら起こらない程のとんでもない数。

それがお姉ちゃんの軽く腕を振る動作に連動して、全て発射された。

「ちよっ、待てええええっ！」

氷の槍に視線を遮られて相手の姿は見えないけど、断末魔の叫びだけは聞こえた。

あれが直撃して無事である訳がない、圧倒的な戦力差で蹂躪されてしまった相手が哀れに思えて、思わず手を合わせている自分がいる。

「まあ、ざっとこんなものよ。もう大丈夫よ、灰……えっ？」

優しく微笑みかけていたスルリムお姉ちゃん表情が豹変した。
正面を見据えているけど、そこつて槍が突き刺さった あっ、何あれ……。

さっきまで半透明のカヨーリングスがいた場所に、巨大な肉の塊がある。

それはパンパンに張り詰めた筋肉で、人の形をしているが全長五メートルを軽く超える人間は存在しない。

皮膚は土色で所々が抉れ、骨や肉が剥き出しになっているが色がくすんでいて、肉に関しては傷口から血ではなく、妙な汁のようなものが流れ落ちていた。

そして、体中に銀の鎖が巻き付いているけど、巨体過ぎて糸で縫い合わせたように見えてしまう。

本来なら頭のある部分にカヨーリングスの上半身が見える。あの肉の塊に埋まっているのか。

「どうだっ！ 死体を繋ぎ合わせて肉の鎧と化す、この腐防鎧はっ！ 体中に張り巡らせた鎖に魔力をたっぷり注入して、てめえの魔法に対する抵抗力を上げている！ 更に表面部分には魔法抵抗力がある元人間たちを利用することで、てめえの魔法は通用しねえ！ 加えて、これは痛みを感じるのがねえ！ どれだけ撃ち込まれても何の影響も受けねえぜっ！」

懇切丁寧に説明してくれている。今までの鬱憤が溜まっていたのだろうか、自分が圧倒的に有利なことを教えて悔しがらせたいのかもしれない。

そんな相手に対するスルリィムお姉ちゃんは 唇が笑みの形になり、すっと目が細くなる。

「口だけじゃないのね、安心したわ。じゃあ、本気で凍てつかせてあげる」

スルリィムお姉ちゃんが両腕を天に向けて伸ばすと、周囲を吹き荒れていた雪が全て頭上へと集まり、腐防鎧と呼んでいた肉の塊に匹敵する大きさの氷の槍を形成する。

「は、はっ、でかけりやいってもんじゃねえんだぜっ！」

そんな巨体に埋まった状態で言われても説得力がないかな。強気な口調だけど表情に焦りの色が見える。これで倒せるかもしれないけど……正直、僕には判断ができないでいる。

相手は宙に浮かんだ状態で停滞している氷の槍を凝視したまま動かない。あれがかなり危険なものだという認識はあるみたいだ。

「これで、二度とその耳障りな声と気色の悪い顔を見ないで済むのね……貫いて」

両腕をゆっくり振り下ろすと、氷の槍は一度天高く昇っていく。そして、その姿が点になるまで高度を上げてから急降下してきた。

あれは避けなければ危険だと誰の目にも明らかなのだけど、あの腐った体の寄せ集めは動きが鈍いらしく、後退っているのだけど僕が歩く速度より遅い。

「く、くそがああつ！ 骨壁！」

腐防鎧に巻き付いていた鎖が地面に突き刺さると、地面から白い壁が飛び出してきた。それは人や動物や魔物の骨を寄せ集めた作り上げた壁だった。

だけど、その壁は正面に立っているだけなので上からの攻撃を防ぎようがない。

と思っていたら、あの巨体が壁の両端を掴んで引っこ抜くと頭の上に持ち上げたのだ。

天から降ってきた氷の槍が骨の壁に激突すると、爆風吹き荒れ砕け散った氷と骨が周囲に飛散する。

その余波に体が持つて行かれそうになったが、何とか耐えきる。下から腐防鎧を見上げると、骨の壁が完全に破壊されて相手の右

上半身が凍りついているが、頭の部分に埋まっているカヨールリングスは無傷に見えた。

「ひゃーっはーっ！ どうだ、てめえの一撃耐えきってやったぜ！ 涼しい顔してやがるが、今の一撃に大量の魔力を注ぎこんだのはわかってんだぜえっ！」

離れた場所にいるスルリムお姉ちゃんの表情は確かに冴えない。笑顔なのだが、いつもと違って余裕が感じられなかった。

相手の言っていることは間違いないのかもしれない。
凍り付いた右上半身を左腕で自ら破壊すると、そのままスルリムお姉ちゃんへ歩み寄っていく。魔力を大量に消費したお姉ちゃんを一気に葬り去るつもりなのか。

「その、すまし顔を踏み潰せるかと思うと、たまんねえなあああっ！」

抑え切れない歓喜に身を震わせ奇声を上げているが良く聞こえる。
あの巨体の一步は歩幅が尋常じゃない、あと二歩も進めばお姉ちゃんを踏み潰せるだろう。

更に一步前に踏み出し、最後の一步を踏み出そうとした、瞬間、あの巨体が膝を突いた。

「なっ、なんでこけやがった！ 動けっ、何をやってやがる！」

怒鳴り散らしているカヨールリングスは何が起こっているのか理解していないようだ。動かない脚にしびれを切らして、左腕を右脚に叩きつけた。

すると、叩かれた右脚の膝が砕け千切れ、殴った左腕もぶちゆりと不快な音を立てて折れ曲がる。

「はあああつ!? ど、どうなってやがる……あああんつ、なんで手足の腐敗が進んでんだよっ!」

ようやく異変に気づいたようだ。歩けないのも殴った腕が折れ曲がったのも、身体の腐敗が進み強度が落ちたからだ。そして、現在もその腐敗は急速に進み肉の殆どが腐り果て、地面に垂れ落ちていた。

これはもう腐防鎧ではなくただの骨の寄せ集めだ。その骨も人型を保てなくなり、崩れると骨の山と化する。

「ごめんね、僕が腐らせちゃった」

落ち込んでいる相手に僕がそう語り掛けると、こっちを見て大口を開けている。

「てめえ、逃げたんじゃねえのか! なんだ、その翼は! それに腐らせるって何をいってやがるうつつうつつ!」

髪の毛を掻きむしっているカヨーリングスを見下ろしながら、ニコリと笑いかけた。

背中の翼は母の血を濃く引いた影響で蝙蝠の羽が出せるだけ。敵を腐らせたのは僕をずっと苦しめてきた加護 腐敗 の力。

ダンジョンマスターさんに 腐敗 を解除してもらう際に、僕は心で語り掛けた。

か(この加護を消すんじゃないかって、自在に操れるようにはできませんか)

と。それを快く受け入れてダンジョンマスターは消し去るのでは

なく、制御できるように変更してくれた。長年に渡って僕の体をずっと蝕んでいたということは、常に発動し続けていたということになる。

その結果、腐敗は磨き上げられここまでの威力を得た。

氷の槍に意識を取られている隙に低空飛行で近寄って、腐らせたのだけど上手くいってよかった！。

「よくわかんねえが、てめえがやったんだなっ！ 死にやが」

彼女はそれ以上の言葉を口にすることはできなかった。

目を赤く輝かせた父さんが短剣を首筋に突き刺し、身体には小剣と槍が突き刺さっていたからだ。

「息子を、やらせるわけがねえだろうが」

「ちっとは、いいとこ見せないとな」

「美味しいところだけいただきだぜ」

こうして、とどめは父さんと弟たちが刺すことで、この戦いに終止符が打たれた。

これで一件落着けど、頬を膨らませてこっちに走り寄ってきているスルリムお姉ちゃんにどう言い訳しようか。それが一番の問題だったりする。

たくましい人々

「足りなかったら、幾らでも木を切ってくるぞ！」

「力が有り余っている奴は、こっち手伝ってくれ！」

「炊き出しできたよー、みんな並びな！」

廃墟と化した町に元気な声が響く。それは一人や二人ではなく、何十人ものが大声を張り上げ、忙しなく働いている。

魔物が溢れ町の大半が破壊されたというのに、一部の人々は落ち込む様子すら見せず、すぐさま復興作業を始めた。

元々町に住んでいた人は悲観にくれ、ただ茫然と立ち尽くしていただけだというのに、ダンジョンからやってきた人々は迷いも見せず、元気に働いている。

彼らは既に何度も逆境を乗り越え、復興作業に関してはお手の物。瓦礫撤去や壁や住宅の修復に関しては、ただの住民やハンターだというのに町の職人に匹敵する手際よさだ。

「ここは土魔法で補強してもらおうか」

「誰か釘貸してくれ。この程度なら、ちゃちゃっと修復するからよ」

二度壊滅しかけた清流の湖階層での経験が、ダンジョンの人々を職人レベルまで引き上げたようだ。

現に信じられない速度で町が復興している。

町が崩壊して二日目だというのに、元ダンジョンがあった窪みの周辺には瓦礫を用いて建てられた簡易の民家が並び、既に商売を始

めている人までいた。

「お代はツケで構わないから、食べていきな！ ムナミ、手がお留守だよ！」

「母さん、太っ腹！」

いち早く食堂を始めたのは、清流の湖に宿屋を構えていた母娘だった。

手持ちの食材と町の周辺でハンターたちが狩ってきた動物と魔物の肉を使い、町の住民が味わったことのない料理を振る舞う。ツケでいいこともあり、人々の列が途切れることがない。

「やっぱり、調味料だけは死ぬ気で運んで正解だったねえ」

「うん、母さん偉い！」

軽口を叩きながら料理を振る舞う母娘は、こんな状況だというのに笑顔で接客をしている。落ち込んでいた人々も、ここで食事をすると元氣とやる気が回復するようで、拳を握り締め復興作業に加わっていく。

町の門跡には黒服の男女が集まり、荷猪車に見るからに価値のありそうな装飾品や武具を詰め込んでいる。

「スオリ様、あと少しで準備が整います」

「荷物を運び終えたら、わらわは直ぐに出発します」

小さい身体で懸命に物を運ぶのを手伝っている、ツインテールの少女が黒服の男にそう伝えた。

それを聞いた周りの黒服たちは眉根を寄せる。

「スオリ様。ダンジョンから溢れ出た魔物がまだいる可能性もあります。それに、護衛のハンターを雇わないのは危険すぎませんか」

「復興作業に人手は幾らあっても足りません。わらわたちで何とかするしかないのです。それに、皆さんを私は信頼していますので」

そう言つて主に微笑まれては何も言い返せず、黒服たちは深々と頭を下げる。

以前は我儘が目立ち、年相応の幼さがあつたスオリだったが、ダンジョンでの出会いと経験は少女を大きく成長させた。

スオリは無事だった荷猪車をいち早く買い取り、何とか持ち出せた高価な品々を荷台へと載せて近くの町で売り捌くことを即座に決断をしたのだ。

その売り上げで大量の食料と復興に必要な必需品を買い取り、残りのお金は復興作業をする人々を雇い、支払う給金に充てるつもりにしている。

「もつとも、ハツコンさんが戻られたら、全てが徒労に終わりそうですね」

そう言いながらも、何処か嬉しそうに笑う主を黒服たちは眩しそうに見つめている。

今日この日、黒服たちはこの方の為に命を捧げようと誓いを立てるのだが、それを知らないスオリは共に汗水を流しながら、懸命に

働いていた。

瓦礫が散乱する町の片隅で、スタイルのいい女性が集まっている。服装はごく一般的な物なのだが、ちよつとした仕草が妙に色っぽく、通りかかった男性が思わず立ち止まり熱い視線を注いでいた。

「みんな、そつちの仕事は暫くお休みだから、儲けたい人は他の町に移った方がいいと思うわ」

清流の湖階層で夜の仕事を切り仕切っていたシャーリイが、従業員たちを集め今後の方針を話しているようだ。

商売時は露出度の高い派手な服装をしているシャーリイだが、ここでは地味な色合いで短パンと袖のないシャツを着て、胸を張り従業員に語り掛けていた。

「私からの推薦状があれば、帝都でも商売できるわ。だから、欲しい人は遠慮なく言つてちょうだい。昔馴染の店を紹介するから」

彼女がその言葉を口にしたにも関わらず、前に進み出て紹介状を欲しがろうとする人はいない。

全員が苦笑して肩を竦めただけだった。

「えつと、みんないいの？ ここにいても、復興のお手伝いするだけよ？」

いつもは凜とした立ち居振る舞いをするシャーリイだったが、小首を傾げる姿が可愛らしく従業員たちは和んでいる。

「ハンターを続けられなくなったところを、シャーリイさんに拾ってもらった身です。何処までもついていきますよ」

「うんうん、ちゃんと恩も返したいし、ここ以上の職場ってあり得ませんよ！」

全員が彼女の元を去る気がないらしく、ここに残ることを主張している。

シャーリイは一瞬、今にも泣きだしそうな顔になるが唇を噛みしめ、天を仰ぐ。

大きく息を吐いてから正面に顔を戻すと、そこには満面の笑みがあつた。

「まったく、おバカさんばかりね。わかったわ、ここが復興したら、また一緒に稼ぎましょう。それまでは、復興作業に協力するわよ…
…お給金もちよっとしか払えないけど」

「充分ですよ、一緒に働けるなら。ねえ、みんな！」

「うんっ！」「遠慮なしに使ってください！」「復興作業は慣れますから！」

こうしてこの日から、復興作業現場には麗しい女性陣の姿が頻繁に見られるようになり、作業に励んでいた男性陣のやる気が漲るところとなる。

「闇の会長、場所わかりそう?」

小生意気そうな少年が足下の影に視線を落とし、語り掛けている姿は傍から見たら、ちょっとおかしな子供に映るだろう。

足下の影が突然盛り上がると、それは大人の人間型となり目に眩しい金色のコートを体内から取り出した。

「犬岩山会長、そない簡単にわかったら、誰も苦労せえへんのやで」

「だってさあー、わいがぱーっと見つけたるわー、って威張ってたよね?」

「威張つとらんわっ! あんときはこないに難しいとは思わんかったんや」

闇の会長は影に同化して地中に潜り、扉のあった付近を探せば簡単に見つけられると予想していたのだが、未だに見つけられずにいる。

ダンジョンから地上へと続く階段の長さがハッキリしていないのと、崩壊した際に土砂に流された可能性があるので、正確な場所が判明していない。

風潰しに探すしかなく、闇の会長も殆ど眠らずに搜索を続けているのだが。

「まあ、しゃーないよね。ハツコンは頑丈だから、まだまだ大丈夫だよ。うん、うん」

軽い調子で口にするので、バカにしているようにも聞こえるのだが、当人は真剣に心配しているつもりである。

「ワイが先に見つきたいんやけど、このままやったら、先を越されそうやな」

闇の会長が顔を向けたのは地面に空いた穴だった。

その穴は元ダンジョンがあった場所なのだが、二日前までは穴とまでは呼べない窪み程度だったというのに今では底が辛うじて見える大穴と化している。

何故、そんなことになったのか。それは、今も土砂を巻き上げ、穴の中心を掘り進んでいる少女　ラツミスが犯人だった。

「ぬああああああっ！」

今日も土塗れになりながら、一心不乱に掘削している彼女は仲間から本気で心配されているが、その手を休めることはない。

手にした巨大なシャベルは幼馴染である魔道具技師のヒュールミが製作した品だが、酷使されて直ぐに破損してしまい、既に六本目だった。

巻き上げられた土砂は傍にいるピティーが巨大な袋に詰めて、穴の側面を登り外へと運び出す。それだけでは処理が追いつかないので、残りはシメライお爺さんが風を操り崩壊した町の外壁付近へ運ぶ。

「そろそろ、なんとかせんと、ラツミスの体がもたぬぞ。婆さんどうにかできんか」

「何度も説得しているのですが、頑としてやめようとせんのですよ。今も二人が説得にあたっておるんやけどねえ……」

老夫婦が肩を揃えて視線を向ける先には、ラツミスに近づいて行く二人の姿があった。

一人は白の頭巾を被り穏やかに微笑む園長先生。もう一人は自ら射止めてきた小動物の丸焼きを手にしているシュイ。

ちなみにシュイは魔物の軍勢を追う予定だったのだが、途中で食料が尽きかねないという判断により置いていかれてここにいる。

「ラツミスさん、休まれてはいかがですか。貴女が体を壊しては元も子もないですよ」

「そうっすよ、ハツコンが知ったらきつと怒るっすよ」

二人の言葉にシャベルを突き刺した状態で動きを止める。

首だけ二人の方へと向けたラツミスの瞼は赤く腫れあがり、その表情からは生気が感じられない。

「でも、ハツコンが、ハツコンが……」

彼女の取り柄の一つである元気が失われ、濁った瞳が虚空を見つめている。

ラツミスも無茶をしていることは重々自覚しているが、身体を動かさずにはいられず、自分の肉体の限界まで体を動かし、気を失う。それを繰り返していた。

「気持ちわかりますが、シュイも申しているようにハツコンさんはそんな無茶、望んでいませんよ」

「でも、でも、でもっ！」

髪を振り乱し、よろめきながらも抵抗しているラツミスに忍び寄る人影があった。

駄々っ子のように意見を受け入れようとしない彼女の背後に立つ

と、ピンと指を伸ばした右手を掲げ、勢いよく脳天へ振り下ろす。

「ハツコンを助け、あたっ！ な、何するの、ヒュールミ！」

振り下ろした体勢のヒュールミに掴みかかるラツミスは正面から見つめ、今度はその頬を両指で摘まみ横に引っ張る。

「いひゃい、いひゃい、ひゃひひひゅよ」

「ラツミス、昔つつつつから、人の話聞かないよな！ ここにいる奴らは全員、お前と同じようにハツコンを救いたいと考えている。それがわからない訳じゃないだろ」

「わかつているの、そんなん、わかつてる……でも、そやけど、うち、うちはっ！」

大粒の涙を零し、訴えるラツミスの頭を抱き寄せ、ヒュールミは優しく撫でる。

「ったくよ、ほんと変わんねえな、ラツミスは。でもよ、そんな無茶をなんとかする為に、オレと一緒に居るんだろ」

思いもしなかった言葉にラツミスが呆けた顔を上げると、ニヤリと自信気に笑うヒュールミがいた。ズボンのポケットに手を突っ込み、小さい卵型の魔道具取り出す。

「これは以前……あれだ、ちょっと作りかけた魔道具でな、本来は魂の声を聴く魔道具だったのだけどな……まあ、それはいいんだが。改良して魂の場所を探る魔道具に生まれ変わったってわけだ」

「え、ええと、つまり」

「これを使えばハツコンの魂を見つけることも 可能になる」

自信満々に言い切るヒュールミが魔道具を発動させると、溢れ出した光が地中へと突き刺さった。

ハッコン

……全身から火花が散り……亀裂の広がるボディが徐々に砕けていく。

……耐久力は一桁をきった……このままでは壊れるのを待つだけか。

体を魔物の群れが通り過ぎていき、視界に映るのは魔物の足の裏と魔物の弛んだ下半身しか見えない。

ああ……天井が全く見えない　　ということは、相手からも俺の姿が見えないってことだよな！

まず、怪しまれない程度に体を少しだけ修復する。そして、素早く商品をライターとコンドームに変更して取り出し口に落とす。

まずは体を懐かしの　ガス自動販売機　へ、フォルムチェンジをする。その時に、身体を修理しておくことを忘れない。

はい、完全復活。

ガスを開け放たれたコンドームに注ぎ膨らませると、今度はミニチュアの自動販売機になる。これは俺が知る限り最小の自動販売機だ。ちなみにこれはジオラマ模型で使われる物だが……ジオラマ模型に興味がある訳じゃない。

って、そんなのはどうでもいいことだった。　結果　を張ってコンドーム風船を外に出してから、　念動力　で操ったライターで炙る。

ガスに引火して小規模の爆発が起こり、爆風に煽られた俺は魔物たちの足元を転がっていく。これで俺が破壊されたように見えたらいいのだが。

体が小さすぎて気づかれることなく、魔物たちが何度も蹴りつけ

て面白いように転がっていく。

視界がコロコロ変わって酔いそうだな。自動販売機だから吐く機能がないので、ある意味安心だな。体の色も地面と同じ色に変更しておこう。

何度転がされたのか数えるのも面倒になってきたので、その身を任せていると魔物の群れから蹴り出された。

飛び出す直前、 結界 を消して、岩肌剥き出しの地面の欠片にしか見えない俺の体が地面を滑っていく。

視界が開けたので冥府の王へ視線を向けるが、あつ、四人がいな
い。

冥府の王が自分の両腕をじっと見つめているので、処分したという訳ではないようだ、ケリオイル団長の 破眼 とスルリムの 転移 を組み合わせ、自力で逃げてくれたと……そう信じる。

冥府の王は爆発した付近を見ているが、もしかして疑っているのか。我ながら見事な演出だと自画自賛したいぐらいなのだが、骸骨が視線を逸らさない。

あー、ドキドキする。疑い深い骸骨だ、そろそろ諦めてくれないだろうか。

今は地面と同化しているのでバレることはない、と思いたい。

魔物たちが階段を上りきり、この空間には俺と冥府の王だけとなる。スーッと地上に降りて来た冥府の王は地面に手を当てた。

骨の手から降れている地面に光が走り、妙な絵を描いていく。

光が幾何学模様と現地語に似た文字を組み合わせた図形を作り上げる。

あれって、転送陣に似ているが規模が違い過ぎるな、あんなにも巨大な魔法陣を一体に何に使うのか。

黙って事の成り行きを見守っていると転送陣の輝きが増すと同時に、魔法陣の中から徐々に姿を現す巨大な物体。

初めはごつごつとした巨大な岩だと思ったのだが、それは浮かび上がっていくうちに、階層主である犬岩山であることがすぐにわかった。

それだけでも度肝を抜かれたのだが、よく見ると脚が以前見た時とは違い、燃える骨、木製、爬虫類の脚に変わっている。

もしかして、各階層主を全て融合したのか。だとしたら、あの化け物の強さは桁外れだぞ。

あまりにも巨大過ぎて融合した犬岩山の頭が天井にぶつかり、天井が崩落していく。これはダンジョンが潰れるのも時間の問題か。

「ふははははは、いける、これならば殺れる！ あの小生意気な魔王を葬り、我が国を統べることが叶う！ ふはっ、ふははははははははは！」

誰もいないと冥府の王が思っただ声で叫んでいる。

この人、魔王の忠実な部下ではなく裏切るつもりなのか。

ダンジョンの魔力を吸収して、魔物の群れも従え、更にこの階層主の集合体加われば調子に乗ってしまうのもわかる気はする。

冥府の王が魔王軍を裏切るのであれば、こちらにとっては好都合だ。この情報を魔王軍にリークすれば、こっちが手を出さずに同士討ちをしてくれるかもしれない。

そんなことを考えていると辺りが急に暗くなり、衝撃が俺の体を縦に揺らす。

《77のダメージ。耐久力が77減りました》

天井の破片が命中したのか、辺りは真っ暗で完全に体を覆い隠している。

結果 を切っていたのでダメージが届いたが、ミニチュアの身体とはいえ頑丈と耐久力を上げていたおかげで、この程度で済んだ

ようだ。

もう、相手から見えないだろうから 結界 は発動しておこう。ダンジョン崩壊による揺れの中にひととき大きな振動が加わるようになった。どうやら、融合犬岩山が動き出したらしい。

この状況では俺にはどうしようもないので、後は土砂に埋まるのを待つだけ。ダンジョンの人々と町の人々が避難しているといいのだけど。

体が完全に埋まる前に元の自動販売機に戻り 結界 を維持したまま、辺りが静かになるまで大人しくすることにした。

埋もれてから体内時計で一時間が経過した。

地中だけあって物音一つしない静寂の世界。自分の体から漏れる明かりで周囲を照らしているのだが、全方位にあるのは土砂のみ。

今は 結界 の大きさは俺を中心として半径一メートルで抑えている。ランク3になってからは二メートルまで範囲を広げられるようになったが、ポイント節約の為に縮めておいた。

こりゃ、どうしようもないな。風船とダンボールのコラボによる移動手段は地中では使えないので、自力でここから脱出するのは不可能。

自動販売機にドリルが付く仕様が実際にあればよかったのだが、そんな物は聞いたことも見たこともない。

念の為に、機能の欄を調べたがドリルはなかった。残念。

どれぐらいで発掘してもらえるかはわからないが、早く動かないと魔物の群れが地上を荒らしてしまう。

会長たちが無事なら、近隣の町村には連絡がいつているだろうか、被害は抑えられていると信じているけど……何もできない自分

が歯がゆい。

一応、助けを求める声を出しておくべきか。

「いらっしやいませ いらっしやいませ」

言ってみたものの、この分厚い土を貫いて声が届くとは思えない。俺は自動販売機だから空気も食事も必要なく、排せつ物の心配も無用でポイントもまだまだ余裕がある。一ヶ月ぐらいは 結果 を維持した状態でも余裕で耐えられるだろう。

ラツミスたち心配しているよな。

いや、もしかして壊れたと思って諦められているかもしれない。そうになると、土の中で化石になるまで埋まる覚悟をしないとけないのか……はああ。

でも、その可能性は低い。ラツミスは必ず俺を助けようとしてくれる。それは確信に近い予想。異世界に来てからずっと相棒として共に過ごしてきた。

お互いに触れあい、助け合い、辛いことも楽しいことも一緒に過ごした日々。

彼女は絶対に俺を見捨てることなく掘り出そうとする。だから、助けに来ないという考えは消去してしまおう。

どれぐらいの時間を要するかはわからないが、俺は希望を捨てず助けを待つ。それだけだ。

その間に能力の確認と助けられた後の行動を考えておこう。ランク3になってから自動販売機の機能も格段に増えた。新たな自分の力を調べておかないとな。

外国の自動販売機のラインナップは日本では考えられない物も多く、これを眺めているだけでも余裕で一日潰せそうだ。

新しい商品や機能で早く仲間たちを驚かせたいな。やっぱり、お客がいないと寂しい。販売する相手がいてこそ、自動販売機なのだから。

独りぼつちは久しぶりだな……この世界に来た時はたった一人で湖畔に佇んでいた。あの時は寂しいより不安が強かった。蛙人魔に襲われ、ポイントが残りわずかになったところで現れたラツミス。

今思えば本当に懐かしい。あの頃はハンターたちの間で役立たずだと言われ、まともな相手と組むこともできず、あの場所に置いていかれていたのだったな。

それが今じゃ、清流の湖階層では知らぬ者がいない有名なハンターとなった。その実力は出会った時は比べ物にならないくらい上達して、一人でも中級クラスの魔物なら余裕でねじ伏せることができるまでになっている。

立派になったなあ。ずっとその背で見てきたからこそ、彼女の成長には感無量だ。

以前は俺がいないと実力を発揮できなかったが、今では怪力に振り回されることなく、制御も完璧に近い。

もう、俺を背負わなくても大丈夫な筈だけど、「ずっと一緒だよ」と言ってくれている。人間時代に、こんなに人に好かれて懐かれたことなんてなかった。こういった状況だと、俺の場合はリア充ならぬ、リア自販機とでも言うのだろうか……いや、違うな。

ラツミスが望んでくれていた人化は叶わなかったが、ダンジョンは他にもあるらしいし、本当に願いを叶えられるという情報も得られた。望みは繋がっている。

今回の一件が落ち着いたら、ラツミスも他のダンジョンアタックに付き合ってくれると言っていた。一緒に行動していた仲間たちも同行してくれるらしいから、次の機会を楽しみにしておこう。

あの騒がしくも頼もしい仲間たちと再び冒険ができるなら、文句

は一切ない。

だから、早くこの騒ぎを終わらせないと。

よっし、何もできないとは思うが俺なりに土砂からの脱出を考えてみるか。何もできないと思うから何もしないなんて柄じゃない。

自動販売機に生まれ変わった時点で常識とは離別した。いつものように、自動販売機として足掻いてみますか！

発掘

地中生活四日目。

周囲をコンクリートの壁で囲っているのは 結果 も消してある。この壁は俺が呼び出した、最近頻繁にお世話になっているコンクリート板だ。

それを 念動力 で操り自分で地下室を作り上げた。 結果 を発動し続けていてもポイントには余裕があるが、今後、何で使うかわからないので節約するに越したことはない。

一応壁際に花を植えているので殺風景な室内ではなくなり、寂しさが少しだけ紛れた。

魔物の群れはどこら辺を進んでいるのだろうか。ヒュールミの話だと、ここから防衛都市までは荷猪車で一ヶ月、徒歩で三ヶ月ぐらい？ だった気がする。もう少し、真面目に話を聞いておくべきだったな。

車を出せば一週間以上の遅れでも取り戻せそうだが、何かあるかわからないので早めに行動しておきたい。まあ、埋まって待っているだけの身なので自分ではどうしようもないのだけど。

でも、そろそろ発掘されるのではないかと思っている。数時間前から遠くから音が聞こえる時があるのだ。微かに聞こえる程度なので、掘削している音なのか人の声なのか、その判別さえできない。でも、その音が徐々に大きくなってきているので、俺も準備をしておいた方がいい。

壁際の花を消し、代わりに新商品を軽く地面に埋めておく。あとはこっちの場所がわかるように、声を発し続けておこう。

「いらっしゃいませ いらっしゃいませ いらっしゃいませ いら

っしゃいませ」

最大の音量で相手が気づくまで続けよう。機械の身体なので喉が枯れることもないから、好きなだけ叫んでいられる。

どれぐらい音を出し続けていたのか、周りの音が変わったような気がしたので声を消すと、何かが聞こえてきた。

「はっ……おおおん……まって……ねー……」

地中を貫き俺の元まで届いた悲痛な叫びは　　ラッミスだ。彼女の声だけは絶対に間違えることがない。

ちゃんと冥府の王から逃げられたんだ。無事なんだね。ああつ、はああああ、ほつとした。

最悪の未来を考えないように心掛けていたけど、安堵した瞬間に気が抜けて電源が落ちそうだ。コンクリート板が邪魔になるかもしれないから、全部取り外しておくか。土は　　結界　　で維持しておく。

「いらっしゃいませ」

かなり声が近くなってきたので、俺も大声で返事をする。

「はっこおおおおんっ！　直ぐに掘り出すから、待っていてねっ
！」

土って防音性能が高いと聞いたことがあるのだけど、ビックリするぐらいハッキリと聞き取れた。どれだけ大声で叫んでいるのか。後でのど飴を渡した方がいいかな……ごめんな、ラッミス心配させて。

結界　　に衝撃があり上に視線を向けるとシャベルの先が見えた。

続いて手の平が見えたかと思うと、表面に乗っている土を払い覗き込んでいるラツミスとヒュールミの姿がある。

「ありがとう」

俺がそう言うと、涙目のラツミスと、少し怒ったような表情だったヒュールミの二人が破顔した。

「おかえり、ハツコン！」

「まったく、心配させやがって。無事で何よりだぜ」

結界 を解除すると二人が落ちてくる勢いのまま、俺に抱き付いてきた。

「ハツコン、ハツコンだあああつ、壊れてないよね、大丈夫だよね！？」
もうっ、もうっ、本当に心配したんだからねっ！」

「うん」

「違和感があったらちゃんと言えよ、いつでも調べてやるからな。まったく、無茶しすぎなんだよ、いつもいつも、わかってんのか」

「うん」

二人が俺の体をペタペタと触り、心底心配してくれている。

目が充血して涙目の二人を見ていると、機械の身体なのに泣きそ
うだ。

「ごめんな、心配させて。無事だから。」

俺も二人が無事かどうかで気が気じゃなかったけど、それは二人

も同じだったみたいだ。

前と違い力いっぱい抱きしめたり、叩いてこないのは少し寂しくもあるけど、ラツミスも俺の体を気遣えるぐらいに成長したってことだよな。

そんなことを考えていると、頭頂部に軽い衝撃があった。視線を上に向けると……お尻が二つあった。

「出遅れ……た……」

「ハツコン、無事ですか！ ご飯出す能力は壊れてないですか！」

消え入りそうな声と真逆の明るく弾むような声。
ピティーとシューイなのか。

「ハツコン、発掘終了やな。これも陰ながら応援していた、ワイのおかげやなっ！ 影だけにっ！」

「面白くありません、闇の会長。ハツコンさん無事でなによりです」

「あー、やっと見つかったんだね。いやー疲れたね、何もしてないけどー」

「でしたら口を噤んでおいた方がよろしいですよ、犬岩山会長。それに、感動の再会を邪魔するような冗談はどうかと思いますわ、闇の会長。口は災いの門と申しますし、お喋りが過ぎますと相手に悪い印象を与えかねませんから。ハツコンさん、お久しぶりです。私のような個性の欠片もない、何処にでもいる平凡な女性のことなど、忘れられているかもしれませんが、迷路会長」

「あなたには言われとうないわ」

「うん、右に同じ」

頭上の穴からこちらを覗き込んでいるのは、闇の会長、始まりの会長、犬岩山会長、迷路会長か。会長ズも無事だっただね。灼熱と熊会長が見えないけど、別行動なのかもしれないな。

「あとの」

「かいちよう」

「とか」

ああ、もどかしいな。みんな無事なのか教えて欲しいのに上手く伝えられない。

「ええとね、他のみんなも無事だよ！」

「街の復興している連中もいるし、近隣の町村に危険を伝えに行つた奴もいる。熊会長や他の仲間は魔物の群れを追っているぜ」

すぐさま、ラツミスとヒュールミが答えてくれた。この二人は自分が言葉足らずなことを忘れそうになるぐらい、俺の言葉から正しく読み取ってくれる。

再会をこんなに喜んでくれている。その事実には俺は商品を全て温かいに対応している商品に変更した。そうしないと、嬉しさのあまり全部温まってしまうから。

みんなが無事だとわかったのなら憂いは消えた。まずは……商売開始だ！

町が壊滅しているなら食料は幾らあっても足りないだろう。みんなに大盤振る舞いするぞ！

「いらっしゃいませ」

「食料は充分にあるから、みんな列を守ってー」

「おらおら、子供と年寄り優先だ！ 横入りすんじゃねえぞ！」

「いらっしゃい……はい……どうぞ……」

「みんな、すつごく美味しいから期待するっすよ！」

自慢の売り子四人衆が商品を人々に配っている。

こういうのは若い子の方が男性陣は喜んでくれるので、わざとラツミス、ヒュールミ、ピティ、シユイの四人に頼んだ。

本当は女性へのサービスにミシユエルも欲しかったが、熊会長と一緒に先行しているらしい。無茶はしないでくれよみんな。

今すぐにもみんなの元に向かいたいが、まずはこの食料事情を何とかしなければならぬ。

素早さも更に上げて、滝のように食料を取り出し口から流し、それをみんなが拾って大きな机の上に並べてくれている。

ここで、住民が暫く過ごせるぐらいの食料を提供するのが先決だ。ここには大事なダンジョンの住民もいるのだから、飢えさせるわけにはいかない。

ここで唐突に久々のステータス確認いってみよう！

《自動販売機 ハツコン ランク3

耐久力 1000/1000

頑丈 100

筋力	50
素早さ	50
器用さ	50
魔力	0

加護 結界 念動力》

機能は多すぎるのでスルーするとして、ステータス上がってきたな。

ゲームなら盾やタンクと呼ばれる前衛でみんなを守る役割を任せられる能力。ステータスだけなら鉄壁と言っても過言ではない。

たとえ冥府の王が相手でも攻撃を防げることは体験済み。結界が張れなくても一発は防げるといことがわかつていたので、次に戦う時はもつと上手く立ち回ってみせる。

「ハツコン、ごめん。もつとご飯貰える？」

あつ、考え込んでいて食料を出すのが止まっていたみたいだ。心配そうに俺をラツミスが覗き込んでいる。

「いらっしやいませ」

ポイントはまだまだ余裕があるからね、幾らでも出すよ。

迷宮の財宝の価値は噂に違わないとんでもないもので、ポイントの桁がおかしな具合になっている。五千にも満たない人々へ食料を提供するだけなら余裕余裕。ダンジョンマスターからもらった宝石一つでお釣りが来る。

今はおごりでいいけど、この町が復興したら常連になってもらうよー！

久しぶりに自動販売機として活躍できることに内心喜びながら、

俺は食料を出し続けていた。

最後の指

早朝まで商品を大量に提供し続けたので、大穴の前に飲食料品の山ができた。

これだけあれば、軽く二週間は持つだろう。ポイントも減るには減ったが、譲り受けた金銀財宝から得たポイントに比べたら、気にもならない程度だ。

「これで大丈夫だね、ハッコン」

朝日に照らされたラツミスがコリをほぐす為に、身体を大きく伸ばしている。

「これで、憂いなく後を追えるな、お疲れさん」

付き合ってくれていたヒュールミが俺の体を小突いて笑う。他にも清流の階層の住民たちが手伝ってくれたので、一晩で終わることができた。

この程度の逆境には慣れてしまっている面々なので、町の住民と比べて立ち直りが異常に早い……いや、落ち込んですらいない。

「いこうか」

急かすようだが、ここでやるべきことは終わったので魔物の群れを追いかけてい。

大食い団は近隣の町村に危険を知らせに行ったそうだけど、ケリオイル団長一家は魔物の群れを追って少しでも削っているそうだ。

熊会長と門番ズとヘブイ、そして弟子が先行して、敵の目的地で

ある防衛都市に先に向かっている。永遠の階層で出した車は無事残っていたらしく、それに熊会長たちが乗っていったらしい。

商品が遠くにあっても失われていないことはわかるので、今も無事だと思う。

「ハツコンは休憩しないで大丈夫ですか？」

シユイが焼きそばを頬張りながら心配してくれている。

「そうだよ……体を……休めないと……」

いつの間にか忍び寄ったピティーが隣に寄り添って、じっと俺を見つめている。顔が接近しすぎていて、唇が体にくっつきそうだ。

「ピティーは近寄り過ぎっ」

あっ、ラツミスに襟首を掴まれて運ばれて行くピティー。

結局、この四人は一日中付き合ってくれていた。俺は眠らなくても平気だから、みんなは寝てくれと何度も言ったのだが、頑として聞き入れずに今に至る。

「みんなの言う通りだよ。休憩した方がいいんじゃないかな？」

「ううんいっく」

休憩は必要ないよ。今すぐにでも飛び出さたくてうずうずしている。気が急いでしょうがない。

気遣ってくれるのは嬉しいのだけど、これ以上はみんなを待たすわけにはいかない。

「そう言つと思つておつたよ。年寄りの早起きが役に立つ日が来るとはのお」

「歳を取るのも悪くないものですねえ、お爺さん」

「早起きには慣れていきますからね」

シメライお爺さん、ユミテお婆さん、園長先生が朝日をバツクに歩み寄つてきている。

全員戦闘衣装で既に旅立つ準備を終えているということは、三人は追撃戦に参加するつもりなのか。

「ワイも同行するで」

「俺も行くぜえええっ！」

早朝の目に優しくない金色のコートと、まだ寝ている人に怒られそうな絶叫が響き渡る。

闇の会長と灼熱の会長も参戦決定。この二人は戦力としては頼もしいが、旅の同行者として考えると、少し躊躇ってしまう。

「私はここに残り、街の復興に邁進します。なので、こちらの心配は無用です」

真っ赤なスーツが目立つ始まりの会長が残ってくれるなら、この町の心配は無用だ。

「ふあああああ、眠いよお」

「犬岩山会長、もう少しシャキツとしてください。皆さんの前です

よ

子供会長と迷路会長は戦闘力が皆無らしいので、始まりの会長の補佐をやってくれるそうだ。

「もう、行かれるのですね。寂しくなりますわ、ハツコンさん」

シャーリイさんも朝早いのに見送りに来てくれたのか。今日はいつものイブニングドレスじゃなくて、少し大人しめの格好をしている。

それでも、魅力が隠しきれないのが女性陣の羨ましそうな視線を全身に浴びているが、平然と佇み微笑む。

「じゃあ、北門の前まで移動しようね！」

ラツミスに運ばれて復旧中の北門から外に出て、少し町から離れる。

今から仲間の後を追うメンバーだけじゃなく、残る人も見送る為にここまでついてきてくれた。

「これ以上は危険ですので残念ですが、ここまでですわ」

シャーリイさんたち居残り組が足を止めて、寂しそうに笑っている。

「ありがとう またね」

二度と会えなくなる訳じゃないのだが、暫く会えなくなるので名残惜しい。

スオリとも言葉を交わしたかったが、今は別の町に向かっている

そうなので、今度会う時にはオレンジジュースを進呈させてもらおうよ。

仲間たちが別れの挨拶をしている間に車を呼び出そうと機能欄に目を通していると、

「おやおや、そこに隠れていらっしやるのはどちらさまでしょうか」

ユミテお婆さんが唐突に近くに生えていた木に向かって声を掛けた。

全員がそつちに目を向けると、一人の女性がゆっくりと歩み出てくる。

ふくよかで温和そうに見える女性。年齢は五十代だろうか。軽くウェーブのかかった金色の髪に目尻の下がった細い目の奥は真黒で……眼球が存在していない。

「あらまあ、気づかれてしまいましたか。初めまして皆様。うちの息子をご迷惑をおかけして申し訳ありません」

両手を揃えて深々と頭を下げる姿に、警戒していた仲間が数人、構えていた武器を下ろしている。

見た目だけで判断するなら、人の良さそうなオバサンなのだが、眼球ないんだよなあ。それに、黒のローブといえば冥府の王の部下を嫌でも連想してしまう。

「あなたは誰だ、それに息子って誰の事だよ」

ヒュールミが半眼で睨みつけ、疑いを隠そうともせず質問した。語気が荒かったというのに、対面のオバサンは笑顔を崩さずに微笑んでいる。まるで、その笑顔以外の表情ができないかのよう……。

「あらまあ、まだ自己紹介をしていませんでしたね、申し訳ありません。ロツちゃんがんばり過ぎて、ほんと困った子ですよ。昔は素直で大人しい子だったのに、どうしてあんな風になってしまったのでしょうかね」

頬に手を当てて悩んでいる仕草をしているのだが、表情に変化はない。

張り付いた笑みに雑談でもしているような気軽さ……不気味だ。

「あ、あのお、ロツちゃんって、どちら様なのでしょうっか？」

ラッミスはおずおずとオバサンに話しかけている。

相手の危険性を理解してないのか、それとも天性の朗らかさの成せる業か、一緒に居る時間が長いのに、未だ性格を掴めないところがある。

このオバサンが何者なのか、幾つか予想はつくがこのタイミングで現れるということは、つまり冥府の王の配下の一人、そしてそれなりに地位のある者。

正直、子供のことより当人について尋ねて欲しかった。

「ロツちゃんはね、ええと、今は違う呼ばれ方しているの……確か、冥府の王だったかしら」

とんでもないことをあっさりと言にした。全員が息を呑み啞然としていたが、慌てて武器を構える。

まさか……母親が現れるとはこれは予想外だった。俺も呆気にとられていたよ。

「昔は心根が優しく、虫一匹殺せない子だったのにねえ。まさか、

実の母親で実験して、あんな骸骨の体を手に入れるなんて信じられないわあ。それから、ずーっと、死なせてくれないのよ」

母親と名乗った彼女の顔がボロボロと崩れていく。

まるで高速で風化していくかのように、肌がどす黒く変色してひび割れ、髪が抜け落ちる。誰もが声を出せず凝視している間に、目の前の女性はどす黒い頭蓋骨となった。

「酷いと思わない？　ずっと、死なせてくれないの。秘術が成功するか実の母で試したのよ。同じ血を引く者ならば、最高の実験体になるって。全くしょうがない子よね……でも、私はお母さんだから全てを許してあげたわ。こうやって永遠に寄り添っていられるのだから。今は親將軍として、息子の邪魔ものを処分したりもしているのよ、立派でしょ」

親將軍であることには驚きが薄い、母親で試したのか。下種野郎なのは重々承知していたけど、救いようがないな。

「無償の愛、これこそが母親だと思うわよね」

黒い骸骨がカタカタと顎を鳴らして熱弁を振るっている。

今の部分だけ切り取れば立派なセリフだが、あれに手を貸しているということとは同罪だ。

「間抜けで愚かな母親ですねえ。子が誤った道を進むのであれば、それを止めるのが親の務めですよ」

「ああ、それは愛情ではない。ただの、依存と甘やかしじゃわい」

シメライお爺さんとユミテお婆さんの老夫婦が同時に一步前に踏

み出した。

相手を見据えているだけだが、その表情に静かな怒りが見えた。

「身を挺して子を庇うのは親の務めですが、過ちを正すのは親の責任ですよ」

園長先生も前に踏み出すと、親將軍に優しく語り掛ける。責めるのではなく諭すような声だ。

「あらまあまあ、皆さんで私を責めるのですね……姑と同じように……こんなにも素敵な母親を捕まえて……貴方たちは……ロツちゃん敵……やっぱり、この世界には……私と……ロツちゃんだけでいいのよっ!」

激昂する親將軍の身体から濃密な闇が噴き出す。闇の量が莫大で親將軍の周囲が小さな黒い池のようになっていぞ。

過保護を通り越した、躰を全くしなかつた親の末路がこれだと思つと、悲しくなってくるな。親になる権利のない精神が子供な大人が、子供を育てた結果がこの有様なのか。

「戦えない者はオレと一緒に下がれ!」

ヒュールミが叫び、戦闘員以外は町に向かって走り去っていく。

残ったのは闇の会長、灼熱の会長、シユイ、ピティー、シメライお爺さん、ユミテお婆さん、園長先生。あれっ、シャーリイさんも鞭を手している。元ハンターとして手伝ってくれるのか。

そして、残りはラツミスと俺。

「みんないらない なにもいらない ろっちゃんがいれば ほかに なにもいらない みんなしんじやえ シンジャエエエエエエエエエエ

エエエエエエッ！

天に向かって絶叫を上げる親將軍に仲間たちが一斉に向かっ
てい

く。
まだ冥府の王に借りを返していないのに、こんなところで倒され
る訳にはいかない。全力でいこう、ラツミス！

親將軍

「ハハノアイハ シュゴイノヨオオオオッ！」

愛情の押し付けは子供に嫌われる元だよ。叫ぶ親將軍に、そう言っ
てやりたかったが、言葉足らずの俺が口にすると違う意味にとら
れそうだ。

親將軍の身体から噴き出されていた闇が何本もの太い綱のように
なると、突っ込んでいった闇の会長、灼熱の会長、ユミテお婆さん
を薙ぎ払おうとする。

闇の会長は影となり地面に沈んで避け、灼熱の会長が体に纏った
炎で闇の綱を殴りつけて燃やし尽くす。

ユミテお婆さんに至っては、相手の攻撃が届く前に切り刻まれて
塵と化している。その際の攻撃はいつも通り全く見えない。何か光
った気がするぐらいだ。

遠距離からは園長先生とシュイが矢を撃ち込んでいるが、全て闇
に絡めとられ親將軍には届いていない。ピティーは弓二人組の護衛
をしてくれているので、安心して攻撃に専念できているようだ。

シャーリイさんが鞭を振るうと、風を斬る音が耳に届く前に目標
に到達した鞭が、闇の綱に何度も叩きつけられる。

俺たちは仲間が注意を引きつけている間に相手の背後に回り込む
と、全速力で特攻していく。

守りの心配は無用だから、本気の一撃を叩きつけていいよ！

十メートルはある距離を、たった二歩で飛ぶように間合いを詰め
る。黒い闇の綱は仲間集中していて、こちらに攻撃を加える余裕
はない。

腰を落として上半身を捻り、突進力と怪力が合わさった凶悪な拳を親將軍の背中に突きつける。

威力、速度、タイミングの全てが完璧だと思えた一撃だったが、その拳は空を切った。

拳圧で風が吹き荒れ周囲の闇は吹き飛んだのだが、肝心の親將軍の姿がない。

「あれっ、外れた!？」

「あ　っ　ち」

拳を突き出したポーズのまま固まっているラツミス目の前に、ペットボトルを一本浮かばせると勢いよく頭上に向けて弾き飛ばした。

ペットボトルを目で追うラツミスは、上空に浮かぶ親將軍の姿を捉える

当たる直前に引っ張られるように空へ退避したのだが、よく見ると飛んでいるのではなく、両肩に闇の紐が巻き付けられている。あれが空に引っ張り上げたのか。

「ヨツテタカツテ　イジメルノネツ　モウユルシテアゲナイ　ジヨン　タベチャイナサイ」

親將軍が上空から見下ろしたまま手を振り下ろすと、地面に黒い線が走り複雑な模様を描き始める。これって、あの時の。

「そこから離れるのじゃ!」

シメライお爺さんが珍しく取り乱した声を上げている。あの焦りようは尋常ではない。

全員が即座に従い地面を走る闇から離れていく。

似たような光景を最近見た記憶がある。冥府の王が始まりの階層で見た魔法陣に酷似している。ということは次の展開は。地面の巨大な魔法陣が濃い黒を立ち昇らせる光景は、漆黒の柱が突如平原に現れたかのようだ。

「これは召喚魔法の一種じゃと思うが……いかなのう、これは」

眉をひそめているシメライお爺さんの頬を、汗が滑り落ちる。

「お爺さん、それ程までなのですか」

「うむ、これはかなりの魔力、それもかなり異質な魔力じゃ。もしや、異界の魔物か」

異界の魔物？ ここも俺にとっては異世界だけど、更に別の異世界とも繋がれるのか。

それを利用したら元の世界に戻れたりしないのだろうか……って、そんな状況じゃなかった。

全員がどう行動していいか判断がつかない状況下で黒い柱は目の前で消滅する。

さっきまで柱のあった場所に佇んでいるのは異形の化け物だった。

頭は煮込み過ぎた魚のようでもあり、腐りかけのバツタのようでもある。顔のど真ん中に幾つもの目があるが、それ全て赤で瞳が存在せず、本当に目なのかも怪しい。

体は肥満気味のトカゲで背中に九つのカラスのような漆黒の羽。濁った薄汚い紫の皮膚はブクブクと泡立ち、弾けるたびに黄色い粉が霧状に飛び散る。尻からは六体の大蛇が生え蠢いていた。

空には分厚い雲がかかり、辺りは日が落ちたかのように暗くなっ

ている。

「ひいうっ、な、な、何あれっ！ あれ何っ！ ねえ、ハッコンあれ何なの！？」

異世界に来てから結構な数の魔物を見てきたが、これは異質過ぎる。

今までも気持ち悪さや若干の恐怖を感じたが、この異形の化け物はそんな次元じゃない。おぞましさを断トツでナンバーワンだ。

俺は自動販売機だからまだ動揺が少なく済んでいるが全員の顔は蒼白で、特にシユイ、シャーリイ、ピティー、ラツミスは全身の震えが止まらないようで、立っているのが精一杯といった感じだ。

「お主らは下がっておれ、ここはワシらの出番じゃな」

「この歳になると怖い物なんてありませんからねえ」

「私は先輩お二人が未だに怖いですわ」

「ワイもそうやで。二人とも怒るとえげつないもんなあ」

ハンターチームの元メンバーである四人は軽口を叩きながら、相手を正面から見据えている。顔色も若干良くなっているようだ。

「燃える展開じゃねえかつ！ 邪悪な存在に立ち向かう正義の軍団、かああつ、最高だぜええっ！」

灼熱の会長は怖気づくという単語とは無縁らしい。全身の炎がいつにもまして激しく燃え盛っている。こういう場面ではありがたい存在だな。

戦闘に参加しない俺らはひと塊になって戦況を見守るしかない。血の気の失せた顔をしたシュイとシャーリーが傍に寄ってきて、俺の体に手を添えている。触れた部分から二人の震えが伝わってきた。

ラツミスも体が硬直して一步も踏み出せないでいる。今はみんなの邪魔にならないように 結界 を張って安心させないと。

しかし、まさか恐怖で萎縮して戦線離脱になるとは思いもしなかった。

彼女たちを落ち着かせるためにリラックスさせる飲み物でも提供しよう。ハーブティーかココアがいいかもしれない。ホットの方がいいよな、うん。

震え続けている四人に 念動力 で温かい缶のハーブティーを渡す。今の状態だと缶を開けるのにも一苦労しそうなので、ちゃんと開けた状態にしている。

手に温かい缶を押し付けると、ずっと異形の化け物から目を逸らせないでいた彼女たちが手元に視線を落とす。

そして、怯えた表情のまま飲み口に唇を添えて、一口だけ飲んだ。震えが少しだけ治まったか、でも、戦える状況じゃない。今は任すしかないのか。

四人が戦力外となった状況下だが戦いを続けている仲間に視線を向けた。

異形の化け物は手が存在しないので、どうやって攻撃を仕掛けてくるのか疑問だったのだが、その攻撃方法は余りにも特殊で思わず我が目を疑ってしまう。自動販売機に目はないけど。

顔中に張り付いている赤い目が弾丸のように飛び出して、仲間を狙い撃ちしているのだ。あの目から光線らしきものが出るなら、まだ想像の範囲内だったがまさか目玉を弾にして打ち出すのか。

相手が巨体なので目玉の大きさは人間の頭よりも大きく、速度も

相当なもので俺は目で追うのがやっとだった。

灼熱の会長は飛び込んでくる目玉を鬱陶しそうに、燃え盛る腕で払った瞬間　爆発した。その爆音にラツミスたちの体が大きく縦に揺れる。

爆炎と爆風が過ぎ去ると、地面が大きく抉られた跡があり、その中心部に灼熱の会長が平然と立つていた……よかった、無事だったのか。

「おー、これやべえな！　衝撃加えると爆発するみてえだから、気を付けろよ！　俺だからよかったけどよおっ！」

あの口振りからして全身炎の灼熱の会長は、爆発や炎に対して耐性があるのだろう。

忠告を聞いた闇の会長は影となり地面に潜り込み、相手の自分の場所を悟られないようにしている。

ユミテお婆さんは見えない飛ぶ斬撃で近づく前に迎撃しているので、爆風で髪がそよぐ程度の影響しか受けていない。

シメライお爺さんに至っては風を操り、飛んできた目玉を相手に返してダメージを与え、園長先生は発射される前に目玉を射抜き、魔物の顔面辺りで爆発を引き起こしている。

……格が違うな。余裕を持って凌いでいるが、決め手にも欠けているというのが現状。目玉を飛ばした後の空洞には再び目がせり出してきて、幾らでも補充が利くようだ。

自分の目玉の爆発に巻き込まれているのに、繰り返しているという事はダメージを殆ど受けてないということなのだろうか。

みんな間合いを詰めるのに苦労しているようで、このまま消耗戦になると体力の問題も出てくる。

俺も手伝いたいところだけど、この状態の彼女たちに戦闘を強い

るのは可哀想だし、せめて相手の注意を引きつけて、少しでも気を逸らすことができれば。

商品一覧に目を通してしていると、面白い商品を発見した。平和になったら夜にでもみんな楽しんでもうと思っていた品なんだが、これなら相手もこつちを見てしまうに違いない。

これはノーマルの自動販売機では売れない商品なので体もそれ仕様に変更する。大きさは通常時の自動販売機と変わらないのだが、ボディーの色が煌びやかになった。

背負っているラツミスは見えないが、残りの二人がじつと俺の体を見つめている。

その視線を無視して 結界 の大きさを半径二メートルからメートルに変更して、取り出した商品を 念動力 がギリギリ届く二メートル先に設置していく、大量に。

ラツミスも俺がやっていることに興味が移り、少しだけ恐怖が薄れている様に見えた。

全ての設置が終わると、ノーマルの自動販売機に戻り百円ライターを取り出し口に落とす。

さてと、やる前に仲間に伝えておいた方がいいよな。最大音量で

……、

「あかりゆく」

「すりゆよ」

「こつち」

これだけだと普通なら意味が通じるか怪しいが、何だかんだ言って付き合いの長い人たちだ。察してくれると信じているよ。

俺は百円ライターを操り、取り出した新商品に次々と火を付けていく。

導火線に火が付けられたそれら 花火は発射音を響かせ、連続

で天高く打ち上がっていく。

「たまや」

辺りが急に暗くなっていたお蔭で、花火も綺麗に見えるな。

そう、俺が準備していたのは花火。とある有名チェーン店限定で花火の自動販売機が存在していると知って、深夜一時にわざわざ買いに行っただったよな、懐かしい。

実際に買ったことあるのは二種類だったのだがランク3になったことにより、全種類の花火が使えるようになってる。

花火つて、一人でやると虚しいからね……だから、マニアな俺でも全種類購入するようなことがなかった。ランク3になっていてヨカッタナァ。

天を彩る華やかな光景に思わず目を奪われるラツミスたち。そして、動きがピタリと止まった異形の化け物。

どうやらこちらに注目してくれたようだ。さあ、ガンガン花火打ち上げるよ！

必勝法

強大な敵とのバトル最中だというのに、異形の化け物もラツミスたちも、空で弾ける色とりどりの花火に魅了されている。

最近では市販の花火でも質が良くてカラフルなものが多い。花火を見たことのない異世界の人々にとっては息を呑む美しさなのだろう。この隙に攻撃を加えて欲しいところなのだが、仲間全員が花火をじっと見つめて動かない。もしかして、新たな魔法か何かだと警戒しているのかもしれない。

正直、あの異形の化け物だけは、花火に興味湧かないのではないかと疑っていたのだが、その場でピタリと動かなくなっている。まるで石化したかのようにピクリとも動かないな。

でも、顔は花火とは逆方向に向いている。動いてはいないが花火を見ているようにも見えない。

そうになると、宙に浮かんでいる親将軍が、現在進行形で魔物を操っていると考えて間違いないようだ。

ここまで強力な魔物が配下にいるのだから、親将軍が協力すれば仲間は苦境に立たされていただろう。だというのに、空に浮かんだままじっと見下ろしているだけだった。

おそらく、彼女は異形の化け物を制御するのが精一杯で、他のことができない状況なのだろう。その証拠に花火に親将軍が意識を奪われている今、異形の化け物の動きが止まった。

ここまでの考えを一瞬でまとめると、呆けたように花火を眺めているラツミスに囁く。

「らっ っ い す」「らっ っ い す」

「え、あ、うんとなに、あれめっちゃ綺麗やねえ」

うつとりとした表情が色っぽくて、思わず凝視してしまったが今はそれどころじゃない。

「とうっして」

そう言っつて、ラツミスの前にコンクリート板を出した。

コンクリート板は自分の体の下にしか今までは出せなかったのだが、ランク3になってから足下以外にも出せることを知り、こうやって活用している。

「えっと、これ投げるの？」

「うんおやに」

「えっと、親將軍の方に投げたらいいんだよね？」

「うん」

戦闘中だというのに殆どの人が花火に集中してしまっている今がチャンスだ。

ラツミスがコンクリート板に指をめり込ませて持ち上げると、大きく振りかぶった。

一歩大きく踏み込み、剛腕から放たれたコンクリートの一投は親將軍目掛けて突き進んでいく。

凄まじい速度が出ているぞ。空からの風景を見る余裕すらない。

一撃必殺の威力が込められたコンクリート板は狙い変わらずとはいかずに、このルートだと親將軍の頭上を通り過ぎていくことになりそうだ。

ラツミスの命中率の低さは織り込み済み！

俺は空中で ダンボール自動販売機 から コイン式掃除機 に
フォルムチェンジして、コンクリート板から離脱した。

投げられる直前にコンクリート板のボルトにダンボールの体を突き刺しておいたのだが、想像以上に上手く行って良かったよ。

「えっ、ハッコン!？」

俺が背中からいなくなったことに気づいたラツミスの焦っている
声が届く。

コンクリート板は親將軍の頭上を越えていったが、途中で分離した俺は最大まで上げた筋力を生かし、掃除機の空気を排出する機能を使い、空気を尋常ではない勢いで噴き出す。

後は 念動力 で角度を調整しながら、親將軍の黒い頭蓋骨に激突するだけ！

「キレイダワー ロッチャント イッシュヨニ ミタイ エッ」

目玉のない空虚な眼窩で火花を見つめていたところに、飛び込んできた俺と視線が交わる。骸骨では表情がわからない筈なのに驚愕しているかのように見えた。

それも一瞬だったが。

相手の顔面に俺の下腹部が命中すると、威力が大き過ぎたのか、元々防御力は大したことがなかったのか、それを知る術はもうないが、あっさりと粉碎された。

相手の撃破を確認して喜びたいところだが、ここからが問題だ。この高さで勢いで地面に激突して、無事でいられるかわからない。

結果 を張ったとしても激突時の衝撃で体の内部が壊れてしまう気がする。

素早く風船自動販売機にフォルムチェンジをして最速で風船を作
つていく。

今俺の身体は下降し続けている、時間は殆どない。五つの風船を
作ったところで妥協すると、今度は最小の自動販売機であるミニチ
ュア模型の自動販売機になった。

ここで 結界 を縮めて風船でパンパンにした中心部にいること
で、激突時のクッションにする。エアバックの要領だ。

体も小さく軽くなっているこれで充分防げる……よね？

地面が近くなってきたているようだけど、風船に囲まれてよく
見えない。衝撃がくるのを覚悟してじっとしていると、身体に急ブ
レーキがかかる。

あれ、このふわつとした感じは風船が思ったよりも効力を発揮し
てくれたのか。

「もおおうつ！ また無茶して！」

風船と 結界 を解除すると、地面に座り込んで俺を抱えている
ラツミスがいた。

着地地点まで駆け寄ってきて受け止めてくれたのか。

「すまにゃい」

「うつ、ちよつと可愛く言っても誤魔化されないからね！」

頬を膨らませて怒っていらっしやいる。言葉足らずなだけで、そ
ういった意図はなかったのだが。

不機嫌なラツミスをなだめる前に敵はどうなったか確認しないと。
親將軍を倒したことで異形の化け物が自由になり暴れる可能性も
ある。理想としては召喚者を失ったことで、そのまま異界に戻って
欲しいのだが。

期待と不安が入り混じったまま、背後に視線を移すと……そこに闇に沈んでいく異形の化け物がいる。

それでも、その姿が完全に沈みきるまで見守っていたのだが、特に抵抗する様子もなくこの世界から去っていった。

「召喚者を失えば魔物は元居た世界に戻る、物の道理じゃよ」

いつの間にか歩み寄ってきていたシメライお爺さんがそう言うなら、心配はいらないのだろう。

これにて一件落着……じゃない。まだ始まってもしなかった。先行了した仲間を追う為にこの場に居たのだった。

まさかの中ボス戦をする羽目になるとは思ってもいなかったから、一仕事終えた気分になっていたよ。

「予想外の展開だったが、相手の將軍を一人倒せたのは大きいぜ」

避難していたヒュールミも戻ってきたのか。

全員が再び集まり、今度こそ出発することになった。

「あつ、移動手段は任せておけて、ハツコンは言っていたけど、またあのクリユマ出してくれるの？ でも、今回は人数も多いし、荷台も持ってきてないから二台出すのかな？」

参加人数は九名プラス自動販売機。コンパクトカーだと二台出しても足りない。それに永遠の階層のように地面が平らではなく、凸凹していることも考慮しないと。

そこで、ずっと狙っていた海外のとある自動販売機にフォルムチエンジすることにした。今までは欲しくてもポイントが全然足りなかったので、手を出せなかったのだが、ダンジョンの財宝をポイントに返還した今の俺なら払える！

「おおおおおおお」

仲間が俺を見上げて驚きのあまり声を漏らしている。

この姿を見て自動販売機だと思う人は殆どいないだろう。殆どがガラス張りで中の商品が丸わかりなのだが、初めてこれを見た人はオシャレなビルだとは思わない。

実際、俺もネットで調べて見つけた時は本当に自動販売機なのかと疑ったもんだ。

中は五階建てになっていて、その大きさにも仲間たちは驚いているようだが、中に並んでいる車から目が離せないでいる。

「あれ、これって形が違うけどクリュマ？」

「みてえだな、あのクリュマよりかなり大きめだが、性能は同じように見えるが」

ラツミスとヒュールミがガラス部分に張り付いて……いや、みんなが凝視している。

そりゃ、興味が湧くよな。これは世にも珍しい自動車の自動販売機だから。正確には外国の中古車自動販売機だが。

ガラス張りの建物の中には中古車が二十台入っているのだが、その場で選んで現金を投入するのではなく、予め購入手続きをしておく専用のコインを手に入れることができる。

それを投入口に入れコントロールパネルで購入者の名前を入れると、後は全て自動でやってくれる。ちゃんとした自動販売機。

自動販売機マニアの間では有名で、車は購入できないがいつかこの目で見るのが夢だった。まさか、自分がその物になれるとは思ってもしなかったけど。

全て外車の中古車なので車の種類も豊富で大きい。ここの車なら一台でも全員をなんとか運ぶことが可能だ。

後ろが荷台になっていてトラックみたいな形状をしている車にしようか。確かこういう車のことをピックアップトラックと呼ぶのだったかな。これだと直ぐに乗り降りできるし、車に乗ったまま攻撃を加えることも可能になる。

雨風は防げないがこれだと自動販売機の身体でも乗りやすい。ええと、購入者の名前なんにしようかな……やっぱりここは。

コントロールパネルにラツミスと入力すると、三階に自動販売機中心部のエレベーターが止まり、そこに目当ての車が運ばれる。

車が一階まで降ろされると、取り出し口？ の扉が開き、赤いピックアップトラックが滑り出てきた。

海外の車なので日本産より一回り大きく、これなら俺が置かれても余裕がありそうだ。雨避けの幌みたいなものも取り付け可能なのか、これはいい買い物をした。

まあ、この自動販売機と車で驚くほどポイントは消費したけど。

まだまだ余裕がある。ほんと、ダンジョンマスターのおかげだよな。よっし、今度こそ魔物の群れを追う準備は整った、早くみんなに合流しないと。

思考と食欲

やはり、ピックアップトラックを選んで正解だったようだ。オフロードに強い4WDで車体も高く、ほとんど整地されていない道を通るのに適していた。

後ろの荷台は俺の体をおいても余裕があるし、普通車でこの大きさなのは流石の海外産だな。

「やっぱり、運転楽しいな！ もうちょいとばすぜ！」

左の運転席には真つ先に運転を覚えたヒュールミが座り、ご機嫌でアクセルを踏み込んでいる。

覚えた仲間の中で一番運転技術があるのは確かだが、スピード狂の気があるので長時間任せるのは怖い。

今までなら 念動力 で運転をしなければならなかったのに、車が走っている時は普通の自動販売機でいることが多かったが、今は余裕がある。

何かしようかな。新しい自動販売機も試してみたいし……もうすぐお昼か。となると、新しい食料品を提供できるタイプか。あっ、あれやってみよう！

このまま荷台でフォルムチェンジをしようと思ったのだが、とあることを思い出したので後に回すことにした。

そろそろお昼だな。半日近く車に乗り続けていたので、昼食時は車を止めることにしている。

荷台から降ろされると、ここなら充分なスペースがあることを確認してから、あの自動販売機になった。

体が通常時の自動販売機の三倍の大きさに膨らむ、横に。

ボデーは真っ赤で三台分のスペースを必要とするこれは、ピザの自動販売機。

それも体内で生地をこねて、トッピングをしてその場で焼くという本格派。値段も日本のピザとは比べ物にならないくらい安い。

日本にも是非一台輸入して欲しいイタリア産の自動販売機だ。

仲間も興味津々なようで、俺の周りに集まってきた。

焼き上げている窯の様子が外からも見えるので、そこを熱心に覗き込んでいるな。

三分ほどで出来上がった品を取り出し口に運び 念動力 で操作してラツミスに渡した。

「あつたかーい。んー、いい香りするね！」

「おおつ、なんだこれ。引つ張つたら伸びやがるぜえええっ！」

灼熱の会長が伸びるチーズにテンションが上がっている。そういや、この世界でチーズを見たことがなかった。

みんなで一ピースずつ分けているので、あつという間になくなる。既に次のを焼いているので待たずに提供できそうだ。

「まだっすか、まだっすか」

体に張り付いて急かすのは、もちろんこの人 シュイだ。

俺が復活して食事の面で一番喜んだのは、彼女だったからな。復興中は遠慮して食事の量を減らしていたらしい……少し落ち着いてご飯は逃げないからね。

次のピザは一枚全部シュイに譲ることにした。全員が苦笑いを浮かべながら、快く譲ってくれた。ここに大食い団がいたらもめていそうだ。

むこうも、元気にしているといいが。

全員分のピザを提供すると、今度は飲み物も配って頼張る仲間を眺めている。

美味しそうに食べる人を見ているのが、自動販売機としての至福の時間だよなあ。みんな熱々を嬉しそうに食べてくれて……あれ、シメライお爺さんとユミテお婆さん、それに園長先生は食が進んでない。

口に合わないという訳じゃないようだが、好んで食べているようにも見えない。あつ、そうか、高齢の方にピザは胃に重すぎる。こんな初歩的なミスを犯すとは、まだまだ精進が足りないな。となると、こっちに変更しようか。

久しぶりにうどんの自動販売機になると、きつねうどんを三人分作って渡した。

「あら、気を遣わせてしまいましたか。美味しいのですが、少し重かったですよ。でも、残りどうしましょうかねえ」

三人ともほんの少ししか口を付けていないので、三枚ものピザが余ることになる……が、

「大丈夫ですよ。シユイ、これ食べていいですよ」

「マジっすか、園長先生！ いただきます！」

既に食べ終わっていたシユイが飛び付き、その胃袋に吸収されていく。うん、何も問題がない。

新商品に浮かれてしまっていたが、ちゃんと需要と供給を理解しないと。自動販売機として修業不足だ。

それから、シユイにはハンバーガーとから揚げを山盛り渡して、出発することにした。

移動中に敵とは全く遭遇しないのでドライブ気分なのだが、等間隔で地面に空いている大穴を見ていると気分が滅入る。

合体した階層主の大きさを嫌でも実感させられてしまう。冥府の王よりも合体階層主の方が厄介な相手に思えるのは、気のせいじゃない。

巨大というのはそれだけで脅威になる。犬岩山との戦いですら避けたというのに、更に強化されているとなると勝ち目があるのか？

「ハツコン、シュワシュワするの欲しいっす」

取り出し口に落としたコーラをシュイに渡す。

冥府の王の膨大な魔力は確かに厄介だが、ポイントが余っている今なら魔法の攻撃を 結果 で防いで間合いを詰めることは可能だろう。

自動販売機の厄介さを知っているから冥府の王は俺に執着して、始まりの階層で確実に壊そうとしてきた。

「ハツコン、小腹が空いたから、何か食べさせて欲しいっす」

スナック菓子を大量に取り出し口に落とす。これで暫くはもつだろう。

で、お腹が空いたところを強襲……じゃない、冥府の王は俺が壊れてないと知ると、また対策を練ってきそうだな。復活したのをばれないようにした方がいい。

あと、気になるのは五指將軍の存在だ。親將軍と中將軍は倒して、薬將軍であるスルリィムは味方になってくれた。残っているのは

「ハツコン、もう少しもらえないっすか」

カロリーの高い、メロンパンやドーナツといった腹持ちの良さそうな品を選ぶ。

やはり、菓子パン將軍……違う、残りの二將軍が厄介だよな。逃亡した小將軍、まだ見たこともない人差將軍が何処で仕掛けてくるか。

できることなら早めに倒しておきたいが、相手が仕掛けてくるのを待つしかない。俺たちが後を追うことを考慮して、何処かに潜んでいる確率が高いだろう。

「喉が渴いたから、甘い飲み物が欲しいっす」

ああもう、考えごとの邪魔をしないで、シユイ。

もう全部食べたのか。胃袋がどうなっているのかヒュールミに解剖してもらいたい。

食べても太らない体質らしいけど、糖尿病が気になる。最近、糖分を取り過ぎな気がするので、ゼロキロカロリーの飲料を渡しておこう。

昔のゼロカロリー系は美味しくなかったが、最近は美味しい物も増えているのでぶん気づかない。

「あれっ、これなんか、甘味が変じゃないっすか？ まあ、美味しいっすけど」

シユイってただの大食いじゃなくて、意外と味覚が優れているのが余計に厄介だ。

今は太らない体質だと大食いできるかもしれないが、こういう人って歳を取って新陳代謝が落ちると一気に太るんだよな。

十年後のシユイを想像してみると……丸っこくてそれはそれでありな気がした。

「ハツコン、失礼なこと考えてないっすか？」

また灯りが点滅していたか。親しい仲間は俺のちよつとした違いで色々察する様になってきている。ラツミスとヒュールミ程じゃないが、昔と比べるとかなり意思の疎通が楽になった。

「ぼ ち ゃ り ゆ」

「ぼちやる……な、何を言っているっすか。いっぱい運動しているから、大丈夫っすよ！」

慌てて弓を手にとると、誤魔化すように弓を構え遠くの魔物を射抜いているが、摂取したカロリーと運動で消費しているカロリーが一致していないからね。

焦ったということは、一応は太る可能性を考慮しているのか。

「ハツコン、女の子にぼちゃとか言っちゃダメだよ、めっ」

ラツミスが俺に指を突きつけて注意してくれた。そうだよな、現代日本だとセクハラ認定される失言だ。

そついや、ラツミスも最近太ってきたとか呟いていた。愛用している鎧や短パンがきつくなってきたらしい。以前と比べて太っているようには見えなかったので不思議だったのだが、最近その原因が判明した。

半眼でラツミスを観察していたヒュールミが、ぼそつと零した声が耳に届いたからだ。

「ラッミス、胸も尻もまだ成長しやがるのかつ。オレは成長が止まったというのに……ぐぬうつうつ」

歯ぎしりをして悔しがっていたので、怖くてその時は口を挟まなかった。

つまり太っている訳じゃなく、膨らんでいく胸とお尻のせいできつくなっているだけ。ただでさえ、男の目を引くスタイルだということに、まだ強化されるというのか。

色々心配になるけど、怪力があるから荒くれ者もナンパ野郎もワンパンチで撃退できるんだよなあ。

性格も顔もスタイルも抜群。普通なら男が放っておかないのだが、常に俺が背中に居るのでナンパしてくる野郎どもを見たことがない。まあ、自動販売機背負っている女の子に声を掛ける勇気がある男はいないよな……。あと、ミシユエルとすることも多いから、男が気後れして近寄れないのかも。

弟子よ、立派に役立っているじゃないか。今度褒めてあげよう。

「どうしたの、何か考えごと？」

ラッミスの額があと数センチでくつつくぐらいに顔を寄せている。

「あたりがでたらもういっぽん」

「あつ、とぼけている。変なこと考えてたでしょ」

じゃれるように拳をぐりぐり押し付けているが、これが生身の間なら結構なダメージが通っているんだろつな。

こつやつてラッミスが無邪気に触れ合えるだけでも、鉄の体になって良かったと思う。

こんな日常が続くならいいのだけど。

永遠の階層を進んでいる時に、みんなと大空の下でドライブしたいと思っていた。その願いが叶った今、気の抜けない現状だが今だけは楽しんで罰は当たらないよな。

降り注ぐ陽の光を浴び、仲間たちと談笑を続けながら車は進んで行く。

一組目

車の旅は順調で特にこれといったアクシデントも発生せず、数日が経過した。

ガソリンも自力で入れられるメリットが大きく、汚れた車も高圧洗浄機になって綺麗にするようにしている。

たまに自分が万能過ぎて怖くなるが、自動販売機である自覚を失わないようにしたい。いや、その前に中身が人間であることも忘れないでおこう。

最近、自動販売機である自分を受け入れてしまっていて、これが普通の身体としか思えなくなってきた。そろそろ、末期かつ！

「どうしたの、ハッコン。考えごとしてるのかな？」

荷台のみんなに飲み物を配りながら、考えごとをしていたのをラツミスに見抜かれたか。

まあ、考えながらもちゃんと配り終えているのが、自動販売機が板についてきたなと実感してしまう。

もう、いつそのこと人間になるより、自動販売機に手足が生えた方が馴染むような気すらしてきた。

「うんとだん」

「ちようにお」

「いちくかな」

さっき考えていたこととは違うが、これも悩んでいたことなので嘘じゃない。

「うん。団長たちと他のハンターは最後尾の魔物を少しずつ削るって話だったから、一番先に合流するのは、団長たちだと思うよ」

「だな。魔物たちは徒歩だから、移動速度はしれていると考えられる。ってことは、そろそろ追いつくかもしれないねえな」

今日は運転をしていないヒュールミが目を細めて前方を睨んでいる。

ここで双眼鏡になり遠方を見ようとしたら、何故かシュイが俺を掴んで覗き込んだ。

「うわー、めっちゃ見えるっすよ！ これ便利っすね！」

「次は……ピティー……変わってね……」

物欲しそうに指をくわえたピティーが俺から目を逸らさない。

あつ、灼熱の会長と園長先生がピティーの後ろに並んでいる。どうやら順番待ちのようだ。暫くは、みんなに楽しんでもらうつもりか。

順番交代で覗かれ、今はユミテお婆さんが覗いている。

「いやー、便利なもんやねえ。最近がちいとはっかし目が衰えてきておったから、ありがたいことですよ」

喜んでいただけたのなら、何よりだ。

かなり楽しんでいるようで体が激しく揺さぶられている。様々な方向を見ようとしているが、陽の光だけは直接覗き込まないように、上方への移動は制限を付けさせてもらう。

「あんれ、お爺さん、お爺さん！」

「なんじゃ、そんなに大声出さんでも聞こえとる。どうしたんじゃ」
珍しく大声を上げたユミテお婆さんが、隣に座っていたシメライお爺さんの肩を激しく叩いている。

「この先で魔物と交戦中の人々がいますよ」

「なんじゃと、ワシにも見せてくれ」

その言葉に俺も双眼鏡が向けられている方向に意識を移すと、確かにまだ米粒のような大きさだが争うハンターたちの姿見える。あれは、敵の数が多すぎるぞ。見るからに劣勢だ。

「闇の。もうちつと速く走らせんか」

「了解や。みんなちよいと飛ばすから、しっかり掴まっというてや！」

今日の運転手は闇の会長だったな。
ヒュールミの次に運転が上手いので、この二人が運転していることが多い。

「ちよつと待った、助手席に乗り込むぜ」

誰も乗っていないなかった助手席の窓を開けてもらい、走行中に屋根へ移動してヒュールミが滑り込む。スタントマンみたいだ。

周りが凄過ぎて気が付かなかったけど、ヒュールミも運動能力が上がっているよな。魔物と正面から戦うには不安があるが、地球なら普通に運動神経が優れている方に含まれる。

「闇のちよつと、操作代わってくれ！」

「な、なんや、もう、まあええけど」

平面の陰になった闇の会長が、車の側面を這って荷台に移動してきた。追い出されたようだ。

「んじゃ、ぶつとばすぜ！」

ヒュールミが躊躇いなくアクセルを踏み込んで速度を上げたのだらう、車が一気に加速した。

かなり距離が離れていたにも関わらず、もう裸眼でも充分に戦場が見える。

味方のハンターらしき数は四十から五十ぐらいか。敵は百を軽く超えているな。

魔物に取り囲まれている最悪な陣形だ。中心部には負傷した仲間がいるので、逃げるに逃げられないという状況なのか。

「あれだけ密集しておると、魔法を撃ち込むのはちと危険じゃのう」

「中まで焼いちまいそうだ！」

シメライお爺さんも灼熱の会長も手が出せないのか。

この速度なら戦場に到着まで残り一分も必要ない。戦闘員を全員降ろして、ヒュールミには避難してもらった方がいいよな。

俺がそう結論を出して指示を飛ばそうとした、その時、

「みんな、どつか掴んどいてくれ。突っ込むぜ！」

ヒュールミが、とんでもないことを言い放った。

止めようかと思ったのだが、冷静に考えるとそれが一番妥当だと思っ直す。

彼女も俺がどうするか見越したうえで判断したのだろうな。

すぐさま 結界 を張り、ピックアップトラックを包み込む。ラック3になって 結界 の範囲が広がったおかげで何とかかなりそうだ。

仲間を取り囲んでいる外周の敵に突っ込む前に、俺は一度クラクションを鳴らす。

驚いて振り返った敵を撥ねつつ、俺たちに気づいた仲間たちが真つ二つに分かれて道を開けた場所に飛び込んだ。

そして、急ブレーキをかけて戦場のど真ん中に停車した。

「負傷している奴は結界の内部に入ってくれ！」

突然の来訪者に敵も味方も固まっていたが、俺たちのことを知っているハンターたちは直ぐ我に返り、指示に従ってくれた。

「怪我人と疲労が溜まっている奴は、あの青い壁の中に入れ！」

「ハツコン、復活しやがったのか！ 仲間だから安心しろ！」

比較的近くにいた紅白双子 正確には三つ子の二人が声を張り上げて、怪我人を運びながら周りに説明してくれている。

怪我人が 結界 内に入り込むと、入れ違いに仲間たちが外へ飛び出していく。

守るべき相手がいなくなったことで、残りのハンターたちも戦いやすくなったのか、さっきまで苦戦していたのというのに形勢が逆転した。

園長先生の癒しの能力で怪我人を次々と治していき、重傷者も傷を塞いでもらえ感謝の言葉を口にしていく。

「た、助かったあ。ありがとうございます！」

「いいのですよ。あとは皆さんに任せて、体を休めてくださいね」

慈愛溢れる対応に怪我人たちが、園長先生を敬い、拝みだしそうな雰囲気になっている。

重症の傷を一瞬で塞いでもらって、あんな優しい言葉を掛けられたら……気持ちには理解できるよ。

俺は 結界 を維持しつつ、怪我人たちにスポーツドリンクを提供しているので動けないのだが、戦況を見る限りでは手助けは必要ないようだ。

仲間たちの相手になるような強敵も存在しないようだし、ラツミスも破壊力を思う存分振るっているようだから安心かな。

怪我人に向いている自動販売機で売っている商品となると、痛み止めや苦痛を和らげる為の……医療用マリファナ自動販売機というものが存在する。

でもなあ、医療用とはいえ、それを提供する気にはなれない。それに異世界の治癒能力は傷を完全に治せるので、痛みも消えているようだから必要ないだろう。

ただ、海外の自動販売機には痛み止めや抗生物質を売っている物もあるんで、いざとなったらそっちを提供する。

改めてじっくり仲間の活躍を観察していると、やはり周囲のハンターたちと比べて格が違う。ケリオイル団長一家が全員揃い踏みなのだが、戦っている敵が可愛そうに思えるぐらい蹂躪されていく。

灼熱の会長に挑む敵は殴られ、燃やされ、殴られ、蹴られ、文字通り踏んだり蹴ったりだ。

闇会長は地面に貼り付いた影の状態から、闇の刃を伸ばして切り

裂くので、敵はどうやって自分が殺されたのかを知らずに死んでいく。

それでもまだ優しいぐらいだよな……シメライお爺さんとユミテお婆さんの、最恐コンビに挑む敵に比べたら。

燃やす、吹き飛ばす、凍らす、爆発と様々な死因が用意されている。お爺さんの半径五メートル以内に近づけた敵は存在しない。

そして、お婆さんに至っては、ニコニコと微笑みながら敵の密集地帯を歩いているだけで、魔物が細切れになり地面に散らばる。仕込み杖を抜いたというのは頭では理解できるのだが、未だにその動きが俺には見えない。

ラツミスは俺を背負ってなければ異様な速度で走り回れるので、敵がその動きを捉えることができず、頭か体のどこかが弾け飛ぶまで、拳動不審に辺りを見回すことしかできないでいる。

「矢、撃たなくてもいいっすよね」

最近定位置になりつつある、俺の頭の上に腰かけて弓を構えているシュイが嘆息して、戦場をぼーっと眺めていた。

気持ちはわかるけど、他に苦戦している人がいるから働こうね。

俺は 結界 からシュイを弾きだして 結界 の上に乗ってもらうことにした。そこからだと狙いやすいよ。

「強引っすね、ハツコンは」

「シュイ……口を動かす暇があるなら、何をしろって教えましたか？」

近くで負傷者を治療していた園長先生に聞こえたようで、笑顔で振り返りながらシュイに注意してくれている。

「は、はい！ 口ではなく、手を動かしますっす！」

すくつと立ち上がると、背筋を伸ばして園長先生に敬礼している。酷く怯えているようだけど、あんなに素敵な笑顔なのにどうしたんだろうな……深く考えるのはよそう。

結局、増援の圧倒的な殲滅力により魔物は掃討され、ここでの戦いは終わったようだ。

フル稼働ハッコン

「ハッコン、飲み物もつと出せるか？」

「いらっしやいませ」

ヒュールミに言われて更に三十個、スポーツドリンクを追加で提供する。

「まだ、食い足りねえらしいから、追加で頼むぜ、ハッコン」

「いらっしやいませ」

ケリオイル団長に温めた料理を人数分、念動力で渡す。

今日の弁当はレトロな自動販売機に手作りの弁当を詰めて売っているところの品なので、素朴でありながらも温かみのある味をした、お勧めの弁当だ。

昔はそういった弁当を販売している自動販売機が結構あったのだが、今は現存しているのを探すのに一苦労する時代。手作りうどんやラーメンのレトロな自動販売機も、かなりレアな存在になってしまった。

マニアとして寂しい限りだ。

大量生産の商品だって好きなのだが、趣のある自動販売機はいつまでも残って欲しいと心から思う。メンテが難しいだろうから無理があるとはわかってはいるのだが。

って、日本のことを思い出して懐かしんでいる場合じゃない。今はここにいるハンターたちの胃袋を満足させるのが最優先だ。

魔物を追っていたハンターたちは数少ない食料を分配していたので、満足いく食事をここ数日でできていなかった。

俺のことを知っているハンターたちが、戦闘終了と同時に目を血走らせて駆け寄ってきたときは、軽い恐怖を覚えて、その場から逃げ出したかったのは秘密だ。

全員が満足する食事を配り終えたようで、俺の周りには親しい仲間たちが残り、他のハンターたちより遅れた食事をとっている。

「かーっ、戦場で準備もせずに温かい飯が食えるなんて、やっぱり最高だな」

「そうですね、団長」

ケリオイル団長とフィルミナ副団長は肩を並べて、手作り弁当に舌鼓を打っている。なんだかんだ言っても、結構仲の良い夫婦だと思う。

「これ美味しいわよ、はい、あーんして」

「恥ずかしいよ、スルリィムお姉ちゃん」

「もう、照れている姿も可愛いわねえ」

歳の差カップルがイチャイチャしている。灰は嫌がっているようにも見えるが、よく見ると照れているだけで結局、食べさせてもらっているな。

そして、それを真横から羨ましそうに睨んでいる、余り者の二人。

「くそっ、何故、神は兄弟にこれ程までに差を付けたのかっ！」

「神よ、神よおおおつ、怨みますっ！」

赤と白の髪を振り乱しながら神批判を始めている。気持ちは若干わからんでもないが、この二人の場合は日頃の行いが問題なだけだ。

「相変わらず仲のいい、一家だよな。羨ましいなあ」

「そう……だな」

ラツミスは目を細めて、ヒュールミは手を休めて、ケリオイル团长一家を眺めている。二人は魔物の襲撃で家族を亡くしたから、特に思うところがあるのだろう。

「ヒュールミはご飯食べないの？」

「この取り付けが終わったら、食っぜ」

彼女が改良しているのはケリオイル团长たちが乗ってきた荷猪車の荷台だ。俺たちが乗ってきたトラックの後ろに繋がるように弄ってくれている。あと、車輪をタイヤと付け替えるそうさ。

もう一台、車を出そうかとも思ったのだが「ポイントもただじゃねえし、また人数が増えたらそうしてくれ」と、ヒュールミに言われたので任せることにした。

ハンターたちへ日持ちする飲食料も渡しておかないといけないので、改良が終わるまでは、ここで暫く待機することになり、話しながら俺は大量の商品を目の前に並べている。

日持ちさせるとなると、缶に入った商品が優秀なんだよな。お弁当となると二日が限度なので、ここで無駄に種類が豊富な缶の製品の定番だ。

パン、おでん、麺類、後は煮物にスープもあるな。珍しい品で蜂

の子とかイナゴの甘露煮もあるが……やめとくか。缶じゃないけど携帯食料も出しておこう。

「っと、雨が降ってきやがったな」

ヒュールミの呟きに反応して頭上に視線を向けると、空には雨雲がかかり、ぼつぼつと水滴が体に当たる。

ここは平野なので雨宿りする場所がない。

幌の付いた荷台にハンターたちが入っていくが、戦闘で荷台が幾つか壊れてしまったようで、何人かは諦めて雨に打たれている。

ここは俺の出番だな。傘の自動販売機にしようかと思ったのだが、ハンターは手が塞がると不便だろうと考え、ポンチヨの自動販売機になることにした。

テーマパークの濡れるアトラクションがあるところに置いてある自動販売機で、その作品のロゴが入っているポンチヨだ。自動販売機も全身迷彩柄で、中心部には大きくアトラクションのロゴが描かれている。

「また、妙な物になったな。これは何が売ってたんだ？」

新しい自動販売機になると必ず好奇心を剥き出しで寄ってくるヒュールミが、俺の全身を舐め回すように観察する。なんか、照れるな。

説明するより見せた方が早いので、ポンチヨを取り出し広げる。

そして、ラツミスの肩にかかるように、そっとポンチヨを被せた。

「あつ、これって雨を弾く服ね！」

すぐに理解した彼女は水を弾くさまが面白いのか、その場でクルクルと回っている。

そのおかげでポンチョがどういったものであるかが、みんなに伝わって雨に濡れていた人全員に渡すことができた。

「このおかげで濡れなくて済むぜ。ありがとよ、ハツコン。うっしや、作業続けるか！」

雨の中、ヒュールミは荷台の改良を続けているので体が冷えない心配だ。後で温かいスープでも出しておこう。

「あの、ハツコンさん。すみませんが、以前使わせてもらいました、あの、簡易のアレを出してもらえないでしょうか」

フィルミナ副団長が俺の傍に小走りで駆け寄ってくると、恥ずかしそうにさっきの言葉を口にした。

アレ……ああ、アレか。女性のハンターが他にもいるみたいだから、需要あるよね。

簡易トイレを取り出し、ラツミスに少しみんなから離れた場所に設置してもらった。一応男性用も出して、これはケリオイル団長に運んでもらうことにする。

食事、トイレ問題はこれで解決したかな。日が落ち始めているから、あとは住というか寝床をどうするか。ハンターは野宿に慣れているので、何処でも平気で眠れるそうだが、雨に濡れながら寝るのは、さすがにきついだらう。

となると、雨宿りができる場所か。俺が知らないだけで実は家を売っている自動販売機とかはないだらうか。ちょっと調べてみよう。

ないな！ まあ、当たり前か。知りうる限りでは車の自動販売機が、世界最大の自動販売機の筈だ。

中古車の自動販売機になって中に彼らを入れてあげるといふ手も

あるが、変身していられる時間は四時間で、あの自動販売機は時間経過でポイントも減っていく仕様なので、あまり長時間は使えない。じゃあ、車を何台か出して乗ってもらうのもありか。車一台のポイント消費って結構減るから、どうしようか。

雨が本降りになってきているし、ケチケチしてられない。ここは……あ、そうだ。家がないなら自分で作ればいいじゃないか。

最近できることが増えすぎて、今ある物を活用しようという考えが薄れている。反省しないと。

俺は毎度おなじみコンクリート板を出すと、念動力で操り地面に突き刺していく。

それで三方に壁を作ると、今度は屋根代わりにコンクリート板を二枚並べる。最後に地面にコンクリート板を敷けば、簡易の家が完成となる。

この大きさと一人用が精一杯だが、身体を最大級の自動販売機にすればコンクリート板も巨大化するので、一つ作るだけで全員が入り込めるはず。

今思えば、これを使って壊れた町の復旧を手伝えたかもしれない焦っていたとはいえ、考えが足りなかった。

「おー、なるほどな。この石の板をそういう風に使うのか。あの巨大な姿になれば、大きな家が作れそうだな」

一目見て俺がやりたいことを完全に把握してくれるヒュールミには、頭が上がらないよ。

「うん」

「らっいす」

「たのもう」

頼むと言いたかったのだが、これだとやけに偉そうだ。

「わかったよー。ええと、大きな自動販売機になるから、人のいない場所に運べばいいんだね」

「いらっしやいませ」

この二人は俺の言いたいことを、阿吽の呼吸でわかってくれる。この体で不便を感じないのは、二人のおかげだよ。

ラツミスに離れた場所へ運んでもらい、中古車自動販売機にフォルムチェンジをすると、驚くハンターたちが呆然と俺を見つめている。武器を構えている人もかなりいるが、仲間と清流の階層にいたハンターたちが、説明してくれているようだ。

コンクリート板を慣れた手つき？ 操作で設置してコンクリートで囲まれた住宅を完成させた。

コンクリート板を重ね合わせただけなので、耐震性や強度の問題はあるが一晩寝泊まりするだけなら大丈夫だろう。

仲間以外のハンターはそこで寝ることとなり、俺たちは荷台の改良が終わったので先行して進むことにした。

朝になったらコンクリート板は消すと伝えてあるので、この家は今晚限りとなる。

昔からコンクリート打ちっぱなしの家が好きだったので、自分で似たような家を建てられたのは嬉しいが、一夜限りの家か。

車に揺られながら離れていくコンクリート板の家が、雨に濡れているのを眺めながら、アンニュイな気分

「ハッコン、お腹空いたっす。何か食べ出させて欲しいっす」

が、吹き飛んだ。シュイのご飯をねだる声で。

異世界の車窓から

ケリオイル団長たちと合流して二日目。今日は珍しく車の中にいる。

外国産のピックアップトラックは日本製に比べて、スペースに余裕があるので後部座席を全て倒すと、俺が寝転んで入り込めるぐらいのスペースが確保できた。

横倒しで乗っているのだが、視界は自由に変更できるので問題はない。

今日の運転手はヒュールミで助手席にはラツミスが入る。ピティーは俺の体の上と天井の隙間に潜り込もうとしていたのを、つまみ出されて今は荷台だ。

「ええと、大食い団のみんなは近隣の町村を回って、危ないから逃げてねって連絡しているんだよね？」

「そうだけ。足の速さと鼻の良さには定評があるからな。敵を避けて任務を全うしてくれているだろうよ……食料だけが心配だがな。なんとか自給自足でやってくれていると信じるしかねえな」

およそ、シユイが四人分だから飢えてないといいけど。

ちらつと荷台に視線を向けると、大きいサイズのコーラを飲みながら、からあでを口一杯に頬張っているシユイがいた。

幸せそうな顔して食べているなあ。大食い団と合流したら満足するまで食べさせてあげよう。

「えっと、このまま進むと殺戮の森だったっけ？」

「殺意の森だ。敵は真つ直ぐ進んでいるようだから、そろそろ殺意の森に差し掛かっているんじゃないか」

殺意の森は鬱蒼と木々や雑草が生い茂り、殺意漲る生き物が繁殖しているらしい。かなりの危険スポットで高レベルのハンター以外で挑む者はいないそうだ。

そうになると、冥府の王の軍隊も足止めをくらうか迂回するのかわかと思ったのだが、合体階層主がいれば森の木々を倒しながら突っ切ることも可能だろう。

あれが後方ではなく先頭に移ったというのは、ケリオイル団長たちからの情報提供により明らかになっている。

未だに、合体階層主の倒し方が思い浮かばないが、防衛都市の戦力とこちらの戦力でどうにか対応するしか手段がない。

先に防衛都市に連絡を入れてくれている熊会長たちが、大掛かりな罠でも仕掛けてくれていると助かるけど。

「こちらは殺意の森にまだつかないの？」

「この速さだと、そろそろ本体に追いつきそうなんだけどな」

魔物軍の進行速度はかなり速いようで、行軍に付いていけなくなり遅れている敵は各個撃破している。何度か最後尾に襲い掛かって敵の数を削ってはいるのだが、焼け石に水かもしれない。

敵の数は万に近く、おまけに合体階層主と冥府の王がいる。

冥府の王は仲間たちと何とかするとして、残りの魔物の群れは防衛都市の兵士たちに対処してもらう。ここまででも結構無理があると思うのだが、ここで最大の問題である合体階層主を誰が相手にするかということだ。

人員が足りないよな……弱点でもあるといいのだが、調べようがない。

「あの、合体階層主は倒すことより、足止めをすることだけ考えた方がよさそうだぜ」

俺と同じことを考えていたヒュールミがぼそつと口にした。

そうだよな、別に倒さなくてもどうにか足止めをして、他の敵を全て倒してから全勢力を注ぎ込めば、なんとかなるかもしれない。それに、防衛都市には老夫婦並みの猛者が揃っている可能性だつてある。ずっと魔王軍の進行を防いできた都市だ。兵士の洗練具合は他の町とはレベルが違う筈だ。

希望的観測に過ぎないけど、マイナス思考よりかはマシだろう。

「つと、森が見えてきた……って、おいおい。森が焼けちゃまっているぞ！」

ヒュールミの叫びで我に返った俺は、双眼鏡にフォルムチェンジすると前方を覗き込んだ。

地面には巨大な足跡が点在していて、その先に真黒に焼け焦げた木々が乱立している。殆どは地面に倒れているが、全身を焦がしながらもまだ倒れない木々も相当数残っていた。

森林火災でもあったのか？ いや、もしかして防衛側が仕掛けたのかもしれない。森一つを犠牲にして敵を火にくべれば、相当数の魔物を倒せる可能性が高い。

地球だと自然破壊で問題になりそうな手段だが、今は非常時だから許されると思うことにしよう。

「これは魔物がやったのか、味方がやったかで今後の展開が変わるぜ」

ヒュールミの考察を聞いてハツとした。

魔物が殺意の森が邪魔で、燃やし尽くしてから進んだ可能性もあるのか。そうになると、敵の数は減らずに済んでいる。

「もし、森に敵が入り込んでから火を放ったのなら、敵の損害は相当数に達していると思うが、どうなんだろうな」

「でも、この森を燃やすって、かなりの火力がないと無理じゃないかな？　んー、よくわかんないけど」

ラツミスが小首を傾げて唸っている。

「そもそも、生木は燃えにくいからな。今は乾燥している季節でもねえから、油を撒くか相当な火力で焼くか……となると、合体階層主が火でも吐けるのか？」

「脚が一本骨で燃えてたよ？」

ラツミスの言う通り、脚が一本炎に包まれていた。あれは迷路階層の炎巨骨魔だよな。あの火力なら触れただけで燃やせそうな気がする。

「敵が燃やしたならその可能性が高い。だが、味方が燃やしたとしたら、どんな可能性があるのか」

「えーと、うちらより先に行ったのは、熊会長とヘブイと門番の二人でしょ、それにミシユエルだよ……あつ、あの竜の大剣！」

わかったと胸も前で大きく手を打ち鳴らした音が大きく、荷台の仲間たちもこっちに視線を向けている。

「そつだ。ミシユエルの高価そつな大剣なら、ここら辺の木々も燃やせるだろうよ」

そう言われると、ミシユエルの可能性が高い気がする。

一人でここに残って足止めを担当したのだろうか。命を捨てるよつな弟子に育てた覚えはないので、無茶なことはしてないと信じているが……いや、育てた覚えがないな。

ハツコン師匠と慕ってくれているが、稽古をつけたことは一度もない。師匠らしいことをした記憶もございません。

一度ぐらいは師匠らしい立派な姿を見せたいところだ。自動販売機の背中 裏面で語れるよつな男にならなければ。

「どうすつかな。焼けた森を突つ切るか、迂回するか」

「みんなで相談した方がいいよ」

「うん うん」

「だな。森の入り口で止めて、昼食がてらどうするか決めようぜ」

くすぶっている火もなさそうだし、煙も出ていないように見える。もし、まだ火が残っていたとしてもスルリィムやフィルミナ副団長の魔法もあるし、シメライお爺さんだつている。強行策を選んでもどうとでもなるだろう。

全焼した森の前で車を停めて、昼食をとりながら今後の方針を決めることになった。

結構な大所帯なので全員が意見を交わすと話がまとまらないので、シメライお爺さん、ヒュールミ、ケリオイル団長、そして俺が代表として意見を交わすことになる。

「オレはこのまま、焼けた森を突っ走る方がいいと思うが、どうよ？」

ヒュールミがそう切り出すと、全員が大きく一度頷いた。俺は物理的に無理だが、心の中で頷いておく。

「それでええと思うがお。結構な数の魔物が通ったおかげで、地面も踏み固められておる。これなら、風の魔法で焼け焦げた木々を払えば、何とか通れるじゃろうて」

「俺も反論はねえな。森の中を突っ切らねえと、結構な遠回りになる。それに、中を進まねえと魔物たちがどうなったかわかんねえぞ。死体も確認しておきたい」

シメライお爺さんもケリオイル団長も賛成なら森を突っ切るルートで決定だな。

もし、これを弟子がやったのなら、森の中にミシユエルが潜んでいる可能性だってある。無事なら拾っていつてやりたい。

「じゃあ、決定だな。飯食ったら、森を進むぜ。よろしく頼むぞ、ハツコン」

「いらっしやいませ」

バンと強めに体を叩くヒュールミに、元気よく言葉を返す。

方針が決まれば後は突っ込むのみ。まだ余裕はあるけど、ガソリンを給油しておこうかと、フォルムチェンジをしようとした、その時。

「ハツコン師匠！ ご無事でしたかっ！」

森の中から姿を現す、黒い影。

歯磨き粉のスパンサーが付きそうなくらい、眩しく白い歯を見せながら走ってくるのは、ミシユエル！

黒い鎧が焼け焦げた木々と同化していたので、気が付かなかったが近くに潜んでいたのか。無事で何よりだよ。

「私は、私は信じていましたっ！」

駆け寄ってくる俺の前で片膝を突いて、今にも泣きそうな瞳で俺を見上げている。

本気で心配をかけてしまったようだ。自動販売機なのに良い弟子に恵まれたな。

「でしょがん」

「あつたね」

ちょっと無理があつたが、称賛の言葉を弟子に投げかけた。

すると、ミシユエルは大きく目を見開くと目を拭い、男でも見惚れてしまいそうになるぐらいの笑顔を見せて「はいっ！」と嬉しそうに返事をした。

「やっぱり、これはミシユエルがやったのか？」

「はい、そうです。ヒュールミさん。仲間と力を合わせて、罨を作り何とか時間稼ぎをしようと思ったのですが、巨大な犬岩山に踏み潰されてしまいました。そこで、森に火を放つしか手が無くなり」

あれ、今、仲間って言わなかったか？

ということは、ミシユエル以外にも誰かここに残ったのか。熊会

長は領主に直接話を付ける仕事があるから、ヘブイか門番ズがいるのかもしれないな。

食事の手を休めてみんながミシユエルの周りに集まってきている……一人だけ弁当を手にしたまま、やってきたが誰か言う必要はないな、うん。

「ミシユエル、おかえり。他にも誰が残っているの？」

「いえ、そうではありません、ラツミスさん。この場で姉上とそのお友達が力を貸してくださいまして。ハヤチ姉さん、ウサッターさん、ウツサリーナさん、出て来ても大丈夫です」

ミシユエルの呼ぶ声に応じて、焼け焦げた木々の陰から一人と二人が現れた。

ウサギだよな。ウサギにしては耳が尖り過ぎているし、身体も大きいけど。女性の方は女騎士を絵にしたらああなるだろうという、理想的な姿をしている。

目つきも鋭く生真面目で優秀そうな雰囲気だ。状況は全く掴めないが、弟子のミシユエルに力を貸してくれたのなら、安心していいだろう。

合流二組目

「ミシユエルの母違いの姉となる、ハヤチと申します！ 弟がお世話になったようで、感謝しております！」

ミシユエルが全員にハヤチ姉さんと呼ぶ女性を説明すると、敬礼した後に堂々と名乗りをしてくれた。

堅苦しい話し方だけど、隣で苦笑いを浮かべているミシユエルとは姉弟で仲が良いようだ。

まあ、それよりも……足下にちよこんと座っている、ウサギっぽい動物が気になる。

ウサギにしては体が二回りぐらい大きく、耳が鋭利な刃物のように鋭く尖っていて異世界の動物なのだなど、まじまじと見つめてしまった。

女性陣も女騎士っぽい人よりウサギもどきに興味津々で、ラツミスは手を伸ばして「おいでー」と手招きしている。

「こちらのエシグはウサッター殿とウツサリーナ殿です。子供が二匹いるのですが、防衛都市に先に向かってもらっています」

「ちなみに五指將軍の人差將軍と遭遇した際に助けただきました。私より格上の剣……耳捌きです」

ミシユエルの説明に無い耳を疑ったが、弟子はくだらない冗談を言うタイプじゃないのは重々承知している。つまり、真実だということか。

「確かに、お強いみたいですなえ」

ユミテお婆さんが微笑みながら感心している。もう、疑う余地がないな。

異世界だから凄腕のウサギがいてもおかしくないのだろう……いや、どう考えても変だ。

「マジでエシグなのにそんなに強いのかよ。婆さんとミシユエルが言うのだから間違いはねえんだろうけど。最近の動物はスゲエな、ボタンと黒八咫もそうだったが」

腕を組んで唸っているヒュールミに女騎士ハヤチが歩み寄る。

急に距離を詰められて上半身を引いているヒュールミの手を、なんの躊躇いもなくガシツと掴む。

「おー、ボタン殿と黒八咫殿もご存知か！」

目を輝かせて必要以上に大きな声で喜んでいるらしいハヤチの勢いに、強気なヒュールミも若干おされ気味だ。

彼女の説明によると、このエシグたちもボタンたちと同じく、俺と同郷で異世界に転生した畑さんの仲間らしい。

畑さんは高性能な動物の育成に定評があるのだろうか。無機物に転生した日本人同士として親しみを感じていたが、彼が異世界でどんな人生……畑生を歩んできたのか本気で知りたくなってきた。

積もる話は移動中にしてもらうことになり、俺は 中古車自動販売機 になると、もう一台、車を取り出す。

ここまで大所帯になると一台では限界だ。

「おおおっ、これは、これは」

ハヤチさんが驚いてはいるが、初見にしてはリアクションが小さ

いような。まあ、畑に転生した人と交流があれば、こういったことに対しての耐性も付くか。

ミシユエルの説明によると、冥府の王の行動は独断専行らしく、魔王軍と防衛都市は休戦中らしい。現在、正式な手続き中らしく、それも数日の内に終わるとのことだ。

「ってことは、冥府の王のやっていることは魔王の意思じゃねえってことか」

「ええ、そうなります。魔王が治める領地は農作物が育ちにくい辺境の土地でして、ここ数年、その環境は酷くなる一方だったそうです。国民の腹を満たす為に隣国への侵攻を開始したようです」

トラックの荷台に正座しているハヤチが、隣にちよこんと座っているエシグたちの背を撫でながら質問に答えている。

今、運転しているのは闇の会長で、隣に灼熱の会長を配置した。やかましいコンビは運転を担当しているとまだマシなので。

荷台には女騎士ハヤチとエシグ夫婦。俺とラツミス、ヒュールミ、シユイ、シメライお爺さん、ユミテお婆さん、園長先生、ミシユエルがいる。

あっ、ピティーが背後にいた。存在感が薄すぎて、全く気が付かなかったぞ。

ケリオイル団長一家はもう一台のトラックだ。後ろに付けているのだが、運転手は赤が担当か。隣には白がいる……無駄に暴走しそうな雰囲気漂っている。

「つまり、冥府の王の暴走か休戦中という情報が伝わっていないのか……」

「おそらく、それはありません。冥府の王は魔王軍で諜報活動を担

当っていましたから。魔王軍の現状を知らなかったでは済まされな
いかと」

帝国で將軍をしていただけあって、魔王軍の内部情報もある程度
は手に入れているそうだ。

「わかってやっているとなると、話が変わってこねえか？　もしか
して、魔王軍も敵に回す気なんじゃ……」

ヒュールミとハヤチの話に全員が聞き入っている。というより、
口を挟めないでいるといった方がいいのかもしれない。

「我々は左足將軍と懇意にさせてもらっているのだが、話によると
冥府の王は元々、魔王領を支配していた存在らしい。それが現魔王
に負け配下になったらしい」

「そうになると、下剋上というよりは元の地位を取り戻したいってこ
とが。魔王を裏切る理由としては充分すぎるぜ」

展開に驚きはしたがこれは悪くない状況だ。冥府の王の軍だけを
対処すればよくなった。もっとも、魔王軍が妙な色気を出して攻撃
に転じなければだが。

「魔王は信用できるのか？　休戦すると見せかけて、挟撃するって
ことも考えられるだろ」

ヒュールミも同じことを危惧していたのか、俺の訊きたいことを
言ってくれた。

「守護者様と左足將軍の話によりますと、信頼に足る人物だそうで

す。畑様とやけに話が合ったそうで、今では親友ポジション？と仰っていました」

ちなみに守護者様というのは、この世界に同じように転生した日本人の畑さんのことだ。

畑の人は動物とも心を通わせることができる人らしいから、コミュニケーション能力が高いのかもしれない。同じ無機物転生をした間柄だが、内面は全く違う。

その話を信用するなら、魔王軍の助力も願えるかもしれない。だとしたら、最大の問題だった合体階層主にも対処できるか？

「それが本当なら、勝ち目が見えてきたな。あとは、オレたちがどうするかだ。魔王軍……いや、もう冥府の王軍と呼ぶべきか。奴ら避けて防衛都市に先回りして、共に防衛戦に参加するか……それとも、後ろから挟み撃ちにするか」

戦略だと挟み撃ちが常套手段だが、それはある程度の戦力があればの話だ。こちらの人数は二十人にも満たない。

たったこれだけの人数で挟み撃ちにして倒しましょう、なんて提案したら鼻で笑われてしまう。

だが、ここは異世界でこちらの戦力は一騎当千の猛者ばかり。悪い賭けではない気もする。

「おそらくなのですが、防衛都市側は町に籠らず、打って出ると思います」

「防衛都市は食料が潤沢なのじゃろ。ならば、籠城戦をするべきではないか？」

今まで沈黙を守っていたシメライお爺さんが口を挟んできた。

「ええ、食料は充分にあります。おそらく半年でも耐えられるぐら
いの蓄えが。ですが、町の前には農場が広がっていて、それを荒ら
されることを守護者様が許さないと思われれます」

まあ、畑だもんな。農作物を大切にする気持ちは理解できる。で
も、堅牢な砦を捨てて戦うのは無謀に思えるのだが。

「農場を戦場にするのは無念かもしれぬが、今は人命を最優先にす
るべきじゃろつて」

「仰る通りです。もちろん、守護者様も人の命を何よりも大切にさ
れていますよ。ご安心ください。魔王軍との戦いには長けておりま
すので」

畑さんを信じ切っているな。そこまで信頼を寄せられるのは羨ま
しいよ。

実際の話、防衛都市の人々は何年も魔王軍の進撃を防いできた実
績がある。任しても大丈夫な気がしてきた。

「そこまで言うのであれば、お手並み拝見といこうかのう」

「防衛都市の兵士は練度が違うのでしょうか。お爺さん、のんびりで
きるかもしれませんよ」

シメライお爺さんとユミテお婆さんは、それ以上追及することな
く、肩を並べて雑談を始めている。

「私たちは矢を射るだけです、方針はお任せしますよ」

「そつつすね。難しいことはわかんないっす」

弓の子弟コンビは口を出す気が端からないようだ。

ラツミスはニコニコ笑っていて、事の成り行きを見守っている。

「ハツコン師匠はどうお考えなのでしょうっか！」

うっ、ミシユエルに話を振られてしまった。

防衛都市の防壁は堅牢だという話なので、籠城戦がいいと思う。

籠城戦をする際は食料の確保。それに加え援軍がくることが前提条件だ。食料は問題なし、援軍は帝国からくる可能性があるのだから、この世界の情報に疎いので判断がつかない。

上手くやれば魔王軍からの助力も得られるかも……うーん。

だけど、あの合体階層主に襲われたら、どんな防壁でも崩される可能性が高い。どっちが正しいかなんて、判断付かないが。

「まもりが」

「いいかい」

「どっちかわかんないよ、ハツコン」

くっ、ハツコン語検定一級のラツミスにも理解してもらえなかった。まあ、わざと曖昧に答えたのだけど。

だけど、結局どうするかは防衛都市側による。

「挟み撃ちにするにせよ、防衛側と息を合わせたいところだが、連絡の取りようがねえな」

「あ、そうだよな、ヒュールミ。ここで決めても防衛都市の人に相談しないと意味がないよ」

連絡か……自動サービス機に公衆電話があるので、公衆電話になることは可能だが、電話線が無いので意味がない。無線で繋がったとしても、もう一つ公衆電話がなければ意味がないので、俺が分裂でもしない限り使いようがない。

どうにかして防衛都市と連絡を取る手段があればいいのだが。

そんなことを考えながら空を眺めていると、空に浮かぶ一つの点が目に入った。

それは徐々に大きくなり、その姿を明らかにする。

あれは……鳥だ。黒く大きい漆黒の羽に三本の脚。そして三つ目。

あつ、黒八咫か！

交差

あの立派な体躯に艶のある漆黒の体。一見、巨大なカラスなのだが三本の脚と知性を感じさせる三つの目が、只者ではないことをこれでもかとアピールしてくる。

こちらに向かってきているのがわかったので、車を止めて黒八咫が舞い降りてくるのを待つ。

トラックの上に降り立つと「クルワツカアア」と、まるで挨拶しているかのように一鳴きした。

いや、実際に挨拶してくれているのだらう。それぐらい頭がいいのは知っている。

「黒八咫殿！ どうしたのだ、こんなところまで」

ハヤチが駆け寄り、ウサッターとウツサリーナは天井に飛び乗り、黒八咫の周りを駆け回り、再会を喜んでいるようだ。

「お、黒八咫じゃねえか。よく、この場所がわかったな。キコユは元気にしているか？」

「クワアアアッ」

ヒュールミが話しかけると、頭を縦に振って肯定の意味を示す。

「これが噂の黒八咫か。立派だな……」

「相手はキリセだとわかっているのに、男として負けている感じがするのは何故だっ」

「頭良さそうだよな、赤」

下車して駆け寄ってきたケリオイル団長一家が黒八咫を見ると感心して、一部は勝手に落ち込んでいる。

そういえば、ケリオイル団長たちと入れ替わりでやってきたのだつたな、キコユたちは。

「久しぶりだねっ、あれ？ 首に何かぶら下げているよ？」

黒八咫が首から下げている小さな鞆が気になったラツミスが、じっと見つめている。

確かに小さな革製の鞆が黒八咫の胸元にあるな。

三本の脚の一本を器用に使い鞆を開けると、中から一枚の紙を取り出した。その紙を掴んだまま全員の顔を見回すと、ハヤチに突き出す。

「これを読めばよいのか。ふむ、おっ、守護者様からの手紙ではないか」

えっ、畑からの手紙なのか。あ、文字が書けるってキコユが言っていたから別に変じゃないのか……いや、待て。畑が文字を書くのは変だろ……。

「では、読むぞ。皆さん初めまして、畑と言います。会長さんから話を聞いて状況は理解しています。こちらとしては籠城戦ではなく、打って出るつもりです。魔王にも話は通していますので、いずれ援軍が来るかもしれませんが、それには期待せずに我々だけで倒しましょう」

倒しましょって、文章は丁寧だけど好戦的な人……畑だな。ハヤチが言っていた通り、籠らずに打って出るつもりだよ。うだ。

「冥府の王は魔王の命令で動いている訳ではありませんので、説得にも応じないでしょう」

こちらの考察は間違ってたということか。

「詳しい陣形と作戦はもう一枚の紙に書いていますので、後で目を通しておいてください。反論や提案は受け付けていますので、紙に記載して黒八咫に渡してください。無茶な要望でも構いませんので」

一方的に押し付けるのではなく、こちらと共同戦線を張るといふ意思が見える。

「あと……これを最後にハッコンさんに見せて欲しいって書いてある。どうぞ、ハッコン殿」

ずっと目の前に差し出された紙を覗き込むと、異世界の言葉で書かれた文章の末尾だけ商品で見慣れた 日本語で書かれている。

『自動販売機なんて、面白い転生しているな。まあ、畑の俺が言えた義理じゃないけど。これが終わったら、ゆっくり日本の話でもしよう。口があれば美味しい野菜食べて欲しかったんだけどな。会うの楽しみにしているぜ！』

この人……畑とは仲良くやれる気がする。俺も楽しみにしているよ。

日本の話ができる。それを想像しただけで、心が弾んでいる自分がいた。異世界に順応したつもりだったけど、やっぱりまだ日本へ

の未練があるのかもしれない。

会った時には懐かしい日本の商品を幾つかプレゼントしよう。作戦の書いてある紙を取り出した黒八咫にヒュールミが礼を言うのと、作戦会議が始まった。二時間ほどの話し合いの結果を手紙に記載して、黒八咫に託す。

「黒八咫殿なら、この距離であれば半日もあれば充分だ」

ハヤブサやワシは二百キロ近くの速度で飛ぶと聞いたことがあるが、黒八咫はそんな鳥たちを遙かに凌駕している。

障害物のない空を滑空する速度は俺たちとは比べ物にならない。伝令役として優秀過ぎる人材……鳥材だ？

遠ざかっていく黒八咫の後姿が見えなくなると、俺たちも運転を再開する。

「畑さんっていい人みたいだね！」

「ハツコンと同郷なんだろ。昔話が弾むぜ、きつと」

ラツミスとヒュールミもそうだが、仲間たち全員が悪い印象を抱いていないようだ。作戦内容も、こういう風に考えていますけど、どうですか？ と、押し付けるのではなく、こちらに伺いを立てていた。

俺に当てた文章は軽いノリだったが、気を遣える人なのだろう。防衛都市側の協力を取りつけた今は、悲観的な気持ちは殆どなくなっていた。自信ありげな畑側の作戦を目にして、勝利への道筋が見えた気がする。

「オレたちがやることは、まず冥府の王軍の背後に追いつくことか」

「そうですね。森を燃やしたことでかなりの魔物を巻きこめたのですが、能力の高い魔物たちは殆ど残っています。あと炎に強い魔物です」

つまり、雑魚は相当数倒せたが強力な魔物は残っているということだ。

「敵の正確な戦力がわかればいいんだが……ダンジョンから飛び出した数は、丘の上からざっと観察したただけだが、五千は下らない」

「ケリオイル団長やみんなが後方から削ったらしいけど、百いくかどうか程度らしいよ？」

ヒュールミが腕を組んで唸り、隣でラツミスが団長たちから教えてもらった情報を口にした。

「我々が倒した正確な数はわからぬが、ミシユエルが引き起こした火災で千以上はやれたのではないだろうか……もちろん、ウサツタ殿一家の活躍もあったのだが」

ハヤチの隣でエシグ二匹が跳ねるのを見て、説明を追加したようだ。

「ふむ、敵の数は低く見積もると碌なことにならない。多く見積もって五千前後と考えた方が良さそうじゃのう」

シメライお爺さんの重々しい口調に、仲間の表情が引き締まる。防衛都市側からは悲愴な感じが微塵もしないが、冷静に考えたら無茶な戦いだよな。

「じゃが、こちらにも好材料はある。五指將軍がもうおらんからのう」

ミシユエルとケリオイル団長たちが倒してくれたおかげで、残る五指將軍は元藥將軍のスルリムだけだ。敵側には一人も存在しない。

「スルリムさんのお話だと、他に優秀な人材もいなかったそうです。その点は楽ですね。そうですね、お爺さん」

「そうじゃのう」

歴戦のハンターである老夫婦が言うと、何とかかなりそうな気がしてくる……って、さつきから人の意見に左右され過ぎだな。

俺は自動販売機として、やれることをやればいいだけだ。

冷静に戦力を算出すると防衛都市には千程度の兵士がいるらしい。魔王軍を退けていた都市にしては人員が少ないのではないかと訝しんだが、これでも以前と比べたらかなり増員されたと、ハヤチが言っていた。

守護者様 焔のチームが参戦していなかったら、勝ち目は殆どなかったそうだ。

ちなみに焔メンバーは、焔、キコユ、黒八咫、ボタン、ウサツタ一家。あと、一時期は左足將軍と配下と協力関係だった。

全員、人間ではないという一風変わったメンバーを集めている。動物たちとキコユの能力は把握しているので、それだけでもかなりの戦力だと理解できる。

だけど、敵の左足將軍と協力関係だというのが意外だな。色々、深い事情があるそうなので会った時に詳しく聞かせてもらおう。

そういや、ダンジョンマスターがこの世界には、異世界人が頻繁

に送り込まれている、という話をしていた。

俺は自動販売機なので有名になってこの外見が広まって、元日本人の耳に入れば同郷の人たちを集めることが可能かもしれない。

異世界に来て幸運にも人に恵まれ、波乱万丈ではあるが幸せに暮らしている俺だが、異世界で貧困にあえいでいる人や、逆境で苦しんでいる人がいてもおかしくない。

そういう人たちを集めて日本人街を作るのも楽しそうだな。商品は俺が提供してそれを売ってもらうだけでも商売として成り立つはずだ。それに、飢えさせない自信だけはある。

全てが落ち着いたら、新たなダンジョン攻略も含めて色々やってみよう。

「なんか、ハッコン嬉しそうだね」

嬉しそう？ ラツミスの意外な言葉に俺の頭には疑問符が浮かんだ。

今後のことを考えてはいたけど、嬉しそうに見えたのか。確かに、明るい未来予想図を描いていたけど、よくわかったな。

「そつつすか？ 違いが全くわかんないっすよ」

シユイは俺が出したポテトチップスを食べている手を休め、脂ぎった指で俺を触ろうとしたので 結界 で弾いておいた。

「酷いっすー！」

「シユイもまだまだ甘いな。灯りの点滅具合で楽しそうなのが、丸わかりじゃねえか」

あれ、ヒュールミにもバレている。自動販売機なのにポーカーフ

エイスができないのか俺は。

「ピティー……も、わかった……と思う……たぶん……」

うわっ、ビックリした！ ピティーはたまに存在感が完全に消える時があるから、不意に声を出されると本気で驚く時がある。

ピティーはそう言いながらも、俯いて自信なさげに呟いているので、本当はわかってなさそうだ。無理して張り合わないでいいのに、うーん、ラツミスとヒュールミが特別なだけで、他の人にはわからないってことか。

「一番付き合いが長くて、一緒に居る時間が長いもんねー」

「二番目はオレだな」

「長さは……関係ない……」

俺が女性なら「私の為に争わないでっ！」と言う場面なのだろうか。

今は自動販売機でみんなに頼られる存在だが、ダンジョンで願いを叶えて人間に戻っていたら、彼女たちは同じように接していられていた……って、また堂々巡りを繰り返すようになった。

少しでも心に余裕ができると、余計なことを考えてしまう。

今は冥府の王の討伐だけを考えればいい。これは政治家みたいな問題を後回しにして誤魔化している訳じゃないぞ……うん。

意気込み

焼け落ちた森を半日かからずに通り返けると、防衛都市に向かつて突き進む。

殺意の森から防衛都市までは徒歩だと一ヶ月近くかかるそうだが、車の速度なら数日で辿り着くのではないかと、ヒュールミが地図を睨みながら計算を口にした。

車のナビが使えたら距離と時間を割り出すことが可能なのだが、異世界の空に人工衛星が上がっているわけがないので、どうしようもない。

そして、特に問題もなく数日が経過した早朝。

「あれは、魔王軍じゃねえか？」

荷台で双眼鏡にフォルムチェンジをした俺を覗き込んだヒュールミが、声を張り上げる。

遠くに砂埃が見えるな、それにあれは魔物の背か。更にその先に巨大な四足歩行の化け物　合体階層主。

追いつくまでに思ったより時間がかかってしまった。

その理由は森林火災に多くの魔物を巻きこみ戦力を減らしたのはいいのだが、弱い魔物が壊滅したことにより行軍速度がかなり上がったってしまったからだ。

更に俺たちの足止め目的で、魔物が待ち構えているというパターンが繰り返された。

もう少し早く魔王軍に追いつく予定だったのだが、作戦の場所には達していないので結果オーライだ。

「指定されている場所までは、まだ距離があるから余計な手出しはしないでおこうぜ」

ヒュールミの言葉に全員が頷いている。

速度を落として、距離を保って尾行を続けること更に三日。指定場所まで残りわずかとなった。

防衛都市の面々とは黒八咫の郵便屋さんを使って、三度ほど意見を交わしている。お互いが納得する作戦が練られたので、後は実行に移すのみ。

空は晴天で時刻は昼に差し掛かったぐらいか。

「みんな、作戦を確認しておくぞ」

車を止めて全員が車座になり、一人だけ立っているヒュールミが作戦書を手にも、声を張り上げている。

「俺たちは後ろから攻撃を仕掛けるわけだが、戦闘開始の合図は合
体階層主の足止めに防衛都市側が成功してからだ。その方法は向こ
うに一任しているが、かなり自信があるとのこと……間違いない
よな、ハヤチ」

「うむ、間違いない。守護者様なら必ずアレを止めてくださる！」

自信満々に言い放つハヤチは成功することを微塵も疑っていない。
そこまで信頼を寄せられているのだ、俺たちも信じるしかないよな。
結局最後まで、その方法を話してくれなかった。ハヤチに訊ねる
と意味深な笑みを浮かべ「それは、見てのお楽しみですよ」と答え
るのみだ。

非常に気になるが予想はつく。強力な加護持ちか大掛かりな罠を
仕込んでいるのだろう。楽しみにさせてもらうよ。

防衛都市の兵市は足止めに成功して、動けなくなったところで一斉に攻撃を加えるそうだ。

「とまあ、そんな感じだ。後方の魔物を倒しながら、冥府の王へ攻撃も加える。んでもって、こっちに冥府の王がやってきたら……本番だな」

俺たちの役割は冥府の王を葬ることだ。こればかりは相手がどう動いてくれるかによるので、臨機応変に対応するしかない。冥府の王の注目を引きつけるぐらいの気持ちで派手に暴れよう。

「これが冥府の王との最終決戦になる筈だ、みんな何かあるか」

そう言つて、ヒュールミが目を向けたのはケリオイル団長だった。全員の視線を浴びて頭を掻きながら、その場にすくつと立ち上がると、一度咳払いをする。

「命懸けの決戦の前には各自が一言、決意を口にするつてのがお決まりだぜ。つてことで、俺から言わせてもらつとするか。一度敵の軍門に下り、殺されたつて文句の言えない俺たちを、温かく迎え入れてくれたことを心から感謝する。この一戦でもしも力尽きたとしても、悔いは全くない！」

拳を握り締め断言するケリオイル団長の手を、フィルミナ副団長がそつと握りしめる。

「私も同じ気持ちですよ。息子の呪いが解けた今、もう心残りはありません」

見つめ合う二人の両脇に座っていた子供たちも立ち上がっていた

のだが、その様子を見て大きくため息を吐く。

「オヤジも母さんも盛り上がるのはいいけどよ、死ぬ気なんてさらさらないからな、俺たちは。なあ、赤」

「当たり前だぜ。人生まだまだ、これからだつてえの。恋人つくつてイチャイチャするまで、絶対に死んでやんねえ！ うおおお！」

「うおおおお！」

紅白が拳を振りあげて、雄たけびを上げている。表情は真剣で必死さが伝わってくるなあ。

「情けないことで気合入れないでよ。兄として恥ずかしい」

「灰には私がいるから、安心してね」

灰を後ろから抱きしめているスルリムに笑みを返している。

両親と兄たちのリア充ぶりに、紅白が唇を噛みしめて地団駄を踏む……少し可哀想になってきた。

「次は俺だな……命の炎を燃やし尽くせ！」

「いやいや、燃やし尽くしたら死ぬ死ぬ。団長もそうやけど、生きて帰ろうや……何で死ぬ前提やねん」

灼熱の会長か体を燃え上らせて叫ぶと、周りから一気に人が逃げていく。その中で闇の会長だけが平然と横に立ち、炎と化した灼熱の会長に突っ込みをいれている。熱くないのだろうか。

「ワシらは、まあいつも通りやらしてもらおうとするかのう。なあ、婆さん」

「そうですね、お爺さん。孫の成長を見守らないといけませんので、まだまだ死ねませんしねえ」

老夫婦は相変わらず気負いもなく、今から散歩にでも行くような自然体だ。この二人は死地にでも笑って出かけそうだな。

「私はハツコン師匠がいるところなら、例え地獄でも共に参ります！」

目を輝かさせている弟子の想いが重いです。最近、信頼を超えて崇拜の域にまで達している気がするが、気のせいだと信じたい。

「守護者殿と共に守り抜くことを誓う。あのお方がいれば勝利は確定だ。なあ、ウサッター殿、ウツサリーナ殿」

堂々と勝利宣言をするハヤチの周りで、ウサギ二匹が飛び跳ねている。

「怪我したらすぐに言ってください、癒しますので」

「園長先生がいてくれたら、死なない限り治してくれるから安心です！ あと、ガンガン射るから、矢に当たらないで欲しいです！」

園長先生とシュイの弓の腕は信頼しているので、余程の事が無い限り誤射はあり得ない。安心して任せられるよ。

射手が二人に魔法使い系が……フィルミナ副団長、スルリウム、シメライお爺さんの三名。充分だな。

「ピテイーも……頑張るね……」

静かに闘志を燃やしているのか、伸びた前髪で見えない眼から熱い視線を感じるような錯覚が。別の意味合いが込められているような気もするけど、自動販売機なのでわからないっす。

「オレは園長とシユイを乗っけてクリユマで走り回るからよ。負傷したら乗っけてやるぜ」

今までは戦場では出番がなく、いつも隠れていたヒュールミだが、運転手として役に立てることが嬉しいらしく、手を打ち合わせて「満悦の表情だ。」

俺としては戦場に出て欲しくないのだけど、それを口にするのはやる気を漲らせている彼女に対して失礼な話か。

海外産の車は頑丈だし、荷台には二人もいる。車の速度に追いつける敵がいるとも思えない。ガソリンの量だけチェックしておこう。

「うちは あれっ、向こうから何か向かってきてない？」

最後にラツミスが言おうとしたタイミングで、遠方を指差す。

全員が目を向けるとそこには……猛進してくる巨大な白い猪

あれは、ボタンか！ って、その上にまたがっているコートの熊は会長だな。あ、よく見ると背中にへブイが貼りついている。

風圧で顔が酷いことになっているけど、あれって車より速いんじゃないか。四足歩行だからオフロードにも最適だし。

あっという間に俺たちの傍までやってきたボタンは、急ブレーキをかけて地面をズサーッと滑り停止した。

「おおおおっ、ぶっつ。生きた心地がしなかったぞ」

「久しぶりに、神へ本気の祈りを捧げました」

風圧で毛並と髪が乱れた二人が、ポタンの背中から降りると大きく息を吐いている。

あの速度で走られたら、絶叫マシンより怖いだろうな。

「二人とも防衛都市にいたんだよね、どうしたの？」

「最後の決戦は、やはり気心の知れた仲間と戦いたいであろう。なので、無理を言って運んでもらったのだ。すまぬな、助かった」

熊会長がポタンに礼を言うと、一鳴きしてからすぐさま走り去っていった。向こうも仲間と一緒に戦いたいのだろう。ありがとう、ポタン。

「こっちで戦う方がやりやすいので。それに、私がいなくては困るでしょう」

へブイが服装の乱れを整えた後に、愚者の奇行団の面々に話しかけると全員が優しい笑みを返した。

「いや、別に」

「園長先生がいらっしやるので特に」

「困んねえよな、赤」

「だな、白」

「あ、そういや、いなかっただっすね」

「何しに……きたの……」

団員たちのあまりに酷い言葉に、ヘブイが崩れ落ちた。

あ、背中を向けていじけている。落ち込んでいる彼を見るのは初めてかもしれない。

もちろん、彼らの言動は冗談なので今、ヘブイを慰めている。なんだかんと言っ、仲のいい一団だと思う。

「これで全員集合だね！ えっと、何か言おうとしていたけど忘れちゃった。みんな頑張ろうね！」

ラツミスの順番だったけど、熊会長たちの乱入でうやむやになっていた。

全員が集まったことに彼女が心底喜んでいるようだから、これでいいか。

みんなの意志は固まった。意気込みも充分。あとは最終戦の幕が開くのを待つだけだ。

最終決戦へ

小高い丘の上に陣取って双眼鏡になり眼下を眺めている。そんな俺を、覗き込んでいるのはラツミスだ。

「魔物たちも休憩しているみたいだよ」

現在、冥府の王軍は遮蔽物がない平地で休息をとっているようだ。進路方向には暫く平原が続くが、途中から見事な色彩の農園が広がっている。

緑の絨毯が大地を埋め尽くしているのだが赤や黄の一带もあり、配置にもこだわっているのだろうか、緑とのコントラストがただただ美しい。思わず録画してしまうぐらいに。

「この農園を守るために打って出る判断をしたのなら、わかる気がするね」

「いらっしやいませ」

そうだね、ラツミス。俺もこの光景を見て意見がガラツと変わったよ。ここまでの農園を作り上げるのには、相当な苦勞と時間を要したことだろう。

部外者の俺だって守ってやりたいと思っってしまったのだ、地元の人間だったら命懸けで守りたくもなる。

見事な農園の先には防衛都市の外壁が辛うじて見える。双眼鏡でギリギリ見える距離なので、裸眼では見えないよな。

立派な壁だな。高さも清流の湖階層より上だし、厚さも相当あるな。打って出るのも、いざとなったら町中に逃げ込めるといふ安心

感があるからなのか。

巨大な門の前に兵士がずらっと並んでいるが、その数は百程度……正直、あの大群を相手にするには戦力不足だとしか思えない。

だけど、兵士たちの顔には死地に挑む悲壮な顔……をしてないぞ。緊張はしているようだが、何処か余裕が感じられる。

「んー、ボタンとかキコユちゃんとかいないね。町の中にいるのかな」

そういや、見かけないな。畑の姿も見当たらないし。そういや、どういった見た目をしているのか聞いてないぞ。畑なのだろうけど、あれか地面に同化しているのか？

あれっ？ どうやって、移動するんだ？ 畑に転生したということでもない設定に驚きすぎて、他のことが頭から抜けていた。

どうやって、畑なのに国を救ったんだ？ もしかして、畑の土を固めてゴーレムのように人型になっているのだろうか。それなら、納得がいく。実はあの兵士の中に紛れ込んでいるのかもしれないな。

「あつ、冥府の王軍が動き出したよ！」

その声に意識が現実に戻される。冥府の王は相変わらず合体階層主の上に乗っかっているが、自分たちは動かずにまずは魔物たちを進ませている。

合体階層主で一気に蹴散らして、そこを魔物たちに襲わせた方が早いと思うのだが、冥府の王の今までの性格からして、まずは様子見とか好きそうだな。

魔物の群れの隊列は上から見ると先端が伸びた長方形だ。単純明快な陣形なのだが、防衛側の人数も少ないし、数で押し切るには間違いないのかもしれない。

防衛都市へと繋がる幅広な道を真っ直ぐに突き進む。速度は駆け

足程度だが、一万近い数が一気に動くとその迫力は壮観の一言。

長く伸びた長方形の冥府の王軍はご丁寧に整備された道の上を進んでいる。いや、街道だからこそ罨を仕掛けられないと見込んでの行動かもしれない。

地肌が剥き出しで平坦な道。罨を仕込んだとしても丸見えだ。落とし穴ぐらいはできるかもしれないけど、そんなもの先頭の魔物たちが少数落ちておしまいだ。

「そろそろ、うちらも動かないのでいいのかな？」

車を使えばこの程度の距離なら数分で到達する。あまり近づき過ぎて、俺たちの存在がバレるのもよくない。合体階層主の周辺に数百体の魔物もまだ控えている、まだ辛抱するべきだ。

「ああ、もうすぐ農園に到着しちゃうよ！ 畑が荒らされちゃう！」

ラツミスが騒いでいるので仲間たちも近寄ってきた。魔物の動きは肉眼でも確認できるので、みんな目を細めて遠方を睨みつけている。

「防衛側はどうする気だ、兵を配置してねえぞ。あれじゃ、みすみす農地を荒らされるのを待つだけだぜ」

ヒュールミは荒い口調で吐き捨てた。その苛立ちはみんな同じだ。仲間たちは忌々しげに遠方を睨みつけている。

本当に動かなくていいのか？ このままだと農園が蹂躪されるだけだぞ……。

「えっ、ええええっ、あれっ!？」

突然、ラツミスが奇声を上げたので全員の視線が集中する。

「先頭にいた魔物たちが急に消えたよ！」

仲間を見ていたので魔物の群れから目を離していたけど、いきなり敵が消えるなんてことがある訳がない。

そう思い、ラツミスと同じ方向へ視線を向けると 平原の道の途中に大穴が開いていた。かなり深く掘っているようで、ここから底が見えない。

長さは二、三百メートルぐらいはありそうだ。道幅が十メートル前後だとしても相当の労力を必要とするぞ。

落とし穴……えっ、あんな大掛かりな穴を街道に仕掛けというのか！？

こんな数日であの規模の工事となると、何百、いや千単位でも無理があるように思える。だが、実際にやってのけているということ、優秀な土木関係の人員がいるのか土系の魔法使いや、加護持ちを大量に保有しているのかもしれない。

防衛都市の自信の一端が見えたな。

操られているとはいえ、大穴に自ら落ちるような真似を魔物はせずに、穴の手前で全軍が足止めをくらっている。

自ら穴に落ちる程間抜けじゃないよな。この罠で百体ぐらいは巻きこめたかもしれないが、これだけ大掛かりな落とし穴を仕込んだら、もう罠は存在しないだろう。

この後をどうする気なんだ？

「あれっ？ 穴が消えてない……？」

えっ、ラツミス何を言っているんだい。あれだけの大穴が急に塞がるわけがない 穴ないな。

えええええっ！ あの穴が一瞬にして消えたぞ。

眺めているだけの俺でも、無い顎が落ちそうになるぐらい驚愕させられたが、現場にいる魔物たちの動揺は尋常じゃないだろう。

あの魔物たちはダンジョンで操られていた時よりも自我があるのか、消えた穴の前で戸惑っているように見える。

「ちよいと、ラツミス変わってもらってもよいかのう。すまん。穴の上に幻覚で土を被せておるのか……いや、魔法のような感じはせんのか」

ラツミスと交代して覗き込んでいるシメライお爺さんが、穴のあった場所を観察してそう結論を出した。

お爺さんがそう言うのなら、幻覚魔法の可能性は低いのか。となると、本当に土を被せたのか、一瞬で。

敵と同様に混乱している俺たちの中で唯一驚く素振りを見せていないのが、ハヤチだった。魔物が消えた場所を眺めながら、顎をくいと上げ鼻高々といった感じで、ドヤ顔している。

「あれが守護者様の力です！」

堂々と言い放たれても、よくわからないです。畑だから土を操れるとでもいうのだろうか。

まあ、今は魔物たちの動向を観察する方が優先事項だ。

魔物が一体、恐る恐る穴があった場所に踏み出している。地面の上をゆっくりと歩いているのだが、再び穴が開くこともなく無事渡り切った。

つまり、幻覚ではなく本当に土があるってことだよな。

少数で渡るなら大丈夫だと思ったのか、魔物たちは二三体ずつ道を進んで行く。危険地帯を抜けた魔物の数が百近くになったところで、またも戦場に変化があった。

今度は穴のあった場所の手前で順番待ちをしていた魔物たち消えたのだ。魔物たちがいた道には　　大穴が開いている。

「えっ?」

シメライお爺さんに変わって今度はヒュールミが双眼鏡を覗き込んでいたのだが、不意を突かれた様で可愛い声が漏れた。

さっき穴があった場所より手前の道で同じぐらいの大きさの穴が開いているのだ。またも百単位で魔物が呑み込まれている。

「なっ!?!」

その穴は大口を開けたまま、まるで生き物のように魔物たちへと進んで行く……穴が自ら動いているのだ。あ、俺は正気だから、故障もしていないから。

呆気にとられて次々と穴に落ちていく魔物たちだったが、正気に戻ると大穴から懸命になって逃げ惑っている。

不思議なことに穴が移動した後の地面は元に戻っている。抉られたような長い溝ができる訳じゃなく、穴だけが不自然に地面を走り魔物を落としていく。

「えっ、はっ、へっ」

どうやらヒュールミの理解を超えてしまったようで、変な声と吐息しか聞こえない。

異常な事態に冥府の王も腰を上げたようで、合体階層主が始動した。

あの巨体なら、穴に落ちたとしても足首辺りまでだろう。

大穴も合体主に気づいたのか、他の魔物を無視して相手の前に移動すると、その場でぐるぐる回りだす。まるで挑発しているかのよ

うに。

合体階層主の上を漂っている冥府の王は骸骨なので表情がわからないが、イラついているように見える。

その大穴を踏み潰すように合体階層主が前足を振り上げ、一気に踏みつけると、穴がすつと後方に避け、相手をバカにするように合体階層主の周辺をぐるぐる回り始めた。

今度は穴が通過した場所の地面が抉れたままで、深い溝にぐるっと取り囲まれることになった合体階層主が立往生している。

これが作戦にあつた足止めの合図なのだろうか。

なら、こつちも行動に移さないといけないなと思つた矢先、合体階層主の足下が盛り上がったかと思うと、そこから無数の巨大な土の拳が現れた

腕の一本が五メートル以上はあるのではないだろうか、それが真下から無防備な腹に無数の拳を叩きつけている。

距離があるというのにここまで、ドゴドゴドゴ！ と激突音が轟いてきているぞ。

信じられないことに、土の拳の連撃で合体階層主の体が浮き、そのまま吹き飛ばされると仰向けに地面に転がった。

その光景を目の当たりにした俺も仲間も完全に硬直している。正直な話……訳がわからない。

今、頭が考えることを拒否しているのがわかる。えっと、今、地面が拳で、ラッシュで。

なんとか冷静さを取り戻そうとしていた矢先に、今度は地面が浮き上がっていく。合体階層主がいた地面から土が隆起している。

それは四角の巨大な土の塊で、たぶん奥行きと幅が百メートル近くあるんじゃないだろうか。高さは十メートルぐらいに見えるけど、側面には地層が見えて、まるで土のケーキのようだ。

まあケーキにあんなにごつつい土の腕が側面から生えてないけど

な……。

四角い土の塊を支えるのは、側面から生えている土の腕。それも右側面に十本、左側面にもう十本、合計二十本もの手が生えている。

「えっ、キモい……」

あっ、うん。俺も思ったけどヒュールミのように口にはしなかった。

仲間は大口を開けて呆然とソレを眺めているだけだ。思考回路がショートしているのだろう。

巨大な四角い地面に無数の腕が生えている。それも大きさが尋常じゃない。なんなんだあれは……。

合体階層主と焔？ が向き合う様は、まるで怪獣映画だ。

「おおっ、守護者殿！ 今日も凛々しいお姿をしている！」

目を輝かせてアレを見つめているハヤチさんの言葉を聞こえてくる。

ですよねー。この状況から、そうだとは思っていたけどあれが焔か。なんか、自動販売機に転生して悩んでいた自分が馬鹿らしくなってきた。

って、眺めている場合じゃない。俺たちにはやるべきことがある。

「あたりがでたらもういっぽん」

最大音量で俺が発声すると、全員がハツとなり我に戻った。

慌てて車に全員が乗り込むと、宙で呆然と浮かんだままの冥府の王へと向かっていく。

このままじゃ、焔に美味しいところを全部持っていかれてしまう。決着はこの手でつけないとな！

最終決戦へ（後書き）

申し訳ありませんが、11月は本当にやるべきことが多く、忙しくてストーリーを考えている余裕がありません。暫く更新を休ませていただきます。

12月には再開する予定ですが、続きは畑視点からとなりますのでご注意ください。

畑が介入している部分は外伝的な感じで書き終えてから、ハッコンたちメインで最後を締めるのが理想の形だと思っています。

最終章は思う存分、私が自由に楽しむつもりでいきますので途中で投げ出したりはしません。その点はご安心ください。

俺は畑で無双する1（前書き）

一週間ほど畑視点で話が進みます。暫くノリが変です
苦手な方や自販機のみ活躍が見たい方は、一週間後から読んでい
ただけると丁度いいかと

俺は畑で無双する1

オッス、オラ、畑農幸！ みんなからは畑って呼ばれてるよ！
趣味は掘ったり掘られたりすることかな……おっと、腐属性の淑女の皆様、勘違いしないでくれよ。そっちの意味じゃないからな。
今のは言い方が悪かった、もう一度チャンスをください。
つまり、自分の体を開発したり、指でほじくられたり、挿入れられたり、抜かれたり、道具を使って掘ったり掘られたりするのが日常なだけさ！

更に誤解が深まったところで、真面目に自己紹介をしようか。
日本で平凡な学生だった俺はふと気づくと異世界で転生していた。
これだけなら「えー、定番の異世界転生でしょー。マンネリー、ワンパターン」で終わる話だったのだが、何と俺が転生したのは『畑』だったんだ。

畑ってのは、農作物を育てて収穫する、あの畑で間違いない。

「ん、この人、頭に害虫でも住んでいるのかな？」

なんて思ったそこのキミ。わかる、わかるよ。俺も鋤で耕されている自分自身に当初は戸惑ったもんだ。まあ、今はもう慣れたけどな！ 適応能力って凄いよね！

じゃあ、ここで俺の体がどうなっているのか説明をしようじゃないか。

まず、俺の身体は百×百メートルぐらいの敷地面積で深さは十メートル。これが俺の体の全てだ。全て土でできているんだぜ、砂利もあるけど。

土だから目は何処にあるのかと思わなかったかい？ 思わなかつ

た？　そこは思ったというのが礼儀だ。こういう空気を読む能力が社会に出た時に活かされるから、覚えておくように。俺は日本で学生だったから社会人経験ないけど。

でだ、視覚は自分の体の何処にでも移動させることができるので、死角はない！　視覚に死角はない！

……さてと、畑として出来ることは視覚移動だけじゃない。他にも自分の感情の変化で、土質を変えることが可能なんだ。

怒れば土が熱くなり、悲しめば土が濡れ、冷静になれば土は冷たくなる。楽しい気持ちになれば土が柔らかくなり、真面目に考え込めば土は固くなる。

他に何かできることあったかな……ええと、土の中に閉じ込めたモノの養分を吸い取ることもできるよ。腐敗させるだけでも可だ。

あつ、そうそう、身体から合計二十本の土の腕も出せる。昔は一本しか土の腕を出せなかったけど、なんだかんだあって二十もの腕を操れるようになった。

今は自在に二十の腕を操れるので、畑を土の腕で支えて移動することもできる。左右から十本ずつデカイ土の腕を出して、疾走する姿は皆さんにも見せてあげたい。

もう、自分について語ることはないかな……これもそうか。畑の身体は自分の意思で結構自由に形を変えることができるってのも、追加しておこう。もう、こんなぐらいか。

じゃあ、ここからはホットなメンバーの紹介だぜ！

まずは俺の愛すべき友……いや、家族からだ！

エントリーナンバー1、艶やかな黒い羽に三つの目と三つの脚。

そんじよそこらのカラスと一緒にされちゃ困るぜ。天空の覇者、黒八咫！

エントリーナンバー2、純白の毛並を纏いし一角の弾丸。頭から生えた角がキュートな猪突猛進野郎、ポタン！

エントリーナンバー3、ウサギ？　おいおい、我が一族をそんなものと一緒にしてもらったら困るぜ。気軽に触れたら怪我しちまうぜ、そこんとこよろしく。鋭い耳に可愛い姿、ウサッター一家！
父、ウサッター。母、ウツサリーナ。長男、ウサリオン。長女ウサッター。

以上が俺の家族だ。全員、人間に負けないぐらい頭がいいだけじゃなく、その身体能力は人を遙かに凌ぐ。同種の仲間とも比べ物にならないぐらい強く育っている。

初めて会った時より明らかに体が大きく筋肉が付いているのだけど、なんでだろうな。うちの野菜を食べているだけなのに。

家族は動物だけと聞くと寂しい奴だと思われるかもしれないが、彼らは最高の家族だ。新婚夫婦なんかよりも熱々で、熟年夫婦よりも強い絆で結ばれている。

おっと、それだけじゃない。親しい仲間だつてもちろんいるぜ？　ここからは動物以外の仲間について話すでしょうか。あ、ちよつと待った。まだ一番大切な人を紹介していない。

その人は　オータミお婆さん。俺が異世界で初めて会った大切な人だ。

優しく朗らかで誰よりも……寂しがり屋だった。あることが原因で亡くなってしまったが、そのお墓は今でも俺の体の上に乗っている。

一生忘れない、とても大切な人だ。

おーっと、らしくないしんみりとした空気になっちまったな。

ここからはテンションアゲアゲで行くぜっ！

フレンドナンバー1、巨大少女？ いえ、今はビューティフルホワイトレディー。最近急成長した雪精人。元は薄幸の美少女、今は誰もが見惚れる美女。彼女は友ではなく家族と呼んでもいい間柄だけどね。通訳でいつもお世話になっております、キコユ！

フレンドナンバー2、何処からどう見ても絶世の美女以外の何者でもない、ジエシカ坊……さん。目と目が合った瞬間好きになりかけたのは、オラ悪くねえだ。一目で相手を悩殺する防衛都市の美しき領主、ジエシカ！

フレンドナンバー3、見た目は渋めの老執事、中身は切れ者。ジエシカさんにはツッコミきつめ。昔はかなりモテたんだろうなというのが言動で見え隠れしている、ステック！

フレンドナンバー4、そろそろ、説明飽きてきたし、みんなも読み飛ばしたんだろうけど、もうちょっと我慢だ。無表情、毒舌、と見せかけて実は動物好きの可愛い一面もあるメイド。動物を溺愛する姿は変質者レベル、モウダー！

フレンドナンバー5、部隊を率いる女騎士だと思ったら、実はお姫様。一見優秀そうな見た目に騙されるな。意外と残念な人だぞ、ハヤチ！

フレンドナンバー6、高性能案山子との呼び声が高い、ツンデレ、吸血鬼、ネクロマンサー、左足將軍。属性が多すぎると冷めるよね、あと名前が覚えにくい、クヨエコテク！

その他にも鍛冶屋や町の住民、クヨエコテクの仲間がいたりするけど省略。

ここ試験に出るから、ちゃんと覚えておくように。あー、別に覚

えなくても雰囲気で大丈夫かな。

さて、ここからが本筋だ。

そんな家族と仲間を支えられ、俺は畑として平穩で退屈な日々を過ごしていた。

たまにやってくる人に野菜を提供したり、畑に腕を生やして山を下り平原を爆走して、防衛都市の人々を驚かせて、野菜で人々を洗脳……魅了したり、魔王軍を撃退もやったりしたけど。

何処にでもいる普通の畑だった俺は、魔王軍の元左足將軍との壮絶な一騎打ちの結果、意識が途切れ自我を暫く失っていた時期があったね。

闇の中を漂うだけの日々が過ぎ、孤独でどうにかなりそうだったある日、俺の世界に再び光が射した。

闇が晴れた光の世界には涙目の家族と仲間がいて、俺は自分が完全復活をしたことを理解したんだ。

意識を失っている間に状況は激変していた。意識がなかった期間も畑として農作物を育てていたらしく、俺の野菜の苗や種が魔王国の全域に広がり、飢えに苦しんでいた魔王国の食料事情が一変したらしい。

それをやった元五指將軍の一人だったクヨエコテクは、昇進して左足將軍に任命されていた。何というスピード出世。

もう帝国と魔王軍は争っていないという話だったが、正式な文書を交わしていないので代表者として俺が魔王の居城に招待されることになった。

というのが、前回までのお話だ。

「畑さん、説明口調ですつと今までのことを話していましたけど、一体、どのような意味が？」

俺の上で農作業中のキコユが地面を見下ろしながら、疑問を口に

している。

しかし、改めて見ると、本当に成長したな。百人中、九十九人が振り返る程の美女に変貌している。幼女時代から可愛かったから納得の成長具合だけだ。

「ありがとうございます。畑さんにそう言われると、照れますね」
頬を赤らめて照れる仕草に思わず見惚れそうになる。っと、心の声はキコユに筒抜けだったな、あんまり強く思うのは程々にしないと。

「何をいちゃついているのじゃ。我には何か言うことはないのかえ」
「？」

口を挟んできたのは、地味な色合いの長袖長ズボンといった格好のクヨエコテクカ。

昔は黒のワンピースに長く黒い前髪で顔も碌に見えなかったのだが、その髪は後ろで一括りにしている。手にした農具と相まって非常に健康的に見える。

畑から一本腕を伸ばして地面に文字を書きこむ。

『健康的になつたね』

「ふむ、褒め言葉としてはあれじゃが、まあよいであろう。あれからずっと農作業に励んでおるからかう」

左足將軍になったというのに毎日うちの畑の手伝いをしてきている。

普通なら上司である魔王に怒られそうなものだが、彼女が出世した理由が魔王国の飢餓を無くした功績によるものらしいので、これ

が彼女の仕事らしい。

「もう少ししたら、ご飯にしましょうか。みんな頑張ってるね」

「ブオフウウウ」

「クワツカー」

彼女たちと一緒に農作業をしている黒八咫とポタンが元氣よく返事をした。

「しかし、あれじゃのう。移動がかなり上手くなっておるな。揺れを殆ど感じぬぞ」

クヨエコテクの感心する声に、顔があるならドヤ顔を返したかった。

実は今、魔王の居城に向けて進行中なのだ。つまり、腕を出して畑を持ち上げて地上を走っている最中だということ。

この巨体なので魔物を踏み潰さないように細心の注意を払いながら、魔王軍の領地を疾走している。

まあ、俺が気を遣わなくてもこの巨体を見ただけで、多くの魔物が勝手に逃げ出してくれるのだけど。

この調子なら、あと二日もかからずに到着するかな。

正確には会合場所は居城の側面に広がる平原らしいけど。この体で城に入ったら大惨事間違いなしだから、しょうがない。

魔王城かー、楽しみだな。魔王は意外といい奴で、何度か言葉を交わしている内に仲良くなって、今じゃ親友だ。

他国を襲っていたのも自分の国の国民を飢えさせないための行いで、放置していたら魔物たちは、本能の赴くまま残虐性を剥き出し

にして他国を襲い暴れていたらしい。

統率していなければ、各国はもっと悲惨な状況になっていたと魔王軍の右腕将軍が語っていた。

実際、話し合っと思ってしたのは魔王に話が通じたし、悪い奴には思えなかった。「侵略戦争を実行しているのだ、今更綺麗事を並べても言い訳に過ぎない」と自分の罪を魔王は認めていたのが印象的だったな。

あの魔王相手なら問題なくことが運ぶと思うけど、和平交渉で他の魔物がごねたら、問答無用でうちの野菜を食わせるか。

俺は畑で無双する2

魔王国の空は薄暗く、日中は陽が殆ど射さない。

そりゃ、作物が育たない不毛の地にもなるか。

魔王の居城に向けて走っている最中だが、一度も晴れた空を見たことがない。平地にちよろちよろと生えている雑草もどす黒く「毒持ってますよ！」とアピールしてくるような色合いだ。

ただ、それだけではなく、時折、新鮮な青々とした葉が生えている一帯もあるのだがあれは……うちの子たちだな。

自分の畑で育てている野菜には栄養をたっぷり送り込むことで、従来の野菜よりも強靱で干ばつに強い品種へと改良が施されている。なので、この国の荒れ地でも元気に育つそうで、うちの畑から嫁いでいった野菜たちが大地に根を張り、元気に育ち、国民の胃袋を満たしているそうだ。

まあ可愛い子供たちは鍛え上げられているからね、ちよつとの水と養分でも力強く生き抜いてくれるさ。ただ、土の栄養が少ないので俺の畑で作るより味は落ちるけど。

そんなうちの野菜が普及したことで食料不足が解決して、もう他国を襲う必要がなくなり魔王国は侵略行為を止めた。

そして知らないうちに俺の功績となっていて、信じられないくらい持ち上げられ、英雄扱いされているのが現状だったりする。

よくわからないけど、魔王国では英雄なのか……畑の俺が。

だから、この巨体で爆走していても、遠くから俺を見つめ拝む魔物が結構いたりするんだよな。う、うーん、とつてもむず痒い。

自分でやったことなら、もう少し素直に現状を受け入れられるのだけど、頑張ったのはクヨエコテクとその部下と、うちの子供（野

菜）たちだからね。

「そんなことはありませんよ、畑さん。心を込めて野菜を育て干ばつにも負けない品種にしたのは、畑さんの功績です。それは間違いありません」

農作業に励んでいたキコユが手を休めて、俺を見下ろしている。心の声を聞かれていたのか。頬を膨らませて少し怒っているようだ。

ありがとう、キコユ。でもなあ、この野菜たちも自分の能力を試す為に、栄養を大量に送ったら勝手に強い子に育っただけの話だし、俺の手柄かと言われると……正直、首を傾げてしまふ。首ないけど。

「何か下らぬことで悩んでおるようじゃのう。この国が救われたのは間違いなく、お主のおかげであろう。謙遜は程々にせんと、嫌味になりかねんぞ」

話に割り込んできたのは、いつの間にか左足将軍に大出世したクヨエコテクさんじゃないですか。

「今、足元から嫌味な波動を感じたのは、気のせいかえ？」

あ、ジト目で睨まれた。感情が表に溢れてしまっていたようだ、気を付けよう。

クヨエコテクは最近農作業用の服装をしているが、以前は黒のワンピースを着ていた。その時はこうやって畑の上にいると、下からのアングルがなかなか……。

「畑さん、今何か仰いましたか？」

地面を見つめて微笑むその顔が怖いです、キコユさん。

あつ、そういえば、キコユ。俺が眠っている間に出会った、もう一人の異世界転生した日本人について少し詳しく教えて欲しい。

初めて教えられた時は信じられなかったのだが、なんとこの異世界に俺以外で日本から転生させられた人がいるのだ。

それも驚いたことに……自動販売機らしい。

自販機ですよ、奥さん！ 異世界転生は小説でも漫画でもよくある設定の一つだけど、自販機に転生って、あり得んだろ と、畑に転生した俺が言ってみる。

「ええとですね、ダンジョンで出会ったのは四角い鉄の箱に宿った方でした。確かに自動販売機だと仰っていましたよ。生前に自動販売機で購入した品ならば、自在に出すことができ、様々な姿に化けられるそうです」

俺も人のことは言えないけど、奇妙な転生しているよな、彼も。

ふと思ったのだが自動販売機と畑、どっちに転生した方がマシなのかね。

って、この二つ比べようがないな。そもその基準がおかしい。これって答えが出ないやつだ、違うこと考えよう。

キコユと黒八咫とボタンがお世話になったそうなので、こっちのいざこざが片付いたら、向こうの手伝いをしようと思っている。何かとややこしいことに巻き込まれているそうだから。

まさか、左腕将軍がダンジョンで暗躍しているなんてな。このことも魔王との会合で触れておこつ。もしそれが、魔王の命令なら取り消してもらえるように交渉するつもりだ。

拒否されたら、和平交渉も取り消して食料の提供も打ち止めだ。各地に散らばったうちの子供たちは回収させてもらう。

魔王の性格なら左腕将軍を止めてくれると信じているが……国の

トップとしての責務もあるだろう。その場合は敵対することになるのか。

「私はどのような結果になっても、畑さんに付いてきますから」

そう言って微笑むキコユは信頼のおける仲間なので心配もしていなかった。だけど、そうになると魔王軍の新たな左足將軍となったクヨエコテクは立場上、無理だよな。

と、俺の考えを土の上に書きこんでいく。文字を追いながら何度も頷いていたクヨエコテクが最後まで読みきると、大きく息を吐いた。

「ふむ、何を勘違いしているのかは知らぬが、我はお主につくぞ。魔王様はあくまで上司でしかない。この国を、我が村を救ったのはお主じゃ。勘違いするではないぞ、お主を好いておるとかそういうわけではなく、我は恩を返したいだけじゃ」

ぶいっつと顔を背け言い放つ姿は理想的なツンデレだ。と茶化したところだが、その気持ちを素直に受け取らせてもらっよ。

こっちの味方になってくれるなら頼もしい限りだ、クヨエコテクの死体を操る能力もかなり強力だし、俺との相性も悪くない。

「私との相性も悪くないですよね」

はい、そうですね。独り言に絡んでくるのはご遠慮願いたいのだが、キコユに心の声を聞かせないように考えるのって難しいんだよなあ。

「我も畑の声が直接聞こえるといいんじゃないのう」

クヨエコテクが、俺とキコユとの会話を羨ましそうに見つめている。一人だけ蚊帳の外なので寂しいのだろうか。

みんなに声が届けられたら楽だけど、心の声が全部漏れるとなると面倒なことになりそうだ。ハイテンションな時とか結構あるからね……。

お婆さんと一緒だった頃は人様に聞かせられないようなことを、散々口にしていた気がする。

「クワツクワツカー」

「ブフウウー」

っと、黒八咫とボタンが鳴いている。両方進路方向に視線を向けているということは、あつ、あれが魔王の居城か。

遙か前方に天を突き刺すように、鋭利な先端を伸ばした建物が見える。

全体が黒に近い灰色で西洋風の城の屋根を無駄に尖らしたデザインだ。如何にも魔王の居城といった雰囲気。

うむ、わかつているじゃないか、魔王。魔物の本拠地はこうじゃないと。

これでピンクメインのアダルトなホテルや夢の国みたいな外観だったら、どうしようかと思っただよ。

居城の前は何もない荒れ地が広がっている。話し合いの場はあそこら辺かな。

普通城の近くには城下町が広がっているものだけど、魔物の国はそうじゃないのか。城だけがポツンと建っている。

遠くの方に人影が見えてきた。二人いるな……如何にもオーダーメイドですと言わんばかりの高級そうな服とマントをはためかしているのは魔王か。トレードマークの一本角が額で反りかえっている

から間違いない。

相変わらずイケメンじゃのう。力もあって顔もいい、そしてカリスマもある。くっ、普通なら完敗宣言をする相手だが、残念だったな！ 貴様には美味しい野菜は作れまい！ だから、悔しくなんてないんだからねっ！

心の中で一方的な勝利宣言をすると、隣に立つ人物に視線を移した。

執事っぽい服装をしている筋肉質なダンディー。背中に骨格だけの羽が見えるから、右腕將軍だよな。一度、魔王と一緒に会ったことがある。

右腕將軍って見た目は五十代ぐらいのダンディー紳士で、俺も人間のまま年を取ったら、あんな風になっていたのだろうな……すみません、誇張しすぎました。どう足掻いてもあの仕上がりにはなりません。

魔王側はトップとその右腕。こっちは畑と動物と美女だ。

「美女だなんて、褒め過ぎですよ」

「キコユ、今、なんと言ったのか教えるのじゃ」

頬に手を当てて照れているキコユにクヨエコテクが詰め寄っている。

うん、心の声もろに聞こえていることを、いい加減学ぼうな、俺。

魔王たちの目前で急停止したのだが、二人とも驚く素振りも見せない。ちっ、脅かし甲斐のない奴らだ。

全ての腕をひっこめて大地の上に体を置くと、魔王と右腕將軍が浮かんで俺の体の上に着地した。

「体の上から失礼するぞ」

俺と会話するときは畑の上に移動してもらおうとしていて、
気にしないでいいよ。

さーて、ここからが本番だ。何もなく和平交渉が終わればいいの
だけど。

俺は焔で無双する3

魔王が俺の用意した手作りの素朴な椅子に座る。右腕將軍は隣で立ったまま控え、微動だにしていない。優秀な従者に見えるが……ステックも一見優秀に見えるが中身があれだから、見た目で判断すると碌な目に遭わない。

「しばらくだったな、焔。それに左足將軍クヨエコテク」

気軽に声を掛けてきたというのに、クヨエコテクはその場に跪き頭を垂れている。

俺は気軽に土の手を振りながら、地面から土の板を取り出し文字を浮かび上がらせた。

『おひさー』

「おう、おひさだ。クヨエコテクも堅苦しいのはなしだ。俺と焔は対等だからな。人間相手に馴れ馴れしくすると周りの奴らも口うるさいが、焔相手だと文句はねえようだぞ。なあ、右腕將軍」

「焔様はこの国にとっての恩人ですので、特別です」

うーん、眠っている間に地位が上がっているなあ。自分で動いた訳じゃないので褒められても気持ち悪い。

『俺よりも頑張ったクヨエコテクを褒めてあげて』

「うむ、ご苦労だったな、クヨエコテク。何か欲しいもんがあった

ら、右腕將軍になんでも言っつていいぞ」

「そんな、もつたいないお言葉。私の望みは既に叶えていただいておりますので」

魔王の前だとあの独特な口調じゃないのか。借りてきた猫のように大人しいぞ。

「ふむ、そうなのか。でだ……あー、んんっ。喉乾いたなあー。ふうー、ちよつと喉を潤したいなあ」

わざとらしく咳き込みながら、喉元を撫でている。

チラチラこつちを見ているのは、早くアレを持ってこいという露骨なアピールか。

わざと焦らしていたのだけど、もういいかな。

土の指をパチンと鳴らすと、地面から土のテーブルが魔王の前に生えてきた。そして、俺が趣味の陶芸で作った湯呑みに、なみなみと搾りたての果汁を注いでキコユが運んでくる。

興味ない振りをしているが魔王の視線は湯飲みから離れない。喉が大きく膨らんでいるので、待ち遠しいのが見え見えだ。

「お待たせしました。今日の果汁は絞りたてルワガです」

ルワガというのはリンゴに似た果物で、最近は果樹にも力を入れているので中々の自信作だぞ。

目の前に置かれた湯呑みを凝視しながら、さりげなく掴み取ったつもりのように手が微かに震えている。

今まで二度、うちの野菜を提供したことがあるのだが、あの時は見ているこつちが恥ずかしくなるぐらいのオーバーアクションで喜んでくれた。

ちなみに、今日のルワガは栄養を容赦なく注入しているので前回よりも旨味は格段に上だと思う。

「じゃあ、いただくぜ」

本当に喉が渴いていたのか、湯呑みを手に取ると一気に中身を飲み干した。

湯呑を机に叩きつけるように乱暴に置いた魔王は　そのまま机に突っ伏した。

あつ、小刻みに痙攣している。

「魔王様！？　まさか、毒を！」

右腕将軍が取り乱して、飲み物を運んだキコユを睨みつけた。ボタンと黒八咫がかばうように右腕将軍の前に立ち塞がる。

つて、とんでもない誤解をされているな。まずは、弁明しておくか。

『誤解しないでください。美味しさのあまり意識が飛んだだけです』

「バカな、確かにここの野菜は旨いが、そんなことがありえ」

「ま、待て、畑は嘘を言っていない。お前も一杯飲んでみる」

何とか上半身を起こして、大きく息を吐く魔王の言葉が信じられないのだろう。右腕将軍が眉をひそめている。

キコユはこの展開を読んでいたのか、既にもう一杯作っていたよついで、もう一つ湯呑みを持ってきた。

目の前に置かれた湯呑みを右腕将軍がじっと睨みつけている。さつきの魔王様のリアクションを見た後だと警戒するのが当然だ。

ゆっくりと口元に持っていき、ぐびっと一口飲みこむ。

「ぐあつ……ふうふう」

膝から崩れかけたが、なんとか耐えやがったか、残念。

クヨエコテクとその部下たちを陥落させた、俺が容赦なく栄養を注いだ果物によくぞ耐えた。褒美にこれもあげよう。

黒八咫に合図を送るまでもなく、何をすればいいのか理解してくれていた。山盛りになった果物が入った籠を三本の脚で掴み、羽ばたきながら机の上に置く。

『魔王も右腕將軍も遠慮なくどうぞ』

さあ、同じように丹精込めて作り上げたうちの果物たちによる、怒涛の攻撃に耐えてみせるがいい、魔王よ！ くくくく、はーはっはっはっはっはっ！

「楽しそうですね、畑さん」

はい、非常に楽しいです。

微笑みながらツッコミを入れるキコユに、心の声で即答した。

三十分後、なんてことでしょう、そこには息も絶え絶えな魔王と右腕將軍の姿が。

うん、ちよつと盛り過ぎたか栄養と旨味。話し合いをする前に疲れ切っているぞ。

『和平交渉は明日にする？』

「い、いや、今日やっておこう。どうせ書類に目を通して終わりだからな」

お、伊達に魔王はやってないな。このレベルの果物や野菜は二、三時間ぐらい動けなくなるんだが。美味しさに、よくぞ耐えた、感動した！

震える手で書類にサインをした魔王から受け取ると、木製の箱に入れて畑の中に収納しておく。防衛都市に帰ったらジェシカさんに渡さないとな。

「これで魔王軍は防衛都市に手を出すことはない。元々、国民を飢えさせないための苦肉の策だったからな。人間に危害を与えても国民を救う道を選んだ……近隣諸国には恨まれているだろうが」

どこか遠い目をしている魔王に俺は何も言えない。戦争が最良の策だとは口が裂けても言う気はないが、植物が殆ど育たない不毛の地に住む魔物たちには他に術がなかった。

元々、帝国が国を構えている土地は魔物たちが住んでいて、そこを南方から押し寄せてきた人間や亜人が、肥沃な大地を奪い魔物をこの地に追いやったそうだ。

何度か帝国や亜人の国に支援を求めたらしいのだが聞く耳を持たないどころか、使者を殺して送りつけるという愚行を 人間側が犯した。

そりゃ、戦争にもなるだろう。

争いは一方的な立場から見ているなら、わからないことってあるんだよな。

『お堅い話はこちらまでにして、晩御飯食べて行ってよ。腕によりを

かけてご馳走するから』

「マジか……この野菜をふんだんに使った料理。気を張らないといけねえな」

「ええ、油断は禁物ですよ、魔王様」

ふふふ、我が特製鍋の前に意識をどれだけ保てるか見ものだわい、かーかつかつかつ。

「悪党っぽいです」

「クワックウー」

「ブフウーブ」

「声は聞こえぬが、碌なことを考えておらぬだろう」

仲間から総ツッコミをもらった。

畑の上の調理場区域に移動して料理を始めると、仲間たちもいつものように手際よく手伝ってくれる。

正直、二十もの土の腕を自在に操れる今の俺なら、一人でも充分すぎるぐらいなのだが、料理や食事はみんなでした方が楽しいに決まっているからね。

ちなみにこの調理場にある調理器具も設備も食器も全て俺が作った物だ。

陶器を焼く窯もお手製で、自力で移動できない時代にせつせと作り込んだ物が大半だったりする。

あつ、そうだ。出来上がるまでに時間があるから、魔王たちには風呂にでも入ってもらうか。沸かすのはあつという間だし。

くつろいでいた魔王たちの前に土の板を再び出すと、そこに『よかったです、あそこのお風呂でも入っておいて』と書き、土の腕で風呂のある場所を指差す。

「風呂まであるのか、畑に。至れり尽くせりな、畑だな」

動けない時代は暇にあかせて様々な設備を充実させたり、趣味の陶芸に熱中していたからな。客人用の宿泊施設も畑の中の地下室に建造済みだ。

魔王と右腕將軍が風呂場に入るのを確認すると、こっちは机の上で鍋の準備を整えていく。野菜は幾らでもおかわりできるから、思う存分食べてもらうことにしよう。

「私たちは別の場所で食べた方がいいですよね」

「魔王様と一緒に食卓など恐れ多い」

あー、どうなのかな。魔王の性格だと一緒に食べても大丈夫だと思っけど、風呂上がりを確認しておこうか。

『あとで聞いておくよ』

取り敢えずは魔王と右腕將軍のだけ用意しておくか。

鍋の味付けは特製味噌味となっている。味噌って実は意外と簡単に作れるので、母が毎年仕込んでいたのを手伝わされていたから、お手の物だ。

まあ……手作り味噌に必須な麹作りでは悪戦苦闘したけど。昔の人は偉大だなと実感させられた。

「ふー、いい風呂だったぜ」

「堪能させていただきました」

二人とも満足してくれたようで、身体から湯気を立ち昇らせながら上機嫌でやってくる。

じゃあ、ご飯にしようか。席に着いた魔王は「ここで一緒に食べばいいだろ。抵抗するなら魔王として命令するぞ」と言い放つ。

じゃあ、みんなでご飯食べようか。全員が席について和気藹々とした空気の中、食事が始まったのだが……後方から何かが近づいてきている。

地面の微かな振動を感じ取り、背後に視線を向けると　こっちに向かって全力で駆けてくるウサッピとウサリオンの姿があった。

俺は焔で無双する4

本気で駆けるなんて珍しい。あの子たちは本気を出すと跳躍力が半端ないので、一步で十メートル近くを低空で跳ねている。

何か伝えたいことでもあるのか。

土の腕を伸ばして手を広げると、その上に二匹がほぼ同時に着地した。

ウサリオンが少し速く到着したのだけど、ウサツピーの方を向いて鼻を鳴らしている。どうやら自分の方が早かったことを自慢しているようだ。

ウサツピーが悔しそうにその場で跳ねている。兄妹なのだから仲良くしなさい。

二匹を焔の上まで運ぶと、キコユの元に駆けていく。

「あら、どうしたの」

「お主たちは女騎士と一緒にあったのではないのかえ？」

クヨエコテクの言う通り、二匹と両親は第八王女ハヤチさんと一緒に殺意の森付近の様子を調べに行っていた筈だ。

あの森は最近魔物が暴れていて被害が出ているとの話だったので、ハヤチさんが暴走しないようにウサツターたちを護衛に付けたんだった。

「どうしたの。背負っている鞆に何か入っているのね」

そついやウサリオンが鞆を背負っているな。ちょっとした荷物や手紙を運ぶときに使う鞆を使っているということとは、そついうこと

なのだろう。

キコユが中から丸めた書状のようなものを取り出し、俺の体の一部である土の腕の前で広げてくれた。

ええと、何々……左腕將軍がダンジョンの力を得て防衛都市に進軍してきている？

ダンジョン内で暴れていることはキコユから聞いていたけど、この和平交渉の真っ只中に何やってんだ。まさか、今回の一件も実は罠で魔王たちの手の平で踊らされている……いや、違うか。魔王は他国を襲う理由が存在しない。

だけど　キコユ聞こえているよね。心の声で返事してくれ。

『はい、聞こえています』

この紙を魔王に渡してくれ。そして、魔王の心を読めるなら読んで欲しい。無理なら感情の動きだけを探るだけでもいいから。

『わかりました、やってみます』

以前の彼女なら能力が高くなかったので危険性は高いが、大人になって能力が急激に上昇した今なら可能な筈だ。

もし、これがバレて危険な目に遭ったら、俺が全力で守る。

「これをお読みください」

キコユが紙を手渡すと、食事の手を止め受け取った。

「ん、なんだこれ。ちよっくら拝見させてもらっぜ。えっと……ほう」

お茶らけた表情をして文章に目を通していた魔王だったが、読み

進めていくとその表情が真剣味を帯びていく。

「おい、右腕將軍。これ見て見るや、ふざけたことが書いてあるぞ」

「では失礼しまして……ほほう、とうとうやらかしましたか」

見た感じだと、左腕將軍が勝手に暴走したことに對して、二人が苦笑いを浮かべているようだ。

『畑さん。二人とも表面上は笑っていますが、内心では左腕將軍に對して怒りを覚えているようです』

そうか、ありがとう。もう心を探らないでいいよ、バレたら怒られそうだからね。魔王たちの策略じゃないとわかったのならそれでいい。

じゃあ、ここからは筆談で俺が直接話し合うか。

『ってことらしいんだけど、これって魔王の指示？』

「んなわけねえだろ。左腕將軍が勝手にやったことだ。前々から裏切る気満々だったのは知っていたが、ダンジョンの力を手に入れて調子乗りやがったな」

「姑息なことをするのが趣味のような骨ですから」

「左腕將軍は陰険で自信家じゃから、我も苦手にしておった」

上司と同僚からの評判は散々だな。クヨエコテクなんて嫌悪感を露わにしているし。

魔王の命令でないとわかれば、左腕將軍を倒しても何の問題もな

いってことだよな。

『じゃあ、俺たちが左腕將軍を倒しても問題ない？』

「おう、当たり前だ。何ならこつちからも援軍出さずせ」

「魔王様。それは防衛都市側に挟撃の意思があると取られかねません。相手が魔王軍を裏切ったと知らしめるために、幹部の一人を向かわせるのはどうでしょうか。援軍も要請があれば向かわせる意思があるとの書状を持たせて」

「その任務、我に任せてもらえないでしょうか」

魔王と右腕將軍の前にクヨエコテクが跪き、強い意志を感じる瞳を向けている。

そついや魔王軍の幹部だったな。四肢將軍の一人だということを、あの農作業スタイルを見ていると忘れそうだ。

「元よりそのつもりだ。お前が適任だからな、頼んだぞ」

「はっ！ お任せください」

こつちいうシーンアニメとか映画で見たことがある。いやー、異世界っぽいなあ。

「んじゃ、ささっと書きちまうから、ちょっと待ってくれや」

右腕將軍が懐から紙と万年筆を出して渡しているが、そんな物を常に内ポケットに収納しているのだろうか。それにしても紙に皺もないな。

もしかして、魔法の一種で異空間と繋がっている仕様とかなのか。あつという間に書き上げた書状を渡してきたので、ウサリオンに運送を頼もうかとも思ったが、黒八咫の方が断然早いことに気づき、そっちに任すことにした。

黒八咫は背負い袋だと邪魔になるので、首から下げるタイプの鞆を取りつけて、そこに書状を入れておく。

「クワツクワー」

一鳴きして羽ばたいた黒八咫は空に舞い上がると、もう見えなくなっている。

あれなら防衛都市まで数時間で着きそうだ。

俺たちは食事会を早々に切り上げ、魔王たちにお土産の野菜と果物を渡すと、挨拶もそこそこにその場を立ち去った。

早く防衛都市に戻って対策を練らないといけない。

『ところで、冥府の王ってどんなの？』

走りながら農作業を続けているクヨエコテクに質問をする。

地面に浮かび上がった文字を見て、考え込むような素振りをしてるな。

「そうじゃのう。腕が四本生えて尻尾がある骸骨で間違いない。ただ、膨大な魔力と姑息な手段を得意としておって、諜報活動や裏工作を得意としておるらしい」

「面倒臭い相手みたいですね」

骨で陰険なんて救いようがない魔物だな。でも、無駄に能天気で明るい骸骨よりかは、らしくていいのか？

「我は死体を操る術を得ておるから、何度か配下にと勧誘されたのじゃが、不遜な態度と自意識過剰が鼻についてのう。丁寧に断らさせてもろうた」

そうか。ネクロマンサーっぽいことがクヨエコテクはできたんだ。骸骨の部下として似合いそうだ。

骨だったら吸収して良質な栄養にならないかな。

そんなことを考えながら疾走していると、進行方向に白っぽいのが地面から次々と湧いている。

あれって骸骨集団か。この露骨なタイミングで現れた骨の群れ。つまり、冥府の王とやらの配下かな。

避けようともせず俺の前に立ち塞がっているということは、敵ってことで間違いないだろう。一応、クヨエコテクに確認もしておこうか。

『クヨエコテク、前方に骨の群れがいるけど、野良魔物とかそつちの配下ってことはないよね？』

クヨエコテクが眉根を寄せて文字を確認した後に、畑の前方に移動して遠くを睨みつけている。

「うむ、あれは冥府の王配下の者じゃろうて。魔力の質がよく似ておる」

彼女がそう言うのなら、間違いないのだろう。実際、骸骨たちは武器を手に構えてやる気満々のようだし。

でもなあ、骨ごときが俺の前に立ち塞がってどうする気だ？

百×百メートルに厚さ十メートル。五メートル以上の長さがある土の脚が二十本生えている、この畑様の前に立ち塞がるとは笑止千

万！ 腹はないけど片腹痛いわつ！

必殺、焔暴走撃！

説明しよう、焔暴走撃とは質量に任せてただ走り抜けるだけの技だ！

足下から骨の碎ける音が伝わってくる。この感覚……寒い日に霜柱を踏み潰していた幼少期を思い出させるなあ。

こんな巨体をカルシウムしか売りのない骨が防げるわけがないだろうに。

跳ね飛ばされる際に手にした錆びた剣やメイスを叩き込む者もいるけど、いや、俺、焔だし、痛覚とかないし、ダメージってなんですかってレベルだから。

そもそも、痛覚があつたら鍬で体を耕すたびに激痛で死ぬわ。ドMなら最高なんだろうけど。

大半の骸骨を蹂躪すると、なんと残りの骸骨たちが密集して……ビッグ骸骨に変貌した。

もうちょっと上手に接合すればいいのに、適当に骨をくつつけて人の形にしてみました感がある。雑な仕事だ。

一応、額に角のようなものを取り付けているが、全長十メートルぐらいの骨だな。

なるほど、俺の突進を止めるには巨大化するしかないと考えた訳だ。うんうん、悪くないと思うよ。

まあ はい、ドーン！

俺が正面から衝突すると骨が砕け散り、辺りに飛び散った。

いとも簡単に砕けた巨大な骨がもつたいないので、足代わりの腕を十本だけ上部に移動して空中の骨をキャッチ&吸収しておく。

カルシウム美味しゅうございます。安心してくれ、君の体は栄養

となつて我が野菜の糧になつてくれ……今度は美味しい野菜に生まれ変わつて、みんなに喜ばれるといいな。

やるべきことは終了したので、今度こそ寄り道もせず防衛都市に向かおう。

俺は焔で無双する5

現在、魔王の領地を抜けて、深淵の上に伸びた一本の道をひたすら進んでいる。

ここは俺と魔王軍が壮絶な戦いを繰り広げた元戦場だ。防衛都市と魔王軍を繋ぐ唯一の道なので、ここでの攻防は必死だった。沈めたり埋めたり吸収したり忙しかった、うんうん。

この道の先に防衛都市があるのだけど、この調子なら一時間もすれば着くだろう。

俺たちが防衛都市に向かっていることは、黒八咫が既に伝えている。

あれから二度ほど黒八咫が戻ってきて、今後の戦略を自動販売機の陣営とやり取りをした。もう二、三回やり取りをしたら互いに納得がいく策が完成しそうだ。

防衛都市に着いたらジェシカさんとも話し合わないといけない。ただなあ、目を合わせると意識を吸い込まれて、我を失いそうになるんだよ。

今は昔と比べて精神が鍛え上げられているから大丈夫だとは思っけど、うーん。目を合わせなければ済む話なんだけど、それは失礼だし。

まあ、目はないけど。

「ジェシカさんと話をする時は嬉しそうですからね……焔さんは」
「確かにそうじゃのう。我とは対応が全く違っておる。浮かれて焔の温度も上がって暑いぐらいじゃよ」

何を仰っているのか、ちっともワカリマセーン。

あの瞳の威力は反則級だから仕方ないんだよ。ただでさえ美人なのに魔性の瞳を持っていたら抗えないのが世の中の道理だ。

なんで不機嫌なのかはわからないけど、果物でもプレゼント・フォー・ユー。

丁度いい具合に熟れているイチゴのような見た目をした、ウツガをもぎ取ってスツと二人に差し出す。

「こ、こんなことでは騙されませんよ」

「う、うむ、そうじゃな。果物なんかで誘惑されぬ」

そう言いながらも果物に視線が釘付けだ。二人ともうちの農作物の威力……じゃない、味は重々承知しているだろう。

なんだかんだ言っても、うちの果物の魔力には勝てない。ほーら、欲しくないのかなあ。ウツガを掴んだ手を左右に揺らすと、二人の顔がゆらゆらと左右に動く。

ほーら、欲しいんだろう。正直に言ってごらん。さあ、その可愛いらしい口を開いて、媚びるように上目遣いでお願いして、

「畑さん、気持ち悪いです」

「えっ、なんて思ってたのじゃ？」

「実は……」

あつ、キコユに耳打ちされたクヨエコテクが俺を半眼で睨んでいる。キコユも一緒になって半眼ですな。こつという時は仲いいよね、キミたち。

結局、最終的にはウツガを食べたことで白目をむいて失神したので、目が覚めたら機嫌もよくなっているだろう……栄養分注ぎすぎ

たかな、もうちょっと調整しよう。

「あれ、私は何を……」

「とても気持ちよかった気がするえ……」

防衛都市の外壁が見えてきたタイミングで、二人が目を覚ました。頭を振っているが、どうやら気を失う前の記憶が曖昧のようだ。都合がいい。

「あの、私たちは一体」

『二人とも果物を食べて気を失っただけだよ。ごめんね、ちょっと栄養が多すぎたみたいだ。身体に悪いことはないと思うけど』

「え、ええ。体調は悪くないですむしろ」

「すこぶる好調だ。いつもより調子がよいくらいじゃのう」

おっし、食前の記憶はないみたいだ。一時的な記憶を吹っ飛ばすほどの美味か。これ別のことにも使えそうだな、心にメモっておこう。

防衛都市の外壁までたどり着くと、門の前にはジエシカさんとステックとモウダーが並んで待っていた。俺の身体は大き過ぎて町の中じゃ目立つので、予め移動しておいてくれたのか。

あれ、隣にいる二人の男の人に見覚えがないぞ。角切りとスキンヘッドの威つい男が俺を見上げて唾然としている。俺を知らないと

いうことは新しく防衛都市にやってきた人か。
引き締まった身体つきをしているから、新しい門番なのかもしれないな。

「お帰りなさいませ、守護者様」

艶やかに微笑むのは防衛都市の領主であるジェシカさん。今日もお美しい。

このままだと、ジェシカさんたちが話しにくそうなので、身体を地面に埋めていく。土のあるところなら何処でも同化できるからね。畑の表面と周囲の地面が同一の高さになると、俺は腕を一本だけ出して彼女の目の前に移動させた。

「お心遣い感謝いたします」

『ただいま』

いつものように土の板に返事を書きこむ。

「黒八咫さんに頼みましたお手紙は届きましたでしょうか？」

頬に指を当てて小首をかしげる姿も絵になっていて、ああ、土壤がとろけてしまいそうだ。って、踏ん張れ！ いきなり、陥落しそ
うになるな。

ジェシカさんは男、ジェシカさんは男。 よっし、大丈夫だ。

『読んだよ。 作戦も立てたから、冥府の王の軍はなんとかなるんじゃないかな』

「さすが、守護者様ですわ！ ジェシカは信じておりました」

一気に距離を詰めて土の腕に抱き付くジェシカさん。あー、男性だとわかつているのに、わかつているのに、この甘い香りと風に揺れる髪と柔らかい身体があああつ。頑張れ、俺の理性さん！ 抗うんだっ！

「ジェシカさん、畑さんが困っています。そろそろ、離れてください」

どすの利いた低い声を発するキコユから、冷気が流れ込んでくる。顔は笑顔なのにとっても怖いのは何故かな？

「守護者様は困っていらっしやるのですか。ジェシカに抱き付かれずには迷惑ですか？」

そんな潤んだ瞳で見つめられて、迷惑と答える男性がこの世に存在するだろうか。いや、いないと断言できる！

「め、い、わ、く、ですよね」

「そうじゃよなあ、畑よ」

うつひょー、クヨエコテクまで睨んでいらっしやるよ。

ここは自力での撤退は不可能だ。至急、援軍求むっ！

家族である、ボタンとウサリオン、ウサッピーに助けを求めると体を背けられた。くっ、身内に見捨てられたっ！

ならば、ステックとモウダーの従者コンビに助力を！

「はっはっは、守護者様はモテモテでいらっしやる。私も若い頃は選り取り見取りでして、多くの女性と夜を共にしたものです。何度

か修羅場を経験して命の危険に晒されたこともありましたねえ。いやはや、懐かしい」

「クズ自慢はドン引きです。守護者様はこの町にとって唯一無二の存在です。女性関係は計画的にお願いします。一人、女性ではありませんが」

……この二人、助ける気ないわ。むしろ、状況を楽しんでいる。あの門番らしき二人は壁際まで下がっているぞ。でも、始めて俺を見たにしては少しリアクションが小さいような。肝っ玉が太いのかな。

さてと、この状況どうしてくれようか。ここで大事なことは……話を逸らすことだな！

『ところで、冥府の王の軍隊はどこら辺まで迫ってきているの？』

「その情報は黒八咫さんに届けてもらったはずですが？ そんなことより、この後お暇ですか」

そんなことじゃないよね！？ 防衛都市どころか国の一大事ですよ！ 優先順位間違っていますかっ！

「この際、ハッキリさせるべきですね。畑さんはこの三人で誰を選ぶのですか」

キコユさん、身体が大人になってから性格変わっていませんか？ 以前はもっと、お淑やかで引っ込み思案だったような気がするのですが。

「それは面白い提案じゃのう。我は畑なんぞに興味はないが。まあ、

あれじゃ、お主がどうしても我と共にいたいと申すのであれば、考
えんでもない」

クヨエコテクまでやる気になるとは。俺が眠っている間に一体何
があつたんだ。

みんな冷静になつて、俺は焔だよ？ ラブコメ展開に相応しいキ
ャラじゃないでしょ。

「守護者様が他の方を選んででも怨みはしません。ですが、私を選ん
で下さつたら、一生尽くします」

再び抱き付かれて懇願されてしまった。

むむむむむつ。焔になつてなんでこんなことで悩まないといけな
いんだ。人間時代にはホモの集団に追われたり、女子とその彼氏に
馬鹿にされたり、デートすっぱかされたりした思い出しかないとい
うのに！

生身の時に、こういうイベント欲しかった！ 今、切実にそう思
うよ。

「さあ」「さあ」「さあ」

三人に取り囲まれて、逃げ場を失ってしまった。俺が夢に見てい
たハーレム展開の筈なのに、ちつとも嬉しくないぞ。

みんな正気に戻れ、焔だぞ！ 土の腕だぞ！ 無機物だぞ！

追い詰められたその瞬間、俺の脳裏に天才的ひらめきが生まれた！
土の腕を大量に地面から伸ばし、急いでウツガを収穫すると、こ
の場にいる全員の口に問答無用で放り込んだ。

全員が白目をむいて、卒倒しかけたので土の腕で体を支えて、
そつと地面に寝かせておく。

ミッシヨンコンプリート！

俺は畑で無双する6

「あ、あれ、私は……」

おっ、全員目が覚めたようだ。勢いで全員失神させたが、ステックとモウダーに食べさせる必要は全くなかったな。少しだけ反省しよう。

「えっと、何かをもめていたような……あつ、そうですね。ポタンさんの力をお借りしても構いませんか？」

上手い具合にジェシカさんの記憶が吹っ飛んでくれている。他の面々も頭を振ってボーっとしているので、同じような状況なのだろう。

話が切り替わったこのチャンスを逃すわけにはいかない。

『ポタンに聞いてみないとわからないけど、何かな？』

「聖樹のダンジョンから今回の一件を伝えに来てくださった御一行から、仲間の元に戻りたいとのご要望があります。よろしければポタンさんに荷台を引いてもらって、送っていただければと」

ポタンに視線を向けると、大きく一度頷いた。大丈夫みたいだな。

『ポタンがいいって言うてるよ』

「ありがとうございます。使者の方々は珍妙な魔道具の乗り物でいらっしやったのですが、動かなくなってしまうたようで、本当に助

かりますわ。モウダー、お伝えしてあげて」

「はっ、仰せのままに」

モウダーが踵を返して町へ向かおうとしていたのだが、俺が手招きをする仕草をボタンにすると、速攻で理解してくれたようだ。

ボタンはとことことモウダーさんの背後に歩み寄ると、そのまま股下に頭を突っ込み背中に乗せる。

「えっ、背中に乗せていただけののですか？」

「ブフウウ」

ちよつと不機嫌な感じの鳴き声だが、彼女はその差がわからないようだ。満面の笑みで背中にしがみ付き体を撫でている。にやけ面で頬を擦りつけている姿は若干……いや、ドン引きだ。

相変わらずの動物好きだな。反応が過剰で一線を越えそうに見えるのは、俺の気のせいだと思いたい。

ボタンが全力疾走して去っていくが、それはまるでモウダーを振り落とそうとしているかのように見える。たぶん、これは気のせいじゃないよな。

使者を送るのはボタンに任せて、俺たちは冥府の王対策を考えないじ。

ある程度は黒八咫便でやり取りして纏まっているが、ここで煮詰めて失敗のないようにしておこう。

そして、決行日を迎えた。

黒八咫の偵察により敵が間近まで迫っているのは確認済みだ。俺たちは防衛都市の外に勢揃いしている。

本作戦の主要メンバーは畑である俺。黒八咫、ウサリオン、ウサツピー、キコユ、クヨエコテクとなっている。ボタンとウサツター夫婦はまだ戻ってきていないが、戦闘が開始したら帰ってくるだろう。

ジェシカさんや従者の二人、そしてクヨエコテクの配下であるイケメン軍団は後方に控えることになった。

撃ち漏らした敵を防衛都市の兵士たちと一緒に倒してもらおう役割だが、それよりも俺が暴れるところに近づくと危険だというのが大きい。

この巨体で戦うと近くに仲間がいると正直戦いにくいのだ。気心の知れたこのメンバーなら阿吽の呼吸で戦えるので問題は無いのだけだ。

「くれぐれも体にお気をつけてください。危ないと思ったらすぐに帰ってきてくださいね。本当は私も一緒にしたいのですが……」

ジェシカさんが俺に抱き付いたまま離れようとしなない。

「皆さん無事に戻ってきてくださいね。最後にもう一度ナデナデさせてください」

モウダーさんは黒八咫とウサリオンとウサツピーを順に高速で撫でている。

「モウダーいい加減にしなさい。ジェシカお坊ちゃま……」
「お嬢様も」

ステックさんが二人を引き剥がしてくれた。

二人とも名残惜しそうにこつちを見て手を伸ばしているけど、いい加減出発しないと間に合わない。

俺は地面と同化させていた体を隆起させていくと、防衛都市に残る仲間たちがその場から離れていく。

巨大過ぎる体に二十もの屈強な土の腕。見慣れたとはいえ、異様だよなやつぱり。

俺たちに手を振るジェシカさんたちに俺も土の腕を数本振りながら、目的地を目指す。

我が子たちが風に揺れる農園地帯を抜け、少し離れた場所に移動すると道の上に陣取り、そのまま地面に沈んでいく。

その前に黒八咫は空に飛び立っている。上空からの偵察任務があるから。

この道を平らに均したのは俺なのだが、今回はちよつといじらせてもらうよ。また後で元通りに戻すからね。

さてと、ここで長く体を伸ばして道と同じ幅にするか。そもそもって周辺の土さんと交渉しないとな。

あー、もしもし、わたくし畑と申します。強引に割り込んで申し訳ありません。今日のご相談したいことがあります、おっと、これは失礼しました。お詫びも兼ねてつまらないものですがどうぞ。

これはなんなのかですか？ これは私の畑で使っている肥しですよ。かなり濃度の高い品質のいい上物ですよ。っと、これは他の土には御内密にお願いします。ええ、貴方様だけに特別です。

おっと、そうでした。肝心の内容なのですが、もう少しするとここを魔物の群れが通ることになっていまして。その魔物を倒す為に協力を願いたいのですよ。ちよつと穴を掘ったり、埋めたりしますよ。ええ、もちろん近隣の土さんにご迷惑が掛からないように細心の注意を払いますので。

許可いただけるのですか！ ありがとうございます。ええ、わか

っていますよ。仕事を終えた暁にはアレを提供させていただきますので。はい、ではそういうことで。

よっし、近場の土たちに許可を得たので思いっきり暴れるぞ！

「あの、畑さん。その交渉って必要なのですか？ 相手は土ですよ
ね」

畑の中に製造した休憩部屋からキコユの声がする。仲間全員休憩部屋に滞在してもらっているのだが、今の交渉は全て彼女には筒抜けだったか。

実際、効果があるか確証はないけど、やっておくと土の操作がスムーズに行えるんだよ。実は俺と同じように土にも意識があるのかもしれないよ。

「そうなのですか。勉強になります」

キコユが素直に信じてくれた。本当のところはわからないけど、俺は畑として、土の塊として、やはり諸先輩方には礼儀を持って接するべきだと思っている。

……と、真面目に語ってみたが、ノリと気の持ちようだ。

さーてと、許可も頂いたことだし、落とし穴作るぞー。

道幅とほぼ同じ幅で深さは百メートルぐらいでいいかな。これだけの深さがあれば、普通の魔物なら即死だろう。底の土はコンクリートのように固めておけば完璧だ。

俺はこの穴の上に蓋のように被さっておいて、敵が来たら体を移動させて穴に落とす。これを繰り返して、巨大な階層主とやらを合体させた魔物が突っ込んで来たら、そいつの足止めをしてできることなら倒す。

冥府の王は因縁のある自動販売機に転生した人たちに任せよう。

そついや、自動販売機つて戦えるのだろうか？ 食料を提供する能力は理解できるけど、戦闘力があるとは思えない。まあ、焔である俺が戦えているのだから、何かしらのやりようがあるのかもしれないが。

今回の戦いはあくまで脇役。焔は材料となる野菜を育てて提供するまでが仕事だ。メインディッシュを作るのは他の人の役割だから。後は魔物の群れがやってくるのを待つのみだ。

今俺は上空から地上を眺めているのだが、それは黒八咫の脚に俺の土リングを装着しているからできる裏技だ。焔の土の一部を仲間にかけてもらうことで意識を移すことが可能となっている。

敵の数は万に近いぐらいか。ほんと、大群だな。

問題の合体階層主は動きを止めて、後方で待機中と。先に他の魔物を進ませて様子見をするつもりなのか。

こつちとしても都合がいい。敵の軍隊は道の上を並んで行進中だ。うむうむ、理想的な展開じゃないか。それでは、そろそろ、魔物たちを落とすとしますか。

落とし穴の上に被さっていた体の一部を縮めて、上に乗っていた魔物たちを穴へとダンクシュート！ 魔物たち没収となります、残念！

落ちた魔物たちは美味しくいただくとしよう。魔物よ、養分になれ。

そのまま、穴に次々と飛び込んでくれたら楽だったけど踏み止まっている。じゃあ、オレが動いて落としますか。

魔物たちを落としては穴を埋めるを繰り返していると、本命が動き出した。

改めて見るとデカいなー。全体像だと俺といい勝負じゃないだろうか、いや、少しあっちの方が大きいかもしれない。

自分と対等な大きさの相手か……元左足將軍だった土竜を思い出

すよ。

まずは搦め手で不意打ちをさせてもらおう。相手の周囲を高速で移動して地面を削って、陸の孤島に封じ込める！

いい感じで立ち往生しているな。そこで、足元の地面に移動しておくか。

俺に気づいてない。さーて、どうしよう。地面に呑み込むのもありだが、それよりもっとインパクトが欲しいよな。

自動販売機の面々も見ているだろうから、どうせなら驚かせたい。なら、方法はこれだ。拳を限界まで硬くしてからの、相手の無防備な腹へ向けて連打！

足下の地面から無数の土の腕が伸び、その拳が合体階層主の腹を捉える。

ハタケエエエエツッ！

拳の散弾を腹にもろに受け敵の巨体が宙に浮き、そのまま仰向けに地面に墜落する。

よっし、一気に行くぞ。

体を地面から隆起させ土の腕で畑を持ち上げる。

相手も体勢を起こした。ここからは怪獣大決戦だ！

俺は焔で無双する7

合体階層主の上に乗っていた冥府の王はどっかに行ったな。自動販売機たちの方が誘い出してくれたようだ。

これで戦いやすくなったけど……敵が頭を地面に伏せて大口を開けている。何をやる気だ。火炎とか遠距離攻撃でも仕掛けてくるのが定番だが。

そう考えて待ち構えていると、その口から 魔物が現れた。

おっとそつちか、意表を突かれたな。全身が溶岩でできた人型の魔物が一体。それに、身体が燃え上がっているデカいカエルもいる。その合計二体が追加の魔物か。

ちよつと面倒なことになったが、この土の腕でぶつ飛ばそう。

「焔さん。あの敵は私に任せてください」

体内に控えてもらっていたキコユがそんなことを言ってきた。

う、うーん。成長して強くなったのは知っているけど、敵も結構強そうだからなあ。

「私ではなかるう。私たちではないのかえ？」

体内に視線を向けるとクヨエコテクが参戦を希望してきた。その隣でウサリオンたちが跳ねている。やる気満々のようだ。

全員で挑むなら、勝機は十分にありそうだな。家族なら仲間なら信用することも必要だ。なんでも自分一人で解決するのが正しいわけじゃない。

じゃあ、お願いしようかな。前までは呪いを解く力があるキコユが俺の体に触れてないと、身体がその場に固定されて動けなかった。

だけど、大人になって力が増したおかげで離れても俺は焔として暴れられるようになった。だから、安心して戦っておいで。

敵を真似て体の一部にトンネルを作ってキコユたちが出られるようにした。

そこから仲間が姿を現し、俺の前に整列する。

ここで俺のやるべきことは、こっちの戦闘に仲間を巻きこまないことだ。

敵の出した二体がこっちに向かってくるのを見て、二十本の腕を限界まで曲げる。焔の下部が地面に着いた状態から、一気に腕を伸ばして跳躍した。

仲間と敵二体の頭上を通り過ぎ、着地地点には合体階層主がいる。

チエエエエエンジ、ハタツケー！

体を真四角のサイコロ状にすると、敵に衝突する一面から腕を生やす。それも、無数の土の腕を出すのではなく、全ての腕をまとめた巨大な一本の腕だ。

想像して欲しい、サイコロ状の土の塊の一面から巨大な腕がよきつと生えているところを　想像力が豊かな人への精神ダメージが通った気がする。

その土の剛腕を躊躇うことなく、合体階層主の顔面に叩き込んだ。相手は焔である俺の変身ぶりに驚いたようで、無防備な状態で拳を受けて吹っ飛んでいる。

俺は土の腕一本で華麗に着地すると、そのままぴょんぴょんと跳ねて相手との間合いを詰めていく。

たぶん、気のせいだろうが、岩でできている合体階層主の顔が怯えているように見える。魔物が俺を見て恐怖を覚える様なことはないだろう。

ほーら、怖くないよお。

今度は体の側面から無数の腕を出して、カサカサと音がしそうなぐらい素早く腕を動かして迫ってみる。

あれっ、後ずさりしてないか。失敬な魔物だ。この姿は農協のゆるキャラに任命されそうなくらい可愛らしいだろうに。

何故か俺から逃げる合体階層主を追い回しながら、仲間たちへ目を向ける。

体が燃えていた大きな蛙は、空から舞い降りてきた黒八咫の羽ばたきの風により炎が掻き消え、そこに土煙を上げて爆走してきたボタンが突撃した。

立派な一本角が蛙の背中から突き刺さり、腹から先端が飛び出ている。だが、まだ生命力が尽きていないようで、腹の角を押し出そうとしていた。

そこでウサッター一家が飛び込み、鋭く尖った耳を振るう。蛙の全身に赤い線が走ったかと思うと、そこには細切れになった肉片が……。

圧勝じゃないですか、うちの家族は。まあ、黒八咫たちは初めから信頼していたけど。

もう一体の溶岩の相手はどうなっているのかな。

そっちに視線を向けると、キコユが手をかざし吹雪を発生させると、溶岩の身体から蒸気が上がっている。あの雪を発生させる力、スキー場でバイトしたらばる儲けできそうだ。

クヨエコテクは腕を組んだ状態で突っ立っただけに見えるが、彼女の周りには無数の魔物が集まっている。

一見、彼女が魔物に襲われているように見えるが、あれは彼女が操っている死体だ。

俺は離れる前にクヨエコテクに頼まれて、さっき畑に取り込んだばかりの魔物の死体を置いていった。それを彼女のネクロマンサー

の力で操っている。

吹雪に晒され動きが取れない魔物に死体たちが群がっていく。身の身体なら寒さに体が縮こまるところだろうが、あれは既に死んでいるので感覚はない。

溶岩人型の表面は冷え固まり、下半身には魔物の死体が纏わりつき、その体が凍ることによって相手の動きを封じ込めている。

下半身の自由を奪われた溶岩人型が魔物を引き剥がそうとしているが、身体が冷えたことで関節も固まり出しているのだろう、動きが鈍重で時間が経つにつれて更に動きが鈍くなっていく。

あっちの戦いが終わるのは時間の問題だな。じゃあ、俺も終わらせることにしよう。

唐突ですが、畑さん殲滅クッキングのお時間です。

今日の献立はハリセンボン風岩の串刺しです。

材料は生きのいい大きな犬の形をした岩。そして、畑から採れたてのゴボウとなります。このゴボウは品種改良を繰り返して硬さに特化した逸品で、どれぐらい硬いのか試す為に防衛都市の壁に投げつけたらあっさり貫通した代物です。驚きですね。

鍛冶屋の方が「鋼より硬いんじゃないか」と驚愕されていました。

そのゴボウを大量に抜き出し畑の上に並べます。まあ、硬くて太くて先が鋭くて美味しそう。それを土の腕でガシツと掴みます。

ここでワンポイントレッスン。ゴボウを投げる時は遠慮なく思いっきり投げつけること。

(使用後のゴボウはスタッフが後で美味しくいただいています)

では、大きく振りかぶって、畑選手第一球……投げました!

投げつけたゴボウの束が宙でばらけて、合体階層主のお尻と脚に

突き刺さる。

関節に刺さったゴボウが邪魔で走れなくなった敵が豪快に転び、地面の上を滑っていく。

ここは必殺の一撃を叩き込む絶好のチャンス！
大きく跳躍すると空中で再び畑の形を変化させる。

下を鋭く尖らせた四角推　つまり、ピラミッドの先端を鋭角にして逆さに向けた形になった。その先端にはゴボウを集めて鋭く尖った切っ先を下に向けた。

更にてっぺんから一本土の腕を出し、畑で採れたサツマイモ
この世界ではシテムウマと呼ばれる野菜の蔦をまとめた物を握りしめている。

そして、その蔦を体に巻き付けると一気に引っ張り上げた！
そうするとコマの要領で体が激しく回転を始める。重量に鋭利な先端、更に回転力を加えることにより威力が倍増する……と、どっかの漫画に描いてあったと思う！

俺は地面に倒れて動けない合体階層主の頭に着地する。下から何かを砕いたゴリゴリという破壊音が響き、一瞬だけ俺の身体は停止したが、すぐさま回転しながら下へと降りていく。

そして、その回転が収まった時には、原形をとどめていない合体階層主の破片が周囲に散らばっていた。

クッキング終了！
貴様が負けたたった一つの要因は……食物繊維をおろそかにしたこと、さっ。

地面に突き刺さったまま、二十もの腕を出し親指を立ててポーズを決めてみたが、格好をつけている場合じゃなかった。

みんなはどうなっている？

慌ててキコユたちへ目を向けると、あっ、氷の塊の中で身動きが

取れなくなつた敵がいる。死んでいるかどうかはわからないけど、勝ちも確定だな。

防衛都市の方に千以上の敵を逃したので、そっちも確認してみると全ての敵を倒し終えていた。目立つた怪我人もないようでホッとしたよ。

実は防衛都市の兵士たちも最近メキメキと実力を付けていて、新兵でも中級レベルの魔物に勝てるとの話を聞いたことがある。

ボタンたちもそうだけど、俺の野菜を食べ続けるとどうやら身体能力が格段に向上するらしく、兵士だけではなく町の人々も医者いらずの健康体でめっちゃ元気なんだよな。

我ながらたまにうちで採れた野菜の効力にビビる時がある。変な成分は入ってないと思うんだけど……。

「お疲れ様でした」

「うむ、よくやったな畑よ」

「流石です、守護者殿」

「クワツクワー」

「ブフウブフオオ」

駆け寄ってきた仲間から称賛の言葉が投げかけられた。ウサツタ一家は嬉しそうに周囲で飛び跳ねている。

あれ、ハヤチも合流していたのか。ウサツターたちがいるから当然と言えば当然だけど。

『みんなもお疲れさま、全部片付いたら祝勝会やろうね』

俺が書きこんだ文字を見て嬉しそうに頬を緩めている。

こつちからは新鮮な野菜を提供するから、防衛都市に戻ったら盛大な野菜祭り開催だ。

「そついえば、ハツコンさんたちはどうなったのでしょうか？」

ハツコンって確か自動販売機の名前だったよな。キコユは少しの間だけど共に旅をしたらしいから、この中で一番彼らと近い間柄だ。心配にもなるよね。

冥府の王と戦っている筈だけど、現状が確認できない。

辺りを見回してみるが、その姿が見えない。魔法で何処かに運ばれたのか？

もし苦戦している様なら手を貸すけど、たぶん、大丈夫だろう。

何故かはわからないが、確信にも似た考えが頭に浮かんだ。

畑としての手伝いはここまでだとしても、同郷として勝利を信じているよ……ハツコン。

俺は畑で無双する7 (後書き)

畑の活躍はこれにて終了です。

次回からハツコンに戻りますので、ご安心ください。

ハツコンチーム

二台の車に分かれて乗り、俺たちは小高い丘から戦場に繋がる道を猛スピードで下っていく。

合体階層主は畑がなんとかしてくれている、それに加えて大量の魔物を呑み込んでくれた。だが、数が数なので俺たちの進路方向にはまだ千に近い魔物が居座っている。

冥府の王は顎が落ちそうなくらい大口を開けて、畑と合体階層主の戦いを凝視しているので、こっちはまだ気づいていない。

「まずは道を切り開かねばな。炎よ踊れ、風よ叫べ」

俺と同じ車の荷台に乗っている、シメライお爺さんが赤と薄い水色の扇子を取り出し、同時に扇ぐ。

炎を帯びた竜巻が前方を貫き、密集していた魔物たちが熱風にあぶられ吹き飛んでいく。

魔物の軍隊のど真ん中に一本空白地帯が出来上がる。そこを車が全速力で突っ込んでいった。

「おしゃああ、ここで俺は途中下車するぜえええっ！ 先に行きなっ！」

後続の車に乗っていた灼熱の会長が、叫ぶと同時に荷台から飛び降りていくのが見える。

「って、敵のど真ん中に単独で！？ 強いのは知っているけど、それは余りにも無謀すぎないか。」

そう思って止めようとしたのだが、灼熱の会長を乗せていた車を運転していたケリオイル団長が窓から顔を出して、こっちを見た。

「俺たちもここで残るぜ！　ここでこいつらを誰かがやらねえと、冥府の王との戦いで邪魔だろ……後は任せたぞ、ハッコン！」

こつちの返事も待たずに一方的に言い放つと、Uターンをして灼熱の会長の元に戻っていく。

あの車には他にケリオイル団長一家が乗っている。助手席のフィルミナ副団長が窓から上半身を出してこちらに深々と頭を下げた。荷台の紅白と灰、そしてスルリウムがこつちに向かって軽く手を振っている。

止めた方がいいと心が叫ぶが、無理やりその感情を押し留める。この車にいる仲間たちも苦渋の表情をしているが、誰一人として彼らを止めなかった。

彼らの行動が間違いではないとわかっているから。ケリオイル団長が言いださなければ、自分たちがその役割を果たすつもりだったのかもしれない。

「大丈夫、大丈夫だよね、ハッコン」

「いらっしやいませ」

俺の体をきつく抱きしめるラツミスに、いつものように返事をする。

辛いのは俺だけじゃない。みんな……信じているからね。

「切り替えていかねばなるまい。こちらも、さほど余裕がある訳じゃないのでな」

そつ口にしながら荷台で爪を振るう熊会長の目の前まで接近してきていた、鰐人魔が切り裂かれる。

そつだ、多くの敵を惹きつけてくれたけど、まだまだ敵は残っているのだ。

園長先生とシュイがこちらに向かってくる敵をいち早く倒しているが、処理しきれぬ数ではない。

だが、敵が雑魚で密集していると　　ラツミスの出番だ。俺がいつものコンクリート板を出すと、瞬時に理解してくれたようにコンクリート板を掴んで。魔物の群れに投げつけていく。

これだけ魔物がいればコントロールが悪くても何処かに当たる。あの怪力で投げつけられたコンクリート板の威力は攻城兵器も真つ青な威力で、面白いぐらいに魔物の群れを吹き飛ばし粉碎していく。

「これは、楽じゃのう。では、進路方向の敵に集中するとするか」

「近寄ってくる敵は全部お掃除しますから、お爺さんは気にせんでいいですよ」

爆走する車の屋根にひょいと身軽に老夫婦が飛び乗る。前方に立ち塞がっている魔物たちが地面から乱射される石礫に弾かれ、荒れ狂う暴風に切り裂かれていく。

運よく魔法から逃れた魔物が車に突進してくるが、銀の線が宙を走ると身体を分断されて、自分が死んだことも気づかぬうちに地に伏している。

うん、相変わらずの最強夫婦だな。

「このままやと、出番が無さそうやなあ」

「我々は側面から迫る敵の排除だ」

闇の会長が体中から細い影の刃を伸ばすと、魔物たちを串刺しにしていく。数が数だけに、それでも倒しきれない魔物がいるのだが、

そこは熊会長の爪と、

「はあああつ！」

ミシユエルの大剣が爆炎を放ち消し炭にする。

「では、私も少しは活躍しておきましょう」

へブイは手にした棘の付いた鉄球の鎖を伸ばし、中間距離の相手を粉碎していく。

魔物が少し可哀想に思えてしまうぐらいの殲滅力だな。このチームって破壊力がずば抜けているよな。攻撃力特化と言ってもいいぐらいの面子だ。

「ピティー………出番が………ない………」

魔物の攻撃が車まで届くことがないので、ピティーが寂しそうにポツンと佇んでいる。

仲間で珍しく防御特化だからね、この状況だと暫く仕事はないかな。でも、冥府の王との戦いでは頼りにしているから。

戦場で派手に暴れながら冥府の王を目指して走っていると、突如ハヤチさんが言葉を発した。

「申し訳ありませんが、我々は守護者様の元へと向かいます。お世話になりました！」

走行中の車から飛び降りるといふ無謀な行為だが、正座した姿でぴよんと外に飛び出すとその足下にウサギが二体潜り込み、背にハヤチを乗せるとそのまま器用に跳ねながら運んでいく。

信じられない跳躍力で魔物の上を軽々と越えて進んで行く姿を見

る限り、心配しなくてもいいな、うん。

「まったく、ハヤチ姉さんは落ち着きのないところが変わらないな」
ミシユエルが呆れて苦笑いを浮かべているということは、昔からそういう性格なのだろう。見た目はできる女性なのだが、意外と残念な人だというのは短い付き合いでも伝わってきた。

ちゃんと合流できることを祈っておくよ。

こっちは順調に敵を蹴散らしながら冥府の王へと迫っていく。

派手に暴れているので畑の戦いぶりに呆気にとられていた冥府の王も俺たちに気づいたようだ。

頭蓋骨に表情はないのだが、なんとなく忌々し気にこっちを見下ろしているように思えた。冥府の王としては圧倒的な力で防衛都市を蹂躪して、後に魔王を倒す予定だったのだろう。

それが俺たちにここまで苦戦させられたら、まあ、キレルだろうな。

『忌々しい。私の計画が貴様らのせいで全てが水の泡だ！ この償いどうしてくれようかっ！』

おっ、念話で直接脳に言葉が届く。

声から苛立ちが充分すぎるぐらいに感じられる。

かなりお怒りのようなので、なんとなく打ち上げ花火を上げてみた。

うむ、戦場に咲く光の花というのもおつなものだな。

『我を愚弄するかああっ！』

挑発行為として受け取られてしまった。和んでくれるかと思ったのに、残念だなー。

何故か仲間たちが俺を見てなんとも言えない表情を浮かべている。呆れているような感心しているかのようにも見える。

『そこまでコケにして、覚悟はできておるのだろうな……我をあまり舐めるでないっ！ 黄泉路より戻れ、我が忠実なる下僕たちよ。主に齒向かう愚かな者たちへ冥府の力を示すがいい！』

右手に握んだ骨の手が寄り集まった杖を振りかざすと、冥府の王の周辺にいた魔物たちが地面に広がる闇に呑み込まれた。

そして、代わりに地面の闇から何かが三体、徐々に浮かび上がってくる。

二つは冥府の王と同じく骨の身体、もう一つは半透明の女性。一体だけは見覚えがないが、他の二体は見知った相手だった。

「小將軍と親將軍……」

ラツミスの呟きがその答えだ。

一人は半透明の女性、小將軍カヨールリングス。

もう一人は冥府の王の母親でありながら、親將軍でもある女性。

「あれは、人差將軍……私が倒したはずなのですが」

ミシユエルが浪人風骸骨を睨み、声を漏らす。

もう一体の骸骨が人差將軍か。ウサギとミシユエルが倒したという。

ここで中ボスが復活して現れるなんて、王道をわかっているな。ゲームなら盛り上がる場面だろうけど、当事者としては勘弁してほしい。

大量の魔物を生贄に彼らを召喚したので、冥府の王の近くには魔物が殆どいない。このまま車で突っ込めば届く範囲に奴がいる。

だが、その前には將軍クラスが三人。生半可な敵でないことは学習済みだ。

全員で一気にかかって倒すしかないが、ここに冥府の王が参戦するととなると……勝ち目が薄いかもしれない。

足止めされたところに広範囲の魔法で一気に壊滅。あり得るよな。あいつは一度死んだ部下を巻きこむことに躊躇しないだろう。

このまま突撃するのは危険だと判断して、運転手のヒュールミが車を止める。

「となると、我々の出番か」

「そうなりますね。懐かしいですわ、この面子で戦うなんて」

「そつやなあ。久々に結成やな」

「黒の一団、再結成じゃのう」

「ふふふつ、またこうして皆さんと一緒にチームを組むなんて、長生きするものですね、お爺さん」

熊会長たちが楽しそうに微笑むと顔を見合わせて、荷台から飛び降りた。

「皆は先に進むがいい。冥府の王は任せたぞ」

熊会長が口角を上げて笑顔を見せる。その表情には悲痛さは微塵もなく、今から全員で何処かに遊びに行くかのような気楽さで、そんなことを口にした。

他の面子も全員にこやかに笑っている。

「ま、待って！ あの敵に会長たちだけで挑むのは無謀だよ！ 私たちも」

「そ、そうっすよ！ みんなで戦うべきっす！」

「それは許可できない。我々が戦っている最中に冥府の王が魔法を放てば、それで終わってしまう。誰かに冥府の王の相手をしてもらわねば、負けは確定だ」

熊会長も俺と同じことを思っていたのか。

「こつという地味な露払いは年寄りの仕事と相場が決まっておる。若いもんはもつと輝ける場所で戦うものじゃて」

「あと四十年若かったら、冥府の王との戦いを譲らなかつたのですけど。ねえ、お爺さん」

「あの頃は、先輩方も血気盛んでしたから、懐かしいですわ」

シメライお爺さんとユミテお婆さんが談笑して、そこに園長先生が割り込んでくる。

「ワイらも脇役になつたんやなあ。昔はブイブイいわしてたんやけど、歳はとりたくないもんや」

闇の会長も話に乗ってきて、自分の額をぺしぺし叩いている。

まるで井戸端会議でもしているかのような穏やかな空気だが、熊会長たちは冥府の王たちの存在を忘れていた訳じゃない、鋭い視線が彼らに向けられたままだ。

相手もこちら側に隙がないことを理解しているようで、未だに仕

掛けてこない。

「というわけだ。こちらのことは心配無用だ。常勝無敗の黒の一団の名は聞いたことがあるう。ここに再結成だ。皆、あの頃よりも衰えたなど言わせぬぞ」

自信満々の態度と気迫に、荷台にいた俺たちは圧倒されてしまっている。

この面子を相手に俺たちが心配するなんて、失礼な話だと即座に理解した。前々からその実力を知っていたが、今の熊会長たちはいつよりも何倍にも大きく見えた。

「うん い こう」

俺がそう言うと、ヒールミが再びアクセセルを踏む。
タイヤがキュルキュルと回り、その場から勢いよく発進する。

「後は託したぞ、ハツコン！ 皆を守ってやってくれ！」

いつもより乱暴な口調の熊会長に「いらっしやいませ」と最大音量で返す。

ここは任せたよ。大丈夫、熊会長たちなら、大丈夫！

自分に言い聞かせて、俺たちは冥府の王を目指して突き進むだけだ。

吸引力

熊会長たちが敵を牽制している間に、俺たちは迂回して冥府の王の背後へと車を進ませた。冥府の王は俺たちを正面に捉えるように体を半回転させただけで、それ以上のことはしてこない。

回り込んだ俺たちを見据えたまま宙に浮いていた冥府の王がすと地面に降り立つ。

俺たちも荷台から降り立ち、ゆっくりと向かっていく。

先頭はミシユエルと俺とラツミス。少し離れてヘブイとシユイとピティー。

五人と一台か。数では圧倒的に上回っているが、ただでさえ馬鹿げた魔力で俺たちを圧倒した冥府の王。それに加えダンジョンの力を得た今、俺たちに勝ち目があるのか。

ヒュールミの考察では、

「あれだけの魔物を操り合体階層主も制御するとなると、かなり魔力を消耗している可能性が高い。勝ち目はあると思っぜ」

とのことだった。作戦としては俺が防御に徹して時間を稼ぎ仲間を増援を待つというのが、一番妥当だという結論に達している。

ただ、敵が多すぎるので仲間の援軍が期待できないかもしれないとのことだったが、畑の無双っぷりを見る限り、防衛都市側の援軍が期待できそうだ。

ちらつと畑の方へ視線を向けたが敵を完全に圧倒していた。彼がこっちに戦いに加われれば戦力は一気に逆転するだろう。

冥府の王もそれを理解しているようで、さっきから何度も顔を怪獣大決戦の場へと向けている。

『主らに構っている時間はない。一気に勝負を決めるとしよう』

やはり焦っているな。今までのように相手を見下してから追い詰めるような真似をしてこない。

杖を頭上に掲げると、上空に黒い渦が発生する。それは周囲の空気や土を吸い込みながら、徐々に肥大化していく。まるで小型のブラックホールのようなようだ。

「隙だらけっすね」

シュイが矢を撃ち込むが狙いが逸れて、頭上の黒い渦に吸い込まれていった。本当に小型のブラックホールみたいだな。

『この暗黒球は、全てを吸い込み異界へと送り込む秘術。防御は無意味となる。貴様らに抗う術はない』

ということとは、結界で防いでも無意味だったことか？

あれっ……それってヤバいんじゃない。

「どうしよう、ハッコン！」

どうしようか、ラツミス。この展開は全員が予想外だったようで、困り顔でこつちを見ている。

えっと、どうしようか、本当に。

俺たちが迷っている間に闇の渦は巨大な渦へと変貌していく。膨張が止まった時には既に直径五メートルを超えていた。

全員をすっぽり呑み込める大きさだよな、あれ。

結界の外は酷いことになっているぞ。周りの地面から土や石が引き剥がされ、ブラックホールもどきに吸い込まれている。

驚きの吸引力だぞ。結界がガタガタと揺れて……やばくない

ですか、これ。

「ハツコン、巨大化しろ！ あれなら呑み込めないだろ！」

あつそうか、ナイスアドバイスだよ、ヒュールミ。焦り過ぎてその考えが頭からすっぽり抜けていた。

ん？ ヒュールミまだ逃げてなかったのか！ 車から降りて 結界 の中に入り込んでいる。さっきまで乗っていた車は宙に舞い上げられ、アレの中に吸い込まれていく。

彼女の判断は正しかったってことが。

「でかいよ」

これで大きくなるのが伝わっただろう、でもこの状況で 結界 から出てもらうのは危険すぎる。体を巨大化させる時もゆっくりとみんなを押し潰さないよう、慎重に慎重に。

このまま 結界 を維持しつつ 中古車自動販売機 にフォルム チェンジした。

これだけの巨体になればブラックホールもどきよりは大きい。これなら吸い込め、

『吸い込めないと思っておるだろう。ふっ』

鼻で笑われた。あの骸骨っていちいち人を見下さないといけない習性でもあるのか。

だが、強がって馬鹿にしている……のではなく、口調から余裕が感じられる。

冥府の王が掲げた骨の杖をくるっと一回転させると、ブラックホールもどきが更に巨大化した。当社比四倍以上に膨れ上がっているぞ。

あつ、これダメなやつだ。

そう簡単に吸い込まれてなるものかと、足元にコンクリート板を十枚近く出すが、巨体が 結界 ごとふわりと浮いてしまう。あの魔法には重さは関係ないのかっ!?

周囲の地面は抉れ草木は既に一本もない。アレに全てが吸い込まれていく。

「えっ、えっ、ええええっ!」

「やべえぞ、マジで!」

仲間が俺にしがみ付いているが、俺にはこれ以上どうしようもない。

体が完全に宙に浮かび、ブラックホールもどきに自ら突っ込んでいく。

何か、何か手はないのか!? 懸命に逃れる手段を考えていたのだが、打開策が思いつかず巨体が渦の中へと飛び込んでいく。

『ふははははははっ、異界への旅を楽しむがいいっ!』

頭に響く不快な冥府の王の笑い声をバツクに俺たちは闇の中へと消えていった。

闇の中で体が洗濯機の中の洗濯物のように何度も回転させられ、上下左右の感覚もわからなくなり、混乱しそうになる心を繋ぎとめているのは 仲間の存在だった。

体から漏れる灯りに照らされた仲間たちの不安な顔。ここで俺が

パニックに陥って 結果 を維持できなくなってしまったら、全員が引き剥がされてしまう。

震えるラツミスやヒュールミを見ると、勇気が湧いてくる。まだ、諦めるのは早い。冥府の王は『冥界への旅を楽しむがいいっ！』と口にしてた。

つまり、ここが終着点ではなく抜ければ異界へと到達できる。その異界がどういう場所かわからないが、この闇の中よりかはマシな筈だ。

ぐるぐると回っているのは体感でわかるのだが、周りが暗闇なので自分がどうなっているのか……あれは、光か？

闇の中に一条の光が射しているのだが、その光に向けてどうやら進んでいるようだ。

あれが出口か。どんな場所に出るのかは不明だが、出た途端に魔物の群れのと真ん中や、溶岩の中ってオチもある。意識を集中して、光の外に出ても油断はしないぞ！

視界が目も眩むような光で埋まり、仲間たちは目を手で覆っているが俺は機械の身体なので問題ない。その光の先を逃さないように凝視したまま 抜けた。

光を抜けるとそこは空中でも溶岩でも魔物の群れの中でもなく、荒野。

草木もなく大地は赤茶色で地表が痩せこけてひび割れている。空は曇天模様で稲光が遠くの方で幾つも見え、世界の終わりを連想させる場所だ。

周りにはちゃんと全員揃っているな。なんとかみんなを守れたか。俺にしがみ付いたまま、辺りをキョロキョロ見回している。

「生き物が皆無じゃねえか」

「寂しいところだね……」

「こんなところ、どうやってご飯食べるっすか」

「ハツコン……怖い……」

女性陣は全員怯えているな。シュイは食い気が勝っている気がするが。

「人がいなければ、靴もない世界ですか。最悪ですね」

「もっと、魔物が徘徊しているのかと思っていたのですが。誰もいませんね、ハツコン師匠」

ヘブイとミシュエルは一見、落ち着いているように見えるが、内心はわからない。

「ちいさく」

そう宣言してからいつもの自動販売機へと戻っていく。

巨体のままだとポイントの消費が激しいので、少しでも節約しないと。まあ、ダンジョンでもらった金銀財宝のおかげで、若干引くぐらいポイントには余裕あるけど。

それでも万が一ってこともあるし、試したいこともある。いつものサイズに戻って 結界 を張ったまま観察を続けるが、本当に何も無い荒野だ。

見渡す限りの荒野。山や小高い丘らしいものはあるようだが、それだけで建造物すら見当たらない……ん？

「ハツコン、あっちに線が一本縦にない？」

ラツミスも同じ物を見つけたのか。視界の先に空から一本地上に線が走っている。細い糸が真っ直ぐ垂れ下がっているように見えるけど、あれってかなり遠方にあるよな。

ということとは真っ直ぐに伸びた塔か何かなのだろうか。でも、長すぎる。宇宙まで続く軌道エレベーターみたいだ。

「んなことより、どうするよ。まずはこの異界は人が生きていける大気なのかってのが、問題だ。結界をといったら呼吸ができなくて死ぬってオチだと、どうしようもないぜ」

異界に飛ばされたというのに、仲間が思ったよりも冷静で助かっているけど、そうだよな。元居た世界と大気が同じだとは限らない。とはいえ、調べる方法がない。誰か試しに 結界 から出てもらう訳にもいかないし。

「そっぴや、ハツコン。前に釣りの餌出したことあったよな。あれ、もう一回出せるか？」

ヒュールミがポンツと手を打って、その言葉を口にする。

あっ、そうか、そういうことか。何がしたいのかわかったよ。

俺は釣り餌であるゴカイを取り出し口に落とすと、入れ物ごとヒュールミに 念動力 で渡した。

透明のケースからミミズのようなフォルムのゴカイを指で摘まみ「すまん」とヒュールミが頭を下げると、ひょいっと 結界の外へと放り投げた。

荒れた大地の上でゴカイがうねうねしている。外に放り出しているなりに苦しみ始めるといふこともなく、まだうねうね中だ。

暫く眺めていたが、元気なようだ。ミネラルウォーターを出して外にばら撒いていみるが、水が地面に染み込んでいくが、高温で蒸

発するという事もない。

「異様な温度というわけでもなく、呼吸も可能だと思うが」

じつと地面を見つめてヒュールミが結論を口にした。

大丈夫だとは思うけど、試してみるには勇気が必要だよな。

「そんな心配はいらぬぞ。ここはあの世界とほぼ変わらぬ世界だ」

二度と聞きたくなかった声が頭上から響いてくる。

俺たちが声の源に視線を向けると、そこには 宙に浮いたままの冥府の王がいた。

異界

「なんでてめえまで、こつち来てんだよ！」

「うん うん」

怒鳴りつけるヒュールミに思わず同意する。

異界に俺たちを飛ばして、ご満悦なのかとおもっていたのだが何故追ってきた。

「追わねば……邪神が支配せし枯れた世界で、お主らの悔しがる顔も怯える顔も見られぬではないか」

肩をすくめて呆れたような態度の冥府の王にいらつとする。

本当に性格悪い骸骨だな、こいつは。

「それに、この手で息の根を止めねば安心できぬからな。特に、その魔道具だけは壊しておかねば。我の予想の範疇を超えてくる故に」

骨の杖をビシツと俺に突きつけてくる。過剰評価しすぎだ。

つまり悔しがる顔と完全に俺を破壊する為に追ってきたわけか、ご苦労なこつて。

「じゃあ、ここで倒しちゃえば、向ここのみんなの手助けにもなるよねー」

ラツミスがぱんつと手を打ち鳴らし、大きな胸を張って笑みを浮かべる。

「そつっすね、こつちが帰れないなら、せめて骸骨も道連れっす！」

「うん……こつちで骨を……埋めてもらっ……」

「靴のない世界に飛ばされた怨みを晴らさせてもらいますよ」

「貴方との腐れ縁もここまでです！」

おー、みんな台詞が決まっているな。ここは俺も便乗して何か力ツコいいことを言っておくか。言葉を組み合わせ、簡潔でわかりやすい感じに。

「あた ま ざんねん」

頭蓋骨を見ていたら自然に言葉が出た。

冥府の王よりもラツミスがしかめ面をしている。そついや、この発言はラツミスにも言ったことがあったな。

「安い挑発だ。さて、このまま虫けらを潰すように処理してもいいのだが、楽に勝ってもつまらぬ。よって、我に万が一勝てた時は……元の世界へ戻そうではないか」

思いもよらなかつた言葉を口にした冥府の王が骨の杖を薙くと、少し離れた場所の地面に紫色の光を放つ魔法陣が現れた。

「我の死を発動条件にしておいた。我を倒した数刻後にその魔法陣は起動する。もちろん、繋がる先は元の世界。どうだ、これでやる気が出たであろう」

こつちとしてはありがたいが、本当にそれが元の世界へ繋がる魔法陣だという保証はない。だが、それに望みを託すしかないことも重々承知した上での行動か。

「……お前らが戦っている間に、オレはあの魔法陣が本物か調べておくぜ」

ヒュールミが囁く声に反応して、全員が小さく頷く。彼女が調べてくれるなら、俺たちも安心して身を任せられる。

「あと、外の空気が本当に大丈夫か……試してみるぜ」

「えっ、どついうことヒュールミ？」

ラツミスの問いに答えず、彼女は後方へ大きく跳んだ。

その体が 結界 の青く透明な壁をすり抜け、外へと出てしまう。大胆すぎる行動に止めることすらできなかったが、 結界 外のヒュールミは手足を振り、屈伸をして大きく深呼吸をしている。

「うっし、大丈夫だぜ、みんな。ちょい寒いぐらいで問題はねえ」

冥府の王は嘘を言ってなかったのか。そういや、今までも無理な条件を提示して、脅迫をしてきたことはあるが、嘘を吐いたことはなかったな……こいつ。

「そんな下らぬ嘘など吐かぬ。我の前に立ちはだかり、何度も邪魔をしてきたことに憤りを覚えはするが、同時に評価もしておるのだよ。故に、自らの手で始末をしなければならぬ」

まあ、ここに放置されてもどうにかして戻ってきそうだよな、俺

たちなら。

こつちとしても、冥府の王との付き合いはこれっきりにしたい。望むところだ。

と格好つけたのはいいけど、問題はこの面子で勝てるか。

ここにシメライお爺さんとユミテお婆さんのツートップがいれば、勝率はぐんと上がるのだけど。冥府の王が大技を使ったことで消耗していれば勝ち目はある筈だが。

そんな心中を押し殺し、俺はラツミスに担がれたまま前進する。ヒュールミだけは魔法陣を調べに行ったので、巻き込まないように離れた場所で戦いたいところだけど。

「お主らもここで戦っては、あの女が心配で力を発揮できぬだろう。移動するぞ」

冥府の王から切り出してくるとは。今までは人質を取ったり挑発したりと、搦め手や嫌がらせが趣味だったくせに、今回はやけに気が利くな。裏があるんじゃないか？

そう思いながらも、スーツと宙に浮かんだまま後方へと移動する冥府の王の後を追う。

「どうしたのですか。もう、人質や罠にかけたりしないので？」

へブイがそう切り出すと、冥府の王は眼球のない窪みをこつちに向けた。

「お主たちだけは、実力で圧倒的な力でねじ伏せなくなったのだ。卑怯な手段で負けたと言いつつ、力の差を見せつけたくなった」

いつもと違い静かな物言いだな。弱者を見下すいつもの口調は何

処にいった。

「それに、我が軍は壊滅状態だ。謀反も魔王に伝わっておる。このままでは破滅を待つのみ。だがな、諦めはせぬぞ。お主らを排除し、我が力を確認した後に、ここで更なる力を蓄えあの世界へと帰還する。世界を手中に納める為につ！」

今回の一件が失敗したことは認めているのか。その上で俺たちを
実力で倒して自信を取り戻したいと。

若干、八つ当たり気味だが、そこまで追い詰めたのも俺たちだからな。

正々堂々と戦ってくれるなら、こちらとしてもありがたい。

魔法陣から距離を取ると、冥府の王がピタリと動きを止め地上へと降り立つ。

俺たち相手なら浮かぶ必要もないということか。その自信が虚勢じゃないのが厄介だ。

「さあ、好きに掛かってくるがいい。暫くは手を出さないと約束しようではないか。本物の絶望を見せてやるっ」

ラスボスっぽい台詞だ。

前衛担当の俺とラツミス、そしてミシュエルがにじり寄る。今回はピティーも近距離戦に参加してもらう。いつもは後方で護衛が多いのだが、本人の希望もあり敵の攻撃を受け持つ役目を担っている。少し離れた後方にはヘブイがモーニングスターの鎖を伸ばした状態で待機。治癒の役目もあるので、積極的には戦闘に参加しない。

更に後ろにシュイが弓を構えている。

ここに魔法担当がいればバランスがいいが、相手は魔法に対して耐性も強い。なので、物理攻撃特化の方がダメージは通るそうだ。

ミシュエルの大技か、ラツミスの渾身の一撃が入れば……倒せる

可能性は高い。

前衛の三人が目配せをすると、まず俺たちが飛び込んでいく。俺の 結界 があるので、少々無謀な突撃をしても守れる。

「いっくよおおおっ！」

正面から全力で突っ込んでいくラツミスを正面から冥府の王が見据えている。

数メートルもの距離を、渾身の力で地面を蹴りつけることで跳ぶように間合いを詰め、目の前に冥府の王の姿を捉えた。

手の届く距離にいる冥府の王に戦場で磨き上げた、お得意の正拳右突きを放つ が、薄黒い半透明の壁に拳が弾かれる。

衝突事故のような轟音が響くが、正面の壁にはひび一つ入っていない。

更に左右の拳を叩き込むが、その壁を打ち破ることができないでいる。冥府の王を囲む魔法の障壁か。 結界 と似たような性質っぽいな。

「ならば、これはどうですかっ！」

後方に回り込んでいたミシュエルが大剣に炎を纏わせて、上段からの一撃を振り下ろす。

爆炎と熱風が辺りに吹き荒れ、俺は慌てて 結界 で余波を防ぐ。赤く染まった視界が元に戻るが、冥府の王が無傷で佇んでいた。

「なかなかの威力だ。我でなければ、既に滅んでいたかもしれぬ。だが、その程度では我が最も得意とする闇の魔法、暗黒の障壁は打ち破れぬぞ」

なかなかの威力……壁が一切傷ついていないのに威力がわかる？

俺と同じようにダメージによるポイントの消耗が当人にはわかっているということか？

いや、この世界の人にはポイントが見えてないし、その存在すら知らなかった。となると、魔力の消耗が見えていると考えたらどうだ。

攻撃を受けて魔力が消費しているとしたら……。

俺が考察している間もラツミスとミシユエルの激しい攻撃が続けられている。

冥府の王は表情筋が消え失せているから、相手が何を思っているのか顔からは読めない。

だけど、攻撃が当たる度にほんの僅かだが体が揺れている。実は気にしているのか？

「このまま、受け続けるのも芸がないか。少しばかり遊んでやるとしよう」「

おいおい、暫く手を出さないって文言を忘れたのか。
やっぱり、これ結構効いてるよな。

「てを だ さん」

挑発を兼ねてさっきの台詞を口にしてみた。表情がないのに冥府の王の苛立ちが伝わってくる。自分の発言を覚えていたようだ。

「ふっ、何もしないのも飽きてき」

「ざんねん」

こっちに顔を向けた冥府の王……眼球がないのに睨まれているのがわかる。

これ以上挑発するのは危険か。
もう何も言わず、手にした杖を上空へ突き刺すように掲げている。

「皆さん、離れてください！」

へブイの叫びに応じて、ラツミスとミシユエルが距離を取る。

闇の壁が消えると同時にシュイが矢を撃ち込んだのだが、冥府の
王の直前で弾かれてしまった。骨の腕が弾いたようだ。

魔法使い系なのに運動能力も高いのか。

冥府の王の周囲にどす黒い槍のようなものが無数に浮かんできて
いる。

今度はこちらのターンか。ここを凌ぎ切って、反撃の糸口を掴ん
でみせるぞ。

最後の進化

漆黒の槍が俺たちを狙い放たれる。

近くにいたミシュエルは俺の元に走り込んできたので、ラツミスと一緒に 結界 で包み込んだ。

あの槍がどれだけの威力であろうと、防ぐ自信があるが問題は残された仲間たちだ。

俺たちの方には十本近い槍、そして、三人の仲間たちへ残りの槍が唸りを上げて迫っている。

向こうの様子が気になるが 結界 に漆黒の闇が激突する度に軽い爆発が起こり、視界が黒く塗りつぶされてしまう。

全ての槍を防ぎ切った俺は仲間たちがいた場所へ視線を向ける。

そこには巨大な二枚貝……ピティーがいた。へブイもシュイも盾の内側にいるということは、全ての攻撃を防ぎ切ったのか。

「へブイ……強引……」

「そつつすよ、女を鎖で引き寄せるなんて最低っす」

「非常事態でしたので、お許しください」

謝罪するへブイが手にしている、モーニングスターの先端にある鉄球が地面に落ちている。よく見ると、ピティーとシュイの胸に鎖が巻き付いているぞ。

つまり鎖だけの状態で伸ばして、二人に巻き付けて強引に引き寄せたのか。

ナイス判断だよ、へブイ！

「アレを防ぐか、いやはや、やりおるわい」

冥府の王は手を叩き、素直に称賛してくれている。珍しい。

「これは防衛に回るより一気に攻めた方がよいみたいですね」

「うん、怒濤の攻撃つすよ！」

「ピティーもやる！」

愚者の奇行団の面々はやる気十分だ。

確かに、受け手に回っているだけでは勝利は掴めない。

「うちも行くべきやと思う」

「私もそう思います！」

ラツミスもシユイも同じ考えか。

そうだな、やるか。あの黒い障壁をうち破らない限り、こちらに勝利はない。

そして、その方法について一つだけ試したいことがある。

「いこう」

俺の発言が合図となり全員が一斉に攻撃を仕掛ける。

シユイの目にも止まらぬ速さで撃ち込まれる矢。

ヘブイがモーニングスターを振るうと、中距離から挟み込むように迫る棘の付いた二つの鉄球。

ピティーはその場でくるっと一回転すると、遠心力を利用して右手の巨大な盾を投げつける。よく見ると、盾には細い鎖が繋がって

いるのか。

ミシユエルは竜の喙から伸びる灼熱の刃を、疾風の踏み込みと同時に関き放つ。

そして破壊力の塊である拳を叩き込む為に、俺たちは正面から突進する。

「ふはははは、無駄だ！ 我が闇の障壁は誰にも打ち破ることはできぬ！」

俺の 結界 と同じく全幅の信頼を寄せているようだな、その黒い壁に。

だが、それはどうかな！

俺はずっと取りたかったある自動販売機を取得すると、フォルムチェンジをした。

新たな体は一見、大きなトロフィーのようにも見える円柱の形をしているのだが、上部にコイン投入口があり、そこにコインを入れると、てこの原理を利用して体内にあるソレが蛇口から出る仕組みになっている。

俺は商品であるソレを操り、相手の闇の障壁へと大量にぶっつけた。

「そのような水如きで、我が障壁を破れるとで……なっ！？」

ジュウツと熱した鉄板に水を零したような音がすると、闇の障壁から湯気が立ち昇り溶けだしていく。

「我が障壁を溶かすだっ！」

冥府の王が驚きのあまり叫んでいるが、この場で一番驚いているのは俺だ。

えっ、こんなに効き目があるの？ で、でも、結果オーライ！
今が障壁を打ち砕くチャンスだ！

全員の攻撃が障壁に叩き込まれると、あれ程、強固だった黒い壁が薄いガラスのように砕け散る。

相手を守る壁は消滅した、これでおしまいだ。

素早く反応したミシユエルとラツミスが更にもう一步踏み込み、
渾身の一撃を放つ直前 動きがピタリと停止した。

えっ？ もう、二度とないぐらいの絶好のチャンスだというのに、
二人は歯を食いしばった状態でそれ以上動こうとしない。

いや、これは……動けないのか？

「まさか、ここまで追い詰められようとはな。そやつらの影を見る
がいい」

冥府の王は動けない仲間の顔を一通り眺めると、スーッと後方へと地面を滑るようにして移動する。そして、顎に手を当てながら、
そんなことを言い出した。

俺は視線をみんなの影へ移すと、全員の影に太い漆黒の槍が突き刺さっている。

「我が槍は普通に突き刺し爆破することも可能だが、相手の影に刺すことにより生物の動きを封じることが可能なのだ」

そんな奥の手を所持していたのか。どうりで余裕の態度が崩れなかったわけだ。

「しかし、魔道具よ。どうやって、私の障壁を消した。その珍妙な
格好に秘密があるのか」

珍妙とは失礼な。これは最古の自動販売機であるエジプトの 聖

水自動販売機 だ！

自動販売機マニアとしては常識でもある、紀元前215年ぐらいに神殿の前に置かれていた、由緒正しき自動販売機。

この姿になれたことに感無量で身も震えそうだが、今はそんな状況じゃない。

聖水の効果が思ったより強力だったことは嬉しい誤算だが、二度と同じ手は通用しないだろう。それに、今、全員の動きが封じられている。

って、そうか、ラツミスだけなら。

俺は 結界 を発動してみる。

「うわっ、あっ、動ける！」

手を握り締めて嬉しそうに声を上げている、ラツミス。

やっぱり、 結界 ならこの硬直からも逃れられるのか。

「やはり、最後まで厄介なのは貴様か、魔道具ハツコン」

「ありがとうございます」

褒めてもらったので一応礼を言っておこう。

さーてどうする。このまま、仲間を全員 結界 に回収してもらって、硬直を解くのが最優先事項かな。

「先に釘を刺しておくが、お主らが仲間を解放する為に動けば即座に残りを殺す。それを止めたくば、わかっておるな？」

もったいぶる男は嫌われるぞ。この物言い、何を言いたいのか理解してしまえるぐらい、こいつとの付き合いも長いつてことか。

「一騎打ちがしたいの？」

「お主らを倒せば私の勝利は揺るがぬ。その魔道具と怪力娘よ。最後の対決といこうではないか！」

あーもう、嬉しそうだな、冥府の王。

だけど、一対一の対決……一対一プラス一台の対決という発想嫌いじゃない。冥府の王には彼なりの悪の美学があるのか？

この提案には乗るべきだな。相手の動きを封じる能力がある限り、仲間の硬直を解いたところで同じことの繰り返しだ。

わざわざ後ろに下がり、戦いに仲間を巻きこまないようにしてくれている。ここまでお膳立てされたら やるしかない！

「二人で勝つよ、ハツコン！」

強い意志の宿った瞳を俺に向けている、ラツミス。

一人と一台じゃなく、二人と言ってくれた……ありがとう。

キミと一緒に戦えるなら、俺の答えは始めから決まっている。

「いらつしゃいませ」

最高の返事はこれだよな。

ラツミスが大地を踏みしめ大きな歩幅で疾走する。

その先にいるのはもちろん、冥府の王。

俺は聖水をラツミスの両腕にぶっかける。これであの障壁を出されても、容易に壊すことが可能となった。

「障壁が通用せぬとなると……近寄らせる訳にはいかぬな。大地よ 罅を開け」

足下に亀裂が走り、大地が真っ二つに裂ける。
俺たちを落とそうとする魂胆らしいが、それは以前、死霊王に見せてもらった。

「二度も引つかからないよ！」

地面が割れる前に大きく横に跳んだことで、割れ目に巻き込まれることはなかった。少し迂回することになるが、そのまま脚を止めずにラツミスが突っ込む。

「では、猛き水よ」

今度は冥府の王の足下から大量の水が溢れ出したかと思うと、それは津波となり俺たちへと押し寄せてくる。

即座に 結界 を張ると、ラツミスもすぐさま地面を両足で交互に蹴りつけ、足首の上辺りまで地面に足を埋没させた。

そのタイミングで大量の水に吞み込まれるが、ラツミスの踏ん張り と 結界 の強度でなんとか持ちこたえる。

「楽しませてくれる。では、もう一度耐えてもらおうとするか。猛き水よ」

再び発生した津波に吞み込まれるが、今度も同じように踏ん張ってやり過ごせる筈だったのだが、俺たちを取り囲んでいた水が急に白く染まる。

半透明の白が 結界 の外を覆い、それが一向に晴れる気配がない。

「水ごと凍らせてみたが、どうかね」

そういうことか。大量の水を凍らせて、俺たちは氷の中に閉じ込められている。

「ハツコン、結界を消して。うちが氷を破壊するから」

それしか手段はないか。そう判断して 結界 を解いた直後、冥府の王の声が微かに届く。

「大地よ罅を開け」

足下の地面が消え、身体が一瞬だけ浮遊した感じになるが直後に落下していく。

「えっ、うんと、とりゃああー！」

驚きながらもラツミスが氷を粉碎してくれた。

でも、足場もない状態じゃ、このまま真下に落ちるのみ。となると、コンクリート板召喚！

足下に出したコンクリート板をラツミスが蹴りつけて跳ぶと、割れた大地の側面へと到達する。そこからは、怪力と運動神経を生かし、三角蹴りの要領で側面を蹴りつけて、地上へと舞い戻った。

「これでも死なぬか。結構、結構。もう少し我を楽しませてくれ」

完全に弄ばれている。実際の話、俺たちは冥府の王に触ることも出来ず、必死になって距離を詰めたが、相手はまた少し下がっているのでやり直しだ。

「やばいかな、ハツコン。どうしようっ」

そんな弱気な声を出さないでいいよ、ラツミス。

あっちが奥の手を隠していたように、俺だって奥の手を隠していた。

ずっと考えていたけど、手を出せなかった一つの機能。

生涯手が届くことがないと思っていた、あの能力。

今ここで、選ぶ時が来た。

そう、この世界に転生したばかりの頃に見つけたまま放置していた、10億ポイント消費して得られる、

変形の機能を！

10億ポイントの価値

この世界に生まれ変わってからずっと気になっていた 変形 の機能。

初期から機能欄に存在はしていたが、あえて無視をしてきたのだ。10億ポイントも消費しなければならぬので、永遠にこの機能を得ることはない……そう思っていた。

だが、聖樹でダンジョンマスターからもらった財宝の数々を吸収したことで、俺のポイントは10億を突破することに成功する。

一見、無謀にも思える冥府の王との戦いを選んだ理由が、これだ。今までの俺なら奴との戦いは躊躇していただろう。しかし、変形 を選ぶ余裕があったので積極的に戦うことを選択した。

さあ、機能欄の 変形 を取得するぞ！

俺以外の誰にも見えない液晶画面に浮かぶ 変形 に触れ、10億ポイントと引き換えに 新たな力が体中に漲っていく。

変形 がどういった能力なのか、その情報が頭だけではなく体中に浸透していく。

「なんだ！？ その金色の輝きは！」

「えっ、ハッコンどうなっているの！？」

今、金色に光っているのか俺は。

冥府の王が驚愕に顎が落ちるぐらいまで開け、ラツミスが必死になって俺を見ようと首を限界までひねっている。

この能力は……制限時間が十分なのか。一日に一度しか発動できず、途中で解除することも不可能。そして、時間が経過すると二十四時間は元の自動販売機以外の姿になることができない。

デメリットは覚えた。本当に知りたいのは 能力だ。
変形 には大きく二つの能力がある。

「光が消えた……こけおどしか！ そんなものに怯えるいわれはない！」

ただの見せかけだと判断したみたいだな。

こちらに杖の先端を向けて魔法を発動するつもりか。

俺は自動販売機の右側面から 高圧洗浄機 のノズルとホースを伸ばし、発射口を限界まで絞り最大の威力で水を放つ。

杖から生み出された炎の球が周囲の空気を歪ませながら迫ってくるが、それを高圧の水系が貫き冥府の王へ突き進む。

ただの水が炎の球を貫くとは思っていなかったのか、あの黒い障壁を張らずに咄嗟に杖で水の糸を受け止めた。

「なっ！ ただの水が、この杖を両断するだど！」

無数の骨の腕が集まり杖を成していたのだが、それが鋭利な刃物で斬られたかのように真っ二つに両断される。

限界まで威力を高め発射口を絞った 高圧洗浄機 は既に洗浄の域を軽く超え、ウォーターカッターと同等か、それ以上の威力だ。

高性能のウォーターカッターは鉄鋼やダイヤモンドすら切断する！
だが、第一の能力に驚いてもらうのは、ここからだ。

俺は基本の自動販売機の姿のまま、左側面から新たにガソリンを給油するノズルとホースを伸ばす。

高圧洗浄機 と同様にノズルを 念動力 で操り発射口を冥府の王に向け、レバー引いてソレを発射する。

「そのような二番煎じは通用せぬ！」

壊れた杖を投げ捨て、今度は黒い障壁を張ったか　予想通りに。勢いよく噴出した液体が黒い障壁に触れると、あっさり防がれることなく……障壁を溶かしていく。

「これは妙な形をした魔道具が出した水！　しかし、貴様の姿は変わっておらんぞ！」

「なに、なに？　えっ、何しているのハツコン！？」

冥府の王も戸惑っているが、背負っているラツミスも結構取り乱している。

無理もないか。見えない分、ラツミスのほうが驚きは大きいかもしれない。

相手に考える暇を与えず、一気に押し込むぞ！

今度は　コインロッカー　に変形すると扉をすべて開ける。

そこに今、放り込んでおいた大量のミネラルウォーターのラベルが張られたニリットルペットボトルを、冥府の王の頭上から落下するような放物線を描くように調整して弾き飛ばす。

更に、右側面と左側面からもう一本ずつ、軽油とハイオクのノズルを生やし、その照準を冥府の王へと合わせた。本体は元の自動販売機に戻して。

上と正面からの攻撃に冥府の王は冷静な判断力を失い、再び黒い障壁を発生させた。

降り注ぐペットボトルの容器を消し、その中身だけが豪雨となって降り注ぐ。そして、四つの発射口からは大量の液体が飛び出す。

液体が黒い障壁に触れたとたん、ジュースという熱した鉄板に水を垂らした音が響き、壁が薄い氷に熱湯をぶっつけたかのように溶けていく。

「何故だ、何故、我が鉄壁の障壁がいとも容易く崩される！」

「これこそ へんけい だいいちののうりよく」

「えっ、ハツコンがちゃんと話して……」

どうやら 変形 を発動中はあらゆる音声機能を合わせ組み合わせることが可能になり、すべての発言が可能となるようだよ、ラッミス。

これはおまけみたいな能力だけだね。

本来の 変形 第一の能力とは、

《取得した全ての自動販売機や機能を組み合わせることができる。

その際に自販機の体を自在に変形、付け足すことが可能となる。更に商品の中身を入れ替えることや、容器を変形させることも可》

つまり、元の自動販売機に 高圧洗浄機 や 給油計量器 のノズルを生やすことも、ミネラルウォーターの中身と排出する液体を聖水に入れ替えることもできるようになった、ということだ。

更に追い打ちとして コインロッカー にペットボトルを補充して山なりの軌道を描いて冥府の王を狙う。

数重ものペットボトルが降り注ぐ中、冥府の王は四本のうちの二本の腕を掲げた。

地面から舞い上がる竜巻に冥府の王が包まれ、ペットボトルは弾かれ周辺の地面へと転がり落ちる。

「障壁で防げぬのであれば、風ですべてを弾き飛ばせばよい！」

ノズルから発射された聖水も逸らされ、冥府の王まで届いていないようだ。

なるほどね、障壁には強い聖水だけど風で吹き飛ばされてはどうしようもない。

それでも懲りずにペットボトルを射出するが、弾かれ周囲に転がっていく。

「その謎の水は完全に防いだ。少々驚かされたが、これで貴様も終わりのようだな」

勝ち誇っていらっしやるが、それはどうだろうか。

「らっみす ぜんりよくで すいちよくにとんでくれる?」

「えっと、真上に飛ばばいいのかな?」

「うん うん おねがい」

「任せて! ハツコンとちゃんとおしゃべりできるのって……楽しんでねっ!」

喜びが溢れ漏れている満面の笑みを浮かべ、ラツミスが大地を全力で踏みしめ跳んだ。

急速に地面が遠ざかり、眼下には小さなフィギュアのような大きさになった冥府の王が、竜巻の中心部にいるのが見える。

本気で跳躍したら俺を背負った状態でも十メートル近く跳べるのか。凄いなラツミスの脚力は。

ここで俺がフォームチェンジするのは 中古車自動販売機 だ!

「しよいこ こわれるから からだにしがみついて」

体が急激に巨大化することで背負子の紐が千切れる。ラツミスは

俺の言葉に従って体に抱き着いているので、振り落とされることはない。

取り出し口というか建物の入り口と言うべきか、そこから大量の中古車が 結界 で弾き飛ばされていく。

中古車爆撃を喰らってみろ！

竜巻ごときでは中古車を防げないと判断したようで、風が止むと代わりに黒い障壁が現れる。それも、今度は学校の体育館ぐらいはありそうな巨大な壁が取り囲んでいる。

まあ、そつくるよね。

中古車が黒い障壁に激突して炎上しているが、ひび一つ入っていない。

やはり単純な防御力なら 結界 に匹敵するようだ。だけど、俺の能力を忘れていないか。

二台目は不自然なぐらい車体がびしょ濡れの状態で黒い障壁へ衝突した。

一台目と同じく爆炎が上がり破壊音が響くが、今度は障壁に大穴が開いている。

次々と落下していく中古車は既に聖水で濡らし、車内は聖水で満たされている。軽トラックなんて荷台に大量の聖水入りペットボトルを満載しているぞ。

冥府の王も聖水対策を考えていたらしく、黒い障壁を何枚も重ねているようだ、それすら突き破り破壊してみせる！

数十台の中古車が衝突破壊されていく。

俺たちは地上へと着地すると、コインロッカー から取り出した背負子を再びセットして担がれると立ち上がり、黙って正面を見据えた。

そこには黒い障壁が全損しただけではなく、四本あるうちの二本の腕を破壊された冥府の王がいる。

黒のローブは所々に穴が開き、裾が焼け焦げているようだ。だが、ぼろぼろの姿でも雄々しくその場に立ち、倒れることなく視線を合わせている。

「見事だ。お主らを未だに甘く見ていたことを、心から詫びよう。余力を残して戦おうなど、愚かな判断であった。全身全霊をもって勇敢なる者を打ち砕こう！」

今までと違い熱意のこもった言葉を吐き出し、冥府の王の体が漆黒の闇に包まれた。

この後どうなるかはわからないが、隙を見せている今の状態なら攻撃が当たる。頭ではそう思っているのだが、体を動かさずに相手の闇が晴れるのを黙って待つ自分がいる。

闇が薄れた先にいるのは、漆黒の骸骨だった。

巨大な体は縮小……いや濃縮というべきか。大人の男性よりも少し小さいぐらいに変貌している。闇よりも黒いローブは袖がなく、肩口から細く黒い骨の腕がむき出した。

四本あった腕は二本となり、長く立派な尻尾も消え失せている。ビジュアルだけなら弱体化したかのように見えるが、常時体から吹き出ている漆黒の闇と、押し寄せてくる圧迫感が只者ではないことを、嫌というほどに伝えてきた。

「ハッコン……あれ、なんか、凄く……怖いよ」

小さな鳴き声とも取れそうな弱弱しい声。触れている背中から彼女の震えが伝わってくる。

あの異様な姿に本気で怯えているのか。ここは男として、自動販売機として、ラッミスを安心させていいところ見せないとな。

「だいじょうぶだよ らっみす かならず かってみせるから お

れをしんじて」

そう言って商品から花を一輪取り出して 念動力 でラツミスの前に持っていく。

素朴だが白く美しい花を見つめていたラツミスは受け取ってくれ
ると、その花の茎を胸の谷間に差し込んだ。

「ごめんね、ハツコン。うん、私は今までもこれからも、貴方を信
じる！」

背後から見える横顔には怯えの色もなく、凛々しい表情で冥府の
王を睨みつけている。

これなら大丈夫だな。安心してラツミス。俺だってまだ本気じゃ
ない。

敵が最終形態になったというのなら、俺だって 変形 第二の能
力を披露するまでだ！

ドリームワールド

漆黒の骸骨姿が、ただのこけおどしという可能性だって残されている。

四つのノズルを操り発射口を冥府の王へと向けた。

細く圧縮した聖水を発射して、相手の実力を見極めさせてもらう！
聖水の糸が人の目では追えない速度で射出され、ラツミスが一息つく間に冥府の王へと突き刺さった…… ように見えたのだが、突如現れた黒く四角い小さな壁に防がれた。

黒く四角い壁は四つ。それが宙に浮かび、聖水を正面から受け止めている。

壁を避けるように着水位置をずらす、壁も自在に動き聖水を逃さない。

「魔力濃度を上げ、全体を覆うのではなく強度を上げた。これであれば貫けぬようだな」

説明ありがとう。なるほど、範囲を絞って強化したと。これ、ペットボトルを上空から落としても、また風で跳ね返されるだけか。

と、結果がわかっていながらやってみると 壁を維持したまま同時に風を操り、周辺にペットボトルが散らばるだけだった。

「では、こちらの攻撃の順番か。その結界……貫いてみせようぞ」

今までの高慢な態度ではなく、冷静な口調に静かな自信が見える。空を掴むように右手を伸ばすと、その手に黒く鋭い闇の槍が生まれた。

その槍は濃厚な闇を吐き出し、先端はドリルのように捻じれてい

る。見た目からして、今までとひと味違っぞ。

「この魔槍を防げるかな」

冥府の王が軽く腕を振ると、手にしていた魔槍が解き放たれる。螺旋の回転をした魔槍が 結界 を貫こうとギョルギョルと奇怪な音を発しながら、飛び掛かってきた。

先端の闇が更に濃く渦を描いているのが正面からよく見える。今まで 結界 はどんな攻撃も防いできた。何よりも信頼している俺の能力だ。

だけど、言い表せない不安と予感が全身を駆け巡る。

結界 を最大強度で張ると同時に、

「ふせて」

全力で叫ぶ！

一瞬の躊躇いも見せず、ラツミスが地面に体を投げ出すようにその場に倒れる。

魔槍が 結界 の壁に触れた途端、青い壁が捻じれるとぽっかりと穴が開く。そして、魔槍は俺の体の上ギリギリを通っていき、後ろの壁も貫いていった。

おいおい、相手の動きをほんの少しだけ押しとどめただけだったぞ。まるで、紙でも貫くかのような威力。ここで、絶対の防御が崩されるのか……。

「ふむ、容易に貫けたようだ。さあ、どうするのかね、ハツコン」

再び魔槍を握りしめ掲げている、冥府の王。

こちらが対策を練る暇もなく、第二弾が発射される。

伏せた状態から片膝立ちのラツミスを正面から突き刺す軌道。あ

れを止めなければ俺とラツミスが串刺しだ。

意識を集中して俺たちと槍の間に分厚い一枚の壁を創造する。六方を囲む青い 結界 の壁を一边に重ね更に圧縮して分厚くする。

つまり、冥府の王のパクリだ！

深い海のように濃い青が闇と激突するが、前回と同じように容易く貫かれることもなく、魔槍を止めている。

空中で拮抗していた青い壁と闇の槍だったが、俺の生み出した壁に亀裂が広がっていく。これ以上は危険だと判断して、逃げるようにラツミスを促そうとした直後、黒と青が弾けた。

「きゃあああああつ！」

ラツミスの叫ぶ声が爆音と入り交じり、俺に届いてきたが何もできないでいる。

視界は黒と青の奔流で埋め尽くされ、辛うじて再び小さな 結界 を張ることで精いっぱいだった。

荒れ狂う光と風が止むと、冥府の王は平然とこちらを眺めている。ラツミスは無事だな。ギリギリだったがあの攻撃を防ぐことができた。今回のでコツは掴んだ。今度はもう少し強度を上げることが可能だろう。

「いやはや、あれを防ぐか。それも、私の行動を真似て。だが、そこで安心してもらっては困る。これはどうするのかね？」

今度は両手を万歳するかのように空へ突き出すと、頭上に二十近くの魔槍が生まれた。

「この数、どう対応してくれるのか楽しみだ」

「無理だよ……ハッコン。あれはもう、無理だよ……」

冥府の王の余裕に対し、ラツミスは絶望。今にも泣きだしそうな瞳が俺に向けられる。

一本を辛うじて防いだけだもんな、そりゃ諦めもするだろう。だけど……、

「まだだ あいてから めをはなすな らっみす」

「えっ」

俺の言葉が意外だったのだろう、涙目のまま呆けた顔でこっちを見た。

「しんじて おれを なにがあっても かならず きみはまもってみせる」

そう断言すると。ラツミスは目元を拭い、頬を挟むようにして叩くと……いつもの笑顔を見せてくれた。

「うん！ 信じるって言ったもんね！ 誰よりも信頼しているよ、ハッコン！」

よっし、それでこそ、俺が大好きなラツミスだ。

信頼には必ず応えてみせる！

さあ、冥府の王。刮目して見るがいい！ これが 変形 第二の能力だ！

「よくぞ、ここまで戦った。敵ながら……この光は、まだ足掻くというのかっ」

勝ち台詞を邪魔するタイミングで周囲から光が溢れる。それは大地の至る場所から天に向かって伸びる光の柱。

更に冥府の王や俺の周辺には濃い霧が漂う。

白い霧は視界を埋め尽くし、結界の外は白の世界となる。

「ここにきて、目くらましか。失望したぞ、ハツコンよ！」

怒声と共に強風が吹き荒れ、白い霧が散らされる。

「もう負けを認めたらどう……だ……ど、どうなっている！ ハツコン、キサマ何をしたっ！」

周囲を見回し、取り乱して声を荒げる冥府の王。

彼の視線の先には 自動販売機があった。

正面にも、横にも、後ろにも。

荒れた大地に雄々しく立つ幾つもの自動販売機。

キャンデー自動販売機、酸素自動販売機、生花自動販売機、冷凍食品自動販売機、大人の自動販売機、ドライアイス自動販売機、風船自動販売機、段ボール自動販売機、野菜自動販売機、カップ麺自動販売機、高圧洗浄機、給油計量器、温泉自動販売機、ハンバーガー自動販売機、お弁当自動販売機、うどん自動販売機、コンビニ自販機、等々、無数の自動販売機がそこにあつた。

どの自動販売機にも光が灯り、稼働中であることがわかる。

自動販売機に取り囲まれた冥府の王は狂ったように首を巡らせていたが、ピタリと動きを止めると額に手を当てた。

「くくくくつ、はーっはははははは！ ここにきて幻影かつ！
そのようなもの、全て貫けばよいだけの話ー！」

頭上の黒い槍たちの穂先が一本ずつ周囲の自動販売機へ狙いを定める。

そして、全ての自動販売機を破壊へと導く魔槍が落ちる。凶悪な豪雨が降り注ぎ、黒の爆炎が大地を黒く染めた。

「所詮は無駄な足掻き。少々驚かされはしたが、これで終わりだ、くっははははははっ！」

勝利を確信した冥府の王が両腕を広げ、体を反らし狂ったように笑っている。

「これで後顧の憂いは断てた！ 残った雑魚共を掃討する」

「まだ おわって いない」

勝利宣言に割り込むように発言したのは、この俺 自動販売機だ。

「なにも おわっていないぞ」

巻き上がった砂塵が晴れると、無数の自動販売機が無傷でそこにいる。

全ての自動販売機が前に青い壁を張った状態で。

「な、に……幻が結界をつ！？」

「それはちがう すべて ほんものだ すべてが おれとどうとつ の そんざい」

そう、これは全てに俺の意思が宿り、まったく同じ能力を秘めた自動販売機。

変形 第二の能力。それは、

《商品を自分とまったく同じ能力の分身に変形させる》

これだ。10億ポイントという桁外れなポイントを注いだ機能は、その消費ポイントに見合った能力だった。

正直、ちよつとだけロボットにでも変形できるのではないかと期待していた。この状況は変形というより分身に近い。

でも自動販売機マニアとしては変形して手足が生えるより、無数の自動販売機を生み出し操れる今の状況のほうが嬉しかったりする。事前にペットボトルを周辺にばら撒き、この展開に持つていくための準備は整っていた。

さあ、無数の俺と戦ってもらおうか、冥府の王！

「ば、ばかなつ！ このようなことがあって、たまるかああっ！」

頭を振り乱し叫ぶ冥府の王を、俺は全ての自動販売機から捉えている。

「ハ、ハッコン。これって全部、ハッコンなんだよね？」

俺の背後に隠れてもらっているラッミスが、キョロキョロと興味深げに見回しながら俺に質問をした。

「うん そうだよ じかんせいげんあるけどね」

「ふああああ、すつごいね！ これって、どういう能力なの？ 技だったら技名とかあるのかな？」

技名か。何も考えてなかったけど、そうだな強いて言うなら、これか。

「そうだね わざめいは

ドリームワールド
自動販売機コーナー」

「ドリームワールド……」

そう、自動販売機マニアにとって夢の世界。俺の願望が詰め込まれた多種多様な機種が並ぶ、自動販売機コーナー。

思う存分、楽しんでいってくれ、冥府の王！

自動販売機コーナー

ナンバー4と20はダンボール、風船のコンボで宙に浮いてくれ。その他の自動販売機は 高圧洗浄機 のノズルを出して射撃準備！俺の意思に従い、すべて自動販売機が行動を始める。

ふわふわと空に浮かぶ ダンボール自動販売機 は 結界 内部を風船で満たして上空で待機。

その様子に冥府の王も気にはなっているようだが、地上の自動販売機のノズルが全て自分に向けられているので動くに動けない状態だ。

さて、最終決戦にはあれがつきものだよな。ということで、ナンバー21と24は ジュークボックス にフォルムチェンジ。決戦に相応しい壮大な音楽で頼む。

冥府の王を中心に東西南北に設置されている自動販売機が ジュークボックス に変化する。

それでは、ミュージックスタート！

荒れ果てた荒野に響き渡る荘厳な音楽。クラシックをチョイスさせてもらったが、ラスボス戦に相応しい選曲だろ？

「どこから聞こえてくるのだ、この音楽はっ！」

「さいごのたたかいは ビーjeeえむ がひつようだろ」

「ビーjeeえむ？」

ラッミスが小首を傾げている。説明はこの戦いが終わってからするよ。

冥府の王が先に仕掛けるつもりなのか腕を掲げようとしたところに、全方位からの一斉射撃を開始した。

白い糸がレーザーのように標的を射抜こうと発射される。その数は五十と少し。

対応しきれないと高を括っていたのだが、冥府の王の周囲を取り囲むように小さな黒い板が大量に発生した。

それが全ての聖水を防ぎ、今のところ一滴も相手を捉えていない。一つを小さくすることで数を増やしたのか。あの数を一人で操る技量……普通なら驚愕に値する実力者だよな。

「やられはせぬぞ！ 我は力を得て魔王を滅し、再び頂点に君臨するのだっ！」

欲望の内容はさておき、その強い意志だけは尊敬するよ。

だけど、これにも対応できるかな？

全員、更に三本のノズル追加だ。軽油、レギュラー、ハイオクを使うぞ。

前に俺がしたように自動販売機の体から三本のノズルが追加される。

単純に四倍の火力を防げるかな。

わざと一度、聖水の放出を止めて冥府の王が周囲の状況を理解する時間を与える。

漂う黒い壁の向こうに姿が垣間見えるが、首がもげるのではないかと余計な心配をしたくなるくらい挙動不審だ。

「妙な腕が増えた……だっ！ ハッコン、お前は一体何者なんだっ！」

冥府の王の絶叫に対し、俺の返事は決まっている。

「ただの じどうはんばいきだよ」

決め台詞も言えし、この戦いを終わらせようか。

こいつがダンジョンを破壊したせいで多くの住民が苦勞をする羽目になり、少くない死傷者も出た。ケリオイル団長一家も翻弄されて仲間同士で争うことにもなった。

今は元の鞘に収まっているけど、決して許される行為じゃない。

聖水のシャワーに貫かれて成仏するがいい、冥府の王！

俺は一切の躊躇いもなく、全てのノズルから最大威力で聖水を発射した。

上に浮かんでいる自動販売機からの光景だと、まるで蜘蛛の巣の中心に冥府の王が囚われているかのような図が描かれている。

これで終わりだと確信していた……のだが、何処からともなく風が吹いてきたかと思うと、冥府の王を中心として豪風が吹き荒れた。ここで竜巻を発生させたのか。黒い板も竜巻の表面に乗ったまま、目にも止まらぬ速度で周囲を回り続けている。

高圧で打ち出しているとはいえ風には弱く、おまけに黒い板が高速で回転することで全方位からの射撃を防がれているのか。

僅かながら聖水が冥府の王まで届いているようだが、全身から薄い湯気が立っている程度で致命傷には及ばない。

「そつちも しぶといじゃないか」

「倒せてないの、ハッコン？」

「まだ けんざいだよ」

聖水では押し切れないことが判明した。となると、空中部隊の出番だ。

ナンバー4と20は コイン式掃除機 になって位置の調整。冥府の王の真上に陣取れ。そして、到着したメンバーから各自……爆撃開始だ！

聖水の放出を続けることで上空に注意が向くことを封じ、相手をその場に固定させる。

真つ先にたどり着いたのはナンバー7か。縁起のいい数字だ、一発目としては最高の人材……自動販売機。

そこで 中古車自動販売機 にフォルムチェンジして、真下へと突撃！

重力に従い巨大な体が冥府の王を目がけて落ちていく。もちろん、足下にはコンクリート板の基礎も召喚済み。

発生している巨大な竜巻の上にナンバー7が乗ったのだが、落下が止まった。これだけの質量をあの竜巻は押しとどめているのか。

それどころか体が回転し始めている。これを回すほどの威力があるとは流石だな。

急に影が落ちたことで冥府の王も頭上の存在に気付いたようで、見上げた状態で大口を開けてポカーンとしている。

今日は驚いてばかりだな。じゃあ、もっと驚いて腰でも抜かしてもらおうか。

ナンバー10、12、17、到着したなら順番に落下だ。ナンバー7の上に乗っていくぞー。さあ、降下開始！

次々と縦に並んで積み上がっていく 中古車自動販売機 それはまるで、自動販売機の塔のようだ。

四台目が最上部に乗った時点で体の回転はなくなり、竜巻が急速に縮んでいく。もう一息だとわかったので、更に二台同時に勢いよく乗る。

一気に自動販売機タワーが沈み、土砂が地面から噴出して空から土が舞い降りてきた。

これは完全に潰れた。あれを止められる存在なんてこの世界には存在しないだろう。

「やったね、ハツコン！ 凄い凄い！」

無邪気に喜んでくれるのは嬉しいけど、念の為に冥府の王がどうなったか確かめないと。粉碎された骨の確認をしないと勝利宣言できないからね。

上に乗っている自動販売機を全部消して、落下地点を確認する。

地面がコンクリート板の形で陥没して窪みが出来上がっていた。

そして、中心部には砕けた骨が……ない？ 代わりに地面へ細かい亀裂のような穴が開いていた。

って、これは！

「まだおわってない らっみす けいかいして」

俺が大声を発すると、ラツミスが驚きのあまり小さく跳ねた。

「えっ、あっ、穴が」

おそらく、耐えきれないと判断して地面に魔法で穴を掘り、その中に飛び込んだのではないだろうか。だとしたら、まだ生存している。骨なので生存という言葉が正しいのかは不明だけど。

そろそろ、時間もやばいよな。残り時間は……一分を切っている！ このまま潜み続けられたら、俺たちの勝機はゼロだ。どうにかして、冥府の王を地面から追い出さないと。

「じかんがない はやくけっちやくを つけないと」

「あっ、そうか。時間制限あったよね。じゃあ、うちの出番だね！」

何を思ったのかラツミスが地面の穴に向かって全力で駆けっていく。窪みの淵に差し掛かると膝を曲げて屈み、中心部の穴へ向けて真つすぐに飛び込む。

拳を強く握りしめ、大きく息を吸い込んだラツミスは、

「全力全開粉碎撃」

なんとも評価しづらい技名を叫ぶ。俺の自動販売機コーナーに対抗して即興で技名を考えたっばいな。

背負われながらそんなことを考えている内に、凶悪な破壊力を秘めた拳が穴の脇に叩きつけられた。

ない耳を覆いたくなるような轟音が荒野に鳴り響き、地面が爆発して土砂が天高く飛び散る。周囲の自動販売機の体が地面からの振動で大きく揺れた。

全部の自動販売機がその光景を凝視している。

吹き上がる砂塵の中に　黒い骸骨を発見。体を反らせた状態で吹き飛ばされながらも、その赤黒く輝く瞳は俺たちを見ていた。

空中で急停止すると、冥府の王はぼろ雑巾のようになった黒の口―ブを震わせながら、口を開く。

「ここでの勝利は譲ろう。だが、我はまだ終わらぬ！　いつの日か必ずっ」

捨て台詞を吐いて、その体が急上昇していく……って見逃すわけがないだろ！

「らっみす　あのからだのうえに　のって」

取り出し口からペットボトルを出し、前方にいる　アイス自動販

売機 へとぶつける。

ラッミスは何も言わずに言うことに従い、ナンバー31の頭上に乗った。

残り時間は三十秒。これがラストチャンスだ！

ナンバー31は即座に日本最大の氷の自動販売機へとフォルムチエンジした。もう二度と会えないと思っていたが、変形を覚えたことで復活を成した。

十メートル以上の高さへと伸び、冥府の王との距離が一気に詰まる。

「ええい、面倒なっ！」

飛んで逃げる最中の冥府の王が振り向きざまに、俺へ向けて魔槍を放つ。

だが、その斜線上に飛び込んできた、宙に浮かんだままだったナンバー5 ダンボール自動販売機 が 結界 でその攻撃を受け止める。

ラッミスが全力で蹴りつけると同時に足場の日本最大の自動販売機が 結界 で弾き、弾丸のように射出された。

このまま、なら届く。ラッミスが最後の一撃を秘めた拳を握りしめている。

あとは冥府の王の顔面に叩き込むだけだ！

ぐんぐんと迫る黒い頭蓋骨。もう拳を突き出すだけの距離。俺もラッミスも勝利を確信した、その時、冥府の王が更に加速して距離が開いていく。

「我が風の力を侮るでない」

あの竜巻の要領で風を操り逃走速度を上げたのか、手の届く範囲にいた冥府の王が、一メートル、二メートル、三メートルと遠ざか

る。

「そ、そんなあと一歩だったのにつ！」

唇をかみしめ握りしめた拳から血が滴り落ち、涙目で冥府の王を睨むラツミス。

「まだまだ まだだよ あとじゅうびょう のこっている」

俺はそこで コインロッカー にフォルムチェンジをすると正面ではなく、ラツミスの背後に扉を開く。

ロッカーの中にはコーラのペットボトルが詰め込まれていて、飲み口は全て扉の外へ向いている。そして、中身を少し減らしたコーラのペットボトルの中に入っているのはキャンディー……ではなくガスだ。ガス自動販売機 のガスをペットボトルの中に充満させている。

コーラをキャンディーで一気に噴出させる技の進化版なのだが、実際にやると危険なので絶対にマネしないように！

俺は一斉にコーラのキャップを消すと、中身が凄まじい勢いで噴出する。

更に コインロッカー の両脇からあらゆるノズルを出して、噴射口を背後に向けて全力で空気を放つ。

ノズルから放たれた空気と、ペットボトルから飛び出したコーラの威力に押されてラツミスの体が急加速した。

必殺コーラバーニアだっ！

爆発的な推進力で冥府の王に追いつくと驚愕に歪んだ顔が、一瞬、呆れたかのような皮肉な笑みを浮かべたように見えた。

その顔をラツミスの拳が捉えると、触れた途端に骨が砕け弾け、腕を振り切った時には粒子となって空に散っていく。

長かった冥府の王との因縁に今、決着がついた。

戦いが終わって

砂状になり大気に溶けていく冥府の王を眺めていると、体に響く衝撃が駆け抜ける。

ラツミスが着地したのか。あの高さから俺を担いで降りて平然としているというだけでも、それはとんでもないことだよな。

「やったね、ハツコン！」

「うん おちか」

「りゅさま」

あつ、話し方が元に戻っている。体もいつもの自動販売機だ。

周囲に雄々しく立っていた分身たちもすべて消え去っているのか。制限時間、ギリギリだったな。

一日たった三十分だけの力だけど、変形のおかげで助かったよ。

当時は10億ポイントで取らせる気がないだろ、と暴言を心でこぼして申し訳ない。大変お役立ちになりました。

まさか10億ポイントに到達する日が来るとはね。あの財宝を普通に売買していたら、今頃町の一つ、いや、小さな国の一つくらい買えたのじゃないだろうか。

まあ、あれだ……命あつての物種って言うから、これでよかったんだよ、うんうん。そう思い込むことにしよう。

「あつ、みんなは？」

手を打ち鳴らして声を上げるラツミス。

そうだ、みんな動けない状態だったけど、今どうなっているんだ？
戦いに集中していたので、仲間のことが頭からすっかり抜け出ていた。

ラツミスと一緒に仲間がいる方向へ目をやると、頭から飛び込んでくるシュイとピティーが目の前にいて、それを認識すると同時に二人の体が俺にぶつかる。

「無事ですか！ 壊れてないですか！」

「ハツコン……大丈夫……痛いところ……ない？」

「しゅい」

「ぼてい」

本気で俺を心配していたようで、全身を撫でまわして傷がないか調べてくれているようだ。感覚があったらきつとくすぐりたいんだろうな。

「うん いらっしやいませ」

「平気みたいですね。さっきの戦い見せてもらったっすよ！」

「いっばいの……ハツコン……見渡す限りの……ハツコン……ふふふふ……」

興奮しているシュイと、緩んだ口元から笑い声を漏らすピティー。反応は違っけど喜んでいるんだよな、きつと。

「よくやったな、ハツコン、ラツミス」

いつの間にか俺の隣にやってきていたヒュールミが俺の体とラツミスの肩を叩く。

心の底から嬉しそうに満面の笑みを浮かべている。

「特にハツコン、そのなんだ………かつこよかったぜ」

最後を体のすぐ近くで囁くヒュールミの顔はほんのり赤く、自分で口にした言葉に少し照れているようだった。

「ハツコン師匠うううう！ 申し訳ありません、お役に立てず！」

凄まじい勢いで俺の前に滑り込み、そのまま流れるような動作で土下座をするミシユエル。いやいや、大袈裟だって！

「最後の戦いでろくに活躍もせず、足を引っ張るのみ。私は情けないです！」

今にも泣きだしそうな声で悔やむ弟子に声をかけることにした。

「またのごりようをおまちしています」

その言葉に俯いていた顔を上げ、涙目でじっと俺を見つめている。そして、何を思ったのか、急に顔を輝かせた。

「つまり、次の機会を期待しているということですね！ わかりました。腕を磨き今度こそは、ハツコン師匠のお役に立ちます！」

拳を握りしめて感動してくれているので、もうこれでいいだろう。

言いたいことの大半は伝わったみたいだし。

「お疲れさまでした、お二方。ラツミスさん、一応回復の魔法を掛けておきますね」

ヘブイの差し出した手のひらから柔らかい光が漏れ、ラツミスの体を包んでいく。見たところけがはないみたいだけど、治癒してもらって損はないか。

「お二人の活躍はケリオイル団長一家や、会長たちにもご覧いただきましたかったですよ」

残念そうにヘブイが肩をすくめるが、その心配は無用だよ。

ちゃんと録画しておいたから。一番遠くに陣取っていた分身ナンバー5が。さっき確認したけど、録画リストにあった。

帰ったらみんなに観てもらわないとね。

「さーで、無事決着がついたな。あとは戻るのみなんだが……」

珍しくヒュールミが言葉を濁して、頭を豪快にボリボリ掻いている。嫌な予感しかしない。

仲間たちもその様子に顔を見合わせているが、次の言葉に予想がついているようで表情は一樣に暗い。

「あー、なんだ、帰還用の魔法陣が起動しねえ。たぶん、冥府の王が本気出して魔力を使いすぎたんだろうな。元の世界に戻る魔力が足りねえんだ」

冥府の王が本気を出さなかったら理由の一つがこれなんだろう。余力を残さずに俺たちと戦ったということだが、帰りの運賃分の魔

力は残して欲しかった！

「えっと、つまり、帰れないってこと？」

「おう、そうだった」

そんな胸を張ってあっさりと。悲壮感を漂わせながら言われるよりかマシだけども。

う、うーん、帰れないのか。となると、この陰気臭い世界で生きないとダメってこと？

「そんな、食料はどうするっすか……あっ」

絶望を口にしていたシュイが俺をじつと見て頷いている。

「食はなんともなりますが、他の生活用品をどうすべきか……あ
っ」

今度はへブイが俺を見ている。

「特に困らないよね……」

今度はラツミスが俺を見つめて勝手に納得している。

他の面々も絶望に染まるわけでもなく、ただ俺を見て頷く。

ここは「もうだめだあ」とか言ってその場に崩れ落ちるのが定番の流れだと思うが、全部用意できるんだよなあ。

それに 変形 で大半のポイントを消費したとはいえ、まだまだ残っている。

全員を食べさせるだけなら、数年は大丈夫だと思うよ……シュイの食欲によるけど。

本来ならここから極限状態のサバイバルが始まる展開なのだろうけど、俺がいるとそういう心配が皆無だ。

「こんな状況だと一番頼りがいがあるな、ハツコンは。流石だぜ」

「やっぱり……ハツコンが……一番……」

「飢えなくていいのは最高っす！」

「ハツコン師匠、一生ついていきます！」

「この状況下でも落ち着いていられるのは、ハツコンさんのおかげですね」

みんな持ち上げすぎだよ。褒められて悪い気はしないけど、ここまで言われるとちょっとむず痒い。役に立てることは嬉しいんだけどね。

「ありがとうね、ハツコン。うちはずっと一緒だよ」

微笑みながら感謝の言葉を口にするラツミス。

やっぱり、彼女から言われるのが一番嬉しいな。もちろん、ずっと一緒だ。

「ありがとう」

「ハツコンがお礼を言うなんて、変なの。ふふっ」

そうかな。自動販売機として生を受け、異世界でこうやって生きていられるのは全てラツミスのおかげだよ。いくら感謝しても足り

ないぐらいだ。

「とりあえず、魔法陣を念入りに調べてみるから、暫くはここでキャンプをしてもらうことになりそうだが。構わねえか？」

全員が賛成したので、一旦、魔法陣の描かれている場所に戻ることにした。

宿泊用の施設として中古車のワゴン出そうかな。それなら二台出せばみんな眠れるはずだし。簡易トイレも設置するか。祝勝会の準備もしないと。

こんな状況だけど今後のことを考えると、胸が弾む。絶望も悲愴もここにはない。全員が明日への希望を抱いて前向きに生きている。

この世界でどういう未来が待っているのかは不明だけど、自動販売機としてみんなの腹を満たし癒していこう。そう決意している間に、魔法陣の場所へと到達したようで、ヒュールミとヘブイが屈みこみ調べ始めている。

「じゃあ、ご飯の用意でもしよっか？」

「いらっしゃいませ」

そうだね。俺たちはああいった知識が皆無だから、手伝っても邪魔になるだけだからね。

みんなの為に食事の準備しないと。涎を垂れ流しそうなら口元がだらしない、シュイが待ちかねているようだし。

仲間たちも手伝ってくれたので、すぐに準備ができ調べるのは中断して、食事をとることにした。今はノーマル自動販売機にしかないもので、ごちそうとはいかないけどね。

コンクリート板を重ねて食卓代わりにして、その周りにみんなが

座り込む。

そして、手を合わせて食べ始めようとした瞬間、魔法陣から目も眩むような光があふれ出した。

あるべきところへ

目も眩むまばゆい光の中から現れたのは 額から立派な角が生えた男だった。年齢は二十から三十半ばぐらいだろうか。ワイルドな風貌をしているが威厳も感じられる。

一見スーツのようにも見える服装に真っ赤なマント。どう見ても雑魚キャラじゃない風格だ。

「あの男は強いですよ、ハツコン師匠」

俺の前に立つミシユエルが柄に手を掛けた状態で、いつでも抜刀できるように腰を落とす。それを見てラツミスたちも戦闘態勢に移行した。

「あー、警戒させちまったか。悪い悪い。俺はそいつ……もう消えちまったようだ、冥府の王の上司をやっている、魔王だ」

魔王という言葉聞き、全員の警戒レベルがマックスまで跳ね上がり、今にも攻撃を仕掛けそうになるが、ちよっと待った！

「ま っ て」

俺が最大音量で止めに入ると、全員が振り返り不審を隠そうともしないで訝しげに俺を見る。

「て が に か い」

「て た よ」

「手蟹搔いてた？ あっ、手紙に書いてた！ 畑さんの」

相変わらず見事な通訳だよ、ラツミス。そう、畑からの手紙に書いていたよね、魔王について。信用できる相手だと。

「おっ、理解してくれたようだな。それが噂の……本当に自動販売機なんだな、懐かしい」

懐かしい？ 自動販売機を知っているということか。あの優しい目は過去を思い出し感動しているようにも思えるが。

過去に自動販売機があつちの世界で存在していたのか？ いや、もしかして、魔王って俺たちと同じ。

「魔王さんが、一体に何しに来たんだ。部下の敵討ちにでも来たのかよ」

ヒュールミの声に思考が妨害される。まあ、疑問は後で尋ねればいいだけだ。

こらこら、疑う気持ちはわかるけど相手を挑発しない、ヒュールミ。

「いや、どちらかといえば後始末に来たんだが、もう終わったようだな。手間かけさせちまって悪かった」

そう口にする、魔王が深々と頭を下げた。

予想外の行動に仲間がたじろいでいる。腰を九十度曲げた見事なお辞儀だ。

暫くその態勢でいたのだが、すっと元に戻り背筋を伸ばしたまま小さく息を吐いた。

「今回の一件に関しては被害にあった人々には、魔王軍として幾らかの補償金を出す予定にしている。といっても、貧乏な国だからなあ、期待には沿えないだろうが」

そこまでやってくれるのか。でも、部下を制御しておけばこの惨事が引き起こされることもなかった。当たり前前の行為だとも思えるが、この異世界ではかなり異質な考えだろう。

「えっ、補償金なんて出るっすか。魔王国の方がしつかりしてるっすね」

「帝国なんて無視して終わりですからね。上に立つものとしては皇帝よりも……これは私が口にしていいことはありませんか」

シユイとヘブイからの評価が上がっていく。というか、帝国のトップが優れた人材ではないようだ。

「皇帝は無能で有名だからな！」

「ヒュールミ、そんなにはつきり言ったらダメだよ」

言葉を濁さずに言い切ったヒュールミに注意しているが、ラツミスも肯定しているよね。

その隣でピティーも頷いている。この国ではみんなに知られていることなのか。

「まあ、帝国に関しては俺も思うところがあるが……って、そうじゃねえ。俺の本命はお前さんたちを迎えに来た。あっちの帰還用の魔法陣の魔力が足りてなそうだから、様子を見に来たんだが余計な

お世話だったか？」

おおおっ、グツジョブだよ、魔王！

完全にこの世界でサバイバル生活をするつもりだっただけに、このサプライズは嬉しい。

「いや、マジで助かる。正直、ここで暮らす気満々だったぜ」

「ハツコンとの……生活なら……地獄でも……大丈夫……」

ピティー、その気持ちは嬉しいけど重いです。

「あー、ここでの生活はお勧めできねえな。ここは邪神が支配する世界でな、昔は文明と魔法が発達した原住民がいたそうだが、邪神を召喚して乗っ取られちまったそうだが。で、世界中に邪神が召喚した化け物が闊歩している。人はもう生き残ってねえと思うぞ」

荒廃しているのはこの場所だけじゃないのか。世界中がこんな感じだと商品売る相手もないのか。お客のいない世界は自動販売機には向いてない。

「陰気臭えとは思っていたけどよ。じゃあ、あれ何かわかるか？ あつちに真っすぐ天まで伸びている棒みたいなのは？」

あっ、それは俺も気になっていた。あれ本当になんなんだろう。

「あれか、冥府の王がなんか言ってたな。確か……邪神が戯れで作った塔らしいぞ。最上階に居座っていて、そこまで到達した人間がいればこの世界から立ち去るとかどうとか」

昔そんなゲームあったな。長い塔の最上階にラスボスが居座っていて、倒したらクリアするのが。

「ほう、己を鍛えるのには、よい場所のようですね」

瞳を輝かせて興味を持つのはやめようね、ミシユエル。そんな危険な場所に行く気はさらさらないよ。

「やめたほうがいいぞ。鬼畜難易度らしいからな。冥府の王が何度か手下を送り出したようだが、誰一人として戻ってきていない。邪神の力を欲したようだが、手を出すべきではないという結論に達したようだ」

そんな危険な相手なら関わらないほうがいいに決まっている。

「って、こんな立ち話をしていたら魔物たちが寄ってくるんじゃないか。あつ、遠くから土煙が上がって、何かがかつちに突進してきてないか。くつ、自らフラグを立ててしまった。」

対象を確認すると、馬の脚が二本だけ生えた巨大な岩が走ってきている。中心部には巨大な目がある。

「うわあ、キモイ。」

「っと、続きは帰ってからするか。邪魔だ」

魔王が駆け込んでくる魔物に向かって人差し指を突きつけると、指先から圧縮された業火の球……まるで小型の太陽のような火の球が放たれ、魔物に着弾すると巨大な火柱を上げ、一瞬で灰となった。魔王の名は伊達じゃないな。なんという高火力。

距離があるというのに熱であぶられたのか、ラツミスたちが顔をしかめている。

「また雑魚共が現れると厄介だ、魔法陣の上に乗ってくれ」

冥府の王の上司ということと腹に一物あるのかもしれないが、疑っていたらきりが無いし、他に変帰る方法が思いつかないので畑の人物評を信用するよ。

全員が魔法陣の上に乗ると魔王もやってきて、片膝について地面に触れる。

「んじゃ、戻るとするか」

軽いノリで放たれた言葉だったが、足下の魔法陣は正常に動き出し、俺たちは金色の光に包まれて消えた。

目が覚めるとそこは元の世界だった。

何故、一目でその判断ができたのか。だって、目の前に無数の脚が生えた畑がいるから。

そして、その前にずらっと仲間たちが並んでいる。会長たちもケリオイル団長一家もみんな揃っているようだ。

よかった、信じていたけど笑顔で俺たちの帰還を喜んでくれる面々を見たら、安堵して電源が落ちかけたよ。

「よくぞ、無事に戻ってきた。皆ご苦労だったな」

熊会長が一步前に踏み出て、ねぎらいの言葉をかけてくれる。

その行動に促されたのか、仲間がこちらに向かって駆け寄ってきた。

「やりやがったな！ 冥府の王には散々世話になったから、俺たちで引導を渡してやりたがったが、よくやってくれた！」

「これで、私たち一家にも平穩が訪れるのですね」

「ハツコンさん、本当にお世話になりました。ボクも家族も感謝しています」

「あの方は滅んだのね……ありがとう」

「かーっ、町を救った一行として俺たちモテモテになるんじゃない？
どう思うよ、赤」

「そりゃ、可愛い子は選り取り見取りで、体がもたねえんじゃないか？」

ケリオイル団長一家が称賛してくれて、一部が意味不明なことを口走っている。

スルリムは冥府の王に救われた過去があるので複雑な心境のようだが、心配して手を握る灰に弱弱しいが微笑んでいるので、大丈夫だと思うことにした。

「かーっ、燃えるぜ！ やっぱ、世界を救うつてのは気持ちがいいなっ！」

世界は大袈裟だと思うけど、気持ちはわからなくもないよ灼熱の会長。だけど、全身が燃え上がって二つの意味で暑苦しいから、ちよっと離れて。

「これで復興に力を入れられそうやな。ふっこうな過去は忘れて復

興に力入れんと！」

闇の会長のくだらないギャグが今日も絶好調のようだ。

「ご苦労様やったね。今日はゆっくりしいや」

「暴れまわって疲労がたまっておるじゃろつて。しっかり体を休めることもハンターとしての仕事じゃよ」

シメライお爺さんとユミテお婆さんの老夫婦が俺の体をポンポンと軽く叩いた。

二人は少しだけ疲れているように見えるけど、五指將軍と戦った後とは思えないぐらい服に汚れがない……みんなの戦いも見たかったな。

「お主らが我が清流の湖階層のハンターであることを誇りに思う。志半ばで散っていった、ハンターや住民たちも喜んでくれているだろつ」

熊会長は空を見上げている。

ダンジョンでは本当に色々あったな。その責務に押しつぶされることもなく、熊会長は誰よりも働き踏ん張ってくれた。

「かいちよう」「ありがとう」

「会長も、ありがとうね！」

俺とラツミスが同じことを口にする、熊会長が視線を落とし俺たちを見つめ口元を緩める。

「シユイ、怪我はありませんか。貴方が無事でなによりです、頑張りましたね」

「はい、園長先生！」

シユイが園長先生に抱き着くと、その頭を優しく撫でている。

思わず頬が緩みそうになる光景なのだが、ぐーっという腹の音が全てを台無しにしている。ごめんな、向こうでの祝勝会を始める前に戻ってきたから、食べるチャンスを逃したままだった。

よっし、まだまだ話し足りないだろうから、今から祝勝会しようか。

みんなで食べて騒いで、思う存分楽しもう！

あるべきところへ（後書き）

明日が最終話の投稿となります。

二話連続投稿をするので、読む順番を間違わないようご注意ください
いね。

最後まであと一息、よろしくお願いします。

宴会

その場で祝勝会をする勢いだったが、まだ合流していないメンバーや防衛都市の面々と騒いだほうがいいだろうという話になり、本格的な祝勝会は一週間後となった。

お互いの奮闘ぶりを話し、防衛都市を観光しつつ料理に舌鼓を打っている、時はあつという間に過ぎ、なんだかんだで、あれから一週間が過ぎた。

祝勝会を夜に控え急ピッチで会場の準備が進んでいる。

防衛都市の門前の空き地に机や椅子を並べ、簡易テントを建てていく。

やっぱり、清流の湖階層の人々と比べると手際が悪いな。あの人たちなら半日で立派な会場を作り上げそうだ。復旧作業で磨き上げられた能力で、会場設置なんてお手の物だし。

町の中ではなく門の外でやるのには理由があるので屋外での祝勝会となっている。畑が中に入れないからだ。彼と一緒に楽しみたいなら地面のある所じゃないとな。

『よう、調子はどうだい』

門脇に設置されている俺の目の前に土の腕がよきつと生え、土の地面に文字が書かれる。この数日で慣れてきたとはいえ、突然の登場には驚かされる。

「いらつしゃいませ」

『悪くないみたいだな。しかし、お互い数奇な運命というか、なんというか』

「うんうん」

本当にね。異世界で元日本人に会えたことは嬉しいけど、まさか自動販売機と畑になるとは誰が想像できただろうか。

彼は元高校生らしく気が付いたら畑だったそうだ。初めは俺に敬語で話していたのだが、この状況で敬語は互いに不要だろうということになった。

それに、この世界では畑の方が先輩だしな。

「いちもだっ」

「たのか」

『いちもだつたかのか？ うっ、すまん。俺には解読不能だ』

あつちは日本語で文字を描いてくれるので俺は理解できるのだが、こっちは言葉足らずで正確に伝わらない時がある。って、俺も商品 を 念動力 で操って地面に書けばいいのか。

この世界の共通語は完全に把握していないが、日本語なら問題ない。

えっと、いつ戻ったんだい？ 聖樹のダンジョンがあつた町で復興作業をしている仲間たちを迎えに行つたんだよね。

『お、ペットボトルで地面に書いているのか、器用だな。日本語を見て懐かしく感じる日があるとは……そうそう、迎えに行ってきたよ。あーん』

その文字が書かれると同時に地面の一部が盛り上がり、小山が出来る上がる。そして、山の側面に穴が開いたかと思うと、そこから多くの人々が歩み出てきた。

「まさか、防衛都市まで片道二日もかからないなんて、驚きですわ」

艶やかな黒髪を掻きあげて、露出度の高いドレスから惜しみなく素肌を晒すシャーリーがいる。他にも始まりの会長や子供会長や迷宮会長も一緒に来たのか。

屋台の商売人や何度も俺を利用してくれた常連もいるぞ。あ、シメライお爺さんの娘と孫や宿屋の二人も。清流の湖階層の面々は殆ど来たようだ。

「おっ、ハツコンではないか」

俺に気付いたシャーリーさんと始まりの会長がこっちに歩み寄ってくる。

派手と地味な服装で並んでいると、両極端だからこそ互いに映えるな。

「いらっしやませ」

「無事、冥府の王を倒したそうですね。さすが、ハツコンさんですわ。お店が再開したら是非いらっしやってくださいね。たっぷりとサービスしますわ」

体をピタリと側面にくつつけるのはやめていただきたい。触感はないけど、ドギマギするので。

『なんと……あんなスタイル抜群で色っぽい女性は、こっちにはいない人材だ。スタイルだけならラツミスも凄いよな。うらやまけしからん！』

畑が地面に豪快に日本語で書きなぐっている。感情の高ぶりが文字で表現されているな、かなり荒々しい。

でも、色っぽい人といえば防衛都市の領主でもあるジェシカさんがいるじゃないか。前に挨拶されたとき、その魅力に圧倒されて一瞬意識が遠のいたし。

『あー、ジェシカさんね。うん、そうだな、うん』

今度の文字は弱弱しいぞ。人なら言い淀んでいそうな、そんな字の頼りなさだ。

ジェシカさんならシャーリイさんといい勝負しそなんだけどなあ。あつちは露出度が控えめな服装だけだ。

「冥府の王との戦いは後で詳しく聞くとしよう。今は会場の準備を急がねばならぬ。シャーリイも手伝ってくれるか」

「いいですよ、始まりの会長。うちの子たちにも手伝わせますね」

お店の店員も来ているのか。会場に咲き誇る花のような一団に作業員の手が一時中断している。まあ、あのメンツだと見惚れても当然だよな。

そんな中、きびきびと手際よく働いているのはダンジョンからやってきた人々だ。防衛都市の住民が引きつった笑みを口元に浮かべるぐらいの速度で、みんなが動いている。

まあ、清流の湖階層の住民は復興作業がプロレベルだからね。見る見るうちに会場の準備が整っていく。

夜までには余裕で完成しそうだ。

『これで会場の心配もなくなったか。うちの子たちの準備も万端だしな』

うちの子というのは野菜のことらしい。畑で採れた味は頬が落ちるぐらい美味しいそうで、ラッミスたちが提供された野菜を口にしてみても一度気を失っていた。

俺に口があつたら食べてみたいんだけどな。

『ハツコンにも一度食べて欲しかったよ。祝勝会では飲み物とデザートは任じていいか？』

ああ、いいよ。肉も提供するよ。海外の自動販売機が使えるようになってから、ソーセージやハムを売っている自動販売機も習得したからね。上海蟹も出せるよ！

『自動販売機って思った以上に種類があるんだな。正直、飲み物ぐらいしかしらなかったよ』

高校生だとそんなものだろうね。今は自動販売機よりコンビニを利用する世代だろうし。

便利になったのは悪いことじゃないけど、今だからこそ自動販売機のよさを知ってほしい。異世界で普及させても仕方ないんだけどさ。

『そついや、今後どうするんだ？』

うーん、やっぱり迷宫探索かな。人に戻りたいっていう望みがあるからね。

『迷宫をクリアすると願いがなんでも叶えられるというやつだよな。俺も人に戻れる可能性があるのか。でもなあ、迷宫に体入らなと思うんだ……』

自在に体を変化させられるそうだが、かなり長細くなってムカデのような感じで迷宮を走破するのはどうだろうか。

『通常の形以外にもなれるけど、あまりに変わった形には長時間無理なんだよ。迷宮で限界がきて元に戻ったら通路が全部土で埋まると想像してみると……：：：：始まりの階層みたいな仕組みのダンジョンだと大惨事だ。』

中が広くて畑でも走破できそうなダンジョンを発見したら教えるよ。

『よろしく頼みます！』

これでダンジョンに潜る理由がまた一つ増えた。いつか、人間になって二人で食事をする時がくるといいな。

『ああ、いつかそんな未来がくればいいな。あ、でも、畑生活に不満はないけどね』

それは俺も同じだよ。自動販売機として生きるのも悪くない。みんなの役に立っていることが本当に嬉しいから。

「あら、畑さんハツコンさんとお話し中ですか」

「仲良くなったんだね、畑さんと」

ラツミスとキコユが肩を並べて歩いてくる。

キコユは小さかった頃を知っているので未だに成長したバージョンに違和感がある。小さい時から可愛らしかったから、美人に成長

したのには納得がいくけど。

『わかるわかる』

畑からも同意をいただけたようだ。

「そういえば、畑さんと二人っきりでお話したいことがあるのです」
「よ」

『なにになに？』

穏やかに微笑むキコユに畑が文字で問いかけると、その笑みが深くなつた。

「シャーリイさんを見てなんと仰っていましたか？」

『あつ……』

土の腕の小指をがしつとキコユが掴むと、そのまま引つ張つていく。

残つた指が暴れて、俺に助けを求めているように見える。

「またのごりようをおまちしています」

そう伝えると指がうなだれた状態で遠ざかっていった。

南無南無う、口は禍の元だよ。心が読める相手がいたことが最大の敗因だけだ。

「連れていかれちゃったね。隣に座っていいかな」

「いらっしゃいませ」

そんなの今さら許可とらなくてもいいのに。

隣で体育座りをするラッミスが肩を俺の体の側面に預けている。

念動力 でラッミスが好きなドリンクを提供しよう。

「ありがとう、ハッコン。やっと、終わったねー」

「うん」

やっとだね。これで暫くはのんびりと自動販売機として営業には
げむことができるよ。ポイントはまだ余裕あるとはいえ、俺の本来
の仕事は商品売ることだから。

「さつきさ、畑さんと話していた内容をキコユから教えてもらった
んだけど……」

そこから話が筒抜けだったのか。別に聞かれて困る内容は話して
ないよな。

「ダンジョン攻略するって、うちも一緒にいいんだよね？」

首をかしげるようにこっちをじっと見つめている。なんで、少し
怯えたような目をするのだろう。そんなの言うまでもないよね。

「いらっしゃいませ」

「迷惑じゃないよね？」

「いらっしゃいませ」

「よかったあー。最後の戦いでも、あんまり活躍できなかったから、うちはもう必要ないんじゃないかって、心配だったんだ」

本気で心配していたのか。大きな胸を撫で下ろしている。

そんな心配無用だよ。ラツミスがいるから、俺はこの世界で生きていけた。これまでも、これからもずっと一緒だ。

「ありがとう」

「こっちこそ、ありがとう」

そう言っただけ見つめ合う、俺とラツミス。

なんだろう、頬を赤らめている彼女を見ると機械の体なのに、胸の鼓動のような機械音が体内で響く。

瞳を潤ませた彼女の顔が徐々に俺に近づき、その唇が自動販売機の体に触れた。

「えへへ、キスしちゃった」

そう言っただけ顔を真っ赤にして足をじたばたさせているラツミスを見つめ……商品が全て温かいになった。

あつ、やばい。本気で嬉しくて恥ずかしい。こ、このままでは配線がショートしそうだ。

「あ、あのね、ハッコン。うちね、ずっと伝えたいことがあったんだ……」

胸の前で手を組み合わせて、祈るようなポーズをして上目づかいでこっちを見ている。

「こ、これは、もしかして、今から言われることは……。
生身だったら唾を飲み込んでいただろう。緊張した空気が張り詰
める中、ラツミスはゆっくりと口を開いた。

「うちはハツコンのことが」

「ハツコンだあああつ！ ご飯つつつ！」

「からあでえええええつ！」

大事な部分が聞きなれた人物の叫び声で掻き消された。

ラツミスが驚きのあまりしゃがんだ状態から一メートルぐらい垂
直に跳んでいる。

「はあああ、渋々だが声のした方へと視線を向けると、そこには土
煙を巻き上げ爆走する大食い団の面々が。」

すっかり忘れていたけど、大食い団は別動隊としていなかったな。
よほど飢えているのだろう、このままだと俺の体ごとかじりそう
だ。

ええい、まだ夕方前で祝勝会に少し早いけど、その飢えを満たし
てやるうじやないか。その木陰からこっちを見てニヤニヤしてい
る仲間たちもいるしな！

変形 フォームラールド 自動販売機コーナー発動だ！

飢えた野獣共の腹を満たしてくれよう。取り出し口からペットボ
トルを次々と取り出し、あたりに飛ばすと自動販売機へと変形して
いく。

さあ、あらゆる食べ物が揃っている、三十分限定の夢の世界だ。
存分に味わってくれ。

周りの人々が無数の自動販売機に気付き駆け寄ってくる。

「さんじゅつぱん げんていだよ きょうはむりょうで だいほう

しゅつだ すきなだけ のみくいしてくれ」

そう宣言すると作業中の人までが手を休めてやってきた。自動販売機なら幾らでも用意できるから、幾らでもどうぞ！

あらゆる食に対して満足できるラインナップに人々が何を買おうか迷っている。

あの目を輝かせて商品を選ぶ姿、昔の俺を見ているようだ。やっぱり、喜んで商品を買ってもらえる瞬間が自動販売機に生まれ変わって良かったと思う時だよな。

「なんか、うやむやになっちゃったね」

ごめんな、意を決して俺に何かを告げようとしてくれていたのに。でもね、俺はこれでよかったと思っっているよ。

俺は 生花自動販売機 の中から一番美しいと思う組み合わせをチョイスして花束にすると、ラツミスへと 念動力 で渡す。

「えっ、これって」

「らっみす いままでありがとう これからもよろしく だいすきだよ」

こうやって、俺から告白できたからね。

花束をぎゅっと握りしめた彼女は眼を見開いたまま、ポロポロと大粒の涙をこぼす。

「うちも好きだよ、ハッコン！」

泣きながら満面の笑みを浮かべる彼女の顔を、俺は一生忘れることはないだろう。

エピソード（前書き）

二話連続投稿の二話目です。ご注意ください

エピソード

「おっちゃん本当にそんな魔道具あったの？ ジドウハンバイキだっけ」

小生意気そうな子供がそんな疑問を口にした。隣に立つ妹らしき女の子は服の袖を掴んだ、おとなしい子だというのに。

この村の近くでダンジョンが発生したと聞き、本来の目的地ではないこの村に立ち寄ったばかりの俺たちは村人に歓迎された。

出来立てはやほやのダンジョンは魔物が湧き出てくることがあるので、中を調べてほしいと村長から依頼され、この後みんなと向かう予定にしている。

そこで今日からお世話になる村唯一の宿屋に向かう途中、その子供たちに捕まり、

「ハンターなら面白い話を知っているよね？」

と絡んできたから相手をしてやったら、この反応だ。

俺が話した自動販売機ハツコンの話の話を全く信じてないな。

「本当だぞ。自動販売機と呼ばれる魔道具で、飲食料だけじゃなく多種多様な日用品や雑貨も出せた、とても優秀な魔道具だったんだよ」

「えー、うっそだー。言葉を話して人の魂が宿る四角い鉄の箱とか信じられないよ。おっさん、子供だと思ってそんな下手糞な嘘つくな」

「お兄ちゃん、大人にそんなこと言っちゃダメだよ」

鼻で笑う子憎たらしい子供の顔を見ているとイラッとしたが、ここで怒るのは紳士として正しくない対応だ。妹の方は必死になって兄を止めているし。

「坊や……おっさんじゃなくてお兄さんだ。わかるかい？」

「あっ、はひっ」

おやおや、何を怯えているのかね。お兄さんは笑っただけじゃないか。

あっ、妹の方も涙目で今にも泣きそうだ。ちょっと大人げなかったな。

「ごめん、ごめん、お詫びにこれどうぞ」

右手と左手に掴んでいるオレンジジュースを二人に手渡す。

一瞬それが何かわからなかったようで、おっかなびっくり受け取るとキャップを開けずにじっとジュースの缶を見つめている。

「それは、甘い果物の果汁が入った容器だよ。上の部分をくると捻ったら蓋が開くから、それで飲めるようになるよ」

未知のものに対する怯えより好奇心が勝ったのようで、二人ともキャップを捻って開けた。飲み口からあふれ出す柑橘類の香りに子供たちの顔がほころぶ。

警戒もせずに口に含むと喉が膨らみ、中身を流し込んでいく。

「ぶはあああっ、うめえええっ！ なにこれ、なにこれ!？」

「すっごくおいしいよ!」

おー喜んでる喜んでる。やっぱり、子供の笑顔を引き出すのは、甘めのオレンジジュースに限る。

「でもさ、おっちゃん……じゃなかった、お兄さんさっきまでこれ持ってなかったよな?」

「ふふーん、お兄さんは手品が得意なんだよ」

「手品?」

兄妹が小首を傾げている。こんな地方の小さな村じゃ手品という言葉も知らないのか。まあ、共通語の書き取りも怪しいらしいし、人口が百にも満たない村なら手品ができる人がいなくても不思議じゃない。

「魔法とか加護みたいなもんだよ」

「おっちゃん、お兄さんは魔法か加護使えるのか! 見せて見せて!」

「私も見たい!」

そんな純粹無垢な瞳を向けられて期待されたら、応えるのが大人の務め。

「よし、それじゃあ、今からお兄さんが特別に」

「あっ、ここにいたんだ! そろそろ、この村の近くにあるダンジ

「ヨンに潜るよー」

ショートカットで金髪を横でまとめた、サイドポニーの明るく活発な女性がやってきた。初めて会った時より髪がかなり伸びて、昔はショートポニーだったのにかなり長くなったよな。

「おーい、みんな揃っているぞ。って、その格好なのかよ。なんか、未だに見慣れねえけど、まあ、あれだ……いいと思うぜっ」

彼女に少し遅れて新たに女性がやってきた。

ミルクティー色の長い髪の所々が跳ねた、一見気が強そうに見える女性だが、本当は姉御肌で心配性なのを俺は知っている。

「あつ……一人で……うるついたらダメ……」

「ご飯まだっすか！」

「皆さんそんなに慌てて走ったら靴が汚れてしまいますよ」

「その姿の師匠もカッコイイですね！」

仲間が全員来たか。嬉しくて一人で村をうるついていたから、心配させてしまったようだ。

「じゃあ、お兄さんたちはダンジョンに向かうよ。帰ってきたらまた話聞かせるから。あ、そうそう。制限時間だし、最後にとっておきの魔法を見せてあげよう」

俺を見上げている子供たちの前で体が黄金の光を放つ。

あまりの眩しさに目をつぶってしまった子供たちが目を開くと、

目の前には白く磨き上げられた自慢の体が太陽の光を反射して輝く
自動販売機があった。

「へっ?」

「いらっしやいませ」

「えっ?」

びつくりしすぎて呆けているな。そう、さっきの好青年の正体はこの俺、自動販売機に生まれ変わった男、ハツコンだったのだよ！まさか 変形 第三の能力に目覚めて、人の姿に戻れるとは思ってもしなかったよ。制限時間は相変わらずなので三十分しか人の体でいられないけどね。

覚えたてで嬉しくてつい一人で村を散策してしまったが、今からダンジョンに潜るとなると大問題じゃないか……やってしまった。

「もう、ハツコン。変形の能力使っちゃったら、今日一日はダンジョンで他の姿になれないよ?」

「おいおい、らしくねえな。まあ、わからなくもねえけど」

うっ、ラツミスとヒュールミがミスに気付いてしまった。

ほら、みんなあの頃より強くなっているし、信頼しているから大丈夫。

「今度のダンジョンはハツコンの願い叶うといいね」

前のダンジョンは規模が小さすぎて、叶う願いがしょぼかったもんな。

財宝もそれなりにしかなかったのは、制作したダンジョンマスターの能力によるらしい。聖樹のダンジョンマスターは当時、相当有名な魔法使いだったらしく、あの規模のダンジョンは数が少ないぞうだ。

各階層が別世界のような仕組みになっているダンジョン。言われてみれば、相当の実力者でなければ創ることは不可能だよな。

今回はどういう理由で誰が創り上げたのかは不明だが、まだ誰も足を踏み入っていないダンジョンだけに期待も高まる。

制限時間なしで、人の体に戻る日がくるといいのだけど。

「準備万端なら、そろそろ突っ込もうぜ。今日は一階を回って中を確認したら戻るぞ」

ヒュールミは俺を参考にして作り上げた、火炎放射器と銃を組み合わせた魔道具を背負って、やる気満々だな。

仲間も同様に武器を携帯して突入準備は整っている。食料や雑貨は任せてくれ、なんでも提供するよ。

「じゃあ、みんな大丈夫かな？」

「ピティーは……ハツコンがいれば……いい……」

「ぼていさん」

最近、依存度が増してませんかね。

「おう、誰もまだ調べていないダンジョンを真っ先に探索できるってのは、心が弾むな！ 見たこともない魔物がいるといいんだが」

魔道具技師でもあり学者でもあるヒュールミの血が騒ぐようだ。

「いっぱい動いて腹を減らして、美味しくご飯を食べるっす」

シユイはいつもと変わらず、食欲が思考の中心に居座っている。

「激しく運動して疲れた時はいつでも仰ってください。最近は足のマッサージも覚えましたので、靴を脱いで渡していただければいつでも」

妙な特技が増えて変態度が増してないか、ヘブイ。

「露払いはお任せください、ハツコン師匠！」

今日も忠誠心の針が振り切れているな、ミシユエルは。

いつもの面々の変わらぬ様子を見てみると、嬉しくなる。

鉄の塊である自動販売機の俺を見捨てることなく、ずっと付き合ってくれている仲間たち。感謝しても感謝しきれないよ。

仲間たちは俺を人間に戻すために頑張ってくれているが、俺はそこまでこだわっていない。一時的だけど人に戻れるようにもなったからね。

彼らとこうして同じ時を過ごせる。それだけで幸せを感じている。いつもの背負子に体を固定され、ラツミスに背負われた。

はぁー、やっぱりこの場所は落ち着くなぁ。人に戻ったら二度と体験できないのか、それが少しだけ惜しい。

「じゃあ、ハツコン出発の合図をお願い！」

全員の視線が俺に向けられている。

では、チームを代表しまして僭越ながら一言。

エピソード（後書き）

ハッコンたちの物語はこれにて終了となります。

長い物語を最後までお付き合いいただき、本当にありがとうございました。

この物語については色々と言いたいことがあるのですが、それは活動報告やツイッターで触れますね。

スニーカー文庫から現在一二巻が出版されていますので、購入していただけると続刊に続きます。最後のバトルの絵を見ることができるとかどうかは売り上げ次第です。よろしく願いします。

さて、ここでいったん終了となりますが、年明けからは週に一話ぐらゐの間隔で外伝を上げられたらいいなと思っています。もちろん、新作も始める予定にしています。気になる方は、活動報告をちよくちよく覗いてくださいね。出版情報にも触れますので、是非に。

長くなりましたが、皆さんの応援のおかげでここまでの長編を書きあげることができました、本当に、本当に、ありがとうございまして！

みんなと一緒

「今日は無理なお願いを聞いていただき、ありがとうございます！」

背筋をビシッと伸ばした金髪のイケメンが深々と頭を下げる

鉄の塊である俺に。

普通なら異様に映る光景なのだが、町行く人々はちらつと視線を向けるだけで、驚いた様子はない。

冥府の王の一件以来、防衛都市では名が知れ渡っているからな、俺と仲間たちのことは。

見るからに高そうな漆黒の鎧に、竜をかたどった大剣。そして、それを嫌味なく装備しているのは中性的な美青年剣士。

自動販売機の弟子を名乗るミシュエルだ。

相も変わらず礼儀正しく、俺を尊敬してくれている。未だに彼が俺にここまで尽くしてくれる理由がわからない。

「では、三十分の間ですが、お相手願えますか！」

「いらっしやいませ」

約束は約束だ。何故こんなことになったと自問自答したくなるが、そもそもこのきっかけは数日前のあの日だったな。

突如現れたダンジョンを調査するために、俺たちは当初の目的を後回しにして名もなき村に立ち寄った。

新たに発生したばかりのダンジョンは外に魔物があふれ出る危険性があるので、誰も踏み入れたことのないダンジョンの調査に乗り

出す。

浅い階層の敵を処理して、ハンター協会の職員がやってくるまでの時間稼ぎをすることになった一行は、暫くこの村に滞在することとなる。

運よく一週間程度で職員やハンターたちがやってきて、村の治安が確保されたところで今後どうするか話し合うこととなった。

「一度、防衛都市に戻って、休暇にしようよ！」

俺の出したお弁当を片手に勢い良く立ち上がったラツミスの、豊かな乳房が大きく縦に弾む。

出会った頃と比べると髪も伸び、少し大人びてきた彼女の元から豊かだった胸は、更に進化を続けているようだ。

「……そうだな、思わぬところで道具を消耗しちまったから、一度補充したいしな」

ヒュールミはじつとラツミスの胸を見つめてから、自分の胸元に視線を落とし、疲れたように呟いた。

残念ながら彼女はあれから胸の成長もなく、平たい胸をキープし続けている。それはそれで需要があるので、そんなに落ち込む必要はないと思うのだけど、当人としてはかなり気になるようだ。

実はバストアップの魔道具を深夜にこっそりと制作中なのを知っているが、見て見ぬふりをするのが大人のたしなみだろう。

「いいっすね！ 久しぶりに、あの野菜食べたいっす！」

大声で賛同したのは、右手にサンドイッチ左手にから揚げを手にしたシュイだった。

相変わらず判断基準は食欲が最優先なのか。

「ピティーンは……ハッコンがいるなら……地の果てでも構わない……」

日に日に依存度が高まっていくピティーンは、盾の内部に敷いたクッションの上に座り込み、安定が悪いのか体が左右に揺れている。

前髪で顔を覆っているので表情はわからないのだが、最近はその微妙な高低差で感情が理解できるようになってきた。これは冗談ではなく本気で言っているようだ。

以前このままではいけないとちゃんと断ったはずなのだが、見事にスルーされてしまった。

「ハッコン師匠の商品を待ちかねている方々もいらっしやるようですし、戻るのは私も賛成です」

ミシユエルも異論はないようだ。そうすると残りは一人だけなのだが。

みんなの視線が法衣を着た、穏やかそうに微笑む男に向けられる。

「私も異論はありませんよ。そろそろ、行きつけの中古靴屋で年代物を……教会で祈りを捧げたいので」

本人は上手く誤魔化せたつもりのようなのだが、本心が漏れている。というか今更、俺たちに言い訳をする必要もないだろうに。

「へイが三食の飯より中古の靴が好きという変態ぶりは、もうみんなあきらめている。」

「みんなはいいみたいだけど、ハッコンはどう?」

俺が反対する理由はないよ。答えは決まっている。

「いらっしゃいませ」

「決定ね！ えっと、それじゃあ、うんとね……あのね……」

嬉しそうに手を叩いた後、ラツミスが俺の体に顔を寄せると上目遣いで、口をもごもごさせて珍しく言い淀んでいる。どうしたのだから。

「えつとね……防衛都市に戻ったら、三十分でいいから人の姿に戻った状態で……うちと二人つきりで過ごしてくれる？」

顔を真っ赤に染めて頼み込む姿を見ると、自販機の商品が全て『あたたかい』に変更された。

そんな顔をされて断れる男がいるだろうか。否、いるわけがない！ つまり、ラツミスは人間に戻った俺とデートがしたい……ってことだよな。そんなの、こっちも望むところだ。

人の姿になれるようになってから、まだ両手の指で足りる回数しか生身の自分に帰っていない。三十分という時間制限もあるのだが、一度 変形 を発動すると丸一日、他の自動販売機になれないというデメリットが大きいので、いざという時以外は発動しないように心がけていたからだ。

なのでダンジョン攻略中は、人の姿になる時は 変形 発動後に時間が余った時だけ戻る、というのが決まり事だった。どう返答するかなんて、考えるまでもない。

「いらっしゃいませ」

「ほんと！ やったあああっ！ 一緒に何しよう、楽しみ〜」

鼻歌でも歌いだしそうなくらいに浮かれたラツミスが、俺の周りをグルグル回っている。

そんなに喜んでもらえるなんて男冥利みょうりに尽きるな。

「へえー、ラツミスだけ二人つきりで過ごすのかよ、へえー」

浮かれていた俺たちに冷水を浴びさせるような、冷え切った声が届く。その声の発主はヒュールミだった。

「ピティーも……ハツコンと……一緒にいたい……」

「人になったハツコンと、食べ歩きとかいいっすね！」

「私も人に戻ったハツコン師匠にお願いが！」

便乗するように、ピティーたちも食いついてきた！

へブイはこちらを眺めながら穏やかに微笑んでいる。あれは見守っているというより、傍観者として状況を楽しんでいる顔だ。

仲間たちに身を乗り出して懇願されたら、断るのは辛いぞ。それに、日ごろお世話になっているし、一緒に過ごすくらい問題ないよな。

「いらっしやいませ」

俺がそう答えると、みんなが歓声を上げて喜んでくれている。

予想以上の反応に生身状態だったら苦笑いを浮かべていただろうな、と思つた瞬間、側面の死角から威圧感が押し寄せてきた。

あえて、そつちは見ないようにしてきたのだが、このプレッシャーに耐えきれなくなった俺は、視界をそつと向ける。

そこには 膨れっ面でこつちを睨んでいるラツミスがいた。

「むううう、うち以外とも……」

拗ねて怒っているラツミスを見て、怖いというより可愛いと思っ
てしまった。

とまあ、これが防衛都市でみんなと過ごすことになった経緯だ。

「どうしましたか、ハツコン師匠？」

つと、今日はくじ引きで一番を引いたミシユエルと過ごすのだっ
たな。

彼のようなイケメンの隣に人間状態で並ぶのには勇気がいる。見
た目で人を判断するような弟子じゃないのはわかっているのだが。

俺は 変形 を発動させて日本での姿に戻る。

ミシユエルより少しだけ高い身長でスーツ姿の自分。俺が自動販
売機をかばい潰れた時と同じ格好だ。

といつても上着を脱いでいてワイシャツ姿なのだが。あの日は暑
かったから、ネクタイも外していたんだよな。

「本来のハツコン師匠も素敵です！」

ミシユエルのような美形に言われても嫌味がお世辞としか思えな
いのだが、目を輝かさせて詰め寄ってくる姿を見ると本気だと
しか思えない。

……彼は美的センスが残念な人なのだろうか。

少なくとも自分をイケメンと思ったことはないし、周囲には美形
が揃っているの、俺がその中にいたら一番劣っているのは確実だ。

「ありがとうな、ミシユエル」

「はい！ 名前を読んでいただけるだけでも、嬉しいですね！」

たぶん、先輩に懐いている後輩のようなノリなのだろう。一応、師匠と弟子の関係だから。

「師匠は筋肉質な体をしていますよね。服の上からでも鍛えられているのがよくわかりますよ」

「あー、趣味が高じて毎日結構な距離を歩いたりしていたからな」

平日は最寄りの駅の二つ手前で降りて、そこから歩いて自宅まで帰っていた。

理由は自動販売機で使う為の金を少しでも貯める目的と、その駅から家まで向かう道には自動販売機ゾーンが三か所あり、結構珍しい商品が揃っていたのだ。

そこをチェックして帰るのが毎日の楽しみだった。

休日は珍しい自動販売機があるという情報を得ると、車や電車で目的地に向かい半日ぐらいうろつきながら、珍しい商品を購入してバックパックに詰め込んでいたからな。

日によってはバックパックの中身が十キロ以上になることもあり、それを担いだ状態で歩き回れば自然と筋肉もつく。

「さすがです、師匠！ 日頃から鍛錬を欠かさなかったのですね！」

「あ、うん、そうかな」

これ以上、この話題を続けるとぼろが出そうなので話を換えよう。

「で、ミシユエルは今日何をしてほしいんだ？ 無理なことではなけ

れば、なんでもいいぞ。確か人型の状態で鍛錬をつけてほしいだったか？」

「それなのですが……実は鍛錬は嘘でして。本当はその姿に戻ったハツコン師匠の能力を見せていただけなのです。その状態での身体能力や自動販売機の力が使えるのか、試しておく必要があるのではないかと思ひまして」

「もしかして、気を使ってくれたのか」

「余計なお世話だとはわかっていたのですが……」

恐縮して頭を掻いているミシユエル。

「そうか、人型の能力を把握してないと、いざという時に困ると思ひ、能力を確認できる時間を確保してくれた。」

「……弟子に恵まれたな、俺は。」

「いや、助かるよ。そうだな、この状態の時ってみんなと雑談するぐらいだったもんな。よっし、能力確認してみるか」

弟子が気を使ってくれたのだ、ここは甘えさせてもらおうしよう。人型の俺は 加護 は使えるのか。自動販売機としての能力はどうなのか。じっくり、調べさせてもらおうぞ。

ミシユエルと一緒

「じゃあ、まずは 加護 が使用可能か調べてみよう」

ミシユエルが気を利かせて後退る。

なら、まずは 結界 を試してみるか。これが使えるかどうかで今後の立ち回りが決まってくる。さて、頼むぞ……。

「結界発動！」

ノーモーションで発動できるはずなのだが、なんとなく右手を伸ばして声に出す。その方がそれっぽいだろう。

半透明の青い光がいつものように俺を取り囲む。 結界 は大丈夫なようだ。 範囲も俺を中心として二メートルの箱状。

「ええと、大きさの調整をしてみるか」

いつもの感覚で 結界 の縮小を試みる。限界まで縮めてみると、体に 結界 を膜のように貼り付けることも可能のようだ。これだと相手に悟られることなく常に体を保護するのも可能か。

「問題ないようですね。お見事です、ハッコン師匠！」

「うん、ありがとう。結界は問題なしと。じゃあ、次は 念動力 を試してみよう」

近くに転がっていた石に向けて意識を集中して、操られるかどうか試してみる。

これも一応、手を伸ばしてそれっぽくしてみるか……ビジュアルは大切だ。

「動けっ！」

気合を入れて踏ん張ってみるが、石はピクリともしない。

暫く腕を伸ばした状態で力を込めている最中に、ふと大切なことを思い出した。

俺、自分の商品しか動かせないじゃないか。

平静を保っているつもりだったが、人に戻って浮かれていたみたいだ。肝心な部分がすっかり頭から抜けていた。

「先に自動販売機の商品を出せるか試してみようか」

「はい！」

ちらつと視線をミシユエルに向けると、ニコニコと嬉しそうにこっちを見つめているだけだ。

さてと、ジュースを出せるのは村で試したことがあるのでわかっているが、一応確認の為に試してみるか。

手のひらにペットボトルの感触が広がる。とりあえずミネラルウォーターを出してみたが、これをついでに 念動力 で操ってみよう。

ミネラルウォーターが浮かび上がり、ミシユエルの元へと飛んでいく。

「念動力も問題なし。それはミシユエル飲んでいいよ」

「ありがとうございます！」

ただのペットボトルを嬉しそうに抱きかかえなくても。いつもながら大袈裟だな。

次は変わった商品を出してみるか。ええと、 高圧洗浄機 の水とか出せるのかな？

地面に向けて手を伸ばして水を噴出するイメージを頭に描く。

おっ、出た出た。地面に高圧で押し出された水が突き刺さる。威力も調整可能。

ついでに他の商品や灯油も出るか試してみたが、全て可能だった。人型になったら無力になるのではないかと心配していたのだが、それは無用なようだ。まずは一安心だな。これなら、いざという時も役に立てる。

「一通りは試したから、もういいな。よっし、ミシユエル時間はまだ余っている、何かして欲しいことはないか？」

「いえ、私はハツコン師匠のお手伝いがしたただけですから」

手と首を激しく左右に振って断っているが、俺ばかりではなく弟子の望みは叶えてやりたい。

「残り二十分はいけるから、もったいないよ。さあ、弟子よ望みを口にするがいい」

わざとらしく偉そうに振る舞うと、ミシユエルが微笑む。

俺が女性だったらその顔に見惚れていたと断言できるぐらいの、魅力的すぎる笑顔だ。そりゃモテますわ。

「で、では、僭越ながら……お手合わせ願えませんか！」

そっぴや、初めから鍛錬をつけてほしいって話だったよな。

この体の身体能力はまだ確かめてないから、ちょうどいい申し出だ。それに、師匠として弟子と戦うというシチュエーションは燃えるものがある。

「構わないよ。じゃあ、防衛都市の外でやるか」

「はい、お願いします！」

そんなに瞳を輝かせて喜ばなくても。ミシユエルが尻尾を振って喜ぶ子犬に見えてきたよ。いや、どちらかといえば忠犬か。

巨大な門をくぐり農業地帯から少し外れた場所まで駆け足で移動する。

結構距離が離れていたのだが、五分も経たずに到着した。二本の脚で走ってわかったのだが、異様に足が速い。

初めは俺を気遣ってミシユエルが速度を落としてくれていたのかと思っていたのだが、そうではないようだ。辺りの風景が飛ぶように過ぎ去り、体が羽毛のように軽かった。

ずっと自力で動けなかったからそう感じるのではなく、日本での自分とは比べ物にならない身体能力を得ている。

「凄いですね、ハツコン師匠！ 本気で走ったのに追いつけませんでした！」

ミシユエルが軽い興奮状態だ。嘘をつくような弟子じゃないから、あれは本心だよな。

これは他の身体能力も期待できるか？

「じゃあ、まずは軽く素手で戦ってみるか。生身で暴れるのは久し

ぶりだから手加減頼むよ」

「わかりました。では、軽く攻撃を仕掛けますので、避けるか防御してみてください」

大剣を地面に置き、鎧も脱ぐと軽装となったミシユエルが構える。格闘技なんてしたことはないが、ラツミスの戦い方を思い出して、それっぽいやポーズを試してみた。

「では、いきますー！」

鋭い踏み込みで一氣に間合いを詰めるミシユエル。

この動きも常人では見極められない速度なのだろうが、ずっと一緒に戦ってきたんだ。動体視力だけは自信がある！

相手の動きを目で追いながら、突き出された拳に対して回避してみるか。

左胸元に伸びる右拳に対し、片足を引いて半身になる。ワイシャツを掠めた拳を見送り、更に繰り出された左拳を屈んで避けた。

ミシユエルの目が大きく見開かれ、驚くと同時に口元に笑みが浮かんでいる。避けられたことを喜んでいるように見えるな。

「お見事です、ハツコン師匠！」

「自分でも驚いているよ」

更にミシユエルの攻撃が続くが、今のところ全てを避けきっている。徐々に回転速度が上がリ突き出される拳や蹴りも鋭くなっているのだが、まだいけるな。

半ば本気に見えるミシユエルの攻撃を、自動販売機だった俺がどうして躲せるのかは、思い当たるふしがある。というか、確実にこ

れが理由だろう。

ステータスの筋力や素早さのパラメーターを上げたからだ。元々、人の体を動かすために必要な能力だ。結構なポイントを消費して割り振っているのだから、この身体能力にも納得がいく。

あれ、それってつまり頑丈も高いってことだよな。素手だから大丈夫か。

俺は顔面に放たれた拳をあえて避けずに食らってみた。

ガンツと鉄を殴ったかのような音が響く。さっきまで喜色満面だったミシユエルの顔が一瞬で血の気が失せ、上下左右に震え始めている。

痛みは全くない。むしろ、ミシユエルの手を心配するレベルだぞ、これは。拳の感触はあるのだけど、そつと頬に触れた程度だ。

「す、すみません、ハツコン師匠！」

頭を深々と下げるミシユエルに「大丈夫、大丈夫。わざと避けなかっただけだから」と手を振り、心配させないように頑丈さをアピールしておく。

これならラツミスと一緒にいても怪力でどうこうなることもないかな。常に力を制御している彼女だから、俺と一緒にの時ぐらいいは余計な気を使わないで自然体でいられるといいのだけだ。

「体もかなり頑丈になっているようだから、もっと遠慮なくきていぞ。今のでわかっただろ？」

「まるで鉄を殴ったかのような感触でした。さすが、ハツコン師匠です」

弟子の口癖が「さすが、ハツコン師匠」になっている気がする。そろそろ、独り立ちさせて距離を置いた方が彼の為じゃないかと、

思わなくもない。

「ミシユエル鎧を着てくれないか。たぶん筋力も相当あがっているから、俺が攻撃したら傷つけてしまうかもしれない」

魔力以外、ステータスをかなり伸ばしているから、下手したら骨の一つぐらい折ってしまいかねない。

「わかりました、しばしお待ちください！」

着なれているのだろう、素早く着込むと大剣は地面に置いたまま再び構える。

じゃあ、今度は筋力の見極めだ。

ラツミスとの戦闘シーンを思い出し、それを模倣して体を動かす。自動販売機のようなのは不明だが、彼女の動きが頭に鮮明な映像で思い浮かぶ。その動きをなぞるように体動かし、軽い跳躍からの正拳右突き。

拳がミシユエルの右胸を捉える。威力を確かめる目的であえて避けなかったのだろう。

あの鎧の強度を知っているので遠慮は一切せず、全力で殴ってみた。

「うっっ！」

カンフーアクションのようにミシユエルの体が宙に浮き、後方へと吹っ飛んでいく。

そのまま倒れることなく体勢を持ち直し着地すると、片膝をついたまま地面を削り止まったようだ。今、五メートルぐらい飛ばなかったか？

「……はあ？」

弟子が気を利かせて後方に跳んだ……ないな。
眼球が零れ落ちそうなくらい目を見開いて、驚愕しているあの姿が芝居なら、もう役者になった方がいい。

「凄いですよ！ ラツミスさん程じゃないですが、ヘブイさんの怪力を上回るのでは！」

ラツミスの桁外れな怪力の足元にも及ばないとは自覚しているが、ヘブイも相当の怪力だ。五百キロ以上ある自動販売機の俺を、持ち上げられるくらいだからな。

それぐらいは筋力があるということなのか。

初めからこの体で異世界に来ていたら、理想的な異世界生活が待っていたかもしれない。残念のような気もするが、自動販売機だったから仲間たちと出会えた。

なら、これでよかったのかもしれない。

「悪いがもう少し、付き合ってくれるか」

「もちろんです。思う存分、体を動かしてください」

それじゃ、お言葉に甘えて時間ぎりぎりまでやらしてもらおう。

それからタイムリミットまで戦い、生身の能力が十二分に理解できた。

ミシユエルの願いを叶えるどころか、俺の能力確認しかやっていない。弟子の望みではあるのだが、申し訳ない気持ちが残っている。

「いやー楽しかったですね、師匠！」

汗を拭い地面に座り込んでいる姿は満足気だ。当人が納得しているのなら、何も言うことはないのだが……今度、別の機会にお礼をしないと。

「いらっしやいませ」

自動販売機に戻ると会話が怪しくなるのが惜しいが、定型文だけでも俺の思いは伝わっている。なんだかんだで付き合い長いからね。

「ところでハツコン師匠、一つ問題がありました」

「ん」

なんだろう？ 俺はもう時間が過ぎたから、この基本の自動販売機以外にはなれないけど、手伝えることがあるなら、なんでもするぞ。

「あのですね……城塞都市から結構離れてしまっていますが、その、ここからハツコン師匠を運ばないといけないわけでは……」

自動販売機である俺をここから町まで運ぶのか。
町に帰るまでが鍛錬だ……頑張れ、ミシユエル。

シュイと一緒

「今日は待ちに待った食べ歩きの日です！」

頭上には澄み切った空が広がり、日差しを浴びた元気いっぱい
のシュイが、俺の前で腰に手を当てて仁王立ちしている。

ミシユエルに続いて二番を引いた彼女と今日は付き合うことにな
っているのだが……食べ歩きか。

人になれるようになってから食べるチャンスはあったのだが、自
分が出したジューズを飲んだぐらいなんだよな。

いつも 変形 を発動させるときは戦闘中なので、敵を倒した残
り時間に人に戻っても長くて十分、少ない時は二、三分しかないの
で食事をする時間の余裕がなかった。

そのことをシュイも考慮して食べ歩きを提案してくれたのかもし
れないな。

「思う存分、食べてほしいです！ いつもお世話になっているから、
今日はおごるっすよ！」

「いらっしゃいませ」

ここで遠慮をするのは失礼な話だよな。前のダンジョン攻略でシ
ユイの懐にも余裕があるらしいから、ここは甘えさせてもらおう。

向かう店も決まっているようなので、そろそろ人型になるのかな。

「おー、やっぱり人間バージヨンのハッコンは新鮮っすよね」

「元々はこの姿なんだけどな」

「うんうん、悪くないっすよ。紅白と違ってまともな人に見えるっす」

「それ……褒められてる？」

あの紅白双子……じゃない、今は三色三つ子だった。見るからに軽薄そうな二人と比べたら大半の男はまともだと思う。最近、長男である灰とスルリイムの熱々ぶりに当てられて危機感を覚えたらしく、本気で彼女を募集しているらしい。

あそこは団長と副団長も仲がいいから、二人の疎外感が半端ないのだろう。

「べた褒めっすよ。って、話している時間がもつたないから、店でゆっくり話すっすよ！」

俺はシユイに手首を掴まれて引っ張られていく。

場所はさっきの場所から徒歩で二分ほどの距離で、洒落た感じではなく、大衆居酒屋のような店構えをしている。日本なら定食が美味しそうな、ごちんまりとした家族経営の店といった感じだ。

あれ？ 食べ歩きと言っていたから、露店巡りでもするかと思っていたのだが……まあいいか。

「前に見つけた穴場っすよ！ まだ誰も連れてきてないところで、一押しっす」

「それは光栄だね。食べることに關してはシユイに間違いはないだろうから、期待しているよ」

そう口にするるとシユイは笑みを浮かべ、俺を中へと引っ張り込ん

だ。

店内は床張りに見るからに年代物の机と椅子が並んでいるが、しっかりと磨き上げられていて掃除が行き届いている。

日本と違いこの世界だと店内が汚らしい店も少なくないので、これだけでも飲食店としての期待が高まるな。

「店長、お願いしていたのよろしくっす！」

四人から六人用だと思われる大きな丸机の席に躊躇いなくシユイが腰を下ろし、隣に座るよう椅子をポンポンと叩いている。

二人で使うには大きすぎる机だが店員も彼女の食欲を理解しているのだろう、ツツコミもなかった。

それに事前に連絡を入れていたのだろうな、席に着いてから一分も経たないうちに食事が運ばれてきている。

「ハツコンは時間制限があるっすから、時間指定して準備しておいてもらっただっす」

「やっぱりそうなんだ」

「三十分は短いっすから。本気で食べても満腹にはなれないっすよ」

それはシユイだけだと思っつ。普通は三十分も食べ続けたら満足だよ。

目の前に並べられた料理を目の当たりにして、俺は目を見張った。思わず、料理とシユイの顔を交互に見つめてしまっつぐらい驚いている。

この反応を待っていたのか、悪戯が成功した子供のような無邪気な笑顔がそこにあった。

「これって、和食というか日本の家庭料理だよな」

スープはお味噌汁でポテトサラダや肉じゃが、それ以外にも焼きそばやオムライスもある。懐かしいレパートリーだ。

ここは異世界の筈なのに、この料理の数々はどういうこと？

「驚いた？ 驚いたっすか？ 防衛都市にはハツコンと同郷の畑さんがいるっすよ。畑さんがニホンの料理を広めたって話っす」

ああ、そうか。俺と同じく日本から転生させられた畑がいたな、ここには。

自動販売機に転生した俺も相当なものだが、畑に転生よりかはマシな気がする。という話を以前畑としたことがあるのだが、

『そつちよりマシだと思っ』

と文字で伝えてきた。あつちにはあつちで充実しているそうなので、お互い幸せならそれでいい気がする。

「さあ、温かいうちに食べるっすよ。いただきます！」

「いただきます！」

久しぶりの食事が日本食なのは本当に嬉しいな。まずは肉じゃがをいただく。

丁寧な仕事で面取りまでしているジャガイモ。この世界ではズユギウマと呼ばれているのだったか、それを箸で摘まみ口に運ぶ。

崩れるまで煮込んだものも好きだが、これは適度に食感を残しながらも味がしっかりしみているううううっ！？

口内に広がる絶妙な味付けと芋の甘みと風味に、脳が揺さぶられ

るような感覚に意識が一瞬遠のいた。

く、くそう、甘く見ていた、ここの野菜を。

みんなから転生者である畑が作った畑産の野菜は、意識が吹っ飛ばぐらいおいしいとは聞いていたが今のはやばかった。

味付けも素晴らしいが芋のインパクトが強すぎる。となると、肉じゃがの人参もおおおおおう！　なんで食べるたびに腰が砕けそうになるんだ！

久しぶりに食べる日本食が美味しいとかじゃなくて、野菜の強烈すぎる味に全てが持っていかれている。

「ふああああっ、いつ食べてもやばひいい」

大食いと早食いが自慢のシュイが一口一口を噛みしめている。語尾に「す」をつけることすら忘れて、堪能しているな。

しかし、この味は確かにヤバい。ここまでくると、もう危険薬物の一種じゃないのかと疑いたくなるレベルだ。

「ここまで美味しいのは畑さんも流通を控えているそうなんっすけど、ここだけは特別に許されているそうっす。美味しいっすか？」

「美味しいどころの話じゃ……野菜の味はとんでもないが、味付けもいい感じで好みだな」

「ふーん、味も美味しいっすかー。あつ、じゃあこのウナスススヤエギ焼きはどうっすか」

食べるのが好きなシュイは料理が褒められるのが嬉しいのか、ニヤニヤしながらこつちを見ている。

ウナスススヤエギ焼きというのは、パツと見た感じだと豚生姜焼きだ。ウナススというのはこの世界のイノシシなので、あながち間

違いではないのだろう。

ウナススの肉と玉ねぎっぱいチミノグを炒めた料理。今度は純粹に味付けを評価するために肉だけを口にした。

「ふんつぐぐぐ、よっし」

肉だけだと思ったが口に広がるシヨウガの辛味と刺激、チミノグから染み出した甘味が肉に絡んでいて、またも意識を持っていかれそうになる。今度は踏ん張ったが。

何度も口にしてしていると野菜本来の強烈なインパクトになれてきたのか、純粹に味を楽しめるようになってきた。よく見ると食材の大きさも均一化されていて、単純な野菜の味だけではなく料理人の腕が良いのが分かる。

それになんと言えはいいのか……この味付けほっとする。味噌汁も口にしたが、なんとというか体の芯まで温まる優しい味だ。

「野菜の味だけじゃなくて……なんか、ほっとするよ。毎日、これが飲めたら幸せだろうな」

ガラッと、店の奥から大きな音が響いてきた。調理道具でも落としてしまったのだろうか。

「ふーん、毎日飲みたいと思うぐらい、美味しいっすか！」

シュイが大声で繰り返して確認しているのだが、なんでそんなに嬉しそうなんだ。

さっきから自分のことのように喜んでるように見えるが、ここの店主と仲がいいのだろうか。

「もっといっぱい食べるといいっすよ」

「じゃあ、遠慮なく」

時間制限があるので全部食べてみないと損だな。並べられていた料理の全てに箸をつける。

俺とシユイは隣り合わせで食べ続けているだけなのだが、これで彼女の望みは叶えられたのだろうか。

ミシユエルもそうだが、二人とも自分の望みというより、俺の為に行動してくれているようにしか思えない……気を使わせてばかりだな。

体感で残りの時間が三分を切ったことがわかったので、俺は食卓に箸を置いた。

「シユイ、今日は誘ってくれてありがとう。本当においしかったよ。でも、これでよかったのかい？」

俺としては大満足だが、彼女はこれで満足なのだろうか。視線を向けるとニコニコと心底嬉しそうに見えるが。

「うん。前から美味しい物を一緒に食べてみたかったす。それに、そろそろ進展してもらわないと……あきらめがつかないから」

「ん？ ごめん、なんていったの？」

最後は俯いて囁くような小声だったので、よく聞こえなかった。

シユイは顔を上げると怒っているような、笑っているような、表現しづらい顔で俺を優しく見つめている。

「あ、そうっす。料理人を紹介するっすね」

手をぱんぱんと打ち鳴らすと、店の奥から料理人が歩み寄って…寄って…。

「ラツミス!？」

胸の前で手をもじもじさせながら歩み寄ってきたのは、ピンク色のエプロンをつけたラツミスだった。

「ええとね。ほら、手料理をいつか食べてほしいって言ってたよね。だから、シュイが気を使ってくれて」

そういうことか。何故、シュイがずっと笑顔だったのか理解できた。

シュイは大雑把なところもあるけど、孤児院で子供たちの面倒をずっと見てきただけあって、結構気が利くんだよね。

この料理は全てラツミスの手料理だったのか。

「あのね、美味しかった?」

顔を真っ赤にさせてチラチラこっちを見ている彼女に伝える言葉は、決まりきっているよな。

「ご馳走様。おいしかったよ。また食べたいな」

「うんっ、また食べてね!」

「よかったっすね、ラツミス」

手を取り喜び合う二人を見て、自分がどれだけ仲間にも恵まれているのかを実感している。

ありがとう、二人とも。腹も心も満たされた最高の食事だったよ。

ピティーと一緒

今日は三日目か。空は晴れ時々曇りといった感じだ。

ええと、今日の相手はピティーだったな。

どんな願いかは確認していないので何を頼まれるのか……彼女相手だと若干心配なところがある。一応、叶えられることならなんでもいいと言ったので、無理難題を口にすることはないと思うけど……う、うーん。

体の灯りを点滅させながら悩んでいると、不意に影が差す。

視線を正面に向けるとそこには淡いピンク色のワンピースを着たピティーがいた。

いつもは地味で余計な飾りが一切ないシンプルな格好なのだが、今日はフリルや細かい刺繍が至る所に施された、見るからに高級そうな服装をしている。

もちろん盾は持っていない。

「ハッコン……変じゃ……ない？」

前髪はいつものように目を隠しているが、頬を紅潮させているので照れているようだ。

髪も丁寧にブラッシングしているようで、深緑で艶のある真っすぐな髪に仕上がっている。

女性の格好についてはちゃんと褒める、というのを自動販売機の前で会話する男女から既に学んでいた俺は、まず人間へと変形した。

「いつものおとなしい服装もいいと思うけど、そういうのも似合うんだね」

「ありがとう……ハッコンも……元の姿……かっこいいよ……」

ミシユエルを毎日見ていると、かっこいいと言われることに違和感しかないけど、お世辞でも褒めてもらったら嬉しいものだ。

でも、照れるなやつぱり。自動販売機の状態なら恥ずかしいセリフも結構平気になったけど、生身だと恥ずかしさが勝ってしまう。

「ええと、今日は何をして欲しいのかな？ 前も言ったけど、できる範囲のことならできるだけ要望に応えるよ」

「あの……ええとね……ピティーと……恋人の……」

俯き胸の前で指を落ち着きなく動かしている彼女。その先の言葉は聞くまでもない。ラツミスが存在がなければピティーの願いを叶える選択肢もあつただろう。

一度ちゃんと断つたのだが、人の体と言葉ではっきりと言わないとダメか。

「ピティー、ごめ」

「ふりをして欲しいの……」

あれ、予想外の言葉が続いたぞ。真似事だけでいいってことか？

「えとね……前カレが……この町にいて……また付き合おう……って迫ってきて……」

前の彼氏というのは、結婚詐欺師でピティーも騙して大量の金を貢がせていたクズのことだよな。彼女に言わせると恋人だったらし

いが、デートどころか手を繋いだこともなく、ひたすら金を貢ぐだけの関係だったらしい。

あれだ、ホストにはまった人と一緒だ。

「でも、元カレは結婚詐欺で北の牢獄にいるって聞いたけど？」

「うん……釈放された……みたい……」

あれから数年経っているから釈放されたのか。でも一生出られないと聞いていたんだが、金でも積んだのかもしれない。この世界の取り締まりはガバガバらしいから、金さえあれば大抵なんともなると聞いたことがある。

「つまり、元カレがしつこく迫ってくるから、恋人役としてそいつを追っ払って欲しいってことかな？」

「そう……ダメ……かな……今日……恋人のふりをしてくれたら……ハツコンのこと……あきらめるから……」

すぐるように俺を見ていた彼女の前髪が風にあおられ、隠れていた瞳が潤んでいるのを目撃して断れるわけがなかった。

あきらめる、という言葉聞いて胸が締め付けられたが、これでいいんだよな。

「いいよ、三十分しか無理だけど。それでいいなら」

「よかった……ええと、待ち合わせは……あそこ……」

俺を先導するために先を歩くピティーに続く。

へブイたちから聞いた話によると口が達者で厄介な男らしいので、

ピティーン一人だと言いくるめられる可能性が高い。

俺と出会った当初は誰に何を言われても盲目的に元カレを信じていたのだが、共に過ごすようになってから、元カレのことはどうでもよくなつたようだ。

その理由は……俺の存在で間違いないだろう。惚れられたというより、依存が移つただけの気がしていたが、今は相手が本気なことぐらい理解している。

これで彼女が納得できるなら制限時間まで彼氏を演じさせてもらおう。

「あの……恋人だから……」

立ち止まり振り返つたピティーンから、おずおずと差し出された手を躊躇わずに握る。

こういう行為は逆に彼女に対して酷いことをしている気になるが、それを望んでいるというのなら付き合うまでだ。

そのまま手を引いて彼女に連れていかれたのは、シユイの時とは真逆のおしゃれなカフェだった。男性一人で入るのには勇気がある店構えをしている。

店内にはカップルと女性ばかりで、一人で来ている男性はいないようだ。

いや、一人いるな……窓際奥の席に移動すると、そこには先客がいた。

金髪に目尻がつり上がったの狐目の男。

パツと見はイケメンだが、よく見ると頑張っているイケメン風だな。

耳や頬を覆う髪の毛で顔の輪郭を誤魔化している。男なのに薄っすらと化粧しているようで、吹き出物が一つもない肌が逆に気持ち悪い。

「ピティー、そいつが例の彼氏かよ。けっ、冴えない男だぜ」

「彼を……悪く……言わないで」

本気で怒っているようで、繋がったままの手が強く握られる。

彼女が反論を口にするとは思っていなかったのか、糸のように細い目が驚きで見開かれた。

ここで追撃しておくか。

「ピティーさんと付き合わせていただいています。貴方が昔の男でクズ野郎だというのは、彼女や愚者の奇行団の方々から聞き及んでいますよ。ふっ」

俺は席に着かず、見下ろした状態のまま鼻で笑う。

元カレが俺を睨みつけているが、何度も修羅場をくぐり魔物と戦ってきた俺に通用するわけがない。

「彼女が迷惑しているので、これ以上近づかないでもらえますか？」

「んだとっ！ てめえ、こいつは俺のもんだ。愚者の奇行団がバツクにいるからって、調子に乗ってんじゃねえぞ」

椅子を蹴り倒して立ち上がった元カレが意気込んでいるが、まったく怖くない。子猫がじゃれついてきているレベルだ。

ピティーが小刻みに震えているのが手のひらから伝わってくる。彼女の強さなら怯える必要はないのだが、恐怖が体と心に沁みついてしまっているのか。

励ますつもりで強く握り返す。

怯えて床に向けられていた視線が俺を捉えたので、大丈夫だよ、

と自信ありげに笑ってみせた。

「愚者の奇行団の手は借りる必要がない。お前みたいな小物相手にもつたないからな」

真面目に話し合うつもりだったのだが、今までピテイーを騙し貢がせてきたことを思い出し、相手の対応を見て気が変わった。

……とことん叩きのめしてやろう。

「へっ、調子に乗るんじゃないぞ。この数年、牢屋で俺は仲間を集い、出所してから連絡を取り合って今じゃ……こうだ」

元カレが手をすつと上げると、店内の客全てが立ち上がり、隠し持っていた短剣や武器を手にしてこちらを睨んでいる。

客に扮していた仲間だったのか。いや、客だけじゃなく店員も。数は二十か、用意周到なことだ。

「愚者の奇行団を連れてきたときの備えだったんだがな。こいつをエサにして、ここで闇討ちする予定だったんだが」

あー、本来は愚者の奇行団を襲うつもりだったのか。

「それは誰からの依頼だ？」

「けっ、それをお前が知ってどうすんだ。……まあいいか、聞いたところで誰にも話せなくなるんだしな。煮え湯を飲まされたところぞの誰か、つてことだけ教えてやるよ」

どうせなら「冥途の土産に教えてやる」というテンプレ台詞を期待していたのだが、定番の一つが聞けたのでいいとしておこう。

しかし、二十人程度のチンピラ集団で俺たちをどうにかできると考えているのか。

全員が余裕の笑みを浮かべているのがおかしくて、吹き出しそうになる。

「ピティーンも……戦つ……」

やる気のようにだが、恋人役としてやることは決まっている。

「ここは任せて。恋人は守ってみせるよ」

盾がなくてもこの程度の相手なら、ピティーン一人でもなんとかできそうな気はするが、ここでカツコつけるのが恋人の役割だろう。

「へっ、女の前で粹がるとろくな目にあわないぜっ！」

俺に向かって元カレが突っ込んできたので、突き出されたナイフを素手で掴んで刃をへし折る。

「えっ」

何が起こったのか理解できないように、折れたナイフを握ったままま間抜け面を晒している。そのまま、手首を掴んで後方へ投げた。軽いな。大人一人だというのにバスケットボールでも投げたかのような感覚だ。

仲間一人を巻き込んで床に転がっている元カレは気を失ったようだが、他の連中が殺気立っている。

全員順番に倒してもいいのだが、制限時間が残り五分を切っている。ここは一気に決めさせてもらおう。

手から次々とペットボトルを取り出し、店中にばら撒く。

俺の行動が理解できない連中が戸惑っている。まあ、俺のことを知らなければ意味不明な行動だよな。

準備は整った、勝負をつけるぞ。

「思う存分楽しんでいってくれ、自動販売機ドリームウォルトコーナーだ！」

店内に無数の自動販売機が現れ、なす術もなく蹂躪されていった。

「ハッコン……ありがとう……」

「いらっしゃいませ」

制限時間を過ぎてしまったので自動販売機に戻った俺は、プレイヤーに抱きかかえられて移動している。

これで元カレとは完全に縁が切れた。防衛都市の牢屋に放り込まれた奴は二度と牢屋から出ることはない。

ここの領主であるジェシカさんとは冥府の王との一件以来、なにかと縁があり親しくさせてもらっているのだから、あの人は不正を許すような人ではない。

プレイヤーには自分の幸せを求めて強く生きてほしい。クズや自動販売機相手じゃなく、まっとうな恋愛をして幸せに。

「ハッコン……防衛都市って……恋愛に寛容……なのを……知っている？」

唐突にそう切り出したプレイヤーの意図が分からず、俺は「ざんねん」としか返せなかった。

「最近ね……この町の条例が……変わったの……同性愛も……無機

物との結婚も……一夫多妻も……認められているんだって……」

えっ？ 同性愛はまだしも無機物との結婚とか条例で認められるわけが、画期的すぎるだろ。

……いや待てよ。ここは畑さんの拠点。そして、領主であるジェシカさんは超絶美人だが性別は男性だ。

それにジェシカさんは畑さんにベタ惚れだという噂を聞いたことがある。実際、畑さんに迫っているシーンを見たことが……そういうことかっ。

「ピティー……二番目でも……三番目でも……いいからね……第一夫人は……あきらめる……」

「ぼていさん」

えっと、話が違いますか？

そう言いたかったのだが、自動販売機に戻った俺は言葉が足りず、正確に思いを伝えることができない。

「ふふふ……今日は楽しかったね……ハッコン」

今まで一度も見たことがない、屈託のない無邪気な笑顔を向けられたら「いらっしやいませ」と伝えることしかできないじゃないか。

ヒュールミと一緒

「うっし、デートするぞ！」

今日のお相手はヒュールミだ。

以前、偽物の自動販売機を見に行った時と、似た服装のヒュールミがいる。

いつもの黒衣姿もいいと思うけど、日頃と違う格好は新鮮で違った魅力を感じるな。

「研究の日々に加え、ずっと冒険ばっかだったからな。女として一度ぐらいは男を連れて買い物とかしてみたいんだ！」

顔を真っ赤にしたヒュールミの頼みごとがこれだった。

出会ってからずっと行動を共にしてきたから分かるのだが、男っ気が全くなかったからね。仲間の男性陣はイケメンだがコミュ障で俺にばかり構っていたミシユエル。見た目は悪くないのだが靴にしか興味のないヘブイ。

あとは自動販売機の俺ぐらいだし……年頃の女性が過ごす日常としては悲しすぎる。

「今日は何処にでもついていくよ。いっぱい、楽しもう」

「えっ、なんで涙ぐんでいるんだよ？」

研究と冒険の日々で潤いのある人生だったとは言い難い。充実していた日々であったことは間違いないけど。

女らしいことの一つぐらいしたかったよな、うんうん。

色恋沙汰に関しては深く考えるのはやめて、今はみんなの望みをかなえることだけに集中しようと思っっている。

「なんか、釈然としねえけど、まあいつか。んじゃ、服を買いに行け！ こういうの憧れだったからな」

今日はいつにも増して可愛らしく見える。口調が少し乱暴なので勘違いされがちだが、ヒュールミは仲間想いで可愛らしい女性だからね。

今日は無理にテンションを高く保ち、恥ずかしさを誤魔化しているようだ。

とまあ冷静に考察しているふりをしているが、実は俺もかなり動揺というか緊張している。

デート……クリスマスやバレンタインデーにいい思い出が殆どない。その前後に変わった商品が自販機に並ぶ場合があるので、それだけが楽しみだった。

世の中の男性がモテるために服装やプレゼントや食事代に費やす金を、ほぼ全て自動販売機に注いでいた人生だったので、この結果は当然なのだが。

会社で同僚との会話でも趣味が自販機巡りだと伝えたと、ドン引きされていた。

「そ、それじゃあよ、あのさ……よくわかんねえから、どうしたらいいか教えてもらえねえか」

俯いてもじもじしているヒュールミ可愛いな。

エスコートをしなければならぬのか。日本での自分ならデートをする場合、ネットで情報を集め無難なコースを選び出していただろう。

だが、ここは異世界で情報端末なんぞ存在しない。スマホの自動

販売機はあるのだが、ネット設備がない異世界ではなんの役にも立たない。

そうなる人々の口コミが大切になってくるのだが、俺は自動販売機として日夜人々に商品売り、雑談に耳を傾けていた。

自動販売機の前で飲み物を口にしながら、たわいもない会話をするとというのは日本でもよく見かける光景。それはこの世界でも同じだ。

つまり、俺はかなりの情報通ということになる。女性が喜びそうな店や場所も把握済み。そこからヒュールミが好みそうな店をチョイスすると…… よっし。

「では、お嬢様、参りましょうか」

わざと丁寧な口調になり、胸に手を添えてから頭を下げる。

自分でやっておいてかなり恥ずかしいのだが、ヒュールミの反応が見たくて無理を試してみた。男勝りなところもあるが、実はこういうシチュエーションに憧れがあることを俺は知っている。

俺から漫画雑誌を購入することがあるのだが少女漫画が多く、このような場面を何度も読み返していたからね。

すっと姿勢を正すと 熟れたトマトの方が負けているのではないかと思えるぐらい、肌を赤く染めた彼女がぼーっと突っ立っている。

うん、これが見たかった。

「で、何処に連れて行ってくれるんだ？」

「ヒュールミが興味ありそうなところだよ」

彼女の趣味嗜好はある程度把握しているつもりだ。たぶん、喜ん

でももらえると思う。

「あ、あのさ、もう一度、名前読んでもらえねえか。ほら、自動販売機の時って名前呼ばれなかったからよ」

頭をボリボリと搔いているのは、照れているのを誤魔化すときにやる仕草だ。

名前……確かに言葉が足りなかったので、ヒュールミと呼んだことが一度もなかった。アネゴと言ったらむくれていたし。

改めて求められるとこっちも照れるな。だけど、今日はどんな望みも叶えると決めている。

「ヒュールミ」

「お、おう」

しまったな。自動販売機状態だったら、この映像を録画できたのに。

そう思ってしまうぐらい、目の前の照れながらも微笑む彼女はとても魅力的に映っていた。

そんな彼女を引き連れて向かった店は 町一番のおしゃれな服屋。

可愛い服ばかりを並べた店の扉を開ける。入り口付近にいた店員に話しかけ、あることを相談すると快く承諾がもらえた。

「突っ立ってないで、入ったらどうだい」

「ええとよ。オレがこんな店に入るのはちょっと、場違いっていうか」

店の前で物怖じしているな。確かに日頃の彼女からは想像もつかない服ばかり取り扱っている店だ。

しかし、お姫様が着るようなドレスや、リボンやフリルといった淡い色合いの女性らしい、言ってしまうえば少女趣味全開の服装に憧れがあるとこは把握済み！

シンデレラとか魔法少女系のアニメ熱心に観ていたよね。この店はそういった服装を取り扱っているとの情報を、市民や領主のジエシカさんから得ていた。

「恥ずかしがらなくても、大丈夫だよ。今日はこのお店貸し切りにしておいたから」

「マジか！ おおっ、貸し切りか……お姫様にでもなったみたいだな。ありがとよ、ハッコン」

「もったいないお言葉です」

「それ、やめい」

笑いながら俺の胸を軽く小突いたヒュールミは、店内へと駆け込んでいった。

ずらっと並ぶ色とりどりの服に目移りしながらも、次々と手に取って体に合わせている。

「これもいいな、これも悪くねえ。いや、オレには似合わねえか」

いつも魔道具開発に明け暮れてファッションに興味がないように見えていたのだが、やっぱり乙女なのだな。

「それも似合っていると思うよ」

「おつ、そうか！ あーでも、これとか高そうだな。品質もいいみたいだし」

この店には値札がないので、実際の値段は店員に尋ねなければわからない。

ヒュールミの鑑定眼は間違いじゃない。ここは高品質で、かなりお高くなっている。

「気にしないで好きな服を選んでいいよ。ここの代金は俺が払うから」

一度言ってみたかったんだよな、この台詞。

自動販売機と付き合えばいいのに、と周囲に言われ続けた人生。一生無縁だと思っていたリア充のような……感無量だ。

「そんな、悪いぜ」

「男に恥をかかせないで欲しいな。前のダンジョンで稼いだお金があるしね」

自分で言っておいてなんだが、背中がぞわぞわする。気障な台詞は似合わない。

「こつというのは男を立てるべきなんだよな。あの本に書いてあったぞ」

あの本とは彼女が密かに恋愛の教本としている少女漫画のことだろう。悪影響を与えるような雑誌は見せないようにしているが、少女漫画も過激な内容の作品があるので、ちょっと心配はしている。

「おつ、そつだ！ どうせなら、ハツコンが選んでくれよ」

「えっ、俺が？ 服装のセンス皆無だよ？」

「おつ。ハツコンが選ぶ服なら、どんなものでも構わないぜ」

まさかのイベントが発生してしまった。ヒュールミの服装選びをする羽目になるとは。

せめて、何種類かヒュールミがチョイスしてから、どっちがいいか選ぶならまだしも……全てを託されるのか。

「で、でも」

「お願い、ね」

くううつ、頬に指を当てて可愛らしくお願いされてしまった。今まで一度も見たことない言動に心臓が大きく一度跳ね上がる。

気が多いな俺も。ラツミス一筋と決めているのに……これはヒュールミがラツミスに負けないぐらい魅力的なのが悪いのであって、自分の意志の弱さではない よな、うん。

つて、今は彼女の為に過ごすことだけ考えないと。

ヒュールミに似合う服か。この青いゴスロリのような格好はどうだろうか。リボンやフリルが付いているし、お姫様っぽく見えるよな。

ただ、胸部を強調するようなデザインなのでヒュールミに向いているかと言われると、まあ、あれだ。

うーん、色がピンクとかの方がいいか？ いつも黒衣だから明るい色がいいよな。シンプルなワンピースも悪くないけど、ピティーンと被るか。

シュイのようなボーイッシュな感じも似合うだろうけど、今求められているのは違うはずだ。自動販売機のデザインなら自信があるのだけど、服装となると難しい。

そつだ、あれこれ悩んでいる暇はなかった。俺には三十分の時間制限がある。

視線だけヒュールミへ移動させると、顔をほころばせてこっちを見つめていた。期待をひしひしと感じるぞ。

考えれば考えるほど袋小路に迷い込みそつだ。よっし、決めた。完全に自分の好みで選ばせてもらおう！

膝上の長さまでしかないスカートと丸みを帯びた大きな襟がついた半袖の服。その上から羽織る丈の短すぎる白いカーディガンのような上着。

完全に俺の趣味だが、ヒュールミならきつと似合う。

「ヒュールミ、これでどうかな。俺が好きな組み合わせだけど……」

「おつ、ハツコンの好みなんだな！　じゃあ、あつちで着替えてくるぜ」

俺が手渡した服を掴むと試着室に飛び込んでいった。

待っている間は手持無沙汰だったので、適当に服を眺めているとカーテンの開く音が背後からしたので振り返る。

そこには俺の選んだ清楚なイメージを抱かせる格好をした、ヒュールミが佇んでいた。

「綺麗だ……」

素直な感想が口から零れ出た。

口元を押さえて俺を見つめていた彼女が涙目で微笑むと、その場

でくると一回転するとスカートの裾がひるがえる。

「ありがとう、ハッコン。一生大切にするぜ……しますわ」

振り返った瞬間に見せた、彼女の幸せに満ち溢れた表情を俺は一生忘れないだろう。

ラツミスと一緒

仲間の望みを人型で叶えよう週間も最終日を迎えました。

さんさんと輝く太陽が今日を祝福しているかのようだ。

最後の締めくくりは我が相棒であるラツミス。彼女も楽しみにしていてくれるだろうが、俺だって今日を待ちわびていた。

まだ自動販売機形態なのは、少しでも時間を有意義に使う為に、彼女がやってくるまで 変形 を発動させたくないからだ。

体の灯りを点滅させながら待っている、相棒の気配を感じた。機械の体で気配を感じるというのもおかしな話だけど、なんとなく分かるのだ。

彼女はいつものように花が咲いたような、見ているこつちまで幸せを感じる満面の笑みを浮かべているのだ……ろ……あの、ラツミスさん？

腰に手を当てて仁王立ちしている彼女の顔は、フグのように頬が大きく膨らんでいた。目尻も若干上がっている。

つまり、怒っていらっしやるようだ。

「いらっしやませ」

怒っているように見えて実は新しい顔芸なのかもしれない。いつもの挨拶で反応を確かめてみる。

「いらっしやません」

うん、怒ってるね、やっぱり。

ブンブンという文字が背後に浮かび上がりそうな、典型的な怒り方をしている。

腕を組んでいるので豊かな胸が下から押し上げられ、いつもよりそこが強調されているのだが、狙っているわけじゃないよな。

「ハツコン、うちがなんで怒っているかわかる？」

「ざんねん」

正直さっぱりです。

最近、彼女と喧嘩したこともないし、怒らすような発言をした覚えもない。

昨日はヒュールミと一緒に過ごす前に会ったきりだが、その時は機嫌が良かった。あの後、何かあったということだよな。

彼女の身に一体何がっ！

「ヒュールミに服を選んであげて、買ってあげたんだよね」

「いらっしやませ」

「ピティーとは恋人役やって、いちゃいちゃしてたんだってね」

「いらっしやませ」

「ふーん、いいなあー、私もそういうの考えていたんだけどなー」

鈍い俺でもさすがに理解できたぞ。つまり、

「しっつ」と

「んもおおおっ！... そういうことは、思っても言わないの！...」

照れ隠しなのだろう、手を振り回して俺をぼかぼか殴ってくる。
まあ、実際はぼかぼかなんて生易しい物ではなく、ドゴンドガン！
といった感じで手がぶつかるとびに衝撃波で砂埃が舞い上がっている。

普通の人なら一撃目で運が良くて骨折、悪ければ死ぬ恐れもある威力だが、頑丈の上がった俺の体なら余裕だ。

《1のダメージ。耐久力が1減りました》

《1のダメージ。耐久力が1減りました》

《1のダメージ。耐久力が1減りました》

男として我慢すべき場面であるよね。

「二人としたことをうちもするからね！ 恋人役は同じ条件だし…
…服を買いに行くよ！」

いつものように背負子を俺に取り付け背負うラツミス。

そして、そのまま大通りを進んでいく……って、ちよつと待てい。
いつもの流れだったので違和感なく背負われてしまったが、今日は人として付き合うのだから、この状況は間違っている。

「らっすいす」

「なーに、ハッコン」

「おりりゆ」

「えっ、降りたいの？ そしたら、ハッコン動けな……あっ、そうだった！」

ラツミスも気づいてくれたようで、俺を地面に降ろして背負子を外してくれた。

よっし、変形 発動だ。

最近は毎日人に戻っているの、自分の体に対する違和感も薄れてきた。そもそも、元の体なのだから当たり前なのだけ。

「いつもの癖で、ハツコンが戻れるの忘れちゃった。ごめんね」

「いいよ。俺も同じだったし。じゃあ、服屋までエスコートさせてもらうよ」

「うん、お願い。あつ、ええとね、一つやってみたいことがあるの。いいかな？」

横に並んだラツミスが上目遣いで頼みごとを口にする。女性のこの仕草って反則だよな。大抵の男が断れないと思う。もちろん、俺もそっち側だ。

「なになにかな」

「腕組んで……いい？」

「もちろん、喜んで」

よっし、かなりドキツとしたが動揺を隠して自然に返せた。

片腕を曲げて、そこに腕を通す隙間を作るとラツミスがすっと腕を入れてくる。

「あはっ、嬉しいなー。ずーっと夢見ていたんだよ。こっぴやって、

腕を組んで歩くのを」

「それは、俺も同じだよ」

腕に伝わる温かさと柔らかい感触。自分が人間であることを実感させてくれる。

人の姿に戻ったら周りから嫌われるのではないかと心配していたが、それは杞憂だった。

仲間は誰一人として態度を変えずに今に至る。悩んでいた自分が馬鹿らしく思えるぐらい、自然体で接してくれているみんなには本当に感謝しているよ。

他愛もない雑談をしながら町を歩く。それだけで、胸が高鳴り鼓動が激しくなる。

この時間が永遠に続けばいいと、月並みなことを思うが制限時間は三十分しかない。変形の制限時間も使い続けていれば、いつか伸びるかもしれないな。それを期待しよう。

「っと、この店だよ」

「わー、素敵なお店だね！」

ヒュールミと同じ店にしようかとも思ったのだが、自動販売機の勘が同じ場所は避けた方がいいと囁いていたので、別の店をチョイスした。

この店は男性の衣服も置いてあるので、前から覗いてみたかった店だ。

人間になれるようになったのだから、異世界の服に袖を通すのも悪くない。

店内は前の店よりかは値段控えめだが、それでも一般市民が手を出すには躊躇する値段設定だ。

「えっと、じゃあ……ハツコンうちの服選んでね！」

「やっぱり、そうきたか。任せて、ラツミスに似合う服を選んでみせるから」

ふっ、この展開は予想通り。ヒュールミの服選びで散々迷って、貴重な時間を浪費させてしまったことを後悔していたので、自動販売機に戻ってからファッション雑誌を夜中に読み込んでいたのだよ！闇夜に鉄の塊の前に 念動力 で浮かぶ雑誌、というホラーな光景で住民に迷惑をかけたかもしれないが、それもこの時のため。付け焼刃とはいえ、かなり勉強してきたからね。

ラツミスにお似合いの服を選び差し出すと、向こうも服を俺の胸に押し付けてきた。

「えっ？」

「うちもハツコンの服選んでみたから、これを着てみて」

「あっ、そうなんだ。じゃあ、着替えてみようかな」

「うん。一緒に新しい服にお着替えだよ」

まさか、俺の服を選んでもらえるとは。じゃあ、隣の試着室で着させてもらうか。

スーツが体と一体化してないか不安だったが、ちゃんと脱げるな。異世界の服は少しごわごわしているけど、思ったよりも動きやすくて着心地もそんなに悪くない。

白が基調で橙色の縁取りがアクセントになっている感じが。これって基本状態の自動販売機の色に合わせてくれているみたいだな。

うん、いいんじゃないかな。この色彩は落ち着くし。

試着室のカーテンを開けて、外に出て待っていると。ラツミスの入った試着室のカーテンが開いた。

そこには暖かい色合いではあるが、少し大人びた格好をしたラツミスがいた。いつも短パンなのでスカートを選んだが、正解だったようだ。

ヒュールミとは逆に落ち着いた感じにしたのは、前に偽自動販売機の敵情視察に向かった時の格好がとても似あっていたので、それを参考に選ばせてもらった。

「ハツコン、かっこいいよ！ すっごく、似合ってる」

「ラツミスも可愛いくて、綺麗だよ」

お、おーし、言えたぞ。目の前のラツミスも真っ赤だが俺も顔が熱いので、たぶん同じような状態なのだろう。

「んと、ええと、この後はなにしようか」

「露店で何か買って、大広場で一緒に食べようか。そういう、普通の……恋人がするようなことを、ラツミスと一緒にしたいな」

「あう、ずるいよ、そんなこと言われたら……もっと好きになっちゃう」

反則級の言葉に俺はノックアウト寸前で彼女を見つめることもできず、手を強引に繋ぐと大広場へと駆け出す。

「ねっ、ハツコン。もしかして、照れてる？」

「どうぞだろっ」

「じゃあ、こっち向いてよ。ねっ、ねえ」

脇腹を人差し指で突いてくる彼女の攻撃を躲しながら、俺は露店へと急いだ。

「いい天気だねー」

「そうだね。日向ぼっこってこんなに気持ちよかったんだね」

日差しを眩しいと思ったことはあるが、こんなにも心地よいと感じたことはなかった。

暖かい陽の光だけじゃない、隣にラツミスがいるからこそ、ここまでの幸せを感じることができる。

「手料理は前に食べてもらったから、また今度ね」

「料理は本当に美味しかったよ」

「次はもっと腕によりをかけて、得意料理を披露するからね」

「ん、楽しみにしているよ」

「ねえ、ハッコン。時間はどれぐらい残ってる？」

「残り五分を切っているのか。楽しい時間は経つのが早いな」

これが最後というわけじゃないのだが、それでもこの時間が続けばいいと思ってしまっ。

繋がれた手から伝わる温もりも穏やかに流れる時間も、全てが愛おしい。

「もう、時間がないね。今日はありがとう、ハッコン。私のわがままを聞いてもらって。えっとね、私はもう満足したからハッコンがしてみたいことってない？」

してみたいことが。今でも十分すぎるぐらい幸せなのだけ……やりたいこと、あったな。ラツミスにだけしてみたかったこと。ずっとずっと、彼女と出会ってからやってみたかったことが……ある。

「なんでもいいのかな？」

「うん、なんだっていいよ。どんなことだって」

ここでとんでもないことを要求しても、彼女はきつと従ってくれるだろう。

なら、俺の望むことはたった一つ。

俺は広場のベンチから腰を上げると彼女の前に立ち、背を向けると屈みこむ。

「ラツミスを背負わせてくれないかい」

今まで背負われてばかりだった。

どんな苦難も彼女の背から見守ることしかできなかった。

あの小さな背中に守られていた。

本当は平和な場所で穏やかに過ごしているのが似合う優しい女性

だ。そんな彼女に何もかも背負わせてしまった。

望んでもいかなかった怪力を手に入れたばかりに、人に甘えることも接することもできなかった。

そんな小さな彼女を俺は背負ってあげたい。

「どうぞ、ラツミス」

「うん」

背を向けているのでどんな表情をしているかもわからないが、背中に流れ落ちてくる水滴が全てを物語っている。

背中を覆う彼女の温もりを感じながら立ち上がった。

軽いな。こんなに軽かったんだラツミスは。

彼女を背負ったまま大通りを進んでいく。目的地は決まっていけど、ただゆっくりと歩を進める。

「温かいんだね、人の背中って」

俺の肩に添えた手にギュツと力が入ったのがわかる。

「ハツコンの背中大きくて、好きだよ」

「それは、よかった」

「うちってさ、生まれたところから怪力で、人を簡単に傷つけてしま
うから、人に触れないように触れられないようにしてきたんだよ」

「うん、知ってる」

ヒュールミに相談されたこともあったからね。

「だから、両親にも背負ってもらった記憶がなくて。友達とも触れ合うことはなかったの」

自分の怪力を持って余していたラツミスは人と触れ合うことを極端に恐れていた。悪気がなくても容易に人を傷つけてしまうからだ。

「ハツコンが鉄の塊で、うちが力を込めても壊れないってわかった時、本当に嬉しかったんだ。やっと、触れ合える友達ができたって」

他の人と接するときはいつも緊張していたよね。それを表に出さないようにしていたから、気づいている人は少なかったみたいだけど。

「ヒュールミは大切な親友だよ。でも、一緒にはしゃいで遊んでも、手を繋いだりすることができなかった。でも、ハツコンは特別。うちにとって特別で大切な人」

「俺もそうだよ」

「人間に戻っても、傍にいてくれる？」

彼女の緊張がかすかに震える手と、萎縮した体から伝わってくる。俺は大きく一度新鮮な空気を吸い込み、頭と心を落ち着かせてから言葉を返す。

「当たり前だよ。ずっと一緒にいようね、ラツミス」

「うん、ずっと一緒だよ！」

振り返らなくても、彼女がどんな顔をしているか想像がつく。
きっと、俺と同じ表情をしているから。

ラッミスと一緒に（後書き）

外伝もひとまず終了です。

苦手な甘々なラブコメっぽい感じを目指しましたが、どうでしたか？
本編はバランスやストーリーを考えてあれでも自重していたのですが、外伝ぐらいは好き勝手やろうと思っています。

また更新することもありますので、続きは気長にお待ちください。

っと忘れていました。明日二月一日に三巻発売となります。

本屋に立ち寄った際にご購入を検討してみてくださいはいかがでしょうか？

（直訳・買ってください）

自動販売機と畑とバレンタインデー

防衛都市の中に建造物が一切ない一角が存在する。

そこは石畳もなく土がむき出しで、通常時は何も無いのだが、日によっては色とりどりの野菜が地面を埋め尽くすこともあり、街の不思議スポットの一つだと言われていた。

……まあ、町の守り神のように敬われている、畑が町に滞在するときの定位置だからなのだが。

ここって二十四時間で、毎月三十日の三百六十日でいいんだよね？

俺は 念動力 で商品のボールペンを操り、足元の地面に日本語で書き込む。

すると、地面に日本語の文字が浮き出てきた。

『そうだよ。ここは北の方だから日本の東北地方のイメージでいける』

俺よりも先にこの世界に転生しただけあって、日本人目線での情報はとても助かる。

畑と会話するときには日本語での筆談が多い。万が一誰かに見られても解読されないのが、安心してプライベートな話や馬鹿話ができるので助かるよ。

この世界で今日は何日？

『ええと、二月十三日だよ』

おー、バレンタインデー前なのか。異世界に来てから季節を気にすることはあったけど、正確な暦を気にしたことはなかったな。

日本ならチョコ関連の商品を大量に仕入れたら売り上げが期待できるけど、異世界にはバレンタインデーのイベントなんて存在しないだろうから関係ないか。

『悪いんだが、バレンタインデーの情報はこの街に浸透している。キココは心が読めるからね……ぽろっと何気ない会話中に思ったことを聞かれてしまって、面白いイベントだからとやる気になって、それが周りに広まっていった……』

なん、だと。あの忌々しいリア充のためにあるイベントが、この世界にも広まってしまったというのかっ！

『ハツコンもバレンタインデーにはろくな思い出がないのか』

母と身内と彼氏がいる女友達が義理でくれるぐらいだったからね。たまにチョコ味の変った飲料が期間限定で自動販売機に並ぶのが、唯一の楽しみだったぐらいかな。

『自動販売機でチョコレートが売ってたりは？』

結構あるよ。イギリスだったかな、チョコレート専門のもあるからね。

アルゼンチンの自動販売機はプロモーション活動で面白い試みをしていて、牛のオブジェクトと自動販売機まで人間同士で手を繋いだら、センサーが反応してチョコが買えるとかやっていたよ。

チョコの自動販売機は結構古くからあってね、チョコとガムを買えるものもあつたらしく……って、ごめん。自動販売機のことになるとダメだな。

恥ずかしいことだが畑と一緒にいるときは、自動販売機ネタが通じるのが嬉しくて、一方的に話し込んでしまうことがある。

『いいんだよ。自分の好きなことって饒舌になるよな。わかるわかる』

そう言ってくれると助かるよ。畑は何かバレンタインデーにまつわる思い出とかあったりする？

『バレンタインデーの思い出か……ふっ、いっぱいあるよ。よかつたら、聞いてくれるかい？』

聞かせてもらえるなら。

『そう、あれは幼い頃。とても仲のいい女子がいたんだよ。小学生の低学年だというのに、お互いに好きだって言いあっていて、恋人ごっこをするような仲だったんだ』

おー低学年なのに、ませているなー。

『そして、運命のバレンタインデーの日。確実に本命チョコがもらえると信じていた俺は、一日中ウキウキで落ち着かなかった。ただ、学校にチョコを持ち込むのは禁止されていたから、彼女は持ってきていなくてね……その日の放課後に「家に帰ったら、私の家に来て」って恥ずかしそうに耳元で囁いたんだ』

ほ、ほう。小学生にしてリア充とは。くっ、俺にはそんな甘い思い出なかった！

『胸の高鳴りを抑えられないぐらい、喜びと緊張でどうにかなりそうだった俺は、家にランドセルを置いてから、速攻で彼女の家へ自転車を立ちこぎで走らせた。到着した俺は震える指でインターホン

を押ししたのさ』

これが中高生の頃だったら心底羨ましいが、その年だと嫉妬よりも微笑まじさが勝つな。自動販売機じゃなかったら今、顔がニヤついているそつだ。

『あのー、みっちゃん帰っていますか。と言うと、扉を開けて現れたのは、みっちゃんのお母さんで「ごめんねー、あの子、友達とチョコレート配りにいるのー」と言っただよ……』

なんだろう。微笑ましい話を聞いていたはずが、雲行きが怪しくなっているような……。

『俺が、あ、そうなんですか。と返すと「ごめんねー。あつ、そうそう。畑君がきたら渡しておいてって、チョコ預かっていたの。はいどうぞ」と、お母さんの手からチョコレートを受け取ったんだ……』

お、おう……。チョコを彼女のお母さんから、か。う、うん。他の人には手渡しに行っているのに……か。

……晴天だというのに、ここだけ空気が重いのは気のせいだよな。『色々思うところはあったけど、それでもチョコがもらえたのは嬉しかったんだよ。結構大きな箱を揺らさないように、細心の注意を払って持ち帰ったんだ。家に到着すると急いで包装を剥がして中を見ると……大きなハート形のチョコレートが入っていたんだ』

ハート形のチョコ！ ベタだけど嬉しいなそれは。

『そう、嬉しかったさ……一瞬だけは。だって、そのハート形のチ

ヨコ、偶然とは思えないぐらい綺麗に真っ二つに割れていたからね……もう、漫画みたいに真っ二つに割れていたよ……』

あ、あれ。今日は空から明る日差しが照っているというのに、地面に霜が降りてるぞ。確か、畑って感情によって土の質が変わるという話を聞いた。悲しんだり落ち込んだりすると、土が濡れたり冷たくなるって……。

『バレンタインデーといえば、こんなこともあったな。……クラスで一番モテている友人がいて、毎年バレンタインデーになると直接渡せない恥ずかしがり屋の女の子から「これ〇〇君に渡しておいて？」ってチョコレート託されることが多くてね、運搬係で忙しかつたよ。そうそう、その友人が毎年食べきれないほどチョコ貰うから、俺と一緒に食べてくれって頼んできて、渋々ながらそいつの家でチョコを食べたのが渡した女の子にバレて、号泣されたことも……あの後、クラスの女子から除け者にされてね……』

も、もういいんだ！ もういいんだよ、畑！

明日、俺からいいならチョコレート幾らでも上げるから！

『ありがとくな、ハツコン。俺からもカカオに似た、キキアを進呈するよ』

異世界のカカオか。使い道はないけど、ありがたく受け取らせてもらおう。

でも、カカオまで育てていたんだ？

『前にバレンタインデーとは関係なしで、チョコレートの話をキココたちにしたら、チョコを食べてみたいって言うから、似たような植物探して育てたんだよ』

チョコは女性が好きだからね。じゃあ、防衛都市ではチョコが普通に食べられていたりするのかい？

『お菓子屋とか喫茶店のようなどころでは、振る舞われているらしい』

へえー。じゃあ、自動販売機の商品でチョコレート並べても売れそうだ。

それから日本での思い出や、雑誌販売できる自動販売機になって、畑に漫画を提供したり、車を呼び出してカーナビで映画を共に楽しんだりした。

次の日。

朝はいつもの定位置で商売をしていたのだが、本当にこの街ではバレンタインデーが広まっているようで、チョコレートの売り上げがかなりいい。

大通りでは、女性から男性にチョコを渡す場面をちらほら見かける。

商売人としてはチョコが売れて美味しい商売なのだが、この世界に悪しきイベントを広めてよいのだろうかと、悩む自分もいるんだよなあ。

モテる奴とモテない奴の明暗がはっきりと分かれてしまう。モテない側だった自分としては、どうにもモヤモヤする。

「ハツコン師匠！」

お、今日も元気に駆け寄ってくるのは、我が弟子ミシユエルか。いつもの装備だけではなく、巨大な布袋を背負っている。あんな大荷物を持ってどうしたんだ。修行の旅にでも出る気なのだろうか？

「いらっしゃいませ」

「ハツコン師匠。どうして、教えてくださらなかったのですか！」

あれ、珍しく詰め寄ってきている。俺に対して怒った顔をするなんて、どうしたんだ。

「とうしたん」

「どうしたん、じゃないですよ。今日は憧れている人や好きな人にチョコレートという菓子を渡す日らしいじゃないですか。それも、ハツコン師匠の故郷の風習だと聞きましたよ」

あー、ミシユエルもバレンタインデーの話聞いたのか。

「街を歩いていたら、女性からお菓子を次々と手渡されまして、慌てて道具屋で一番大きな布袋を購入して、なんとかかりましたか」

その背負っている大人がすっぽり入るぐらいの大袋は、チョコで埋まっているのか……イケメンはどんな世界でも同じだということだ。

「そ、それで、師匠。自分からも師匠にチョコレートを買ってきましたので、受け取ってもらえますか！」

ミシユエル……それは憧れている人というのを、間違ったニユア

ンスで誤解しているだけだよ。顔が真っ赤なものも、コミュ障だからだよ。そうだよ。

「いらっしゃいませ」

だとしたら、受け取るべきだよ。

「受け取っていただけのですね！ありがとうございます！」

心底嬉しそうに笑っている。弟子として師匠に日頃のお礼を込めて渡してくれたプレゼント。そう思うことにしよう、うんうん。

「はあはあ。いい……すごくいい」

荒い息と興奮した声が聞こえてきたので、そつとその方向へ視線を向けると、近くの建物の陰から覗き見をしている スコの姿が見えた。

ミシユエルもその姿を確認したよう駆け寄っていく。

「スコさんが教えてくださったおかげで、師匠にチョコレートを渡せました。ありがとうございます」

「うん。こちらこそ、ごちそうさまでした」

あの、腐タスマニアデビルが弟子に妙なことを吹き込んだ犯人かっ！

スコは最近、俺が出した少女漫画のBLっぽいシーンを食い入るように見ていたからな。……同族だけでなく、人間までいけるのは感心するべきところなのだろうか。

異世界でバレンタインに貰ったのはイケメン弟子からのチョコと

畑からのカカオの実。……あ、うん、自動販売機だから、そういうイベント関係ないしい。

「いたいた、ハツコーン！」

自分を慰めていると、大通りの方から駆け寄ってくる、ラツミス、シユイ、ヒユールミ、ピティーの姿が見えた。

全員、その手にはカラフルな色で包装された何かを手にして。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n7583de/>

自動販売機に生まれ変わった俺は迷宮を彷徨う

2023年6月2日10時29分発行